

東北福祉大学博士論文

ポストモダン社会における「新しい貧困」

—「実存的貧困」概念の提唱—

学籍番号：16GD002

氏 名：原田和広

論文の要旨

1. 論文題目 (副題を含む)

ポストモダン社会における「新しい貧困」の研究 —「実存的貧困」概念の提唱—

2. 論文の要旨

太宰治の私小説・『人間失格』の主人公は（畢竟、太宰治は）、果たして「貧困」であろうか。或いは、世に「東電 OL 殺人事件」として知られる事件の被害者であり、東京電力のエリート社員でありながら、渋谷の円山町で約 10 年間に渡って街娼生活を送り、最期は暴行された後に殺害された女性は「貧困」だったのであるか。

彼らは、闇の様に暗く深い「貧困」状態に陥っていた、というのが、本論文が準備した解である。何故ならば、彼らを貧困であると理解しない限り、彼らの深い孤独と苦悩、そして極めて自傷的な日々の営みを説明することはできないし、同様の状態に置かれている社会的マイノリティへの理解も不可能であるからだ。一方、太宰や東電 OL が貧困であると理解可能ならば、それを敷衍して、世界や日本社会を震撼させた数々の事件の犯人達もまた、同じ類の貧困であったことが理解できるようになるだろう。

突如として何者かがさしたる理由もなく凶行を犯すような事件は、これまで常人には理解不能な「心の闇」とされてきた。この種の事件は、インドネシアでは、単に *amok* と呼ばれる土着の精神疾患として処理される。アメリカでも、多発する概ね自殺を伴う銃乱射事件はそのように見做される傾向がある。だが、昨今のヨーロッパ社会において、比較的高学歴で恵まれた社会環境の若者達が次々とイスラム国へ出国し、イスラム原理主義に基づく聖戦へ参加する場合は、さすがに単なる精神疾患だけではその行動を説明できない。日本でも、2014 年に北大を休学中の学生がイスラム国に入国しようとして水際で警察に止められる事件が起きた。更に振り返れば、1990 年代、オウム真理教の高学歴信者達による首都圏無差別殺傷事件に日本社会全体が震撼した。他にも、不可解な自殺、殺人、テロリズム、その他様々な自傷他害行為、嗜癖由来の事故が、資本主義が十分に行き渡った先進国を中心に日々起きているが、このような先進国特有の深刻な社会病理に対する理解の補助線として、本論文を通して「実存的貧困 (existential poverty)」という新たな貧困概念を提唱する。

そのためには、社会福祉学における一つの堅牢なアプリオリを最初に棄却する必要がある。それは、「貧困とは必ず中核に経済的な貧しさを伴う」という概念である。我々は、ほぼ無条件に「貧困＝経済的な酷い貧しさ」を想像しがちであるが、貧困＝経済的困窮という安易な概念構造に対しては、昨今ヨーロッパを中心に強い批判が起きている。Castel や Paugam らは、フランスにおける不安定就労者の研究を通して、所謂「新しい貧困」を提唱したが、Castel はそれを「社会喪失」と呼び、Paugam は「降格する貧困」と表現した。彼らが最も注目したのは、人々が貧困状態にある時の経済力の欠損ではなく、貧困者が置かれた社会的紐帯の乏しさである。何故ならば、経済的に困窮した人々に対して、単なる金銭的な給付によってその経済的苦境を打開したところで、結局彼らは社会の上部階層に立ち返ることができなかったからである。

Castel, Paugam らが貧困者の社会関係資本に着目して「新しい貧困」を論じたのに対して、Stiegler もまた、「新しい貧困」として「象徴的貧困」が現代社会において発生していると指摘する。Stiegler (=2006: 2) は、「日本や欧米等、テクノロジーが支配している社会において特徴的な事象は、『個』が衰退し、シンボル（象徴）の生産に参加できなくなることである」と指摘する。高度工業社会では、我々を同質化する力と、個体化する力の二つが同時進行するのであるが、その相矛盾するベクトルの中で自己を見失った者達が陥る人間存在

の空疎化を、Stiegler はポストモダン社会の新しい貧困として、「象徴的貧困」と呼ぶのである。

Lister もまた、Stiegler と同様にスティグマに代表される貧困の象徴的側面を重く捉えた。そして、彼女は貧困概念の中核に経済的な困窮を据え、その周縁に「関係的・象徴的貧困」の概念を布置して新たな貧困観を示した。イギリスの「アンダークラス」の研究を通して Lister が明らかにしたのは、貧困者は経済的な困窮よりも遥かに、社会からの偏見や差別、そして社会関係資本の乏しさに苦しんでいたという事実である。

Lister (=2011: 21) は、「貧困は、不利で不安定な経済状態としてだけでなく、屈辱的で人々を蝕むような社会関係としても理解されなければならない」と述べる。彼女は、「新しい貧困」に関して Fraser の「再配分と承認」の政治論から多くの示唆を受け、剥奪や搾取といった経済的な問題に関わる貧困だけでなく、「非承認」や「蔑視」といった「文化的・象徴的不正義」への配慮が不可欠であることを指摘しているのだ。それを表したのが、「貧困の車輪」(図 1・上)である。物質的核として、中心に「容認できない困窮 (unacceptable hardship)」を配置し、その周囲にあたかも車輪のように貧困の関係的・象徴的な側面を布置した。経済的に貧しいということが今なお貧困概念の大前提にあり、その状況に置かれてかつ関係的・象徴的にも貧困を味わっている状態を、Lister は最も深刻な貧困状態であると捉えたのである。

全てでは無いが、幾つかの有用な「新しい貧困」に関する論考が出揃ったところで、ここで再度太宰治や東電 OL は、果たして貧困であろうかという冒頭の問に立ち戻るが、この問は次のようにも換言できる。Lister の「貧困の車輪」から、中核にある「容認できない困窮」を、すなわち経済的困窮を切り離し、なおその状態を「貧困」として措定できるであろうか、と。Lister は、「象徴的・関係的貧困」を経済的困窮以上に重視してはいるが、それ自身を単独の貧困概念として措定している訳ではない。従って、車輪の中核である経済的困窮状態が貧困概念には不可欠であるとするならば、富豪の出自である太宰や、超一流企業で総合職として働いていた東電 OL は、貧困ではないと考える他ない。

しかし、Lister が提唱した「貧困の車輪」の外側部分、「関係的・象徴的貧困」が単独で、或いは何らかの要素との組み合わせによって「貧困」として措定されるのであれば、確かに貧困概念は拡張されるものの、社会福祉学は対象者理解に関しても広大な射程と奥行きを手に入れることになる。その場合、「関係的・象徴的貧困」、そして、後述する「実存的貧困」が極めて色濃く人生に付随する太宰や東電 OL は、いかに本人達が経済的困窮を抱えておらずとも、個としては「貧困」であった、と表現して差し支えないであろう。

これまで論じてきた貧困概念を整理し、改めて図化したものが、図 2-1・下である。「実存的貧困」は、「経済的貧困」と「関係的・象徴的貧困」の中に、横断的に含まれる概念であるが、必ずしも「経済的貧困」を必要としない。その点において、これは全く新しい貧困概念である。

「実存的貧困」が、「経済的貧困」を伴っている場合は、三重の貧困が凝縮された「絶望的貧困 (hopeless poverty)」であると定義する。「実存的貧困」は、Lister の「貧困の車輪」の枠内に収まる概念であり、「関係的・象徴的貧困」の安易な拡張版ではない。その意味では、貧困概念を徒に広げたのではなく、更に深めたのだと理解されるべきである。無論、本論文で提唱する「実存的貧困」状態は、Lister が重視した「関係的・象徴的貧困」よりも、人間にとって一層耐え難い苦悩であることは十二分に強調しておきたい。

本論文では、従来の貧困研究の歴史と新概念の理論背景を概説した後、性風俗産業に従事している女性達の苦悩に着目したフィールドワークを通して、現代社会において、近代的な貧困観では最早説明できないポストモダンの貧困が世界中で無数に誕生していること、そしてそのような「新しい貧困」に対する本質的な理解の枠組みとして、「実存的貧困」及び「絶望的貧困」概念が必要不可欠であることを述べる。そのために、Lister が行った「貧困の再定義」を部分的に棄却、修正し、本論文において貧困を改めて再定義するが、その際鍵概念となるのは Stiegler や Bauman が主張する非物質的な貧困概念である。Stiegler 同様、Bauman も「新しい貧困」を提唱し、古典的な物質的欠損としての貧困に強く疑問を呈するのであるが、従来の社会福祉学は

Lister も含めてそのような視点を一貫して欠いてきた。

事実、Lister は、Sen や Spicker らの定義に倣い、貧困の物質的側面を核として、「容認できない困窮」を「貧困の車輪」の中心に据えて、その周囲に図 2-1 上のように関係的・象徴的な貧困の諸要素を配置して、社会的紐帯の乏しさと参加の欠如を重視したのだが、彼女の貧困論も最後まで経済的貧困概念の軌に捉われたままである。本論文では、この議論を更に推し進め、東電 OL のように性風俗産業に従事した経験がある 61 人の女性達の質的・量的研究から、「実存的貧困」という全く新しい概念を提唱するのである。

「実存的貧困」の定義を簡単に言えば、「Lister の『貧困の車輪』から、中核としての物質的な『容認できない困窮』を除いたもの」である。加えて、図 4 に示したように、社会的に排除されているという事実とスティグマの実感、及び 4 つの心理・社会的な要件を全て満たす必要がある。通常、このようなパワーレスな状態になるためには、何らかの「非物質的な『容認できない困窮』」が、「物質的な『容認できない困窮』」の代わりに、この新しい貧困概念の核として存在しているはずである。

Lister らが最後まで拘った、貧困の物質的な中核を取り除くことに抵抗を感じる向きもあるだろうが、それを除いてもなお貧困概念が成り立つ理由は、現代社会において、個人が体験する「容認できない困窮」は、必ずしも物質的なものだけとは限らないからである。

「容認できない困窮」は、心理・社会的なものでも十分に成り立つ。Sen は、貧困の「還元不能な絶対的中核」の顕著な事例として、飢餓と栄養失調を挙げた。彼の輦に倣って非物質的な貧困の顕著な事例を挙げれば、それは虐待である。飢えていなくても、例え王侯貴族でも、虐待され続けた子どもは絶対的に心理・社会的に貧困である。そして、栄養失調が様々な身体疾患を引き起こすように、虐待は幼児期から様々な精神や発達の障害を引き起こす。これは明らかに、人間にとって「容認できない困窮」である。

Bauman も、Castel や Paugam 同様に「新しい貧困」を語っているが、彼は貧困に関して、Lister らの経済的貧困概念に拘泥する旧来の社会福祉学的な立場を明確に否定する。

貧困という現象は、物質的な欠乏や身体的な苦痛に帰着するだけではない。貧困は、社会的・心理的な条件でもある。(Bauman=2008 : 76)

「貧困＝飢餓」という等式は、貧困の持つその他の多くの複雑な側面を覆い隠している。つまり、「ぞっとするような生活と住宅事情、病气、識字能力の欠如、攻撃性、家族の離散、社会的な絆の弱さ、将来がないこと、生産能力の欠如」がそれである。これらは、タンパク質を多く含有するビスケットや粉ミルクでは癒せない苦痛である。(Bauman=2008 : 163)

Bauman が指摘するように、現代社会において、単に物質的な欠乏だけで貧困を語るのは、最早致命的な誤りである。アフリカのような未だに物質的欠乏を抱えた社会においてさえ、子ども達は学習の機会が剥奪されていることに遥かに苦痛を感じているのである。

しかし、改めて非物質的な「容認できない困窮」の存在を認めて、Lister の図に併記する、或いは置き換えればよいのかといえ、事はそう単純ではない。そのやり方では、明らかに図に矛盾が生じてしまう。何故ならば、先に例として挙げた虐待は、親と子の関係性の問題であるからだ。つまり、虐待は、Lister の貧困の定義で捉えれば、「関係的貧困」に入らなければならない。虐待以外にも「実存的貧困」を引き起こしやすいものとして、研究を通して、DV、性暴力被害、いじめ、極度のハラスメントなどのトラウマティックな事象が浮かび上がってきたが、これらもやはり全て Lister の「関係的・象徴的貧困」に加えるべき事象である。従って、非物質的な「容認できない困窮」を想定する場合、彼女が築き上げた貧困論では貧困の核が内側と外側に二つ

同時に発生し、車輪の体をなさなくなる。故に、この問題を矛盾なく説明可能な新たな貧困概念の再構築が今求められているのだ。

畢竟、Sen がその知見を発展途上国の貧困研究から導き出した結果、飢餓と栄養失調という物質的側面に縛られてしまったように、Lister もまた、先進国の「アンダークラス」の貧困研究から得られる知見以上のもの、すなわち「関係的・象徴的貧困」以上のものを見つけ出すことができなかった。そして、両者共に近代的貧困論の枠を出ておらず、ポストモダン社会特有の貧困をその貧困論の射程に収めていなかった。つまり、経済的に豊かな状態で、時に人間が極めてパワーレスな状態に陥り、その潜在能力（ケイパビリティ）が制限されてしまうという現実を、彼らは把握できなかったのである。

最終的な結論として、『実存的貧困』とは、『内的作業モデル（IWM）』の欠陥を抱え、非物質的な困窮状態を抱えた者が、ポストモダン社会特有の『実存的不安』を、何らかの要因で『実存的空虚』の段階にまで悪化させ、かつその生育歴において社会的排除に直面し、その過程でスティグマを自らに内面化した状態」と定義された。そして、その状態は、結果的に必ず以下の4つの心理・社会的欠損状態を引き起こしている。すなわち、①希望の喪失、②^{アイデンティティ}自我の未形成、③低い自尊感情、④生きる意味の不明瞭性、である（図4：「実存的貧困における存在証明の構造」は、性風俗産業に従事する61人の女性達に対して実施された筆者の質的・量的研究から導き出された。）

「実存的貧困」状態は、Lister の「経済的貧困」や「関係的・象徴的貧困」の間に横断的に存在し、「経済的貧困」とも重なる場合は、「絶望的貧困」と定義される。三重の貧困状態は、考え得る全ての貧困が凝縮されたものであり、その苦悩は筆舌に尽くし難い。そのような状態にある者が、世の理不尽さを嘆き、自らの苦しみ
の責任を他者に転嫁させた時、そこに絶望と共に、灰暗いルサンチマンが沸き上がる。その結果、彼らの自暴自棄な行動化が、図1・下に記されたような、種々の「自傷的存在証明（self-injurious identification）」となって、社会の中で発露するのだが、それに真摯に向き合うことが、ポストモダン時代の社会福祉学の使命なのである。

目 次

序章 はじめに

第1節 社会的排除論の陥穽

- 第1項 「新しい貧困」理解の枠組み：「相対的貧困」か、「社会的排除」か…………… p1-21

第1章 「貧困理論」の再検討

第1節 「実存的貧困」：新たな貧困概念の提唱

- 第1項 「経済的貧困」概念の限界：物質的貧困論を超えて…………… p22-29
- 第2項 貧困概念の変遷：Booth から Sen まで…………… p29-35
- 第3項 Lister の貧困の再定義：「実存的貧困」による貧困の再々定義…………… p35-41
- 第4項 Stiegler の「象徴の貧困」：自己の喪失と世界からの疎外…………… p41-48
- 第5項 豊かさの中の貧困：「実存的貧困」の意義…………… p48-88

第2節 社会福祉の新しい支援対象としての「性風俗産業従事者」

- 第1項 日本における「アンダークラス」と社会的排除…………… p89-110
- 第2項 「貧困の女性化」と「居場所」としての「性風俗」…………… p110-118

第2章 研究の背景：「大きな物語」の喪失と「実存的不安」

第1節 ポストモダン、新自由主義、そして消費社会

- 第1項 「ハイ・モダニティ」の到来：Giddens と「実存的不安」…………… p119-134
- 第2項 「新自由主義」が生み出す格差社会：「近代的不幸」と「現代的不幸」…………… p134-144
- 第3項 「新自由主義」的統治と「生権力」：権力への隷従と制度化された社会的排除 p144-152
- 第4項 「消費社会」における「性の商品化」：「物象化」される性…………… p152-165
- 第5項 「孤独」と「生」と「性」…………… p165-172

第2節 フェミニズムの限界：「可哀そうな被害者」と分かりやすい性的搾取の構図

- 第1項 当事者主義の欺瞞：サイレントマジョリティへの無関心…………… p173-186
- 第2項 「承認の共同体」としての性風俗：「社会福祉は性風俗に敗北した」…………… p186-195
- 第3項 性風俗産業従事者の「行為における主体性 (agency)」…………… p196-209

第3節 性風俗産業従事者と社会的排除：「廃棄された生」

第1項 性風俗という「職業スティグマ」：Goffman 理論から風俗嬢を捉える …… p210-220

第2項 「実存的不安」から「実存的空虚」、そして「実存的貧困」へ …… p220-232

第3章 研究の手法

第1節 混合研究によるアプローチ：(当事者インタビュー，アンケート調査，関係者インタビュー)

第1項 質的研究の手法：グラウンデッド・セオリー (GT) …… p233-237

第2項 トライアングレーション (量的調査) の手法 …… p237

第3項 トライアングレーション (質的研究) の手法 …… p237-238

第4章 質的研究：52人の「性風俗」に生きる女性達の実態

第1節 水商売 (A 群) に属する女性たちの研究

第1項 13人の女性達の概略 …… p239-240

第2項 3人の現役キャバクラ嬢の物語 (地方都市・政令市・六本木) …… p240-246

第3項 2人の定職に就いた元キャバクラ嬢の物語 …… p246-253

第4項 2人の定職に就いた元キャバクラ・デリヘル嬢の物語 …… p253-260

第5項 2人の定職に就いた元スナック嬢の物語 …… p260-265

第6項 2人のガールズバー，パパ活嬢の物語 …… p265-277

第7項 2人の失業中の元キャバクラ嬢の物語 …… p277-292

第2節 風俗業 (B 群) に属する女性たちの研究

第1項 11人の女性達の概略 …… p292-293

第2項 3人のホテヘル・デリヘル嬢の物語 …… p293-312

第3項 4人のソープランド嬢の物語 (高級・中級・低級×2) …… p312-332

第4項 2人のセックスワーカーの物語 …… p332-343

第5項 2人の最貧困風俗嬢の物語 …… p343-362

第3節 エンタテインメント業 (C 群) に属する女性たちの研究

第1項 9人の女性達の概略 …… p362-365

第2項 6人のAV女優 (強要被害者・現役専属・元専属×1，元企画単体×3) の物語 p365-407

第3項 3人の地下アイドルの物語 …… p407-427

第4節 風営法外のサービス（D 群）に従事する女性達の研究

第1項	13人の女性達の概略	p427-428
第2項	2人のJKビジネス嬢の物語	p428-448
第3項	5人の素人売春嬢の物語	p448-470
第4項	6人のパパ活嬢の物語	p470-509

第5節 その他の女性達（E 群）の研究

第1項	6人の女性達の概略	p510-511
第2項	2人のシングルマザーの物語	p512-516
第3項	4人の高学歴風俗嬢の物語（元AV・元キャバクラ・高級デリヘル・低級デリヘル・パパ活等）	p516-562

第6節 比較群の女性達（F 群）の研究

第1項	4人の女性達の概略	p562-563
第2項	4人の比較群（アイドル、タレント等）女性の物語	p563-571

第7節 質的研究（52人のインタビュー調査＋比較群4人）のまとめ

第1項	性風俗産業で働くということ：「近代的不幸」と「現代的 ^{アンサンブル} 不幸」の入り組んだ総体	p571-576
第2項	性風俗産業で働く女性と「実存的貧困」	p576-577

第5章 補足研究の分析とまとめ

第1節 トライアングレーション（量的研究）から見た性風俗に生きる女性達の「生きづらさ」

第1項	量的研究の結果と分析	p578-581
第2項	「実存的貧困」概念の妥当性	p582-583

第2節 トライアングレーション（質的研究）から見た性風俗に生きる女性達の実態

第1項	支援者の立ち位置：中立派・社会福祉系（X1, X2）	p583-592
第2項	支援者の立ち位置：権利擁護派・フェミニズム系（Y1, Y2）	p592-602
第3項	支援者の立ち位置：業界関係者（Z1, Z2）	p602-616

最終章 研究の総括：Honneth の承認論に基づく新たな「貧困理論」の構築

第1節 社会福祉の支援対象としての「性風俗」

- 第1項 「実存的貧困」或いは「絶望的貧困」からみた女性達の「貧しさ」…………… p617-621
- 第2項 偽装されたセーフティネットとしての「性風俗」…………… p621-625
- 第3項 自由意思か性的搾取か：「中動態」を生きる女性達…………… p6235-628

第2節 結論：「実存的貧困」概念による「貧困理論」の再定義

- 第1項 新しい貧困概念の検証と課題…………… p628-642
- 第2項 「実存的貧困」における存在証明の構造：Camus の「異邦人」的世界観…… p643-657
- 第3項 「自傷・他害的存在証明」：愛着障害＋社会的排除＋「象徴の貧困」＝「実存的貧困」の極北
…………… p658-674
- 第4項 現代のトリスタンとイゾー：ある「^{ディザフィリエ}社会喪失者」の悲劇…………… p674-684

補稿 第4章における会話分析のトランスクリプト（Web 公開版では割愛）

第4章 質的研究：52 人の「性風俗」に生きる女性達の実態（トランスクリプト版）

- 第1節 水商売（A 群）に属する女性たちの研究
- 第2節 風俗業（B 群）に属する女性たちの研究
- 第3節 エンタテインメント業（C 群）に属する女性たちの研究
- 第4節 風営法外のサービス（D 群）に従事する女性達の研究
- 第5節 比較群の女性達（E 群）の研究
…………… p685-686

参考文献…………… p687-695

序章 はじめに

第1節 社会的排除論の陥穽

第1項 「新しい貧困」理解の枠組み：「相対的貧困」か、「社会的排除」か

(1) 従来の社会福祉学、或いは社会学の貧困概念ではその実態が上手く捕捉できない「新しい貧困 (new poverty)」が 1970 年代頃から少しずつ発見され、1980 年代以降、世界中の先進国で一気に顕在化し、現代社会において急速に拡大してきているというのが、社会学や社会福祉学における一つの共通認識である。「新しい貧困」は、最初は主に欧州を中心に不安定就労者（プレカリアート）が置かれたパワーレスな状態を指す言葉として用いられた。プレカリアートとは、「Precario (不安定な)」と「Proletariato (プロレタリアート)」を合わせた造語である。この言葉は、2003 年頃、イタリアの路上に「落書き」として突然現れたという。以来、世界中の不安定なプロレタリアートの間に広まり、ユーロメーデーなどで使われるようになった。一般的なプロレタリアートによって組織されている従来の労働組合の行進に対して、非正規雇用故にそこに属することができず、社会保障制度や様々な企業内福祉から疎外されている彼ら「持たざる者」達が自分達を表現する際、社会へのルサンチマンをたぶんに込めて批判的な文脈で用いたのである。

フランスの社会学者・Paugam は、第二次大戦後「栄光の 30 年期」と称される経済成長の後半から終焉の時期と重なるように、フランス社会に現れた上述のワーキングプアの貧困層を発見した。好・不況の荒波に翻弄される様に時に失業し、時に辛うじて有期雇用契約で就労し、しかし結果的には少しずつ社会の下層に滑り落ちて沈殿してしまうようなプレカリアートの窮状を、彼は「社会的降格 (social disqualification)」或いは「降格する貧困」という言葉で表現した。

同じ時期、アメリカでは「貧困の女性化 (feminization of poverty)」が起きていた。それ以前は、大都市部のゲットーと呼ばれるスラム街に押し込められていた低学歴の黒人男性達が、悪しき人種差別の歴史から生じたアメリカの貧困の象徴であった。しかし、1960 年代にリンดอน・ジョンソン大統領が貧困の撲滅を目指して「貧困戦争」を宣言し、重点的にスラム街の黒人男性に対して就労への支援が行われた結果、黒人男性に変わって台頭してきたのが主に黒人のシングルマザーとその子ども達の貧困である。彼女達は、アメリカ社会の中で性質の悪い「福祉依存者」のレッテルを貼られ、若いギャング集団の男性達や薬物依存症者と並んで忌み嫌われる代表的な「アンダークラス」となり、今も増え続ける未婚の母親達は、アメリカ社会において、さながら Lewis が指摘したような「貧困の文化」を再生産し続けている。彼ら「アンダークラス」に蔓延するのは、犯罪率の高さ、非行、不衛生な居住環境、虐待の連鎖、高い学校中退率と低学歴、DV、薬物依存、若年での妊娠・出産、売買春の横行など、不道德・不品行とされる凡そ全ての事柄である。こうした欧米の「アンダークラス」に象徴されるように、「新しい貧困」は単に経済的に貧しい状態を指すだけでなく、寧ろ極めて複雑に絡まり合った社会問題の総体^{アンサンブル}なのである。

同様の「新しい貧困」が日本で顕在化したのは、欧米から 10 年程遅れた 1990 年代のバブル経済崩壊後であ

る。それまでも、Hikikomori という英語として海外でも広く認知されていたひきこもりの問題や大都市圏に特有のホームレスの問題は、社会福祉学が向き合うべき対象として、幾許かは専門家の興味関心を集めてはいた。しかし、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」の掛け声の下、高度経済成長を続ける日本社会においては、それが社会全体を脆弱化させるほどの大問題であるとは、当時まだ深刻に考えられてはいなかった。婦人保護事業の対象となるような知的或いは精神や発達障害を持った女性達の売春等も含めて、当時の社会福祉に関わる対象は、自分達「常人」とは違う異質な存在であるという偏見とスティグマが、彼らの存在を他者化し、日本社会の中で不可視の存在にしていたのである。

高度経済成長期、「一億総中流社会」の華やかな幻想の下に覆い隠されていた先述の諸問題は、バブル経済の崩壊後、小泉構造改革がもたらした労働市場の規制緩和と相まって、一気に社会の中の様々な領域で顕在化した。増加の一途を辿る非正規雇用労働者、とりわけ住込みの派遣社員は、不況時には雇用の調整弁として簡単に雇い止めにあつた結果、容易くホームレスやネットカフェ難民に陥る脆弱な存在になった。湯浅誠（2008）が指摘するように、雇用・社会保険・公的扶助の本来あるべき三層のセーフティネットが各層共に著しく劣化した日本社会は、文字通り一度躓いて雇用の機会を失えば、簡単に社会の底辺まで滑り落ちて行って二度と這い上がれない「すべり台社会」と化したのである。リーマンショックが起きた 2008 年の世界同時不況の年は、全国で一斉に派遣切りが行われ、実家に帰ることもできない程困窮した元派遣労働者達が、湯浅と弁護士である宇都宮健児の呼びかけで日比谷公園に集まり、その様子は「年越し派遣村」として全国にテレビ報道されて日本社会に大きな衝撃を与えた。

東日本大震災発災の翌 2012 年、日本の「子どもの貧困率」は OECD 加盟国の中、統計の無い韓国を除けば最悪の数字である 16.3%を記録し、実に子どもの 6 人に 1 人までが貧困という状態に陥った。日本社会で深刻化する貧困に早くから気付いていた阿部彩は、2006 年に「社会生活に関する実態調査」を東京近郊の地域で 20 歳以上の男女 2,600 人を対象に行ったが、その調査の中に「15 歳時点での生活状況」という項目を設けた。その結果から分かったことは、15 歳時点での貧困は現在の所得の低さと強い関連があるということであった。つまり、15 歳という義務教育の最終年齢時において貧困だった場合、限られた教育機会しか得られず、その結果恵まれない職に就き、低所得で低い生活水準となってしまう、という図式が浮かびがって来たのである。子ども時代の貧困は、その時点だけではなく、将来に渡ってもその子にとって不利な条件を蓄積させてしまい、そしてそれは、次世代にも受け継がれていく場合が多いことが実証されたのだ。2000 年代に入って自民党政権の下で一層推し進められた構造改革と規制緩和は、日本国内における経済格差を更に拡大することになり、橋本健二（2018）が指摘するように、日本社会にも欧米のような「アンダークラス」が誕生して、社会の下層に固定化・再生産されていたのである。

山田昌弘（2007）は、『希望格差社会』の中で、フリーター、ニート、使い捨ての非正規労働者達が被る不利益と社会的排除の現実に触れ、職業・家庭・教育の全てが不安定化している「リスク社会」日本では、「勝ち組」と「負け組」の格差は最早救いようが無い程に拡大し、「努力したところで報われない」と感じた人々から

希望が消滅していく事態を指摘し、将来に希望が持てる人と将来に絶望している人が分裂する日本社会の現実を克明に描き出した。そして、2020 年現在、この状況は一層悪化していると言っても過言ではないであろう。

岩田正美（2007：22）は、「こうした新しい貧困の出現は、80 年代以降明確になったポスト工業社会とかグローバル化といわれる新しい社会経済体制への移行の過程で顕著になった」と指摘するが、その潮流、すなわち一般的には「新自由主義（neo liberalism）」と称される市場原理主義の政治経済システムは、日本で今現在も強力に推し進められている。小泉構造改革に象徴されるこの潮流は、中曽根内閣以降一貫して自民党政権が堅持してきた政治経済施策であり、近年例を見ない長期政権となった第二次安倍内閣において、鳴り物入りで打ち出された経済政策・アベノミクスと、それに続く労働市場の更なる規制緩和によって、「新しい貧困」はより一層先鋭化された。アベノミクスが実施された 7 年間で、日本社会における経済格差は拡大の一途を辿り、非正規雇用労働者数は 304 万人を突破して既に全労働者の約 4 割に達している。不況や雇用の流動化の煽りを受けた団塊ジュニアを中心とするロスジェネレーションや若者世代では、ネットカフェなどで暮らさざるをえない「住居喪失者」が増加し、都内では 2017 年に 4,000 人と、この 10 年間で倍増した。一般社団法人つくろい東京ファンド代表理事の稲葉剛（2019）は、朝日新聞の紙上で「24 時間営業のファミレスやファストフード店、カプセルホテル、サウナ、友人宅などを転々とし、路上生活の一手手前で都会を漂流する人が増えている」と若者の見え難い貧困、所謂ハウジングプアの増加を指摘している。

一方、高齢者に目を転ずれば、藤田孝典（2015）が指摘するように、こちらも下流化に歯止めがかからない。日本の高齢者世帯の相対的貧困率は、実は一般世帯よりも更に高いのである。内閣府の「平成 22 年版男女共同参画白書」によれば、65 歳以上の相対的貧困率は 22.0%である。更に、高齢男性のみの世帯では 38.3%、高齢女性のみの世帯では 52.3%にも及ぶ。つまり、単身高齢者の相対的貧困率は極めて高く、高齢者の単身女性に至っては半分以上が貧困下で暮らしている状況なのだ。この状況を藤田は「下流老人」と呼び、近い将来日本の高齢者の多くが陥る冷たい現実であると警鐘を鳴らしている。

高齢者の相対的貧困率を超え、現代日本社会で最貧困に位置する集団は、「母子家庭」である。その貧困率は、1997 年の 63.1%をピークとし、なだらかに改善傾向にあるものの、2018 年の最新の調査に至るまで一貫して 50%を超えて推移している。OECD 加盟国の中で、ひとり親家庭の相対的貧困率が 50%を超えている国は日本だけであり、これは先進国として恥ずべき数値である。従って、中村惇彦の『東京貧困女子。』や荻上チキの『彼女達の売春（ワリキリ）』、鈴木大介の『最貧困シングルマザー』等のフィールドワークで描かれる日本版「貧困の女性化」は、ある意味、若者や高齢者以上に苛烈であるかもしれない。虐待、精神疾患、発達障害、借金、売春、自傷行為、多重債務、DV、性暴力被害等のトラウマティックな人生の中に色濃く浮かび上がる救い難い貧困と彼女達に押し付けられた社会からの冷たいスティグマは、貧困であるということが、人間としての尊厳をここまで奪われるということなのか、と嘆息せずにはいられない程である。しかし、こうした、大企業に使い捨てられて住居さえままならない若者達、下流化する高齢者、社会から白眼視される母子家庭や、性を切り売りして辛うじて生きて行く若い女性達の貧困が年々顕在化する一方、新自由主義社会の「勝ち組」

に属する日本の富裕層（金融資産が100万ドルを超える人の数）は、2019年に316万5,000人に上昇し、アメリカに次いで世界第2位を記録している。

加速度的に社会全体の貧困化が進む「リスク社会」日本において、同様の速さでニューリッチが形成され、分断された社会の中に堅固な格差社会が構築されている。富める者は一層富み、貧しい者は一層貧しくなるのが、新自由主義が社会の隅々まで行き渡った資本主義国家の常態なのである。従って、これまで縷々述べてきた単なる経済的貧しさだけに還元できない「新しい貧困」は、明らかに日本を含めた先進資本主義国家に完全に定着した格差社会の光と影のうち、今日も増え続ける絶望的な影なのである。

(2) 多元的な困窮状態として理解される「新しい貧困」に対して、これまで様々な研究者が、各自の立場から「記述的概念」として独自の貧困概念を構築してきた。「貧困の文化」、「アンダークラス」、「依存の文化」、「社会的降格」、「社会喪失」、「すべり台社会」、「象徴の貧困」、「リスク社会」、「希望格差社会」、「下流社会」、「無縁社会」等々である。しかし、これらの概念が現在の「新しい貧困」を全て包含して説明可能かと言えば、それぞれに全て限界があるであろう。各概念は、確かに特定の「新しい貧困」の実態を説明することは可能であるが、包括的な貧困理論として新たに理論化されたものではない。一方で、従来の貧困理論では、1970年代以降、世界中で「再発見」された、上記の様々な生活課題を抱えた個人や集団の困窮状態を全て包含できない。従来の単純な「所得貧困」では測定できない「新しい貧困」を測定するために、所得の概念に新たに「時間の貧困」の概念を追加し、「所得」と「時間」の関数として貧困を措定する Vickery (1977) による「二次元貧困線」なども開発されているが、やはり「所得貧困」を土台とした貧困理論に拠る限り、「新しい貧困」を全て包括して説明することは不可能である。これが、今の社会福祉学が直面するアポリアなのである。

昨今、世界の先進国を中心に、従来の社会福祉学が「貧困」措定のために用いて来た概念や尺度では上手く捕捉できない様々な生活困窮状態（多くの場合は経済状況に濃淡があり、かつ複合的な心理・社会的な生活問題を抱える）が無数に存在していることは、最早疑いようのない事実である。このアポリアを打開するため、志賀信夫（2016）は、貧困理論の新たなパラダイムシフトを提唱し、従来主流であった「相対的貧困」に基づく貧困理論の限界を示しながら、「社会的排除」を新時代のパラダイムに即した貧困理論として援用することを提示している。

現在の貧困問題は、タウンゼントの貧困概念では最早理解できない要素があるという理解から出発するものである。つまり、これまで貧困の範疇に入っていなかった諸問題が社会化し、「新しい貧困」と呼ばれる社会問題となって生起しているが、これを説明し整理するための新しい枠組みが必要なのである。この新しい枠組みこそ、近年注目されている社会的排除概念に基づくものであると主張したい。社会規範に照らして容認できないとされる生活状態のなかに、これまで貧困の範疇に含まれていなかったものがあり、それが社会的排除概念のなかには見出せるのである。そしてこの社会的排除概念によって基礎

づけられた貧困理論は、これまでになかった新たな展開を伴っているのである。もちろん、依然としてタウンゼント的貧困概念の立場に依拠し、社会的排除概念についてこれが貧困概念とは区別されるべきものであるという主張があるが、本書はそのような主張に異議を申し立てるものである。（志賀 2016 : 35）

志賀（2016）は、『貧困理論の再検討』で上述のように記しているが、志賀のこの主張は、残念ながらこのままでは不十分であり、部分的には牽強附会の謗りを免れない。Lister ら、大多数の貧困研究者が従来指摘してきた通り、社会的排除概念は、「絶対的貧困」や「相対的貧困」のように、現時点では独立した貧困理論としては成立しえない。少なくとも、志賀が論じる様な形では認め難いというのが、本研究の主張である。そして、本研究は、志賀が自身の社会的排除論で構築に失敗した新たな貧困理論を、社会的排除概念とも矛盾せず、両者の相補的關係性を維持したままで再編する試みでもある。言うなれば、Lister が「貧困の再定義」と称される業績の中で行った貧困概念の理論化を再修正し、志賀が『貧困理論の再検討』の中で不十分に論じた箇所を補足することで、「新しい貧困」を十全に捕捉できる新時代の貧困理論を構築すること、すなわち、「貧困の再々定義」を行うことが、本研究の主たる目的である。

Lister の「貧困の再定義」をいかに修正するかについての詳細は次章以降に譲ることとし、ここでは一先ず、社会的排除論が「相対的貧困」論に替わる新しい貧困理論である、という志賀の主張を一旦棄却するのだが、本格的な議論に入る前に、社会的排除について一度概念整理を行いたい。

Percy-Smith は、社会的排除に関して、EU の文書の中で次のような説明を紹介している。

社会的排除は、現代社会で普通に行われている交換や実践、諸権利から排除される人々を生み出すような複合的で変動する諸要素に用いられている。貧困はもっとも明白な要素の一つであるが、社会的排除はまた、住宅、教育、健康そしてサービスへのアクセスの権利の不適切性をも意味する。それは個人や集団、とくに都市や地方で、場合によっては差別され、隔離されやすい人々へ不利な影響を及ぼす。そしてそれは社会基盤（インフラ）の脆弱さと、2 重構造社会を始めから定着させてしまうようなリスクと強く関わっている。委員会は、社会的排除を宿命的なものとして受け入れることには断固反対する。そして、すべての EU 市民が人間の尊厳を尊重される権利を有していることを信じている。（岩田 2008 : 20-21）

トニー・ブレアがイギリス首相に就任した直後の 1997 年に立ち上げた、社会的排除と戦う特別機関「ソーシャル・エクスクルージョン・ユニット」（Social Exclusion Unit）による定義は、以下のものである。

社会的排除は、例えば失業、低いスキル、低所得、差別、みすばらしい住宅、犯罪、不健康、そして

家族崩壊などの複合的不利に苦しめられている人々や地域に生じている何かを、手っ取り早く表現した言葉である。(岩田 2008 : 21)

いずれも、様々な社会問題と関連した不利の複合性、それらを生み出すリスク、中心社会からの距離が示唆されているが、イギリスの定義で「手っ取り早く表現した言葉」という直截な表現にも見られるように、決して学術的には明確な定義ではない。フランスを発祥の地としてヨーロッパに根付いたこの概念は、社会政策担当者達の政策推進のための言葉として用いられてきた結果、それが何を意味するかを敢えて明確にすることを避けてきた経緯もある。しかし、それでも社会的排除の鍵概念を構成する幾つかの共通項は見つかる。それが下記の三つである。

一つ目が、「参加」の欠如である。社会的排除という言葉は、それが行われることが普通であるとか望ましいと考えられているような社会の諸活動への「参加」の欠如を表現したものである。換言すると、社会関係が危うくなったり、時には関係から切断されている、ということである。貧困が、生活に必要なモノやサービスなどの「資源」の不足をその概念の核とするものだとすると、社会的排除は「関係性」や「社会的紐帯」の欠損を中核概念とすることが強調される。そして、ここでいう「参加」とは、単にある関係が保たれているとか、ある団体への加入が認められているということだけを意味している訳ではない。「関係者」のレベルも階層化されており、例えば「関係者以外立ち入り禁止」のゲートを潜った先にも、様々な「立ち入り禁止」の札があり、それらを次々と潜り抜けられる人ほど、物事を決定できたり、意見を述べたりするパワーを付与されていると考えられる。従って、関係の欠如は、同時に声やパワーの欠落でもある。

二つ目が、社会的排除が様々な不利の複合的な経験の中に生まれているということである。また、このような不利の複合の経験は、従来の社会問題の典型的な把握方法とは異なって、「極めて『個別的』な様相を持っており、従って、統計的に掴むというよりは、人々の人生行路の軌跡の中でしか把握しにくいことも強調されている」(岩田 2008 : 24)。例えば、フランスの政治から社会問題まで幅広く論じている Rosanvallon は、今日の社会問題が、労働者階級、障害者集団、高齢者集団などの社会階級や特定集団の共通利害を典型的に示すような問題としてではなく、「原子化・個別化」された人々の多様な人生の中に、様々な「差異や逸脱の状況」として生じていることを重要視している。従来の福祉国家システムは、分かりやすい貧困や疾病・高齢・障害から生じるタイプの社会問題に対応してきたので、このような「原子化・個別化」した問題には対処できない。

それでは、具体的にはどのようなものが社会的排除と結びつく複合的不利として取り上げられるのかというと、岩田は、Percy-Smith が 7 つの側面に区分したそれぞれの排除の指標を整理し、カッコ内のように例示している。「①経済的側面（長期失業、就業の不安定、失業世帯、貧困）、②社会的側面（伝統的家族の解体、望まない十代の妊娠、ホームレス、犯罪、不満を抱く青少年）、③政治的側面（無力、政治の権利の欠如、選挙人登録率の低さ、実際の投票率の低さ、地域活動の低調さ、疎外、社会的騒乱）、④近隣（環境評価の格

下げ、低質な住宅ストック、地域サービスの撤退、サポートネットワークの崩壊）、⑤個人的側面（心身の疾病、低教育、低技術、自己評価の低さ）、⑥空間的側面（弱者の集中や周縁化）、⑦集团的側面（高齢者、障害者、少数民族などの特定集団に上記の特徴が集中していること）」（岩田 2008 : 25）である。

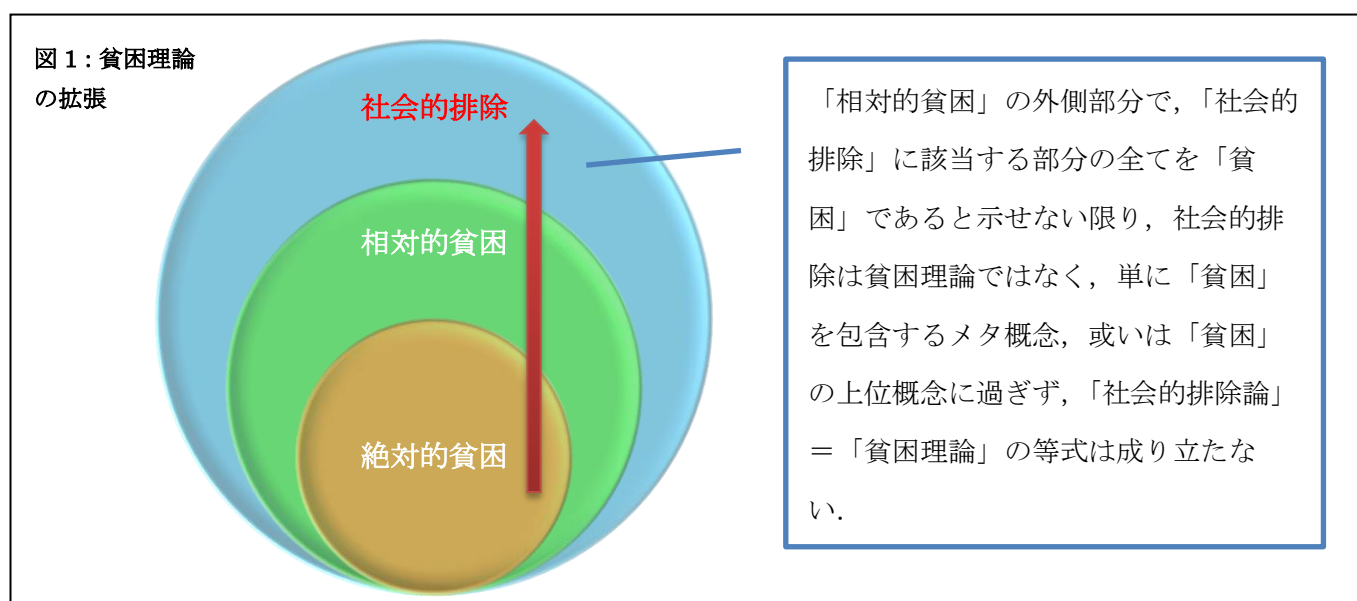
これらを見て分かるように、「参加」の欠如は、やや過剰とも言えるほど、人々の社会活動のあらゆる側面、或いはコミュニティ全体をその視野に入れており、多面的な社会問題（社会的不利）とその要因が考えられるものが、包括的に表現されている。

社会的排除の三つめの共通項は、排除の「プロセス」の存在である。社会的排除という概念は、「ある状態」というよりは「プロセス」なのだ、ということが強調される。社会的排除という言葉は、『誰かが誰かを排除する』といった『動詞』として捉えられ、また、排除の原因と結果の連鎖のようなプロセスとして理解されている」（岩田 2008 : 26）。

以上、社会的排除について簡単に整理を行った。これを踏まえて志賀の社会的排除論の不足を指摘していく訳であるが、端的に言えば、志賀の試みは次の6つの点で不十分であり、現状では説得力に欠ける。

第一に、社会的排除という広範な概念が、貧困でないものまで含んでいる可能性を恣意的に無視している。上記の Percy-Smith の社会的排除の7側面を見ても、貧困は最初の経済的側面の一構成要素に過ぎない。それ以外は、貧困というよりは寧ろ、それと関係する様々な社会的不利の複合体である。かくも広汎な心理的・社会的・文化的・政治的・経済的なありとあらゆるハンディキャップ概念を従来の貧困概念と一致させるためには、社会的排除概念の精緻化か、貧困概念の大幅な拡張がなされなければならないはずである。しかし、志賀の論考では、その部分が明確ではない。

例えば、志賀の理論展開に従って従来の貧困研究の流れを図にまとめると、下記ようになる。



ここで例として、社会的排除に該当する存在で、必ずしも「相対的貧困」状態にあるとは言えない存在を列挙してみよう。移民・難民・技能実習生・留学生等、ニート、フリーター、ホームレス・ハウジングプア、シ

シングルマザー、ひきこもり、不登校者、前科者、同和地区出身者、在日外国人、LGBT、薬物・ギャンブル依存症者、多重債務者、障害者、ヤクザ、反グレ、非行少年少女（暴走族、レディース）、性風俗産業従事者（AV女優等含む）、水商売従事者（キャバクラ嬢、ホスト等）等の多くは、日本社会では明らかにスティグマを負った存在である。そして、それ故にしばしば社会的排除の対象となっている。それを証明するかのように、近年社会から追い詰められたひきこもりやニートによる無差別殺傷事件が日本社会を震撼させているが、それによって上記の集団に対する排除の空気はより一層醸成されていると言っても過言では無いであろう。

しかし、彼らが社会的に排除されているからと言って、必ずしも「相対的貧困」の枠組みには入ってこない。ヤクザや反グレ、そして彼らと密接な関係にある性風俗産業従事者や水商売従事者、AV女優等は地下経済の中で多額の収益を上げている者もいれば、搾取の構造に組み込まれて「相対的貧困」よりも更に貧しい状態に置かれている者もあり、極端に二極化している。アンダーグラウンドの世界は、表社会以上の激しい格差社会であることを鑑みると、身分的には社会的排除の対象でありながら、経済的には寧ろ富裕層であるという、ある意味矛盾した立場の存在も決して否定できないのである。同様のことは、先述した全ての集団に言えることであり、社会的に排除されている以上、貧困状態に陥る可能性は一般の集団よりは高いものの、必ずしも全員が経済的に貧困であるとは断言できない。この点において、Listerらが指摘してきた通り、現状、社会的排除は、新しい貧困理論、或いは、拡張された貧困理論というよりは、貧困を含む様々な社会問題を理解するための有益な枠組みであると理解すべきである。社会的排除がそれ自体で十分に貧困に該当する、という強い説得力を志賀の論考は提示し切れていない（例えば、富裕層に生まれて何十年もひきこもり続け、生活面ではとりわけ不足を感じていない中高年のひきこもりや、経済的に成功したヤクザや半グレ等の犯罪者集団、偶々幸運に浴したギャンブル依存症者、被差別部落出身もしくは在日外国人で居住地や結婚、就労等に制約を受けている者達、或いは一時的とはいえ、金回りのいいキャバクラ嬢や風俗嬢、ホスト等も貧困である、またはその可能性がある」と十分に説得できる枠組みではない）。

第二に、志賀は主にワーキングプアを前提に社会的排除を論じ、彼らの労働への包摂と市民権、すなわちシティズンシップの重要性を指摘するのだが、現状、「新しい貧困」は決してワーキングプアの問題だけに留まらない。ひきこもりや重度障害者の様に、必ずしも一般人と同じ様式で働くことを前提にしていない生活者に対して、労働への過剰包摂を主張するのは、貧困問題を単なる「所得貧困」の問題に矮小化する恐れがある。

昨今指摘される「新しい貧困」は複合的な「生きづらさ」の象徴であり、単に低賃金の不安定就労を指すものではなくなっている。「福祉依存者」などというレッテルに苦しむ生活保護受給者の主観的な苦しみや、LGBTの当事者達が、法的或いは経済的に差別されていると感じることから生まれる劣等感と不平等感、或いは、DV被害者で精神疾患に苦しみ、幼子を抱えたが故に一般就労できず、生きるために性風俗産業に従事せざるをえない年若いシングルマザーの極めてパワーレスな生活困窮状態など、様々な形式の生きづらさを含むのが現代日本の「新しい貧困」である。それを、欧米、とりわけ、英仏のプレカリアートの研究結果のみに依拠する実証研究の乏しさは、貧困理論としての志賀の社会的排除論から血肉を奪っている。欧米のプレカリアートの実

証研究から導き出された結論を日本社会の全ての「新しい貧困」に当てはめ、彼らの切実な苦悩を労働問題に還元し、全て社会的排除の一言で片付けるのであれば、その指摘はやはり牽強附会の誹りは免れないであろう。

一方、社会的排除の位置づけを巡り、志賀とは見解が相容れない Lister は、志賀とは逆に質的研究や参加型研究を重視して、そこから貧困の新しい様式や実態をあぶり出すべきだと主張している。事実、イギリスの「アンダークラス」に対する参加型研究から、Lister は「経済的貧困」以外の新しい貧困概念である「关系的・象徴的貧困」を見つけ出して体系化した。それが十全に正しいかどうかは別問題として、少なくとも彼女のそのような姿勢とそこから生まれる貴重な知見にこそ、まさに貧困に苦しむ人々の実生活が宿っているのではないだろうか。

第三に、志賀は労働の権利と労働による社会参加を阻害するのが、社会的排除の本質であると指摘しているが、先述の通り、その認識は余りにも狭隘に過ぎる。これらが反貧困のゴールとして掲げられるのであれば、最終的に辿り着く先は、理論上は共産主義にならざるをえない。マルクス経済学によるプロレタリア革命の実現と、ディーセントワークの保障を国家が全労働者に行い、個人が「物象化」され、労働の本質から「疎外」されることを無くすこと、これこそが志賀が考える反貧困の一つの理想形なのではないだろうか。事実、志賀は度々『類的存在』としての人間等、マルクス経済学の用語を用いて労働の尊さ、そして社会的排除によって自分が望む様に労働できない「疎外」された人間の苦しみを「新しい貧困」として描くのだが、実際それが本当に「新しい貧困」であるかは甚だ疑問である。Marx が資本家から搾取される労働者の苦しみを『資本論』で描いたのは 19 世紀である。格差が拡大して日本社会に非正規労働者が溢れ、当時 Marx が描いたような、或いは共産主義者の小林多喜二が『蟹工船』で描いたような「疎外」された労働者が現代日本に数多く生まれていたとしても、それは単に古典的な貧困が時を超えて復活したに過ぎない。それは従来の貧困概念、すなわち Booth や Rowntree らに連なる貧困理論で十分に捕捉可能なものであり、そこに敢えて社会的排除を敷衍して、新たな貧困理論のパラダイムシフトを提唱する必要性は全く無いのである。志賀が想定する「新しい貧困」が、本当に現代の日本社会に顕在化している「新しい貧困」と同義であるのかを示すためには、Lister の様な実証研究、及びそれに基づく詳細な説明と議論が必要であると感じる。

実際、ポストモダン社会における労働と過去の労働は位相を全く異にしている。その差異を自覚せずに、単純に労働の権利を主張するのは、極めてナイーブかつ危険である。例えば、Offe は、1982 年に最初に発表された論考で、現代生活の構造的特徴には労働の求心性の喪失があるという優れた分析をした。

圧倒的多数の人びとが従属的賃労働にますます従事しているのに、賃金労働が千差万別に個人生活に影響を与え、それを形づくることによっていわば個人生活に「参加」する程度は衰退している。他の生活領域と比較した際のこの労働の脱求心性が、その個人の来歴の周辺に局限されていることは、数多くの同時代的な診断によって確かめられている。(Offe=1985 : 141)

これらをまとめてみると、労働の成果と獲得物が個人の実存を統合し導く規範として求心的な役割を果たし続けるという状況は、もはやありそうにない。あるいはこうした準拠規範が政治的に再生されたり、再要求されるということもありそうにない。近年の労働の「再倫理化」の試みや、労働を人間存在の中心カテゴリーとして扱うことは、矯正装置というよりも危機の特徴とみなすべきである。（Offe＝1985：143）

Offe が当時指摘した以上に、新自由主義が引き起こした労働の意義の価値低下は著しい。非正規雇用の労働にかつて正社員が持っていたような社会的価値は無く、一方で働かないことに対しては、道徳的なスティグマが付与される。従って、勤労の喜びは社会に無くなり、労働は個人のアイデンティティの源泉たりえず、寧ろそれは権利ではなく義務であると厳しく社会に言い立てられる生きづらさの源泉に変わったのである。現在「8050 問題」として日本社会で大きな問題となっている中高年ひきこもりの多くは、過去に就労体験、それも正社員としての経験があるとされるが、何故彼らが再就労の道を選ばないのか、Offe の指摘からも理解できる。一度社会から逸れた彼らがありつけるような仕事はどんなものか、彼らとて容易に想像できるのである。それは新自由主義において徹底的に効率化され、非人間化された労働である。そこには最早ほぼ本来の労働としての喜びと価値が無いことを、彼らは十二分に理解しているだろう。ひきこもり当事者や親の会（NPO 法人 KHJ 全国ひきこもり家族会連合会）が、就労だけを最終的な目標に掲げてはならない、尊厳の回復や居場所づくりこそが何よりも重要である、としばしば社会に提言する理由もここにある。労働はこの問題を解決する万能薬ではない。

第四に、第三の誤謬とも繋がるのであるが、志賀の基本的な考え方には、全てのプレカリアートは自己実現のために働きたいはずだ、人間としての尊厳を保持できる労働をしたいはずだ、という決めつけが伺える。しかし、「類的存在」として、誰しもが人間らしい労働をしたいはずだというマルクス経済学の考え方を人間存在の唯一の前提にすると、それが前提にならない人間存在や生き方の選択を結果的に否定することになってしまう。

Castel（＝2015：111）が指摘する様に、人類が労働以外に個人の経済的独立と社会的承認の両方を確立可能な他の手段を未だ見つけ出していない以上、志賀の指摘を全否定するつもりはない。本来、人間らしい労働への包摂は第一義的に支援の在り方として考慮すべきものである。Castel（＝2015：333）もまた、『「排除」に対して闘う』ためにまず介入すべき対象は、労働に関する規則や、労働と結びついた保障システムである。」と指摘している。ただし、それ故に、Castel は「排除」という言葉の用法に厳密さを求める。Castel によれば、「排除」という言葉は、共同体からの根絶や隔離、権利が剥奪された特殊な地位といったように厳密に使うべきであり、彼が「社会喪失者」と表現した長期失業者や郊外に住む移民の若者のような存在には用いるべきではないとする。後者の存在に対して、『不安定化』、『脆弱化』、『周縁化』を語ることはできるが、『排除』を語

ることはできない」(Castel=2015: 398)という指摘は、極めて重要である。志賀(2016: 144)は、「本書は、社会的排除理論を特徴づけるシティズンシップの権利としての『労働の権利』を主張したい」と主張するが、志賀同様に「社会喪失者」のために労働の権利保障と国家の強い介入を求める Castel が、志賀が用いる意味では社会的排除を用いていないのだ。従って、志賀が『貧困理論の再検討』の中で、Castel と同じ結論を提示することには強い違和感を覚える。労働の権利保障は、志賀が想定する「新しい貧困」への処方箋ではあっても、現代社会に蔓延する多種多様な社会的排除を想定した場合、唯一絶対の解決策ではないはずだ。

例えば、「アンダークラス」に分類されるような福祉依存のシングルマザー、DV シェルターで保護を受けているバタードウーマン、虐待被害者等の多くには、身体的な稼働能力はあっても、セクハラやパワハラ、モラハラ、DV、性暴力被害等で極めてパワーレスな状態に陥っていることが多々見受けられる。「貧困の女性化」の象徴である彼女達が、働かないという選択をした時に、働く自由や権利に拘泥する志賀の社会的排除論の枠組みでは、彼女達の苦悩を十分に掬い上げることはできないであろう。

また、「川崎市登戸通り魔事件」や「京都アニメーション放火事件」の犯人達に象徴される社会の中で長年孤立したひきこもりの中高年男性達に対して、労働による包摂とシティズンシップの重要性を訴えたところで、その思いが直ぐに彼らに届くとも思えない。資本主義社会において、働かなければ生きてはいけないということが、彼らとて分からない程未熟ではなかろう。にもかかわらず、働けない状態に陥っている自らの惨めさ、不甲斐なさとは必然的に向き合わざるをえないような労働への過剰包摂は、日本社会で優に 100 万人を超えるとされる彼らの様な存在を一層追い込むことになり、結果的に社会が不穏状態になるのではないだろうか。

働きたくても働けない彼らは、湯浅(2008)が指摘するような、社会的排除を内面化した「自分自身からの排除」の状態にあり(アルコール依存症者や高齢者のセルフネグレクトも同じ心性である)、排除の主体は最早「社会」ではなく、より一層深い段階の「自分自身」の領域に達しているのである。しかし、彼らが自分自身を排除した原因を、「類的存在」としての人間の尊厳を毀損する劣悪な労働環境にあると指摘し、彼らの苦悩を単なるワーキングプアのそれと同列で論じるならば、やはりその論考は浅いと言わざるをえない。社会福祉学における社会的排除とは、人間らしい労働からの排除だけでは断じてないはずだ。故に、社会的排除のマルクス経済学的理解は、志賀の論理を極めて皮相的で限定的なものにする。志賀が「新しい貧困」と言いながら、その著作の中で扱っているテーマが極めて「古典的貧困」に近いと思われてしまうのもそこに理由があるのだ。

新時代の社会福祉学は、志賀が陥っているような古典的な労働問題の軛から解き放たなければならない。大橋謙策は社会福祉の 6 つの自立の第一番目に「労働的・経済的自立」を挙げてはいるが、それだけで社会福祉学的な自立を構成する与件たり得ないことを指摘している。「これからの社会福祉は、戦後初期の社会福祉の目的の中心であった経済的自立のみを考えるのではなく、経済的自立を基底に保障しつつ、それら(①労働的・経済的自立、②精神的・文化的自立、③身体的・健康的自立、④社会関係的・人間関係的自立、⑤生活技術的・家政管理的自立、⑥政治的・契約的自立の 6 つ)を踏まえつつ多様な自立生活を保障していく対人福祉サービスとして考えられる必要がある」(大橋 2012: 46)という大橋の指摘もまた、社会的排除や貧困理論の

本質を労働問題に矮小化する危険性を見抜いているものといえよう。ポストモダン社会においては、物質的な困窮だけでなく、非物質的な困窮もまた、貧困理論の射程に入れることが絶対に必要なのである。

従って、社会的排除の本質は、志賀が考えるような尊厳ある労働からの「疎外」ではない。寧ろ、社会からの「承認」の欠如がもたらす自己否定と希望の喪失、そして未来にまで影響を及ぼすスティグマの軛である。社会的排除を無くすために本質的に必要なのは、志賀が指摘するような「労働の権利」の確立ではなく、「労働の権利」を自己決定で選び取ることができる状態まで個人の尊厳とアイデンティティを回復させる、ソーシャルワークによるエンパワーメントであることをここでは強く主張しておきたい。事実、仲正昌樹が以下の様に指摘しているが、この認識は、ソーシャルワークにとっての希望となるだろう。

また、ハンナ・アーレントやハーバマスの公共性論の影響を受けたリベラル左派系の人々の間には、身体を具体的に動かす「労働」よりも、自律した「人格」相互のコミュニケーションを、人間の本質と見なす見解もある。「労働」の“本質”が、単に自分の身体を動かして、自然に手を加えることではなく、社会的に価値ある——必ずしも物質に限定されない——“もの”を生み出すことであると考えれば、肉体労働よりもコミュニケーションが重要であるという見方を、マルクス自身から引き出すことができるかもしれない。（仲正 2018：220）

第五に、志賀は「栄光の30年期」が終焉を迎え、完全雇用が事実上不可能な時代が到来したが故に、「新しい貧困」が生じたとその由来を解説するが、その前提もやはり誤っていると指摘せざるをえない。確かに、雇用のセーフティネットの毀損は、欧米で「新しい貧困」が生まれた切欠の一つであることに間違いはないであろう。しかし、異常な少子高齢化に直面する現代日本社会は空前の人手不足であり、有効求人倍率は史上最高、失業率も史上最低を毎年更新と、ここ数年は文字通りの完全雇用を実現している。自然失業率5%以下の世界にも類を見ない低失業率を長年に渡って維持し、現在はほぼ完全雇用を達成している日本社会において、何故これ程「新しい貧困」が生じているのかを鑑みれば、完全雇用と「新しい貧困」は、志賀の想定に反して、必ずしも逆相関の関係ではないことを認めねばならない。「新しい貧困」を産んでいるのは、完全雇用の喪失ではなく、明らかに雇用の質の劣化と共同体における社会的紐帯の喪失である。その実態は欧米であっても、日本と大差はないはずだ。日本の様に数量的にはほぼ完全雇用を達成し、社会の成員に十分に仕事の量だけは行き渡っていても、非正規雇用が約4割に達し、彼らの賃金がほぼ最低賃金に張り付いているような格差社会において、人は安全・安心を感じて「今、ここ」を生きては行けないし、「相対的剥奪」に絶望することはあっても、到底未来に希望を持つことなどできはしない。加えて、核家族や単身生活が一般的になり、「無縁社会」とまで表現される地域における絆の喪失もまた、日本社会の中から安全や安心の感覚を奪っている。従って、山田（2007）が「希望格差社会」と呼ぶこの現代日本社会こそが、今「新しい貧困」が世界で最も蔓延している場所だとしても、決して驚くべきことではないのである。

最後に、志賀の最も致命的な誤りとして、「貧困理論」と「貧困論」の浅薄な線引きが挙げられる。志賀は、『貧困理論の再検討』の冒頭で、日本には貧困問題に対する理論的アプローチを「貧困理論」として打ち出している研究・論考は、僅かに三つしかないと指摘する。更に、そのうち二つの論文はオリジナルの研究ではなく、イギリス人研究者の論文の翻訳であり、「貧困理論」という言葉を使用している唯一の日本語論文（萩原康生（1997）の「発展途上国における貧困と不平等」）は、「貧困理論」というよりは、単なる開発論に過ぎないと指摘する。この結果をもって、志賀は、日本には単に「貧困論」と呼ばれるものはあるが、「貧困理論」と呼ぶものは存在しないと、日本における「貧困理論」の乏しさを以下のように指摘する。

では、「貧困論」と「貧困理論」の違いはどのような点にあるのだろうか。決定的に異なるのは、「貧困理論」は貧困とは何かという根本的な問いから出発しているのに対して、「貧困論」は必ずしもそうではないという点にある。「貧困とは何か」という問いなくして貧困であるという判断は成立しないが、日本ではそれがあまり問われることなく「貧困論」ばかりが先行している。それは、とりあえずよって立つ何らかの貧困理論を前提としているからであろう。このとりあえずの貧困理論は大抵の場合、イギリス貧困理論であり、タウンゼントによる「相対的剥奪 (relative deprivation)」から定義される貧困概念によって形成される理論である。（志賀 2016：ii）

日本には、独自の「貧困理論」が無い、と断ずる志賀のこの見解は受け入れ難い。例えば、日本でも既に 1950 年代に、氏原正治郎や「社会階層論」で知られる江口英一が、政府が強調した貧困線とは異なるアプローチで貧困の量的捕捉を独自に行っている。江口英一・川上昌子（2009）の『日本における貧困世帯の量的把握』の冒頭で、江口の量的な貧困研究の始まりが、Townsend の著作である “The Poor and Poorest” が刊行された 1967 年以前であることが指摘されているが、この事実からも分かる通り、必ずしも日本の貧困研究の歴史がイギリスの貧困研究の後塵を拝している訳ではないのである。Townsend が相対的剥奪概念を提唱したのとはほぼ同時期に、日本において江口らは Rowntree らが示した最低生活基準の貧困線概念に疑問を抱き、生活保護水準の貧困線を絶対視しない相対的視点から貧困問題を拡大的に理解し、社会階層の詳細な分析・研究を行っているのである。江口以前にも、社会学的視点から貧困問題を捉えようとした真田是、「生活構造論」で知られる竈山京など、貧困を量的或いは質的に分析し、論考を加えてきた日本の研究者は多く、志賀が「貧困理論」のグランドセオリーとして重視するイギリス貧困理論の様にそれらの学説が世界的に共有化されていないからと言って、単純に日本には「貧困理論」が存在しないと見做すのは、日本の貧困研究と社会福祉学の歴史そのものを否定することになる。志賀に対する筆者の批判を代弁するかの如く、竈山は、『社会福祉と貧困』のあとがきで、「江口貧困理論の確立によせて」（傍点筆者）と題して、江口の貧困研究に関して以下のような考察を加えている。

労働力は経済学の対象である。しかし、人生は経済学の対象ではない。労働力は物であって、そこには哀歓がない。人間の歴史がない。しかし低所得層には、労働力のある人生も、また労働力のない人生も、そして労働力があつたりなかったりするような人生もある。それが現実であつた。その現実をみて、江口君は労働力の研究から離れて、貧困の研究に向かわざるを得なくなつていったのだと思う。そして、その人々の人生を対象とし、人生の哀歓を対象とせざるを得なくなつたのだと思う。

(中略)

「以上のような意味で重要な、具体的・個別的な姿をとる人間の破壊・崩壊の現象、それを可能性としていつもになう『人間』あるいは個々人、それが直接的対象である」と書いている。

これが江口貧困論の特質であつた。

(中略)

しかし、それが今度の『現代の低所得層』の中でどうなっているか、私には興味がある。したがつて、この点を議論してみたかつたし、それが江口君への礼儀でもある。とくに彼がイギリス遊行の当時、イギリスではやりだした“Deprivation”をどうみて来たかについて(上巻収集)、質問したかつた。けれども、それは次の機会にしたい。

私はイギリスの新しい貧困論をあまり買っていない。と同時に、貧困の研究にとってはイギリスその他外国の貧困論は全く違ったもので役に立たないという気持ちを強くもっている。なぜなら、私らの貧困研究は日本における貧困層の人生の現実が対象だからなのである。かつて、S.Rowntreeが「私の研究はイギリス人にしか通用しない。日本人が読んでみても何の役にも立つまい」と語つたということをおぼえ出す。(江口編 1998 : 499-502)

簗山の上述の指摘は、そのまま志賀の社会的排除論に対する厳しい批判の言葉となるであろう。まさに、江口は志賀同様に、当初は経済学者として、マルクス経済学の経済理論と「商品としての労働力」の概念に拘る余り、1人の労働者が生きる姿の本質を見落としていたのである。それに対して、簗山は先達の貧困研究者として、そして衛生学者として、あくまで1人の人間の人生を観察することを重視し、江口の経済学的貧困研究における人間理解の欠落を嘆いたのだ。やがて、日雇労働者を真の友とし、生きた貧困研究に没頭していった江口は、簗山が当初懸念していた学術的な欠落を見事に補完した。それが、人生の哀歓を対象とした江口英一の「貧困理論」なのである。

江口貧困理論とは対照的に、『貧困理論の再検討』における志賀の社会的排除論には、全く人生の哀歓がない。それは、恐らく、志賀自身も自覚しているのではないだろうか。あとがきにおいて、志賀は、自身の研究者としての原点となつた、若くして命を絶つたプレカリアートの友人が発した、「その思想に生活はあるのか?」という言葉、自らへの戒めとして記している。その言葉と真摯に向き合うために、亡き友が言語化できなかったもの、すなわち貧困の本質を言語化することが、実証的な貧困研究を行うよりも先に自分がすべきことで

あった、と志賀はあとがきで述べているのであるが、志賀の友人が彼に対して発した言葉は、麓山が若き日の江口の貧困理論に対して抱いた懸念と全く同根であろう。つまり、対象としての人間存在の欠落である。残念ながら、江口のように深い実証研究を伴わない志賀の社会的排除論は、いかに巧みに言語化されようが、そこにはまるで血肉がない。人生の哀歓がない。厳しい言い方になるが、志賀の思想には全く生活がない。それは、理論倒れのグランドセオリー以外の何物でもないのである。

Glaser と Strauss が提唱したグラウンデッド・セオリー (GT) は、机上の空論に陥りがちな実証を伴わないグランドセオリーに対するアンチテーゼである。GT は、まず膨大な質的データを収集し、それを細かく分析して、実証に裏打ちされた確かな理論を構築する手法であるが、本研究は第 3 章以降に GT を用いて、「新しい貧困」を捕捉可能な実証的な「貧困理論」を構築する。志賀の論考を大幅に修正するのが本研究の目的である以上、やはりイギリス貧困理論を叩き台として貧困概念を論じざるを得ないのであるが、その際、江口に代表される日本の貧困研究の知見を随時取り入れながら、志賀の論考に批判的考察を加えたい。

(3) ここまで、社会福祉学の従来の貧困理論では十分に捕捉できない新しいタイプの生活困窮状態が世界中に発生しており、それらは「新しい貧困」と称され、古典的な貧困概念では最早十分に理解できないことを指摘した。一方で、それを説明可能であるとする志賀の社会的排除論もまた十全ではなく、多くの点で瑕疵があることを指摘した。

昨今、古典的貧困概念が扱う対象は、基本的には全て「相対的貧困」論の範疇に入るものである。すなわち、「絶対的貧困」概念を提唱した Booth や Rowntree らの研究に対して異議を唱えた、Townsend の「相対的剥奪」を鍵概念として、途上国に見られるような圧倒的な物質的欠損だけを貧困とは見なさず、例え先進国であっても、社会全体の豊かさの陰で、個人的な貧しさ故に社会に対するメンバーシップを奪われている存在があるならば、その貧しさを貧困と規定する考え方である。しかし、繰り返しになるが、現在この「相対的貧困」論では、掬い上げられない貧しさがある。

志賀は、一般に「相対的貧困」の基準となる貧困線を行ったり来たりする欧米のプレカリアートの低所得状態と不安定な雇用状況に着目し、貧困と非貧困を繰り返さざるをえない劣悪な雇用環境こそが「新しい貧困」の原因であり、例え経済的に「相対的貧困」の基準に該当しなくとも、長期に渡って不本意な不安定就労状態にある場合は、その個人が正当な労働市場からの疎外という社会的排除に遭っている以上、社会福祉学は彼らを貧困者として認識すべきだという、社会的排除概念に基づく新たな貧困理論のパラダイムを提唱した。端的に言えば、志賀は「相対的貧困」の概念を大幅に緩和させ、それを非貧困領域まで拡張させたのであるが、志賀のこの見解は、決して新しい立場とは言えないどころか、寧ろ既に江口が「社会階層論」で展開した貧困理解の視点と大筋で変わらない。江口は、戦前の「古典的貧困」に代わる戦後の「現代の貧困」を志賀とほぼ同じ枠組みで切り取り、膨大な実証研究を基に、独自の貧困理論を組み立てた。江口は、Townsend の「相対的剥奪」を援用し、相対的貧困論に基づく貧困領域を、政府の貧困線の前後に存在する就業形態が不安定な「低

所得層」に拡大させたのである。そして、社会階層間の移動として貧困を動的に捕捉したのである。江口の「社会階層論」は、Paugam の「降格する貧困」とも重なる性質を持っている。これは非正規雇用のワーキングプアが溢れる現代でも十分に有効な理論であり、志賀の社会的排除の論考が労働政策に軸足を置く限り、それが江口の「社会階層論」を一歩たりとも超えることは無い。つまり、江口が戦後「現代の貧困」を捕捉する概念として提唱した低所得の社会階層を、志賀は社会的排除という新しい概念でなぞっているに過ぎず、実際は志賀の論考に社会的排除概念を埋め込む必然性すらないのである。志賀が『貧困理論の再検討』で論じる貧困は、「相対的剥奪」を日本社会の貧困問題に援用した江口の貧困理論そのものであり、志賀の論考はワーキングプアの貧困論としては、寧ろ古典的な視角でしかない。つまり、志賀が捉える「新しい貧困」は、江口が戦後「現代の貧困」と称して研究した準古典的貧困であり、決して、本研究が新概念を持って描き、捕捉しようとする「新しい貧困」ではないのである。

また、長期失業者は「社会喪失者」^{ディザファイリテ}であっても、社会的排除の対象ではないとする Castel の主張を改めて例に出すまでも無く、理論的な外縁を持たない志賀の貧困概念を全面的に首肯できない理由は先述の通りである。畢竟、社会的排除の枠組みの中で、非貧困のどこまでを対象として貧困概念を拡張させるのかが志賀の論考では全く明確ではない。社会的排除が極めて広汎な概念であるが故に、志賀の理論を推し進めると、結局 Percy-Smith の 7 つの領域の社会的不利の全てを最終的には貧困であると認めざるを得ないのではないかと、との懸念が消えない。仮にそうなれば、貧困が持つ「容認できない困窮」という本質は、志賀の理論から完全に抜け落ち、それは最早「貧困理論」の体をなさなくなるだろう。

社会的排除が確立した一つの「貧困理論」たり得るためには、社会的排除の対象者のほぼ全てが貧困状態であることを合理的に説明するか、後述する Castel のように、社会的排除を容認できるものとできないものに論理的に区別できなければならない。それができないならば、志賀の立論は致命的な瑕疵を内包したままになる。更に志賀は、社会的排除をマルクス経済学的な狭隘な理解に押し込めてしまい、その理解の枠組みに含まれない「新しい貧困」の存在を恣意的に無視するという誤謬を犯している。従って、本研究では、社会的排除の概念に基づく新たな貧困理論のパラダイムシフトが起きたとする志賀の主張を、有意義な問題提起であることは認めつつも、大筋で棄却せざるをえないのである。

故に、本研究は、志賀の試みとは全く別の視角から「新しい貧困」を読み解き、そしてそれらを全て包含する新たな貧困理論を構築するものである。その際、鍵概念となる物は、志賀が着目した社会的排除ではない。何故ならば、貧困の本質は、社会的排除という彼我の境界に存在する差別化のプロセスではなく、困窮状態の基底部に存在している「承認」の欠如にこそ見て取れるからである。そして、この視点は、江口の貧困理論にも無い全く新しい視点である。次項以降に展開される「貧困の再々定義」と、本研究全体への理解の補助線とするため、ここで全体の鍵概念となる承認論に若干触れることにする。

志賀も自身の論考の中で承認論に全く触れていない訳ではないのだが、社会的排除の概念に拘泥する余り、貧困の本質を安直に「労働からの疎外」と規定したが故に、貧困理論において、承認論が持つ重要性を完全に

見落としている。一方、本研究の中心をなす「貧困の再々定義」において、最も重要な役割を果たすのが、Honneth の承認論である。何故ならば、先述の通り、貧困の本質は「承認」の欠如、すなわち「非承認」がもたらす「不平等」と「不自由」に起因する人としての尊厳の「剥奪 (deprivation)」にあると理解できるからだ。

藤野は、以下のように社会的存在としての人間が、他者からの「承認」無しには存在しえないことを指摘している。

承認—他者によって認められるという経験—は、ことほどさようにも、社会生活の様々な局面に顔を出してくる。ホネットは、それどころか、人間が社会的存在であると言われていることの意味を、人間が他者による承認を求めて闘わずにはいられない存在であるという事実のうちに見出そうとするのである。その意味で、彼の承認論は、人間が社会的存在であるとはどういう意味でそうなのか、という問いに答えようとする反省的（＝哲学的）思索の試みである、と見ることができる。それは、多文化社会状況と特徴づけられることもあるわれわれの時代にあって、異なる文化との共存を模索するすぐれて現代^{アクチュアル}的な理論でありつつ、しかし、個人主義の時代であればこそ必要とされる反時代的な社会理論でもある。（藤野 2016 : 9）

Honneth は、政治学者の Fraser との間で、社会正義を実現する手段としての「再配分」と「承認」について激しく議論を戦わせている。Fraser によれば、「再配分」と「承認」は、互いに深く関係を持ちつつも、各々がそれ以上に還元不能な等価的審級であると規定される。貧困が社会正義の不在であり、正義論から見て「承認できない困窮」であると捉えるならば、当然「再配分」と「承認」領域の両方で社会正義の実現が指向される必要がある。Lister は、従来の「経済的貧困」を「再配分」の領域の問題、彼女が重視した「関係的・象徴的貧困」を「承認」領域の問題に置き換え、両者は密接に関わり合いつつも別次元の問題であるという Fraser の「パースペクティブ二元論」を敷衍して、「貧困の車輪」という、いわば「貧困の二元論」を完成させたのである。しかし、この貧困理論は論理矛盾を孕み、かつ近代的貧困観に囚われているため、再定義を必要とする。何故ならば、そもそも彼女の貧困理論の土台になっている Fraser の「再配分」と「承認」の「パースペクティブ二元論」自体に、Honneth が指摘する様な瑕疵が存在するからである。

Fraser と異なり、Honneth は、「承認」を「再配分」の上位概念に置いているため、仮に Honneth の承認論を土台にして社会正義を論じ、そこから社会福祉学の貧困理論を導き出すならば、必然的にそのような貧困理論は、承認概念に基づく「貧困の一元論」にならざるを得ない。「経済的貧困」を全ての貧困問題の中核として捉え、その領域における「再配分」に拘泥した Lister は、「承認」に特化した「貧困の一元論」による概念構築を退けざるを得なかった。そして、彼女の貧困理論に、貧困の定義、概念、基準等の多くを依拠する志賀もまた、Honneth に依拠する立場を巧妙に避けている。志賀は、自身の社会的排除論を展開するに当たって、

Honneth と Fraser が繰り広げた論争自体への直接的な評価さえも避けている。

ホネットは「再配分」という理念を「承認」をめぐる闘争に従属的なものと位置付ける。その一方で、フレイザーは「再配分」と「承認」の両者を相互に還元不可能ではあるが関係し合う二つの社会正義であると考えている。

本書は、貧困理論の立場から、この両者のいずれにも与しない。(志賀 2016 : 22)

貧困理論を説き起こすに当たって、この両者のいずれにも与しない立場を取ることが、果たして理論上可能であろうか。恐らくそれは、不可能に違いない。仮に、両者のいずれにも依拠しないのであれば、一体それはいかなる社会正義に基づく貧困理論なのか、本来明確に指し示す必要があるはずだ。志賀は、社会正義の理論から貧困理論に辿り着くためには、両者の間に平等に関する理論を一度介する必要があると述べ、平等理論に関しては、寧ろ古典的な Rawls の第二原理(「格差原理」と「機会均等原理」)に貧困理論の土台を求めようとする。しかし、Honneth の承認論の三類型にも、「平等原理」に基づく「法による承認」が準備されている。古典的な正義論として平等概念にしか触れない Rawls よりも、「再配分」領域も「承認」概念に包含する、幅広い射程を持った Honneth の承認論にこそ、本来志賀は、自己の貧困理論の土台を求めるべきなのである。

然るに、その後の理論展開過程において、志賀は無意識のうちに、Honneth ではなく、明らかに Fraser の立場に軸足を置いている。

ホネットとフレイザーの承認論の議論を更に延長させるには、平等に関する理論から「許容できない不平等」に関する理論へと歩を進めていくための理論的整理が必要になる。格差のなかの貧困への対応を射程に入れた再配分の理論形成は、共同体の深まりという点に着目し、「あるべき平等」と「許容できない不平等」という区別を行いながら、さらにその両者から形成される理論がいかなるものであるのかを検討し、承認の正義とは別の再配分の正義論が「あるべき平等」と「許容できない不平等」のどちらに依拠したものであるのかを整理しておく必要がある(傍点筆者)。(志賀 2016 : 24)

何故志賀は、両者のいずれにも与しないと言った端から、「許容できない不平等」を是正するために、「再配分」が必要であると認識し、「承認の正義とは別の再配分の正義論」を臆面も無く語ってしまうのか。それは、Lister 同様に、志賀もまた、Fraser に依拠した「貧困の二元論」が正しいはずだという直観を抱いているからであろう。

しかし、Fraser の「パースペクティブ二元論」を貧困理論の土台にする限り、「新しい貧困」の本質を掴むことは絶対にできないのである。何故ならば、必然的にそこから派生する貧困理論は、「再配分」と「承認」の二元論に帰着してしまい、貧困理論の根底に無批判に「所得貧困」が組み込まれてしまうからだ。しかし、志

賀も指摘しているように、「新しい貧困」は、本来そのような「所得貧困」とは位相が異なる貧困なのである。つまり、本来それは承認論の拡張によって捕捉しなければならない類の貧困なのであるが、「パースペクティブ二元論」を前提にすると、Sen や Lister のように、貧困概念の中核に「所得貧困」を置かざるを得なくなり、「再配分」の必要が無い貧困は存在しない、という現在主流派の貧困理論に帰着してしまうのだ。そして、本研究は、まさにそのような貧困理論の誤謬を正すことを目的としている。すなわち、「再配分」の必要が無い貧困は存在する、ということを、実証研究を通して主張したいのである。そして、「パースペクティブ二元論」に依拠しない新しい貧困理論だけが、社会福祉学のアポリアを打破し、「新しい貧困」の正しい理解へと導くアリアドネの糸になり得ることを指摘したいのである。

志賀は、「所得貧困」にさほど拘泥しない社会的排除概念を基礎として「新しい貧困」を捕捉しようと試みているが、残念ながら社会的排除が広汎過ぎる概念であるが故に、「所得貧困」を伴う「新しい貧困」と、「所得貧困」を伴わない「新しい貧困」を弁別できていない。加えて、「所得貧困」を伴わない「新しい貧困」を、「貧困」であると認識すらできていない。また、Castel のように排除概念の対象を厳密に定義しない限り、社会的排除概念から貧困理論を展開すると、このような貧困、つまり、先述した「再配分」の必要が無い貧困だけでなく、「再配分」の必要性が低い貧困に対してさえ、主流派の貧困論者から必ず、「それは果たして貧困なのか？」という問いかけがなされる。それに対して、「社会的に排除されている以上著しく『承認』を欠いており、『不平等』であるが故に『貧困』なのである」と答えたとしても、必ず、「その不平等は、本当に社会的に許すことができない類の不平等なのか？百歩譲って、仮にそうだとすると、不平等と貧困は果たして同義なのか？」という問いかけがなされるだろう。そして、ここで再び、「新しい貧困」問題は、社会福祉学のアポリアに迷い込むのである。

上述の問いに対して、志賀の社会的排除論では、誰もが十分に納得できる解を示せない。既述の通り、第一に、承認論及び社会的排除概念に対する理解が不十分なため、「社会的に許されない不平等」と「そうでない不平等」に明確に線引きができていない。これは社会的排除概念の無制限の拡張をもたらしかねない。第二に、貧困に対する理解が不十分なため、「所得貧困」を伴わない「新しい貧困」の検討ができていない。本研究で提唱する新しい概念である「実存的貧困」の領域に関して、志賀はその可能性すら検討に加えていない。故に、志賀の社会的排除論は、「新しい貧困」を捉えると言いながら、まるで投網で漁をするかの如く、「新しい貧困」以外の諸々の社会問題まで社会的排除概念で包含してしまう雑駁な理論に留まっている。このように、現状志賀の社会的排除論は貧困理論としては未完成な部分が多く、全面的にこれを支持することは不可能である。結局、志賀の社会的排除論では、図 1 で提起された問題は一切解決されることは無い。故にこれは、背理なのである。

(4) 従って、より精緻に「新しい貧困」を捕捉するためには、志賀が構築した社会的排除論では不十分で

あり、「再配分」の必要が無い貧困は存在するという事まで実証し、捕捉できる貧困理論でなければならぬ。本研究は、それが可能な貧困理論を、第4章以降で詳説する実証研究を基に提唱する。そのために本研究が依拠するのは、Fraserの「再配分」と「承認」に基づく「パースペクティブ二元論」ではなく、Honnethの承認論である。Honnethが提唱する一元的な承認論に従って、貧困を三つの「承認」カテゴリから分析し、従来の貧困理論に存在しなかった位相の異なる貧困を描き出そうとする「貧困の一元論」なのである。

ここで誤解が無いように断っておきたいが、Fraserが「再配分」の領域とした経済的な社会正義の実現を、Honnethは全面的に否定している訳ではない。彼は、適切な「再配分」の大前提として、その対象に対する社会からの「承認」が先行しない限り、「再配分」の成果自体が無効化される危険性を指摘して、「再配分」に先んじる「承認」の重要性と本質性を説いているのである。

例えば、Honnethは、女性の労働について以下のように述べている。

関連する研究文献を見渡すと、早々と次のことが明らかになる。主として女性によって担われる活動領域は低く評価されるとしたもののだが、その事実、労働の実際の内容への関連に基づくものではない。むしろ逆であって、職業化されたどんな活動であっても、それが多数において女性によって行われるようになるのとたちまち、自動的に、社会的地位の階層秩序の中で、価値を喪失することになるのである。それに対して、対応する性の交替が反対方向に推移する場合には、当該の活動領域は逆に地位を高めるに至る。どちらの性に属しているかという問題こそが、ここでは、社会的分業の組織化の中である特定の活動にどのような社会的価値評価が帰されることになるかを、労働内容の特色からは独立に決定する文化的要素として働くのである。女性が具える仕事能力の価値を低くみるというこの（自然主義的に理由づけられた）文化的メカニズムこそが、ようやく初めて、市民社会＝資本主義社会がそれ自身の前提についてなす自己了解において、家事や子育てという、女性によって行われる活動が、まずは一向に「労働」として概念記帳されなかったという事態を帰結するなどということが何故ありえたのかという点を説明しうるのである。そして、職業上の性の交替が起こる場合、それが男性から女性への方向に進むと、なぜ、決まったように著しい価値低下が起こるのかが説明されねばならない場合には、この同じメカニズムが引照されねばならないのだ。（Honneth＝2003：173）

現在、日本社会では保育や介護といったケア労働に関して、社会的な需要が著しいにもかかわらず、極めて低賃金で推移していることが指摘されている。そして、女性の社会参加を促進し、かつ少子高齢社会がもたらした労働力不足を補うために、一般に3K（危険、キツイ、汚い）或いは4K（危険、キツイ、汚い、給料安い）と揶揄される領域で働く保育士や介護士の給与を底上げすることが政治的に盛んに議論されているが、Honnethは、女性の労働に対する適切な「承認」を欠いたまま、ケア労働一般に対して政治的判断で賃金引上げという「再配分」を行うことに、果たしてどれ程の意義があるのかを鋭く指摘するのである。本来、「再配

分」に先行する「承認」の領域において、貶められた一方の性の尊厳の回復と彼女らが従事する労働の正当な価値こそが論じられるべきなのだ。社会的に適切な「承認」がなされれば、男女間の「平等」が実現し、社会正義が達成された帰結として、「再配分」としての賃上げは自然となされるはずなのである。

同様の「非承認」の問題は、男女間の不平等に留まらない。欧米における黒人と白人の間の不平等、アジア諸国と欧米諸国との不平等など、様々な場所で散見される根強い差別と偏見に起因する不平等は、現状、諸々の経済格差や文化的格差を生じさせている。そこに存在するのは、紛れもなく Honneth が提唱する『承認』をめぐる闘争だ。そして、『承認』をめぐる闘争においては、藤野（2016：214）が指摘するように、「下部構造（経済）が上部構造（文化）を決定する、という形では、必ずしも問題は解決しない」のである。例えば、Fraser の認識に立てば、イスラム国（ISIL）に欧米の若者達（多くは移民の二世、三世）が次々と参加する理由は、何よりも先ず移民家庭が置かれている経済的問題に帰着しがちであるが、その認識は恐らく短絡的に過ぎるであろう。現実には、決して少なくない移民家庭が欧米社会においても比較的裕福であり、またそこで育った子弟達もそれなりの高学歴であることが以前から良く知られている。であるならば、若者達がイスラム国（ISIL）に参加する動機は、「再配分」に対する絶望ではない。無論、彼らが無知で愚かだからでもない。彼らが現代の聖戦に参加する真の動機は、彼らが属する民族や文化が世界から尊厳を持って扱われず、正当に評価されていないことに対する憤慨と怒りなのではないだろうか。これもまた、『承認』をめぐる闘争の一形態なのである。

「承認」が「再配分」の上位概念であるという Honneth の承認論が、現実社会においても極めて有効であることは上述の事例からも明らかである。そして、Fraser の「パースペクティブ二元論」は、「再配分」に拘泥する余り、「承認」の重要性を過小評価しているという点で看過できない瑕疵がある。本研究は、Honneth の承認論に基づいて、Fraser に依拠する Lister の貧困理論の瑕疵を修正し、より妥当性の高い貧困理論の概念化と図式化を試みるものだが、次章以降では、「再配分」の必要が無い貧困は存在するという事例を先ず冒頭で取り上げ、古典的な「絶対的貧困」概念から Lister の「貧困の再定義」に至るまで、貧困理論の大まかな歴史を順次概観し、そしてまとめとして、最後に「新しい貧困」の十全な理解を可能にする新たな貧困のグラントセオリーを提示したい。その際、志賀が「貧困理論」ではないと切り捨てた、日本固有の貧困研究の成果を随時取り入れる。江口英一の「社会階層論」や「人口プール理論」、長谷川俊雄の「実存的貧困」概念（本研究が提唱する「実存的貧困」概念とは質的に異なる）は、本研究において、極めて重要な意義を持っている点は最初に強調しておきたい。

第1章 「貧困理論」の再検討

第1節 「実存的貧困」：新たな貧困概念の提唱

第1項 「経済的貧困」概念の限界：物質的貧困論を超えて

(1) 「恥の多い生涯を送って来ました。」の一文で始まる太宰治の私小説・『人間失格』の主人公は（つまるところ、太宰治は）、果たして「貧困」であろうか。或いは、世に「東電 OL 殺人事件」として知られる事件の被害者であり、東京電力に入社した初めての女性総合職でありながら、毎日会社を退社した後、渋谷の円山町で約 10 年間に渡って街娼生活を送り、最期は何者かに暴行された後に殺害された女性は「貧困」だったのであろうか。

彼らは疑いようもなく、闇の様に暗く深い「貧困」状態に陥っていた。というのが、本研究が準備した解である。何故ならば、彼らを貧困であると理解しない限り、彼らの数奇な運命、筆舌に尽くし難い孤独と苦悩、そして極めて自傷的な日々の営みを説明することはできないし、同じような状態に置かれている社会的マイノリティへの理解も不可能であるからだ。そして、太宰や東電 OL が貧困であると理解可能ならば、それを敷衍して、世界や日本社会を震撼させた数々の事件の犯人達もまた、同じ類の貧困であったことが理解できるようになるだろう。

突如として何者かがさしたる理由もなく凶行を犯すような事件は、これまで、常人には理解不能な「心の闇」として、各々の立場や専門性から多くの精神医学者や臨床心理学者、社会学者がそのような事件が起こる度に縷々見解を述べてきたが、それらは残念ながら、あたかも目隠ししたままで象の体を触るようなものであり、いずれも現象の一面は捉えているものの、その全体像を十全に把握しているとは言い難かった。

この種の事件は、インドネシアでは、単に amok と呼ばれる土着の精神疾患として処理される。アメリカでも、しばしば多発する概ね自殺を伴う銃乱射事件はそのように扱われる傾向がある。だが、昨今のヨーロッパ社会において、比較的高学歴で恵まれた社会的地位の若者達が次々とイスラム国 (ISIL) へ出国し、イスラム原理主義に基づくジハードへ参加する場合は、さすがに単なる精神疾患だけではその行動に説明がつかなくなってくる。日本でも、2014 年に北大を休学中の 26 歳の学生がイスラム国 (ISIL) に入国しようとして水際に警察に止められる事件が起きた。更に振り返れば、1990 年代に首都圏でオウム真理教の信者達による無差別殺傷事件が起きたが、事件当時犯行に関わった者達が日本でも屈指の名門大学を卒業したエリート達であることに、日本社会全体が震撼した歴史がある。他にも、不可解な自殺、殺人、テロリズム、その他様々な自傷他害行為、嗜癖由来の事故が日々、資本主義が十分に行き渡った経済的に豊かな先進国を中心に起きているが、このような先進国特有の深刻な社会病理に対する理解の補助線として、本研究を通して「実存的貧困 (existential poverty)」という新しい貧困概念を提唱する。そして、その新しい貧困概念によってのみ、古くは「永山則夫連続射殺事件」が、最近のものであれば、「秋葉原通り魔事件」や「相模原障害者施設殺傷事件」の犯人達の置かれていた状況と彼らの犯行動機が全て了解可能になり、引いては「新しい貧困」全般の理解が

促進されるのである。

そのためには、社会福祉学における一つの堅牢なアプリオリを最初に棄却する必要がある。それは、「貧困とは必ず中核に経済的な貧しさを伴うものである」という概念である。我々は、ほぼ無条件に「貧困＝経済的貧しさ（多くの場合は極めて酷い）」をイメージしがちである。経済的な貧しさこそが、人生における最大の軛であり、人間の可能性を最も剥奪する無慈悲な桎梏であり、生活の質を大きく低下させる諸悪の根源である、という素朴理論を持っている。従って、OECD 加盟国の中でも日本のひとり親家庭の貧困率は、世界でも最悪の 50.8%、子どもの貧困率も現在最下位に近い 15.6%となっているという「相対的貧困」概念に基づく統計資料（厚生労働省の「平成 28 年国民生活基礎調査」）をテレビ番組や書籍が紹介すると、「絶対的貧困」概念だけが「貧困」とであると勘違いした多くの識者から、「世界第 3 位の GDP を誇る経済大国の日本には、そもそも既に貧困など存在しない」という疑義が呈され、たちどころに不毛な「貧困バッシング」がメディアを介して繰り広げられるのだ。哀しいことに、社会福祉学や社会学を専門としない者は、「相対的貧困」すら、貧困概念として受け止めることができないのである。

貧困＝経済的困窮という安易な概念構造に対しては、昨今「貧困の再定義」と称される動きがヨーロッパを中心に展開されており、強い批判が起きている。序章でも触れた通り、Castel や Paugam らは、フランスにおけるプレカリアートの研究を通して、所謂「新しい貧困」を提唱した。それを、Castel は「社会喪失」^{ディザフィリアシオン}と呼び、Paugam は「社会的降格」、「降格する貧困」と表現した。彼らが最も着目したのは、人々が貧困状態にある時の経済力の欠損ではなく、貧困者が置かれた社会的紐帯の乏しさ、すなわち社会的な関係性の欠如である。何故ならば、経済的に困窮した人々に対して、ただ「社会参入最低所得 (RMI)」や失業手当を配ってその経済的苦境を打開したところで、彼らは社会の上部階層にもう一度立ち返ることができないからである。既に経済的には「絶対的貧困」の状況は脱し、様々な救済措置がなされているにも関わらず、彼らは社会の下層に力なく転がり落ちていくことはあっても再度浮上していくことはない。まさに、「降格する貧困」なのである。

湯浅が同様の事態を日本社会でも発見し、その状態を「すべり台社会」と呼んだのは 2008 年のリーマンショックの前後であるが、既に 1980 年代から Paugam が「降格する貧困」と呼んだものは多くの先進国の中で顕在化していたのである。人々が、経済力によってその未来の可能性を奪われているのであれば、「再配分」の正義論に基づく現金給付こそが貧困者にとっては最大の救いになるはずである。しかし、比較的手厚い社会保障制度が構築されているはずのヨーロッパ社会において、現在も「降格する貧困」に歯止めはかからず今なおそれは裾野の拡大を続けており、国内に堅固な格差社会を構築しているのである。

Castel, Paugam らが貧困者の極めて乏しい社会関係資本とソーシャルサポート・ネットワークに着目して「新しい貧困」を論じたのに対して、Stiegler もまた、「新しい貧困」として「象徴的貧困」がハイパーインダストリアル社会において発生していると指摘する。Stiegler (=2006: 2) は、「日本とアメリカ、ヨーロッパ、そしてテクノロジーが支配している社会において特徴的な事象は、『個』が衰退し、シンボル（象徴）の生産に参加できなくなることである」と指摘する。ここで彼が意味する象徴とは、「知的な生の成果（概念、思想、定

理、知識」と感覚的な生の成果（芸術、熟練、風俗）」の双方を指すが、象徴的なものの瓦解は精神分析的欲望の瓦解であり、Freud が端的に「大衆の心理的貧困」と称したものが一層悪化した状態である (Stiegler=2006: 40)。

新自由主義政治経済がもたらした格差社会の周縁で社会的排除の対象となり、社会的紐帯が断たれるということは、必然的にシンボル（象徴）の生産という活動からは継続的に疎外される。そして、更に社会的排除の対象となったものには、外部から容赦なく、劣等なシンボル（象徴）が一方的にスティグマとして貼り付けられるのである。その結果、生活保護受給者、ホームレス、長期失業者、ひきこもり、ニート、フリーター、前科者、移民・難民、LGBT 等の性的マイノリティ、薬物依存症者、多重債務者、売春婦、高齢者・障害者等の社会的弱者など、知的な生の成果とも感覚的な生の成果とも切り離された存在は、容赦なく共同体そのものからも疎外される。個人のアイデンティティが常時脅かされるハイパーインダストリアル社会において、そのような周縁的地位に置かれることは、社会的存在である我々人間にとって致命的であり、それだけで多大な苦しみを伴うことになる。

(2) 「関係性の貧困」と「象徴的貧困」は、「経済的貧困」と相互に影響し合いながら、非常に困難な状況を形成するというのが、Lister の主張である。Lister は、上記の概念を一括りにし、貧困概念の中核に経済的な困窮を据え、その周縁に「関係的・象徴的貧困」の概念を布置して新たな貧困観を呈示した。イギリスにおける「アンダークラス」の研究を通して、Lister が明らかにしたのは、貧困者は確かに経済的にも苦しんでいるが、それよりも遥かに、社会からの偏見や差別、そして社会関係資本の乏しさに苦しんでいたという事実である。多くの場合、経済的な貧しさに対しては、様々な生活の知恵や工夫で貧困者は何とか日々様々なやりくりをして、ささやかではあっても自己の「行為における主体性 (agency)」を実感することができるが、「関係的・象徴的貧困」の領域に対して、貧困者ができることは少ない。スティグマは容赦なく他者が一方的に付与するものであり、その結果もたらされる自尊感情の低下と地域社会との関係性の断絶は、自己の努力だけではいかんともし難い問題である。Lister (=2011: 21) は、『貧困とはなにか』の冒頭で、「貧困は、不利で不安定な経済状態としてだけでなく、屈辱的で人々を蝕むような社会関係としても理解されなければならない」と述べている。彼女は、「新しい貧困」に関して政治学者の Fraser の「再配分」と「承認」の政治論から多くの示唆を受け、剥奪や搾取といった経済的な問題に関わる貧困だけでなく、「非承認」（認められないこと）や「蔑視」といった「文化的・象徴的不正義」への配慮が不可欠であることを指摘しているのだ。

Lister による「貧困の再定義」の中で、経済的困窮以上に「関係的・象徴的貧困」の根深さが浮き彫りにされた訳だが、Lister は、あくまで彼女の新しい貧困概念の中心に、経済的困窮を核として置いた。それを表したのが、「貧困の車輪」(図 2-1・上) である。物質的核として、中心に「容認できない困窮 (hardship)」(Lister の場合は、経済的困窮) を配置し、その周囲にあたかも車輪のように貧困の関係的・象徴的な側面を配置した。

「容認できない困窮」が絶対的な指標であれ、相対的な指標であれ、経済的に貧しいということが今なお貧困

概念の大前提にあり、その状況に置かれてかつ関係的・象徴的にも貧困を味わっている状態を、Lister は最も深刻な貧困状態であると捉えたのである。

Booth らに代表される古典的貧困研究を土台とする従来の経済的貧困論と大きく異なるのは、Lister が「関係的・象徴的貧困」の方が遥かに人間の「行為における主体性」に根深い爪痕を残すものであり、社会福祉学的により一層刮目すべき貧困問題であると指摘した点である。ただ、Lister の貧困理論は、土台となる Fraser の「パースペクティブ二元論」に依拠する余り、「経済的貧困」を貧困の中核に据える近代的貧困理論に留まっているため、ポストモダン的な「新しい貧困」を正しく捕捉するために、再定義を必要とすることは既述の通りである。

(3) さて、全てでは無いが、幾つか本研究で提唱する独自の貧困概念を構築するための有用な「新しい貧困」に関する論考が出揃ったところで、再度本章冒頭の問に立ち戻ろう。太宰治や東電 OL は、果たして貧困であろうか。この問は次のように換言できる。Lister の「貧困の車輪」から、中核にある「容認できない困窮」を、すなわち、経済的困窮を切り離し、なおその状態を「貧困」として措定できるであろうか、と。

Lister 自身は、あくまで中核である経済的困窮に固執している。彼女は「象徴的・関係的貧困」を経済的困窮以上に重視してはいるが、それ自身を単独の貧困概念として措定している訳ではない。従って、Lister の車輪の中核が貧困概念には不可欠であるとするならば、青森県の富豪の一家に生まれ、精神科病院に入院させられた後も、自殺するまで家族から経済的な支援を継続して受けていた太宰や、東京電力という超一流企業で総合職として働き、何者かに殺された時は東電の株式も含めて約 7,000 万円の資産を保有していたとされる東電 OL は、貧困ではないと考える他ない。

しかし、Lister が提唱した「貧困の車輪」の外側部分、「関係的・象徴的貧困」が単独で、或いは何らかの要素との組み合わせによって「貧困」として措定されるのであれば、確かに貧困概念は拡張されるものの、社会福祉学は、対象者理解に関しても広大な射程と奥行きを手に入れることになる。その場合、「関係的・象徴的貧困」、そして、後述する「実存的貧困」が極めて色濃く人生に付きまとっている太宰や東電 OL は、いかに家族や本人が経済的困窮を抱えておらずとも、「個」としては「貧困」であった、と表現して差し支えないであろう。

本研究は、「関係的・象徴的貧困」の一部は、幾つかの条件を満たせば「経済的貧困」が中核に存在しなくとも十分に「貧困」に該当する、と考える。そして、それを「実存的貧困」と名付けるものとする。この「実存的貧困」という耳慣れない概念を理解するために、その土台となっている Stiegler の「象徴的貧困」を今少し下記で考察してみよう。

Stiegler と Lister は、共に「象徴的貧困」、或いは「象徴的貧困」という言葉を用いているが、厳密に言えばこの 2 人の概念は本質的に異なる。Stiegler は、哲学者としての立ち位置から Freud の精神分析や Deleuze, Derrida, Foucault らの哲学・現代思想を基盤に、ハイパーインダストリアル社会の文化的帰結としての個々

人の「自己の喪失」を「象徴の貧困」という概念を用いて指摘している。

本項で、Castel や Paugam が近代から後期近代社会に至る過程で生じる「新しい貧困」を指摘していることを示したが、彼らが指摘したのは、主に社会的紐帯の欠損や社会的排除がもたらすスティグマの軛である。一方で、Stiegler が「象徴の貧困」で訴えているのは、スティグマや恥辱のように外部から貼り付けられる負の象徴のことではない。彼が主張する新たな「象徴の貧困」とは、ポストモダン社会における個人の内奥の空虚化なのである。

我々は、各自が共同体の一員であるために、様々なシンボル（象徴）を共有することで、その社会に繋がっている。個人は、自らの人生の中で様々なシンボル（象徴）を生産し、また、他者と社会的に認められたシンボル（象徴）を共有することで、その共同体の中で個人的アイデンティティと民族的アイデンティティの両方を生成していく生き物なのである。ところが、高度に発展した工業社会は、個人と社会の両方の土台となる従来のシンボル（象徴）生成の営みを疎外するのである。

Stiegler がハイパーインダストリアル社会、Giddens がハイ・モダニティ、Bauman がリキッド・モダニティと呼び、そしてより一般的にはポストモダン（後期近代）と称される現代、新自由主義政治経済体制と市場原理主義が国家を超えて世界規模で発展した結果、従来の労働者の価値に大きな地盤沈下が起き、一方で消費者が社会の中心に躍り出た。シンボル（象徴）の生成は労働の成果というよりは、寧ろ労働とは切り離された消費によって達成されるものに変容したのである。

その状態を、Stiegler は以下のように解説する。

工業大国の都市部に住む人々の大多数は、ますます耐え難くなる一方の状態です。それらの人々の果たす仕事はますますやりがいのない、働く人にとっては何の意味もないものとなっています。それは意義とはかけ離れたもので、彼らの仕事の目的はたいていは極めて俗悪なものです。労働によって得る収入で彼らは消費という行動を取り入れるのですが、それらの行動はますます規格統一されたもので、消費されたものは消費者にとってほとんど何の存在感ももたらさないため、そこから生じるのはつねに深まるばかりの底なしの欲求不満であり、その結果つねにもっと消費に熱中することになるのです。つまり、募る一方の欲求不満は失墜そのものに加速度的に向かっている傾斜のようなもので、問題はしたがって、いつどこでそれが止まるのかを知ることなのです。「自分自身の自己生産」とは程遠い状態です。（Stiegler=2006 : 181）

今日ではこれらの破壊や強化がどこで生じているのか検討することが必要になりました。その観点から言えば、集团的個性化のあらたなカタチについてどの程度まで語れるかを問わなければならないのは明らかです。そのあらたな集团的個性化を支えているのは「ブランド」（マーケティングの産物ですが、「ブランド *marque*」という名前そのものも解説に値するでしょう）なのです。あらたな個性化のかた

ちはメーカーによって組織されるのですが、それらの企業は集団的個体化のシステムを、政治的な統一に代わって経済的なまとまりとして作り出します。しかも労働によってというより、労働よりも安定している消費—消費は止むことがないので—によって作り出すのです。この経済的なまとまりが作り出す個体化のプロセスは、マーケティングによって組織されコントロールされる取り入れによってできあがった極めて脆いものです。しかしそれはこれまでの、たとえば国民としての心的かつ集団的個体化に取って代わるものなのです。(Stiegler=2006 : 150)

現代において、経済的なマーケティングが消費という人間の活動を通して、個人の人格形成や共同体意識の形成にまで強い影響を及ぼしているという彼の指摘は正鵠を得ている。そして、より一層恐ろしいのは、単なる私企業の経済論理によって、国民国家としてのアイデンティティまでが脅かされているという現実である。これまで、我々は、民族的アイデンティティを何らかの共有できるシンボル（象徴）を介して協働で構築してきたのであるが、現代においては、営利を追求するマスメディアやグローバル企業によるマーケティングの結果によって、非常に脆く危うい国家的ブランド（象徴）までが何時の間にか我々の共同体に創出されているのである。それは、かつてナチスドイツという悪夢の形態で歴史に登場したものが、政治的プロパガンダではなく、企業的マーケティングによっても形成され得るという恐ろしい事態である。

それが如実に顕現した事例として、Stiegler は 2002 年のフランス大統領選挙を挙げる。J.シラク、L.ジョスパンなどの有力な候補者に混じりながらも、仏大統領選挙の第 1 回投票で、投票に参加した有権者の実に 16.68%が排外主義的極右政党である国民戦線（Front national）の党首であるジャン＝マリー・ルペンを選んだ。その際、Stiegler (=2006 : 24) は、彼らを同じフランス人として、「いかなる共通の感性をも共に感じるができない人たち」であると同時に、ある地区（商業ゾーン、産業ゾーン、田園ゾーン、整備ゾーン等）に閉じこもっており、その場所は感性的に脱落してしまっている以上、もはや彼らが住む場所は「世界」とは呼べない不毛な暗黒^{ディストピア}世界であると喝破した。つまり、高度工業社会において、有権者の約 5 分の 1 が、他者を思いやる気持ち、すなわちフィリア（友愛）を失っており、そしてそれがまさに人間の本源的自己愛の土台となるべきものであるが故に、彼らは既に自分自身をも適切なナルシズムをもって愛せなくなってしまったのである。結果的に、その歪んだナルシズムは、激しい攻撃性となって自らのゾーンから外れた、彼らから見て異質な者達に向く。その行為は、自己を喪失し、世界から疎外されて足場を失ってしまった憐れな者達の存在証明の足掻きだ。自らのルサンチマンの捌け口を共同体の別の集団の中に探すことで、高度工業社会から零れ落ちまいと、そして何より必死に実存的な生の営みに縋り付こうと苦しんでいるのである。

全く同様のことが、大西洋を越えて、2017 年に世界一の経済大国・工業大国であるアメリカでも発現している。第 45 代アメリカ合衆国大統領に就任したドナルド・トランプは、フランスの国民戦線さながらに、声高に移民排斥を訴え、イスラム等の異文化に対する不寛容の姿勢を選挙期間中一貫して示したが、寂れた工業地帯である「ラストベルト（Rust Belt）」の白人労働者達が、彼の反知性主義的ポピュリズムを熱烈に後押し

した。彼らもまた、良識あるアメリカ人達からすれば、「いかなる共通の感性をも共に感じる事ができない人たち」の一例であろう。

上述の通り、Stieglerは国民戦線という排外主義的極右政党への投票行動という事例を用いて、自己愛の未成熟から来る異質な者に対するフランスの社会的排除の現実を指摘してはいるものの、あくまで彼が提唱する「象徴の貧困」の主眼は、フランスに生きる個々人が現在進行形で直面している「集团的個体化」の失敗、すなわち「自己の喪失」と「世界からの疎外」にあることは明確である。一方、Listerは、社会福祉学の鍵概念である社会的排除を念頭に、排除される者に張り付けられるスティグマや恥辱、そしてそれらが当事者にもたらす学習性無力感という心理的・社会的な意味合いで「象徴の貧困」を規定している。Stieglerが指摘したような哲学的な意味での疎外にListerが全く触れていない訳ではないが、あくまで彼女が「関係的・象徴的貧困」と呼ぶものは、彼女の貧困理論においてはスティグマや恥辱という外部からもたらされる偏見と差別のレベルに留まっている点で、Stieglerが人間の内奥を照らしながら描き出した、実存主義哲学に通じる貧困概念に比べると若干皮相的である。

以降の考察において、両者が用いている「象徴的貧困」概念のずれがもたらす混乱を避け、そして筆者自身の貧困概念をより一層明確にするために、本研究において特別な断りが無い場合、「象徴の貧困」或いは「象徴的貧困」は、皮相的ではあるが、一先ずListerの定義に準じて用いることとする。そして、Stieglerが用いている「象徴の貧困」という概念に、後の章で詳説するFranklの「実存的空虚」やGiddensの「実存的不安」の概念を付加し、独自の貧困概念として「実存的貧困」及び「絶望的貧困」という二つの新概念を本研究において提唱したい。

これらの貧困概念は、Listerが指摘するスティグマのように外部から一方的に貼り付けられる受動的な負のレッテルに起因するものではなく、自分自身が自己を脱価値化し、自らが生きる世界の足場を自らの手で崩落させていく、ある種能動的・破壊的で極めて根が深い自己否定の先に存在する。湯浅が『反貧困「すべり台社会」からの脱出』の中で、「5重の排除」と呼んだもののうち、最も深刻な段階である「自分自身からの排除」に近い概念である。しかし、自らを排除する主体が第三者ではなく、あくまで自分自身であるという自虐的な状態が何故発生するのかを、湯浅は理論的な形で明快に論じている訳ではない。彼はただ、個人の内面に向かって深化する排除のメカニズムをホームレス支援という一つの貧困問題への実践を通して発見し、叙述したに留まっている。その点を補足するために、現代社会において「実存的貧困」が何故発生するのかという理論的枠組みに関して、次章において先述したStieglerの新しい貧困概念と、Giddens, Baumanらの社会学的考察を土台として詳らかに考察する。そして、そのメカニズムが、湯浅が前提としているような経済的困窮状態や「自分自身からの排除」に先行するとされる4つの排除を必ずしも必要とはしない点を強調したい。

これまで論じてきた貧困概念を整理し、改めて図化して表現したのが、図2-1の下段である。「実存的貧困」は、「経済的貧困」と「関係的・象徴的貧困」の中に、横断的に含まれる概念であるが、既に述べた通り、必ずしも「経済的貧困」を必要としない。その点において、これは全く新しい貧困概念である。「実存的貧困」が、

「経済的貧困」を伴っている場合は、三重の貧困が凝縮された「絶望的貧困」であると定義する。図 2-1 にある通り、「実存的貧困」は、Lister の「貧困の車輪」の枠内に収まる概念であり、「関係的・象徴的貧困」の安易な拡張版ではない。その意味では、貧困概念を徒に広げたのではなく、更に深めたのだと理解されるべきである。無論、人間にとって、本研究で提唱する「実存的貧困」状態は、Lister が重視した「関係的・象徴的貧困」よりも、一層耐え難い苦悩であることは十二分に強調しておきたい。

近年、志賀が主張したように、社会的排除を新しい貧困理論として捉える向きもあるが、本研究がその立場に与しないことは既に付言した通りである。社会的排除は非常に多面的の性質を持っており、序章で見た通り、現時点においては、全ての研究者の合意が得られるような具体的定義が存在しないため、Lister が指摘しているように、単独の貧困理論というよりは、「貧困分析の幅広い枠組みを促進するもの」(Lister=2011: 145) として捉えるべきである。従って、社会的排除は、後に記す通り「実存的貧困」をもたらす必須の要因ではあるが、必ずしも同一の概念ではない。

本研究では、性風俗産業に従事する若い女性達が抱える生きづらさと彼女達の語りを通して、実証研究から「実存的貧困」がいかなる状態であるかを明らかにしていく。何故ならば、「実存的貧困」或いは、「経済的貧困」と「実存的貧困」の複合体である「絶望的貧困」という概念を最も分かりやすい生き方で体现しているのが、彼女達だからである。東電 OL のように、傍目には、ある意味社会の上層階級に属するような人間でも、「実存的貧困」の状態に陥って街娼生活を続けた以上、その背景には必ず「実存的空虚」と社会的排除やスティグマ、そして彼女を苦しめる何らかの個人的失調要因が存在していたはずである。その詳細な分析は、後の項に譲る。

本節では、次項以降で従来の貧困研究の歴史を改めて順を追って概観し、最終項では、現代社会において、近代的な貧困観ではもはや説明できないポストモダンの貧困が数多日本社会に誕生していること、そしてそのような「新しい貧困」に対する本質的な理解の枠組みとして、Lister が、Fraser の「再配分」と「承認」の政治哲学を土台にして築き上げた近代的貧困理論ではなく、Honneth の承認論に基づく新たなポストモダンの貧困理論、すなわち、「実存的貧困」及び「絶望的貧困」概念が必要不可欠であることを解説する。

第 2 項 貧困概念の変遷：Booth から Sen まで

(1) 社会福祉学における貧困研究の嚆矢は、19 世紀後半、17 年間に渡ってロンドン市で行われた Booth による「ロンドン調査」である。大学セツルメントの拠点であってトインビーホールの関係者から構成された調査員が、400 万人のロンドン市民全てを A：最下層、B：極貧、C と D：貧困、E と F：労働者階級・愉楽、G と H：中産階級以上、の 8 段階に分け、A～D を貧困、E～H を愉楽と規定した。Booth の当初の想定を裏切り、貧困のカテゴリに区分けされたロンドン市民は実に 30.7%に及び、ロンドン市民の間に貧困が蔓延していた事実が判明した。

Booth の貧困調査に次いで、彼同様に成功した実業家である Rowntree は、生まれ故郷のヨーク市において、1899 年から約 50 年間の長期に渡る調査を行い、マーケット・バスケット方式という科学的手法を用いて有名な「貧困線」の規定を行った。Rowntree は、「父、母、子ども三人の家族経費は、ヨークでは 21 シリング 8 ペンスとされた。これは単なる肉体的能率の保持のために絶対に必要なもの以外の支出は全く認めておらず、『なんら人間的な愉楽のない逼迫したもの』であるが、この程度の生活すらできない人々が総人口の 10%ほどいる」（岩田 2018 : 338）ことを明らかにし、そのうえで、上記の貧困線以下の家庭、すなわちその総収入が、単なる肉体的能率を保持するために必要な最小限度にも足りない部分を「第一次貧困」、その総収入の一部が、有用無用のいかににかかわらず、他の支出に充当されない限り、一応肉体的能率を保持するに足る程度の貧困状態を「第二次貧困」と規定した（岩田 2018 : 97-98）。

Rowntree の調査結果も、Booth の「ロンドン調査」の結果とほぼ同じで、ヨーク市の人口の約 30%が貧困状態にあることを証明したが、Rowntree の調査の独自性は、貧困が静的な状態ではなく、労働者のライフサイクルに従って動的に変化するものであることを示した点である。普通の労働者は、自分の少年時代、自分の子どもの養育期、そして引退後の老齢期の三期に顕著な貧困を示した。この結果をもって、Rowntree は、児童手当や年金の重要性を指摘し、第二次世界大戦後にイギリスが着手した「ゆりかごから墓場まで」という福祉国家制度の基盤作成に理論的に大きく貢献したのである。

Rowntree の調査において、「第一次貧困」が肉体的能率を基にした生存の問題として定義されたため、一般的には、彼の貧困概念が「絶対的貧困」の定義とされる。こうした貧困の絶対的概念は現在もなお有効であり、世界銀行は、2015 年 10 月に国際貧困ラインを 2011 年の購買力平価（PPP）に基づき 1 日 1.90 ドルと設定したが、この「1 日あたりの所得が 2 ドル以下」というものが、食料・衣服・衛生・住居について最低限の要求基準により定義される現在の「絶対的貧困」ラインである。

(2) 一方で、この定義を貧困概念として用いると、日本などの先進諸国では国内に生じている貧困問題を正確に捕捉できなくなってしまう。従って、現在は「相対的貧困」の概念を一般に先進国の社会保障制度の指標として使用し、社会の中における下位の経済的水準（等価可処分所得（世帯の可処分所得を世帯人員の平方根で割って調整した所得）の中央値の半分に満たない世帯員下）から貧困率を規定するようになっている。先述した子どもの貧困やひとり親家庭の貧困は、「相対的貧困」の概念から導き出されたものである。「相対的貧困」は、世界銀行の「絶対的貧困」ラインのように特定の研究者や機関が恣意的に定めたものではなく、数学的な指標なので主観が入りにくいとされるが、国によって「貧困」のレベルが大きく異なってしまうという可能性を持っている。実際、先進国に住む人間が「相対的貧困」の意味で「貧困」であっても、途上国に住む人間よりも高い生活水準をしているという場合と、先進国においては物価も途上国より高く購買力平価を用いた計算をすると途上国よりも生活水準が低くなってしまう場合の二種類の逆転現象が「相対的貧困」の矛盾として存在する。

「相対的貧困」概念は、Rowntree の「絶対的貧困」概念に対するアンチテーゼとして、Townsend によって主張された。Lister が指摘するように、実際には Booth も Rowntree も Townsend 程ではないが、ある程度慣習的な生活様式との関係で貧困を想定しているのだが、社会福祉学において、今なお彼らの研究は「絶対的貧困」の代名詞となっている。Townsend は、Rowntree の「絶対的貧困」概念に基づいてイギリスの戦後福祉国家が、傲慢にも国内において既に貧困は除去されたと宣言したことを痛烈に批判し、イギリス社会において未だに貧困は撲滅されていないこと、そして貧困問題を絶対的概念で捉えるべきではないことを強く主張した。彼が、その批判の論拠としたのが、「相対的剥奪 (relative deprivation)」の概念である。

Townsend は、単なる資源だけに着目するのではなく、その背後にある生活様式の重要性を極めて重く捉えた。貧困は、人々が参加することを当然とされている習慣や活動である生活様式を獲得するために必要な資源が無い、或いは資源が少ないために生活様式を獲得できない、相対的に剥奪された状態と定義されたのである。彼は、「社会のメンバーシップとして当然の生活条件を獲得するのに必要な資源を欠いている、或いは資源を与えられない人々の状態が貧困状態であるとも述べている」(Townsend=1979:915)。Townsend が剥奪の指標として掲げたものは全部で 60 項目に達するが、貧困を議論する際に主に用いられる指標は 12 である。そして、そのうち、5 つか 6 つ以上が該当するならば、彼はその状態を「普遍的剥奪」状態であると規定している。

Townsend が「相対的剥奪」概念を提唱したのとほぼ時を同じくし、日本における独自の貧困研究として、江口は Townsend 同様に早くから Rowntree の貧困線概念に疑念を抱き、貧困概念を相対的に拡張させて捕捉していた。江口は経済学者として、戦後日本に誕生した戦争や自然災害から生まれる古典的な貧困とは趣を異にする工業化社会に構造的に組み込まれた「現代の貧困」に対して、「社会階層」と「過剰人口プール」という概念から解を出そうとした。そしてその際、政府が定める生活保護水準、すなわち日本における貧困線を絶対のものとし、より包括的な貧困状態を捕捉しようとした。

さて、現代の「低所得階層」＝“現代の貧困の作用を最も強くうけている階層”をどのように限定し、どのようにしてとり出すか。もともとわれわれが複雑で高度な現代社会の「貧困」をとらえるために「社会階層」という用具を用い、一定の「階層」としてとらえようとするのは、現代の「貧困」のもつさまざまな要因を、総合し一括してとらえるためである。すでにのべたように、異質な生活スタイルによって構成される重層的階層的構造によってなりたつ今日の社会での、社会的文化的慣習生活の中で考えられる今日の「貧困」は、かつて C・ブースや S・ラウントリーが考えたような所得―消費の視点のみからでは把握できないのであって、多様な生活における文化的慣習的場面での一定の状態を、同時にふくめて考えなければならない。多要因による今日の「貧困」を具体的に把握するために、ここに「社会階層」という用具を用い、「一定の社会階層」＝「低所得階層」として、これをとらえようとしたのであった。

(中略)

そしてこの場合、もうひとつの重要な問題は、現代の「貧困」、先述の言葉では **Deprivation** を構成する要因として何があり、何と何が重要であるかということを確認することであるが、この問題については、一つはそのすべてを確認することは不可能であるという前提に立っている。強労働、低所得、家族分解・崩壊、無知・無教育、不潔・病気、劣悪居住、低消費、不道德・非行、老齡孤独等々はそれを構成する重要な要因と考えるが、これらは現代の「貧困」の要因として、抽象的に存在するのではなく、地域生活の中で、具体的な組み合わせのもとに存在するものであると考える。しかし、その中で、われわれが考える最も重要なファクターは、一つは所得、一つは住宅、そしてもう一つは教育、さらに一つは家族というように考えるのであるが、その中でさしあたり最も共通的であり、根元的なファクターは、所得—低所得であると考えるのである。これは一つの仮説であり、この点が最も重要な点である。この所得—低所得とその他の要因が、強くあるいはゆるやかに関連しあいながら、全体が構成されているような「貧困」の構造を考え、一定時点でのその具体的な姿を特定の「社会階層」に求めようとするのである。そこで、「社会階層」を求めるために、「所得」から出発するのであるが、まず「所得」の源泉となっている「労働」を考える。具体的には「職業」にさかのぼる。（江口 1985 : 24-26）

江口は、東京都における広範な貧困調査から、東京における相対的貧困率がイギリスの相対的貧困率とほぼ同等かそれ以上であることを実証し、Townsend 同様に日本においても貧困が蔓延している実態を明らかにした。貧困理論の系譜としては、江口は留学先でもあるイギリスの貧困理論に強い影響を受けており、Townsend の相対的剥奪概念を自身の貧困理論に取り入れている以上、相対的貧困論者と見做しても差し支えないと思われるが、注目すべきは、欧米の「アンダークラス」（江口においては「社会階層」）に近い概念に、かなり早い時点で言及し、自説の中心に据えていることである。そして、はっきりと「現代の貧困」問題をワーキングプアの問題として認識している。その意味で、江口の研究は極めて先駆的であり、Castel や Paugam と並ぶ業績と言っても過言ではないであろう。無論、同じワーキングプアであっても、江口が捉えたのは、都市部が農村部から過剰に労働力を吸い上げ、その結果、工業化が進んだ都市部に必然的に発生する「過剰人口プール」とそれがもたらす失業の増加と低賃金労働の蔓延である。これは、Castel や Paugam、志賀が前提にする新自由主義が生み出した世界規模での競争の激化と雇用の不安定化の前段階であり、同じワーキングプアの貧困状態であっても質的には若干異なるのであるが、移民によって職を奪われる欧米の労働者と、農村部からの人口流入によって職を奪われる都市部の労働者という両者の構図は、非常に近いものがある。Castel らが社会的排除の概念を用いて、ワーキングプアが単に低所得であるだけでなく、社会的紐帯を欠いて地域社会の中で孤立していくことを強調している点も、江口は個人の社会階層内での沈下、脱落という形で描き出している。従って、先に述べた通り、志賀が社会的排除論の根底にワーキングプアの問題を据える限り、その貧困理論は既に江口によって質的にも量的にもより詳細に構築されており、そこに殊更に社会的排除を当て込む必要はないの

である。社会的排除が持つスティグマに焦点を当てることなく、貧困の本質を単純に労働からの排除と捉え、社会的排除がその原因と考えるならば、それは寧ろ江口の「社会階層論」で全て説明可能であるからだ。

江口貧困理論に限界があるとするならば、やはり貧困の第一の要因に「低所得」を挙げ、労働問題を貧困の基底に据えたことである。川上は江口の「貧困理論」に関して、以下の様に要点を指摘する。

その江口の「低所得階層」の概念には二つのことが含意されている。ひとつは「低所得」であり、もうひとつは「階層」である。「低所得」の意味は、一般に日本で「貧困」という言葉で表されるところの極貧、つまり生存にかかわるような低い水準を「貧困」とは捉えないということである。そうではなくて低位な所得のため低位な生活しか営めず、また、そこには種々の生存困難はあるが、「家族生活」があるという認識である。生活、つまり労働力の生活に基礎をおく「貧困概念の拡大」の把握こそが、江口が著書『現代の「低所得層」』に込めた一貫した主張であったといえる。（江口・川上 2009 : 7-8）

貧困概念を拡大的に把握した江口であっても、「所得貧困」概念を否定するものではなかった。畢竟、江口が拘ったのは、貧困線をどこに引くかという問題である。日本の政治やアカデミズムの世界において、一般的に「要保護層」と「低所得階層」の間に引かれた貧困線を江口は頑なに否定し、彼が規定した「低所得階層」とその上部の「一般層」の間にこそ貧困線は引かれるべきであると彼は主張した。何故ならば、真の貧困層と呼ぶべき集団は必ずしも固定化されておらず、ダイナミックに下位階層での移動を繰り返すからである。従って、生活保護基準に合致する「要保護層」だけでなく、その集団と密接に関わり合い、時にその集団以下の生活水準で暮らしている「低所得階層」までを含めて貧困層と見做さない限り、日本における貧困の本質を見失うと江口は主張し続けたのである。

江口のこの指摘自体は非常に的を射ており、現代にも通じる有益な視点であるのだが、公的な職業分類に基づく「社会階層」の整理に拘る余り、売春婦やヤクザ等、当時から存在していたにもかかわらず、階層外とされた存在の生活がほとんど考慮されていないこと、故に必然的に最下層の存在としてワーキングプアの「日雇労働者」が指定されてしまうこと、また、社会的排除概念に関して、最後まで距離を置いたこと等が今日的な視点から見れば江口貧困理論の限界であったとも言えよう。志賀に対する批判で述べた通りであるが、「生活、つまり労働力の生活に基礎をおく」という川上の言葉からも明らかな通り、江口の貧困理論は労働経済学の視点を色濃く残しており、貧困を多面的で包括的なものと見做した江口においても、非物質的な困窮状態よりも、「低所得」という物質的な困窮状態とそれを生み出す「労働」の価値が遥かに重く理解されたのである。志賀にしる、江口にしる、彼らの貧困理解では、貧困の本質は必ず労働問題に還元されてしまう。そして江口のこの考えは、イギリスにおいてもほぼ同様に展開されていく。Townsend に学んだ Lister が、相対的貧困論を「再配分」と「承認」の二元論から理解し、「貧困の再定義」の過程で発展させていくのである。

(3) Lister は、次項に述べる「貧困の再定義」の中で、「絶対的」及び「相対的」貧困の概念的対立は無益であり、それらを統合する理論枠組みが必要であると述べているが、Lister の貧困概念に先んじる Sen の「潜在能力論」は、その試みの一つである。

Sen は、貧困線の基準に関しては、貧困概念を明確にするべきという特別な理由などないという比較的相対的な立場を取っている。何故ならば、身体的特徴や気候条件、労働習慣には同じ地域でも著しい個体差があり、栄養状況などを基準にする Rowntree らの物質的ニーズに基づく貧困措定のアプローチは一見明確に見えてその実極めて不明瞭であるからだ。Sen (=1995: 174) は、「個人的な諸条件を無視した貧困線は、われわれが関心をもつべき貧困の根源的な部分、すなわち経済手段が不十分なために生じる潜在能力の欠如という側面を正当に扱うものではない」と指摘した。彼は物質的な「財」があるかどうかではなく、諸権利や機会が奪われている不平等状態に着目して「ケイパビリティ」アプローチで貧困を捉えるべきと主張し、『『潜在能力 (capability)』の無い状態が貧困である」と定義した。彼の定義に従えば、もし、ある人は所得が高いが病気がちであったり、或いは身体的障害のためにハンディがあるとすれば、その人は単に所得が高いというだけで、非常に優位にあると言えなくなるのである。寧ろ重要なのは、未来に対して、その人間がどれほどの選択肢を持っているかになってくる。

Sen の「ケイパビリティ」アプローチは、一見すると社会構成主義的な概念に基づいて貧困を捉えているように見受けられるが、必ずしもそうではない。彼は、「相対的貧困という考え方は、絶対的貧困にとって代わるものではなく、かえってこれを拡大させるものである」(Lister=2011: 52) と主張しているからだ。そして、一見相対的に見える彼の貧困理解の視点の中心に、敢えて楔として「絶対的中核」を置くのである。

(Sen は、)「貧困という考え方には『還元不能な絶対的中核』というものがあり、その最も顕著な現れが、飢餓と栄養失調であると力説したのである。この＜絶対的中核＞は、^{ケイパビリティ}潜在能力空間で作用するが、しばしば「商品空間では相対的な形態」をとる。いいかえれば、人が＜なにかである・なにかをする＞ための能力は普遍的な絶対性の問題だが、その能力を実際に＜なにかである・なにかをする＞という形に移すのに必要な財は、相対性の世界にあるということである。なぜなら人が＜なにかである・なにかをする＞ために必要となるものは、文化的・歴史的背景によって違ってくるからである (Lister=2011: 52)。

Sen の「ケイパビリティ」アプローチは、Rowntree ら研究者や世界銀行が恣意的に定めた何らかの「貧困線」を否定するという意味では相対的であるが、「還元不能な絶対的中核」として、飢餓と栄養失調を貧困の中心に置いたという意味では、極めて明確で絶対的な貧困観を持っている。このように貧困の絶対論と相

対論の対立を^{アウフヘーベン}止揚させた先に、かつ貧困の「关系的・象徴的側面」を強調した地平に、Lister による「貧困の再定義」が存在しているのである。

第3項 Lister の貧困の再定義：「実存的貧困」による貧困の再々定義

(1) Lister (=2011:16) は、「貧困について、歴史や文化から離れた単一の概念は存在しない。貧困は個々具体的な社会の構築物である。さらにいえば、同じひとつの社会でも、集団が違えばまた違った貧困が構築される」と述べているが、この考え方は社会学の社会構築主義、或いは社会構成主義に基づいた視点である。社会構成主義は、唯一絶対の真実を排し、今現在社会的に真実と信じられているものは、単にその社会に暮らす多くの人々がそのように語り、暗黙の裡に合意しているから真実であるかのように成り立っているに過ぎないという相対主義の立場である。この立場が社会科学や人文科学を超え、自然科学の領域にまで及ぶのかに関してはさすがに議論の余地があるだろうが、「貧困」という社会科学の概念に関して適用されるのは、ある意味当然であると言える。

誰を「貧困」とであるとみなすかは、すなわち、誰を救済するのか、という極めて政治的な判断を常に伴う。日本初の公的扶助である恤救規則においては、「無告ノ窮民」を救護の対象としたが、その中でも特定の貧困者は全て政治的に排除された。昭和21年に定められた旧生活保護法においても、第一章総則において、

第二條 左の各號に一に該当する者には、この法律による保護は、これをなさない。

- 一 能力があるにもかかわらず、勤勞の意思のない者、勤勞を怠る者その他生計の維持に努めない者
- 二 素行不良な者

と勤勞の意思が乏しいものや、素行が不良な者は保護の対象外と定められた。

何時の時代においても、どのような状態が「貧困」であるかを規定する作業は、常に誰を救済するべきかという倫理的な概念とも対になっている。スティグマを付与された者、社会的排除の対象が「貧困」とであると社会的に認識されにくい理由がまさにここにある。従って、Lister が指摘するように、「貧困」の基準が極めて文化相対的であり、国や時代によって基準が異なるということは寧ろ当然のことなのであるが、問題は、国や時代を超えてなお存在する普遍的な形態の「貧困」というものが果たして存在するのか、ということである。

最も相対主義の立場に立つ Townsend は、そのような普遍的・絶対的な貧困の基準は存在しえないとする。Townsend において重視されるのは、社会や文化によって相対的に変化する社会のメンバーシップとして当然の生活条件である。それを手に入れるための資源が不足していることが「相対的剥奪 (relative deprivation)」状態であり、その状態は一時代を通して固定的でも無ければ、絶対的な何かを核に置く必要

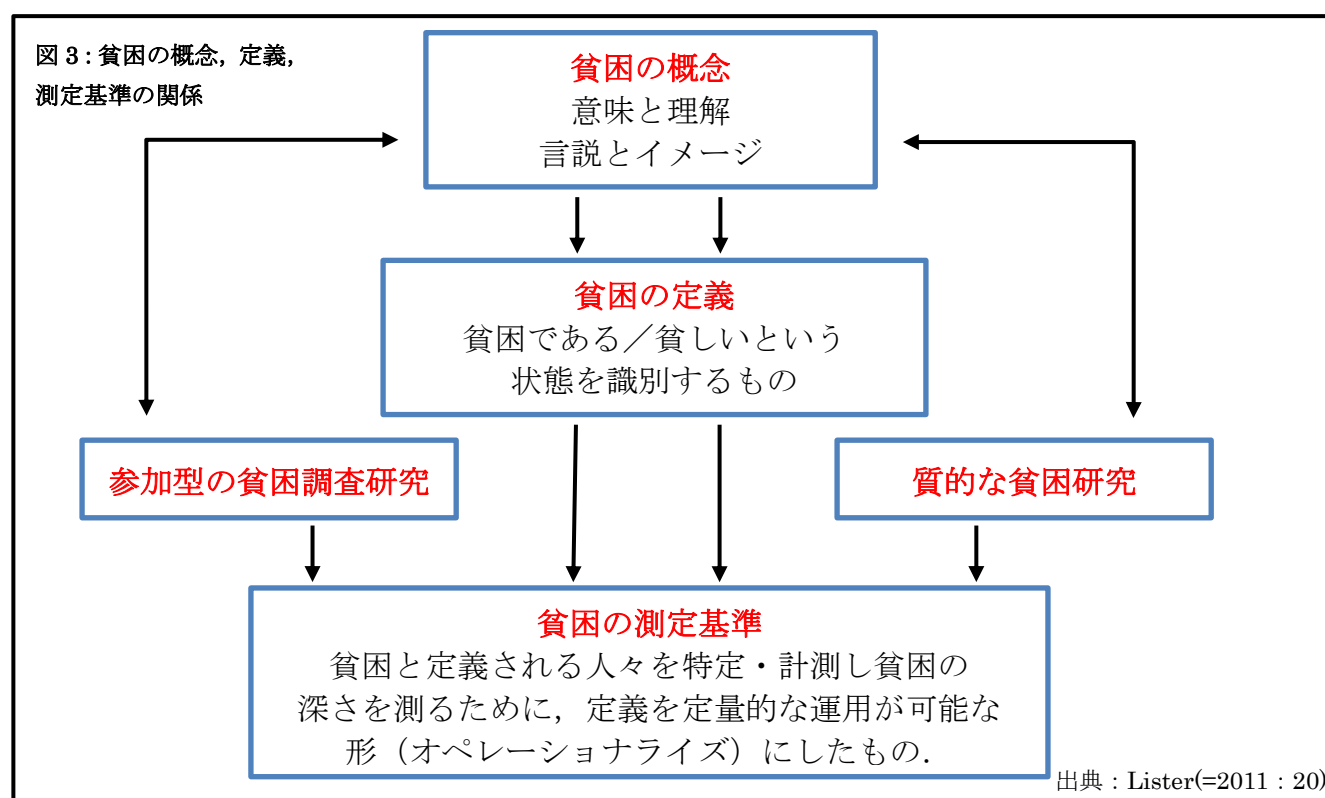
もない。それに対して、ネガティブな「剥奪」という概念ではなく、ポジティブな「ケイパビリティ (capability)」という概念を用いて、個人の未来への可能性が欠如している状態と貧困を定義したのが、Sen である。そして、Townsend とは対照的に、彼は貧困の「還元不能な絶対的中核」の顕著な事例として、先にも述べた飢餓と栄養失調を挙げた。「還元不能な絶対的中核」を認めるか認めないかに関しては、両者の間で多くの議論がなされたが、Lister は、その議論は労多くして益が少なかったと断ずる。その原因は、両者が用いている「相対的」の概念理解がすれ違っていたからだと彼女は指摘する。そして、Lister は、両者の意見はさほど乖離している訳ではなく、更に、貧困の相対論と絶対論はそもそも対立するものでもないことを、「貧困の再定義」の過程で論証するのである。そのうえで、最終的に彼女は、Sen の考え方を踏襲した立ち位置を取る。Lister は、貧困が多様な形を取るものであり、文化的・社会的に構築される極めて政治的な言説に基づく存在であることを自ら指摘しながらも、「貧困」にはやはり絶対的な核（物質的な核）が存在しなければならないという立場を譲らないのである。それが、第 2 項で論じた Lister の「貧困の車輪」(図 2-1・上)における「容認できない困窮 (Unacceptable hardship)」である。

(2) Lister は、Sen の定義にならい、貧困の物質的側面を「容認できない困窮」として「貧困の車輪」の中心に据えるが、その周囲に関係的・象徴的な側面として、「軽視」「屈辱」「恥辱やスティグマ」「尊厳および自己評価への攻撃」「他者化 (othering)」「人権の否定」「シティズンシップの縮小」「声を欠くこと」「無力」等を配置して、旧来の貧困観の中核である物質的側面以上に、社会的影響力と参加の欠如を重視する。Lister が、「関係的・象徴的貧困」として掲げた領域は、従来の貧困研究では比較的軽視されてきたものであるが、彼女は寧ろこの領域こそが、貧困者にとって経済的困窮以上に大きな苦悩の根源となっていることを、イギリスの「アンダークラス」「福祉依存者」と蔑称される人達への参加型研究から導き出した。

Lister は、貧困の概念から測定基準を導き出すまでの一連の流れを図化しているが、それが図 3 である。初めに「貧困の概念」があり、次に「貧困の定義」が行われる。そして、その際の実証研究として、「質的な貧困研究」か「参加型の貧困調査研究」が行われるのが適切であるとする。そして最後に、定量的な「貧困の測定基準」が定められる。従って、何者かが「貧困」を語る際に、この 4 つの構成要件または手段を、貧困理論の妥当性を確保するために彼女は要求していると言っていいたいだろう。

Lister (=2011: 16) は、「概念から判定基準へ移るにつれて焦点が絞られていく。最初に一般的な概念を考察せず、いきなり定義や測定基準に飛びつくと、定義や測定基準についての広範な意味や含意を見失うことがある。とくに排除されやすいのは、質的なアプローチや参加型のアプローチから生まれる貧困理解である。貧困には、所得や物質的な生活水準以外に焦点を当てた定義では捉えられない側面もあれば、時間による変化や、各国間の比較を検証するためにつくられた調査では評価が難しい部分もあるのだが、こうしたアプローチで光を当てられるケースが多い」と指摘しているが、その見解は確かに正鵠を得ている。そして、Lister の図 3 の理解を本研究に当てはめて検討すれば、この耳慣れない「実存的貧困」概念も、より一層説

得力を持つようになるであろう。



最初に求められる新たな貧困概念には、「実存的貧困」という名称を付与して既に触れたが、その定義を端的に言えば、「Lister の『貧困の車輪』から、中核としての物質的な『容認できない困窮』を除いたもの」、である。加えて、図4に示したように、社会的に排除されているという事実とスティグマの実感及び、4つの心理・社会的な条件を全て満たす必要がある。4つの心理・社会的な条件を全て満たす者を、筆者はCastelの言葉を借用して『社会喪失者』と呼びたい。通常、このようなパワーレスな状態になるためには、何らかの「非物質的な『容認できない困窮』」が、「物質的な『容認できない困窮』」の代わりに、この新しい貧困概念の核として存在しているはずである。

再度分り易く時間軸に沿って整理すると、「非物質的な『容認できない困窮』を抱えた『社会喪失者』^{ディザファイリエ}（希望を失い、アイデンティティを欠き、自尊感情が低下し、生きる意味に苦悩する者）が社会的排除の対象となり、スティグマを刻印された時、彼らは『実存的貧困』状態に陥る」のである。そして、実はその状態は、Honnethの三つの承認領域で概ね存在が否定されている深刻な「非承認（＝不平等）」状態でもある。

この条件が揃った時、人間は例え経済的に困窮していないとしても、或いは寧ろ経済的に豊かであろうとも、極めてヴァルネラブルでパワーレスな状態に置かれてしまう。Senの言葉を借りれば、明らかにその状況に置かれた人間には「ケイパビリティ」が存在しないが、まさにそれこそが「実存的貧困」状態の本質なのである。

SenやListerが最後までこだわった、貧困の物質的な中核である「容認できない困窮」を取り除くことに抵抗を感じる向きもあろうが、それを除いても貧困概念が成り立つ理由は、現代社会において、個人が体験

する「容認できない困窮」は、必ずしも物質的なものだけとは限らないからである。

「容認できない困窮」は、心理的・社会的なものでも十分に成り立つ。Sen は、貧困の「還元不能な絶対的中核」の顕著な事例として、飢餓と栄養失調を挙げたが、彼の顰に倣って物質的ではない貧困の顕著な事例を挙げれば、それは虐待である。飢えていなくても、例え、富豪の家に生まれても、虐待され続けた子どもは絶対的に心理的・社会的に貧困である。そして、太宰治がまさにそれに該当する。虐待された子どもは、食事ではなく、愛情に飢えている。それも飢餓的にである。そして、栄養失調が様々な身体疾患を引き起こすように、虐待は幼児期の反応性アタッチメント（愛着）障害を始め、ありとあらゆる精神疾患や早期の発達障害を引き起こす。これは明らかに、人間にとって「容認できない困窮」である。

太宰の筆名の由来には諸説あるが、Heidegger の哲学用語である、「現存在（Dasein）」に由来するという説はある意味極めて示唆的である。彼は、地方の名家に生を受けるも、多くのきょうだい達の末に生まれたがために何一つ大きな期待もされず、幼少の頃より家人達には性的な虐待を含む様々な嫌がらせを受け続け、国会議員だった偉大な父や兄のように社会に確固たる居場所も見つけられず、挙句親の力で入学した東京帝国大学からも学業不振により放逐された。彼の半生は、まさに「^{ディザフイリエ}社会喪失者」と呼ぶに相応しい。そしてその後、薬物や女性に溺れ、マルクス思想に傾倒し、無頼派を気取りながらも弱い心は何度も繰り返し自殺を企図する中で、彼は「自分自身からの排除」を完成させた。最期は愛人との心中で閉じた彼の儂く短い人生を思う時、抛無く漂う実存的な苦悩から逃れたい、1 人の人間としてこの世界で「承認」され、価値ある存在として生きていたい、そのような切なる祈りと実存への飢えが「太宰」という筆名に込められていたように思えてならない。

Lister と同じ時代、同じイギリスという国に暮らし、そしてリキッド・モダニティという独自の概念でポストモダン社会を描いた Bauman も、Castel や Paugam 同様に社会学の視点から「新しい貧困」を語っているが、彼は、貧困に関して、はっきりと Lister らの経済的貧困概念に拘泥する経済学や社会福祉学的な立場を否定する。

大半の人類の歴史において、貧困という条件は、飢餓や、医学的な対象とならない病気、避難所の欠如によって死亡する危険性などの形で、身体的な生存を直接脅かすものであった。それはまた、地球上の多くの地域におけるあらゆる危険を意味した。貧しい人々の条件が純然たる生存レベル以上に引き上げられるとしても、貧困は常に、栄養失調や、気まぐれな気候に対する不適切な防護手段、住む家がないことと結びつき、そのすべてが、当該社会が適切な栄養・衣料・居住環境水準とするものとの関係で規定される。

しかし、貧困という現象は、物質的な欠乏や身体的な苦痛に帰着するだけではない。貧困は、社会的・心理的な条件でもある。つまり、人間の存在の適格性が当該社会で実践されている世間並みの生活という基準で測られ、そうした基準に合わせられないこと自体が、悩みや苦痛や屈辱感の原因となる。貧困

は「普通の生活」をおくることを阻まれていることを意味する。それは「基準に達していない」という意味である。貧困はまた、当該社会の中で「幸福な生活」をおくる機会を断たれ、「人生が与えてくれるはずのもの」を受け取れないことも意味する。このことが、怒りや腹立たしさにつながり、暴力行為や自責の念、或いはその両方の形で噴出する。（中略）

消費社会において、社会的な降格、「国内追放」へと導くものは、とくに、その人物の消費者としての不適格性である。置き去りにされ、権利を剥奪され、降格され、他の人々が入場を許される社会的な祝宴から締め出され、排除される苦痛へと変わるのは、自らの消費者としての義務を果たすことへの不適格性であり、無能力である。消費者としての不適格性を克服することが唯一の治療法であり、屈辱的な状態からの唯一の出口とみなされる可能性が高い。（Bauman=2008：75-76）

「貧困＝飢餓」という等式は、貧困の持つその他の多くの複雑な側面を覆い隠している。つまり、「ぞっとするような生活と住宅事情、病気、識字能力の欠如、攻撃性、家族の離散、社会的な絆の弱さ、将来がないこと、生産能力の欠如」がそれである。これらは、タンパク質を多く含有するビスケットや粉ミルクでは癒せない苦痛である。カプシチンスキーは、アフリカの町や村をさ迷い歩いていて出会った子供たちが「私にパンでも水でもチョコレートでもおもちゃでもなく、ボールペンをせがんだ（彼らは学校に通っていたが、筆記用具を持っていなかったために）」ことを思い起こしている。（Bauman=2008：162-163）

Bauman が明瞭に指摘するように、現代社会において、単に物質的な欠乏だけで貧困を語るのは、最早致命的な誤りである。アフリカのような未だに物質的な欠乏を根幹に抱えた社会においてさえ、子供たちは筆記用具がないこと、すなわち学習の機会が相対的に剥奪されていることに遥かに苦痛を感じているのである。従って、貧困概念の本質論の中で、物質的な核だけを格別に重要視する根拠が、既に失われているのは自明であろう。

しかし、物質的な「容認できない困窮」のように、非物質的な「容認できない困窮」の存在を認めて、Lister の図に併記する、或いは置き換えればよいのかといえ、事はそう単純ではない。そのやり方では、明らかに矛盾が生じてしまう。何故ならば、先に例として挙げた虐待は、親と子の関係性の問題であるからだ。つまり、虐待は、Lister の貧困の定義で捉えれば、「関係的貧困」に入らなければならない。虐待以外にも「実存的貧困」を引き起こしやすいものに、DV、性暴力、いじめ、ヘイトクライム、極度のハラスメントなどのトラウマティックな事象があるが、これらもやはり全て Lister の「関係的・象徴的貧困」に加えるべき事象である。従って、非物質的な「容認できない困窮」を想定する場合、彼女が築上げた貧困理論では貧困の核が内側と外側に二つ同時に発生して機能不全に陥り、この種の困窮状態は十全に説明がつかなくなってしまう。仮に、外側に発生した非物質的な「容認できない困窮」の方が、内側の核よりも重要である、と主張

すれば、完全に自家撞着に陥る。あくまで、「貧困の車輪」においてその核は車輪の中心に存在しなければならず、外側は核の補完的要素或いは悪化要因であるべきだからだ。従って、このような状態を矛盾なく説明可能な貧困理解と新たな貧困概念の構造化が今求められているのである。そして、先に記した図 2-1 は、まさにそれを可能にするものなのだ。この図を用いながら、「絶対的貧困」と「相対的貧困」の対立化が無意味だったように、物質的困窮と非物質的困窮の対立化もまた無意味であり、同様に^{アウフヘーベン}止揚する必要があることを、次節以降詳細に指摘していく。

本研究の貧困概念と貧困の定義は、第 3 章以降に記すように、61 人の性風俗産業や AV 女優等のエンタテインメント業に従事した女性達への質的調査から生まれたものである。従って、Lister の貧困理解の手続きにも十分に合致するものである。最後に貧困の定量的な測定基準であるが、当然これは心理検査に重きを置かざるをえない。無論、生活史の聞き取りや社会的孤立の程度を測定する各種尺度も活用できるが、それだけでは、彼らが抱える主観的な苦悩を、外部の専門家や社会に対して説明可能なレベルで客観化できない。本研究では、修士論文作成時のフィールドワークで得られた知見に基づき、改めて 123 人の調査協力者に 5 種類の心理検査を行った。その結果は第 5 章において詳述するが、いずれも極めて不良な結果を得た。5 種類のテストバッテリーが、「実存的貧困」という概念を確実に捕捉しているかという内容的妥当性及び構成概念妥当性は、本研究を読み進めて各自に判断して頂きたいが、質的研究と照らし合わせた分析内容には自信を持っている。将来的には、この領域の研究が更に進み、1 種類の生活史を記す調査票と 1 種類の心理検査によって「^{ディザファイリエ}社会喪失者」であること、或いは「実存的貧困」の度合いが測定できるようになるのが望ましいが、それは本研究の射程を外れており、今後の研究に託すべき重要な課題である。

(3) Lister の「貧困の再定義」と称される業績は、従来の経済的貧困概念を中心とした貧困研究に対して、「関係的・象徴的貧困」という新たな地平を切り開き、かつ、後者の貧困概念が時に経済的貧困以上に個人をパワーレスな状態に追いやるということを参加型研究から実証的に明らかにした点で、ノーベル経済学賞を受賞した Sen の業績にも劣らない画期的なものであった。しかし、Sen がその知見をインドという発展途上国の貧困研究から導き出した結果、飢餓と栄養失調という物質的側面に縛られてしまったように、Lister もまた、イギリスの「アンダークラス」の貧困研究から得られる知見以上のもの、すなわち、「関係的・象徴的貧困」以上のものを見つけ出すことができなかった。そして、両者とも、従来の貧困理論を乗り越えて新たな分野を切り開いたものの、それはあくまで近代的貧困理論の枠を出ておらず、ポストモダン特有の貧困をその貧困理論の射程に収めていなかった。つまり、経済的に豊かな状態で、時に人間が極めてパワーレスな状態に陥り、そのケイパビリティが制限されてしまうという事実を、彼らは想像できなかったのである。本研究は、まさにその、ポストモダンの貧困までを射程に入れた、完全に新たな貧困理論なのである。

非物質的な「容認できない困窮」は、現代社会において、より一層それに苦しむ人達の裾野を広げている。新自由主義政治経済システムが生み出す格差社会と強要される「万人の万人に対する闘争」、ポストモダン

社会に生きる全ての人間の生活の中に埋め込まれた漠然とした未来への不安と、Beck が提唱する「リスク社会」の着実な浸透等、今を生きる我々は、かつてないほどに息苦しいのである。そして、その息苦しさ・生きづらさが様々な社会問題を生み出すのだ。最も分かりやすい虐待という事例以外にも、家族間・男女間の性暴力や DV の増加、企業のブラック化とハラスメントの増加、実生活の場から SNS にまで拡大されたいじめの増加、ストーキングの増加と手段の多様化等、新たな社会問題や福祉的課題は日々増え続けている状況である。しかし、それらがいかなるものであれ、その存在が非物質的な困窮・苦悩である限り、それらは全て「関係的・象徴的貧困」または「実存的貧困」概念の射程に入る問題である。従って、ポストモダンに代わる新たな時代区分と科学のパラダイムシフトが訪れない限り、全ての貧困問題の理解は、図 2-1 をもって完成したと言っても過言ではないであろう。

第 4 項 Stiegler の「象徴的貧困」：自己の喪失と世界からの疎外

(1) 本項では、Lister の提唱する「関係的・象徴的貧困」では捉え切れないポストモダンの貧困と、それを射程に入れた新しい貧困理論として、改めて Stiegler の「象徴的貧困」を再度取り上げて考察する。何故ならば、彼の新しい貧困概念は、本研究で提唱する「実存的貧困」の中核的要素であるからだ。

Stiegler の「象徴的貧困」は、貧困概念として必ずしも社会的排除とスティグマを含んではいない。しかし、本研究で提唱する「実存的貧困」は、Lister の「関係的・象徴的貧困」の枠内に収まる概念であるため、社会的排除とスティグマ、及び「関係的・象徴的貧困」に含まれる諸々の貧困概念を必然的に全て伴っている。この点が両者の大きな差異である。

以下に、詳細に「実存的貧困」とそれを抱えた個人の苦悩について解説するが、その前に、本研究が提唱する「新しい貧困」問題に対して、世界に先駆けた取り組みを既に始めているイギリス政府の動きを概観したい。それは、国内に蔓延する社会的孤立に向き合う孤独省（Ministry for loneliness）の新設である。

2018 年 1 月 18 日、テリーザ・メイ首相は、2016 年に極右過激派の男性に殺害された労働党のジョー・コックス庶民院議員の遺志を引き継ぎ、トレイシー・クラウチ庶民院議員を孤独担当大臣に任じて孤独省を新設した。ジョー・コックス議員が超党派グループの取組みとして生前に設立を計画していた「ジョー・コックス孤独問題委員会」が提出した「孤独」に関する諸問題について、メイ首相は委員会からなされた多くの勧告を受け入れたのである。

「ジョー・コックス孤独問題委員会」は、赤十字社など 13 の福祉団体と連携し、2017 年に約 1 年間かけて孤独に関する調査を進めていた。日本版ハフィントン・ポスト（2018.1.18）の報道によると、その結果明らかにされたのは以下のようなものだった。

- イギリスでは、900 万人以上の人々が常に、もしくはしばしば「孤独」を感じており、その 3 分の

2 が「生きづらさ」を訴えている。

- 月に1度も友人や家族と会話をしないという高齢者（65歳以上）の人口は20万人にのぼった。週に1度では36万人になる。
- 身体障害者の4人に1人は日常的に「孤独」を感じており、18～34歳の中では3分の1以上になった。
- 子どもを持つ親たちの4分の1が常に、もしくは、しばしば「孤独」を感じている。
- 400万人以上の子どもたちが「孤独」を訴え、チャイルドライン（相談窓口）の支援を受けた。

上記の結果を元に、委員会では「孤独が人の肉体的、精神的健康を損なう」と警告、肥満や1日に15本のタバコを喫煙するよりも有害であるとする啓発活動を実施するとした。また、委員会は孤独がイギリスの国家経済に与える影響は、年間320億ポンド（約4.9兆円）に上ると推計している。

一見すると、「ジョー・コックス委員会」が指摘した「孤独」の負の影響は、概ね「経済的貧困」と「関係的・象徴的貧困」の領域に属する問題のように見受けられる。しかし、ロンドン在住の国際ジャーナリストである木村正人（2018）は、「表には出ていませんが“テロ対策”という側面もある。近年、イギリスではテロが頻発していますが、イギリスで生まれ育った孤独な若者がネットで国外の過激派の思想に触れることで『自分の苦しみは社会のせいだ』と考え、ホームグロウン型のテロを起こすという例がありますので」と週刊誌上において指摘している。事実、SNSを通してジハードへの参加を呼び掛けるイスラム国（ISIL）からの誘惑に応じ、シリアへ渡った若者達の数、2015年の段階で、イギリス一国だけで既に600人を超えている。全世界であれば、1,000人を超える疎外された若者達が、自らの孤独を癒すために、テロリズムに身を捧げているのである。

国内に目を転じて、若い女性議員のジョー・コックスが、EUからの離脱の是非を問う国民投票のための集会の準備中に、「Britain First」を叫ぶ「極右過激派男性」に射殺されたこと自体が、ある意味極めて象徴的にイギリスに蔓延する孤独とそれが生み出す「実存的貧困」の現状を物語っている。

凶行に走ったこの極右過激派男性は、本研究の貧困概念で言えば、「絶望的貧困」状態に陥っていた可能性が極めて高い。これまでの報道によれば、52歳の男性は精神科の通院履歴があり、祖父と母を続けて失った後、少なくとも事件の直前2か月間は、自宅で孤独に1人暮らしをしていた。30年以上その地域に住み続けていたにもかかわらず、地域住民とはほぼ交流がなく、長い間失業状態にあり、車の免許すらもっていない様子だったという。アメリカのネオナチ組織とも繋がりがあったため、地域の「要注意人物」として警察が注視していたとも言われる。Stieglerが、フランス国民の少なからぬ者がフランス大統領選挙において極右政党である国民戦線の党首に投票した事例から、彼がフランスに蔓延する「象徴的貧困」を実感したことは既に述べたが、その意味で、ジョー・コックス議員を殺傷したこの極右の男性は、まさにイギリス社会における「象徴的貧困」の象徴のような男性だと言えよう。加えて、精神科の通院履歴と、ひきこもりの52歳

男性失業者という社会的マイノリティに属する身分は、Lister の定義においても十分に「経済的貧困」と「関係的・象徴的貧困」を満たしている。そして、かくも幾重に重なる貧困の結果、彼が最終的に犯した凶行は、インドネシアの風土病である amok そのものであった。

amok は、精神医学における文化依存症候群の一つであり、「男性に多く、激しい悲しみや侮辱を受けたことをきっかけに周囲からひきこもり、物思いにふけったような状態となる。その後突然に武器を手にして外へ飛出し、無差別殺傷を起こし本人も自殺を企てる精神疾患」（日本語版ウィキペディア）とされる。男性は事件の直後に警察に身柄を取り押さえられたため、実際に自殺を企図した訳ではない。だが、イギリスの EU 離脱の是非を問う政治集会の真ただ中、衆人環視の状況で行った凶行であることを鑑みると、最初から自分の生命や人生に執着は無かったのではないかと推察される。何故、数ある EU 離脱反対派議員の中でジョー・コックス議員を選んだのかは、その後の報道でも詳らかにされてはいないが、彼女がこの男性のルサンチマンを激しく掻き立てる存在であったことは疑いない。

若く、美しい、高所得の女性。極右政党支持者が敵視する左派労働党員にしてフェミニストの庶民院議員。ケンブリッジ大学、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（LSE）を経て国会議員秘書を務め、数々の人道的支援団体で活動してきたという、まさにイギリス社会における成功と道徳のシンボル（象徴）。男性とは全てにおいて対照的な人生であり、余りにも遠く隔たった存在である。彼女は、その人生の大半を通して見事に「知的な生の成果（概念、思想、定理、知識）と感覚的な生の成果（芸術、熟練、風俗）」（Stiegler = 2006 : 40）の両方を成し遂げ、ハイパーインダストリアル社会において、最も価値ある行為である様々なシンボル（象徴）の生産に参加し続けた。そして、それは死してなお、今も継続しているのである。

一方、男性は彼の人生において何一つ価値あるシンボル（象徴）を生産することなく、社会的なものに繋がる自己を十分に構築できなかった。誰の目にも眩しいほどに輝いている彼女がその身に纏ったシンボル（象徴）が、「何者でもない」男性のただでさえ不安定なアイデンティティを激しく揺るがし、不確実な自己の存在意義に対する無言の脅威となり、彼女の存在を知った日から液状化が始まった自らの精神世界を守るために、この男性が無我夢中で凶行に走ったのは決して偶然ではない。これは、「絶望的貧困」状態にある者がルサンチマンを抱いた際の、無慈悲な必然の最悪の形態なのである。Stiegler は、ハイパーインダストリアル社会において、健全なナルシズムを持つことができず、自分自身と自らを取り巻く世界を受け入れることができない浮き草のような個人に対して次の様に述べる。

それは極端な結果を招くこともあります。たとえば私が以前示したのは、リシャール・デュルン
ンは「存在していなかった」ということです。少なくとも彼は日記にそう書いています。ナルシ
シズムがないと、自分自身へのいかなる愛もなく、したがって誰に対しても敬意を持つことがで
きないのです。それでいて彼には抑え難い存在の欲求、すなわち存在しているという「実感を持
ちたい」という欲求があったと彼は書いています。彼にはこのような欲求がありましたが、それ

を満たす手段を奪われていました。なぜなら、ディアクロニゼーションの潜在力でもある固体化する能力がないために、自己を満たすための条件が破壊されていたからです。現在この上なく広く蔓延しているこのような矛盾、個人の葛藤によって、デュルンは殺人犯となりました。個としての存在を奪われ、「みんな on」というものによって「誰でもない者 *Personne*」に変えられてしまったことに苦しむ何百万のうちの 1 人として、デュルンは犯罪行為を実行に移しました。そしてその苦しんでいる何百万人は潜在的なデュルンなのです。

すべての意識をシンクロさせるということは、私が本源的とみなすナルシズムを失わせることにつながります。意識がひたすらシンクロニゼーションのプロセスである徹底的な搾取の対象となると、自己愛は破壊されます。自分自身に苦しむ意識は、もはや耐える（自分を支える）ことができません。意識は耐え難いものとなるのです。耐える（自分を支える）ことができない意識は、存在する（*ex-sister* 自己の外に - 出る）ことができず、世界に自分を投企することにもはやできず、このとき世界は世界とは呼べないもの *immonde* と化します。意識はもはや他の意識に耐える（それを支える）こともできず、この危機の最悪のかたちでの表出として、他の意識を消滅させるのです。この他者の消滅は、「みんな on」と化してしまう「われわれ」によって、「われわれ」としての「われわれ」が消滅することの前兆でもあります。つまり他者はここでは破壊しなければならない「われわれ」というものの ^{フィギュア} 姿であり、それはこの「われわれ」がもはや個体化しない「われわれ」であって、それ自体がわれわれを破壊するものだからなのです。

これが否定された個 *individu* の分解していく *dividuel* 運命であり、個人が否定されるのは、個人が単なる消費者になってしまうからなのです。（Stiegler=2006 : 147-8）

Stiegler が「存在しない人間」の実例として取り上げたりシャール・デュルンの市議会襲撃事件は、ポストモダン社会の「実存的貧困」の深淵に沈んだ 1 人のフランス人青年の哀しい物語である。

デュルンは、2002 年 3 月 26 日、フランスのパリ郊外のナンテール市議会に押し入り、市議会議員 8 人を銃殺し、19 人を負傷させた。彼は逮捕されたが 2 日後に投身自殺した。彼が日記に記していた世を憐む言葉は、「実存的貧困」の中核的要素である Stiegler の「象徴の貧困」に大きなインスピレーションを与えた。

「われわれ」を殺害しようとしたデュルン——彼は、市議会という「われわれ」の公的な代表を狙ったわけで、それはつまり「われわれ」を殺害することに他なりません——は、自分がこの世に存在していない、つまり彼曰く「生きている実感」が持てないということにひどく苦しんでいました。自分を見ようと鏡を覗き込んでもそこにはぼっかりと空いた穴のような虚無しかない、と彼は言っています。これは『ル・モンド』誌に公開された彼の日記によって明らかになりました。その日記にデュルンは「人生でせめて一度、生きていると実感するために、悪事を働かなければな

らない」のだと記していました。(Stiegler=2007 : 20-21)

リシャール・デュルンがぶつかっていたのはまさに非・意味 *asignifiante* と呼ぶべき壁であり、それは単なる無意味 *insignifiante* をはるかに超えた、意味生成 *signifiante* の限界であり、その限界があまりに耐え難いものであったがゆえに、彼は殺戮行為を引き起こすに至ったのです。これは意味をなすものが破壊されることによって至る象徴の貧困の結果です。そしてこの貧困からは、実は誰も逃れることはできません。象徴の貧困はいつも重くのしかかり、幽霊のようにうろついていて、たとえばせつかく夕食を共にしても、ほとんどの場合はもう、ろくに話すことがないといったありさまなのです。(Stiegler=2007 : 75)

Stiegler が述べたシンクロニゼーションとディアクロニゼーションの同時進行は、社会の一成員として生きる「われわれ」のなかの 1 人としての「私」に意味を与えるプロセスである。Heidegger 風に言えば、世界内存在としての「現存在 (Dasein)」に意味を付与するということだ。こうした「われわれ」と「私」の「集团的個体化」がうまくできなければ、私たちは自己愛の対象としての「われわれ」と「私」を持つことができない。こうしたプロセスの機能不全が、デュルンの凶行の根源にあったと Stiegler は見ているのであるが、全く同じものを、私は太宰や東電 OL の人生の中に垣間見るのである。

(2) 上述のように、シンボル (象徴) の生成に参加できなかった個人の自我は液状化し、多くは何らかの自傷他害行為や嗜癖行動、より極端な場合は犯罪やテロリズムにまで辿り着く。事実、同様の事件は日本にも数多く存在する訳だが、ジョー・コックスの様に、著名な若い女性が公衆の面前で被害者になったという類似点から、日本におけるこの種の事例を一つ挙げるのであれば、「AKB48 握手会傷害事件」になるであろう。

2014 年 5 月 25 日、日本の女性アイドルグループ・AKB48 が岩手県滝沢市の岩手産業文化センターで開催していた握手会のイベントにおいて、のこぎりを持った男性がグループのメンバー 2 人とスタッフ 1 人を切りつけ、負傷させた。後の公判によって、男性は明確な殺意を認めた。逮捕直後、男は犯行動機について「人の集まるところで人を殺そうと思ってやった。誰でもよかった」と述べたが、「誰でもよかった」という言葉は、警察やマスコミが無差別殺傷事件が起きる度、お約束のように毎度繰り返し用いられるあらかじめ準備された報道用のテンプレートではないだろうか。事実、公判の中で、男性は何故 AKB48 という人気アイドルグループを狙ったかを問われて、「メンバーなら誰でもよかった」と改めて自身の襲撃の意図を述べた。つまり、凶行の対象は、誰でもよかった訳ではなく、あくまで「AKB48 のメンバー」という「感覚的な生の成果 (芸術, 熟練, 風俗)」(Stiegler=2006 : 40) のシンボル (象徴) でなければなかったのである。ここに男性のルサンチマンとその怒りの矛先が明確に伺える。男性にとってアイドルは、文字通り破壊すべ

き「偶像」だったのである。

事件後の報道によれば、犯人は青森県十和田市に住む、発達障害の診断を受けたことがある、当時 24 歳の男性であった。2014 年 1 月に仕事を失っており、犯行動機はテレビで AKB48 を見て「収入が多い」「自分とは正反対」などと不満に思ったことであった。5 月に岩手県で AKB48 の握手会が行われることを知った男性は、その参加券を入手し、自宅ののこぎりにカッターナイフの刃を貼りつけるという改造を加えた。こののこぎりを持って握手会に参加し、参加者の列が短かったレーンを狙って犯行に及んだのである。その後も、模倣事件として、2017 年に AKB48 以上に人気が沸騰した欅坂 46 の握手会においても同様の未遂事件が発生した。逮捕された 25 歳の無職の男性は、警察での取り調べの際、グループの象徴であり、不動のセンターでもある平手友梨奈を殺傷することで、「ひきこもりだった自分自身を変えたかった」と供述している（皮肉にも平手も、部活以外に目標が無い内気な自分の人生を変えるために兄の勧めでオーディションを受けている）。

このように、現代社会において、何らかのシンボル（象徴）を生産できないものは、何者かによって生産された偉大なシンボル（象徴）を破壊することでは、自らの生の実感を得られないのである。従って、「アメリカ同時多発テロ事件」において、国際テロ組織アルカイダによってハイジャックされた 4 機の旅客機が、自爆テロの目的地として向かった先が、アメリカの経済的繁栄の象徴であるワールドトレードセンターの北と南のツインタワー、軍事力の象徴である米国国防総省（ペンタゴン）、そして結果的には未遂に終わったが、政治力の象徴・ホワイトハウスの 4 か所だった点は、決して偶然ではないのだ。因みに、自爆テロに及んだ 4 人の実行犯は、全員が欧米的価値観の下で高等教育を受けた若者である。ワールドトレードセンターに自ら激突した者は、ドイツにおいて建築学を修めた者であったが、これも決して偶然ではないだろう。それを、Burma と Margalit は次の様に指摘している。

西洋、特にアメリカに対して妬みや憎しみを感じるのは、それがどのようなものだから想像すらできない人たちではない。普段から西洋の発するイメージや商品を身近に感じ、消費している人たちである。ツインタワーを破壊した殺人者たちも、相当の期間を西洋で過ごし、専門教育を受けた教養ある若者だった。モハメド・アッタはカイロの大学で建築学の学位を取得した後、ハンブルグ工科大学で都市計画におけるモダニズムと伝統について論文を書いていた。ビンラディン自身も、かつては土木技師だった。ツインタワーは現代技術者たちの慢心のあらわれとされ、皮肉にもその技術者達によって破壊されたのだ。（Young=2008 : 288-289）

ハイパーインダストリアル社会において、「象徴の貧困」がもたらす悲劇は、上記のように既に世界中の先進国でほぼ時を同じくして次々と発生している。1997 年日本の「神戸連続児童殺傷事件」、1999 年アメリカの「コロンバイン高校銃乱射事件」、2011 年ノルウェーの「ノルウェー連続テロ事件」、2015 年フランス

の「シャルリー・エブド襲撃事件」及び「パリ同時多発テロ事件」、そして2016年日本の「相模原障害者施設殺傷事件」等々である。これらは全て、Stieglerの主張する「集団的個体化」に失敗し、深刻な自己の喪失状態にある時に社会的排除の対象となり、結果、「実存的貧困」或いは「絶望的貧困」に陥った者達が引き起こした事件である。全てが、『承認』をめぐる闘争の最終局面であり、犯人達は自らの命を賭して、彼らからして受け入れがたいシンボル（象徴）に対して、意図的に害をなしたのである。

Stieglerは、「象徴の貧困」が実社会で如実に顕現した数ある具体的な事例の中から、敢えて、2001年の「アメリカ同時多発テロ事件」、2002年のフランス大統領選挙及びリシャール・デュルンの市議会襲撃事件の三つを象徴的事象として挙げた。同様に、筆者は、2001年に「附属池田小事件」が起きた時、2008年に「秋葉原通り魔事件」が起きた時、そして2014年に「AKB48握手会傷害事件」が起きた時、そして、より新しく、最もおぞましい事例で言えば、2016年に「相模原障害者施設殺傷事件」が日本国内で起きた時、それぞれStiegler同様に、改めて犯行を行った者達を日本人として「いかなる共通の感性をも共に感じる事ができない人たち」であると認識すると同時に、彼らはある地区（ゾーン）に閉じこもっており、その場所は感性的に脱落してしまっている以上、もはや彼らが住む場所は我々が価値観を共にする「世界」とは異なる不毛な暗黒世界^{ディストピア}であると感じた。彼らは、フィリア（友愛）を失っており、その歪んだナルシズムは、激しい攻撃性となって自らのゾーンから外れた、彼らから見て異質であり、羨望の対象、成功のシンボル（象徴）、或いは、軽視の対象、侮蔑のシンボル（象徴）である者達に向けられた。2001年の事件では、未来を約束されたエリート予備軍である附属池田小学校の幼い児童達に。2008年の事件では、自らがこよなく愛した秋葉原という街を、孤独な自分とは対照的に楽しそうに行き交う人々に、2014年の事件では、同年代の成功を収めた人気絶頂のか弱い女性アイドルグループに、2016年の事件では、犯人が「心失者」と呼び、何一つ社会のシンボル（象徴）生成に参加していないと無慈悲に断じた重度の障害者達に、である。

これらの事件はまさに悪魔の所業であるが、自己の内奥に確固たるシンボル（象徴）を失った者が、時にディアボル（悪魔）に変わり得ることを、Stieglerは以下のように指摘していた。

そしてこの象徴の貧困は、現在ではプロレタリアだけの問題にとどまらず広がっている。というのもそれはわれわれが皆そうである消費者を侵すからであり、われわれの子供たち、友人、両親を侵し、われわれのもっとも私的な生活環境を汚すからである。地球のいくつかの場所を汚染している空気のように、富める者も貧しき者も、所有者であろうがプロレタリアであろうが、すべての住民を汚染し、その環境を人の住めないものにしてしまうからである。この貧困は単に「物理的」なものでなく、象徴に関わるものであるだけにいっそう耐え難い（傍点筆者）。それはあたかもすべてのシンボルがディアボルに寝返る運命にあるかのようなのだ。（Stiegler＝2006：218）

Stieglerが「象徴の貧困」を、「所得貧困」に限定せず、富める者、所有者にもその対象を拡張したことは

慧眼であった。だが、筆者は、敢えて経済状態を不問とした Stiegler の「象徴の貧困」は、やはり貧困層とそれ以外の層に区別して考えるべきだと考える。何故ならば、結果的に両者とも自己を喪失し、同様な自己破壊的行為にまで陥るのだとしても、やはり社会関係資本に恵まれていない貧困層の方が遥かにそのリスクは高いからである。畢竟、犯罪は貧困の宿痾である。従って、「経済的貧困」を伴わない「象徴の貧困」、すなわち「実存的貧困」と、「経済的貧困」を伴う「象徴の貧困」、すなわち「絶望的貧困」は、別概念として分けた方が理解がしやすいであろう。無論、本研究の立ち位置は、後者の貧困を遥かに重く捉えている。犯罪抑止と社会防衛の視点からも、「経済的貧困」と「相対的剥奪」の感覚を強める社会の中の経済格差を是正しなければならないことには少しも異論は無いのである。その意味で、Fraser の「再配分」の社会正義を否定するものでは全くない。それは寧ろ当然の事として行わなければならないが、それ以上に「承認」の社会正義を重視しているのである。

いずれにせよ、先述した事件の犯人達は皆、「実存的貧困」、或いは「絶望的貧困」の状態にあったのだ。従って、彼らの凶行の本質は、Stiegler が指摘するハイパーインダストリアル社会において単なる未熟な消費者に成り下がり、シンボル（象徴）生成の過程から疎外され、挙句に自己を喪失し、世界から放逐されたリシャール・デュルンのような「存在しない人間」が、彼らから見て「許しがたい世界」のシンボル（象徴）に対して繰り出された乾坤一擲の復讐の邀撃であり、まさに自身の命を懸けた哀しい「存在証明」の聖戦なのである。そして、同様に今この瞬間もヨーロッパにおいて、孤独の中で不遇をかこつ若者たちが、彼らから見て「許しがたい世界」のシンボル（象徴）＝「アメリカに代表される西側キリスト教世界」を打破するためにイスラム国（ISIL）に身を投じ、ジハードにその身を捧げている。その胸の内で、微かに自らを英雄のシンボル（象徴）であると信じながら。

第 5 項 豊かさの中の貧困：「実存的貧困」の意義

(1) 前項までの議論の中で、「実存的貧困」概念の大枠は既にある程度示した。本項では、改めて「実存的貧困」のより詳細な定義と、ポストモダン社会における貧困理解の枠組みとしての存在意義を、図 2-1、図 2-2、及び図 4、図 5 を基に論じる。その際、鍵概念になるのは、やはり前項までに何度も考察してきた Stiegler の「象徴の貧困」と、Honneth の承認論である。また、今まで触れなかったが、「実存的貧困」という名称は、既に長谷川俊雄が自身の貧困概念の中で用いている用語であるため、長谷川の用法と本研究における意味が異なることを、本項で改めて子細に説明したい。加えて、図 2-1 に記述されているが、ここまでさほど触れてこなかった新たに再構築された貧困概念の外側部分も含めて、この全く新しい貧困概念である「実存的貧困」及び「絶望的貧困」の枠組みを一通り、本節のまとめとして詳説する。

長谷川（2014）は、『実践から学ぶ社会福祉』の中で、貧困と格差が生み出すものは物理的なものの欠乏に留まらず、質的なもの、すなわち人間を人たらしめる生きがいや希望などの主観的要素の著しい減退、欠

乏をもたらすと指摘する。「格差は、世代を超えて連鎖することが指摘されており、格差は社会の中で低所得層・貧困層として一定の量的存在として滞留されていく。富める者は富み、貧する者は貧するという構造は、社会階層として固定化されて、社会階層の上位移動（サクセス・ストーリー）を著しく難しいものとさせる」

（長谷川 2014 : 18）という長谷川の指摘は、江口の「社会階層論」そのものであるが、江口があくまで貧困の第一の要因と規定した「低所得」を、長谷川は第一義的に重要であることは認めつつも、貧困概念の絶対的中核には据えない。長谷川（2014）は、貧困・格差は、「経済的貧困（低所得・貧困）」、「関係的貧困（孤立）」、「実存的貧困（生きる意欲）」が密接に関連して表現されながら、「制度・資源的貧困（社会保障・社会福祉の貧困）」によって、一層継続・深化されて暮らしに現れると考えるのである。

貧困と格差問題は経済的問題であることから、社会保障・社会福祉制度による所得保障によって、国民最低限の生活を保持することが第一義的に重要であることは当然である。しかし、貧困と格差問題が生み出す心理的・実存的問題への対応は、所得保障だけでは十分に解決することにならない。心理的・実存的問題の緩和・解消を目標とした社会的活動が、今まで不十分であったことは否めない。貧困や格差問題は、人の生きる意欲、生きる希望、生きる目的などを喪失させたり、奪ったりする。（長谷川 2014 : 21）

長谷川のこの指摘は重要な示唆に富む。心理的・社会的な貧困を Bauman 同様に長谷川も指摘するのだが、長谷川はそのような貧困概念の理解が日本の社会福祉学において、これまで不十分であったことを認めるのである。だが、一方で長谷川の貧困概念は抽象的・観念的な理解に留まっており、具体的にどのような状態を指して「実存的貧困」と呼ぶのかの精緻化がなされていない。また、あくまで長谷川の提唱する「実存的貧困」は、多面的な貧困概念を切り取る視角の一つに過ぎず、それ単独で貧困概念を構成するものでもない。その意味で、本研究が提唱する「実存的貧困」概念とは、本質的に異なるものである。本研究が提唱する「実存的貧困」概念は、「経済的貧困」を伴わない状態でも独立した貧困概念を形成する。無論、それは長谷川が指摘したように、「経済的貧困」や「関係的・象徴的貧困」と関連し合いながら貧困概念を一層悪化・深化させるのであるが、「実存的貧困」は「経済的貧困」に付随する単なる与件ではなく、それ単独で既に「経済的貧困」と並ぶ貧困概念なのである。物質的な貧困状態を「経済的貧困」とするならば、非物質的な貧困状態を「実存的貧困」と称するのであり、そこに Lister が「再配分」と「承認」の貧困理論で設けたような上下の階層や中外の区分けは無い。両者は完全に並列して存在する貧困概念なのである。従って、以下に検討するように、Lister の貧困理論は棄却されなければならないのである。

繰り返しになるが、Lister の「貧困の車輪」という貧困概念は、Townsend, Sen, Spicker や Bauman らの業績を踏襲し、それに政治学者の Fraser の「再配分」と「承認」の正義論から示唆を得た概念を追加し、経済的困窮を車輪の中核に据えながら、その周囲に Lister 独自の概念として「関係的・象徴的貧困」を布置

し、貧困を単なる物質的困窮から非物質的困窮を含む概念にまで拡張したものである。

貧困のポリティクスは、この車輪の中心部では再分配のポリティクスとして、関係的・象徴的な周縁部では承認と尊重・敬意のポリティクスとして理解すれば、有効なものとなるはずである。ここでも、これは貧困問題を幅広い現代政治および理論的な論議に統合する道筋となる。そうした議論でもっとも顕著なものは、政治理論家ナンシー・フレイザーの仕事である。フレイザーは再分配のポリティクスを社会経済的な不正義に対する闘いに、そして承認のポリティクスを文化的ないし象徴的不正義に対する闘いとして位置付けている。(Lister=2011: 267)

Lister は上記のように、「貧困の車輪」がほぼ Fraser の正義論を土台として構築されたことを認めているが、先述の通り、この認識は余りにも近代的貧困観に捉われ過ぎている。Lister が非物質的概念である「関係的・象徴的貧困」に着目し、「経済的貧困」以上に重視したことは確かに慧眼であったが、Sen の貧困理論に倣い、貧困の中核に経済的苦境である「容認できない困窮」を据え置いたまま、それを総体としての貧困の不可欠の要素と規定したことに対しては、本研究は強い疑義を呈するものである。

「容認できない困窮」は、必ずしも物質的な困窮に限定されるものではない。事実、Lister が「貧困の再定義」に当たって参照した Spicker が提示した貧困の概念図では、Lister と同じ様に中心部分に「容認できない困窮」が据えられているが、彼は決してそれを Sen や Lister の様に、物質的な困窮に限定していない。

Spicker は、『貧困の概念』の中で、「容認できない困窮」を自身の貧困概念の中核に据え、その周囲に 10 の意味の群を配置させている。10 の意味の群は三つの主要なカテゴリに組み入れられるが、それらは、「物質的状态（生活水準、特殊な必要、剥奪パターン）」、「経済的境遇（資源、経済格差、経済階級）」、「社会的地位（社会階級、依存、排除、権限の欠如）」である。

剥奪パターンは Townsend の「相対的剥奪」を意味し、権限の欠如は、Sen の「ケイパビリティ」の欠如を意味する。排除は社会的排除と同義と考えると、Spicker の貧困概念図は、従来の貧困理論を、「容認できない困窮」という漠然とした中核の周囲にコラージュのようにまとめたものとも言える。従って、ある意味 Lister 以上に雑駁な貧困概念になっているのだが、それは以下に記すような、Spicker の極めて相対的な貧困観を反映しているからである。

貧困に「本質」など無いのである。それは多くの事柄を意味するのである。場合によっては、あらゆる社会のあらゆる場所で異なったものを意味する。貧困の本性は論争的である。貧困とは何かを説明する、単純で単一の一貫した方法などというものは存在しないのである。(Spicker=2008: 21)

貧困は、いくつかの概念の複合体を指す。しかし、各概念の意味は人それぞれであって、例えば物質的な剥奪状態、金銭の欠如、給付依存、社会的排除、不平等などを意味する。貧困の本質と意味をめぐる論争は絶えることがない。産業化を遂げた西欧諸国と、途上世界の貧困地域とでは、貧困の性質が異なっている、と主張する者もいる。さらに、貧困の本質は、豊かな国々と貧しい国々の間だけでなく、国ごとに、または国の内部でも異なっている、と主張する者までいる。(中略)「貧困」概念に隠されているのは、**なにかがなされなければならない**という発想である。(Spicker=2008: 2-8)

Spicker の極めて柔軟な貧困概念に比して、Lister のそれは Sen 同様に頑なである。畢竟、Lister が自身の貧困理論で物質的な困窮に頑なに拘らざるをえないのは、経済的不正義と社会的・文化的不正義の 2 軸で社会正義のあるべき姿を描いた Fraser の「再配分」と「承認」の「パースペクティブ二元論」に依拠しているからなのである。従って、Lister の「貧困の車輪」が抱えた矛盾は、Fraser と対立し、かつポストモダンの貧困までを射程に入れることが可能な Honneth の承認論によって、乗り越えなくてはならない。

Honneth の承認論に基づいて貧困問題を改めて考察すれば、社会的に到底「承認」できない非物質的な不正義が、既に現実社会の中に無数に存在することに気付く。「再配分」の領域に関連しない「容認できない困窮」として、虐待、性暴力、DV、いじめ、拷問、各種ハラスメント、犯罪行為、様々なヘイトクライム、テロリズム等を挙げることができる以上、「貧困の車輪」の中核に物質的な困窮だけを据えることは明らかに合理性を欠いている。本来その中核は、「再配分」と「承認」の両方の視点を併せ持たなければならないはずだ。そして、Fraser 曰く、この二者はお互いに関連しあいながらも還元不能な同等の構成概念なのである。従って、一方の軸の不正義（経済的）が単独で貧困たるならば、もう一方の軸の不正義（社会的・文化的）は単独で貧困たりえない、という説明は極めて合理性を欠いている。故に、その点を改めて考慮しながら、Lister の「貧困の車輪」概念は、新たに再構築される必要がある。

Honneth は、政治哲学的に経済と社会・文化のそれぞれの正義を二軸に分けるべきだとする Fraser の「パースペクティブ二元論」を否定し、正義論は「承認」概念による「一元論」で了解可能であるとする。Honneth によれば、「承認」は「再配分」の領域の社会的不正義状態をも包含する上位概念なのである。

Honneth は、「愛による承認」、「法による承認」、「連帯による承認（共同体による承認）」の三種類の承認形態を規定している。愛を原理とする第一の「愛による承認」では、個人は入替不能な個体として承認され「自己信頼」感情が生まれる。不全が、非物質的に絶対に「容認できない困窮」の例として挙げた「虐待」である。「平等原理」に基づく第二の「法による承認」では、個人は権利と責任を持つ個体として承認され「自己尊重」感情が生まれる。不全が「権利剥奪」である。これは社会的排除概念の領域であり、本来法的に対等な存在に対して、社会が不当にスティグマや偏見を付与して個人や集団を諸権利から排除し、屈辱的な状態に押し留める類の不正義・不平等である。従って、市民権（シティズンシップ）の完全なる付与によ

って、この領域では完全な「承認」が得られるようになる。そして、「業績原理」に基づく第三の「連帯による承認（共同体による承認）」では、共同体にとって貢献的価値を持つ個体として承認され「自己価値」感情が生まれる。不全が「尊厳剥奪」である。そしてこの領域が、Fraser と Honneth の議論において、最も対立し論争を呼んだ部分である。

Fraser の「再配分」領域の不正義は、Honneth の場合、他の領域に還元不能な独立した不正義ではない。それは、第三の「連帯による承認」によって包含される。Honneth がその際に強調するのが、「業績原理」である。「連帯による承認（共同体による承認）」を得るためには、社会が有用であると客観的に判断可能な何らかの業績が個人に求められるが、市場原理を重視する新自由主義社会において、それはまさに自らの労働が生み出す貨幣価値である。労働の貨幣価値が高ければ高い程、「業績原理」に照らし合わせれば、その個人は社会的に有用であり、共同体に無くてはならない存在だと見做される。それによって、個人は連帯による承認、すなわち共同体からの包摂を手に入れることができるようになるのだ。従って、本来、「経済的貧困」という状態は、「業績原理」に基づく「承認」の欠落による「尊厳剥奪」を意味するものなのである。

結局のところ、いかに労働の質が劣化し、その価値低下が著しいとはいえ、社会における貢献的価値は、新自由主義を標榜する資本主義国家に留まらず、共産主義や社会主義国家においても、「労働」とその結果としての「納税」以外に無いのである。故に、労働の対価を十分に得られず、経済的に困窮することは、単に金銭的な窮乏を味わうだけではない。人よりも暮らし向きが慎ましいこと、そして何よりも納税者たり得ず、社会に参画できていないという状態は、人間としての尊厳が奪われている状態なのである。Townsend の「相対的剥奪」が貧困概念として何故重要なのかがここから改めて理解できる。人間が社会的存在である限り、経済活動もまた『承認』をめぐる闘争の一形態に過ぎず、従って全ての人間行動の本質は、『承認』をめぐる闘争』に一元的に還元可能なのである。一方で、Fraser はこの考えを受け入れない。彼女にとってあくまで「業績原理」に関する部分は「再配分」の領域として、「承認」の領域とは異なる次元の社会正義なのである。

とりあえず、本研究では Honneth の立場に立ち、「業績原理」は承認論において「再配分」の領域を包括するという立場を採る。ただ、ここで一つの疑問が生じる。「実存的貧困」状態にあつては、Honneth の三類型のほぼ全ての領域で、存在が「承認」されていないということは既に述べた。しかし、同様に、「実存的貧困」は、必ずしも経済的困窮を伴わず、中には富裕層の場合もあり得るとも述べた。何故、「連帯による承認」が本来あつてしかるべき太宰のような富裕層が、その領域でも「承認」を欠き、結果「実存的貧困」に陥ってしまうのか。「業績原理」において「再配分」を必要としない満たされた状態が何故「非承認」の状態に置かれるか、一見するとここに論理矛盾が発生しているかのように感じられる。

だが、これに対しては、以下の Bauman の考察が、その矛盾を解決してくれる手掛かりになるであろう。

逆説的なことですが、自己解放のためには、強力で多くの事柄を要求するコミュニティの存在が

必要です。自己創造は一つの義務ですが、その能力があることを自分で主張しても、妄想や作り事だと非難される可能性があります。また、自己創造に向けて努力する個々人の立場や自信や能力の違いは、その最終的な仕上がり具合や目標に影響を及ぼすかもしれませんが、自己創造の作業を達成できるという裏付けは、一つの権威、つまり承認を拒む力を持っているがゆえに、その承認に価値があるコミュニティだけが提供できるのです。(Bauman=2007: 12)

つまり、資本主義社会において「連帯による承認」を得るためには、一般的には労働による貨幣価値という「業績原理」で秀でる必要があるのだが、最終的な「承認」は、貨幣価値を生む過程とその多寡を考慮したうえで、あくまでコミュニティの判断に委ねられるということである。先述の通り太宰は富豪の一家に生まれたが、太宰個人の何らかの業績によって、その身分を手にしたのではない。太宰が富裕層なのは単に家族の業績である。また、東電 OL は個人の能力で多額の資産を形成していたが、家族は早世した父を除いて彼女を愛さず（愛による「承認」の欠如）、また、彼女が強く社会的な帰属を望んできた東電は、女性であるが故に彼女を男性とは異なる扱いをし（法による「承認」の欠如）、彼女の職務能力に対しても全く「承認」が与えられなかった（連帯による「承認」の欠如）。つまり、東電のエリート幹部社員として 7,000 万円を超えていたといわれる資産を形成していながらも彼女は、哀しいことに誰からも何一つ「承認」を得られていないのである。故に彼女は、闇の様に暗く深い「実存的貧困」の深淵に沈み、他者からの「承認」を求めて売春、摂食障害、アルコール依存などの嗜癖に陥りながら、必死に「自傷的存在証明」を繰り返さざるを得なかったのである。

本研究の対象である性風俗産業従事者は、この東電 OL のように、多額の利益を月当りに稼ぎ出すものも多い。だが、性風俗産業という場所が社会的に価値があるコミュニティではないために、彼女達がどれ程自らの稼ぎを誇示しようとも、ありがちではあるがこれ見よがしに浪費し、SNS 等で不特定多数の第三者に優れた消費者としての自分を顕示しようとも、彼女達が「業績原理」に基づく「連帯による承認」を得るのは日本社会では極めて難しい。それは、ホストもキャバクラ嬢もヤクザも反グレも詐欺師等の犯罪者も、皆同様である。そしてこれが、東電 OL の様に富んでいても、Honneth の承認論に基づけば、全ての領域で存在が「承認」されない可能性があるという先の指摘に繋がるのである。個人が「連帯による承認」を正当に得たいのであれば、必ず価値あるコミュニティにおいて、誰もが納得いく形で何らかの業績を残さなければならないのである。

(2) Honneth の「承認」の一元論から貧困問題を捉えた場合、Fraser の二元論を土台とする Lister の貧困概念は、根底から覆る。「経済的貧困」、「関係的・象徴的貧困」は、Lister 自身が認めるように「再配分」、「承認」という二元論に対応しており、Honneth の指摘通り「承認」が上位概念であるならば、「関係的・象徴的貧困」という上位概念に「経済的貧困」は、包含されなければならない。しかし、Lister は、「関

係的・象徴的貧困」が、時に「経済的貧困」以上に、人々を一層パワーレスな状態に陥らせるものであることを指摘しつつも、Fraserの二元論に拘るために、寧ろ「経済的貧困」を貧困概念に不可欠な存在として位置付けてしまっている。本来、Listerは人間の可能性を阻害する、貧困の厄介さを説明するために、「関係的・象徴的貧困」 \geq 「経済的貧困」という概念図を描こうとしたのであるが、実際は、「経済的貧困」 \geq 「関係的・象徴的貧困」と記述しているに等しい。何故ならば、Listerの貧困理論では、「関係的・象徴的貧困」を単独で貧困と指定できないからである。Fraserにおいてお互いに還元不能な等価的審級である「再配分」と「承認」概念を土台としながら、そこに軽重の差を付ける形で理論展開している段階で、Listerの貧困理論は既に大きな論理矛盾を抱えている。故に、Listerの貧困理論は合理性と一貫性に欠けるのである。

また、Honneth (2012) は、Fraserとの議論の中で、彼女が「法の領域」、すなわち「平等原理」について、何一つ満足に語っていないと厳しく批判する。

ここでさらに考察すれば、さまざまな不正義の経験は客体に関してだけでなく、承認が拒否される仕方に関しても確認できることがわかるだろう。それゆえに、文化的集団が一種の社会的価値評価を求めているのか、それともその集団としてのアイデンティティが法的に承認されることを求めているのかは、たとえばナンシー・フレイザーによって強調される「アイデンティティのコンフリクト」において本質的に異なるのである。いずれにせよこれら二つの選択肢に言及しただけですでに、「再配分」と「文化的承認」という対立を固定化するナンシー・フレイザーは、カテゴリーとして、ちょうどいま「法的」という特徴づけを与えられた形態の承認をまったく考慮に入れることができていないのではないか、という疑念が私には生じる。ナンシー・フレイザーの議論では、社会的集団は本質的に物質的資源かあるいは文化的承認をめぐる闘争するかのようであり、法的平等をめぐる闘争には驚くべきことに体系的にまったく言及されることがない。(Honneth=2012:152)

Honnethが指摘する法の領域へのFraserの言及の少なさは、彼女の「パースペクティヴ二元論」に抜け落ちた視点があるということである。そして、そのような瑕疵を内包したままの政治哲学の理論にListerが依拠したが故に、彼女もまた、法の領域に対する理論の精緻化を怠っている。例えば、Listerは、Fraserの「承認」の領域を、「関係的・象徴的貧困」という形でまとめ上げたが、Honnethの承認論で理解するならば、本来ここには、「愛の原理」と「平等原理」の両方が含まれているはずである。従って、「関係的・象徴的貧困」という雑駁な貧困概念は、本来「関係的貧困」と「象徴的貧困」の二つに分解されるべきなのである。そして、「愛の原理」における不正義状態を示すものを「関係的貧困」、 「平等原理」における不正義状態を示すものを「象徴的貧困」と整理した方が、理論的にはより解りやすいかもしれない。

本研究は、Listerの「関係的貧困」を、敢えてポストモダンの貧困理論として展開するために、長谷川から借用した概念である「実存的貧困」の名称に置き換えたが、その際、Stieglerの「象徴的貧困」の概念を

埋め込んだことは既述の通りである。従って、Lister の「関係的貧困」と本研究が提唱する「実存的貧困」は、同義でない点は重ねて強調しておきたい。無論、長谷川が提唱する「実存的貧困」とは完全に定義が異なる。そして、新たな貧困理論の土台に Honneth の承認論を据える形で貧困概念を分析し、再編したものが、図 2-2 の新・貧困概念図である。この全く新たな概念図によってのみ、1980 年代以降先進国に蔓延している「新しい貧困」は全て了解可能になるのである。

図 2-2 による整理の結果、Fraser に欠けていた、「平等原理」の不正義が、Lister の言葉を借りれば「関係的・象徴的貧困」の中の、主に「象徴的貧困」部分として浮かび上がって来た訳だが、実はこれが社会的排除と非常に近い概念であることが理解できよう。ただ、貧困が主として静的な「状態」を表すものだとすれば、社会的排除は動的な「プロセス」を表すものであるため、より正確に言えば、Lister の「関係的・象徴的貧困」は社会的排除の「結果」なのである。

ここで、再び冒頭に問いかけた疑問が沸き起こる。「関係的・象徴的貧困（≡社会的排除）」は、果たして単独で貧困概念たりうるであろうか、と。筆者の答は、とりあえずは、Lister と同様に「否」である。そしてそれが、志賀の社会的排除論が貧困理論として、新しいパラダイムたりえない理由でもある。しかし、とりあえず、と敢えてここに留保を付けたように、「関係的・象徴的貧困（≡社会的排除）」だけが単独で貧困概念たりえないというのも、実際は論理的に整合性に欠けるのである。Honneth による「承認」の三類型も、やはり承認論の枠組みにおいては、お互いに還元不能な等価的審級なのである。法の領域の不平等である社会的排除だけがどんなに容認できない状況でも貧困では無いと主張すれば、Lister 同様に合理性に欠けるといふ批判を受けるだろう。

しかし、図 1 でも指摘したが、現代社会の社会的排除は必ずしも「容認できない困窮」だけで形成された概念ではない。そして、社会福祉学において、「貧困とは絶対に『容認できない困窮』を含むものである」というのが、多面的理解を伴う貧困概念において、唯一の共通理解なのである。貧困に「本質」など無いと断じる Spicker（＝2008：8）でさえ、「なにかがなされなければならない」という発想は、唯一共有化できるとする。そして、それがまさに、貧困の本質である「容認できない困窮」なのであり、Honneth 的に換言すれば、「容認できない『非承認』」なのである。

図 2-1 及び図 2-2 で示した通り、「容認できない困窮」は、物質的なもの（例：飢餓や栄養失調等）と非物質的なもの（例：虐待や暴力、テロリズム、拷問、虐殺等）の二種類が存在する。そして、物質的困窮を単独で抱えた場合は、基本的に従来の貧困概念に従って、「絶対的貧困」或いは「相対的貧困」の枠組みに入る「経済的貧困」状態である。そしてそれは、無論「関係的・象徴的貧困（≡社会的排除）」を伴う場合も多々あり得る。社会的排除は、貧困の上位階層に位置する包括概念であるからだ。

「社会喪失者」が非物質的困窮を単独で抱えた場合は、「実存的貧困」である。「実存的貧困」概念は、経済的困窮を必要としないので、繰り返しになるが、太宰や東電 OL のような富裕層に近い「貧困者」の存在もあり得る。経済的側面にだけ着目すると語義矛盾に感じるが、「実存的貧困」は、「Stiegler の『象徴的貧困』

困』=Freud が『大衆の心理的貧困』と呼んだもの」が「関係的・象徴的貧困≡社会的排除」と複雑に組み合わせられた複合的貧困概念であり、かつ Honneth の承認論で考えれば「絶対に容認できない『非承認』」状態である以上、これを貧困と見做すことに本来躊躇は不必要である。「^{ディザフイリエ}社会喪失者」が非物質的困窮と物質的困窮の両者を抱えた場合は、「絶望的貧困」である。三重の貧困（経済的・実存的・象徴的貧困）は、考え得る全ての貧困が凝縮されたものであるが故に、その苦しみは筆舌に尽くし難いであろう。当然、これを貧困と見做すことに対しては、躊躇などある由もない。

どうしても躊躇を感じてしまうのは、やはり「関係的・象徴的貧困（≡社会的排除）」の取り扱いである。先にこれが、単独で貧困概念たりえないと言ったが、それが単独で「容認できない非物質的困窮」を形成することは、実際にありえないのである。何故ならば、シビル・ローが確立した近代社会以降、法的な「非承認」というのは、建前上は社会の中に存在しない。無論、それはあくまで建前であり、男女雇用機会均等法があっても、男女間の給与格差や性別役割は未だに差別的である。また、欧州を中心に「同一労働・同一賃金」の原則が守られているが、そこでも正規労働者と非正規労働者の間には明確なヒエラルキーが存在し、社会保障制度等においても差別的な待遇格差が存在する。しかし、直ちに是正が必要なレベルの法の領域における「非承認」は、少なくとも先進国においては社会に存在しないのである。

現代社会における法の領域での「容認できない『非承認』」は、例えば、アジア・アフリカ等で行われる女性器切除（FGM）や、カースト制度、児童婚姻制度、人身売買、臓器売買、民族浄化等が挙げられよう。これらは国際人権規約に照らせば明確な人権侵害であり、到底許容できないが、恐らく先進国にはこのような極端なレベルの法の領域における「非承認」は既に存在しない。あくまでその残滓が残されているだけである。だが、その残滓は思いの外厄介であり、社会的排除の基底部に根強く存在している。日本の被差別部落出身者や知的・精神障害者、ハンセン病患者、共産主義者等への偏見や差別を合法化していた慣習や法制度（士農工商制度、精神病者監護法及び精神衛生法、らい予防法、治安維持法等）は既に無い。従って、現状法の領域における「容認できない『非承認』」は、全て何らかの犯罪行為を構成する（経済的搾取は、労働法や刑法、民法のいずれかに触れる。また、虐待や DV、性暴力等も刑法や民法の処罰の対象である。）。そして、重要なのは、そのような法の領域の「非承認」は、連帯の領域か、愛の領域、もしくは両方の領域での「非承認」を必ず伴っているということである。従って、厳密な意味で、法の領域の「非承認」がそれ単独で何らかの貧困概念を構成することはあり得ない。その状態は、「経済的貧困」か、「実存的貧困」か、両者の混合物である「絶望的貧困」の中に埋め込まれているものなのである。故に、Lister の「関係的・象徴的貧困」の領域で、従来の「経済的貧困」及び本研究が「実存的貧困」と規定する部分以外の領域は、全て社会的排除であって、何らかの社会問題を包含してはいるが、社会福祉学的な意味での「容認できない困窮」、すなわち貧困ではないのである。社会的排除は法の領域における「非承認」の残滓に過ぎない。「生きづらさ」の源泉であり、看過できない社会問題ではあっても、貧困概念を構成するためには、やはり物質的か非物質的、

或いはその両方の、絶対に「容認できない困窮」が必要なのである。

ここで、法の領域における「非承認」の残滓と社会的排除の関係性を考察するために、分かりやすい例を一つ挙げよう。それは、欧米における移民の二世、三世が置かれた社会問題である。彼らは、法的には移住先の国家に統合されている。多くはその国で生まれ、その国で教育を受けて育ち、その国の市民権（シティズンシップ）を持ったれっきとした市民・国民なのである。しかし、彼らは真の意味で社会に統合されているとは言い難い。彼らの置かれた状態を指して、**Standing** は、「デニズン（寄留民）」と表現する。「デニズン（寄留民）」とは、古代ローマ時代、「在住権を与えられている外国人で、交易に従事する権利を持つが、完全なシティズンシップはもたない人々のことだった」。（**Standing=2016 : 21**）

この発想は、人がもつ権利、すなわち市民的（法の前の平等、犯罪や物理的危険から保護される権利）、文化的（文化を平等に享受し、共同体の文化的生活に参加する権利）、社会的（年金や保険医療を含む社会保護の諸形態への平等なアクセス）、経済的（所得を得る活動を行う平等な権利）、そして政治的（投票し立候補し共同体の政治生活に参加する平等な権利）の範囲を考慮することで、適用される。今日の世界では、ますます多くの人が、これらの権利のうちの一つを失っている。その意味で、どこに住んでいようと、市民（citizenry）というよりは、「デニズン（denizenry）」に属するようになっている。

デニズンという発想は、さらに法人の内部についても適用できる。法人には、さまざまなタイプの市民やデニズンがいると言えるのだ。サラリーマン階級は、企業内の一定の範囲だけの決定や実行について、少なくとも暗黙の投票権を持つ市民だ。株主と法人のオーナーは、それを暗黙のうちに承認するが、企業の戦略的な決定については明示的な投票権を持つ市民だ。法人に関するその他の人々、すなわち、臨時雇用の人々、日雇い労働者、個人請負就労者などは、デニズンだ。ほとんど何の権限も権利もない。

より広い世界に目を向ければ、デニズンのほとんどはさまざまな種類の移民たちだ。（中略）

一時雇用のキャリアにならない仕事をする労働者たち、移民であるデニズンたち、犯罪者とされた闘士たち、社会福祉給付の申請者たち、…そんな人々を加えてプレカリアートの数は増えていく。

（**Standing=2016 : 21**）

Standing が指摘するように、建前上は移民の二世、三世は、法の領域で既に「承認」されている。しかし、それはあくまで建前であり、実態は寧ろ逆なのである。彼らは、移民というスティグマを背負い、地域社会において明確な社会的排除の対象となっている。未だ是正されていない目に見えない法的な「非承認」の残滓が、今なお移民の二世、三世を苦しめているのである。

Standing は、現在先進各国で急増している「アンダークラス」や「プレカリアート」を、「デニズン」と

いう包括的な概念で理解することを提唱しているのだが、これは、社会的排除の対象を全てその一言で表現できる利便性を備えた言葉である。また、市民権（シティズンシップ）を市民的、文化的、社会的、経済的、そして政治的の5領域で把握している点も分かりやすい。このいずれかの領域を一つでも欠けば、それは市民ではなく、デニズンであり、彼らが所属する社会のシティズンシップを欠いているということになる。

さて、序章において、冒頭で志賀の社会的排除論を棄却した訳であるが、その理由の一つとして、シティズンシップを単に労働の権利に矮小化している点を挙げた。その際は詳述しなかったが、本来シティズンシップとは、Standing が指摘しているように、5つの領域から構成されているものである。志賀曰く、社会的排除論は、Townsend が主張したような社会のメンバーシップではなく、シティズンシップを重視し、その確立を目指す試みであると述べた。そして、その中核として労働の権利、すなわち経済的なシティズンシップの保障を第一義に目指すべきと主張するのであるが、やはりそれは片手落ちではないだろうか。シティズンシップ・アプローチを取ること自体は正しい。しかし、経済的なもの、労働の権利だけに固執する考えはいかにも狭隘過ぎる。少なくとも、社会的排除論を掲げて貧困と戦うのであれば、個人は全ての領域でのシティズンシップの回復が目指されなければならない。そうでなければ、仮に労働の権利だけを保障されても、他の4領域では「デニズン」に留まっている人達を社会に取り残してしまうことになる。それは結果的に、定職に就きながら、突然国内で理不尽なテロを起こす様な若者達の存在論的な苦悩に寄り添うことに失敗するであろう。

(3) 志賀の社会的排除論がシティズンシップとしての労働の権利とそこへの包摂にこだわる限り、2005年7月に「ロンドン同時爆破事件」を起こした若者達の苦しみへの淵には絶対に辿り着かない。以下、ここで少し、実行犯の若者達と事件について触れよう。

ハシブ・フセイン。18歳。移民第二世代。リーズ市ホルベック出身。企業研究で一般認識職業資格を取得。クリケットの熱狂的ファンだった。

シェヘザド・タンウィール。22歳。移民第二世代。リーズ市ビーストン出身。リーズ大学でスポーツ科学を修めた優れたスポーツ選手であり、クリケット選手だった。

ジャーメイン・リンジー。19歳。子ども時代にジャマイカから移住。最近ムスリムに改宗し、カーペット敷き職人として働いていた。生後5か月の子と妊娠中の妻をもつ彼は「愛情に満ちた夫であり父」である。

モハメド・サディク・カーン。30歳。デューズベリー在住。リーズ大学を修了し、精神的に不安定な子どもたちの相手をする教員補助を務める。小学校のよき助言者であった彼は、14歳の子と妊娠中の妻を置き去りにした。(Young=2008: 305-6)

この事件は、2001年の「アメリカ同時多発テロ事件」や2004年の「マドリード列車爆破テロ事件」と異なり、社会の不穏分子が国外からやってきた訳ではない。排他的な人達にとっては、寧ろそのように外国からきた誰かの凶行であった方が、遥かに自身は心安らかでいられたらう。社会の異分子が外からやってくるのであれば、移民・難民の管理を徹底し、国境における水際対策をしっかりと行えば、なんとか市民社会は防衛できるはずというささやかな安心感を持つことができる。しかし、残念ながらこの事件は、イギリスで育ったイギリス人が起こした所謂ホームグロウン型のテロ事件なのである。潜在的なテロリストは、既に無数にイギリス国内に今も存在しているのである。

彼らは、親世代からイギリスに移住し、そこで子どもの頃から過ごし、学び、教育を修めて結婚し、家庭を持ち、仕事をしながら普通に暮らしていたはずだった。この慎ましやかでも幸せな生活を送っていたように見えた者達が、突然自爆テロという「自傷的存在証明」を行い、イギリスのみならず世界中を震撼させたのである。後に国際テロ組織のアルカイダが声明を発表し、イギリス当局も彼らの犯行と断定したが、このテロは、「アメリカ同時多発テロ事件」のようにホワイトハウスの大統領を狙ったり、トニー・ブレア首相や当時のイギリスのいかなる政治権力者を狙ったものでも無いのだ。イギリス北部出身の実行犯4人とは全く関係無い20歳から60歳のロンドン市民と留学生、観光客併せて52人の命が奪われ、約700人が負傷するという未曾有の大惨事は、人種も国籍も宗教も民族も階級も関係なく、ただロンドン市で暮らしているというだけでターゲットにされた、大量殺戮が目的の無差別攻撃だったのである。地下鉄とバスにおける無差別自爆テロという形態は、オウム真理教信者が引き起こした「地下鉄サリン事件」を彷彿させる。

この事件の実行犯達は、本研究が提唱する「実存的貧困」或いは「絶望的貧困」状態にあったと想定されが、その分析を試みる前に、Youngが犯罪社会学の枠組みから試みている分析を先に検討しよう。Youngは『後期近代の眩暈』において、ポストモダン社会の特徴とそこで起きている社会的排除の現実を、「過剰包摂(bulimia)」という秀逸な概念で提唱する。翻訳者の木下らが、「過食症」の原義に疑問を感じ、社会を指し示すメタファーとしても適切かどうか悩んだために、敢えて「過食症」と直訳せずに「過剰包摂」と訳したとあとがきに記しているが、Baumanも好んだこの表現は、メタファーとしてこの上なく秀逸であると感じる。また、東電OLがこの病気に苦しんでいたのも決して偶然ではない。強迫的に食べて、代償行為として直後にこれを全て吐き出すという過食嘔吐は、精神分析的に愛情に対する飢餓的欲求であると分析される。つまり、数ある精神疾患の中でも、これほど外部にも分かりやすい形で、他者からの「承認」を病的に求める疾患は少ない。

社会学的メタファーとしてYoungが用いる以前に、「過食症」の概念は文化人類学者のLévi-Straussが『悲しき熱帯』の中で用いている。彼は、「未開社会」が、よそ者や逸脱者を呑み込み、自分達自身と一体化し、そこから力を得ようとする同化型の社会だとすると、「現代社会」は対照的に、逸脱者を外部に吐き出して追放するか、内部の隔離施設に閉じ込める排除型の社会であると指摘したのである。Youngは、Lévi-Straussの考えを敷衍してポストモダン社会を体現する社会病理を「過食症」に求め、「カニバリズムの社会」

（共食いするように包摂する社会）と「嘔吐する社会」（社会のメンバーをたらふく包摂し、同時にむりやり排除するような社会）というメタファーで表現したのだが、ポストモダン社会は Lévi-Strauss が指摘して時代よりもなお一層強迫性の強い「過食症」的な様相を呈している。

「過食症」（DSM-5 による正式名称は、「神経性大食症」）は、短時間における異常な食物の摂取の後、通常嘔吐を伴う。嘔吐を伴わないものは、「むちゃ食い障害」と言われ、DSM-5 で新たに追加された。所謂「拒食症」（DSM-5 による正式名称は、「神経性無食欲症」）とはコインの裏表と表現される「摂食障害」の一つである。精神分析医のヒルデ・ブルックは摂食障害を「これは食欲の病気ではありません。人からどう見られるのかということに関連する自尊心の病理です」と指摘している様に、摂食障害患者は根源的な自己否定感を抱えており、食行動の異常の背景には茫漠たる自己不信が横たわっていると理解される。一般に過食行動は憤怒、自暴自棄、絶望、孤立無援感、抑うつ、空虚感などの境界例（境界性パーソナリティ障害：BPD）心性に続発して出現すると言われる。自傷行為やギャンブル・薬物中毒同様、嗜癖の一種であり、患者に共通するのは、未熟なアイデンティティと低い自尊感情である。しばしば過去の心的外傷体験（トラウマ）が報告される。疫学的に圧倒的に経済的に豊かな先進国に多く発生し、豊かさの病の象徴でもある。

以上、簡単に「過食症 (bulimia)」について記したが、これはまさに「実存的貧困」状態にある人間の心性そのものである。社会病理は個人の集団的無意識の集積でもあるため、豊かな現代社会が「過食症」的になっていくのは全くもって当然である。そして、経済的に豊かだからこそ、存在論的な苦しみがなお一層深くなるというパラドックスがこの社会病理に表れているのである。

「過食症」において、過食と嘔吐はほぼ同時に起こる。大量に摂取された食べ物は、直ちに代償行為として吐き出さなければならない。強迫的なまでのその行為にタイムラグはほぼ無い。そして同じように、ポストモダン社会においても、人間の過剰包摂と排除がほぼ同時進行で起きているのである。これは、『象徴の貧困』で Stiegler が指摘した、「集団的個体化」のプロセスと概ね合致する。彼は、ハイパーインダストリアル社会では、「わたし」を「われわれ」に変えるシンクロニゼーションと、「われわれ」を「わたし」に変えるディアクロニゼーションが同時に進行していると指摘する。この同時進行する「過剰摂取」と「排除」の潜勢力の中で、自己を見失ってしまった者が、「われわれ」の象徴である市議会議員という公人達を殺害し、結果的に「わたし」自身をも殺害したリチャール・デュルンのような若者なのである。「過食症」の両義性、及びその本質にある自己愛の障害とアイデンティティの欠損を鑑みると、これほどポストモダン社会の社会病理を的確に表すメタファーはないであろう。

さて、以上の点を踏まえて、イギリス社会が現在進行形で過剰摂取し、そして同時に強迫的に排除しようとしている移民の若者達の苦しみを考察しよう。社会の全てを安価なサービス産業に順次置き換えていく新自由主義社会の経済は、国外から流入する安い労働力に頼らなければシステムが成り立たない。江口が論じた「社会階層論」と「過剰人口プール」は、新自由主義がグローバリゼーションと一体となって深化した結果、国家を超えて形成されたのである。国内においては、常に市場原理主義的な競争によって低賃金労働へ

労働者を駆り立てる圧力が高まり、「過剰人口プール」が移民によって飽和状態まで満たされる。これによって、国内に低所得の社会階層、すなわち「アンダークラス」が大量に発生するのである。

労働市場の規制緩和によってもたらされたホスト国の雇用の流動化は、本来移民の若者達にとっては望ましく、家族が祖国に居た時以上の豊かな暮らしを手に入れるための絶好の機会に思われたはずだ。しかし、強かな「未開社会」と異なり、コミュニティが脆弱化したポストモダン社会は、彼らを強烈な圧力でイギリス社会に心理的にも文化的にも同化させようとする一方で、彼らに移民のスティグマを貼って社会的排除の対象とすることで、彼らの社会への完全な統合を冷たく拒否するのである。彼らは「デニズン」として、十分な市民権（シティズンシップ）を確立することはできないまま、侮蔑の対象である「アンダークラス」として、経済的にも存在論的にも不安定な状況に置かれる。グローバル政治経済は、インターネットやマスメディアを通して、日々西欧的価値観を徹底して彼らに刷り込み、彼らも知らず知らずのうちにその価値観や考え方をうちに宿していく。成功のシンボル（象徴）として、文字通りセレブリティが社会から称賛され、メディアを通して彼らの華やかな暮らしぶりを嫌というほどに見せつけられるのであるが、彼らがそこに辿り着くための道は固く閉ざされている。これが、イギリスだけでなく、欧米における移民の二世、三世が置かれた冷たい現実なのである。

これまで論じてきたように、移民第二世代のかれらに特有の歪みを与えており、そのことは北部の諸都市のパキスタン・バングラディシュ系の人びとにとくにあてはまる。物質レベルにおいてかれらは、自由と民主主義の重要な価値観である自由・平等・友愛というお題目でメディア、学校、政府当局、そして市民社会から攻撃を仕掛けられている。ところがこうした価値観は、労働市場、工場、学校、街頭で、かれらが警察権力のひどい偏見、白人労働者階級の激しい敵意に面前することで日々挫かれている。私はこれを過剰包摂のプロセスとみなした。かれらは、ホスト国の価値観に同化されながらもそれに拒絶されるのである。これは外国人だという経験ではない。^{アリエネ}外人化／^{イト}疎外されるプロセスである。コリン・ウェブスターによる、北部の諸都市の暴動についての幅広い研究はこの分析と合致する。イギリスのパキスタン人とバングラディシュ人は、新しい価値観の宝庫というよりはむしろ価値観の「過剰摂取」に悩まされている。「それは、怒りあるいは絶望として内面化される（…）いかに相対的剥奪がこのように感じられるかということである」。ウェブスターが思いを込めて強調しているのは、ここから生じる文化的アイデンティティの可変性についてである。すなわちその感覚は、相対的剥奪とアイデンティティの危機に直面する貧困化した白人労働者階級と雑種混交化し、交錯し、ある種の価値観を共有しているというものだ。そしてこの適用形態のうちのひとつが原理主義なのである。さらに注目すべきなのは、このアイデンティティは、伝統志向で穏健で暴力を惹起しないかれらの両親の宗教を直接継承したものではないことである。それどころか、少なからぬ活動家たちは改宗しているのである。（Young=2008：309-310）

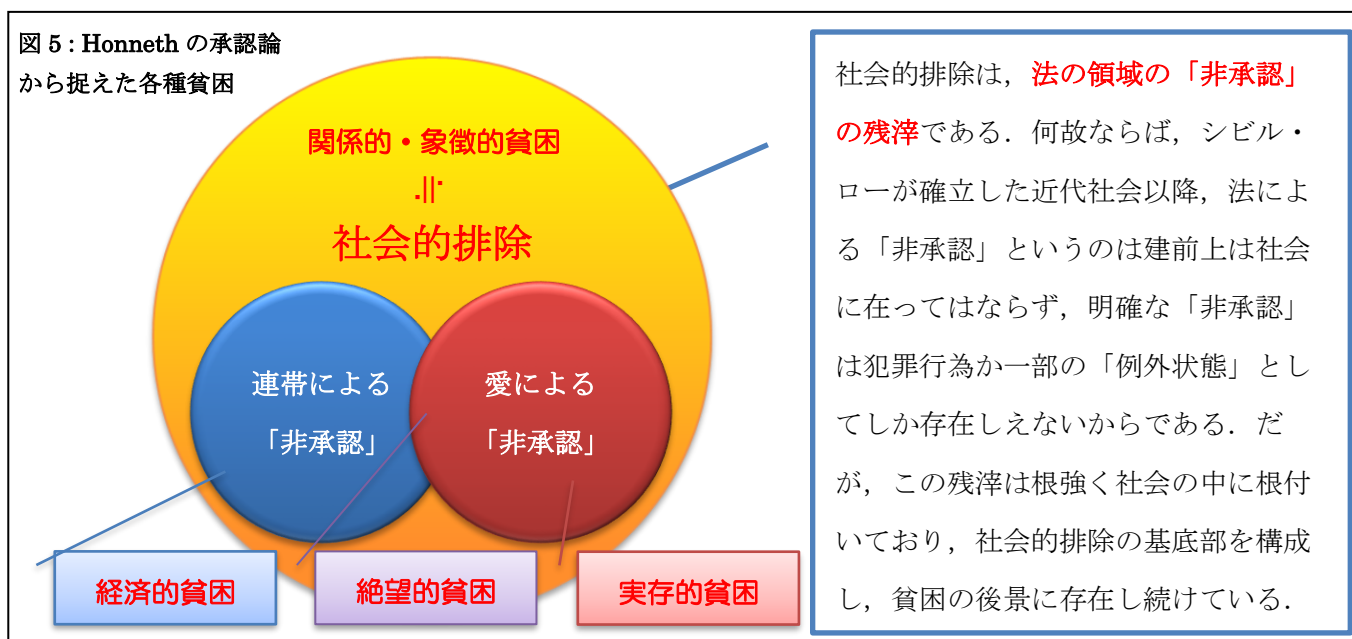
Young が述べる「^アリ^エネ^イトされるプロセス」とは、これまで何度も言及してきた、Castel の「^{ディ}ザ^フライ^リエ^エ」に陥るプロセスである。Young は、先述のプロセスがわざわざ「外国人だという経験ではない」、と指摘しているように、「^アリ^エネ^イトされるプロセス」は本質的にイギリスに住む誰もが直面し得るプロセスである。明日仕事を失えば、明日シングルマザーになれば、その日から白人であっても、男性であっても、富裕層であっても、たった一度の蹉跌から、この「^アリ^エネ^イトされるプロセス」、「^{ディ}ザ^フライ^リエ^エ」に陥るプロセスに入り込む可能性がある。それ程までに、新自由主義が行き渡ったポストモダン社会は、「過食症」的なのである。逆らい難い過食衝動に突き動かされて、過食症患者は満腹感を感じることもなく、高カロリーの食事を味わいながら食べるというよりは、ただひたすら胃に流し込む。そして、ようやく胃が満たされた瞬間から始まる異常な自己嫌悪と罪悪感が、彼らをして強迫的な過食嘔吐に走らせる。嗜癖故に生じる一時の恍惚感に酔って、自らが仕出かした不始末に対して行わなければならないようになった苦しみを伴う代償行為が、過食嘔吐なのである。過食嘔吐でも足りなければ、利尿剤や便秘薬の使用など、ありとあらゆる手段を尽くして、彼らは摂取した食物をまるで穢れものであるかのように扱い、徹底的に身体から外部に排除して自らを浄化しようとするのだ。

過食症患者の病的な行いは、昨日絶対に必要だった労働者が明日簡単に無価値になるというプロセスに、すなわち、昨日雇用した労働者が明日にでも解雇されるような、新自由主義における労働市場の冷たいフレキシビリティに重なる。そしてこのような流れは今のところ将来的にも止まる見込みがない。エドワード・^{ターボチャージャー}ルクトワは、この過剰な資本主義を、「加速装置付き資本主義」と表現したが、まさに言えて妙である。これからも加速度的にグローバル企業は人を使い捨てていくだろう。しかし、使い捨てられた人達は、企業からは消えても社会から消える訳ではない。何故ならば、Bauman が指摘するように、世界は既に政治的な意味で「人間廃棄物 (wasted lives)」でいっぱいであり、刑務所産業以外に彼らの置き場がないからである。故に、彼らは尊厳を踏みにじられた状態で社会に吐き出されるのである。そうして、社会の周縁に排除された者達が集団を形成していく。すなわち、移民のいるところ、至る所で必ず市民の「デニズン」化が起きるのだ。Standing が指摘したように、現代社会では様々なタイプの「デニズン」が国内に一大居留区を作るのであるが、彼らを包括して表現する概念が社会的排除であることは既に述べた通りである。

図 1 の問題を再度念頭に置いて頂きたいのだが、過剰に包摂されたものは、当然過剰に排除されねばならない。そして、排除された先はすべからく「デニズン」の居留区だ。従って、社会的排除という概念は、結果的に貧困以外の社会問題も過剰に包含してしまう。各々の「デニズン」の市民権の欠損は 1 から 5 段階までかなりの幅があるため、それらを全て貧困として同列には扱えない。従って、Lister も「関係的・象徴的貧困 (≡社会的排除)」を単独で貧困概念として措定できなかったのである。

これを改めて社会的排除と貧困、そして Honneth の承認論を図に表すと、図 5 になる。

図 5 : Honneth の承認論
から捉えた各種貧困



上記の Honneth の承認論に基づく図 5 の理解によって、改めて何故志賀の社会的排除論が貧困理論として瑕疵があるのかが分かるはずである。そして、何故 Lister の貧困理論が不十分であったかも理解可能になる。その原因は、まさに Honneth が指摘したように、Fraser が「平等原理」に基づく不正義に対して、適切な理解と配慮をしていなかったことにあるのだ。Honneth が丁寧に愛と法の二つに分けた領域を、Fraser と Lister は、一つの「承認」概念で一括して理解しようとしたため、結果的に「貧困の車輪」は合理性を欠き、「再配分」が不必要な貧困問題を説明することができなくなってしまったのである。一方で、志賀は、Lister が貧困として措定することを避けた部分、すなわち雑駁な概念である「関係的・象徴的貧困」を社会的排除論として、単独で「貧困」とであると措定したのであるが、これは明らかに厳密性を欠いた背理であり、社会福祉学の貧困理論としては、対象が広過ぎる故に棄却せざるをえないのである。

この問題を、巧妙に回避しているのが、Castel の社会的排除の捉え方である。「関係的・象徴的貧困（≡社会的排除）」は、雑駁であるにもかかわらず、言葉の使用だけは今なお拡大し続けており、著しい人権侵害から、スティグマには至らない瑣末な日常的な差別・偏見の類までの全てを包含するため、そもそも一つの貧困概念として取り扱うのが不適切であると Castel は指摘する。彼は、敢えて広義の社会的排除と狭義の社会的排除の二つにこの問題を分類し、広義の社会的排除に属する者を「社会喪失者」、狭義の、真に社会的に排除された集団を「排除された者」と呼んで厳密に区別するのだ。そして、Castel が指摘する「新しい貧困」は、主として『社会喪失者』のプレカリアート^{ディザフイリエ}を指すのである。その意味では、彼もまた Lister 同様に、ある程度貧困を、経済的側面と社会的・文化的側面の両面から捉えている。Lister との違いは、従来の社会福祉学が「相対的貧困」と「絶対的貧困」の形式で経済的貧困を捉え直した様に、彼は社会的排除を、

いわば「絶対的社会的排除」と「相対的社会的排除」に分類し、「相対的社会的排除」でかつ「相対的貧困」と非貧困を行き来しているプレカリアートを、「新しい貧困」に分類したと言ってもいいであろう。Castelの「新しい貧困」は、「経済的貧困」を伴わない非貧困群を含んでいるため、Listerの分類では貧困概念に組み入れられない存在なのである。

Listerが経済的困窮に拘った様に、Castelは寧ろ排除の中核概念に拘りを持っている。そして、現在、社会学や社会福祉学において、社会的排除という概念で表現される集団（非正規雇用のワーキングプア等）は、真に社会的に排除された集団である「排除された者」とは本質的に異なるものであると指摘するのである。その意味では、前者も社会的排除で理解しようとするPaugamとも意見を異にしている。

Castelは、社会的排除という概念と言葉が人口に膾炙し過ぎたせいで、言葉本来の含意が希釈され、真に社会から排除された集団である「排除された者」の存在を押し隠してしまう危険性を憂慮し、「新しい貧困」のような社会問題に安易に社会的排除という言葉を用いることを避けるのである。Castelの意図するところを、訳者の北垣は『社会喪失の時代』のあとがきで秀逸に描き出している。

歴史上繰り返されたユダヤ人追放や、南アフリカのアパルトヘイトは、文字通り排除である。しかし不安定雇用に置かれた若者は、それらと同じ意味においては、社会から排除されていない。この若者は、時代の支配的な価値観を受け入れ、仕事に価値を見いだそうとしている。わずかながらの社会的給付を受けることもある。しかしながら若者は、自分の人生を見通すことができず、「明日を失い」つつある。家族や職場、地域での、人とのつながりも希薄になりつつある。彼は社会のなかにいるが、社会的なものを失いつつある。これが社会喪失であり、それはたんに内から外への移行ではなく、少しずつ損なわれていくものだ。ある程度を過ぎれば、文字通り社会の外へと排除されることもあろう。しかし見てとるべきは、結果よりも過程である。トリスタンが各地を遍歴し、さまざまな出来事に遭遇するなかで孤立していくように、人は社会を喪失するというプロセスを生きるのだ。（Castel=2015：482）

このCastelの区分法に従い、かつ、Honnethの分類を土台として、「関係的・象徴的貧困（≡社会的排除）」の領域、すなわち「平等原理」に基づく「法による承認」の領域において、「排除された者」と判断される場合は、「容認できない困窮」状態にあるために、その社会的排除は貧困である、と判断しても差し支えないであろう。インドにおけるカースト制度、ナチスドイツのユダヤ人に対するホロコースト、何アフリカのアパルトヘイト、そして日本の被差別部落差別などは、歴史的に見ても法的に「容認できない『非承認』」の実例である。より新しい事例で言えば、アビグレイブ刑務所やグアンタナモ基地で行われた米軍のイラク兵や誤認逮捕された一般人に対する拷問なども、間違いなく法の領域における「容認できない『非承認』」である

だが一方で、「排除された者」は、同時に愛の領域か、連帯の領域、或いはその両方においても「容認できない『非承認』」を受けている。ユダヤ人は社会的に愛されていない、否、忌避され、軽蔑され、或いは憎悪されているが故に、ホロコーストに至るような法による「非承認」が社会によって冷たく黙認されたのである。そして、その結果、彼らは強制収容所で自由を奪われ、「絶望的貧困」状態での労働を強要されたのだ。従って、「排除された者」の場合は、東電 OL や太宰同様にほぼ全ての「承認」が欠損する訳だが、「排除された者」が法的に極めて例外的状況であるが故に、彼らが置かれる状況は、「実存的貧困」ではなく、しばしば「絶望的貧困」状態になる。

それは、インドにおける不可触民、南アフリカにおける黒人、キリスト教文化圏におけるイスラム原理主義者、そして、我が国における、在日外国人や被差別部落出身者も排除の度合いに程度の差はあっても同様であろう。歴史的に見て、愛されている、或いは尊敬されているのに社会から徹底して排除されている個人や集団というものは、絶対に存在しない。法の領域で、容認できない程の苛烈な「非承認」が存在する背景には必ず、容認できない程の個人或いは集団に対する愛の領域の「非承認」がある。そして、そのように排除された集団は、往々にして経済的にも搾取されており、連帯の領域でも「非承認」状態にある。例えば、多重債務者をタコ部屋に隔離して強制労働を行わせたり、“訳アリ”の労働者を集めて除染作業員として長期間に渡って被爆線量を見捨てて福島原子力発電所で働かせたりする場合などがそうである。

いずれにせよ、Honneth の承認論の「非承認」の組み合わせは、複数パターン存在するのだが、法の領域における容認できない「非承認」は、建前上法治国家の現代社会においては普通存在しないため、それが単独で社会の中で何らかの貧困概念を構成することは無い。仮に、例外的に法的に「容認できない『非承認』」が発生した場合は、必ず他の二つの「非承認」状態のいずれか或いは両方を伴い、結果的に「経済的」、「実存的」、「絶望的」の三つの貧困状態のいずれかを形成している。このように、純粹に法の領域の「非承認」だけ（すなわち、「関係的・象徴的貧困」単独の貧困）が起きている状態というものを想定できないが故に、Fraser も Lister も、愛と法という二つの本質的に異なる領域を単一の承認概念で捉えてしまうという誤謬を犯したのである。

なお、「不平等」を「貧困」と見做すかどうかについても様々な議論があるが、ここでは Spicker の視点に立ち、両者は同義であるとする。両者は異なると主張する代表的存在は、「相対的剥奪」概念を提唱した Townsend であるが、Spicker は、Townsend の「相対的剥奪は貧困である」という貧困の定義に触れた後、次の様に述べる。

この定義は、貧困の社会的定義や不平等原因論よりも、さらに踏み込んだものである。それは、社会が容認するかどうかという観点から貧困をとらえている。社会が変われば、貧困の基準も変わる。社会が豊かになれば、それだけ基準も高くなる傾向がある。

その意味で、相対的貧困概念は極めて論争的である。タウンゼントは「不平等は貧困ではない」

というが、これは彼自身の主張と食い違っている。彼は事実上、貧困を不利の一形態として定義するが、不利とは不平等の別名である。他の人々よりも劣った立場に置かれている限り、その人は貧困であるはずである。(Spicker=2008 : 43)

「関係的・象徴的貧困（≡社会的排除）」は、元来非常に論争の多い部分である。理論上、厳密な意味においての社会的排除、すなわち愛及び法的な「容認できない『非承認』」が認められる場合、それは「容認できない『不平等』」のことである。そして、Spicker が指摘する様に、「不平等」と「貧困」は同義であるため、そのような「関係的・象徴的貧困」は、単独でも貧困概念として認めるべきなのである。しかし、先述の通り、現状そのような著しい法的な「非承認」は、存在しえない。例外的に発生したとしても、その状態は必ず他の領域の「非承認」を伴うため、「経済的貧困」、「実存的貧困」或いは「絶望的貧困」のいずれかの状態を構成することになる。故に、本研究では、Lister 同様に、「関係的・象徴的貧困（≡社会的排除）」を単独では貧困として措定しない立場を取る。従って、志賀が展開する社会的排除概念で「新しい貧困」問題を捕捉できるという、ある意味当たり前だが貧困理論としては精緻さに欠け、論理的な飛躍を伴う指摘は、やはり棄却せざるをえないのである。

(4) もう少し「実存的貧困」概念について考察を加えるが、Lister の貧困概念は、社会関係資本やソーシャルサポート・ネットワークの欠損に着目する Castel や Paugam の「新しい貧困」の影響を多分に受けているが、Stiegler が提唱したポストモダン社会の「新しい貧困」である「象徴的貧困」の視点を欠いている点でやはり不十分である。従って、Lister の「象徴的・関係的貧困」には、Stiegler が提唱した「新しい貧困」を重要な構成要素として埋め込む必要がある。しかし、そうすると、この新しく創出された「象徴的・関係的貧困」に、紛らわしいことに、二つの意味での「象徴的貧困」が含意されてしまう。このダブルミーニングを回避して誤解を避けるために、社会福祉学の領域において、既に人口に膾炙している Lister の用語はそのまま残し、本研究において、Stiegler の「象徴的貧困」には、長谷川から借用した「実存的貧困」という新たな名称と概念を、社会福祉学的な肉付けを施した上で付与することとする。

だが、既に述べた通り、「実存的貧困」＝「象徴的貧困」ではないということには、ここで再度注意を喚起しておきたい。何故ならば、Stiegler が提唱する「象徴的貧困」は、社会的排除やスティグマ等の社会福祉学の重要な鍵概念を含まず、またその対象も余りにも広く、貧困層のみならず、一般市民や富裕層までがその概念に包含されてしまうからである。「象徴的貧困」が、ポストモダン社会に必然的に埋め込まれた概念であり、我々が日々この貧困に直面しているのは疑いの余地が無い。しかし、社会福祉学として、貧困というものは、やはり絶対に「容認できない困窮」を含むパワーレスな状態を示す概念でなくてはならない。そう考えた時、Stiegler の「象徴的貧困」が、必ずしも「容認できない困窮」を土台として構築されていない点には十分な配慮が必要となる。

畢竟、彼の「象徴の貧困」という概念は、精神分析的・哲学的概念を用いて「人間性の喪失」と「世界からの疎外」を描いたものであって、日本語の翻訳である「貧困」という言葉は、あくまで個人がシンボル（象徴）生成の過程に参加できないことの比喩としての意味合いが強い。「De la misère symbolique」という原書のタイトルは、「象徴の不幸」或いは「象徴の窮乏」といったニュアンスの翻訳の方が、筆者には適切であると思われる。そもそも、フランス語において、一般的に「貧困」を意味する英語の *poverty* に該当する単語は、*la pauvreté* である。無論、英語の *misery* にも「貧しい」という含意はあるため、フランス語の *la misère* を「貧困」と翻訳することは完全なる過ちではないが、やはり違和感は覚える。社会福祉学の領域において、「貧乏」と「貧困」は決定的に異なるからだ。

「貧乏」は、貧しくとも何とか暮らしていける生活水準のことであり、必ずしも苦しみや不幸を伴うものではない。所謂「清貧」の暮らしがまさにそれに該当する。宗教家や儉約家は、どれほど厳しい生活状況を送っていても、その生活は自らが望んでいる暮らし向きであり、そこに哀しみや苦しみは無いのである。「子供の頃は、貧しかったが、楽しかった」という実体験に基づく記憶を語る個人は、戦後生まれの日本人にもたくさんいるに違いない。しかし、「貧乏」と異なり、「貧困」は必ずそこに耐え難い苦しみを伴う。故に、Spicker が指摘したように、「なにかがなされなければならない」という感覚が喚起され、対象者には社会福祉学的な支援が必要とされるのだ。

翻って、Stiegler の「象徴の貧困」を言語学的に考察すると、彼の指摘する「貧困 (*la misère*)」にはかなりの濃淡があることが理解できる。それは、日本語の文脈において「貧乏」から「貧困」までを同じ概念で一括りに捉えているに等しい。従って、「象徴の貧困」が社会福祉学的に「容認できない困窮」である「実存的貧困」に至るためには、更に幾つかの制約条件を加えて、概念の枠組みを限定的にする精緻化作業が必要である。

「実存的貧困」は、大きな括りで言えば、「関係的・象徴的貧困」の中に入り、かつ、物質的核である経済的困窮を持たない概念である。従って、物質的核の代わりに、貧困の核となり得る非物質的困窮を必ず持たなければならない。具体的には、図3に記載されている通り、ミクロレベルで言えば、「重要な他者 (*significant other*) の不在」と、様々なトラウマティックな個人的失調要因の存在が挙げられる。

人間のアイデンティティの研究は、哲学や精神分析、社会学、発達心理学など様々な領域で展開されているが、Young (=2008 : 358) は、「象徴的相互作用論の伝統的議論によれば、自我はわれわれをとりまく有意義な他者に反照されることでリアリティを獲得する。クーリーはこれを『鏡に映った自我』と呼び、ミードは『一般的他者』と呼んだ。われわれは、他者がわれわれをどう認知しているのか、それを認知することで自分自身をみているのである」と伝統的なアイデンティティ研究を総括して、他者の存在の不可欠性を説く。アイデンティティの拠り所となる他者の存在は、他にも多くの識者が指摘しており、Lacan の「鏡像他者」、Levinas の「顔」の体験と「絶対的な他者」等無数に挙げられるのだが、やはり最も代表的なものとして、Mead の「一般化された他者 (*generalized other*)」と「重要な他者 (*significant other*)」の概念をここ

では用いる。

Mead は、自己に内面化される他者性は、「最初は特定の『重要な他者』の形態を取り、やがて抽象的な『一般化された他者』へと転換する、という経緯を重視している」（大澤 2002：379-380）が、「実存的貧困」の根底にあるアイデンティティの未形成は、既に最初の「重要な他者」の段階で躓いていると推察される。人生早期に、自らを無条件で、全面的に肯定してくれる母親や父親が不在がちである、或いは未熟であったりして、結果的に「一般化された他者」の構築にも失敗しているのである。かようにも深刻な他者性の不在がもたらすものは、他者に対する深刻な不信感であり、それは引いては世界全体への不信感となって、結果的に自らが拠って立つ世界の足場そのものを崩落させている。更に、その不信の眼差しは自分自身にまで向けられてしまうため、必然的に自尊感情は低下せざるをえない。過去と現在の安定した接続が自我を介して確立されていないため、当然未来はより一層不安定で不明瞭なものになる。故に、「実存的貧困」状態にある者は、希望を抱くこと、具体的で肯定的な未来を描くことが極めて難しくなるのである。

アイデンティティの未形成が個人の人生にもたらす負荷は深刻である。多くの場合は、虐待や機能不全家族等の家庭的問題がその根底にあるのであるが、このような個人的な失調要因とは別に、ハイパーインダストリアル社会においては、社会的な潜勢力としても、アイデンティティの希釈化がもたらされている。Stiegler は、それを「集団的固体化」という独自の概念で示すのであるが、この「集団的固体化」に失敗した個人が陥るのが、「自己の喪失」なのである。

Stiegler は、「自己の喪失」の原因として、精神分析を拠り所として本源的ナルシシズムの不在を挙げている。その結果、「象徴の貧困」状態にある者達は、自分を愛せず、従って他者も愛することができないのである。Stiegler のその指摘自体に心理学的な瑕疵は無いが、では、精神分析でいうところの本源的ナルシシズムが、何時どのように形成されるのかは、Mead の自己概念を下地として、昨今の発達心理学の潮流では、「内的作業モデル（Internal Working Model：IWM）」に基づく「アタッチメント（愛着）理論」によって科学的実証性と妥当性が高い説明がなされている。

「内的作業モデル（IWM）」は、乳幼児期における保護者（主に母親）との相互作用の中で形成される自己や他者に関するスキーマ（情報処理の枠組み）である。例えば、泣いている乳児に対して母親が応答的に接することで、乳児は「自分は愛されるに値する存在だ」「母親はいつでも守ってくれる存在だ」などの自己・他者に関するポジティブなスキーマを形成する。一方、非応答的な母親の下で育った乳児は「自分は愛されない存在だ」「母親は助けてくれない」などの自己・他者に関するネガティブなスキーマを形成する。これらのスキーマは、母子関係を超えてその後の対人関係に応用される。この視点に立てば、Stiegler が指摘する本源的ナルシシズムは、先ず人生の早期に、母親、或いは、それに該当・匹敵する「重要な他者」との濃密な相互関係を通して、自分は愛されるに値する存在である、という実感を繰り返し得ることではしか、自らのうちに構築できないものなのである。「重要な他者」に対する信頼が「一般化された他者」に汎化され、それがそのまま自分自身への信頼、本源的ナルシシズムに転嫁されるのである。そして更にその信頼を土台

として、個人の中で他者に対する思いやり、フィリアが豊かに花開いていくのである。従って、人生の早期に「重要な他者」を持てず、その後も「重要な他者」から十分に受容されなかった者は、Honneth の承認論のうち、愛の領域の深刻な「非承認」が発生して、結果的に「非物質的な困窮状態」に陥ることになるのだ。

そのような状態に陥る原因は多種多様な事態が想定されるが、児童虐待はその最たるものである。

『死に至る病～あなたを蝕む愛着障害の脅威～』の中で、精神科医の岡田尊司（2019）は、医療少年院で非行少年の臨床に 20 年関わった経験から、反抗や非行の改善にもっとも効果的な方法は、親の関わり方を変えることだと断言する。なぜなら、反抗や非行の最大の原因は、自覚されていたかどうかはともかく、子どもが何らかの虐待的な状況に置かれていたことにあるからだ。岡田は、心身にありとあらゆる疾患を続発させる愛着障害を「現代の奇病」と表現し、Kierkegaard の言葉を借りて、「死に至る病」とであると指摘する。Bowlby や Ainsworth ら、欧米の愛着（アタッチメント）の研究の知見に触れながら、岡田はここ数十年の間に我々の社会に広がった生きづらさの背景には、愛の領域における「非承認」の急速な拡大があると結論付けるのである。事実、1960 年代以降、世界中で急速に増加した、愛着障害の指標とでもいうべき疾患群、すなわち、境界性パーソナリティ障害（BPD）、摂食障害、子供の気分障害、注意欠如・多動症（ADHD）の背景には、明らかに、虐待、ネグレクト、養育者の交代が常態化した社会構造があると岡田は指摘する。岡田は、岩井八郎の論文を引用し、アメリカ社会において、1950 年代から徐々に女性の社会進出が始まり、1980 年代には、女性の 6 歳から 17 歳の子供を持つ母親の 60%、6 歳以下の子供を持つ母親の 45%が、子供を保育園に預けて就業するようになった事実を重く捉える。1940 年代には、それぞれ 25%、10%だった社会状況が一変し、それに併せて夫婦の離婚率も急上昇した。そして、そのような社会状況に重なるように、新自由主義による過度な競争社会がアメリカに誕生した結果、経済格差は拡大し、低所得な社会階層やひとり親家庭において、虐待、ネグレクト、養育者の交代という愛着障害の要因が続発し、社会の中で常態化するようになったのである。更に、Kierkegaard が「死に至る病」、すなわち「絶望」の唯一の処方薬であるとした宗教もアメリカ社会では力を失った。1950 年代から 60 年代まで 2%で安定していた無宗教の割合は、60 年代以降右肩上がりで見られ、2010 年の統計では 20%を超えたのである。

宗教の一つの役割は、愛着障害からわれわれを守ること、つまり「死に至る病」に救いをを用意することにあったといえるかもしれない。親のいない子、親に愛されない子にも、等しく神や仏の愛が注がれるという信仰は、欠落を補う強力な装置であった。この世の移ろいやすい愛よりも、もっと不変の偉大な存在の愛を信じ、感謝することによって、不足した愛への怒りや不満や悲しみを乗り越えることができた。（岡田 2019 : 146）

岡田と同じように、文化人類学者の上田紀行も、現代社会に蔓延する閉塞感や社会病理を宗教の喪失、そして、愛や生きがいの喪失に見出す。『生きる意味』と『愛する意味』において、上田は今日日本社会が直面し

ている深刻な問題は、「生きる意味の不況」であると指摘する。高度経済成長時代、右肩上がりの経済状況の中では機能してきた「生きる意味」は、その利益が失われるに至って、全くの機能不全に陥ってしまった。経済的な不況、経済成長の停止と共に、「生きる意味の不況」に日本人は直面していると上田は指摘する。

いま私たちの社会を襲っている問題の本質とは何なのだろうか。

それは「生きる意味」が見えないということだ。いま日本社会のいたるところで起こっているのは、「生きる意味」の雪崩のような崩落である。自分がなぜ生きているのか分からない。生きることの豊かさ、何が幸せなのかが分からない。

その「崩落」がまず目に見える形で現れているのが若者の危機である。若者だから「夢」がある。若者だから「生きる活力」に満ちているといったイメージは既に過去のものとなった。いつも疲れている。何故生きているのかが分からない。そういった若者がむしろ標準となりつつあるのだ。

そして、何よりも社会を震撼させ、「この社会は何かが確実に崩壊しつつある」ことを私たちに実感させたのは、暴力の噴出だろう。（上田 2005：2-3）

『生きる意味』の冒頭で上田は上記の様に述べ、Stiegler が指摘した「象徴の貧困」、すなわち「自己の喪失」を、Stiegler と同様に「アメリカ同時多発テロ事件」に求め、また日本の若者の無気力な心理状況を「神戸連続児童殺傷事件」で少年 A が用いた「透明な存在」という言葉から読み解こうとする。

上田は、2001 年 9 月 11 日にニューヨークの世界貿易センタービルを襲った衝撃的なテロリズムと、その後アフガン、イラク戦争へと続く世界戦争は、紛れもなく「生きる意味」の戦争であったとする。何故ならば、アメリカは建国以来一度も本土を攻撃されたことが無い国であるからだ。アメリカの戦争とは、常に自国から遠く離れたところでの戦争であり、湾岸戦争を大半のアメリカ人がテレビの前で観たように、アメリカ人にとっての戦争は常に「遠近感」を欠いてきた。だからこそ、アメリカは容赦なくゲリラを掃討するためにベトナムのジャングルに枯葉剤を撒くことができたし、日本や中東を空爆によって蹂躪し、国土を壊滅させることが可能だったのである。都市を灰燼に帰することが、そこに生きる人達にとってどれほどの喪失感をもたらすかをアメリカ人は想像することができなかった。上田（2005：58）は、「そこに生きる人間にとって、その土地への『愛着』が実存を支えているとは、想像することができなかった」と指摘し、建国以来初めて国土を攻撃されたことで、アメリカ人が直面せざるを得なくなった実存的な不安とそこから生まれたイスラム原理主義に対する激しい怒りと憎しみを読み解くのであるが、何ものかへの「愛着」が人間の実存を支えるというのは、真理である。逆説的に言えば、何ものへも愛着を抱けない状態は、人間の実存を根源から脅かす。それが、愛着障害の本質である。そして、それは生きる意味の喪失、引いては自己の喪失を生み出すのである。それが、病的症状として個人の心身に発現すれば、愛着障害という医学的カテゴリーの間

題になる。そして、社会病理として現れれば、テロリズムや殺人事件などの「自傷的存在証明」の形を取る。これは存在論的カテゴリーの問題なのである。少年 A の「透明な存在」という言葉は、少年の交換可能性を表したものであり、かけがえのない人間の実存が著しく毀損されている状況であると上田は指摘するが、少年 A のように、自己の存在価値に意味を見出せない若者が増え、「生きる意味の不況」が日本社会で深刻化している背景に、上田も岡田同様に、愛の欠落・不在を見出すのだ。

世界とは効率性の追求のためにあるのではない。自分が何を愛するのか、世界の何と「愛」でつながることができるのか、そのことを見出さなければぼくはこれから生きていくことはできないんだ。（上田 2005 : 142）

上田は自らの「自分探し」における深い実存的な苦悩の経験から、自己は世界と「愛」によってのみ接続可能であり、「生きる意味」はその先にしか見つからないことを学んだのであるが、まさにその世界に接続するための「愛」が個人の中で著しく毀損されている状態が、「愛着障害」なのである。Honneth の承認論のうち、愛の領域の深刻な「非承認」は虐待であるが、虐待を受けた子供は、世界と「愛」によって接続することが難しい。その結果、「生きる意味」に辿り着くことが困難なのである。「重要な他者」から寄せられる無条件の愛を土台にして、人間は健全な自己愛を構築し、それを世界への橋頭保とする。しかし、昨今世界への橋頭保を築けない者達が社会の中で孤立し、「生きる意味」を喪失し、「実存的貧困」の深淵へとはいまひ込んでいるのである。そして、岡田が指摘するように、愛着障害は現代の「死に至る病」であるが、非物質的困窮という形でそれを貧困概念の中核に持ち、更に社会的排除にまで遭っている「実存的貧困」の状態は、より一層死の淵に人を誘う。

仮に、幼少期に概ね健全な心理・社会的発達を遂げ、家族関係に大きな問題が無いとしても、思春期・青年期において、いじめや DV、ストーキング、性暴力被害などの極めてトラウマティックなライフイベントに遭遇し、一度完成した「内的作業モデル (IWM)」が後天的に破壊され、「実存的貧困」に陥ることは、十分にあり得る。人間は「愛」によって世界と接続しているのであるが、その結節点である「愛」を、上記のトラウマティックな事象は根底から破壊する。そして、一度破壊された愛を修復するのは、極めて難しいことが、これらの心的外傷体験が生み出す PTSD (Post-Traumatic Stress Disorder) の治療の困難さから証明されている。

「実存的貧困」の原因としては、愛による「承認」の欠如が最も大きいのであるが、Honneth の承認論のうち法による「承認」の欠如、すなわち広義の社会的排除が与える影響も看過できない。昨今日本でも橋本が指摘するように「アンダークラス」が誕生し、社会の中で増加傾向にあるが、彼らの多くは「社会喪失者^{ディザフリース}」であるため、十全な法による「承認」を受けていない。内面で進行する「象徴的貧困」と、愛の領域における「非承認」、加えて外部から付与されるスティグマに代表される差別・偏見といった法の領域の「非承認」

の総体が、「実存的貧困」という概念で提唱される人間存在を揺るがす程の苦悩である。それは、単なる生きづらさのような表現で終わらせることができない程の「容認できない困窮」である。

第三章以降で詳述する質的研究を通して、「実存的貧困」状態に陥っている者達の成育歴に、往々にして上記の何らかの個人的失調要因が例外無く存在することが浮き彫りになったのだが、本研究が研究対象とした性風俗産業に従事する若い女性達の生きづらさが今に始まったものではなく、彼女達の人生早期から、多くの場合一貫して、そして継続している問題であることが明らかにされたことの意義は深い。多くの女性達が、愛着障害の指標である上記の精神疾患を複数発病していたのは、決して偶然ではないのである。

一旦ここまでの議論をまとめると、『『実存的貧困 (existential poverty)』』とは、上記のように心理学的な「内的作業モデル (IWM)」の欠陥（端的に言えば「愛着障害」）を抱え、非物質的な困窮状態を抱えた者が、ポストモダン社会特有の『実存的不安』を、何らかの要因（図4で示した様に、マクロ・メゾ・ミクロの各段階に要因が存在する）で時に精神医学的に病的な症状を持つ『実存的空虚』の段階にまで悪化させ、かつその生育歴の中で社会的排除に直面し、その過程においてスティグマを自らに内面化した状態」である、と定義される。そして、質的研究の調査結果によれば、その状態は、必ず以下の4つの心理・社会的欠損状態を引き起こしている。すなわち、①希望の喪失、②自我（アイデンティティ）の未形成、③低い自尊感情、④生きる意味の不明瞭性、である。

Giddens の「実存的不安」、及び Frankl の「実存的空虚」のそれぞれの概念に関しては、次章において、改めて詳述するが、前者はポストモダン社会に生きる全ての者が抱えている自分自身の人生や将来に対する漠然とした不安のことであり、それ自体は病的なものではない。後者の一部は、神経症水準の病的状態で、自分自身のアイデンティティと生きる意味を見つけないことができないが故に苦悩する状態であり、Frankl のロゴセラピーの対象とされるものでもある。本研究では、両者は地続きの概念であると考え、「実存的不安」が日々の暮らしの中に埋め込まれたポストモダン社会においては、Frankl がロゴセラピーを実践していた時代よりも人々は遥かに「実存的空虚」に陥りやすくなっており、一般的な神経症がストレスから発症するように、日常生活上に何らかのストレスを抱えた場合、「実存的不安」は「実存的空虚」という神経症水準の病的段階へと移行する。そして、その状態にある人間が、広義の社会的排除の対象となり、スティグマを自らに内面化した時に陥る状態が、「実存的貧困」という極めてパワーレスな状態なのである。このようなパワーレスな状態をより端的に表現すれば、「孤絶」とも言えるだろう。すなわち、社会的に排除されているが故に「孤独」であり、希望を失っているが故に「絶望」している。上田（2005：137）は、「とにかく人間は、すべての苦しみの中で孤立するというのが一番の苦しみなのです。どんなに病気や社会的な問題で苦しんでいても、誰かがその話を聞いてくれて、ある程度共感してくれるということで人は救われる。」と「孤絶」の苦しみを人間にとっての第一級の苦悩に挙げるが、タンパク質を多く含んだ物質でこの実存の飢えが満たされないのは自明であろう。

「実存的貧困」状態は、Lister の「経済的貧困」や「関係的・象徴的貧困」の間に横断的に存在し、「経済

的貧困」とも重なる場合は、「絶望的貧困 (hopeless poverty)」と定義される。三重の貧困状態は、考え得る全ての貧困が凝縮されたものであり、その苦悩は筆舌に尽くし難い。そのような状態にある者が、世の理不尽さを嘆き、自らの苦しみの責任を他者に転嫁させた時、そこに絶望と共に、ほの暗いルサンチマン (ressentiment) が沸き起こる。

Nietzsche (=1993 : 393) によれば、ルサンチマンを持つ人とは「真の反応、つまり行為による反応が拒まれているために、もっぱら想像上の復讐によってだけその埋め合わせをつけるような者ども」であるが、「実存的貧困」或いはより一層悲惨な「絶望的貧困」状態に陥っている者にとって、寧ろそれを内面的な復讐に留め置くことの方が遥かに難しい作業である。その結果、彼らの自暴自棄な「行動化 (acting out)」が、図 2-1, 2-2 に記されたような、種々の「自傷的存在証明 (self-injurious identification)」となって、社会の中で発露する。Nietzsche は、『道徳の系譜』の中で、この類の行動化の原因について、以下の様に述べる。

すべての貴族道徳は自己自身にたいする勝ち誇れる^{ヤー・ザーゲン} 肯定 から生まれでるのに反し、奴隷道徳は初めからして＜外のもの＞・＜他のもの＞・＜自己ならぬもの＞に対して^{ナイン} 否 という。つまりこの否定こそが、その創造的行為なのだ。価値を定める眼差しのこの逆転——自己自身に立ち戻るの^{ナイン} でなしに外へと向かうこの必然的な方向——こそが、まさにルサンチマン特有のものである。すなわち奴隷道徳は、それが成り立つためには、いつもまず一つの対立的な外界を必要とする。

(Nietzsche=1993 : 393)

ここで、Nietzsche は、ルサンチマンを持った「畜群」は、自らではなく、＜自己ならぬもの＞に対して^{ナイン} 否 という必然性を持っていると述べるのだが、アメリカの同時多発テロ事件の場合や、排外的右翼政党や右翼的ポピュリストへの投票行動等は、Nietzsche 風に言えば、愚かな奴隷的「畜群」が、＜外のもの＞・＜他のもの＞・＜自己ならぬもの＞に対して、ルサンチマン故に^{ナイン} 否 と言っているのである、と表現できよう。事実、それらは、彼らなりの酷く醜い創造的行為であり、『承認』をめぐる闘争の破滅的な一形態でもある。

Nietzsche が『畜群』の奴隷一揆という蔑称を用いて指摘したものは、本来自己ならぬものに対して向く必然的な否定による創造的行為である。そしてそれは、もっぱら現実社会ではなく、想像の中だけで卑劣にも行われる、というのが彼の主張であった。「畜群」の奴隷一揆は、奴隷の勇気や意志の欠落故に、自らの留飲を下げるために想像の世界でのみ密に行われ、現実世界では決して起きえないと彼は考えたのである。しかし、「実存的貧困」或いは「絶望的貧困」状態にある者達が Nietzsche 的なルサンチマンを抱いた時、それは彼の想像をも超える事態に展開する。「畜群」の 1 人に過ぎなかったか弱き者が、現実世界において、彼らの所属していた群からも疎外された結果、突如戦慄すべき悪魔へと変貌するのだ。

Nietzsche が「奴隷」「賤民」「畜群」と呼んだのは愚かな一般大衆のことであるが、「実存的貧困」或いは

「絶望的貧困」にある者は、一般大衆というよりも、社会的排除に直面し、彼らから見て更に社会の下層から外側に徐々に押し出されていく「社会喪失者」^{ディザファイリエ}か、既に押し出された「排除された者」^{エクスクリエ}である。従って、彼らが命を賭して行う世界の否定は、リシャール・デュルンの市議会襲撃事件の様に、空想の世界を飛び出て、一足飛びに現実世界においてなされることがままあるのだ。かように激しいルサンチマンの自己破壊的な発現形式が、概ね自殺を伴うインドネシアにおける amok やアメリカの銃乱射事件、そしてオウム真理教やイスラム国 (ISIL) に代表されるテロリズムへの共鳴の本質であり、本研究が「実存的貧困」、「絶望的貧困」概念と併せて提唱する「自傷的存在証明」なのである。自傷の水準が上がれば、当然それは極めて重篤な「他害的存在証明」にまで至る。ただし、いかに重篤に見える他害行為においても、あくまで「自傷」がその行為の本質である、という認識から、名称は「自傷的存在証明」という概念で留めたい。

従来、「貧困」というものは、主に個人の能力や可能性を著しく制約するものとして理解されてきた。だが、「実存的貧困」或いは「絶望的貧困」は、極めて直接的に自らの生命と共同体の安寧の両方を同時に毀損する破滅的なルサンチマンとして、ポストモダン社会に溢れ返っている。彼らのルサンチマンを受け止め得る、新たな貧困概念とその理解、そして、新たな支援の枠組みが今切実に求められているのだ。

「実存的貧困」は、実際は有史以来存在している古い貧困形態である。しかし、社会福祉学的に目立ち始めたのは、やはり近年のことである。「実存的貧困」は、近代（モダン）から後期近代（ポストモダン）への移行、新自由主義の波及・浸透、消費社会の到来という三つのマクロ要因が重なった結果、1970年代後半から急速に世界中に広がり始めた。とりわけ、消費社会が確立し、労働よりも遥かに消費に価値が置かれる西側先進諸国において、その価値観の下で生まれ育った若い世代では、この社会病理の浸潤が極めて深刻に見受けられる。その理由は、改めて次章以降で詳らかにする。

(5) 「実存的貧困」或いは、「絶望的貧困」が最も分かりやすい形で色濃く表れている存在は、日本人の男性の場合、太宰治の『人間失格』の主人公のような自暴自棄な放蕩者やギャンブルや薬物等の嗜癖行為への依存症者、反政府組織の構成員、カルト信者、ヤクザや反グレ等の反社会的勢力、そして、ホストやスカウト、水商売や性風俗業の経営者等反社会的勢力と関係が近い者達、或いは、リシャール・デュルンのように、所謂劇場型犯罪やテロリズム、及びそれに近い凶行を果たした者達である。また、社会的排除の対象となりやすいプレカリアートや長期失業者、生活保護受給者、高齢者、障害者、同和地区出身者、在日外国人、LGBT等の性的マイノリティ、ニート、フリーター、シングルマザー、ひきこもり等にも、一定数「実存的貧困」または「絶望的貧困」状態の者が存在すると推測される。「実存的貧困」の場合は明確な経済的困窮を伴わないため、仮に家族や親類縁者等が経済的に裕福な場合は、当事者のパワーレスな状態が外部からは極めて見え難い。しかし、日本社会において社会的排除に晒されやすい上記のような社会的身分の者達である限り、一見何不自由ない暮らし向きであっても、「実存的貧困」状態に陥っている可能性は常に十二分にあるのである。

その意味で、太宰治は豊かさの中の「貧困」を象徴する存在である。彼の元来の出自自体は富裕層であり、社会的排除とは本来無縁の存在のはずである。ところが、彼は最終的に貧困の極北である「絶望的貧困」に辿り着き、その間多くの同類達と交わる中で、スティグマを着実に内面化し、自分自身で自らの存在を少しずつ社会から疎外していった。まさにその身をもって、「社会を喪失する」というプロセスを完璧に生き切ったのである。

お金が無いことよりも、社会的紐帯が乏しいことに人は遥かに苦悩する。そして、社会的紐帯が乏しいことよりも、自分自身に社会的な存在価値が無いこと、自分の人生に生きる意味を見つけられないことに、尚一層人は耐えられない。太宰の人生が物語る苦悩は、決して贅沢病の類ではないのだ。この苦しみは、「理性的存在である人間（homo logos）」にとって、寧ろ当然の帰結である。

『ヨハネの福音書』には、「はじめにロゴスがあった。ロゴスは神とともにあった。ロゴスは神であった。（中略）そしてロゴスは肉体となり、私達のうちに宿った。」という警句があるが、神無き現代、ロゴス（理性）を持たない人間、人生に意味を見出せない人間に、施しやお金で買える関係を与えたところで詮無きことである。彼らが自身の存在価値を実感することは無く、単に死なないでいる理由が幾つか残っているに過ぎない。その理由を全て失ってしまえば、彼らを社会に係留する舫は全て失われる。後は、時に死をも覚悟した「自傷的存在証明」に縋って刹那的に自己の実存を体感することだけが、彼らに唯一残された、ルサンチマンの解放手段なのである。

自分がこの世に存在していない、「生きている実感」が持てないということに懊悩し、自分を見ようと鏡を覗き込んでもそこにはぼっかりと空いた穴のような虚無しかない、と生前語っていたデュルンとはほぼ同じことを、奇しくも太宰は、『人間失格』の冒頭で、狂言回しの語り手に以下のように語らせている。それは、最後に残された太宰のささやかな矜持ではないだろうか。幾ら私小説とはいえ、惨めな自分自身の内奥を赤裸々に告白はしたくない。敢えて、狂言回しとして実在しない第三者の立場を作り上げ、彼に自身の虚無感の手掛かりとなる三葉の写真を観察させ、数奇な人生と、そこに間違いなく存在したはずの孤独と苦悩を冒頭に読者に想起させるという体を取ることで、間接的に自らの「実存的貧困」及び「絶望的貧困」状態の耐え難い苦しみを伝えようと試みているのであろう。

『人間失格』は、太宰の分身である物語の主人公の姿が映し取られた古びた三葉の写真を、語り手が見比べるところから始まる。少年期、青年期、壮年期と順次語り手がそれらを眺めていくのだが、三葉の写真の変化から、主人公が身に纏う「実存的貧困」が、「絶望的貧困」へと次第に深まっていく様子が、簡潔かつ明瞭に描写されている文章はまさに当事者のなせる業であり、実に見事である。

まったく、その子供の笑顔は、よく見れば見るほど、何とも知れず、イヤな薄気味悪いものが感ぜられて来る。どだい、それは、笑顔ではない。この子は、少しも笑ってはいないのだ。その証拠には、この子は、両手のこぶしを固く握って立っている。人間は、こぶしを固く握りながら笑える

ものでは無いのである。猿だ。猿の笑顔だ。ただ、顔に渋い皺を寄せているだけなのである。(中略)

第二葉の写真の顔は、これはまたびっくりするくらいひどく変貌していた。学生の姿である。高等学校時代の写真か、大学時代の写真か、はっきりしないけれども、とにかく、おそろしく美貌の学生である。しかし、これもまた、不思議にも、生きている人間の感じはしなかった。(中略)しかし、人間の笑いと、どこやら違う。血の重さ、とでも言おうか、^{いのち}生命の渋さ、とでも言おうか、そのような充実感は少しも無く、それこそ、鳥のようではなく、羽毛の様に軽く、ただ白紙一枚、そうして、笑っている。つまり、一から十まで造り物の感じなのである。(中略)

もう一葉の写真は、最も奇怪なものである。まるでもう、としの頃がわからない。(中略)こんどは笑っていない。どんな表情も無い。謂わば、座って火鉢に両手をかざしながら、自然に死んでいくような、まことにいまわしい、不吉なおいのする写真であった。(中略)額は平凡、額の皺も平凡、眉も平凡、眼も平凡、鼻も口も顎も、ああ、この顔には表情が無いばかりか、印象さえ無い。特徴が無いのだ。たとえば、私がこの写真を見て、目をつぶる。既に私はこの顔を忘れている。部屋の壁や、小さい火鉢は思い出すことが出来るけれども、その部屋の主人公の顔の印象は、ずっと霧消して、どうしても、何としても思い出せない。画にならない顔である。漫画にも何にもならない顔である。目をひらく。あ、こんな顔だったのか、思い出した、というようなよろこびさえ無い。極端な言い方をすれば、眼をひらいてその写真を再び見ても、思い出せない。(太宰 2019 : 6-8)

太宰が表現した、自己の人間存在の不明瞭さは、畢竟、本源的ナルシズムの欠損なのである。「重要な他者」を持たない人間の孤独、そして自らの人生に対する自虐的なまでの無関心、フィリアの欠落。人として耐え難い程の存在の軽さ。この小説において、紆余曲折の果てに主人公が自らに「人間失格」の烙印を押したのは、周囲に勧められて入院した療養のためのサナトリウムが、実際は脳病院（現在の精神科病院の閉鎖病棟）であり、その病室の扉に医師から冷たく施錠された時であった。現実の太宰も主人公同様に、家族に騙されて当時脳病院へ強制入院させられているが、その瞬間が、太宰の「精神障害者」としての社会的排除が完成した瞬間であり、徐々に内面化されていたスティグマが、一生消えない刻印として太宰の存在を呑み込んだ瞬間でもある。

曰く、「人間、失格。もはや、自分は、完全に、人間でなくなりました。」。この途切れ途切れの簡潔な言葉が意味するのは、自らが実存の最果てである「絶望的貧困」の状態にあることを、太宰自身が漸く気づき、力無く受け入れた人生の敗北の瞬間なのである。

筆者は、この文章と全く同じ心象風景を同じように稀有な文才で描いた者を知っている。その人間の名前は、酒鬼薔薇聖斗、「神戸連続児童殺傷事件」の犯人、所謂「少年 A」である。彼は、神戸新聞社に送り付けた二通目の犯行声明で、自らを「透明な存在」と表現した。上田も看過できない事象として『生きる意味』の冒頭で取り上げた「透明な存在」という交換可能性を意味する言葉の持つ闇は極めて深い。

ボクがわざわざ世間の注目を集めたのは、今までも、そしてこれからも透明な存在であり続けるボクを、せめてあなた達の空想の中でだけでも実在の人間として認めて頂きたいのである。それと同時に、透明な存在であるボクを造り出した義務教育と、義務教育を生み出した社会への復讐も忘れてはいない。

人間存在への渴望、そして、社会に対する強烈なルサンチマン。1人の人間の「自傷的存在証明」が、かつてこれ程日本社会を震撼させたことはなかったのではないだろうか。

医療少年院、中等少年院を退院した後、2015年、彼は突如としてインターネット上に自らのホームページを開設した。その名称は、『存在の耐えられない透明さ』。この名称が、チェコ出身でフランスに亡命した作家・ミラン・クンデラが1984年に発表した小説である、『存在の耐えられない軽さ』へのオマージュであることは明白であるが、彼という存在は、軽いのではなく、透明なのである。すなわちその存在を軽いと感じることさえできないレベルで、彼は自らの儚い存在感を表現する。つまり、彼にとって自分自身は「透明＝不存在」なのである。彼の「実存的貧困」は、手厚い矯正教育の中でも、更生されることは無かったのだ。そして、出院後も、彼の正体を暴こうというマスメディアや一般市民からの執拗なまでの社会的排除に遭い、複数の職場や街を転々とする生活を送りながら、彼は手記を書き続け、同年、元「少年A」は社会的に大きな物議を醸した『絶歌』を発表する。冒頭で、彼は自らの存在の耐えられない透明さを、太宰と同じような筆致で描くのである。

全員出揃ったところで、教室の片隅に眼をやってみてほしい。ほら、まだいたではないか。あなたが、顔も名前も思い出せない誰かが、自分と同じクラスにいたことさえ忘れていた誰かが。勉強も、運動もできない。他人とまともにコミュニケーションを取ることもできない。教室に入っても彼のほうを見る者はいない。廊下でぶつかっても誰も彼を振り返りはしない。彼の名を呼ぶ人はひとりもない。いてもいなくても誰も気付かない。それが僕だ。どの学校のどのクラスにも必ず何人かはいる、スクールカーストの最下層に属する「カオナシ」のひとりだった僕は、この日を境に少年犯罪の「^{カオ}象徴」となった。（元少年A 2015：7）

元「少年A」が『絶歌』で自身の心情や当時の状況を語ったことに関しては、無論多くの批判が寄せられたが、手記として永山則夫の『無知の涙』や加藤智大の『解』同様に、そこに病跡学上一定の価値は認められる。少なくとも、事件を起こした当人が、多少は記憶のねつ造や、自己の行動への美化や脚色を施してあるにしても、根底に自身を誰かに理解して欲しいという「実存的貧困」者特有の過剰な承認欲求がある以上、概ねその心情には、無駄な嘘偽りは無いと思われるからである。元「少年A」も、太宰の『人間失格』の文

章を引用する等、「社会に居場所が無い」という彼らの共通項を正確に認識しており、その事実は本研究の主張を裏付けるものともなっている。

ポストモダン社会の進行、そして消費社会の成熟と新自由主義と市場原理主義に基づく「万人の万人に対する闘争」が確立し、Giddens の提唱する「実存的不安」は人々の間で一層強まっている。それが、Frankl が指摘した「実存的空虚」に発展し、社会的排除の果てに「実存的貧困」や「絶望的貧困」に陥るのは男性だけではない。寧ろ、全世界規模で「貧困の女性化」が加速している以上、日本社会の「失われた 20 年」の間に、ある意味男性以上に、日本の女性達の間で生きづらさが募っている。男性に比べて遥かに安い賃金、男性に比べて幅の狭いキャリアパス、自由や安全を求めて離婚した女性を待ち構えているシングルマザーの貧困の罠。とにかく日本社会において、女性であるというだけで、彼女達は男性よりも遥かに生きづらさに直面し、人生において常に様々なリスクを抱えることになる。

また、消費社会においては、何を消費したかによって即時的にその人間の価値が決まる以上、自らの承認欲求を満たすためには、自分自身の消費にまつわるライフスタイルを、事細かに SNS 等を介して外部に発信していく必要がある。消費の痕跡を残せない人間は、この世界に存在しない人間と同義であるからだ。

既に優れた消費者として社会的に認知されており、その結果十分に自我が確立している者にとっては極めて滑稽な行為に映るが、過去に「重要な他者」から満足に受容されなかった女性達は、過剰な承認欲求の塊とでも言うべき存在となっており、軒並みポストモダン社会の新しい自己承認のツールである SNS の Instagram, Twitter, LINE, TikTok などのお手軽なスマホアプリの虜になっている。それらを用いたセルフプロデュース（流行語大賞にも選ばれた「インスタ映え」）、更に、美容整形、ダイエットやエステ、ブランド品の購入やホストクラブでの浪費、敷居が下がった自称アイドルに過ぎない地下でのアイドル活動、AV 女優としての作品制作、そしてその他、多種多様な性風俗産業を通じた男性とのやり取りは、全て「自傷的存在証明」の可能性を孕んでいる。SNS やブログでの炎上覚悟の投稿等も、承認欲求に根差す同根の行動であらう。

SNS を通せば、即時にイイね！の数やフォロワー数で、自分の価値が明確に数値化されて確認できる。そして、男性に体を売れば、自分の女性としての存在が承認されるに留まらず、新自由主義における万能の神である金銭、すなわち貨幣価値によって、自身の市場価値を即時的に容易に知ることができる。だが、ポストモダン社会の「実存的不安」を解消するために、「性の商品化」が進み、女性が行うことができる承認欲求を満たす手段が男性以上に豊富であることに彼女達が気付いてしまった以上、それを使いこなせない女性達にとっても、使いこなさず、競い合っている女性達にとっても、結局生きづらさは倍増してしまう。何故ならば、先述の通り、我々は、自己を確立するために、必ず鏡となるべき第三者、他者を必要とするからだ。自分とは、常に他者の鏡像としての存在に過ぎず、他者の存在無しに我々の自我が単独で確立することはありえない。そして、新自由主義が波及・浸透した社会においては、他者という鏡は万華鏡のように、自己を乱反射させる。新自由主義によって経済格差が拡大した現代において、鏡は上から下まで数えきれない程の

枚数が揃っており、その結果、マスメディアやインターネットを介して際限のない他者と自己の比較が、ポストモダン社会を生きる我々の人生に埋め込まれてしまっているのである。溢れる消費情報に振り回され、同世代との上方比較と下方比較を繰り返しながら、彼女達は日々一喜一憂しているが、その結果、ありのままの自分が一体何者なのか、彼女達はもはや自分でも分からなくなっている。否、ありのままの自分では足りず、精一杯「盛った」自分を、目に見える消費行動の形で外部に発信する作業を通して表現しなければ、消費社会においては人間として不適格の烙印を刻まれてしまいかねない。従って、男性以上に生きづらさを抱えた女性達は、現代社会において、より一層「承認」への渴望を抱え、結果的にストレスから嗜癖行為等に陥りやすいのである。

更に、若い女性に与えられる期間限定の価値ある「女子高生（JK）」「女子中学生（JC）」という記号が、性産業における市場価値という点で激しい女女格差を生み、日本の女性社会を分断している。2000年代に秋葉原で「JK ビジネス」と称される業態が現れる以前から、宮台が指摘するように、都市部を中心に、うら若い女学生は既に特別な存在になっていた。買春男性達にとって、「シンボル（象徴）」としての女子高生（JK）や女子中高生（JC）は、「ただ、存在しているだけで十分に価値のある存在」なのだった。彼女たちが、100均から買ったショーツは、たった30分履いただけで1万円以上の市場価値で取引された。それまで無価値だった女子高生（JK）や女子中高生（JC）の唾や尿、糞便にまで、全てを貨幣価値に換算する新自由主義政治経済システムは、十分な金銭的価値を付与した。

その結果、日本社会における価値と倫理の体系は糜爛し、本来消費能力が乏しいはずの若い女性達が、一躍消費社会の中心に踊り出た。それは、Baumanが指摘するように、消費社会における人間としての適格性の証明である。その結果、本来は圧倒的に男性が優位である社会の権力構造に歪みが生じ、本源的ナルシズムが確立する前に、多くのまだ年若い女性達が、自己愛の異常なインフレーションを、実体験や他者を通してのシミュレーションにより経験してしまった。女性性が貨幣価値を持つ社会においては、プライドさえ捨ててしまえばお金は簡単に手に入る。そして、一度上がった生活水準を戻すことが極めて難しいように、一度体験した「選ばれてあることの恍惚と不安」は、嗜癖行為のように体に染みついて忘れることがなくなる。従って、やがて歳を取り、「存在しているだけで価値があった」新自由主義社会における自分の女性としての市場価値が暴落したことに気付かされた時、未成熟なまま肥大した自己愛はそれを素直には受け入れられない。ダイエット、美容整形といったコンプレックスビジネス産業は、彼女たちに一時の自己満足を与えることができるが、彼女達の人生の時計の針を止めることはできない以上、女性達に「実存的貧困」が蔓延してしまうのは、現代日本では当然なのである。

実際、「メンヘラ」というインターネットスラングで語られる、情緒不安定で自意識過剰な所謂「イタイ女性」達が明らかに増加傾向にある。「ミス iD」という、メンヘラであること、或いは異端であることをかけがえの無い個性として認め、それを競い合う講談社主催の大規模な女性タレントのオーディションまで誕生し、今や人気芸能人への登竜門となっている。「ミス iD」に応募する女性の中には、単なるひきこもりやメ

ンヘラというレベルから、少年院に入っていた者や自殺未遂を繰り返した者、自分の実の父親に性的虐待に遭ったという凄絶な過去を赤裸々に語る者までいる。女優、モデル、アイドルから、キャバクラ嬢、風俗嬢、SM嬢、AV女優等、生きづらさを抱えた女性達が、自分自身の不確かなアイデンティティ (iD) を審査員に向かって必死にアピールするのだ。まるで、「壊れ物の私達を、どうかこの世界の片隅に在るがままの姿で居させて下さい」と懇願しているかのように。

「実存的貧困」に陥りやすい存在として、既に男性の集団については述べたが、女性の場合に目を移すと、搾取される存在、或いは被害者という特性が男性以上に際立ってくる。自暴自棄な放蕩者や薬物等の嗜癖行為への依存症者、反政府組織の構成員、カルト信者等は男性集団の場合と同じだが、ヤクザや反グレ等の反社会的勢力そのものというよりは、彼らのパートナー、或いは、時に彼らに性的にも金銭的にも搾取される存在であるキャバクラ嬢やホステス、風俗嬢、AV女優等、反社会的勢力と関係が近い「夜」や「風」の世界の住人達が主な集団として挙げられる。また、それらの予備軍である非行少女、家出少女やパパ活、援助交際等を行う一般子女やシングルマザーも一定数「実存的貧困」状態として存在する。加えて、社会的排除の対象となりやすい長期失業者、生活保護受給者、高齢者、障害者、同和地区出身者、在日外国人、LGBT等の性的マイノリティ、ニート、フリーター、ひきこもり等も男性同様にリスク集団として規定できるであろう。

一方、リチャール・デュルンに代表されるような大量殺傷事件や大規模テロリズムの実行犯に女性は少ない。インドネシアにおいて、**amok** が主に男性が罹患する風土病として規定されているように、女性は社会に対する破壊的行為を行うよりも、寧ろ家族や恋人などの身近な存在、そして何より自分自身に対してそのような破壊衝動が向けられている。つまり、より一層「自傷的」なのである。

既に述べた通り、本研究では、これらの集団のうち、キャバクラ嬢やホステス、風俗嬢、AV女優等の性風俗産業への従事者を主な調査対象として質的・量的調査を行った。何故ならば、その集団の中に、既に嗜癖行為への依存者、障害者、在日外国人、ニート、フリーター、ひきこもり、長期失業者、生活保護受給者等の社会的マイノリティが相当数含まれており、かつリストカットや性的逸脱、美容整形依存、過食嘔吐、大量服薬等、文字通りの「自傷的存在証明」を行っているのが、修士課程時のフィールドワークから傍目にも明瞭であったからだ。

(6) 彼女達性風俗産業の従事者が抱えた生きづらさを体現し、「実存的貧困」に陥っていた女性の一つの典型例として、東電OLの人生をやはりここで改めて少し掘り下げて考察してみたい。そして、彼女の物語を敷衍すれば、性という営みに「実存的不安」や「実存的空虚」から逃げ込む女性達の姿が浮かび上がる。恐らく、決して少なくない性風俗産業の従事者が、「実存的貧困」或いは「絶望的貧困」の状態に陥っていると推測される。何故ならば、宮台（1998：164）が「宗教と性は、人間の『全面的包括要求』に答え得る」という意味で、機能的に等価である」と指摘しているように、自らのアイデンティティに苦しむ女性にとって

は、性を媒介とする男性との接触は、明らかに男性による性的搾取の側面があるにも関わらず、虐待等によって傷ついた本源的ナルシシズムが満たされ、癒される瞬間でもあるからだ。そしてそれは、彼女達を性的な商品として利用する「実存的貧困」状態に陥っている男性達にも同様に言えることである。

太宰の『人間失格』の主人公が、第二の手記の中で次のように語る箇所は、宮台の指摘する「全面的包括欲求」をいかに両者が、自らの本源的ナルシシズムの欠損を癒すために利用し、傷付き合いながらもお互いに求め合っているかの証左である。

自分には、淫売婦というものが、人間でも、女性でもない、白痴か狂人のように見え、そのふところの中で、自分がかえって全く安心して、ぐっすり眠る事ができました。みんな、哀しいくらい、実にみじんも慾というものが無いのです。そうして、自分に、同類の違和感とでもいったようなものを覚えるのか、自分は、いつも、その淫売婦たちから、窮屈でない程度の自然の好意を示されました。何の打算も無い行為、押し売りでは無い好意、二度と来ないかもしれぬひとへの好意、自分には、その白痴か狂人の淫売婦たちに、マリヤの円光を現実に見た夜もあったのです。（太宰 2019 : 47）

ノンフィクションライターの佐野は、太宰が淫売婦に見たある種の聖性を、彼がライターとして追いつけた、東電 OL・Y.W.の生き様に認めている。佐野は、彼女を「ブラックマリア」と表現した後、外国の編集者に彼女の二重生活の理由を問われた際、次の様に答えたのである。

彼女が売春していることは、職場も家族も知っていた。にもかかわらず、職場も家族も彼女に『出て行け』とはいわなかった。彼女は職場のなかでも家族のなかでも、たぶん生きているという実感が得られなかったと思います。職場からも家族からも見捨てられていわば宙づりになった彼女にとって、ただ売春しているときだけが、生きていることを実感できたんじゃないでしょうか。（佐野 2003 : 203）

生の実感の欠如。それ故に、会社においても、家庭においてもアウトサイダーになっていた、つまり社会的排除の対象になって「社会を喪失する^{ディザファイリエ}」というプロセスを生きていた東電 OL は、自らの「実存的貧困」を癒すために性に縋った。いや、縋る他なかったのである。しかし、その行為によって玉響、彼女が生きている実感を得たとしても、売春という行為は更なる社会的排除を彼女に実感させ、徐々にスティグマを内面化させたはずである。「実存的貧困」が彼女を捉え、次第に深い闇に引きずり込んで行ったのは想像に難くない。そして、遂に悲劇が訪れることになったのだ。今なお多くの謎を残しながら。

本項では、以下に現代の「マグダラのマリア」の足跡を詳細に辿る中で、彼女が抱えた「実存的貧困」を

太宰同様に考察して、豊かさの中で貧困に陥ること、パワーレスな状態になるとはいかなることであるかを改めて理解したい。

「東電 OL 殺人事件」は、1997 年に発生した東京電力の幹部社員だった女性が、東京都渋谷区円山町にあるアパートで殺害された未解決事件である。当時アパートに出入りし、かつ殺害された被害者女性と何度か肉体関係を持ったことがあるネパール人男性が容疑者として逮捕されたが、後に冤罪として無罪判決を得た。

被害者女性は、慶應義塾大学経済学部を卒業した後、東京電力に初の女性総合職として入社した社員であったが、後の捜査で、退勤後は円山町付近の路上で客を勧誘し毎日のように売春を行っていたことが判明する。昼は大企業の幹部社員、夜は性風俗の世界でも最も危険で最底辺の仕事と言われる街娼という二重生活を長期間に渡って送っていた。彼女と関係を持った男性達の証言によれば、その体躯は異常にやせ細っており、摂食障害が強く疑われた。また、売春の前に必ずアルコールを飲み、あるホテルでは何度も居室を糞便で汚したこともあり、ホテルを出入り禁止になるなどの問題行動や数々の奇行を繰り返していた。資料となる彼女の手記や日記は残っていないため、彼女の心情や行動は当時の新聞報道やその後のノンフィクション書籍によってしか窺い知ることはできないが、佐野の『東電 OL 殺人事件』、『東電 OL 症候群』、酒井の『東電 OL 禁断の 25 時』の 3 冊のノンフィクション、及び精神科医の斎藤学が『家族の闇をさぐる一現代の親子関係』の中で東電 OL を取り上げた部分を基に、以下に彼女が「実存的貧困」をその人生で体現して生きていたことを示したい。

東電 OL の詳細な分析に入る前に、改めてもう一度、「実存的貧困」の定義をここで振り返るが、それは、「心理学的な『内的作業モデル (IWM)』の欠陥を抱え、非物質的な困窮状態を抱えた者が、ポストモダン社会特有の『実存的不安』を、何らかの要因で『実存的空虚』の段階にまで悪化させ、かつその生育歴の中で社会的排除に直面し、その過程においてスティグマを自らに内面化した状態」であった。そして、その状態は、必ず以下の 4 つの心理・社会的欠損状態を引き起こしている。すなわち、①希望の喪失、②自我（アイデンティティ）の未形成、③低い自尊感情、④生きる意味の不明瞭性、である。

では、本項のまとめとして、この定義を東電 OL が完全に満たしていることを、彼女の成育歴を振り返りながら考察してみよう。

最初に、「内的作業モデル (IWM)」の欠損であるが、彼女は、東大卒の父親に溺愛されて育ったものの、一方で、日本女子大卒で専業主婦の母親を蔑視していた。母子関係は、極めて希薄かつ疎遠である。大企業である東電の重役の一步手前まで進んだ忙しい仕事人間の父親が、彼女の幼き日に多くの時間を共にしたとは到底考えられない。W 家待望の長女である彼女にとって、「重要な他者」は当たり前のように専業主婦である母親が担うべきはずだったが、彼女にとって母は寧ろ憎悪の対象であった。実際、彼女の母親を貶める言説は幾つか記録に残されている。母親が、うっかり彼女がスクラップしていた日経新聞の記事を捨てた際は、「あの人はバカだから、記事の価値が分からない」と言い切ったという。また、同僚に対して、「東女（東

京女子大)の女は気が強い」という言葉で妹との関係の悪さも語っていた。つまり、彼女にとって肉親は、彼女の大学時に早世した父親以外、心の通う存在では無かったのだ。

精神科医の斎藤は、佐野との対談の中で、家族療法家・精神分析医の視点から、東電 OL とその家族との歪な関係性を下記のように指摘する。

彼女の売春行為は、母妹という二者連合に対する攻撃だったと思いますね。自分が亡くなったお父さんと結びついている。だから本当は男性連合のはずなんだが、それには自分の身体が邪魔だった。だから一石二鳥ですね。売春するということは、母いじめにも役立つし、自分の身体をぼろぼろにするのにも役立つ。これの軽い形は、ふつう摂食障害、拒食症という形でやってくる。渡辺さんもそうだったようですが、日本のごく一般の少女たちのなかにもありふれた形で存在する。この人たちのなかには、自分の体をぼろぼろにするために、売春などというまどろっこしい方法をとらない人もたくさんいる。煙草の吸いかけを自分の腕に押しついたり、カッターナイフで腕を切ったり……。 (佐野 2003 : 312)

「内的作業モデル (IWM)」をポジティブに構築するのに必要な「重要な他者」は必ずしも母親である必要は無いが、幼い頃当然のように育児を担っていたであろう専業主婦の母親からは、彼女は長じて後明確に心的距離を取り、その一方で彼女を溺愛する父親に対しては異常なまでの心的一体化を行っていた。そして家庭内で父親と母親の関係が悪化する過程で、父母同様にほとんど口もきかなくなるまでに至ったという母娘の関係は、佐野や斎藤が指摘するまでもなく、やはり正常な家族関係ではない。ここに、東電 OL の「内的作業モデル (IWM)」の明確な欠損を見て取れる。彼女にとって、最も身近な存在であるべき母親は、彼女を無条件に愛してくれる存在ではなかったのである。以下の佐野の記述からも、母娘の心理的断絶が極めて深かったものと推察される。

ここではじめていうが、私は彼女の母親に、「お母さん、売春婦となった娘さんをどうか抱きしめてやってください。全部肯定してやってください。あなたが肯定してやらなければ、一体、誰が彼女を肯定してやれるんですか」という気持ちだけは、どうしても伝えておきたかった。他人のあなたなんかは何もわかるわけがないといわれるに決まっているだろうが、彼女のことを血を分けた肉親のように感じて書いている人間がいることだけは理解してほしかった。そう思い、私なりにあったけの真情を綴った母親宛ての手紙を何通も出したが、結局、返事はこずじまいだった。(佐野 2003 : 326)

事実、母親からあるがままの自分を愛されなかった彼女は、39 歳で殺害されるまでの間、父親以外の男性

を真剣に愛した形跡が無い。また、家族以外の人間関係も総じて希薄であり、彼女が抱えたコミュニケーションの機能不全は、広汎性発達障害を疑わせる程に独りよがりで、未熟である。東電でも、出向先でも、彼女の扱い難さは有名であり、数々の奇行が伝えられている。その結果、彼女は人間関係において完全に孤立しており、早世した父親以外に、彼女の周囲に「重要な他者」はただの1人も見受けられないのである。彼女が、その疾患の背景に家族内のコミュニケーション不全があると指摘される摂食障害に長く苦しみ、殺害された頃には肋骨が浮き出る程の重度の痩身になっていたのは、決してその希薄な人間関係と無関係ではないだろう。

斎藤は、摂食障害を含めた様々な嗜癖行動・依存症患者を生み出す機能不全家族を描いた『家族の闇を探る』の中で、「母を蔑む娘たち」という一章を設けているが、これはほぼ全て東電OL論と言っても差し支えない内容である。そして、彼女（E という名前で描写される）に対して、秀逸な精神分析を以下のように展開する。

（中略）〈……突然に喪失した愛着対象は、その喪失を嘆く人に取り憑く。失った「愛する人は様々な形で、それを嘆く人に取り込まれ、その人の一部になる。（中略）フロイトはこれを「喪った対象の亡霊は自我にうつる」と表現している。（中略）……E もまた、様々なところに父を取り入れたはずである。E が「仕事半ばに倒れた」父の遺志を継いでいるかのように見えたというのは、そのとおりだと思うが、もしそれが E 自身に意識されていたとしても、それは意識されない他の無数の父・同一化の中の「安心して意識できる一片」に過ぎなかったろう。「安心して意識できない」ものは、無意識（という名の、もうひとつの意識）の中で蠢き、その人の行動を支配する。これらの中には異性の親への性的愛着があるし、同性の親への敵意と攻撃もある。父への性的愛着が、父のような男性との性的接触として強迫的に反復されるという頻繁に見られる現象は、女の子の「人形遊び」のひっくり返しと考えることができる。女の子は、自分が可愛がられたいように人形を可愛がる。自分に対して性的に接触してくる人形（男）を介して、父を愛する娘は父になる〉

（中略）

〈父の死の直後、E は「妹は幼いし、これからの我が家は私が背負わなければならない」と友人にもらしたそうである。そこには父に代わって娘たちを保護するはずの母が見えない。「母は無能で子どもと同じ」と E は考えたのであろうか。（中略）E は母と口もきかなかった。おそらく亡き父もまた、E とは語り、母とは話さなかったのかも知れない。その父と母とは父の死の前から感情的に冷えていたのかも知れないし、それを E は「母がいけない」と思ったかも知れない。すべては推測に過ぎないのだが、摂食障害女性の多くから、このような母批判を聞くことは確かである。（中略）E は稼げない母に家事を任せて、自身が会社オヤジになることを目指した〉（斎藤 2001 : 98）

東電 OL は、父親という愛着対象を人生の早期に喪失することで、父を自身に取り込み、完全に内面化してしまった。その結果、東電 OL は、自分の人生というよりは、自らに同一化した父親の人生を必死に生きようとしたのではないだろうか。東電に入社した時、彼女は「父の名に恥じないよう、精一杯頑張ります」と上司に挨拶したとされるが、それは重役に成れなかった父の無念を晴らすという、彼女の断固たる決意の表れだったと思われる。

しかし、父の軌跡を過剰なまでに辿ろうとする営みは、やがて直ぐに頓挫した。男女雇用機会均等法の施行を受けて、東電に女性として初めて採用された総合職であった彼女には、同期入社でライバルとされる父と同じ東大卒の女性幹部候補生がいたのだが、彼女はその女性とハーバード大学留学の社内推薦枠の座をかけて争い、敗れている。この蹉跌は、彼女の摂食障害を悪化させた一因ともされる。

また、直ぐに彼女は東電のグラスシーリングにも直面することになった。当時、初めて採用した女性幹部候補生を、東電自体が将来的にどのように扱ってよいものかはっきりせず、女性総合職の存在を明らかに持て余していたのだ。結果、他の男性総合職が辿るであろうキャリアパスとは明らかに違う道を、理不尽にも彼女は女性であるという理由だけで呈示された。同期の東大の女性は、東電のそのような女性への蔑視体質を敏感に感じ取り、寿退社という形で東電からいち早く身を引いた。だが、彼女は、左遷に近い形で関連の子会社に出向させられても、東電の社員として会社に尽くす道を選んだ。それに対して、口さがない上司や同僚達は、ライバルの女性同様に、彼女が早く寿退社することこそが、東電に対する最大の貢献であるかのように仄めかしたという。東電という、父が命尽きるまでその身を捧げた大企業は、彼女に対しては極めて冷たい保守的な組織であったのだ。

父のように生きようと欲する彼女に対して、東電は父とは異なる 1 人の女性社員として生きることを要求した。しかし、彼女は、あくまで父の無念を晴らすために、同一化した父の人生をそこで必死に生き切ろうとした。組織のグラスシーリングに露骨に阻まれても、彼女は女性として結婚に逃げる道を是とはしなかった。結果、彼女は、本当の自分自身というものを見失ってしまったのである。何故ならば、父と同じように出世できない自分は、彼女が考える自分自身の理想の姿から、大きく乖離しているからだ。もがけばもがく程、家族内と同様に、東電という組織においても、彼女は居場所を失っていった。彼女が所属していた部署では、家族同様、全員が彼女が売春をしていることを知っていたというが、そのような四面楚歌の状態を自分自身で作り出しておきながら、それでもなおその場に留まり続けた彼女の精神状態は、マゾヒスティックの極みであり、例えそれが無意識的な周囲への攻撃であったとしても、やはり常軌を逸している。

かくして、家庭においても、職場においても、私生活でも、幾重にも重なった抑圧と疎外故に、彼女の「実存的不安」は、「実存的空虚」に達した。アルコールへの依存や摂食障害は、その神経症的症状の身体への表れである。単に家庭にも会社にも居場所が無いだけでなく、東電の社内では寧ろ、彼女は仕事ができない部類の評価であったとも言われている。左遷先ともいわれる子会社でも、仕事内容、人付き合い共に評判は著しく悪く、本社からの出向である以上無下にも扱えないため、あたかも腫物のような状態で敬遠され、食事

もほとんど1人で採っていたとされる。

こうした彼女の人生から浮かび上がってくるのは、極めて色濃い孤独と実存的苦悩である。大きな期待を抱いて、父と同じ道を歩んだものの、結果的に誰からも必要とされない存在となった彼女は、自分を唯一受け入れてくれた父親の幻影を追って、29歳の時、渋谷のクラブホステスとなり、その後は父親ほど歳の離れた男性達との売春行為に溺れていく。例え家庭人や社会人としては不適格であっても、せめて1人の女性としてくらは、誰かに受け入れて貰いたい、という切なる願いがその行動の背景にあったのではないだろうか。同時に、三十路を迎え、日々色褪せていく女性としての自身の魅力にも焦りも感じていたであろう。事実、彼女は何人かの常連客に対して、実際はセックスが好きではないことを告白している。曰く、休日朝、ベッドの中で1人行う自慰行為が、彼女が最も性的に満足を得られる行為なのだった。従って、彼女が仮に性依存症であったとしても、性行為自体に快楽を求めている訳では無いことは明らかである。また、彼女は外国人や貧困層の客に対しては、2,000円から5,000円という、考えられないような安値で自分を売っていた。当時、年収が1,000万円を超えていた彼女が、金銭目的で売春を行っていたというのも、以上の事実から極めて考え難い。彼女が求めているものはお金ではなく、あくまで男性からの実存的肯定であり、1人の女性としての「承認」だったのではないだろうか。Honnethの承認論で考えれば、最も欲したに違いない「連帯による承認」は、東電という組織からは得られなかった。そして、「法による承認」は売春という違法行為からは絶対に得られない。従って、彼女が売春行為に縋っていたのは、実の家族からは得られない「愛による承認」を、売春関係にある男性達から疑似的に得たいが為だったのだろう。

それを裏付ける幾つかのエピソードがある。例えば、客との私的なやりとりである。普通、売春婦や風俗嬢は、幾ら親しい常連客に尋ねられても詳しい身の上話はしないものだ。後々、身分が判明して、脅迫や、ストーキングの切欠を相手に与えてしまう可能性があるからだ。まして、彼女のように大企業の幹部候補生であるならば、なお一層身上に関しては慎重であるべきで、自身の秘密を守るのが当然である。しかし、実際、彼女の行動は全く逆だった。いかに東電が素晴らしい会社で、電力が国家にとって重要な客に対して滔々と説き、しばしば客と経済談義に花を咲かせ、自らの経歴や父親の経歴についても、隠すことなく延々とベッドの中で語り続けた。まるで、それだけが、彼女に唯一残された最後の誇りであり、人生における^{レーゾン}存在^{・デートル}意義であるかのように、である。

結局のところ、暫時女性として認められるだけでは、彼女の承認欲求は満たされなかったのである。彼女が真に心から求めているのは、やはり「連帯による承認」、すなわち東電に属するエリートOLとして、他者から尊敬の眼差しを向けられることだったのだろう。だが、哀しいかな、多くの男性客にとって、そのような彼女のプライドは、全くもって無意味に見えたに違いない。単なる性的存在としてしか「承認」されない虚しさ、或いは、売春婦としてもコミュニケーション力の問題と年齢的限界から最下層の街娼に落ち、更に、歳と共に客の取れない現実を突き付けられる日々の不安と恐怖が次第に彼女の精神を追い詰め、苦しめていたのは間違いない。

2001年2月4日、東京・浅草のすみだリバーサイドホールで「シンデレラ物語の裏側——東電 OL 殺人事件を読み解く」というシンポジウムが開かれた。第2部では、佐野、斎藤と一緒に作家の田口ランディがパネリストとして登壇し、東電 OL に対する彼女の理解を鼎談の中で語ったが、以下の田口の言葉は、ある意味、この事件の本質を見事に突いている。

私が彼女の死に様から何を受けとったかという、あのお部屋で一人で亡くなられて、やはり「私は働いて死んだのよ」という、要するに労働して死んでいるわけですよね、労働して「死ぬまで働いた」、まずそういうメッセージとして受けとったんです。それから「誰からも愛されなかった」、「すごく孤独だった」、「私は汚い」という四つのメッセージをあの死に様から感じました。そのことをいうために、ああやって亡くなったんじゃないかと思うくらい、きちんとしたメッセージとして受けとったんです。（佐野 2003 : 369）

作家である田口は、ジャーナリストの佐野のように足で情報を稼いだり、斎藤のように精神医学的な難解な分析を行った訳ではないが、同じ女性であるが故か、寧ろ、彼ら以上にこの事件の本質である彼女の孤独と苦悩を見事に掬い上げている。最下層の売春婦という状況に置かれた時、プライドの高い彼女は、恐らく女性としての誇りすら失いかけていたであろう。しかし、田口が指摘したように、彼女は労働の末に死んだのである。本望では無かったかもしれないが、売春は、東電で認められなかった彼女の労働者としての誇りを取り戻すための、「行為における主体性」だったのである。一時肌を重ね合うだけであっても、彼女にとっては、その行為はかけがえの無い他者からの「承認」だったのである。その一方で、変装や化粧をして、東電で働く彼女とは違う姿で客を取ったように、彼女自身、売春という行為に後ろめたさを感じ、自らを汚らしい存在と認識していたのではないだろうか。社会的排除の対象として、性風俗に従事する女性達に注がれる社会の目は冷たい。それを肌で感じ、知らず知らずのうちに自らをスティグマタイズした結果が、衛生的な普通のラブホテルで普通の客を取るのではなく、外国人や貧困層の客に対して極めて安価に自身を売り、時に路上で、時に車の中で、そして時に最後に殺害された、廃屋のような汚らしいアパートでまで情事に及ぶという自傷的な性の営みに繋がったのであろう。

「こういう人たちは、私のクリニックにいっぱい来ていますし、ここにも来ていらっしやると思います。そういう人たちに、『なんで自傷行為をするんですか』と聞いても、『自分じゃよくわからない』『やらないと気持ちが悪い』というだけです。この自傷行為は時には自殺にも行く。渡辺さんの場合は、たいへんに手のこんだ『慢性の自殺』だったともいえます。彼女は加害者を待っていたんじゃないかな。私はそう解釈しているんです」（佐野 2003 : 382）

斎藤は、東電 OL・Y.W.の自傷的な生き様を上記のように解釈する。彼女が本当に自分を殺してくれる加害者を救いとして待っていたのかは、もはや誰にも分からない。しかし、彼女の生き方が、極めて自傷的であったことに関しては、誰にも異論は無いはずだ。そして、まさに彼女が死をもって体現したその「自傷的存在証明」が、飢餓的なまでに愛に飢え、「承認」を求め続けた1人の不憫な女性が陥った「実存的貧困」の末路なのである。そして、それは今、単に彼女1人の孤独ではない。成人女性の20人に1人といわれる風俗嬢や、その周縁に位置する女性達の多くが抱えている、決して誰とも分かち合うことができない類の魂の孤独なのである。

第2節 社会福祉の新しい支援対象としての「性風俗産業従事者」

第1項 日本における「アンダークラス」と社会的排除

(1) 小泉構造改革に代表される急速な新自由主義政治経済システムが1980年代以降の日本で推進され、その中で、日本社会の経済格差は1990年代のバブル崩壊以降、年々過去に例が無いほどの拡大が続いている。とりわけ、近年欧米でしばしば社会の不穏分子やお荷物として取り沙汰される「アンダークラス」に近い貧困層が、かつて「一億総中流」と称されていた日本社会にも誕生し、少子高齢化によって人口が減少し続けているにもかかわらず、2025年にはその数は、1,000万人を超えると推定される。近年、日本社会に急速に形成されてきたこの異常な経済格差と人口動態を指して、橋本(2018:15)は、既にこれは、「格差社会」などという生易しいものではなく、日本に誕生した新たな「階級社会」とであると表現するが、その指摘は概ね正鵠を得ている。

新自由主義が推し進めた労働市場の規制緩和は、日本社会に大量の非正規労働者を生み出した。現在日本の労働市場において、身分が極めて不安定で、かつ、安価な労働力である非正規雇用は、労働者の実に4割弱を構成するに至っている。非正規雇用労働者の増加に伴って「相対的貧困」を示す日本の貧困率は上昇を続け、1985年に12.0%だった貧困率は、2012年には16.1%に達した。人口に貧困率をかけた貧困層の数は、1,400万人から2,050万人にまで増えたことになる。2015年の最新の統計によると、貧困率は15.6%とわずかに下がったが、今後もまずこの数値は高止まりするとみていいだろう。ちなみにひとり親世帯(約9割が母子世帯)の貧困率は、50.8%にまで達している。これは、世界的に見ても最悪の数字と言っても過言ではない。全世界で深刻化する所謂「貧困の女性化」は、日本社会にも様々な形で、極めて顕著に表れているが、シングルマザーの貧困はその最たるものである。

大量の非正規労働者が登場し始めたのはバブル経済末期の1990年頃からだ。その頃、まだ20歳前後の若者だった非正規雇用第一世代は今や50代前後に到達した。そして、大学生の就職率が6割を切っていた就職氷河期の大卒者の一部が非正規雇用のまま働き続け、あと十数年すれば順次60代になる。当然、彼らの中には年金を受給できず、生活保護を受けることが確実な者が多く存在するだろう。そして、彼らのような、労働者階級の中でも更に下層に位置し、社会から白眼視される者達、すなわち、ほぼ最低賃金で働いているワーキングプア、或いは、その能力すら無く、労働市場から弾き出された生活保護受給者やホームレス、障害者・高齢者などの貧しい年金受給者、幼子の育児の足枷故に働けないシングルマザー、社会的にいかがわしい仕事に就いている不安定就業者(その最たるものが歓楽街での飲食・接客業、または性風俗産業従事者である)、そして、親世代に経済的に寄生するニート、ひきこもりなどの無業者が形成するのが、現代日本の「アンダークラス」であり、スティグマを背負った下層階級である。

「アンダークラス」という言葉が初めて用いられたのは、スウェーデンの経済学者・Myrdalの著作『豊かさへの挑戦』であるとされる(Myrdalは、under-classと間にハイフンを入れている)。(橋本2018:51)

しかし、この言葉が人口に膾炙し、一般人が目にする形で初めて定義されたのは、アメリカの著述家、Auletta の一連の著作物においてであり、その意味するところは、自らが暮らす社会のメインストリームに参画しない人々のことであった。Seabrook (=2009 : 128) は、「アンダークラスは貧困と全く同じというわけではないが、社会生活の混乱、すなわち、犯罪行為、教育や仕事からの脱落、安定した人間関係の破綻などと結びついている」と指摘する。実際、現在欧米で「アンダークラス」というこの極めて粗野な言葉が用いられる文脈において、多くの場合、そこには単なる貧困に向けられる以上の侮蔑と憐憫、そして敵意が込められている。それは、労働者階級に属さない「最下層の腐敗物」として、19 世紀に Marx が「ルンペンプロレタリアート (Lumpenproletariat)」と呼んだ者達の姿に極めて近いと言えるだろう。

なんで生計を立てているのかも、どんな素性の人間かもはっきりしない、おちぶれた放蕩者とか、ぐれて冒険的な生活を送っているブルジョアの子弟とかのほかに、浮浪人、兵隊くずれ、前科者、逃亡した漕役囚、ぺてん師、香具師、ラッツァローニ、すり、手品師、ばくち打ち、ぜげん、女郎屋の亭主、荷かつぎ人夫、文士、風琴ひき、くず屋、鋏とぎ屋、鋳かけ屋、こじき、要するに、はっきりしない、ばらばらになった、浮草のようにただよっている大衆、フランス人がラ・ボエムと呼んでいる連中。(Marx=2008 : 89-90)

Marx は『ルイ・ボナパルトのブリュメール 18 日』の中で、「ルンペンプロレタリアート」を上記のように表現しているが、彼らは、先述した「実存的貧困」に陥りやすい男女の姿そのものである。例えば、「おちぶれた放蕩者」、「文士」は、太宰治のことであり、「ぐれて冒険的な生活を送っているブルジョアの子弟」とは、まさに東電 OL・Y.W.のことである。

Marx が「ルンペンプロレタリアート」と呼んだ存在は、その後も欧米において、長きに渡って社会的排除の対象となりながら、その概念を徐々に拡張させてきている。Scheler は、1926 年に『知識形態と社会』の中で、「上層階級 (Oberklasse)」と「下層階級 (Unterklasse)」の思考形態の差異を指摘し、先述の通り、Myrdal が 1962 年に史上初めて、「現代社会に生まれた新しい下層階級」という現在の意味に近い形で「アンダークラス (under-class)」の定義を行った。そして、1977 年 8 月 29 日、『タイム』が、「マイノリティの中のマイノリティ アメリカのアンダークラス」のタイトルで詳細なカバーストーリーを掲載し、その中で「アンダークラス」の一覧表を作成したことによって、この言葉は完全に欧米社会において市民権を得た。Marx の古めかしい表現は、大西洋を渡り、より近代的な装いを纏い、根深いスティグマを含む形でアメリカにおいて再定義されたのである。

「誰が想像するよりも、手に負えず、社会的に異質な、敵対的な人々の大集団。彼らが、手に届かない人々、つまり、アメリカのアンダークラスである」。(中略) 非行少年、学校の落ちこぼれ、麻

薬常習者、ウェルフェア・マザー、略奪者、放火犯、暴力犯罪者、未婚の母、売春斡旋人、売春婦、物乞い（中略）普通の人々からすると、明らかにお荷物であった。（Bauman=2008：142）

Gans もまた、以下のように「アンダークラス」を定義するが、やはりそれは、『タイム』の一覧表に記された人々の姿に近い。そして、同様に彼らも社会的排除の対象であり、スティグマを刻まれている存在である。Gans が新たに「アンダークラス」の集団に位置付けたのは、ホームレス、様々な福祉的プロジェクトで暮らしている貧民、不法移民や十代のギャングメンバーなどである。

このような行動を基にした定義では、学校から落ちこぼれ、働いていない、また、若い女性の場合には、結婚せずに子供を持ち、福祉の対象となっている貧しい人を指している。行動の面から見たアンダークラスは、ホームレス、乞食、物乞い、貧しいアルコールや薬物中毒者、街頭犯罪者も含んでいる。この言葉がフレキシブルであるため、「プロジェクト」で暮らしている貧しい人々、不法移民、十代のギャングのメンバーもアンダークラスとされる場合が多い。（Gans=1995：2）

以上、Marx の「ルンペンプロレタリアート」を労働経済学史における「アンダークラス」概念の嚆矢とし、順次「アンダークラス」に対する有用な定義を見てきたが、ここで最後により包括的な定義を示そう。Bauman は、これら全ての「アンダークラス」概念に共通する属性を次のように記述している。

彼らに共通する一つの特徴は、他の人々が彼らに適切な存在理由を見出せず、彼らが周囲にいない方が、自分たちがずっと幸せだと想像してしまうことかもしれない。アンダークラスがまったく役に立たないと見られるがゆえに、人々は彼らの中に、彼らがいなければうまく運ぶことのできる何かを見て取る。事実、彼らは、それさえなければ美しい景観の上のシミであり、醜いけれども旺盛な雑草であり、庭園の調和のとれた美に何も加えることなく、多くの植物の栄養を吸い取っているものである。彼らが消えれば、誰もが利益を得ることだろう。（Bauman=2008：138-139）

これまで考察してきた欧米の「アンダークラス」概念と、橋本が『新・日本の階級社会』の中で描いた日本の「アンダークラス」概念は、必ずしも完全に一致している訳ではない。重なる部分はかなり多いものの、橋本が指摘する日本の「アンダークラス」は、基本的には各種の統計資料及び経済指標から浮かび上がってきた、階層として貧困状態が固定化されたワーキングプアのことである。従って、橋本の「アンダークラス」論は、江口の「社会階層論」の現代版であり、そこには、欧米の「アンダークラス」概念が持っている個人の不道德や不品行のような犯罪に関連するスティグマは存在しない。しかし、実際に日本においても、「アンダークラス」は、確実にコミュニティの中の不穏な存在、或いは社会のお荷物、そして何より、犯罪予備

軍という負の側面が認知されてきている。その排除の空気に敏感に反応し、当事者の言葉でその空気に対する反発を、忌憚なく表現したのが、当時フリーターだった赤木智弘である。

最近こんなことを考えることが多くなった。

夜勤明けの日曜日の朝、家に帰って寝る前に近所のショッピングセンターに出かけると、私と同年代とおぼしきお父さんが、妻と子どもを連れて、仲良さそうにショッピングを楽しんでいる。男も三〇歳を過ぎると、怒涛の結婚ラッシュが始まるようで、かつての友人たちも次々に結婚を決めている。

一方、私はといえば、結婚どころか親元に寄生して、自分1人の身ですら養えない状況を、かれこれ十数年も余儀なくされている。三一歳の私にとって、自分がフリーターであるという現状は、耐え難い屈辱である。ニュースを見ると「フリーターがGDPを押し下げている」などと直接的な批判を向けられることがある。「子どもの安全・安心のために街頭にカメラを設置して不審者を監視する」とアナウンサーが読み上げるのを聞いて、「ああ、不審者ってのは、平日の昼間に外をうろついている、俺みたいなオッサンのことか」と打ちのめされることもある。

しかし、世間は平和だ。(中略)

ならば、私から見た「平和な社会」というのはロクなものじゃない。(赤木 2007 : 241)

これは、赤木が『論座』に投稿した、『丸山眞男をひっぱたきたい。三一歳、フリーター。希望は、戦争。』論考の冒頭の部分だが、ワーキングプアのフリーターが既に、監視カメラで監視される「不審者」として日本社会で社会的排除の対象になっていることを、赤木は鋭敏に肌で感じているのだ。

一読すると、ワーキングプアの「経済的貧困」状態にある1人の若者が、自分自身の惨めさと世の冷たさを嘆いているように感じるが、実際、赤木が主に苦しんでいるのは、Listerの「関係的・象徴的貧困」の領域、及び本研究で提唱する「実存的貧困」の二つの領域なのである。ワーキングプアは、今日本社会では、不審者と結びつくような負のスティグマ、シンボル(象徴)になっている。そして、赤木が「希望は、戦争」と叫び、自分を含めて日本社会に生きる全ての国民のスタートラインを戦争という突発的災厄によってマイナスの方向に揃えたいと願うのは、偶々就職氷河期に生まれたというだけで、理不尽にも「不平等社会」の底辺を生きることを余儀なくされたことに対するルサンチマンなのである。

ただ、赤木の場合、そのルサンチマンは、まだNietzscheの提唱した字義通りのルサンチマンである。つまり、「畜群」である赤木が、自らではなく、＜外のもの＞・＜他のもの＞・＜自己ならぬもの＞に対して、論考という想像の中で、「希望は、戦争」という言葉を用いて「否^{ナイン}」と言っているに過ぎない。彼は、永山や加藤のように、実社会の中で全く関係無い他者を殺害した訳でもなく、太宰や三島由紀夫のように、自死を選んだ訳でも無い。その意味では、赤木が苦しんでいた「実存的貧困」の状態は、彼ら程酷くは無かった

であろう。しかし、仮に、インターネットに公開した彼の様々な論考が全て社会から黙殺され、『論座』の編集者の目に留まるという僥倖を得ることもなく、名もなき「畜群」の1人として、意味なき人生を生き続けることを余儀なくされたならば（つまり、「非承認」の状態が続いていれば）、いつか彼の精神は破綻し、ルサンチマンに基づく社会に対する無差別の反撃か、自死かのいずれか、すなわち、「自傷的存在証明」を選んだのではないかと思われる。既に、その両方の可能性を、彼は論考の中でも、『若者を見殺しにする国』の中でも示唆しているのだから。

Young（＝2007：12）は、「私たちは、大規模な構造変動の時代に生きている。正規雇用の労働市場も、非正規雇用の労働市場も根底から変容した。女性の雇用形態が劇的に変わった。経済構造に根差す失業者が大量に生み出された」とポストモダン社会の特徴を指摘する。我々が生きる現代社会は、安定的で同質的な「包摂型社会」から、変動と分断を推し進める「排除型社会」へと着実に移行しているのだ。そして、その排除の空気を赤木のようなフリーターのみならず、橋本が指摘した日本の下層階級の人々も、ほぼ全員が鋭敏に実感しているのではないだろうか。赤木（2007：299）は、「同じ『弱者』であっても、弱者のなかに強弱の差があることを認識すべきだ」と同著で指摘しているが、それは橋本が「アンダークラス」と定義した「弱者の中の弱者」である日本の最下層の「階級」を代表する者の言葉として、我々は真摯に受け止め、しかるべき対策をもって応えるべきである。何故ならば、そうしない限り、日本社会における階級間の相互嫌悪と排除、隔離は今後も止むことなく、最終的には階級間の闘争、すなわちテロや暴動が不可避なものになってしまうからだ。そしてこれは、欧米の様に日本でも徐々に現実のものになりつつあるのである。

2019年5月28日、「川崎市登戸通り魔事件」が起き、長年ひきこもり続けていた51歳のロストジェネレーションに属する男性が、恐らくそのルサンチマンから、彼にとって許し難いシンボル（象徴）であるカリタス小学校の子ども達を対象に大量殺傷事件をひきおこし、現場で自決した。その翌月、今度は元農水相の事務次官が、ひきこもりの44歳の長男を殺害した。長い間長男からのDVに苦しんでおり、川崎の事件を受けて自分の息子が同様の凶行に走るのを阻止する為だったと言われる。元事務次官の殺害動機には、強い社会防衛思想が伺える。そして、更にその翌月の7月に、35人が死亡、34人が負傷するという、未曾有の放火事件が発生した。やはりひきこもりだった41歳の男性によって引き起こされた、「京都アニメーション放火事件」である。この事件は、瞬く間に世界中を震撼させた。

これらの事例は、欧米で多発する、宗教的或いは政治的な意味でのテロリズムとは多少異なるかもしれない。しかし、アメリカで多発するスクールシューティングとは恐らく類似性があるであろう。いずれにせよ、全ての事件の根底にあるのは、「実存的貧困」或いは「絶望的貧困」であり、彼らの amok の様な行動様式は、全て彼らにとっては何らかの意味を持った「自傷的存在証明」なのである。川崎の事件では、直後に犯人が自殺したことから、「拡大自殺」という解説も精神科医によってマスメディアで行われていたが、その解説は単に発生した事実を専門用語で表しただけであり、動機や背景、何よりも、何故犯人がカリタス小学校というシンボル（象徴）を攻撃対象にしたのかを全く説明できない。それは、京都の事件でも同様である。

前科者だった、精神障害者だった、プレカリアートだったという「^{ディザファイリエ}社会喪失者」の姿がメディアでは伝えられているが、これとて何故「京都アニメーション」が狙われたのかを明確には説明しない。しかし、本研究が提唱する「実存的貧困」或いは「絶望的貧困」、及びルサンチマンに基づく「自傷的存在証明」概念だけが全てを了解可能にし、社会に対して予防策を提示できる。つまり、監視カメラによる監視や、不審者の隔離、実効性が疑わしい避難訓練を行うなどの本質から大きく外れた対策ではなく、日本から社会的排除をなくし、「実存的貧困」状態にある「^{ディザファイリエ}社会喪失者」を直ちに社会に包摂せよ、という事件の本質を射抜く提言を、である。

上記の様な事件が多発する昨今、階級間の嫌悪感は間違いなく醸成されつつある。とりわけ、新自由主義における強者が、赤木のような弱者を見る目に、明らかに蔑みが込められている。赤木の『希望は、戦争』論考にすら、左派を自任するはずの佐高信や鎌田慧らの言論人ですら、赤木が納得できる形で、まともに応答できてはいない。赤木の論考が、当時左派陣営を超えてより広く読まれたとしたならば、新自由主義者のみならず、一般人ですら、恐らく左派論壇人以上の酷い罵詈雑言を、赤木の論考に浴びせたのではないだろうか。

事実、現実社会において、生活保護受給者や福祉依存者に対する貧困バッシングがマスメディアを中心に止まらない。2012年、週刊誌報道から、年収5,000万円の人気お笑い芸人の母親と姉が生活保護を不正受給している疑いがあるとして（実際には、全く不正受給ではない）、お笑い芸人がテレビで国民に謝罪する事態にまで、マスメディアに追い詰められた。また、2016年には、「NHK ニュース 7」の子どもの貧困特集に登場した“貧困女子高生”は、本人のTwitterアカウントが特定され、暮らし向きが貧困ではないとして、SNS上で激しく炎上する騒ぎに発展した。その度にメディアを介して沸き起こるのが、「自己責任論」である。何故努力しなかったのか、何故働けなくなる前に適切な回避・予防行動を取らなかったのか。新自由主義特有の「自己責任論」と弱者に対する侮蔑が、コミュニティを分断するように横行し、生きることにに対して努力不足のレッテルを貼られた経済的困窮者は、容赦なく不道德・不品行だとして批判の矢面に立たされる。従って、橋本は、著書の中であくまで日本の「アンダークラス」の「経済的貧困」の側面にしか触れていないのだが、日本の「アンダークラス」も、既に欧米同様に、単に貧しいというだけで社会的排除の対象になっていると認識すべきである。日本の「アンダークラス」は、欧米の移民二世、三世同様に、徐々に日本社会の「デニズン」になりつつある。そしてその傾向は、日本社会において、残念ながら強くなることはあっても全く解消する気配はない。否、寧ろそのような排除の空気は、昨今一層蔓延していると言ってもいいだろう。

例えば、2018年11月、港区南青山に児童相談所、子ども家庭支援センター、母子生活支援施設を、ワンストップサービスとして提供する公共施設の建設に関して、区役所職員から地域住民に対して住民説明会が行われたが、そこで、港区に住む少なくない住民達から、行政に対して強い反対が示されたのだ。曰く、南青山の品位・価値が下がる、曰く、貧困者に都内の一等地に出入りして欲しくない、曰く、地価の安い田舎

には彼らに相応しいもっと広い場所があるであろう、などである。Young が指摘した、「包摂型社会」から「排除型社会」へ向かうというポストモダン社会の潮流は、確実に日本でも誕生していることが、この事例からも明らかだ。日本で最も住民の世帯収入が高い港区の富裕層は、居住地域として貧困層と同じ空間を共有したくないのである。

児童福祉施設に対する地域社会の厳しい目は、港区の事例に留まらない。横浜市でも、一時保護所が無い児童相談所に一時保護所を新たに建設する計画を 2011 年に発表した際には、地域住民から強い反対が起き、2,600 人分の反対署名と陳情書が市長に手渡されている。2016 年には東京都国分寺市でも地域住民から児童養護施設の設置に対する反対運動が起き、結果、施設の建設自体が中止に追い込まれた。同年、大阪市でも高層マンションに児童相談所を作る計画に対して、マンションの住民から強い反対意見が寄せられている。港区の事例は、マスメディアが着目したために多くの国民の知るところとなって議論を巻き起こしたが、その他の事例はこれまでさほど注目されることは無かった。だが、実際に全国各地において、児童福祉施設の建設の際は、ほぼ必ず地域住民から懸念が示され、多くの場合は反対運動が起きているのである。そこにあるのは、まさにアメリカにおけるウェルフェア・マザーや未婚の母親達に対する強い差別感情と同根のものであろう。やはり、日本においても、「アンダークラス」は、既に明確な侮蔑と社会的排除の対象なのである。

ここで一旦既出の概念を少し整理したいが、先述の通り、「アンダークラス」と「貧困」は必ずしも同義ではない。「アンダークラス」は、社会的排除と同様にかなり定義の広い概念であり、その中の大部分が「貧困」状態ではあろうが、その状態も「絶対的貧困」状態から「相対的貧困」状態、或いは、「相対的貧困」状態と中間層のボーダーラインであったりと、かなり経済的には濃淡のある多様な状態が想定される。一方、多義性があるという意味で、「アンダークラス」と社会的排除は非常に似ており、スティグマを負っているという点でも両者の関係は近接している。これまでも「貧困」は状態であり、社会的排除は「プロセス」であると述べてきたが、「アンダークラス」は社会的排除の「対象」であると考えると理解しやすい。

いずれにせよ、新自由主義政治経済が広く浸透した社会において、「アンダークラス」であると定義されることは、すなわち、差別と偏見の対象になるということであり、同時にその存在が社会的に排除されることを意味する。そして、Young の指摘通り、ポストモダン社会は、「排除型社会」に向かって着実に流れを進めている以上、ポストモダン社会が加速させた社会病理である「実存的貧困」は、「アンダークラス」という概念と、社会的排除という社会福祉の鍵概念を通じて接続する。つまり、「実存的貧困」は、主に「アンダークラス」に発生する社会病理なのである。それは、Castel や Paugam らの研究からも明らかである。彼らが「社会喪失者」^{ディザフイリエ}或いは「社会的降格」と呼んだ概念は、「アンダークラス」のワーキングプアを研究対象としたものであるからだ。

太宰治や東電 OL が「アンダークラス」であったことは、既に記した通りであるが、日本において、橋本が指摘するように社会の階級化が進み、「アンダークラス」に近い将来 1,000 万人を超える事態が迫ってい

るという現状は、それと同等以上の数の「実存的貧困」或いは「絶望的貧困」状態が、日本社会に生まれる危険性を孕んでいるのだ。

繰り返しになるが、「実存的貧困」は、確かにポストモダンに生きる我々が陥り易い社会病理ではあるが、必ずしもポストモダン特有の現象という訳ではない。寧ろ、遥かにそれ以前から、世界中でそのような状態に陥っている人間が一定数存在していたことは、Marx の記述からも十分に窺い知れる。このような、労働者階級の更に外側に位置した社会の異端者達は、高度経済成長の恩恵を受けた日本社会では、一時数少なくなっていたのだが、急速にグローバル化した新自由主義政治経済システムは、労働市場の規制緩和を通して再び日本社会に Marx が「ルンペンプロレタリアート」と表現した階級外の存在を大量に生み出した。そして、彼らの大半が、昨今日本に新たに誕生したと言われる「アンダークラス」となって貧困の最下層を形成し、親世代から子の世代へと時代を超えて忌まわしい貧困の連鎖を産み、劣等な下層階級として日本社会の中に固定化されつつあるのである。江口が「社会階層論」で記述した「低所得層」は「日雇労働者」をその最下層に据えるのであるが、昨今の「アンダークラス」概念は、ワーキングプアの「日雇労働者」の更に下に位置する様々な階層外の存在、いわば「二級市民」をも幅広く含んだ概念となっている。そしてそのような「アンダークラス」に属する者達には、社会から容赦のないスティグマが付与される。江口に代表される日本の貧困研究者のグループは、そのスティグマに対する心理学的・社会学的な理解が欠けているのではないだろうか。それを如実に示すのが、江口の共同研究者であった川上の以下の指摘である。

川上は、前掲著の総括部分において、「最近の貧困研究の論点としての社会的排除論について——貧困の質と量の問題」と題した項目を設け、『『社会的排除』に関する議論が最近の日本の貧困研究では盛んである。貧困に関する議論はほとんど社会的排除論・社会参入論一色といつてよい。』（江口・川上 2009 : 192）と現状を認識しつつも、岩田や志賀が新しい貧困理論として展開する社会的排除論に対しては明らかに距離を置いている。多少長くなるのであるが、ここで、江口を代表とし、イギリス貧困理論でいえば相対的貧困論の系譜に連なる量的研究を重視する学派が、昨今の社会的排除論をいかに分析し、捉えているのかを、川上の言葉を借りて理解したい。

「社会的排除」という概念で捉えられる貧困状況が注目されるようになっている。「剥奪」と「排除」は日本語の意味としては「普通の状態」から引き離されることであり、非常に似通っているようにみえるのであるが、「剥奪」は社会的標準的生活様式に照らした個々人の不十分な生活状態に着目して、直接的に生活改善のための多側面な必要を考えながら、普遍的、全体的な生活保障を主張するのに対して、「排除」論は、特異な者の排除の問題というように捉えている。ホームレスの増大、多重債務者の増大、若者のフリーターの増大、あるいは覚醒剤使用者の増大等々である。その特異性が強調された。そこから導かれるのは、その独自性に沿った個別的対応、自立支援である。さらに、その「特異性」は、岩田正美によれば、経済社会の秩序外的とされる存

在であり、実は前からあったもので、歴史的に偉大な貧困研究者とされるマルクスもブースもラウントリーも特異な性質の貧困の存在に気付きながら、秩序内の「われわれの社会」の貧困への重視から、曖昧なまま切り捨てたとされる。それは、マルクスの「ルンペンプロレタリアート」、ブースの気ままに日雇しかする気のない「全くの日雇」、ラウントリーの賭博、浪費、家計の不手際を内容とする「第二次貧困」を指すのであろう。それが現代において、「貧困の文化」論や「アンダークラス」論として特徴づけられる「特異性」に着目する議論として登場、復活したのであり、特異な「彼等の貧困」（岩田）は同質の労働者階級、市民層の中の連続する生活水準のレベルの、ある「解決すべき」閾値、例えばこの研究で用いた最低生活基準で判断され把握されるような問題でない異質なものとして捉えられるとされる。岩田自身の主観において排除しているのはもちろんなく、客観的な事実としてそう捉えられるということであろう。したがって、それは「われわれの社会」内部に視野を閉ざしたアプローチに基づく福祉国家体系では「彼等の貧困」に関与できないということで、「社会的排除論」として独自に捉え、out から in へ、プロセスとして捉えることの必要を岩田は主張する。（岩田 2005 : 5-8）

さて、「秩序内に閉ざした狭い視野のアプローチ」への岩田の批判は、われわれの不安定・低所得層の視角とつながる日本社会の独自性をふまえた批判としてならば頷けないことはない。だが、岩田の「われわれの社会」と「彼等の社会」の二分は、おそらく、われわれの捉え方とは基本的に異なる捉え方であると思われる。われわれは「拡大した貧困」として不安定・低所得層と捉えてきている。それは、日本における過剰人口の存在形態であるところの停滞的過剰人口を具体的に表した概念である。岩田の言説においては、社会的排除という概念を用いて、これまでとは異なる貧困の出現、その質の違いが指摘され強調される。社会階層としてどのように押さえられているのか判然としないが、無業層を中心に想定されているのであろう。また、そのような捉え方に立つかぎり、問題解決は、特殊問題に重点化して、個人サイドの、個々人の事情に即した「自立支援」による「われわれの社会」への「統合」に期待をかけることになる。日本においてはそのような理解が広がっており、特に、社会福祉分野において、このごろでは低所得者や養護を必要とする児童や老人に対して、それぞれの集団のもつ問題の内部的共通性をとらえ対応することすら放棄され、個々人への対応こそ重視されている。つまり、マスとしてその問題の特性を捉えて、大きく対応する施策の必要を表す「保護」や「養護」という言葉がだんだん用いられなくなり、個々人への「自立支援」という言葉がもっぱら用いられるようになった。われわれには、表 3-3-10 で捉えられたようなワーキングプアの広がりの中で、そのようにうまく誰もが「自立」できるものだろうかという疑問がある。これまでのような社会保障の包括的政策の視点は基本的に保持されなければならないと考える。それを基盤として、その上に支援の個別性を充実させてい

かなければならないのではないかと考える。

排除の原因とされがちな貧困の質の違いは、「貧困文化」とまで特殊化されることがあるが、そのこと自体の特殊性から生じてきているものであろうか。それ自体に問題があるというよりも、その問題状況が量的に増大していることの方が重大な問題状況を作り出しているのではないかとわれわれは考えるのである。

というのは、ホームレスもフリーターも、従来から指摘されてきた「失業」および「無業」のひとつの形態であるにすぎない。現在におけるその特徴は、そのもととなる「相対的過剰人口」がグローバリゼーションの影響により量的に巨大化していること、および、失業や無業者自体の量的増大と長期化による社会的影響の深刻さの点にあるのではないか。その派生的二次的影響まで含めて、手に負えない様相を呈するに至っているといえるのではないか。そのように、マクロな社会構造との関連において把握しなければ、当人さえも自己責任と考えてしまうだろう。閾値といった捉え方ではなく、連続する問題と捉えるのであれば、そのことによって、むしろ、排除することになる。「排除論」はこの事態の解決の難しさを示唆し、警鐘を鳴らした。だが、もっと強調されるべきことは、個々人の資質の次元の問題（である「貧困文化」）に起因するというよりも、600 円や 700 円、800 円に一時間当たり賃金が固定され、しかも 1 日フルに働く必要があるのに短時間しか働けない、あるいは逆に長時間の、あるいは二重の就労という過度労働をしなければならないといった、その状況が、変わりようがないという社会経済的閉塞感に覆われている現状を、いかにしたら打ち破ることができるのかという課題こそが喫緊であろう。質の特殊性をあれこれあげつらうのではなく、問題の量的大きさ、関連、広がり、深さを捉え、それをふまえることの方が重要であると思うのである。なぜならば、もっと広い視野に立った大きな基本的政策が基盤として必要であろうからである。（川上 2009 : 192-195）

川上は、自分達が属する貧困理解の視角を Townsend に遡る「剥奪」に求め、それはマスを理解する普遍的な視角であるとする。一方、岩田に代表される社会的排除論者が強調する「排除」は、具体的な社会階層を対象として持たない個別的な事象の雑駁な寄せ集めであり、「彼等の貧困」の個別性に着目し過ぎるあまり、本来その背景に存在しているマクロな社会構造に対して視野狭窄になっているのではないかと批判するのである。そして、普遍的な社会保障制度の対象とならないような個別具体的な貧困に対しては、自立する姿が想像しにくく、有効な社会福祉的処方箋が見つからないのではないかと危惧するのである。

岩田に対する川上の指摘は、マクロの視点では概ね正しい。イギリスのニューレイバー政権が想定した排除—包摂概念を検討した Levitas（＝2005 : 69）が指摘するように、「^{インクルージョン}包摂」とは、資本主義システムがもたらす根元的不平等を受け入れることを意味する」からである。従って、「貧困の問題を排除された人々の問題として捉え、その包摂を目指すという戦略は、特定の人々を排除する社会のあり方——貧困者を生み出

す経済的不平等や格差，社会的分配のあり方——に焦点を当てることなく貧困問題を理解し，その解決を図ろうとする姿勢と結びつく可能性」(西村 2013 : 20)がある点には，十分な注意が必要であろう。ナイーブに社会的包摂だけを求めるならば，それを世界規模で構造化しているグローバル政治経済システムに対する批判が抜け落ちてしまいかねないからだ。本研究は，岩田らに代表される社会的排除論を貧困理論としては否定する立ち位置である以上，川上同様に，雑駁な事象を全て社会的排除の一言で片づけ，彼らを社会に包摂する，という近視眼的で具体性を欠いた支援のあり方に関しては同様の危惧を抱いている。実際，志賀が労働の権利を保障し，シティズンシップ・アプローチに基づいて彼らを社会に包摂すると述べているが，ひきこもりの若者や，本研究が研究の対象とする性風俗産業に従事する女性達が諸手を挙げて労働の権利に飛びつくとは筆者も到底思えないのである。同様に，幼子を抱えたシングルマザー，アルコールや薬物の依存症者達，精神・発達の障害を持った者達など，社会的排除の対象になっている多くの「アンダークラス」の人々が労働を通して社会に包摂されていく状態が想像しにくい。事実，様々な公共職業訓練やひとり親家庭への学費の貸与など，既に就労に向けた支援がある程度制度として社会の中に準備されているにもかかわらず，それらを利用して自立に向かう者達が「アンダークラス」には決して多くはないという現実が，理念としての「社会的包摂」の正しさ以上に，その実践の難しさを指し示してはいないだろうか。従って，川上が，社会的排除概念が持つ対象の曖昧さとそれがもたらす支援の曖昧さの両方に対して，そして，その背景に明確に存在しているマクロ要因に対する無頓着さに対して懸念を抱くのは当然であり，その点に関しては筆者も全く同じ感覚を抱いているのだ。だが，一方で，川上の上述の指摘に対しても，余りにも労働経済学に捉われ過ぎているのではないか，という疑念を抱かざるを得ない。それは奇しくも籠山が江口に抱いた懸念と同じものであるが，「労働力」と「労働者」は根本的に異なる，という籠山の指摘は，やはり江口らのグループに本当の意味では届かなかったのではないかと感じてしまうのである。

社会福祉というものがどのような支援の形を取ったとしても，最後は「実存である人間」を問うレベルまで降りてこなければ，その実践は絶対に成り立たない。「実存である人間」の相互作用的な援助関係が常にその実践の基礎となっているからである。しかし，川上が指摘するように，社会的排除の対象者達の自立が想像できないということは，ホームレスや依存症者，ひきこもり支援等の現実の実践場面において，「実存である人間」の理解が常に問われているにもかかわらず，残念ながら支援者側の未熟さ故に，支援者＝被支援者の二項関係において，最も重要な「他者理解」は，傲慢にもできたものとして済まされてしまっているのではないだろうか。そして，同様にその傲慢さを，筆者は川上の主張にも感じるのである。次章以降に詳述するが，現在のワーキングプアの増加をマクロな視点で分析すれば，新自由主義という政治経済的要因によって生み出されているのは疑いようのない事実である。しかし，それがもたらす個別的な貧困とそこから派生する苦しみはあくまで1人ひとりの個人に還元されるもので，単純に一つの「社会階層」の問題として安直に語っていいものではあるまい。川上もまた，最も重要な人間の実存的理解，すなわち「他者理解」を，傲慢にもできたものとして済ましてはいないだろうか。衛生学者である籠山が，経済学者である江口の「商

品としての労働力」という概念を最後まで理解できなかったように、筆者も川上がここで用いている「保護」や「養護」という言葉が全く理解できないのである。現代のポストモダン社会において、その「保護」や「養護」が、江口や川上が長年研究対象としてきたワーキングプアに対してさえ通用しなくなってきたことを、彼女はどのように理解しているのだろうか。そのような現実を、江口や川上同様に長年ワーキングプアの研究を続けてきた Castel や Paugam が、「新しい貧困」として指摘しており、社会的排除のスティグマが単なる「所得貧困」以上に彼らをパワーレスな状態に陥らせる原因となっていると主張しているのだ。

同様のことは、アメリカでも指摘されている。一般的に「貧困の文化」や「アンダークラス」研究の第一人者として知られる Gans は、徹底的にそうした言葉を用いることを避けている。その言葉が持つ暴力性を十二分に認識しているからだ。「アンダークラス」であると人々をラベリングすることによって、確かに理解の枠組み自体は簡略化されるのだが、結果的に支援の枠組みが壊れてしまう。つまりそれは、1人の個人の人生そのものを壊すのだ。スティグマが染みついたその言葉は、それ程までに個人の尊厳を毀損する。「低所得層」という言葉にも、「アンダークラス」程ではないにせよ、それに近い暴力性が秘められていることを、川上は自覚しているだろうか。欧米において、支援の現場では P ワード (Poverty, Poor など) が現在使用されなくなっているという現実を、彼女はどのように認識しているのだろうか。安易に「保護」や「養護」を語ってしまい、ホームレスもフリーターも、その原因を一緒にくたに「相対的過剰人口」、所謂「人口ブール理論」に還元してしまう労働経済学的な考え方と「実存である人間」の視点が欠けた対象理解は、社会福祉学が支援の拠り所とすべき貧困理論としては、余りにも冷た過ぎるのではないだろうか。川上の言葉にはやはり、籠山が指摘した人生の哀歓が感じられないのである。寧ろ、岩田らの社会的排除論の方が、遥かに人生の哀歓に寄り添おうとする意欲だけは感じられる。

Gans 同様に、筆者も安易に「アンダークラス」概念を支援の現場には持ち込みたくないし、本来はこうした論文で多用するのも憚られるのであるが、本研究においては、「実存的貧困」という全く新しい貧困概念の理解の補助線とするためにやむを得ずに用いていることを、ここで改めて指摘しておきたい。

いずれにせよ、上述の通り、「アンダークラス」には、非常に根深いスティグマが付与されている。その結果、彼らは一般的な労働者階層どころか、江口らが「低所得層」と名付けた部分と重なるような形で、更に下層に向かって外延を広げている状態である。一般的な労働者階層の遥か下に位置する以上、多くは「相対的貧困」以下の経済状態に置かれており、そして、貧困であるが故に、同時に社会的排除の対象にもなっている。極めて残酷な話だが、消費社会においては、お金が無いことはそれ自体が既に「罪」なのである。

消費社会論で知られる Bauman は、『新しい貧困』の中で、イギリスにおいて、かつて失業と結びついていた「貧しいこと」は、今日のポストモダン社会では、「欠陥のある消費者」とであると指摘する。近代の「生産社会」から後期近代の「消費社会」に移行する過程において、かつて「労働予備軍」であった貧困層は、「欠陥のある消費者」の役割を割り当てられており、社会的排除の対象として「国内追放」されていると鋭く指摘するのである。「国内追放」された新しい貧困層は、やがて社会から一層の排斥を受け、不可視化する

ことさえ求められる。何故ならば、消費行動に参画できない彼らはもはや生きる意味や社会的存在としての役割を失った「人間廃棄物 (wasted lives)」であり、イギリスがかつてのように植民地を持たず、かつ政治的な意味で地球が一杯になってしまった以上、労働者としてリサイクルすることができない「人間廃棄物」の置き場所は、もはやイギリスには刑務所産業しかないからである。そしてそれは、200 万人を超える受刑者がいるアメリカでは、より一層顕著であろう。刑務所産業の市場規模は 9 兆円とも言われ、社会の全てを市場化し、サービス産業に置き換えようとする新自由主義の最先進国においては、「アンダークラス」を収容するための刑務所は、皮肉なことに最早国家になくてはならない一大産業なのである。

刑務所産業に廃棄されたくなければ、この新しい貧困層は、自らその存在を必死に掻き消さなければならない。「かつて、よいインディアンは死んだインディアンであるとされたように、今日、『良い貧民』とは目に見えない貧民である」(Bauman=2008: 215) からだ。自活し、何も要求しない人間、すなわち、自分が存在していないかのように振舞う貧民だけが、消費社会の片隅で辛うじて物の様に「在る」ことを許されるのだ。だが、社会的存在である人間にとって、その状況はある意味死よりも苦しい。

従って、今日の「新しい貧困」者は、単に「貧しい」から困窮しているのではない。その存在自体を、自ら率先して消さなければならないことが、何よりも彼らを苦しめているのである。そして、まさにこれこそが、赤木の苦しみの根源であり、彼をして「希望は、戦争。」と叫ばせた所以である。赤木は、「良い貧民」であることに、存在自体を自ら率先して消さなければならない不条理に、1 人の尊厳を持った人間として、堪えることができなかったのである。

日本の「アンダークラス」は、確かにまだ監獄に閉じ込められてはいないかもしれない。しかし、彼らは明らかに経済市場からは締め出され、消費活動から疎外されている。新自由主義が社会の隅々まで行き渡った消費社会において、そのような状態は、事実上見えない監獄に閉じ込められ、人間としての自由と尊厳を奪われていることに等しい。Seabrook (=2009: 136) は、「貧困はグローバル化のインパクトを受けてメタモルフォーゼを遂げた。初期の貧困のイメージがまだ残っているとしても、貧困はいまやそれを超えている。貧困生活者はもはや特定の国の居住者ではない。彼らは、グローバル市場から排除された者たちである。このことは、貧困生活者の気質や心理に大きな影響を与えることになる」と Bauman と同様の指摘を行っているが、社会から排除され、市民権 (シティズンシップ) すら奪われ、そして、極めて心理的な負荷を抱えたパワーレスな存在に追い込まれること、それが新自由主義社会における敗北者、「アンダークラス」の宿命なのである。彼らの多くは、日々経済的な困窮と存在論的な苦悩を抱えた状態、すなわち、三重の貧困が凝縮された苛烈な「絶望的貧困」を生きているのだ。

(2) 先述した日本の「アンダークラス」は、総じて「絶望的貧困」状態ではあるものの、一部異彩を放つ集団が存在する。「アンダークラス」は、しばしば社会から大いなる差別と偏見の眼差しを注がれ、犯罪者予備軍と見做されて一般社会から忌み嫌われているが、性風俗産業従事者とそれに密接に関連するヤクザ、反

グレなどの反社会的勢力、カルト教祖、そして、一部の犯罪者だけは、例え一時ではあっても、状態的には「経済的貧困」とは言えない場合がある。無論、主として法の埒外で行われる経済活動が永続的に続くとは考えられないため、彼らのほとんどが何時か必ず貧困状態に転落するのであるが、観測上、彼らの人生の一時点を切り取れば、寧ろ富裕層よりも経済的に豊かな状態になることも十分にあり得るであろう。

従来、そのような者は、病気や障害を患ったり、DV等の被害者になったり、誰の目にも明らかな経済的な貧困状態に陥るまでは、社会福祉の援助対象としては認められてこなかった。しかし、本研究では、「実存的貧困」をより理解するために、そして、彼らへの社会福祉の支援の必要性を提起するために、社会的排除に遭いやすい日本の「アンダークラス」の中でも、敢えて性風俗産業に従事する女性達を調査対象に選んだ。理由は、彼女達の暮らしの中に、東電OLがそうであったように「実存的貧困」と「絶望的貧困」の生きづらさが凝縮されているにもかかわらず、また、全世界規模で「貧困の女性化」が進んでいるにもかかわらず、彼女達に対して社会福祉の光が一切当てられていないからである。

誤解の無いようにここで断言しておきたいが、キャバクラ嬢やホステス、ホストなど、「職業スティグマ」が付与された夜の飲食・接客に従事する者達は、概ね経済的に貧困である。女性であれ、男性であれ、社会から白眼視される仕事に就く以上、各自が何らかの差し迫った経済的なニーズを抱えている。そして、彼らのような所謂「夜」の住人達以上に、「風」の住人達、すなわち、風俗業に従事する女性と男性は、更に深刻な経済的ニーズを持っている。そのような窮状は、店舗に所属せず、個人でSNSや出会いカフェ等を通して売春を行う女性達、そして、AV女優など、女優として性を売り物にする女性達もほぼ同様と見做してもよいだろう。

中村は、『図解日本の性風俗』の「まえがき」で、以下のように述べているが、この主張は極めて正論である。

「裸の女性は、社会を映した鏡である」

私は一貫して、そう伝えています。子供の頃に「風俗嬢になることが夢」と作文に書く女の子はいません。風俗嬢や売春をして生きる女性達は、なにかしらのきっかけがあって裸になることを決断し、今に至っています。

現在のところ社会的に認められる職業ではないので、一般的な他産業と比べると、風俗で働く女性達には自覚、無自覚も含めて働く強い理由があります。

近年は価値観が多様化して裸になる様々な理由が出てきましたが、やはりいつの時代も経済的理由が圧倒的といえます。「お金がない」「お金が欲しい」から、女性たちは簡単に価値の認められる裸を利用して換金するわけです。

風俗嬢は過半数が兼業であり、多くの女性はアルバイト感覚で従事しています。就くのも辞めるのも自由で人材流動が激しい職種です。当然、私が取材を始めた90年代半ばは遊びたい、贅沢を

したい、という女性が多かったですが、現在は生活や学費のためという女性が増えています。その20年間に消費税増税、雇用の変化、デフレ経済などがありました。「お金が欲しい」風俗嬢の傾向や動向には、国の政治経済が深く影響してくるのです。（中村 2016 : 11）

新自由主義政治経済が、若い女性を貧困化させ、社会保障制度ではなく、それに代わるセーフティネットとしての性風俗に向かわせている、というのが、90年代からこの世界の取材を続けてきた、業界の生き字引としての中村の一貫した指摘である。

同様の指摘を、荻上が、『彼女たちの売春（ワリキリ）』社会からの斥力、出会い系の引力』の中で、また、鈴木が中村との共著『貧困とセックス』の中で主張しているが、これらの著作から浮かび上がってくるのは、現代を生きる若い女性達が直面する、極めて複雑に絡まり合った社会福祉学的な課題の総体である。彼女達は、経済的な貧困のみならず、障害、疾病、離婚、DV、虐待、学校中退、非行、嗜癖、性被害、いじめ、不登校、ひきこもり、中絶、人種的マイノリティなどの様々な個人的な負債を人生に抱えている。しかし、それにもかかわらず、性風俗に関わっているという一点で、社会から不当に白眼視され、社会福祉の支援の対象の外に追いやられてきたのである。

一部の例外的なキャバクラ嬢やホストがテレビや雑誌で話す“盛られた話”を鵜呑みにして、その他大勢のキャバクラ嬢やホストが抱えた貧困や困窮を社会は敢えて無視してきた。また、一部の例外的なAV女優や伝説の風俗嬢の自伝や雑誌に描かれた「勝ち組」の人生に嫉妬し、その他大勢のAV女優や風俗嬢の孤独や絶望に目をやろうとはしなかった。日本社会の無理解の根底に存在するのは、やはり「アンダークラス」に対する差別と偏見、そして新自由主義の「自己責任論」なのである。「自己責任論」を展開するに当たっては、過度に道德観を重視することによって、「救うべき貧民」と「救うに値しない貧民」に生活困窮者を選別し、後者を「悪魔化」（Young=2007 : 288）し、救わない理由を正当化するのが新自由主義の特徴である。不浄なもの、理解できないものを躊躇無く社会から排除する狭量な姿勢は、貧困だけでなく、個人の意思の弱さや努力不足が背景にあると考えられる疾病や障害、行動、生活習慣や職業選択、或いは本来、本人の努力とは一切関係の無いはずのジェンダーの違いやLGBTの問題に対してまで幅広く及んでいる。

例えば、あらゆる嗜癖行動は、須く破滅が人生の遠くない未来に存在している。従って、全ての依存症は、本来医学的或いは心理学的には治療、社会福祉学的には支援の対象なのであるが、ギャンブル依存症や薬物依存症、セックス依存症等に対して、一般社会の目は極めて冷たい。彼らは、自己管理ができない未熟な人間として、新自由主義の「自己責任論」によって、往々にして医学や社会福祉学から切り捨てられがちな存在である。

同様に、DVやストーキング、性被害等、主に男性の嗜癖行動の被害者である女性に対しても、日本社会の目は冷たい。そこには、日本社会に極めて根強く残る、男尊女卑の風潮がある。東電OLがぶつかったガラスシーリングもまさにそれだった。「女性」であることだけが理由でその存在や価値を全否定された時、

女性の尊厳は根底からくずおれる。女性差別は、Honneth の承認理論で言えば、法の領域、「平等原理」に反する「非承認」であり、彼女のように優秀な女性の存在理由を、時に完膚なきまで破壊する程に耐え難い不条理なのである。

日本のように極めて強く男尊女卑の風潮が残った社会において、新自由主義的「自己責任論」が横行すると、必ず以下のような言説がまことしやかに語られる。DV を受けたのは、パートナーや伴侶として未熟だからではないか。ストーキングを受けたのは、軽々しく男性に自分の個人情報を与えたからではないのか。性被害に遭ったのは、挑発的な態度や思わせぶりな態度を取った自らに、女性として落ち度があったからではないか、と。事実、2018 年、『新潮 45』において、「LGBT は生産性がないため、行政が積極的に支援すべきでない」と発言して先進国の多くのメディアで批判を浴びた杉田水脈衆議院議員は、まさに新自由主義を体現したような政治思想の持主であるが、彼女は、フリージャーナリストの伊藤詩織氏が、日本版#MeToo 運動として、実名で著名な男性ジャーナリストからの性被害を告発した際、それを取り上げた BBC の番組の中で「伊藤には、女としての落ち度がある。男性の前でそれだけ（お酒を）飲んで、記憶をなくしている。社会に出てきて女性として働いているのであれば、嫌な人からも声をかけられるし、それをきっちり断るのもスキルの一つである」と性被害に遭った被害者である伊藤を冷たく批判している。新自由主義と男尊女卑の風潮が、あろうことか、同じ女性であるはずの日本の政治家からまで良識を奪っているのだ。当然、市井の人間の思考回路も杉田と恐らく大差は無いであろう。

それを示す事例の一つを以下に示すが、それは被害者となって殺害されたキャバクラ嬢が、加害者となった男性ストーカー以上に、電腦世界で名誉を毀損された異常な事件である。日本社会において、キャバクラ嬢を始めとする、性風俗産業に携わる女性達は、ただ単に非正規雇用で不安定な就労状態にあるだけでなく、人間として一段卑しい存在として、日々心無い社会からの偏見と侮蔑に晒されているのだ。それは、理不尽な人の死という居た堪れない状況に置いて、より一層明らかになるのである。

2013 年 11 月 27 日、千葉縣市川市で元キャバクラ嬢の 22 歳の女性が、元交際相手の男性ストーカーに殺害された後、インターネット上では加害者の男性ストーカーではなく、被害に合った女性に対して、個人情報を暴露したり、その人格を貶めるような様々なバッシングが巻き起こった。その一連の流れに対して、元キャバクラ嬢が中心となって 2009 年にフリーター全般労働組合（PAFF）の分会として結成されたキャバクラユニオンがブログで出した以下の声明文は、キャバクラ嬢という日本の「アンダークラス」に属する女性達の魂の叫びではないだろうか。そして、日本社会に厳然と存在する差別と社会的排除の証左でもある。

「殺されるかどうか、スカートの丈や、化粧の濃さ、髪の色が関係あるのか。

服装や化粧によって、殺されていいか悪いかを判断されなければならないのか。

（中略）

水商売や風俗で働いているというだけで、多くのことは自己責任論に転化され、被害者に原因があると攻

められる。給料が払われなくても、暴力を振るわれても、レイプされても、殺されても。

スカートの丈が短ければ痴漢にあってもしょうがない、服装が派手ならレイプされた原因を作ったの本人だ。キャバクラで働いたならセクハラされて当たり前。

(中略)

わたしたちは差別と戦い続ける。水商売や風俗で働く女性が、暴力に脅かされても仕方がないなんて言わせないように。誰もが差別のもとで生活を脅かされないように。

匿名でネットに書き込みをする人も、自身が吐き出す差別によって、誰かが殺されることを考え想像し慎むべきだ。そのことに生きることを危ぶまれる人たちの事を考えるべきだ。

わたしたちは被害者への差別的言論に抗議する。」

(2013年12月3日キャバクラユニオンのブログより

<http://ameblo.jp/cabaunion/entry-11716695256.html>)

橋本は、日本の非正規雇用の労働者が、社会的地位において正規雇用の労働者の遥かに下に置かれ、新たな下層階級を築いている事実を指摘したが、下層階級である非正規雇用の中にも更に序列があることまでは示さなかった。何故ならば、一般的な統計資料には載らないグレイゾーン経済や地下経済が日本社会には存在しており、そこで働く労働者達の姿は、橋本が用いるような公式の統計資料では十分に捕捉できないからだ。

赤木は、前述の通り、下層階級にも序列があり、自虐的に自分自身のような「男性の非正規労働者」を最下層に位置付けた。何故ならば、女性には「永久就職」として、結婚後主婦という立場が社会から立派な仕事として認められているにもかかわらず、赤木のような男性が主夫になる選択肢は日本社会では事実上閉ざされており、それを望むような家庭志向の男性には一切救いが無いからであった。赤木は、日本社会には、ジェンダーによる社会的、文化的な要因に基づく経済格差があることを指摘し、結婚に逃げることができず、逆に家族の扶養能力を社会から当然のように求められる男性の方が立場上不利であると論じたのである。

しかし、赤木のこの指摘には明らかに瑕疵がある。幾ら橋本の「アンダークラス」論が、赤木のような主観的な不満足感を重視せず、階層分けに当たって労働者の経済状態だけに着目し、低所得の非正規雇用労働者をたった一つの階級、「アンダークラス」にまとめてしまうような乱雑な論考だとしても、赤木の主張を一般論として是とするのは苦しい。赤木が主張するように、「アンダークラス」には、社会福祉学的に明瞭なヒエラルキーが確実に存在する。だが、そのヒエラルキーの中で、非正規雇用の男性フリーターが底辺という認識は社会の認識からも、橋本の用いる統計資料の実態からも大きく乖離している。確かに、社会福祉学は、単なる理論社会学や経済学以上の射程を持つべきである。その意味では、赤木のような特定個人のナラティブに基づく心理学的、社会学的視点による、日本社会の格差の分析も重要であろう。だが、尊重すべき赤木の論考にも重大な瑕疵があると私が断ぜざるをえないのは、彼が「永久就職」と呼ぶ女性の特権は、既

に日本社会では約束されていない、単なる過去の幻想だからである。

日本における「生涯未婚率」は、統計を取り始めた 1990 年以降、急激に上昇している。2015 年の国勢調査では 50 歳男性の 23.4%、50 歳女性の 14.1%に一度も結婚歴がなかった。なお、90 年には、男性 5.6%、女性 4.3%と、差はほとんどなかったため、「生涯未婚率」に対して、新自由主義政治経済とそれがもたらした格差社会が与えた影響は極めて大であったと断言できる。実際、厚生労働省の推計では、2035 年における「生涯未婚率」は、男性 29.0%、女性 19.2%となっている。「生涯未婚率」の上昇が今後も避けられず、かつ現状男女間に明瞭な賃金格差が存在する限り、「弱者の中の弱者」は、赤木のように「主夫」になれない未婚男性ではなく、「主婦」になれない未婚女性ということになる。

また、「生涯未婚率」の上昇と同じくらい深刻な問題に、「離婚率」がある。厚生労働省が公表している人口動態総覧の「人口千人当たりの離婚率」というデータを参照すると、日本の離婚率は、2002 年の 2.03 がピークであり、2015 年は 1.83 と、世界の先進国の中では平均的な数値となっている。一般的に、日本の離婚率は 3 分の 1 と言われるが、これは明らかに誤りである。この種の「離婚率」は、単純に「その年に結婚した男女」と「その年に離婚した男女」を比較しているからだ。

厚生労働省が発表している人口動態統計によると、2016 年の結婚件数は 62 万 531 組、離婚件数は 21 万 6798 組となっている。この数字を基に、離婚件数÷結婚件数とすれば離婚率は約 35%＝3 分の 1 というよく見かける結果と一致する。しかし、上記の計算方法だと、分母は 2016 年に結婚した人しか対象になっていないが、分子の離婚は 2016 年以前に結婚していた夫婦全てが対象である。これでは離婚率が高く算出されるのは当然であり、日本人の離婚の実態を正確に表しているとは言えない。

だが、それでもやはり、社会保障制度が脆弱な新自由主義社会の日本において、1.83 の離婚率は十分に憂慮すべき問題である。何故ならば、1.83 の離婚率のうち、女性の場合、実に 42%を若い世代（18～34 歳）が占めているからである（男性の場合、18～34 歳は 33.3%）。その結果が、現在のシングルマザーの異常な貧困状態に直結している。先述した、50.8%という世界一酷いひとり親家庭の相対的貧困率を鑑みると、経済的に見た「弱者の中の弱者」は、赤木のような主夫になれない男性の非正規労働者でもなく、結婚して主婦に「永久就職」できない女性の非正規労働者でもなく、若くして離婚し、小さな子どもを抱えて就労が著しく制限された女性の非正規労働者ということになるだろう。

筆者は、決して赤木の「自らが最も不幸」だ、という主観的な苦しみを否定したい訳ではない。畢竟、幸・不幸を決めるのは、何時でも他者ではなく、自分自身である。世界一の富豪が、主観的に世界一惨めな思いをすることは十分に可能である（事実、筆者は児童虐待の被害者だった故マイケル・ジャクソンは、「実存的貧困」状態の富豪だったと考えている。）。社会構成主義に基づけば、唯一絶対の真実などないのであるから。しかし、赤木が経済的な弱者の定義にジェンダーの要因からも考察を加え、その結果、主夫に逃げられない男性の方が女性よりも不幸なのだ、と決めつけるのであれば、それはやはり誤りであると指摘したいのである。明らかに日本において、経済的に最底辺層を形成しているのは、若いシングルマザーである。彼

女達の相対的貧困率は、新自由主義が日本以上に社会に行き渡っているアメリカ社会よりもなお酷い状態なのだから。鈴木『最貧困シングルマザー』が描く彼女達の生活は、到底先進国におけるそれではない。

若いシングルマザーや未婚の母、或いはその予備軍の女性達が、真つ当な職に就けないのが、新自由主義の競争社会であるとするならば、必然的に彼女達は、生きて行くためにグレーゾーン、或いはアンダーグラウンドの世界に足を踏み入れる以外道は無い。しかし、中村や鈴木など、ルポライターとしてその世界を長年に渡って観察してきたごく一部の者達を除けば、その世界の全容を正確に一般人に伝えることができる者は皆無に等しい。故に、一般人にとってその世界は、初めから敬して遠ざけるべきものと認識されている。だが、その結果、文字通り無法地帯と化している性風俗産業は、実社会以上の新自由主義の競争原理と男尊女卑が横行しているのである。

マネーゲームにおける一握りの成功者と、圧倒的な数の敗者達、そしてそれを正当化する強者のための「自己責任論」は、社会を歪にした。男性による女性の性的搾取のメカニズムは、日本社会に巧みに構造化された。加えて、その世界にたった一度でも関わっただけで、汚れ物のスティグマが無慈悲に社会から貼り付けられるのだ。2014年、日本テレビに入社予定だった1人の女性アナウンサーが、母親の知り合いが経営する銀座のクラブでホステスとして一時勤務していた過去を問題視され、後日内定を取り消された(後、和解)ことから、日本社会に厳然と存在する飲食業や性風俗産業への根深い差別と偏見が伺える。マスメディアのような公器はまさに、その社会を映し出す鏡そのものであるからだ。

無論、飲食業や性風俗産業で働く全ての女性達が搾取の被害者であり、社会福祉学が支援すべき貧困状態であるとは言わない。中には一定数、その仕事に誇りを持つ者、その仕事を強かに利用して逞しく世を渡る者、逆に男性達を手玉にとって財を成す者もいるであろう。それらの行動は、社会的に弱い立場に置かれている女性達の「行為における主体性」として時に高く評価されることもある。だが、この様な事例は寧ろ少数派であり、多くの女性達(とりわけ、幼な子を抱えた若いシングルマザー)は、一般社会以上の抑圧を受けているのである。

(3) ここでは、本項のまとめとして、「アンダークラス」に該当し、日本社会では広義の意味で社会的排除の対象となっている、歓楽街での飲食・接客業や性風俗産業に関わっている女性達について、近年の具体的な事例に基づいてその実態を再度概観する。Castel 風に言えば、彼女達もまた、典型的な形で社会を喪失する^{リエ}というプロセスを生きている「社会喪失者」^{ディザファイリエ}なのである。

世界的に展開している「貧困の女性化」の煽りを受けて、日本社会でも若い女性やシングルマザーが貧困を理由に、こうした「夜」や「風」の世界に流入していることは先述の通りであるが、最近ではマスメディアを中心に少しずつその状態は認知されつつある。しかし、彼女達は従来の婦人保護事業が対象としてきた知的・精神障害者等とは異なるため、DV被害等を受けていない限り、女性を対象とした社会福祉の措置制度の対象になりにくい。その結果、社会福祉八法体制の中で、彼女達のセーフティネットとして有効に機能

しそうなものは、生活保護制度しかないのである。ところが、その生活保護制度は、彼女達が真に求める支援制度とはなり得ていないのが現状である。坂爪は、『「身体を売る彼女たち」の事情——自立と依存の性風俗』の中で、生活保護を拒み、性風俗産業のデリヘルで働く女性を紹介しているが、これは決して特別な事例ではない。寧ろ、この女性の選択は、近年極めてありふれた事例の一つであると言っても過言では無いだろう。

弁護士・学者などで行く大阪市生活保護行政問題全国調査団（井上英夫団長・金沢大学名誉教授）は、2014年5月28、29の両日、生活保護行政の適正化と「大阪市方式」の全国への波及を阻止するために実態調査を行った。その調査によって浮き彫りになった実態が、まさに前述の状況である。

報告書によると、ある30代の女性は、「（生活保護の）申請を5回断られ、その際対応した職員から『ソープランドへ行け』と言われて信じられない気持ちになった」というが、昨今、性風俗産業は複雑な事情を抱えた若い女性達の駆け込み寺としての側面を持つようになってきているのだ。恐らく、生活保護行政の担当者もその実態を十分把握しているので、保護を求めた女性に対して、臆面もなく上記のような発言をしたのだと思われる。

坂爪（2018）が指摘するように、現在日本社会では、訳あって家族に頼れない若い女性達のうち、決して少なくない集団が、人生において妊娠・出産・離婚・DV・障害・失業・疾病などの複合的な問題を抱えた際、福祉行政ではなく、性風俗産業を最初に頼るようになってしまっている。その一方で、大阪市の心無い職員の「ソープランドへ行け」という言葉で激しく傷つく女性達もいる。どちらも日本社会の「女性の貧困」の現実である。坂爪は、このような状態に陥った女性達の心情を次のように記述している。

扶養照会や資力調査、ケースワーカーの訪問といった「社会的な恥」に耐えながら、不自由な暮らしの中で、生活を立て直す道を選ぶか。それともホテルの密室で、初対面の男性の前で全裸になるという「個人的な恥」に耐えながら、デリヘルで働いて自由な暮らしをする道を選ぶか。

優子さんにとって、そして彼女の娘にとっても、まさにこの瞬間が人生の大きな分岐点だと言える。

風テラスの相談員も、決してデリヘルで働くことを否定するようなことはしない。

しかし優子さんが現在置かれている状況を客観的に見れば、デリヘルで働きながら綱渡りのワンオペ育児を続けることよりも、生活保護を受給して離婚手続きを進めた方がいいことは明白だ。

もう一度、丁寧に制度の説明を繰り返した後、女性ソーシャルワーカーは優子さんの目を見つめて、静かに尋ねた。

「……生活保護を受けるのは、絶対に、嫌ですか？」

優子さんは、きっぱりと即答した。

「絶対に、嫌です」（坂爪 2018：76-77）

この事例において、女性が生活保護を嫌がる理由は、恐らく大半の読者を困惑させるであろう。新自由主義を支持する者であれば、寧ろ怒りすら覚えるかもしれない。前述の杉田代議士であれば、恐らく、烈火のごとく、この女性を怒鳴りつけ、「自己責任論」をもって高邁な説論を始めるに違いない。以下が、この女性が、生活保護の受給を勧めるソーシャルワーカーに語った、制度利用を拒む理由である。

役所の人が自宅に来たら、「あなたも娘さんも、良い服を着ているんですね」「生活に困っているはずなのに、ロングコートチワワを三匹も飼っているんですね」とか、絶対嫌味を言われると思うんです。また生活保護を受給することで、ペット可のマンションに引っ越せなくなるのも困ります」と優子さんは語る。（坂爪 2018 : 75-76）

「社会的な恥」、「貧困」のスティグマが、若い女性達にとっていかに耐え難いものであるかが、この事例から窺い知れるのではないだろうか。消費社会を生きる我々にとって、生活保護によって車が持たなくなる、自分や家族がみすぼらしい服を着なければならなくなる、ペットを買えなくなる、公営住宅に住まなければならないこと、もはや社会インフラとなった SNS において貧困故に何一つ発信せず、沈黙を続けること等、一般人に認められた消費活動から疎外されることは、個人の尊厳を著しく損なう事態なのである。それは、密室で女性が見ず知らずの男性に体を売るという屈辱を耐え忍んでも、「女性としての尊厳」を犠牲にしてもなお、守りたい、「人間としての尊厳」なのである。そして、これはかつて、赤木が『希望は、戦争。』の中で、訴えたものでもあり、現代の「相対的剥奪」なのである。

社会福祉援助の専門家として、我々は、赤木のこの主張や坂爪が紹介した優子さんの事例に対して、真摯に耳を傾ける度量が求められているのではないだろうか。何故ならば、彼らの欲する「人間としての尊厳」や市民権（シティズンシップ）は、本来国家が当たり前のものとして国民に保障しなければならない類のものだからである。

彼らの主張を、甘い、世の中を舐めている、と批判するのは容易い。何か、暮らしの優先順位が間違っているのではないか、或いは、本来は、そんなことをしたり、言ったりする前に、すべきことがあるのではないか、というのは、一般論として、極めて倫理的かつ道徳的に当たり前な主張に思われる。しかし、筆者がここで主張したいのは、そのような新自由主義に基づく「自己責任論」と、古典的な道德観が説得力を持つためには、大前提として、まず社会の中に「機会の平等」が担保されている必要があるはずだ、ということである。しかし、残念ながら、現代日本社会は、湯浅が指摘したように、「機会の平等」も「結果の平等」も欠いた「不平等社会」であり、一度雇用のセーフティネットから零れてしまえば、簡単に社会の底辺へと滑り落ちてしまう、「すべり台社会」である。そして、昨今その状況は一層悪化しており、『ブラック企業日本を食いつぶす妖怪』の中で、今野晴貴は、「正社員」を餌にして、若者を過労死まで追い詰めるブラック企業

が跳梁跋扈する日本社会の現実を以下の様に表現する。

ブラック企業で働く正社員からの相談を受ける私には、すべり台に落ちるというよりも、「落とし穴に落ちる」という感覚の方がしっくりくる。一度ブラック企業に入ってしまったら、その時点でアウト。長時間残業やハラスメントが横行し、誰も助けてくれない。うつ病を患えば、自己都合退職後も働けず、そのまま生活保護へと「転落」してしまう。ブラック企業が蔓延する社会は、いつ何時「転落」するか分からないという意味で「落とし穴社会」と表現できる。或は、より敵意と偶発性、予見し難さを強調するならば、「ロシアンルーレット社会」と言っても良い。（今野 2012 : 164-165）

「すべり台社会」から、「ロシアンルーレット社会」へ。これが、日本社会における新自由主義の帰結である。行き過ぎた市場原理主義と競争社会は、遂に、若者が日常的に過労死や自殺に追い込まれたり、うつ病等の精神疾患から生活保護の受給を余儀なくされるような冷たい社会に行き着いてしまったのである。この状態は、就職氷河期に生まれ、「不平等社会」を生きることを余儀なくされた赤木達、ロストジェネレーションに比べても、決して幸福とは言えないのではないだろうか。

「ロシアンルーレット社会」を生きる若者達の中でも、現在、とりわけ不利な立場に追い込まれているのが、女性達である。世界経済フォーラム（WEF）が策定する、世界各国の男女平等の度合いを示す「ジェンダー・ギャップ指数」（2018 年版）では、調査対象 149 カ国のうち、日本は 110 位で前年から 4 つ順位を上げたが、依然として 110 位台という低位置である。所得格差の縮小など職場環境がやや改善した結果の 4 ランクアップと言われるが、日本は主要 7 カ国（G7）では最下位であり、女性が経済や政治の第一線で活躍する環境の整備など課題は山積している。若い女性、その中でもひとり親家庭は特に男女間の賃金格差が大きく、シングルファーザー（平均年収約 380 万円）に比べて、シングルマザー（平均年収 220 万円）は圧倒的な社会的・経済的弱者の地位に押し留められているのである。

次項では、このような男尊女卑の風潮が生み出す著しい「不平等」と社会的な「不公正」について、改めて論考を加える。

第 2 項 「貧困の女性化」と「居場所」としての「性風俗」

（1） 1970 年代後半から、特にアメリカを中心として「貧困の女性化」という概念が提起され、研究が進められてきた（岩田 2005 : 197）。その中核になったのは、やはり過去 30 年に渡って増加を続けて来たシングルマザーであった。1970 年代には、18 歳未満の子どものいる家庭の 11%がシングルマザーだったが、1990 年代には 24%、実に 4 人に 1 人の子どもの家庭がシングルマザーであった（宮本 2015 : 2）。シング

ルマザーになる原因の大部分は、死別ではなく、離婚と非婚である。アメリカの社会保障制度の中でも最大規模の福祉プログラムである「要扶養児童家庭扶助 (Aid to Families with Dependent Children : AFDC)」を受給する人々が 70 年代以降急速に増加したのだが、受給者の大半がシングルマザーであった。

ここではまず、AFDC 制度には以下のような問題があったことを認識しておきたい。すなわち、受給児童の半数以上は婚外子であり、この福祉システムは家庭崩壊を助長している可能性がある、という点である。アメリカでは、高校を卒業した若者は「家を出る」という慣習がある。しかし AFDC 制度の下では、女性はシングルマザーになれば十分な福祉を受けられるので、働くよりも福祉に依存した生活を選ぶことができってしまう。つまり、この福祉制度は、若者に対して「自立」よりも「福祉依存」に陥り易い生活を安易に選択させる点で、自助と自立を旨とするアメリカの道徳慣習にそぐわないとの批判が提出されていたのであった。また、AFDC 制度の下では、福祉受給資格の審査が甘く、再受給、再々受給が簡単に繰り返されてしまい、全体として受給者の半数以上が 5 年以上の給付を受けていたという問題もある。結果、1994 年にはこの制度の受給者の数がピークに達し、約 500 万世帯、児童数全体にして約 8 分の 1 が、この制度に依存するという事態を招いていた。急増したこれらの女性達に対しては、マスメディアを中心にして「福祉依存者 (ウェルフェア・マザー)」という差別的なレッテルが貼られ、アメリカの代表的な「アンダークラス」として、シングルマザーは極めて強い社会的批判を浴びたのである。

1996 年、このような状況に対して、クリントン政権は、「福祉から就労へ」をスローガンに掲げて、約 60 年間続いてきた AFDC を廃止し、これに代わって、「個人責任および就労機会調整法」を制定し、このなかには、「貧困家庭一時扶助 (Temporary Assistance for Needy Families : TANF)」を設けることにした。福祉の給付を原則として一度に 2 年間まで、生涯を通じて 5 年間までに利用を制限し、給付に依存した生活が長期間続かないように、言い換えれば受給者の経済的自立を促すように、手厚い就労支援プログラムが施される一方で、TANF の受給に関しては厳しい制約が課されることになったのである。

TANF においては、まず、AFDC よりも遥かに受給資格の要件が厳格に審査されるようになった。そして制度の利用者は、受給と引き換えに、一週間に 30 時間程度、労働に関する活動 (work activities) をするという市民的義務を課されるようになったのである。受給者は勤労倫理や遵法意識を身につけることが奨励され、生活形態を監督されることになった。福祉受給に関わるこれらの追加的政策は、受給者に対する温情的な自立支援であり、「新しいパターンリズム」の政策と見做すことができる。こうした政策はとりわけ、ウィスコンシン州、ミシガン州、ニュージャージー州において受給者数の数を大きく減らすことに成功し、州政府の財政基盤を強化することに貢献した。TANF の月平均受給者数は、制度導入時の 1996 年度の受給者数に比して、2003 年には約 3 分の 1 にまで減少している (2001 年度は 540 万人、2003 年 9 月には 488 万人)。また、雇用された福祉受給者の平均月額収入は、1996 年度には 466 ドルであったのに対して、2001 年度には 686 ドルへと増加している。シングルマザー世帯の平均収入は、1996 年度の 1,740 ドルから 2001 年度の 2,960 ドルへと増加した。子どもの貧困率については、1996 年度の 20.5% から、2001 年度の 16.3%

へと減少すると共に、「生活保護給付」補助金額は、1996 年の 166 億 7,000 万ドルから、1998 年の 43 億 7,600 万ドルへと、約 3 分の 1 に減少している。

このように TANF 制度は、アメリカ社会において様々な成果を挙げてきたのだが、その一方で、シングルマザーの中に格差を創り出してしまったのも事実である。TANF 制度によって就職先を見つけた人々のうち、その約半数は、依然として貧困状態から抜け出せていないという報告がある。加えて、彼女達のうち、25% の世帯は「相対的貧困」以下の生活を強いられているとされ、就職せずに無業者のまま TANF 制度から退出した人々の割合も、退出者全体の 20%~25% を占めると推計されている。つまり、働ける状態にあった約半数のシングルマザー世帯が徐々に貧困から脱却していく一方で、能力の低い者や、働けないシングルマザー世帯は一層惨めな状態でアメリカ社会に取り残され、AFCD 制度時代以上に貧しくなってしまったのである。

新自由主義が、社会福祉の領域にまで適用されることの恐ろしさがここにある。競争原理と自立を全ての国民に強要する新自由主義的政策は、どのようなものであれ、必ずそのシステムの中に勝者と敗者の両方を産む結果になるのである。無論、敗者が置かれた窮状は、全て自己責任の名の下に国家から冷たく無視されることになる。

アメリカ同様に、個人の自立を尊重するイギリス社会においても、1980 年代以降、シングルマザー世帯の貧困が社会問題になり、彼女達に対してスティグマを付与すると共に、「アンダークラス」論が盛んに展開された。ホームレスや移民、障害者、売春婦、薬物依存症者等と並び、働かないシングルマザーは、イギリス社会において社会的排除の対象となったのである。実際、1993 年、イギリス北部有数の貧困地域であるリバプールで、悲惨な状況下で育った 2 人の児童が幼児を誘拐して虐殺するという、「ジェームズ・バルガー事件」が起きた際、典型的な「アンダークラス」に属する 2 人の少年の母親達（両名とも福祉依存のシングルマザーだった。同じく、別れた父親（1 人は未婚）は、アルコール依存症等の「アンダークラス」だった。）は、イギリス社会において世論の集中砲火を浴びた。そして、今やそれは、欧米だけの問題でなく、多くの先進国においての常態となっている。

アメリカの経済学者・Thurow（=1996：42-44）は、1996 年に『資本主義の未来』の中で、グローバル化によって富の分配の不平等が著しくなり、先進資本主義社会において須く経済的な格差が拡大し、中流家庭が没落していく姿を描いている。男性のホワイトカラー労働者が、競争が激化する労働市場から脱落して徐々にブルーカラー化し、それに伴って男性の経済力が一貫して低下し続けた。一方で、大学を始めとする各種の教育費は高騰し、家族を支えるコストが急増したことにより、男性は主に経済的理由から、家族に対する責任から逃れたいと強く願うようになった。その結果が、アメリカ社会における離婚率と未婚率の急上昇なのである。

Thurow（=1996：48）は、欧米において「経済的には父系社会が終わった」と断じる一方で、「世界中で家庭が崩壊した。離婚と未婚の母が増加しないのは日本だけだ」と伝統的な家父長制に基づく日本社会の堅

牢な家族制度を称えたのだが、彼の指摘が余りにも見当違いだったことは、既に自明であろう。ここまで再三述べてきたことだが、日本のひとり親家庭の貧困率は、統計の無い韓国を除けば OECD 加盟国の中で最低の 50.8%であり、4 番目に酷いアメリカの 45.0%を遥かに上回っている。日本社会も、今や欧米と同じように、新自由主義政治経済政策の帰結として、橋本が指摘するように中流家庭が次々と破綻し、経済格差は拡大し、「アンダークラス」が社会の底辺に固定化されてしまった。貧困がもたらす家族の崩壊とシングルマザーの増加も、他の先進諸国とほぼ遜色無い状態である。そして、その状況に対して、何ら有効な社会福祉政策を施さないできた結果、シングルマザーとその子ども達の貧困率は、昨今世界最悪の水準で推移しているのである。

ウォルフによれば、戦後アメリカの家族の「模範的ライフパターン」は、誰もが成功の階段を上がっていくことを大前提としていた。家族における性役割分業は、深い考えに基づいていた訳ではなく、ただ男女とも結婚以外では得られないメリットがあったから夫と妻の役割を演じていたにすぎない。このような家族の在り方、地域の在り方、男女の性役割分業は 1970 年代より前の時代の賃金、労働、住宅条件に基づいたものであったが、経済構造が急速に「ニューエコノミー」と称される形態に変化したことで、製造業などの「オールドエコノミー」を支え、それに支えられてきた伝統的な組織や仕組みが機能不全を起こすに至り、90 年代に入って遂に完全に崩壊したのである。

このような社会変動は、子どもの福祉を直ちに侵食した。子どもの貧困の最大の原因は親の実質賃金が低下していることに加えて、男女間格差のために母親の賃金が低過ぎることだった。また、離婚後の父親の養育費の不払いも原因となった。若い高卒男子の実質賃金が低下し、若者総数の 3 分の 1 が、もし家族を持ったとしても貧困レベルの生活水準を上回る収入は稼げなかった。低所得層の集中する地域出身の若い男性で結婚するゆとりのある者はどんどん減少し、結婚相手として相応しくないと女性から見られるようになった。その結果、結婚制度というものが維持し難くなる。貧困な夫婦の離婚可能性は二倍も高くなった。また、若い女性の婚外出産が増加したが、その原因は貧困と社会的不平等にあった。

ここまでの議論をより一般化して整理すると、新自由主義の帰結として、アメリカを始めとする先進工業国において 1980 年代に貧困が急速に増加し、90 年代以降、その傾向がより強まったのには 4 つの事情があったと言える。①経済のグローバル化に伴う競争の激化、②失業、非自発的なパートタイム労働、有期契約雇用、一時的労働が増加するなどの労働市場の柔軟化と不安定化、③戦後の西欧型社会モデルが弱体化・崩壊し、それまでの雇用保障、所得再配分制度を維持できなくなるなど、福祉国家路線の崩壊、④生活保持を国家の責任ではなく、自己責任とする論調の台頭、の 4 点である。

一般的に、先進工業国の中でも市場経済を重視し、新自由主義を標榜する国家のシングルマザーや子どもの貧困率は、北欧諸国のように高い消費税率を持ち、手厚い社会保障制度によって所得再配分を重視する国々よりも高い傾向がある。それは、アメリカとイギリスの両国家に特に顕著であったが、イギリスは 1990 年代以後、保守党から労働党に政権交代が起き、社会保障政策が変化したことによって状態は好転している。

その一方、日本は未だに 6～7 人に 1 人の子どもが「相対的貧困」の状態にあり、近年益々アメリカ型の激しい格差社会に近付いている。

(2) ここで、改めて日本社会における「貧困の女性化」を概観しよう。貧困はこれまで、主に男性の問題として受け止められがちだった。何故ならば、男性の貧困は、ホームレスやネットカフェ難民のような形で、社会の中で十分に可視化されるからである。最近では、ネットカフェ難民の中にもだいぶ女性が増えたと言われるが、一般的には、女性は性的被害に遭いやすい以上、パブリックな場所を寝所とすることは極めて難しい。従って、貧困故に住居を失ったり、虐待等で家出をせざるを得なかった若い女性達は、寝所を求めて、寝泊まりできる場所を提供する男性＝神を求めて、「神待ち」と呼ばれる売春行為を行ったり、ひたすら DV に耐えてパートナーの下に居続けるしかないのだが、その結果、女性の貧困は社会において見え難くなってしまっているのである。

だが、欧米の例にもれず、日本においても「貧困の女性化」は確実に浸透している。現在、財務省の給与所得統計では、年収 200 万円以下の働き手は女性の 4 割以上にのぼる。男性の貧困も増えてはいるものの、年収 200 万円以下は 1 割に満たない。確かに、4 割の中には、世帯主男性の扶養下にあつて、日々の生活には困らない女性も少なくないだろう。だが、パートナーからの暴力や離婚の激増、男性の貧困化、日本社会における生涯未婚率の急上昇により、既述の通り、女性にとって、既に結婚はセーフティネットではなくなっている。にもかかわらず、自立できる経済力を持てる女性が、ごく僅かに留まっていることが、女性の貧困の深刻化を招いているのだ。

背景にあるのは、女性労働の非正規化の急速な進展だ。1985 年に「男女雇用機会均等法」が制定されて以降、女性の社会進出は進んだように見える。先述した通り、東電 OL・Y.W は、東京電力が同法に基づいて採用した初の女性総合職であった。日本社会の中に、少しずつ彼女のような高位の女性や高賃金の女性も生まれてきた。だが、均等法以後に増えた働く女性の 3 分の 2 は、結局はパートや派遣などの非正規労働に流れ込み、非正規労働者は今や女性の 5 割を越えている。「非正規」は例外という意味を含んでいるが、それが寧ろ多数派という異様な状況だ。

これら非正規労働者の賃金を時給換算すると、女性パートは男性正社員の 40% 台で推移し続けている。これでは、週 40 時間の法定労働時間働いても、年収 200 万円程度しか稼げないのは当然である。正社員主体の企業内労働組合が主流の日本では、パートや派遣労働者は組合の支えがなく、賃金は横ばいを続けがちだ。最低賃金すれすれの時給でボーナスも手当も昇給もないという安さに加え、短期雇用なので、次の契約を更新しなければ削減も簡単という「便利さ」が企業に悪用され、1990 年代後半からの不況では人件費削減のため、非正規労働は、女性から、新卒者や男性、公務労働にまで及んだ。働き手の 3 人に 1 人が非正規という社会では、親や夫がいない生計維持者も非正規労働となり、生存を脅かされ続けている。「日本の貧困は女性発」といわれる所以だ。

均等法は何故、女性の雇用に対して、悪化の歯止めにならなかったのだろうか。それは、「平等を求めるなら男性並みに働くべきだ」との経済界の求めに応じ、均等法が、女性保護の撤廃と引き替えに導入されたからである。日本では、労働基準法 36 条の規定で、労使協定があれば事実上「青天井」の残業が可能である（安倍政権の「働き方改革」の一環で、大企業等の一部企業には上限規制が始まっている）。そのため、均等法前まで、女性は休日労働や 10 時以降の就労を禁止されていた。これは、男女分業を前提にし、育児や家事の時間を女性にだけ確保することで社会生活を持続可能なものにしようとする策だった。

そもそも、日本の男性が、青天井で長時間労働できるのは、家庭に主婦という女性がいて、仕事以外の労働を担ってくれるからにすぎない。また、女性の低賃金を補って「妻子を扶養」するために、男性は青天井で働くことを拒めない。保護抜きの均等法は、「性別役割分業モデル」、或いは、「妻つき男性モデル」ともいえるこうした働き方を正社員の標準として改めて定式化した。その結果、「妻」を持っていない多数の女性は、出産後は正社員には留まらず、非正規労働者への道を歩むことになった。ヨーロッパでは、雇用の平等を進める過程で、男女双方の労働時間規制を強化し、両立モデルを働き方の標準とすることで女性の経済力を高めた。日本は、男女両方の労働時間規制緩和という形で「均等」を進めたことが、女性の急速な非正社員化を招いたということになる。

1985 年は同時に、「主婦年金」といわれる第 3 号被保険者制度と、労働者派遣法も導入された年でもあった。第 3 号被保険者制度は、配偶者の扶養下にある人の保険料を免除するものだが、扶養からやっと抜け出る程度の低賃金では、保険料負担で世帯収入が逆に減ってしまう場合がある。そのため、自主的に収入制限をするパート女性も多く、これもパートの低賃金が続く原因になった。こうした働き方は、夫の年金に頼れない女性達を極端な低年金、または無年金に置くことになり、高齢社会の無年金女性問題というもう一つの貧困を生む結果となった。労働者派遣法も、均等法後は正社員の長時間労働に耐えられない女性の増加が見込まれるため、その受け皿として、パートより専門的で時給の高い仕事が必要だったとして導入された。こちらはその後、「年越し派遣村」などに象徴される貧困の土壌になった。藤原千沙・岩手大准教授は、均等法・第 3 号被保険者制度・労働者派遣法を、その後の女性の貧困を深刻化させた 3 点セットとし、「1985 年は女性の貧困元年」と呼んでいる。1985 年の「男女雇用機会均等法」は、女性の社会進出を促進するというよりは、寧ろ女性を社会から排除し、生活を困窮させる要因になってしまったのである。

宮本（2015：9）は、『下層化する女性たち：労働と家庭からの排除と貧困』の中で、1990 年代以降、女性が置かれた困窮状態を、「労働と家族からの排除」として規定している。ここでいう排除は、単なる結婚（家族形成）からの排除だけでなく、彼女達の出自家族（多くは親のいる実家）の中での排除と、出自家族の社会からの排除を含んでいる。また、労働からの排除は、人として生計を営むに足る安定した仕事と収入の世界からの排除を指している。

宮本が、同著の中で強調するのは、女性の貧困は社会的排除の産物であり、それは、不確実で低賃金の仕事や長期かつ繰り返しの失業がもたらす、「経済的マージナル化」が、ネットワークや社会的参加の機会の

喪失という「社会的マージナル化」に繋がり、更にそれが、参加や影響力の欠如という「政治的マージナル化」に至るという排除のプロセスである。貧困という経済的・社会的困難な「状態」よりも、宮本は、そこに至る「ダイナミズム」を問題とし、そのプロセスとそれを防止する方策を明らかにすることの方が、女性の貧困問題の理解と解決のために遥かに重要であると指摘するのである。何故ならば、「このような三つのマージナル化を放置すれば、社会の結束や統合性は失われ、社会の持続可能性が衰退してしまうから」（宮本 2015 : 9）である。

故に、宮本は、女性の貧困問題を、非正規雇用と低賃金という経済的困窮だけに矮小化しない。彼女は、「下層化する女性に特徴的にみられるのは、さまざまな暴力に晒されていること」（宮本 2015 : 12）であると指摘し、男性からの暴力と、社会システムの中に組み込まれた抗い難い権力構造を、経済的な困窮状態以上に問題視するのである。

若年女性の労働者・職業人としての自立は複雑である。一方で、労働市場は女性労働を求めるブル要因が働く。ところが稼ぎ手として社会的に承認を受ける男性と違い、女性には常にジェンダー役割が負わされる。家族の世話や介護は、家族の状況のなかで期待されることが多く、女性の自立を阻む。しかも下層にしばしばみられるのは、家族内における娘に対する家父長的支配であり、経済的・非経済的収奪に晒される。さらに職場でも性的ハラスメントやパワーハラスメントの対象となりやすい。（宮本 2015 : 12-13）

Young は、下層の男性達の男らしさ（マチズモ）に価値を置く文化の構造を以下の様に描いている。安定した職を奪われた単純労務の男性達は、社会的地位を手に入れる機会や将来の展望を絶たれて、流れに任せるしかなくなった。生活が安定しないため、「結婚に値する相手」にもなれなくなっていく。社会の表舞台から締め出されながらも、メディアを通じて華やかな消費社会を見せつけられる。現実を認めようとしない若い男性達は、男らしさ（マチズモ）に価値を置く文化を創造するようになる。「男らしさの力を誇示し、仲間から『尊敬』されることに躍起となり、そうした価値観を中核とする下位文化を作り上げていく」（Young = 2007 : 44）のである。彼らは、女性差別主義者であり、人種差別主義者であり、露骨なインテリ嫌いになっていく。

Young は、女性が暴力に晒される問題を次のように描く。女性の労働市場への参入と社会的地位の上昇が、男女間の対立を激化させる。対立が激化するのは、単に女性の平等への期待が高まったからだけではない。女性達の期待は男性の先入観に対する挑戦だからである。また、男女間の対立を隠蔽しようとする男性に対する抵抗でもあるからだ。これらの暴力は相対的な剥奪感から、また、平等を求める個人とそれを妨害する個人の対立から生まれる。両方が重なれば、暴力はもっと激しくなる。その結果、家庭で暴力が頻発するだけでなく、最も激しい場となる。何故ならば、Giddens の言葉を借用すれば、「そこで脅かされているのは

男性支配であり、もはや家父長的支配も素直に受け入れられる時代ではなくなっている。支配が崩れつつあるからこそ、暴力が頻発するのであり、支配が安定していれば、そのようなことは起らない」(Giddens = 1995 : 120) からである。

下層階級の場合が、まさにこれに該当する。男性至上主義文化を特徴とする「アンダークラス」においては、失業中の若い男性が、低賃金ながらも安定した仕事を持つ女性から平等な関係を求められることで、両者の間に激しい対立が生じる。その結果が夫婦別居となり、多くのシングルマザーが生まれるという道筋である。Young (=2007 : 45) 曰く、「シングルマザーの多くが夫の暴力の被害者であるのは、その結果」なのである。

以上、前述の通り、欧米社会同様に、新自由主義とニューエコノミーが隈なく波及・浸透した日本において、長らく社会システムに組み込まれていた「性別役割分業モデル」は完全に機能不全に陥っており、とりわけ「アンダークラス」においては、家族はセーフティネットというよりは、寧ろ危険な暴力装置にすらなっている状態である。そして実はこれこそが、女性の貧困問題の核心なのである。戦後の日本では、男性が稼ぎ主となって家族の中心におり、未婚女性は父親に、既婚女性は夫に扶養されるというのが、標準的な家族モデルであった。元来女性とは、男性に守られる存在だったのである。社会保障制度もこの前提に立って設計され、妻が夫に扶養される形の標準的な家族が優遇されてきた。そしてこうした優遇策である所得税の配偶者控除や社会保険料の被扶養者などが、この制度に合うように女性の働き方を制限するという現実を生み出してきたのである。

ところが、小泉構造改革以降、労働市場の度重なる規制緩和が生み出した非正規雇用の増加と、それに基づく低賃金労働の増大は、日本社会全体を貧困化し、とりわけ、旧来の社会システム故に男性の賃金の 60% 前後に留められた女性労働者の生活を直撃した。そして、稼ぎ主として女性を扶養する力を失った「アンダークラス」の父親と夫は、最早家族の大黒柱ではなく、家族という暴力装置の中に、女性を押し込めるだけの暴君に成りかねない存在である。不幸にして「アンダークラス」の家庭に生まれ、そこで耐え難い暴力に直面した場合、就労できない年齢で家族という名の暴力装置から逃れれば、「神待ち」以外の手段で寝所を確保できない若い女性の行先は「泊め男」という名の「神」の下しかなく、そこには出自である壊れた家族同様に、女性の尊厳を打ち砕く性的搾取と暴力が待ち構えている可能性が高い。就労年齢に達していれば、既に述べた通り、社会保障制度ではなく、寮付き、保育所付きの性風俗産業が、彼女達のセーフティネットになり得る。だが、そこで待ち構えているのも、やはり女性の尊厳を著しく損なう可能性が高い、感情労働の不浄なセックスワークである。しかし、彼女達は労働者として、生きるためにそこに雪崩れ込んでいる。

坂爪は、貧困のみならず、DV や疾病、障害など、複雑な問題を抱えた女性達が、そのような問題を解決するために、昼の真つ当な仕事ではなく性風俗産業を選択する理由を、彼女達なりに合理的な選択を行なった上で決定した「納得解」であるとする。同様に中村も、奨学金という名の多額の教育ローンを背負った学生達が、将来路頭に迷わないために、学生時代に高賃金の性風俗産業で働いて貴重な時間を節約することは

寧ろ賢明であると主張する。確かに、経済合理性だけを考えれば、まさにその通りなのであるが、どうしても彼らの主張には全面的に賛同し難い。性風俗産業自体を道徳的な観点から安易に全否定したり、そこに関わる女性の人間性を貶めたい訳では断じてない。性風俗産業が、社会の必要悪であることは、十分に承知している。貧困女性にとっての存在意義もだ。しかし、彼女達に軽々にその道を勧めようとは思えないのである。何故ならば、第一に、本来国家が彼女達のシティズンシップを守るのが当然であり、個人的窮乏からの脱却を市場原理と自己責任だけに委ねるのは、社会正義の観点から著しく公正を欠いているからだ。そして第二に、性風俗産業に関わるということは、既述の通り「職業スティグマ」が最悪一生付きまとい、そして、その重荷に耐えきれない場合は、「経済的貧困」よりも遥かに深い苦しみである「実存的貧困」の状態に陥る可能性があるからだ。人生を長い目で見た時、その選択肢は、寧ろ大きなマイナスとなる危険性が高いのである。そして、最後に、売春の「外傷性」が挙げられる。後の章で詳述するが、売春が心身ともに外傷性を持つものであり、女性の心と体を両面から著しく害するものであることは、既に Farley らの国際研究から証明されている。有害な仕事であることが自明である以上、仮に自己選択だとしても、安易に女性達のその選択を是認することはできない。

しかし、それにもかかわらず、労働や家族から排除された「アンダークラス」の女性達は、次々と性風俗産業の門扉を叩いている。まるでそこが、彼女達にとってのかけがえのない「居場所」であるかのように。否、既に「実存的貧困」状態にある女性達、或いは「絶望的貧困」状態にある女性達にとっては、1人の価値ある女性としてその存在を「承認」されるその場所は、間違いなく「居場所」なのである。であるならば、社会福祉学は、強引に居場所を閉ざしたり、彼女達を罰したり、教化・啓蒙してりするのではなく、彼女達のニーズを満たしながらも、その生活が未来に繋がるようなやり方で、何らかの社会福祉的支援のネットワークを構築する必要があるはずだ。彼女達は、「実存的」或いは「絶望的貧困」状態なのである。

社会において、総体としての貧困を是正するのが政治学の役割だとすると、多種多様な個別の貧困に向き合うのは社会福祉学の重要な役割である。従って、今こそ彼女達が抱えた生きづらさに光を当てて、真摯に向き合うソーシャルワークのあり方を模索する必要があるとは言えないだろうか。彼女達が抱えているのが貧困問題である以上、彼女達は紛うことなき社会福祉の支援対象なのである。

第2章 研究の背景：「大きな物語」の喪失と「実存的不安」

第1節 ポストモダン、新自由主義、そして消費社会

第1項 「ハイ・モダニティ」の到来：Giddens と「実存的不安」

(1) 本章では、研究の背景として、「実存的貧困」が社会に蔓延するに至ったマクロ要因を三つ取り上げたい。一つ目は、近代（モダン／モダニティ）から後期近代（ポストモダン／ポスト・モダニティ）社会への移行である。

現代社会とはポストモダンと呼ばれる後期近代社会のことであり、Beck は「第二の近代」、Bauman は「リキッド・モダニティ」或いは「^{フルイッド・モダニティ}流動的近代」、Stiegler は「ハイパーインダストリアル社会」、Giddens は「ハイ・モダニティ」等とその特徴から称している。後期近代は明確に前時代である近代から質的に区分される（Bauman は、あくまで近代の延長という立場であるが）性質を持つという認識の下、Giddens は、『近代とはいかなる時代か？』において、ポストモダン社会を以下のように概括する。

ポスト・モダニティとは、普通、何を指しているのでしょうか？この言葉は、過去とは明らかに本質的に異なる時代を生きているという概括的な意味合いのほかに、通例、少なくとも次のことを意味している。認識論の既存の「基礎」がすべて信頼できないことが明らかになったため、何ごとにも確信をもって認識できない点にわれわれが気づいたこと、「歴史記述」は目的論を欠いており、その結果、いかなるかたちの「進歩」もまことしやかに擁護できないこと、生態系にたいする関心や、おそらくもっと一般的には新たな社会運動が次第に顕著になるにつれて、新たな社会的、政治的協議事項が生じてきたことを、意味している。（Giddens＝2011：64-65）

つまり、端的に言えば、ポストモダンとは「不確実性の時代」を意味する。一方、近代、すなわちモダニティについて、Giddens（＝2011：13）は、「17世紀以降のヨーロッパに出現し、その後ほぼ世界中に影響が及んでいった社会生活や社会組織の様式のことをいう」と簡潔に語っているが、その本質は楽観的な進歩史観にあると言えるだろう。そして、その近代を通底した一つの支配的な思想体系、或いはシステムが、「大きな物語（grands récits）」である。

東（2000：57）が「18世紀末から20世紀半ばまで、近代国家では、成員を一つにまとめあげるためのさまざまなシステムが整備され、その働きを前提として社会が運営されてきた。システムはたとえば、思想的には人間の理性の理念として、政治的には国民国家や革命のイデオロギーとして、経済的には生産の優位として現れてきた。『大きな物語』とはそれらのシステムの総称である」と指摘するように、伝統や戦後民主主義といった国民国家的なイデオロギー、あるいはマルクス主義のように歴史的に個人の人生を根拠づける価値体系が、「大きな物語」として戦後の日本社会を牽引して来た。それらは、何に価値があり、どのように人

は生きるべきかを明確に国民に指示してくれた。従って近代とは、フランスの哲学者・Lyotard が指摘した『大きな物語』の終焉（Fin des “grands récits”）」がまだ起きていなかった、人類にとって最も幸せだった時代と言っても過言ではないだろう。

確かに、民主主義の発展や近代社会の科学技術の進化は、人々に多くの夢と希望を与えてくれた。努力すれば何時かは必ず報われる。例え、生まれや育ちがいかに卑しくても、能力さえあれば社会で立身出世が可能だという「メリトクラシー（業績主義）」の考え方を、誰もが素朴に信じることもできた。だからこそ、教育には意味があったのである。より良い教育は、将来のより高い地位を約束するものであり、良い大学に入って、大企業へという未来を誰もが簡単に思い描けた。例えそれができないとしても、右肩上がりで発展を続ける日本の高度経済成長は、ブルーカラー労働者にも十分に夢を与えるものだった。正社員として長く企業のために働けば、会社の幹部にはなれなくとも給料は生涯上がり続け、退職金を貰って不足ない年金生活を送れたのである。

戦後日本に普及した学校教育のレベルによって先々の就職経路まで細かく決定される独自の選別システムは、ハーバード大学の研究員であるダニエル・ヤンミンとチャン・マイミンによって「パイプライン・システム」（山田 2007：105）と名付けられた。高校のランクによってだいたい就職か専門学校か大学進学が決まり、大学受験によって各種大学に振り分けられ、大学の学部とランクによって、就職先が決まっていく。枝分かれしながら、就職という最終目的地に向かって、スムーズに流れていく様子をパイプラインと名付けたのだ。まだ「大きな物語」が力を持ち、今日よりも明日はより豊かになれると素朴に信じることができた近代日本社会では、この堅牢な「パイプライン・システム」に若者はただ黙って従っているだけで、手厚い企業福祉に守られ、大企業でも中小企業でも容易に終身雇用を手に入れることができたのである。

ポストモダンの始まり、すなわち『大きな物語』の終焉」が何時かは、研究者や国によって定義に諸説ある。東（2000：12）は、「とりあえず、60年代あるいは70年代以降、より狭く取れば、日本では70年の大阪万博をメルクマークとしてそれ以降、つまり、『70年代以降の文化的世界』のことをポストモダンと呼ぶ」と定義している。小熊は『1968』の中で、学生運動を基軸として、ポストモダンに生きる若者達の社会への反乱を描いているが、この時代を生きることになった若者達には、既に自分達の年長者が当たり前のように信じていた「大きな物語」を素直に信じ切れないが故の、「実存的な苦悩」が芽生え始めている。小熊（2009：14）は、1968年とその時代精神^{ツァイト・ Geist}のことを、「結論から言えば、高度成長を経て日本が先進国化しつつあったとき、現在の若者の問題とされている不登校、自傷行為、摂食障害、空虚感、閉塞感といった『現代的』な『生きづらさ』のいわば端緒が出現し、若者たちがその匂いをかぎとり、反応した現象であったと考えている」と指摘する。そして更に、「日本が高度成長によって発展途上国から先進国に変貌していく状況のなかで、当時の若者たちは、戦争・貧困・飢餓といった『近代的不幸』とは次元が異なる、いわば『現代的不幸』—アイデンティティの不安・未来への閉塞感・生の実感の欠落・リアリティの希薄さなど—に直面していた」（小熊 2009：24-25）と結論付けるのである。

小熊が指摘するように、1968年には、既にポストモダン社会の萌芽が、日本の若者達の中に見受けられたのであるが、東の定義に従い、日本におけるポストモダン社会の始まりを、大阪万博と位置付ければ、まだその時代の学生達が生きた時空間は、近代である。そこにおいては、個人が努力をすれば、そこに必ず何がしかの成果が約束された。皆がたゆまぬ努力を続ける結果、昨日よりも明日は必ずいい社会になるに違いないという共同幻想を、社会を構成する誰もが共有できた。科学技術や政治、経済等は全て過去を乗り越える形で進歩し、人々は平和な未来に常に大いなる希望を持って生きることができる安心と安全が担保された時代、それが近代、すなわちモダニティである。事実、全体主義という挿話的出来事がもたらした大きな災厄があってもなお、近代に生きる人々は未来の可能性をナイーブな程に信じていた。人類は進歩の歴史を着実に歩み続けており、近代が形作った国民国家や資本主義という制度は、人類を幸福に導くものと固く信じられていた。国家やコミュニティ、家族は個人にとって安全の源泉であり、そこに生きる個々人の日々の暮らしは文字通り日進月歩で進化し続けたのである。しかし、このような時代は Lyotard が宣言した通り、最早完全に終焉したのである。

ポストモダン社会は、安心や安全が組み込まれていた近代とは対照的に、極めて不安定でリスクに満ちた社会である。Bauman は、国家による抑圧、秩序維持、教育、社会福祉といった安定的なモダニティ（近代）を支えたメカニズムを指して、Foucault が近代社会の象徴として使った Bentham のパノプティコン（全展望監視システム）に言及しながら、しばしば丁寧に庭木を整えるガーデニングの比喻を用いて、社会秩序を形成し、個人をシステムに組み込み、そこで教育しながらも徹底的に管理統制する合理的なメカニズムの国民国家における拡大・拡充を説明した。現代社会はそのようなメカニズムが機能不全を引き起こし、統制力を失ったポスト・パノプティコン社会なのである。

多くの研究者、評論家は「歴史の終焉」、ポストモダニティ、「第二の近代」、「超近代」といった事柄について語っている。また、人間的強制の制度や、今日、生活政治が展開される社会の、社会的状況の根本的变化について、直感的にのべている。かれらがそうするのは、移動の速度を速めようとする長年の努力が、いま、自然の限界にまで達したという認識があるからだろう。権力はいまや電子信号の速さで動き、権力を構成する事象を動かすのに必要な時間は一瞬へと短縮された。権力は空間の制約をうけない、空間にしばられない、真に超領域的なものとなった。（携帯電話の出現は、空間依存にくわえられた象徴的な「最後の一撃」だったのだろうか。命令をくだし、命令の遂行を監視するのに、電話線の差し込みも必要なくなったのだ。命令をあたえる者の居場所は重要ではなくなった。つまり、「近く」と「遠く」、「いなか」と「都会」、「未開」と「文明」の違いは意味をなさなくなった。）これによって、権力保有者には、前例のないチャンスがおとずれた。権力のパノプティコン的執行にまつわる悩みが解決されたのである。近代史の現段階の形容の仕方にはいろいろあるだろうが、現在は、たぶん、なによりもまず、ポスト・パノプティコン時代だといえる。

パノプティコンで重要なのは、責任者が「その場所」に、近くの監視塔のなかにいなければならないことだった。ポスト・パノプティコンでは、人間の運命を左右するような権力レバーを握る者たちは、いつでも、だれの手もととどかないところまで、逃げていくことができるのである。

パノプティコンの終焉は、管理者、資本と労働、指導者と支持者、戦争の敵味方のあいだの、相互関与の時代の終焉を予感させる。（Bauman=2011：15-16）

ポストモダン社会における経済の国際化、多国籍化、グローバル化と、生産・貿易・金融の自由化、規制緩和と撤廃は、資本と国家、資本と政治の関係を一変させた。ポストモダン社会において、資本は国家の近代的機能を必要としなくなったのである。資本は国家とは関係なく、最も利潤を最大化する場所を求めて世界中を回遊する。国家は資本を自国に繋ぎ止め、投資と雇用と税収を確保するために、資本の奴隷に甘んじなければならない。ここで起きたのは、経済の政治に対する優位性の確立であり、その結果としての「政治の経済化」と「経済の政治化」である。

近代国家、すなわち社会の細部に至るまで規制、管理、保護する「大きな国家」の後退に伴い、ポストモダン社会において求められるのは、レーガン・サッチャー改革に代表される新保守主義的、或いは新自由主義的な「小さな国家」である。いみじくもサッチャーは、「社会などというものは存在しない」と断言した。それはつまり、「ふりむくな、お上に期待するな、自分自身の内側だけをみろ、そこには生活の進歩に必要な資源のすべて、個人的才能、意志、能力がみつかるのだから」（Bauman=2011：40）ということである。その結果、社会では様々なポストモダンの現象が生起する。脱産業化、企業の合理化、規模縮小は雇用の流動性を生むのだ。流動化は一方では選択の自由と可能性の拡大であるが、他方では不安定性の増大でもある。社会全体の液状化は、アイデンティティが仕事、職種によって決定されるのを難しくする。こうして個人のアイデンティティが、買ったもの、つまり消費によって確保されるという特異な現象も生まれる。このようなポストモダン社会において、我々現代人は、自由、解放、選択肢の増大といった恩恵に対して、不安、不確実性、リスクといった多大な代償を支払わなければならないというのが、Bauman（2011）の指摘である。不安とリスクは日常に埋め込まれたものとなり、個人のアイデンティティは絶えず自己改変を求められ続けて容易に確立することも無い。ポスト・パノプティコンにおいて、我々一般市民は、近代国家以上に強大な資本権力に翻弄される極めて不安的な存在に陥ってしまうのである。これが、ポストモダン社会における個人の生きづらさの根源であり、小熊が『1968』で描いた時代のカナリアとしての若者達の苦悩なのである。

（2） キャリア心理学者の Schlossberg は、転機：トランジション（Transition）を成人の様々な人生上の出来事として捉え、成人が急速に変化する社会において様々な挑戦を受けている中で、人生において何が起きているのかを探索し、理解し、対処できるようになること（すなわち成人の発達）を支援するキャリ

ア理論を提唱している。不確定なポストモダン社会を生き抜くためには、従来のキャリア心理学では対応できなくなったからである。

Shlossberg は、人生の中で遭遇する転機を「期待していた出来事が起きた時」「予想していなかった出来事が起きた時」「期待していた出来事が起こらなかった時」の三つに分類しているが、最も重視し、支援の必要性を説いたのは、「予想していた出来事が起こらなかった時 (Non-Event)」である。これまでの文脈で言えば、プレカリアートにとっての Non-Event は、「正規雇用に就けなかった」ということになるであろう。ストレス状態に置かれた彼らに対しては、単なる職業指導だけでなく、徹底した心理的援助が必要なのである。

Shlossberg の用いるトランジションは、人生上の「出来事」の側面が非常に強いが、通常、他のキャリア心理学や発達心理学では、トランジションは、より広い意味、すなわち発達段階の移行期として使われる。それは、Erikson のライフサイクル論や近年のライフコース論の中で繰り返し現れて来る心理・社会的発達段階での「移行」の意味である。

元来、トランジションには、このように二つの意味があるのだが、ポストモダンのプレカリアート達は、この両者の意味のトランジションの真ただ中で、ただ茫然と立ち尽くしている感がある。それを、Brinton は、「ロスト・イン・トランジション (Lost in Transition)」という言葉で巧みに表現している。

若者たちは行き先を失い、どこの「場」にも属せずにいる。(中略) 日本の社会では、学校や職場、家庭生活などの安定した「場」に属することが人々のアイデンティティや経済的な成功、心理的な充足感の源としてきわめて重要な意味をもってきた。日本人にとって、「場」の喪失がもつ意味は大きい。

ここで私が言う「ロスト・イン・トランジション」という言葉には、2重の意味がある。一つは、社会の移行の過程で若者が行き先を失ったという意味だ。いま日本の社会は、根本的な変化のなかにある。若者がまじめに努力して社会のルールを守ればしっかりとした「場」が保証された社会から、「場」との結びつきが幻想にすぎない社会へと、日本は移行しはじめているのだ。もう一つは、社会がこのように大きく変化するなかで、若者が大人に移行する過程で行き先を失っているという意味だ。思春期と1人前の大人の間の「どっちでもない場所」にさまよい込んでしまう若者が少なくないのである。(Brinton=2008: 8)

Brinton が指摘する一つ目のトランジションは、Shlossberg の「転機」の概念に、二つ目のトランジションは、発達心理学の「移行」の概念にほぼ一致する。Shlossberg にとって、転機は新しいキャリアを形成し、人間的に成長するための成長の機会でもある。その際、4S (Situation (状況), Self (自己), Support (支援), Strategies (戦略)) の全てを見直して、適切に対処する必要がある。具体的には、置かれている状況

を変えるために環境の再構成や自己主張訓練等を行う。次に、自己の中でプラスとなる部分に着目して自らのストレングスを探すと共に、コーピングによってストレスを緩和する。更に、周囲の援助を増大させるために有益な社会資源を探索し、最後に現時点で実現可能な対処の戦略をワーカーもしくはカウンセラーと一緒に作成する。これで、その転機は無事人間としての成長へと繋がるという訳だが、これは現代ではいささか安易過ぎる、と言わざるを得ないのではないだろうか。

今、日本のプレカリアートが置かれている状況は、4S の見直しだけで対処できる問題だとは思わない。日本社会の雇用環境に構造的な欠陥があるのである。湯浅は（2008：74）は、「貧困とは選択肢が奪われていき、自由な選択ができなくなる状態」であると指摘しているが、その意味で言えば、Shlossberg が主張する 4S 中の「戦略」など、今の日本の状況ではほとんど意味が無いのである。プレカリアートが置かれているのは、単なる失業状態ではない。国家と大企業によって構造的に作られた失業者である。その問題を、個人の資質やその周囲の社会資源だけで解決しろというのは、どだい無理な話である。数少ない戦略が全て尽きた時、彼らは、もう一つのトランジションすら諦めてしまう。いや、諦めざるを得ない。何故ならば、そちらのトランジションを上手く行うことの大前提が、「大きな物語」の終焉と共に、機能不全を起こしているからである。従って、若者達の間で、「希望の格差」は、生まれて当たり前なのである。

「学生」から「社会人」に、すなわち「子供」から「大人」へ場の移行は、今の日本社会では「あたりまえ」のライフコースではない。「子供」から「親」へと場を移行するにも、まずは先立つお金というリアルな問題を解決しなくてはならない。しかし、かつてそれを保障していた「パイプライン・システム」は既に 90 年代に崩壊した。Brinton（＝2008：23）は、「今の若者の『人生の道筋』が特殊なのではなく、むしろ特別だったのは、1960～1980 年代の日本で標準的だった人生の道筋のほうだということ」を理解すべきであると指摘している。更に、この困難は、「バブル経済が崩壊した後の 1990 年代に学校を出た若者達」（Brinton＝2008：7）の上に災厄のように降りかかっていると言う。赤木が、ロストジェネレーションの上の世代だけでなく、ロストジェネレーションを踏み台にして景気回復した後、その恩恵を受ける形で比較的容易に正規雇用で就くことが可能だったロストジェネレーションの下の世代にも敵愾心をぶつける理由がここにある。

今や良い大学を出ても、良い企業に入れる保障は何もない。昨今の企業が大学生に求めるものは、従来の能力とはまるで異質の能力である。本田由紀（2011：56-57）は、近代のメリトクラシー社会において高く評価された能力は、「認知的で標準的な記号操作能力（文字や数学、法則などを正確に適用し、操る能力）を主としていた。なぜなら、行政機関や企業など、近代社会を構成する主要な組織においては、整備された指揮命令系統やルール、そしてマニュアルなどに沿って行為する官僚制の原理が支配的であり、そのような組織においては、この種の能力がもっとも有効であったからである。しかし、ポスト近代社会においては、こうしたメリトクラシーもいまなお生き続けてものの、そこにさらにかぶさるようなかたちで、ハイパー・メリトクラシーが現出している」と指摘する。

更に、「ハイパー・メリトクラシーとは、非認知的で非標準的な、感情操作能力とでも呼ぶべきもの（所謂「人間力」）が、個人の評価や地位配分の基準として重要化した社会状態を意味する」とし、「ハイパー・メリトクラシーは、手続き的な公正さよりも、その場でのアドリブ的な結果の成否を重視するという点で、不断のパフォーマンスによる永続的な証明を要求する」苛烈なものであると定義する。「パイプライン・システム」が決壊した日本では、かくも厳しい「人間力」の永続的な競争を企業に求められるのである。これに常に勝ち残れる人間とは、一体どれ程の強度を持った人間存在なのであろうか。

「パイプライン・システム」が近代日本の構成員に約束していた、学校→職場→結婚→子育てという「あたりまえ」の人生の土台は崩壊したのだ。そこで、従来通りのトランジションを辿ろうと思えば、嫌でもこのハイパー・メリトクラシーを勝ち上がる必要がある。しかし、それは、Shlossberg の助言に従い、自己の努力や周囲の支援、戦略の巧さを極めたところでどうにかなる問題ではないのである。

更に、本田も指摘するように、ハイパー・メリトクラシーには、明らかに弊害がある。

第一に、能力としての要求水準が余りにも高度過ぎる。ある時点で、この要請の荷重に気付き、それに自分が応えられないと思った者は、教育機関や職場からの離脱・退出を選択することになる。

第二に、求める柔軟な諸能力が個々人の存在全体に関わるものであり、それらは一朝一夕には獲得できない。それらは、幼少期からの家庭内・家庭外での生育経験を通して長い時間をかけて形成されるものである。Bourdieu が強調したように、豊かな親のもとに生まれれば、よりよい教育を受けるチャンスは増大する（山田 2007:71）。つまり、文化的な環境は絶対に無視できないのだ。家庭における両親の経済力や文化水準が、子供の潜在的能力以上に大きな影響力を人生に及ぼすならば、この時点で既に、ハイパー・メリトクラシーは、単なるペアレント・クラシーに転じて社会内での格差を永続的に固定化させてしまう恐れすらある。そのような容易に挽回不可能な諸能力が、単なるペアレント・クラシーではなく、「生まれつきの本人の性格や能力なのだ」と社会が誤認するならば、一層その能力を持たない人間を生きにくくさせることになるであろう。

最後に、この能力は、明確に計る基準が無い、文脈依存的で極めて恣意的な能力である。最初から誰もが合意可能な「正解」が無い故に、その場の空気を読むことや文脈に沿った当意即妙なやりとりを「能力」として期待される訳だが、これを判断する人間には、必ずハロー効果や論理誤差という人事考課のエラーが生じる。そのようなエラーによって能力を否定された時、否定された側の人間が感じる屈辱感は耐え難いものになるであろうし、仮に、同郷や同じ大学の出身というだけで話が弾み、ハロー効果によって評価が高くなった場合は、その結果の恣意性を本人が勘違いしかねない。二度とそのような幸運は無い可能性があるにも関わらず、偶々評価された人間は自分の「能力」を過信するであろう。

(3) このような激動の時代を生きる我々は、変わり続ける世界に適応するために、自己を変革し続けて行かなければならない。このような認識の下に、現代社会における我々の生き方についての議論を

Giddens は「再帰的自己 (reflexive self)」という概念を用いて鮮やかに描き出している。

「再帰的自己」とは、端的に言えば、社会構造が激変し価値規範も流動化・液状化するなど社会全体のあり様が常に不明瞭・不確実に陥るが故に、仮にどのような人生設計をしたとして、事あるごとにその計画の見直しを強いられるような個人のあり方を意味する。これは、Nietzsche の「永劫回帰」のように、同じ人生を永遠に繰り返すような生き方ではない。Nietzsche は、そのような「一回性の人生」の果てしない繰り返しに対して、常に「然り」と答え得る強靱な意志を備えた「超人」を人間の理想形とし、徹底的な人生の肯定を唱えたのだが、我々が生きているポストモダン社会は、別の意味である意味苛烈である。「永劫回帰」において、「超人」は自らを変える必要は無い。ただ、永遠に繰り返される「一回性の人生」を在りのままの自分自身で受け入れ、全て肯定するのみである。従ってそこでは、不変で永遠の、自己の実存的全肯定が繰り返されている。だが、「再帰的自己」は真逆である。我々は、文字通り「一回性の人生」の中で、絶えざる自己変革を、その人生の最期の瞬間まで求められるのである。もし、ポストモダン社会において「再帰的自己」の在り方を否定するならば、その個人は社会の底辺に零れ落ちて行くほかない。そして、事実「アンダークラス」は、「再帰的自己」の確立に失敗した個人なのである。彼らは、リスクに鈍感であり、自己を変容する努力を怠った者達と見做される。その一方で、変化に対する自己の閾値を極限まで高めて、些細な変化に対しても速やかに自己を変革し、そして、柔軟に変容していく過程においてもアイデンティティの一貫性を保ち続けた個人だけが、ポストモダン社会の「超人」として社会的な成功を手に入れ、称賛される存在になれるのである。従って、キャリア心理学者の Hall が提唱した「プロティアン・キャリア」(プロメテウスのように変幻自在なキャリア) は、本来特定の個人ではなく、ポストモダン社会に生きる我々全員が強要されている働き方であると認識すべきであろう。

Giddens によれば、このような「再帰的自己」が立ち表れて来た背景には、17 世紀移行進行して来た近代化 (モダニゼーション) の特質が極限まで展開して来ていることがある。彼は近代化が進んだ社会を「モダニティ」と定義し、それが最高潮に達している現代のポストモダン社会を「ハイ・モダニティ」と呼んでいるが、それには三つの特質がある。

第一の特質は、「時間と空間の分離」である。Giddens によれば、その典型は時刻表である。我々はその時刻表を参照することによって、今ここには存在しない列車、それが運んで来る乗客や積荷などとのやり取りが可能になる。しかし、この場合の他者との結びつきは所謂対面的な相互作用ではなく、遠く離れた見えない他者とのやり取りが共通の時間の中で可能になったということを意味している。先述した Bauman の指摘のように、現代はポスト・パノプティコン社会なのだ。具体的な誰かとの結びつきに代わって、抽象的な他者とのやり取りが生活を規定していくようになって行くのである。

ここから、モダニティの第二の特質である「脱埋め込み」という現象が生じる。「脱埋め込み」とは、「社会関係がローカルな文脈から引き離され、時間と空間の無限の拡がりの中に再編成される」ということを意味している。つまり、進行する近代化は、我々が特定の閉じられたコミュニティの中だけで生活することを

不可能にする。我々は誰もが何らかの形でグローバルな世界の動きの影響下に置かれるようになったのである。これは、「象徴的通票」と「専門家システム」によって引き起こされる。

「象徴的通票」の最も分かりやすい例は貨幣である。貨幣が個人や社会、国家の間の差異を超えて「時間や空間の面でかけ離れて存在する行為者間の取引遂行を可能にしていける」(Giddens=2005: 31) ものであるが故に、個人はグローバル経済の影響下に置かれることになる。

次に、「専門家システム」とは、科学技術の成果、職業上の専門的な知識の体系のことである。このシステムは、我々の日常生活、すなわち日々食べ(栄養学など)、薬を服用し(薬学)、住み(建築学)、移動する(自動車工学など)といった領域の隅々にまで浸透している。これらのシステムは、事故や病気など前近代において日常的に直面していた危機から我々を守ってくれるものであり、その意味で日常生活における安心を我々に提供するものである。

こうした「象徴的通票」や「専門家システム」が全世界的に共有され我々の日常生活に深く入り込むことで、我々の社会と行為がその場その場のローカルな事情にではなく、より広い時間と空間の中に位置づけられるようになって行く。これが、「脱埋め込み」ということの意味である。しかし、「脱埋め込み」が進行した現代社会は、前述したような安心を我々に提供する社会であると同時に、どのような姿をしているのか分からないブラックボックスでもある。人々がグローバルに開かれた地平におかれることが進行して行った帰結として、我々の生活は個人では統制不可能なものとなっている。一般的に「専門家システム」は、他のシステムと互いに参照・利用し合っているが故に、我々にはその体系の全体を把握することが難しい。また、複数の「専門家システム」の間で生じている食い違いは、我々の選択に不安を与える。

我々は、このような不安を解消すべく、様々な「専門家システム」から取得した情報や知識に基づきながら自らの行為を繰り返し調整して行くが、我々の行為がもたらした結果が新たに「専門家システム」を再構築して行くことになり、それが我々の行為を再び変化させ、, , , というように無限の再帰性へと入り込んで行く。こうした一連の動きを、モダニティの第三の特質として Giddens は「制度的再帰性」と名付けている。

このようなモダニティの三つの特質が最高度に展開しているのが、Giddens が「ハイ・モダニティ」と称する現代社会なのである。我々は、これまでに無いほど広範な領域の中で、複数の「専門家システム」から常に新たな情報や知識を取り入れ、それらを駆使しながら生きている。しかしそうであるが故に、生活の場である社会は常に流動的に変化し続けている。こうした社会のあり方を、Giddens はドイツの社会学者・Beck の言葉を借りて、「リスク社会」と呼んでいる。この「リスク社会」に生きるということは、「肯定的にせよ否定的にせよ、行為の開かれた可能性に対して計算的な態度を持って生きる」(Giddens=2005: 32) ということである。

ここに、「ハイ・モダニティ」を生きる我々の生の姿が映し出されている。すなわち、我々は最早自分自身の未来を単に来るべき出来事の予期として捉えることはできなくなっており、「未来とは、知識が知識自身が形成された環境へと持続的に還流されるという意味で、現在において再帰的に組織される」(Giddens=

2005 : 34) ものになっているのだ。畢竟、モダニティ以前の社会においては、未来とはまさに「おのずとやってくるもの」であって、それが変わるということを殊更考える必要などなかった。それに対して、我々が住むこのポストモダン社会は、新たな情報や知識が次々と登場するに伴って修正され、変化していく。当然、その先にある未来の姿もまた常に変化する。こうした状況においては、未来とは、ある時点で、それを知ろうとする者が持ち得ている情報や知識に基づく限りでの将来予測である。その予測は、まさに現在において存在するのであって、それがそのまま既定の未来として確実にやって来るという保証など何処にも無い。いわば、一定の将来予測をしながら未来に向けて我々が生きて行くことは、リスクを孕んだ営みだということになる。我々は、常にリスクを計算しながら、本質的に流動的で不確定な社会を生きて行くのである。「ラブラスの魔」を手にしない限り、我々はこのリスクと不安から決して逃げられないのだ。

このようなリスク管理についての態度が浸透していくと、若者は、リスクを避けて下手な冒険をしないで無難な生き方を選択するようになるし、社会の側でも逸脱行動をする若者をリスク要因として排除することになる。つまり、予測可能な他者に対しては寛容であるが、自らの価値観とは相容れない行動を取る他者については、リスクを孕む要因として不寛容な態度を取るようになっていく。まるでこれは、赤木のようなプレカリアートやニートやフリーター等の「アンダークラス」にスティグマを貼り付けて排除し、無難な公務員的生き方に安心と安定を求める現代の日本社会の姿そのものではないだろうか。

こうした「再帰的自己」という自己のあり方は、我々に何をもたらすのであろうか。自らの幸せな人生、それがもたらされることを、我々の誰もが望んでいることは確かである。しかし、Giddens は、「再帰的自己」として生きて行くことが、我々にある不安を抱かせる恐れがあることを指摘している。我々が自らの人生を生きて行く上では、「自分は本当に存在するのだろうか」「核戦争で世界が無くなってしまうのではないか」などの「それ自体としては問いとしてあり得るが、それへの解は容易には得られないような問い」が存在する。そうした問いが我々に引き起こす名状し難い不安を、Giddens は、「実存的不安 (ontological insecurity)」と呼ぶ。

ただ、我々は、通常そのような問題を殊更に問うこともしないし、だからといって不安になることも無い。我々はそうした問いに絡め取られること無く、「今、ここ」を生き、毎日の人生を大過無く送り続けることができている。そのような「実際に生きている」「世界が続いている」という実践ないし事実それ自体が、「実存的不安」を解消し、我々は社会と自己の存在それ自体への深い信頼と安心を得る。Giddens (=2005 : 38) は、これを「存在論的安心 (ontological security)」と名付けている。

だが、この「存在論的安心」が、昨今根底から揺さぶられているのだ。我々は既に、「9.11」を目撃した。2001 年の「アメリカ同時多発テロ事件」は、我々の平穏な日常は、ある日突然何の前触れも無く、一瞬で崩れ落ちたツインタワーの様に崩落するものであることを証明するに十分であった。そして、我々は、「3.11」を、身をもって体験した。2011 年の東日本大震災は、東北地方を襲った大地震と大津波の甚大な人的・物的被害に加えて、福島第一原発のメルトダウンという非日常が、「核戦争で世界が無くなってしまうのではな

いか」というかつては空想でしかあり得なかった問いを、単なる想像上のものから現実社会の極めてリアルな問いとして実感するに十分であった。人間の実存を脅かす事態が全世界で次々発生する 2000 年代において、我々は最早近代が保障していた牧歌的な平和や生命の安全・安心を、人生における与件としては認識できない。Giddens が「実存的不安」と呼んだものが、歴史上、今ほど我々の心理を脅かしたことは無いのである。

(4) 既述の通り、ポストモダン社会において、我々の「存在論的安心」は日々脅かされ、個人は否が応でも「実存的不安」を抱かざるを得ない訳だが、Giddens (=2005: 116-117) は、存在の本質に関する安心とは、「ほとんどの人にとって自己のアイデンティティの連続性にたいして、また、行為を取り囲む社会的、物質的環境の安定性にたいしていただく確信のことをいう。信頼という観念にとってきわめて重要な、人とのごとの信憑性にたいする意識は存在論的安心の基盤をなしており、それゆえ両者は、心理学的に密接に関係している。存在論的安心は、『存在』、あるいは現象学の用語でいう『世界内存在』と関係している」と指摘している。

「ハイ・モダニティ」において、我々が「存在論的安心」を手に入れるためには、何よりもまず、自らのアイデンティティを堅固に保ち続ける作業が必要なのである。そして Giddens は、そのために必要な自我の起源を心理学における幼児期の愛着形成（アタッチメント）に求めるのである。

かりにこのような生きる上で途方もない潜在的な悩みを考えあわせば、人は誰もが、なぜ、つねに存在の本質に関する重度の不安状態に陥らないのであろうか。大多数の人がこうした自己尋問に関して多くの場合いただく安心感の根源は、幼児期初期に特有な経験のなかに見いだすことができる。「普通の」人は、生まれてすぐにこうした存在の本質に関する過敏な感情を緩和したり鈍くさせる、信頼という「投薬」を基本的に受けているからである、と私は主張したい。あるいは、比喩を少し変えれば、すべての人間が潜在的に陥る可能性がある存在論的不安から人々を守ってくれる感情面での予防接種を「普通の」人は受けている。この予防接種を行う存在が、幼児の介護を中心となっておこなう人間、ほとんどの人にとっては、母親である。

エリク・エリクソンの研究は、幼児の初期発達過程で信頼感のもつ意味について重要な洞察をおこなっている。長く変わらない自我の同一性の核心には、「基本的信頼」と称するものが存在する、とエリクソンは主張している。幼児期における信頼について論ずる際に、エリクソンは、私がすでにそれとなく言及しておいた信仰という不可欠な要素に注意を向けている。(Giddens=2005: 119)

前章において、「実存的貧困」概念の基底に存在する愛の領域の「非承認」、すなわち人生初期の愛着形成の失敗がいかにアイデンティティの確立を阻害するかを述べたが、「実存的不安」の源泉として、Giddens も

本研究と全く同じ立場を取る。彼は、「普通の」人は、という記述で一般人が「実存的不安」をさほど抱かない理由を説明するのだが、ポストモダン社会の特徴の一つである政治の経済化は、新自由主義という市場原理主義を旨とする政治経済システムとなって全世界に波及し、現実社会を著しい格差社会に導いている。雇用のセーフティネットが激しく流動化し、非正規雇用労働者が全労働者の4割に達するような不安定な社会においては、Giddens が「普通の人」と呼ぶような存在は減少の一途を辿っている。

経済的にゆとりを無くした親が虐待を引き起こす蓋然性は当然一般人や富裕層に比べて高く、事実日本社会の貧困化と足並みを揃えるように、児童虐待の件数は右肩上がり推移している。厚生労働省の統計では、全国210か所の児童相談所が児童虐待相談として対応した件数は、平成20年度に42,664件だったが、平成29年度は速報値で過去最大の133,778件を記録した。日本社会から「普通の人」が減り続け、愛の領域における「容認できない『非承認』」が増え続けるということは、この国でそれだけ多くの子ども達が、幼少期に存在論的な安心を奪われていることを意味する。彼らの多くは長じたのちも不安を抱えたまま、社会の片隅で生きづらさを抱えながら暮らしているのであろう。また、児童虐待は極めて暗数が多いことは以前から指摘されている。近代社会において安全基地として機能した家族は、ポストモダン社会においては Beck が「ゾンビ的制度」と表現したように、生きているように見えるが実態は死んだ制度、機能不全に陥った制度になっている。前章で、貧困男性が支配するその場所は最早女性にとっては危険な暴力装置になりつつあることを示したが、同様にそこは子どもにとっても危険な暴力の温床になりうる。家族という帳の陰で今現在どれほどの児童虐待やDVが起きているのかは、誰も正確には把握はできないであろう。

ポストモダン社会に埋め込まれた「実存的不安」は、新自由主義というポストモダン社会が辿り着いた政治経済システムが生み出す格差と経済的な貧困の増加によってより一層悪化しているのだが、加えてキャリアの面から見ても、その不安は拡大し、アイデンティティも脆弱になっている。近代において職業と強く結びついていた個人のアイデンティティ形成は、雇用の流動化が著しく、かつ「再帰的自己」を強要される現代においては、確立させるのは困難になりつつある。ポストモダン社会で生き抜けるだけの「プロティアン・キャリア」は、誰もが手に入れられる類のものではない。頑なに一つの生き方、一つのキャリアだけに拘れば、それを失った時、全てを失って簡単に公的扶助に陥るのが、現代社会なのである。

前章では、^{ディザフィリエ}「社会喪失者」の状態に陥っている「アンダークラス」の苦境を子細に取り上げたが、Castel や Paugam らのフランスの「社会参入最低所得 (RMI)」受給者の研究から明らかになったのは、彼らの職業的アイデンティティの欠落は、存在論的な人間としてのアイデンティティをも無残に打ち砕いているという事実である。新自由主義がもたらした規制緩和は、アイデンティティの領域にすら及んでおり、いわばアイデンティティの規制緩和とフレキシブル化に最も苦悩せざるをえないのは、他ならぬ「アンダークラス」なのである。

Bauman (=2009: 73) は、「アンダークラス」と呼ばれる人々のアイデンティティについて、その本質

はアイデンティティの不在であると見做し、彼らのアイデンティティは、予め否定されていると指摘する。Bauman によれば、「アンダークラス・アイデンティティ」とは、エスニックな義務や道徳的ケアの対象である個人性や「顔」の消去であり、人間性そのものの否定なのである。「アンダークラス」が持つスティグマは、人間性の本質を疎外するという意味においては、他のいかなるスティグマよりも苛烈である。そこから敷衍して、彼は Agamben が提唱した「ホモ・サケル」の概念を「アンダークラス」に投影するのである。

「アンダークラス」とは、ジョルジョ・アガンベンが述べたような、自分たちの「ビオス」（つまり、社会的に認知された主体の生）を「ゾーエー」（人間として認識できるあらゆる属性を剥ぎ取られるか、取り消された、剥き出しの動物的な生）へと還元されてしまった人々の雑多な集合体のことです。同じ運命に見舞われるもう一つのカテゴリーが難民—国家のない、無資格滞在者—、すなわち、領土に基礎を置く主権の世界の中の領土なき人々です。彼らは、アンダークラスの人々の困難を共有しつつも、その他のすべての剥奪の頂点で、特別に設定された「非場」（難民というレッテルを貼られるか、残りの「ノーマルで」「完全な」人々が生活し、移動する空間から、彼らを区別す避難所を求める人々のためのキャンプ）を除いて、統治権の下にある領土の範囲内に物理的に存在する権利を否定されています。（Bauman=2009：73）

Agamben が持ち出す、古代ローマ時代、世俗の法秩序の外にいた存在（ひいては、この者に対しては誰もが法律上の殺人罪に問われることなく殺害することができるとされた）・「ホモ・サケル（Homo Sacer）」は、ローマ時代の特異な囚人のことであり、bios（ビオス、社会的・政治的生）を奪われ、zoe（ゾーエー、生物的な生）しか持たない存在であるという。Agamben はそのような生を、Benjamin の概念を借用して「剥き出しの生」と呼び、Foucault が指摘した「生政治」はこの「剥き出しの生」を標的にしていると指摘する。また、Agamben は、Schmitt の「例外状態」の概念を拡張して、現代社会は、『「例外状態」が常態化」した社会であるとするが、そのような社会構造の中で、Bauman が指摘するように、難民同様に「アンダークラス」は、着実に「ホモ・サケル」化しているのである。事実、それを象徴するような事件が世界中で発生しているが、その中からここではノルウェーと日本の事例を一つずつ取り上げ、移民や障害者など、社会的排除の対象であっても本来必ずしも「排除された者」ではない「アンダークラス」が、徐々に法的な「承認」を欠いた「ホモ・サケル」化しつつある事例を以下に概説して、本項のまとめとする。

(5) 「ノルウェー連続テロ事件」は、2011 年 7 月 22 日にノルウェーの首都オスロ・ウトヤ島で発生した連続テロ事件である。政府庁舎爆破事件により 8 人、銃乱射事件により 69 人がそれぞれ死亡しており、両事件で 77 人が死亡したが、ノルウェー国内において第二次世界大戦以降最悪の惨事であり、世界史上においても短時間における単独犯の犯行としては最多の死傷者数を記録している。

ノルウェー警察当局により、両事件は極右思想を持つキリスト教原理主義者のアンネシュ・ブレイビク（当時 32 歳）が起こした連続テロとされており、共犯者は確認されていない。ブレイビクがノルウェー社会を外敵から守るべく、自らのアイデンティティの拠り所としたのはキリスト教原理主義と白人至上主義であり、この事件はテロ事件であると同時に、ヘイトクライムでもあった。ブレイビクは 2011 年 7 月 17 日に Twitter に犯行決意を書き込み、2011 年 7 月 22 日の犯行直前に 1,514 ページの文書をウェブ上に公開。自らテンブル騎士団を自称し、殉死作戦を書き連ねた。「ロンドン同時多発テロ事件」においても、犯行声明や動画は残されていたが、それ以上に自らの存在を誇示している点で、彼が抱えた「自傷的存在証明」の病理は深い。そして、ブレイビクの半生を辿った時、そこに Bauman が指摘する「アンダークラス・アイデンティティ」の桎梏が極めて色濃く浮かび上がるのである。

彼は看護師の母親が再婚するまで母子家庭に生まれ育ったが、シングルマザーだった看護師の母親を「穏健フェミニスト」として心から憎んでいるという。そして、思春期から非行グループに交わり、16 歳で逮捕された後は、実の父親とは一度も会っていない。この段階で、Honneth の承認論で言えば、ブレイビクは、愛、法、連帯の三領域全てにおいて一度「承認」を喪失している。その後、非行グループ内でも衝突して居場所を失ったために彼はグループから離脱、19 歳の時には投資で失敗して 4,000 万円近い負債まで抱えた。彼の「実存的貧困」は、ここで遂に「絶望的貧困」状態に至ったのである。

ブレイビクの実の父は外交官であり、母親の後の再婚相手はノルウェー陸軍中將である。母親も看護師という専門職であり、決して彼の出自自体は典型的な貧困層のそれではないのであるが、太宰や東電 OL と同じように、「重要な他者」を人生の早期に持つことができなかった「^{ディザファイリエ}社会喪失者」の苦悩が彼の半生に窺える。

彼は、20 代からステロイド剤を使い始めて肉体改造に着手し、更に 20 代前半のうちに顎、鼻、額に整形手術を受けた。それらが原因で徴兵検査の際「軍務に適さない」と判定されたため、軍には入隊できなかった。こうした人体改造は三島由紀夫と、そして美容整形は、以下に記す「相模原障害者施設殺傷事件」の犯人とも共通する「自傷的存在証明」である。

このような「^{ディザファイリエ}社会喪失者」である彼（繰り返すが、彼の出自自体は決して「アンダークラス」ではない）には、やがて大学中退の前科者で、無職という「アンダークラス」のスティグマが付与された。ポストモダン社会という極めて不安定な足場の中で、彼のアイデンティティは剥奪されたのである。そしてその結果、ブレイビクのルサンチマンは、現代の「ホモ・サケル」である「難民」とイスラムという名の「異邦人」に向けられたのだ。彼らを社会に包摂しようと努めてきたノルウェー労働党の政治集会場において、彼は銃による無差別乱射を行い、政府庁舎を爆破しようとした。ブレイビクのような白人「アンダークラス」よりも、「ホモ・サケル」である難民やイスラム教徒を労わっているように見えるリベラルなノルウェー労働党政権とその支持者達もまた、彼にとっては「ホモ・サケル」と同一視して憎むべき存在になったのである。

「相模原障害者施設殺傷事件」は、知的障害者施設「神奈川県立 津久井やまゆり園」が犯行当時 26 歳

の元職員・植松聖被告に職員が少ない夜半に襲撃され、選別された重症の障害者 19 人が死亡、更に 26 人が重軽傷を負った、戦後の日本犯罪史上最悪の事件である。この事件の死傷者数は、短時間のマスマーダーとしては、従来最悪とされてきた 1938 年の「津山事件」(30 人死亡)にも匹敵する(オウム真理教による集団でのテロ事件は除く)。

植松被告が「ホモ・サケル」として選別したのは、重症の心身障害者である。彼は意思疎通できないレベルの障害者は、社会に対して不幸をまき散らすだけの「心失者」と規定する独自の優生思想を掲げて、今なお、自らの犯行に対して反省することもなく、2018 年 7 月、月刊『創』誌上において、自身の優生思想と選民思想を漫画化して社会に公表した。美容整形や刺青などの肉体改造も見られ、「自傷的存在証明」の病理はブレイビク同様に顕著である。当然、植松被告が犯行当時置かれていた状態も、完全に「アンダークラス」の「^{ディザフイリエ}社会喪失者」である。

ごく一般的な家庭に生まれ育ち、普通に暮らしていたかに見えた植松被告の人生に翳が射したのは高校時代であった。同級生とトラブルになり、暴力事件を起こして転校を余儀なくされた。また、教員を目指して大学に進学してからは人が変わったように「強い者」に憧れを抱き始めた。これ見よがしに全身に反社会的な刺青を入れ、反グレ集団や右翼団体と交友を持つようになり、違法薬物に依存し始めた。加えて、実家において酷い DV を振るうようになり、両親は彼を 1 人家に置いて逃げ出したと言われる。「津久井やまゆり園」に辿り着く前には、運送業やデリヘルドライバーなど、最底辺のプレカリアートの職を転々としており、障害者を「税金の無駄」と揶揄する一方で、自らは事件前、3 月 24 日から 31 日の 8 日間にかけて生活保護を受給し、それを遊興費として浪費していた。数百万円の借金があったという報道もなされているように、事件直前は「絶望的貧困」状態にあったと想定される。更に、彼は「津久井やまゆり園」で臨時職員として働いていた時、「障害者は殺すべき」という優生思想を上司に語ったが、その際、自傷他害の恐れありと判断され、精神科病院に措置入院させられている。彼自身が、彼が「ホモ・サケル」と見做した「障害者」の 1 人なのであるが、その現実には認めようとはしない。これは、Vaillant による防衛機制の分類で言えば、レベル 1 の自己愛的精神病的防衛である「否認 (Denial)」である。このような歪んだ認知が生まれる背景に、愛、法、連帯の三領域全てにおける「承認」の欠損が存在することは疑いの余地がない。

ノルウェーと日本の二つの事件に共通して見られるのは、ポストモダン社会の「実存的不安」と雇用の流動化が、元来は貧困層ではないような普通の青年のアイデンティティを完全に破壊して「絶望的貧困」状態をもたらし、ルサンチマンから彼らが「ホモ・サケル」と見做した存在に理不尽な怒りの矛先を向けたという一連の社会病理である。そして、彼らは Standing が指摘したプレカリアートの一般論に合致するように、極右思想というアイデンティティ (ナショナル・アイデンティティは、貧困者にとって、その国に生まれただけで手に入れられる唯一の誇りなのである) に縋り、自分とは異質な存在を排除しようとするのだ。国家、地域社会、家族の全てが液状化したポストモダン社会において、貧困状態に陥った「アンダークラス」が不確実性の中でそれ以上自分を失わないためには、現代社会がそうであるように、異質なものを受け入れてそ

れに自己を同化するか、或いは異質なものを徹底して排除するか、またはその両者を同時に行うか、のいずれかしかない。しかし、「アンダークラス」の「^{デ・イ・ザ・フ・イ・リ・エ}社会喪失者」である彼らは、自らの境遇を素直に受け入れられるだけの本源的なナルシズムを持ち合わせてはいないのだ。必然的に、「世界内存在 (In-der-Welt-sein)」としての自我を保つためには、自分達以下の存在を、すなわち排除すべき異物を必要とするのであるが、それが彼らが選定した各々の「ホモ・サケル」なのである。

ローマ時代の「ホモ・サケル」は、明らかに法の領域で著しい「非承認」状態に置かれた「^{エ・ク・ス・ク・リ・テ}排除された者」であった。Agamben が取り上げた我々の時代の「ホモ・サケル」は、ホロコーストに遭遇した戦時中のユダヤ人、そして現代の難民であって、彼らもまた紛れもなく「^{エ・ク・ス・ク・リ・テ}排除された者」である。しかし、移民やイスラム原理主義者、或いは重症の心身障害者は、「^{デ・イ・ザ・フ・イ・リ・エ}社会喪失者」であっても、「^{エ・ク・ス・ク・リ・テ}排除された者」ではない。従って、現実には、彼らや彼らを支援する立場の者達を殺害したブレイビクや植松被告の方が、逆に法によって裁かれる訳であるが、彼らの主観の中では、今なお彼らが殺めた存在は、「ホモ・サケル」なのであろう。植松被告に至っては、殺人の免責のみならず、障害者の口減らしという社会奉仕活動に対する金銭的な報酬までも要求する手紙を事前に首相宛にしたためているほどである。

ブレイビクは、ノルウェーの司法制度において、統合失調症による心神喪失状態が認められた。植松被告の場合は措置入院の過去があり、複合型のパーソナリティ障害が認められるものの、現状責任能力までは棄却されないと目されている。同じような凶行に至った人間に対する精神医学と司法機関の判断は分かれた。ただ、ここで強調しておきたいのは、彼らのような人間は、この社会に数え切れないほど存在しているという現実である。つまり、何らかの精神疾患や障害が、このような事件を引き起こすのではない。だが、彼らは共に、「絶望的貧困」状態にあったのである。そしてそれこそが、彼らの「自傷的存在証明」の本質的な原因なのである。その背景に存在するのが、ポストモダン社会に埋め込まれた「実存的不安」とそこから派生した「実存的貧困」である以上、彼らの訴えに向き合い、彼らを苛んだ不安と孤独を解消する術を探さない限り、第二、第三のブレイビクや植松被告が、世界中で彼らが恣意的に選んだ「ホモ・サケル」に対して、同様の凶行をこれからも繰り返すことになるだろう。ポストモダン社会とは「不確実性の時代」である、と冒頭に記したが、上記の事例から明らかになるのは、そのような液状化したリスク社会で生きることが、自己愛やアイデンティティが脆弱な人間にとっては、物質的欠乏状態以上に耐え難い、存在論的な苦悩をもたらすのだ、という冷酷な現実なのである。

第2項 「新自由主義」が生み出す格差社会：「物質的不幸」と「現代的不幸」

(1) 「実存的貧困」が社会に蔓延するに至ったマクロ要因の二つ目は、「新自由主義」の全世界への波及・浸透と、それが必然的にもたらす「生権力」の影響である。前者は、格差社会を正当化し、社会において成功できなかった者を、「自己責任」の名の下に断罪する。経済的合理性と利潤の追求が道徳や倫理より

も優先される中、著しく倫理を欠く企業家であっても、成功ゆえに社会の寵児として持て囃されることもある。このような優勝劣敗の政治経済システムにおいて、敗者に属する「アンダークラス」は、勝者に属する「セレブレティ」の生活を至近で目撃する以上、「相対的剥奪」の感情は著しく募ることになる。加えて、グローバル化の深化が、国内のみならず、全世界のセレブリティの生活を、SNS やテレビ、インターネットを通してリアルタイムで届けることを可能にした結果、我々にとって青く映るのは、最早隣の芝生だけではなくなくなってしまった。自分の芝生以外の全ての芝生が鮮明に見えてしまい、否が応でも比較対象になってしまう以上、下方比較だけに安堵することはできない。終わりのない上方比較は当然かつてない程の渴望感と徒労感を全ての生活者にもたらし、それ故に、どんなに手入れをした芝生を備えていても、自分の芝生が果たして他者から見て本当に十分に青いのか、という確かな実感を持つことはできない。故に、我々は、新自由主義の下では際限の無い経済競争（消費競争）に取り込まれてしまい、閉じた世界を生きることができた近代以前のような、安心を手にすることができないのである。

「生権力」は、「新自由主義」の下で新たに生まれた主権権力である。Foucault が「生権力 (bio-politique)」と名付けたその主権権力の在り方は、「新自由主義」の下では、「市場原理の内面化によってセルフ・マネジメントの主体を形成し、そうした主体形成のモデルに適応しえない諸個人を容赦なく社会の外へと打ち捨てる」（佐藤 2016 : 102）。従来の「規律権力」と異なり、「新自由主義」がもたらした「生権力」は、前項で Giddens が「再帰的自己」で描いた個人の在り方を、政治経済システムの中で常に個人に「自分自身の主たれ。自分をより良く管理せよ」と強要するのである。そしてそれは、最初から正しい方向性が決まっている。つまり、経済的に優越するということが唯一絶対の目標とされ、その目標を達成するように、個人に対して自分という資本の価値をより一層高めるように強く働きかけるのである。その終わりなき自己変革・自己投資は、それができない者に対して強い苦痛と閉塞感をもたらす。また、個人の能力には、Bourdieu が文化資本 (le capital culturel)」という概念で示したように、世代を超えて蓄積され、個人の努力ではいかんともしがたいものがあるのだが、「新自由主義」における「生権力」は、それを持たない者達の機会を理不尽に奪う。

「アンダークラス」の両親に生まれ落ちた者が、「アンダークラス」の状態から這い上がれないのは、個人の資質の問題というよりは寧ろ、劣等な「文化資本」に負う部分が多いのである。だが、「新自由主義」の下ではそのような格差が拡大再生産されることはあっても、ほとんど縮小することはない。故に、山田が提唱するような「希望の格差」が社会の中に生まれ、かつては極めて経済的に均質な社会だった日本において、橋本が主張するように、欧米では以前から白眼視されてきた「アンダークラス」という不穏な「階級」が徐々に生まれつつある。このような状況において、不幸にして社会的排除の対象である「アンダークラス」に所属した人間は、自己のアイデンティティが確立しないが故に、益々「実存的不安」が大きくなってしまっている。

本項では、ここで改めてこれまで説明無しに何度も用いて来た「新自由主義 (neo liberalism)」について

概観し、それが 1980 年代の中曽根政権誕生以降の 40 年間でどのように日本社会を変容させたかについて考察を深め、「新自由主義」が持つ社会を分断する力に警鐘を鳴らすと共に、諸々の格差と社会的排除、そして本研究が第 4 章以降の実証研究で取り上げる性風俗産業従事者の生きづらさ、すなわち「女性の貧困」とどのように結びついているのかを論じたい。

「新自由主義 (neo liberalism)」は、文字通り旧来の「自由主義 (liberalism)」という存在を前提とする。

「自由主義」は、個人的自由、人間の尊厳という基礎的な生存原理を出発点に据える。Rousseau に代表される啓蒙思想から生まれた近代思想の一つであり、人間は理性を持ち従来の権威から自由であり自己決定権を持つとの立場から、政治的には「政府からの自由」である自由権や個人主義、「政府への自由」である国民主権などの民主主義、経済的には私的所有権と自由市場による資本主義などの思想や体制の基礎となり、またそれらの総称ともなった。「自由主義」は政治や経済における多元主義でもある。この「自由主義」、「リベラル／リベラリズム」は、欧米ではかなり異なる発展を遂げた。ヨーロッパで生まれた古典的な意味での「リベラリズム」は、本来自由市場と夜警国家を意味する。市場には「神の見えざる手」が働くため、政府は徒に市場に介入すべきではないとアダム・スミスは主張したが、その考え方に従い、国家の機能を安全保障や治安維持など最小限にとどめた自由主義国家を目指すべきとする考え方が「自由主義国家論」或いは「夜警国家論」である。この考え方は、19 世紀末期から 20 世紀初頭までは広がりを見せたが、世界恐慌によって、自由主義国家論的な「自由な資本主義」は抑制されていった。そして、ヨーロッパで誕生した古典的な「自由主義」に社会主義的な修正を加えて誕生したのが、アメリカで生まれた「福祉自由主義 (welfare liberalism)」である。1930 年代に民主党のフランクリン・ルーズベルト大統領によるニューディール政策の際に、福祉国家的諸政策が「リベラリズム」と関連付けられたため、アメリカで一般に「リベラル／リベラリズム」と言った場合は、この「福祉自由主義」を意味する。

本項、及び本研究全体で用いる「新自由主義 (neo liberalism)」は、このようなアメリカで派生した社会主義的な修正を施された「リベラリズム」を、古典的な意味での「自由主義」に回帰させようとする潮流の一つである。なお、イギリスでは「新自由主義 (new liberalism)」は、アメリカ的な「福祉自由主義」を意味する。20 世紀中葉において、古典的な「自由主義」をルーツとしながらも、全く意味が異なる二つの新しい「自由主義」が大西洋の両側に誕生した訳であるが、元来「自由主義」は政治や経済における多元主義であるため、そのような事態が起きたと理解できる。

「新自由主義」は、アメリカにおいて社会主義的な修正を受けた「福祉自由主義」を、再度古典的な「自由主義」に押し戻す潮流の一つである、と先に一般論について述べたが、実はその単純な認識は正確ではない。経済学者の橋本 (2012 : 20) は「レッセ・フェールは、現代でも有力な思想の一つとして生き続けている。市場原理主義・新自由主義と呼ばれる思想がそれであり、政府の介入を排し、規制緩和・自由主義による競争促進政策が、経済を強くするため必要と考えた。イギリスのマーガレット・サッチャー、アメリカのロナルド・レーガン、日本の小泉純一郎による構造改革路線はこの経済思想である」と指摘しているが、こ

れは完全に誤りである。

「新自由主義」は、一見すると橋木が指摘するように、政府の市場への介入を排しているように見受けられるが、古典的な「自由主義」、レッセ・フェール（自由放任）への回帰とは異なり、実はその本質は極めて介入主義的なのである。ただ、介入する場所が、ケインズ経済学とは大きく異なるだけなのだ。それに関しては、改めて次項に詳述し、「新自由主義」が、単なる政治経済イデオロギーではなく、その本質は国民全体に影響を及ぼすより広範な「統治イデオロギー」であることを概説する。

さて、本研究で用いる「新自由主義」がアメリカ的な意味での「新自由主義^{ネオリベラリズム}」であることを確認したところで、この概念が意味する三つの次元、すなわち、①イデオロギー、②統治様式、③政策パッケージについて以下に考察を加えるが、本項では、既述の通り、主として政治経済的側面である①のイデオロギー、そして③の政策パッケージに関して概説する。②の統治様式は、ある意味「新自由主義」の本質ともいえる部分であるため、これに関しては項を改め、Foucault の「統治性」や「生権力」の解釈を加えながら、次項で更に考察を加える。

①のイデオロギーとしての「新自由主義」は、人々に一つの理想的な社会像を与える。それは、自由市場を中心とした消費者文化に支配されたイメージであり、こうした社会が他の社会よりも快適であり、より多くの幸福をもたらすと人々に教唆する。つまり、このイデオロギーは、「物質的な財の生産と交換、消費を、人間の経験の中心的なものに見做しているという点で、経済イデオロギーである。しかしながら新自由主義のイデオロギーは、人々に不可避性の感覚を植えつけるという点で政治的イデオロギー」（山岡 2014 : 26）でもある。

山岡が指摘するように、「新自由主義」のイデオロギーの本質は、市場原理主義と徹底した自由経済競争なのであるが、更にそれが不可避の事態なのである。「新自由主義」国家において、このイデオロギー支配から 1 人だけ降りることは許されない。その意味では極めて政治的であり、全体主義やマルクス主義のように、「新自由主義」が国家の基本的な方向性を示すものである限り、イデオロギーを変更する国民の総意とそれに基づく新しい政府が誕生しない限り、我々はこのイデオロギーに従う他はないのである。イデオロギーとしての「不可避性」の感覚は、往々にして為政者の言葉となって示される。サッチャーはしばしば閣僚に対して、「他の選択肢は無い（There is no alternative.）」と語ったとされる。また、近年の日本では、安倍政権がアベノミクスを推進する際、自民党は「この道しかない」をスローガンに掲げて選挙戦を戦った。ポストモダン社会においては、唯一絶対なものが否定されており、本来我々は無限ともいえる選択肢を持っている筈なのに、「新自由主義」においてこのようなイデオロギーの「不可避性」に陥っているのは極めて皮肉なことである。だが、「新自由主義」がイデオロギーとして他のイデオロギーよりも秀でている点が、まさにこのセルフ・マネージメントを全国民に強要し、受け入れさせる枠組みなのである。次項で改めて詳述するが、「新自由主義」は、為政者から一方的に押し突けられるだけのイデオロギーではなく、為政者の都合のいいように、そのイデオロギーに相応しい人間として自らを変革させるように個人に強く働きかけるシステムが

組み込まれた、いわば「制度的再帰性」を持ったイデオロギーなのである。これは、あたかも Bateson の「ダブル・バインド理論 (double bind theory)」の様に個人を巧妙に束縛して心理的な袋小路に追い詰める。「新自由主義」からドロップアウトしても、ドロップアウトしなくても、ストレスフルな状態は変わらない。いずれにせよ際限の無い競争と自己変革を強要される個人が置かれた状態は、常に不安と隣合わせである。

③の政策パッケージとして「新自由主義」を見ると、「新自由主義」と呼ばれる政策にはほぼ共通して含まれる原理が存在する。それが、「D-L-P 公式」である。つまり、①規制緩和 (deregulation)、とりわけ経済に関する規制緩和、②自由化 (liberalization)、とりわけ商業と産業の自由化、③民営化 (privatization)、とりわけ国営企業の民営化という三原理のセットである。そして、これらの原理の運用と結びつくのが、「減税 (とりわけ大企業や高額所得者の)、社会保障の削減、インフレーション抑制を目指す中央銀行による金利政策、政府の小規模化、生産性や労働力の弾力化の名の下での労働運動の抑制、地獄的なグローバルな経済統合、といった種々の政策だとされる」。(山岡 2014 : 27)

上記の政策が徹底的に実行されれば、社会において労働者の雇用は流動化し、経済的な勝ち組である富裕層と負け組である貧困層への二極化が生じるのは自明であろう。事実、『21 世紀の資本』の中で, Piketty は、戦後先進国において、富の不均衡は 19 世紀の水準まで拡大したことを各種経済統計を基に指摘したが、これは「新自由主義」の当然の帰結である。ポストモダン社会において、我々が抱く不安は存在論的なものであるが、「新自由主義」がもたらす不安は、肌感覚としてよりリアルな経済的なものである。その不安を掻き消すためにも、どんなに不本意であっても我々は経済競争を降りられないのだ。近代を支えた「大きな物語」は終焉した。サッチャーは、「社会などというものは無い (There is no such thing as society.)」と断言し、徹底した個人による「自己責任」を社会の全成員に対して求めた。未来への希望と寄る辺を奪われたうえで、我々は冷たい自己責任論を押し付けられ、容赦ない経済競争の真っ只中に追いやられたのである。

「構造改革」論者は、改革によって「強い個人」が生まれると言う。しかし、私には全くそうとは思えない。そのシステムに耐えられる強さを獲得できる人間の数は限られている。確かに社会の中の少数者は「強い個人」を獲得するかもしれない。しかし大多数の私たちはそんな強い人間にはなりえない。それは私たちが決して劣っているからではない。そもそも新自由主義は、自然な人間としてはありえない強度を持つ人間を標準と措定しているからである。そして、そうした「強い人間」が標準とされ、弱い人間は努力の足りない人たちだとして、「強くなれないのは自己責任だ」として切り捨てられることになる。(上田 2005 : 96)

新自由主義が生み出す生きづらさを、上田は上記のように述べるが、その指摘は正鵠を得ている。我々の大多数は、新自由主義が措定するような強度を持った人間ではないのである。

畢竟、労働者は強大な資本の奴隷と化し、強大な資本は政治権力と他の資本を飲み込んでより一層拡大し、

本来資本を統治すべき国家すらが、資本に屈せざるをえない状況を「新自由主義」はもたらす。そしてその状態は、社会に大きな断層を生み、容認できないレベルの経済格差は本来個人を守るべき存在であった共同体を無残に切り裂いた。稲葉陽二（2011：189）は『『きずな』は一朝一夕にはできないが、壊すのは簡単だ。一番簡単な壊し方は、格差を拡大させることだ。格差拡大は富める者と持たざる者の間に軋轢を生み、互いの『きずな』を壊す。人は他人への思いやりなどどうでもよくなり、その場しのぎの行動を取り、それが社会の根幹である信頼関係を壊し、腐敗を生み、さらに格差を拡大させる。アスレイナーはこれを『不平等の罌』と呼んでいる」と指摘する。Young が指摘する「排除型社会」も日本社会に完全に定着し、アメリカのような「ゲートティッド・コミュニティ（ゲートで他の住民達と区切られた共同体）」さえ築かれてはいないものの、ヘイトスピーチに代表されるように、確実に社会は排除の空気に満ち溢れてきている。

（2） 「新自由主義」が日本社会で一つのピークを迎えたのが「小泉構造改革」であるが、その小泉政権に先駆けて、既に 1995 年に、「新自由主義」を象徴するような労働の規制緩和に関する政策提言が資本の側から政府に対して発表された。日経連（現在の経団連）が、「新時代の『日本的経営』」の中で提言したことは、労働者を、今後は「長期貯蓄能力活用型」「高度専門能力活用型」「雇用柔軟型」の三つに区分し、それぞれのグループの特性に応じた雇用形態を導入するということである。「長期貯蓄能力活用型」は「管理職・総合職・技能部門の基幹職」とされ、「期間の定めのない雇用契約」が保障されている。それに対して、「高度専門能力活用型」と「雇用柔軟型」は、「有期雇用契約」である。この提言の狙いは言うまでも無く総人件費の抑制である。より直截的に言えば、これによって「多くの若者が『見捨てられる』形となった」。（雨宮 2009：28）

労働者派遣法は、財界の要望を受けて改正を繰り返し、99 年にはほぼ全面解禁、2004 年には、製造業にまで解禁された。現在、年収 200 万円以下の所謂プレカリアートは、1,000 万人を突破している。ポストモダン社会では、「大きな物語」があちこちで機能不全を起こし、社会全体のまとまりが急速に弱体化しているが、1995 年の日経連報告書は、その「大きな物語」の機能不全が、若者の雇用問題を直撃する形で現れた最初の事件と言うこともできるであろう。そしてこれは、日本において国家が資本に完全に屈した最初の事例でもある。

山田（2007：26）は、『量的格差（経済的格差）』は、『質的格差（職種やライフスタイルの格差、ステータスの格差）』を生み、そこから『心理的格差（希望の格差）』につながるのである。」と指摘し、とりわけ将来を悲観し、やる気を失っている若者達とそうでない若者達の間に広がっている深刻な「希望の格差」を問題視している。だが、そのような「希望の格差」が生まれるのは、本当に若者達のせいなのだろうか。

結論から言えば、現代のプレカリアートの問題は、決して彼らの努力が足りなかったからではない。日本社会における雇用構造の転換や近年の慢性的な不況、それらが組み合わさって進行している雇用の流動化の問題が基底部分に横たわっている。『仕事のなかの曖昧な不安』の中で、中高年の雇用維持のために、「失わ

れた 20 年間」に若年世代の新規雇用が抑制されたという立場を取る玄田（2005：236）は、「はっきり言いましょう．みなさんに良い仕事がないのは，大人のせいなのです」とまで断言している．

しかし，経緯がいかなるものであろうとも，「フリーターやニートなんて，ダメな奴らだから放っておいていい」と，結果のみが問題にされ，今日本の若者達はしばしば叱責や厳しい排除の対象になっている．当然，先述した通り，スティグマを背負ったセックスワーカーに対する社会的排除の空気は，フリーターやニートの比では無い．若者がそうした排除を受けたくないとするならば，常に，安定した職を得て，従来の社会において「ふつう」とみなされていた基準を満たすべく努力し続けなければならない．村澤（2012：38）は，『「ふつう」の生活は，誰もが手にできるものではなく，努力の結果成功したものだけが手に入れるものとなっている（傍点筆者）」と指摘しているが，これは，前章に記した赤木の「希望は，戦争．」のフレーズが，いかに切実な絶望の地平から生まれている言説かを理解する重要な補助線となるであろう．つまり，「新自由主義」の下では，努力だけでは足りないのである．

赤木が欲しているのは，「安定した職」，ただそれだけである．それは，赤木にとって人間としての「尊厳」を満たす一筋の希望の光なのである．にもかかわらず，それが絶望的なまでに赤木が置かれている状況からは遠いのだ．故に，赤木が告発するのは，徹底して社会の中の不平等，とりわけ，自分達プレカリアートと安定雇用層との間のそれになるのだ．これは，「絶対的貧困」に対する異議申し立てというよりは寧ろ，「相対的剥奪」に対する怒りであろう．偶々ロスジェネレーションという世代に生まれ落ちた不幸な若者だけが，再チャレンジというギャンブルを強制されるのは，おかしいと．「そのようなギャンブルを押し付けられるのは不平等なので，私たちを含む国民全体にギャンブルを強制するべきだ」（赤木 2007：285）というのが，赤木が言う「希望は，戦争．」の意味なのである．

『何も持っていない』私というが，いのちは持っているのである」という佐高信からの論文への応答に対して，赤木は，強く反駁する．「私が欲しい，そしてすべての人がごく当たり前の尊厳として得るべきなのは，『人間としての命』であり，ただ心臓が動いているだけの『いのち』などではないはずだ」（赤木 2007：292）と．生活保護という最後のセーフティネットを提示されても，それを赤木が望んでいないことは明らかである．彼は，人としての「尊厳」を得るために，ただ「安定した職」で働きたいだけなのである．赤木がいう「安定した職」の後ろにあるものを揣摩するに，恐らく「結婚や家族などの人並みの生活を築くこと」，そして，「憐みや蔑みの視線を周囲から受けないこと」ではないだろうか．

赤木の血を吐くような言葉の一つひとつに，日本社会のプレカリアートの多くが共感できるであろう．「正規労働から非正規労働へ，非正規労働から無業へ，無業からひきこもりへ，さらにはこの世から退出して自殺を選ぶというように，ハイパー・メリトクラシー下で『使えない』と自他によって定義された人間は，社会の中心から周縁へと自らを排除していく」と指摘する本田（2011：62）は，若者たちに「新自由主義」を生き抜くために，「専門性を鎧とせよ」と説く．また，玄田（2005：242）は，「夢を持つことよりも，もっと大事なのは『自分で自分のボスになる』という意志をはっきりと持つことです」と言う．恐らく，彼らの

助言は、佐高の言葉同様に、赤木の心には響かないだろう。何故ならば、本田のアドバイスは今更聞いたところで赤木にとっては既に手遅れであるし、玄田の助言などは戯言と一笑に付されるだけであろう。「一介のフリーターの自分にそれができるならば、私はとうの昔にそのようにしていますよ」、と。赤木のようなプレカリアートの「^{ディザフィリテ}社会喪失者」にそのようなセルフ・マネジメント力は無いのである。

私が、赤木の言説に拘るのは、彼が、十分に能力があるにもかかわらず、仕事のチャンスすら与えられないプレカリアートの悲劇と絶望を誰よりも直截に表現しているからである。そして、日本社会の矛盾を、多分にルサンチマンに満ちた「持たざる者」の視点で見事に突くからである。「浅ましい考えだと非難しないでほしい。社会に出てから 10 年以上、ただ一方的に見下されてきた私のような人間にとって、尊厳の回復は悲願なのだから（傍点筆者）」（赤木 2007 : 196）と言って自らの業をさらけ出し、自分の社会的地位を上げるのではなく、自分の位置まで安定雇用者の地位を貶めることで、何とか自分自身の歪んだ矜持を納得させようとしている彼を、これ以上一体誰が責め、蔑むことができると言うのであろうか。

雨宮も自身をプレカリアートの代表に位置づけ、かつ赤木同様にロストジェネレーションを代弁する形で、労働者派遣法を日本政府の事実上の「棄民政策」だったと批判するのだが、湯浅の言葉を借りれば、雨宮にはまだ赤木よりも幾許か「溜め」がある。湯浅（2008 : 60）が指摘する「5 重の排除」は、貧困問題が決して自己責任ではないことを、極めて明瞭な形で納得させてくれる。「①教育課程からの排除」、「②企業福祉からの排除」、「③家族福祉からの排除」、「④公的福祉からの排除」、そして、最後に「⑤自分自身からの排除」。湯浅（2008 : 62）は、「セーフティネットの欠如を俯瞰する視点から、排除され落下して行く当事者の視点へと切り替えるとき、もっとも顕著に見えてくる違いが、この『自分自身からの排除』という問題である」と、自分自身さえ疎外してしまう精神的な極限状況をこのように表現するが、赤木やこれから検証する多くの性風俗産業従事者が陥っている哀しい状況が、まさにこの「自分自身からの排除」なのである。

「何も持たない」という赤木と違い、雨宮にはまだ温かい家族福祉が残されていた。北海道の進学校出身である彼女は、教育課程からも明確には排除されておらず、税理士事務所を経営する父親を持つように、経済的な貧困とは恐らく無縁の若年期を送っているであろう。Bourdieu の文化資本の観点から見ても、寧ろそれは一般家庭以上の水準であると推察される。何より、「明晰な頭脳を持った若い女性」は、それだけで既に資本主義社会では十分な武器である。結果、ドキュメンタリー映画への出演や国外の政治・音楽活動への参加、著書の出版等、Goffman がいう「常人」でさえ叶わないことを、彼女は若くして既に成し遂げている。その意味で、雨宮はやはり、赤木のように本当に「何も持たない」典型的なロストジェネレーションのプレカリアートとは一線を画していると思われる。雨宮は、「自分自身からの排除」を止めることができる「溜め」を持っており、何らかの切欠さえあれば、「^{ディザフィリテ}社会喪失者」から脱却できるストレングスを最初から持った存在だったのである。

ここまで縷々赤木や雨宮を代表例とする日本のプレカリアートの問題について論じて来たのは、当然意味がある。何も持たない赤木は、少なくともマイナスではない。障害を持っている訳でも、疾病を抱えている

訳でも無く、事実「何も持たない」のだ。家族に借金がある訳でも無く、住む家が無い訳でも無い。ただ、その人生に「尊厳」が無いだけである。

玄田（2005：146）は、「仕事に貴賤はない。しかし、仕事にはあきらかに異なる二種類のものがある。一つは、仕事をする過程で学習や訓練の機会が豊富であり、働くことで人々が能力や所得を向上させていくことができる仕事である。もう一つは、仕事のなかでみずから多くを学ぶ機会が乏しいため、その職務自体からは能力向上や働く意味を見出せない仕事である」と指摘している。この文脈で言えば、赤木がしているコンビニのアルバイトというのは、明らかに後者の仕事である。10年間毎日フルタイムで続けているにも関わらず、昇給も無く、賞与も無い。コンビニで働き続ける限り、赤木は誰とでも取り換えが利く社会の歯車的な労働者であり、そこに玄田が指摘する仕事としての意味は全く無いであろう。では、赤木はプレカリアートの最底辺にいるのか、と問われれば、私の答は、否、である。

また、私は、玄田の「仕事に貴賤はない」という言葉にも正直、幾許かの違和感を覚える。「仕事に貴賤はない」という言葉自体は、まさにその通りだ。ただ、これまでも再三指摘してきた通り、キャバクラ嬢や風俗嬢の仕事にはスティグマがべったりと貼り付けられている。彼女達の仕事が卑しいのではなくて、彼女達を見る社会の目が卑しいのである。私は、性風俗に従事する者達を穢れていると言いたい訳では断じてないが、彼女達を穢れたものとする視点が日本社会にこうして厳然と存在する事実、やはり認めなくてはならないだろう。彼女達は、在日外国人や被差別部落出身者、ヤクザ達と並んで明確に差別と偏見の対象である。公序良俗に反する仕事と見做されるため、ハローワークのような公的機関で彼女達の求人を出すことができないという事実が、法の領域における「非承認」、すなわち社会的排除の現実を物語っている。

故に、第4章以降の実証研究からも明らかであるが、彼女達は、赤木のように「何も持たない」程度のプレカリアートではない。それよりも、遥かにパワーレスな状態に置かれた存在、「排除された者」に近い「社会喪失者^{フイリエ}」なのである。往々にして学校を中退していたり、家庭環境が幼少期から崩壊していたりする。そしてその結果、少なくない者達が虐待のトラウマや精神疾患、発達障害等に苦しんでいる。5重の排除を抱えた者も多い。セックスワークという仕事に意味を見出せる者もいるであろうが、それはあくまで彼女達の中でもごく少数の「勝ち組」の人間である。実証研究部分で詳説するが、ほぼ全員が仕事の第一義的な目的は「お金」であり、「その仕事を通して何か学んだものや得たものはありますか？」と問えば、即座に「お金以外には何もない」と答える者までいる。意味の無い仕事に生きるために従事しながら、そして明らかにスティグマが、負の烙印が彼女達には押されているのである。従って、単に生存のためにこの職業に就いている者にとっては、性風俗の仕事は意味が無いルーティンワークに過ぎず、かつ他人から侮蔑の視線を容赦無く送られる「賤業」なのである。故に、玄田の先の指摘は、軽々に全ての仕事に普遍化すべきではない。そのような「賤業」に就かざるをえない彼女達は、押しなべて、学力・知力も低い。人生の早期に教育課程と家族福祉から排除されており、学習障害どころか、中には知的障害が疑われるものもいる。企業福祉からはほぼ無視された存在であるにもかかわらず、公的福祉からは完全に排除されている。そして、「賤業」に就いた

時点で、自分自身の排除すら終わっている者もいる。彼女らは、まさに社会福祉の盲点としか言いようがない存在なのである。そんな彼女らを前にしてもなお、玄田は、「職業に貴賤はない」と言い切れるだろうか。

(3) 社会福祉学が包摂できていないこの領域、序章で考察した日本の「新しい貧困」は、何も昨今急に見つかったものではない。ジャーナリストの鈴木大介は、『家のない少女たち』『出会い系のシングルマザーたち』『援デリの少女たち』といった一連の優れたフィールドワークで早くからこの問題に関心を寄せていたし、荻上チキは、フィールドワークに量的調査を取り入れることで、よりリアルな女性の貧困と性的搾取の実態を『彼女達の売春（ワリキリ）』『夜の経済学』で描いてみせた。虐待、精神疾患、DV、ドラッグ、離婚、借金、失業といった女性達の圧倒的なまでの「溜め」の無さはこの豊かな日本社会の女性の現実である。鈴木も荻上もジャーナリストである以上、話を聞いて社会に問題を提起する以上のことはできない。故に、最後は必ず彼女らに、「専門家に相談して」と言うしかない訳であるが、専門家である我々がその問題に真正面から取り組んでいないことこそが、最大の問題なのである。

荻上（2012：13）は、湯浅の5重の排除を引き合いに出し、ワリキリ女性には更に、「2重の追い打ちがある」と指摘している。一つは、「社会問題からの排除」である。メディアはこの問題をタブーとして取り上げず、かつ多くの人達は「昔は可哀そうな売春はたくさんあったけど、今は無いだろう」と思い込んでいる。橋下元大阪市長が、「性風俗に従事している女性は自由意志でそれをやっているのだから、米軍はもっと積極的にそれを活用して性犯罪を減らして欲しい」という趣旨の発言をする程までに、一般人はこの問題に関して無知なのである。無知な人間が、単なる道徳や倫理の問題として女性の貧困を語り出すと、問題は途端に矮小化されてしまう。この問題を、決して社会問題から排除してはならないのである。

二つ目の追い打ちは、「ジェンダーによる排除」である。前章でも指摘したが、日本社会では女性の方が男性に比べて平均所得も低く、雇用も少ない。ホームレスになれば、女性は常に路上で危険な性的被害の対象になり得るため、結果嫌でも男性の下を転がり続け、どんなに暴力を振るわれても我慢し、ひっそりとクローゼットの中で耐え続けているという哀しい状況になっている。荻上が調査したワリキリ女性のうち、実に6割の女性がキャバクラ等の性風俗経験者というのは、無視できないものがある。彼女達を社会から排除し続ければ、いずれは個人売春しか彼女達に生き抜く道は残されなくなり、東電OLがそうだったように、人としての尊厳はズタズタになって行くのである。

荻上（2012：14）は、夜の世界には社会福祉とは別の包摂の姿があると指摘する。「僕は『アウトサイドの包摂』と呼んでいるのですが、社会の中でインクルージョン（包摂）されない人たちがアウトサイド（外側）に抱きしめられてしまう。その機能性を無下に否定するだけでなく、よりベターな包摂を作っていくという意識でないと、また別のアウトサイドに包摂されていくだけです。多くの人は『そんなの包摂じゃない』と言うかもしれませんが、僕があえて包摂と言うのは、彼女たちの話を聞いているとそれが仮初の『救い』と受け止められている現実があるからです」（荻上 2012：15）と問題の所在を明確に把握している荻上は、

日本の社会学者の誰よりも、このテーマの核心に迫っている。

「社会問題からの排除」がある故に、この問題は、他のプレカリアートの問題とセットでは決して語られない。事実、プレカリアートとしてのキャバクラ嬢や風俗嬢の存在などは、赤木も、本田も、玄田もほとんど視野にすら入っていないかのようなのである。いや、「同じ『弱者』であっても、弱者のなかに強弱の差があることを認識すべきだ」（赤木 2007 : 299）と言う以上、赤木ははっきりとプレカリアートの中にも階層があることに気付いている。ただ、赤木は「自分自身が生きることによって既に精一杯であり、自分よりも下に位置する人間の尊厳までは、考えられる心の余裕など一切ないのだ」と言うのだろう。

仮に赤木がそのようなスタンスを取ったとしても、「卑怯である」と責めることは難しい。赤木のその弁明自体は決して正しくは無いが、十分に納得はできるからだ。人がパワーレスな状態に置かれるというのは、まさにそういうことなのである。

もし、仕事に尊厳が無い生活が 10 年続いただけで、赤木のように「希望は、戦争。」になるのだとしたら、「新自由主義」のイデオロギーの中で完全に敗者であり、今後も「自己責任論」によって社会的に排除され続ける性風俗産業従事者達に「希望」はあるのか、という問いを、本項のまとめとして最後に発したい。

前項で、ポストモダン社会の若者が抱えている不幸は既に検討した。「大きな物語」という依り代を失った結果、若者が陥ったのは「現代的な不幸」である。小熊（2009 : 160）は、『1968』の中で、『我々は、人間として生きたい。人間として生きたい』。このような不満は、前述した飢餓や貧困、戦争といった『近代的な不幸』しか知らない年長者たちには、理解できなかった。彼らは、若者たちを閉塞感に追いやっていた『現代的な不幸』が理解できなかったのである。」と、「現代的な不幸」を理解できなかった当時の年長者世代を揶揄しているが、その小熊自身でさえ、恐らく、「新自由主義」の日本社会で生じている「不幸の先祖返り」とでも言うべきものを見落としている。今、我々が生きるポストモダンの日本社会には、「現代的な不幸」のみならず、既に一度は克服したはずの「近代的な不幸」が息を吹き返し、完全に併存しているのである。ポストモダン社会特有の存在論的不安と、「新自由主義」がもたらした経済的不安という「二重の不安」、「二重の不幸」の状態に置かれている若者達の中に、一層孤独な状況で性風俗産業従事者がいることは、最早論を俟たないであろう。

第 3 項 「新自由主義」的統治と「生権力」：権力への隷従と制度化された社会的排除

(1) 本項では、前項で敢えて取り上げなかった「新自由主義」の特性の②、統治様式について改めて考察する。統治様式としての「新自由主義」とは、Foucault によって「統治性 (gouvernementalité)」と呼ばれているものを指す。それは、競争、自己利益、脱集権化といった、企業家的な価値に基づいた、ある種の統治の様式を表す思想を意味している。つまり、前項でも触れたように、個人の自立を称揚し、中央の権力を分権化することを推奨するものである。

佐藤（2012：49）は、Foucault の分析を踏まえながら、「新自由主義」的統治に関して以下のように指摘する。

新自由主義的統治において、規範を内面化して自己統御するような規律的主体は、むしろ自己を投資の対象として徹底的に管理（マネージメント）するような「自分自身の企業家」へと、つまり市場原理を内面化し、それに基づいて自己を統御するような経済的主体へと置き換えられているのである。フーコーは、この経済的主体をホモ・エコノミクスという経済学的概念に結びつけ、「新自由主義とはこのような条件において、ホモ・エコノミクスへの回帰として現れる」と述べている。経済学において、ホモ・エコノミクスとは自己の行動を最大限に合理化し、最大の利益を追求する合理的人間像のことだが、それは新自由主義的統治において、まさしくその極限としての「^{アントレプレヌール}企業家」、つまり「自分自身における自分自身の資本、自分自身にとっての自分自身の生産者、自分自身にとっての〔自分の〕所得の源泉」としての「自分自身の企業家」として現れるのである。このような意味でのホモ・エコノミクスは、環境（すなわち市場）の変化に応じて自己を可塑的に変化させるような^エ経済^コ主体^{ノミ}＝^エ行^コ為^{ノミ}者である。つまり新自由主義的統治は、社会全体を市場原理で全面的に覆いつくすことによって、容易に「操作可能[maniable]」で「統治可能な[gouvernable]」主体、すなわち市場原理を内面化したセルフ・マネージメントの主体を作り出すのである。（佐藤 2012：50）

佐藤が指摘するように、「新自由主義」とは、その極限として、ホモ・エコノミクスとしての「自分自身の企業家」を生み出す統治形態なのである。そこでは市場原理を内面化した「自分自身の企業家」による自己のマネージメントが求められている。終身雇用制度の撤廃、成果主義賃金制度の導入、社会保障の縮減は、ますます自己のキャリアを自己によって立案、管理し、自己の人的資本を高めてさらなる地位の向上を目指す、といったセルフ・マネージメント型の自己統御を促進することになる。こうした統治のスタイルにおいて、市場が提示するような自己統御システムに適応しうる者はさらに上の地位へと進み、適応しえない者は容赦無く社会の外に打ち棄てられる。

ここで重要なのは、佐藤が指摘する様に、市場原理を内面化したセルフ・マネージメントの主体は、「新自由主義」が行き渡った社会においては独立した個人の様に思われるのだが、実際はそうではないということである。経済的には企業家としての独立性が求められる一方で、社会の成員としては容易に操作可能で統治可能な存在となり、自らの主体化は必然的に権力への従属をもたらすというパラドックスが「新自由主義」的統治の中には組み込まれているのである。経済的な個人の主体化が、政治的には権力への従属化に繋がるというメカニズムを、本項では Foucault の「生権力」の思想を縦糸に、そして「新自由主義」を横糸にしなが、読み解いていきたい。

前項で、経済学者の橋木（2012）が、「新自由主義」は現代におけるレッセ・フェール思想である、と述べたものを誤りであると指摘した。実際、橋木の様な認識は、レーガン・サッチャー改革以降、全世界に波及・浸透した「新自由主義」を表現する一般論としてしばしば用いられるのであるが、この認識は明らかにその本質を見落としている。何故ならば、「新自由主義」は、一見すると橋木が指摘するように、政府の市場への介入を排しているように見受けられるが、古典的な「自由主義」、レッセ・フェール（自由放任）への回帰とは異なり、実はその本質は極めて介入主義的なものである。ただ、前項でも指摘したが、「新自由主義」が介入する場所は、ケインズ経済学に代表されるような従来の政治・経済的な領域を超えており、結果的にその介入の影響力は凡そ社会の全てに、果ては人々の心の持ちようにまで行き渡るのである。

有効需要の政策的なコントロールによって、完全雇用 GDP を達成し「豊富の中の貧困」という逆説を克服することを目的とするケインズ経済学は、利子率の引き下げ等の金融政策や公共事業を通して積極的に市場経済に介入する。国家は、経済・社会保障全般に対して、「大きな政府」としての役割を果たすのである。それに対して、「新自由主義」においては「小さな政府」が選択され、市場経済への直接的な介入はほとんど無いかに見えるが、実は、経済の枠組には介入はしているのである。

Foucault は、コレージュ・ド・フランスの講義『生政治の誕生』において、「新自由主義」を題材として扱っているが、その中で、その介入様式を以下のように指摘する。

新自由主義的統治は結局のところ——そして、ここにおいてその介入は、社会の上に市場の一般的調整装置を構成するという、自らの目標を可能にすることになる——社会に介入し、競争のメカニズムが、いかなる瞬間も、そして社会の厚みのいかなる地点においても、調整装置の役割を果たすことができるようにしなければならない。従ってこれは、重農主義者たちが思い描いていたような経済的統治、つまり経済的諸法則を認め、それを遵守するだけでよいような統治ではない。それは経済的統治ではなく、社会の統治である（傍点筆者）。（Foucault=2008：179-180）

つまり、「新自由主義」的統治とは、社会のあらゆる局面に競争メカニズムを構築し、それによって社会全体を統治しようとする介入型のシステムなのである。Foucault が指摘するように、「新自由主義」が、市場の中に自然発生的に存在しない競争を構築し、それによって社会を組織化する、という理念を保持していたとすれば、そのような統治は必然的にレッセ・フェールではありえず、市場の中に競争を構築・維持するための様々な積極的な介入を伴うことになる。この点について、オルド自由主義と深い関わりを持っていた Hayek は、次の様に述べる。

ここで重要なことは、いま述べたような計画主義者のいう「計画」への反対と、凝り固まった「自由放任」への主張とを、混同してはならないということである。自由主義者の主張は、諸個人の活

動を調和的に働かせる手段として、競争が持つ諸力を最大限に活用すべきだということであって、現に存在するものをただ放任しておけばよいということではない。自由主義の主張は、どんな分野であれ、有効な競争が作り出されることが可能であるなら、それはどんなやり方にもまして、諸個人の活動をうまく発展させていく、という確信に基づいている。(Hayek=2008 : 41)

Foucault は、Hayek 同様に、「新自由主義」とは、市場のメカニズムに直接介入するのではなく、「市場の諸条件」に介入する、と述べている。つまり、「新自由主義」は、公共投資、社会保障といったケインズ的な仕方で市場経済のメカニズムに介入するのではなく、寧ろ市場の諸条件に、つまり市場の存在条件である諸規則、諸制度といった「枠組」に介入することによって、経済プロセスを調整しようとするのである。更に換言すると、「新自由主義」は、法律、制度に介入して「効果的な」競争を創出し、競争原理によって社会を統治しようとする一つの統治技法なのである。

本項冒頭で、Foucault の「統治性 (gouvernementalité)」概念に触れたが、「新自由主義」が単なる経済イデオロギーを意味するものではないことを、彼は早くから見抜いていたのである。そして、このような社会の統治様式は、Foucault が「生権力 (bio-politique)」と名付けた主権権力を体現したものなのだ。

Foucault は、近代以前の権力を「剣の権力」と呼んだ。それはつまり、「死なせるか、生きるままに放っておくか」(Foucault=1986 : 172) の形で行使される。そしてこうしたタイプの権力の頂点に位置するのが、「生命を奪い抹殺する特権」(生殺与奪の権利)である。こうした権力のあり方、その行使のされ方を劇的な形で明示するのが、身体刑の儀式、なかでも王殺しのような君主権力にとって最大の侵害に対して、王の側、秩序の側が見せる容赦なき対応である。『監獄の誕生——監視と処罰』の冒頭において、Foucault は凄惨な処刑シーンを描いてみせるのであるが、その意図は、近代の「生権力」と対比させて、前近代の主権権力の本質を読者に理解させるためなのである。

このような前近代的な主権権力は、近代国家では存在しない。近代の権力は、人々の生に寧ろ積極的に介入し、それを管理し方向付けようとする。こうした特徴をもつ近代の権力を「生権力 (bio-politique)」と Foucault は名付けた。具体的には二つの現れ方があり、一つは個々人の身体に働きかけて、それを規律正しく従順なものへ調教しようとする面である。学校や軍隊において働くこの種の権力は「規律権力」とも呼ばれる。もう一つは、統計的な調査等々にもとづいて住民の全体に働きかけ、健康や人口を全体として管理しようとする面であり、佐藤 (2016) や東 (2007) は、それを「環境介入権力」と呼ぶ。

Foucault は、『知への意志』の中で、前近代の剣の権力の統治技法である「死なせるか、生きるままに放っておくか」になぞらえ、近代的な「生権力」の統治技法を「生きさせるか、もしくは死の中に打ち棄てるか」という二者択一として定式化したが、我々はこのヴァリエーションを「新自由主義」的統治の中に見出すことができる。つまり、既述の通り、「新自由主義」的統治は、市場化された自己統治の技法に適応しうる者のみを社会の中に「生きさせ」、その技法に適応しえない者を容赦なく社会の外に「打ち棄てる」。或いは

それは、「社会の中に生きるべき者と、社会の外で生きるべき者との間に切断線を引く」（佐藤 2016 : 51）のであるが、これはつまり、社会的排除をシステムの中に意図的に組み込んだということである。

従って、社会的排除は、「新自由主義」の当為として発生する防ぎようのない現象なのである。「新自由主義」的統治がなされる限り、佐藤（2016）が指摘するように、必ず社会の中に何らかの「切断線」が引かれてしまう。望ましい生き方と、そうでない生き方を「新自由主義」的統治は、場所や時代に合わせて二者択一の形で提示し、そこに生きる個人はそのどちらかに必ず該当するのである。故に、社会的排除は常態化し、そこで生活する人々の社会不安は必然的に高まる。

Giddens が指摘するように、ポストモダン社会には存在論的な不安が埋め込まれていた。そして、前項で指摘した通り、「新自由主義」は社会における経済格差を容認するイデオロギーである。「新自由主義」的統治は、完全雇用というケインズ主義的目標を採用しない。その時の失業者とは、「移動中の労働者」、すなわち「収益のない仕事からより収益の高い仕事へと移行中の労働者」と解釈される。「新自由主義」は、労働の「フレキシビリティ（労働移動の可能性）」を生み出すために、最初からある程度の失業を容認している。更にいえば、「新自由主義」は、労働の「フレキシビリティ」を、安価な労働力の生産や雇用調整のために、派遣労働や期限付き雇用といった非正規雇用の導入によって積極的に創出しているのである。こうした事態は、前項で述べたような富裕層と貧困層への極端な二極化をもたらし、社会の不安定性の増大に帰結する。それに加えて、「新自由主義」的統治とそこに生まれる「生権力」は、制度的に社会的排除を生み出し、社会に切断線を引くことで人々の間に社会不安を生むのである。そして、この分断が「新自由主義」的統治のシステムに組み込まれている以上、現状、社会的排除は絶対に克服できない類のものであり、救いがないのだ。自分が排除されないようにと怯えながら暮らす日々、決して安息の刻は無いであろう。

（2） 「規律権力」は、社会の隅々に規律化の諸装置（学校、工場、病院、刑務所など）を配置し、個々人に規範を内面化させることで彼らを「内的に服従化」しようとした。それに対して、「新自由主義」の権力は、個々人の内面に働きかけるのではなく、寧ろ個々人が置かれた「環境」、或いはそのゲームの規則に働きかけることによって、環境を均衡化、最適化しようとする。このように「新自由主義」は、個々人に直接介入するのではなく、寧ろ環境に介入してそのゲームの規則を設計することで、環境の最適化を図ろうとする権力なのである。既述の通り、佐藤や東は、このようなタイプの権力を、「規律権力」に対して、「環境介入権力」と名づけることができると指摘する。この場合の「環境」とは、「偶然的な諸要素が展開される空間」のことであり、『安全・領土・人口』において、Foucault はそれを「セキュリティ＝安全確保の装置 (dispositif de sécurité)」と定義している。

「セキュリティ＝安全確保の装置」、或いは「環境介入権力」は、偶然的な出来事の展開される場に介入し、そのゲームの規則を設計することで、そのような偶然性を飼い馴らし、統治可能なものに変えようとする。「規律権力」が空間を基盤目に区切り、秩序化し、階層化することによって個々人を可視化し、監視し

て、監視のメカニズムを内面化させるべく個々人の内面へと働きかける権力だとすれば、「環境介入権力」は、偶然的要素が展開する場としての環境に介入し、その偶然性を統治可能なものに変化させ、環境を最適化、均衡化しようとするような権力である。つまり、「新自由主義」的権力とは、環境に介入し、環境を設計することで、統治不可能な蓋然性を統治可能なものへと変換する権力なのである。例えば、そうした偶然的要素に「人口」を考えてみる。「環境介入権力」は、多様で偶然的要素を孕んだ人間の群れを「人口」という統計の対象へと変換し、出生率、罹患率、死亡率といった統計的データとして捉えることで、統治可能なものに変えようとする。その意味において、「環境介入権力」とは、人間の生をまるごと統治の対象とするような、「生政治」の一つのヴァリエーションなのである。

Foucault が、「セキュリティ＝安全確保の装置」、佐藤や東が、「環境介入権力」と呼ぶものは、Young の『排除型社会』を参照すれば、「保険統計的アプローチ」をその作動原理としている、と換言できる。Young によれば、多くの先進国において用いられているこのアプローチは、犯罪者の収監や更生、つまり、犯罪者の規律化ではなく、寧ろ犯罪の抑止を問題にし、そのためにリスク計算を重視する。つまりそれは、「犯罪を起こす機会を制限する障壁を設け、リスクを最小化し被害を限定するような犯罪予防政策を提唱する」

(Young=2007 : 118) という戦略を意味している。Young は、その具体例として、ショッピングモールや刑務所において、ガードマンやカメラによる監視がトラブルを事前に察知し、逸脱者を排除する、という戦略を挙げている。つまり保険統計的戦略とは、犯罪或いはトラブルが起きる前に、犯罪を起こすリスクのある逸脱者をあらかじめ公共空間から分離、排除する、という戦略なのである。

このような保険統計的戦略の最も極端な例が、1990 年代にアメリカで導入された、ゼロ・トレランスと呼ばれる政策である。この政策の目的は、「市民道徳に反する行為を絶対に許さず、しつこい物乞いや押し売り、浮浪者、酔っ払い、娼婦を取り締まり、街頭から逸脱者や無秩序を一掃すること」(Young=2007 : 315-316) である。ゼロ・トレランス政策は、市民道徳に反する行為と犯罪とを連続したものと見做し、あらゆる逸脱を容認せず、目的達成のためには懲罰を最大限に利用する。例えば、三回起訴された人物には無条件に本来より重い刑罰を科するという「スリーノックアウト」政策がその典型である。リスク計算に依拠した保険統計的戦略は、逸脱者を潜在的犯罪者と見做し、そうした者達をあらかじめ公共空間から分離、排除しようとする。このように、「環境介入権力」とは、環境に介入してリスクを統治可能なものへと変換し、リスクをもたらすと見做された者達を単に社会の外へと排除する、リスク管理と排除の権力なのである。

このような「新自由主義」的統治形態の保険統計的戦略は、往々にして行き過ぎるものである。石原都政における「歌舞伎町浄化作戦」やブッシュ米大統領の「対テロ戦争」、そして、ドゥテルテ比大統領の「麻薬戦争」等、洋の東西を問わずその事例は枚挙に暇がないが、そのような過剰なリスク管理と排除の権力が生み出す異常事態を、Agamben は、Schmitt の概念を借用し、『例外状態』の常態化と呼んでいる。そして、これは Foucault が述べる現代の「生政治」の統治技法に通底するパラダイムであると指摘するのである。例えば、「新自由主義」的統治形態が、『例外状態』の常態化を招いた例として、アメリカのブッシュ

政権における「グアンタナモ湾収容キャンプ」が挙げられる。「9.11」の衝撃を受け、「対テロ戦争」の名目の下、アメリカ合衆国憲法の効力が行き届かないキューバの「グアンタナモ湾収容キャンプ」で、超法規的にテロリストの被疑者が長期間に渡って不当に拘禁され、拷問と著しい人権侵害を受けた。国連やアムネスティ・インターナショナルなど、世界中の諸機関から強い批判を受けてもなお、収容所は閉鎖されず、未だに存在している。

また、ドゥテルテ比大統領の「麻薬戦争」では、大統領就任から僅か半年で、麻薬戦争の死者が 6,182 人に達したという。投獄や死刑に当たって、時に裁判すら無い文字通りの無法状態であるが、まさにこれが、Agamben が指摘する『『例外状態』の常態化』なのである。ここで重要なのは、この「例外状態」は、決して 1 人の暴君が作り出して、脅しや暴力で人々に強要した訳ではないことだ。この様な「例外状態」は、多くの人々の合法的な支持の上に成り立っているのである。かつて、ナチスドイツが権力を握り、ヒトラーが総統として第三帝国という「例外状態」を作り上げた時も、彼らはヴァイマル憲法に則って、当初は正当な手順で権力を掌握したのである。

Agamben によれば、「例外状態」の自発的な創出は、「政治システムに統合不可能」であるような市民、あるいは非市民を政治システムの外部へと物理的に排除すること、或いはそのような排除を可能にしうる「合法的内戦」を確立することを目的とする。(佐藤 2016 : 99)「政治システムに統合不可能な市民」とは、1989 年以後のグローバリゼーションが進んだ世界においては、移民、難民、外国人労働者であり、また主権国家の秩序維持にとって「危険な」外国人であると言える(フィリピンの場合は、国内の薬物依存症者である)。そして、欧米のような移民国家ではない日本社会においては、このような秩序維持を脅かす代表的な存在は、在日外国人であり、同和地区出身者であり、ヤクザ等の反社会的勢力であるが、その反社会的勢力と密接に関わるという意味で、本研究が対象とする性風俗に従事する女性達もまた、政治システムに統合不可能な市民、排除されるべき市民であると言えよう。

(3) 「新自由主義的」統治は、社会的排除の容認、失業と労働の「フレキシビリティ」によって生じる社会不安の増大などの構造的欠陥を抱えるため、何らかの手段によって、その社会的空虚を埋め合わせる必要が出てくる。Fraser は、そのような社会不安は、「あからさまな抑圧」によって埋められる可能性が高いと指摘している。更に、そうした社会的空虚を充填するために、人種主義(外国人労働者の排斥)、或いはポピュリズム的政治手法が横行する可能性も付言しておかなければならない。そして事実、「新自由主義」的統治が行われている国家において、まさにそのような社会の不安定化は常態として発生し、それに対して様々な反動が如実に顕現しているのである。

Stiegler が「象徴の貧困」の着想を、フランスにおける極右政党の躍進から得たことは既述の通りである。そして、フランスのみならず、移民・難民排斥や、反グローバリゼーションを謳うポピュリズムがヨーロッパとアメリカを席捲している。アメリカでは、「メキシコとの国境に壁を作る」と宣言し、反イスラムを鮮明

に打ち出したトランプ大統領が誕生し、イギリスは EU 離脱を決める「ブレグジット」投票が可決され、その後、ポピュリストと目される離脱強硬派の B.ジョンソン政権が誕生している。日本に目を転じて、美しい国」を標榜する安倍政権の主要閣僚は、概ね「日本会議」に所属するナショナリストである。そして、歴史修正主義を指摘される安倍政権においては、日中関係、日韓関係は過去に例が無いほどに悪化している。「新自由主義」的統治は、為政者にとっては極めて都合がよいものであるが、統治される側にしてみれば、常に不安や生きづらさを感じるものである。しかし、そのような状況に置かれた人々は、驚くべきことに自発的に馴化されて、その統治に従うのである。

何故、自発的な馴化などという矛盾したことが起こり得るのか。それは、Deleuze と Guattari の『アンチ・オイディプス』が、「何故人々は、それが自らの救済であるかのように、自らの隷属を目指して闘うのか」という問いから出発したことを想起すれば良い。仲正によれば、そもそも、「主体」を意味するフランス語の *sujet* 或いは、英語の *subject* の語源が、「下に投げ出されたもの＝根底にあるもの」という意味のラテン語〈*subjectum*〉であり、ここから「臣下」という意味が派生したとされる。従って、それが象徴する様に、『主体』になることは、自己を律する何らかの『規範』を獲得し、それに自発的に従うことを意味する（仲正 2018 : 246）のである。

「新自由主義」的統治において、人々が不安と生きづらさを抱える状況にもかかわらず、自ら権力に従う理由は、Foucault、及び Deleuze と Guattari の「主体化＝服従化」の分析から理解されよう。Foucault は、晩年『快楽の活用』、『自己への配慮』において、権力による主体形成である「服従化（*assujettissement*）」とは異なった「主体化（*subjectivation*）」の問題について考察している。服従化が、規律や市場原理といった統治原理に従って自己統御を行うような主体を形成するものだとするれば、主体化とは、そうした統治原理に依拠しないような自己自身による自己の形成を問題としている。もし、主体形成が、権力からの呼びかけに応じて権力を自らの中に取り込む服従化の実践によってしかなされないとすれば、自己による自己の形成とは、そのような権力の命法を拒絶し、自己を別の仕方でも再創造する自己変容の実践であると考えられる。例えば、Foucault は、1982 年に書かれた『主体と権力』というテキストの中で、次のように述べている。

今日、おそらく主要な目標は、私たちが何者であるかを発見することではなく、私たちのいまのあり方を拒むことではないだろうか。個別化であると同時に全体化でもある近代的権力の構造のこの種の「ダブル・バインド」から私たちを解放するために、私たちが何者でありうるかを想像し、組み立てねばならない。結論として次のように言うことができよう。今日私たちに提示されている政治的、倫理的、社会的、哲学的課題は、国家やその制度からの個人の解放ではなく、国家と国家に結びついた個別化の形から私たちを解放することである。（Foucault=2001 : 20）

ここで Foucault が言う「国家と国家に結びついた個別化の形から私たちを解放すること」とは、我々の文脈に置き換えるなら、「新自由主義」的統治、或いはその結果としての市場の命法（「自分自身の企業家たれ！」）に依拠する自己統御の様式を拒絶し、自己自身に依拠しつつ自己自身を創造する全く新たな自己統御の様式を発明することである。このように、Foucault が「主体化」という言葉で意味していたのは、まさしく服従化された自己統御の様式を拒絶し、新たな自己統御の様式を発明する行為のことなのである。

ここで改めて明確にしておきたいが、「新自由主義」の浸透によって「規律権力」が消滅する訳ではない。学校、病院、監獄に代表されるような「規律権力」的装置は、「新自由主義」的統治の下でも確実に存在し続けており、それらは依然として諸個人を規範化し、「主体化＝服従化」している。従って、現段階において、「規律権力」と「環境介入権力」は互いに補完しつつ作動していると考えるべきだろう。そして、そのような前提を踏まえた上で、我々は次のように断言することができる。「新自由主義」的統治においても、「規律権力」的統治と同様に、諸個人に権力を内面化させるような「主体化＝服従化」のメカニズムが決定的役割を果たしているが、それは個々人に介入して規範を内面化させるという仕方で作動している。そこから生み出されるのは、自らの人的資本を高め、自らのリスクを自己管理するようなセルフ・マネジメントの主体であり、そのような主体形成のモデルに適応できない者は容赦なく社会の外へと排除される。従って、「新自由主義」的統治のこのような在り方が、社会的排除を不可避のものにするのである。

第4項 「消費社会」における「性の商品化」：「物象化」される性

(1) 現代は、「消費社会」である、と言った時、我々はその社会の全ての成員が消費するという、月並みで、自明で、敢えて言及するまでもない事実以上の何かを念頭に置いている。有史以来、生産に従事してきて、人類の消滅に至るまで生産し続けるという事実にもかかわらず、先人達の社会が「生産社会」の名に値していたのと同じ、根源的・基本的意味で、我々の社会は「消費社会」なのだ、と Bauman (2009) は指摘する。

かつての近代社会を「生産社会」と呼ぶ理由は、その社会がその成員をもっぱら生産者としての活動に従事させ、その成員の形成のあり方が、生産者としての役割を担う必要性に基づいており、その成員に求める基準が、生産者としての役割を果たす能力や意欲であったためである。一方、今日の後期近代（第二の近代あるいはポストモダン段階）の社会は、その成員の役割をもっぱら消費者としての能力に求めている。今日の社会がその成員を自らの基準に合わせようとするあり方は、何よりもまず、消費者としての役割を担う必要性によって決定されており、私たちの社会がその成員に求める基準は、消費者としての役割を果たす能力と意志である。

過去と現在の違いは、一つの役割を放棄して、それを別の役割で置き換えるほど根源的なもので

はない。いずれの社会も、少なくとも、その成員の一部が消費されるモノの生産に従事することなしに消費することはできず、二つの社会のすべての成員が消費することは言うまでもない。その違いは力点の違いであるが、そうした力点の転換は、事実上、社会・文化・個々人の生活のあらゆる側面に大きな影響を及ぼすことになる。それらの違いが非常に重大であり、広範に及ぶために、私たちの社会を、生産社会とは異なる特徴を持つ社会、すなわち、消費社会と呼ぶことは完全に正当化される。(Bauman=2009 : 50)

このような消費社会においては、あらゆるサービスが市場において商品化され、消費される訳であるが、その中には当然、商品化された性も含まれる。有史以来、連綿と女性の性が貨幣やそれに代替する何らかのものと交換されてきたことは疑いようのない事実であるが、現代社会ほど公然・非公然を問わず、それが広範に売買されたことはないであろう。

「性の商品化」という言葉は存外に古い言葉である。赤川によれば、1955年の『西日本新聞』紙上に、福岡県婦人少年室長の言葉として、「売春は女の人権を無視、商品化したものだ」という世論が,,,」という近い表現がある。(赤川 2002 : 154) これ以降、主にフェミニズムの領域で、この言葉は広がりを見せ、常に物議を醸してきた。

1992年、『フェミニズムの主張』に、橋爪大三郎の「売春のどこが悪い」と瀬治山角の「よりよい性の商品化に向けて」という二つの論文が収録された際、編者の江原のもとには日本中から彼らに対する多くの反論が殺到したが、フェミニストである江原が敢えて自らが編集する著書に上述の挑発的な論文を収載したのは、日本のフェミニズム論壇の成熟を信じていたからだという。江原は、その後の宮台らに代表される「ブルセア論争」などにおいても明らかなように、日本社会にこのような議論を必然化する「性の商品化」が実際に現れていたと指摘するのだが、後に発刊された『性の商品化』においても、江原自身が橋爪論文を全面的に否定できる論考がないことを素直に認めている。

このような議論を整理するために指摘しておくべきことは、橋爪氏の議論において「自由意志に基づく売春」を「わるいとは言えない」という判断に論理的に結びつけているのは、「売春は売春する女性の人権を侵害する」という近代的廃娼論の枠組みであることである。「売春＝悪」という根拠を（それ以前の論とは異なり）、「売春女性の人権侵害」に求めるからこそ、「自由意志に基づく売春があるとすればそれは女性の人権侵害とは言えないのではないか」という判断が生まれ、「わるいとは言えないのではないか」という結論が導かれたのである。この論点に照準を当てるとすれば、橋爪氏を論破するためには、「自由意志による売春」も、売春女性の人権を侵害するから悪であるということを論じなければならない。この意味において橋爪氏を論破した論は、今回の議論においてはなかったと結論づけることができる。売春女性の人権侵害という問題にもっとも忠実に議論を

展開した立岩氏も、「売春」に「悲惨」を見いだすにとどまり、「売春＝悪」という結論を出すには至っていない。（中略）

このような結果になったのは、論者の多くが、「自由意志による売春」がありうることを承認したことに基づいている。「性の商品化批判」の一つの論法として、「自由意志で行っている売春もまた、ある意味における強制の結果である」と主張するような論法がある。この論法をとるとすれば、「自由意志に基づく売春」などは存在しないことになる。しかし、このような論法に対しては、多くの論者が、強い批判を寄せた。（江原 2002 : 314）

本項においては、「性の商品化」について、その是非を明確に論ずるのは上記の理由で避けたい。この問題は、フェミニズムにおける一つのアポリアである。売春、すなわち、「性の商品化」自体が悪である、という主張は、江原が指摘しているように女性の自由意志を認める限り、恐らく絶対に成り立たない。従って、「性の商品化」の是非を論じるのではなく、消費社会において、一つの商品として性が消費されるということがどういう事態もたらすのか、そして、それが売主である女性においていかなる意味を持ちうるのか（予め付言しておくが、「性の商品化」を通して、女性の全員が等しく同じ心理・社会的経験をするということはありません。得ないため、論考としての一般化や普遍化は避けたい）を、Marx が『資本論』で用い、Lukács が自らの著作で重要視した「物象化（Versachlichung）」を鍵概念にして検討を加えることをここでの主眼としたい。

ただ、江原が背理であると退けた、「自由意志で行っている売春もまた、ある意味における強制の結果である」という論法を、筆者は否定しない。何故ならば、既に論じてきたように、新自由主義の波及・深化に伴って日本社会の経済格差はかつてない状態に陥っており、「アンダークラス」の女性達や奨学金の返済に苦しむ若い女性達が、生きるため、或いは経済的合理性から売春及びそれに類する性行為を行っていることは、既に日本社会の常態として報告されている。そのような女性達の売春や性交類似行為の多くは、先に検討した事例の様に、あくまで本人達の自由意志で行われている。だが、選択肢が他にない、或いはほとんどない状態での「性の商品化」は、決して真の「自由意志」ではない。新自由主義の自己責任論を否定する立場から、筆者も『性の商品化』における立岩のように、「売春」に「悪」ではなく「悲惨」を見いだす。そして「悲惨」は「不平等」の発現形であり、それは「貧困」と同根の概念であるが故に、看過すべきではないと考える。だが、その点に関しては前章で一通り概説したため、敢えてここでは再度深入りせず、本項では「物象化」に絞って「性の商品化」を論ずることとする。

Honneth は、Marx, Weber, Simmel らの著作からテーマを引き出し、「物象化」という概念の鑄造に成功したのは、Lukács であると指摘する。『歴史と階級意識』において、Lukács は、「物象化とプロレタリアートの意識」についての長い三部構成の論考を行った。それは、当時支配的な状況のもとでの生活形態を社会的物象化の結果として分析するよう、哲学者や社会学者の全世代を駆り立てたのである。Lukács は、商品を媒介として交換関係に支配される近代社会（商品社会）において、人々が自らの「類的本質」である労

働から「疎外」され、“物”化している現状を分析した。「物象化」した“我々”の意識は、自己の周囲の社会的な現実を客観的に認識する能力を失い、商品の作り出す幻想に囚われているのである。換言すれば、「物象化」を主体の内面に即して捉え直したのが、「疎外」であるということになる。ただし、Lukács の場合、「物象化」はあくまでも資本主義社会に特有の現象であり、「プロレタリアートは物象化されている自らの社会的存在を意識化することを通して、硬直化した＜主体／客体＞関係を弁証法的に打破し、変革の＜主体＝客体＞になれる可能性を秘めているとされる。物象化を克服して＜真なるもの＞を認識することは可能」なのだ。（仲正 2018 : 154）

しかし、第二次世界大戦後は、「物象化」というカテゴリが時代診断において有する中心的位置は損なわれた。ホロコーストがもたらした文明の崩壊が大仰な社会診断へと向かう思弁的傾向を麻痺させてしまったかのように、社会理論家や哲学者達はこぞって民主主義や司法の欠損についての分析で満足し、Adorno ら一部のフランクフルト学派の著作を除いて、昨今では「物象化」や「商業化」といった病理概念を利用しようとはしなかった。しかし、近年「物象化」という概念は、改めて知的討議の場に登ってきている。その背景にある要因の一つが、「ますます増大する代理母の利用や恋愛関係の市場化、セックス産業の爆発的発展」（Honneth=2011 : 12）である。我々の道徳的、倫理的原則に反する人間の態度として、「物象化」は新自由主義社会に再び立ち現れている。Nussbaum は、近年の研究において、他者の人格の道具的利用の極端な形態を特徴づけるために「物象化」について触れており、自分と異なる主体を、感情のない死せる対象の様に、まさに「モノ」や「商品」として扱う態度に対して、他者への共感力を失わせ、民主社会に不可欠な道徳心を損なう要因であるとして強い懸念を示している。

人間の平等と尊厳という概念と関連づけられなければ、感情移入を伴う想像力は気まぐれで偏ったものになりかねません。地理的に、もしくは階級や人種の点で近い者には繊細な共感を覚えながら、遠くにいる人間もしくはマイノリティ集団に属する人々にはそうした共感を抱かず、彼らをモノ同然に扱うのはあまりにも簡単なことです。さらに言えば、偏った共感を助長してしまう芸術作品はたくさんあります。人種差別的な文学や、女性を単なるモノのように扱うポルノグラフィーを讀んで想像力を養うように求められても、子どもが民主社会にふさわしい想像力を培うことはないでしょうし、反民主的な勢力が、特定の集団や民族をさらに避難して貶めるために、芸術作品や音楽やレトリックを巧みに利用してきたことも否定できません。（中略）こうした欠陥を持つ「文学」は、汚名を着せられている人々に想像力を働かせるのを禁じることで、——つまり、マイノリティの人々や女性を、探求するほどの経験を持たない単なるモノとして扱うことで——機能する点に留意すべきです。他者の内面を想像力によって探求するという行為は、他者との健全な道德関係のすべてではありませんが、少なくともそれに必要不可欠な要素ではあるのです。（Nussbaum=2013 : 141-142）

Nussbaumによれば、「物象化」は、倫理的・道徳的に認めるべきではないものである。それは、人々から共感の概念を奪い、他者に対する配慮を喪失させ、引いては民主制を毀損するからだ。従って、彼女にとっては、代理母や「性の商品化」は在ってはならないものになる。

「物象化」という概念を、道徳や倫理学の観点ではなく、純粋な経済用語として最初に用いたのは Marx であるが、Marx は「物象化」について明確な定義を残していない。Lukács もまた、「人間と人間との関わりあい、関係が物象性という性格を持つ」こと以外の何物でもない、とシンプルに規定しているに過ぎないが、Honneth の解説によれば、その意味するところは概ね以下のようなものである。

すなわち、(a) 目前の対象を、もはや潜在的に利用可能な「モノ (Dinge)」としか認識せず、(b) 向かいあっている相手を、多くの収益をもたらす取引の「客体 (Objekt)」としか見なさず、そして最後に (c) 自らの固有の能力を、収益獲得機会の計算における追加的「資源」としか考えない、そういったふるまいである。(Honneth=2011: 20)

さて、「物象化」に関してある程度理解が深まったところで、それを「性の商品化」に敷衍して次項において考察を加えるが、消費社会において、女性が男性に消費されるということがいかなる意味を持つのか、そして、その際女性の尊厳や主体性はどのような影響を受けるのかを中心に論じたい。

(2) 「性の商品化」の詳細な論考に入る前に、Bauman が指摘する消費の本質をまず冒頭に取り上げたい。

消費することは破壊を意味する。消費されるモノは、消費される過程で存在することを止める。文字通りの意味でも比喩的な意味でも。モノが食べられたり、着つぶされたりする場合のように、それらは完全な消滅の地点まで物理的に「使い尽くされる」か、あるいはその魅力を奪われて、もはや欲望を喚起せず、人の欲求や欲望を満たす能力を失って（たとえば、それ以上使用できないほど使われた玩具やレコードのように）、消費に適さなくなる。(Bauman=2009: 48-49)

Bauman のこの指摘は、「性の商品化」にもある程度当てはまるであろう。女性の「性」は、消費者である男性によって、完全な消滅の地点まで物理的に「使い尽くされる」。これが、写真集などのポルノグラフィや、アダルトビデオなどの物質的な商品、或いは、宮台が提起したブルセラ女子高生の使用済みの下着など、実体を伴う「モノ」であれば分かりやすい。だが、本項で主に取り扱いたいのは、「売春」などのサービスとしての性行為と、その行為主体である女性自身である。彼女達が「性の商品化」の中で、男性に消費さ

れる時、やはり同様に使いつぶされて商品としての価値が毀損され、「使い尽くされる」ということが果たして起こるのであろうか。それとも、ポルノグラフィやアダルトビデオ、或いはポルノ小説やマンガ等の問題とは完全に一線を画するものなのであろうか。

結論から言えば、筆者は、「性の商品化」として挙げられる商品は、各々が明らかに固有性を持つものであると見る。Bauman 的な消費論で単純に語れるのは、あくまで非人間の商品に限定される。それは完全に創作物であるポルノ小説やマンガであり、所謂「被害者無き犯罪」である。無論、それを不快に思う人間がいることは十分に承知しているが、少なくともこの領域の「性の商品化」においては、誰 1 人、「当事者」が苦しむことはない。

一方で、同じく市場に「モノ」として流通する商品であるポルノグラフィやアダルトビデオは、創作物であっても、ポルノ小説やマンガと同列では語れない。何故ならば、そこに映っている女性は紛れもなく実在している人間であり、彼女達が生きている生活空間は、それが商品として流通している生活空間と全く同じ場所であるからだ。インターネットが普及し、そしてデータがデジタル化されて半永久的に保存・配布が可能な現代社会において、女性の性的な映像はデジタルタトゥーとしてウェブを介して社会の中に永遠に残る可能性がある。女性が絶海の孤島に暮らしていない限り、女性と関りを持つ人間がウェブに繋がっている以上、商品化された女性の姿は、結婚、就業等のライフイベントの際に深刻な桎梏と社会的排除の契機になりかねない。そして、事実それが世代を超え、自らの子どもにまで累を及ぼしていることは、紗倉が実際に仲間の AV 女優から聞いた話を原作にした映画（『最低..』）でも描かれている。将来起こり得るそれらの諸々の不都合を契約の段階で予め全て知ることが女性の側において実質不可能である以上、女性の「自由意思」は、ポルノ産業にとっての免罪符にはなりえず、納得の上で制作に同意した女性も自身の行為を後悔する可能性が常に存在する限り、「わるいとは言えない」という橋爪の言説には全面的には首肯できない。従って、彼女達もまた、フリーソーシャルワーカーの宮本ら「ポルノ被害と性暴力を考える会（PAPS）」が支援しているように、社会福祉学の新たな支援対象であろう。

宮本らの告発を受けて昨今「アダルトビデオ出演強要問題」が社会問題化したのち、業界団体は健全化に乗り出し、女性に対して過剰なまでに法的なリスク回避の手段に出ている。面接の際は常にビデオを回し、女性が強要されてメーカー面接に来ているのではないことを証明しようとしている。契約書を取り交わす際には、必ず女性が条文を読んでいる場面を同様に映像化し、漢字が読めなかったり、内容が分からない女性に対しては、必ず趣旨を分かり易い言葉で説明し、合意を得てから撮影に臨むという。大手アダルトビデオメーカーではここまで法的リスク回避の措置が取られている一方で、筆者はそれでもやはり対策は不十分であると指摘したい。意図的に将来起き得るリスクを伝えない、つまり「不都合の不告知」が常に存在する以上、法的な問題はなくても、道義的・倫理的な問題は最後までクリアされないからである。昨今、「忘れられる権利」が欧米では議論されているが、インターネット社会において、それを完全に実現することは事実上不可能であろう。

以上、「性の商品化」のうち、最も単純な「モノ」である製品であっても、人間の人格と不可分の商品は、単純な消費社会論では説明できないことを述べたが、以下では最も難しい性的サービスに関して論じる。

ここでは、性交と性交類似行為をひとまず同じ類の性質を持つものと捉え、議論を簡略化するために便宜上「売春（或いは買春）」とする。

『性の商品化』において、立岩（2002：222-223）は、買春の快樂とは性が「モノ」になっていることから得られているというよりもむしろ、『モノ』でないものを『モノ』でないまま『モノ』のように扱うことができる」ことから得られているのではなからうかと問う。立岩の問いが正しければ、「性の商品化」とは、性が「商品」という「モノ」になるということと、「モノ」になりきれないという二つの出来事の狭間に生じる意味の亀裂をこそ、その成立要件としている事態なのかもしれない。そうであるとすれば、「性」が「商品」として売られているということから直ちに、「性」が「商品」になりうることを何の疑問の余地もない事態として把握してしまうような論は、前述の通り、「性の商品化」という事態のある重要な側面を見落としていることになるだろう。「性が商品であるとはどういうことなのか」ということは、「性」が現に「商品」として流通しているということを超えて、その意味を問われてよいのである。

立岩（2002：206）は、『自由』はこの社会の最高の原理ではない」と主張する。また、「身体の自己所有」も正当化されえないという。無論、「自由」「自己決定」等の言葉で我々が言い表そうとしてきたものには、無視できない「感覚・倫理」がある。それを立岩は、「他者は他者であってほしい」という「感覚・倫理」であるという。その「感覚・倫理」を「自由」「自己決定」「身体の自己所有」といった言葉で言い表そうとする限りにおいて、我々は「他者の自由を尊重」するゆえに「売買春をも肯定」せざるをえないというような、論理の枠に囚われてしまう。しかし、「他者の自由の尊重」は、「身体の自己所有」や「自己決定」とは逆の、「他者が他者として『在る』ことに関わるものを他者から奪わない」という論理に言い換えることもできる。

そうであれば、「他者の自由を尊重」するからこそ「売買春」に「悲惨をみる」と言うこともできるのである。「売春は悪いこと」だとは言えないとしても、「悲惨」ではあり得る。「売春はわるくない」としても、だからと言って、「買春もわるくない」と言えるわけではない。立岩は、「新しい批判の論理」を立てることによって、これらのことを区別することが可能だと主張する。

この立石の「他者が他者として『在ること』から切り離せないものをその他者から奪わない」という論理は、先に検討したマンガや小説などの創作物には一切関係が無いものであるが、少なくとも「売春」に関しては十全に適用される論理であり、そして部分的にはポルノグラフィやアダルトビデオ等の流通商品にも援用できるのである。

性を商品化するということは、その具体的な行為・関係そのものは隠されているとしても、そこへの接近が開かれるということである。お金を払われる時に（実際に断ることはできるとしても）、少なくともその提供者（の候補者）としてそれを求める者の前に現れてしまう。

そういう人を別の回路によって知りつきあうことがうまく成り立つか. 完全に道具化することができるなら, そのことは問題にならないはずである. 肉屋の A の店のコロッケ a を買うことと, その A が近所の人だったり何かの同好会で一緒だったりすることは両立する. 陶芸家の A の陶器を買う時, その陶器は確かに A の作品であることが自覚されている. しかし, その作品にどれほど A の影が濃いとしても, その作品そのものに A がついてくることはない.

だが, 性の場合はどうか. ここに生じてしまうのは, 他者として認識しながら, しかも他者であるあり方そのものが商品として接近可能なものとしてあるという事態である. 単にそこに性=a があるというのではなく, A を性的な (接近が開かれている) 対象=人として認識してしまう. (中略)

しかし, 私たちの社会がどれほど商品化されても商品化されていない関係は残る. どんなに分化してもいくつかの社会的な場に参加するのは同じ人である. かなり特殊な社会関係を前提にしなければ, 性はうまい具合に商品であることができおおせない. これは, 性に関わる職業が賤業か否かといったこととは別のことである. (立岩 2002 : 218-219)

男は単なる快楽を得ようとする. そのために女の身体が必要である. 必須とは言わないまでもあった方がよい. 別に男は金を払いたいわけではない. しかし, そうでなければ, 相手の女は応じないだろう. そこで払う. これだけのことであっても, その時, 女は, 自ら提供する性から, 自分と男を切り離せない中で性を譲渡せねばならない (譲渡しようとする) ことがある. さらに, 買う側がこのような状況を利用し, 他者が他者であるまま, その他者を支配しようとすることがある.

他者が他者であること, 自らが他者であることが尊重されるべきだという感覚は, そこに生ずる快楽を得ようとする感覚は, このようにして性を売ることを悲惨なことだと感じるし, この時に買うことを悪いことだと, 卑怯なことだと感じる. そのような感覚を持つ当の者にとってそうだし, その者を取り巻く者にとってもそうである.

このように感じられる範囲は, 同意がない (強制されている) 場合よりも広い. だから, 問題になるのは「管理売春」だけではない. このような事態が, 世界的には依然として貧困を背景に, ただ単に貧困というだけでない家族を単位とする扶養というあり方, 家族内, 市場内での男女の力関係の中で, 生じせしめられる. これは無残なことだ. (立岩 2002 : 226-227)

立岩が指摘する「悲惨」であり, 「無残」であるという感覚は, 「性」が少なくとも Bauman がいうような形で消費の対象になるものではないということを実存的に指し示しているとは言えないだろうか. 畢竟, 「性の商品化」は, 社会的存在である人間にとって, 極めて歪なものであり, それは性愛の関係が特殊であるが故に, 消費社会における純粋な「商品」としては成り立たないことを示しているのである. いみじくも, Frankl

(=1999 : 133) は、「人間のセックスは、常に単なるセックスという行為以上のものである。セックスを超えた何か、その身体的表現、つまり愛の身体的表現である限り、それは真に価値ある経験なのだ」と正当なパートナーとのセックスを称揚するが、一方で、次のようにも指摘する。

商売として成り立つのに十分な需要さえあれば、ビジネスは成功する。セックス産業もその例であり、現代文化の中では、セックスのインフレとでも呼ぶべきものを私たちは目の当たりにしている。(中略)

このような状態によって起こる実存的空虚の中で、性的なりビドーは肥大化していく。この肥大化こそがセックスのインフレをもたらしているのである。ほかのどんな種類のインフレもそうだが、セックスにおけるインフレも、価値の引き下げと結びついている。セックスは非人間化されると価値が下がるのである。こうしてセックスが1人ひとりの生活の大切な部分として組み込まれ、生きられているというより、むしろ快樂のために続けられているという傾向を私たちは見てきている。こうしたセックスの脱人格化、性生活を生きているという感覚の喪失は、実存的フラストレーション、つまり生きる意味の探求が欲求不満を起こしている兆候である。(Frankl=1999 : 137)

Frankl (=2011 : 226) によれば、「愛は、その背後に向かってそれ以上遡ることのできない『原現象』であり、人間存在を人間的たらしめる行為、つまり実存的行為なのである。それだけではなく、愛はとりわけ実存共同的 (koexistentiell) 行為でもある」ため、偽りの愛であるセックスのインフレーション、すなわち、「性の商品化」は、社会の中に蔓延している「実存的空虚 (existential vacuum)」の顕現であると見做される。ポストモダン社会において、この「実存的空虚」は、なお一層広がりを見せているが、それは既述の通り、「大きな物語」を失った我々の日常には、Giddens が言うところの「実存的不安」が埋め込まれており、全ての人間の存在論的な足場が揺らいでいるからだ。その不確かな足場が崩れ、更なる存在論的な脅威に晒された時、我々は Frankl が提唱する「実存的空虚」という、神経症水準の病的状態を含んだ精神状態に陥るのである。

「実存的空虚」を埋め合わせるために、人間が仮に偽りの愛であってもセックスに逃避するのは必然であり、寧ろ不可避である。何故ならば、崩落する存在論的足場を支えるための自己の存在証明として、近年人間のアイデンティティ形成においては、「仕事」以上に「性」が大きな役割を担うようになってきたからだ。それを Foucault は、以下のように指摘する。

「前提となる性」はまた、すでに述べた諸機能を貫通しそれらを支えるもう一つの機能を果たしていると付け加えることができよう。今度は理論的であるよりは実用的な役割である。事実、性という、性的欲望の装置によって定められた想像上の点を通過することによってのみ、各人は

自分が何者であるかという理解可能性に至り着き（何故ならば性は隠された要素であると同時に意味産出の原理なのだから）、彼の身体の全体に到達し（何故ならば性は身体の現実の部分であり、しかも脅かされた部分であって、象徴的に身体の全体性を構成するからだ）、彼の自己同一性を手に入れることができるのである（傍点筆者）（何故ならば性は衝動の力に一つの歴史〔個人史〕の異形性を結びつけるからだ）。おそらく以前から暗々裏に始まっていた逆転によって——我々は今や、幾世紀にも亘って狂気と見做されていたものに我々が何者であるかという理解可能性を、長いこと我々の身体の烙印であり傷であったものに我々の身体の充実した意味を、名付けようもない暗い衝動であると感じていたものに我々の自己同一性を求めるに至ったのだ（傍点筆者）。

（中略）性は死を代償としても手に入れるに値するのだ。今日、性が死の本能に貫通されているのはこの意味においてであり、すでに明らかなように厳密に歴史的であるこの意味においてなのだ。西洋世界が、すでに久しい以前に、愛というものを発見した時、死を受け入れ得るものにするのに十分な価値をそれに与えた。今日その等価物たろうとしているのは性であり、しかも至上の等価物たろうとしている。（Foucault=2009：196-197）

「性は死を代償としても手に入れるに値するのだ。」という Foucault の指摘から、何故、東電 OL が、あのような形で無残な死を迎えるまで、売春行為をやり続けたのかが理解できるであろう。「実存的貧困」状態にあった彼女にとって、東電で働き続けることも、売春行為を続けることも、どちらも彼女にとっては生きる意味の根幹であり（哀しいことに、両者とも「承認」のレベルは極めて低かったのであるが）、アイデンティティを構築する不可欠な存在証明の手段だったのである。ただ、それはもたえるような苦しみを伴う性愛ではなかっただろうか。

畢竟、Frankl が指摘するように、「実存的空虚」という社会病理を指し示す一つの目安がセックスのインフレーション、「性の商品化」だとすると、それが異常に膨満した日本の状況は、ある意味危機的状況である。中村が指摘するように、性産業の発展成長は著しく、そこでは、セックスのインフレーションだけでなく、セックスの貨幣価値の激しいデフレーションも同時に起きているからだ。東電 OL は、最後は 2,000 円で売春行為を行っていたとされるが、そこまで価値低下されたアイデンティティでは、恐らくもう存在論的な苦悩はほとんど支えきれないだろう。「中には、肉体的な愛を、次から次へと求めている人もいることだと思います。ただ、もしも叩き売りのように自分を二束三文でいろんな人に売ってしまっているのだとしたら、それは自由なのではなく、あまりにも承認を求めすぎている、依存のような状態を抱えているのかもしれない」（上田 2019：127）という『愛する意味』における上田の指摘は、まるで東電 OL について語っているようである。

中村は、『ハタチになったら死のうと思ってた AV 女優 19 人の告白』の中で、年収 200 万円弱という「相対的貧困」状態にあえぐ、AV 女優の丸山れおなについて、以下のように記している。

丸山れおなは AV 女優のヒエラルキーの上位にいる「企画単体女優」である。ついに企画単体女優の貧困がはじまってしまったことになる。彼女は常時 4000 人程度が入れ替わる AV 女優の中で上位 15 パーセントの層にしながら、家賃 4 万円のマンションで暮らす。貧乏暮らしをするのは節約のためではなく、圧倒的にお金がないからだ。年に何度かは食べ物に困り、腐った食料に手を出すこともある。限界に近い貧乏を耐えながら AV 女優を続けている。（中村 2018 : 159）

全ての AV 女優が「実存的空虚」を抱えている訳ではないが、同著で紹介される 19 人の女性達のうち、全員が過去に精神的に病んでいたか、今現在も病んでいる。また、『東京貧困女子.』で描かれる性風俗に従事する女性達もまた、貧困故に様に精神的に病んでいるが、これは決して偶然ではない。寧ろ、前者で描かれる 19 人の中には AV という仕事を通して成功し、今現在は寧ろ幸福を感じている少数の事例が紹介されているにもかかわらず、後者の女性達の人生には一切の救いが無い。彼女達は、全員が「絶望的貧困」状態にある。中村は、彼女達が貧困な理由を、「特に、家賃が高く、地域の縁が薄い東京暮らしは、躓いて貧困に陥りやすい。」と東京という土地柄に帰着させるが、彼女達の困窮状態を、単にそのような地理特性に埋め込まれた経済的困窮だけに還元すべきではない。AV 女優の中には幸福になっている者達がいる一方で、性風俗産業に従事している女性達のほとんどがそうではない、という中村のフィールドワークにおける質的な差異は、「性の商品化」を再度、「物象化」の観点から考察した時に、その理由が明らかになるのである。

(3) 本項では、「性の商品化」について概観したが、その中で、「性の商品化」は一括りで語れるものではなく、主に三種類の区分けができることを示した。一つ目が、Bauman が提唱するような消費社会における、一般的な消費財として創作されたマンガやポルノ小説、二つ目が、そのような創作物の性質を持ちながらも、実在する生身の女性が登場しているが故に、一つ目の商品と異なり、ある程度の個別性がその中に残ってしまい、それが時に実生活に影響を与え得るような商品である。最後に、売春とそれに近い性交類似行為をサービスとして提供する行為であるが、これは既に、「他者として認識しながら、しかも他者であるあり方そのものが商品として接近可能なものとしてあるという事態」が結果的に消費者に対して、「悲惨」な感覚を抱かせることに繋がり、全ての消費者が純粋な悦楽を持って「消費し尽くす」ことが不可能であるために、いかに現代が消費社会であっても、この類の行為は厳密な意味では商品たりえないことを指摘した。

そして、この商品としての二つ目と三つ目の違いが、まさに上述した女性達の置かれた不遇に直結しているのである。19 人の AV 女優達は二つ目、『東京貧困女子.』の女性達は三つ目のカテゴリに属するのであるが、このカテゴリにおける差異は、女性の精神保健にとっては極めて重要なのである。何故ならば、二つ目のカテゴリの場合は、自己を意図的に「物象化」して、社会の偏見も無視し、敢えて自身の「娼婦性」を商品として市場で高く売ったのだ、と合理的と考えられる女性にとっては、実生活に何らかの不都合が生じな

い限りにおいて、苦悩の根源は無い。「ハタチになったら死のうと思っていた」、虐待等で「絶望的貧困」に置かれていた若い女性達が、AV 産業のお陰で多額のお金を手にし、結果的に救われた、と語るのには、決してあり得ない話ではない。無論、二つ目の商品の特性である、未来に発生しうるライフコースにおける諸問題は依然として彼女達の人生に残されるが、結婚や出産自体を諦める、或いは最初からそれに価値を感じない女性にとっては、そのような不安さえ無いかもしれない。従って、商品として価値あるものを市場に提供でき、十分に消費に回せるお金が手に入る限りにおいて、彼女達は消費社会においては勝者たりえるのである。

一方、三つ目の場合は、それがかなり難しい。商品として単価が低いため、消費される回数が圧倒的に二つ目の商品に比べて多い。また、顧客に対する物理的・精神的距離が近過ぎるために、二つ目の商品のように、「自己物象化」がしにくく、心身共に摩耗しやすくなってしまう。例えば、専属の AV 女優の場合、同じ感情労働でかつ肉体労働に従事しているにしても、女性がプロダクションやメーカーにとっては貴重な商品で無駄に消耗はさせられないため、撮影の際の本番行為は通常は 2 回、多くても 3~4 回まで、撮影は月に一本という業界の不文律がある。これを守らないと、商品としてまだ余剰価値があるうちに、女性が心身に異常をきたして商品として使い物にならなくなる可能性がある。「物象化」の本質とは、「承認の忘却」である、と Honneth (2011) は指摘しているが、彼や Hegel が「承認 (Anerkennung)」と呼び、Lukács が「共感 (Antrilnahme)」, Heidegger が「気遣い (Sorge)」と呼んだ態度、本来「物象化」された存在に対しては忘却されてしかるべきものが、実際には二つ目の商品に属する AV 女優（少なくとも価値ある専属女優には）に対しては、周囲から注がれているのである。つまり、成功した AV 女優は、「半商品・半人間」と表現しても良いだろう。そして、その商品の人間的部分に対しては、明確な「承認」（連帯による「承認」）が、時にはファンからの称賛までが存在するのである。無論、あくまでその「承認」や称賛は、その女性に商品価値がある限りにおいて、という条件付きではあるが。

畢竟、三つ目の場合は、消費社会において厳密な意味での商品たりえないため、本来は「商品を提供する人間」として理解すべきもののなのである。その意味では、キャビンアテンダントや受付嬢などの、「女性性」を商品化して提供するサービス業と彼女達の仕事の本質は変わらない。身体的接触を伴うという意味では、ケアワークの看護、介護、保育等に一層近いと言える。従って、性風俗産業といえども、あくまで人間が、商品である性サービスを提供するのであって、消費されるのは第一義的には性サービスなのであるが、その性サービスが女性の身体と一体にして不可分であるが故に、人間としての女性までが男性に消費されるという事態を招く。その意味では、二つ目のケース同様に、女性はやはり「物象化」されているのである。しかし、同じ「半商品・半人間」の存在でありながら、三つ目のケースでは多くの場合、「承認」が致命的に欠けている。

第 4 章以降の実証研究部分でも指摘するが、彼女達の多くは、男性からあたかも「モノ」のように扱われ、時に理不尽ともいえる様々な性行為の強要を受け、言葉によって人間性を貶められることも少なくない。無

論、全員がそのような辛い思いをしている訳ではなく、性質のいい顧客を抱えた幸運な風俗嬢もいれば、店舗に優しく守られている風俗嬢もいるだろう。そのような場合、彼女達もまた、専属の AV 女優と同じような「承認」を他者から受けているために、本章第 3 節で詳述する「職業スティグマ」や社会的排除を実感していようとも、幸福な自己物語を語ることは十分にあり得る。

問題は、『東京貧困女子。』で描かれるような、ごく普通の女性達である。商品としては、市場にありふれていて何時廃棄されても、特段誰も困らない類の存在である。彼女達は、商品としての単価が低いため、回転数を上げないと売り上げが伸びず、そのために心身共に無理を強いられる。更に、本来は人間であるために「承認」が不可欠であるにもかかわらず、男性達は、多くの場合彼女達を都合よく「物象化」して、立岩が指摘するような「悲惨」を感じないように心理的な防衛機制を発動する。消費者である男性は、純粋に消費を楽しみたいのであるから、あくまで行為の最中は、彼女達は都合の良い「モノ」であって欲しいのである。この男性による「物象化」は、最後まで徹底される場合もあれば、途中で解除される場合もある。だが、往々にして、男性の思いとは異なり、途中で解除されるケースの方が寧ろ一層罪深い。

性風俗産業に従事する女性が異口同音に指摘する「最低の客」は、行為が終わった後に「こんなことはするべきじゃない。早く止めた方がいいよ」と説諭を始める厚顔無恥な男性（所謂「説教客」）であるが、男性のこの行為ほど、女性の「物象化」とその後の「再人間化」が分かりやすく示されている事例はない。恐らく、割り切って「自己物象化」を必死に徹底しようとしている女性にとって、行為が終わった瞬間に自分に突然「共感」を示す男性は、侮蔑の対象であると同時に、自己を「承認」する存在でもあるため、必然的にダブル・バインドが発生する。この状態は、女性にとっては心理的に逃げ場が無い極めて厄介な状態である。最後まで、男性が女性を「モノ」として扱ってくれた方が、彼女にとって「自己物象化」は遥かに成功しやすく、感情労働の負担も少ないのだ。ところが、「悲惨」を感じないように都合良く防衛機制を発動していた男性が、性欲の収まりの後に、今度は更に自身の罪悪感を掻き消すために、別の防衛機制を発動してくるのだ。それが、「打ち消し (Undoing)」による説教か突然の共感的態度なのであるが、この男性が用いる二重の防衛機制は、卑怯なまでに男性の側の「性的搾取」に対する心理的負担を軽減する一方で、女性は逆に Bateson 的なダブル・バインド状態に絡め取られる。だからこそ、彼らは「最低の客」なのである。

女性達にとって厄介なもう一つのパターンが、女性に慣れておらず、サービスを好意と勘違いした男性客が、客と風俗嬢という関係性を超えて、私的な交際を求めてくることである。この行為に対して、女性が嫌悪感を抱く理由は、先述のダブル・バインド状態と全く同じ理屈である。自分を最初に「モノ」として扱った人間が、その後突然自分を「人間」扱いし始めた時、その想いを本物の愛として実感するのはほぼ不可能である。実証研究のインタビューにおいて、女性達が異口同音に、「最初に裸で出会った関係が、その後特別に変わることは絶対にあり得ない」と断言する（実際は、意外に客と私的関係に発展している女性達は多いのであるが。）のは、「物象化」された女性達の最後の誇りであろう。

本項においては、「物象化」を鍵概念として、「性の商品化」の分類とそれが女性達に及ぼす影響について

考察を行った。そして、第三の商品形態（既述の通り、厳密な意味では商品とはいえない）の場合は、時に男性に「悲惨」を感じさせることを立岩の論考から導いたが、ここで眼差しを逆転させれば、男性が「悲惨」を感じる状況は、女性にとっては「屈辱」を感じる瞬間であることが推察される。そのように人間の尊厳を傷つけられる可能性がある仕事が性風俗産業である、とここで論じたところで、現実には、既に何度も指摘した通り、多くの若い女性達が雪崩を打つようにそこに殺到しているのである。「物象化」されることがシステムに組み込まれている性的な商品に自らなりたがる女性が一定数いる事実を看過する訳にはいかないので、次項を設けて性風俗産業が持つ引力について改めて考察を加えたい。

第5項 「孤独」と「生」と「性」

(1) 性風俗産業が、複雑な事情を抱えた若い貧困女性達、とりわけ幼子を抱えたシングルマザーやハウジングプアの状態にある若い女性達にとって、今や欠かすことができない社会インフラであり、経済的なセーフティネットになっていることは、前章で述べた通りである。だが、『女性たちの貧困 “新たな連鎖”の衝撃』は、更にそこが、全員ではないにしろ、多くの女性達にとって、心安らぐ「居場所」としての機能まで有している事実を指摘する。

風俗店では、出勤すると一日だいたい四万円くらいは手に入るという。しかし、浪費癖が強く、もらうと直ぐに使ってしまっていた。

そんな彼女を心配し、「店のスタッフが親身に話を聞いて、借金を減らすために協力してくれた」とゆきえさんは話す。風俗店は、給料は基本的に日払い制だ。彼女の浪費癖を抑制するため、店が給料の一部を封筒に入れて、店の金庫で預かり積み立てをしてくれたという。

さらに彼女は、店の客にも癒されていると話してくれた。疑似恋愛関係と分かっている、客から優しい言葉をかけられると、それが嬉しいというのだ。

「店は家族のような、家のような存在。休みの日でもふらっと立ち寄ってしまう」と彼女は話す。

(NHK 取材班 2014 : 112-113)

ゆきえさんにとって、風俗店は「家のような存在」なのである。何故ならば、彼女曰く、「スタッフが親身に話を聞いて」くれるし、例え疑似恋愛であっても、客から優しい言葉をかけられると嬉しいからだ。そして、太宰の『人間失格』において、主人公が、「自分には、その白痴か狂人の淫売婦たちに、マリヤの円光を現実に見た夜もあったのです。」と語っている通り、「実存的貧困」状態にある男性客もまた、ゆきえさんのような風俗嬢から、間違い無く幾許かは「救われている」のである。何故ならば、性風俗の本質はケアワークであり、癒しによる労働力の回復であるからだ。Young は、エーレンライクらの著作を引き合いに、それ

を以下のように指摘している。

このようにわれわれは第三世界に製造、サービス業を外注するとともに、第三世界から子守やセックスワーカーといった介護労働を内注する。ポルノ写真は外注できるが、性行為は内注しなければならない。エーレンライクとホックシールドの編集書『グローバルウーマン——ニューエコノミーのなかの子守、メイド、セックスワーカー』のサブタイトルがすべてを物語っている。ホックシールドがエッセイ「愛と黄金」で新しいかたちの帝国主義について語っていることがまさにそれなのだ。つまり、かつて先進国は鉱物を搾り取っていたが、現在はケアを輸入するのである。こうして「愛とケアは新しい黄金になった」。(Young=2008 : 181)

飯田や中村によれば、現在、性風俗産業の市場規模は、年間で2兆円を超えると推計されている。この数字は、デリヘルやホテヘル、ソープランド等、届出をしている性産業だけの数字なので、日本に幾らあるかわからないキャバクラやスナック等の飲食店と、無許可で行われているガールズバーやラウンジ等の飲食店、及び、風営法に定めが無い交際クラブや出会いカフェ、マッチングアプリ、インターネットの匿名掲示板、出会い系サイト、SNSを介して行われる素人売春等を含めれば、一体どれ程のお金が「夜」と「風」の世界で渦巻いているのかは、誰1人正確に知る者はいないだろう。だが、逆に言えば、それ程のお金の仲介を通してまで、救われたい、或いは癒されたいと願う男女が日本社会に一定数存在しているのだ。そして、彼らは決して少数派ではないということを、性風俗産業の巨大な市場規模が極めて明白に物語っているのである。

マスメディアが「女性の貧困」問題に目を向けたのは近年のことであるが、中村が指摘するように、そこで働いている女性達は、1990年代以降、基本的には変わっていない。1980年代までの所謂“訳アリ”の女性達に比べると、1990年代以降の働き手の多くは、基本的にどこにでもいるような普通の女性達である。故に、ポストモダン社会を生きる普通の人間であれば誰しもが抱える「実存的不安」を彼女達も抱えており、それを癒すために、「性」という営みに縋っていても何一つおかしくは無いのである。

2014年に『女性たちの貧困“新たな連鎖”の衝撃』で描かれた内容は、2005年に発表された伝説のソープ嬢・大庭佳奈子の自伝、『風俗依存症—私が本当の居場所を見つけるまで—』の中で語られている大庭の体験談とも完全に符合するものである。

風俗に飛び込んだきっかけは、実に簡単な動機からだった。ただ、家とそのときの環境から逃げ出しかっただけだった。学生のころからグラビアモデルとしてタレント活動をし、写真集を出したこともあったが、出版バブルの崩壊でモデルの仕事もなくなった。父の出奔で家庭も崩壊してしまい、10代でさまざまなことに翻弄されてしまった。

ソープ嬢をしていたけれど、SEXが大好きなわけでもなく多大な借金があったわけでもなく、男に貢

いでいたわけでもない。ただそのときの私には、ソープランドしか「居場所」と思える場所がなかったのだ。普通の人からしてみれば、ソープ嬢は特別な人間のように思うかもしれない……。だが、ほんの少しの“現実逃避”とちょっとしたきっかけさえあれば、勢いで誰でも入れる世界なのである。（大庭 2005 : 3）

再びここで、宮台（1998 : 164）の「宗教と性は、人間の『全面的包括要求』に応え得るという意味で、機能的に等価である」という言葉を引用したいが、傷だらけになった大庭が求めていたのは、まさにこの「全面的包括要求」であり、それはより端的に Honneth の「承認」の概念に換言できるだろう。更に大庭は、風俗嬢の視点からその客へと眼差しを向けると、実はそこに自分と同じような虚しい存在が見えることを次のように述べている。

お客さんのなかで、「風俗に勤めている女の子は、いい子が多いよね」とか「風俗の女の子といると、居心地がいい」と言う人が、わりと多くいらした。《なんでかなあ》と、いつも思っていた。

風俗に勤めるにあたって、なにか特別な教育を受けたわけでもないし、ふつうに生活をして、ふつうの仕事に勤めていた子が、なにかのきっかけで風俗に入るのが多いのだし、風俗嬢だからって、ふつうの女性と特別な違いがあるわけではない。

ただ、私が知る風俗嬢には、ある共通点があるように思えた。それは心の弱さであったり、今の生活に 100%は満足できない不安であったり、そのような弱い一面があるから居心地がいいのではないのかな、と私には思えた。

風俗店に足を運ぶお客さんも、その生活すべてに大満足なら、風俗は必要ないように思う。なにかの隙間を埋めたいから風俗に行くのではないか。それは寂しさであったり、欲望であったりで、非現実の世界を求めるからではないだろうか？

（中略）

何かを埋めたくて気持ちのどこかが弱っている人には、その弱さを共感をもってわかってくれる弱い女（風俗嬢）が落ち着くのかなあ、と思う。だから、「風俗嬢には癒される」とか「居心地がいい」と思う人が多いのではないかと、私には思えた。（大庭 2005 : 95-96）

「性の営みは、人間の実存を肯定する」という宮台や大庭の言説がほぼ間違い無いことを、他にも様々な識者が指摘している。例えば、荻上（2012 : 15）は、「僕があえて（ワリキリを）包摂というのは、彼女たちの話を聞いているとそれが仮初めの『救い』と受け止められているという現実があるからです」と指摘する。同様に、鈴木（2010 : 2）も「彼女らのしていることは、売春だ。だが、彼女らは出会い系に仕事と収入ではなく、明らかに救いを求めている」と出会い系のシングルマザー達を追いかけた一連のフィールドワ

一クの中で、最後まで理解できなかった問題として指摘している。だが、『援デリの少女たち』を書き終えた今ならば、恐らく鈴木も、「性」の営みこそが、紛れも無く人間の「実存」の「承認」に繋がるものであることを、既に理解できているに違いない。

「鈴木さん、キャバの仕事と風俗の仕事って、何が違うと思う？」

「キャバは酒飲めて話せないと駄目とか、かな・・・」

「全然、違うよ。キャバは、客に夢見させて、騙して期待させて、金をどんだけ落とさせるかって商売でしょ。たまには客のことも喜ばせないといけないけど、完全に満足させたら駄目なワケ。逆に風俗でも援デリでも、カラダを売る商売は、客に嘘はつかない。単に客のこと満足させるのが仕事でしょ。だから私、カラダ売るしか能がないとか言われると、すごくイラッとする。援デリでやってた時も、私キモい客とかでも絶対に手え抜かなかったよ。鈴木さん、ウリやってる女がセックスで感じてないって思ってるでしょ？」

「苦痛に思うこともあると思ってる」

「だからさ、それが差別なんだよ。ウリのセックスだって、感じんだよ。ていうか、客が満足するためだったら、自分が感じてなきゃ駄目じゃん？それでビッチって言われても、私は全然気になんない。むしろ本当に馬鹿でなんの仕事もできない子だって、セックスだったら客のこと満足させられるって分かったら、それって誇りに思っちゃ駄目なの？今の店は本番 NG だけど、そのこと私、物足りなく思ってるからさ」(鈴木 2012 : 211-212)

19 歳の里奈にそう言われて鈴木は思わず言葉を失ったのだが、否定も反論もしなかったのは、単にそれができる正当な理由が一つも見つけられなかったからだろう。何故ならば、彼女の語る「物語」は彼女の中では本当に「幸せな物語」だからだ。「大きな物語」が終焉したポストモダン社会において、個人は 1 人ひとりが千差万別な「小さな物語」を生きている訳だが、その「小さな物語」は、少なくともその個人にとっては、自己の人生の価値を左右する重要な物語なのである。

自尊感情の極めて低い女性達にとって、自らの「性」を通して自己存在を異性に強く「承認」されることは、何よりも価値あることなのだ。それは、彼女の単なる「性」ではなくて、「生」そのものを強く肯定するからだ。そして、あたかも「マグダラのマリア」の如く、掃き溜めの中で神格化された女性達によって、ポストモダン社会で傷付き疲れた男性達も恍惚たる癒しを得るのであろう。ここで「性」は「生」の肯定を経て、遂に「聖」へと至るのである。何故ならば、『終わらない日常』のなかを、欠落を抱えたまま生きなければならぬとき、そういう自分を全体として肯定できるチャンスは、宗教と性にしかない」(宮台 1998 : 164) からだ。

「宗教」と「性」だけが、人間の实存をありのままに全肯定する、という主題を描いた代表的な作品とし

て、多少長くなるのだが、ここで Dostoevsky の『罪と罰』を取り上げてみたい。

学費滞納のため大学から除籍された赤貧状態にある青年ラスコーリニコフは、それでも自分は一般人とは異なる「選ばれた非凡人」との特権意識を持っていた。その立場故に「新たな世の中の成長」のためなら一般人の道徳に反してもいいとの考えから、悪名高い高利貸しの老婆アリョーナを殺害し、その金を社会のために役立てる計画を立てる。アリョーナから金を借り、その金を貧乏なために娘が娼婦になったと管を巻く酔っ払いのマルメラードフに気紛れに与えた翌日、かねてからの計画通りアリョーナを斧で殺害し、更に金を奪おうとする。しかし、その最中にアリョーナの義妹も部屋に入ってきたので、勢いでこれも殺してしまう。

この日からラスコーリニコフは、罪の意識、幻覚、自白の衝動などに苦しむこととなる。苦悩を抱えたラスコーリニコフは、マルメラードフの娘で娼婦であるソーニャのところへ行き、聖書の朗読を頼んだり、「君と僕は同類だ」と言っ、ソーニャを激しく不安がらせる。その後、ラスコーリニコフの代わりに、別人がアリョーナ殺しの犯人として名乗り出たことにより、彼に対する警察からの嫌疑は一度晴れるのだが、良心の呵責と葛藤の日々に耐えられなくなったラスコーリニコフは、ついにソーニャの部屋で殺人の罪を告白する。隣の部屋で、スヴィドリガイロフが薄い壁を通して、2 人の会話を聞いているとは露知らずにである。

「そこでぼくはさとったんだよ、ソーニャ。」と彼は有頂天になってつぶけた。「権力というものは、身を屈めてそれを取る勇気のある者にのみあたえられる、とね。そのために必要なことはただ一つ、勇敢に実行するということだけだ！ そのときぼくの頭に一つの考えが浮んだ、生まれてはじめてだ、しかもそれはぼくのまえには誰一人一度も考えなかったものだ！ 誰一人！ 不意にぼくは、太陽のように思い浮べた、どうしていままでただの一人も、こうしたあらゆる不合理の横を通りすぎながら、ちょいとしっぽをつまんでどこかへ投げすてるという簡単なことを、実行する勇気がなかったのだろう！ いまだってそうだ、一人もいやしない！ ぼくは…ぼくは敢然とそれを実行しようと思った、そして殺した……僕は敢行しようと思っただけだよ、ソーニャ、これが理由のすべてだよ！」

「ああ、やめて、やめて！」と両手を打ちあわせて、ソーニャは叫んだ。「あなたは神さまのおそばをはなれたのです、神さまがあなたを突きはなして、悪魔に渡したのです！……」

「これはね、ソーニャ、ぼくが暗闇の中にねそべっていたとき、たえず頭に浮かんだことなんだよ、してみるとこれは、悪魔がぼくを迷わせていたのかな？ え？」

「やめて！ ふざけるのはよして。あなたは神を瀆神する人です、あなたは何も、何もわかつちやいないのです！ おお、神さま！ この人は何も、何もわからないのです！」

「お黙り、ソーニャ。ぼくはぜんぜんふざけてなんかいないよ、ぼくだって、悪魔にまどわされたくらいは知ってるよ。お黙り、ソーニャ、お黙り！」と彼は憂鬱そうにしつこくくりかえした。「ぼ

くはすっかり知ってるんだよ。そんなことはもう暗闇の中に寝ていたとき、何度となく考えて、自分に囁きかけたことなんだ……

(中略)

ぼくはね、ソーニャ、詭弁を弄さないで殺そうと思った、自分のために、自分一人だけのために殺そうと思ったんだ！ このことでは自分にさえ嘘をつきたくなかった！ 母を助けるために、ぼくは殺したのじゃない——ばかな！ 手段と権力をにぎって、人類の恩人になるためにぼくは殺したのではない。ばかばかしい！ ぼくはただ殺したんだ。自分のために殺したんだ、自分一人だけのために。この先誰かの恩人になろうと、あるいは蜘蛛になって、巣にかかった獲物をとらえ、その生血を吸うようになろうと、あのときは、ぼくにはどうしてもよかったはずだ！……それに、ソーニャ、ぼくが殺したとき、ぼくに一番必要だったのは、金ではなかった。金よりも、他のものだった……それが今のぼくにははっきりわかるんだ……ソーニャ、わかってくれ、ぼくは同じ道を歩んだとしても、おそらくもう二度と殺人はくりかえさないだろう。ぼくは他のことを知らなければならなかったのだ。他のことがぼくの手をつついたのだ。ぼくはあのとき知るべきだった、もっと早く知るべきだった、ぼくがみんなのようにしらみか、それとも人間か？ ぼくは踏みこえることができるか、できないか？ 身を屈めて、権力をにぎる勇気があるか、ないか？ ぼくはふるえおののく虫けらか、それとも権利があるか……」

「殺す？ 殺す権利があるというの？」

ソーニャは両手をうち合わせた。

「ええッ、ソーニャ！」と彼は苛々しながら叫んだ、そして何か言いかえそうとしかけたが、さげすむように口をつぐんだ。「話のじゃまをしないでくれよ、ソーニャ！ ぼくはきみに一つだけ証明したかったんだ。つまり、悪魔のやつあのときぼくをそそのかしておいて、もうすんでしまっただけから、おまえはみんなと同じようなしらみだから、あそこへ行く資格はなかったのだ、とぼくに説明しやがったということさ！ 悪魔のやつぼくを嘲笑いやがった、だからぼくはいまここへ来たんだ！ お客にさ！ もしぼくがしらみでなかったら、ここへ来ただろうか！ いいね、あのとき婆さんのところへ行っただけ、ただ試すために行っただけなんだ……それをわかってくれ！」

「そして殺したんでしょう！ 殺したんでしょう！」

「で、どんなふうにしたと思う？ あんな殺し方ってあるものだろうか？ あのときぼくがでかけて行ったように、あんなふうにしたに行く者があるだろうか？ どんなふうにもぼくが出かけて行ったか、いつかきみに話してあげよう……果たしてぼくは婆さんを殺したんだろうか？ ぼくは婆さんじゃなく、自分を殺したんだよ！ あそこで一挙に、自分を殺してしまったんだ、永久に！……あの婆さんは悪魔が殺したんだ、ぼくじゃない……もうたくさんだ、たくさんだ、ソーニャ、よし、そうよ！ ぼくをほっといてくれ！」彼は急にはげしいさびしさにおそわれて、叫んだ。「ほっと

いてくれ！」

彼は膝に両肘をついて、掌ではげしく頭をしめつけた。

「ああ、苦しいのねえ！」という痛々しそうな涙声がソーニャの口からもれた。

「さあ、言っておくれ！ これからぼくはどうしたらいいんだ！」彼はとつぜん頭を上げて、絶望のあまりみにくくゆがんだ顔でソーニャを見ながら、尋ねた。

「どうすればいいって！」と叫ぶと、彼女はいきなり立ち上った。いままで涙がいつぱいたまっていた目が、急にきらきら光り出した、「お立ちなさい！（彼女は彼の肩に手をかけた。彼は呆気にとられたように彼女に目を見はりながら、腰を上げた。）いますぐ外へ行って、十字路に立ち、ひざまずいて、あなたがけがした大地に接吻しなさい、それから世界中の人々に対して、四方に向かっておじぎをして、大声で、《わたしが殺しました！》というのです！そして神さまがまたあなたに^{いのち}生命を授けてくださるでしょう。行きますか？ 行きますか？」彼女は発作でも起こしたように、全身をわなわなふるわせて、彼の両手をとってかたくしめつけ、火のような目でじっと彼を見つめながら、尋ねた。（中略）

「苦しみを受けて、自分の罪をつぐなう、それが必要なのです。」（Dostoevsky=1987：302-308）

ラスコーリニコフが老婆を殺すことで、実際は、自分自身の魂をも殺したのだという哀しい現実気付、取り乱しながら救いを求めた先は、教会の神父でも牧師でもなく、殺人者である自分自身と同じくらい穢れた存在であったのだ。「絶望的貧困」に置かれた者が、社会に対して「自傷的存在証明」を行い、その存在証明が誤りであったと悟った時、辛うじて悔恨の言葉を述べることができる相手は、気高い存在である神や神の代理人ではなかったのである。だが、娼婦であるソーニャは、あたかも聖女のように、苦悩するラスコーリニコフに心からの贖罪を促すのである。大地に跪いて接吻し、世界の四方に頭を下げて、自らの罪を告白せよと。そこにしか、「救い」は存在しないのだと。

「絶望的貧困」状態にあるラスコーリニコフが最初に救いを求めたのは、「宗教」ではなく、娼婦に象徴された「性」であったということは、極めて示唆的である。それは、性風俗産業で働く女性達が社会福祉という権威に対して最初は距離を置き、なかなか救いを求めてこないことに似ている。また、第4章以降で論じるが、彼女達のうち、少なくない数の女性達が、ホストという同じく汚れた異性に依存していることにも通じるものがある。Dostoevskyは、「性」という「承認」を通すことで、すなわち人間の愛と温もりを通してようやく辿り着くのが、「聖」すなわち、「宗教」的（スピリチュアル）な救い、すなわち「未来への希望」であることを、『罪と罰』という壮大な物語を通して描こうとしているのだ。

ラスコーリニコフは、ソーニャの言に従って大地に接吻し、罪を告白し、今度は法廷において、自分で自分を徹底的に裁くのである。自らの手で殺してしまった自身の魂を、もう一度生き返らせるために、である。その姿は、自殺して自己の魂の再生から逃避した、リシャル・デュルンとは対照的である。そして、シベ

リアでの労役（連帯による「承認」）とそこでの贖罪の日々（法による「承認」）を通して、ラスコーリニコフは再びソーニャの愛という聖なる「性」に辿り着く。彼は彼女を愛し、彼女に愛されていることを知り（愛による「承認」）、ようやく自身の「実存」を、愚かにも自ら破棄した「生」を取り戻すのである。

「生」を取り戻した彼は、それまで頑なに否定し続けた権威、すなわち「宗教」或いは「神」の救いを不意に認めるようになる。ソーニャが残していった福音書を手に取り、ささやかな幸せを夢想しながら、ラザロの復活の物語に目を通す。そこに自身の魂の復活が重ね合わせられていることは言うまでもない。

既に見た通り、性風俗産業には、間違いなく救いの一端がある。だが、それは、ラスコーリニコフが贖罪の果てに漸く辿り着いた真の救いとは異なる、あくまで仮初の救いである。その意味で、それは嗜癖に似ている。そして、全ての嗜癖同様に、性風俗産業は、そこに長く関わり続ける者を破滅に導く可能性がある。性風俗の世界にべったりと貼り付けられたスティグマとそれがもたらす社会的排除は、人間の実存をより一層希釈させる可能性がある。従って、筆者は、諸手を挙げて、その世界に女性が流れ込むのを勧めたくないのである。どれほど社会に彼女等か弱き者達を排除する斥力が存在し、性風俗の世界に彼女達を引き寄せるいかなる引力が働こうとも、安易にその世界の中で自らの人生を完結させて欲しくない。坂爪（2018:255）のように、そこで生計を賄うことを「納得解」だとは思わないし、中村のように、それが合理的で賢明な行動だとも思えない。ラスコーリニコフがソーニャと出逢ったことは文学的な奇跡であり、誰しもが真の「救い」をそこで望んで得られるものではない。それは、鈴木のリポルタージュからも明らかだ。出会い系のシングルマザー達は、皆が「救い」を求めているながらも、実際は誰1人救われていないのである。だからこそ、我々は、自分自身の「現存在（Dasein）」を自らの手で確立する苦悩から逃げてはならないのだ。しかし、その苦悩に向き合うことができない、人として根源的な弱さを抱えた「社会喪失者」達が、自らの苦悩を癒すために「居場所」を求めて今日も性風俗産業に安易に流れ込んでいる。これが悲劇的な喜劇なのか、喜劇的な悲劇なのか、今はまだ誰にも判断できないのであるが。

第2節 フェミニズムの限界：「可哀そうな被害者」と分かりやすい性的搾取の構図

第1項 当事者主義の欺瞞：サイレントマジョリティへの無関心

(1) 2015年は、「アダルトビデオ出演強要問題」に世間が大揺れした。それまでも「バッキー事件」のような悪質な監督やメーカー、プロダクションによる女性の人権侵害問題が何度か社会を騒がしていたが、そのような事例はあくまで例外的なものであり、所謂大手メーカーから発売されているアダルトビデオに出演している女優達が、出演を強要されていると考える者は少なかった。とりわけ、バブル崩壊前までは、AV女優は作品1本当たりのギャラも高く、公衆に裸を晒す覚悟さえ決めれば、同世代の女性では経済的に全く手が出ない様な派手な暮らしを手に入れることも可能であった。だが、それもバブル崩壊後に一転する。

中村が指摘するように、アダルトビデオ業界は出演価格が一貫して下落傾向に歯止めがかからないほど、女性の新規参入が増え続けており、かつては“訳アリ”女性の集まりとまで言われていた業界は、普通の女性だけでなく、今では元グラビア女優や元アイドルまでが参入、更に昨今ではデビュー前に美容整形を行うことも一般化し、テレビタレントの様に容姿が整った女性達で溢れる様になってきていた。その様な状況では、かつての様な多少見栄えが良い程度の容姿では、最早女優として通用しないのである。

その結果、一躍人気グループになった「恵比寿マスカッツ」のように、深夜番組とはいえ、実際にテレビで歌って踊るAV女優やグラビア女優が集まったアイドルグループまで誕生し、SNSのフォロワー数では普通のアイドルを遥かに凌駕するようなカリスマ的なAV女優も今や多数存在する。AV女優というステイグマを含んだ言葉の代わりに、地上波のテレビでも使うことができるセクシー女優という言葉も少しずつ人口に膾炙しつつあり、着実に彼女達の社会的ステイタスは改善されてきている。最早AVは「賤業」ではなく、なりたくても簡単にはなれない、人によっては憧れの職業と言っても過言ではない存在になったのである。だが、そのような状況において、2015年に3人の元・現役女優達が、顔出しで突然、出演強要被害を訴えたのは、まさに業界にとっては晴天の霹靂だったと思われる。

ところが、その告発に反応する形で、Twitterを中心としたSNSで、今度は現役或いは元AV女優達が一斉に出演強要問題に対して、そんなものはあり得ないという主張を繰り広げたのだ。ある有名女優はTwitterで次の様に発言した。「300本以上出演してる女優さんが強要されましたなんて何故信用するの？てゆーか！無理やりAV出演とか、いつの時代の話ですかー？なりたくてもなれない女の子もいるってーのに アホくさ そもそも無理やりやる仕事じゃないし。」

この様な発言は、彼女1人だけのものではなく、彼女に追隨して業界を擁護する女優達が多数現れた。告発した側（300本以上に出演している女性は、結婚前提で付き合いしていた恋人に身バレした結果、「あの頃は出演を強要されていた」と言い訳したところ、「だったら、被害届」を出せ、と男性に言われて出したのだと業界擁護派の有名女優はSNSで事情を暴露している。残りの2人は、洗脳と恐怖による支配を主張している。恐怖による支配を訴えている女性は、実際に摂食障害等の様々な精神疾患に苦しみ、精神科に入院した

こともある)には、フェミニスト団体と人権派弁護士が支援に付き、悪質なプロダクションと徹底して戦う姿勢を見せた。一方で、業界団体には少なくない数の著名な現役或いは元 AV 女優達が、強要など無いという論陣を張って味方についた。マスメディアと人権団体、フェミニスト達と、セックスワークの当事者集団が真っ向から異なる主張を繰り広げたのである。支援者側は、ほぼ全面的に業界の異常性を指摘し、被害女性達には一切落ち度がないという主張を展開した。支援団体の一つ、「ポルノ被害と性暴力を考える会 (PAPS)」の代表世話人であるフリーソーシャルワーカーの宮本節子は『AV 出演を強要された彼女たち』を記し、あからさまな人権侵害と違法行為の具体例を多数示して、業界の悪質な手口を事細かに記述した。その後、問題を重く見た政府も動きを見せ、被害女性達を内閣府に招聘して啓発のシンポジウムを行うなど、女性の人権侵害に対しての救済の動きを見せている。

ほぼ時を同じくして、未成年の高校生や、高校を卒業したばかりの若い女性達がアルバイト感覚で従事していた秋葉原の JK ビジネスが社会的に問題視されてきた。JK ビジネスは性風俗産業の規制の枠をすり抜けるグレーゾーンの形態で無届けでも営業ができるため、性サービスを伴わない単なる食事やお散歩、リフレクソロジーから、未成年によるアンダーグラウンドでの売春まで幅広い営業実態があり、事実上の無法地帯であることが問題視された。無論、JK ビジネスは新宿や渋谷、池袋などの繁華街にも数多く店舗が存在していたが、槍玉に上がったのは、本家ともいえるべき秋葉原だった。東京都においては、「特定異性接客営業等の規制に関する条例」を作成し、平成 29 年 7 月 1 日から施行されている。この流れは、神奈川県や埼玉県等の近県にも波及している。

そのような中、2015 年 10 月に訪日し、児童の売買及び性的搾取の状況についての約 1 週間の視察を行った国連特別報告者のマオド・ド・ブーア＝ブキッキオ氏が、「日本では女子学生の 13%が援助交際を経験している」と記者会見で発言した事で大きな物議を醸し、後に外務省の抗議を受けて、信憑性に欠ける数字は撤回されたのだが、ブキッキオ氏に恣意的に JK ビジネスに関して事実と反するプレゼンテーションを行い、上記の発言を引き出した人権擁護団体が、「アダルトビデオ出演強要問題」の支援団体とも重なっていたことから、今度は支援団体の存在や活動が疑問視されるようになった。

正直、今なお多くの情報が錯綜し、何が正しいのかは誰も分からない状況であろう。筆者も、実態を少しでも正確に把握するために、被害を告発した当事者本人を含め、現役のアダルトビデオ監督、様々な関係者等幅広く聴き取り調査を行なったが、結果として、益々真実は分からなくなってしまった。第 4 章で詳述するが、筆者がインタビューを行なった 15 人以上の元・現役 AV 女優の誰 1 人、プロダクションから AV に出演を強要された人間はいなかった。「友人ではいませんか？そういう噂話だけでも聞いたことはありませんか？」という質問も全員にしたのだが、拍子抜けなくらい全員が、「そんな酷い話は聞かない。だいたい昔のことじゃないですか」と口を揃えた。唯一何人かから聞こえてきたのが、お金の支払いが不明瞭で不公平な事務所に、不当に安い出演料で利用されている女性が知り合いにいる、という事例であった。中には、「あれは左派系のフェミニスト人権団体が、自分達に都合の良い発言をする女優を探して来て被害者に仕立て上げ、

自分達の団体向けの話を書かせてるだけでしょう。韓国の従軍慰安婦と同じ構図です。私の周りでも皆あの人達に怒ってますよ。女性の味方を気取ってるけど、あたし達にとっては業界のイメージが悪くなって大迷惑なんですけどね。勝手に人を被害者にしないでくれって感じです」と吐き捨てるように言う者までいた。

この「アダルトビデオ出演強要問題」に関しては、筆者は断定調の判断を下してその真偽を明確にする気はない。それはいずれ、現在係争中の幾つかの裁判を通して明らかになるはずである。ただ、フィールドワークを進めていく中で確信したこともある。それは今でもやはり「ソフト」な形の強要は存在するという実感である。撮影初日に、心変わりされない様に山奥のスタジオに撮影場所を準備して、女優が帰ろうと思っても帰れない環境を整えたり、台本に無い演技や演出を当日突然要求したり、心変わりした女性を部屋に閉じ込め、代わる代わる関係者が脅したり、優しくしたりしながら交代で説得する（これは洗脳の常套手段である）、或いは宮本が上述の著書に記している様に、契約書を盾に不履行の場合の違約金や損害賠償等で、婉曲的に或いはかなり直截的に出演を迫る類のものである。そのような「ソフト」な形式の出演強要が日常茶飯事であることは、業界内部の関係者の話からもほぼ間違いないと判断している。

一方で、支援団体や当事者達が訴える形での極めて「ハード」な形式の強要が、昨今大手メーカーや有名プロダクションにも本当に有るのかには、今も若干の疑問を抱いている。何故なら、十分な規模の調査を行い、聴き取りをしたにもかかわらず、宮本が本に記したような「ハード」な形式の犯罪行為を一件も他人事としてすら確認できなかったからだ。唯一、洗脳に近いものを当事者本人から聞くことができたが、彼女も宮本が記したような（事務所でスタッフが輪姦し、その現場を勝手に撮影し、更にその後はそれを元に脅迫してAVに出演させ続ける等）、絶対に許すことができない犯罪行為を語った訳ではない。正直、新自由主義者であれば、冷たく「自己責任」と退けるレベルの話である。そして、支援団体に関しては、全ての機関に対して取材の依頼を行なったが、残念ながら組織としての返事は一つも返ってこなかった。唯一返事があった宮本個人からも、インタビューは多忙を理由に断られた。従って、この問題に関して、筆者が真実を語れるというだけの自信がない。また、真実を調べたり、業界や支援団体等のプレスリリースの矛盾や問題を指摘するのは、本来マスメディアの仕事であって、本研究の趣旨から逸れてしまう。

故に、本項で指摘するのは、一部のラディカル・フェミニストや当事者が、彼女達が守りたいと望む女性達の尊厳を実際には守れていない、或いは逆に傷付けているという事実である。そして、何故そのような哀しいことが起きてしまうのか、日本のフェミニズムが、何故今の今まで性風俗産業の当事者達と連帯することができず、支援の枠組みすら満足に作れずに来たのか、その点についても若干の考察を加えたい。

畢竟、日本のフェミニズムは、大枠でいうとアカデミックか、イデオロギー的か、ジャーナリスティックかという三種類のどれかに区分されるだろう。そして、残念ながら、いずれの場合でも社会福祉学が本来最重要視しなければならない当事者の気持ちに、真に寄り添えていなかったのではないかと、という疑念が今回の一連の騒動を通して改めて実感せずにはいられなかった。そして、古くは明治の廃娼運動の時代から、実はフェミニストの姿勢や考え方はさほど大きくは変わっていないのではないかと、とさえ感じるのである。林

(2011 : 26) は、「明治末期、全焼した吉原遊廓の再建反対運動から誕生した廓清会の公娼廃止運動は有名である。しかし当時の廃娼運動については、男性主導であった同会のみならず、婦人矯風会の運動の論理にさえ、その根底に娼妓への蔑視観があった」と述べるのだが、この指摘は今でも有効であろう。

日本の女性福祉の歴史に一貫して見受けられるのは、「当事者」の不在と価値観の押し付けである。それは、廃娼運動の先駆けである公益財団法人日本キリスト教婦人矯風会の活動が、当時のフェミニストから批判を受けていることから明らかである。与謝野晶子は、婦人運動に理解を示しながらも、矯風会に代表される宗教的不道德観のみにより他人を断罪するキリスト教的な処罰主義に疑問を呈し、また、宮本百合子は、同会が農村の貧困構造の本質を説かないまま、社会機構に疎い層を動員していることへの不満を述べている。

こうした宗教的な道徳を起源とする運動では、必ず一方であるべき姿、望ましい姿が提示される。廃娼運動の場合は、当然、純潔であり、結婚まで女性は貞操を守るべきという「清く正しい生き方」を女性に強要することになる。そこには、宮本が指摘した公娼の置かれた経済的困窮状態などの事情を理解しようとする視点や、彼女達の気持ちに寄り添うという感覚はない。最初から、神と神の代理人による教化と救済以外の選択肢は示されないし、求められないのである。Nussbaum (2011) は、アメリカはこのような宗教的道徳による教化という悪しき伝統、すなわち宗教的不寛容を、合衆国憲法によって乗り越えたと指摘するが、残念ながら日本においては、戦後憲法が十分な国民の議論に基づいて起草されたと言い難い状況であるため、未だに過剰な道徳観を理性の力で克服することを国民が理解・経験できていないかのしれない。

社会福祉学が重視する自己決定・自己選択の基本理念に従えば、本来、このような当事者の気持ちを置き去りにした議論は全く意味が無いはずである。また、社会運動として、当事者を積極的に巻き込まない、或いは巻き込めない連帯を欠いた運動にはほとんど価値が無い。それでは、当事者が全くエンパワーメントされないどころか、逆にパターナリズムによってディスエンパワーメントされてしまうからだ。その意味で、日本の廃娼運動は、宗教的には正しくとも、社会福祉学的には明確に誤った運動であった。声なき声、サイレントマジョリティへの配慮が全く欠けていた、否、完全に彼女達に対しては無関心であったと言っても過言ではないであろう。そして、日本においてマジョリティではない宗教的価値観によって性的な社会規範を無理に作り上げたことが、結果的に性に関わる諸問題に対する日本の歪な状況を現代社会に生み出してしまい、昨今の出演強要問題や援助交際の氾濫に繋がっているのだと筆者は考える。

本項ではその点を踏まえて今回の「アダルトビデオ出演強要問題」と「JK ビジネス」規制の厳格化という一連の騒動を振り返り、日本のフェミニズムの限界について論じたい。

(2) 日本のフェミニズム実践の最大の問題は、上述の通り、それを行うフェミニスト集団が皮肉にも極めて性的に保守的な思想を持っており、性的な自己決定、すなわち「行為における主体性」としてのセックスワークを頑なにまでに認めたがらない態度にある。例えば、「性の商品化」の項で論じた際に明らかだった様に、江原の立ち位置はそもそも「性の商品化」を認めたくない、という立場であった。これは、背理

法で否定したい背理として橋爪論文を挙げておきながら、それを明確に棄却できなかった彼女のもどかしさを記した箇所にも如実に表れていた。江原は女性が自由意志で性を売る行為が、「行為における主体性」である可能性を恐らくほとんど考慮していない。貧困であっても、疾患や障害のせいで満足に働けなくても、女性達が性の営みを通して幾許かの「承認」を得て、自己のアイデンティティや人生を立て直す事を全否定する訳ではないにしろ、江原がそれをかなり否定的に捉えていることは明瞭である。無論、筆者もそれに近い立場（「売春」に「悲惨」を見てしまう立場）なのであるが、女性のフェミニストである江原が、そのような男性的な価値観と視点を持つことは問題なのではないだろうか。同じ女性が、男性の目線（往々にして日本社会では、「上から目線」である）で女性を見る事は、男尊女卑の社会において、男性性を内面化した女性が他の女性を見下していることになりはしないだろうか。それが、フェミニズムが結果的に女性からの支持だけでなく、男性からの支持までも失いがちな最大の理由だと思われる。

そして、日本のフェミニズム実践家のもう一つの問題は、パターンリズムである。社会福祉学において、それは本来最も避けるべきものの一つである。パターンリズムは、抑圧されている人々のエンパワーメントを阻害する。ところが、フェミニズム実践家の中には、明らかに過剰なパターンリズムを持って女性を保護しようとする、或いはそのために男性を必要以上に「加害者」に仕立て上げたり、全ての女性を無垢な「被害者」の類型に落とし込む様な言説が散見される。その様な問題を抱えた日本のフェミニズム実践家の事例を幾つかここで取り上げたい。

一つ目が、本項の冒頭に触れた「アダルトビデオ出演強要問題」をメディアに告発したグループである。まず、彼女達の主張は、一貫して女性は全く落ち度のない無垢な被害者で、一方的に騙したスカウトやプロダクション等の男性、そしてそのような性商品をノーリスクで消費している多くの一般男性までが悪い、ということになる。だから、女性の「被害」を殊更に強調する形で社会に訴え、被害者救済を金科玉条の物として、その実現のために政治家やマスメディアを大いに利用している。彼女達の主張が全て事実であるならば、これ程の人権侵害を看過してきたマスメディアや政府は極めて具合が悪いだろう。だからこそ、彼らも過剰なまでにこの問題に反応し、リベラルな朝日・毎日新聞などは今も継続的に記事にして取り上げており、出演強要被害を無くすため、国会議員による超党派の議連も作られた。また、内閣府において、被害女性がシンポジウムを開催するまでに至った。これら一連の流れは、深刻な人権侵害を看過してきたことに対する権力の側の後ろめたさの表れとして理解できる。だが、ここで改めて問われなければならないのは、支援団体の全ての訴えが本当に真実なのか、ということである。

宮本が認めている様に、彼女達支援者への最も多い相談は決して出演強要被害ではない。過去の作品の販売差し止めである。これは、前項で論じた「性の商品化」の二つ目のカテゴリで筆者が指摘した問題である。ライフコースの中でデジタルタトゥーが問題になったケースであり、これが相談の過半数を占める段階で、支援者と当事者の間の問題認識にかなりのずれや温度差がある。それにもかかわらず、女性の被害だけを殊更に強調し、産業としてのアダルトビデオ（そして、そこで生計を立てている女性達も）を追い詰めている

彼女達の行き過ぎた正義感には、正直違和感を覚える。「被害者」の救済を声高に主張し、「加害者」の側の悪を糾弾すればする程、「被害者」ではない女性達を間接的に責めることになる。「被害者」として洗脳から目覚めることが正しく、そう思えないのは「加害者」のせいなのだ、と幾ら予防線を張ったとしても、「被害者」ではない女性達は、間接的に悪の側に属する人間であると指弾されているに等しい。このような支援者のスタンスは、その業界で自己実現している女性達の「行為における主体性」を全否定することに繋がる危険性を秘めているのだが、長年婦人保護事業に携わってきたソーシャルワーカーの宮本や先陣を切っているNPO 法人ヒューマンライツ・ナウ（HRN）の弁護士の伊藤事務局長は、その様な女性の生き方を認める気が無いのであろうか。その様なパターンリスティックで、かつ内心では性に自己実現を求める様な女性を軽蔑し、スティグマタイズしている支援者が、当事者達から猛反発を受けるのは、ある意味当然であろう。

全く同じ構図がJK ビジネスの規制強化の背景にある。昨今、この問題を取り上げながらソーシャルワークを行なっている団体に、女子高生サポートセンターColaboがある。代表の仁藤は、『難民女子高生』や『女子高生の裏社会』などの著書を持ち、「私たちは『買われた』展」などの社会的にかなりの物議を醸した展覧会を企画することで、JK ビジネスの危険性を社会に訴えと共に、そこに関わる女性達は全員「可哀そうな被害者」であり、買春をした男性は一律に「厚顔無恥な加害者」という姿勢を貫いている。だが、この安易な問題のフレーミングは果たして本当に正しいのであろうか。

Lister (2011) は、社会で起きることのうち、どこまでを個人の行動（主体的行為）の産物であり、どこからが社会的構造による強制であるかを決める議論は、社会学理論において長年振り子の様に揺れ動いてきたと主張する。理論の振り子はあるときは「行為における主体性」を強調する側へ、またある時には構造を強調する側へと振れてきたが、彼女は近年は「両者の関係」ということが中心になってきていると指摘し、貧困研究においては、個人主義的なアプローチと構造主義的なアプローチの二分法の超克を目指すべきだという。

この「福祉の新たなパラダイム」の中心となっているのは、「人が創造的で物事を熟考してふたたび現実に反映させるような人間存在である能力、すなわち積極的な行為者として自身の生活を形成し、経験し、福祉政策の結果にさまざまに影響を与え、これを再構成する能力」の強調である。そこでの分析の枠組みは、主体的行為を「幅広い形態の階層化や社会的権力関係との関係のなかでの」個人の社会的地位という文脈に位置づける。そうすることで、貧困状態にある個人の行為者としての主体性に焦点をあてつつ、しかも彼らの主体的行為能力が物質的資源や力の欠如によってどのように抑制されているのかを見失わずに済むからである。（Lister=2011：185）

Lister のこの考えは、明らかに次項で詳述する Butler のエイジェンシー論に拠っているが、本来「AV に出演した」という事実は、女性の「行為における主体性」と男性による性的搾取が存在する社会的な構造と

いう両者の関係性から理解し、かつその中でどのようにその行為を個人が「言説化」するのかを待って語られるべきであろう。だが、現状は、数人の女性達が、「強要被害にあった」という「言説化」を行った事実には飛びつき、あたかも数万人を超えるであろう過去に AV に出演した全ての女性達がそのような「言説化」を行っている、或いは、行ってはいないが、行いたいはずだ、という決め付けの下で第三者によって都合よく理解され、語られてはいないだろうか。それは、JK ビジネスに対するフェミニスト達の容赦無いバッシングも同様である。社会学理論における振り子は、今極端に構造主義的なアプローチの方向に振れている訳だが、搾取的な社会構造を強調すればする程、結果的にそのような「言説化」とは意見を異にする女性達のエイジェンシーが否定されざるを得ないという状況を、PAPS, HRN, Colabo らの活動に従事しているイデオロギー色の強いフェミニスト達はきちんと理解しているのであるか。

成熟したフェミニストである上野千鶴子や信田さよ子は、女性が男性を手玉に取り、援助交際や売春をすることを決して全否定はしない。『毒婦たち: 東電 OL と木嶋佳苗のあいだ』で、東電 OL や木嶋の生き方にある種の憧れや共感を覚えるというフェミニストの北原みのりとの鼎談で、北原同様に上野や信田は東電 OL を「聖化」する佐野や、「売春は魂が傷つく」と言ったユング心理学の大家である河合隼雄らを批判し、男性視点のロマンティズムや勘違いをフェミニズムの立場から揶揄するのだが、多くの男性達を手玉に取った強かな毒婦達が、売春していたことを可哀そうである、或いは、惨めであるなどと指摘することはない（筆者同様に、自傷行為であるとは指摘している）。彼女達にしても買春男性に対する露骨な侮蔑は隠さないが、それでも女性を都合良く「聖化」したり、単純な「被害者」に矮小化したりはしない。

上野や信田達に比べると、北原も含め、実際に社会活動を行なっているフェミニストの女性達の主張においては、アカデミックな体系だった思想だけでなく、それ以上に政治的なイデオロギーやジャーナリスティックな感情論が先行している。それが透けて見える限り、支援を受ける女性達は、自分達が支援団体に利用されているのではないかと、或いは支援者自身の承認欲求の踏み台にされているのではないかと、という不信感を持ってしまっているのではないだろうか。それが、日本のフェミニズム実践が抱える大きな課題であると感じる。更に、そのような支援者達はジャーナリズムに走り過ぎるが故に発言内容が極端過ぎて不正確でもあり、イデオロギーが先行しているが故に不寛容でもある。アカデミズムの観点から見た場合は、無知や不見識が往々にして垣間見られる。そして、より一層問題なのは、自分達が準備した「言説化」以外は絶対に認めない彼女達の見方の狭さである。

『16 歳だった一私の援助交際記』、『副業愛人 年収 300 万円で囲えるオナナの素顔 28』等の著作を持つ、援助交際の当事者だった中山美里は明確にフェミニストを自認している訳ではないが、自分自身がライターとして覚えた違和感を、インターネットの言論プラットフォーム「アゴラ」において発表している（政治的な圧力で週刊誌での掲載が取りやめになったからだという）。その際、HRN の伊藤が、中山からの取材を拒否する事、メディアを選別する事、記事を事前チェックする事等を指摘して、「伊藤氏が AV に対して無知な可能性があることよりも、実はこちらの方がよほどスキャンダルかもしれない。彼女から発信された情

報がメディアに載せられる時、それは報道の体裁をとってはいるが、実態としては彼女の広報であることを週刊誌 A に対して自白している。彼女から発信された情報をもとに記事を構成しているメディアは数多く、それが現在の AV 出演強要を取り巻く世論状況のベースになっている。曖昧な定義に基づいた言葉に乗せられてしまうことの危うさに、日本社会はもっと敏感になるべきではないだろうか。」と警鐘を鳴らしているが、AV 産業や性風俗産業は元来情報が表に出にくく、不利益を被った当事者が堂々と顔を出して訴えができない事情もあり、真実というものが判然としない世界でもある。そのような状況だけに、そこで発生する人権侵害や女性の性的搾取に対しては絶対に支援をしなければならないし、救済措置は図られなければならないのだが、支援団体のイデオロギーが過剰に先行し、当事者が不在のまま進められる現状の議論には、筆者も中山同様に危うさを感じる。そのような支援団体主導のマスメディアのミスリードは起こり得るし、事実起きているからだ。

例えば、既述の国連特別報告者のマオド・ド・ブーア＝ブキッキオ氏に、外国特派員協会での記者会見により、JK ビジネスの不確かな情報を与えたのは支援団体の代表の仁藤である。仁藤は、その際のプレゼンで、JK ビジネスに参入する女性達の具体的な統計数字には一切触れることなく、とにかく増えている点だけを、映像資料を使って紹介した。実際の女子高生のうち、どの程度がそのビジネスに携わっているのか、記者達からは当然質問が出たのだが、そこは最後まで不明瞭にぼかしただけである。そして、彼女は JK ビジネスに参入する若い女性達を三分類し、「1.貧困層」「2.不安定層」「3.生活安定層」と紹介した。前二者は、従来からある福祉制度の売春防止法が適用される売春予備軍であり、伝統的な「女性の貧困」の象徴として過去から日本社会に連綿と存在してきた。社会福祉学の支援対象としては格別新しい層ではないため、仁藤は特に 3 に注目して、「両親との仲も良く、学校での成績も良く、将来の夢もあって受験も控えているような普通の女子高生がリフレやお散歩に入り込んでいっています。」と外国の記者団に発表し、日本における若年女性の人身売買の横行と性被害を訴えるのだ。だが、筆者の感覚では、「実存的空虚」或いは「実存的貧困」状態にないごく普通の生活安定層の女子高生達が、騙されて JK ビジネスに参入し、そこで安易に小遣い稼ぎをしようとしている、という仁藤の主張は安易に首肯できない。

第一に、鈴木や中村の様にライターとしての実績も無く、荻上の様に社会調査の知識もアカデミックな素養も不足している仁藤のフィールドワークには、その質自体に疑問を持ってしまうからだ。故に、彼女の主張自体が疑わしく思われる。ラポールがなければ、女性達は本当の身上を語ることはあり得ない。故に、本当に両親との仲がいいのか、将来の夢は本人が自分で選んだ夢なのか、親の人生を無理に押し付けられていないだろうか、等々幾らでも彼女の主張には疑問が湧いてくる。筆者自身のフィールドワークと比較した際、仁藤が生活安定層と呼ぶ集団が、本当に何の心理・社会的問題も持たない健全な女子高生なのかが極めて疑わしいのである。

宮台（1998）は初期のフィールドワークにおいて、ブルセラ女子高生をポストモダン社会の新しい自由な生き方であると称賛し、オウム真理教に嵌ってしまうような生真面目な大人は、寧ろ、ブルセラ女子高生を

見習って脱力して生きろ、と「まったり革命」を説いた。だが、宮台は後にその言説を撤回する。彼女達が、所謂メンヘラ女子高生であり、心理的に情緒不安定で病んでおり、普通的女子高生ではない自傷少女達であったことに遅まきながら気付いたのである。宮台のようなアカデミズムに属する人間ですら、心理学や社会福祉学の専門家でない以上、目の前の少女が普通か普通でないかの区別は容易には付かない。恐らく、精神科医や心理学の専門職であっても、やはり初見では二者の区別は難しいであろう。仁藤は、自分が所謂「難民女子高生」だったという当事者性を前面に打ち出すことで、JK ビジネスの当事者である少女達の気持ちを代弁できていると信じて疑わない訳であるが、当事者だからこそ嵌り易い陥穽があることに、支援者として思い至らないのであろうか。

仁藤の記者会見は典型的なジャーナリズム寄り、或いはイデオロギー寄りのフェミニズム実践になるだろうが、致命的なまでにアカデミズムの裏打ちを欠いているため、ほとんど説得力がない。信頼に値する統計資料等は無く、彼女が語る実態（東京だけで年間 5,000 人以上が従事等）は全て単なる主観である。質的に分厚い鈴木フィールドワークや、アカデミックな手法で行われた荻上の質的・量的調査に比べると、『難民女子高生』や『女子高生の裏社会』で描かれる現実とは、彼女の身の半径数メートルで起きている出来事を、自分に都合よく解釈し、パッチワークの様に提示した、という印象を抱かざるを得ない。そのような主観的な世界観を何の戸惑いもなく世界に発信することに対しては、強い懸念を抱かずにいられない。事実、日本の女子高生の 13 パーセントが売春をしているという、何の調査実態もない数字が国際社会で 1 人歩きしてしまう。また、彼女が指摘する「生活安定層」が何故 JK ビジネスに参入するのか、という問いに対して、彼女は、悪意ある男性に巧妙に広告やスカウト等で騙されて、という若い女性の「被害者」の側面しか強調しない。それは、先述の「私たちは『買われた』展」での主張と同じである。これらの問題の本質は、全ての人権侵害は男性による性的搾取に帰着する、と最初から彼女の結論があることなのだ。そこに向けて全ての事象を安易に結びつけていく主張の仕方は、余りにも未熟かつ狭量であり、牽強附会の誹りを免れまい。彼女の論理展開は常に、ただの 1 人も自由意志で売春や性行為類似サービスを男性に行う者はおらず、故に傷付いた女性達は、自分達のようなフェミニストグループに適切に保護されるべき、という考え方に帰結する。しかし、保護というパターンリスティックな支援方法の問題以前に、このような女性の過剰なまでの「被害者」性の強調は、実際の被害者だけに留まらず、誇りを持って能動的にセックスワークを行なっている多くの女性達の尊厳を著しく傷付けるだろう。加えて、「行為における主体性」の手段として性労働を自分なりに正当化したり、合理化したりして辛うじて自らの苦境と折り合いをつけている「^{デイズァフイリエ}社会喪失者」の女性達に、あたかも「貴方達は女性の恥である」とでも言う様な、「純潔」な女性達からの差別と偏見、そして極めて保守的な性道徳と価値観を押し付けることにもなりかねない。彼女が指摘する「貧困層」や「不安定層」であるが故に売春や JK ビジネスに頼らざるを得ない女性達は、「生活安定層」に比べてソーシャルワークの支援対象として支援の緊急性や必要性が高いはずであるが、その女性達を助けた際に、「貴方達は何も悪くありません。貴方達がやりたくない行為を強要する汚らしい男性達と、それを容認する社会が悪い

のです」という「彼女の正義」を押し付けることは、男性支配からの解放ではなく、ある意味それ以上に性質の悪い純潔な女性達によるパターンリズムと、貧困以上のスティグマと屈辱感を彼女達に感じさせる危険性がある。

(3) 筆者と同じ懸念を持つのが、フェミニストであり、セックスワークの当事者でもある Y1 である。セックスワークに関する複数の著作を持ち、そこで働く女性達の権利と地位向上を目指す団体・M を主宰する Y1 は、主として欧米のセックスワーク論を土台に、性労働に従事する当事者の視点からセックスワークの「行為における主体性」を論じる。彼女には、質的研究の際に支援者の 1 人として三角測量のインタビュー調査に応じて貰ったが、その中で彼女は、以下の様に語っている。

原田 139：なるほど。じゃあそろそろちょっとまとめの質問を聞きたいんですけども、風俗を使う人って求めているものはなんだと思います？

Y1-139：風俗の対象者？

原田 140：はい。買春する側。女性を買う側の男性は何を求めているんですかね。

Y1-140：あの、うちら調査やった時はさ、風俗嬢の意見だけど、安らぎとか愛情とかでしょ、なんかそういう、楽しい空間とか。

原田 141：性処理だけではないですよ。明らかに。

Y1-141：そう。そりゃそうよ。それはもう絶対そうよ。

原田 142：ですよ。

Y1-142：みんな言ってる。

原田 143：ピンサロレベルでももしかしたら安らぎとか求めているかもしれないですよ。

Y1-143：そうなんじゃない？ うん。

原田 144：ですよ。やってることと言うのは基本的にはやっぱりこう、ケアの仕事を提供してるという風にわたしも思ってるんですけども、その意識って、女性ってみなさん持ってるんですかね。

Y1-144：あるあるある。

原田 145：ありますか。

Y1-145：うんうん。

原田 146：なんかわかってない人,,,

Y1-146：わたし達が現役の風俗嬢を対象に実施したアンケート調査ではさ、あなたは何を売ってますか？っていう質問でさ、一番多かったのは精神的な物ってなった。

原田 147：そうでしたね、確か。

Y1-147：うんうん。

原田 148：でも逆に言うと全員ではないわけで、何人かはこう、男性は性のはけ口だけを求めてるからおおざっぱなサービスでいい、みたいな、そういうものやっつけばいい、みたいな子もいると思うんですけど。売れない子ってたぶんそういう子なのかなって気はするんですけども。で、男性は明らかにそういった癒しのものを求めて行ってるわけですが、女性もそこに癒しのものって求めていますかね。

Y1-148：え、客の側ってこと？ 売る側？

原田 149：売る側の女性も、客を癒すことで自分も癒すっていう感覚ですけども,,,

Y1-149：うん、それはそうよ。レジリエンスにつながるって言うじゃん。レジリエンス、あの、つまり例えば、あの、さっきその、病んでる子たちが多たって話したでしょ？

原田 150：はい。

Y1-150：その病んでる子たちっていうのは、なぜ風俗に行くのかっていうのは、いろんな視点があってね、労働としてより自分が、まあ楽というか、ストレスの少ないと思える、自分でも続けられる仕事が唯一風俗なのかもしれない、っていう面とね、あの、自分がそこで得るものが、与える側になるから。人に。あの、求められる側になる。必要な存在になる。多くのお客さんにとって喜ばれる存在になる。サービスを提供する側になるってことは、自信につながるわけ。自己肯定につながるわけ。

原田 151：そうですね。

Y1-151：わたしのやったことはすごく人を元気にしていると。自分の働きがこんなに人を幸せにしていると。こんなに感謝されることをわたしはしているんだ、ということは、レジリエンスとエイジェンシーに繋がってるわけ。だからこの仕事がみんな好きなの。うん。やって良かったなっていう風に言うじゃん。

原田 152：そうですね。

Y1-152：で、悪いことだと思ってないもん。それが全然。だってみんなを幸せにしてるって思ってるんだもん。

原田 153：うん。そういう話もよく聞くので、あの、なんていうか、でも一方で、この性風俗に対するスティグマの問題で、非常にこう、自分のやっていることに後ろ向きになって、申し訳ないみたいなことを感じてる人もいて、そういう人達は、レジリエンスにつながったりエンパワーされてなかったりして、っていう感じも受けるんですよ。

Y1-153：その問題は2種類の人のパターンの見方じゃなくてね、あの、人の中にアンビバレンスな感情があってね、2種類の矛盾する気持ちがあるわけ。外部の視線を取り入れた自分は自信がないし、それこそ黒歴史だし、自分なんて風俗しかできないしと思ってるわけ。だけど、あの、風俗と、なんだろう、風俗の中での自分で、お客さんとのわたしとの関係というか、から見た場合は、

自分はすごく素晴らしいことをしているんだなあっていうのがわかるわけ。だから、外部から自分を見るか、内部から自分を見るかみたいな。二つの視点が自分にあるじゃん。誰でも。風俗嬢じゃなくてもね。自分のやってることは納得してるんだけど、周りから見たら最悪だよっていうこといくらでもあるじゃん。ただそれだけの話だと思うよ。

原田 154：ああー。なるほどね。アンビバレンスはほぼ全員が抱えていて当たり前ってことなんですよね。

Y1-154：そうそう。みんなあるじゃん。わたしだってさ、M（支援団体）の活動してんのは自分の中では納得して素晴らしい活動してると思ってるけど、人から見たらなんなの、そんなの早く止めれば、みたいな。言われるわけ。あの、お金にもならないし、なんだろう、あの、その、何がしたいかわかんないみたいななんかさ、なんでそんなに風俗嬢、風俗嬢みたいなことやってんの？みたいなね。理解されにくいっていう風に思ってる、自分は。人に。だからすごくストレス抱えるよね、そこで。自分が良いと思ってるけど、周りから見たら全然理解されないから。それはもう二つの評価が自分の中にあるの、誰でも。

セックスワークが、レジリエンスとエイジェンシーに繋がっている、という性風俗産業の当事者である Y1 の指摘は重要である。そもそもこの視点は、フェミニストであろうとなかろうと、女性達の支援をする場合は、必ず持っていなければならない視点であると思われる。確かに、リスクを理解もせず、単なる興味本位で性風俗産業で働きたいという女性を水際で止めたり、不本意な状態で働いている女性達を説得して引退させたりすることも、一つの大切な支援ではある。また、彼女達が引退した後のセカンドキャリアや人生を法的に守ることも当然今後も十分に検討されなければならない。しかし、これらのことに拘る余り、性風俗産業やポルノ産業が完全な悪＝敵であり、醜悪な性的搾取の場でしかない、と決め付けてしまう上述の支援団体の立場は、Y1 のような当事者を、支援者の側から否定することになるのである。前項で、鈴木のリポーターの一部を抜粋したが、19 歳の里奈が発した、「だからさ、それが差別なんだよ。ウリのセックスだって、感じんだよ。」という言葉には、まさに Y1 と同じ性労働に対する彼女の誇りと、自称支援者に対する極めて否定的な感情が宿っている。支援者はこのような想いを否定すべきではないし、里奈のような女性がいることを許容できない支援者は、本来支援者を名乗るべきではない。

その意味では、支援者としての一つの見本を Y1 が体現している。Frankl (=2011 : 196) は、「人間は労働において創造価値を、体験において体験価値を、苦悩に耐えることにおいて態度価値を実現する」という。Y1 は、今 M という場所で風俗嬢達を助けるという仕事を通して創造価値を体現している。更に、彼女達からの相談を受ける中で、時に転移感情を抱き、自分自身の過去を見つめ直すことを余儀無くされている。しかし、その辛い自己覚知の中に、体験価値が存在する。そして、その自分自身が苦しい状態で、更に他者の苦しみまで一緒に背負おうという強い意志が、最も意味のある態度価値である。M という当事者団体を主宰

し、支える側になった当事者は、まさにロゴセラピーを自らに施しているのに等しいのである。それが、Y1 が指摘するレジリエンスやエイジェンシーに繋がっている。そして、そこから下記のような更なる自己覚知に辿り着くのである。

原田 166：でもそういう風に支援したいと思ってる人から言われちゃってる時点で〇〇さんは支援者じゃないんですよ。

Y1-166：そうそうそうそう。うちもそう思ってる。

原田 167：言わせちゃってるんですもんね、その言葉を。

Y1-167：要するに傷付けてるわけだから。

原田 168：うん。傷付けてるんですもんね。

Y1-168：そうそう。けど、なんで傷付いちゃったのかな、それで、って考えないと支援者は。うん。

Y1 は、セックスワーカーの支援団体である M の活動を「自助グループ」として位置付けている。幾つかの著作を通して、性風俗に携わる女性達の意識調査やセックスワーク論を社会に発表したのも、自分自身の癒しのためでもあるのだ。そして、そのような支援活動を通して、支援することと支援されることの間主観的な営みが、両者に対して癒しを与え得ることを理解すると共に、時にお互いに傷付けあったり、或いは支援する側が無自覚に支援される側を傷つけてしまう可能性にも自覚的である。従って、Y1 の PAPS, HRN, Colabo などの性風俗に関わる女性を助ける（保守的な純潔思想が支援の背景にあり、結局は、一段高い場所からの啓蒙・教化と悪いことをした本人の反省や矯正が求められる）と謳う NPO への批判は手厳しい。

Y1-46: ですよ。それをね、みんなおっしく見せるのうますぎるんですよ。あのね、所謂その、今でいうオシャレ NPO ですか、キラキラ系の NPO とも言う言い方あるけど、なんせ数がめちゃめちゃ少ないのに、やることがみんな共感しやすい内容だから、めちゃくちゃこの団体良いこと言ってる！みたいなのが際立って、実際じゃあ何人救われたのよそれで？って話しにならないんですよ。そこにね、注目されない。あの、もちろんそれについて批判する人もいないしそんなこと批判したらせっかく良い活動してるのにいちいち文句言ってるって言われるから批判しにくいでしょ？一体それで何人救われたの？って聞いても悪いっていうか。1 人でも救われたらいいじゃないって言い返されたら、それはそうですよねってなるし。

ここで、Y1 は人権系 NPO の実態の乏しさとそれに反比例する影響力や見かけの大きさ、そしてそのことに対する批判しにくさについて述べているのであるが、この指摘は正鵠を得ている。実際、上記の団体に対して、明確に批判的な態度を取れるのは、当事者だけなのである。援助交際の当事者であった中山とセック

スワーカーでかつ支援団体の代表を務める Y1 は、まだ PAPS, HRN, Colabo などの活動の歪みや矛盾に対して辛うじて異論を唱えられる。それは、ある意味女性同士の内輪の揉め事だからだ。だが、女性であっても仮に中山や Y1 でなければ、その女性には「当事者でもないくせに」、「当事者の話をきちんと聞いたこともないくせに」という当事者至上主義、或いは現場至上主義の観点から、かなりの批判が寄せられるのではないだろうか。無論、これらの団体を男性が批判することなどは畏れ多い。このようなジェンダーとステイグマが絡み合ったデリケートなテーマは、男性が支援団体を批判しただけで、女性の敵、人権の敵と謗られる可能性がある。だが、満足に議論を戦わせられない今の状態は、決して健全ではない。

第 2 項 「承認の共同体」としての性風俗：「社会福祉は性風俗に敗北した」

(1) 2014 年 1 月 27 日放送の NHK「クローズアップ現代」で、特集「あしたが見えない～深刻化する『若年女性』の貧困～」が放送された。そこで紹介されたのは、20 代シングルマザーの哀しい現実である。特集では、アルバイトを三つ掛け持ちしても給料が 10 万円程度にしかない 19 歳の女性など、厳しい状況にある単身女性も紹介されたが、特に生活が逼迫していたのが、やはり小さな子どもを抱えた若いシングルマザーだった。同番組によれば、今、20 代シングルマザーの 80%が年収 114 万円未満の貧困状態にあるという。そうした中でも、周囲の支援を受けられなかった若いシングルマザーは、性風俗店に居場所を見出すしかなくなってしまうというのだ。

番組スタッフは、東京近郊のある性風俗店取材した。この店では、若いシングルマザーに働いてもらうため、子どもを預ける提携託児所を用意し、その費用も負担していた。保証人がいなくなったりして家を借りられない女性のために、事務所近くには寮も設けた。インタビューに登場した 21 歳のシングルマザーは、出産直後から働かなくてはいけない状況だった。しかし、託児所に子どもを預ける余裕もなかったため、この店に流れ着いたという。週 5 日働いて収入は月 30 万円。生活保護を受給して慎ましい暮らしをするよりも、性風俗で働ける若いうちは、このような生活が続ける方が合理的だと彼女は判断したのである。

また、面接に来た 30 代のシングルマザーは、役所に生活保護を申請したものの審査に 2～3 か月かかると言われたという。生活は困窮しており、数か月も待てる余裕が無かったので、彼女は 20 代の頃に経験した性風俗の世界で再び働こうと決めた。この事例の場合、役所の対応は、典型的な「水際作戦」である。実際、生活保護は、直ぐに利用が開始可能な制度である。申請に対する決定も 14 日以内の通知が義務付けられているにもかかわらず、その知識が無い若い女性は、このような「水際作戦」に騙された結果、社会保障に見切りを付け、即日払いでお金が貰える性風俗産業に流れていかざるをえないのだ。

スタジオでは、若い生活困窮者の支援をしている臨床心理士の鈴木晶子氏が、「性産業が職や住居、保育までを含めたしっかりとしたセーフティネットになってしまっている」と指摘した。公的機関ではそうした包括的なサービスが提供できておらず、「社会保障の敗北といえますか、性産業の方が、しっかりと彼女た

ちを支えられているという現実だと思う」と話した。「社会保障は性風俗に敗北した」という言説が、大手のマスメディアに始めて登場した瞬間である。

2017年11月14日、坂爪が代表を務める一般社団法人ホワイトハンズが主催する「セックスワーク・サミット 2017 秋」において、上記の言説をテーマに、有識者のパネルディスカッションが行われた。その際、児童養護施設や里親家庭を退所した若者の相談支援事業を行っている「アフターケア事業所ゆずりは」の高橋亜美氏がメインパネリストを務めた。

「アフターケア事業所ゆずりは」は、社会福祉法人子供の家が運営母体となって始めて、7年目を迎えた施設だが、高橋によれば、7～8割を占める女性相談者の相談内容の多くが、性虐待や性被害を受けた、実は妊娠している、中絶したいけれどお金がない、パートナーから暴力を振るわれている、性風俗で働こうかどうか迷っている、性風俗を辞めたいけどやめられない、一般の仕事先でのセクハラやパワハラ、モラハラなど、女性であるがゆえに付随した相談だという。パネルディスカッションの中で、高橋は以下のように発言した。

『「社会保障は性風俗に敗北した」という言葉があります。私は本当に、心からそう思います。ゆずりはだけでは全ての相談を解決できないので、相談者の方が公的な支援を適切に受けられるように同行やサポートをするのですが、一般の公的な支援で、性風俗と同じようなサポートが受けられることはまずない。本当に困った時に、役所の窓口や女性相談の窓口では相談しても受けられないサポートを、性風俗がきちんと保証しているという一面があると思います。

全ての性風俗のお店が安心安全に働ける場だとは言いきれないのですが、社会保障は性風俗に対して支援の面で後れを取っていると言わざるをえない。自分も支援者として恥ずかしい、悔しい思っています」

<https://www.excite.co.jp/news/article/BestTimes>

本項では、前項までの議論を踏まえて、改めて幾つかの問題を検討したい。先ず、NHKの番組に登場した、月収30万円を性風俗で稼ぐ21歳のシングルマザーの選択は果たして合理的で賢明なものであろうか。そして、鈴木や高橋が指摘するように、本当に「社会保障は性風俗に敗北した」のであろうか。本研究のフィールドワークから浮かび上がってきた性風俗産業の概念図を参照しながら、この点について、下記で考察する。

(2) 質的研究の方法・手順に関する詳細は次章に譲るが、研究から浮かび上がってきたのが、「性風俗の世界で働く6つのメリット」である。それらを、図2-2として整理したが、その中にやはり擬似的な社会保障機能が含まれていることを指摘できる。これらの機能には明らかに質的な上下があり、上位の機能は

人間としての「尊厳」を恢復して「実存」を満たし、下位の機能は単に「生存」と「好奇心」を満たすだけに留まっている。これは、Maslow の「欲求段階説」とそれを修正した、Alderfer の「ERG 理論」に構造が似ている。

最上位の機能に「自己実現」を通して「アイデンティティ」を確立する「自己実現機能」が、上位の機能に自尊感情を恢復させ、人としての「実存」を実感できる「承認獲得機能」、心地よい場を確保し、心身の「安全」を体感できる「居場所確保機能」、有意義な対人関係を築いてそのやりとりから「癒し」を得られる「社会関係資本構築機能」の三種類があり、下位の機能に、当面の「生存」を確保する「生計維持機能」と夜の世界やお洒落に対しての「好奇心」を充足させる「社会学習機能」の二つがある。前項において Y1 が指摘した通り、セックスワークには、明らかにレジリエンスとエイジェンシーに繋がるものが存在するのである。それが、性風俗産業の上位機能である。そして、更に女性の中には、ごく稀にそこで自己実現に辿り着いている者もいる。圧倒的に少数事例とはいえ、決してこれは無視できない事実である。性風俗産業に関わること自体を悪とし、そこから女性を 1 日でも早く引き離そうとしか考えられない支援者は、この事実を真摯に受け入れるべきである。

これを裏付ける女性達の発言に関しては、第 4 章以降で詳述するが、少なくとも、ラディカルな支援団体が指摘するように、性風俗産業は性的被害や搾取の温床となる有害なだけの存在ではない。大庭（2005）が指摘したように、そこはさながら、傷付いた者達による「承認の共同体」なのである。Honneth の承認論で言えば、客とのやりとりからは、例え疑似的であったとしても愛の領域の「承認」を、そして、新自由主義における努力の対価である獲得した金銭からは、連帯の領域の「承認」を得ることができるだろう。セックスワーカーとしてきちんと確定申告を行い、納税している人間は、法の領域の「承認」さえ、手に入れることができるのである。従って、PAPS, HRN, Colabo 等の団体の様に、その場所を不浄であるとにべもなく切り捨てるならば、そこに救いを感じている女性達の尊厳を著しく傷付ける可能性がある。

確かに、支援団体が指摘する負の側面もまた、たぶんに存在することは事実である。そこで哀しい程に搾取され、性暴力被害に遭い、苦しんでいる女性達がいる事実を否定する気は全くない。ただ、そこに集まる女性達が、そこ以外で同じようなレジリエンスやエイジェンシーを実感できる場所が、残念ながら日本社会に存在しないこともまた事実なのである。仮にそのような場所が存在し、そこにソーシャルワークが適切に繋がっていないだけならば、性風俗産業を法で厳密に禁止し、女性達は「しかるべき場所」にネットワーキングすればいいと安直に結論づけられる。だが、そのような「しかるべき場所」は、現実問題としてどこにも無い。これは、長谷川が「制度・資源的貧困」として規定する社会福祉の大きな問題である。

鈴木が NHK の番組で指摘したように、性風俗産業が職や住居、保育までを含めてワンストップでサービスを提供しているのに対して、同じものを社会福祉は全く提供できていない。縦割りの社会福祉制度を複数組み合わせれば、この 21 歳のシングルマザーは、確かに日本においてなんとか生きて行くことはできる。まず、生活保護を申請して公営住宅に入居すれば、少なくとも生命は守られる。ある程度子どもが

大きくなり、保育園が利用できるようになれば、その時点で保育園を無料で利用して、就労を始めることもできるだろう。就労にあたっては、全国の母子寡婦福祉連合会等が行っているシングルマザー向けの職業訓練や、都道府県や労働局が提供する公共職業訓練或いは求職者支援訓練も実質無料で利用できる。訓練の中には、看護師や保育士、介護福祉士等、医療福祉の専門資格を取得できるものもあり、職業訓練でなくとも、各都道府県では独自に母子家庭の母への教育訓練給付制度を持っているので、それを利用して専門資格を取得することも可能だ。だが、これは全て、生活保護を受給して、まず生活を安定させることが大前提となる。更に、彼女が諸々の制度を活用して努力できる女性であることも必須要件だ。一方で、行政機関が準備した資格取得への助成金制度は、基本的には慢性的に人手不足のケアワークの領域がほとんどである。女性が、それをキャリアにしたいくなければ、この道は選べない。仮に、行政が、貴方が生きて行く道は、人手不足のケアワークの道しかない、とその道を強要し、かつ再就職のための専門資格取得のための努力を彼女達に強要するのであれば、前項で論じた「アダルトビデオ出演強要問題」と逆の意味で、「新自由主義」的な努力の強要が成立し、女性に対する人権侵害になるのではないだろうか。

こうした制度があるにもかかわらず、恐らく若いシングルマザーのほとんどがこれらの制度を知らないことは、やはり大きな問題である。そして、仮に知ったとしても、残念なことに、彼女達はこれらの関係機関を順次たらい回しにされる。生活再建のための相談は、一か所では絶対に終わらない。生活困窮者自立支援法や生活保護法、母子及び父子並びに寡婦福祉法、職業能力開発促進法、求職者支援法等、一見日本には、若いシングルマザーが貧困に陥らないために幾重ものセーフティネットが揃っているように感じる。しかし、これらが全て別々に機能しており、所管も国、都道府県、市区町村、その他の団体等、完全にばらばらで全く横の連携が取れていない。この社会福祉機関同士の連帯の乏しさは、利用者にとって極めて利便性を欠いている。

例えば、生活困窮状態に陥った若い女性が、生活保護のスティグマを回避したいが故に、市区町村の生活困窮者自立支援法に救いを求めて、窓口相談に行くとする。筆者が暮らしている山形市をケースに考えるが、山形市は山形市社会福祉協議会に事業を全て業務委託しているので、相談は市社協のソーシャルワーカーが受ける。そして、就労に繋げようとしても、そもそも社協には就労支援のノウハウはほとんど無い。生活困窮者自立支援法ができて、市区町村が実施主体になると決まった際、都市部であれば、既にそのような活動をしている団体があったため、そこが受け皿になり得た。東京都における「認定 NPO 法人自立生活サポートセンター・もやい」やさいたま市の「NPO 法人ほっとぶらすプラス」などがそうである。ホームレスの自立支援等を通して、このような団体には就労まで一貫して伴走型の支援を行える力量を持った相談員とノウハウがあっただろう。だが、山形市においては、そのような団体自体が存在しないため（本当はあるのであるが、単に行政が関知していない）、事業は社協に丸投げされたのである。また、生活困窮者自立支援法は様々な自立支援事業があるが、社協に任意事業の就労支援事業担当者は存在しない。この部分は別の NPO 団体に委託されている。故に、実際の就労に関しては、今度は社協から、NPO やハローワークに丸投げさ

れることになる。

ハローワークの相談員が幾ら親身に相談に乗っても、山形県に若いシングルマザーを望んで採用したがる会社などない。子どもが病気になれば、保育園に毎回子どもを迎えに行かざるを得ないシングルマザーを戦力としてはあてにできないからだ。かといって、だらだらとハローワークで面談を続けたり、企業の面接に落ち続けていては生活が成り立たないので、当面の生活を保障するために、若く、経験も資格も無いシングルマザーであれば、十中八九、公共職業訓練に行って、当面は失業手当を貰いながら資格を取って下さい、という流れになるだろう。そこで今度は、山形県が実施する公共職業訓練を受講するために、山形県の職業能力開発専門校に行くことになる。公共職業訓練自体は、山形県は全て民間機関に業務委託しているので、専門校の選抜試験に合格すれば、今度は民間の教育訓練機関に数か月通う。その間、雇用保険受給者か、求職者支援法に基づく生活支援給付金の対象者であれば、毎月ハローワークの相談員と職業相談を行うのは必須である。それに加えて、民間機関のキャリアコンサルタントと社協の相談員とも個別の相談が続くだろう。当然、この三者に連携は一切無いままである。彼女は全く同じ話を、3人に対して一からしなければならぬのだ。加えて、母子寡婦福祉連合会等にお世話になれば、更に相談員が1人増えるし、他にも保健所や精神保健センター、子育て支援センター、各種婦人施設等で相談をすれば、更に相談員の数が増え続ける。

ワンストップどころか、ほとんど鈍行の各駅停車のような途切れ途切れのサービスを望む女性が果たしているだろうか。これ程までに、日本の社会保障制度は煩雑かつ非効率なのである。それに耐えたとして、彼女が手にできるのは、前職の約6割～8割の失業手当か、月最大10万円の生活支援給付金である。しかも、それを得るためには、ハローワークで仕事を探すことを継続し、各相談員と面談を続け、就労の意欲をアピールし続けなければならないし、公共職業訓練の出席率は月当たり8割を切ってはならない。健康に問題がある女性であれば、このハードルはかなり高いだろう。うつ病等で意欲が低下している女性や、人と会うことが苦痛なくらいパワーレスな状態に置かれている場合は、最低3人の相談員と毎月面談することに精神が消耗して耐えられないはずだ。そうすると、この制度の枠から零れる訳であるが、生活保護が嫌ならば、もう選択肢はここで尽き果てているのだ。

この段階で、若いシングルマザーが選ぶ道は、繁華街付近で夜間も運営している劣悪な環境の認可外保育施設に高額な保育料で子どもを預けて深夜まで水商売をするか、日中子どもを認可外の一時保育施設に預けて隙間時間で性風俗の仕事をする以外、考えられなくて当然である。そして、鈴木が『最貧困シングルマザー』で描いている通り、若い孤独なシングルマザーは愛に飢えている。彼女達は、再婚或いは再婚できなくても、男性のパートナーが欲しいという強い願望を持つ傾向があるが、本来人間とは『承認』をめぐる闘争』を生きている社会的な生き物である以上、寧ろそれは当然の願いである。彼女達は、パートナー獲得のために、生活保護が足枷になることを十分に理解している。消費社会においては、Bauman が指摘している通り、貧困とは単にお金がないことではない。欠陥のある消費者は犯罪者と同義であるため、そのようなスティグマを背負うくらいであれば、「職業スティグマ」があっても日払いでそれなりのお金が手に入る性

風俗産業に従事した方がまだいくらかマンである、と女性が考えるのは十分に理解できる。そしてその結果、NHKの番組に登場した、月収30万円を性風俗で稼ぐ21歳のシングルマザーの自己決定とキャリア選択に繋がっていく訳であるが、実はこれは前項でも指摘した、「選択肢のほとんど無い状態での自己決定」である。そのような場合は、安易に自己責任論を振りかざしたりせず、そこに至るまでの苦悩と苦労を労わると共に、本人に伴走しながら支援するのが、真のソーシャルワーカーの役割なのではないだろうか。

畢竟、生活保護という道を選択しない限り、実家を当てにできない若いシングルマザーがワンストップで彼女の生活の問題を解決してくれる性風俗産業に頼ることは、煩雑な社会保障制度に頼り、かつ税金の厄介になって後ろ指を指されながら相談員にお説教をされるよりも、やはり遥かに賢明な判断なのである。性風俗産業に頼っている彼女達の弱さが問題なのではない。性風俗産業の方が選択肢としてまだマンだと思えてしまう、日本の社会保障制度の機能不全こそが問題なのである。それをなんとかして改善することこそが、急務であろう。

また、その制度に組み込まれているソーシャルワーカーや各種相談員の質やあり方も問われている。無駄な縦割り制度である以上、最初から伴走型の支援は不可能である。たらい回しにせざるを得ないシステムでは、各自がどんなに真摯に相談業務を行っても、結局は、直ぐに女性の側から不要とされるだろう。パワーレスな人間が、同じ話を何度も何度も専門家に聞かれることは、到底耐えられない苦痛であるからだ。畢竟、性風俗産業に存在する6つの機能のうち、現状の社会保障制度には、当面の「生存」を確保する「生計維持機能」しかないのだ。しかもこれは下位機能であって、他の機能のようにパワーレスな状態に陥った個人の尊厳を回復させるものではない。無論、性風俗産業は、上手く使えば社会保障制度よりマシなだけで、決して全員がこの6つの機能を実感できる訳ではない。しかも、あくまで「偽装されたセーフティネット」であって、決して万人が等しく利用可能な「社会福祉」ではない以上、当然、性暴力被害や搾取の対象になることもあり得る。

性風俗産業の本質は、新自由主義における一般企業と全く同じか、寧ろそれ以上に先鋭化した営利追求のシステムである。しかし、だからこそ、優秀な店長やオーナーは、決して女性を蔑ろにしない。彼女達は、彼らの利潤を最大化させる大切な存在であり、使い捨てにするように雑に扱えば、自分達の生活が立ち行かなくなる。結局、女性がいなければ風俗店には一切利益が出ないのだ。そこに、疑似的な共生関係が生まれてしまうのはある意味当然ともいえる。一方で、社会福祉は女性を雑に扱っても、相談員の給与が下がる訳でも無く、無事就労に繋げても相談員の自己満足以外に得るものは無い。どちらが新自由主義の日本社会において、より女性の気持ちに寄り添っているのか、寄り添わざるを得ないのかは、考える余地もないことである。

従って、これまで述べてきたのと同様に『社会保障は性風俗に敗北した』という言葉があります。私は本当に、心からそう思います。」という高橋の支援者としての実感は、正しいと言わざるを得ない。寧ろ、この実感を社会福祉に携わる者が抱けないのだとしたら、その人間は狭量で傲慢であるという謗りを免れないだ

ろう。

(3) 性風俗産業で女性が自己実現ができる、などというのは、フェミニズムの立場からすると恐らく到底認め難いことであろう。だが、Frankl は、職業労働について下記のように指摘している。

創造価値とその実現が人生の使命の前面に出ているかぎり、その具体的な充足の範囲は一般に職業労働と一致している。労働とはとくに、個人の独自性が共同体との関係において意味と価値をもつような領域である。しかしこの意味と価値は、つねに業績（共同体に対する業績）にそなわっているのもであって、具体的な職業そのものにそなわっているのではない。それゆえ、ある特定の貴い職業というものは存在しない。多くの、主として神経症的な傾向をもった人間は、もし自分が他の職業に就いていたならば、充足した生き方ができたのにと主張するが、そのとき彼らは職業労働の意味を誤解しているか、さもなければ自分を偽っているのである。もし、具体的な職業がいかなる充足感も与えないとすれば、その責めは人間にあるのもであって、職業にあるのではない。職業それ自体が人間をかけがえのないものにするのではない。職業はただそのための機会を与えるに過ぎないのである。

ある女性患者はかつて、自分の人生が無意味なものに思われ、そのため病気を治そうとはまったく思わないと語った。そして、もし自分を充実させるような職業、たとえば医師とか看護師とか、なにか科学的発見をするような化学の研究者のような職業に就いていたならば、人生はすっかり別の、素晴らしいものになっていただろうというのである。ここでこの患者に明らかにせねばならなかったことは、人間がどういう職業についているのかが重要なのではなく、むしろその人間がいかにそれを為しているかが重要なのであるということであった。具体的な職業そのものが問題なのではなく、人間的実存の唯一性の本質をなす人格的なものと独自なものを労働において発揮し、そのことによって人生を意味あるものにしているかどうかの問題なのである。（Frankl=2011：207）

Frankl のこの言葉が、本項で行なった考察の全てを簡潔に物語っているとは言えまいか。同じ仕事をしていたとしても、大切なのは「その人間がいかにそれを為しているか」なのである。前項で、性風俗産業は「賤業」とであると筆者は言ったが、それは自らのうちに迷いや苦悩を抱えてそれに従事する場合である。直接的、或いは間接的に、若い女性が自らの「性」を男性にサービスとして提供する仕事は、社会一般の視点からすれば「穢れ」をまとう。その穢れ者を見る他者の視点を自らのうちに取り込んでしまった人間は、例え本来の心根が純潔であってもスティグマタイズされ、結果、自分自身を自ら「疎外」するようになるだろう。それ程までに、自分を見つめる他者の視線は束縛する力を持っている。だが、それを力強く跳ね返せる者にとっては、性風俗の仕事は喜びをもって日々感謝と共にあるものである。一方、他者の視線にスティグ

マタイズされた者にとって、哀しいかな性風俗の仕事は疑いを持って日々不安と共にあるものなのである。この様に同じ仕事であっても真逆な結果に陥りやすい風俗嬢という不安定な仕事に従事する女性達の間には、「希望の格差」が存在しているように感じられる。

Y1 が性風俗の仕事にレジリエンスやエイジェンシーという創造価値を見出したのは必然であって、偶然ではない。何故ならば、Frankl が例に挙げた女性と異なり、彼女は、ただ自分で気付いたのである。仕事とは、何を為すかがではなく、いかに為すかに真の価値が宿るのだという実存分析^{ロゼンバウム}の命題に。

さて、ここで本項の冒頭に掲げた問題に立ち戻るが、21歳のシングルマザーの選択は、一先ず合理的な選択であると言ってもいいだろう。何故ならば、彼女は明らかに経済的にも貧困である。30万円という手取りが気になるだろうが、彼女が置かれている状況は極めて不安定なプレカリアート以下の暮らしである。安定して客が付く保障が無い仕事、そして、雇用保険も社会保険も加入できない形式上は個人事業主という曖昧な立場は、病気になれば簡単にわかり易い貧困に転落する危うさを常に孕んでいる。江口の「社会階層論」では、貧困状態の前提として、「低所得」であること以外にも、「不安定」であることが重視される。従って、彼女は貧困なのである、という特集を組んだNHKの立場は、社会福祉学の立場からも十分に納得できるものだ。昨今見えにくい「女性の貧困」を社会の中で可視化し、真剣に社会福祉学の解決すべき新しい課題として捉えようとする、坂爪や高橋ら、この領域の支援者達の立場は、女性達の被害者性を殊更に強調する支援者達よりも遥かに妥当で現実的である。

本研究は、既に縷々述べて来たように、坂爪らの立場を更に踏み越えて、第三の立場を提唱する。彼女達は、確かに貧困であるが、それは、単なる「経済的貧困」というよりも、寧ろ「実存的貧困」の文脈で、極めて困窮した状態にある、というものである。従って、仮に月収が何十万であろうとも、東電OLと同じ意味で、自分自身の「人間としての尊厳」を回復しない限り、彼女達の多くは依然として「実存的貧困」であり続ける。故に、彼女達「社会喪失者」^{ディザファイリエ}の支援を考えた時、単にその人間の経済状況や稼働能力だけに着目する従来の議論自体が不毛であり、時代遅れであることを主張するのだ。

だが、性風俗産業に6つのメリットがあると指摘したが、それは全ての女性に等しく働く機能ではない。他者の視線を内面化しやすい者にとっては、その仕事を通して「人間としての尊厳」を回復するのは容易なことではない。性風俗産業に対する、社会からの差別、偏見とスティグマが、どれ程のお金を稼ごうとも、やはり容赦無く女性達の心を蚕食する。俗語として、売春行為を「ワリキリ」というが、どんなに割り切って考えようとしても、自分自身の「性」を売り物にするということは、多くの女性にとって「女性としての尊厳」を売り物にすることでもあり、誰しもがそう簡単に割り切れるものではない。また、仮にその時は上手く自分を騙し、割り切っていたとしても、その自己欺瞞は生涯に渡って維持し続けられるものでもない。法の領域の「承認」を欠いた仕事に、人は普通誇りを持ってないのである。

高校時代からブルセラ、キャバクラ嬢、援助交際、AV出演など、性的逸脱行為を繰り返して生きてきた鈴木涼美は、作家・ライターになった後、AV女優の出演強要被害問題に揺れた2017年を振り返り、その年

の終わりに文春オンラインで、「私の AV デビュー作のギャラ 100 万円は、何に対して支払われたのか うちの母は元 AV 女優です、の怖さ」と題した興味深いエッセイを載せている。彼女は、AV 女優としてデビューした 19 歳の自分に対して、30 歳を過ぎた今の自分から、自らの愚かさを咎めるような助言を送りたいと率直に認めているのである。

「未来への対価」の割合が多い、というのが性産業の特徴であり、さらに他に輪をかけてその負担が重いのが AV 女優の特徴だというのは、おそらく多くの当事者たちもわかっている。もちろん、先にあげた偏見の問題もその「未来への対価」に大きなウエイトを持って含まれるが、当然、それだけではない。そして、世間的な偏見以外の何かしらの「未来への対価」こそ、引退して 10 年以上経った私は重要視したいと思っている。

(中略)

私にとって AV 出演など、当時は足元に転がっている石のようなものだった。不安や不満や憧れや期待など、要約するとアドレセンスというようなものを持て余し、若干むしゃくしゃした気分で蹴っ飛ばした石が延々とはねっかえり続けて、自分の顔面や親の脇腹や恋人の後頭部にぶつかり続けて、10 年以上経った今も、ビュンビュンと飛び交っているような感じ。時々それはまた私の顔面に直撃して鼻血をブーブー飛ばしたり、頭をクラクラさせたりする。そんな気分で私は生きている。

ぶつかる度に私は、「この痛み、この悲しさがなければ何で 100 万円もらえると思ったの？自分の顔に身体にそれだけの価値があるって思ったの？」と 19 歳のワタシを恨みがましく叱る。何にお金が支払われるのか、もうちょっと考える時間はなかったの？と。何でそんなことがわからなかったの、バカなの？バカなのは知ってたけどさらにバカなの？

<http://bunshun.jp/articles/-/5614?page=4>

「後悔」という言葉を素直に用いることは、その経歴を作家・ライターとしての「売り」にしている彼女にしてみれば、多分できないことなのであろう。しかし、AV 女優のみならず、性風俗産業で働いた女性達に対する社会からの差別と偏見は、現状、一生逃れられない、否、東電 OL のように、死してもなお逃れられない暗黒の桎梏である。急速にインターネットが普及した現代のポストモダン社会では、AV 女優だけでなく、全ての性風俗に従事する女性達が将来に渡って電腦世界で苛まれる。ネット上に上げたたった一枚の顔写真でさえが、デジタルタトゥーとなって半永久的に残り続け、消すことができない過去になるのである。

繰り返しになるが、本研究は、「実存的貧困」を理解するために、東電 OL 同様に、最もそれが分り易い形で、色濃く人生に表れている性風俗産業に従事する女性達が抱えた生きづらさに着目し、彼女達への質的・量的調査から各自の生活課題や苦悩を実証的に把握し、考察する過程で、「新しい貧困」を説明可能な貧困概

念を提唱することを目的としている。そのインタビュー調査の際、決して少なくない数の女性達がインタビュー当時、その人生に大きな後悔など無いし、寧ろ、「夜」や「風」の仕事は楽しかった、やって良かった、と語っていた。その時点では、スティグマの実感すら無いような女性も何人か存在した。しかし、恐らくそのような女性達のほとんどが、何時か鈴木同様に、嫌でも社会に厳然と存在する「職業スティグマ」の冷たい現実直面するはずである。

結婚の際、就職の際、いやが応にもその過去は、隠し通すことが難しいものとして、或いは上手く隠し通すことができたとしても、バレることが恐ろしい過去の汚点として、彼女達の心を一生苛むであろう。また、それを全く気にしない男性をパートナーとし、彼らの社会で生きるということは、事実上、社会のアウトサイダーの一員として、同じように脛に傷を負ったアウトサイダー達と共に生き続けるという意味である。「アンダークラス」が「実存的貧困」という社会病理を生み出す土壌であることは先述の通りであるが、筆者は、社会的に排除されたまま、その状態を「割り切って」生涯幸せに生きられるという強い人間存在を、全く想像できない。

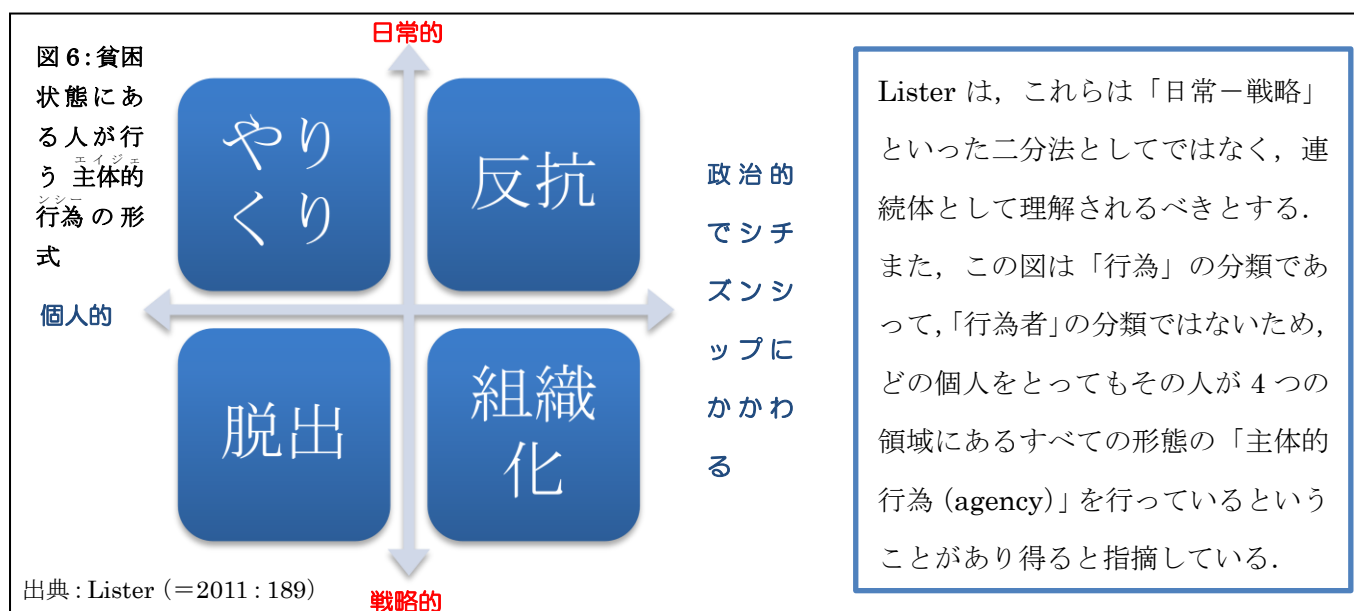
貧困故に、若い女性達が性風俗産業で働くことを選ばざるをえない社会というのは、やはり異常な社会なのではないだろうか。時に一生を台無しにしかねない「職業スティグマ」は、長期的に見れば、一部の例外的な存在を除き、女性を幸福にするよりも、遥かに多くの不幸を作っているのではないかというのが、一通り調査を終えた現在の個人的な実感である。ただし、次項でその理由を概説したいが、筆者は、必ずしも性風俗産業自体を全否定する気はないのである。その意味で、筆者の立場は、PAPS, HRN, Colabo 等の団体の立ち位置とは位相を異にする。何故ならば、最も「職業スティグマ」が大きい AV 女優でさえ、現在では成り手が殺到して、その結果出演料が大幅に値崩れし、年々デフレ化が進行する程に、その世界に若い女性達が惹き付けられるのである。これは単に金銭的な魅力があるから、だけでは説明がつかない。「性」の仕事を通して、つまりセックスワーカーとして、何らかのエージェンシーを発揮できる人間にとっては、性産業は、日本社会における「女性の貧困」の単なるセーフティネットではなく、時に自己を再生させることも可能なヌミノース的な空間なのである。従って、「実存的貧困」故にそこに辿り着いたとしても、「承認の共同体」である性風俗産業で癒しを得た者は、やがて自己実現に向けて一歩ずつ歩き出すかもしれない。そして、何人かの女性達は、「実存的貧困」を自らの力で乗り越えていくだろう。それは単にお金を得るという成功体験だけで達成できるものではない。客との出会い、そこでなされるコミュニケーション、何よりも、愛や連帯による「承認」の実感、そのようなものを体験した者は、誇りを持ってセックスワーク論を展開するであろう。私たちは、決して「不幸」などではありません、と。そのように性風俗産業で自己実現を手に入れることができる稀有な女性達に共通しているのは、前項までに議論してきた「行為における主体性」の発揮である。これを発揮できる女性達は、ヌミノース的な性風俗の世界の中で、自己を喪失することなく、寧ろ逞しくアイデンティティを彫琢していくのである。それを、次項で概観したい。

第3項 性風俗産業従事者の「行為における主体性（agency）」

(1) Butler は、アイデンティティは言説実践の効果だとして、主体の所与性を否定し、常に絶えざる生成過程にあるものだと考えた。Butler にとって、言説行為の前に主体はなく、言説行為を通じて主体が事後的に構築される。こういう過程的な在り方を行為に先立つ主体と措定することはできないので、これを「エイジェンシー」と名付けるのである。行為体、行為遂行体、行為媒体などと訳されるが、ここでは、『貧困とは何か』における Lister の用法と松本伊智朗の日本語訳に準じて、「行為における主体性（agency）」、或いはそのままカタカナで「エイジェンシー」と表記する。

なお、このエイジェンシーの概念は、『貧困とはなにか』の翻訳を行う際、監訳者の松本が最も苦労したと述懐した概念である。松本（2011：313）も指摘している様に、Lister の用法には、「行為における主体性」、「主体的行為」、「行為能力」の三つの側面が含まれているのであるが、それらを適切に表現する単語が日本語に存在しない。従って、松本は全ての日本語にカタカナで「エイジェンシー」とルビを振り、なるべく読者の側が共通の概念として理解できるように配慮しているが、本研究においても、この言葉を用いる際は、「行為における主体性」を基本としつつも、他の「主体的行為」や「行為能力」を意味する場合は、寧ろそのまま適宜カタカナの「エイジェンシー」を用いることとする。

『貧困とはなにか』において、Lister は、貧困状態にある人が行う「行為における主体性」の形式を以下の4つの種類に分類している。それが図6である。



Butler は、エイジェンシーという完全な能動態でも受動態でもない言説実践の媒体を導入することで、所与の構造に限定されながらも、その構造自体に働きかけていく実践の過程を捉える視点をフェミニズムに取り入れた。彼女は、「女らしさ」などで表現される女性という主体の存在そのものに疑義を差し挟んだのである。ポスト構造主義の立場から、Butler は、ジェンダーを所与のものとせず、それはある種の構造の中で繰

り返し語られた言語実践によって形作られるものであるが、人々の相互行為によって逐一変化生成する概念であると規定したのである。ここでは、性風俗産業に従事する女性達が、「性暴力被害者」、「性的搾取の対象」などというラディカル・フェミニズムの視点に絶対的に固定化されるような存在ではなく、彼女たちのエイジェンシーは、社会規範やスティグマ、女性性などの概念を自分なりに語り直し、能動的に再定義していく自らの言語実践の結果、自分なりのアイデンティティを勝ち得ていく過程であるとして尊重したい。本研究では、Lister の貧困理論の枠内で女性達のエイジェンシーの発現形式を検討するのが目的であるため、これ以降は、主として Lister が指摘する貧困状態にある人が行う 4 種類のエイジェンシーを念頭に考察を加える。

Lister によれば、貧困状態に置かれた者が発揮する日常的で個人的な領域におけるエイジェンシーは、「やりくり」である。「＜対処＞ないし＜やりくり＞は、最低限のところでは、人はなんとか生活を切り盛りし、あれこれをつなぎあわせ、ないものはないで我慢する積極的なプロセスである。子どもが役割を担うことも多く、たとえばアルバイトをしたり、ほしいものを自分でがまんしたり控えめにしたりする」(Lister=2011: 193) ものである。この領域のエイジェンシーは、性風俗産業に従事する女性達のうち、経済的に困窮した機能不全家族に育った者達の多くが日常的に幼少時から行っている。例えば、第 4 章で考察する D13 は、父親からの DV によって精神疾患を発症し、働けなくなった元キャバクラ嬢の母親のために、14 歳の時に歳を誤魔化してスナックでアルバイトをして家計を支えているが、まさに D13 は「やりくり」のエイジェンシーを性風俗産業を通して発揮しているのである。

Lister (=2011: 203) は、「当然のことながら、貧困状態にある人々のうちのどれくらいが、＜やりくり＞のために『地下の』仕事についているかは、さらによく分からない。ケンプソンらが低所得の 74 家庭を研究したところ、母親 3 人に食料品の窃盗経験があり、売春を考えている者も 1 名いた。これはほかの研究では『貧困の犯罪』と呼ばれている」と述べているが、この箇所から理解されるのは、売春が貧困の宿痾であると理解しておきながら、それに対する広範な研究は、恐らくイギリスにも存在しないということである。貧困と売春を安易に結びつけるラベリングの形成とスティグマを回避するために、敢えてその領域に研究者が踏み込んでいない、ということも十分に考えられる。だが、本研究を一通り終えた現在、ケンプソンの 74 の貧困家庭の研究において、わずかに 1 名の母親だけが売春を考えているという状況はにわかには信じ難い。イギリスは日本の様に売春以外の多種多様な性的サービスが存在しないため、売春の敷居が高いということも考えられるが、それでも、Lister は余りにも売春等の地下経済に関して無頓着過ぎる。繰り返すが、売春や犯罪は、貧困の宿痾である。これらは密接に関連しており、かつ不可避の現象であるとも感じる。貧困に耐え続けるよりも、人は「やりくり」の一環として、その個人が許容できる範囲の犯罪に手を染めがちであり、また同じく許容できる範囲で、少なくない女性達が自らの身体を商品化するものであろう。従って、本研究のインフォーマントは全員が、ある意味各自が許容できる「やりくり」を性風俗産業を通して行っている、と言っても過言では無い。

ところが、本節第1項において、林や仁藤に代表される日本のフェミニストが、ポルノ産業や性風俗産業を女性の人権侵害の根源と見做し、そこで男性に利用される女性の行動は、一見自己決定の様に見えたとしても、結局それは何らかの強制を伴った自己決定に過ぎず、決して真の自己決定ではない以上、被害者という視点から逃れられず、従って、権利擁護に努めなければならないという主張を見た。これは、明らかに女性の日常的・個人的な領域におけるエイジェンシーを全面的に否定する言説である。

林は、自身が掲げる女性福祉の原点を売買春であると指摘し、次のように述べる。売買春は、「性の交流に金銭を介入させて最も人間的側面である性、精神的な要素を含む相互一体化、両者の人格を問う性関係を否定するものである。（中略）それは、人格の損なわれた状態と言える。（中略）売春は、交換価値を生むとはいえ労働ではなく、職業とも言えない」（林 1990 : 9）。更に林は、売春を行う女性の意志について、「女性を売春に追い込んでいるのは、『職なく、金なく、住居なし』の状況をもたらす社会構造であり、（中略）本人もそう言っているからそうだと切り切るのは、あまりに短絡的であり、全体的視野を見失っていると言えるのではないだろうか。本人の意志は何らかの強制の結果」（林 1990 : 10）だと決め付ける。林は、ラディカル・フェミニズムという MacKinnon の系譜を、長年社会福祉実践の中で貫いてきた日本における女性福祉研究の第一人者だが、こうしたパターナリスティックな女性の主体性の否定は、性風俗産業に従事する女性達を時に著しく傷付ける可能性があることは既に指摘した通りである。

完全なる自由意志というものがそもそもあるのか、仮にあったとしても、それを実行に移すことができるのか、という問いを立てた後に我々全ての生活者の暮らしに目を向ければ、全ての人間が大なり小なり何らかの社会的な制約を受け、辛うじてその中で折り合いをつけながら、自分のできる範囲、或いは許容される限りにおいて自己決定を行っているに過ぎない存在であることは自明である。だが、我々は完全に無力で、単に流されるままの客体でないこともまた、自明であろう。一個の行為遂行体として、我々はできる範囲で自身の行動に対して何らかの言説化を行い、更にその宣言に従って行動を起こすことによって、我々を取り囲む構造が少し変わることを日々体験している。その変化した構造が再帰的に我々のエイジェンシーに影響を与え、それに対してまた言語的实践をもって何らかの働きかけを行えば、また周囲の構造がそれを受けて僅かずつ変化する。

Butler のこのような人間の捉え方は、社会福祉学における、「環境の中の人（person in the situation）」、すなわち、エコロジカル・パースペクティヴが描くクライアントの姿に重なる。人間は社会構造の奴隷として、常に同じ思考パターンや同じ行動パターンを繰り返すだけの無力な存在ではないはずだ。Lister は、「アンダークラス」への参加型研究を通して、彼ら貧困者達は何らかの「行為における主体性」を発揮して日々の生活をやりくりしている姿を発見し、それまでのパターナリスティックな保護的支援のあり方に疑義を呈するようになった。無論、先に指摘した通り、Lister は売春等の地下経済を構成するエイジェンシーに関しては、さほど明るい訳ではない。だが、エイジェンシーの一形態として行われる「貧困の犯罪」を全否定する立場ではない。寧ろ Lister (=211 : 203) は、それらを「生き残りに不可欠なもの」と認識して、ある程

度の理解を示している。従って、林や、PAPS, HRN, Colabo 等に代表される支援者達が、女性の無力感を強調し、「可哀そうな被害者」に仕立て上げることには、Lister 同様に、筆者も貧困理論の研究者の立場から、やはり強く疑義を呈したい。

ただ、誤解を避けるために再度指摘しておきたいが、筆者は林らの考えを全否定しているのではない。所謂人権派に属するフェミニスト達が主張するような悲惨な事態は実際に性風俗産業において多々発生しているし、彼女らの保護的な視点が無ければ、新自由主義の日本社会では、女性達が傷付くのも搾取されるのも、全て冷たい自己責任論で片付けられてしまいかねない。従って、日本社会に存在する根強い男尊女卑の支配構造に対して林らのように異議申し立てをすること自体を否定している訳では無いのである。筆者が注意を喚起したいのは、林らの「被害者視点」をそこで働く女性達全てに普遍化することは、単にパターンリステックなだけでなく、余りにも教条主義的過ぎると言いたいのである。何故ならば、性風俗産業に従事する女性達を、「行為における主体性」を行使する存在であると考えなければ、林ら人権派フェミニストに対して、同じフェミニズムの権利派や、セックスワーカーの当事者達から強い抵抗が示される理由の説明が付かないからである。

丸山里美は、女性ホームレスの研究を通して、彼女達がエイジェンシーを用いて、自分達なりのアイデンティティを構築していることを、『女性ホームレスとして生きる』において生き生きと描き出しているが、筆者と同じ懸念を、丸山は林に向けて以下のように指摘している。

つまり林にとって、女性差別が蔓延する社会構造から生み出される売春は、すべて「何らかの強制の結果」であり、そこに売春を行う本人の意志や主体性を認めないのである。このような林の主張は、女性を従属させる社会構造から生み出された性奴隷だと売春をとらえる、売春をめぐる議論の「人権派」と呼ばれるものである。しかしながら、この女性福祉論は、フェミニズムが目標とする女性の人権侵害や性差別に着目し、そこから女性を解放しようとするものだったはずであるにもかかわらず、そこに到達するには、女性福祉の対象となる「女」のとらえ方に問題があるように思われる。(中略)

それが端的に表れているように思われるのが、林が女性野宿者について言及しながら、自身の立脚する女性福祉を説明したつぎの一文である。「この春、仲間たちの誘いで隅田川べりの青テント村を歩きました。女性のホームレスが少ないのは何故か、男性のホームレス化と女性のホームレス化には相違があるのではないかという私の問題意識に返ってきたのは、「ホームレスの女性は1人ではいられない。男性と一緒に暮らすんですよ」との話でした。このことがすべてを物語っているように思えます。女性は依存的だとか、自立性がないとかではなく、女性としての性の危機への本能的な回避をするのではないのでしょうか。私の女性福祉は、ここから出発します」

(林・堀 2000 : 269)。林は支配的なセクシュアリティをそのまま受け入れ、女性を「性の危機

への本能的回避」をするものとして本質主義的にとらえている。その結果、男性とともに暮らす女性野宿者だけで「すべてを物語っている」と考え、三〜四割を占める単身の女性野宿者やセクシャル・マイノリティの存在には思い及ばず、そうした人びとを「性の危機への本能」がないようにあつかってしまっていることに、気づいていないのである。こうした視点に立って、すべてを強制の結果だと考えるような売春を中心に据える女性福祉は、女性を一様に保護的にあつかうものであり、すべてを性による支配関係に還元し、女性を従属的な位置に固定化してしまうとともに、男性や福祉の保護を受けないような女性の存在を、視野の外においやってしまう。(丸山 2013 : 15-17)

丸山は、一般的に最も悲惨な「女性の貧困」の形態として社会に立ち現れている女性ホームレスが、野宿前にできなかった読み書きが、ボランティア等との交流の結果できるようになった軽度の知的障害の女性の事例を用いて、彼女の語りが野宿生活を通して前向きになっていったことを示す。そして、読み書きができるようになった女性は、それによって内気だった性格までが改善され、人と少しずつ関わられるように変化していったのである。丸山が関わったインフォーマントは同じような経歴や特性を持った女性が多く、彼女達は、お互いに共感し合うことで、野宿生活に陥る前の差別や偏見に溢れていた一般社会での人間関係よりも、野宿生活において構築した人間関係の方が遥かに心地良いのである。とりわけ、知的障害などのスティグマが貼り付いた現実を隠していた以前の生活よりも、それを包み隠さずに語ることができ、その上でしっかりと「承認」してくれる仲間達に野宿生活の中で出会えたことに感謝すらしているのである。

女性ホームレスは性暴力被害に遭いやすいため、保護しなければならない、という林らの視点に立てば、丸山が描く女性ホームレスの世界観は、受け入れ難いものがあるだろう。だが、林から見て到底「容認できない困窮」状態にしか見えない女性ホームレスの世界は、本人達にとっては決して絶望的なものではないのである。そこに生きる女性達は、限られた範囲ではあってもしっかりとエイジェンシーを行使して、少しずつ自らのアイデンティティを構築している。更に、ささやかではあっても幸福を感じることができているのである。そして、女性ホームレス達と非常に似たようなエイジェンシーの働きが、性風俗産業に従事する女性達の間にも見受けられるのである。

(2) 水嶋かおりんの『風俗で働いたら人生変わった **www**』は、その書名からして明らかに、匿名掲示板の2ちゃんねるへの書き込みが小説化(のち映画化)された『風俗行ったら人生変わった **www**』のパロディであるが、その意図するところは明快である。それは、後者の小説にまだ色濃く残る性風俗産業で働く女性への憐憫、差別と偏見、そして、「女性は可哀そうな被害者である」というラディカル・フェミニズムの先入観・価値観に対する現役のセックスワーカーからの強烈な異議申し立てなのである。そしてこれは、Lister が指摘した4つのエイジェンシーのうち、「反抗」に該当するものである。政治的にリベラルな水嶋

が、自らを含むセックスワーカーのシティズンシップを求めて、未だに保守的な価値観に囚われているラディカル・フェミニズムに対して、まさに『承認』をめぐる闘争』を挑んでいるのだ。

『風俗行ったら人生変わった www』は、29歳でコミュニケーション能力に欠けるオタクの男性が、童貞のコンプレックスを乗り越えるためにデリヘルで初めて女性を呼んだ際、余りの緊張からホテルで過呼吸になり、人気風俗嬢の女性から介抱されるところから物語が始まる。近代的人間にとって、「性」が「アイデンティティの至上の等価物」とであるという Foucault の指摘を思い返して貰いたい、男性が29歳でまだ童貞であるというのは、コンプレックスという単純な言葉では示せないほどの存在論的な苦悩である。従って、ここで彼が過呼吸を起こすほどにストレスを感じたとしても、それは何ら不可思議ではない。自分よりも年若い女性が、自分以上に性的に経験が豊富であるという事実、そしてあまつさえその女性に性の手ほどきを受けなければならないという現実、は、「男性が性的に優位であるべき」という男尊女卑の風潮が根強い日本社会においては、尋常ではないストレスを引き起こすであろう。

そんな主人公を一切哀れんだり、見下すこともない心優しい女性に主人公は一目惚れしてしまい、性的なサービスを受ける勇気が無いにもかかわらず、その後も度々ホテルに呼び出しては女性と話だけしているうちに、話だけにお金を使わせるのが勿体ないと思った彼女の方から携帯の連絡先交換を申し出て、友人の様に店外で一緒に食事をするようになる。その後、判明してくるのが、女性がデートレイプに遭った後も元彼から同じような関係を強要されており、更に元彼は彼女を利用し、自分が作った借金を彼女に肩代わりさせてデリヘルで働かせていたという事実である。その話に憤慨し、同情した主人公は、友人と共に彼女を元彼と借金から救い出そうとするのだが、その頃彼女はスカウトから流されるままに、一刻も早く借金を完済したい思いに付け込まれて、AV出演を強要されていた。主人公と友人は、女性のAV出演強要を止めるために、元彼、そしてその背後にいる悪質なスカウトを追い詰めて彼女を救い出し、最後は目出度く2人は結ばれるという、極めてオーソドックスな風俗嬢のシンデレラ・ストーリーである。

小説は大きな共感を呼び、映画化もされたという事実から、いかにこの物語が社会的に「安心」な物語であるかを物語っている。2ちゃんねる発であるこの物語の真偽は一先ず置くとして、この物語には性風俗に関わる様々な「神話」が凝縮されているのである。

まず、女性は全く落ち度の無い穢れ無き「被害者」である。そして、彼女は自分のためではなく、元彼の借金のために健気に風俗で働く女性である。これは、全てのジェンダーから見て、「安心」な設定である。ラディカル・フェミニズムからすれば、自分達の主張を都合良く展開できる「好事例」である。女性の人権と尊厳を守るために、男性による性的搾取を声高に主張できる。そして、男性からしても「安心」である。彼女は、「自由意志」で性風俗に関わっていない見た目も「まじめ」な女性である。風俗嬢一般が背負う穢れた放蕩者といったスティグマがそれによって回避され、貞淑な女性を好む男性であつても彼女に強く感情移入できる。彼女は性行為が好きでも、楽しんでもない保守的な女性なのである。ただ、彼女は自分が無く、意思が弱いために男性に騙されている「不幸」な女性であり、守ってあげたいという庇護欲を掻き立てられ

るに十分である。このように、この物語は、ラディカル・フェミニストや矯風会のようなキリスト教純潔主義者、或いはリベラル・フェミニストや一般人であっても違和感無く鑑賞できる。男性側も、女性が置かれた状況が女性の欲望から遠く乖離しているので、自分自身の風俗嬢に対する差別を自覚することなく、『おしん』の不幸物語でも観るかのように素直に物語に共感できる。

また、童貞で不細工な所謂「アンダークラス」の 29 歳男性と、美人で初心な 20 歳の風俗嬢という関係性は、日本社会の男尊女卑のヒエラルキーから見た時に、両者の対等な関係性を描くうえで絶妙にバランスが取れている。これが恐らく、男性が若く美男子でかつ遊び慣れている場合、物語としては全く共感を呼ばなかったはずである。男性的価値観が優位に立つ日常と異なり、この物語では主客が逆転し、少なくとも性に関する限り、男性よりも女性の方が遙かに主体的・自律的に見える。女性は若く美しく、男性は中年で醜い。加えて、男性が性的に奥手な「アンダークラス」であるために、現実社会における動かし難い男女間の権力構造が、この物語では上手く覆い隠されている。従って、フェミニズムの側から見ても「敵」ではない、訝えないが、まじめだけが取柄な男性が、最後には白馬の王子様宜しく女性を救い出し、女性も野獣の内面に恋した美女のように、この男性を受け入れるというハッピーエンディングは、やはり誰もが「安心」を感じられるものなのである。似たような設定の『プリティ・ウーマン』が、誰が観ても「安心」でないのは、映画の中での男女の権力関係が、現実社会の権力構造と全く一緒だからである。富裕層の男性（リチャード・ギア）が、貧困層の売春婦（ジュリア・ロバーツ）を、NY への滞在中に気まぐれに 6 日間 3,000 ドルで買うという設定は、圧倒的に権力を持った男性による女性差別・支配そのものであり、その男性が悔い改めて最後に白馬の王子になったとしても、フェミニズムの視点からすれば、到底許し難いであろう。

一方で、『風俗行ったら人生変わった **www**』は、最後の最後まで社会の凡庸な常識や価値観から逸脱しない。分かり易い勧善懲悪であり、最後にはまじめに頑張った者が報われる、気持ち良いくらいの予定調和である。だが、やはりこの作品で描かれるのも、社会の偏見そのものなのである。つまり、女性が風俗で働くことは汚らしいこととされるが、男性が風俗を用いるのは正当化されている。更に、風俗で働く女性は性的搾取の被害者、女性達の周囲にいるスカウトは人間の屑、風俗嬢を愛する男性には覚悟が必要等々、そこで描かれるものは時代錯誤ともいえるほど、保守的な価値観のオンパレードである。

従って、現役の風俗嬢である水嶋は、この物語に強い違和感を覚えたからこそ、敢えてこの物語を直ぐに連想させる書名で、セックスワーカーである自身の体験談を発表したのである。そして、冒頭、自分の体験談が、読む者の価値観に亀裂を入れ、不愉快な思いをさせかねないことを念入りに断るのだ。彼女は、一般人が「安心」できない、小説や映画とは違うリアルな物語、15 年間もがき続けた自己のエイジェンシーの結果を語ろうというのである。Lister の分類で言えば、彼女が性風俗産業でもがき続けた 15 年間は、「やりくり」と「脱出」に該当する。当初は日銭を稼ぐために始めた「やりくり」のための性的サービスは、水嶋にとって何時しか戦略的な意味を持ち始め、彼女は自分の過去のトラウマから、そして置かれた貧困状態から「脱出」するために、明確な意図を持って性風俗産業とそれを利用する男性客達を社会資源として活用した

のである。そして、それを書籍化して日本のフェミニズムに対する「反抗」として語る行為もまた、まさに彼女の新たなエイジェンシーとなり、そこから彼女はセックスワーカーとしての自己のアイデンティティの更なる構築を試みようとしているのであろう。その証拠に、『風俗で働いたら人生変わった www』の中で、著書を通して自分自身の物語を「主観的」に語ることは、彼女にとって「不可欠」だったと述べるのである。

それゆえ、もしもあなたが、ありがちな不幸物語を期待して本書を手にしたのだとしたら、まったくの見当外れだ。「風俗嬢は不幸な存在である」という陳腐なファンタジーは、本書には一切登場しない。この点について、なにか不都合があるようなら、さっさとこんな悪書はシュレッターで裁断し、巷に溢れている凡百の風俗取材記でも読まれた方がいい。さもないと、あなたの孤独な夜を淫猥に慰めてきたそのファンタジーは、本書によって少なからず、掻き消されてしまうことになるだろう。（水嶋 2016 : 8）

水嶋が挑発的に記しているように、この本は最初から最後まで、反フェミニズムである。恐らく、先に論じたフェミニスト達のほとんどが、水嶋の主張に眉を顰めるであろう。その上で、彼女は「幸福」であると宣言する。彼女達が「不幸」であり、彼女達を救いたいという思いで活動をしている林や、PAPS, HRN, Colabo 等に代表される支援者達は、肩透かしを食らうであろう。否、水嶋に、頼むから口を閉じていてくれ、と懇願したくなるかもしれない。しかし、水嶋にしてみれば、彼女達フェミニスト達や、社会福祉系の支援団体は、少しも効果的な救いになっていないどころか、彼女達風俗嬢の尊厳を著しく傷付ける存在なのである。

彼らが風俗嬢を語るとき、風俗嬢は飽くまで救済対象として規定される。救済とは聞こえはいいが、実際に行おうとしていることは排除に近い。実際、彼らの三段論法は、決まってこのような形を取っている。

大前提 本来なら風俗などで働くべきではない。

小前提 それにも関わらず、風俗で働いているということは何か問題を抱えているからだ。

結論 問題を抱えているからには救済してあげなければならない。

ここでいう救済とは、しかし「風俗を辞めさせること」であり、所謂サポートではない。風俗を辞めた後については「本人の自助努力で」とされる。かかる倫理観の押し付け、有害善意の暴走が、しかし現在のマスメディアにおいては一般的な論調なのだ。私のようにセックス・インダストリアル「リアル」を前向きに捉え、社会との共存を図っていこうと活動する現場の人間に

については、「頼むから口を閉じていてくれ」と願っている人も少なくないだろう。（水嶋 2016 : 60-61）

社会福祉学や社会学のフェミニズムは、古くは廃娼運動から、今日は「アダルトビデオ出演強要問題」まで、常に水嶋が指摘する、三段論法を駆使してきた。それは一体、誰のためなのであろうか。実は、他ならぬ我々自身の信念体系を維持するためであり、決して性風俗産業従事者の人権や尊厳のためではなかったのではないかと支援する側が自己覚知できないのであれば、せめて一旦自らの価値判断や活動内容をエポケーする必要があるのではないだろうか。少なくとも、筆者がこの研究を始めた契機は、まさに水嶋が指摘する通りなのである。水嶋が提起した三段論法が正しいことを証明すべく、60人を超える性風俗産業従事者にインタビューし、10人近い支援者・関係者からも話を聞いた。そして辿り着いた結論は、古典的三段論法の棄却であり、Y1や水嶋らセックスワーカーの立場なのである。無論、貧困研究として、「実存的貧困」概念を証明するために、風俗嬢達をその分かり易い体现者としてアプローチしてきたのであるが、常に心の中には、貧困理論の検証と同時に、先の三段論法が心に根付いていたと感じる。目の前のインフォーマントが、筆者が聞きたいような貧困に根差した「生きづらさ」、もっと言えば「不幸」な言説ではなく、水嶋のような「幸福」な物語を語る時、それをどうしても素直に信じることができず、当初彼女達は「強がっているに違いない」と決め付けた。または、「自己覚知のレベルが低過ぎて、自身が置かれている窮状や不幸が認識できていない」、更に酷い時は、「病的な妄想である」、「現実逃避している」とまで考えていた。そして、事実、コーディングの際には、そのようなコードを彼女達の言説に無思慮に貼り付けていた。自分の大前提が誤っている、と考えを改めるためには、何人もの「幸福」な物語を聞く必要があった。その後はコーディングの貼り換えを行い、改めて彼女達の様々な「やりくり」、「脱出」、「反抗」等のエイジェンシーに向き合った。Y1や水嶋らのように、セックスワーカーの「組織化」を目指した政治闘争を行う女性達の言説にも真摯に耳を傾けた。そして今確信しているのは、それを認められない支援者は、時に自らが支援したい女性達を苦しめかねない存在だ、ということである。性風俗産業で生きる女性達は、確実に Lister が指摘する 4 つの「行為における主体性」のいずれか、或いはその全てを駆使している。だからこそ、わざわざ一節を設けて、こうして日本のフェミニズムの限界を指摘しているのである。

(3) 「風俗を辞めた後については『本人の自助努力で』とされる。」という水嶋の言葉は辛辣であるが、正鵠を得ている。新自由主義の「被害者」である女性達を性風俗産業から「助け出した」つもりになっている支援者達は、その後無責任にも彼女達を再度新自由主義の荒波の中にただ投げ捨てているだけなのである。それはサポートではない、と水嶋が怒るのは当然だ。一般社団法人 GrowAsPeople のように、風俗嬢のセカンドキャリア支援を謳っている団体にしても、どの程度の資格取得や就労支援を行っているのかは具体的に明らかにされていない。だが、「人として成長する」という団体名が示している様に、風俗嬢を辞めて昼の仕

事に就くことが「人間の条件」であるかのように考えているならば、それは酷い偏見と見当違いであると言わざるを得ない。Lister は、「脱出」のエージェンシーを解説する箇所、以下の様に指摘している。

有給の仕事は、貧困から抜け出す最大のルートかもしれないが、万能薬ではない。低賃金はやはり貧困を意味するだろうし、とくに女性にとってはそうである。福祉手当から仕事への（しかも多くは不安定な仕事への）移行が、貧困と負債を悪化させることもある。（Lister=2011:214）

シングルマザーが有期雇用されると、日常生活において複雑なバランスをとる作業に直面することが多く、これはこれで＜やりくり＞上の負担となる。このバランスをとる作業では、有給の仕事と子どもの教育が衝突する場合もある。有給の仕事に就きつつ子どもの教育にももっとかわれという矛盾した政策が、シングルマザーにとっての負担や時間的圧迫になりかねないことが、調査結果から分かっている。さらに、有給の仕事を通じて貧困から抜け出そうという努力によって、子どもの学業成績向上への支援が犠牲になっているケースもある。つまり、貧困から抜け出そうとする母親の戦略的^{エージェンシー}行為が、長期的には逆の結果をもたらし、子どもが貧困から抜け出す能力や、貧困に陥らない能力を損ねることもあるということである。これは一例であって、貧困状態にある人々がとる個人的な戦略的行為は、彼らが直面する構造的・文化的・政策的な制約と、ほかの人よりも限定的な機会という文脈で理解しなければならないという一例である。（Lister=2011:215）

筆者の研究自体が、Lister がここで指摘していることに対する反省から始まっている点は既述の通りである。何故、キャバクラ嬢や風俗嬢に対する昼の仕事への就労支援が上手くいかないのか、何故彼女達は職業訓練でそれなりの資格を取得したにもかかわらず、直ぐに昼の正業を捨てて、元の仕事に戻ってしまうのか。これが、就労支援の最前線で長年キャリア・コンサルティングとソーシャルワークを行ってきた筆者が抱えた悩みであった。水嶋が指摘するように、筆者もまた「風俗を辞めた後については『本人の自助努力で』」という考え方を、女性達に無自覚に押し付けていたのである。林らに代表される無責任なラディカル・フェミニストと違い、自分はただ仕事を辞めさせただけではない、面談を通して昼の仕事へのモチベーションを引き出し、かつ3か月から6か月の公的な職業訓練を提供することによって、社会的に有用なパソコンスキルやホームヘルパー等の公的資格も与えた、十分に彼女達は社会で生活していけるはずだと筆者は考えていたのだと、幾許かの自己正当化をすることは可能だ。だが、筆者にしても、彼女達のヴァルネラブルでパワーレスな状況が正確には理解できていなかった。本研究が第4章以降の実証研究で明らかにした様に、機能不全家族に育ち、愛着障害を基底に抱えていることが多い彼女達は、本質的に脆弱なのである。身体的にも精神的にも、極めてパワーレスな女性達を新自由主義の「万人の万人に対する闘争」に送り出すのに、僅かば

かりの資格を取得させるだけでは、到底十分ではなかったのだ。その結果、Lister が指摘している様に、彼女達の貧困からの「脱出」は結果的に戦略的行為としては誤りとなったのである。彼女達は昼の職場でより一層心に傷を負い、心身を壊し、最終的には元の性風俗産業ですら働けなくなり、A13 の様に生活保護を受給せざるを得なくなった者もいる。性風俗産業からの「脱出」が貧困からの「脱出」に繋がらず、逆に彼女は以前よりも更にパワーレスな状態に陥ったのである。この苦い経験こそが、本研究の原点なのである。

一方で、第4章以降に詳述するが、水嶋やY1だけでなく、多くの女性達が、確かに社会的には不幸な状態に置かれながらも、性風俗産業の中で「脱出」というエイジェンシーを発揮して、自己のアイデンティティの構築に成功している。そしてそれを今は「組織化」を目指して発展させているのだ。Y1のMにおける活動は、まさに「組織化」のエイジェンシーそのものである。それをY1自身も明確に認識している。

Y1-151: わたしのやったことはすごく人を元気にしていると。自分の働きがこんなに人を幸せにしていると。こんなに感謝されることをわたしはしているんだ、ということは、レジリエンスとエイジェンシーにつながってるわけよ。だからこの仕事がみんな好きなの。うん。やって良かったなっていう風に言うじゃん。

Y1 の上記の言説は、従来のフェミニズムにおいても、社会福祉の領域においても、真剣に向き合われることがほぼなかった。何故ならば、恐らくそこには明確な「娼婦ラベル」が存在していたからである。性風俗産業に従事している当事者が語る言説は、「娼婦」として最初からスティグマタイズされており、彼女達の行動や言説にエイジェンシーなどあろうはずがないと、研究者や支援者という一段高い地位から冷たく断罪され、無視されてきたのではないだろうか。穿った見方になるのであるが、仁藤は自身の著作の中で仁藤と同じ「難民女子高生」の友人達が性風俗産業に取り込まれていった様子を事細かに描いてはいるが、そこで自分自身が取り込まれてはいないことを過剰な程に強調しているように感じる。そこに仁藤本人が友人達に貼り付けた「娼婦ラベル」が透けて見えるのである。恐らく仁藤の頭の中には、自分が性風俗産業の当事者ならば、支援者としての資格に欠けてしまう、という考えがある。支援者は純潔であらねばならないという保守的な考えに囚われているのだ。従って、仮に「難民高校生」だった仁藤が何らかの性風俗産業に少しでも関わった過去があれば、彼女は絶対にそれを隠すだろう。だが、これは間違っている。彼女が当事者であっても、支援者としての資格が欠けることなど一切無いし、寧ろ彼女に対して共感を抱く女性達が今以上に増えるに違いない。それは、実際のセックスワーカーであるB9が、Y1らMの活動を支持していることから明らかだ。自己覚知した当事者、すなわち、性風俗産業を日常的な「やりくり」のレベルから戦略的な「脱出」の手段に替え、更にそれをアカデミズムに対する「反抗」や政治的な運動である「組織化」にまで昇華させた者は、一つのロールモデルとして十分に尊敬に値するからである。第4章で詳述するが、少なくともセックスワーカーであるB9は、Y1らMの取組みをそのような眼差しで見詰めている。一方で、PAPS,

HRN, Colabo らの取組みには冷ややかだ。B9 は、彼等の取組みや発言は余計なお世話であり、性風俗産業で働く当事者にもっと配慮して欲しい、被害者を助けたいという思いは分かるが、もっと言葉遣いに気を付けて欲しい、とまで指摘するのである。

ここから明らかになるのは、Butler が指摘しているようにエイジェンシーの本質である個人の内面の言説化を、社会の側が阻害することはあってはならないということである。それを阻害するということ、すなわち先の三大論法を問答無用で受け入れろ、と風俗嬢達に支援の名を借りて強要することは、水嶋が指摘しているように、彼女達のエイジェンシーの「排除」なのである。彼女達の語りを無視し、自分達のイデオロギーを押し付けることが、フェミニストや社会福祉学が闘っている社会的排除に加担することだと気付かない限り、我々は彼女達に対する支援者として立ち現れない。

それでは書こう。なぜ私は風俗で働いて良かったと思うのか。その理由の一つではない。ただ、数ある理由のうち、私個人にとって最も大きな意味を持つ理由は、「私はこの仕事によって自身のミサンドリー（男性嫌悪）を克服することができたから」というものだ。風俗で働くことによってミサンドリーを克服した…だなんて、風俗嬢を「性の被害者」として疑わない、ある種の信仰深い方々にとっては噴飯物だろう。「風俗で働くことは男性嫌悪の原因になりこそすれ、風俗が男性嫌悪の回復の場になることなど断じてない！」といった、ヒステリックな反応が目につく。しかし、他人がいかに思おうと、実際に私は風俗で働くことによって、あるいは売春行為を行うことによって、ミサンドリーを克服することができた。いや、それだけではない。同時に抱えていたミソジニー（女性嫌悪）、セックスヘイト（性嫌悪）をも克服することができたのだ。（水嶋 2016 : 9-10）

「行為における主体性」を行使する存在として、水嶋はセックスワーカーの誇りと共に、自己の言説を我々に突き付けてくる。15 年間、セックスワークを行った当事者が、様々な偏見や差別、スティグマと闘いながら、自分自身の思いを必死に言語化し、彼女にとっては呪いだったミサンドリー、ミソジニー、セックスヘイトという「ジェンダーの三重苦」を克服したのだ。決して、そこに至る道が平坦だった訳ではない。寧ろ、普通の女性であれば、到底耐え難いような性暴力被害と児童虐待、DV を幼少期から長期間に渡って体験したのが水嶋という女性である。不幸から始まった彼女の人生が、その軛から解放されるためには、自身が呪った女性性を武器に変え、「性」と向き合い、男性に対して究極のサービス提供者としての実践を繰り返す中で、彼女のエイジェンシーは生成変化し、遂に彼女を幸福に誘うアイデンティティを構築したのである。性的逸脱だけでなく、様々な非行や反社会的行為、反道徳的行為は、時に人格形成のために必要な要素となり得る。水嶋や Y1 らによるそのような指摘を、真摯に受け入れられるだけの寛容さを日本の社会福祉とフェミニズムには望みたい。

その一方で、水嶋や Y1 らに代表されるセックスワーカー達にも、自分達の言説がなかなか社会に届かず、歯がゆい思いをしたとしても、「組織化」に協力しない、或いはできない女性達が寧ろ普通であることを理解して貰いたい。これまでの発言を検討すれば、筆者が指摘するまでもなく、成熟したリベラル・フェミニストである水嶋や Y1 はそれが良く分かっている。だが、中には、政治的なイデオロギーだけが突出しているように見受けられる支援団体も一部存在している。そのような団体が、女性達よ、連帯せよ、共に闘おう、と呼びかけ、それに応えない者達を何故一緒に支配権力と闘わないのだと批判するならば、その活動は結局、個々人のエイジェンシーの否定に繋がってしまう。誰もが連帯して闘える程には強くないのである。

Lister (=2011 : 217) は、「組織化」のエイジェンシーが発揮された時、障害者やシングルマザーなどのマイノリティの身分は、時に力強い所属感を得て「存在論的アイデンティティ」に変換され、価値ある「自己感覚ないし存在感覚」を生み出すことがあると指摘する。しかしその一方で、貧困という状況は、その様に価値あるアイデンティティにはなりにくいことも指摘している。

「貧しい」という、集団としてのカテゴリー的アイデンティティが欠如していることは、第 5 章で論じたように、このラベルで認識されることが不本意である場合が多いことを反映している。「直接確かめられた貧困 (Poverty First Hand)」という研究では、貧困状態にある人々の多くが反貧困キャンペーンに参加しない理由のひとつとして、これが挙げられている。グラスゴーで働くインド出身のコミュニティワーカーは、「立ち上がって『私は貧しい。私はほかの貧しい人たちとともに自分の権利のために闘う』という者は 1 人もいなかった。貧しいことに対して恥ずかしいという感覚があった」と語っている。対照的に「ゲイや身体障害者などの集団は……誇りをもって集まり、たがいを認め合っていた」。こうした集団（ないし少なくともメンバーの一部）は、ネガティブな生得的アイデンティティを積極的で肯定的なカテゴリー的アイデンティティに変換し、自分たちの差異を政治的に承認させる基礎としていた。

このタイプの変換は、貧困状態にある人々に初めから開かれているわけではないし、大多数は、好んで貧しくなろうとは思わないだろう。「貧しい」という語句は、社会的にスティグマを付与された物質的資源の「欠如」を表している。この種の欠如は、アイデンティティ共有の確固とした基礎とはならない。「貧しいことへの誇り」という旗印の下に行進する者は多くはないだろう。従って貧困が、それに苦しんでいる者にとって、連続性のあるカテゴリー的なアイデンティティを構成するようにはとても思えないのは当然である。集団的な行動は、共有するアイデンティティなしには困難なのだ。

しかし、ほかのカテゴリー的アイデンティティには、母親（シングルマザー）、年金生活者、地域住民など、集団的行動の基礎を提供しうるものもある。個々のアイデンティティの連続性は状況によって違ってくる。しかし行動の焦点が貧困であるかぎり、貧困をとまなう特定のアイ

デンティティーの連続性のみを中心として組織化することは危険で、かえって資源をめぐって競合する集団どうしで、分裂を強めることになりかねない。人は貧困のスティグマから逃れようとして、自身よりも「価値がある」と思えない者を＜他者化＞することがあるからである。

(Lister=2011 : 220-221)

『『貧しい』という語句は、社会的にスティグマを付与された物質的資源の『欠如』を表している。この種の欠如は、アイデンティティー共有の確固とした基礎とはならない。』という Lister の指摘は、性風俗産業で働く女性達が同様にアイデンティティーを共有できない理由に繋がる。「娼婦ラベル」というスティグマは、性風俗産業で働く女性達に須く付与される。その仕事が実際には性的サービスを含まないキャバクラのようなものであろうとも、娼婦性を持つというだけで、スティグマの対象になってしまうからである。そのような状況下に置かれた女性達が、風俗嬢、或いはキャバクラ嬢を前面に打ち出してカテゴリー的アイデンティティを形成するのは不可能とは言わないが、かなり難しいのではないかと感じる。

事実、2009 年 12 月 22 日に厚生労働省記者クラブでキャバクラユニオンが発足記者会見を行った際、現役のキャバクラ嬢で顔を出して会見に臨んだ者は 1 人もいなかった。その後、2010 年 3 月 26 日に、キャバクラユニオンが主催した『『ちゃんとしないと、飛ぶぞ』デモ』が歌舞伎町で行われた時も、現役のキャバクラ嬢はほとんど参加しなかった。顔を隠して参加した者も若干名いたとされるが、当該デモは、フリーター全般労働組合に属する女性や男性が、キャバクラ嬢風に仮装して行ったものであった。こうした「組織化」された活動に対して、当事者が誇りを持って参加できないという現実が、貧困と同様に、その仕事を業として行うことが「恥ずかしい」と感じてしまう性風俗産業に貼り付いたスティグマの根深さを実感させる。また、そうした当事者性を欠いた活動の限界をも示しているのではないだろうか。このデモを通してエンパワーメントされた女性や、エイジェンシーを発揮できた女性というのは、現役の女性達に限って言えばほぼ皆無に近いであろう。

なりたくて貧困になる者がほとんどいないように、なりたくて性風俗産業従事者になる者もまた少ない。キャバクラ嬢や AV 女優など、メディアへの露出があり、若干華々しく取り上げられる職種であれば、それに憧れる女性も出てくるであろうが、デリヘル嬢やソープランド嬢の様に、メディアで取り上げられることもない性のルーティンワークを行う女性達の場合は、その仕事に誇りを持つことの方が難しい。その意味で、水嶋が『風俗で働いたら人生変わった [www](#)』で描いたセックスワーカーの誇りは、誰もが共感できるものではなく、いかに水嶋がセックスワークを「究極の接客業」とであると主張しても、「恥の感覚」からその価値観を共有できる女性達は極めて少ない点を指摘して本項を閉じ、次項で改めて、性風俗産業に従事することが持つ意味、すなわちスティグマを付与されることの本質を検討したい。

第3節 性風俗産業従事者と社会的排除：「廃棄された生」

第1項 性風俗という「職業スティグマ」：Goffman 理論から性風俗産業従事者を捉える

(1) Frankl (=2011 : 209) は、「自分の人生を労働に意味づける機会はどうな職業によっても与えられているものであるが、ただしそれは、その職業における労働のあり方が正しく理解された場合だけである。人間の代理不可能性やかけがえのなさ、一回性や唯一性はつねに、誰がそれを行うか、いかにそれを行うかにかかっているのであって、何を彼が行うかにあるのではない」と指摘した。

Frankl は、「職業に貴賤は無い」などと玄田のような単なる綺麗事だけを言わない。確かに職業に貴賤は無いのだが、その前提として「自分の人生を意味づけるためには、その職業における労働のあり方が正しく理解されることが必須である。」と指摘するのである。ただ、漫然と与えられた仕事をしているだけの派遣社員やアルバイトの職務の在り方に労働としての価値はなく、それが仕事として正しく定義づけられて、何をなすべきかが明瞭になって初めて、人はそれに生きがいを感じられるのだ、と指摘しているのだ。その意味では、医師や弁護士のような専門職であろうと、水嶋のようなセックスワークであろうと、仕事自体に人生を意味付ける価値はなく、その仕事における労働の正しいあり方にこそ意味がある、ということになる。

前項で論じた水嶋はまず、セックスワークとは何か、と自らの仕事の意味を真摯に問うていた。そしてそれを、「風俗嬢とは、風俗店と口約束の請負関係にある『個人事業主』であり、その事業内容とは、『お客さんと極めて近い距離において、心と体と同時に気を配りながら、言語と肉体を重ね、性的興奮という明らかにアウトプットされていくものに影響を与えていく、“特殊”な接客業』である。なお、現行の法律下においては、業種によって微妙に立場は異なるものの、適法性の判断が法執行者の恣意性に委ねられた、極めて不安定な立場にある」（水嶋 2016 : 79）と明瞭に規定した。そして、自身の仕事を「究極の接客業」と位置づけ、どのような客が来てもその客に合わせた接客ができるように、自己の陶冶に努めたという。日経新聞や読売ビジネスオンラインに目を通し、恵比寿の高級ホテルでセレブリティの相手を務めたのち、直ぐに渋谷の安いラブホテルで「アンダークラス」の相手を務める。そのどちらに対しても、同じ熱量をもって、相手の尊厳を傷付けない性的サービスの提供を実践したのである。このように、自身の職業における労働のあり方が正しく理解されていたので、彼女は Frankl が指摘した人間の代理不可能性を実践することができ、客との一期一会の関係性は、かけがえのない職務を形作る一回性や唯一性となってその仕事を感動的なものにしたのである。彼女のことを、10年以上の時を経て指名した客から、覚えていますか、と問われて、実際に鮮明に覚えていた水嶋の職業意識の高さがそれを物語っている。

従って、本来、セックスワークはそこで働く風俗嬢の「行為における主体性」を引き出し、価値ある仕事として自身のアイデンティティ構築にも寄与し得るものなのである。だが、残念ながら現実はそうならないケースの方が圧倒的に多い。そして、その点は、他ならぬ水嶋自身も認めている。水嶋曰く、風俗嬢は「弱い」のである。2000年代に入り、要や松沢、菜摘らが性風俗産業をセックスワーク論から改めて肯定的

に捉えるような風潮を作ろうとしたが、決して主流にはなり切れていない。寧ろ、先に紹介した NHK 等の立ち位置は、相対的貧困論と社会的排除で風俗嬢と「女性の貧困」を捉えようとする動きである。そこで描かれるのは、日本において格差社会が広がる中、その犠牲者として社会から零れ落ちた若い女性達が性風俗という最後のセーフティネットに縋って辛うじて生きている、という惨めな姿である。そこにおいては、仕事に誇りを持って従事している風俗嬢の姿など全く脳裡に浮かんでこない。従って、性風俗産業の実態は、現実社会以上の「超格差社会」であると認識すべきであろう。そして、水嶋のような「勝ち組」が風俗嬢のマジョリティではなく、寧ろセックスワーカーになり切れない、Frankl の言葉を借用すれば、「その職業における労働のあり方が正しく理解されない、人間の代理不可能性とは全く無縁」の使い捨ての風俗嬢が、日本社会の「アンダークラス」の最底辺層を形成しているというのが実態なのである。先に、水嶋が風俗嬢を「弱い」と指摘した理由は、彼女達の多くが精神保健に問題を抱えた所謂メンヘラであるからだ。

以前から、この問題は、「鶏が先か卵が先か」の論争になってきた。支援団体側は、性風俗産業という劣悪な環境に「堕ちた」ために、女性達は心身を壊し、とりわけ精神を病むに至ったと結論付ける。故に、そのような場所から一日も早く救い出さなければならないという論理が展開されるのである。それに対して、水嶋は逆の論理展開をする。元々精神的に病んでいた女性達にとって、働きやすい職場が性風俗産業であるために、必然的にそこにうつ病等の精神疾患や摂食障害や自傷行為等の様々な嗜癖を抱えたメンヘラが多くなるのだという。従って、性風俗産業が彼女達を壊したのではなく、彼女達のようにメンタルの状態を一日の間で長い時間安定的に保てない女性達にとって、時間単位で働けて日払いで給与が支給され、かつ無断欠勤にも目くじらを立てられず、若ければ基本的に前科があろうが、障害があろうが、門戸だけは異様に開かれていて色々と融通が利く職場に、問題を抱えた女性達が自然と集まってきているだけなのだと水嶋は指摘するのだ。ただ、水嶋は、彼女達がそこでエイジェンシーを発揮して癒されることもある一方で、一定数が更に性風俗の過酷な仕事でより一層病んでしまうことも認めている。Frankl が指摘した人間の代理不可能性を実践することができる程の人間力がある女性は、元々それ程多くは無い。そのような女性は、本来普通の家庭であれば、昼の世界で十分に能力を発揮できたはずの女性である。だが、いかに才能があろうとも、水嶋のように幼少の頃から極貧の家庭に生まれて暴力に支配され、あまつさえ性暴力被害を受けるなどして自身のケイパビリティを周囲に毀損され続ければ、昼の世界で自身の能力を開花させることは難しくなる。結果、彼女は、自分自身のアイデンティティを破壊する暴力装置である家庭から一日も早く逃げなければならなかったのである。そして、性風俗産業で働けるようになった 18 歳の時に上京し、以来その世界で才能を開花させていくのであるが、このような形でその業界に救いを求めた才能ある女性だけが、この世界での「勝ち組」になれるのだ。一方、昼の世界の桎梏を抱えたまま仕方なく「夜」や「風」の世界に入り、その呪いに囚われたままの女性であれば、やはり精神を健全に保ち続けるのは極めて難しい世界であると言わざるを得ない。性風俗産業は単なるケアワーク以上の「究極の接客業」だからだ。従って、水嶋は、やはり多くの風俗嬢にはサポートが不可欠だという。ただしそれは、お説教でも、性風俗産業から引き離すことでもないの

である。その場所で、メンタルに不調を抱えたままでもなんとか働けるように支えて欲しいと訴えているのである。何故ならば、既に見たように「社会保障は性風俗に敗北」しており、彼女達が生活保護の受給を拒んだ場合、性風俗産業以外に社会に行き場所が無いのである。それを引き離して、無理やり生活保護を受給させて婦人保護施設等で管理するような形の支援は、彼女達のエイジェンシーを毀損し、主体を失った完全なる客体としてパワーレスな存在に貶めるだけである。そのような生の在り方を社会福祉の理念は支持しない。従って、本来あるべき支援策は、性風俗産業に張り付いたスティグマを無くし、社会的排除の対象である「アンダークラス」の地位から彼女達を救い出すことである。そのためには、売春の「非犯罪化（或いは合法化）」が必要である、と水嶋は指摘する。

違法性がある仕事という事実だけでも、女性達は後ろめたい気持ちにならざるを得ない。非犯罪化によって性風俗の仕事を一般の仕事と同じ地平に引き上げたのち、感情労働でかつ肉体労働である過酷な現場で働き続けられるように女性達のメンタル面をカウンセリング等で支えることが必要なのである。だが、現状、そのような水嶋の願いは到底叶いそうにない。何故ならば、日本のフェミニズム、とりわけアカデミックなフェミニズム自体がそのような方向性を全く目指しておらず、寧ろ、風俗嬢を「救済」の対象とするようなラディカル・フェミニズムのメサイア願望が日本社会に拡大しようとしているのである。多分にパターンリステックな押し付けと、哀れみの視線を風俗嬢達に向けながら、である。

そして、それに NHK や大手マスメディアが同調を始めたのが昨今の潮流であるが、残念ながら、一般人は、決してそこまでリベラルではない。社会の歪な保守性は、仁藤が「私たちは『買われた』展」を企画した際、そして NHK のクローズアップ現代が「女性の貧困」や「高校生の貧困」特集をした際に、強烈な批判となって表面化する。新自由主義の自己責任論は、大合唱となって彼女達を一層貶めるのである。

その原因は、一般社会が性風俗産業を良く知らないことに起因する。性風俗産業は、これまでに度重なる「浄化作戦」の名の下に徐々に社会の中で不可視化されてしまった。風営法が改正され、堂々と看板を掲げた店舗型が一部地域にしか存在しなくなった現状、代わりに無店舗型のデリヘルが主流となってまるで地下に潜ったような形になった風俗嬢に対して、社会は一層の偏見と差別の眼差しを向けるようになってきているのだ。ポストモダンの格差社会の中で不安と生きづらさを抱えた一般人は、自分達と価値観を共有できない社会の異分子にその不満の捌け口を求めており、在日外国人などと一緒に風俗嬢は都合の良いスケープゴートとして利用されるのである。そして、そのような他者から向けられる偏見と侮蔑の眼差しを、真っ向から跳ね返せるような強い女性はほとんどいないだろう。多くは、他者のそのスティグマを孕んだ視線を自己に内面化し、自分自身で自らを排除するメカニズムを作り上げる。Foucault が指摘した新自由主義の「主体化＝服従化」のメカニズムは、性風俗産業において、より一層顕著に機能する。何故ならば、ポスト・パノプティコン社会において、ついに監視人は社会の至る所に偏在するのみならず、個人の内奥にまで入り込んでしまったからである。そしてその監視人は、Bentham のパノプティコンのように単に囚人が仕事をさぼっていないかを見張っているのではない。風俗嬢という法的にも違法に近い存在が犯罪者にならないか、侮

蔑と偏見を込めて 24 時間常に監視しているのである。自分の中にスティグマと監視人を内面化した状況は苦悩に溢れており、まるで救いが無い。風俗嬢が「弱い」のは、新自由主義のシステムが、必然的に彼女達の精神を内部から崩壊させるからなのだ。新自由主義というシステムが社会的排除を機能的に不可避にしていることは既に指摘したが、その対象に風俗嬢が入っていることに加えて、彼女達の職業の法的な位置付けの危うさが、更に彼女達のアイデンティティを不安定なものにしている。そして哀しいことに、彼女達はそのような状態で、社会の外に容赦なく打ち棄てられているのである。

(2) ストーカー被害に遭って殺された元キャバクラ嬢に対するネット上の自己責任論の噴出と、それに対するキャバクラユニオンの抗議声明文は、既に前章で述べた通りである。キャバクラで働くということ、敷衍して言えば、性風俗の世界で働くということは、日本では極めて強く非難される。その背景にあるのが、ニートやフリーター、派遣労働者、在日外国人、障害者、前科者、多重債務者、生活保護受給者、シングルマザー、性風俗産業従事者など、所謂「アンダークラス」に対する日本社会の「排除の空気」である。

これまでも縷々述べてきたが、Young (=2007 : 12) は、「私たちは、大規模な構造変動の時代に生きている。正規雇用の労働市場も、非正規雇用の労働市場も根底から変容した。女性の雇用形態が劇的に変わった。経済構造に根差す失業者が大量に生み出された」と後期近代の特徴を指摘する。所謂ポストモダン（後期近代）社会は、安定的で同質的な「包摂型社会」から、変動と分断を推し進める「排除型社会」へ移行しているのである。そのような「排除型社会」で、プレカリアートの最底辺に位置する性風俗産業に従事する女性達を更に排除するイデオロギーが働いている。彼女達は、明らかに他の「アンダークラス」が持つ以上のスティグマに晒されているのである。

Goffman (=1963 : 14) によれば、スティグマとは「価値剥奪されたアイデンティティをもたらし属性であり、これをもつことで望ましくないものとして他人から蔑視や不信を受け、社会から十分に受け入れられる資格を奪うもの」である。

われわれ常人 (the normals) がスティグマのある人に対してとる態度、われわれが彼に関してとる行為はよく知られている。というのはこれらの反応は、善意の社会的措置が和らげ改めようとしているものに他ならないからである。よくあることだが、スティグマのある人を、定義上当然完全な意味での人間ではない、とわれわれは思い込んでいる。このわれわれが無意識に自明として^ア^サ^ン^ブしている前提に基づいて、われわれはいろいろな差別をし、ときに深く考えもしないで、事実上彼らのライフ・チャンス^ンを狭めている。われわれはスティグマの理論、すなわち彼の劣性、ならびに彼が象徴している危険を説明するイデオロギーを考案し、さらには他の差異、たとえば社会階層、に根差す敵意を正当化しようとするのである (Goffman=963 : 19)。

Goffman は、ここで「常人」という言葉を敢えて強調して用いているが、そこには、我々「常人」は常に社会のマジョリティであるという含意がある。しかし、果たしてそうなのであろうか。何時、我々が「常人」から零れ落ち、社会のマイノリティになるかは誰も分からないという「不確実性の時代」を、今我々は生きているはずである。それが、後期近代、ポストモダンという時代のはずだ。性風俗産業に関わる女性達に押しつけられた烙印と同様のスティグマが我々にも刻まれ、無慈悲にライフ・チャンスが奪われるのが何時なのかは、誰にも予想がつかないのである。であるならば、かような醜い敵意を正当化することは、大きな誤りであると社会全体が一刻も早く気付かない限り、いずれポストモダンの荒波が、我々の共同体を完膚なきまで破壊してしまうであろう。

事実、インタビューをしたほぼ全員がスティグマの存在を強く実感していたし、多くの女性達が何らかの形で「パッシング (passing)」(Goffman によれば、スティグマを回避するために正体を隠すこと)を行っている。最も親しく、信頼できるはずの恋人や親友、両親にさえ、性風俗産業で働いていることを「言いたくない」「言えない」という段階で、排除のプロセスが幾重にも日本社会に存在することは明らかである。前章でキャバクラユニオンの抗議声明文を紹介したが、人が殺されるという究極の被害に遭ってさえ、「キャバクラで働いていたから自己責任である」とインターネットでパッシングが巻き起こる社会は、余りにも哀し過ぎるのではないであろうか。

在日外国人に対するヘイトスピーチもそうだが、「ある集団を排除している自分」を他者に見られるということは、本来自身が「狭量である」「寛容な精神が無い」と否定的に判断されることであり、結果、その本人が社会の中で排除の憂き目に合うのが通常の世界であろう。しかし、在日外国人に対する差別とレイシズムを顕示する、或いは、性風俗に従事するセックスワーカーを貶めることで、自らの歪んだ社会正義や道徳観を誇示しようとする人間が余りにも多過ぎる日本社会に、筆者は新自由主義の社会病理と、根強い「排除の空気」を感じる。改めて、新自由主義が社会的排除を前提とする政治経済システムであること痛感する。

アメリカでは、一時期、ホームレスの拡大に精神科病院の閉鎖が寄与したと言われた。Bauman (=2004: 83) は、近代化は過剰や余剰とされる「人間廃棄物 (wasted lives)」を不可避免的に生産していくが、その「廃棄物処理施設」をも設計してきたという。例えば、植民地化と帝国主義侵略がその一つの手段であるとし、またそれぞれの国において福祉国家の制度もまた、それらの余剰人口と正常人口を慎重に仕分けながら、前者の「リサイクル＝リハビリ」、それもかなわない場合は、立ち入り禁止地区の空間内部に余剰人口を留めておくという機能を果たしてきた。しかし、現代ではそうした「廃棄物処理」機能そのものが批判され、そうした施設そのものが壊されているだけでなく、余剰人口を犯罪者扱いにしたキャンペーンを張っている。その一例として、Bauman (=2004: 93) が挙げているのが、「フランスの郊外地区の『外国生まれの人間廃棄物』の犯罪者としての国による摘発」である。社会的排除の概念は、こうした福祉国家の隠されて来た「対処」の仕組みの限界を、主要な制度の限界と共に浮かび上がらせることを可能にする。その視点で昨今の日本社会を眺めると、石原都政で行われた「浄化作戦」とその後全国に波及したその潮流は、まさに性風

俗産業の犯罪化であり、それに伴う女性達の物象化とスティグマ化であった。彼女達は、まさに Bauman が指摘する「人間廃棄物 (wasted lives)」と見做されたのである。それは、マスメディアや行政官庁が用いた「浄化」という言葉からも明らかであろう。

社会の中で何がスティグマになるかは、時代や地域によって異なるが、現代日本社会においては、明らかに「アンダークラス」は欧米同様にスティグマ化されつつある。更に言えば、「アンダークラス」の最底辺に違法かそれに近い不穏な仕事に就く者達が据えられ、彼らが従事するスティグマ化された職業は「Dirty Work」(Hughes=1962: 3-11)と表現され、社会的排除の対象となる。つまり、Dirty Work とは、社会的に嫌悪され、受け入れられず、卑しいとみなされているために、社会の多くの成員が個人的に行わない仕事や職業のことで、個人の尊厳を貶める“シンボル (象徴)”なのである。

Ashforth & Kreiner (1999: 413-434) は、Dirty Work を「職業威信 (prestige) の高低」と「三つの職業次元 (dimensions)」の二軸を用いて分類した。職業威信は、社会において認識されている地位の高さ (高威信・低威信) であり、文化を通じて共通部分があると指摘されている。また職業次元については、(1) 身体的: 廃物や死などにじかに接する、汚染や危険などに影響を受ける、と考えられる職業、(2) 社会的: 病気や犯罪歴を持つ人々と直に接する、他者と隷属的な関係にある、と考えられている職業、(3) 道徳的: 罪があるとか反道徳的と考えられる職業、の三類型が提示されている。

上記の枠組みで捉えた時、性風俗の仕事は、(3) の道徳的な職業と見ることができるであろう。本項では「職業スティグマ」の問題を論じるが、それに際し、上瀬のキャバクラ嬢と「職業スティグマ」に関する先行研究を取り上げたい。

上瀬によれば、キャバクラは、「性風俗の一形態として社会的に認められている性の商品化活動」であるが、「性的欲望や性幻想などを満足させるサービスを行っていることから、性的に商品化された存在」(上瀬 2011: 34) であると一般に認識されている。また、実態としては、男性客の間にセクハラが横行しており、キャバクラ嬢の中にも「枕営業」と称される、売春行為を行う女性も一部に存在すると言われる。加えて、経営者の側にも問題が多い。キャバクラユニオンの代表である桜井凜とフリーター労組の共同代表の布施えり子が、「賃金未払いやセクハラなどは『夜の世界では当たり前』とされている」、「女性が傷つけられ、使い捨てにされている」(毎日新聞 2009 年 12 月 23 日東京 (朝刊)) と述べているように、ほとんどのキャバクラ店で使用者側に著しくモラルが欠如しており、実際にキャバクラユニオンが賃金未払いのために団体交渉を申し込んだケースでは、店側が交渉直後に店を閉店するなどの理不尽な対応を取ることがしばしばあった。上瀬 (2011: 36) は、こうした店側の不誠実な対応に対して、『性的に商品化された女性は、金銭で人格を売ることを職業にしており、価値低下された存在である。従って、どのような扱いを受けても、文句を言うべきではない』という偏見が雇用者側にあり、就労する女性達への差別行為を生じさせている」と推察している。直接的に性的サービスを伴わないキャバクラでさえが、これ程の社会的排除の対象になるのであるから、性風俗産業に従事する女性達は、それ以下の存在と認識されているのはある意味当然である。

心無い男性客から日常的にセクハラを受け、そして、雇用者の側からもその人格を否定されるとなれば、結果として、キャバクラ嬢自身の自尊感情は低まり、自分自身を卑下することになる。自分達でさえ、「キャバクラは夜の仕事だから、問題が起きても結局泣き寝入りせざるをえない」と自己否定的に考えてしまうのである。故に、キャバクラ嬢は、単に雇用が不安定なプレカリアートであるだけでなく、「職場での違法行為や差別を公にできない環境に置かれて」（上瀬 2011：36）おり、上瀬は、極めて劣悪な労働条件の下で、金銭的にも性的にも搾取されている存在であることを指摘する。

そのような仕事であるにもかかわらず、三浦は、若い女性の一躍みたい職業の中でもキャバクラ嬢・ホステスは上位人気であり、驚くべきことに昨今の若い女性達の憧れの職業であると揶揄するのである。だが、この統計自体が極めて杜撰で信憑性に欠ける。三浦（2008：14）自身が「もちろん、一生の仕事という意味ではない。1度だけやってみたいのかもしれないし、3年くらいしたいのかもしれないという、ゆるい範囲の回答である」とわざわざ断りを入れているくらいなのだが、更に、職種が「ペットトリマー」「バリスタ」「ネイルアーティスト」など、突飛で非現実的なものを多く含み、「経営者・社長」などという職業ですらない役職までが、職業としてキャバクラ嬢と並列で記載されたいい加減なアンケートである。加えて、複数回答可能、実際に自分の人生で選ぶ職業ではない、とすれば、恐らく三浦が内心誘導したいであろう方向へと、彼女らの答が流されてしまうのは想像に難くない。事実、1位は、「歌手、ミュージシャン」、2位は「音楽関係」（これは、経営者・社長同様に職業ではない。元々がインターネットの携帯サイトで集めた15～22歳の社会人経験がほとんど無いケータイ世代の偏ったサンプルである。）、3位は「雑貨屋」という実社会から極めて乖離した結果になっている。このような杜撰なアンケート結果を踏まえて、マスメディアで若い女性の間でキャバクラ嬢が人気職業であるというイメージ操作を行うのは、悪質の誹りを免れないであろう。

実際、上瀬が行ったキャバクラ嬢に対する成人男女の意識調査（上瀬 2011）は、三浦のアンケートとは真逆の結果となり、キャバクラ嬢の「職業スティグマ」が浮き彫りになる形となった。上瀬は、SSM 調査研究会（社会階層と社会移動全国調査）と Ashforth & Kreiner（1999：413-434）の先行研究をもとに、威信とスティグマの程度が異なると考えられる19の職業を選出し、Web モニターである男女計 2,368 名に調査以来を送り、5 件法（「5.とても高い」、「4.やや高い」、「3.ふつう」、「2.やや低い」、「1.低い」）で回答を求めた。回答があった者の中から不備があったものを除いた 922 名（男性 462 名、女性 460 名）を有効票として分析したところ、キャバクラ嬢の職業威信は「2.06」となり、裁判官「4.59」や感染症医「3.77」、ホスピス看護師「3.64」と比較して、有意に低いことが証明された。キャバクラ嬢よりも職業威信が有意に低い職業は、清掃員「2.03」とソープランド嬢「2.00」のみである。また、同時に行われた4件法の接近傾向の調査（「4.やってみたい」、「3.やってもよい」、「2.あまりやりたくない」、「1.絶対やりたくない」）でも、キャバクラ嬢の接近度は、ホスト「1.52」とソープランド嬢「1.34」の次に低く、「1.59」となっている。つまり、キャバクラ嬢という仕事は、一般的な成人男女にとっては、敬して遠ざけたい仕事なのである。

この研究から明らかになったのは、「夜」や「風」の世界に対する一般人の根深い偏見である。とりわけ、

下位三業種のキャバクラ嬢、ホスト、ソープランド嬢は全てそれに属する業態であり、いかにこれらの仕事に従事する者達がスティグマを背負っているかが理解される。そして予想に違わず、職業威信における最底辺は風俗嬢であった。

上瀬は、同じ男女にキャバクラ嬢のイメージ調査も併せて実施している。こちらは、 χ^2 自乗検定によって男女間と年代による差が確認されたが、全体としては「若い」が半数を超えて最も多く、次いで「金使いが荒い」「不健康な」「お金がある」が 4 割前後となっていて、「若く、派手にお金を稼いでいる」というプレカリアートの実態から乖離したイメージが、いかに 1 人歩きしているかが良く分かる結果となった。一方、本来プレカリアートとして、よりキャバクラ嬢の実態に近いはずの、「借金を返すために働いている」「シングルマザーが多い」「家族のために働いている」など生活のための就労といったイメージは、1~2 割に留まっており、これも一般的な認識に歪みが伺える結果となった。次章以降で述べる質的研究の中で、キャバクラ嬢の生活困窮者としての実態には、インタビューに参加してくれた女性達が度々触れているのだが、そのような認識は社会にはほとんど存在しないかのようなのである。そして、キャバクラ嬢以上に生活に困窮しているのが風俗嬢や個人で売春をする者達であった。彼女達は、「絶望的貧困」状態に置かれた者が多く、上瀬の研究で上位に来ている「お金がある」とは程遠い存在である。

結論として、上瀬（2011：44）は、『キャバクラ嬢』は他の風俗営業職と共に、他の職業群とは異なる職業群として認知されており、特別視されていることが示された。また、イメージの測定からも職業としてスティグマ化が生じていることが示された。このことから、『キャバクラ嬢』が置かれている苦境には、性の商品化に関わる職業全体に対し社会的地位を低く位置づける社会全体の態度があり、『夜のルール』はそれが極端に表れたものと推察される」と述べている。また、「人々のキャバクラ嬢イメージは、メディアで流される『華やかに働く高給の女性たち』の姿に一致」しており、「健康を害しやすく危険な仕事とみなされている一方、実際には多いはずの、シングルマザーや生活のための就労という姿はあまり顕在化されていなかった」（上瀬 2011：44）とその問題を指摘している。

ここで浮かび上がって来るのは、女性の人格と人としての尊厳を貶める明確な「職業スティグマ」の存在である。そして、その残酷さを恐らく、世の一般の男女は考慮したことが無いのである。結果として、キャバクラユニオンに属する女性達が、抗議声明文を出さざるをえない、被害者の女性としての尊厳を冒瀆するような、理不尽極まりない社会からのバッシングが沸き起こってしまうのだ。

(3) 社会からのバッシングが、司法の現場にまで歪んだ形で反映されてしまったのが、所謂「池袋買春男性刺殺事件」である。多少古い事件ではあるが、現代にも通底するところがあるため、以下にこの事件の概要を示して、日本社会において性風俗産業に従事する女性に対しては、司法の場ですらスティグマが存在することを明らかにしたい。

1987 年 4 月 15 日、池袋で事件は起きた。男性（NTT 社員、28 歳）は部屋にやってきたホテル嬢（21

歳)に7万円を支払い4時間の契約を結んだ。女性が店に契約の成立を告げて受話器を置いた瞬間、男性は彼女を殴りつけ、刃渡り8センチのナイフで彼女の手を刺し、それを顔に近づけて「静かにしないと殺すぞ」と脅した。そして備え付けの浴衣の帯や持参のガムテープで縛り、彼女が身動きできないように縛り上げ、卑猥な台詞を強要する等、拘束したまま1時間20分に渡って女性を凌辱し、更にそれを8ミリカメラで撮影した。

男がナイフ以外にも銃等の凶器を持っていたため、命の危険を感じた彼女はテープが緩み、男が隙を見せた際にナイフを奪うと男を刺した。乱闘の末、男は数ヶ所の刺し傷を負って死亡し、血だらけのまま女性は直ぐにフロントに助けを求めた。その後、フロントの通報により駆け付けた警察官から、女性は現行犯逮捕された。

裁判が始まると、法廷には有力な証拠が提出された。男がセットした8ミリカメラに凌辱の一部始終が映っていたのだ。危害を加えてきたのは男性であり、彼女がナイフを手にとったのは正当防衛である、と弁護人は無罪を主張した。だが、裁判所は、一審、二審とも、過剰防衛と認定した。一審では懲役3年の実刑判決、二審では懲役2年、3年間の執行猶予付きの判決が下された。

検察側は懲役5年を求刑し、「被告人はそもそも売春行為を業としており、被告人にとっての抵抗感というのは……通常の女性が見知らぬ男から同様の行為を受けた場合とは質的に全く異なるものである」、「売春契約をした以上、性的自由及び身体的自由は放棄されており、保護に値しない。客によっては危険のあることも知っていたはず。被告人は命の危険もなかったのに、憤怒のために殺意を持って被害者を刺殺した」と主張した。「抵抗すれば殺す」と言葉で脅され、実際にナイフで腕を切られた挙句に縛りあげられ、1時間以上も恐怖の中で凌辱を受けた時であっても、貞淑な婦女とホテル嬢(※ホテルは、ホテルでトルコ風呂の略。当時まだ風営法が定めるデリヘルは存在せず、女性がホテルに出張して性的サービスを行う場合は、ソープランド(当時はトルコ風呂)同様に性交を伴う売春行為であった。)では感じる恐怖心も違うだろうと恥も外聞も無く検察は主張したのである。

判決文の、「所謂ホテル嬢として見知らぬ男性の待つホテルの一室に単身で赴く以上……あえて被害者の求めに応じてホテルに赴いたという意味では、いわば自ら招いた危機と言えなくもなく……過剰防衛だった」という内容にも、司法の自己責任論と根深いスティグマが見受けられる。ホテル嬢の女性が、所謂「アンダークラス」であったことも、司法の判断に影響を与えたかもしれない。仮に同じことが普通の女子大生に起きていたならば、このような判決文にはならなかっただろう。女性は高校中退後、プレカリアートとして喫茶店等で働いていたが、事件の直前に父親が母親と妹と彼女の3人を実家に残して家出したために生活が困窮し、父に代わって家計を支えるためにホテル嬢になったと言われている。

二審の判決文においては、「被害者からの暴行、脅迫や異常なまでのわいせつ行為を耐えがたく感じたのは無理からぬことで、被告人が本能的にナイフを振って犯行に及んだことは、同情に値する」として若干の配慮が見られるようになり、有罪判決は変わらないが、執行猶予が付いた。だが、それでも「売春婦と一般婦

女子との間では性的自由の度合いが異なる」として、正当防衛は最後まで認められなかったのである。

現在であれば、ここまで露骨に女性の「娼婦性」が司法において問題視されることは無いかもしれない。実際当時は存在しなかった、リベンジポルノ被害防止法などの法整備も整っているため、最初の同意なきビデオ撮影の段階で男性側に相当の落ち度が認められよう。だが、大企業の正社員サラリーマンを売春婦が刺殺したという非対称な関係性が明らかに当時のこの判決には影響を与えており、法の番人であり、かつ人権の守り手でもある司法当局においてすら、性風俗産業に従事しただけで女性の人権が軽くなるという事実が、この事件を通して明らかになったのである。悪しき判例を日本に残したという意味で、心から慚愧の念に堪えない。だが、これがまさに法すら歪める「職業スティグマ」の影響力なのである。

「池袋買春男性刺殺事件」では、ホテル嬢が男性を殺害した際、正当防衛が成立しなかったことで異常ともいえる判決が下った訳だが、逆の立場の事件が、2010年に発生した「池袋出会いカフェ女子大生殺人事件」である。この事件は、裁判員裁判となり、量刑には一般市民の心情が盛り込まれた。

2010年9月26日深夜、女子大生の女性（事件当時22歳）が、池袋の出会いカフェ「K」で知り合った男性（29歳・住所不定無職）に、ラブホテルで首を絞められ殺された。男性は、翌日中に知人に付き添われ渋谷警察署に出頭し、容疑を認めた。女性を殺害した動機については、「シャワーを浴びている間に財布の中にあった1万円がなくなり、女性が盗んだと思い、口論になり、その際女性から、『レイプされたと警察に言う』と脅されたため、腹を立て、首を絞め殺した」と供述した。裁判では、男性は容疑を認めているため、身上や犯行の非計画性、罪の隠匿など悪質性、心証などの点が争われることになった。

結果は、検察の求刑16年に対して、14年の判決が下された。判決では、「被害者の言動や態度にも問題があった側面はみられ、被告人のために汲むべき事柄。」と殺害された女性の側がまたも司法によって貶められる結果となった。

先の事件と異なるのは、女性ではなく、男性が所謂住所不定無職の「アンダークラス」である。「女性の貧困」問題は、昭和から平成に入っても変わらずに存在していることが伺えるが、男性は大企業の正社員から「アンダークラス」に変わった。時代性を感じる対照的な事件である。

裁判員制度の特徴として、一般に量刑相場の上昇が指摘されている。検察の求刑よりも、裁判員制度では度々それ以上の判決が下ってしまい、制度導入前の量刑相場と比較して明らかに求刑は重くなっている。一般市民の処罰感情の高まりを量刑に反映させるのはいかながなものか、という制度に対する是非は置き、ここで注目しなければならないのは、そのような上昇傾向の量刑相場において、逆にこの事件では求刑以下の判決が下された点である。通常の裁判においても、加害者及び被害者の学歴や職業等は、量刑にかなり影響することが知られている。この事件においては、男性が高校中退で住所不定無職の「アンダークラス」であり、女性が都内に家族で住む普通の女子大生である。両者の身上を吟味すれば、量刑は、男性に相当不利になっても何らおかしくないケースであったが、実際は逆になった。出会いカフェで売春行為をしているというだけで、女性の側が不利益を被ってしまうという司法の現実、今なお健在であり、売春に関するスティグマ

の根深さを感じさせる。

奇しくも、同じ池袋で起きた二つの殺人事件を検討したが、異常者に殺されかけても、司法からは、売春婦は一般的な貞操概念とは無縁と突き放されて正当防衛すら成り立たず、実際に殺されれば、どれほど社会的にはまじめに品行方正に生きていても、隠れて売春をしているだけで、住所不定無職の「アンダークラス」の男性に殺されても一般人に比して量刑が軽くなる。法の下での平等を謳うこの国で、「売春婦」に人権は無いのかと問いたくなる事実であるが、このようなスティグマがある限り、性風俗で働く女性達が自分自身をスティグマタイズしてしまうのは当然であるといえよう。

第2項 「実存的不安」から「実存的空虚」、そして「実存的貧困」へ

(1) 我々が生きるポストモダン社会は、Giddens が指摘するように、日常に「実存的不安」が埋め込まれており、幼少期に「重要な他者」を持たなかった者は特に、その不安に押し潰されそうになる。何故ならば、「重要な他者」が本来与えてくれるはずの無償の愛が、「実存的不安」を払拭する「存在論的安心」の源泉であるからだ。次章以降に詳述するが、本研究のフィールドワークにおいて、「実存的貧困」であると筆者が感じた性風俗産業に従事する女性達のほとんどが、児童期における愛着形成に問題を抱えていた。児童虐待、親の離婚、家庭内不和等は、彼女達から非常に多く聞かれた問題である。そのような存在論的な安心が無い状態でポストモダン社会を生きようとする、個人は多大な不安を抱えてしまう。

ここで改めて、図 2-2 の貧困概念の外側に書かれた部分について説明したい。記述の通り、Giddens が提唱した「実存的不安」は、必ずしも病的ではないが、この存在論的な不安が昂じて、一部病的な状態に至ったものが、Frankl が提唱した「実存的空虚 (existential vacuum)」である。Maslow の「至高経験」に対比させて、Frankl はこの状態を「深淵経験」とも呼んでいる。「実存的空虚」の原因を、Frankl は、次の事実に着させる。

第一に人間には、動物と異なり、何をしなければならないかを知らせる衝動や本能がありません。第二に人間には、過去の時代と異なり、何をなすべきかを伝えるしきたり、伝統そして価値が存在しません。そしてまた人間はしばしば、自分が何をやりたいのかすら知らないことさえあるのです。自分がやりたいことではなく、他の人々がすることをやりたがったり、他の人々がさせたがっていることをしたりするのです。つまり、体制順応主義や全体主義の餌食になっており、それぞれの体制順応主義は西欧に典型的に見られ、全体主義は東欧に典型的に見られるのである。(Frankl=2015 : 132-133)

Frankl が指摘した第二の理由は、Giddens が示したハイ・モダニティの特性であり、両者は概念的に近

いと思われるが、違いがあるとすると、「実存的不安」がほぼ全ての人が漠然と抱いている健全なレベルの不安だとすると、「実存的空虚」は、単なる不安というレベルを超えた苦悩であり、それは時に病的な水準に達する。当然、「実存的不安」のように社会のほぼ全ての成員が抱く類のものではない。ただ、Frankl は、時に病理学的な水準に達する「実存的空虚」も、全てが直ちに神経症であると見做すべきではないと指摘する。Frankl は、精神的苦悩である「実存的空虚」と心的疾患である神経症を、基本的には別次元で捉えているのだ。ただし、「実存的空虚」は、神経症の原因になり得ること自体は否定しない。従って、「実存的空虚」が精神因性の神経症になった場合は、医師が心理療法であるロゴセラピーを行うが、それ以外の心的疾患ではない「実存的空虚」、すなわち深い精神的苦悩に関しては、カウンセラー、ソーシャルワーカー、牧師、そしてラビなどが各々の立場からロゴセラピーを行いながら、その支援をすることを認めている。従って、1954年に設立されたアルゼンチン実存的ロゴセラピー協会には、精神科医の部門と医師以外の会員部門がある。

本研究で提唱する「実存的貧困」概念は、Frankl の「実存的空虚」を抱えた者が、更に社会的に排除された状況を想定している。そして、その状態は、病理的水準であれ、精神的苦悩の水準であれ、リシャール・デュルンの様に市議会を襲撃し、その後に自殺するほどの耐え難い苦悩に達しているはずである。新自由主義における消費文化が極限に達したポストモダン社会（Stiegler は、ハイパーインダストリアル社会とこれを一言で規定した）における「実存的空虚」を、Stiegler は、「象徴の貧困」の概念を用いて指摘したのであるが、このような精神的苦悩が「豊かな社会」に横溢し始めた原因を、Frankl は、社会からの要請の少なさに求めるのである。

教育は、どの程度まで実存的空虚を強化し、緊張の欠如を引き起こしているのでしょうか。依然としてホメオスタシス理論に基づく教育は、「若き人に課せられるべきものは、最小限にすべきだ」という原理によって導かれます。若い人は、過剰な要求の支配を受けてはならないことは当然です。しかしながら、今日少なくとも、豊かな社会の時代において、ほとんどの人々は非常に多くというよりあまりにも要求が少ないために苦しんでいるという事実をも考慮しなくてはなりません。豊かな社会とは、人々が緊張から解放されたことで、要求されることが不十分となった社会ということができるのです。（Frankl=2016：78-79）

Frankl の指摘は、Fromm が『自由からの逃走』で描いた社会病理と重なるものである。「自由」＝「要請の少なさ」「緊張からの解放」と考えると、寧ろ、豊かな社会においては、ある程度不自由な方が人はそれに没頭できるが故に不安の程度が逡減するのであるが、逆に緊張から解放されて自由を与えられてしまうと、必然的に発生する自己決定への責任と孤独に人間は耐えられなくなる。それほど、人間にとって真摯に自分自身と向き合う作業は辛いのである。その結果が、自己決定を避け、寧ろ喜んでそれを他者に捧げてしまうという社会病理であり、それがナチズムを生んだのだと Fromm は指摘する。ほぼ同様のことを、Frankl も

「実存的空虚」状態に置かれた人々の体制順応主義や全体主義への馴化として指摘していることは、既に示した通りである。

従って、「実存的空虚」の状態に陥った若者達は、健全な方法で、或いは不健全な方法で緊張を求める。健全な方法の事例として、Frankl はスポーツを挙げる。日々のトレーニングから食事内容に至るまで自分自身を厳しく律し、成果を上げるために過剰なほどに自らに我慢を強いなければならない何らかのスポーツに没頭している間、結果的に個人は「実存的空虚」から解放されている。逆に言えば、その状態が不必要になれば、個人は「実存的空虚」に陥り易くなる。そう考えると、過去に超一流と呼ばれたスポーツ選手の幾人もが、引退した後に薬物やギャンブルで身を持ち崩している事実が首肯できるのである。

一方、不健全な方法として、Frankl は非行少年・少女や不良集団の行動様式を挙げる。チキンレースや危険なサーフィンなど、積極的に自らの生命を危険にさらすことを彼らが望むからである。LSD などの薬物に依存する行為も全て、「実存的空虚」から逃れるために刺激と緊張を求めているからだ、と Frankl は指摘するが、このような逸脱行動は、本研究が提唱する「自傷的存在証明」のうち、「自傷的」な部分に合致する。

「アンダークラス」の多くは、Frankl が指摘する健全な方法においては、刺激や緊張を得ることができないのである。彼らの多くは、「内的作業モデル」に欠陥を抱えているため、世界に対する信頼を持っていないだけでなく、自分自身の可能性に対しても信頼を持ちえないからである。そのような彼らが、結果が出るまでに長い我慢の時間を要するスポーツのような健全な方法で自律を実践するのは、極めて難しい。必然的に、彼らは直ぐに刺激や緊張が手に入る不健全な方法に飛び付くのであるが、往々にしてそれらは自身の健康や生命を害するために、「自傷的」に見えてしまうのである。

「実存的貧困」と「実存的空虚」との相違点は、社会的排除の有無であるが、その状態に陥っている人間が起こす行動の差異からも演繹可能である。「実存的空虚」に陥っている若者達が、健全か不健全かは別として、何らかの方法で刺激と緊張を求める理由は理解できたが、それでは「実存的貧困」、或いは「絶望的貧困」状態の者達が行う「自傷的存在証明」の半分しか説明したことにならない。故に、「存在証明」が、何故彼らにとって重要であるかが問われなければならない訳だが、その理由は、やはり彼らが社会的に排除されていることに求められるだろう。つまり、彼らは自分達を認めない社会に対して、自分を「承認」せよ、という強い異議申し立てを行っているのである。

「実存的貧困」の基底部には、Honneth の承認論における愛の領域、法の領域、そして連帯の領域における「非承認」が存在する。それは、必ずしも Frankl の「実存的空虚」には存在しないものである。不良集団の若者達であれば、或いはそのような「非承認」はある程度あるかもしれない。とりわけ、家族内の愛による「承認」と法による「承認」の欠如は顕著であろう。愛された経験が無く、自分を愛することができないから、彼らはチキンレースなどという一般人から見て価値の無い刹那的な行為に命を懸ける。だが、彼らはそのような行為を通して、連帯による「承認」だけは得ているのである。ギャングエイジの子供達が、些細な悪事を皆で共有することで仲間同士の連帯感を高めるように、不良集団は少なくとも「集団」であって、

そこにはメンバーシップと友愛に基づく堅固な仲間意識が存在している。世界中どの地域、どの世代の反社会的組織であっても、たった一つ共通項があるとすれば、それは連帯による「承認」が、極めて絶対的な絆、或いは掟として存在することである。敵対する組織に対してはどこまでも非情になれる犯罪組織であっても、身内と認めた者達に対しては、極めて堅固な仲間意識を持ち、お互いに支え合い、忠誠を誓い合う。それは日本のヤクザや半グレであっても、アメリカのギャングであっても、イタリアのマフィアであっても、中国の黒社会であっても変わらない唯一の共通項である。その意味で、そのような絆からも疎外されている「実存的貧困」状態の個人に比べれば、何らかの集団に積極的に帰属している彼らはまだ幸せなのである。

「実存的貧困」は、例外的なものを除けば、概ね三重の「非承認」が全て揃っている状態である。とりわけ、Frankl の「実存的空虚」との差異を明確にするために、構成要件として愛の領域における「非承認」(＝「内的作業モデル」の欠損)と、法の領域における「非承認」(≡社会的排除)は絶対に必要である。加えて、上述した仲間を持たない、或いは持っていたとしても、その集団内で孤立している、という意味での連帯による「承認」を欠いていること、更に、「絶望的貧困」の場合は、消費社会における人間の証明、経済力という意味での連帯による「承認」を欠いていることも重要である。これ程までに「承認」を欠いた彼らは、人生のあらゆるものから根無し草の様に遊離している。故に、より端的に言えば、彼らは「孤絶」なのである。

「孤絶」であることに、社会的存在である人間は耐えられない。Fromm は、『愛するということ』の第二章 1 節「愛、それは人間の実存に対する答え」において、以下の様に述べている。

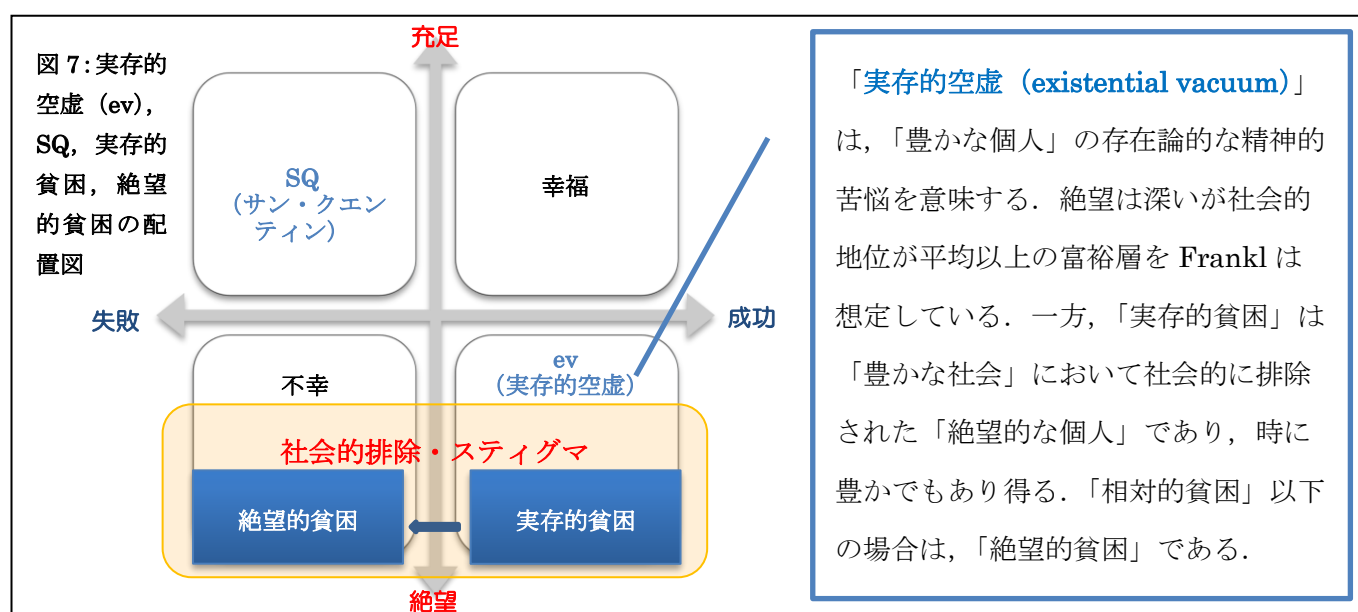
人間のもっとも強い欲求とは、孤立を克服し、孤独の牢獄から抜け出したいという欲求である。この目的の達成に全面的に失敗したら、発狂するほかない。なぜなら、完全な孤立という恐怖感を克服するには、孤立感が消えてしまうくらい徹底的に外界から引きこもるしかない。そうすれば、外界も消えてしまうからだ。(Fromm=1991 : 25)

Fromm の言う通り、人間にとって孤独程耐え難いものは無い。故に、人はそれを回避するために誰かを愛するのであるが、全面的に失敗すれば発狂するほかないのである。その場合、Fromm は、世界から徹底的にひきこもって外界を消去する以外に、自らの精神を守る術はないと指摘するのであるが、果たしてそのようなことは可能であろうか。

一見極端な孤独状態を自ら招いているようなひきこもりでさえ、実は必死に他者とコミュニケーションを取ろうともがいている。それは往々にして指摘されるインターネットとの親和性であったり、家庭内暴力という歪んだ形であるかもしれない。だが、いずれにせよ、本当に部屋にひきこもって、一日中何もしないでいるひきこもりというものは、何らかの精神疾患を伴わない限りは、存在しないはずである。インターネット・ショッピングが昂じて買い物依存症になり、次々と親のカードで高価な物を買いくるので、困り果てた親が致し方なくカードを止めたり、インターネット回線を解約したりすると、ひきこもりの当事者は、し

ばしば壮絶な抵抗を家族に対して行うが、それは文字通り彼らにとっての命綱、外部との唯一の繋がりを遮断されたからである。Fromm が想定している徹底的なひきこもりというのがどの程度のレベルを指すものなのか判然としないが、最終章で触れる「生存放棄症候群」の状態を除けば、凡そ人間にそのような徹底した外界の遮断などは不可能事であると筆者は考える。従って、「孤絶」は必ず「実存的貧困」か「絶望的貧困」状態に人間を導く。これらの貧困の本質は、自己の喪失と関係性の断絶であるからだ。

一方で「実存的空虚」は、必ずしもそうではない。ここでは、Frankl が用いた二次元の図を用いて、「実存的貧困」概念との差異を確認したい。



出典：Frankl (=2015 : 121) を一部改変

図 7 は、『絶望から希望を導くために』に記載された Frankl の概念図を改変し、「実存的貧困」と「絶望的貧困」等を追記したものである。なお、「SQ (サン・クエンティン)」とは、カリフォルニア州のサン・クエンティン刑務所の受刑者達であり、「ev (実存的空虚)」は、ロルフ・H・フォン・エッカーツヴェルクがハーバード大学を卒業した 100 人の卒業生の 20 年後の生活適応状態の追跡調査の結果を図示したものである。エッカーツヴェルクによれば、この 100 人中相当の割合の者が、経済的には何ら困っていないものの生活上の危機を訴えているという。そして、彼らの職業には、弁護士、博士、外科医、精神分析家などで、非常に成功している者も含まれていた。つまり、人は「成功」の最中であっても、人生に「絶望」することは十分にあり得ることなのである。

同様に、図 7 は、人は例え人生において何らかの「失敗」をしても、「充足」はできるということも示している。それを図示したのが、SQ の位置なのである。実際、サン・クエンティン刑務所は、Frankl と刑務所の教育監督官のインタビューを刑務所内の新聞に載せ、更に死刑囚の檻房に向けて、Frankl から言葉懸けを行い、それを死刑囚の檻房のみならず全ての場所に放送したのである。受刑者が書いた記事は、イリノイ大学が主催した全国刑務所新聞報道コンテストで一等賞に輝き、更にその記事は、150 以上のアメリカの

刑務所が参加する代表団体で最優秀に選ばれたのである。それに対してお祝いの手紙を送った Frankl 宛に、新聞の編集長を務める受刑者から、以下の内容の手紙が届いた。

私たちの対話の筆記原稿は刑務所内で広く回覧されました。(中略)「理論としてはけっこうだが、人生はそんなふうにはいかない」といった偏狭な批判をする人もいました。(中略)私は自分たちの現在の状況、目下の苦境から得たことで社説を書き、人生は本当にこのように進むのだと示すつもりです。そして、絶望や無意味さの深淵にあって人は自力で意味深く重要な人生経験を形づくり得ることから、批判する人たちに私たちの刑務所がおかれた状況を的確に示したいと考えています。そういった人たちはまた、このような状況にある人が絶望を勝利に変えるような経験ができるとは、どうしても信じられないのでしょうか。私はそれが可能だというだけでなく、必要なのだということをその人たちに示すつもりです。(Frankl=2015: 124)

Frankl が過酷なアウシュヴィッツの強制収容所で希望を失わず、そこで自らのロゴセラピーの土台を築いた様に、サン・クエンティン刑務所の囚人達もまた、自分達が置かれた状況の中で精一杯「充足」し、自己実現まで辿り着いていることを、この手紙が如実に示しているのではないだろうか。そしてそれは、このサン・クエンティン刑務所だけの現実ではない。

『ライフアーズ 罪に向きあう』は、米国アリゾナ州を拠点とする民間の更生団体「アミティ」が刑務所や社会復帰施設で行う更生プログラムの実践を描いたものである。「ライフアーズ」とは、終身刑もしくは無期刑受刑者のことであり、彼ら重い罪を犯した者達が、「アミティ」で自分の人生をさらけ出し、徹底的に罪に向き合っていく。そして、それを見た他の受刑者も、麻痺した心を開き、暴力への依存から自由になる道とともに模索していく。再犯の連鎖から回復の連鎖への転換がここにあるのだが、彼ら「ライフアーズ」もまた、SQ と同じように絶望的な状況下において「充足」を体現しているのである。

(2) 上記で、「実存的不安」、「実存的空虚」と「実存的貧困」の大枠について記述したが、図 7 から分かる通り、「実存的貧困」や「絶望的貧困」は、「実存的空虚」よりも遥かに苦しい状態である。この図に追記した社会的排除とスティグマが彼らには襲い掛かっており、単に「生きる意味」に苦悩する「実存的空虚」と異なり、「絶望的貧困」の場合は、更に目の前の生活の糧にも悩まなければならないのである。また、「相対的貧困」には該当しないような暮らし向きであっても、或いは Frankl が図 7 で示したような富裕層であっても、「実存的貧困」の場合もやはり「実存的空虚」よりも遥かに苦悩が深い。社会的排除に遭遇するということは、存在論的な苦悩の他に、現実社会の様々な場所で、自分達が社会から「承認」されていない証を繰り返し突き付けられるからだ。

例えば、あるデリヘル嬢は、ホテルに辿り着いて送迎車を降りた瞬間、顔も知らない男性から、わざと周

囲にも聞こえるような声で、「あ、風俗嬢。」と言われた屈辱を語った。彼女は見た目も決して派手ではなく、その容貌からは、一目で風俗嬢だと分かるような手掛かりは何もないのである。「何故そんな風に、一瞬でバレたのでしょうか？」という筆者の疑問に対して、彼女は、「ホテルの前で車から 1 人だけ降りた若い女性が、大きな荷物を持っているだけで、分かる人には分かるんです。」と答えて俯いた。デリヘル嬢は、ホテルの備え付けの備品を使うことが許されていないので、自分専用のバスタオルを数枚必ず持っている。そして、それ以外にも業務用の携帯や充電器、客のための領収書、お金を預かる袋、サービスの前にお互いの口を漱ぐためのうがい薬と専用のコップ、自分の歯ブラシセット、プレイに使用するローションを一日分数本、コスプレの希望があればそのコスチューム等、通常のホテル利用客とは明らかに異なる洒落っ気の無い仕事用の大きなカバンを一つ、必ず担がなければならない。確かに、言われてみれば直ぐに分かることなのである。私物のカバンと比べると、それは余りにも「業務用」な感じが滲み出ている。だが問題は、それを本人の前で、周囲に人がいるにもかかわらず、敢えて聞こえるように言う男性がいる、ということなのである。それも、決して 1 人や 2 人という話ではないのだ。別の女性は、エレベーターという逃げ場がない場所で、明らかに酒に酔った男性から、「デリヘル嬢でしょ？デリヘル嬢だよな？君、幾ら？今日はこれから何分コースなの？」と執拗に言われ続けたという。周囲の友人男性が、「おい、止めろって。」と何度か制止してもその男性は止めなかったもので、「はい。デリヘル嬢ですけど、ほっといてくれませんか」と言い捨てて、急いでエレベーターから出たというが、彼女にとってもこのような経験は日常茶飯事だという。

上述のような屈辱的な体験は、あからさまな侮蔑であるが、間接的なものも含めれば、偏見や差別を実感する経験は、彼女達の日常生活の至る所で発生するだろう。美容室のお世辞で、「綺麗ですね。普段は何をされてるんですか？」と聞かれた時、ある女性は褒められているにもかかわらず、一瞬暗い気持ちになったという。偶々平日の日中、アパートの隣人に遭遇した時、「今日はお仕事お休みですか？」という他愛も無い挨拶から何気なく世間話を始められた時は、逃げたいとさえ感じるのだ。そして、アパート等の賃貸物件を借りる時や公的機関等で様々な手続き・契約を行う際、毎回聞かれる「お仕事は何ですか？」という問いに、彼女は何時にも苦しめられてきたのである。そして、これこそがまさに、社会的排除を生きるということなのである。彼女がデリヘル嬢であることを明かしてしまえば、称賛の目で彼女を眺めていた美容室のスタッフは、一瞬で彼女を蔑むだろう。アパートの隣人は、挨拶すらなくなるだろう。そして、不動産屋に至っては、契約自体してくれないはずだ。定職に就いていない女性が幾ら敷金・礼金が払える十分な貯金があると言い張っても、賃貸物件を借りることはできない。いつ収入が止まるか分からない女性を入居させることは、家主として大きなリスクを負うからである。その結果、多くの女性が、代理人や保証会社に少くない額のお金を払って契約等を代行してもらうのであるが、それは、彼女達が法の領域において「承認」されないだけでなく、彼らに個人情報等の弱みを握られるということでもあるのだ。

このような日々の一つ一つの出来事が、性風俗産業に従事する女性達の社会的排除を完成させていく。Goffman の言うところの「パッシング」を日々繰り返していくことは、社会から疎外されていることを実感

し、そしてそのような自分を自ら追い詰めていく過程なのである。これから逃れるためには、性風俗産業を離れて昼の正業に就くしかない。何故ならば、既述の通り、我々にとっては仕事こそがまさに自分自身の「存在証明」に他ならないからだ。

山田（2007：120）は、「近代社会においては、仕事は二つの意味をもっている。一つは、経済的に生活するために不可欠のものとしての仕事である。働かなければ収入が得られず、まともな生活ができなくなるという意味での仕事であり、これは、人類史上共通の理解であろう。それにくわえて、近代社会になると、仕事にもう一つの意味がクローズアップされてくる。それは、仕事が『アイデンティティ（存在証明）』の一つになっている」と指摘している。ポストモダン社会において、「実存的不安」を埋めるには、何らかの方法で自らのアイデンティティを確立させなくてはならないのだが、現状、最も間違いの無い方法が正業を持って働くことなのである。

ただ、この山田の指摘は、性風俗産業で働くことには該当しないであろう。水嶋の様にセックスワーカーとして個人事業主の自覚を持ち、確定申告まで自分でしていれば話は別であるが、そうでない女性達にしてみれば、風俗で働いていることを公言できる者などいない。だからこそ、日々胸を痛めながら「パッシング」を繰り返しているのである。仕事が「アイデンティティ（存在証明）」を形成する最も重要な要因になっている社会において、自分の仕事を公の場で語れないということは、事実上、その人間のアイデンティティは無いということであり、すなわちその人間は社会に存在していないということになる。そしてそれを、Baumanは、以下のように指摘している。

「アイデンティティ」を一つ一つの職務や生涯の労働の目標として設定することは、前近代の身分への帰属に比べると、一つの解放の行為、つまり、伝統的な形の惰性や、不変の権威、あらかじめ定められた目標や疑問の余地のない真理から解放される行為でした。しかし、アラン・ペールフィットがその歴史研究の中で見出したように、身分制度の解体の後に起こった、そうした前例のないアイデンティフィケーションの自由は、新しく前例のない自分と他者への信頼、さらには「社会」という名前を与えられた、他人同士の集合の利点という形、つまり、その集合的な智慧、その指示の信頼性、その制度の永続性という形で訪れました。リスクに立ち向かい、リスクを引き受け、選択を行う際に必要な勇気を持つためには、自分、他者、社会に対する三重の信頼が必要です。社会的に実行される選択への信頼が託され、未来が確実に思えると信じる必要があります。人は、社会を、カードを胸の近くに抱え込んで人を驚かせようとしているカードゲームの対戦相手ではなく、審判として必要とするのです・・・（Bauman＝2007：86）

「リキッド・モダニティ」の中では、アイデンティティは、自分自身と他者が決めるだけでは不十分であり、「社会」という第三者の審級が無ければ確立しないと Bauman は指摘するのである。これは、性風俗産

業のようなスティグマタイズされた仕事に従事する限り、アイデンティティはほとんどの場合は手に入らないということである。社会的な「承認」（すなわち、連帯の領域と法の領域における「承認」）から疎外された性風俗の世界で生きる限り、彼女達はアイデンティティからも永遠に疎外されているのだ。

「逆説的なことですが、自己解放のためには、強力で多くの事柄を要求するコミュニティの存在が必要です。自己創造は一つの義務ですが、その能力があることを自分で主張しても、妄想や作り事だと非難される可能性があります。また、自己創造に向けて努力する個々人の立場や自信や能力の違いは、その最終的な仕上がり具合や目標に影響を及ぼすかもしれませんが、自己創造の作業を達成できるという裏付けは、一つの権威、つまり承認を拒む力を持っているがゆえに、その承認に価値があるコミュニティだけが提供できるのです。」という Bauman（＝2007：12）の指摘は、どんなにキャバクラ嬢や風俗嬢がその店でNo1になろうとも結局は無意味であることを意味する。何故ならば、既に十分に検証した通り、「夜」や「風」のコミュニティは、「承認に価値があるコミュニティ」では無いからである。

Frankl（＝2015：68）は、Maslow の言葉を引用し、「自己実現の動きは『重要な仕事にかかわることによって』最も見事に実現されうる」と指摘するが、これはつまり、性風俗産業のように社会が重要な仕事と見做さない類のものである場合は、Maslow が言うような形式での「自己実現」は極めて難しいことを意味する。事実、実証研究においても、それは明確に証明された。性風俗産業において「自己実現」することは、決して不可能ではないが、やはり限りなく難しい。個人としてのアイデンティティ形成に大きな意味を持つ仕事において、確かさを実感できないだけでなく、社会からも排除され、スティグマを付与されれば、人は生きる意味を失う。そのような状況が、Frankl が「実存的空虚」と呼んだ症状を「実存的貧困」にまで悪化させる。社会的存在である人間は、一切の「承認」を欠いたままで生きられるほど強くはない。従って、彼らの自傷的な逸脱行為には、自分自身と周囲の両方を納得させるために「存在証明」の要素が付加されなければならないのである。Honneth が指摘する『「承認」をめぐる闘争』が、それも、極めて切実なレベルの闘争がそこで始まるのである。

チキンレースにおいて、命を懸けることが「男らしさの存在証明」であるように、彼らは何らかの行為を通して、「人間の存在証明」を行わなければならない。分り易いのは消費行動である。消費社会において、消費することは、それだけで立派な社会参加なのだ。無論、そのお金がどこから得たのかを堂々と言えないならば、その消費は中途半端な消費となり、結局真の意味での存在証明たりえない。故に、彼らは身の丈に合わない消費を繰り返さざるをえないのである。また、別の分かりやすい存在証明が、性的逸脱と自傷行為である。どちらも、自分の肉体を用いて、感覚的に生の実感を得ることができる。温かい血が流れれば、間違いなく自分が生きた人間であることが、その温もりと痛みからはっきりと理解できる。また、性行為からも、同じように自分が生きている実感を、自分と相手の両方から肌を重ね合う悦楽として得ることができる。自傷行為と違うのは、性行為の場合は、必ず相手がいる以上、他者からの強い「承認」が得られる。それは、自尊感情が低い女性にとっては、仮に一時的な偽りのパートナーや刹那の出会いであっても、一握の救いに

なり得るのである。従って、キャバクラ嬢や風俗嬢が、ホストに依存し、一晩で多額の金銭を浪費してしまうのはある意味当然なのである。

(3) 本項のまとめとして、ここで少し、「実存的空虚」及び「実存的貧困」状態だったと思われる女性（匿名化コード A12）のナラティブを引用したい。当時のことを振り返りながら彼女が語った言葉は、これまでの議論を非常に分かりやすくしてくれる。

この女性は、地方都市では平均以上の家庭に生まれた平均以上の学歴を持った女性だが、自尊心が低く、大学卒業後も定職に就くことができずに、結果的に好きでもない水商売を繰り返していた。

原田 120：死のうと思ったこともある？

A12-120：何回もありましたね（笑）その、中一のリスカしてた時もそうですけど、なんかリスカなんかじゃ全然死ねないんですけど、そんな時はもうやっぱり、こう、ドライブとか、親の車で後ろに乗ってて、ドライブとかしてて、「ああ、あの山の中で死ねたら良いな」とか、漠然と考えてることとか、ずーっとあって。で、なんか、高校は、高校自体は楽しかったんですけど、なんか、なんだろう。で、大学入ってからも、実際階段とか歩いてて、「今手を放したら落ちてって死ねるかなあ」とか、なんかこう、「今、こうやったら死ねるかな」とっていうのを凄くずっと考えてるみたいな時期とかもやっぱりあったんで。今全然その、突発的に「うわ、やっちまった」みたいなことがあって、「うわ、死にてー」とか冗談で言うことはあっても、本気でもう、「もう生きていたく無い」とってことは無くなったんで。

原田 121：何でそんなに虚しかったんだろう？

A12-121：あー、何ですかね、やっぱり、うーん、人とか、距離を取るっていうか、人と接すること自体が、凄く下手だったのかなあって思いますね、うん。最近、ホント最近なんですけど、やっと人に意外と正直な気持ちをぶつけても、意外と大丈夫だってことを最近やっと気付いたというか、「あ、こんな話しても大丈夫なんだ」みたいな出来事が結構あって。大学の友達と久々に会ってとか、その、彼女に対してもそうなんですけど、その彼女によって段々そうなった感じなんですけど、彼女に対してもだし、ライブハウスで会う友達とかにもだし、なんかこう、「あ、ここでこう言わなきゃいけないのかな」とか考えるより、思ったことバーって言っちゃっても、全然大丈夫だったりして。そうすると、人と話すこと自体楽になるんですよね。だから、それはたぶん昔っていうのは、そういうの考え過ぎてたりとか、なんかそれで人と話せないから、人と距離を置いて、で、なんか、なんだろう、人と距離を置くから、なんて言うんですかね、**こう,,, 孤独なんですよね。ずっと。だから、「あたしいなくなっても、大丈夫じゃん、この世界は」「あたし、いなくなるところで、この世界は動き続けるんだから、なんか、関係無いよね。あたし死んでも」**みたいな

思いの方が強くて、やっぱり。

原田 122：その孤独は、夜の仕事で埋まった？

A12-122：あ、それは埋まりませんでした。

原田 123：埋まらないか。

A12-123：うん。やっぱりこう、性的な目でとか、それも一種の求められてるってことだと思うんですけど、だけど、そのことについては、求められて嬉しいよりも、生理的に気持ち悪い、の方が勝って。嬉しい,, んー,, 満たされる感じは無かったです。もう、プラマイゼロみたいな感じがすよね。ふふふふ（笑）

A12 - 121 の「孤独なんですよ」という言葉に、彼女が抱える「現代的不幸」、すなわち「実存的貧困」がほぼ集約されていると言っていいだろう。何不自由ない暮らし、何不自由ない人生であるはずなのに、虚しさだけが埋まらない。そして、漠然と A12 - 120 のように「死」を考える。これは、物質的なものの欠如である「近代的不幸」しか知らない人間から見れば、ただの甘えにしか感じられないかもしれない。第三者が、彼女が死にたい理由を理解するのは非常に難しい。しかし、A12 - 121 の「あたしいなくなっても、大丈夫じゃん、この世界は」「あたし、いなくなったところで、この世界は動き続けるんだから、なんか、関係無いよね。あたし死んでも」というナラティブが指し示す意味は、ポストモダン社会においては非常に重いと思われる。彼女は、「自分が世界から求められていない」ことに、この世界において、自分が代替可能な存在であることに、真剣に悩んでいるのである。

だが、Frankl からすれば、彼女の苦悩は主客が転倒している。人生に意味を問うのは、彼女ではないのである。Frankl (=2011 : 131) は、「人生それ自身が人間に問いを立てているのである。人間が問うのではなく、むしろ人間は人生から問われているものであり、人生に答えねばならず、人生に責任を持たねばならないものなのである」と指摘しているが、人間が与える答は、「具体的な人生の問い」に対する具体的な答でしかあり得ない。彼女は、それを履き違え、漠然とした人生への問いを、漠然と待ち続けていたが故に、「実存的空虚」が彼女を襲い、不健全な刺激を求める形で社会から逸脱して水商売に関わり、社会的排除の対象となつてからは、「実存的貧困」状態に苦しむことになったのである。

しかし、Frankl の考え方は、一般人にとってみれば、簡単に辿り着ける境地ではない。サン・クエンティン刑務所において、Frankl 自らが教導しなければ、囚人達の多くは充足に辿り着けなかったであろう。自らの人生に意味を求める者は、人生の意味は、ある日偶然見つかるような類のものとして淡い期待を抱いている。それは、「自分探し」などという言葉に典型的に表されているように、昨今の日本社会においては、アイデンティティは自分で人生からの問いに真摯に向き合い、それに答えながら構築するというよりは、そのような苦悩を経ずしてお手軽に「自分探し」の先に発見されるものだと考えられがちである。だが、残念ながら、このような若者の甘えは、往々にして裏切られる。A12 が、そうであるように、彼女は美大に行けば、

自分のやりたい何かが見つかるかと期待して入学した。しかし、彼女がそこで味わったのは、才能溢れる同期生と自分との圧倒的な能力差であった。彼女は、大きな挫折を味わってメンタルヘルスに不調をきたし、卒業後も満足に就労することができず、結局生きるために水商売の道を選ばざるを得なかったのである。生きるために致し方ない進路選択故に、そこに誇りを感じる余地などなく、結果的に夜の世界では自己実現など全くできなかった。

だが、A12の人生は、更なる「自傷的存在証明」が発露する前に、恋人による「承認」の機会を得たことで救われた。逆に、一切の「承認」を人生で得ることができずに、そして人生からの問いかけを無視し、自暴自棄に生きた先に、取り返しがつかない「自傷的存在証明」である「秋葉原無差別殺傷事件」を引き起こした、加藤智大死刑囚のケースをここで検討したい（皮肉にも彼は獄中で、看守等の「承認」を与えてくれる多くの人達に接した結果、事件の全容を自らの言葉で説明し、有識者の的外れの誤解を解き、二度と同じような事件を起こさないための提言として書籍を出版することに「人生の意味」を明確に見出した。).

「秋葉原無差別殺傷事件」の後、社会活動家である雨宮処凛は、主としてこの事件は、新自由主義における若者の非正規雇用と経済格差が生み出した社会問題に起因する悲劇であると論じた。雨宮のこの主張は表層的であり、加藤本人が公判においても『殺人予防』等の一連の著作においても明確に否定している。加藤は、非正規雇用に陥った自分自身のことを、悪い意味で受け入れている。自己責任論を完全に内面化しており、彼は新自由主義の日本社会に生きていながら努力しない自分が悪いと認識して、「永山則夫連続射殺事件」の犯人である永山則夫の主張の様に社会が悪いという責任転嫁は決して行わないのだ。加藤の一連の言説には、新自由主義的統治が持つ主体の服従化が明確に見て取れる。そして、加藤は、彼の内面や真の動機を理解せずに一方的に彼が引き起こした無差別殺傷事件を格差社会に結びつける、雨宮、赤木、桐生正幸ら有識者の安直な論調を全て「的外れ」と揶揄するのである。

雨宮らが「経済的貧困」から加藤が置かれた困窮状態を理解しようとしたのに対して、中島岳志は加藤が置かれていた存在論的な困窮状況を見て取ろうとする。雨宮との対談で、中島は、政治学の保守主義の立場から、以下のように非常に興味深い考察を加えている。「加藤容疑者は、事件の3日前に作業着が見当たらないことにキレて、無断退社した日の夜、こう書いています。『それでも、人が足りないから来いと電話が来る。俺が必要だから、じゃなくて、人が足りないから。誰が行くかよ』『誰でもできる簡単な仕事だよ』。代替可能な、付け替え可能な自己、『あなたじゃなくって誰でもいいんだよ』ということ突き付けられると、人間は存在の根拠を失ってしまう。（中略）戦後保守をリードした福田恒存は、『人間・この劇的なもの』の中で、次のように言っています。『私たちが欲するのは、事が起こるべくして起こっているということだ。そして、そのなかに登場して一定の役割をつとめ、なさねばならぬことをしているという実感だ。なにをしてもよく、なんでもできる状態など、私たちは欲してはいない。ある役を演じなければならず、その役を投げれば、他に支障が生じ、時間が停滞する——欲しいのは、そういう実感だ』（中島 2009 : 42)。

中島のこの指摘は、まさに人間の「実存」の重要性を言い当てているのではないだろうか。「なにをしても

よく、なんでもできる状態」というのは、Frankl が指摘した、社会からの要請が少ない状態、Fromm においては、より端的に「自由」である。福田もまた、そのような状態を、人間は決して欲していないのだと喝破するのである。

自由な世紀における不自由な人間達を観察しながら、宮台は「まったり革命」を説いた。彼にとってはオウム真理教の信者達は、まさに自由であるが故に、世紀末の存在論的な不安に耐えられなくなった者達だった。彼らが麻原という教祖に帰依し、そして教団内で麻原を中心に性の乱れが著しかったという事実を受けて、宮台（1998：164）は、「宗教と性は、人間の『全面的包括要求』に応え得るという意味で、機能的に等価である」と指摘したのであるが、その言葉通り、偶々A12 は、その実存的な孤独を性的なパートナーに受け止めて貰えた。しかし、加藤と A12 の心理的な苦悩の間には、本当に紙一重の違いしかなかったように思われる。確かに、A12 には、多くの「溜め」があった。だが、企業福祉からの排除という点では、加藤と共通するものがある。教育課程からの排除で言えば、大差はないだろう。A12 は、大学こそ出ているものの、高校は〇〇では中堅校である。〇〇のような田舎では、大学よりも寧ろ高校で人間の資質や能力が判断される。その点で言えば、加藤の出身地である青森も同じであろう。彼は県下一の進学校を卒業している以上、派遣労働という不幸な道に入らなければ、まだ別の生き方もあったかもしれない。加藤と A12 を決定的に分けたのは、家族福祉からの排除である。加藤は、虐待をする母親から逃げて家を出るしか無かった。一方、A12 は、思春期から様々なメンタルヘルスの問題を抱えてはいたが、温かい家族に常に見守られていた。同じ社会的排除の対象であるプレカリアートで、事件当時の加藤と今の A12 の年齢がほぼ同じという事実を鑑みれば、たった一つの「溜め」の有無がいかに関決的な違いとなるかが良く分かるのである。

A12 - 121 のナラティブにあるように、それまで浅い人間関係しか築けなかった彼女は、人との距離感を上手く取れない自分自身に常に苦しめられて来た。そのような「実存的空虚」は、結局夜の世界では埋められなかったと彼女は A12 - 122 で語る。だが、それを彼女の恋人は見事に埋めてくれたのである。愛による「承認」を得た彼女（本研究の調査中に結婚が決まった）は、かつての自分の存在論的な苦悩を今は笑い話として語ることができるのだが、あくまで彼女は、今回のインフォーマントのうち、ハッピーエンディングを迎えることができた少数事例の一つに過ぎない。実際は、彼女の様に「実存的貧困」から救われた女性よりも、逃れられない女性達の方が多いということが、他の多くの事例から浮かび上がっている。

次章以降では、「実存的貧困」概念としてここまで理論化してきたものを、研究の結果を通して更に実証的なレベルで肉付けを施していきたい。

第3章 研究の手法

第1節 混合研究によるアプローチ：(当事者インタビュー，アンケート調査，関係者インタビュー)

第1項 質的研究の手法：グラウンデッド・セオリー (GT)

(1) 研究の技法として主に用いたのはグラウンデッド・セオリーである。具体的には、61人の性風俗産業従事者に対して半構造化(別紙12~14参照)されたイン・デプス・インタビュー(1人あたり1~2時間)を実施し、それを定性的なデータとして取り扱う。例外的な個人によるナラティブの偏りを防ぐために、似た経歴の女性を2~6人ずつマッチング乃至はグルーピングするように配慮し、6つの群と16組のサブタイプに分けてインタビューを実施している。61人全員にコーディングを施す中で、会話分析をする価値があると判断した計52名を選抜し、A~Eの計5つの群に分けた。

A群は、主として水商売に属する女性達である。現役キャバクラ嬢の女性3名(地方都市・政令市・六本木)、引退して定職に就いている元キャバクラ嬢2名、引退して定職についている元キャバクラ兼風俗嬢2名、引退して定職についている元スナックの「ママ」2名、ガールズバー勤務者2名、そして、現在は無業の元キャバクラ嬢2名である。

B群は、主として風俗産業に属する女性達である。デリヘル・ホテヘル勤務の女性3名、ソープランド勤務の女性4名(高級店・中級店・低級店×2)、セックスワーカーを自認する女性2名、最貧困風俗嬢2名(所謂「地雷店」に所属する女性達)である。

C群は、エンタテインメント業に属する女性達である。AV女優6名(出演強要被害者、専属女優、元専属女優、現役・元企画単体女優×3)、性風俗や売春に関わっている地下アイドル3名である。

D群は、風営法以外のサービスに主として従事する女性達である。JKビジネス勤務者2名、素人売春嬢5名、パパ活嬢6名である。

E群は、その他のカテゴリとして、多少雑駁になるが、比較することに意味があるカテゴリを職種横断的に集めた群である。E群の中の一つ目のグループが、シングルマザー2名(定職に就いた元キャバクラ・元デリヘル嬢)である。二つ目のグループが、高学歴風俗嬢4名(元AV女優、高級デリヘル嬢、パパ活嬢、ソープランド嬢)である。

最後に、これら研究対象の女性達と会話分析を比べる比較群が、F群である。同じように「女性性」を売りにするが、スティグマや社会的排除を伴わない「感情労働」に従事する、元・現役アイドル・タレント・女優等の4名である。こちらも会話分析を行うが、厳密な意味でのコーディング作業と比較検討はしない。あくまで捕捉的に、本研究において意味のあるナラティブを抜き出し、他の群の女性と比較するだけに留める。

研究に当たっては、「性風俗産業に従事する女性達」を『風俗営業等の規制及び業務の適正化等に関する法律』が定める接客業に従事する、若しくはかつて従事していた女性及び、AV女優を含む性風俗産業に従事している、若しくはかつて従事していた女性及び、個人的に売春若しくはその類似行為に従事している、

若しくは従事していた女性」と操作的にかなり幅広く定義した。従って、水商売から、性風俗産業全般に加えて、個人売春の当時者やAV女優など、様々な形態で自身の「性」を何らかの形で男性に提供している女性全てを対象とした。実質、彼女達はこれら全ての形態を極めてフレキシブルに移動を繰り返していたり、幾つも掛け持ちしていたりする。女性によっては、主たる業務が何なのか特定できないようなケースも多々あった。対象年齢は、20歳から30代前半までである。恐らくこの年代が性風俗産業で働いている中心世代と言っているであろう。多くの者が既に10代から、時には未成年の時から仕事を始めていた。一応、事前に調査票と親権者等の同意書は作成したのだが、倫理的配慮から10代の現役女性を探して特別に話を聞くことはしなかった。

インタビュー対象者は、フィールドワークを行って遭遇した女性に直接依頼する形と、性風俗店に依頼書を郵送し、許可を得た店舗を仲介して女性を紹介して貰う形を取った。フィールドワークの手法としては、荻上が『彼女たちの売春（ワリキリ）』で行った方法を一部参考にし、対面での依頼は、首都圏の出会い喫茶「A」と政令市の出会い喫茶「B」の店舗を利用した。店舗には事前に準備した依頼文書を持ち込み、入店後順次右側から声をかけてトークルームへ移動し、依頼文書を見せて、合意が得られた場合はそのままカラオケボックスや喫茶店等の本人の指定する場所へ移動して、ICレコーダーを用いてインタビューを採取した。フィールドワークと並行して、地方都市、政令市、首都圏併せて計60店舗（各地域20店舗ずつ）への依頼を文書及びメールで行い、研究への協力の同意が得られた12店舗の中から、バランスを考えて地方都市、政令市、首都圏から偏らないように6地域を選び、各地域で概ね6〜7人のインタビューを実施した。また、筆者が所属する職業訓練施設に公共職業訓練受講のために通っていた女性達で、キャリア・コンサルティングの際に協力を申し出てくれた女性達が5人いる。

インタビュー実施期間は、2018年2月1日〜2019年3月31日、場所は、C市、D市、E市のキャバクラ店（地方都市、政令市、首都圏）、F市、G市、H市のデリヘル店（地方都市、政令市、首都圏）である。更に、同期間にSNSのマッチングアプリ・IとSNSのTwitterを利用し、プロフィール欄で自分自身がAV女優や風俗嬢であることを公表している女性に対してダイレクトメールで同様の依頼を行い、同意を得られた女性とカラオケボックスまたは喫茶店等で待ち合わせてインタビューを実施した。インタビュー採取後、女性から次の女性を紹介してもらったスノーボールサンプリングを併用したため、比較的短期間（1年間2か月）で61人の多種多様な形態の性風俗産業従事者のインタビューを70時間以上収録することができた。

比較対象群として設定したF群に関しては、在京の芸能事務所、プロダクション15社にメールで依頼書を送り、マネージャー等とやり取りを重ねて、同意が得られた7人とは、マネージャー同席の下、事務所内の一室で同様に半構造化インタビューを行った。また、トライアングレーションとして、多角的に現状を把握するために、性風俗産業で働く女性達の支援者や業界関係者にもメールで依頼書を送り、同意が得られた者から、同様にカラオケボックスまたは喫茶店等でインタビューを採取した。論文内で個人名を使って構わない旨の許可を得た者を除いて、全員の個人情報には連結不可能匿名化を行い、A1〜F7まで匿名化コード

に変換してから、詳細な会話分析を行った。会話分析は、A群からD群までは、全員の分析を行った。E群は雑駁であり、15人とカテゴリ内の人数も多く、全員の分析を行うに当たっては紙数の制限があるため、コーディング自体は全員に施したが、会話分析は特に有意義であると判断した計6人に留めた。F群もあくまで比較群であるため、同様に7人中、4人のみに会話分析を行った。

上記の6店舗からは留め置き法の量的調査にも協力を得ることができたので、各店舗に20人分の調査票を郵送し、計71人分のデータを回収することができた。うち、調査票に不備や欠損が見られたデータを破棄した結果、最終的に62人分の有効なデータが得られた。それにAA1～EE7までの匿名化コードを付して、インタビューと同時に得たデータと併せて123人分の量的データをExcelに整理して統計処理を施した。更に、捕捉研究として、性風俗産業に関わる経営者やAV監督、性風俗に関わる女性達の支援者等立場が異なる第三者のインタビューを7人分採取してトライアングレーションを実施し、質的調査にも多角的な視点と、ある程度の客観性を与えた。なお、F群は完全な比較群であるため、心理尺度の集計の際は、全体の平均に入れることはしなかった。ただ、別紙15：表5には参考のためにF群の平均値を載せている。

会話分析の進め方としては、インタビューデータを全て逐語化し、1段階目のコーディングとしてまず「行ごとのコーディング (line-by-line coding)」を行ってデータを細分化した。この際得られたコーディングのデータは、別紙1：表1に記すが、総計で526である。「行ごとのコーディング」を進めて行く際に、「継続的比較法 (constant comparative methods)」を用いて、例えば、「スティグマの実感」と「スティグマの欠如」のように類似点と相違点を分類していった。また、「行ごとのコーディング」を分類する作業と並行して「単語ごとのコーディング」も行い、中期には「インビボ・コード (in vivo codes)」の検討を行った。インビボ・コードとは、①凝縮されているが重要な意味があることを示す、誰もが「知っている」一般的な用語、②意味や経験を捉えている研究参加者の画期的な用語、③そのグループの観点を反映する特定のグループ内固有の簡単明瞭な用語、である。インビボ・コードは、別紙2：表2に記すが、総計で32である。彼女達のインタビューには頻繁にインビボ・コードが登場するため、これらの言葉を仲間内でジャーゴンとして用いることによって、「彼ら—自分達」すなわち、「一般人—『夜』・『風』の世界の住人」という対立構造を明確化し、自身の立ち位置を決めることで、自己のアイデンティティを人によってはポジティブに、人によってはネガティブな方向に固めているのであろうと推察される。

次に、2段階目のコーディングとして、「焦点化のためのコード化 (focused coding)」を行った。1段階目のコーディングで得た複数の関連するコードを組み合わせ、上位概念となるコーディング表を作成した。「焦点化のためのコード化」で得られた新しいコーディング表は、別紙3：表3に記すが、総計で18である。

最後に、3段階目のコーディングとして、「理論的コード化 (theoretical coding)」を行い、会話分析の中で浮かび上がって来た幾つかの事実を理論として概念化した。「理論的コード化」で最終的に得られたコーディング表は、別紙4：表4に記すが、総計で25である。

それを図式化し、性風俗産業に従事する女性達とそれを取り巻く社会の関係図を「クラスター化 (clustering)」したものが、別紙 5：図 2-1 である（この段階では、まだ図として未完成である）。

インタビューを始めて、51 人目の段階で、「行ごとのコーディング」で増えるコードが激減した。それまでは、平均して 30～50 程度の新しいコードが生まれたが、51 人目のインタビュー時に増えた新しいコードは 12 であり、しかもその中にほとんど新しい発見は無かった。それらは従来のコード内の言葉を分解して組み合わせることで新しいコードとして作成可能であり、全く異質なコードは性風俗産業従事者の語りというよりも、その女性個人の性格や特性に負うところが大きく、分析する意味が無いように思えた。そこで、一旦「論理的カテゴリーの飽和 (grounded theory saturation)」の可能性があると見做し、次の 3 人も同様の結果になった場合は、インタビューを一旦切り上げることにした。結果、やはり「行ごとのコーディング」で増えたコード件数は、それぞれ僅か 6 件、7 件、4 件であり、最後の 4 件は全て個人的なエピソードに過ぎなかったため、この段階で、「論理的飽和 (theoretical saturation)」に達したと判断した。ただ、この時点で、当時、研究対象としてさほど重きを置いていなかった AV 女優の「AV 出演強要被害問題」が発生して社会的に大きな話題となってきていた。AV 出演経験がある性風俗産業従事者のインタビューは既にある程度収集していたのであるが、出演強要被害の事実関係を確認するため、AV の出演経験が有る女性達の調査を続け、更に 6 人のインタビューを採取して「行ごとのコーディング」を行ったが、同様に個人的なエピソード以外に新たなコードが作成されなかったため、この段階で本研究のインタビューを完全に打ち切った。

最後に、実験のまとめとして、最初にクラスター化した概念図に、メモや参考文献等から得られた新たな発見と肉付けを行い、理論モデルとして精緻化した。別紙 7：図 2-2、別紙 8：図 2-3 は、精緻化が終わり、統合された図表である。グラウンデッド・セオリー (GT) の技法に従い、理論を精緻化して行く過程で多くのメモを取り、随時参照した。最終的に、メモは参考文献と逐語記録を繰り返し読み進める中で、200 枚ほどに達した。

インタビューに際しては、全ての参加者に対してインタビュー前に 5 つの質問紙調査を実施し、それぞれの調査の大学生の平均値と比較・検討を行った。量的データのみ収集した群と合計して 123 名の調査研究となれば、量的研究としても十分であると思われる。

質問紙調査として用いるのは、下記の 5 つの心理尺度である。性風俗の仕事とその後就いた定職や身分・状況のどちらが彼女達の人生の QOL を上げているかを調べるために、「いきがい感スケール (近藤・鎌田 1998)」を、自我同一性の成熟度を調べるために「多次元自我同一性尺度 (谷 2001)」を、「職業スティグマ」が自尊感情に与える影響を調べるために「自己肯定意識尺度 (平石 1990)」を、そして、性風俗産業に従事する女性達が支援すべきパワーレスな状態であるかを把握するために、「拡張版ホープレスネス尺度 (高比良 1998)」を用いて、補足的に彼女達の心理状態を測定している。また、修士課程の研究で発見された、対象女性の境界性パーソナリティ障害 (BPD) の傾向（これは愛着障害の指標の一つでもある）を補足するために、「ミロン臨床多軸目録境界性スケール 17 項目短縮版 (井沢・大野・浅井・小此木 1995)」を用いた。

なお、本研究は、東北福祉大学大学院の研究倫理審査委員会の許可を得ている。

第2項 トライアングレーション（量的調査）の手法

(1) 量的研究においては、研究対象者と比較的年齢に近い女子大生の平均と標準偏差のデータが存在する5種類の既存の心理尺度を、参加協力の依頼文、フェイスシートと一緒に郵送して一か月後に回収する留め置き法を用いて、インタビュー調査を実施した61人に加えて、更に62人分の有効なフェイスシート及び心理尺度のデータを得た。5種類の心理検査の結果に対して、Excel統計を用いて片側検定のt検定を行い、1%水準と5%水準でのP値を求めた。検査結果は、別紙15:表5の通りである。

Excelでデータをまとめる際、5種類の心理検査の数字に加えて、フェイスシートから得た年齢、出身学校の偏差値、を入力して、それぞれ平均値を求めた。大学以降の高等教育において偏差値が60を超える教育機関に所属した女性は、質的研究においては、E群の「高学歴風俗嬢」にグルーピングし、その他の群と各平均値を比較するt検定を行い、同様に、1%水準と5%水準でのP値を求めた。また、個人誌を表中（別紙15:表5参照）に書込み、ライフコースにおける様々な失調要因について個数を調べ、全体に占める割合を求めて、女性の全体像を把握する一助とした。

第3項 トライアングレーション（質的調査）の手法

(1) 性風俗産業で働く女性達に関する立ち位置の違いは、前章までにも十分に触れてきたが、大きく分けて、社会福祉学のソーシャルワークを土台とする支援者と、社会学のフェミニズムの立場から支援を行っている者の二つに大別される。両者は、学術的に密接に関わり合っているため、両方にまたがって支援を行っている者も当然いるのであるが、なるべく偏りが出ないように、主として社会福祉系、或いはフェミニズム系であると筆者が判断した個人または団体に手紙またはメールで依頼文を送付し、協力を承諾してくれた団体、個人から、それぞれ2人を選んだ。

K（風俗嬢を支援する民間団体）の代表であるX1と、L（児童虐待被害者の支援団体）の代表であるX2を社会福祉系の支援者と見做し、M（セックスワーカーの当事者団体）の代表であるY1とN（AV女優のセカンドキャリア等を支援する団体）の代表であるY2をフェミニズム系としてインタビューを依頼した。フェミニズム系の2人は、立場的に言えば権利派であり、ラディカル・フェミニズムのように女性の人権侵害に反対するというよりは、女性達の自己実現やエイジェンシーに対する支援を重視しているため、そうではない人権派の協力者にも何度も依頼を行ったのであるが、全ての団体、個人から協力を得ることができなかった。それ以外にも業界内部の意見も重要であると考えたので、質的研究及び量的研究に協力してくれた首都圏の大手風俗店グループのエリアマネージャーと、AV監督、そして男性週刊誌のAV及びグラビア担当記者の3人に業界関係者としてインタビューを依頼し、それぞれ協力を得た。この3人からは、名前の公表は絶対に避けて欲しいとの強い匿名化の要望があったため、インフォーマントの女性達と同様に連結不可能

匿名化を行い Z1, Z2, Z3 という匿名化コードを付与した。男性週刊誌記者の Z3 からは、他の支援者と比較して有意義な情報が得られなかったため、コーディングは行なったが、会話分析からは外した。

会話分析の進め方としては、基本的には上述の GT の手順に従ったが、これはあくまで捕捉研究であり、トライアングレーションの一環なので、厳密な意味での GT を実施はしていない。インタビューデータを全て逐語化し、各種コーディングを付与したが、7 人という人数が GT としては十分ではないため、「論理的カテゴリの飽和 (grounded theory saturation)」や「論理的飽和 (theoretical saturation)」に達したとは考えていない。ただ、ある程度のコーディングとクラスター化はできたため、それを図 8 として図式化した。

第4章 質的研究：52人の「性風俗」に生きる女性達の実態

第1節 水商売（A群）に属する女性たちの研究

第1項 13人の女性達の概略

(1) 本項で会話分析を行うのは主として水商売に従事した、或いは水商売を入り口として性風俗産業に足を踏み入れた13人（平均年齢25.08歳）の女性達である。会話分析をまとめるにあたり、最初に彼女達の概要を一覧表に記す。会話分析の内容、及び量的研究において有意に低い心理検査の結果が出たものにはそれぞれ○を付してある。聞き取り式のフェイスシートには、「内的作業モデル（IWM）」を欠損させる可能性がある虐待等のトラウマティックなライフイベントや精神・発達・身体障害等の既往歴を記入したが、そのうち会話分析及び量的研究の両方に顕著にその影響が表れており、IWMの欠損が疑われる者は、その欄に○を付した。○が付されたもののうち、「実存的貧困」を形成する4つの心理状態が量的研究から確認されたものは、更に「実存的貧困」の欄にも○を付した。また、生活状況の聞き取りを行い、個人或いは世帯が相対的貧困率を下回っている場合は、「経済的貧困」に○を付した。両方に○が着いた場合は「絶望的貧困」を意味している。その他の特記事項には、会話分析を行うにあたり、事前情報として有益なもののうち主だったものを順に記した。A群13名のIWMの欠損率は、46.15%であり、全員が4つの心理検査においても全て不良の数字を示したため、実存的貧困率も同じく46.15%である。うち、2名が経済的に「経済的貧困」の状態にあったため、絶望的貧困率は15.38%である。量的研究の結果から見ても、A群は最も悪い群であるB群の次に精神保健の状態が悪い群である。とりわけ目立ったのは、「ミロン臨床多軸目録境界性スケール」の高さで、平均点数でカットオフポイントの10点にかなり近い7.846点を示した。愛着障害の指標となる疾患のBPDがこれ程強く疑われる群は他に無く、会話を中心にした異性との対人接客業という職業形態に親和性を持つ女性達は、BPDの傾向が強いと断じて良いであろう。

コード	年齢	職業	IWM	実存的貧困	経済的貧困	その他特記事項
A1	23	キャバクラ				大学中退、自殺未遂、精神疾患、母子家庭
A2	21	キャバクラ	○	○		高校中退
A3	23	キャバクラ				専門学校中退、中絶、美容整形、詐欺被害
A4	22	キャバクラ	○	○		高校中退、不登校、自傷、精神疾患
A5	30	キャバクラ	○	○		専門中退、離婚、精神疾患、DV、中絶
A6	22	キャバクラ				デリヘル、専属AV、性被害、精神疾患
A7	22	キャバクラ	○	○	○	デリヘル、高校中退、自傷、父自殺、性被害
A8	32	スナック				性被害、中絶

A9	30	スナック				母親精神病，性被害，DV，母子家庭
A10	28	ガールズバー				専門中退
A11	20	ガールズバー	○	○		いじめ，性被害，自傷，売春
A12	26	クラブホステス				不登校，自傷，精神障害
A13	27	キャバクラ	○	○	○	生保，いじめ，離婚，母子家庭，性被害
	25.08		46.15%	46.15%	15.38%	

第2項 3人の現役キャバクラ嬢の物語（地方都市・政令市・六本木）

(1) A群の最初に，3人の現役キャバクラ嬢（A1，A2，A3）のナラティブを比較する．A1は地方都市のX店のNo1キャバクラ嬢，A2は政令市の中堅店Yの成績上位キャバクラ嬢，A3は，六本木の名門店Zの中堅キャバクラ嬢である．所得水準で言えば，A3（時給9,000円）>A2（時給3,500円）>A1（時給2,500円）となり，A3の時給9,000円は，単純にA2の二倍以上，A3の三倍以上である．同じキャバクラという業種であっても，やはり新自由主義を反映した格差社会であることが伺える．3人のナラティブから，印象深いものを抜き出して，キャバクラと一言で言っても，そこに一体彼女達が何を求めて働いているのかが，全く異なることを検討する．

歳がほぼ同じこの3人の現役キャバクラ嬢の余りにも真逆の心理尺度の結果にまず注目すべきであろう．A2は，全領域で極めて点数が低く，完全にパワーレスな状態にある．自尊感情は低く，自我同一性も全く確立されていないが，彼女は，□□町の中規模店で常に2～3位の成績を維持しているレギュラーキャストである．インタビューによれば，家出と不純異性交遊を繰り返し，高等学校を中退した以外は特に大きな挫折があった訳でも無く，両親との不仲も今は解決しているという．

一方，ほぼ全面的に良好な心理状態を保っているA1は，現在こそ〇〇市のキャバクラでNo1の地位にあるが，そこに至る過程は波瀾万丈と言って良く，家庭環境にも決して恵まれていない．母親も水商売経験者であり，離婚した父親とは養育費を巡って現在訴訟状態にある．また，大学を中退した理由は明らかに重い精神疾患であり，その後は風俗嬢も経験するなど，〇〇〇〇のエリート選手から一時未来を失ってどん底まで転げ落ちている．A3は，A1ほど波瀾万丈な人生を送っている訳ではないが，中絶，DV・ストーカー被害等ある程度，人生に何らかの失調要因を抱えている．心理検査の結果は，概ね両者の間に位置し，女子大生平均と比較しても，不良なものの方が少ないくらいである．

この三者の比較から端的に浮かび上がるのは，「所得」が人生の満足度とは完全に相関しないということ，そして，キャバクラという場所でも自己実現できる人間とできない人間がいるということである．とりわけ，A1とA2は，非常に対象的な2人であったため，キャバクラ嬢の問題を経済的な貧困や疾病という「近代的

不幸」に重きを置いて考察していた自分に、この2人のインタビューの分析は新たな視点をもたらしてくれた。従って、本項では、両者のナラティブの比較分析を軸に、適宜A3のナラティブも取り上げながら、「実存的貧困」概念を理解するための補助線を引きたい。まずは、A2の方から特徴的なナラティブを拾い、何故彼女がこれ程までにパワーレスな状態なのかを検討する。

A2のナラティブの中で最も特徴的なのは、現在「やりたいことが分からない」という、「Lost in Transition」の典型例であるということだ。彼女は、明らかにモラトリウムを維持し、人生の具体的な選択を全て先送りすることで、この状況に対処しようとしているが、この方策は決して彼女の心理的状況の安定化に寄与しない。A2-52「うーんと、凄く、決めてないです（笑）」というキャバクラの引退時期はモラトリウムの単なる先送りであり、A2のアイデンティティを拡散させている（※A-2-①参照）。

A2のナラティブで何度も繰り返されるのは、徹底したモラトリウムの延長と現実社会との接点の回避である。A2-176で、「絶対に辞めてやろうと思います」とは言っているものの、具体的な情報収集やプランは何もないのである。一応の水上げ時期を、23、4歳くらいと口には出しているが、本気かどうかは定かではない。結婚の時期も、「35でいい」、「まだ遊びたい」というナラティブは、社会人という意味と大人という意味で、両方へのトランジションの拒否と見ることもできるであろう。彼女は、宮台真司風に言えば、「終わりなき日常をまったり生きている」ということになるのかもしれない。だが、A2が□□町の人気キャバクラ嬢でありながら、心理尺度が極めて低い理由は、このポストモダン社会特有のアイデンティティの不確かさ、すなわち「実存的空虚」或いは「実存的貧困」にしか解を求められない。小此木啓吾風に言えば、典型的な「モラトリウム人間」になるが、それが彼女の実態と言って良いであろう。年齢的には、21歳とまだ若く、キャバクラで足枷になる年齢にはまだ届いていないため、図2-2で言えば、A2はせいぜい「実存在的苦悩の体験」までしか、降りて来てはいない。だが寧ろ、そこで留まっているが故に、苦しいのだともいえる。何故ならば、実存在的苦しみには終わりが無いからだ。事実、彼女は今回のインフォーマントの中では、比較的酷い「近代的不幸」は背負っていない。それにも関わらず、「実存在的苦悩」はかなり深いのである。

A2のナラティブに特徴的に見られるのは、将来への不安と過剰なまでの孤独である。そして、他者に対する異様な気遣いである。A2-279「あー、何か、どうなんですかね。仲良いし、普通の友達よりは親友に近い人はいるんですけど、あっちもそう思ってくれてるかは分かんないし、っていう。」というナラティブが示すように、お金にも困っていない、彼氏も必要ないという彼女は、友達が自分を本当に好きで傍に居てくれるかを、滑稽なほど気にしている（※A-2-②参照）。これは、Rogersのいう「受容」を現象学的な世界の中で感じるができないからであろう。A2-273の「うーん、心の支え,,, って何だろうって感じです」という言葉にそれが象徴されているとは言えないだろうか。彼女の「病んでいないのかも」という言葉は、正直鵜呑みにはできない。初対面の自分には言えない、または、言葉では表現できない現象学的な苦しみをこの箇所から感じ取れはしないだろうか。

一方、A1の方は、確かな「受容」を手に入れている。それはつまり、Honnethの承認論で言えば、複数の「承認」を得ていることを意味する。A1-88「うん。でも事情も色々話したら、『もう、分かったから』って。だから『今はちゃんと夜頑張りなさい』って言うてくれて。やっぱり、あっちも結構年上なんですけど、結婚も考えてくれてるので、だからあたしもちゃんとかう、目標とか目的じゃないけど、ちゃんと定めて仕事しようかなあと思って。ダラダラじゃなくて。」というナラティブから、A1は、愛の領域の承認を得ていることが理解される。また、彼女にとっての「重要な他者」(恋人)は、弟の大学の奨学金のために彼女がそこで働くことを認めている。これは、連帯による「承認」にも繋がる(※A-2-③参照)。

更に、幾人かの常連客も同様に彼女を「承認」してくれている。キャバクラで働いていて、「セクハラ以外に何か嫌なことが何かあるか?」、という自分の質問に対して、彼女は言下に「無い」と否定する。そして、下記のように質問を続けると、A1-13「え、やっぱ、助けてもらえる人がいっぱいできたというか、ホントに今お世話になってるお客さん達っていうのは、ホントにいい人達ばっかで、うん、ホントになんか感謝しないとイケない。」と、実に生き生きと客についての感謝を語るのである(※A-2-④参照)。

A1-114で客から「ティッシュ3箱」貰ったことで素直に喜びを感じられるA1は、まさに現象学的な人生における唯一性・一回性の幸福を感じている。それは、金銭的に何かしてくれるとか、高価なプレゼントを貰うことよりも、遥かに彼女にとっては大切なことなのである。お金に困っていないA2が極めてパワーレスな状態であるにもかかわらず、A1は、家族のために今後も暫くの間はずっとお金を必要とし続けるだろう。それでも、A1の方がA2よりも遥かに幸せであることは疑いようが無い。明らかに、彼女は図2-2という、「アイデンティティの再構成」を終え、「スティグマの克服」まで達成している。そうであるが故に、彼女はささやかな日常にも喜びを見出せるのである。一方、A3に目を転じると、A2と同じように、キャバクラに誇りを感じていない。A3-72「で親とかもけっこう、『娘さん何してんの?』って、『んー』、みたいになるのもかわいそうやなあって思って。」というナラティブには、スティグマに対する実感が伺える(※A-2-⑤参照)。

A3は、明らかにキャバクラをやりたくてやっているのではなく、単にお金を効率良く稼げる手段として利用している(生計維持機能)。また、スティグマを内面化しているので、家族にすらその仕事は話せないし、時給が同じなら別の仕事をするという。そして、長くやるものではない、ろくな人に会わないと、ネガティブにキャバクラの世界を語るのである。

一方で、A1は、A2、A3のようなスティグマの実感が無い。だが、このA1の感性は、決して一朝一夕に構築されたものではない。事実、彼女は一時、大好きだった〇〇〇〇という競技を呪い、全ての賞状やトロフィーを破棄し、自分に〇〇〇〇をさせた母親を口汚く罵り、破れかぶれになって風俗嬢にまで転落しているからである。その彼女を立ち直らせたのは、やはり社会関係資本である親友の同僚の女の子達であった。

一方、社会関係資本に全く恵まれていないA2の場合、A2-185「うん。あの一、あっちでできたキャバクラの友達と遊ぶっていうのは、未だ無いです」と、仲間うちの女の子に対するナラティブは極めてドライ

である（※A-2-⑦参照）。一応、地元遊び仲間はいるのであるが、元々の知り合い達に対しても過剰な気配りをしていることは既に指摘した。A2 がキャバクラの世界で遊離しているように感じるのは、常連客を始め、ほとんど誰にも心を開いていないからである。本来、キャバクラで働く以上、ある程度の信頼関係が必要不可欠なはずの男性スタッフに対しても頑なに心を開かない。「何かキャバクラで学んだことや得たことはありますか？」という自分の質問に対して、彼女は「人を信じなくなったこと」を学んだこととして挙げるのである（※A-2-⑧参照）。

畢竟、A1 にとっては、キャバクラは「承認の共同体」であり、A2 にとっては、不信感を持ってしまう人間関係に深みが無い職場である。A3 は、職場の人間関係で、男性スタッフの付け回しが下手なことを散々怒る一方で、A3-235「最初キャバクラ始める時は、女同士の関係が一番なんか不安やなぁと思ったんですけど、Z はほんまになんか、たまたまなんですけど、体験入店の時に場内してもらってアフターになったんですけど、その時に一緒にいた先輩が、今ラウンジも一緒に働いてる先輩なんですけど、その先輩がなんかけっこうフレンドリーで、そこで仲良くなって、でけっこう毎日のようにしゃべってて、プライベートでも遊んでて」と女性同士の仲間意識に触れる（※A-2-⑨参照）。従って、A3 にとっても、キャバクラはある程度仲間と楽しめる居場所として機能している。その意味では、A1 に近い。3 人の上述したナラティブから浮き上がってくるのは、図 2-2 中の「夜の世界で働く 6 つのメリット」は、人によっては全く存在せず、人によってはその機能を大いに活用しているという事実である。

今回、この 3 人の事例で理解できるのは、下位機能の「生計維持機能」と「社会学習機能」としてのみキャバクラが機能している A2 に比べて、そこが上位機能との複合体としても働いている A1、A3 の場合は、夜の世界で得るものが失うものよりもずっと多いということである。

図らずも、A1 は A1-190『やっぱり、どうしても、お客さんには心開けない』みたいな人もいっぱいいるし。」と、A2 が抱えている問題を指摘している（※A-2-⑩参照）。A2 にとって、キャバクラが単なる下位機能としてしか役割を果たしていないのは、他者に対する心の壁を取り払えないからである。一方、A1 は A1-191「うん、天職だと思います。」とキャバクラの仕事を表現する。これは、Maslow の欲求段階説では、自己実現の段階にあると置き換えても良いであろう。一般社会でも自己実現に至れる人間が非常に少数であるように、キャバクラで救われる人間もまた非常に少数であるだろうが、その稀有な事例が A1 であった。ただ、その A1 でさえ、キャバクラ嬢に付きまとう偏見やスティグマを A1-188「やっぱり、凄い偏見が多くて、キャバクラっていうのは。」と指摘していることは忘れてはならない。A2 は、自分自身が抱えているスティグマに関して、A2-294「それはもう、先入観です。夜イコール、みたいな。」と語っているが、スティグマを強く内面化した状態では、A2 にとってキャバクラは絶対に居場所にはならないであろう（※A-2-⑪参照）。

A2 や A3 と異なり、キャバクラを「天職」と言っている A1 には、本音でそう言えるだけの明確な理由がある。それは、キャバクラで働く期間を自分で決めているからだ。彼女曰く、弟が大学を卒業するまで、つ

まり、あと僅か1年なのである。その後は、何をするかは漠然とはしているが、必ず昼の仕事に就くという「希望」を持っている。将来への「希望」がA1をここまで強くしているとすると、それが将来に欠片も見えないA2は心理尺度の通りに弱く、彼女の人生は苦しい。今後も自己決定を避け、流されるままにモラトリアムの延長で偏見に満ち溢れた夜の世界で生き続けて行くとすれば、それは大きなストレスであり、徒に実存的な苦悩を抱え続けることになる。A1がキャバクラの仕事を「天職」と語ったことは、彼女はこの仕事を自らの正当なる「職業労働」として認識したのだと言えるであろう。Franklは、その職業労働について下記のように語っている。

創造価値とその実現が人生の使命の前面に出ているかぎり、その具体的な充足の範囲は一般に職業労働と一致している。労働とはとくに、個人の独自性が共同体との関係において意味と価値をもつような領域である。しかしこの意味と価値は、つねに業績（共同体に対する業績）にそなわっているのであって、具体的な職業そのものにそなわっているのではない。それゆえ、ある特定の貴い職業というものは存在しない。多くの、主として神経症的な傾向をもった人間は、もし自分が他の職業に就いていたならば、充足した生き方ができたのにと主張するが、そのとき彼らは職業労働の意味を誤解しているか、さもなければ自分を偽っているのである。もし、具体的な職業がいかなる充足感も与えないとすれば、その責めは人間にあるのであって、職業にあるのではない。職業それ自体が人間をかけがえのないものにすることはできない。職業はただそのための機会を与えるに過ぎないのである。

ある女性患者はかつて、自分の人生が無意味なものに思われ、そのため病気を治そうとはまったく思わないと語った。そして、もし自分を充実させるような職業、たとえば医師とか看護師とか、なにか科学的発見をするような化学の研究者のような職業に就いていたならば、人生はすっかり別の、素晴らしいものになっていただろうというのである。ここでこの患者に明らかにせねばならなかったことは、人間がどういう職業についているのかが重要なのではなく、むしろその人間がいかにそれを為しているかが重要なのであるということであった。具体的な職業そのものが問題なのではなく、人間の実存の唯一性の本質をなす人格的なものと独自のものを労働において発揮し、そのことによって人生を意味あるものにしているかどうかの問題なのである。(Frankl = 2011 : 207)

Franklのこの言葉が、A1とA2の違いの全てを物語っているとは言えまいか。同じ仕事をしていたとしても、大切なのは「その人間がいかにそれを為しているか」なのである。前章でキャバクラ嬢は「賤業」とあると指摘したが、それは自らのうちに迷いや苦悩を抱えてそれに従事する場合である。直接的ではないにしろ、若い女性が自らの「性」を男性に意識させる仕事は、社会一般の視点からすれば「穢れ」を纏う。そ

の穢れ者を見る他者の視点を自らのうちに取り込んでしまった人間は、例え純潔であってもスティグマタイズされ、結果、自分自身を疎外するようになるだろう。それ程までに、自分を見つめる他者の視線は束縛する力を持っている。だが、それを力強く跳ね返せる A1 にとっては、キャバクラの仕事は喜びをもって日々感謝と共にあるものである。一方、他者の視線にスティグマタイズされた A2 にとって、哀しいかなキャバクラの仕事は疑いを持って日々不安と共にあるものなのである。A2-298「んー、ていうよりも、昼職に夜から抜けた子とかには、余計言えないっていうか、、、」というナラティブは、穢れを払った女性達に対する彼女の後ろめたさと憧憬が素直に表現されているとは言えないだろうか。その意味では、A3 も A2 に近い。同じキャバクラ嬢という不安定な仕事をしながらも、明らかに 3 人には、「希望の格差」が存在しているように感じられる。A1 は、今の幸福が未来にも同じように期待できると強く信じられるのだ。一方、A3 は、キャバクラという仕事から、「承認」ではなく、「非承認」をも時に味わい得ることを指摘し、それ故に、A1 ほど、キャバクラという仕事に前向きではない。

A3-147「『うわ、なんか、自分全然やん』とか思っちゃう。」という A3 のナラティブは、恐らくほとんどの女性が強い違和感を覚えるだろう（※A-2-⑫参照）。何故ならば、A3 は、六本木でも 1, 2 を争う超高級店のキャストである。そこで上位ランキングに絡むような特別目立つ存在ではないが、街を歩けば多くの男性が思わず振り返ることだろう。それ程の容貌に恵まれていても、彼女は、際限の無い上方比較に苦しんでいるのだ。そして、その苦しみから逃れるために、過剰な消費に逃避している。軽度とはいえ、それは「自傷的存在証明」に近い。何故ならば、女性がキャバクラで働ける時間は短く、その間に彼女も自覚していることだが、おかしくなった金銭感覚を元に戻せない限り、その消費生活は近い将来必ず破綻するからだ。結局、A3 は女性としての魅力が十分にあり、この 3 人の中では経済的に最も「勝ち組」でありながらも、六本木という「美しさ」がインフレーションを起こしている街の中で生きているために相対的な「剥奪」を味わい、心理検査でも明瞭なほど自尊感情が下がっている。23 歳の若さで、東京 23 区内に単身で月 15 万円近い高級マンションに住めるのは選ばれた者だけであるにもかかわらず、彼女の各種心理検査の結果は、A1 に比べてほぼ全ての領域で劣り、女子大生平均に比べてさえ劣る部分があるのである。Townsend の「相対的剥奪」が、貧困層だけでなく、一般層や富裕層でも起こり得ることを A3 のナラティブは示している点は、本研究においても非常に重要な意味を持つ。

これまでの考察をまとめると、経済的な多寡は、キャバクラ嬢の人生を豊かにする最重要の要因ではない。最も経済的に貧しい A1 が、心理的には三者の中で最も豊かなのである。重要なのは、その仕事に対してスティグマを内在化しないこと、誇りを持つこと、そして、職場の内外において良質な人間関係を維持することなのである。だが、これはキャバクラ嬢に限らず、昼の仕事も含めてほぼ全ての職場にある程度共通するのではないだろうか。スティグマ以外の項目の重要性は、古くは Mayo と Roethlisberger による「ホーソン実験」から既に証明されている。職場内においてワークモチベーションに最も貢献するのは、テイラーシステムのような合理化・分業化された科学的な管理ではなく、人間関係論に基づくマネジメントなのである。

そして、職場内において、黒服（男性スタッフ）、キャスト、顧客の全員と良好な関係を築いている A1 が最も生きがいを感じており、キャストとしか良好な関係を築けていないが、かなりの高給取りの A3 が続き、孤立している A2 という順番で心理検査の結果が出るのはある意味当然である。だが、本当に大切なのは、Frankl が指摘した創造価値を A1 が、キャバクラに見出したことなのである。Frankl が例に挙げた女性と同じように、奇しくも A1 も最初は、キャバクラの仕事を「最初は、全く意味の無いものだったと思う」と語っていたのだ。ところが、Frankl の女性患者の例と異なり、彼女は、キャバクラという仕事を通して、自分で気付いたのである。仕事とは、何を為すかがではなく、いかに為すかに真の価値が宿るのだというロゴセラピーの命題に、である。

第 3 項 2 人の定職に就いた元キャバクラ嬢の物語

(1) A4 と A5 は、共に現在はキャバクラを引退し、昼の正業に就いている。2 人の間の大きな差異は、A4 に比べて、A5 は長い期間に渡って不定期で夜の仕事を続けていることであろう。◇◇への家出から仕方なくキャバクラの仕事を始めて、最終的には目的であった自分の車を購入し、恋人に「辞めろ」と言われて直ぐに水上げできた A4 と、プレカリアートとして、昼も働きながら不定期に夜の仕事を続けて来た A5 のナラティブは、A4 のそれとは明らかに違うものである。大枠として A4 は、若い故にアイデンティティの拡散が顕著で、モラトリアム型という点で非常に A2 と似ている。年齢も近く、高等学校中退で社会人経験がほとんどない点でそのように似て来るのであろう。それに比べて、A5 は年齢的にもキャバクラでは既に働けない歳であり、派遣の非正規社員、正規社員、アルバイト等を転々としているこれまでの半生は、完全にプレカリアートのそれである。社会に打ちのめされているという点で、これまでも何度も参照してきた同じプレカリアートの赤木のナラティブに印象が似ている。

古市（2011：25）の、赤木は、「希望は、戦争。」と論文タイトルで謳っているが、「実際は『戦争』という言葉を借りた承認格差に対する異議申し立てに過ぎず」、そこを履き違えると赤木とは議論が噛み合わないこと指摘している。「赤木の文章を読むと、彼が求めているのが『社会の流動化』や『戦争』ではなくて、『結婚して家庭を持つ』や『安定した職業につく』『家を買う』といった身近な問題であることがわかる。彼の文章からは『誰かに認められたい』という思いがひしひしと伝わってくる」（古市 2011：25）という指摘は、正鵠を射ているだろう。

A5 のナラティブから浮かび上がってくるのも、やはり赤木と同様の強い「承認欲求」である。それを、これから具体的に検討して行きたい。尚、A4 と A5 に共通しているのは、美しさへの囚われである。2 人とも、店で№1 の存在でありながら、執拗にそこに拘る背景には、自身の社会人としての知的能力（メリトクラシー型能力）や人間力（ハイパー・メリトクラシー型能力）への強い劣等感がある。それは心理検査の結果からも顕著に伺える。まずは、2 人の共通項である強い劣等感を示す箇所から対比を始めたい。A4 は、筆者が

働くことの意味を問うた際、A4-267「全部、何もかも分からない。分かる人って凄い。」と答えた（※A-3-①参照）。そして、可能ならば「生活保護が欲しい」というのである。彼女にとって、生活のために働くことは苦痛以外の何物でもないのだ。まさにこの点が、志賀の社会的排除論の限界なのである。排除の概念を安直に労働からの排除に求めて、ディーセントワークやワークフェアを反貧困のゴールに掲げると、A4 のようなパワーレスな女性をより一層社会から排除することになってしまうのである。A4 にとって、キャバクラは単に下位機能を持っている場所に過ぎない。キャバクラは単に「生計維持機能」としてのみ働いており、A4 には、お金以外にそこで働くモチベーションはほぼ無いのである。また、A4 にとってのキャバクラは下位機能のうち、「社会学習機能」も欠落している。キャバクラや夜の世界に対して、怖いもの見たさのような、少し後ろめたい興味すら無いのである。A4-15「(キャバクラでは、お金以外に) 得たものは別はない。」と断言する A4 に対して（※A-3-②参照）、その後も、「本当に何もないのか」と問うと、漸く「友達」という社会関係資本について言及したものの、田舎から出て来た人気キャストの宿命として、お店でかなり苛められた経験の印象が強いからか、それは女性キャストではなく、あくまで男性スタッフのことであった。お金以外に得るものが無いキャバクラの仕事は、A1 が体験したような価値ある創造体験からは程遠い。意味の無い仕事に徒に従事した結果、自尊心は低くなり、パワーレスな状態に今も陥ってしまっている。A4-269 のように「生活保護を貰えるならば、働かずに貰いたい」とまだ 22 歳の女性が口にするのは、ある意味非常に衝撃的である。A4-273 で「やる気が無いから高校を中退した」と言うが、不登校になった理由は「なんとなく」「眠くて行けなかった」などと余り要領を得なかった。ただ、A4-211「勿体ない（笑）って思ったけど、その時点でなんか皆就職とか大学とか決まっていたから、,,、」, A4-212「うん。結局あたしはフリーターだから。」というナラティブから、彼女が非常に繊細な神経を持っており、異様に他者の目を気にする認知構造を持っている点が理解できる（※A-3-③参照）。

自己評価が自分自身ではなく、他者との比較によって決定付けられているのが、A4 の認知の特徴である。そして、これは昨今の「ゆとり教育」で育った若者達に共通する問題点であると、法政大学教授の尾木直樹は NHK スペシャル『職場を襲う“新型うつ”』の中で指摘する。尾木は、「ゆとり教育」の世代が、自己肯定感の国際比較で、先進国の中でも飛び抜けて低い点を挙げ、最大の理由を、1989 年に導入された「新学力観」に求める。「新学力観」では、子供の成績に影響を与えるのは得点力よりも「関心・意欲・態度」である。教師の極めて主観的な評価が、高校・大学受験に直結するようになってしまったが故に、子供達は基礎的な学力を身につけることよりも、教師にどう評価されるかを重要であると考えようになってしまったのである。そうすると、子供達は常に周囲の顔色を伺うように日々の生活を過ごすことを余儀なくされる。その結果、学業等で十分な達成体験を得られなかった子供達は、他人との比較でしか自分を評価できない極めて自己肯定感の低い子供に成長してしまうのだ。

同様のプロセスを、古荘純一も『日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか』の中で、深刻な問題として論じている。子供の幸福度を測るユニセフの幸福度調査で、オランダは先進国の中では最も幸福度が高いこと

で知られているが、「孤独を感じる」と回答した子供はわずか2.9%である。一方、日本の子供は、29.8%で、国際比較で圧倒的に最低の得点になっている。そして、その理由として、古荘（2009：86）は「日本の子どもたちは学校で感じるストレスが非常に強く、親は自分の悩みを何も理解してくれないと感じている」ことを挙げている。そして、これはA4の生育歴とも完全に一致する。親と折り合いが悪いのは、今回インタビューをした全てのA群女性の共通項の一つである。成人後、仲良くなったというケースはあるが、スポーツが万能だったA1以外のほぼ全員が「幼少期は自分を理解してくれなかった」と主張するのは決して偶然ではないであろう。

自尊感情の低さが結びつきやすいものとして、精神科医である古荘は、不安、うつ、摂食障害、自傷行為、発達障害、パーソナリティ障害等を挙げているが、こうした精神病理学的症状もインタビューに応じてくれたA群の女性達全員の共通項の一つである。13人中、中途退学の経験が無いものは半分以下の6名である点も決して偶然とは言い難い。それを考慮に入れると、自尊感情の低さと水商売女性というスティグマを持った職業の選択には、教育を介して大きな相関関係がありそうである。つまり、勉強ができないことは幼少期に親からの「承認」不足に繋がって子供の自尊感情を下げる。自尊感情の低さは、学校の中途退学という人生の大きな負の決断を容易に後押ししてしまう結果、湯浅のいう「教育課程からの排除」が起きる。その学歴では就職先が限定されるため、「企業福祉からも排除」され、キャバクラ嬢等の「賤業」に就くことで、とりあえず夜の世界に包摂されるのである。これは、ある意味教育格差と女性の貧困の問題であり、小熊が指摘する「近代的不幸」の一形態と言っても良いであろう。

「ゆとり教育」の世代よりは若干上であるが、このように、学力の達成水準の低さから自分自身を卑下する傾向は、やはりA5にも同様に見受けられる。A5-177「逃げてると思われるかもしれないけど、勉強できないんです。人よりも何回も何回も同じ文章を読まないで覚えられなくて、何かの資格を取るとか、ステップアップ、ステップアップ、なんて分かってるんです。頭では、でも、頭では分かってるけど、資格を取るまでにどのくらいの労力と、時間と、もしかしたらお金、使うんだらうって思うと、だったら、今生きる方が先かな、と思う。」というA5のナラティブから、彼女にとって、学校教育の場所がキャバクラに比べて遥かに生きにくい場所だったことが良く理解される（※A-3-④参照）。

繰り返すが、A5は、A4と同様に、地域の最著名店のNo1なのである。それが、ここまで自分自身を卑下するほどにパワーレスなのである。A5-179にあるように、「もう、最初の頃から」自分ではできない子だ、と思い込んでいるA5が、フェイスシートにあるような個人的な失調要因を積み上げて来たとすれば、A2以上に「生きがい感」が下がったとしても仕方がないように思われる。A5-177に示されるナラティブは、学業成績というメリトクラシー型能力の欠落を意味しているが、本田が言うハイパー・メリトクラシー社会においても、やはりこの能力は人間を評価する基軸能力であり続けていると思われる。

A5がA4と異なる点は、キャバクラという場所で得たものがお金だけではないということだ。A4は、A4-15のナラティブで、お金以外に「得たものは別にない」と断言するが、A5の場合は、「生計維持機能」に

加えて、上位機能としての「承認獲得機能」と「居場所確保機能」にも頼っていることが分かる。A5-169「アルバイトだけど仕事だから、与えられた職務を果たして、まあ、夜延長されたお客様に対しては、まあ、嫌だけど、,, 早く帰れないけど、夜遅くまで居てってちゃんと職務をこなして、仕事として考えてるから、,, 楽しくないの前に、まず仕事って考えてたから、,,。」というナラティブがそれを示しているが、彼女にとっては、キャバクラは唯一自信をもって働ける職場なのである（※A-3-⑤参照）。だからこそ、A5-169のように、アルバイトであっても与えられて職務を果たすために精一杯の努力をしたのだ。そして、社会における自分自身の唯一の居場所で必死に努力した結果、付いてくるのが「承認」なのである。

A5-186「たぶん。化粧して、傍で笑っていると盛り上げられるし、役に立っていると思うと頑張れるんですよ。」というナラティブから浮かび上がってくるのは、誰かの役に立つ喜びである。そして、彼女は、キャバクラの方が昼の仕事よりも自分らしさを出せるというのだ（※A-3-⑥参照）。A4がA4-72で「ふふふ(笑)うん。時々、あたし何やってんだろ、って思った。」と、キャバクラで自分自身を偽っていたのを自嘲しているのとは対照的に、A5は、キャバクラでこそ自分らしさを出しているのである。ここから、No1という結果は同じでも、その実像は全く別物であることが理解される。A1もA5と同じ類のNo1である。自分自身を偽らず、客のために誠意を尽くして接客した結果の価値あるNo1である。それに対して、A4の場合は、あくまでお金を貰うために自分を押し殺して演技をしているに過ぎない。そして、その中で、客からのストーカー行為による被害を受けたり、陰湿な女の子同士の苛めに遭ったりしている。キャバクラという世界に対して、肯定的・中立的・否定的の三つの視点で敢えてそれぞれのキャバクラ嬢の見方を整理すると、A1とA5は自分らしさを出せる場所としてキャバクラを肯定的に捉えている。つまり、彼女達はその中でエイジェンシーを発揮しており、自己実現まで辿り着く可能性を秘めている。A2は、お金を稼ぐ場所と完全に割り切っているが、別に否定的ではない。何時辞めるかの予定すら立てずにモラトリアムを続けているのであるから、ほぼ中立的立場と言って良いだろう。それに対して、A3はキャバクラという世界を若干否定的に、A4至ってはかなり否定的に見ている。それは、そこがお金を貰うために彼女にとっては「嫌なことを耐え忍ぶ場所」に他ならないからだ。彼氏に「キャバクラを辞めろ」と言われた時のA4-90「いや、ショックじゃなかった。辞めたいって思ってたから。」というA4の反応が、それを如実に物語っている（※A-3-⑦参照）。

そう言って彼女は、直ぐにキャバクラを退店し、事実夜の世界に2度と戻ってはいない。何故ならば、どうしても自分自身の中に拭い難いスティグマが存在するからだ。

A4-103「だって、夜は夜だし.」, A4-297「戻らない。戻らないって誓った。究極のことが起きない限り2度と戻らない.」, A4-298「自分は、ここは違うかなって思った.」, A4-299「ううん。夜の人に失礼だけど,, 仕事って言ったら、夜は違うから。誰もそれを仕事とは思わないから.」という一連のナラティブは、キャバクラという場所が、いかに彼女にとって居心地の悪い場所だったかが良く分かる箇所である（※A-3-⑧参照）。A4は結局最後までスティグマを克服することができずに、夜の世界を後にした。図2-2で彼女が辿った経路を確認すると、「アイデンティティの再構成」から「水上げ」し、「昼職への就業」という比

較的ストレートな経路を辿っていると言える。だが、昼職に就いてもまだ「アイデンティティのゆらぎ」は収まってはいない。

働くことの意味を問う筆者に対して、A4-175「うーん、だって分かんなくないですか？ 何で働くんですか、じゃあ（笑）」と逆質問の形で問い詰めて来る彼女は、昼の生業に就いて尚、まだ働く意味を理解できていない（※A-3-⑨参照）。Frankl（=2011：209）は、「自分の人生を労働に意味づける機会とはどんな職業によっても与えられているものであるが、ただしそれは、その職業における労働のあり方が正しく理解された場合だけである。人間の代理不可能性やかけがえのなか、一回性や唯一性はつねに、誰がそれを行うか、いかにそれを行うかにかかっているのであって、何を彼が行うかにあるのではない」という。

その意味で言えば、A4 は労働のあり方を正しく理解していないのである。まだ、駆け出しの臨時職員だからかもしれないが、自分がその場所にとって無くてはならない存在である、という人間の代理不可能性を実感できていないのであろう。故に、A4-297 で彼女は夜の世界に「究極のことがなければ戻らない」と言っているが、「Lost in Transition」の地点を経由して、彼女が夜の世界に舞い戻る可能性はゼロではないだろう。A4-182 のナラティブが彼女の本音であれば、喫緊のお金が必要な状態になった時、キャバクラは彼女にとって例えどんなに嫌な場所であっても、最も自分が高く評価され、効率良くお金を稼げる場所であるからだ。キャバクラに対して否定的な人間が、キャバクラで働くことはあり得ないなどと筆者は思わない。荻上が、現在も売春の多くが貧困型売春であることを指摘しているように、未だにキャバクラという場所は経済的な貧困とは決して無縁ではないからだ。そして、ポストモダン社会の現代は、何時、誰が、生活困窮状態に陥るかは全く分からないからである。

筆者は、キャバクラも含めた夜の性風俗産業全体が、偽装された「裏のセーフティネット」であると考えている。「偽装された」という言葉の意味は、一見、この世界は女の子の方にもメリットが大きいように見えるからだ。だが、それはあくまで見せかけだけだ。高い時給は、劣悪な労働条件と環境の上に成り立っている。雇用保険も社会保険も無く、労働基準法が禁じている以上の罰金を当たり前のように取り、いざ辞めると言えば、最後の月の給料は未払いになるなどというのはザラな世界なのだ。そもそも、労働者の権利など、何一つ保障されていないのである。それは、雨宮が再三自らの著書で実体験から指摘していることであるが、それでもやはり、ここが無ければ困る女性がたくさんいることも事実なのである。A4 も何らかの理由で今直ぐお金が必要になれば、恐らくはそこに戻るであろう。そのくらい、夜の世界の引力は強い。いみじくも、A4 自身がそれを A4-300 で、「（笑）いや、そーやっていかないと、また戻っちゃうから。なんかね、、、」と語っているのは、夜の抗い難い金銭的な誘惑にはっきりと気付いているからであろう。A4-297-299 の件は、必死に意志の弱い A4 自身へ戒めの言葉をかけているようにすら、筆者には感じられるのである。

A4 に比べれば、A5 はキャバクラという世界に対しては遥かに肯定的である。しかし、だからと言って、A1 同様にスティグマから解放されている訳ではない。それは、A5-152「うーん、周りが許してくれない。」というナラティブからも明らかである（※A-3-⑩参照）。A5 自身は本当ならば今もキャバクラで働き続けた

いと願っているのだが、それを A5-152 にあるように「周り」すなわち「世間」が許さないというのである。世間の中には、彼女の家族だけでなく、仲の良い友人も含まれている。前章で検討したように、日本のラディカル・フェミニズムの立ち位置も、彼女からすれば同じであろう。人権を守る、性的搾取を許さない、という彼らの目標は、裏を返せば、そこでは絶対に働くべきでない、という強力なメッセージをそこで働く女性達に放つことになる。

A5 は、友人達は、キャバクラが A5-128「風俗だから。」という理由で、そこで長く働くべきではないと助言してくるという。友人が持つ偏見、引いては、一般人が持つ夜の世界に対する偏見がありありと分かる件である。彼女は、キャバクラで働くことを友人に「道徳的」に諫められたのだ（※A-3-⑪参照）。前章で説明したように、キャバクラ嬢の仕事はある程度のセクハラを覚悟する必要があるが、性的サービスの提供はしない。あくまで、疑似恋愛の提供であって、勘違いするのは客だけである。ある意味非常に罪な仕事とも言えるが、そこにデリヘル嬢やソープランド嬢のように直接的な身体接触を伴う性的サービスは無いのである。それにもかかわらず、友人が「風俗」と一括りにして「道徳的」に彼女を諫めるというのは、恐らく世間一般の認識もその程度のものなのだろう。そして、それを A5 自身良く分かっているからこそ、A5-153 で「世間が」キャバクラで働くことを許さないというのである。

ただし、A5 の場合は、A4 と違ってもう一つ許されない理由がある。それは、年齢の足枷である。A5 は、化粧をしている限り、A4 と比べてもさほど老けて見える外見では無い。彼女は現在 30 歳だが、実年齢よりも 4〜5 歳は常に下に見られるくらい容姿の維持には気を遣っている。ところが夜の世界では、どんなに若く見えたとしても 30 歳という年齢は、キャバクラではなく、スナックやクラブに拠点を移行しなくてはならない年齢なのだ。そこで新しいキャリアを始めれば、いよいよ「世間」様は彼女の昼職への移行を許してはくれなくなるだろうし、A5-195「社会において行かれないという気持ちはあります。夜だけ仕事をしていると、世の中が見えなくなるんですよ。」というナラティブにあるように、何より彼女自身の社会からの疎外感は一層強くなるだろう（※A-3-⑫参照）。

従って、世の中に置いて行かれないから、彼女は後ろ髪を引かれながらも夜の世界を去らなければならない。しかし、それが彼女にとって非常に心残りであることは彼女のキャバクラに対する肯定的なナラティブからひしひしと伝わってくる。彼女にとって、キャバクラは、A4 のように単にお金を稼ぐだけの場所ではなかったために、去るのが一層辛いのであろう。そして、夜の世界を去った先に待っているのは、昼の仕事の厳しさの洗礼である。元々能力も自尊感情も低い彼女達が昼の仕事で直ぐに評価されるということは考え難い。事実、昼の職場の上司は、優しい夜のマスターと違って、彼女を手厚く扱いはしない。ここで耐えられるかどうか、今後の彼女の人生の行方がかかっているのである。だが、今のところ、彼女の将来には余り「希望」が見えない。それは、彼女自身良く分かっているようで、臨時職員から正職員にして貰ったことが、逆に A5 にとっては大きなプレッシャーとなっており、既に辞めたい気持ちで一杯なのだという（事実、インタビュー後彼女は退職した）。それが彼女の心理尺度の点数を著しく下げている要因であろう。

A5-198「何時までも綺麗でいたい,...」というナラティブは、現在彼女が最も望むことであり、恐らく彼女の女性としての唯一の誇りなのかもしれない。「美しさ」が老いと共に過ぎ去って行くということは、ある意味彼女の人生がセピアに色褪せて行くことなのだろう。だから、彼女は A5-206「後悔したくない」、A5-207「もう時を戻すことはできない」と縋り付くように語るのである。キャバクラで働いたことには確かに意味があったのだと。

Frankl (=2011 : 209) であれば、優しく彼女に言うかもしれない。貴方は「唯一性と一回性とを実存の意味契機として呼び起こしたのだ」と。仮に疑似的なものであったとしても、貴方はその場所で、確かに「愛し愛される者として、かけがえのない存在だった」(Frankl=2011 : 209) のだ、と。だから、本来、時を戻す必要も無いし、後悔する必要も無いのだ。そのことに彼女が気付いた時、A5 は、A2 や A4 が味わうことができない「実存」の喜びが確かに人生に刻まれていることを知るに違いない。

この項を閉じるに当たって、A5 の A5-204「弱いお客さんには、事件になるといけないので、強く言ったりとか、注意をしたりとかもしました。そうやって、言ってあげたり見守ってあげたりするのは、凄く大事な事なんだなって思いました。」というナラティブに着目したい。彼女は、自分のようにか弱い女の子の同僚達や客に対して、温かい共感と慈しみの心を向けている。キャバクラ嬢がパワーレスだということは既に再三論じてきたことだが、ここで敢えて「お客さんも自分に似ている」と A5 は言うのである。

キャバクラが 1980 年代というポストモダンが確立した時期に誕生したのは、恐らく決して偶然ではない。キャバクラのシステムに組み込まれており、従来の他の性風俗に存在しない要素は、たった一つである。それは、「疑似恋愛」だ。単純に性欲を充足させればソープランドがあるし、女性と一緒にお酒を飲む場所としては、スナックやクラブがずっと以前から今とほぼ変わらぬ姿で営業されている。確かに、スナックやクラブでも可能性としてのホステスとの恋愛はあり得る。しかし、最初から「同伴」や「アフター」のように誰もが選択可能な形で、「疑似恋愛」を楽しめるシステムにはなっていなかった。客に対して、まるで恋人のように接近して女の子が座り、1対1で接待することも無かった。当然、客との私的な電話やメールなどもあり得なかった。つまり、キャバクラは、恐らくポストモダンを生きる男性の「実存的不安」を埋めるために作られた、新しい性風俗のシステムなのである。何故ならば、『終わらない日常』のなかを、欠落を抱えたまま生きなければならないとき、そういう自分を全体として肯定できるチャンスは、宗教と性にしかない(宮台 1998 : 164) からだ。宮台 (1998 : 164) は「宗教と性は、人間の『全面的包括要求』に応え得るという意味で、機能的に等価である」と指摘しているが、思うにキャバクラ嬢に客が求める「性」とは、直接的な「性愛(エロス)」だけでなく、まさに「無償の愛(アガペー)」としての「性」も含まれるのではないだろうか。そのような癒しの幻想をもたらし場であるからこそ、キャバクラ嬢のように心が傷付いた客達が、仮初の「疑似恋愛」を求めて、誘蛾灯に引き寄せられる蛾の様にキャバクラに通うのではないかと、A5 のナラティブから思われてならない。そして、それは Honneth の承認論からも十分に説明可能だ。キャバクラにおいて、客は、例え疑似的ではあっても、愛の領域と連帯の領域の「承認」を暫時手に入れることが

できるからである。

第4項 2人の定職に就いた元キャバクラ・デリヘル嬢の物語

A6, A7 共に、キャバクラでも十分に人気キャストとして通用する容姿を持っている。特に、A6 は成人式の時に、地元美容室で見本写真として着物姿が使われ、地方新聞にもそれが掲載されたほどである。その2人が共にキャバクラを辞めた理由が、キャバクラという場所に自分が合わないと感じたことである。

「疑似恋愛」を客に提供するには、柔軟なコミュニケーション・スキルは必要不可欠である。雨宮 (2010: 32) は、ただ「しゃべっているだけで金になる」といい、A5 も、A5-182「しゃべるだけだから。」と、事も無げにキャバクラ嬢の仕事を表現する (※A-4-①参照)。しかし、この男性相手にしゃべる、すなわちコミュニケーション・スキルを使って男性に幻想の「無償の愛 (アガペー)」を与えるということは、誰にでも簡単にできる仕事ではないのである。実際、インタビューに答えてくれたキャバクラ嬢全員が、「No1 は、必ずしもその店で最も可愛い女の子になるものではない」と断言した。若くて美しい容姿は必要だが、A5 のように、キャバクラの平均年齢をずっと超えた年齢であっても巧みな話術とホスピタリティ精神でNo1 になった例もあるし、逆に、A6 のように美容室のパネル写真に使われるほどの容姿であっても、キャバクラではNo1 にはなれなかった例もある。つまり、キャバクラは、「容姿」+「コミュニケーション・スキル」の組み合わせで人気が決まるのであるが、後者の要因の方が大きいと思われる。男性の側にも当然女性は何らかの「承認」を与えなければ、女性に対して男性は気持ちを動かされない。そして、そのためには、まず女性の側から発動される効果的なコミュニケーション・スキルが不可欠なのである。キャバクラからデリヘルに流れた2人の共通項は、このコミュニケーション・スキルに対する苦手意識である。まず、それをA6 のナラティブから見て行きたいが、A6-15「んー、初めて会う人と話を凄く盛り上げていくっていうのは、あんまり,,,(得意じゃない)と」語った後で (※A-4-②参照)、キャバクラの更に嫌な点として、A6-19「アフターをしつこく誘われること」と語る (※A-4-③参照)。

「同伴」と「アフター」は、キャバクラ嬢であれば、絶対に避けては通れないサービスである。客と店内だけの付き合いでは、決して幻想の「無償の愛 (アガペー)」は演出できない。お金が発生していない、店外での付き合いをまるで本当の恋人のようにするからこそ、客は喜び、高いお金を払ってでも何度も店に通うようになるのである。その基本中の基本であるシステムをA6 は嫌がるのである。これは、■■のキャバクラでNo1 になった、A4 とは対照的である。

A4 は、A4-95「頑張ってる時期は、週末は (同伴で) 全部埋まってたと思う。」と事も無げに言う。彼女の演出技術がどれほど巧みであるかは、その後の件からも明らかである。たった1時間、「面倒くさい」とお座なり程度にデートしただけで、その客が最後まで一緒に居てくれるのである。俗に、「オープン・ラスト」と呼ばれる状況だが、「同伴」から始まって、閉店まで客が1人のキャストを独占し続けると、■■で

あれば軽く 10 万円はかかるはずである。彼女が、1 日 3～4 万円の大金を貰っていたというのも、十分に納得できるのではないだろうか。A4 は、1 日で客に貢がせた最高額は 50 万円であると簡単に言うが、体を売らないキャバクラ嬢にとって、この額は破格である（※A-4-④参照）。

次に、A7 のナラティブを検討してみるが、やはり A6 と同様に、彼女もキャバクラの仕事を楽しく感じなかったと言う。A7 の A7-33 「いや、なんか思われてるとか言われたとかされたとかじゃないんだけど、なんか行くの嫌になって。気遣うの疲れるし。嫌だって感じ。」というナラティブから浮かび上がるのは、キャバクラという場所に埋め込まれた人間関係の面倒臭さである。A1 や A3, A5 は逆にそれを大切に感じていたが、A2 同様に、A7 はそこで社会関係資本に恵まれていない（※A-4-⑤参照）。

A6 もそうだが、A7 は客だけでなく、同僚のキャストに対しても、強い苦手意識を感じている。2 人は、不特定多数の人間と良好な関係を築くコミュニケーション・スキルが欠けているのである。A7-34 「なんか、おじさんの絡みが気持ち悪いと思ったのもあった」というナラティブは、体を使って性的なサービスをするデリヘル嬢の言葉とは思えないが、恐らく彼女が言いたいのは、プライベートに立ち入って来る類の話であろう。キャバクラ嬢にとっては「疑似恋愛」であっても、客は真剣にキャバクラ嬢と恋に落ちようとしているのである。当然、源氏名だけでは満足できず、本名であったり、通っていた学校であったり、住んでいる地域であったりをしつこく聞き出して、キャバクラというヴァーチャルな世界ではなく、実世界でも女の子と接点を持ちたいと考える。そして、恐らく A7 はそれが嫌なのであろう。A6 の「アフターをしつこく誘われるのが嫌」というナラティブも同様の心理的嫌悪感を示していると思われる。つまり、2 人に共通しているのは、お互いに「会話」を楽しみながら客と良好な関係を築き、相手を癒してあげたいという A1 や A5 の奉仕の精神の欠落である。A4 のようにそれを完全な虚構として提供できる女性もいるが、本来、キャバクラという仕事にある程度のやりがいや誇りを持っていなければ、それはかなり難しい。A4 のような存在が例外なのであって、キャバクラで No1 になる女性というのは、A1 や A5 のようにキャバクラの仕事に対して肯定的な心理を抱いている女性なのである。中立的な立場の A2 が No1 になれない理由もそこにあると思われる。A2 は、A7 の高校時代の友人であるが、実際 A1 や A5, A4 となんら容姿的には遜色が無いにも拘らず、レギュラーキャストとして月にそれなりの回数も出ているのに、2～3 位が定位置なのである。そして、No1 には絶対に適わないと言う。A2 から見て、絶対に叶わない No1 の特徴は、A2-194 「んー、何だろう、マメさもそうだし、口の上手さもそうだし、勿論可愛いし。」なのであるが、ここで、A2 がマメさ、口の上手さ、そして最後に容姿を順に挙げた点が非常に印象的である（※A-4-⑥参照）。恐らく、キャバクラにおいて容姿が優れていることはさほど大きな売りにはならない。何故ならば、有名店であればほぼ全員の容姿が整っているからである。A4 のように愛嬌がずば抜けていない限り（彼女の〇〇訛りの標準語は、◇◇では非常に受けが良かったという）、「疑似恋愛」を成り立たせる一番大切な要素は、マメさ、つまりコミュニケーション・スキルなのである。A2 にそれが最も欠けていることを、彼女自身が実は一番良く分かっている。彼女は、場内で飲みながら交わす、自身のトークセンスには強い自信を持っているからだ。だが、そのよう

な場内だけの営業努力では足りないのである。キャバクラにおける最大のコミュニケーションの肝は、いかに1人の客のことだけを（実際は複数いる訳だが）気にかけているかを、電話やメール、「同伴」や「アフター」の中で、つまり店外でのやりとりでマメに演出できるかにかかっているのである。それは、膨大なプライベートの時間と労力を費やさなければならないことを意味する。当然、一朝一夕にできることではないし、何よりも本人のやる気とある程度ハイパー・メリトクラシー的な人間力が必要になるだろう。A6とA7には、それが欠けていたのである。そして、それ故に、彼女達はキャバクラという「疑似恋愛」の空間を早々に去り、より「性の強度」もスティグマも強い世界へと進んで身を置いたのである。

では、A6とA7が求めたのは一体何だったのであろうか。筆者は、キャバクラよりもずっと高いお金は当然大きなモチベーションだったと思うが、それが全てではないと考える。お金だけが理由ならば、デリヘルという仕事は、肉体的にも精神的にも弱い病みがちな女の子には余りにも過酷な仕事だからだ。筆者は、彼女らは自分の「居場所」を、そして何よりも自分の「存在証明」を、確かにそこに見出だしていたのであろうと確信している。Honnethの承認論による、愛の領域と連帯の領域の承認こそが、彼女達が最も欲したものなのだ。この二つの「承認」は即時的でもある。愛の領域は当然、お互いに肌を重ね合う中で確実に実感できるし、連帯の領域の「承認」は、性風俗産業特有の慣習である「日払い」によって、その日の終わりに直ぐに実感できるのである。新自由主義社会において、「女性性」は貨幣価値に換算され、連帯の証として社会的に最も価値ある形態で彼女達に手渡されるのだ。

キャバクラが見せてくれる夢は、あくまで幻想の性である。お金は、「疑似恋愛」のサービスに対して支払われるため、可能な限り客に夢を見せ続けなければならない。すなわち、頑張れば「恋人になれるかもしれない」という浅墓な夢を、である。そして、A1のように本物の恋に落ちない限りは、客と絶対に肉体関係を持ってはいけない。もし、1度でもプライベートで寝てしまったら、目的を果たしたその男性は、別のキャバクラ嬢を落とすために、違う店に行くかもしれないからだ。だから、女の子達は「私が本当に心を開いているのは貴方だけよ」と甘く囁やきつつも、決して一線は超えない。そして、客は薄々嘘だと感じながらも、心理的にその言葉を信じたくなる。例え、最低の扱いを受けていても、同時に他の競合する客と一緒に接遇を受ける訳では無いため、女性の手抜きはなかなか分からないのである（だが、メリトクラシー型能力が低い女性の場合、往々にして、メールの誤送信等で客にそれがバレる。彼女達は同じ文面を名前だけ変えて送るという手抜きをしがちだが、名前を修正する程度の作業でさえ間違えることが多い。その点、銀座のホステス等は、一通一通手書きだったり、メールも明らかに内容が個人向けだったりして、手抜き感を出さないよう工夫している点で「素人さ」を売りにするキャバクラとは明らかに異質である）。他の客や恋人と一緒にいる決定的な現場を見ない限り、その夢は醒めにくい。ところが、デリヘル嬢の場合は、最初から完全にサービスの内容が決まっている。呼ばれる全ての客に対して、基本的に全く同じ性的サービスを提供しているのをお互いが前提の上で行為に及ぶ。ある意味、そこにはキャバクラと違って一切嘘が無い。キャバクラが虚飾の世界だとすると、デリヘルは本当の意味で裸の付き合いをする世界なのである。

当然、客層も異なるであろう。面倒くさい駆け引きを好まない即物的な客はデリヘルを使用し、女の子との駆け引きや、攻略する過程をゲーム感覚で楽しみたい男性はキャバクラを好む。そのように、男女の思惑が様々に交錯するキャバクラという場所は、A6 と A7 のように、自分を相手に合わせつつも駆け引きをするのが苦手な女性達にとっては、気を遣い過ぎて心がすり減る場所であって、決して心地よい「居場所」としては機能しないのである。その一方で、A6 と A7 は、デリヘルの仕事を楽しんでいる。いや、正確に言うと、実際に誰かに心から必要とされていることに、「承認」の喜びを感じている。故に、そこは自分にとって誇らしい「居場所」なのである。A6 は、A6-106「(お金) もだし、スタッフさんもだし、客層も。何もかも全部が良かった。」とキャバクラに比べてデリヘルの素晴らしさを絶賛する。だがその一方で、A6-107「嫌な思い出は、本番を要求されること。」とも語る。デリヘルの仕事が一から十まで彼女にとって素晴らしい訳ではないのだ (※A-4-⑦参照)。

デリヘルの仕事をしている女性に対する最も大きな誤解と偏見は、彼女らが「異常性欲者」であり、プレイそのものを楽しんでいるというものだ。実際に、そういう女性も中にはいるのかもしれないが、その認識は一般的ではない。セックスワーカーを自認している水嶋ですら、著書の中で、当初はそれが苦痛だったことを素直に告白している。通常のデリヘル嬢は、A6 のように本番行為を要求されることを心から嫌がるし、そもそも通常のプレイ自体が好きでもないのである。寧ろ、仕事内容に関しては、大きな苦しみを味わっている。それは、A7 も同じだ。彼女もまた A6 同様に、本番強要や乱暴な客には辟易したという。

A6 は、地方都市の〇〇でも 1, 2 を争う高級店に所属していたため、紳士的なお金持ちが多く、客層は非常に良かったと言う。一方、同市の大衆店で働いていた A7 は、やはり何度も危険な目に遭遇している。それにもかかわらず、彼女はデリヘルの仕事を「楽だ」と表現する (※A-4-⑧参照)。A7 の置かれた心理状態に一層迫るために、この後の件を続けよう。

A7-125「あー、でも、なんだろう,,,『可愛い』とかチャホヤされて、で、それも嬉しかったし、なんか、『え、ホント今日、会えて良かった』みたいに言われると、ああなんか、そういう風に言ってくれる人いるんだったら、いいなって思って。」、A7-128「嬉しい。嬉しいし、もっと可愛くなろうって思うし、色々気遣うから,,, うん、凄く良かった。して、後悔は別にしてない。」というナラティブから分かる通り、A7 も A6 同様にデリヘルの仕事に対して非常に肯定的だ。自分自身の彼氏を仕事のせいで失っても、デリヘル嬢をしたことは「後悔しない」と A7 は言う (※A-4-⑨参照)。A7-125, A7-128 のナラティブから伝わって来るのは余りにも真っ直ぐな性を介した A7 の「承認」への喜びだ。明らかに、A7 は、風俗の仕事を通して承認されることで「癒し」を得ている。それは、A6 も同様である。水嶋が『風俗で働いて人生変わったwww』で描いた人生や価値観は、決して特異な女性の特異な人生ではない。全く同様のことを、水嶋のようにセックスワーカーという自認は無いにしろ、A6 も A7 も語っているのである。そこには、ラディカル・フェミニズムが欲する被害者としての悲壮感は一切無い。

A6 の A6-149「んー、楽しいのは、何時も常連のお客さんが来てくれて、なんか、自分の好きなものと

か買って来てくれて、一緒に食べながら一緒に笑ったりとか,,, プレイとかは嫌だったけど、そういう風にさり気なく気遣ってくれるところとか。」というナラティブを聞けば、風俗嬢のことを良く知らない人は、恐らく「何を矛盾したことを言っているのだ」と思うに違いない（※A-4-⑩参照）。だが、A6 のこの感覚は、A7 とも共通する点である。そして、これまで見て来た A6 や A7 のナラティブから浮かび上がって来る心理状態は、既述した伝説のソープ嬢と呼ばれた大庭佳奈子が、自伝である『風俗依存症—私が本当の居場所を見つけるまで—』の冒頭で述べている箇所、すなわち、「ソープ嬢をしていたけれど、SEX が大好きなわけでもなく多大な借金があったわけでもなく、男に貢いでいたわけでもない。ただそのときの私には、ソープランドしか『居場所』と思える場所がなかったのだ」（大庭 2005 : 3）とほぼ完全に合致している。

性の営みは、人間の実存を肯定するという宮台や大庭の言説は、他にも多くの識者が指摘している。例えば、荻上（2012 : 15）は、「僕があえて（ワリキリを）包摂というのは、彼女たちの話を聞いているとそれが仮初めの『救い』と受け止められているという現実があるからです」と指摘する。同様に、鈴木（2010 : 42）も「彼女らのしていることは、売春だ。だが、彼女らは出会い系に仕事と収入ではなく、明らかに救いを求めている」と出会い系のシングルマザー達を追いかけた一連のフィールドワークの中で、最後まで分からなかった疑問として提起している。ここで鈴木が彼女達の行動を理解できないのは、鈴木 of 立ち位置が中立的ではなく、彼女達を捉えるフレームが明らかに「被害者」という枠組みになっているからである。その意味では、彼はルポライターでありながら、ラディカル・フェミニズムの立場に近い。鈴木は立岩と同じように、明らかに女性が性を売る行為に対して、「悲惨」を見ている。故に、女性達が、極めて自傷的な性行為を行いながら、そこに「救い」を求めている矛盾を理解できないのである。

A6 や A7 のように自尊感情の極めて低い女性にとって、自らの性を異性に強く肯定されることは、何よりも大切なことなのだ。それは、彼女の単なる「性」ではなくて、「生」そのものを強く肯定するからだ。そして、男性達に求められ、神格化された女性達によって、ポストモダン社会で傷付き疲れた男性達もまた癒しを得るのであろう。ここで「性」は「生」の肯定を経て、遂に「聖」へと至るのである。

A7-251 「生きがい,,, えー、でも、一番はお金とかでもなくて、なんか,,, 自分を,,, 風俗だったら自分を呼んでくれて、自分に会いたいと思っていてくれる人がいるっていうのとか、必要とされてるとか、会いたいと思ってくれるとか,,,」, A7-253 「ああ、全然嬉しかった。それを、他の人じゃなくて、なんか自分で,,, なんか、誰でもいい人もいるかもしれないけど、普通って誰でもよく無いと思うんで、それで、いっぱいいる人の中から自分のこと選んでくれて。だから、その人の中では、可愛いと思ってくれてるんだろうっていうのとか。そういうのも凄い嬉しくて。」という A7 のナラティブは、あたかも「マグダラのマリヤ」を思わせるほどに、ある意味感動的である。例え性的な対象であったとしても、その時男性に求められていなければ、彼女は生きてさえ行けなかったと素直に告白しているのである（※A-4-⑪参照）。

性風俗産業とそこで働く女性達を、可哀そうな「被害者」、さもなくば、権利を持った「労働者」という極端な二元論で語ることの危険性を、上記の A7 のナラティブが証明している。彼女達は、「被害者であり、ケ

アラーであり、かつ自分自身も癒しを得ている「行為遂行体^{エイジェンシー}」なのである。本研究を通して筆者が辿り着いた結論は、日本のフェミニズムの中で対立する安直な二元論ではなく、それを^{アウフヘーベン}止揚させた第三の立場なのだ。ただ、ここで注意が必要なのは、全ての女性達がエイジェンシーを発揮して自分にとって価値あるアイデンティティを構築できる訳では無いし、何より後々、当時は束の間の癒しに目が眩んで気付かなかった問題に直面した際、例え A7 であっても、ポジティブな自分語りは崩れ落ちる可能性を常に秘めている点である。そして、その引き金になるのは、通常は社会からのスティグマであることは、先の鈴木涼美の指摘で見た通りである。彼女の場合は AV 女優であったが、AV ほどではなくても、デリヘルの場合であっても女性に対するスティグマの大きさは、キャバクラと比較して桁が違うと思われる。

「キャバクラで働いていたことは普通に誰にでも言える」という A7 に、「では、デリヘルで働いたことは？」と問うと、彼女は言下に A7-223「言いにくい。言いにくいっていうか、絶対に口が裂けても言わないし、『誰かからそんな噂聞いた』って言われても、『何それ。知らない』みたいな。絶対隠し通すと思う。」と答える（※A-4-⑫参照）。これが、デリヘル嬢が背負うスティグマなのである。キャバクラ嬢よりも職業威信が低い、最も社会の底に位置すると思われるソープランド嬢とほぼ同じ認識を社会がデリヘル嬢に抱いていることを、A7 も正確に把握している。そのスティグマがどこから生まれるのかを確かめるために更に話を促すと、驚くべきことに、当事者である A7 自身がデリヘルの仕事に対して、強いスティグマ感を持っているのである。A7-280「うーん,,、え、だって、『誰の前でもそんなホイホイ脱ぐんでしょ』みたいな感じになるし。実際自分が男で、彼女が風俗とかで働いてたら、ムリだし。」という A7 の言葉は矛盾しているようであるが、風俗嬢が抱える二面性は、既に Y1 が解説した通りである（※A-4-⑬参照）。重要なのは、A7 がかくも苛烈なスティグマを背負ってでも欲しかった「居場所」に対する欲求の切実さである。A7 同様に、A6 も、自分の内に宿っているスティグマを実感している。A6-259「『あー、ムリムリムリ』って。『あたしも絶対ムリだわ』って（笑）って言うことによって、自分はやってないアピール（笑）」をするという A6 は、一般人がその様に風俗嬢を見下し、偏見をぶつけてくるのは当然だという。キャバクラはそこまで酷い偏見に晒されないのでは、という筆者からの問いに対して、A6 は、A6-261「うん。それは,,、体があるかないか。体の関係があるかないかじゃん。」と答えるのだが、やはりこの違いは想像以上に大きいのである（※A-4-⑭参照）。

上記の一連のナラティブは、2 人のデリヘル嬢が、心を裸にして語った貴重なナラティブである。2 人とも、最初は一瞬社会的な偏見に対して自身の拒否感を示そうとする。A7 の「いや、そんな時は,,、」と A6 の「でも,,、」がまさにそれである。ところが、その後、思い直したように、自分自身を貶めることになる社会的偏見の正しさを肯定するのである。これこそまさに、Goffman が指摘するスティグマの本質である。2 人は、過剰に内在化された他者のまなざしによって、自分自身を差別や偏見の対象として見出してしまったのである。2 人は、デリヘル嬢の仕事をしている間、常に迫害的なまなざしを持った「内なる他者」に捉われ続けてきたのだ。現実の他者のまなざしは、「パッシング」という方法で回避できても、「内なる他者」のま

なざしからは絶対に逃れられない。だから、2人ともデリヘルの仕事は「肉体的にも精神的にもキツイ」と言うのだ。だが、一般社会の中でも、キャバクラの中でも、自分の「居場所」を作れなかった不器用な2人にとって、漸くデリヘルという世界で見つけた「居場所」は、一層かけがえの無いものであったに相違ない。最後に、総括として自分がA6に尋ねた際、彼女はデリヘルと昼の仕事はどちらが上でも下でもなく、共に価値ある場所であると語るのだが、やがて思い返したように、デリヘルの仕事は自分の場合は、良い客に恵まれたから、と語るのである。良い客に恵まれたという経験は、図らずも彼女が良い風俗嬢であった証でもある。従って、A6-292「うん。そう思う。皆が得られるものではない。うん。」というナラティブに、A6のささやかな矜持と大きな喜びが垣間見えるのではないだろうか（※A-4-⑮参照）。彼女はきっと誇りに思えるのだろう。例え、社会が嘲笑っても、「内なる他者に」迫害されても、それでもなお彼女の「実存」を力強く肯定してくれる「居場所」を獲得できた自分自身の生き方に、決して嘘は無かったことを。未来は予測できない。彼女達も、何時かスティグマの軛から逃れられずに後悔するのかもしれない。しかし、少なくともこのインタビューを採取したその瞬間において、彼女達は性風俗産業に救われている。その現象学的な事実だけは動かない。

原田 256：じゃあ、今一番大切なことは何？

A7-256：なんだろう、こう、必要とされるっていうのは、変わらないんですけど、なんかこう、女の人としてというよりは、なんかこう、なんだろう、そういう意味で会いたいじゃなくて、んー,,、なんだろう,,、んー、なんか難しいな。

原田 257：女の子じゃなくて、1人の人間として必要とされたいってこと？

A7-257：あー、そうですね。うん。

原田 219：そっか。夜の仕事、キャバクラとか風俗とかやってみて、人生の役には立った？

A6-219：一種の社会勉強にはなったかなと思う。何か人よりもそういうの知ってる分、何か、こう、そういう職に,,、職っていうか、バイトして、色んな人とおしゃべりして、何か、自分が考えてたことがちょっとちっぽけだなと思ったりとか、考え方が逆に楽観的になった。前よりも、病まなくなった。逆に。

これらのナラティブが、「実存的な苦悩の体験」に不器用ながらも真摯に向き合った、2人の人間としての成長の証なのだ。「またデリヘルの仕事をするかもしれない」と彼女達は本音で語る。今は2人とも「昼職への就業」を果たしたが、もう1度夜の世界に舞い戻るコース、「Lost in Transition」は、2人の人生の中に依然有力な選択肢として残されている。彼女達が十分な「溜め」を得るために、「居場所」はもう少しの間

だけ必要なのかもしれないが、「被害者であり、ケアラーであり、かつ自分自身も癒しを得ている行為遂行体」である彼女達のアイデンティティや生き様の価値を決めるのは、第一義的には我々第三者ではなく、あくまで彼女達自身であるべきだと指摘して、本項を閉じる。

第5項 2人の定職に就いた元スナック嬢の物語

前項では、キャバクラに居場所を見つけ出せずに、デリヘルという風俗業に居場所を求めた女性達のナラティブを検証した。ここでは、同じくキャバクラに余り馴染めずに、最終的にはスナックという場所を主な居場所とした2人の女性のナラティブを比較したい。

「スナック」、正しくは「スナックバー」は、一般に女性がカウンター越しに接客する飲酒店を指す。店の責任者は女性であることが多く、その女性は「ママ」と呼ばれる。風営法の規定で深夜までしか営業できないキャバクラと異なり、往々にして深夜0時以降まで営業している店が多い。客が、酒や軽食を口にしながら、「ママ」ら店員や客同士の会話を楽しんだり、カラオケを歌ったりするのが主たるサービスであって、キャバクラのようなマンツーマンサービスの提供、すなわち、テーブルにソファで女性が男性客の直ぐ横で接待することは少ない。若者向けの業態とは解されておらず、客・店員ともに年齢層が高いのが特徴である。店員の年齢層が高いということは、それだけ夜の世界に長くいるということの意味する。高時給のキャバクラは、A4のように短期間でそれなりのお金を貯めて綺麗に辞めたい女性に向いているが、スナックになると時給も安く、女性にとってはさほど旨味は無い。どちらかというと、長くスナックで働く女性は、何時までも所謂「夜の女」を卒業できないイメージが強い。A8は、まさにその典型のような女性である。若い時代に数年キャバクラで働いた後は、コンパニオンなども経験したが、基本的にはスナック一本で水商売歴14年のキャリアを持っている。A8の性格を良く表しているのが、下記のナラティブである。

原田 54：今でも、飲み屋、水商売の世界っていうのは、自分の居場所だと思います？

A8-54：居場所,,居場所にしちゃ、いけないんだろうな,,あはは(笑)はい。そこは(笑)

原田 55：そっか。でも、心地良い空間であることは、確かなんだ？

A8-55：そうですね。知ってるところに飲みに行けば、誰かはいるので。

原田 56：ああ、なるほど。辞めてなくて、まだ同じくらいの歳で働いている子っています？

A8-56：いますね。

原田 57：いますか。そういう子っていうのは、一生それに懸けて行くって感じなんですかね？

A8-57：んー、結婚って、まあ結婚していたり、バツイチの方で、子供いる方でそこで働いている人は、たぶんずっとそれして行くと思うんですけど、独身の人は、どうなんですかね,,結婚する気が無いですね。独身でそういうところに勤めてる人は、楽しいから、「私は二番目でいい」っ

て言ってますね。彼氏がいても、やっぱり、妻子持ちだったりというのが多いですね。

キャバクラがあくまで「疑似恋愛」を提供する場所だとすると、スナックは女性の方も情性からか単なる「居場所」化が一層進み、客とも疑似ではなく、不倫や2股などのより生々しい男女の関係に発展するケースが多々見受けられる。そして、A8も、A8の友人達も所謂「男と女のドロドロの人間模様」に対して、ほとんど抵抗感が無いかのようである。今回の研究でA群にカテゴライズした、13人の現役・元水商売の女性達のインタビューの中で、A8だけが唯一夜の世界のスティグマを実感していない特殊なケースである。2児の母であり、かつこれまで不倫による人工中絶を4度も経験していながらも、未だに「男性から女性として見られたい」と主張するA8の価値観を明らかにするために、もう少し彼女のナラティブを見てみるが、A8も不倫の経験があるかどうか尋ねると、実にあっけらかんとして、A8-61「ああ、多々あります（笑）はい。若い頃、20歳の時に働いていたところは、旦那さんがヤクザだったので、んー、今の旦那とも会ってましたけど、やっぱそういう方とのお付き合いっていうか、遊びっていうのはありましたね。」と答えるのである（※A-5-②参照）。

ヤクザとの不倫をあけすけに語るA8は、明らかに倫理観や社会道德という部分が欠落している。恐らく、一般人が抱く「夜の女」のイメージをそのまま体現したかのような存在である。この研究の目的は、「夜の女性達はスティグマに苦しみ、かつ性的・金銭的な搾取に遭っている被害者である」というラディカル・フェミニズムが志向するような事実を証明することではない。その理由は、A8のような存在がいることを現実問題として決して無視できないからである。前章で、鈴木に対して熱く風俗嬢の誇りを語る19歳の里奈の言葉を引用したが、恐らくA8にそのようなスナックに対する誇りや熱い想いは無い。彼女を夜の仕事に駆り立てる動因は、ただ「楽しいから」に尽きるだろう。「承認」「居場所」「社会関係資本構築」「生計維持」「社会学習」という夜の世界の5つのメリットの全てをA8は満喫しているかのようだ。そこで、最上位機能である「自己実現」に達していたのかと問われれば、かなりの疑問が残る。A1のように、人間的成長を実感している様子は、A8のナラティブからは伺えない。例えば、A1は、A8と異なり、「キャバクラ嬢は天職」だと言いながらも、社会に根深く存在する偏見を語っていたが、A1が自己実現に辿り着いているのは、キャバクラ嬢という仕事に対する偏見や差別を乗り越え、自分自身にも確かに存在していたスティグマを克服しているからなのだ（※A-5-③参照）。そのような自己と向き合う激しい葛藤無くして、人間に真の意味での成長などあり得ない。それに対して、A8の夜の世界に対する認識は全く対照的だ。A8-161「キャバクラに対してですか？（偏見は）無いですね。」というナラティブが示すように、そもそも、A8には一般人が感じるようなスティグマの感覚が最初から欠落しているのである（※A-5-④参照）。

他の女性達の社会的偏見やセクハラにまつわる様々な苦悩を聞いた後だと、A8の驚くべきほどの無邪気さには、いささか拍子抜けしてしまう。A8にはスティグマの実感が完全に欠如している。故に、夜の仕事に対する足枷は彼女の場合は婚姻関係と子供以外に存在しない。仮に離婚することになれば、躊躇無く夜の世

界に舞い戻るだろう。やりたいことが見つからずに消極的に夜の世界に留まり続ける A2 が「コテコテのキャバクラ嬢」だとすると、望んでその世界に積極的に留まり続ける A8 は、「コテコテの夜の女」なのだ。

同じようにキャバクラからスナックに拠点を移した A9 も、A8 ほど無邪気にはではないが、夜の世界に対する態度を A9-95 「やっぱ、楽じゃないですか。昼の仕事に比べたら。お酒作って、カラオケ歌って、おもてなしして、自分も飲めるっていうことが楽なので。皆よく、『楽』って言葉を使いますね。」と語る（※A-5-⑤参照）。

A8 と A9 の 2 人に共通している感覚は、「スナックの仕事は楽」である。楽しくて、お金が貰える。つまり、「居場所」と「生計維持」がセットで手に入るのである。本人が楽しいということは、当然そこには「承認」もあるはずで、スナックで働けば、この三つはほぼ自動的に手に入るシステムになっているようだ。

だが、これは、雨宮が著書で指摘していたことと矛盾する。雨宮は、「キャバクラの時給は三五〇〇円ほど。スナックのようにガチンコで飲む必要はなく、しゃべっているだけで金になる」（雨宮 2010 : 32）と、スナックよりもキャバクラの方を遥かに楽だと言っているのだ。A8 はキャバクラに対しても、A8-160 のように肯定的に考えているので参考にならないが、A9 がキャバクラに対してどう思っているのかを表現したナラティブを探してみると、非常に興味深いことが分かる。A9 は、キャバクラの仕事がスナックよりも嫌だというのだ。A9-22 「キャバクラっていうと、ちょっと、色んな年齢層の、若い人からお年寄り,,, お年寄りじゃないけど、まあ、年齢層高い方まで来るので、話を合わせる,,, 何だろう、あたし、あんま若い人苦手なんです。テンション高くて、盛り上がるような感じが苦手なので、大変でした。」というナラティブから分かるのは、A9 もまた、前項でデリヘルに流れた A6 や A7 と同じ類の女性だということである（※A-5-⑥参照）。つまり、疑似恋愛を成り立たせる会話術と、それでいて相手との関係を絶妙にコントロールするコミュニケーション・スキルが未熟なのである。その代り、彼女が優れているのは、酒の強さだ。これで、雨宮の発言とも整合性が取れて来る。つまり、キャバクラは、雨宮や A2 のように会話術に長けた女性が就けば楽だが、A6 や A7, A9 のようにコミュニケーション・スキルに自信が無い女性にとっては、複雑な人間関係から単に気をすり減らす場所に過ぎないのだ。逆に、スナックは、酒が強い A8 や A9 には楽だが、雨宮や A2, A6 のように酒が弱い女性には絶対に無理なのである。スナックは、まず客と一緒に酒を飲み、酔って楽しむことが大前提であり、カラオケも店内に常時ガンガン流れている。従って、最初から会話の重要性は低いのであろう。これで、A6 と A7 がキャバクラからスナックではなく、キャバクラからデリヘルに流れた理由も納得できる。会話もお酒も苦手な女性には、風俗産業以外に夜の世界は行き場所が無いのだ。本田が指摘した新自由主義のハイパー・メリトクラシーは、実は「夜」や「風」の世界でも、さほど重要性は失われていなかったのである。その能力が足りずに「昼」の世界から零れ落ちた女性達は、さながら夜の世界の「パイプライン・システム」に沿って、自分が一番居心地の良い場所に区分けされていくのである。

キャバクラ嬢としてしか働いた経験が無い A1, A2, A4, A5 と比較して、スナックに移行した A8 と A9 には、会話術とコミュニケーション・スキル以外にもう一つの違いがある。それは、女性としての魅力の格

差である。若い間はキャバクラを主戦場としていた A8 のナラティブからはさほど感じないが、そこを直ぐに離れずにはいられなかった A9 のナラティブからは、明らかに女性としての強い劣等感を感じることができる。A9-216「あ、全然無かったです（笑）あたしは、結構容姿とかに対して、自信が無い方なんですよ。」というナラティブは決して自虐や謙遜ではないだろう（※A-5-⑦参照）。A9 のこのナラティブは、仮にも「ママ」をやった女性とは思えないかもしれない。しかし、この劣等感を実際に A9 の心理尺度にも明確に表れているのだ。

劣等感と優越感の同居という奇妙なアンバランスを、これまでも何度もキャバクラ嬢のナラティブの中に見てきたが、彼女ほど劣等感が顕著な女性もいないかもしれない。確かに、A4 や A5 も、一般論として十分に魅力的であるにもかかわらず、「整形したい」とまるで口癖のように言う。2 人に加えて、A2 と A7 も明らかに摂食障害が疑われるレベルで既に十分に痩せているにもかかわらず、「もっと痩せたい」と望んでいる。彼女達はある意味その劣等感故に、異常なまでに美に憑りつかれていると言っていいだろう。彼女達の中では、自尊感情と容貌は、完全にリンクしている。恐らく、内心自分達が持っている他者に誇れる特性は美しさしかなく、唯一無二のその価値だけは誰にも否定されたくないと願っているのであろう。美しさは、彼女達にとってはかけがえのない、たった一つの縋り付くような「アイデンティティ」なのである。

しかし、ポストモダン社会の中では、アイデンティティは、自分自身と他者が決めるだけでは不十分であり、「社会」という第三者の審級が無ければ確立しないと Bauman が指摘したことは既述の通りである。従って、キャバクラやスナックというスティグマタイズされた仕事に従事する限り、美しさという彼女達が縋るアイデンティティの先に、人間存在としてのアイデンティティは決して見えてこない。社会的な「承認」から疎外された夜の世界で、美しさに縋って生きる限り、彼女達は人間存在としてのアイデンティティからも永遠に疎外されているのだ。

故に、彼女達のアイデンティティは、一様に未成熟である。インタビューに先駆けて実施した心理尺度のうち、「多次元自我同一性尺度」の全ての項目で良好な数字を出したのは、次項で検討する A12 ただ 1 人である。A2, A4, A9 の 3 人が 4 次元の全てで不良な得点を残しており、他の女性達も A1 を除けば一様に得点が低い。そして、明らかにこれは偶然の結果ではない。アイデンティティが「価値あるコミュニティ」からの「承認」が不可欠であるとするならば、成育歴の中にそれが存在するのが、A12 と A1 だけなのである。

A12 は、今回の A 群のインフォーマントの中で唯一の大学卒の女性である。そして、その大学も偏差値で 55 を超える社会的に十分に評価された大学である。そして、A1 は、〇〇〇〇の全国大会で 3 位という成績を 2 度残したスポーツエリートである。つまり、A12 と A1 の 2 人は、「承認に価値があるコミュニティ」に過去に帰属した経験があることによって、自己のアイデンティティを確立できているのである。

上記の考察を踏まえると、A12 と A1 以外の女性が異常なまでに「美しさ」に拘ることは理解できる。社会が十分な「承認」を与えてくれない彼女達にとって、自己満足と他者からの「承認」は、未熟な自己を肯定するために切実なものになってくる。学業能力が低く、社会人としての能力も低い彼女らが、唯一自己の

誇りとなっている容貌に強迫的に拘る心理は当然なのである。何故ならば、「容貌の否定」が、そのまま彼女達の「実存の否定」になるからである。A4やA5など、ある意味キャバクラ嬢の中でも「勝ち組」に属する№1の女性でもそう思うならば、そこに届きもしない容貌のA9ならば、一層その劣等感は強くなるであろう。13人のインフォーマントの中で、次項以降で検討する生活保護を受給中の女性A13や「実存的貧困」が顕著に伺えるA11の次にA9が、「多次元的自我同一性」のスコアが低いのは、ある意味当然なのである。そして、A9がスナックに移行した真の理由がそこから見えて来る。彼女は、恐らく逃げ出したのである。自分の「実存」が否定されるキャバクラという他の女性達と美しさを競い合う場所は、彼女にとって心安らぐ居場所たりえなかったのだ。

A8がスナックに移行した理由は、キャバクラよりもそちらの方が彼女にとっては「楽で居心地が良い」からであろう。A8は、A2のように達者な話術で場を盛り上げる能力に長けている訳でもなく、A4やA1、A5らのキャバクラ№1経験組や、デリヘルトップレベルのA6のように特別に秀でて美しい訳ではない。無論、年齢が既に30を超えているということもある。だが、スナックならば、十分「華」になれる容姿を未だに持っている。

キャバクラで若い女性達と美しさを競い合うには不十分な年齢に達した彼女にとっては、スナックが自分の自尊感情を一番保てる理想の居場所なのである。そして、A8に比べても女性として見劣りがするA9にとっては、キャバクラはさぞ自分の「実存」を否定される惨めな場所であっただろう。スナックでさえ、劣等感を感じるには十分なのかもしれない。指名客に対して感じるA9-230「ありがたい」という一言に、彼女の女性としての喜びと、それ以上の劣等感が集約されているように思われる。女性としての自分自身の魅力を信じられない彼女にとって、「君のために来たよ」と言ってくれる客は、さぞ救いだっただけに違いない。

A9の顔に対する極度の劣等感を額面通りに捉えるのはいささかナイーブ過ぎるかもしれないが、彼女の低い自己肯定感には根深いものが感じられる。恐らくそこには、単に容貌に対する劣等感以上の意味がある。そのような観点からA9のナラティブを丁寧に読み込むと、やはり彼女の人生には、公共性の領域での疎外が見つかるのである。キャバクラ嬢は、プレカリアートであるという主張をこれまでも続けて来たが、A9-80「んと、色んなとこ受けましたけど、全部落ちて、最終的にそこしか行くところが無かったみたいな感じなんですよ。」というA9のナラティブは、それを非常に分かり易く証明してくれる（※A-5-⑧参照）。彼女は、就職活動の際に何度も挫折を味わい、著しく自尊心を傷付けられている。Honnethの承認論で言えば、A9は連帯による「承認」を欠いているのである。そしてその状況は、現在の昼の仕事でも続いているのだ。

結婚し、夫もあり、年齢も29歳なのでA9は夜の世界にはもう戻るつもりはないという。例え未熟であっても「アイデンティティの再構成」も経て、彼女は「昼職への就業」で漸く自身の居場所を固定できそうである。だが、その昼の世界でも自分の居場所が無いのだ。不妊気味なせいで、彼女は夫と家で性生活を巡る葛藤があり、仕事以外でも将来に対する不安が尽きないという。従って、彼女は、Honnethの承認論で言えば、紛れも無く愛と連帯の両方の領域で疎外されているのである。そして、更にもう一つの追い打ちがあ

る。すなわち、スティグマである。

A9-193「そういう感じで、結局、『キャバ嬢は』とか『夜の女は』とかって言われるじゃないですか。だから、世の中から見ても偏見ってあるんだろうなってずっと思ってたし。」と語る A9 もまた、迫害的なまなざしを持った「内なる他者」に捉われている（※A-5-⑨参照）。彼女から見れば、A8 の無邪気なまでのスティグマの欠如は、さぞ羨ましいに違いない。A8 のこれまでの半生を彼女のナラティブから辿ってみると、「アイデンティティのゆらぎ」や「実存的な苦悩の体験」すらも明確には感じ取れない。だが、A8 の心理尺度の点数に目をやると、A1 のような圧倒的な自己肯定感も感じない。寧ろ、拡張版ホープレスネス尺度などは、かなりパワーレスな状態を示している。14 年という長きに渡り「承認に価値があるコミュニティ」ではない夜の世界に生きて来た A8 は、A1 のようにスティグマを克服したというよりは、ただ単にスティグマや偏見に対しての感覚が鈍り、麻痺しているだけなのかもしれない。或いは、「解離 (dissociation)」という防衛機制によって感情を区画化し、切り分けているのかもしれない。いずれにせよ、一見無邪気な仮面の下では、他のキャバクラ嬢達と同じように、迫害的なまなざしがじっと彼女を内から見つめ続けていたとしても、何らおかしくは無いと心理検査の結果は物語っている。

第 6 項 2 人のガールズバー、パパ活嬢の物語

本項では、最も長いキャリアがガールズバーの女性 2 人のナラティブを比較検討する。ガールズバーは、水商売の中では比較的新しい業態であり、若い女性が従事するという意味ではキャバクラに近い職種であるが、風営法に定められた業態でないため、深夜以降の営業も可能である。多くは朝の 5 時、6 時頃まで営業する形を取っており、女性は接客する際、キャバクラのように男性の横に直接腰を下ろすという形にはならない。あくまで、店のカウンター越しに対応する“バーの店員”という体裁を取り、風営法の規制をすり抜けるのだ。キャバクラのような厳密な指名制が無い場合も多く、その際はローテーションで客の対応にあたる。また、「同伴」や「アフター」といった、キャバクラの基本要素も無い場合がある。女性は T シャツやコスプレ等の店の統一ユニフォームを着ることが多く、ドレス着用が基本で、衣装や過度のヘアメイクに自前でお金をかける必要があるキャバクラに比べて女性の側の経済的負担が少なく、参入障壁が低いとも言われ、若い学生を中心にアルバイトとして最近では人気がある業態である。キャバクラと同じかそれ以上に働く女性が若いため、男性も比較的若い客が多く、値段もキャバクラよりは割安な設定になっている。しかし、最近はその人気を悪用して、客に対する悪質なぼったくりが行われて客と店がトラブルに発展することなどが度々報告されている。また、女性は指名制が無いので、稼ぐには男性から振舞われる酒を飲まなければ給与が上がらないシステムになっており、昨今お酒に弱い女性が無理をして急性アルコール中毒で倒れたり、泥酔させられて男性客から性的被害に遭うようなトラブルも多発し、問題視されてきている。

本項で検討する 2 人は、パパ活の SNS アプリを介して取材を依頼し、協力してもらった経緯があるので

が、話を聞いていて最も長い経験が水商売のガールズバーだったため、他のパパ活嬢と区分けして、敢えて A 群にカテゴライズした。また、他のパパ活嬢にも、同様に水商売経験がある者が多かったが、敢えてこの 2 人を選択し、他の A 群女性達とも比較するためにここに据えた。その理由は、本項で取り上げる A10 と A11 が、極めて似ていてかつ異なる特徴を持った者達であり、対比させる意味があると感じたからである。

パパ活は、最近 SNS やテレビ等でも紹介されている新しい男女の出会いで、基本的には男女の肉体関係は持たず、経済的に裕福な男性・パパが、経済的に困っている若い女性を支援し、それに対して女性はお茶やご飯を同席することで応えるという形態である。だが、実際は昔から存在するデートクラブと同様に、サイトや SNS アプリは素人売春の温床になっていると指摘されている。デートクラブと同様に、男女とも本人確認等があるが、ほとんどは SNS を通して行われる簡易的なもののため、店側に詳細な身分証を控ええられるデートクラブに比べて心理的負担は少なく、参入障壁は男女とも低い。サイトや SNS の利用料は基本的に男性が月額で負担し、女性は無料でメール等のやりとりも自由にできるために女性の登録数の方が圧倒的に多く、結果、複数の女性で 1 人の男性の奪い合いになるために、女性は顔写真まで載せて、ある程度のプロフィールを公開しないと男性からメールすらもらえない状況である。

女性も男性もサイトや SNS のマッチングアプリに登録する際は、裕福で時間のあるパパ＝支援者、夢に向かう女性＝被支援者、というパパ活の建前上のルールに同意して参加するのであるが、登録後のメールのやり取り内容は基本的に検閲を受けず、ほぼ自由なので、そこで非公式に様々な取引が行われている。一般的に「茶飯」と呼ばれるお茶、或いは食事のみのデートは通常男性が 5,000 円～10,000 円、「大人の関係」と呼ばれる素人売春の場合は、30,000～40,000 円を女性に対して、当日前金で支払う形になる。「顔合わせ」といって、お互いの相性を確認する簡単な打ち合わせの場合は、無料か 3,000 円から 5,000 円程度を、「交通費」或いは「お手当」という名目で男性が負担する。パパ活がポジティブなイメージで何度かマスメディアで取り上げられ、夢を追う女性とそれを支援する裕福な足長おじさんの構図が大手ニュースサイトにも大々的に載るようになってからは、男女ともサイトやマッチングアプリへの参入が急増し、上記の価格帯は値崩れしていると言われる。

本項で比較する A10 と A11 は、ともにガールズバーが一番経験が長かったのだが、最近のブームに乗って、SNS のマッチングアプリに登録して、パパ活を始めたところであった。A10 は、水商売も既に卒業して正社員として首都圏で勤務しており、パパ活はあくまで少し良い暮らしをするための小遣い稼ぎであるという。また、A11 は、田舎から上京してきて芸能系の専門学校に通っているため、学費や生活費等も全て自分で稼がなければならない、パパ活は不可欠な「お仕事」と明言する。そして、パパと肉体関係は持たず、数回デートしてそれっきりという関係を続けている A10 と異なり、A11 は生計を賄うために、時にデートだけでなく高値（70,000 円）での売春も行っている。まずは、2 人のガールズバー勤務に関するナラティブを比較し、その後何故、彼女達がパパ活に移行していったのかを検討したい。

A10 は、A10-20「そうです。でもお酒が弱いので、あんまりこうたくさんは。飲まずに、どちらかと言

うと結構こう、飲むの作ったりとかする方に専念してたかもしれないです。」と語るように、お酒が弱い。また、A10-21「嫌だった点はやっぱりね、ちょっとストレスはありますね。男性とこう、なんか、ね、初対面の男性としゃべるので。」から分かるのは、キャバクラの様なテンションを挙げてコミュニケーションを積極的に図らなければならない場所には向いていないということである（※A-6-①参照）。

前項で、キャバクラで通用しない容姿と年齢の女性達は、あたかも裏社会の「パイプライン・システム」で分けられるように、スナック、デリヘル等に流れていくことを指摘したが、首都圏や政令市のように大都市になると、水商売の形態はより一層多様化し、地方都市にはあまり存在しないガールズバーもその選択肢に入ってくる。そして、ここでA10が指摘しているように、ガールズバーは、アルバイト感覚で若い女性が勤務するには都合がいいのである。キャバクラは、客からの指名を取らなければ時給も上がらず、ノルマも店によってはかなり厳しかったりする。また、女性達を競わせるために、毎日のように成績を発表したりして、店側が女性のモチベーションを上げようとする。昼の世界の新自由主義的メカニズムが経営管理の手法としてキャバクラの世界にも完全に入り込み、競争原理によって女性達を統治しているのである。

A10は今でこそ正社員であるが、それ以前は専門学校中退後もまじめに就職活動もせずに数年間はフリーターとして漫然と〇〇で過ごしてきた。昼の世界の新自由主義では敗者の側であり、夜の世界に身を置いても、やはり状況は同じだった。優勝劣敗の市場原理が支配し、明確な勝ち負けが発生するキャバクラのマネーゲームを戦い抜く強いメンタリティとモチベーションを持たず、かといって、スナックに行くには年齢が若過ぎる彼女は、若さと容姿だけを武器にして、さほど努力せずとも戦うことができるガールズバーという場所に身を置いたのである。彼女は、フリーター時代の生計を維持するために昼のアルバイトだけでは全く足りず、夜のガールズバーの収入、十数万を足してようやく〇〇で生活が成り立ったという。従って、享楽型ではなく、あくまで貧困型の水商売従事者である。

専門学校の学費だけは家族に負担して貰っていたA10と異なり、大家族のため、その費用も自分で働いて工面していたA11は、完全な貧困型の水商売従事者であるのみならず、生きるために売春まで行っている。そして、最近始めたパパ活の効率の良さから、遂には水商売を完全に辞めて、現在はパパ活をメインに生計を立てているのだ。

A11-120「んーなんか、風俗だと絶対そういう行為をしなくちゃいけないっていうのがたぶんわたしは耐えられない。なんか、条件があって、今だって条件が合う人としかしないですし。そう。」というナラティブから分かる通り、彼女には性風俗産業に対する強いスティグマがある（※A-6-②参照）。そして、自分のライフスタイルに合わせて働きたいというニーズもある。彼女にとっては、水商売の中でも比較的緩いガールズバーやパパ活が最も都合が良かったのである。

A10、A11の暮らしから浮かび上がってくるのは、首都圏で若い女性が1人で生きていくことの困難さである。中村の『東京貧困女子』で描かれている通り、物価が高く、地縁に全く期待できない首都圏に夢を抱いて上京してきた女性達が、そこで単身で生きていくには何らかの正業に就かなければならない。しかし、

これまで縷々述べてきた通り、格差社会の日本において、そして「貧困の女性化」が進む社会構造の中で、若い女性が、仮に昼の正業に就いたとしても、決して生活は経済的に安定しないのである。A10は、正社員＋パパ活の組み合わせで何とか今の生活が成り立っているものであり、昼の正社員だけでは彼女が求める可処分所得に到底届かないのだ。A11のように学費まで自分で賄わなければならない専門学校生であれば、昼は短時間のアルバイト程度しかできない。必然的に、何らかの高時給な副業が必要になり、貧困な若い女性にとって、従来は水商売か風俗しか選択肢が無かったのであるが、昨今ここに新しい領域、パパ活というグレーゾーンが誕生したのである。

A11が語っているように、性風俗産業は特殊なケアワークである以上、その仕事が生理的に受け付けられない女性の方が寧ろ多いであろう。看護や介護という身体接触を伴うケアワークを全ての女性ができないのと同じである。しかし、性風俗産業に従事すれば、客である以上全ての男性を等しく扱い、平等に性的サービスを提供しなければならない。彼女はそのような形態では働きたくないのであるが、パパ活のように、自分が生理的に受け付ける範囲の男性であるならば、売春を行うことにも大きな抵抗はないのだ。客のニーズに合わせて、客の都合でサービスを提供するのではなく、時には食事だけ、時には売春も行うという形で、A11は自分自身の都合を優先させながら、性的サービスを主体的に提供して生計を立てている。これが、彼女なりのエイジェンシーの発揮方法なのである。実際、彼女は単純に男性に性的に搾取されているだけのか弱い被害者ではない。あくまで主導権を自分の側に置こうとする。また、その「仕事」を強要されて、嫌々行っている訳でもない。ガールズバーの時代から、A11は、エイジェンシーを発揮しながら、男性客からの癒しも得ているのである。

だが、彼女の自尊感情は低い。心理検査は概ね不良である。何故ならば、A11は中学時代から執拗ないじめに遭っていたからだ。笑顔が不気味だということで、彼女に付けられたあだ名は「キモワライ」だった。それが原因で男性恐怖症になったのだが、田舎から上京すると同時に、彼女曰く、それを克服するためにガールズバーに身を置いたのである。これは、水嶋が、自身の「性の三重苦」を克服するために、性風俗の世界に入ったのと極めて似たパターンである。A11-26「まあ、それもあるし、一番は自分の自信を取り戻したいなと思って。」というA11のナラティブから、仕事を通して彼女の個人の尊厳が幾許かその仕事から回復されたのが理解できる（※A-6-③参照）。彼女にとっては、ガールズバーはいじめによって毀損された自信を取り戻すための貴重な「居場所」なのである。

芸能系の専門学校で自分の夢を叶えるためには、昼の学業を疎かにはできない。そして、ガールズバーは、キャバクラ並みの高時給ではあっても、朝方までお酒を飲まなければならないという時間的制約が厳しい。そこで、彼女が選択したのが、パパ活なのである。理由は、先述の通り、風俗であれば嫌な客であっても客に合わせて自分を殺してサービス提供をしなければならないが、パパ活は、実質的には個人の素人売春のためにトラブルのリスクを個人で背負う分、行動や選択の自由度が高いからだ。そして、A11-85「んー。面白くはないけど、面白くはないけど,,、あの、なんだろう、やっぱ自分のためになることは多いですね。」と語

るように、A11 は、そこでもある程度のエイジェンシーを発揮して、それなりに仕事を楽しんでいるのである。だが、居場所機能を持っていたガールズバーと異なり、パパ活は完全に「仕事」としての側面が強い（※A-6-④参照）。A11-180「わたしは仕事って認識。生きるための、生きるために必要なものって思ってます。」というナラティブが示す通り、A11 は、はっきりと自分がしているパパ活と売春行為は、〇〇で生きるための「仕事」だと断言する。パパ活はやりたくてやっている訳では無いが、彼女にとっては夢を追うために不可欠なものが〇〇での活動と専門学校生活であり、そのためには多大なお金が必要なのである。新自由主義社会においては、夢はただでは見られない。それを叶えるためには相応のお金がかかってしまうのだ。A11 のように、家族福祉に恵まれず、首都圏から遠く離れた実家から上京して夢を叶えようとするならば、貧困と売春は、その夢の実現のために支払うべき過酷な対価なのである。

A11 が、パパ活やそれに付属する売春を「仕事」とであると明言する一方で、A10 は、あくまで副業、小遣い稼ぎとそれを位置付ける。20 歳の A11 と違い、若者特有の浮ついた夢を諦めた 28 歳の A10 には、A11 の様にお金に執着し、売春をしてまでパパ活を続ける意味は無い。だが、彼女は、昼の正業だけでは満足できないのである。そして、彼女もまた A11 同様に、ガールズバーやパパ活を通して「癒され」、そしてそこで得たお金で更なる「癒し」を買おうとしているのだ。逆に言えば、彼女の日々の暮らしには、憧れの大都市で、正社員で働いているにもかかわらず、潤いや彩りが無いのである。A10-92「いや、ま、安定してるとは言ってもそんなにいいお給料もらってるわけじゃないので、ま、普通か、普通くらいなので。ま、ちょっと贅沢したいってなると、ま、今の給料だけだと難しいので。」のナラティブが示すように、彼女は決して貧困ではない。だが、満足もしていない。満たされていないのである。その欠乏感を埋めるために、A10-213「うん。乃木坂。いや、昔はジャニーズ、結構、なんでもいいんですよ。昔はジャニーズ好きでしたし、ちょっと前まで、ちょっと前まで、今もですけど、プロレスとかも好きでしたし。」と彼女はアイドルやプロレスなど、夢中になれる「何か」に癒しを求める。A10 の抱える欠乏感は、A10-204「いや、全然、なんでもいいです。その、褒められる系の内容だったらなんでもいいです。」というナラティブからも明らかだ。彼女は、切実に「承認」を求めている。これまで検討してきた女性の多くは、「女性としての魅力」を「承認」して貰いたがっていた。一方で、A10 は、1 人の人間としての「実存」を「承認」して欲しいのである。A5 があくまで女性としての魅力に拘り、「綺麗になりたい。いつまでも綺麗でいたい」と語っていたのも印象深い。A10 の様な一見社会に適応し、正社員として首都圏で働いている有能な女性であっても、より根本的な「承認」を求めてパパ活を行ったり、アイドルに夢中になっている状況に、ポストモダン社会に蔓延している存在論的な不安の深刻さが垣間見られるのである（※A-6-⑤参照）。

A10 も、A11 同様に、各種心理検査の結果は、総じて女子大生平均よりも低いのである。年齢的に、アイデンティティなどは、女子大生よりも遥かに確立していなければならない歳であるにもかかわらず、彼女は、仕事などの「日常」の「何か」ではなく、「非日常」の世界観を身にまとう女性アイドルに夢中になっている。そして、乃木坂 46 の女性達の活躍に、A10-212「癒される」というのである。すなわち、彼女は「成功」

しているにもかかわらず、「充足」に達していない，SQ（サン・クエンティン）の対極，Frankl の「実存的空虚」の状態に置かれているのだ。自身の満たされない感覚，欠乏感を埋めるために彼女は，ガールズバーやパパ活を通して，第三者からの「承認」を欲している。A10-204「いや，全然，なんでもいいです。その，褒められる系の内容だったらなんでもいいです。」や，A10-205「褒めてもらいたい。」というナラティブに，彼女の切実な承認欲求が表れている。

A10 は，A11 と異なり，過去に酷いいじめに遭った訳でもなく，機能不全家族に育った訳でも無い。少なくともインタビューを通しては，専門学校を最終学年時に中退した以外は，特に成育歴に「内的作業モデル」が大きく欠損するような要因は確認できなかった。しかし，明らかに心理検査の低さが証明するように，彼女の自尊感情は，若く美しい女性であるにもかかわらず，有意に低い。「近代的不幸」が人生に見受けられない彼女が，前章で触れた A12 と同じ類の「現代的な不幸」をそのナラティブから感じさせるのは，一体何故なのか，結局最後まで明確な結論は見出せなかった。ただ，間違いなく言えることは，A10 には，「承認」への飢えがあるということである。それも，恐らく，Honneth の承認論で言えば，愛の領域で，である。その理由は，昼の世界における正社員という立場から，彼女は既に法の領域においては十分に「承認」されているからだ。そして，連帯の領域で見ても，首都圏で「普通」のお給料を貰っている以上，業績原理において排除されることは無いはずだ。故に，彼女の「承認」への飢えは，必然的に愛の領域に限られてくる。故に，彼女のパワーレスな状態は，「実存的貧困」概念で捕捉され得る状態なのである。それを示唆するのが，女性アイドルへの憧れであるが，いみじくも A11 が学校に通いながら目指しているのも声優というアイドルなのである。

Stiegler の『象徴の貧困』において，自らが社会において何らかの象徴（シンボル）を生産できない限り，その人間は「集团的個体化」から疎外されて，自己を喪失するということが指摘された。そして，間違いなくこの 2 人は，「象徴の貧困」概念でも，その心理尺度の低さを説明可能である。何故ならば，文字通りの象徴（シンボル）として，一方はアイドルを崇め，もう一方はアイドルになろうとしているからだ。しかし，A10 と A11 が抱える生きづらさは，必死に他者からの「承認」を求めるという意味では一緒なのであるが，その方向性は寧ろ対極なのではないかと思われるのだ。ここでは，その分析のための理解の補助線として，精神分析の「防衛機制（defence mechanism）」を用いてみよう。

Vaillant の防衛機制の 4 分類に従えば，A10 が用いているのは，レベル 4（成熟した防衛）の「同一視（Identification）」である。文字通り彼女は，特別な存在になって「承認」されたいのであるが，それは現実世界では実現されない。28 歳の彼女には，アイドルになるチャンスはもう無いのである。従って，彼女は乃木坂 46 のライブに通い，メンバーの個別握手会のためにわざわざ休日に千葉県幕張メッセを訪れてまで，彼女達とのたった数秒間の握手で「癒され」ているのである。「同一視」は「昇華（sublimation）」などと同じ，成熟した防衛機制であり，それによって本人が苦しむことは無い。事実，彼女は「同一視」によって「癒し」を得ている。アイドルの語源が偶像であり，元来は宗教的なシンボルを意味する事実が示すよう

に、現代日本のアイドルは、神無き時代の「癒し」であり、時には「救い」にさえなるのである。濱野智史の『前田敦子はキリストを超えた：〈宗教〉としてのAKB48』は、そうした視点から描かれている。

一方で、A11 のナラティブから浮かび上がるのは、「投影 (Projection)」という防衛機制である。レベル 2 (未熟な防衛) の防衛機制である「投影」は、自分自身の中にある受け入れがたい不快な感情を、自分以外の他者が持っていると感じ覚することである。例えば、自分が憎んでいる相手を「憎んでいる」とは意識できず、相手が自分を憎んでおり攻撃してくるのではないかと思ひ恐れる、自分が性的な欲望を感じている異性に対し、相手が自分に情欲を感じていると思ひ、「誘惑されている」と感じたりする。

何故、A11 がこのような未熟な防衛をしていると感じるのかと言えば、彼女の言動と行動がしばしば矛盾しているからである。例えば、原田 104「やっぱ男性から必要とされるということがすごく自信につながってるんだね。」に対して、A11-104「そうですね。」と A10 は答えるのであるが、何故、軽蔑している男性からの「承認」に対して喜びを感じるのでしょうか。ガールズバーの時から、男性から肯定的な言葉掛けをされると嬉しいと彼女は言っているが、そもそも彼女は、A11-7「いないことって、必要と感ぜない、ことがあります。」とまで、男性を否定しているのである (※A-6・⑥参照)。彼女が味わったいじめが典型例であるが、誰かを無視していないことにするのは、いじめの中で一番辛いとよく当事者達から指摘される。暴言を吐かれたり、殴られたりするのとは、まだ対象として認識されているから我慢できるが、無視となると、存在が無いものとして扱われることになる。そして、人間は、殴られる物理的な痛みには耐えられても、存在を認知されないことには耐えられないのだ。殴られる痛み以上に、「実存」を否定されることは、人の精神を完膚なきまでに打ち砕く。Honneth が指摘するように、社会的な存在である人間の人生は、畢竟「『承認』をめぐる闘争」なのである。換言すれば、「承認」されない状態を避けるのが人生の本質なのである。

しかし、世界には価値の無い「承認」というものがある。例えば、奴隷制度が堅固だった時代、アメリカの富裕層の社会において、奴隷である黒人の前では、婦人達は普通に裸になって着替えたと言われるが、それは黒人男性の存在が、社会の中で無いことにされているからである。「非承認」の存在は、性的な対象として完全に除外され、それに対しては羞恥心すら働かないのだ。これはある意味、究極の「物象化」である。黒人男性は、白人女性の裸に欲情するはずもない「モノ」として、認識されていたのである。故に、「モノ」である黒人男性からなされる「承認」は、絶対にあり得ないのだ。従って、仮に黒人男性がどれ程見事な言葉で女性達を褒め称えても、その「承認」には全く価値は無い。あくまで、「承認」は自分が価値を認めた存在から与えられて初めて真の「承認」たり得るからだ。

そう考えると、A11 のナラティブに大きな矛盾があることに気付かされる。彼女は、自分を迫害した男性達を敷衍して、世の男性全てを A11-7 の発言で「物象化」している訳だが、その後、その男性達からの称賛に素直に喜び、「非承認」には心から落ち込んでいる。これが A11 の本心であるならば、先の A11-7 のナラティブこそが、偽なのである。つまりこれは、未熟な防衛機制なのだ。自分が本当は男性からの「承認」に最大の価値を置いていることを、彼女は認めたくないのである。そして、最大の価値を置いている存在か

ら否定されることは、ある意味最も耐え難い「非承認」である。それに耐えることができない未熟な自我を抱えているからこそ、A11 は、防衛機制を発動して、男性の「物象化」、精神分析の言葉に言い換えれば、「脱価値化」をしているのである。これは、典型的な境界性パーソナリティ障害（BPD）の心性であるが、事実彼女の「ミロン臨床多軸目録境界性スケール 17 項目短縮版」の結果は、カットオフポイントを超えており、BPD の病的水準を示唆している。

東電 OL が、時に外国人に対して 2,000 円という破格の値段で売春をしていたことは既述の通りであるが、A11-112「んー、安く売りたいくないから、7（万円）からにします。」と語る A11 の値段設定は、完全に高級娼婦のそれである（※A-6-⑦参照）。だが、ここにも彼女の未熟な防衛機制が伺えるのではないだろうか。彼女は、恐らく断られても自分が傷付かない金額を取って設定しているのである。相場のほぼ二倍の金額を提示し、幸運にも相手がその条件を飲んでくれれば自分の女性としての価値は二倍だと実感できる。そして、仮にダメでも自分は元来セックスが、男性が好きではないと、防衛機制を発動させて強かに予防線を張っておけば、自我の傷付きは最小限度に抑えることができる。ここから筆者の眼前に浮かび上がってくる A11 の本当の姿は、言葉の強さとは裏腹な、極めて繊細で脆い内面を抱えた女性像である。

従って、彼女のしばしば矛盾するナラティブは全てを額面通りには受け取れない。これ程歪んだ防衛機制を身に着けたということは、A11 が中学時代に酷いいじめを受けていたと傷付いたというのは事実であろうし、その際好きだった男性からまで、「キモワライ」と陰口を言われて存在を否定されたことは、彼女の「内的作業モデル」と「実存」を毀損するに十分であっただろう。この事件が、彼女の防衛機制の原因だというのは間違いないと思うのだが、だからこそ、彼女の男性嫌悪（ミサンドリー）が寧ろ改めて疑わしく感じられてしまうのだ。そもそも彼女は今でも本当に男性が嫌いなのだろうか。彼女は、ガールズバーによってそれを克服したというのであるが、それも事実とは異なるのではないだろうか。寧ろ、過去から現在に至るまで、彼女ほど男性を求め、誰よりもその愛を必要としている女性はいないのではないだろうか、と思ってしまうのである。それを疑わせるのが、A11-79 のナラティブ、「なんか、男性恐怖症っていうのは怖いとかじゃなくて、怖いとかじゃなくて、なんだろ、信用ができないだけ。怖くはもうないんですけど、信用はできないだけ。」である。男性が「怖い」と言いながら、売春までして取って好みの男性に接近している彼女の行動の矛盾から、やはり素直にこのナラティブを額面通りには受け取れない。彼女は、いじめられた男性達を憎いと言いながら、他ならぬその男性にこそやはり女性として「承認」されたいのである。

そしてその意味で、A10 とは全く「承認」の方向性が違うのだ。A10-204「いや、全然、なんでもいいです。その、褒められる系の内容だったらなんでもいいです。」や、A10-205「褒めてもらいたい。」は、レベル 4 の防衛機制を用いる A10 の言葉である以上、寧ろ額面通りに素直に受け取れる。彼女は、男性でも女性でも、部下でも上司でも同僚でも、とにかく誰でもいいから自分の存在、すなわち「実存」を「承認」してくれる人が欲しいのである。一方、A10 は、「承認」されたい対象は明らかに「男性」しか考えられない。そして、恐らく、それは性的な意味での承認願望を含むものであると思われる。何故ならば、繰り返しにな

るが、『終わらない日常』のなかを、欠落を抱えたまま生きなければならないとき、そういう自分を全体として肯定できるチャンスは、宗教と性にしかない」（宮台 1998：164）からだ。従って、彼女はやはり「実存的貧困」状態にあると考えられるのである。いや、生活水準から考えれば、「絶望的貧困」と見て差し支えないであろう。彼女の心理検査の結果がほぼ全面的に低いこと、すなわちパワーレスな状態であることは、それで納得できるのである。

一方、それなりに生活を安定させている A10 は、Frankl が指摘した典型的な「実存的空虚」である。そして、彼女自身理解できない虚しさの根源には、A11 ほどではないにしろ、何らかの根深い「承認」の欠如と「要請の少なさ」があると思われる。ただ、彼女は、正社員になれるだけの近代的なメリトクラシー型能力と現代的なハイパー・メリトクラシー型能力の両方を成長と共に社会の中で身に着けたため、A11 のような未熟な防衛機制を用いないのである。その人間としての成熟度の違いが、両者の「自傷的存在証明」の軽重に明確に表れているのだ。

ここで、A10 と A11 が、共に「実存的貧困」概念の枠内の対象であることが理解される訳であるが、それを証明する社会的排除とスティグマの存在を 2 人のナラティブから改めて確認したい。

A11-175 「（一般人はパパ活を援助交際として）見てと思う。てか、なんか、うん。周りの友達と最近流行ってるパパ活の話になったりするんです。ドキッとするけど。その時に、なんか、『援交みたいなもんじゃん』、『ダメだよ』、みたいな話になったりするんで、ああやっぱ認識的にはそんなもんなんだって。」と A11 は、パパ活に対する自身のスティグマを吐露する（※A-6-⑧参照）。A11 は、ガールズバーで働いていることは、家族に普通に話せるという。そこには、実際社会的なスティグマはさほどないのである。一方で、パパ活に対するスティグマは根深い。建前上、パパ活は肉体関係を伴わない清い関係なはずである。裕福な足長おじさんが、頑張っている若い女性の夢を応援するために、食事やデートの対価として、お手当を支払うのである。だが、このような夢物語を信じる者は、社会の中にほとんどいないだろう。A11-174 の「でもたぶん一般の人から見たら、たぶん援交と何一つ変わらないと思う。」という言葉に端的に表されているように、一般人の感覚では、パパ活＝援助交際、すなわち、売春なのである。そこには、ガールズバーとは比較にならないスティグマが存在するのだ。そして、それが社会的排除の要因である以上、A11 が置かれた状態、異常に男性からの「承認」を欲する状況は、単なる「実存的空虚」では終わらない。それは、「実存的貧困」或いは「絶望的貧困」状態なのである。そして、全く同じことが、A10 に対しても言えるであろう。A10 も、パパ活に対して、強いスティグマを実感している。A10-139 「んー。そうですね。キャバクラだとやっぱりその、ね、キャバクラで働いてたみたいなイメージがその会社の中でもないの、え、キャバクラ、実は体験入店くらいしたことありますよ、とかはたぶんネタで言える感じだと思うんですよ。で、え一意外一、みたいな。けどパパ活してますはちょっと、何か笑えない感じがする。なんか。」と語る A10 も、水商売であるキャバクラは、まだ周囲にネタとして話せるという。だが、パパ活は笑えないし、周囲から完全に引かれるだろうと指摘するのである（※A-6-⑨参照）。

A10 は、A11 と異なり、キャバクラやガールズバーを「仕事」と認める一方で、パパ活を「仕事」とは認識しない。そして、「仕事」として男性とお酒を飲むことはやましさを感ぜないにもかかわらず、「仕事」ではないパパ活で食事をするには、スティグマを実感してしまうのである。A10-138「やっぱりその、なんでしょうね、男の人と2人で会う、っていうのがなんか、後ろめたさ。たぶん他の子もお客さんで、お店の中でお客さんと店員さんでお店の中で、で働いてるわけじゃないですか。仕事として。パパ活は別にそういうアレじゃなくてこう、別に仕事でもなく、男の人と1対1でこう、どこかに行くみたいな、結構、ハードル高いですよ。ね。と思っちゃいますね。」というナラティブが示すように、A10 がそう感じる理由は、男性と仕事でもないのに、金銭を介して2人きりで会うことに対する後ろめたさなのである。

しかし、A10 は、実際に売春行為は一切していないのだ。それを男性から求められるようになったら、なるべく自然な形でフェイドアウトして、別のパパとの食事やデートだけの関係を始める。本来のパパ活の定義に近い形でシステムを運用している A10 が、それでもスティグマを感じてしまうのは、一般人がパパ活を援助交際、つまり素人売春であろうという疑いの目で見ていることを、日々の暮らしの中で実感してしまうからである。従って、A11 のように実際に売春を行うか否かは、さほど重要ではないのである。パパ活に対する社会的な認識は売春であり、それはある意味他の性風俗産業と何も変わらないか、或いはそれ以下の「賤業」なのである。このようなスティグマを内在化させてしまえば、A10 も A11 も、自己のアイデンティティを確立することなどできない。しかし、ガールズバー時代に感じなかったスティグマと社会から排除される感覚を、パパ活という行為が彼女達に与えているにもかかわらず、彼女達はそこから離れられないのだ。それは、本質的にこの2人の女性が「承認」に異常なまでに飢えているからなのである。

新自由主義的統治によって、彼女達はセルフ・マネージメントを強要されている消費社会を生きている。彼女達は、「実存的空虚」とその日々のストレスを解消するために、パパ活とそこから手に入るお金で、人間の条件である消費によって精神の安定を買おうとするのであるが、結果的に隠れてその行為を行くことが、逆に自身のスティグマ化を強めてしまうのである。それが、「実存的空虚」を「実存的貧困」にまで悪化させ、そしてその結果、「自傷的存在証明」が発動する。A10 の場合は、正社員であるにもかかわらず、パパ活を結局辞められない。会社にバレて解雇されるリスクや、不倫を疑われて相手のパートナーに訴えられるリスクがまるで計算されていないのである。A11 の場合は、違法の売春を行いながら、多額の学費を専門学校に費やして、決して現実的とは言えない夢を追う。否、夢を追うというよりも、現実から逃げる。Fromm 式に言えば、「自由からの逃走」である。正社員制度など存在しない、極めて水物の芸能人である声優を目指すというリスク、そして、それに失敗して大都会で生活が行き詰まった時のリスク、更に実際にパパと肉体関係を持つ以上、A10 以上の確率で相手のパートナーに訴えられて慰謝料を請求されるリスクなど、本来彼女は様々なリスクを検討しながら、被害が最小化されるような人生の選択肢を選ばなければならない。それが、ポストモダンの「リスク社会」を生きるということである。しかし、彼女はそのような保険統計的計算を、意識的にか無意識的にか完全に放棄している。その結果、彼女は自傷的にほぼ敗北が確定した人生ゲームに

徒手空拳のままで挑むのである。

原田 187：なるほど。自分で自活したいって気持ちがすごい強いのはわかるんですけど、声優って正直水物というか当たりはずれあるような気がするんだけど、成功する自信はありますか？

A11-187：んー。はっきり言っちゃうと、無いに等しいけど,,,

原田 188：無いに等しいの？

A11-188：そう。別に 0 パーセントじゃないし、うん。自分の進め方次第で変わると思うし。その声優業界の時代の流れにもよると思うし。(成功の可能性は) 無くはないなと思うけど、自信は無い。

原田 189：目標は平野綾だけ？

A11-189：んー、みたいな感じ。

原田 190：ミュージカルにも出て？

A11-190：出たい。いろんな活動したい。

(中略)

原田 232：最後にひとつだけ。あなたにとって生きる意味ってなんですか？

A11-232：生きる意味ですか？生きる意味？生きる意味か。生きる,, , 生きる意味,,,, , ん,,,, , 何のために生きてるかってこと？

原田 233：うん。何のために生きてます？

A11-233：何のために生きてるかって言われたら、自分に自信持つため。自分の価値をあげるため、かな。生きてる、と、思う。

原田 234：ということは、今はその目標に辿り着いてないってこと？

A11-234：ま、その価値はずっと上がり続けるんですけど、目標が。

原田 235：自信が足りないから、目標がどんどん天井知らずで上がっていくんだ。

A11-235：上がっていくと思う。なんか。

原田 236：常により高い目標目指して自分の価値を上げ続けていくのが人生なんだ？

A11-236：と思ってます。夢目指すのだって、自分が周りに「すごい」とか、「有名人だー」みたいな感じに尊敬されるっていう承認欲求があるのはあると思いますし、なんだろう、お洒落するのだってその認められたいし可愛いつて思われたいからっていうのもあるから、たぶん、たぶんそういう事なんだと思うんですけどね。あんま深く考えたことないけど。

A11 の A11-233「何のために生きてるかって言われたら、自分に自信持つため。自分の価値をあげるため、かな。生きてる、と、思う。」というナラティブは、Frankl のロゴセラピーの視点からすれば、「実存的

空虚」を生み出す誤った生き方そのものであり、典型的な人生の目的と手段の取り違いである。Frankl (= 2011 : 68) は、「自己実現は人の究極的目的ではありません。自己実現は人の第一の意図ですらありません。自己実現はそれ自体を目的とするのであれば、人間の実存の自己超越的性質と矛盾することになります。幸福と同じく、自己実現は一結果であり意味充足の結果です。人はこの世においてある一つの意味を充足する限りにおいてのみ、自らを充足するのです。」と指摘しているが、A11 は、自分の価値を高めることを人生の目的に据えてしまっているからこそ、今現在「実存的空虚」に陥っているものであり、更に間違った努力として売春行為を行い、そこでスティグマを実感してしまうが故に、「実存的貧困」状態で苦しんでいるのである。彼女が声優になりたいと本気で思っているのであれば、生きる意味、すなわち人生の目的は本来は、声優になって自分が好きな仕事をするのであったり、そこでその仕事が高く評価されたりすることであろう。しかし、彼女のナラティブから分かるのは、そもそもその声優の仕事は実は人生の「目的」なのではなく、単なる「手段」なのである。そして、真の目的は、自分自身の承認欲求を満たすことなのだ。だが、本来それは、目的に向かって努力した「結果」として得られるべきものである。仮に人生において望むものが手に入らなかったとしても、正当な努力の結果であれば、その人生をやり切った思いと共に、何がしかの「承認」が、自己と他者から得られるものなのである。ところが、A11 は、本来の目的である声優の仕事に、最初からほとんど希望を見出していない。A11-187「んー。はっきり言っちゃうと、無いに等しいけど,,,」というナラティブから明らかなように、彼女は本来の目的に対して、かなり悲観的である。その状況で何故、A11-234「ま、その価値はずっと上がり続けるんですけど、目標が。」という矛盾に満ち溢れた言葉が紡がれるのか。目標達成が遙か遠い現状において、不可思議にも彼女の中では目標の水準や目標の価値が下がるのではなく、逆に上がるのである。つまり、A11 の実存的フラストレーションは、反比例する形で際限の無い欲望のインフレーションを引き起こしているのである。

はじめに私は、性的快感は実存的フラストレーションからの逃避として機能するだろうと述べた。意味への意志の欲求が阻止されているこのような事例では、快楽への意志は意味への意志の派生物であるのみならず、その代用物でもあるのです。権力への意志も類似した同様の目的に奉仕するのです。意味を充足するという人間に独自の関心が挫かれた場合のみ、人は快楽に没頭するかもしれない満足するのです。

権力への意志が取る形態の一つに、私がお金への意志と呼んでいるものがあります。お金への意志は、性的に過剰な活動に加えて職業上でもあまりに過剰な活動が、実存的空虚を自覚することから逃避する機能を果たすことへの説明となりえます。

一旦お金への意志が勝ってしまうと、意味への追求は手段の追求に取って代わってしまいます。手段のままあるのではなく、お金が目標となってしまうのです。この事態は目的の追求を中断してしまうことになります。

そうするとお金の意味するところとは何であり、お金を持つことの意味はどのような問題があるのでしょうか。お金を所有する人のほとんどは実際のところお金によって所有され、お金を増やすことにとりつかれており、つまりお金の意味を彼らは無にしています。(Frankl=2011: 149-150)

A11-107「もうここまで、ここまで顔、うん、世の中本当に顔とお金ですべてだとわたしは思っているの。」というナラティブが孕む「実存的空虚」の闇は深い。彼女の人生の意味の追求は、単なる手段の追求に取って代わっており、そしてそれが、消費社会における際限の無い承認欲求の追求、すなわち消費による「人間の証明」を生み出してしまっているのだ。だが、彼女は元来の出自が貧困なのである。家族福祉は脆弱で、売春を「仕事」としなければ、大都会で生活が全く回らないほどの窮状に置かれているのである。売春を業として行う「売春婦」は、法の領域において「承認」されることはない。故に、社会的排除とスティグマは不可避であり、それを行わない A10 さえが、「売春婦」と同列に見做されることでスティグマを感じている以上、どれ程経済的な苦しさを理由に売春を正当化し、自己弁明しようとも、A11 が、「売春婦」のスティグマの軛から逃れるのは不可能であると思われる。そしてそれが更なる実存的フラストレーションを生み、「手段」の「目的化」に拍車をかけるのだが、欲望のインフレーションが引き起こす「自傷的存在証明」の先にあるのは自己の破滅でしかないことに、彼女は何時か気付く日が来るのであろうか。

第 7 項 2 人の失業中の元キャバクラ嬢の物語

本項で検討する 2 人の元キャバクラ嬢は、共に現在は無業者である。修士論文の研究開始当時の自分の仮説では、就労することには大きな意味があり、それによって「夜の世界の住人」というスティグマは解消され、元キャバクラ嬢の QOL は向上する、というものであった。志賀が社会的排除論で展開した、労働からの疎外が貧困の本質である、という論理とほぼ同じ考えである。その意味で言えば、本来 2 人の心理尺度の得点は、「昼職への就業」に移行した他の女性達に比べて低くなり、現役キャバクラ嬢と同程度にならなければならないはずである。しかし、実際にはそうならなかった。A12 は、全ての領域で健全な女子大学生の平均を優に上回る数値を示し、「生きがい感スケール」に至っては、A1 を遥かに超える 86 点という A 群の最高点を記録している。一方、A13 は当初の予測通り、57 点という最低点を記録した。失業者という社会参加を拒まれた状態にありながら、完全に対照的な心理尺度の数値を示した A12 と A13 のナラティブは、当初の仮説の誤りに確証を与えるだけでなく、スティグマの恐ろしさを再度我々に突き付けて来るものである。A13 は、単なる失業状態ではなく、現在は生活保護を受給して既に 2 年が経つのであるが、生活保護を受給することによって、元キャバクラ嬢という経歴に加えて「生活保護受給者」という不名誉なスティグマが加わり、より一層苦しい「2 重のスティグマ」に陥っていることになる。欧米で言うところの典型的な福祉依

存者のシングルマザー、すなわち「アンダークラス」である。彼女は、5つの心理尺度の全てで最悪の数値を出し、まさにどん底のパワーレス状態に陥っている。だがこれは、今までの考察から考えれば、ある意味当然のことかもしれない。A13は、小熊がいう「近代的不幸」と「現代的不幸」を併せ持った「2重の不幸」に加えて、「元キャバクラ嬢」と「生活保護受給者」という「2重のスティグマ」に苦しんでいるからだ。

一方、A12は求職中の失業者でありながら、心理尺度の全ての数値でほぼ最高に近い点数を出している。志賀の社会的排除論からすれば、失業したプレカリアートという労働から疎外された彼女の状態は、貧困でなければならない。だが、志賀の社会的排除論では、A12の心理尺度がこれほどまでに充実していることに對して、つまり、今現在は貧困ではないという事実に対して全く説明がつかないであろう。

A12の場合は、前節で指摘したように大学という「承認に価値あるコミュニティ」に属していた点は、やはり無視できない。また、他の12人の女性達が「現代的不幸」に加えて貧困・疾病・障害などの「近代的不幸」を自身の成育歴に多く抱えていたとすると、A12の場合、精神疾患を除けば、「現代的不幸」以外に特筆すべきものはさほど見当たらない。それなりに評価の高い大学を卒業したものの直ぐに「Lost in Transition」の状態に陥ったように、確かに彼女が抱えた「現代的不幸」は大きいように思われる。だが、彼女の生育家庭に目をやると、湯浅の「5重の排除」のうち、「企業福祉からの排除」以外は存在しないのである。彼女は、きちんとした教育を受け、温かい家族に恵まれて曲がりなりにも大学まで無事に育ってきた。大学では様々なサークル活動やクラブに属し、そこで培ってきた社会関係資本の豊富さは、今回の調査対象者の女性達の中では比較的恵まれている。それにもかかわらず、自傷行為は既に中学時代から始まっており、パニック障害（PD）や境界性パーソナリティ障害（BPD）などは深刻な状態である。「アイデンティティのゆらぎ」は最近まで続いており、人生が「生きづらい」という意味では、雨宮処凛の成育歴に非常に似通っている。また、雨宮が芸術系の大学に進学を希望したのと、A12が実際に芸術系の大学に通っていたことも、決して偶然ではないように思われる。そのような点を考慮しながら、2人の元キャバクラ嬢（A12はクラブのホステスとして同程度のキャリアがある）の失業者の会話分析にあたって、まずは、A12のナラティブの中から、彼女が抱えている「現代的不幸」とそれに基づくポストモダン社会の「生きづらさ」を検討して行きたい。

A12の「生きづらさ」を語る上で、象徴とも言うべきものが、大学4年生の時に作成した卒業制作である。雨宮が「思想に依存しているのではないかと悩み、右翼団体を辞めるまでを描いた」（雨宮 2009 : 162）ドキュメンタリー映画『新しい神様』（監督・土屋豊、主演・雨宮処凛）の中で、「現代的不幸」に苦しむ自分自身のアイデンティティの変化を表現したことと対比させると、A12が自らの卒業制作に込めた意味も理解し易くなる。彼女は、映像制作を専攻していたのであるが、「遺書ビデオ」を作ることにしたのである。A12-35「皆にあたしに向けての『さよなら』を言ってもらうっていうビデオを作って。で、その、なんかこう、あたしの語りみたいなのも入れて、こう、なんだろう、落ちてるっぽい映像っていうか、入れて、最後にあたしの語りがバーってあるんですけど、あたしはこう、皆に『さよなら』を言ってもらおうと思ったって。

そして、最後に皆の『さよなら』がバーって（笑）」というその作品を説明したナラティブは、今だからこそ笑いながら語れるが、当時の A12 は本気で死ぬ気だった（※A-7-①参照）。雨宮が映像制作で自分自身のアイデンティティを見直し、右翼という思想に依存していたことから脱却していくのに比べると、A12 の卒業制作には、一層否定的な場所から自身のアイデンティティに向き合ったことが見受けられる。彼女は、自身のアイデンティティの模索すら諦めて、人生を終わらせることをもう少しで選択するところだったのである。彼女が、そのように精神的に病んで行った原因をもう少し詳しく見てみると、浮かびあがってくるのが、深刻な「実存的空虚」である。そして、それを彼女にもたらししたのは、「非承認」なのである。彼女は、大学という世界から才能を、引いては「実存」を否定されたと感じたのだ。

A12-38「その、入った時っていうか、その高校生の段階で、受かるじゃないですか。『大学受かった』ってなって、そこで、『あたしこの道でもやって行けるんだ』みたいな思ったんですけど、大学入ってみたら、もう自分なんかより全然絵も上手いし、こう、映像撮るの上手かったり、編集が凄い上手かったり、なんかこう、荒々しいのに凄くセンスがあったりとか、そういう才能が凄い飛び抜けてるみたいな人ばかりで、それで『うわー、あたし全然才能無い』みたいなで、それでちょっと落ち込んだ部分もあったりして。『あたし、ここでやって行こうと思ったのに、全然できないじゃん』とか思ったりした部分もあって。で、そういう人でも勉強はできないかっていうと、そうではなかったりして。」というナラティブから、彼女の過敏で繊細過ぎる内面が浮かび上がってくる（※A-7-②参照）。彼女が苦しめるのは、まさに「相対的剥奪」なのだ。事実、大学に入るまでは、A12 は希望に満ち溢れていた。それが、大学に入って自分自身の才能がありふれたものである現実と直面し、また、自分を圧倒する才能を持った同級生達の存在にすっかり打ちのめされてしまったのである。同じ芸術という道を志す仲間が集まる芸大という場所は、芸術家の卵であった A12 にとっては、当初は夢のような場所だったはずだ。だが、A12 が直面したのは、そこで才能を開花させて行く自分ではなく、1 人だけ除け者のように置き去りにされて行く現実だった。では、理想とは異なる不本意な自分と出会ってしまった時、その受け入れ難い自分を受け入れ、存在論的な不安に押し潰されることなく踏み止まるにはどうすれば良いのであろうか。

土井（2008：81）は、「同質的な仲間だけで矮小な世界を生きていると、いざ自分が自分にとって受け入れ難い存在になってしまった時、その自分は仲間からも受け入れ難い存在となってしまう。その仲間は自己の鏡像に過ぎないからである。そして、他者からの承認を欠いた地平では、その他者の視点から現在の自分を相対化して見詰め直すことも難しくなってしまう」と指摘する。A12 は、恐らく、自分を客観的に見詰め直すことができず、過剰なまでの自己否定に走ってしまったのではないだろうか。彼女が言うほどに、彼女と他の学生達の才能に大きな開きがあったのかは正直疑問である。何故ならば、筆者は A12 の卒業制作は、非常に独創的で芸術性の高い作品ではないかと彼女の話聞いて思うからである。生と死のコントラストをブラックユーモアで描いた彼女の作品は、確かに遺書としては後味の悪い作品だが、彼女が生を謳歌して生きている限り、それは十分にユーモアの枠に収まるはずだと思うのである。自分にとって不本意な現実を否

定したり、そこから逃避したりするのではなく、寧ろそれを積極的に認め、他者との異質さに上下の関係を付けるのではなく、水平な差異として折り合いを付けて行くことが、そして異種混交の人間関係を紡ぐ中で、自分のまだ気付いていない才能に目覚めて行くことが、本来 A12 には求められていたことだったのではないだろうか。

芸術家としてのアイデンティティの形成に失敗したという意味では、雨宮も同じような経験を語っている。雨宮は、高校 3 年生の時に、突然進学校から美大への道を志し、「滝川の高校に通いながら週末は美大専門学校に通う、という生活を始めた」（雨宮 2009 : 85）。そこで、美大の実技試験の「デッサン」と「平面構成」を学んで受験に臨むのだが、不合格となる。その後、「仕方がないので目白の美大予備校に入り、毎日朝 9 時から午後 4 時くらいまで実技試験の授業を受ける日々」（雨宮 2009 : 87）を彼女は始めるのである。上京してから、雨宮は人生で初めてとなる 6 畳 1 間のアパート暮らしを開始したのだが、そのアパートが北海道時代の彼女のバンギャ仲間（ビジュアル系バンドの追っかけをするギャル、バンド・ギャルの略。どのような音楽ジャンルのバンドであっても、彼らには大抵熱烈なファン（追っかけ）が存在するが、ビジュアル系バンドの追っかけは明らかに他のバンドの追っかけとは異質な存在なので、彼女達を指して「バンギャ」と称する）の溜まり場になって行く様を、雨宮は下記のように描いている。

上京したバンギャ友達といえ、住み込みでパチンコ屋の店員を始めたり、誰かの家に居候して本屋でバイトしたりしていたが、「バンドが好き」という理由だけで高校を中退し、ほぼみんなが中卒だった彼女たちは、その後多くがキャバクラ嬢から風俗へと転身を遂げた。また、私と同じように「合法的」に上京するため、「就職」した者もいた。仕事は工場勤務で寮生活という具合だ。まだ、「派遣」ではない。

地方出身で低学歴、という私の周りのバンギャたちは、何か一つの「階層」をなしていたともいえる。で、高卒で美大進学を目指す私は、彼女たちの中では「高学歴」の部類だったのだ。そんな彼女たちと、今はまったく連絡もとっていないし何をしているのかわからない。けれども、風俗を始めた子の中にはクスリで完璧におかしくなって地元に戻った子もいたし、水商売と風俗でしか働いたことがない子たちもたくさんいた。（雨宮 2009 : 87）

ここでも雨宮は、特にキャバクラ嬢や風俗嬢を敢えて貶める意図を持って描いている訳ではないと思う。だが、改めて雨宮の立ち位置が良く分かる箇所でもある。雨宮は自分自身をプレカリアートと自認しているが、実際彼女は「高学歴の部類」であり、かつ裕福な家族福祉の庇護の下にある。一方で、そうでないバンギャ友達の多くは中卒で「低学歴」であり、一つの「階層」を形成しているという。その階層とは、すなわち「アンダークラス」なのである。そして、「アンダークラス」である彼女達の多くはキャバクラから風俗へと転身したというのだ。雨宮が無意識のうちに指摘しているのは、「浪人生の情けない自分」と、それ以下の

生活をしている「キャバクラ嬢や風俗嬢という『アンダークラス』」なのである。どれだけ自分を卑下して見せても、その人間の家に世話になっている存在が、宿主以上ということは絶対にあり得ない。果たしてそこに、蔑みの視線は皆無なのであろうか。

前章までにも指摘したが、雨宮や赤木は自分達を「ロストジェネレーション」のプレカリアートと称し、自分達の世代の尊厳の恢復を必死に社会に訴えているが、彼らの置かれた状況には、やはりまだ「溜め」があると言わざるを得ない。少なくとも雨宮は教育課程からの明確な排除が無い。雨宮は北海道の地方都市とはいえ、そこで最も偏差値の高い高校を卒業している。赤木も、高校時代は不登校気味だったとはいえ、何とかそこを卒業して専門学校まで卒業している。5重の排除のうち、教育課程から排除されていないということは、親世代の貧困は無いとみてまず間違いない。事実、赤木は高校時代、まだパソコンが普及していなかった時代に、数10万円するNECのPC-88シリーズを親から買って貰い、専門学校に上がる時は、更に高価なマッキントッシュ一式を買い与えられている。

一方、私がここまで取り上げて来たキャバクラ嬢達の生育環境は、概ね上記の雨宮の描写でほぼ間違いない。この研究のA群のインフォーマントのうち、大学卒はA12ただ1人であり、13人中7人が学校教育において中途退学を経験しているという状況は、大学全入時代の昨今において、ある意味異常に偏った成育環境である。ビジュアル系バンドの追っかけをやるバンギャに自傷行為をする病んだ女の子が多いのは、様々な媒体でこれまでも報道されている。鈴木も、通常のルポルタージュとは毛色が違う著書、『フツーじゃない彼女。』の中で、次のように典型的なバンギャの少女を描いている。

これはあれだ。バンギャちゃんって奴だな。バンギャと言えば、V系バンドの追っかけ活動で、全国を高速バスにのって遠征しまくり、稼いだお金のすべてを遠征費用と、ロリータ・ゴスロリ・パンク・バンドコスチュームなどの超高額衣装に注ぎ込む。ライブハウスの最前で、ヘドバンしながら咲きまくる、あれだ。

男で言えば、アイドルヲタ並に反社会的なヤツらだ（と、俺は思っていた）。

ちなみにバンギャ活動資金を維持するために風俗勤めしたり、バンドのメンバーに熱烈な「私を食べて」な求愛行動をする、非常にビッチ属性が高い女たちである（と、俺は思っていた）。（鈴木 2012 : 8）

精神病理学的に言えば、このような特徴を持った女性達は、明らかに境界性パーソナリティ障害（BPD）が疑われる。彼女達は自尊心が歪んでおり、他人とは違う特別な自分を服装や言動で演出しながらも、同時に他者依存的で情緒不安定であり、自虐的な態度や思考パターンに絡め取られてもいる。そして、対人関係は常に不安定で、慢性的な空虚感に囚われている。雨宮は、大学に2浪した結果、キャバクラやスナックで働きながら「自分探し」に没頭し、プレカリアートとして生きていた当時の自分の状況を振り返って、下記

のように振り返っているが、これは「実存的貧困」状態にある典型的な BPD の姿だ。

当時の私は精神科にも通うようになり、リストカットだけでなく、オーバードーズ（粹物の大量摂取）などもするようになっていた。自分が生きているのか死んでいるのかわからなくて、そして生きていたいのか死にたいのかもわからなくて、ただ生と死の境界線をウロつくような遊びにハマっていた。（雨宮 2009 : 133）

結局雨宮は、上京当初は自分とは違うと線引きをしていたかつてのバンギャ仲間達と同じような精神状態に陥って行く訳なのだが、既に A12 は、この状況に大学進学前から陥っている。大学時代に心療内科に通い始めたというナラティブに続いて、DV 気質の彼氏がいかにストレスであったかを語った後、彼女自身の自傷行為について、A12-76「あ、□□（部活動）は、その中学入って始めて、始めて1年で辞めたんですよ（笑）で、なんか、なんだろう、でも、そこら辺くらいから段々,,、ああ、□□やり始めて、授業中に眠くなって、授業段々できなくなってきたんですよ、昔に比べて。なんか、で、でもなんか、できない自分っていうのが凄く嫌で。それ、勉強ができなくなってきたっていうのもストレスで、なんかたぶん切ってたと思うんですね。やっぱりその頃ちょっと反抗期みたいな部分もあって、なんかこう、なんだろう、物を投げたりとか、部屋の中で。なんか壊したりとかしたりして。でも、物投げると、なんか凄く自分で『あーう、やっちゃった』『壊しちゃったよ』みたいな、凄くそれもイライラしちゃって、なんか手なら傷付けても治るから、みたいな（笑）あはははは（笑）」と A12 はまるで他人事のようにあっけらかんと笑いながら語っているが、実は自傷行為が収まったのは、つい半年前ほどなのである（※A-7-③参照）。既に左腕は手首から肩下まで全体的に傷だらけである。そして、A12 は大学に入学するまで、やはりビジュアル系バンドの追っかけをやっているバンギャだったのである。彼女のナラティブを眺めてみると、昨今の大学生の「現代的不幸」が、『1968』の時代から、実は大きく変わっていないことに改めて気付かされる。「独りであること、未熟であること、これが私の二十歳の原点である」と記し、鉄道自殺で自らの命を絶った高野悦子は、『二十歳の原点』の中で、次の様に記している。

最近、2、3 日前からおかしな考えに取りつかれている。カミソリで指を切り血を流そうという考えである。私は、カミソリを持ちそれを一気に引く時の恐怖を考えるとゾッとする。体中の力が抜けてワナワナとなる。お前は自分を傷つける勇気が無いのかと励ますがダメである。

今日、カミソリを買ってきた。スッパリと切り赤い血をタラタラと流し真白なほう帯をしようと考えた途端、ヘナヘナと力が抜けてしまった。おそろおそろやっていたら、チクリと痛みが走った。あわてて手を離したのだが、それでも血が出て来た。真っ赤な動脈血であった。なめてみたら鉄分の味がした。幼い頃怪我をして、その傷口をなめたときと同じであった。あまり血が出

るので、何ということもなく「私」という血文字を書いてみた。いまその指先はちょっとだけ痛む。(高野 1979 : 36)

A12 の「いつでもどこでもリストカッター・南条あや」のようにあっけらかんとしたナラティブの後では、高野の自傷行為に対する妙な奥ゆかしさや持って回った言い方は、寧ろ牧歌的でさえある。だが、アイデンティティの不在に苦しむ高野が、「私」という血文字を無意識に書いたという件は、精神分析的には非常に重要な意味を持つ。「象徴の貧困」は、高野がそうであったように、時に死に至る。自我が希釈された人間は、何時の時代も赤い血の温もりと傷口の痛みでしか自らの「実存」を実感できないのである。

雨宮や A12 の自傷行為語りに比べると、A13 のそれはかなり深刻で、精神病理学的な闇の深さを感じさせる。彼女は、自分自身の自傷行為とオーバードーズに関してこう語る。

原田 27 : そういう問題行為って、一体何時頃から始まってますか？

A13-27 : 自傷行為ですか？

原田 28 : うん。それも含めて、薬の一気飲みだとか、あと、意識無くなるくらいお酒飲んでセックスするとかも。

A13-28 : 自傷行為自体は、高校の時ですね。あの（集団強姦事件）後直ぐです。もう、なんか頭おかしくなっちゃって,,, でも、なんかこう、誰にもそんなこと、言えないじゃないですか。

原田 29 : うん、うん。

A13-29 : で、もう、自分でも生きてくのがこう、段々嫌になって来て、「あ、手首とか切ったら死ねるのかな」って思って、なんか、台所のテーブルの上にあった大きい鋏を持ってきて、切ってみたんですよ。

原田 30 : それで、血がたくさん出た？

A13-30 : いや、鋏って、意外と切れないんですよ。何回か手首に切りつけたんですけど、思ったように血が出てくれなくて、やっぱ初めての時って結構痛いし、ますます頭おかしくなりそうで、なんか結局泣きながら「あーっ」って叫んで、鋏を思いっきり壁に投げつけた気がします。

原田 31 : その時、お母さん、家にいたの？

A13-31 : いませんでしたね。後で、帰って来て、手首から血を流して台所で倒れてるあたしを見て、すごいビックリしたって言ってました。

(中略)

A13-41 : 初めて薬を一気飲みしたのは、たぶんキャバクラの仕事を始めて暫くしてからですね。家帰って眠ろうとしても、なんか疲れてるのに全然眠れなくて。で、たまたまキャバクラの客ですっごい嫌なお客さんが来た日があって、その人に「お前、テンション低くて、マジ、ノリ

悪りーよ。つまんねーじゃん、こっちは金払ってんのによ」って言われたんですよ。あたしも、なんかその日罰金取られたくない一心で、かなり無理して出勤してたんで、ホントいっぱいばいで、、、顔とかメッチャ固まっちゃってて、、、家帰っても眠ろうとすると、そのお客さんの罵り声がなんか頭の中でグルグル響いてきちゃって、「ああ、もう、なんなのっ！」て思って、衝動的に家にある薬、ルボックスとか、ハルシオン、、、デジレルとか全部まとめて飲んじゃったんですよね、、、

原 田 42：大丈夫だった？

A13-42：なんか、起きたらすっごい時間経ってて、2日くらいかな、、、頭もガンガンするし、吐き気するし、気持ち悪いし、、、お母さんも最初は心配してたんですけど、後でなんか、お説教とか始めちゃって、、、ああ、こういうのが耐えられないのになって思いました。結局、その日のうちに筆筒の中から飲まずに隠してたクスリ全部出しちゃって、あてつけみたいになんか一気飲みしちゃいましたね。

原 田 43：それで、入院だった？

A13-43：ですね。ベッドの上でうつ伏せのまま吐いたらしくて、吐いたものが気管に入って肺炎になったんですよ。ちょっと拒食症っぽかったから、免疫力、すっごい落ちてたんで。クリスマスの夜からICUに1週間くらいいたみたいです。あたしは、あんまり覚えてないんですけど、、、

哀しい話であるが、A13は、一步間違えば、母親への単なるあてつけで「死にたくないのに死ぬ」という最低の死に方をするとところであった。彼女は母子家庭なのであるが、母親もストレスからうつ病を発症して虐待気味に彼女を育てた。時に過干渉、時にネグレクトという一貫しない養育スタイルのせいで、彼女は「内的作業モデル」が著しく欠損している。彼女の人生は、愛の領域、法の領域、連帯の領域で概ね排除され続けており、彼女曰く、一度も誰にも「承認」された経験がないため、今でもしばしば生きていて申し訳ない気持ちになるという。

2人がこうした自傷行為や大量服薬をする時には、大体男性関係のトラブルが先行しているか、それに巻き込まれている。そして、大抵の場合、その男性の素性或態度は良くないのである。恐らく、自尊感情が下がり切っている女性は、普通のサラリーマンなどは、気後れして交際できないのだと推察される。大庭が、「風俗に来る男性は弱い風俗嬢に癒されている」と指摘していたことは先に挙げたが、キャバクラ嬢やスナックのホステスがホストに嵌ったり、素行の悪いフリーターやバンドマンと付き合うのは、ごく自然なマッチングなのだろう。そして、この付き合う男性によって、時に彼女達の人生はドラマチックに転換する。優しい恋人は、「実存的な苦悩」を抱えて夜の世界を彷徨っている彼女達にとって、「実存的な全肯定」を与えてくれる夢のような存在であり、彼女らの「全面的包括欲求」を存分に満たしてくれるからである。

A12は、1人のフリーターのバンドマンと出会い、今は結婚間近である。一方それとは対照的に、A13は、

15 歳以上年上の客と不倫した後、妊娠していたにもかかわらず、冷たく捨てられて結局は未婚のシングルマザーとなり、現在は生活保護を受給している。「運命」のような安易な言葉で 2 人の物語を片付けてしまいたくはないのだが、2 人の対照的な物語は、キャバクラ嬢の人生にとって、男性がいかに大きな影響力を持つかを示す、典型的な事例と言えるのではないだろうか。

A12-87「そんな感じで付き合ったんですけど、付き合ってるうちに、凄いい話が合うのと、こう、結構キャパシティが広くて、こう、自分が想像してた人のキャパシティを遥かに超えてて、そこで凄いいびつくりしたというか、『こんな言っても大丈夫なんだ』とか、『これ言っても、受け止めてくれる人いるんだ』みたいなのも凄いい感じて。」というナラティブから浮かび上がるのは、A12 が、愛の領域の「承認」に戸惑いながらも、徐々に喜びに打ち震えていく姿である（※A-7-⑤参照）。彼女は、現在事あるごとに周囲にいかにか彼が優しいかを吹聴して歩くほどのめり込んでいる。正直、売れないバンドマンで、日雇いの土方をやりながら夢を追う男性というのは、明らかにリスクを背負ったプレカリアートのそれではない。年齢的にも男性の 36 歳は、既にある程度仕事を確立していなければならない時期であろう。東京で、雨宮も一時期バンドを組んで活動していたが、自我同一性が拡散したプレカリアートが真っ先に考えることは、ファンから自身の承認欲求を最大値で満たして貰える「アーティスト」であろう。だが、それは概ね徒労に終わるのが世の常である。A12 の心理尺度が軒並み高いのは、この彼氏から最近プロポーズをされて、少々浮ついている心理状態である点は差し引いて理解しなければならないだろう。とりあえず、先行きが不安ではあるが、A12 自身は、今は幸せ一杯のようである（本論文の執筆中に、2 人は無事結婚した.）。

また、A12 の場合は、他の女性達に比べると、圧倒的に家族福祉がしっかりしている。将来何かあった時、頼れる場所があるということは非常に大きな強みであり、そこを拠点として未来に希望を描くことができる。今回インタビューを採取した A 群の 13 人の中で、最も家柄的に恵まれていると感じたのが A12 で、次が A6 である。この 2 人の心理尺度のうち、QOL を図るために用いた「生きがい感スケール」の点数が女子大生平均よりも高い理由は、明らかに家族福祉の機能水準の高さと、大学、短大、とそれぞれが生活して来た世界で培われた社会関係資本の豊富さが、2 人の未来志向な考え方に大きな影響を与えているからだと思われる。実際、A6 がデリヘル時代に知り合った客で今も関係が続けている男性の中には、地域では相当な名士もあり、「何かあったら直ぐ俺に言え」と言われているという。

これに対して、A13 の場合は、男性によって人生が滅茶苦茶にされたキャバクラ嬢の格好の事例と言えるだろう。A13-98「携帯、繋がらなくなりました,,, かけたら直ぐに留守電になっちゃって。あ、コイツ逃げたなってその時思いましたけど、こっちななんか悔しいから,,, 貴方の子供産みますから。認知とかしてもらわなくても結構です。あたしが 1 人で育てますからって、留守電に入れました」とあくまで醒めた様子で、結局籍も入れずに自分と子供を置いて逃げた男性のことを A13 は淡々と語るのだが、そこには怒りを通り越した諦観と静かな絶望が伺える。そして、その絶望を生んだのは、救いを求めた彼女に対する男性の拒絶なのだ。A13-99「もう 1 回、その人に救って欲しいって思って、その人に勇気出して電話したら、もう

向こうの携帯は番号変えてみたいで、、、家の住所とか教えて貰ってなかったんで、今思えば最初っから騙されてたんですけど、、、あたし、ホント、バカみたいですよね、、、」A13-124「あたしはただ、救わただけなんです。あたしはただ、普通にIと一緒に生きて行きたいだけなんですけど、やっぱり無理ですかね、、、」と、短時間のナラティブの中で、A13は二度、救って欲しい、という切実な願いを口にするのだが、そのように彼女が願うのは、今は新たに生活保護受給者という不名誉なスティグマが刻まれたことを、社会からの逆風を、肌身を持って彼女自身が感じているからであろう（※A-7-⑥参照）。

原田 126：そうだよね。生活保護受給者は車を持つてはダメ、でも若いんだから働こうっていうのは、明らかに自分もおかしいと思うし、ムリがあると思う。

A13-126：ですよね、、、なんで、この国ってそういう風に、冷たくて、融通が利かないんですかね、、、生活保護の受給始める時も、Iのために積み立てた学資保険は「法律ですから」の一点張りで全部解約させられたし、初めての相談の時はお母さんと一緒に書類貰いに行って、すごいガーってお説教みたいなこといっぱい言われて、2人で泣いて帰って来たし、、、なんか、もう最近すごい疲れてしまって、、、キャバクラとかやってた時は、確かに自分でも恥ずかしいこととしてるって心の中では思ってた部分はあるんですけど、それでもあたしは実は結構幸せだったんだなって、最近思うんですよね、、、生きて行くためには、「水商売が嫌だ」なんて言ってもらえないし。でも、今は、確かに生きてはいるんですけど、幸せかっていうと全然そうじゃなくて、、、最初は、生保貰えたら暫く休めるから病気も良くなって、直ぐに昼の仕事も探せるかなって思ってたんですけど、病気はますます悪くなってく一方で、、、N先生はすごく相性が悪くて、あと、昔の話とか、怖くて言えなくて、、、T病院のI先生は、女の人だから、N先生には言えなかったことを全部言えたんですよ。そしたら、先生も一緒に泣いてくれて、「よく頑張ったね、よく生きて来たね」って褒めてくれて。あたし、生きてても良いんだってちょっとだけ、思えたんですよ。何も社会の役に立ってないし、、、

A13-126のナラティブに、生活保護を受給することのスティグマの重さが非常に明瞭に表現されている。彼女は、「キャバクラで働くことは自分でも恥ずかしいこと」と考えていた。「職業スティグマ」に苦しんでいたのである。だが、生きて行くためには「水商売は嫌」とは言えなかった。母親もうつ病で、自分自身のことでも精一杯であり、家族が全員バラバラになり、アパートで1人暮らしをしなければならなかったからである。兄は寮のある自衛隊を選び、妹は恋人の転居に伴って他県に引っ越し、彼女は母親とは別のアパートを借りて、〇〇市に残ってキャバクラで生計を立てるしかなかった。若い女性が1人暮らしをするには、製造でも事務でも賞与が貰える正社員以外では難しいが、「パイプライン・システム」が決壊した後は、工業高校出身の女性など採用してくれる企業は1社もなかったのである。同時期に就職活動を行っているA12も、

A12-29「なんか3年生の時はやってたんですけど、やっぱ、3年生でたぶん,,、5件くらいしかやってないと思うんですけど（笑）うん、でも、なんか必死で頑張ったつもりが、全然もう、箸にも棒にもかからないって感じで。」と、その時の苦しさをこう語っている（※A-7-⑧参照）。

A12は、決して能力の低い女性ではない。〇〇市であれば、エリートとは言えないまでも、それなりに評価される高校、大学をストレートで卒業している。その女性でさえ、「箸にも棒にもかからないって感じで」と表現するほど、当時正社員で就職することは難しかったのである。その後彼女は、漫画喫茶とスナックを掛け持ちで働くという典型的なプレカリアート状態に陥って行くのである。そして、一旦このようなライフサイクルに嵌ってしまうと、抜け出すためには職業訓練で専門的な資格や知識を無料で習得する以外に、具体的な行政の支援は受けられない。別の高等教育機関への進学や職業訓練に無い資格を目指せば、当然それは自己負担ということになるし、家族福祉の「溜め」が無い限り、その道はほぼ確実に閉ざされる。そのように「Lost in Transition」の場所に置かれてしまった若い女性で、かつ精神疾患や身体の病気で定期的に働けないA12やA13のような“訳アリ”の女性にとっては、夜の世界はほとんど唯一の選択肢になってしまう。まさに、「社会福祉は性風俗に敗北した」のである。

生活保障システム論では、Sen にならって、人として生活が成り立ち、社会に参加できるという「潜在能力」の欠損を「ニーズ」と捉える。Sen は、人の状態（〇〇であること）や行動（〇〇すること）が、「その人の暮らしぶりのよさ」を直接に表すとして、「機能」と呼ぶ。各人が選択することのできる機能のメニューが、その人の「潜在能力」（ケイパビリティ）である（Sen=1999: 24）。つまり、潜在能力とは、個人が選択できる生き方や行動の幅を表す。その意味で、A12には、「潜在能力」が欠けている。湯浅（2008: 101）は、「貧困とは選択の機会を奪われること」であると貧困を定義しているが、この視点に立てば、A13は、完全に貧困である。更に、「現代的不幸」が顕著なA12のナラティブと比較すると、A13が語るナラティブは、「近代的不幸」にも満ち溢れている。それを顕著に示す箇所を下記で比較してみたい。この部分は、既にも前章でも引用した箇所である。

原田 119: 中1の時にリスカ始めて、大学時に結構落ちたんだよね？で、遺書みたいなビデオを撮るってなったのに、今はこうして凄く楽しくなって来ている。その、波瀾万丈な人生をどう思う？

A12-119: あ、あたしは、今思うのは、やっぱり死ななくて良かったってことですかね。

原田 120: 死のうと思ったこともある？

A12-120: 何回もありましたね（笑）その、中1のリスカしてた時もそうですけど、なんかりスカなんかじゃ全然死ねないんですけど、そんな時はもうやっぱり、こう、ドライブとか、親の車で後ろに乗ってて、ドライブとかしてて、「ああ、あの山の中で死ねたら良いな」とか、漠然と考えることとか、ずーっとあって。で、なんか、高校は、高校自体は楽しかったんですけど、なん

か、なんだろう。で、大学入ってから、実際階段とか歩いて、「今手を放したら落ちてって死ねるかなあ」とか、なんかこう、「今、こうやったら死ねるかな」というのを凄くずっと考えてるみたいな時期とかもやっぱりあったんで。今全然その、突発的に「うわ、やっちまった」みたいなことがあって、「うわ、死にてー」とか冗談で言うことはあっても、本気でもう、「もう生きていたく無い」とってことは無くなったんで。

原田 121：何でそんなに虚しかったんだろう？

A12-121：あー、何ですかね、やっぱり、うーん、人とか、距離を取るっていうか、人と接すること自体が、凄く下手だったのかなあって思いますね、うん。最近、ホント最近なんですけど、やっと人に意外と正直な気持ちをぶつけても、意外と大丈夫だってことを最近やっと気付いたというか、「あ、こんな話しても大丈夫なんだ」みたいな出来事が結構あって。大学の友達と久々に会ってとか、その、彼女に対してもそうなんですけど、その彼女によって段々そうなった感じなんですけど、彼女に対してもだし、ライブハウスで会う友達とかにもだし、なんかこう、「あ、ここでこう言わなきゃいけないのかな」とか考えるより、思ったことバーって言っちゃっても、全然大丈夫だったりして。そうすると、人と話すこと自体楽になるんですよね。だから、それはたぶん昔っていうのは、そういうの考え過ぎてたりとか、なんかそれで人と話せないから、人と距離を置いて、で、なんか、なんだろう、人と距離を置くから、なんて言うんですかね、こう、,,、孤独なんですよ。ずっと。だから、「あたしいなくなっても、大丈夫じゃん、この世界は」「あたし、いなくなったところで、この世界は動き続けるんだから、なんか、関係無いよね。あたし死んでも」みたいな思いの方が強くて、やっぱり。

原田 122：その孤独は、夜の仕事で埋まった？

A12-122：あ、それは埋まりませんでした。

繰り返しになるが、A12-121の「孤独なんですよ」という言葉に、彼女が持つ「現代的不幸」、すなわち「実存的空虚」はほぼ集約されていると言っていい。そして、A12-121のナラティブにあるように、それまで浅い人間関係しか築けなかった彼女は、人との距離感を上手く取れない自分自身に常に苦しめられて来た。そのような「実存的空虚」は、結局A1のように夜の世界では埋められなかったとA12-122で語る。だが、それを彼女の恋人は見事に埋めてくれたのである。しかし、これはソーシャルワークの選択肢としてはあり得ない。ソーシャルワーカーが恋人を斡旋したり、または夜の仕事を斡旋するのは間違っている。だが、昼の就労を支援して事足りるはずだ、という当初の仮説も崩れ去った今、A12が抱えているような「実存的空虚」に対する正しいソーシャルワーク・トリートメントが求められているのである。

A12の「実存的空虚」、すなわち「現代的不幸」とは対照的に、それとは位相が全く異なる「近代的不幸」すなわち、古典的な貧困の問題はA13の語りの中に、哀しいほどに埋め込まれている。A12と同じように、

A13 も「死にたい」と口にするのだが、それは A12 のように漠然とした意味の「死にたい」、つまり「別に今死んでも構わない」という意味ではない。明確な意志を感じる「死にたい」である。最早、本当に近く死ぬのではないか、という懸念を抱くほどのリアリティを感じる口吻なのである。

原田 155：正直、死にたいと思う気持ちはありますか？

A13-155：うん,,, それはあります,,,

原田 156：どんな時、そう思います？

A13-156：どんな時,,, 毎日ですよ。今、こうやって原田さんと話している瞬間もそうです。話をしているから死なないですけど、家に帰って、2 人っきりの部屋で I の顔を見たら、きっと悲しくて、悔しくて、涙があふれて来ると思います。

原田 158：すごく辛いんだね。I ちゃんは、A13 さんの救いにはならないのかな？

A13-158：I は、あたしの生きる意味です。でも、それなのに、時々思うんです。I と一緒に死んでしまいたいって,,, 実は、昨日も夜 I が泣き止まないのをずっとあやしながら、顔をじっと見つめてました。このまま 2 人で死んでしまおうかって。生きていても意味がないし,,, 希望なんか、何も見えないし,,,

原田 159：病気が治れば仕事もできるし、人生が変わるとは思わないかな？

A13-159：,,, 変わるんですかね,,, 人生って。生活保護を受けていた母子家庭の母親を雇う会社って〇〇にあるんですか？最近、ニュースとかでも良く生活保護の問題をやってるじゃないですか。あたしは、辛くなっちゃって、直ぐにチャンネル変えちゃうんですけど,,, そんなにあたしは生きてはいけない人間ですか？ケータイ持つとか、パソコン使うとか、I と一緒に息抜きに電車で旅行言ったことさえ内緒にしないと、後で誰かから陰口言われるんですよ,,, 死んだ方がいいって思いを、持たない方が今のあたしには難しいです,,,

A13-159 のナラティブの後、筆者は思わず言葉を失うのである。目の前に存在する「絶望的貧困」を前にして、かける言葉さえ何も思いつかないのだ。「貧困」という恐ろしい状況がここまで彼女を追い詰めているのかと思うと、「今の状況で、A13 さんは働くのは無理だと思う。だから、生活保護を受給しよう」と安易に生活保護の道を勧めてしまった支援者としての自分自身の責任を問われているような気にさえなってくる。自分は、確かに赤木の言う「いのち」は守ることができたが、A13 の「人間としての命」の灯を消してしまったのではないか、とを感じるのである。

赤木 (2007: 292) は、「私が欲しい、そしてすべての人がごく当たり前の尊厳として得るべきなのは、『人間としての命』であり、ただ心臓が動いているだけの『いのち』などではないはずだ」と佐高に対して強く反駁したが、彼女のナラティブを通して改めて感じたことは、赤木のこの言葉が持つ重みである。赤木でさ

え、こう思うのならば、元キャバクラ嬢というスティグマに、生活保護受給者のスティグマを2重に背負ってしまった彼女が、例え「いのち」を放棄しようとしていたとしても、一体誰が責められると言うのであろうか。

A13 をここまで追い詰めたスティグマの問題をもう一度最後に考察して、本節を閉じたいが、A12 にスティグマが無かったのかというと、決してそうではない。彼女がかなり早い時期にキャバクラを離れて、クラブのホステスとして長く働いた理由は、親の反対もあるが、基本的には前項で考察したスナックやガールズバーに行った女性達と同じである。彼女は、キャバクラで勝ち抜けるほどの容姿もコミュニケーション・スキルも無いと自認している。ホステスの道を選んだのは、そこが当時の彼女にとっては「一応お金を稼げる」という意味で「居場所」と「生計維持」、更に「社会学習」の場として機能していたからだ。また、A12-129「やっぱり、その、まあ、性的な目で見られるのは気持ち悪いっていうのがある反面、『あ、そういう風に見えるんだ』、『そういう女性らしくというか、色気があるように見られてるんだ』っていう意味では、『あ、あたしそういう部分で、なんかこう女として見られてるんだ』、みたいな、ちょっとした優越感みたいなものは、無かったとは言えないですね。やっぱり、あったのかなって思いますね。」というナラティブからは、ささやかではあるが、そこが女性としての「承認」を得る場であったことも理解できるのである（※A-7-⑪参照）。

しかし、そのようにA12はクラブでの思い出を語った後で、スティグマに関する質問に対しては、A12-108「あ、なんかでも、やっぱりちょっと負い目というか、が、あったんで、なんか、それを逆に笑いに変えないって思って（笑）なんか、わざと、ホステスの格好してナイトクラブっていうか、何時も言ってるライブハウス行ったりとか、『今日仕事だったんですよ』みたいな。『凄くないですか、コレ』みたいな。『ゾラなんですよ』みたいな。なんか、そういう感じで、笑える方向に持って行かないと、『なんかあの子大変そうだね』みたいな目で見られるのが凄く怖いっていうか。」と多少韜晦しながらも否定的な答を返す。やはり、キャバクラ嬢と同様にクラブホステスにも、「職業スティグマ」は染み込んでおり、A12もそれを内面化しているのである。そして、A12の場合は、一般的な汚らしいという感覚に加えて、「可哀そう」という憐みの感覚も付随しているのだ。彼女は、そのように周囲から憐みを受け、蔑まれることが耐えられないのだ（※A-7-⑫参照）。

A12 がここで用いている戯画化した自己語りは、Goffman（＝1963：186）が言うところの「劇化（minstrelization）」である。劇化とは、「スティグマがある者が自分の同類に負わされている好ましくない特性を、常人たちの前で彼らの気を惹くような仕方で演じて見せ、生活状況を道化したものにしてしまうこと」（Goffman＝1963：186）であるが、A12-108の「やっぱりちょっと負い目というか、が、あったんで、なんか、それを逆に笑いに変えないって思って（笑）」というナラティブは、相手に同情される前に、A12が自嘲的に自ら「道化」を演じることで、自身のスティグマを必死に減じようと試みている行為なのである。

これまで13人の現役・元の主として水商売に従事していた女性達のナラティブを比較分析して来た訳だ

が、A8を除いて、全ての女性達が、夜の仕事に対してスティグマを実感していた。上瀬が先行研究の中で、キャバクラの仕事を「職業スティグマ」とであると量的研究の結果から結論付けたが、その正しさはほぼこの質的研究によっても裏付けられたと思われる。

一方、彼女達の中には、精神障害というスティグマを負っている者も多数いた。これに対しては、さほど彼女達からスティグマに関する苦しみが語られなかった。それは、昨今の新型うつ病の蔓延や10人に1人が自閉スペクトラム症(ASD)といったマスメディアの啓発活動、また彼女達の同僚の女の子達も多かれ少なかれそのようなメンヘラ達である事実から、外集団に対して過剰なまでのスティグマとして、それを実感することは無かったのかもしれない。そもそも、精神疾患は自傷行為のように明らかに視認できるものを除けば、自分から言い出さない限り、つまりパッシングを続けている限りは、外集団が知る由も無いからだ。だが、キャバクラ嬢は違う。その仕事をしていることを隠すことは、精神障害者であることを隠す以上に遥かに難しい。同伴やアフターの最中に知り合いに姿を見られることもあろうし、店での接客中に遭遇することもあるであろう。そして、「夜の女」に対する世間の風当たりの強さは、キャバクラユニオンの抗議声明文の部分で既に考察した通りである。道義上、精神障害者や発達障害者を公の場でパッシングすれば、その人間が逆に不見識であるという誹りを免れないだろうが、キャバクラ嬢をインターネット上でパッシングすることは、寧ろ当然のことと見做される風潮がある。その意味で、キャバクラ嬢という「身分」に対する社会的なスティグマは精神疾患等よりも顕著に表れて当然である。

キャバクラ嬢という身分と同様に、昨今日本社会で異常なまでにパッシングを受けているのが、生活保護である。人気お笑い芸人の母親が生活保護を受けていたことから社会的な批判が強まり、現実と乖離した不正受給問題などがしばしばニュースを賑わすようになった。そうした状況下で、生活保護に甘んじなければならないということは、スティグマを背負い、社会の目を気にしながら、非常に肩身の狭い思いをして生きることになるのであろう。

『出会い系のシングルマザーたち』の中で、鈴木(2005:63)は、「バレない売春で稼ぐほうが、生活保護の差別よりマシ」と語る複数のシングルマザー達を紹介している。「何故、売春をするのか」、「何故生活保護を受けないのか」、「貴方たちの生き様は育児放棄ではないのか」という至極真っ当な鈴木の問題は、日本社会では、シングルマザーという「身分」や売春という「行為」よりも、遥かに生活保護という「状況」に対するスティグマの方が強いことを、まざまざと浮き彫りにしている。隠れて行う売春「行為」は、内面的には少しずつスティグマは刻まれているにしても、世間にバレない限りは、直ぐに大きなスティグマとはならない。しかし、生活保護を受給することは、隠しきれぬ「状況」ではない。生活保護受給者は、人格やライフスタイルまでが墮落しているという容赦の無い偏見を社会から強制的に貼り付けられ、完全なる「二級市民」、「アンダークラス」として生きることを余儀無くされるのである。現状、かつての同和差別や在日外国人差別と同じように、日本では「貧困者差別」が大手を振ってまかり通っているのである。

生活保護を受給することは、親族や友人関係にも時に修復不可能なひびを入れる。事実、最初はA13のこ

とを気にかけ、偶に様子を見に行っていた同じシングルマザーの友人達は、A13 との交友を止めてしまった。怪訝に思った筆者がその理由を問うと、彼女達の 1 人は筆者に対してこう言ったのだ。「私達だって必死に働いて生活しているのに、A13 は働きもしないでケータイの SNS で、パソコン買ったとか、I ちゃんと旅行に行ったとか、平日に書き込みするじゃないですか。ああいうの、自分はホントに腹が立つんですよ。前は同じシングルマザーだし、友達だと思ってたから仲良くしてましたけど、今はもう共感できません。同じことを、私だけじゃなく、K も言ってます」。

これが、スティグマがもたらす悲劇なのである。A13 は、自身の孤独を埋めるために、何とか外界との接点を持とうとして、SNS にそのような書き込みをするのだ。そこにあるのは、徹底的な自己否定から来る過剰なまでの承認欲求である。本当は家の中で、まだ生まれて間も無い息子を抱いて、毎日心中を考えているほどに、精神的には追い込まれているのである。しかし、彼女はそのようなことは SNS に書かない。いや、絶対に書けない。寧ろ、A12 が自身のホステスというスティグマから逃げるために「劇化」し、おどけて「今日仕事だったんですよ」というのと同じ感覚で、A13 は SNS にそのような書き込みをしたに違いない。その意図は、A12 が A12-108 で『『なんかあの子大変そうだね』みたいな目で見られるのが凄惨怖いっていうか』と語っている心理状態とほぼ同じであろう。

A13 は、精神疾患、元キャバクラ嬢、未婚のシングルマザー、生活保護受給者という自身が抱えた一連のスティグマに対して、「大変そうだね」という蔑みを内に孕んだ同情や、憐みの視線を送られるのが耐えられなかったのに違いない。しかし、電腦世界を経由したその「劇化」は、上手く読み手に伝わらなかったのである。フェイス・トゥ・フェイスのコミュニケーションであれば、彼女の覇気の無さや、暗い表情にきっと同情し、優しい声をかけたに違いないシングルマザーの友人達が、冷たく「今はもう共感できない」と言うのである。彼女の社会関係資本は元々少ないが、現在は筆者を含めた数人の専門家が弱い関わりを持っているに過ぎない。櫛の歯が欠けるように消えて行った彼女の人的ネットワークの再構築は今喫緊の課題であると思われる。

見田（2008：34）は、『まなざしの地獄』の中で、「人間の^{ヴェーゼン}存在」とは、その現実にとりむす社会関係の^{アンサンブル}総体に他ならないのであるから、その諸関係の解体は、確実に人間そのものの解体をもたらす」と指摘している。見田のこの分析は、まさに卓見であった。生活保護というスティグマは A13 の社会関係の^{アンサンブル}総体をズタズタに解体し、確実に A13 の人間そのものの解体をももたらしてしまったのである。その結果、彼女の人間の^{ヴェーゼン}存在は、立脚する場を失ったのである。今彼女は、「絶望的貧困」の深い闇の中でもがき苦しんでいる。

第 2 節 風俗業（B 群）に属する女性たちの研究

第 1 項 11 人の女性達の概略

- (1) 本項で会話分析を行うのは主として風俗業に従事した、或いは風俗業を入り口として性風俗産業

に足を踏み入れた 11 人（平均年齢 27.64 歳）の女性達である。B 群 11 名の IWM の欠損率は、63.64%であり、全員が 4 つの心理検査においても全て不良の数字を示したため、実存的貧困率も同じく 63.64%である。うち、2 名が経済的に「相対的貧困」の状態にあったため、絶望的貧困率は 18.18%である。量的研究の結果から見ても、B 群は最も精神保健が悪い群である。心理検査は概ね不良であり、最悪の項目数が最も多い。とりわけ目立ったのは、対人領域の「拡張版ホープレスネス尺度」の高さで、女子大生平均の 4.13 の倍以上の 9.444 点を示した。人間関係に対する異常なまでの不信感と苦手意識は、同じく「自己肯定意識尺度」の「自己閉鎖性・人間不信」にも顕著に表れており、こちらも女子大生平均の 16.840 点を大幅に超える 27.545 点を示した。この項目は、全ての群に共通して女子大生平均よりも顕著に悪いのであるが、その中でも 2 番目に不良な数字である。また、「生きがい感スケール」は全群を通して最低の 63.545 点で女子大生平均の 71.538 点を大きく下回っている。異常なまでの絶望感・無力感が B 群の女性達から浮かび上がってくる。生活史に目を向けても、児童虐待が 11 人中 6 人に確認されており、IWM の欠損が著しい。岡田が愛着障害の指標と位置付ける BPD、気分障害、ADHD 等の疾患がほぼ全員に発現しており、愛着障害を抱えながら「職業スティグマ」が非常に強い仕事に従事しているが故に、精神保健が極めて悪化するという事態を招いていることが推察される。半数近くの 5 人が母子家庭出身というのも特徴的であり、これが児童期の深刻な「経済的貧困」と虐待の原因になっている。

コード	年齢	職業	IWM	実存的貧困	経済的貧困	その他特記事項
B1	26	ホテル	○	○		専門中退、いじめ、自傷、虐待、母子家庭
B2	38	ホテル	○	○		虐待、性被害、母子家庭
B3	24	デリヘル				高校中退、中絶、いじめ、母子家庭
B4	28	ソープランド	○	○		高校中退、いじめ、虐待、母子家庭
B5	25	ソープランド	○	○		親離婚、虐待、恋人事故死、受験失敗
B6	21	ソープランド				ストーカー被害
B7	34	ソープランド	○	○	○	虐待、母子家庭、中卒、親生保、性被害
B8	34	ホテル				性被害、機能不全家族
B9	28	デリヘル				
B10	20	デリヘル	○	○		いじめ、借金（教育ローン）
B11	26	デリヘル	○	○	○	虐待、性被害、発達障害、浪人・留年
	27.64		63.64%	63.64%	18.18%	

第 2 項 3 人のホテル・デリヘル嬢の物語

(1) 本節では、主として性風俗産業の中でも水商売ではなく、性的サービスの提供を主とする「風俗嬢」のナラティブを分析する。前節で比較したのは、キャバクラ嬢を中心とした飲食・接客業であるが、その中でも半数近くに風俗嬢か援助交際の経験があった。同様に、B群の女性達の多くが、性風俗産業の入口の段階でキャバクラ嬢等の水商売を経験している。本節では、最初にそのような風俗嬢の中でも風俗嬢しか経験が無いホテルを中心として従事してきた中堅風俗嬢(B1)と、業界の生き字引ともいえるべき大ベテラン(B2)、そして、デリヘル代表として、水商売も含めて様々な職種を経験したのち、デリヘルが一番自分に合っていると確信して以来それに従事し続けている女性(B3)の3人のナラティブを比較検討することで、水商売とは違う風俗産業特有の悩みや苦しみ、或いは喜びややりがいについて紐解いていきたい。

ホテル・デリヘル・箱ヘルは非本番系サービスとも呼ばれ、基本的には膣内への性器挿入は禁止である。本番行為をほとんどの客が望むため、それをやんわりと禁止しながら男性を射精まで導くには、ある程度の人間力とそれなりの技量が必要であり、決して女性であれば誰でもできる類の仕事ではない。水嶋が「究極の接客サービス業」と称するのも十分に納得できるものである。実際、技量の足りない風俗嬢は、寧ろ男性に身を委ねられるソープランドや、サービスの必要性が全くない売春の方が楽だと言い、時には店には内緒で男性から追加の両金を取り、本番行為を行って手抜きをする者もいる。

最初にB1が性風俗産業に足を入れた切欠を見てみたい。キャバクラ等の水商売に比べてスティグマのレベルが遥かに強いこの産業に、いかなる理由で女性達は足を踏み入れるのか、は彼女達を理解する上で非常に重要なポイントである。

家庭環境が複雑なケースが多いのは、性風俗産業に従事する女性達の中でも恐らく最大の共通項の一つである。B1-21「うちが、家庭が複雑,, ,まではいかないんですけど、ちょっと母が変わってまして。奨学金を使い込まれてしまって。」というナラティブから、B1の家庭の機能不全が伝わってくるが、B群の他の女性の家族関係と比較した際、それは寧ろ軽度な部類である(※B-2-①参照)。機能不全家族に育つという共通項以外にも、荻上(2012)が指摘した通り、精神疾患や障害、貧困、いじめ等もかなりの頻度で彼女達に共通して見受けられるが、虐待、DV、両親の離婚等の家庭内の諸問題は、明らかに女性達の「内的作業モデル」を欠損させ、Giddensが指摘した通り、早期の愛着形成の失敗はポストモダン社会における「実存的不安」の根源となる。そして、Franklが指摘したように、実存的フラストレーションは、様々な刺激を求める行為となって自己破滅的な行動に導く傾向があるが、性的逸脱はその最たるものである。Frankl(2015)は、フロイト心理学の「快楽原理」を「自滅的」とであると否定し、「ひとが快楽を目指せば目指すほど、自らの目的はますます誤ってゆきます。換言すれば、『快楽の追求』とはまさに快楽を妨げること」(Frankl=2015: 61)になると指摘する。しかし、Franklの指摘に反して、「快楽の追求」は、現在広く社会全般に広がり続けている。

とあるアメリカの雑誌に次のような文章があります。「今日のアメリカ合衆国ほど性に支配された国は、歴史上世界のどこにもなかったと言って間違いない」と。不思議なことに、この文章は『エスカイア』(Esquire) [英米で販売されている二〇～三〇歳代向けの男性雑誌でファッションやスポーツ記事が中心] からの引用なのです。ともかく、もしこれが本当であるならば、ごく普通のアメリカ人は他の国の人々以上に、実存的フラストレーションに囚われており、それゆえに性的な過補償に没頭しているという仮説を裏付けることになるでしょう。この観点から、ウィーン医科大学の私の学生に実施した簡単な統計調査で、オーストリア、西ドイツおよびスイスの学生の四〇パーセントが、彼ら自身の経験から実存的空虚を知っていると示されたことが理解できるでしょう。しかしながら、私が英語でおこなっている講義に出席していたアメリカ人学生の場合では、四〇パーセントどころか八パーセントにも達していたのです。(Frankl=2015: 134-135)

Frankl は、『絶望から希望を導くために』の中で、現代社会では性的な過補償が欧米の若者に蔓延している状況を上記の様に記すのであるが、今日の日本社会を鑑みるに、実は現代日本こそが歴史上最も性に支配された国ではないかとさえ疑われてしまうのである。それを指摘するのは、風俗サイトの運営等も手掛ける大ベテラン風俗嬢の B2 である。B2-217「大して注目してる人いないんですね。こんだけの兆円産業が地下経済であって、たった1日で数十億動いてるってことに対して。社会のセーフティネットうんぬんの話とかよりも、これなくなったら終わりですよ、この国、たぶん。」というナラティブが示すように、日本では現在性風俗産業は、推定で年間約 2 兆円の巨大なグレーゾーン産業に成長している (※B-2-②参照)。そして B2 は、全国の繁華街を走るラッピングバスの異常性をも指摘する。「高収入求人」と大々的に書かれたピンク色の派手なバスは、主として彼女が運営に携わっている風俗嬢の求人サイトの広告なのである。水商売どころか、風俗嬢の求人情報へのアクセスの仕方が、渋谷や新宿、池袋といった都内の繁華街を堂々と毎日の様に走り回る日本の状況を指して、彼女は端的に「異常」と指摘するのであるが、これが日本こそが歴史上最も性に支配されている国ではないかと筆者が感じる所以である。

Frankl の顰に倣い、もしこれが本当であるならば、ごく普通の日本人は他の国の人々以上に、実存的フラストレーションに囚われており、それ故に性的な過補償に没頭しているという仮説を裏付けることになる。そして、水商売に就いていた A 群の女性達に比べて、遥かに性の強度が強い B 群の仕事に就いている女性達、或いはそのお店に通う男性ほど、実存的フラストレーションは強く、「実存的空虚」、或いは「実存的貧困」の可能性が高いと言っても過言ではないであろう。「実存的空虚」の背景に Frankl は必ずしも愛着関係の不全を挙げてはいないが、「実存的不安」の根底には Giddens の指摘通り、愛着 (アタッチメント) 関係の不全がある。これだけ性が社会に横溢する日本社会においては、急増する児童虐待の数に端的に示されるように家族機能の弱体化と児童期の愛着関係の不全が拡大しつつあるのではないかと疑われるが、それを証

明するかのように、本項で取り上げる3人は、いずれも劣悪、或いは悲惨な家庭環境に置かれていたという共通点がある。その中でも、B1のアタッチメントは比較的まだ健全な部類である。性の強度が強いB群以降においては、母親が娘の奨学金を使い込み、娘の人生を破壊して性産業に入るのを誘発するレベルの関係性は、比較的軽度の機能不全なのである。いかに、異常な親子関係が彼女達の間で常態化しているか理解できるのではないだろうか。

そのB1と比較して、B2、B3の愛着関係の歪みを示す箇所を以下に引用する。B2は、自身の「内的作業モデル」が崩壊しても当然ともいえる壮絶な過去を持っている。少し長くなるが、非常に重要な箇所なので引用する。

原田 299：あー。なるほどね。今、B2さんのフェイスシートのプロフィールを見て、7歳の頃にレイプされたとか母子家庭に生まれたとか、結構自分が見ても人生の初期から本当であれば福祉に繋がんなきゃいけない人なのかな、っていう風に感じたんですけど、、、

B2-299：（笑）そうですか？（笑）

原田 300：あの当時に行政を頼ろうとかがってなかったんですか？

B2-300：なかったですね。

原田 301：知識としてないですか？

B2-301：うん。あとね、母さんに心配かけたくないっていうのが強烈でしたね。

原田 302：強烈でしたか。

B2-302：乗り越えられるって思った。

原田 303：7歳ですよ。

B2-303：うん。忘れたんですよ、1回。

原田 304：1回忘れたんですか？

B2-304：そういうことって、人って忘れるんですね。

原田 305：あー。

B2-305：で、ある時ふと「久しぶり！」って声かけてきて、「あれ、誰だろう」って思って、なーんか覚えてんなって、ずーっと辿っちゃいけないんだろうなこれ、っていうのはわかったんですよ。ちょっと思い出せないと先に進めないような気がして辿ってフラッシュバックですよ。

原田 306：まざまざと思い出しました？

B2-306：そうそうそう。

原田 307：7歳の頃のことを。

B2-307：「あいつだ」と思って。

原田 308：ゾッとしました？

B2-308：ゾッとしましたより、「殺してやる」っていうのが先ですね。

原田 309：あー。

B2-309：ゾットしたというか怒り。

（中略）

B2-315：ええ。だから処女失ったので、もう「おっ」て思って、破れかぶれでやりましたよね、速攻、同級生と。

原田 316：あー。それは何歳くらいの時？

B2-316：中学上がって直ぐ。

原田 317：それはなんか忘れたいからですか？その思い出を。

B2-317：ですね。でもこういう私みたいに（近所のペドフィリアのレイプ犯から）お遊戯会をずーっと見られたりとかして、この場所から早く出たい、って思って上京している人って、いると思うんですけど。でもね、思ったんですけどね、性をもって性は征服できないと思いますね。

原田 318：性は征服できない。

B2-318：性を武器にして、性を忘れようと思いましたが、無理。

原田 319：この業界にいる理由も、もしかしたら過去のトラウマを忘れようとしているっていうのもありますか？

B2-319：きっかけはあると思う。

原田 320：あると思いますか。

B2-320：ええ。今はのびのびやらしてもらってます（笑）

原田 321：今はのびのび（笑）でも、そのトラウマだけは消えない。

B2-321：消えない。死んでも殺してやりたいもん、まだ。

原田 322：あー。

B2-322：でも殺したところでね、終わるのかっていう話ですよ。殺人で。それで終わらないもん。絶対、復讐って。

原田 323：ふーん,,, 自分からする普通そういう性的なトラウマを持った人って性に臆病になってしまったりして逆に男性苦手とか怖いとかってなってこの業界から遠ざかるのかと,,,

B2-323：逃げたくなかったんです、私は。立ち向かっていきかけた。

原田 324：立ち向かって,,, 逃げるタイプと立ち向かうタイプがいて B2 さんは立ち向かうタイプだったと。

B2-324：うん。

原田 325：でも克服はできなかった。

B2-325: できないっすね,, , 永遠にできない.

原田 326: 永遠にできない.

B2-326: あれがあったからこそ, なんかねえ, 近所のおじさんには挨拶しなさい, とか愛嬌良くしなさい, っていうきれいごとがクソなんだっていうのがわかった.

原田 327: 身近な人ほど怖いっていうこと.

B2-327: そうそう. 身近な人ほど怖いっていうか, 4歳5歳とかで人の区別つかない. ○○(支援団体代表の氏名) に対しても言えるね, それは. きれいごと売りにしてる人っていうのは女でも危ない, と思う.

自己に内面化される他者性は, 「最初は特定の『重要な他者』の形態を取り, やがて抽象的な『一般化された他者』へと転換する」(大澤 2002: 379-380) という Mead の愛着理論を第1章で指摘したが, B2 においては, 母子家庭であるが故に本来は唯一の『重要な他者』であるべき母親が, その役割を全く果たしていないのだ. その結果, 抽象的な『一般化された他者』へと信頼対象が汎化されることも無かった. 故に, B2-326 「あれがあったからこそ, なんかねえ, 近所のおじさんには挨拶しなさい, とか愛嬌良くしなさい, っていうきれいごとがクソなんだっていうのがわかった.」というナラティブから明らかな通り, B2 には世界に対する信頼は存在しない. そして, その状態は本源的ナルシシズムの欠損に繋がる. 結果的に, B2 自身に対する信頼も生じ得ないのである. それ故に, 無意識のうちに他者の「承認」を求める行動が, 極めて自傷的な存在証明となって発露している. B2 は, 自らホームページを立ち上げて, そこで過去の性被害について赤裸々に語り, 虐待被害者の1人として, 『日本一醜い親への手紙 そんな親なら捨てちゃえば?』に寄稿して実の母親に対して呪詛の言葉を投げかけ, 彼女達のような風俗嬢のセカンドキャリア支援を行っている団体の代表を, 裁判で訴えると言って憚らないのである. 彼女は, ホテヘルを主たる業種とし, 企画モノのAVに出演し, 風俗サイトのライターや昼の事務職, 個人事業主としての輸入業など, 様々な仕事を組み合わせて生計を立てており, 「相対的貧困」の状態にすら当てはまらない. だが, 各種心理検査の結果は概ね不良であり, 特に, パワーレスな状態を測る「生きがい感スケール」の低得点は特筆すべきものがある. 本人は, B2-320 「今はのびのびやらしてもらってます(笑)」と発言しているが, 本当にのびのび生きている人間の点数が, これほど低いということは考え難い. だがこれが, 虐待や性暴力被害等, 「実存的貧困」概念の中核を持つということなのである. 彼女は, 経済的な意味では今は貧困状態ではない. だが, 存在論的な側面では, 極めて深刻な貧困状態に陥っているのである.

貧困理論の上位概念として「対象論」を考えた時, 一つの考え方として, 三浦文夫による「貨幣的ニード」と「非貨幣的ニード」の区別がある. Lister や Fraser の「パースペクティブ二元論」に立つて貧困概念の中核に「貨幣的ニード」を据え, 周辺に「非貨幣的ニード」を配置した場合, 「非貨幣的ニード」は Lister の「関係的・象徴的貧困」とほぼ同じ位置付け, 意味を持つであろう. だが, Lister が, 「関係的・象徴的貧

困」をそれ自体で「貧困」と措定しなかった（或いはできなかった）ように、貧困理論を三浦のような「対象論」で捉えてしまうと、結局、「非貨幣的ニード」の持つ意味は「貨幣的ニード」の重要性よりも下になってしまう。その場合、筆者が提唱する「実存的貧困」は、「実存的困窮」とでもいう形で、格下げされた一つの「生きづらさ」として貧困概念の中核ではなく、その周縁に位置付けられるのであるが、やはりこの近代的な貧困理解は受け入れ難い。彼女が抱えている実存的な苦しみは、決して経済的な貧しさに附随する周縁的な苦しみではない。寧ろそれは、極めて本質的なものであって、到底看過できるものでは無いのである。

Spicker が指摘したように、「なにかがなされなければならない」という状況が「貧困」概念における唯一の合意であるならば、B2 が置かれている状況に対しては、絶対に「なにかがなされなければならない」と感じる。彼女の存在論的な苦悩を、単なる困窮の一形態に矮小化すると、その苦悩以前に、まず彼女の「所得貧困」部分を「なんとかしなければならぬ」のであるが、実際、彼女にはその様な「貨幣的ニード」は一切無いのである。一方で、彼女には明確に「非貨幣的ニード」がある。7歳の時に彼女をレイプしたペドフィリアの男性を殺したいという想い（実際は既に死んでいるので、その願いは叶わない）、今なお彼女の足枷として彼女を縛る「毒親」としての母親の支配からの解放、性のトラウマからの解放、等々。彼女はサバイバーであり、今も人生をサバイブし続けており、各種心理検査が指し示す通り、極めてパワーレスな状態に陥っている。パワーレスな存在をエンパワーメントするのは、本来ソーシャルワークの役割であるはずだ。

無論、病理的な側面から見れば、B2 は PTSD であり、うつ病であり、彼女を支える枠組みには、精神科医や臨床心理士等のケアの専門家も必要であろう。だが、彼女の苦しみの根底にあるのは、Frankl が指摘する「意味への意志」の欠如なのである。A 群の女性達は、A4 を除いて、多くは何らかの意義や価値をその仕事の中に見出し、ある程度癒されてもいた。その意味で、彼女達は、性風俗産業の中で何らかのエイジェンシーを発揮している行為主体であった。だが、14 年に渡って風俗嬢として仕事を続けて来た業界の生き字引ともいうべき B2 に、そのような誇りは一切無い。エイジェンシーの存在すら、疑わしいレベルである。その仕事にやりがいを持っている人もいるのでは、という筆者からの問いかけに対しても、それは風俗嬢の 0.1% くらいしかいない、と極めてドライに応えて、彼女は性風俗産業に対しては最後まで否定的な態度を貫き通すのだ。それは、B2-280「やりがいとかいう問題ではなく生活の一部になってる。なんの疑問も持っていない、そこに。ここまでに落ちるっていうか、ここまでにならない方が良いですね。っていうのは言いたい。」というナラティブに明確に示されている（※B-2-④参照）。そして、B2-282「この場所だけに留まってたら終わりますよ、やっぱ人生。」と極めて否定的に性風俗の仕事を捉えるのである。そこには、Y1 や水嶋のようなセックスワークという概念は無い。B2 にとっての仕事は、個人の尊厳やエイジェンシーに繋がる類のものでは全くないのである。彼女のこの感覚は、性風俗産業に対する自らの強いスティグマから派生している。彼女は性風俗産業の非犯罪化や合法化には一切反対の立場を取る。差別や偏見が無ければこの仕事は成り立たないとさえ断言する。その意味では、まるで保守的な従来のフェミニズムの考え方に近い。B2-427「人権は人権であり、仕事は仕事であり、人権は仕事になっちゃダメ、仕事は仕事なんすよ。」というナラテ

ィブには、新自由主義の自己責任論が色濃く伺える。彼女は、自分自身を人権派であると言いながらも、そこで働く女性達の人権は仕事と切り離して考えるべきであり、性風俗の仕事を通して自己実現がなされるなどということは、寧ろ絶対にあってはならないと主張するのである。

B2 の議論には、フェミニズムの人権派と権利派の考えが渾然として紛れているが、それは一先ず置くとして、14 年間も性風俗産業に携わって生計を立ててきた B2 が、これ程までに徹底してこの業界に対して否定的態度を崩さない点に着目したい。自分を差別する他者の視線を内面化し、自分自身をスティグマタイズするのはパワーレスな存在の宿命であるのだが、上記のナラティブは、彼女をエンパワーメントする難しさが改めて浮き彫りにされた箇所である。恐らく、ホームレス支援の実践の中で湯浅が出会った「自分自身からの排除」を完成させたホームレスであっても、ここまで自分自身を卑下することは無いのではないだろうか。だが、恐らくこれがスティグマの桎梏なのである。14 年間の長きに渡って性風俗産業に携わり続けてきた B2 のナラティブには、未来に対して一縷の希望も感じられない。B2-280「やりがいかいという問題ではなく生活の一部になってる。なんの疑問も持ってない、そこに」、B2-395「うん。入れたシフトだから行こうって。」というナラティブから分かる通り、彼女にとってホテルで働くことは、単なるルーティンワークなのである。それは、赤木のコンビニでの単純作業と変わらないのだが、赤木の場合はその状態が 10 年間続いただけで人間としての尊厳を失い、「希望は、戦争。」という社会への過激な異議申し立てを行うことになったのだ。彼は、「承認」か、さもなくば「もろともに死か」という二者択一を、思考実験とはいえ日本国民全員に迫ったのであるが、ほぼテロリストと変わらない極端な選択肢を突きつける彼の思考回路は、「実存的貧困」状態に置かれた者の特徴でもある。未来に対して希望が持てないが故に、本来無数にあるはずの選択肢を、自分で悉く排除してしまうのだ。だが、赤木とて、最初からそこまで希望がなかった訳ではなからう。あくまで、10 年間の非正規雇用のルーティンワークと社会的排除が、極端に視野が狭窄した心性に導いたのである。

一方で、赤木以上に希望が無いのが B2 なのであるが、両者の差異は、スティグマのレベルがフリーターと風俗嬢では桁が違うということ、そして、幼少期における愛着形成の失敗と、そしてそれが生み出す「実存的不安」の深さに起因するのではないだろうか。ポストモダン社会に生きる限り、大なり小なり我々は「実存的不安」を持つのであるが、Giddens 曰く、「重要な他者」からアタッチメントという名の「予防接種」を受けたものと、受けていない者の間には、「実存的不安」の軽重に大きな差異が生じる。まして、B2 のように、「予防接種」どころか、病気が悪化するような「毒薬」を唯一の身内から長年打たれ続けたら、どうだろうか。

2008 年 12 月、京都大学医学部附属病院の病室内で、当時 1 歳の五女につながった点滴に注射器で腐敗した飲み物を混入させて殺害しようとしたとして、母親が殺人未遂容疑で逮捕された。精神鑑定の結果、彼女は「代理ミュンヒハウゼン症候群」という「児童虐待」の一種であると診断され、懲役 10 年の判決が下ったが、B2 が母親から行われてきたことは、このようなことなのである。この母親は、物理的な毒を娘に与え

続け、B2の母親は、周囲からは見えない非物理的な毒を娘に与え続けたのである。そして、38歳になってもなお、未だにその毒親から解放されていないB2の人生は、寧ろ遥かに悲劇的かもしれない。

本来は、母親に代表される「重要な他者」を足掛かりとして、我々は自己を社会に接続させるための足場を少しずつ築いていくのである。それが、すなわち自らのアイデンティティを構築するということであり、そのアイデンティティの先に自己の人生の「生きる意味」や「いきがい」が誕生する。だが、B2には、アイデンティティの土台となるべき足場自体が無かったために、最終的にはいきがいすら失ってしまっているのである。その意味では、完全にFranklのいう「実存的空虚」である。故に、彼女は、自らの実存的フラストレーションを晴らすため、ひたすら性の過補償を行いながら自傷的に性風俗産業で生き続けるのだが、本人も自覚している通り、そこに救いは無い。水嶋のようにその仕事を通して性のトラウマを克服した事例もあるのだが、少なくともそれは全ての女性に約束されたものではない。加えて、性風俗産業で働くということは、最大級の「職業スティグマ」を背負うことを意味するのである。自動的に、Honnethの承認論における法の領域における「承認」を完全に欠くことになり、幾ら所得を稼いだとしても、連帯の領域における「承認」も「恵比寿マスカッツ」に所属するような準芸能人クラスにならない限り、手に入れたと言うことは難しいであろう。そして、風俗嬢と付き合いたい、或いは結婚したいと望む男性も一般人ではほぼ皆無である以上、愛による「承認」もこの仕事からは手に入れ難い。だからこそ、彼女達風俗嬢は、日本社会における「アンダークラス」の代表的存在であり、かつ明確な社会的排除の対象なのである。Franklの「実存的空虚」状態の若者達は、第一義的にはロゴセラピーの対象であり、あくまで心理学や精神医学の問題として片づけることができる。しかし、その状態にある人間がB2のようにスティグマを負った「アンダークラス」となり、社会的排除の対象となるならば、それは必然的に社会学や社会福祉学が真摯に向き合うべき問題であるという認識が不可欠であろう。

次に、B3の状況を検討するが、B2同様に、彼女の人生初期の成育環境も壮絶である。キャバクラのような水商売ではなく、一足飛びに性産業或いは売春に飛び込む女性達は、C群以降にも数多く散見されるが、やはり共通して、水商売で留まっている、或いはそこを最初の性産業の入り口とする群に比べて、愛着形成における機能不全が極めて深刻な形で見受けられる。B3-239「たぶんみんな病んでんだね。」B3-240「うん、何かしら原因で。大抵お父さんと仲が良くないとか、過去にお父さんから強い愛情を受けてなかったって子が多い。」というB3のナラティブは、B群全体を通して確認されている事実と合致する（※B-2-⑤参照）。半数以上が母子家庭で虐待を受けているというB群の女性達が病んでおり、父性に飢えていても何も不思議ではない。寧ろ、そのような家族機能の不全が一切存在しない女性がセックスワーカーを自認するB9ただ1人であるという現実から、B群の女性が抱える「生きづらさ」の源泉は家族である、と断言しても問題ないと思われる。そしてそれはつまり、B群の女性は愛の領域における原初的な「承認」を欠いているということである。

事実、B3自身父親からの愛を完全に欠いている。B3の父親は、何らかのパーソナリティ障害と診断され

ているらしく、浮気性で 10 人の子供をあちこちで作っている。或いは、軽度の知的障害等も疑われるのかもしれない。遺伝の影響かは不明だが、B3 も軽度の知的障害の診断を受けている。B3-240 のナラティブは、B3 の友人達の「重要な他者」の不在を示すものであるが、友人達は須く男性依存の傾向が強く、そしてそのパートナーの男性達もヒモであったり、ホストであったりして、ラディカル・フェミニズム系の支援者であれば、直ちに関係を断ち切ることを要求するような存在である。だが、今回のフィールドワークで実感したのは、この性風俗産業で働く女性達をヒモ、ホストのような男性達に過度に依存することから引き離すのは、非常に難しいということだ。その困難さを、支援者の立ち位置から、支援団体・L の X2 は、次のように指摘する。

X2-21: (中略) まあその風俗、そこから逃げられなくて苦しんでる子ももちろんいるんだけど、風俗ともうほんとあの、なんだ、だいたいあれがセットになってるんですよ,,,

原田 22: ホストですか？

X2-22: あ、ホスト。そうそうそう。

(中略)

原田 23: そうなんですよ。で、今ホストの話出てきましたけども、かなりの女の子がやっぱりそこに依存してしまっているところがあって、薬物と同じ様に、ギャンブルと同じ様にその、ストレスの発散としては非常に効果的なのはわかるんですけども、結局薬物とかギャンブルが身を亡ぼすように、ホスト依存は人生を壊すわけですよ。それから引きはがそうすると彼女らは離れていくわけですよ。そういったものってどういう支援をされていくんですか？

X2-23: 引きはがそうとはしないですね。

原田 24: しないですか。

X2-24: だけど、しつこいですよ、わたしたちも。あの、ま、「そうじゃない選択肢あるよ」ってということと、あと、やっぱりあの、「わたしはこう思う」ってことは言うね。「わたしは心配だよ」って、だってこのホストにこんだけの金を。でもあなたが今それがね、それがあつて逆で仕事も頑張れるとかそれがなかったらもう死んでいいんだみたいな、いつ死んでも、明日にでも死んでやるよ、だったら、っていう子もいるから、わかってる、それが命と同じくらい今そのホストの存在が大事だということもわかってるけど、でもわたしは、ホストじゃなくてもこんな風にできる力があるとか、こんな選択肢あるとか、そういう情報を伝えるとかね、情報とかわたしはこんな風にホストと風俗とそれだけじゃないとこのその子の良さとか、こんなことができるよねとか、あともっと、本当はどういう、いろんな条件が重なったらどんなことがしてみたいかみたいな話聞いてみたりとか、そういうの引き出したりとか、あるけど、でも引き剥がす、は絶対にできないから、それを根気よく伝え続けてく、しかも。こっちからあんまりやらない

んですよ積極的に。(中略)で、わたしたちの価値観はぶれさせないというか、価値観というかそれを待ち続けるとか、それを良いか悪いかじゃないというところとか、ホストにしろ何にしろ、今必要なのかもしれないっていうのはありますね。

X2 が指摘するようにホストと性風俗産業に携わる女性達との関係は、極めて密接である。それは、お互いに似通った仕事をしている、或いは似通った生育環境（貧困、虐待等の劣悪な家庭環境）を共有していることがもたらす親近感、だけではとても説明がつかないレベルである。過去に虐待を受けた女性が全員ホストに依存するということは、精神医学的に考え難い。また、経済的に貧困な家庭で育った女性が皆ホストに依存することも、社会学的にあり得ない。だが、虐待的な養育環境、或いは生活困窮状態で成長した女性で、かつ性風俗産業に従事している者の場合は、「実存的貧困」或いは「絶望的貧困」故に、かなりの確率でホストに依存してしまうのである。そして、十中八九、その関係性はお互いを苦しめ合う「共依存」である。その現実を、E 群に属する高学歴（高校・大学の偏差値がそれぞれ 76・75）風俗嬢は、E4-138「てか、んーとね、風俗やってる人の割合でいうと、多分 7 割はホストに狂ってる人。」と冷静に指摘する（※B-2-⑦参照）。そして、ホストクラブで起きている女性同士の争いに関して、以下のように指摘するのであるが、E4-156「女って基本男と違って自分が一番じゃないと嫌な生き物だと思うんですよ。他の女の子、例えば私がここにいたとして男性の方がこっちばっかに話振ってる、『可愛いね』って言うてる、こっちイラつくに決まってんじゃないですか。だから自分が例えば大事にされてます、自分が一番可愛いと思ってました、だけど他にお金ドカン使うお客さんいたら『え、そっちに今日…そっちとじゃあアフターとかしちゃうの？』って思ったらこっちダンって使うじゃないですか。だからもう争いみたいなもんなんじゃないですか？」というナラティブのうち、「だからもう争いみたいなもんなんじゃないですか？」の部分は、ホストクラブに嵌ってしまう女性達が、実際は、そこでストレス発散や息抜きをしているのではなく、壮絶なまでの『承認』をめぐる闘争』をしていることを示唆している。だが、この現実認識が無ければ、X2 達支援者の支援のあり方自体が間違ってしまうのである。賢明にも X2 達は、他の支援団体のように、ホストクラブでお金を使う女性達に風俗を直ぐに辞めるような指導、或いはホストから無理やり引きはがすような説得はしないという。X2 の経験上、それが完全に無意味かつ逆効果であることをよく理解しているからだ。

ホストクラブというシステムは、キャバクラと比べても極めて特殊である。若い男性が、ホストとして酒席を共にし、客である女性をもてなすという形式だけは変わらないが、それ以外のシステムは全く別物である。キャバクラと同じ指名制度があるが、キャバクラの指名替えが簡単に行えるのと異なり、基本ホストクラブは永久指名である。何度か試してホストクラブに通い、最終的にその店で指名する男性を 1 人決めたら、原則その指名は二度と変えられない。女性はその男性（「担当」と呼ばれる）だけを、来店の度に毎回指名しなければならないのである。そして、当然指名が被る場合、躊躇なく男性は、最もお金を使う女性の傍に行く。当然、1 人の男性を巡って複数の女性での奪い合い、すなわち、お金の使い合いが始まる。高級なワイ

ンやシャンパンを入れれば入れるほど、会場にいる全男性キャストや店長、オーナーまでが彼女をちやほやして気持ちを盛り上げる。時には、他の客を放置してまで、最も羽振りがいい女性の下に全ての男性スタッフが押し掛けて接待する。このシステムは、E4-156「女って基本男と違って自分が一番じゃないと嫌な生き物だと思うんですよ。」というE4の指摘が示すように、女性の性格特性を巧妙に利用している。女性の嫉妬心と競争心を金使いによって可視化する。そして、酔いを利用して客同士の競争を煽る。この手口は、女性の承認欲求に付け込んだ悪質な手口であるが、効果は絶大だ。その結果、短時間で女性達は信じられないくらいのお金をホストに注ぎ込むのである。その状態を指して、E4-154「でももう信者じゃないですか、言ってしまうとE4は表現するのである。

時間単位で明朗会計を行うキャバクラと異なり、ホストクラブの会計は恐ろしいことに青天井である。会計の時にないと自分が一体幾らお金を使ったのかすら、女性にははっきりとわからない。その結果、一晩で数百万円の店へのツケ、或いは「掛け」ができる訳だが、この売掛けを悪用するのが、所謂「掛け縛り」である。吉原の高級ソープで人気のある風俗嬢が働いても、月の売り上げは150～200万円稼げるかどうか、である。つまり、それ以上の「掛け」を一月で作ってしまえば、それを一括で返済させるよりは、寧ろホストは自分が店に入金しなくてはならないノルマ以外の部分は「掛け」にして、残しておいた方が遥かに得策なのである。その「掛け」が残っている間にも、当然店への来店と散財を促す。さながら、サラ金のリボルビング払いや違法利息の闇金のように、ホストクラブの「掛け」は、女性を瞬く間に借金地獄に引き摺り込む。「掛け縛り」が発生した時点で、家族が余程の富裕層で、飲み代を身代わりで払ってくれない限り、若い女性に残された選択肢は、借金を踏み倒して「飛ぶ」か、性風俗産業で働いて払う以外にないのである。そして、実際に風俗に「沈める」作業は、ホストクラブと懇意にしている専門のスカウトがやってくれるのだ。当然スカウトには、店舗に女性が在籍している期間、ずっと風俗店からバックマージンが発生する。こうした全ての背後には、反グレやヤクザなどの反社会的勢力が存在する。そのような組織の庇護の下で、女性を性的にも金銭的にも搾取するカラクリが、日本社会に極めて巧妙に構築されているのである。

この問題で重要なのは、E4が「信者」と揶揄するように、ホストクラブに通う女性達は、周囲の制止など全く聞かないということである。DVを受けようと、搾取されようと、AVやソープランドに沈められようと、従順にホストの男性に「掛け」を払い続ける。中には、ホストには「掛け」の入金の時に数秒会うだけで、店にも顔を出さずに、ホストが他の女性達と豪遊している間も必死に働き続ける女性達もたくさんいる。哀しいことに、ホストからそのように“躰け”られるのだ。それが一番“良い女”だと。

無論、「洗脳」や「共依存」など、女性達が置かれている状況を説明する言葉は無数にあるだろうが、本研究はそれを論じるのが目的ではない。ここで指摘したいのは、「承認」を致命的に欠いた女性達が、すなわち「実存的貧困」状態にある女性達が、『承認』をめぐる闘争に文字通り、命を、人生の全てを懸けているということである。飢餓状態にある者は、食料が残り僅かになれば、自分が生き残るために他者を蹴落としても水や食料を巡って壮絶な奪い合いをするであろう。飢餓状態の人間の暴走を理性に働きかけて制止する

ことは不可能である。それが、飢餓、すなわち極限としての「経済的貧困」である。故に、「経済的貧困」は人間性を破壊するものであるから、社会にあってはならないのである。そして、同様のことがホストを巡って、風俗嬢の間で行われている。愛情の飢餓状態にある者は、自分1人しか愛されないのであれば、幾らお金を使ってもその愛（実際は、虚飾の愛である）を独占しようとするだろう。それが、愛情飢餓、すなわち極限としての「実存的貧困」である。故に、「実存的貧困」は人間性を破壊するものであるから、やはり社会にあってはならないのである。

(2) 先に B2 が性風俗産業を極めて否定的に眺めている点を考察したが、これは B1 も同様である。彼女からも安易な仕事に対するやりがいは語られない。その意味で、キャバクラから性風俗の仕事始めて自分の居場所をデリヘルに見つけた A6 や A7 などと違い、最初から金銭が目的で性風俗産業に参入した女性達は、そこを自分の居場所とは考えないようだ。

B1-56「やりがいはないですけど、正直流され続けている理由は金銭的な面プラス、やっぱ自由じゃないですか。朝起きなくても良いしその日嫌だったら休めるし、常識ない行動しても優しいし,, , そういう状況にも関わらず、ふつーにぽんぽんって出勤すれば、看護師でめちゃくちゃ神経遣った時よりもかなり稼げる、っていうただその甘えでずっと今流されてるんだろなっていうのも自覚してるので。」、B1-57「風俗がやりたいから、っていうのはないですねー、全く。」、B1-174「ないですね。もうバレちゃった時点で,, , なんかというか、人生狂わすレベルだと思うので、そうなって私が風俗嬢だって認識されてしまったら一緒にいられないなと思いますね、彼氏に関しては。」という B1 の一連のナラティブから、彼女にとっていかに性風俗産業の仕事が生きがいに値しないものかが伝わってくる（※B-2-⑧参照）。彼女は単に楽にお金が欲しいだけなのだ。また、スティグマに着目すれば、その仕事は恋人との関係性を破壊するのみならず、人生を台無しにする可能性を秘めている。それを十分に自覚しながらも、彼女はダラダラとその世界で働き続ける。B2 も抜けるのが難しい、と性風俗産業の特色を語っていたが、全く同じことを B1 も指摘するのである。

A 群の考察をする中で、性風俗産業の 6 つのメリットを前項までに整理した。その 6 つのメリットに従って、B1 の発言を再度整理すると、B1 にとっての風俗は、単に「生計維持機能」しかないのである。B1-55「やりがいはないですね。」と、そっけなく彼女は言う。B1-181「やって良かったことー,, , ないですね。」と、最後のまとめでも、彼女は繰り返し、風俗産業の「生計維持機能」以外の部分を否定する。彼女にとっては、社会関係を構築する手段でもなく、まして他の上位機能である「承認獲得機能」や「居場所確保機能」は全く存在しない。最上位の機能である「自己実現機能」など、B1 にある由もない。ただひたすら、彼女は生計維持のためだけに、楽に生きるためだけに、ホテルやソープランドで流されるように働くのである。それは、B2 の B2-280「やりがいとかいう問題ではなく生活の一部になってる。なんの疑問も持っていない、そこに」、B2-395「うん。入れたシフトだから行こうって。」というナラティブに近い。そこから浮かび上がるのは、ルーティンワークとしての性風俗産業である。従って、B2 同様に、B1 も各種心理尺度が軒並み

女子大生平均を下回るのだ。「拡張版ホープレスネス尺度」の異常な高さと、「生きがい感スケール」の異常な低さは突出している。加えて、境界性パーソナリティ障害（BPD）の病的水準を測る「ミロン臨床多軸目録境界性スケール」も、病的水準のカットオフポイントの 10 点を遥かに超える 14 点を示す。彼女が置かれた状態も B2 同様に極めてパワーレスなのであるが、そのパワーレスな彼女が生きて行くためには、性風俗産業が必要なのだ、やはりこれは打ちのめされた女性達にとってのセーフティネットなのだ、という見方もできるかもしれない。ただ、セーフティネットという視点に対しては、B2 が極めて辛辣な批判をしている。B2 は、その考えを、B2-182「んー、ちょっとね、逃げ場すぎるかな。」という。そして、B2-184「受け皿があるからこそ逃げられるじゃないですか。普通に結婚しようとか,,、なんでしょう、この仕事、私合ってると思ってやってるんで、『仕方なく』ってワードがついてくるってことはイイイイやってるんですよ。」、B2-185「っていうんだったら、やめた方が良いですよ。」と続けるのである（※B-2・⑨参照）。業界の生き字引である B2 にとっては、性風俗産業は決してセーフティな場所ではないという感覚が強い。寧ろ、嫌々風俗嬢をやるくらいであるならば、辞めて生活保護を受給すべきというのが彼女の認識なのである。そして、デリヘルで生きるために仕方なく働く 70 歳の風俗嬢を呼び出し、ストレス解消のために女性をひたすら面罵する悪質な男性客の実例を持ち出し、B2-194「泣く泣くやるしかないじゃないですか。そういうものってそこまでしてやらないとダメっすか、セーフティネットって。」と指摘するのである。

ここで B2 が語る 70 歳の女性風俗嬢の実例はかなり極端な事例だとしても、曲がりなりにもセーフティネットとして性風俗産業が機能している、と辛うじて表現できるとするならば、やはりそこで働いている女性達が、何らかのエイジェンシーを発揮し、そこで人生を少しでもより良い方向に切り開いている側面がなければならないだろう。そうでない限り、そこは結局、ホストクラブに代表される搾取機関に都合よく利用されるだけの場所になってしまう。B1 は 5 年、B2 に至っては 14 年と性風俗の世界で働いている期間も長く、その間スティグマと社会的排除の現実と直面してパワーレスになっているのかもしれない。また、2 人とも水商売を入り口にせずいきなり家庭の事情や金銭的な苦境から敷居の高い性風俗産業に入ったため、最初からこの業界に否定的な態度を取っている可能性もある。従って、デリヘルが最も働いている期間が長いのであるが、キャバクラ等の水商売も含めてチャットレディやセクキャバなど、豊富な業態を経験している B3 のナラティブを敢えてここで 2 人と比較してみたい。結論から言えば、B1、B2 とは真逆である。

B3 の B3-298「感じないわけじゃない。好きな人だったら感じるけど、どーなんだろう、たぶん相手のことそこまで好きじゃないんだと思う。ただ相手が『好き』っていうのだけを信じたい。」という言葉と、筆者の「ふーん。誰かから必要とされたいっていうのはとても重要？」という問いかけに対して、B3-299「それはとても重要。」と B3 が答えている点は、彼女が男性に対して常に承認欲求を持って臨んでおり、そして実際デリヘルの仕事から、ある程度の「承認」を得ていることを示唆している（※B-2・⑩参照）。従って、彼女は B1、B2 ほど、デリヘルの仕事に対して否定的ではない。だが、同じデリヘルにやりがいを感じていた A6 もそうであるが、彼女達は決してデリヘルのプレイ自体が好きな訳ではない。A6 の項でも彼女達が「異

常性欲者」であるというのは、男性側の都合の良いファンタジーである点は指摘したが、地元で「ヤリマン」と名高い B3 ですら、何千人という男性と性行為を行ってきた彼女でさえ、彼氏ではない限り、その行為自体に快楽は求めているのである。彼女が求めているのは、性行為を通して「承認」されることである。それが彼女の言葉を借りるならば、B3-298「ただ相手が好きっていうのだけを信じたい。」ということになるだろう。

B3 の承認欲求は切実である。だが、本項の冒頭で指摘した通り、Frankl (2015) は、フロイト心理学の「快楽原理」を「自滅的」であると否定し、「ひとが快楽を目指せば目指すほど、自らの目的はますます誤ってゆきます。換言すれば、『快楽の追求』とはまさに快楽を妨げること」(Frankl=2015: 61) になるという。従って、B3 が何千人もの男性達と肌を合わせてきたにもかかわらず、全く幸せになっていないことが、Frankl の卓見を物語っており、かつ、実存的フラストレーションは、「意味への意志」に昇華されない限り、自傷行為となって本人を苦しめ続けるということが、文字通り彼女の腕の数百條の切り傷から痛いほどに理解できるのである。

B3 は、軽度の知的障害があるからか、インタビュー記録を読み返しても悲壮感が無い。だが、彼女は決して「普通」の状態ではない。高校を三日で中退した彼女は、今でこそ読み書き計算がある程度できるが、中学時代は足し算もできなかったのだ。物心ついた時から常にいじめの対象となり、学校でも、キャバクラでも、仲間を求めて不良集団と交わっても、結局女性からはテンションが異常に高いと嘲られ、いじめの対象になり、男性からはヤリマンとバカにされて、都合よくやり捨てにされる毎日だったのだ。父親からは幼少期に見捨てられ、今は年上のヒモに貢いでクレジットカードの借金を数十万円抱え、それでもデリヘルで稼いだお金をほとんどヒモの男性に渡している。寂しさに流されて行った最初の援助交際は 14 歳の時、その後も不良仲間と交流する中で、コカインや大麻を使用したりして、ありとあらゆる非行に走り、時には犯罪行為にも手を染めた。彼女のこの経歴だけを聞けば、その人生は「悲惨」の一言に尽きてしまう。そして、精神保健の状態は、今回の研究調査の対象者の中でもかなり悪い群に属している。

B3-307「その震災の時に付き合ってた,,、まずそもそもその前に 18 の時に付き合った男が DV でそいつに妊娠させられておろせて言われておろしたのよ。その後に,,、その時点でなんかおかしくて。精神状態異常だったんだよね。情緒不安定。」というナラティブが示すのは、彼女が既に思春期から精神疾患を発症している事実と、その時点で既に中絶まで経験している凄絶な過去である(※B-2-⑩参照)。中絶を要求してきた男性からは、激しい DV も受けている。そして、彼女が選ぶ男性は、須く自分を捨てた父と同じ女性にだらしく、生活能力に欠ける男性である。Freud であれば、「反復強迫」と指摘するであろうが、事実彼女は父親の呪縛から逃れられない。常に年上のヒモに貢ぎ続け、都合よく利用され続け、心身が摩耗していくのである。

B3 の酷い困窮状態に比べたら、他の 2 人は生活に困窮すらしていないかもしれない。B1 は看護師であり、正社員の経験もある。26 歳とまだまだ若く、従って、何時でも社会復帰可能な最も安全・安心な立場に

いる。B2 は、年齢が今回の調査では最年長の 38 歳であり、性風俗産業で働くには徐々に体力的にも年齢的にも限界に近付きつつあり、それなりに厳しい状態ではある。だが、彼女はしっかりと昼にパートの仕事をしたり、風俗を含めて様々な仕事を複数抱えることで、それなりに「リスク社会」におけるリスクヘッジを行っている。一方、B3 は、リスクに対して全く無防備である。軽度の知的障害があるからかもしれないが、それでも余りにも彼女は社会に対しても、他者に対しても無防備で無邪気過ぎるのである。しかし、心理検査の結果だけを見ると、寧ろ、彼女よりも他の 2 人の方が、全体的に不良な数字を示している。

一つの考え方として、A8 もそうだったが、業界に長くいると、心理尺度の結果が下がるという仮説が成り立つかもしれない。A8 は水商売に 14 年間、B1、B2 は性風俗産業にそれぞれ 5 年間、14 年間とかなりの長期に渡って従事している。この間、スティグマと社会的排除に晒され続けてきたことが、彼女達を著しくパワーレスな状態に陥らせたのかもしれない。現状、この仮説はかなり有力である。他の群にも同様の傾向が見られるのであれば、少なくとも「夜」や「風」の仕事は幾ら好きでやっても、長期で続けるべきではない、という支援の目指すべき方向性が見えてくる。それ程、スティグマの影響力は大きいのかもしれない。事実、この 3 人は全員が明確にスティグマを認識しているが、かなりの濃淡がある。B1 と B2 の性風俗に対する否定的な見方は顕著であり、それに比べれば B3 のスティグマ感は低い。

それを以下に並べて比較するが、まず B1 のナラティブから見ていこう。B1-37「まあ、見下してない人なんていないんじゃないかなっていうくらいのレベルですね。」という B1 のナラティブに対して、A6、A7 等の会話分析の結果から、筆者が幾らかは客の男性に感謝されたり、癒されたりすることもあるのでは、と問うと、インテリの B1 は、それに対して、B1-39「もちろん感謝もされるんですけど、,,、その根底には差別があるというか、『こーんな仕事をしてくれてありがとう』みたいな。『こーんなとんでもない仕事をして私を癒してくれた』みたいな、それすら差別というか。」と答えるのである（※B-2-⑫参照）。B1-37 のナラティブは、男性客に対する非常にシビアな視点である。男性に対してここまでの先入観を持ってしまうと、仕事の中でエイジェンシーを発揮することはかなり難しい。男性との行為に、生計維持以外の何も期待できなくなり、結果、サービスは不毛なルーティンワークと化さざるを得ないからだ。

同様に、B2 のスティグマ感もかなりの強さである。筆者が Y1 や水嶋ら権利派の立場から、女性の法的権利を認めてはどうか、という問いを投げかけると、それに対しては当事者である B2 から全否定の答が返ってくるのだ。B2-368「認められちゃダメ.」、B2-370「合法化だけでも偏見浴びるべき仕事であって、健全にやるべきものになったら、おかしくなるよ、たぶん.」、B2-372「差別っていうものないと,,、普通に生きてるの馬鹿らしくなりません?」というナラティブから伺えるのは、極めて自傷的な自己否定である（※B-2-⑬参照）。自分は普通に生きていない、そして、そんな自分は差別されるべき、という自虐的な心性を持って生きることは、人生においてとてつもない苦悩を生むのではないだろうか。差別をされて当たり前の人間などこの世界に存在しないはずだ。全ての人間に人権と尊厳があってしかるべきである。しかし、支援される側が、支援者に対して自分は差別されるべき人間です、というナラティブを当たり前のように語る時、

徹底したエンパワーメント・アプローチ無しに、彼女は一步も前に進めないのではないか、という大きな懸念を抱かざるを得ない。それ程までに、B2はパワーレスである。彼女は経済的困窮を全く抱えておらず（将来の不安定さに関しては心配はしている）、「相対的貧困」の枠組みにすら入ってこないのであるが、明らかにこれまで見てきたどのインフォーマントよりもパワーレスであり、絶対に何らかの支援を必要としている。そしてそれは、「実存的貧困」を克服するためのソーシャルワークなのである。江口の「社会階層論」は、複数の仕事を掛け持ちすることで、貧困線以上の生活費を確保しているため、生活保護水準の「要保護層」には該当しないが、その仕事の不安定さ故に、実質「要保護層」と何も変わらないか、時にそれ以上に酷い経済的な困窮状態に置かれている「低所得層」を拡張された貧困概念の枠組みで捉えている。その意味では、B2は完全に貧困である。だが、あくまで江口の貧困理論では、彼女は経済的に貧困である、という捉え方になってしまう。筆者は、彼女を経済的に貧困であると捉えることは、彼女の貧困の本質を見失うことになると思う。無論、江口の貧困理論の視角を否定はしない。彼女を江口の拡張した貧困概念で「相対的貧困」と見做しても何ら問題はないであろうし、寧ろ見做すべきだと思う。彼女は間もなく性風俗産業の一つの壁と言われる40歳になろうとしている。明らかにこの年齢を境に、風俗嬢の仕事は激減する。それは、角間（2017）が『風俗嬢の見えない孤立』の中で指摘している通りである。その際、今の昼の仕事とのかけもちで、彼女の生活水準が維持できるかは極めて疑わしいからである。

だが、筆者は、彼女に著しく欠損しているのは、経済力や生活能力ではなく、「承認」であると思う。とりわけ、愛の領域の「承認」である。それが、彼女が抱えた貧困の本質なのだ。現状、法の領域の「承認」を自ら拒み、そして、経済力という形ではある程度連帯による「承認」は得ている彼女に対して、ソーシャルワーカーが「重要な他者」の代わりを一時的に引き受け、苦悩に真摯に向き合いながらそれに意味づけを行っていく「実存主義アプローチ」、ストレングス・モデルに立脚し、彼女の強みを活かしながら居場所作りや関係性の構築を通して癒しを与える「エンパワーメント・アプローチ」、そして否定的な自己語りを書き換える「ナラティブ・アプローチ」等は、全て彼女にとって効果的なソーシャルワーク・トリートメントたり得る。逆に、彼女の経済力だけに着目して、社会福祉的な援助を行わないこと、或いは精神医学的な側面だけに着目して、治療のみを行うことは、彼女の人生のQOLをほぼ向上させないであろう。事実、彼女は医療機関に既に長らくかかっており、投薬やカウンセリング等も受けているのである。従って、「承認」の欠損がもたらす「実存的貧困」概念に立脚しない限り、彼女の生活困窮状態は絶対に見えてこない点をここでは強調しておきたい。

前述のB1、B2の強いスティグマ感に比べれば、B3のそれは酷くない。だが、B3自身、性風俗産業を肯定している訳でも無い。B3-518「偏見はないよ。偏見はないけど自分はやらない。他人がやるのはまあ良い。友達がやるのもまあ止めはしないけど、でも例えば昼職をやってる子がデリヘルやりたいって自分の唯一の友達が言って来たの、この間。でも『それはダメだよ』って言った。」、B3-519「そこまでなっちゃいけないと思った。今昼職やってるし彼氏もいるし幸せな生活を続けてって欲しい。夜の世界には入らないで

欲しいと思った。何故か。やっぱり後悔すると思うから。」というナラティブから分かるのは、B3は、この世界で壊れる女性と生き抜ける女性が存在していることを理解しているのだ。そして、自分が好きな女性は、自分の様に壊れて欲しくない、と心から願っているのである（※B-2-⑭参照）。

B3は、B3-525「自分が後悔したし、判断ミスだによって教えたい。」のように、明らかに他者に対する気遣いができているが、これは極めて重要なことである。第2章で、「物象化」の本質とは、「承認の忘却」である、という Honneth (2011) の指摘を検討した。そして、彼や Hegel が「承認 (Anerkennung)」と呼び、Lukács が「共感 (Antrilnahme)」, Heidegger が「気遣い (Sorge)」と呼んだ態度が、「物象化」された存在には働かないことを指摘した。その意味で言えば、彼女は自分自身も友人達も「物象化」していない。明らかに彼女の態度には、「共感」や「気遣い」がある。彼女は、自分自身も、友人達もきちんと「承認」しているのである。

「自己物象化」は、一種の防衛機制である。自分自身を「物象化」することによって、性風俗産業特有の苦悩に向き合わずに済む。B1のように、客まで「物象化」すれば、一層仕事はルーティンワークと化し、ケアワークから単なる不快な肉体労働に代わる。それは、B1にとって、長期的に性風俗の世界で自分を保ったまま働き続けるために必要なエイジェンシーだったのだろう。同じく、B2もそのようなコーピング戦略を取り、14年に渡って、長く出入りの激しいこの業界に留まり続けてきた。彼女の場合は、単に自己を「物象化」するだけでなく、「自己スティグマ化」まで行っている。彼女は事前にこれを行うことで、他者からスティグマ化された時の心理的な負担を軽減しているのであろう。これは、過酷な性風俗の世界を生き抜くための一種の生存戦略なのである。しかし、短期的には効果的なその「物象化」戦略は、長期化するにつれて効果的な戦略ではなく、寧ろ自分自身をパワーレスな状態に陥らせる原因になってくるのだ。初めはエイジェンシーの一環だったその戦略が、図らずも「自己物象化」を通して自身のエイジェンシーを喪失させるのである。何故ならば、「モノ」に主体性など存在しないからだ。

B1は、働き始めた初日のことを、B1-13「正直、他の子とかちょっとわかんないんですけど、なんていうか、最初に勤めた初日とかって、こうまだセックスと,,, んーなんですかね、愛が切り離されてないというか。まだプライベートな感じの感覚がちょっと残ってるので,,,」, B1-14「むしろ初日とかは嫌悪感というよりは、お客さんに対してちょっと好きになりそうとか,,,」, B1-15「プライベートとちょっとごちゃごちゃした感じで。あー、良い人だな良い人だな、って感じで最初は終わって。」と語っており、そこには明確に客に対する「気遣い」が存在している（※B-2-⑮参照）。明らかに彼女は最初は客にしっかりと「共感」していたのである。そして、B1は、当初はその仕事に対しても、決して大きな嫌悪感を持つてはいなかったのだ。それが変わったのが、仕事が急に忙しくなってからである。B1-18「その時にこう初めて、なんていうか嫌というか、こう,,, なんだろう,,, もう、お客さん全員に対して殺意が湧くじゃないですけど（笑）今までこうお客さんに対して『ちょっと愛しい』とか『大事にしよう』っていう気持ちがあったのが、一切なくなった瞬間がその時ありましたね。」というナラティブに示されるように、この段階からB1は、自分を

守るために「物象化」を防衛機制として用い始めたのだと思われる。客への「共感」や「気遣い」は彼女から失われ、それと恐らく並行して「自己物象化」も行い始めただろう。何故ならば、自分自身は「人間」でありつつ、客だけを「物象化」するには、罪悪感を伴うからだ。最初から客を徹底的に軽蔑していたり、憎んでいたりするならば話は別であるが、B1のような普通の女性が、1人の尊厳を持った「人間」を徹底的に「モノ」として扱うということは、他の防衛機制を駆使してもかなり難しいだろう。

例えば、外科医などは、手術に際して手元が狂わないように、医行為の一環として防衛機制を発動する。宋（2015）の研究では、術中ストレスを緩和するために、優秀な外科医ほどレベル4の適応的な防衛機制を用い、技術の低い外科医ほどレベル3以下の未熟な防衛機制を用いていることが明らかになっているが、「物象化」を正当化する防衛機制のレベルが低ければ、結局は自分が苦しむことになる。そして恐らく、B1の防衛機制のレベルは低いはずだ。

医師が高いレベルの防衛機制を発動できるのは、医師が高度な専門職であるからだ。高い倫理観に基づき、患者の最善の利益のために医行為を行うからこそ、手術中に患者を「モノ」のように冷静に扱うことは倫理的にも許される。一方、専門職ですらない風俗嬢が、そのような防衛機制を発動することは不可能である。そもそも、客は自分が「物象化」されることは全く望んでおらず、寧ろ「恋人」であるかのように扱って欲しいのである。表面上はその意向に従い、内心では客の「物象化」を行えば、当然風俗嬢は心理的に大きな葛藤を抱えることになる。かといって、自分の精神状態を守るために表面上も客に対する「物象化」を行えば、今度は客が全く付かなくなる。「モノ」扱いされた客はその女性を二度と指名しないだろう。結果、一見の客以外はその女性に付かなくなり、新人のお試し期間が終了して一見の客がいなくなれば、不本意でも店を移動しなければならなくなる。客を「承認」しないということは、結果的に客からも全く「承認」が得られない訳で、これは仕事のやりがい奪うだけでなく、女性を相当ストレスフルな状態に陥らせるであろう。

B1は、B1-5「結構すぐ違うお店に行くっていうのを繰り返してるので。」と、自分が一定の店に定着しないスタイルで働いていることを認めている（※B-2-⑩参照）。そして、B1-6「あの一、風俗の特性っていったら特性なんですけど、新人期間が稼げるんですよ。」と続けるのであるが、この認識は、正確に言えば正しくない。これは彼女のように、客を「物象化」するタイプの女性に特有の現象である。確かに客は「新人」を好むと言われる。それは、純粋に初めての女性を試したいという客の好奇心を満たすだけでなく、主導権をとって本番行為等の交渉を有利に進められるからだ。客に「本番行為をしないと客がつかないよ」などと言葉巧みにそそのかされた結果、経験が浅いデリヘル嬢やホテヘル嬢が不本意ながら本番に応じてしまったという話はよく聞く。だが、全ての客が、新人だけをターゲットに指名を入れる訳ではない。基本的に客は、単なる性欲の捌け口を求めている訳ではない。ある程度の信頼関係を築いたうえで、女性に対して非日常的な「癒し」を求めているのである。そして、それを提供できる女性には必ず固定客が付く。事実、Xで超売れっ子デリヘル嬢になったA6の場合は、キャンセルが出ない限り、一日の指名はほぼ全て常連客である。新規客は予約すら入れることができず、店側も新規客から「何で何時も予約が取れないんだ」との苦

情を回避するために、A6 の出勤情報は、敢えて深夜の 4 時に更新していた程である。新規客が朝起きて出勤情報を発見し、店に朝一で電話をすれば、「既に一杯です。」と断られる仕組みだ。A6 は、出勤前に固定客に事前に連絡を入れるため、店のホームページに A6 の出勤情報が無いにもかかわらず、前日に固定客の方から店に予約が入ってくるのだ。その電話で店側は A6 が翌日に出勤することを知ったほどである。これには、X の店長も苦笑するしかなかったという。

A6 のように、客を楽しませ、自分も楽しむタイプの人気風俗嬢と異なり、B1 は明らかにそれができない女性である。いや、当初はそれができていたのであるが、直ぐに B1-18 の繁忙期を迎え、それができなくなったのである。余程仕事が好きであったり、誇りを持っていたりしない限り、大半の女性は、B1 のように客を「物象化」せざるを得なくなる。そして、一度そうなると、B1-6 のナラティブで示される、次から次と店舗を移動する渡り鳥のような生活が始まるのである。そして、それが結果的に B1 から仕事のやりがい奪い、彼女の中のエージェンシーを喪失させ、ただお金のためだけに性風俗産業に従事するという状況を作り上げるのである。その先にあるのは、Frankl のいう実存的フラストレーションと性の過補償だ。B1 も B2 も、性風俗を辞めない理由を明確には言えない。否、辞める理由を見つけられない。それは、他にやるべきことを見つけられないからである。だから、長期間に渡って性風俗産業の中に居残ってしまっており、それを良くない状況と自覚してもいる。だが、抜け出せないのである。これは「実存的空虚」であることを意味するが、風俗嬢という状態が強いスティグマと社会的排除を伴っているので、彼女達は結局より一層の疎外を味わう「実存的貧困」状態なのである。この 2 人のナラティブから浮き上がってきたのは、B 群にカテゴライズした性風俗産業で長く働き続けるということは、恐らく多くの女性達に必然的に「実存的貧困」をもたらすということである。これは、水嶋のようにセックスワーカーを自認し、性風俗産業を肯定的に捉えようとする立場の人間からすれば、極めて不都合な事実であろう。そして、それは次項で触れる女性達の場合は、更に顕著なのである。

第 3 項 4 人のソープランド嬢の物語（高級・中級・低級×2）

前項では、本番行為を伴わない性的サービスであるホテル・デリヘルに主として従事した女性達のナラティブを検討し、性風俗産業に長く居続けることのリスクを浮かび上がらせた。スティグマと社会的排除に長年に渡って晒されることは、明らかに女性の自尊心を損ない、パワーレスな状態に陥らせている。本項では、主として「風俗の王様」と称されるソープランドで 1 年以上働いている女性達のナラティブを比較検討し、更に考察を深める。

4 人の内訳は、吉原の老舗高級店×1、高級よりの中級店×1、大衆店×2 人である。結論を先に言えば、18 のサブカテゴリ全ての中で、平均して最も心理検査の結果が悪いのはこのカテゴリと次の AV 女優のカテゴリである。ただ、性風俗産業の中で経験した仕事がソープランド嬢のみというインフォーマントがおらず、

他のカテゴリにも多数のソープランド経験者がいるので、一概にソープランド嬢が最も精神保健の状態が悪いとは断定できない。しかし、他のサブカテゴリに入れたソープランド経験者の心理尺度の得点を見ても、さほどこの4人と大差はなかった。従って、一先ずソープランド嬢は、高級店であろうと大衆店であろうと、パワーレスな状態の女性が多い、と結論付けておく。ソープランド嬢とAV女優のカテゴリを比較した時、大きな差は無いが、AV女優は今回1人10年以上トップ女優として活躍してきたレジェンド女優が入ったため、彼女1人の心理検査が突き抜けて良好で高くなってしまい、全体的に低い結果が底上げされてしまった。その結果、ソープランド嬢の方が、AV女優よりも若干パワーレスに感じられてしまうのであるが、自己実現している一部の例外的なAV女優を除けば、この二つのカテゴリの女性達の精神保健には大差無く、最も不良なカテゴリと位置付けても良いと思われる。

なお、対象をソープランド嬢に限定した量的・質的研究としては、小澤千咲の博士論文として「女性性産業従事者における職業に対する態度の形成および変容プロセス—M-GTA および心理検査を用いて—」がある。小澤は他にも岡野との共同研究で「性産業従事者に見られる心理的傾向及び問題」があるが、いずれの論文でも、ソープランド嬢にはPTSDや抑うつ、嗜癖等の精神保健の問題があることが指摘されており、本研究の結果・結論と大きくずれてはいない調査結果が導き出されている。また、質的研究でも概ね同様な結果が得られており、小澤がM-GTAで生成した概念図では、本研究でも活用できそうなものが多い。例えば、＜機能不全家族環境による満たされぬ思い＞、＜外傷体験による傷つき＞、＜将来についての熟考の先送り＞、＜愛他性と被虐性のグラデーション＞、＜孤独に潜む脆弱性＞、＜acting outとしての水商売・セックスワーク＞、＜身体化の道具化＞、＜ストレスの身体化と精神疾患の発現＞、＜社会的スティグマへの対処＞、＜仕事による恩恵・学び＞、＜見えない将来像＞、＜仕事からの見捨てられ感＞等、本研究のこれまでの分析内容と一致するような、或いは近似の分析カテゴリが、小澤の研究でも相当数得られている。従って、本項で論じる4人が概ね一般的なソープランド嬢の姿から逸脱してはおらず、質的研究の対象人数としては4人と少ないのであるが、ある程度の妥当性も担保されていると考える。

心理尺度の比較をした場合、吉原の最高級店にいる女性（B4）は他の3人（B5, B6, B7）よりは若干上であり（それでも女子大生平均に比べれば相当下である）、他の3人はさほど遜色がなかったため、最初に中級店以下の3人から少しずつ考察を進め、最終的には最も点数が高かった最高級店の女性の置かれた状況に重点的に検討を加える。なお、上記の小澤の研究は主として吉原の高級店で働く女性を対象になされているので、本研究で最初に触れる中級店以下に在籍している3人の精神保健の状態が、小澤の研究と比して極めて悪いのはある意味当然だと思われる。

性風俗産業に従事する女性達の多くが、機能不全家族で育っていることはこれまでも再三指摘してきたが、本項で取り上げる4人はその中でも相当下位に位置すると思われる。幼少時からかなり経済的に困窮した家庭で育ったB7のナラティブからそれを順次比較していきたい。

B7の出身は、東北地方の県都であるが、物心ついた時から母子家庭で生活保護である。B7-10「嫌だし、

なんか恥ずかしい。でも母親しかいないからま、しょうがないかな。」というナラティブから、彼女が幼少期から既に「相対的剥奪」に苦しんでいることが理解される（※B-3-①参照）。前項で取り上げた B1, B2 が「経済的貧困」を伴わない「実存的貧困」状態だとすると、B7 は、ソーブランドで働いていた 3 年間（平均月収は約 140 万円）を除いて、幼少期から出会い喫茶を利用している現在まで、一貫して経済的に貧困であり続けている。現在は派遣社員というプレカリアートを脱したもののかかなりの低賃金の正社員であり、ソーブランド時代の貯金を切り崩して生活している。昼の正業のみでは到底首都圏では生きていけないため、出会い喫茶を利用して売春を行っている。江口の「社会階層論」で言えば、「不安定・低所得階層」の典型例であり、何時「要保護状態」に陥ってもおかしくない状態にある。従って、彼女が行っている売春は、「享楽型」ではなく、「貧困型売春」の典型例である。今回のインフォーマントの中で、幼少時から最も「経済的貧困」が可視化されてきた存在であるため、彼女は「絶望的貧困」であると見做すことができるだろう。心理検査は、全面的に最低か最低レベルに近く、本研究のインフォーマント 61 人中、彼女は最も精神保健の状態が悪い群に入る。診断名が付いている精神疾患は、うつ病と睡眠障害、パニック障害 (PD) である。だが、それでも彼女は、本研究において最もパワーレスな女性ではない。

彼女と同等か、それ以下の心理状態の者を探すと、A13（児童虐待被害、性暴力被害、生活保護）、B5（児童虐待被害）、B11（児童虐待被害）、C2（AV 出演強要被害）、C3（児童虐待被害）、C4（性暴力被害、人種的マイノリティ）、C6（発達障害）、D2（児童虐待被害）、D7（性暴力被害、生活保護）、D11（児童虐待被害）、E6（児童虐待被害）、F7（児童虐待被害）の 12 人が、対象群の A から E まで、更に比較群である F 群に至るまで満遍なく存在している。（カッコ内は特記すべき心的外傷体験）。C6 以外は、全員が何らかの被害者であるが、性暴力被害以上に児童虐待の被害が目立つ。全員が極めてトラウマティックな外傷体験を経験しているのが共通の特徴であると言えるため、「承認」の欠如を「実存的貧困」をもたらす非物質的困窮と位置付けるのはやはり正しいと思われる。また、B7 同様の「経済的貧困」の経験者は、A13 と D7 のみであり、新自由主義が限なく波及した裕福なポストモダン社会において、人間をパワーレスな状態に陥らせるのは、「経済的貧困」以上に「実存的貧困」である、という本研究の仮説は、この結果からも支持されるように思われる。

B7 同様に、かなりのパワーレス状態にある B5 のナラティブの中で、その根源であると思われる箇所を以下で検討するが、最大のものは B5-213「母親死んで元カレ死んでですかね。」という喪失体験である。だが、彼女の不幸はそれで終わらない。母親が死んだ後、父が再婚するのであるが、その再婚相手の継母から心理的な虐待を受けるのである。B5-290「ある意味虐待ですね、もう.」、B5-291「フルシカト。同じ家に他人同士が住んでるような感じです。」というナラティブから、B5 が精神的虐待とネグレクトを受けていることが分かる（※B-3-②参照）。これは、B5 がいうような「ある意味」ではなく、明確な児童虐待である。そして、彼女の心的外傷体験には、高校受験の失敗も加わる。3 歳で母に先立たれ、思春期に受験に失敗し、更に高校時代に恋人を事故で喪うという様々な喪失体験を人生の早期に体験したことは、B5 から「存在論

的安心」を奪うには十分であろう。加えて、実家では日常的に継母が虐待を行うのである。実家や地元が彼女にとっては心理的な安全基地ではなく、居場所としての機能を全く果たさなかったのは当然であろう。父親は継母の虐待を黙認しており、人生において彼女は、「重要な他者」を持つことが一度もなかったのではないかと、とさえ疑われる。

「重要な他者」の不在は「実存的不安」を悪化させ、生きづらさの根源となる。実際彼女は、高校卒業と同時に逃げるように上京し、最初はキャバクラ店で勤務しながら、ホストクラブとビジュアル系バンドにのめり込むのである。地方から上京し、キャバクラ店で働きながら、ビジュアル系バンドにのめり込むというのは、雨宮とほぼ同じ人生行路であるが、これは「実存的貧困」或いは「絶望的貧困」状態にある女性のライフコースの一つの典型例である。また、B5-279, 280, 281 のナラティブが示すように、彼女には明確な「人生の意味」が存在しない。モラトリアムの状態をただ流されるままに生きている姿が浮かび上がってくるが、それは、本項では B4, B6 にも共通するものである。何もやりたいことが見つからない B5 が、唯一強い興味と感心を向けるのが、ホストクラブとビジュアル系バンドなのであるが、この二つは、そのような女性達にとって悪い意味で重要な受け皿になっている。ある意味嗜癖の対象に嵌る女性に共通することは何かと筆者が問うと、B5 は、B5-183「寂しいんだと思います。」と答えるのであるが、これは正鵠を射ているであろう。無論、B5 自身がその当事者なので、この表現は B5 が抱えた孤独の深さでもある。このようなポストモダン社会に特有の存在論的な苦しみは、何らかの没頭できる対象を見つけることができれば、ある程度は軽減される。Frankl は、スポーツへの没頭を健全なものとする一方で、最も不健全な形式の没頭を性的逸脱や薬物依存であると指摘するのだが、ホストクラブとビジュアル系バンドへの没頭は、極めて後者に近いだろう。

何故、ホストクラブとビジュアル系バンドであって、他の系統のバンドや芸能人ではダメなのかは、B5 自身がよく理解している。多少長くなるが、その直前の件から、引用する。

原 田 37: 自分の勝手なイメージなんだけど、所謂バンギャをやってる人って全国のライブを追いかけていくために風俗やってるイメージがすごく強いんですけども、それって間違ってますか？

B5-37: いや、間違っていないと思います。

原 田 38: あともう一つ自分のイメージなんですけども、バンギャをやってる女の子達って自傷してる女の子すごい多いと思うんですけども。

B5-38: ああ、多いですね。

原 田 39: あとゴスロリの格好してる子とか。

B5-39: はいはいはい。

原 田 40: それも間違っていないですか？

B5－40：うん、でもやっぱバンギャとホス狂いは多いと思いますね。

原田 41：あれって何なんですか、何でなんですかね？

B5－41：誰かに依存したいんじゃないですか？

原田 42：ああ、そういう子が依存するのにホストっていうのはすごいわかりやすいんですよ。わざと女性を依存させる、そういう仕事だから。でも何で、ビジュアル系バンドがホストの代わりみたいになっちゃうんですかね？

B5－42：でも、インスタ握手会みたいなものがあるんですけど、結構今、それこそ過剰営業みたいなものが流行ってて、あの一、抱きついたりとかおでことおでこ合わせたりとか。

原田 43：それってビジュアル系バンドは、絶対やってるんですか？

B5－43：ほぼほぼ今はやないと CD が多分売れないって言ってましたね。

原田 44：あー。普通のバンドと違ってビジュアル系の場合は、AKB 商法みたいな、、

B5－44：そうですそうです。

原田 45：そういうファンサービスがセットになってんだ。

B5－45：みたいですね。あと今は SNS があるんで、昔よりやっぱバンドマンとバンギャの子も繋がりやすくなった。

原田 46：あー。

B5－46：から、この人カッコいい、で、そういう伝手がある子に紹介してもらって貢いだりとか、っていうのが増えた、っていうのは言ってましたね。

原田 47：ふーん、だともうほとんど、ホストと変わらない感じですね。

B5－47：変わんないと思います。逆にホストより良い扱いしてくれますよね。多分。

原田 48：それはどういう意味でですか？

B5－48：あの一、月に、バンドマンでやっぱお金ないじゃないですか。だから月にじゃあ 10 万渡すって言ったらホストの 10 万で安いじゃないですか。でもバンドマン個人的に 10 万あげるってなったら、ま、高いじゃないですか。ってなったらバンドマンの方が良いっていう子は周りにもいますね。

原田 49：あー。だと常にバンドマンはそうやって、何て言うか、不倫じゃないけどその、不適切な関係を複数のファンと持ってるって感じなんですかね。

B5－49：うん、人にはよるけど、結構やっぱ貢いでもらってる子は多いって聞きますね。

原田 50：ふーん。その音楽が好きなんじゃなくて、バンドマンを依存の対象にしちゃってるんですかね？女の子たちは。

B5－50：うーん、は多いと思いますね。

上記ナラティブの前半の確認部分は、鈴木『フツーじゃない彼女。』でも描かれている事実と、自分が今回のインフォーマント達とのインタビューを通して得た実感の再確認なのであるが、B5 も認めているように、概ねこの認識は正しいと思われる。黒や白を基調としたゴシックロリータの服装を好み、時には目立つようにわざわざ手首に包帯までして自傷行為をアピールし、ビジュアル系バンドのライブハウスの最前列を全国どこでも陣取って、ライブ会場以外の場所でもメンバーに激しく求愛する、という典型的なバンギャのイメージから浮かび上がってくるのは、境界性パーソナリティ障害（BPD）の心性である。

夜行バスを乗り継いで全国ツアーの全会場に参加し、応援するには、当然昼の定職には就けない。従って、お金を稼ぐのも兼ねてバンギャの多くはキャバクラ嬢か風俗嬢になる。これは雨宮の著書にも描かれている通りだ。そして、このような行動の背景にあるのが、BPD の心性であるため、本研究では敢えて BPD のスクリーニング検査を行っている。そして、第 5 章で詳述するが、結果的に BPD のカットオフポイントを超えたのは調査者 123 名のうち、約 27%である。「ミロン臨床多軸目録境界性スケール」は、17 問の質問中 10 問に○が付くことがカットオフポイントになるのであるが、8 問、9 問まで○が付いた者を含めると、その率は実に 5 割近くなる。これは異常な数字である。BPD は、DSM-5 によれば、生涯有病率は 5.9%とされる。人口の 0.7~4.0%に存在すると言われる精神医学においては平均的な有病率の精神疾患であるが、性風俗産業従事者を対象に調査を行うと、質問紙による簡易検査とはいえ、一般人口の 4 倍を超える 27%近い有病率になってしまうのだ。だが、研究調査を通して得た実感は、この数字でもまだ低いと感じられるほどである。

BPD を顕著に特徴づけるのは、「見捨てられる」ことに関連する特殊な感情反応である。憤怒、空虚感、絶望、寄る辺のない不安、孤立無援感、抑うつ、自暴自棄の感情といった Mahler が「見捨てられに関連する黙示録の七人の騎士」と呼んだ破壊的な感情は、調査対象者の 8 割以上が抱えていた実感がある。無論、ここまで考察してきた A 群、B 群の女性達の大多数が、Mahler が挙げた感情を内に宿していた。そして、風俗嬢以外で最もこの状態に合致するであろう存在が、恐らくゴスロリファッションを身に纏ったバンギャなのである。

そもそも、バンギャが追いかけるビジュアル系バンドのメンバー達も恐らくこの特徴を内に備えており、バンギャと価値観を共有している。そしてそれは、如実に詞や音楽の世界観に現れている。日本において最も有名なビジュアル系バンドは、X JAPAN だと思われるが、その主要メンバー 7 人のうち、既に 2 人が自殺で世を去っていることも、BPD の特徴に合致する。X JAPAN の奏でる音楽からは、非常に分かりやすい形で自暴自棄なアティチュードと破壊的な衝動が伝わってくる。彼らの性的に挑発的（2 枚目のシングル名は「オルガスム」、7 枚目のシングル名は「Standing Sex」、所属レーベル名は「エクスタシーレコード」である）で、死や血を彷彿させる独特な歌詞の世界観と音楽の疾走感に多くの若者達が熱狂するのだが、BPD の心性を全面的に打ち出したバンドに対して、BPD の心性を持った（或いは、存在論的な不安を抱えた）若者達が共振しているようにも見受けられる。例えば、10 枚目のシングル、「Rusty Nail」は、ジャケットか

らして **BPD** そのものである。タイトルにもなっている「錆び付いた釘」で、手首を激しく掻き切っている自傷行為の絵柄が、ジャケットの背面に大きく描かれているからだ。PV では、メンバー1 人ひとりが順番に死んでいくのだが、「Rusty Nail」は週末に自殺することを描いた「WEEK END」（「序章に終わった週末の傷」という歌詞で示唆される）の続編であると説明される。

記憶のかけら描いた 薔薇を見つめて
跡切れた思い出重ねる 変わらない夢に

Oh Rusty Nail

どれだけ涙を流せば
貴方を忘れられるだろう

Just tell me my life

何処まで歩いてみても

涙で明日が見えない

序章に終わった週末の傷 忘れて
流れる時代に抱かれても 胸に突き刺さる

Oh Rusty Nail

どれだけ涙を流せば
貴方を忘れられるだろう
美しく色褪せて眠る薔薇を
貴方の心に咲かせて

(セリフ)

I can die, I can live

I can die to set me free

Day and Night, Night and Day

I wanna live to set me free

I can die, I can live

I can die to set me free

Day and Night, Night and Day

I wanna live to set me free

素顔のままで生きて 行ければきっと
 瞳に映る夜は 輝く夢だけ残して
 朝を迎える 孤独を忘れて
 赤い手首を 抱きしめて泣いた
 夜を終わらせて

この歌詞は、憤怒、空虚感、絶望、寄る辺のない不安、孤立無援感、抑うつ、自暴自棄の感情といった Mahler の「見捨てられに関連する黙示録の七人の騎士」だけで構成したと言っても全く違和感が無い。つまりは、凡庸でステレオタイプの塊なのであるが、B5 は、このバンドを神のように崇拝する。そして、X JAPAN の影響を受けた若手のビジュアル系バンドに嵌っているのである。B5 の「ミロン臨床多軸目録境界性スケール」の得点は 9 点であり、病的水準を示すカットオフポイントに、僅かに 1 点足りていない。だが、明らかにモラトリアムの真っ只中を自傷的に生きている彼女の生き様は、BPD の女性に重なる。B5-41「誰かに依存したいんじゃないですか？」というナラティブは、自分自身に向けられた言葉でもあるが、B5 はつまり、切実に「承認」を求めているのである。そして、その「承認」は、自分と同じ価値観、世界観を持った存在からでなければならないのであろう。

第 1 章の冒頭で、「実存的貧困」を生き方で体現した者として、太宰治と東電 OL を例に挙げたが、彼らが生きていれば、臨床的には十中八九 BPD と診断されるだろう。ここで、改めて DSM-5 (『精神疾患の診断・統計マニュアル第 5 版』) にける「境界性パーソナリティ障害 (Borderline Personality Disorder: BPD)」の診断基準を以下に確認したい。

対人関係、自己像、情動などの不安定および著しい衝動性の広範な様式で、成人期早期までに始まり、種々の状況で明らかになる。以下のうち、5 つ（またはそれ以上）によって示される。

- (1) 現実、または想像の中で見捨てられることを避けようとするなりふりかまわない努力
 (注：基準 5 で取り上げられる自殺行為または自傷行為は含めないこと)
- (2) 理想化とこき下ろしとの両極端を揺れ動くことによって特徴づけられる、不安定で激しい対人関係の様式
- (3) 同一性の混乱：著明で持続的な不安定な自己像または自己意識
- (4) 自己を傷つける可能性のある衝動性で、少なくとも 2 つの領域にわたるもの(例：浪費、性行為、物質濫用、無謀な運転、むちゃ食い) (注：基準 5 で取り上げられる自殺行為または自傷行為は含めないこと)

- (5) 自殺の行動, そぶり, 脅し, または自傷行為のくり返し
- (6) 顕著な気分反応性による感情の不安定性 (例: 通常は 2~3 時間持続し, 2~3 日以上持続することはまれな, エピソード的に起る強い不快気分, いらだたしさ, または不安)
- (7) 慢性的な空虚感
- (8) 不適切で激しい怒り, または怒りの制御の困難 (例: しばしばかんしゃくを起こす, いつも怒っている, 取っ組み合いの喧嘩をくり返す)
- (9) 一過性のストレス関連性の妄想様観念または重篤な解離症状

DSM-5 によれば, BPD は明らかに女性に多く, その割合は 75%である. そして, 関連特徴として, 以下のように記述されている.

繰り返す失業, 教育の中断, 離別や離婚もよくある. 身体的および性的な虐待, 育児放棄, 敵対的な争い, 小児期における親の喪失が, 境界性パーソナリティ障害をもつ人の小児期の生活歴によくみられる. 合併することの多い障害は, 抑うつ障害および双極性障害, 物質使用障害, 摂食障害 (特に神経性過食症), 心的外傷後ストレス障害, そして注意欠如・多動症である. また境界性パーソナリティ障害は他のパーソナリティ障害ともしばしば合併する. (高橋・大野 2014: 656)

本研究のインフォーマントの女性達の多くが, 上記の BPD 診断基準を満たし, そして DSM-5 に記載された解説に合致すると思われるが, 特に B 群の女性達は, 精神医学的にその病理が深い. A 群が最も「ミロン臨床多軸目録境界性スケール」の平均得点が高いのであるが, 病理的水準で比較すれば, 圧倒的に B 群の女性達の方が深刻である. それは, フェイスシートに記載された併存症の数を見ても明らかだ. B 群の多くの女性達が, 上述の複数の疾患を抱えており, より一層トラウマティックな人生を生きている.

繰り返しになるが, 「実存的貧困」は基底に愛着障害がある故に, 主たる精神病理は BPD の心性となって発現する. それが, 上述した (1) ~ (9) の心性である. また, (4) に列挙された, 性的逸脱等の様々な自己破壊的な嗜癖行為に耽溺したり, (5) に記載された, 自殺や自傷の行動化を度々企図するのは, 彼等が抱えた「実存的空虚」に耐え切れないからである. そして, X JAPAN の「Rusty Nail」は, ただそれだけを歌っている. 歌詞から浮かび上がる明確なメッセージは, 「最愛の貴方がいない」と「死ぬほど切ない」の二つしかない. それ以外はいかようにも解釈できる空疎なメタファーの羅列でしかなく, 聴き手が好きなように自己を投射して歌詞を理解可能であるが, 上述した二つのメッセージだけは誰の目にも明らかである. そして, この心性がまさに BPD なのである. 切ない理由は, 実のところ本人も良く分かっていないのである. ただ, 慢性的な空虚感と絶望感が身を苛んでいる. そして, 最愛の人が居てくれば, きっとその虚しさは

埋められるのだ、救われるのだ、と安直に BPD は考えるのだが、往々にしてその期待は裏切られて、最愛の人は当人達を見捨てて離れて行く。それは、毎日のように繰り返される BPD の激しい「試し行動」や「行動化」に耐え切れないからだ。その結果、BPD は「最愛の貴方がいない」と「死ぬほど切ない」虚しさを、大切な人に裏切られた苦悩と一緒に抱えて生きて行かなければならなくなる。これは『承認』をめぐる闘争』において、常に敗北し続けている状況だ。

彼らは愛の領域の「承認」を絶望的に求めているのだが、BPD のパートナー同士が上手く行くケースは極めて稀である。彼らの愛情行動は、お互いに暖を取ろうとして寄り添おうとするが、結局針で傷付けあってしまい、暖が取れずに震えている「ハリネズミのジレンマ」にしばしば例えられる。B5 ももちろんそうである。

B5 の元カレは、バイクによる事故死なのであるが、Frankl が実存的フラストレーションの捌け口として、死のスリルを味わうチキンレースに没頭する不良集団を事例として挙げたことを思い出して欲しい。B5 も元カレも、当時は地元の不良集団に属しており、元カレはバイクによる暴走行為で死んだのである。「Rusty Nail」の「I can die, I can live」というセリフは、BPD のやぶれかぶれな心性、生きても死んでも構わないという自暴自棄な心性を分かりやすく示唆しているが、存在論的な苦悩を抱えた者達が、その世界観を全面に押し出して歌うビジュアル系バンドに惹かれるのは、当然である。そして、彼らの拠り所の無さ、虚無感を示すのが、大人でも子どもでも無い未完成なアイデンティティの象徴であるゴスロリファッションであり、その衣装が白と黒を基軸にするのは、それが生と死、或いは、善と悪という完全なる二極化思考、精神分析で言えば、未熟な防衛機制である「分裂 (Splitting)」の象徴であるからだ。

吉原の最高級ソープランドで働く元専属 AV 女優の B4 は、10 代の頃から、常に恋人はホストかビジュアル系バンドマンである。そして、彼女の友人達の多くもまた B4 と同じで、お互いに傷付けあうような、「ハリネズミのジレンマ」的な「共依存」関係しか築けない。B4-56「私もそうだけど、男の子のために身を削ってなんかこう、費やしてあげたい、みたいなさ、支えてあげたいみたいな、ところってさー。支えてあげたいんだけど支え方って違うものも、あるわけじゃない。金銭面じゃなくて精神的にも、とか。いろんな方法があるのにそこしか思い浮かばなかった。」というナラティブからは、B4 やその友人達が、ヒモのような男性達に対して、必死に金銭的に尽くしている姿が浮かび上がってくる (※B-3-⑤参照)。そして、前述の通り、彼女達が尽くす男性達の多くは、ホストか売れないバンドマンなどである。何故、もっと条件の良い、或いは、普通の男性達を愛せないのか、と筆者が問うと、B4 は、それはたぶん難しいと答える。何故ならば、お金がある男性には「自分以外がいる」と疑ってしまうからだ。彼女達はそれ程までに自らを卑下しながら、矛盾する様だが、愛する人に自分 1 人だけを見て欲しいと切実に願っている。B4-61「そうだねー。たぶん根本求められたいんだろうね。」というナラティブは、B4 だけでなく、性風俗で働く全ての女性達の想いを代弁しているのではないだろうか。

繰り返しになるが、彼女達は切実な程に「承認」、とりわけ、愛の領域の「承認」を求めているのである。

そして、その理由は、B4-68「自信がないから。」なのだ。Lister は、『貧困とはなにか』の中で、自尊心や敬意に関して以下の様に指摘している。

貧困状態にある人が尊重・敬意をもって扱われると、自信ができ、行為における主体性の感覚が増す。グラスゴーのイスターハウスに暮らすキャロルは、食品生協の議長に選出されたこと、他のボランティアが「尊重・敬意をもってくれたことで、さらに自信をもつことができた」と述べている。

ジョン・ロールズによれば、自尊心は「おそらくもっとも重要な基本材」である。センも、自尊心を重要な機能と認定している。自尊心の重要性は、ヌスバウムの著作でさらに深く探求されている。ヌスbaum は人間の機能的能力の中心となるものをリストアップし、それに自尊心をふくめている。すなわち「自尊心があつて屈辱を受けないという社会的基盤があること。ほかの者と同じ価値をもつ、尊厳をもった存在として扱われること」である。(Lister=2011: 177-178)

B4-73「…私高校辞めた時くらいからペコってなったかも、自信.」、B4-74「友達にいじめられたから.」と B4 は、自らの自信が無くなった時期と理由を語るのであるが、彼女がいじめられたのは、彼女の生い立ちに起因する。彼女は人種的マイノリティ（東南アジア系の母親を持つハーフ）なのである。自分自身では何ともならない生得的なアイデンティティを理由に、彼女はいじめという個人の「内的作業モデル (IWM)」を後天的に破壊するトラウマティックな出来事を経験した。母子家庭に生まれ、虐待的な環境に育った B4 の IWM は、最初から極めて脆弱であったことが推察される。その IWM を粉碎し、B4 から生きるうえで「もっとも重要な基本材」をいじめが奪い去ったとしても全く不思議ではない。そしてその結果、人間の機能的能力の中心は欠損し、彼女は「実存的貧困」状態に陥ったのである。B4 や B5 は、実存的な苦悩を抱えて、たった 1 人で世界で生きて行くだけの強さが無い。だからこそ、誰かに依存したり、何かに没頭しなければ、その苦悩に押し潰されてしまうのである。アイドルの乃木坂 46 の追っかけをやり、彼女達に癒されていた A10 の抱えた存在論的な不安に比べると、B4 や B5 の苦しみはレベルが違う。A10 が、「実存的空虚」に苦しんでいるとするならば、明らかに B4 や B5 のそれは、「実存的貧困」である。それを放置しておけば、何時か自分が死なずにはいられないレベルである。「実存的貧困」は、本当に「死に至る病」なのだ。

B4-213「あーでも常に『死にたいな』とは思ってる.」というナラティブから、彼女が絶望していることがはっきりと理解される。彼女は、9 歳の頃から、既に世界に対して絶望感を抱いているのである。「重要な他者」を欠くということ、その結果、「世界」を信頼できなくなることは、結果的に「自分自身」を信じられなくなることである。何故ならば、自分自身、すなわち自らのアイデンティティは、世界からの「承認」によって確立するものであるからだ。Kierkegaard は『死に至る病』の中で、自己は独力で措定できるものではないと言う。「自己は、自分一人では平衡にも平安にもたどり着けないし、そんな状態でありうるものでもな

く、むしろ自己自身に関係するときに関係全体を措定した他者に関係することによってのみ、そうしたことが可能なのである。」(Kierkegaard=2017: 27-28)と彼は指摘しているが、これは心理学においても、社会学においても、数多くの識者が従来指摘してきたことである。故に、人生において他者からの「承認」を欠いてきた B4 が、自分自身に対して B4-68「自信がないから。」と感じるのは必然である。どれ程女性として魅力的であっても、それだけが単独で B4 のアイデンティティにはなり得ない。前項の A5 がまさにそうであるが、容貌は必ず衰える。美しさだけに囚われれば、10 代後半から 20 代前半の若さの絶頂期を過ぎた後、一気に精神状態が不安定になる。そして、この状態が終わりの無い絶望を招くのだ。そして、絶望は「死に至る病」である。

B4-209「いっぱい飲んでた。」というナラティブで、大量服薬(OD)による自殺未遂について B4 は語っているが、恐らく彼女は、何としても死にたかった訳ではない(※B-3-⑥参照)。OD は、確実な死を企図するには、手段として不十分である。だが、死が唯一の希望や救いになる状態であるならば、人間は本来躊躇なく肉体的な死を選ぶ。年間に約 30,000 人が自殺する自殺大国の日本において、自殺者のほとんどが、唯一の救いとして自死を選んでいるはずだ。一方で、彼女は、それを選ばなかった、否、選べなかったのである。そして、それがまさに絶望の絶望たる所以なのである。いかに日々が苦しくとも、生きることが絶望的であっても、彼女にとっては、死すら希望ではない。死んでも死にきれない想いが僅かでも残留する限り、死は決して人間にとって救いにならないのだ。

Kierkegaard (=2017: 34) は、『死に至る病』の中で、「絶望とは、こうして死が希望となるほど危険が大きくなるときの、死ぬことすらできないという希望のなさなのである。」と規定しているが、これは今現在彼女が置かれている状況そのものである。原田 220「彼氏ができたらどうするの？彼氏ができたらそんな気持ちなくなるでしょ。」、B4-220「彼氏がいてもねー、『死にて一なー』とは思ってるよ。」という筆者とのやりとりは、決して偽りではないだろう。彼女は恋人からの「承認」を必死に求めているのであるが、その恋人からの「承認」は、事実彼女の苦悩を、絶望を、これまでのところ全くもって解消していないのだ。これに関しても、Kierkegaard は、『死に至る病』の中で納得できる説明を行っている。

というわけで、何かをめぐって絶望しているうちは、まだ本来的な絶望ではない。それは発端であって、医者が病気を診て「まだ判然としない」と言う場合に近い。その次に、自己自身をめぐって絶望するという判然とした絶望が現れてくるのである。ある少女が恋のゆえに絶望している。恋人が死んだとか、恋人に裏切られたとかして、恋人を失ったことをめぐって絶望している。この絶望はまったくまったく判然としていないが、彼女はじつは自己自身をめぐって絶望しているのである。彼女としては、もし「彼」の恋人になっていたら、まったくおめでたいことに、自分のこの自己から逃れ出るか、それを失うかしていたことだろう。この自己が今や「彼」なしでいなければならなくなってしまうので、彼女からすれば忌々しいのである。彼女にとって財産になっていたかもしれないこの自

己——そうなったところで別の意味ではやはり絶望しているのだが——が、「彼」が死んだ今となつては、彼女にとってうんざりするような虚しさになったのである。あるいは、その自己のせいで自分が欺かれたことを思い出してしまうので、彼女にとってその自己は忌み嫌うべきものになったのである。ために、そうした少女に向かって「きみは自己を食い尽くしてしまっているね」と言ってみればいい。「いえ、そうすることができないところにこそ、私の苦しみがあるのです」という返答を聞くことになるはずだ。(Kierkegaard=2017 : 37-38)

Kierkegaard が指摘するように、B4 は、「じつは自己自身をめぐって絶望している」のである。そしてこれは判然とした絶望である。B4 も含めて多くの風俗嬢やバンギャ達は、男性問題、主として恋人との人間関係において絶望しているように周囲からは観察される。だが、Kierkegaard は、そうではないと指摘するのだ。「何かをめぐって絶望しているうちは、まだ本来的な絶望ではない。それは発端であって、医者か病気を診て『まだ判然としない』と言う場合に近い。」という通り、あくまで恋人との間に発生する「ハリネズミのジレンマ」は、単なる苦悩の発端に過ぎない。B4 のように、男性達との数々のすれ違いを通して、彼女達の苦悩の本質は、最終的には「自己自身をめぐって絶望するという判然とした絶望」の形で立ち現れてくるのである。そして、この絶望を克服する手段は、キリスト教に対する「信仰」しかない、と Kierkegaard は続けるのであるが、ポストモダン社会では、「神」による救済すらもが、「大きな物語」としては既に終焉しているのだ。従って、Nietzsche の「神は死んだ」という言葉は、全く別の文脈で正しかったのだ。

Kierkegaard は、「可能性」が絶望の唯一の解毒薬であるとする。そして、彼にあっては神こそが可能性の象徴なのであるが、ポストモダン社会において、「可能性」を神という不可知の存在に求めることはできない。「可能性」は、自らのうちに見出さなければ、未来に対する希望を抱けないのだ。だが、B4 を始めとする性風俗産業に従事する女性達の多くが、幼少期に「重要な他者」を持つことができず、自己を確立できていないが故に、致命的なまでにその「可能性」の実感を欠くのである。Kierkegaard (=2017 : 67) は「可能性を欠くとき、人間という存在が可能性を欠いた状態に追いやられるとき、その人間は絶望しているのであり、可能性を欠くあらゆる瞬間に絶望しているのである。」と指摘するが、B4 の B4-213「あーでも常に『死にたいな』とは思ってる。」というナラティブは、完全にこれに符合するものである。彼女は、あらゆる瞬間に絶望することを 9 歳の時から、約 20 年に渡って続けて来ているのだ。

Sen は、ケイパビリティ・アプローチによって、「貧困」とは「潜在能力」を欠いた状態と措定したが、その考え方に従えば、「可能性」を欠いた状態＝「絶望」と、「潜在能力」を欠いた状態＝「貧困」は、ほぼ同じであることに気付く。従って、「絶望」＝「貧困」という等式もまた成り立たなければならない。そして、そこから導き出されるのが、B4 が長年留め置かれてきた存在論的な「貧困」状態なのである。

だが、「所得貧困」に限定される現在の貧困観では、月に 100 万円以上の所得がある B4 は富裕層であって、到底「貧困」とは言い難い。これが、「相対的貧困」概念の限界である。貧困理論を「対象論」の下に位

置付ける限り，社会福祉学は彼女の苦悩に真摯に向き合えないのである．社会的排除を「貧困」であるとする志賀の立場に立てば，風俗嬢である彼女は「貧困」であると言えるかもしれない．だが，社会的に排除された風俗嬢の全員が B4 のような苦しみを抱えている訳ではない．次項で取り上げるセックスワーカーの様に，誇りを持ってその仕事に就いている女性達まで「貧困」であると見做すような雑駁で拡張された貧困概念は，B4 の絶望の本質を完全に無視している．彼女がこれ程までにパワーレスなのは，今現在，風俗嬢として社会から排除されているからではない．過去から今に至るまで，一貫して「承認」を欠いており，その結果としての自己，すなわち「可能性」の源泉が存在しないからである．そして，今現在の絶望は，過去まで遡って人間の「可能性」を苛むという，病気や障害とは全く異なる次元の苦悩であることを，Kierkegaard は以下のように指摘するのだ．

それでは，ひとたび不協和が，絶望が現れた場合，その不協和が続いてゆくということは理の当然なのだろうか？否，それは理の当然ではない．不協和が続くとすれば，それは不協和に起因するのではなく，それ自身に関係する関係に起因するのである．つまり，不協和が現れるたびに，不協和が存在するあらゆる瞬間に，その関係までさかのぼって考える必要があるということだ．ある人が（例えば不注意で）何かの病気を招く，という言い方がされる．そうして病気にかかると，その瞬間からその病気は症状を現し，現実性になるわけだが，その発端はどんどん過去のものになってゆく．「きみ（病人）はこの瞬間にも自分でその病気を招いている」とはっきりなしに言い続けるとしたら，つまり，あらゆる瞬間に病気の現実性をその可能性に還元させようとするなら，それは残酷であるし，非人間的でもあるだろう．彼がその病気を招いたことは間違いない．けれども，彼が病気を招いたのはただ一度のことだし，その病気が続いているのは彼が一度病気を招いたことの単純な帰結にすぎず，病気の進行をことあるごとに彼のせいにすべきではない．彼は病気を招きはした．けれども，彼が病気を招いていると言うことはできないわけだ．絶望することは，これとは違う．絶望が現実的になる瞬間は，どの瞬間であっても，その可能性に帰されるべきであって，絶望者は，絶望する瞬間ごとに，自分で絶望を招いているのである．その瞬間はどこまでも現在という時であり，その現実性をたどってさかのぼったところにある過去などというものは存在しない．絶望が現実的になる瞬間ごとに，絶望者は過ぎ去ったものすべてを現在的なものとして，その可能性において担うのである．それは，絶望することが精神の規定であって，人間のうちにある永遠なものに関係しているからであり，そして人間は永遠なものから逃れ出ることができない——そんなことは永遠にできない——からだ．

(Kierkegaard=2017 : 31-32)

絶望は，過去にならないのである．ということは，9歳の時に初めて「死にたい」と考え，その際に彼女が絶望したとするならば，爾来，絶望は片時も彼女の傍を離れず，B4 は何度も何度も絶望を現実的に繰り返す。

返してきたのである。そして、それが未来においてもなお続くことを彼女は確信しているからこそ、愛する人の手で B4-221 「『殺してほしいな』と思う。」のである。これ程の存在論的な困窮状態が、「経済的貧困」に比べて低く見積もられることがあっていい訳がない。故に、B4 の苦悩を余さずに掬い上げるためにも、「所得貧困」を必要としない「実存的貧困」概念が絶対に必要なのである。

B4 の心理検査の結果は、B5, B6, B7 に比べると高いのだが、それはある程度、高収入によって生活が安定していることに起因すると思われる。従って、彼女は「絶望的貧困」状態にある B7 と異なり、「所得貧困」を伴わない「実存的貧困」状態なのである。心理検査の結果を比較すると、パワーレスな順に、 $B7 > B5 > B6 > B4$ と並ぶのであるが、B4 が唯一全面的に女子大生平均を下回っているのが、「多次元自我同一性尺度」であることは、示唆に富む。彼女は、全ての次元において、アイデンティティが、すなわち自己が未確立であるが、この結果は、「じつは自己自身をめぐって絶望している」という絶望の本質に、B4 が既に辿り着いていることの何よりの証左であろう。そして、B4 同様に他の女性達も、この領域においてほぼ全面的に不良である。このサブカテゴリでは、1 人としてアイデンティティが確立している者がいないのである。B6 は、21 歳と最も若いということもあるのだが、人生設計に関する具体的な内容は、ほとんど何も語られなかった。それはまるで、誰かの人生を伝聞で語っているかのような、他人事さであった。例えば、留学したいという希望を B6 は語るのであるが、場所さえ定かではない。B6-27 「今はなんかそんな、絶対ここ、とかは決めてないんですけど、漠然と暖かい国、海が綺麗な所が好きなんです。だから海が綺麗な所に留学行きたいなって。」、B6-163 「留学は,,, 留学?,,, 留学に行きたいって思ったのは最近ですね。」、B6-166 「はい。英語喋りたいな、っていうのがあって。そうですね、最近ですね、思ったのは。」という一連のナラティブからは、B6 が語る空疎な夢の様に、彼女のこれまでの人生も全て行き当たりばったりであるのが伝わってくるようである（※B-3-⑦参照）。

B6 は田舎から上京して正社員として勤務していたのだが、仕事がつまらないという理由で退職し、デリヘルやキャバクラを経て彼女は現在ソープランドで働いている。そして、退職と同時に芸能事務所に応募して合格し、今とりあえずモデルを目指しているのであるが、それにもほとんど執着がなく、人生を壊しかねない AV にまで自分から応募したというのである。普通に考えれば、AV 女優としてデビューするならば、その段階で芸能人の道は閉ざされるのだが、B6 にその感覚は無い。そして、最近漠然と留学したい思いが芽生えたというのだが、目的は英会話が話せるようになりたいである。本来、留学は手段であって、それが目的ではない。当然、英会話も仕事のための手段であって目的ではないはずだが、B6 にとってはそれが目的なのである。手段と目的をここまで取り違え、かつ、自分のキャリアに徹底して無頓着で、人生において何をしたいのかがインタビューをしても杳として全く掴めないのが、B6 という女性である。このアイデンティティの不明瞭性は心理検査にも表れており、B4 同様に、「多次元自我同一性尺度」は極めて不良である。彼女の場合は、話していてもラポールができた感じがせず、過去の喪失体験等の踏み込んだ話に会話が発展しなかったのであるが、心理検査の結果だけを見れば、B4 や B5, B6 同様に何らかのトラウマティ

ックな出来事があってもおかしくはない。ただ、印象としては倫理観や道德観と未来に対する責任感など、人としての大切な部分が、ごっそり抜け落ちているような非常に不可思議な存在である。軽度の知的障害があるのかもしれないし、サイコパスなのかもしれないが、断定できる要素が無いので、彼女に関する深い考察は敢えて行わない。

本項のまとめとして、「風俗の王様」であるソープランドに対するスティグマについて質問した部分を比較したい。上瀬の先行研究では、ソープランド嬢は最も職業威信が低かった。キャバクラよりも遥かに下、辛うじてホストが同じレベルという低い数字である。それ程までに、日本社会においてソープランド嬢というものは、社会から白眼視されているのである。だが、そこで働く4人は全員が、差別や偏見を強く内面化していない。B6の場合は、上述の様に人として欠落したものを感ずるので、さほど驚くことはないのであるが、B5やB7までが、ソープランドで働いたことをそれ程恥じてはいないのである。

B6-185「悪いことではないですね。年齢詐欺ってる訳でもないですし、正直だっってこういうソープとかがなかったら性犯罪なんて死ぬほどあると思いますし。」というB6のナラティブには、ほとんど開き直っている感すらある(※B-3-⑧参照)。彼女自身はソープランドで働くことに抵抗感はなく、悪いことをしているという罪悪感も無い。単に彼女は、損得勘定で考えた時に、周囲にカミングアウトすることは自分にとって不利益を生むので、すべきでないと思っているだけなのである。彼氏が怒ること、両親が哀しむことは理解できているが、逆に言えばその程度の浅薄な理解である。スティグマの実感としては極めて軽微であり、A8の無頓着さに通じるものがある。最も職業威信の低い職業に就いていながら、それをほとんど実感しないのは社会人経験の少なさ故か、元来の性格によるものなのかは分からないのだが、B6が一般的なソープランド嬢を代表しているとは考えられない。だが、B4、B5、B7も、B6ほどではないにしろ、やはりスティグマ感はさほど大きくはないのだ。

B5は、キャバクラに関しては親にも全く問題なく言えるという。A群の女性達の多くがそれすら家族や知人、恋人には知られたくないと感じていたのと対照的である。しかし、流石にデリヘルやソープランドは家族には言えないという。だが、言えない理由は、決して良心の呵責ではない。B5のB5-137「なんですかね？なんだろう。なんか『お前何やってんの』みたいな。さすがに怒られるっていうか多分縁切られる。」というナラティブから分かるのは、B5自身にはB6同様に、ソープランドに対する差別や偏見は無いのである(※B-3-⑨参照)。キャバクラと違って、風俗で働いていることを親に言えないのは、ただ単純に怒られるからなのである。それは、B6が恋人から怒られるからキャバクラを言えないという次元の話と何も変わらない。あくまで、自分自身の損得勘定の話であって、A群の多くの女性達や、B1やB2が前項で指摘したような、自分や社会の道德観や倫理観に照らし合わせた時に感じる後ろめたさや、恥の感覚ではないのである。それは、B7も同様だ。B7-143「んーとー、今普通の仕事してるから、例えば、変なことしてきたとは思ってないんだけど、水商売、風俗とかって。変なことしてる訳じゃないんだけど、やっぱり普通、普通って何が普通かわかんないですよ。みんな普通だと思うけど、ちゃんと仕事を持っている女性として普通に見ら

れたり。」という B7 のナラティブは、水商売や風俗を仕事として否定はしていない (※B-3-⑩参照)。寧ろ、それらの仕事を変なことではないと正当化するのである。ただ、やはりそれを普通だとも言い切れない歯がゆさは伝わってくるが、決してそこに酷いスティグマは感じられない。一方で、B7 の場合は、生活保護に対しては、非常に強いスティグマの実感が見受けられる。生活保護を受給していた母子家庭に育ち、生活保護のお陰で生きることができたにもかかわらず、B7 はそれに感謝するのではなく、それを恥だと感じているのである。B7 は、首都圏で手取り 14 万円で働く典型的なワーキングプアである。その意味では、江口が貧困と指定した「不安定・低所得階層」そのものである。だが、彼女は経済的な貧困状態を国に縋って改善することを拒むのだ。B7-130「あ、そう、でもプライドがあって働けてるうちは、そういうなんだろう、国に『貧乏です』っていうの言いたくないんです。」、B7-131「(生活保護は) 受けたくない。まだ丈夫でいるって思いませんか。で、生活保護ってなんか保護されるまで落ちたくないです。なんだってまだできるのに恥ずかしい。」、B7-132「恥ずかしい、恥ずかしいっていうか言い方変だけど、,, いや、働きたい。」というナラティブからは、新自由主義の自己責任論を内面化し、消費社会の二級市民として生きることを頑なに拒む女性の姿が浮かび上がってくる (※B-3-⑪参照)。そしてその姿は、第 1 章で、坂爪が紹介したゆきえさんの事例そのものだ。生活保護よりも性風俗産業の方がマシという感覚は、やはり女性達にとっては特殊なものではない。生活保護を実際に子ども時代に受給していた B7 が、スナックやソープランドの仕事は、実際とても大変だし、そこで理由があって働く女性達に偏見など持たないと言いう一方で、生活保護に対してはこれほど強いスティグマ感を持つのである。新自由主義における「主体化＝服従化」のメカニズムは、B7 を完全に市場原理主義、経済至上主義のイデオロギーに隷従させている。働くことは義務であり、生活保護は恥であるという社会通念は、生活保護受給者だった B7 にこそ強く働いてしまうのである。消費社会における「相対的剥奪」の爪痕の深さを痛感させられる。

B4 は、さすがに AV に出演したことに対しては、強いスティグマ感を示した。だが、ソープランドも含めて風俗に関してはさほど大きなスティグマ感を持っていない。彼女は他の 3 人が言えないという風俗の仕事でも、デリヘルまでならば、彼氏にも言えるというのだ。無論、B4 の彼氏はホストかスカウト、ビジュアル系のバンドマンなどの特殊な人に限定されてしまうため、そもそもの価値観が一般の男性とは異なるのであるが、それでも彼女のスティグマ感は低い部類であると言っていいだろう。

従って、差別や偏見に対して比較的無頓着に生きてきた B4 であっても、AV に関しては、スティグマが別物であると指摘することはかなり重要である。というよりも、B4 は AV を経験して、改めて性風俗産業に対する社会の風当たりの強さを理解したと言ってもいい。未成年からキャバクラで働き始めた B4 は、本人が自分で言うくらい貞操観念が低い。そんな彼女は、AV を引退し、そして間もなくソープランド嬢も引退してキャバクラ嬢として再出発するのだ。収入が減っても、性風俗産業の中では比較的「職業スティグマ」が低い仕事に就きたいと考えられる歳に、漸く達したということであろう。

上瀬の「職業スティグマ」の先行研究には AV 女優のカテゴリが無いのだが、日本の性風俗産業において

最も社会的偏見に晒される職業は、AV 女優でほぼ間違いない。それは、主として AV 女優として活動している女性達を集めた C 群の研究結果からも確信を得ている。

B4 は、ソープランド嬢と AV 女優の間には、B4-295「大きい差がある。」と断言する。それは、人から観られるだけでなく、B4-296「もう消せないから」だ。そして、彼女は、B4-297「でもなんか、一時の欲に流されて AV 出たってことに対して後悔はしてないけど,,, 未来は狭めたなとは思ったよ。やっぱり。」と後悔はしないと強がりながらも、未来永劫付きまとうスティグマの強さを実感しているのである。B4-300「そうだね,,, どうなんだろう……たくさん目の当たりにはしたわけじゃない。この間の◎月（引退オフ会があった月）もそうだし。自分がそういう仕事してたから、っていうことに対して。何回も観てるし、何回も同じこと感じたし,,, 慣れないんだよね。やっぱりここだったか、やっぱりここで躓くんだな、っていうので、たぶん将来的なことを諦めてたりするんだよね。」というナラティブが示すように、彼女は AV 女優になったことで自分の将来の幸せを諦めざるを得ないのだ。これが、AV 女優という日本の性風俗産業における最大のスティグマの軛なのである（※B-3-⑫参照）。

B4 が、「貞操観念がぶっとんでる」と指摘する程、やはり AV に出演することは世間一般の感覚から大きなずれがある。本研究に協力してくれたインフォーマントの大多数が、「AV に出ることは考えたことがあるか？」と質問を向けると、十中八九、「それだけは嫌だ、記録に残る」とそのリスクを指摘して、職業選択としては問題外と切り捨てた。これ程社会的な偏見が強いにもかかわらず、AV に出演する以上、女性達にはのっぴきならない理由があるか、「自傷的存在証明」のいずれかだと推測されるが、B4 の場合は、恐らく後者である。彼女は、「承認」が欲しかったのだ。

B4-32「お金が大きかったのかな,,, やっぱ、あと一、求められたかった,,,」というナラティブを総合的に分析した時、彼女の場合、お金＝ホストクラブなので、結局 B4 が主張する金銭的理由は、求められたかったという承認欲求と同義である。当時の恋人であるホストに大金を貢ぐためには、B4 は当時働いていたデリヘルよりも、AV 出演の方が効率が良い手段だと考えたのだ。だが、前項で E4 が解説してくれたホストの「掛け縛り」による借金地獄であるが、それが理由で大金が必要になった場合、女性達が主戦場とするのはソープランドなのである。ここで B4 が指摘する「お金＝AV」という図式は、正直腑に落ちない。実際、B4 は専属女優だったとはいえ、破格の待遇とは言い難い。B4-156「うん。私より高い子ももちろんいるし。でも最初 1 本 50 万で言われたときに、あー、それが私の値段か、ってスンって落ちたのはなんとなくある。」と B4 自身は語っているが、専属女優として 1 本僅か 50 万円というギャラは、恐らく平均以下ではないだろうか。

中村が指摘するように、明らかに 2000 年代に入って、AV 女優の一本当たりの出演価格は下落している。専属女優の B4 が僅か 50 万円ならば、月の収入はそれ+αのイベント料金分しかない（イベント参加まで契約に含む場合があり、その場合イベントは完全にただ働きである）。彼女の場合は、イベントの日当が 2 万円だったという。月に 1 本撮影して 50 万円、そして、仮に土日を中心に一月当たり 10 回のイベントをや

ったとしても、収入は計 70 万円にしかならない。これならば、B4 レベルの容姿の女性であれば、寧ろソーブランドやホテヘルで働いた方が遥かに月当たりの収入は高いはずだ。吉原の高級ソーブランドで働けば、だいぶ値下がりしたとはいえ、それでもフルで出勤すれば 150～200 万円の月収は可能なのである。従って、倍以上稼げる手段が他にあるにもかかわらず、敢えて AV 出演に拘ったのだとすれば、そこには意識的か無意識的かは別にして、本人なりの何らかの意図があるはずだ。察するに、彼女の場合は、「専属 AV 女優」という肩書が、その時は必要だったのではないだろうか。

B4-20「そうだねー、なんかねー、当時はねー隠し通せないだろうなって思ったけど。なんか、そのほら、AV にもランクがある,,, じゃない?」というナラティブには、専属女優のランクの高さに対する確かな誇りが感じられる(※B-3-⑬参照)。自分は専属女優という選ばれた女性なのだ、価値ある女性なのだ、ということ、当時付き合っていたホストの彼氏に対しても、そして何より彼女自身に対しても、本当は誇示したかったのではないかと、と思われるのだ。逆に言えば、そのくらい彼女の自尊感情は下がり切っており、自傷的ではあっても、「専属 AV 女優」という肩書が、脆過ぎる自我を支えるために必要だったのではないだろうかと思うのである。その理由は、キャバクラやデリヘル、そして吉原の高級ソーブランド嬢と様々な形態の性風俗産業を渡り歩いた中で、彼女が最も誇りを持って仕事に取り組んだのが、やはり AV 女優であるからだ。大変な仕事ではあったが、一番長く働いた業界でもあり、明らかに彼女はそこで「承認」を手に入れている。以下のナラティブから、それは良く分かるのである。性風俗で働く 6 つのメリットのうち、さすがに自己実現を彼女は「AV 女優」としては手に入れてはいないのであるが、AV 業界は単に生計を維持するための機能に留まっておらず、上位機能も含めて、彼女にとっては「承認」の共同体として機能していたことが伺えるのである。

原田 309：そろそろまとめの質問したいんだけど、AV 女優は人から大切にされたいんだっていう貴重な話をもらったんだけど、やっぱり B4 さんもそういう仕事やってた時は、それをやることによって大切にされてるとか必要とされてるっていうのは実感できてた？

B4-309：実感できてた。

原田 310：お金がメインであっても、それは感じるんだ、自分が必要だって。

B4-310：そうだねー,,, 仕事をさ、最後辞めるっていう、じゃこの間の引退飲みオフ会の時とかも身をもって実感したなーっていうのが、「辞めないで」っていう言葉よりも「本当に今までお疲れ様でした」って泣く人が多かったんだよね。Twitter 上ではもちろんわからないけどさー。たくさんのお祝いの言葉、「お疲れ様でした。新しい道を頑張ってるね」って言ってくれる人とか、たくさんいてー。

原田 311：うん。

B4-311：あー、まあこういう時にやってて良かったな、とは思った。さすがに、AV 女優の活動

全てをさー、良かったなんて言えないけど。こういう所は、ずっと応援してくれてた人がいたから成り立った仕事だし。別にそんな売れっ子とは思わなかったけど。それでも「B4 ちゃん頑張れ」とか言ってくれる人がいたっていうことは、まーそれなりに充実してたな最後は、って思えたかな。

原田 312：そっか。じゃあキャバクラとデリヘル、ソープランド、AV っていう 4 パターンで働いてたと思うんだけど、一番やりがいを感じたのはどこ？

B4-312：AV（即答）

原田 313：やりがいが一番つらい AV なんだ。

B4-313：やっぱそうだねー,,, 一つの駒だと思うのよ, AV 女優って。業界を発展させるとかさー。今だったらマスカッツとかもさ, あるけどさー。

原田 314：うん。

B4-314：結局現場においては AV 女優も AV 男優も一つの駒なわけで。そういうものだってわかってるし, そうだと思ってやってたけど, そこに一つの,,, 人間じゃないにしても AV 女優っていうくくりの中でもファンの人とかがいたから一つの「もの」として成り立たせてくれたわけじゃない。そうならないで, 消えてく人も山ほどいるわけだから。そういうので考えたらやって良かったとまでは思わないけど, 良かったこともあったのかな, みたいな。

B4-314 のナラティブの後, 「アダルトビデオ出演強要問題」について尋ねた部分は後の項に譲るが, 彼女はこの問題を頑として否定する。少なくとも 300 本以上に出演した女優に関しては, 『強要された』なんて, 絶対に認めない」と言って譲らない。AV 業界を擁護するこれらの発言からも, B4 の「専属 AV 女優」という肩書に対する強い誇りが伝わってくるのである。

本項では, 「風俗の王様」と称されるソープランドで働いている女性達に焦点をあてて比較検討を行ってきたが, 先に述べたように, 心理検査の結果が著しく不良なことに加えて, 会話分析からはスティグマの実感が, 少なくとも A 群の女性達や, 所謂非本番系サービスに従事する前項の女性達に比べて, かなり低いことが認められた。恐らく, 最も職業威信が低いソープランドで働く女性達は, そこに足を踏み入れる段階で, ある種の覚悟が完了していること, 或いはそうしたスティグマに対して, 元来性格的に無頓着であることが, 理由としては推測される。ソープランドで働く女性達の心理的な抵抗感が予想以上に低かったことは, 小澤も自身の質的研究の中で指摘し, それに＜自己規制の対象外としてのセックスワーク＞と名前を付けてカテゴリ化している。小澤は, 水商売と風俗, そして, 本番系風俗とそうでない非本番系風俗をそれぞれ分けて考え, そこには「great wall (身体的な侵襲と精神的な抵抗感から成る大きな壁)」があるはずだと事前に想定したが, 研究を通してそれが実際はほとんど存在しないことに気付かされた。彼女達は, セックスワークに関しては都合良く自己規制を解除しているのである。従って, 小澤のインフォーマントの中には, ソープ

ランドで働ける年齢になったことを喜ぶ若い女性の事例や、セックスワークに前向きにのめり込んでいく事例などが多数紹介されており、本項で比較検討した4人以上に、女性達が能動的にソープランド嬢という仕事に向き合っている印象を受ける。無論、小澤のインフォーマントが全員吉原の高級店に所属していることは割り引かなければならないが、それでもラディカル・フェミニズムを見つけようとする「可哀そうな被害者」像を、ここに見出すのはかなり難しいと思われる。

ただ、前項でE4が指摘した、ホストクラブの「掛け縛り」の被害者は、話が異なる。自由意思でソープランドを選んだ女性の権利と人権は最大限に尊重すべきだと考えるが、ホストクラブに入金するためだけに働き続けるのだとすれば、本番行為が必須のソープランドは、精神的な摩耗感が極めて強い場所であることもまた、疑いない事実である。小澤の研究でも、本研究においても、主としてソープランドで働く女性達の精神保健の状態は、他の業態の女性と比較してかなり悪い。それは、欧米の研究でも従来繰り返し指摘されている事実である。例えば、南アフリカ、タイ、トルコ、アメリカ、ザンビアの5か国で、475人のセックスワーカーを対象としてPTSD（心的外傷後ストレス障害）と性暴力被害の大規模調査がFarleyらによって行われたが、その際、対象者の3分の2がPTSDの診断基準を満たしたことから、Farley（2003）らは、「売春は本質的に外傷をもたらす行為」であり、「売春の害は文化的な制約をうける現象ではない」と結論付けている点を最後に指摘して、本項を終えたい。

第4項 2人のセックスワーカーの物語

本項で取り上げる2人は、共に水嶋やY1のようにセックスワーカーを自認している。そして、2人とも、講習会の講師を務めたり、自分が主宰する協会や団体の中で、風俗嬢の仲間達と技術の向上に努めたり、情報交換等の交流会を行ったり、悩み相談等のピア活動を行っている。2人とも個人事業主としての届け出を出し、確定申告を毎年行っている納税者である。水嶋以外に、このように確定申告まで行っているセックスワーカーは、恐らく日本には数えるほどしかいないに違いない。キャバクラ嬢もそうであるが、ほとんどの風俗嬢が現状わざわざ税務署に所得の申告をしない。中には納税義務すら知らない者も多いであろう。そのような状況において、敢えてセックスワーカーを名乗り、納税を行っているが、お互いの立ち位置が対照的なB8とB9のナラティブを比較検討することで、本項では所謂「勝ち組」風俗嬢と、それ以外の風俗嬢のマインドの違いを浮かび上がらせたい。

B8は、カリスマ風俗嬢として高いリピート率を誇り、店長からの依頼を受けて、全国のデリヘル店やホテヘル店、ソープランドで風俗嬢として働くことの心構えを、女性達とそれを支える黒服スタッフ達に伝えるコンサルティングの仕事をする傍ら、現役風俗嬢として、今は主にソープランドとデリヘルに従事している。前項までの研究結果に照らし合わせれば、彼女の心理尺度の検査結果は低くなるはずである。何故ならば、第1項で指摘したように、性風俗の世界で長く働くことはスティグマの内面化に繋がり、自尊感情の低

下を招くからだ。また、第2項では、ソープランドという本番行為が組み込まれた仕事に従事する風俗嬢は、押しなべて精神保健の状態が悪いことが、本研究及び小澤の研究から導かれた。Farleyらの、「売春は本質的に外傷をもたらす行為」であり、「売春の害は文化的な制約をうける現象ではない」という結論が正しいことは、改めて日本でも確認されたのである。

この点を鑑みれば、長年性風俗産業に籍を置き、かつ外傷的なソープランドという仕事に従事しているB8はこれまでの女性達同様に低めの心理尺度の結果が想定されるのであるが、それは全く逆の結果になった。つまり、全面的に良好であり、ほぼ全ての領域で女子大生平均を大きく上回っている。これは、彼女が元来特殊なメンタリティの持主だった訳ではなく、彼女が仕事を通してセックスワーカーの自認を持つに至り、現在も誇りを持って仕事をしていることが最大の要因であると考えられる。事実、B8も普通の女性達と同じように、性風俗の世界に入った理由はそれなりに切羽詰まった金銭問題なのだ。彼女は、最初に勤務したエステ会社において、自社製品のノルマを達成するために所謂「自爆営業」を強いられてしまい、結果、総額で400万円のローンを抱えてしまったのである。その後、普通のOLに転職した際、B8-4「やっぱちょっと毎月の支払いが大きすぎて払えなくなって、給料では、それで風俗の世界に入りました。借金返すために。」性風俗の世界に足を踏み入れたのである。従って、今はセックスワーカーを自認する彼女であっても、決して好きでこの業界に飛び込んだ訳ではないのである（※B-4-①参照）。

上記のエピソードから分かる通り、B8はごく普通というよりも、寧ろ昼の世界では恐らくメリトクラシー型能力は低い部類であろう。自分の返済限度額を超える借金を抱え、転職にも成功しなかった段階で、彼女のメリトクラシー型能力には疑問符が付く。それは彼女の高校の偏差値が地域の底辺校レベルなことからも推察される。また、ハイパー・メリトクラシー型能力、すなわち人間力も当時は持っていなかったのだろう。コミュニケーション能力に優れているならば、そもそも会社の圧力で必要のない商品を買うことを断ることができたはずである。そう考えると、今のB8が成功した風俗嬢になった理由は、彼女の能力が飛び抜けて高いからではないのである。本項で取り上げるもう1人のセックスワーカーが大学院の修士課程を修了しており、専門性の高い国家資格まで取得していることに比べれば、彼女は寧ろ平均的な風俗嬢と比較しても、持って生まれた能力や容姿などに特筆すべきものは無い。だが、現状彼女は業界でも有名な「カリスマ風俗嬢」になっている。彼女は年齢的にも34歳と若干風俗嬢としてはピークを過ぎた感もある。それにもかかわらず、B8は8割を超える驚異のリピート率を誇るのである。ここから理解されるのは、風俗嬢だけでなく、風俗に通う客もまた、本質的に求めているのは、決して単なる性の捌け口ではなく、「承認」であるということである。それに気付くまでは、B8も普通の風俗嬢と何一つ変わらず、B8-107「そこまで、そうですね。ほんとにただお金を稼ぐための手段とか、生活のためにやってるって感じであってそんなに深く考えたことはなくてほんとに、なんだろう、会社員の仕事が風俗、ってだけみたいな感覚で、あんま深くは考えてなかったですね。うん。」というナラティブが示すように、彼女は単に「生計維持機能」だけを求めて漫然と風俗で働いていたのである（※B-4-②参照）。

B8 は、最初は何も分からない性風俗の世界に入り、言われるがままに「写メ日記」を書いたりしていたのだが、性風俗の仕事はやがて彼女に生きがいとやりがいをもたらす始めるのである。B8-19「えっと、風俗をやってですね。良かった点はいっぱいあるんですけども、やっぱり、トータル、一番大きかったのは自分でお仕事をつくる、経営者感覚っていうか、自分でお仕事をつくるって感覚ですね。お仕事って、風俗のお仕事って自分がちゃんと接客を返さないとリピートをいただけなかったりとか、写メ日記でちゃんとお客さんに呼び掛けて集客しないとお客さん来てもらえなかったりして、来てもらえないと完全歩合制なんでゼロなんです。なんで、いかに工夫してこう、売上を上げるかっていう、ちょっと、そういう意識は高まりました。あとは、男性が、なんだろう、男性の心がちょっと、わかるようになったりとか、女性らしい、なんだろう、なんか会話とか、男性に喜ばれる女性を演じることが上手くなりましたね。」というナラティブから理解されるのは、彼女が単なるプレカリアートから、新自由主義における行為主体に劇的に生まれ変わったということである（※B-4-③参照）。

彼女は、新自由主義の日本において、昼の世界では決してその潮流に乗れてはいなかった。寧ろ、「負け組」と言ってもいい「不安定・低所得階層」だったのである。だが、風俗の世界に拠点を移してからは、彼女は新自由主義が求める最も価値ある人間に変化したのだ。Foucault は、新自由主義的統治において、最も価値ある人間像として、「まさしくその極限としての『^{アントレプレヌール}企業家』、つまり『自分自身における自分自身の資本、自分自身にとっての自分自身の生産者、自分自身にとっての〔自分の〕所得の源泉』としての『自分自身の企業家』として現れるのである。このような意味でのホモ・エコノミクスは、環境（すなわち市場）の変化に応じて自己を可塑的に変化させるような^{エー}経済主体^ジ=^エ行為者^{ント}である。」を描き出したが、B8-19 のナラティブは、彼女がそのような^{アントレプレヌール}企業家であり、自己を可塑的に変化させる^{エー}経済主体^ジ=^エ行為者^{ント}であることを示している。

これは、昼の世界に生きる人間にとっても実践するのは容易ではない。否、サラリーマンであれば寧ろ、このような価値観を持つことは難しいであろう。「社畜」という言葉に表されるように、どれほど雇用の流動化が指摘され、プロティアン・キャリア（変幻自在のキャリア）の大切さが提唱されようと、日本型の雇用慣行に長年慣れ親しんでしまった国民性は簡単には変化できない。リスクを取って自律的なキャリアを模索できる僅かな個人だけが、ブルーオーシャンを見つけて新自由主義の勝者となるのであるが、多くは企業に管理されたままの「社畜」に甘んじ、レッドオーシャンの過酷な競争を勝ち抜くための長時間労働を耐え忍んでも、安定した正社員の地位に留まろうとする。恐らくそれが普通の日本人である。B8 とて、昼の世界では組織の中で自己を確立できず、言われるがままに 400 万円のローンを組まされて、そして結局人生が追い詰められたのだ。その状況は、奨学金を返せなくなり、結局自己破産する大学卒の「ロストジェネレーション」の中年の姿に重なるものがある。

昨今奨学金を返済できずに自己破産する裁判が全国的に増えている。多くは 200 万から 300 万円程度だ。何とか大企業に正社員で就職できた者からすれば、その程度のお金で人生が終わるのか、と感じられるだろ

うが、「すべり台社会」の日本において、スタートで躓いた若者達は、赤木のように非正規雇用の仕事を余儀なくされ、ワーキングプアの人生を何年か過ごして遂に力尽きるのである。大学に進学できるような近代的メリトクラシー型能力があっても、新自由主義の日本においては挫折から這い上がることは容易ではなく、現実にはたった 200 万円の借金すら彼らは返すことができないのだ。まして、大学卒でもなく、地域でも底辺校に位置する高校を卒業した B8 程度の能力であれば、昼の世界では 400 万円の借金は絶望的な額だったはずだ。だが、彼女は自らの才能を性風俗産業という場所で見事に開花させ、本当に「^{アントレプレヌール}企業家」となったのである。

B8-19「えっと、風俗をやってですね。良かった点はいっぱいあるんですけども、やっぱり、トータル、一番大きかったのは自分でお仕事をつくる、経営者感覚っていうか、自分でお仕事をつくるって感覚ですね。」と B8 は、性風俗で得たものを語るのであるが、これがまさに「勝者」のマインドなのだ。彼女は、これまで取り上げてきたどの女性とも決定的に違う。風俗で得たものを、自信や癒し、やりがいなどという曖昧なものに還元しない。結局のところ、これまでナラティブを比較検討してきた女性達は、一見「勝ち組」に見える者もいるのだが、真の意味ではそうではないのだ。何故ならば、どれほど一時的な高所得を得たとしても、それは彼女の一生の成功を約束する類のものではないからだ。例えば、前項までに比較した女性達の中で、最も高額な所得を得ているのは、六本木の有名キャバクラ店で働いている A3、専属 AV 女優から吉原の高級ソープランド嬢に転じた B4 であろう。恐らく彼女達は、現段階では B8 よりも高い収入を一時的には得ているだろう。しかし、長い目で見た時、否、ほんの数年後の人生を比較した際に、どちらが新自由主義社会における本当の勝者なのかは、明確に分かるはずだ。

B8 は、性風俗産業において、体力と気力が続く限り勝ち残るだろう。既述の通り、40 歳が収入が激減する一つの分水嶺というのは、性風俗産業の関係者の間でしばしば指摘される現実であるが、熟女デリヘルなどのジャンルが確立され、60 歳や 70 歳の風俗嬢がいる現在、客のニーズにさえ応えられるのであれば、その女性は生涯現役を続けることができる。無論、年齢が上がるにつれて店舗の数が激減し、客数もそれに合わせて減る以上、勝ち残れる女性は本当に精鋭だけになる。そして、恐らく同じ風俗嬢であっても、B4 はここには入れない。熟女カテゴリで勝ち上がるために最も重要なのはハイパー・メリトクラシー型能力、すなわち人間力である。それは、性風俗産業であれば、どんなジャンルで働いたとしても結果が出せるレベルでなければならないが、B4 は専属 AV 女優を続けることもできず、その後企画単体女優としても業界に残れず、都落ちするような形で吉原の高級ソープランドに流れ着いている。

何故、彼女が誇りを持って働いていた AV 業界で生き残れなかったのかは、実は明確なのである。それは、ファンを大事にしないからだ。違法な海賊版がインターネットの海外サイトに無料で溢れる昨今、年々販売数が下がり続けると言われる DVD を買い支えるのは熱心なファンなのだ。彼ら無くして、AV 女優の仕事は成り立たない。自分が知らない日本の誰かが自分を支えているのではなく、ファンイベントに来てくれる数十人から数百人のコアなファン達がそれなりの枚数を毎月買ってくれば、実はその AV 女優は何年でも

仕事を続けられる。所謂レジェンドと呼ばれるような息の長い女優達は、そこを弁えてファン対応をしっかりやっている。全国を回るサイン会やイベントは、新規ファンの掘り起こしのためだ。それは、第一義的にはメーカーやプロダクションのためではあるのだが、結局は自分自身のためなのである。だが、それが分からない女優は直ぐに淘汰されて業界から消えて行く。かつて本物の芸能人が、何人も鳴り物入りでAV業界に参入したが、ほとんどが失敗して直ぐに姿を消した。それは、自分自身の知名度や容姿に自信を持つが故に、DVDを売るためのインストアイベントやファンミーティングを軽視し過ぎるからなのだ。ビジュアル系バンドが、自分達のCDを売るためのインストアイベントで、「過剰営業」と呼ばれるほどにファンに身体的に密着する理由も、AKB48に代表される「会いに行けるグループアイドル」が、握手会で「神対応」をファンから求められ、それができる女性達が毎年恒例の人気投票（総選挙）で上位に来るのも全て根本は同じだ。畢竟、良い音楽や美しいアイドルが高く評価されるのではない。ファンを大切にしたいバンドやアイドルが、何とか生き残るのである。それが、過酷な市場原理を旨とする新自由主義社会の大原則なのだ。B4は、最後までそれに気付くことができなかった。それを示す箇所を下記に引用する。

B4-160: 専属にこだわるのもなーって。別に専属が良いものっていうイメージもなかったのよ。だって、専属女優って確かに1本あたりさーギャラも良いかもしれないけど、そのかわりメーカーの看板だから毎週毎週イベントとかやってたりするわけ。

原田 161: あれは断れないんだ、やっぱり。

B4-161: 断れない。

原田 162: ふーん。

B4-162: 余程の何か、インフルエンザになりましたとかそういうことじゃない限りスケジュールって変更できないのね。とかー、あとはじゃあ来月、いついつの土曜日に友達の結婚式があるからお休みさせてくれって事前に言っとかないとといけないのね。じゃないとバババババってスケジュール入れられちゃうの。

原田 163: スケジュールっていうのはほぼ毎日？

B4-163: 毎週,, 土日とかさ、イベントとか。でも私は基本的に「有名になりたくないからイベントに出たくない」ってずっと言っていたの、事務所に。だから、あんまりその一、専属の時のイベントはなかったね。

原田 164: ふーん。

B4-164: キカ単になってから作品数が増えて、「イベントやりましょう」はもちろんあったし、キカ単の方が長かったから、まあそこそこイベントはやったけど。イベント1日かかるのにギャラこれかーみたいな。

原田 165: 大したことないんだ。

B4-165：大したことないね。1日,, , △△とかだったら近いしさーイベントも一つの店舗2時間とか2時間半, 3時間いかないくらいだったりするから楽なんだけど, それでも半日かけて仕事してんのに2万とかだよ。

原田 166：日当2万か。

B4-166：うん。もちろん普通の仕事からしてみたら高いけどさ, ヌードにならないってだけでこんなに拘束時間取られて2万かみたいな思っちゃうの。

原田 167：正直お客さんでもキモイ感じの人とかいっぱい来ると思うんだよね。どう思う？

B4-167：…私は,, , 来てくれるファンの人にさー, 優劣ってないんだけど。ファンの人はファンの人じゃん。みんな同じじゃん。だけどその中でちょっと出しゃばってる人とかいるとなんだコイツって思っちゃうのね。

原田 168：「俺はファンの中のファンだ」みたいな人が出てくるんだ。

B4-168：そうそうそう。参加してくれる人にさー, じゃあ1本の人とー, 買ってくれたのがね, 1本しか買ってないよって人と3本買ってくれた人と, 別に変わんないじゃん, 正直。買ってくれたお金が自分に入るわけじゃないからさ。

原田 169：そうだよな。

B4-169：うん。1本あたり, 撮影費用, 1本これ!いくら!みたいな感じなわけだからさ, 売り上げなんか正直関係ないのよ。だからー, 1本でも3本でも買ってくれた人はみんな良い人っていう印象の中で出しゃばってる人とかいるとちょっと腹立つよね。

原田 170：なるほどね。

B4-170：なんだこいつって思っちゃう。

原田 171：ファンからすればやっぱり雲の上の人というか, 絶対普段だったら会えないような人と会える貴重な数分間なわけじゃん。すごい思いを背負って来ると思うんだけどそういう思いが逆に重たくなったりはしない？

B4-171：あるある。

原田 172：ある? (笑)

B4-172：ある (笑) すごいある。で, それがきつくてー, でも私こういうキャラクターだからさ, なんか意外と失礼なこと言ってくる人とかもいるのよ。B4 だから気軽に返してくれるだろうみたいな。

B4-168 の認識は根本的に間違っている。新自由主義において, ファンの価値には絶対に優劣が無ければならない。3本のDVDを買ってくれたファンは, 1本しか買ってくれなかったファンの3倍の価値がある。だからこそ, そのファンには3倍の敬意を払わなければ, 結局そのファンは去って行くのである。毎日のよ

うに新人がデビューする AV 産業において、「承認」を与えてくれない女優に使うだけのお金も時間も熱量も、ファンは持っていないのだ。彼らは、自分を「承認」してくれる別の女優を直ぐに探しに行くであろう。そして、この新自由主義における「勝者」のマインドを理解できなかったが故に、B4 は直ぐに専属契約を切られているのだ。ファンにも当然人間性がある。自分が好きなタイプの良いファンもいれば、嫌いな性格のファンもいるであろう。だが、ファンを見る時に、彼らが自分の生活を支えている収入の源泉であるという視点は絶対に無くしてはならないのだ。嫌いだろうが、虫唾が走ろうが、お金を使ってくれるファンは貴重なファンとして大切に扱わなければならないのだ。

中村が指摘するように、AV 業界はなりたいた女性が増え過ぎて、異常なまでの競争社会になってしまった。それは性風俗産業全体にも言えることなのであるが、「貧困の女性化」が進む新自由主義の日本社会において、性風俗産業のいかなる業態であろうとも、生き残り続けるためには、絶対に^{アントレプレヌール}企業家であり、自己を可塑的に変化させる^{エージェン}経済主体^ト＝行為者であることが求められる。それが実践できない B4 は、なるべくして格下のソーブランド嬢に落ちぶれているのである。

B4 の「敗者」のマインドと比較して、B8 の「勝者」のマインドを以下に見てみよう。B8-48「ちょっとまあ、もちろん性的に発散するとか癒されに来るっていうのはあるんですけど、やっぱりデリヘルの方がなんかプライベートな感覚を求めるっていうお客さんが多いのかな、とか、あと、なんだろうな、お仕事っていう感じよりはやっぱり普通の女性みたいな方が、慣れてない女性の方がよりウケる業態だなんっていうのはすごい感じました。」、B8-79「あーそれがですね、始めは、なんかソープだからしっかり技とかテクニックとか、お仕事って感じでやんなきゃいけないとか、『風俗の王様』だからすごいお客さんを敬まっ必要以上に丁寧になんなくちゃいけないと思ったんですけど、でもそう思ってやったらぜんぜん上手くいかなくて、でも逆に、なんかその、そうじゃないんだって気づいてもっとその、けっきょくはデリヘルホテルとなんも変わらなくて、お客さんと一緒に楽しむ、を意識したりとか、ま、フランクに接して指名増えてきたんで、ま、根本は変わらないんだなと思いました。」というナラティブから分かるのは、B8 のハイパー・メリットクラシ型能力の高さである（※B-4-⑤参照）。俗に言えば、圧倒的な「空気を読む」力、コミュニケーション能力を彼女は 14 年間のキャリアで培ってきた。否、その能力をキャリアの序盤で身に付けたお陰で、14 年間に渡って生き残ってきたのである。そして、特筆すべきなのは、それ以上に良好な精神保健の状態を保っていることである。同じ 14 年間の長きに渡って性風俗産業で糧を得てきた業界の生き字引の B2 は、精神保健の状態は壊滅的である。幼少時から続く母親からの虐待や児童期のレイプ被害など、性風俗の仕事にだけは還元できない元来の負因はあるにしても、B1 の事例からも分かる通り、生きがいややりがい、誇りが無い限り、たった 5 年で心が病み、極めてパワーレスな状態に陥るのが性風俗産業の怖さである。それが、14 年間も働き続けて、これほど健全な精神保健を維持しているのは、次項で比較するレジェンド AV 女優の C1 しかいない。彼女もまた、B8 と同じ、新自由主義における「勝者」のマインドの体现者である。

B8 は、昨今性風俗産業で働く女性達の悩みを解消することを目的に、支援団体を主宰している。彼女が

セックスワーカーを公言し、水嶋のように確定申告もし、社会的な発言を続けるのも、偏に性風俗産業で働く女性達の生活水準が良くなることを祈念してのものである。だが、その活動が真の支援であるのかには、若干の疑念が残る。何故ならば、彼女が新自由主義における「勝者」のマインドを持つが故に、支援の方向性もそこからずれることは無いからだ。昼の世界であれば、強制的な富の再分配が、税や社会保険料の応能負担という形で行われる。高額所得者に対する累進課税や高額な保険料が、結果的に経済的強者から弱者への富の再分配に繋がっている。しかし、それでも新自由主義においては、経済格差は広がり続けているのだ。一方、そのような税制や保険制度が適用されない性風俗産業は、システムとしての富の再分配は最初から存在しない。従って、仮に自分が働けなくなった時の保険を考慮すれば、昼の世界と同じような社会保障制度がある方が、圧倒的に安心であるし、他の働く女性達にとっても有難い事であろう。従って、Y1 が主宰する風俗嬢の支援団体・M などは、セックスワークの合法化・非犯罪化を目指しており、「夜」や「風」の世界の昼職化を謳っている。彼女達の立ち位置は、政治思想的には「リベラリズム」である。一方、同じ風俗嬢のための支援を謳いながら、B8 はそこには思い至らない。政治思想的には「リバタリアン」である新自由主義の「勝者」のマインドは、勢い身内にも冷たくなるのである。B8 は、風俗嬢が働きやすい社会を求めていると主張する。だが、B8-141「あー。それはなんかあんまりイメージ的に、なんか職業として認めてほしいとはあんまし。そこには重きを置いてないって感じですかね。」と語るように、Y1 や水嶋の様なリベラリズムに基づくセックスワークの合法化を求めているはいない。そして何より、B8 は社会の中の格差を否定しない。性風俗が格差社会であることは当然であり、自分自身の富は敗者を前提に成り立っていることをはっきりと認める。B8-158「成り立ってますね。みんなが頑張ってる、みんなが利益を分け合う、分かち合うのは、厳しいかもしれないですけど、それは難しいです。それはやっぱりピラミッドにはなります。ただそのピラミッド全体が上がるのか、上がったらいいな、とは思います。ただこういう三角形の図式は変わらないです。」というナラティブは、極めて新自由主義の価値観を内包している。そして、筆者が仮に利益を再配分してはどうか、と問いかけると、それは絶対に容認できない、と拒否するのである。B8-162「したくないですそれは。めっちゃ怒りますよ、女の子。だってめっちゃ努力してるから。」というナラティブに、「自分自身の企業家」として彼女の立ち位置が明瞭に現れている（※B-4-⑥参照）。

B8-165「人生において。それはわたしの生きてる場所だったり使命だったりするので、します。」というナラティブは、彼女にとってのセックスワークの意義であるが、B8 が風俗嬢のために活動を続けるのは、「ノブレス・オブリージュ」なのである。彼女は、それを自分の「使命」とであると認識しているのだ。B8 は、A8 や B6 のようにスティグマの実感が欠落した存在ではない。一般社会の倫理観や道徳観も弁えたうえで、敢えて生きがいを感じて風俗嬢として働いている。彼女がセックスワークの合法化を望まないのも、この仕事が残るめたい仕事であるという明確な実感があるのである。そのように、冷静に自分の仕事の特質を見極められる彼女が、スティグマを跳ね返す内面的な逞しさをもち、そして公的な発言を続けて行く人間としての強さは、「使命」という言葉に如実に現れている。ただ、Y1 や水嶋の様に同じセックスワーカーであって

も、他のセックスワーカーに対する連帯の意識は低い。人権意識や権利意識などは、本来実践の場だけから自動的に得られるものではないからだ。

「啓蒙思想」という言葉が示すように、人間は本来「蒙」の状態に置かれている。その人間に、不可侵の人権や権利が生まれつき備わっていることは、ただ生きているだけでは誰も気付きえない。先達である存在が、後進を教え諭し、導いて蒙を啓いてあげる必要があるのだが、その先達となるためには、何よりもメリトクラシー型能力と実際の高等教育が必要だ。だが、B8にはそれが欠けているのだ。彼女は、新自由主義において、完成体ともいえる^{アントレプレヌール}企業家であり、自己を可塑的に変化させる^{エージェン}経済主体＝^ト行為者に成長した。これは、新自由主義的統治の中で、その経済イデオロギーに非常に忠実に成長したことを意味する。自分を競争原理の勝者とする過程において、競争原理に敗れた人間に対する配慮は失せていくのであるが、それがまさに新自由主義的統治における人間性の帰結であり、Foucault が指摘した「主体化＝服従化」のメカニズムなのである。故に、彼女はまごうことなき「勝者」であるが、同時に新自由主義的統治に何の疑問もなく隷従しているという意味では、「蒙」から抜け出せない「敗者」であるのかもしれない。

B8 とは対照的な思想を持ち、かつ同じセックスワーカーを自認する存在が B9 である。彼女もまた、新自由主義に適応した^{アントレプレヌール}企業家であり、自己を可塑的に変化させる^{エージェン}経済主体＝^ト行為者である。彼女には、B9-9「(笑) 前々から、会社 1 年間くらい普通に会社員やってたんですけど、食品系の会社で。そんな時は、就職した段階でちょっと起業願望みたいなあって、『私は独立したいんでちょっと会社を辞めるかもしれない』みたいな話を母親には言っていて。」、B9-37「それ以降はやってたとしても収入のベースがそっちっていうよりも自分の事業の方をやる方で、メインは。」というナラティブが示すように、人生のかなり早い段階から強い独立へのモチベーションと将来の明確なビジョンが存在している。それを現実のものにするために、B9 は、現在主たる収入をソープランドで稼ぎ、副業として企画の AV にこれまで 30 本ほど出演している（※ B-4・⑦参照）。そして、セックスワークの技術や性に対する知識を学ぶセックスワーカーを対象にした有料の研修会を主宰している。B9 は、将来的には現役を退き、女性が働きやすい職場を目指して会社経営を手掛けたり、主宰する有料の研修会のコンテンツを充実させたりして、セックスワーカーではなく実業家として生計を立てようと模索している。大学院まで修了して国家資格を持つインテリの側面もあり、そのメリトクラシー型能力は、普通のセックスワーカーとは明らかに一線を画している。そして、彼女の立ち位置は思想的には Y1 らに近い。B9-81「B8 さんとかがやってるグループとかだと、なんだろう、結構技術を高めて更にキラキラした風俗嬢になって行きましょう、みたいな感じなんですけど。そういうイメージっていうよりもなんだろう、社会と繋ぐワンクッションみたいな感じの、とりあえず出来るだけ規模が大きい団体にしたっていうのがあって。ここに問題を投げれば何かしら返してくれるよっていう、そう、M (Y1 が主宰する支援団体) みたいな。」というナラティブがそれを明確に示している。

B9 は、B8 のような上昇志向に溢れた活動ではなく、M の様に連帯や権利に重きを置いた活動をしたいというのである。B9 は、「意識低い系」と自虐的に自分達のグループ特性を指すのであるが、これは B8 のよ

うな新自由主義における「勝者」を必ずしも目指していないということである。B9 が持つ問題意識は、恐らく B8 の考え方に関して筆者が覚えた違和感と同じであろう。B8, B9 は、共にセックスワーカーを自認し、セックスワーカーの地位向上と生活を守ることを目的とした団体を主宰しているのだが、方向性が真逆なのである。B9 の思想は、Y1 らと同じ権利派のリベラル・フェミニズムの立場であろう。政治的には明らかに「リベラリズム」であり、従って性風俗産業にも一般の産業同様に労働組合等が必要であると主張するのだ。

キャバクラには、首都圏を中心に「キャバクラユニオン（キャバユニ）」が存在し、千葉県でキャバクラ嬢がストーカー被害に遭って殺された際に、殺されたキャバクラ嬢を自己責任論で責めるインターネット上の世論に抗議する声明文を出したことは既述の通りである。B9 は、同じようなユニオンが風俗嬢に無いことを何とかしたいという問題意識を持ち、セックスワークを「強者」の立場から変革するのではなく、「弱者」の視点から安全にしようと考えている。一方、B8 は、セックスワークの合法化も目指していない。保守的な倫理観を持っている B8 は、B9 のような考えを否定はしない、と前置きしながらも、それを第一には目指さないと述べる。B8-147「ただ、やっぱり順番があるんですよ。いきなり健全化、合法化じゃなくて、やっぱり働くわたしたち自身が1人ひとりがこれは職業として意識を持ってプライド持ってやってくと、その上で何十年後かに合法化したらいいよね、みたいな気持ちなんですよ。で、健全化がなんで無理か。無理ってわけじゃないですけども、なんか無理やりやろうとしても、健全化、法律の改正とかってことですよね。結局、周りが認めないと思うんです。」という B8 のナラティブは、実は保守的・道徳的な既存の価値観に完全に馴化されている。彼女は、新自由主義の自己責任論を「主体化＝服従化」の過程でその身に宿してしまっているため、まずセックスワーカーが、1人ひとりレベルアップして、決してそれが「賤業」ではないことを証明する必要がある、と考えてしまうのである。そのためには研修等を通して技術を向上させる必要があるのだ。そして、自分達が変われば、いつか社会も変わるはずだと主張するのである。それをせずに社会の側を無理やり変えたとしても、やる気のない単にお金目当ての風俗嬢達が業界にたくさんいる限り、セックスワーカーの権利は世間から絶対に認められないと主張するのだが、ここに、B8 の「勝者」のマインドが垣間見られる。B8 は、明らかに自分の様に努力していない風俗嬢を低く見ている。彼女にとっては、自己責任で変革に付いてこれない意識の低い風俗嬢は、端的に言って業界のお荷物なのである。

B8 は、昼の世界における新自由主義のイデオロギーを、そのまま性風俗の世界に持ち込んでいるのだが、そこに自分が新自由主義的統治によって馴化されている意識は全く無いのだろう。結果的に、彼女の主張は B9 のような「意識低い系」の人間からすれば、かなり息苦しいのである。そもそも、性風俗に携わる女性達の多くは、昼の世界で躰いた者が多いのだ。それは実は B8 も一緒なのだが、自身の華やかな成功体験のせいで、そこに集う女性達が極めてヴァルネラブルな状態であることを、自らの風俗嬢としての原点を、忘れているのではないだろうか。家庭環境の悪さ、虐待、いじめ、性暴力被害、障害や疾病等々、様々な負因に足を引っ張られて、彼女達は昼の世界で自由に生きることができずに、風俗嬢になっているはずである。そのような女性達に、「キラキラした風俗嬢になろう」と呼びかける B8 の無邪気さは、やはり新自由主義の

「勝者」のマインドから生まれる傲慢さを感じてしまう。恐らく、ハイパー・メリトクラシー的な人間力を持たない B9 は、自分が B8 のような成功者になれないことを自覚している。従って、B8 のようになれない自分のことを、直接的ではないにしても、B8 から責められているように感じてしまうのであろう。だが、その実感は正しいのだ。事実 B8 は、B8-158「分かち合うのは、厳しいかもしれないですけど、それは難しいです。」と主張している。その前後のナラティブを見ても、彼女の主張は、風俗で稼げないのは本人の努力が足りないという自己責任論そのものである。従って、同じ様にセックスワーカーを自認していても、B9 は B8 に共感できずに、Y1 らのようなリベラル派の立ち位置に共感を覚えるのである。だが、B9 が完全に政治的なリベラル左派なのかと言えば、必ずしもそうではない。水嶋が「セックスワークは、ワーク（仕事）である」と強く主張することに関しても、B9 は B8 に対するのとは別の違和感を抱くのである。B9-178「私的にはそのなんか、結構かおりんさん仕事、仕事っていう感じじゃないですか。人によってはどうなんだろうな。私としての意見は人によってセックスワークの利用の仕方っていうか好きなように利用すれば良いものだと思ってて。仕事ってしっかり捉えてやっても良いだろうし、ちょっとしたお小遣い稼ぎとしてやっても良いけど、お小遣い稼ぎにしては結構リスクが高いことはわかっていてね、っていう感じの話ではあるけれども。それぞれが自分の人生の中で上手いこと活用してやりたいこととか先々につなげられるものであれば何でも良いのかな、みたいな。」というナラティブから、B9 が全面的に Y1 や水嶋の思想に賛同している訳ではないことが理解される（※B-4-⑩参照）。

実際、水嶋や Y1 達の立ち位置は、かなり強い政治的なイデオロギーを感じさせる。それは、左派系政治団体と深く繋がっているキャバクラユニオンも一緒である。「意識低い系」の B9 は、そのようなイデオロギー的な主張も避けたいのである。そして結果的に、「社会資源」という筆者が口にしたソーシャルワークの考え方に自らが最も親和性を持っていることに気付くのだ。B9 は、現在の性風俗産業が、昼の世界以上に新自由主義的であるが故に、そこでの苛烈な競争から零れていく弱い女性達を、何とか掬い上げたいと思っている。何故ならば、彼女にとっては、性風俗産業は大切な居場所であり、そこが過度な競争原理によって、今よりも居心地の悪い場所になって欲しくないのである。B8 の考え方に共感できないのは、「キラキラした風俗嬢」を目指す B8 達のスタンスが、間違いなく激しい競争を引き起こすからであろう。B9-263「風俗業界がパッてなくなったら困ります。」、B9-264「居場所だと思います。ここから色んな話が発展して色んなお仕事もらえてるんで。」、B9-265「（厳罰化には）反対ですね。なくしたところで何のメリットもない、って思うんで。」、B9-267「ただただお客さんを目の前にすごいなんか今日来て良かった、みたいなことを言ってもらえると嬉しいっていう、接客業的な承認欲求みたいなやつもあるし、って感じですかね。なんかよく風俗の業界は性犯罪の抑止力になってるとか言うけど、そんなデータないじゃないですか。」という一連のナラティブから、あくまで B8 にとって性風俗産業は、個人的に大切な居場所であることが理解される（※B-4-⑩参照）。そこは、彼女のエイジェンシーを発揮できるかけがえのない場所でもあるからだ。だが、一方で、同じセックスワーカーである水嶋や Y1 らの様に、B9 は女性達の連帯を目指し、社会をも変革する

という強いイデオロギーや信念を持っている訳ではない。彼女達が求める性風俗産業のあり方もまた、B8が目指すような新自由主義の帰結としてのセックスワーク同様に、B9には息苦しいのである。

B9はインテリらしく、極めて合理的に性風俗産業の現場を俯瞰して見ている。前項でB6が指摘した「性風俗がなければ犯罪が増える」という主張をB9は否定するのであるが、確かにこの点に関しては現状ほとんど有効なエビデンスが無い。水嶋が著書で取り上げたWall Street Journalの記事などを除けば、性風俗産業の社会化が実社会において絶対に必要と断定できるだけの根拠は、研究自体がほぼない以上さほど強いとは言い難いであろう。従って、B9は、そこでセックスワーカーとして働く理由を、活動の社会的な意義ではなく、お金と将来のための学習・経験、そして何より承認欲求に求めるのである。事実、彼女は純粋に性風俗の仕事を楽しんでいる。彼女は、AVに参入する切欠になったハプニングバーに関して、純粋にB9-230「楽しいです。すごい。」と語る。そして、お金を稼ぐ主戦場をソープランドに置き、ほとんどお金にならない企画単体AVの仕事を、B9-238「趣味（笑）」と言い切る。自らのアイデンティティをセックスワーカーに置きながら、彼女はB9-241「一番広くくりで言うと私は性に自由をみたいな、性についていうかエロに自由を、っていうテーマを（笑）」掲げて、性の営みを純粋に人間としての喜びや生きがいとして楽しんでいるのだ（※B-4-⑫参照）。

B9-241のナラティブから、B9の自由な生き様が伝わってくるのではないだろうか。彼女は、B8のように「キラキラした風俗嬢」を率いるセックスワーカーも、水嶋やY1のように「権利を求めて真剣に闘う」セックスワーカーも、自らの性分に合わないであろう。強いて言うならば、彼女は「意識低いけど仕事を楽しみたい」セックスワーカーなのである。

B8、B9という対照的な考え方を持つセックスワーカーのナラティブから分かるのは、彼女達風俗嬢は、やはりしっかりしたエイジェンシーを発揮できる存在であるということだ。一口にセックスワーカーと言っても、実に多様である。B8のような誇り高い風俗嬢もいれば、B9のような「意識低い系」の風俗嬢もいる。どちらも日本の風俗嬢の一つの在り方であり、同じ様にセックスワーカーを自認している女性達であっても、これ程価値観に相違がある。従って、これが日本の風俗嬢である、と断定的に結論付けることがいかに乱暴な論議であるかが理解できるのではないだろうか。セックスワーカーの2人の心理尺度を比較した場合、誇りある風俗嬢であるB8が全面的に良好な精神保健を維持している一方、「意識低い系」のB9は、女子大生平均と比較してもさほど高くはない。だからと言って、B8のような生き方を目指すべきだと結論付けるのは早計に過ぎる。否、寧ろ危険ですらある。何故ならば、B8は次項で検討するような、所謂「最貧困女子」の存在が眼中に入っていないからだ。「キラキラした風俗嬢」を最初から目指すことができない、「風」の新自由主義における最底辺の存在は、B8の「勝者」のマインドでは絶対に掬い上げることができないのである。

(1) 鈴木 (2014) の『最貧困女子』は、セックスワークの底の底に、「三つの縁」を欠き、「三つの障害」を持った女性達が集まると指摘する。そして、長年ルポライターとして女性の貧困と向き合ってきた鈴木は、ここに自己責任などない、と断言するのだ。何故ならば、彼女らは『自己』というものが既に壊れ、壊されてしまっている」(鈴木 2014 : 125) からだ。

鈴木が指摘する三つの縁とは、「家族の縁」、「制度の縁」、「地域の縁」であるが、これはそのまま Honneth の愛、法、連帯の領域の三つの「承認」にほぼそのまま当てはまる。彼女達は徹底的に「承認」を欠いている「^{ディザファイリエ}社会喪失者」なのだ。畢竟、鈴木が指摘する「最貧困女子」は、全員が「実存的貧困」か、或いは「絶望的貧困」状態に置かれているのである。そして、追い打ちをかけるように、彼女達は概ね精神・発達・知的障害のいずれか、或いはその全てを複合的に抱えている。鈴木のこの指摘の妥当性は、本研究においても確認されており、実際、性風俗産業に従事する女性の多くがこれら三つの障害のうち、なんらかの障害を抱えているか、グレーゾーンの状態にある。そして、鈴木が指摘する「三つの縁」の欠如と「三つの障害」は、本来能力が高い女性であっても、その力を奪いパワーレスな状態に陥らせるのに十分なのである。本項では、それを体現している女性達のナラティブを比較検討するのだが、その前に、これまで論じてきた女性達と比較して、セックスワークの「底の底」である彼女達がどのような位置付けなのか改めて一度整理してみたい。

日本の性風俗産業には、序列やランクがあることは一般にも知られているが、中村は『日本の風俗嬢』の中で、メーカー専属の単体 AV 女優をその頂点に据え、分かり易い偏差値評価でランク付けしている。単体 AV 女優が偏差値 80 で 1 本あたりの収入が、40 万円～100 万円である。以下、中村は、あくまで主観ではあるが、彼の長年のフィールドワークに基づき、企画単体 AV 女優 (偏差値 72)、飛田新地若者エリア (偏差値 70)、高級デリバリーヘルス (偏差値 68)、高級ソープランド (偏差値 67)、SM クラブ女王様 (偏差値 66)、企画 AV 女優 (偏差値 62)、店舗型イメクラ (偏差値 61)、都市部デリヘル人気店 (偏差値 60)、回春マッサージ・M 性感、SM クラブ M 女 (偏差値 59)、大阪各地のちょんの間 (偏差値 57)、都市部ファッションヘルス・デリヘル (偏差値 56)、大衆ソープランド (偏差値 55)、飛田新地熟女エリア (偏差値 54)、都市部人気ピンクサロン (偏差値 53)、格安ソープランド (偏差値 52)、地方デリヘル (偏差値 51)、地方ファッションヘルス (偏差値 50)、本番サロン (偏差値 49)、都市部格安デリヘル・地方ちょんの間 (偏差値 48)、地方ピンクサロン (偏差値 47) と格付けを行っている。これはあくまで風営法に基づいて性的サービスを業として行うもの、或いはそれに近い形態の風俗産業のみが分類されており、ここにはキャバクラなどの水商売や、個人で行う売春等は記載されていない。故に、ランキングとしては不十分ではあるのだが、一先ずこの評価は、30 万人以上といわれる日本の風俗嬢の大まかな序列を知るうえで参考となる。本節でこれまで論じてきた女性達をそれぞれの区分に入れ込むと、以下のようになる。

単体 AV 女優 (A6, B4)、企画単体 AV 女優 (B4, B9)、飛田新地若者エリア (無し)、高級デリバリーヘルス (B4)、高級ソープランド (B4)、SM クラブ女王様 (無し)、企画 AV 女優 (B2, B3, B4)、店舗型イ

メクラ (B2), 都市部デリヘル人気店 (A6, B3), 回春マッサージ・M 性感 (B8), SM クラブ M 女 (B9), 大阪各地のちょんの間 (無し), 都市部ファッションヘルス・デリヘル (B1, B2, B5, B7, B8), 大衆ソープランド (B1, B5, B6, B7), 飛田新地熟女エリア (無し), 都市部人気ピンクサロン (無し), 格安ソープランド (B2), 地方デリヘル (A7), 地方ファッションヘルス (無し), 本番サロン (無し), 都市部格安デリヘル・地方ちょんの間 (無し), 地方ピンクサロン (無し).

A6 の箇所では触れなかったが、彼女は後に専属の単体 AV 女優としてデビューしている。また、A7 も水商売だけでなく、風俗嬢として働いていたため、ここに追記してある。複数の形態で働いた経験がある女性は、それぞれの箇所に記載した。中村の区分に従えば、彼女達の容貌と所得を勘案した総合的な風俗嬢としてのランキングは、 $A6=B4>B9>B2=B3>B8>B1=B5=B6=B7>A7$ という順番になる。なお、複数個所で働いた女性は、序列が上の形態に入れ込んだ。ここで気付かされるのは、心理検査の結果は、必ずしもこのような序列通りにはなっていないということだ。最も精神保健の状態が良好なのは、B8 であり、最低なのは B7 であるが、B8 よりも明らかに高く評価されるべき位置にいる女性達が、精神保健の状態において B8 を遥かに下回っていることから、女性としての美しさや所得以上に、本人のマインドが心理状態に大きな影響を与えていることが良く分かる。

これから本項で取り上げる 2 人は、風俗嬢の序列としては、このランクの更に下に位置する。それは、「地雷店」である。「地雷店」とは、形態としては都市部のデリヘルなのであるが、そこで働く女性達は、上記のどの店でも相手にされなかった女性達である。つまり、地方ピンクサロンでも採用されないレベルの女性だけを、敢えて集めた店なのである。わざわざ「地雷」と謳うレベルなので、通常の男性であれば、彼女達から性的サービスを受けても寧ろ苦痛を感じるはずだ。

「地雷店」のスタートは、経営に困った Y というデリヘルが、とにかく面白半分でもいいからメディアの取材を受けたい、なんとか社会に認知してもらいたい、という苦肉の策で始めたものだった。基本コンセプトは、「レベルの低さ日本一」であり、それを実現するためにも面接した女性は全員採用である。面接した女性は、どれほど年齢が高くとも、どれほど容貌が醜くとも、全員採用して「地雷」として客に提供するのである。最初は、主として飲み会後のサラリーマン達が、面白半分に罰ゲームとして内輪で利用して楽しむようになった。だが、これが瞬く間に評判となって思わぬ大当たりとなった。「レベルの低さ日本一」というコンセプトが面白おかしくメディアで取り上げられると人気に火が付き、そして、そのような店のコンセプトに逆に惹かれ、性癖として醜い女性を好む男性達が次々利用し始めたのである。全員採用なので女性の数が増え続け、今では「地雷」の中にも「当たり」が入るようになり、それを期待して普通の男性客まで「地雷店」を利用するようになった。何故ならば、「地雷店」は価格が安い分、そこで他店の普通である「当たり」の女性を引くことができれば、割安価格な分、お得感があるからである。

ただ、そのような「当たり」はあくまで少数であり、基本的に「地雷店」に所属する女性達は、鈴木が指摘するような「最貧困女子」である。「地雷店」が無ければ、特に三つの障害を抱えた「最貧困女子」達は、

どの都市のどの店からも相手にされないため、SNS を使って個人で売春をするか、繁華街で街娼をするというリスクを冒す他ない。従って、ある意味「地雷店」は、「最貧困女子」を救済する、性風俗産業における「最後のセーフティネット」なのである。本項では、この「地雷店」に所属する 2 人の女性のナラティブを以下で比較する。

B10 は、典型的な「最貧困女子」である。精神・発達の障害を抱え、家庭では長年に渡って性的・心理的虐待を受け続け、大学生の時に意を決して家出をしたのであるが、結局両親に脅されて連れ戻されている。完全に、家族の縁、制度の縁、地域の縁が欠如しており、追い打ちをかける二つの障害によって人生がままならない。それでもその状態で、なんとか自立しようと性風俗産業を彷徨いながら「地雷店」に辿り着いたのであるが、ここで、全員採用の原則を曲げて、S 店長が敢えて彼女をキャストではなく、女性達のシフト管理等を行う内勤スタッフとして採用したのである。その理由は、彼女が余りにもヴァルネラブルであり、デリヘル嬢として働いてしまうと、彼女の人間性の根幹が壊れると長年の経験から判断したからだ。「地雷店」の店長でさえ躊躇する「最貧困女子」がどのように誕生したのかを、彼女が生い立ちを語る部分から見ていきたい。

ちなみに、彼女は高校・大学ともに十分に高学歴である。高校・大学の偏差値はそれぞれ 69, 65 であり、メリトクラシー型能力は通常の女性以上に備えている存在である。B10 は、自身が受けた虐待に関して、B10-11「母親も父親も両方なんですけども、ひどい暴力とか命に別状があるものではなくて、性的虐待ですとか心理的虐待でして、証拠がなかったりすごい過干渉されていたり、外から見たら絶対理解されないだろうっていうものばかりだったのですね。」と語るが、このようなナラティブは今回のインフォーマントのうち、B10 以外からもしばしば聞かれた。傍目には社会的に成功しているような家庭において、この種の虐待は起こりやすく、虐待の当事者も B10 の様に一流大学に通っていたりして、一層周囲からは虐待の存在自体が認知されにくい（※B-5-①参照）。

鈴木『家のない少女たち 10 代家出少女 18 人の壮絶な性と生』は、主に十代の家出少女達の人生のルポルタージュであるが、ここに描かれている少女達と B10 との最大の相違は、実家が裕福であることである。鈴木『家のない少女たち』では全員が虐待だけでなく、母子家庭等の壮絶な貧困状態にあるため、少女達は家出をある意味躊躇しない。だが、B10 は実家が自営業で裕福であるため、豊かな生活を捨ててまで家出する勇気がなかなか生まれなかったのである。だが、大学卒業を控えて、積年の虐待に彼女もいよいよ耐え切れない状態になったのだ。「詳細は語りたくない」と拒否されたが、一番辛いのは実の母親からの性的・心理的虐待と過干渉だという。彼女自身が自閉スペクトラム症（ASD）の診断を持つが、本人曰く、両親共に明らかに ASD のグレーゾーンであり、家系的にほぼ全員が何らかの発達障害であるという。一番それが色濃く出てしまった兄と従弟は、自閉症で重い知的障害を持っている。両親共に在日二世の韓国人という人種的マイノリティであるため、同族内での結婚を繰り返した影響があるのかもしれないという。両親の経歴や彼女の学歴だけ見れば、B10 は十分に「お嬢様」と言っても過言では無いのであるが、在日の家系であるが故

に父方も母方も地域社会との縁は薄く、ビジネス以外では、あくまで在日コリアンのコミュニティにしか繋がっていない。従って、鈴木が指摘した「三つの縁」の欠如のうち、「地域の縁」が薄い理由の一つとして、このような人種的マイノリティも挙げることができるであろう。

関東や関西の都市部であれば、在日韓国人・朝鮮人は人口的に決して少なくはないだろうが、それでもやはり日本社会では少数派だ（※B-5-②参照）。彼女は、日本風の通名を名乗っていた。やはり、普段は日本人として暮らしているというが、それも正直かなりのストレスであるという。「最貧困女子」を生み出す原因として鈴木が挙げた「三つの縁」の欠如、「三つの障害」に、敢えて付け加える要素があるとすれば、彼女のような在日韓国人・朝鮮人、LGBT、同和地区出身者といった「社会的マイノリティの^{ステータス}地位」が挙げられよう。これは、「三つの縁」のうち、「地域の縁」だけでなく、友人関係にも影響を及ぼし、結果的に「制度の縁」から零れ落ちる要素にもなるので看過できない。更に、欧米社会と異なり、民族的には極めて均質な日本社会においては、日本民族でないということは、存在論的な苦悩を必然的に引き起こす。その意味で、B10の置かれた状況はまさにヴァルネラブルなのである。彼女は、非常に努力家であり、難関国家資格を持つ父親譲りの能力も高く、メリトクラシー型能力の高さから、本来新自由主義社会において「勝ち組」であってもおかしくないはずだ。だが、彼女には圧倒的に「溜め」が無い。Senの言い方を借りれば、「ケイパビリティ」が致命的なまでに欠けているのである。実際、B10は、ストレスから様々な心身の疾患を発症してしまい、到底就労が可能な状況ではない。それでも彼女は、生きるために仕方なく、不本意ではあっても障害や疾病を隠したままで仕事を始めるのであるが、結局、B10-193「発達障害の傾向が少し思ったよりも強かったもので、うつ病などと相まって仕事に支障」が出てきてしまうのである。だが、虐待から逃れて実家を飛び出た彼女は、昼も夜も働き続けなければならない。B10-196「ただもうずっと生活が安定していなくていつも職を転々としたり、ずっとオーバーワークで働いていたり体自体ボロボロで休む間もなかったので結構それがたたっていたり、夜職のストレスも結構あったと思いました。」というナラティブが示すのは江口の「不安定・低所得階層」の生き様そのものである。「不安定・低所得」という貧困状況に加えて、水商売という「アンダークラス」アイデンティティが彼女の家族と労働からの排除に、社会からの排除という追い打ちをかける結果、彼女の心身は更に不調となり、多大な医療費の負担はB10の生活の大きな桎梏になる（※B-5-③参照）。

鈴木も『最貧困女子』で指摘しているが、彼女達は皆一様に心身が弱いため、医療費が嵩んでしまう。岡田も『死に至る病 あなたを蝕む愛着障害の脅威』で指摘している通り、それは虐待の後遺症なのだ。虐待は、精神的にも肉体的にも人間をヴァルネラブルにしてしまう。何故ならば、虐待は愛着システムの基底を成すオキシトシンというホルモンの働きを生涯に渡って著しく阻害するからだ。オキシトシンは、かつては授乳や分娩を引き起こす原始的なホルモンであると考えられていたが、昨今の研究では、副腎皮質ホルモンと同様に、ストレスや不安を和らげる作用があることが確認されている。岡田（2019：58）は、「愛着が不安定で、オキシトシンがうまく働かないと、ストレスを感じやすく、幸福度が低下するだけでなく、ストレ

ス・ホルモンの分泌が亢進し、心身の病気にもなりやすくなる」と指摘するが、B10 や鈴木が『最貧困女子』で描く女性達は、完全にその状態に合致している。その結果、彼女達は長く一つの仕事に従事できず、漸く昼の仕事にありついても、繰り返す欠勤や遅刻・早退等から直ぐに解雇や雇止めにあってしまう。また、昼の仕事が低賃金の場合はそれをカバーするために「夜」か「風」の仕事をダブルワークするのだが、忽ち無理が利かなくなると B10 のように倒れてしまう。これを「自己責任」というのは厳しい。鈴木が指摘するように、彼女達の「自己」は虐待によって既に壊れており、愛着システムはズタズタなまでに傷物でオキシトシンは正常に機能していない。彼女達は、そもそも自分の人生に責任を負えるような状態ではないのである。

彼女は、とりあえず今は福祉に繋がっており、障害者総合支援法の就労移行支援を受けている。だが、それもあまり見込みが無いように感じられる。とにかく、虚弱体質で仕事がままならないからだ。2 年間の移行期間で昼の正業に就労できなければ、彼女は「障害者」として福祉の世界で一生を終えるかもしれない。一流大学を卒業してなお、虐待の桎梏と「毒親」の軛が彼女の人生を阻むのだ。そして、そのようなパワーレスな状態にある彼女を救っているのは、皮肉にも性風俗産業における「最後のセーフティネット」である「地雷店」なのである。就労移行が成功しなかった場合、彼女は性風俗産業で働くことを、B10-232「そうですね、はい。仕方ないと思います、自分が自立するためには、実家に戻ることは、絶対に避けたいので。」という（※B-5-④参照）。繰り返しになるが、彼女は、極めて高いメリトクラシー型能力を持っている。その意味では今まで検討してきたどの女性よりも圧倒的に高い学歴と学力を持っているのである。それにもかかわらず、今障害者福祉の利用者になり、それでも社会復帰できなければ、「最貧困女子」として「風」の世界の「底の底」で生きて行かなければならないのだ。それ以外に選択肢がない人生というのは、「貧困」以外の何物でもない。そして、その選択肢の無い状態は、経済的・物質的な欠損状態から派生していない。彼女の実家は富裕層であり、世間的には、彼女は周囲も羨むお嬢様なのだ。だが、実際の彼女は籠の中の鳥だ。自由になる物は、そこに一つとして無いのである。大学生時代の塾でのアルバイト料でさえ、お金は母親に一旦全部奪われてしまい、そこから母親が認めたものだけを買うために与えられる。彼女の交友関係は全て母親に許可を得なければならない。大学の単位すら自分の履修したいものが選択できず、学校の先生になる気など微塵もないにもかかわらず、彼女は目いっぱい教職課程を選択させられて、実習の負担で精神が摩耗してしまったのだ。就職先を選ぶ際にも、エントリーシートを出す場所は、逐一母親の許可を得る必要があった。彼女は、彼女の人生ではなく、母親の人生を生きさせられていたのである。そして、それを 23 年間耐え続けて遂に精神が崩壊し、親子の縁を切っても逃げるしかないと思い、彼女は大学がある〇〇を離れて、知り合いが 1 人もいない××に出奔した。もう、親とは二度と会わない覚悟であったが、大学の退学さえ実は親の許可がいることが判明し、大学から両親に連絡が入って家出が直ぐにばれた。そして、所持金がほとんどない彼女が出奔できる場所は、低額なシェアハウスしかない、と先読みした親から直ぐに彼女の居場所は調べられ、突き止められた。結局、脅迫され、大学を卒業することを約束させられ、無理やり地元連れ戻されたのだが、唯一彼女が妥協案として引き出したのが、親元を離れて 1 人暮らしをすることであ

る。それが、彼女にとってできた唯一の交渉であり、その後彼女は生計を立てるために直ぐにインターネットで調べた性風俗産業に向かったのだ。彼女のメリトクラシー型能力の高さは、ここに現れている。

彼女は、風俗の世界に入る際も、インターネットを使って実に入念な業界のリサーチを行った。彼女ができるサービスの限界は何なのか、彼女でも務まる仕事は何なのか、ASD のせいでハイパー・メリトクラシー型能力が致命的に欠けている彼女は、未熟なコミュニケーション・スキルではキャバクラのような複数の女性がチームで客をもてなすシステムは、絶対に自分には無理だと直ぐに理解した。性的トラウマを持つ彼女は、本来風俗は水商売以上に嫌だったのだが、自分の能力の限界を超えるキャバクラの仕事で精神を摩耗するよりは、トラウマを抱えても一対一の対人サービスができる風俗産業の方が幾らかマシだろうと考えて、回春マッサージの仕事に就いた。だが、やはりどうしても体力と気力が続かないのである。何度か性風俗の職種を変えて試行錯誤しながら情報収集に努めた。そして、ここならば自分でも務まるのではないかと、否、ここで務まらないならば、日本に自分の「居場所」など無いのではないかとまで思い詰めて、全員採用でかつ、坂爪が主宰する風テラスとも提携を結んでいる「地雷店」に活路を求めたのである。そして、幸か不幸か、そこでキャストとしては採用されなかったのは既に述べた通りである。

B10-86「なんか病んで壊れるって.」、B10-87『人間を壊したくない』とまでおっしゃっているほど、多分夜職の業界色々見て来た方だと思うんですけど何かそう思わせる何かが私にあったのだろうなと思いましたね.」というナラティブから、彼女が心理的にも肉体的にもどれ程ギリギリの状況に置かれていたかが推察される（※B-5-⑤参照）。B10 は、文字通り「地雷店」という最後のセーフティネットで辛うじて救われたのである。彼女が今、なんとか自分を保っているのは偏に S 代表の厚意によるところが大きい。ブラックで当たり前の性風俗産業において、S 代表の経歴は変わり種である。昼の仕事から脱サラして起業したため、コンプライアンスの重要性和女性を大切にすることが店の利益に直結するという当たり前の経営者意識を持っている。その彼が始めた「地雷店」は、想像以上の成功を収めたのであるが、今は坂爪が主宰する「風テラス」と連携して女性達の精神保健を改善する企業努力をしている。女性達に気持ちよく、長く働いて会社に利益を落としてもらうには、何よりもまず、女性に利益が出ることが最重要事項であると理解しているため、S 店長は、とにかく女性が稼げるように、満遍なく全ての女性に客を付けることを最優先する。その S 店長は、当然全員採用の面接を、既に何百人と行ってきたのであるが、その中でも原則を曲げて、内勤スタッフの事務職としてしか B10 の場合は採用できないと確信したのだという。それに対して、B10 は心から感謝しているのだ。逆に、Y に辿り着くまでに彼女が繋がっていた医療機関と福祉制度は、被害者である彼女をひたすら自己責任論で追い詰めていた。親の言うことだけを信じてしまう医師やカウンセラーは、彼女にとっては全く信頼のおけない存在だったのである。学校関係者、行政機関、民生委員や各種専門家が、「最貧困女子」を自己責任論で追い詰めるという指摘を鈴木も著書の中で行っているが、彼女は医師やカウンセラーから尊厳を傷付けられることはあっても、救われることなど人生で一度も無かったのである。B10-153「はい、発達障害の療育の人だったんですけど、その人が発達障害の療育自体のことは良いんです

けど、うちの親、完全に『あなたの良い親なのよ』、『恵まれてるのよ』ってばかり言って、全部つるむ形にグルになる形になってしまったので.」, B10-154「はい。その方は親子問題に一切関与しないまま、世の中のことでとかそういう面では勉強になったんですが、親子問題にすごい口出ししてくるので結局その療育の人からかなり追い詰められる形になってしまいましたね.」というナラティブは、社会福祉学が忌むべきパターナリズムそのものであり、専門家と呼ばれる人間が、Foucault が指摘するように、権力故に時にどれ程当事者を苦しめるかを物語っている。彼女を救ってくれたのは、そうした権力ではなく、権力とは無縁のシェアハウスの管理者であったり、「地雷店」のスタッフ達なのである（※B-5-⑥参照）。

インタビューの最後に、まとめとして彼女が心安らぐ居場所について尋ねたのだが、彼女はそれを最近できた恋人と「地雷店」だと答えた。「三つの縁」を欠いていた彼女は、「家族の縁」に代わるものとして彼氏を、そして「地域の縁」に代わるものとして「地雷店」を手に入れたのである。B10-156「あ、はい。本当にそう思ってます。一番自信がついたのがそこでしたね.」というナラティブからは、「地雷店」が B10 にとっての安全基地であることが理解される。「重要な他者」である両親ではなく、本来縁もゆかりもないはずの性風俗産業が彼女の愛着の基底になるなどということは、その世界を全否定したい立場の支援者は到底受け入れ難いだろう。だが、間違いなくそこで、Honneth の承認論で言えば、愛の領域と連帯の領域において、B10 は悲願であった「承認」を遂に手に入れたのだ。

彼女は、もし、性風俗産業がなければ、B10-277「実家から出られずに人生崩壊してるような気がします.」という。そこが差別と偏見の対象であり、スティグマが貼り付いた場所であろうとも、虐待が続く家庭よりは、そこは彼女にとっては遥かに救いのある場所だ。そして、そこで働くことも、彼女にとっては必ずしもお金を稼ぐ意味だけに留まらない。そこは彼女から前向きなエイジェンシーを引き出し、レジリエンスの回復に貢献している。B10-287「たぶんそこでやっぱり少し自信がついたんですよ。良いお客さんに褒めて頂いたりして自分の力でお金を稼いで勉強したいことややりたいことも欲しい物も、お金が少なくて制限されてることで出来なかったものが出来ましたし、人とコミュニケーション取ったり話を聞き上手になるためには、とか色々身になるものもありましたので。あと本格的にやったりする方は自分の得意不得意、見せ方を知っている方が多いので、そういうこともあったりとても勉強になりましたね.」, B10-289「(後悔は) はい、全くないです.」, B10-290「少なからず夜職をやったから今の自分があって、夜職がなかったらもっとひどい状況になっていたと思います.」という一連のナラティブは、B10 が「最貧困女子」である以上、他の女性達の発言に比しても尚一層重いと云わざるを得ない（※B-5-⑦参照）。

昼の世界の社会福祉や医療は彼女にとっては一切救いとならず、逆に彼女を追い詰める機関であったのだ。心安らぐ家がなく、ある程度裕福な暮らしを送ることができてはいたが、そこには自由は何一つない。つまり、人間としての尊厳が剥奪されていたのである。人は、「承認」を欠いた状態で生きて行くことができないということを、彼女のこれまでの人生が如実に物語っている。「承認」の欠如は、物質的なものの欠如以上に、人間を苦しめるという現実を受け入れなければならないだろう。事実、彼女は今が一番幸せなのである。

生活保護水準に近い「不安定・低所得階層」状態に置かれ、昼の仕事で上手く就労できずに苦しんでいることも、彼女にとってかつての籠の鳥の人生に比べればさほど苦痛ではないのだ。江口の「社会階層論」が、貧困であると断ずる状況は、彼女にとって必ずしも貧困ではないことの意義は大きい。例え、スティグマが張り付いた世界であっても、そこに選択の自由と権利、僅かであっても尊厳があることは、彼女から幾許かのエイジェンシーを引き出すことになる。それは、B10にとって、本当に救いなのである。

(2) 今度は、B10 同様に、「地雷店」である Y に辿り着いた「最貧困女子」の B11 のナラティブを下記で分析しよう。彼女もまた、少なくとも幾許かのエイジェンシーを Y において発揮し、自分の人生を立て直そうと少しずつ前に向かって歩み始めているのである。ただ、後に指摘するが、B11 は、B10 程に Y に愛着を持っている訳ではないし、風俗の仕事にやりがいを感じている訳でもない。その意味で、彼女のエイジェンシーは、B10 に比べて発揮されているとは言い難い。

B11 の「自己」を破壊したものは、いじめである。そして、そのいじめに何一つ手を打ってくれなかった学校関係者である。B10 と比べて救いがあるのは、B11 の場合はまだ家族がそれなりに機能している。「家族の縁」は切れていないのだ。だが、彼女は子供時代から続きたいじめのせいで、地元にはいられなくなってしまった。「地域の縁」は完全に切れているのである。そして、もしかしたら自分の人生が変わるかもしれないと希望を抱き、◎◎の短大に進学した。2 年間で 200 万円の奨学金という名の教育ローンを背負った。それにもかかわらず、結局彼女は何者にも変われなかった。そして、200 万円の借金を背負い、過去のトラウマに傷付いた女性が辿り着いた場所は、「最貧困女子」が集う Y という「地雷店」だったのである。

短大を卒業後、どのような経緯で「地雷店」に辿り着いたのかを尋ねると、B11 は、極めてパワーレスな口調で淡々と一見何も考えず、楽な方に流されているだけの様な人生を語る。B11-16「(就職活動を) してないですね,,,」, B11-17「えー,,, 気持ちの、自分の中の気持ちが高不安定になってしまったりとか出たりするので、こういう仕事は自由出勤で自分の出たい時間に出たりとかマイペースに,,, できるので。」というナラティブを見ると、受動的過ぎる彼女に対して自己責任論に基づく批判が起こりそうだが、既に述べた通り、彼女もまた「最貧困女子」なのである (※B-5・⑧参照)。壊れた「自己」に責任を負わせるのは酷過ぎる。彼女は、アパシーによって、就職活動がままならず、日々を生きる気力も奪われているのである。そしてそれは、やはり小学生の時まで遡る。A11 と同じように、彼女もまた容姿を男子にからかわれたところからいじめが発生している。そして、長期に渡るいじめは、家庭における虐待と同じように、個人の尊厳を奪い、自己を破壊して「内的作業モデル」を欠損させるのである。彼女から見た世界は、信頼に足るものではない。そして何より、彼女は自分自身の能力に大いに疑念を抱いている。それは、やはり第三者の視点からすると不可思議である。彼女が自己を卑下する正当な根拠はないのである。しかし、彼女は本源的ナルシズムを欠いているため、自らを肯定することができないのである。B11-22「はい。で、こう面接をした時にこういうお店があるっていうのを知って、私はあまり自分に自信がなかったりするので、こういうコン

セプトの店があるんだ、っていうのを知ったのでやってみようかな、と思って.」, B11-25「はい,, , そうですね, 自分の見た目がすごいコンプレックスなので, 全然嫌っていう気はしなかったし.」というナラティブからは, 彼女の極めて強い劣等感, とりわけ容貌に対する劣等感が伝わってくる (※B-5-⑨参照).

彼女は, B10 と異なり, 「地雷店」を自ら探し求めた訳ではない. 偶々, 系列のデリヘルに申込をしようと思った際, 手違いで「地雷店」の方に電話をしてしまったのである. 実際に面接に進み, 店のコンセプトを説明された時, 普通の女性であれば, そこで働けと言われれば怒っても当然である. 貴方は「レベルの低さ日本一」を謳う店で働くのです, と言われれば, 女性としての尊厳は相当傷付くであろう. だが, 彼女は店のコンセプトを説明された際, それに対して不快感を抱くどころか, 僅かの抵抗感さえ持たなかったというのである.

本研究において, 全ての女性に必ず聞いた質問の中で, 61 人全員がほぼ同じ答を返した質問は, たった一つしかない. つまりこの質問は, 女性であればほぼ絶対同じ回答が返ってくると考えても良いであろう. その質問とは, 「貴方にとって, 男性から女性として魅力があると認められることは重要なことですか?」である. この質問を想定した時には, 若干否定的な返答もあるのではないかと予測していた. 特にフェミニズムに傾倒している女性であれば, 人間としての価値が無く, 「女性性」だけとは考えないだろうと思ったのである. その様な女性であれば, 男性から好かれることが女性の価値の本質である, という価値観は認め難いものがあるだろう. 事実, 同様の質問を男性にすれば, 恐らく相当数の男性が, 男性としての外見的・性的な魅力よりも, 仕事力, 知性, 教養, 権力, 財力, 地位など, 様々な価値観から自己の本質に根差す男性としての価値が, 答として返ってくるはずである. 同様に, 女性の中で何人か, とりわけ能力の高い女性達の中には, 「女性性」に重きを置かない人間がいると思っていたのだ. だが, この想定は間違っていた. 女性にとって, 自分が男性から魅力的な存在であると「女性性」を認められることは, 人間としての「承認」に繋がる根源的な問題であり, それを二の次, 三の次にしている女性の方が, 寧ろ何か欠落がある存在なのかもしれない. 恐らく男性のように, 多様な価値観を答として返すであろうフェミニスト達は, 寧ろ男性の価値規範を内面化している女性なのである. 彼女達が, 往々にして同じ女性から共感を得られなかったり, 時に嫌悪感すら示されたりするのは, 女性であるにもかかわらず, 男性と同じ思考回路と行動様式を持つことへの違和感なのである.

従って, その「女性性」を全否定されることになる「地雷店」で働くことは, 本来女性として屈辱的なことであるはずなのであるが, B11 はすんなりと受け入れてしまうのだ. それ程までに, 「自己」が壊れているのである. 男性的価値観を内面化していないにもかかわらず, この屈辱的状况に微塵も怒りを感じない程に, 彼女はパワーレスなのである.

女性が「女性性」を最重要視することを, 鈴木も『最貧困女子』の中で, 別の切り口から描いている.

僕の勝手に作ったキーワードに「おにぎりとコスメ」がある. これは, 取材をした家出少女 (少年

も同様)らの多くが、過去の小学生時代などに、万引きの経験があったり常習犯の過去を持っていて、その盗んだ商品がおにぎり＝食品とコスメ＝化粧用品だったことから考え付いた。

憐憫の要素はある。おにぎりを盗んだという経験は、そのものが虐待とネグレクト、そして貧困の象徴だ。(鈴木 2014 : 160)

鈴木は、『最貧困女子』の中で、「おにぎりとコスメ」という二つのキーワードで、最貧困状態の女子が何を最も欲しがっているのかを、同じ次元で提示しているのである。そして、分かりやすいおにぎりには、象徴としての「経済的貧困」を重ね合わせて分析するのだが、コスメが何故おにぎりと同様に女性から必要とされるのかには一切触れられない。恐らく、単に万引きの対象として盗みやすいから、或いは友達に転売し易いから、くらいの認識しか鈴木の中ではないのかもしれないが、筆者にはこれは必然であると考えられる。何故ならば、女性にとって、命と同様に大切なものが化粧用品であるならば、それだけ女性の価値の本質が美しさにあるということの証左に他ならないからだ。「女性性」は、貧困の底の底にあってもなお、女性の大切な拠り所なのだ。おにぎりが「経済的貧困」の象徴ならば、コスメは尊厳と価値の象徴なのである。実はこれに関しては、同著の別の箇所でも、鈴木は意図せずにコスメが持つ真の意味を、デリヘル店の店長の言葉を借りて解説する形になっている。

デリヘル店の店長に対して、昨今日本で進行する「貧困の女性化」のために、本来は「最貧困女子」のものであったセックスワークという職場が、女子力の高い可愛い女性達から奪われそうになっている。このままでは、セックスワークの中にすら、「最貧困女子」の居場所はなくなるかもしれないと現状を憂慮している旨を鈴木が告げると、不意に店長は、ユダヤ人と女性は実は一緒なのだと鈴木に語るのだ。店長曰く、ユダヤ人にノーベル賞受賞者が多いのは、長い間迫害された歴史が、彼らに他者から絶対に奪われないものとして、財産や土地ではなく、知識と教育を選択させ、それを宗教というシステムの中に巧妙に埋め込んだからなのだ。だから、ユダヤ人は賢く、ノーベル賞受賞者が多いのだと指摘し、女性に関してもこれと全く同じことが言えると指摘するのである。

でもこれ、女と同じなんですよ。女にとって、最後まで奪われない財産って何ですか？女であることですよね。風俗トップの子らがどれくらい努力してるか知ってますか？ファッション誌全部目え通して、メイク勉強してエステ勉強してジム通いして、そうやって女の子は『誰からも奪われない女力』を磨くんですよ。女が女を磨く理由は、それが保険だからなんです。そうやって頑張っている子がいるから、店の側も必死でサポートできるんじゃないですか。(鈴木 2014 : 200)

恐らく、この店長の言っていることは正しい。これが新自由主義に基づく完全な弱肉強食の考え方であり、強者の論理であることは一旦脇に置く。ただ、女性が本能的に絶対に奪われないもの、すなわち「女子力」

を磨くのは必然であり、本能なのである。

A群のフィールドワークの際、将来どうなりたいのか、と将来のキャリアについて筆者が尋ねた時、A5が、A5-198「何時までも綺麗でいたい,,. 何時までも綺麗でいたい。」と答えた時には、正直その返答に対して違和感を覚えた。綺麗でいることは、キャリアとは一切関係無いのではないか、この子は一体何を勘違いしているのか。物事には優先順位というものがあるはずだ、外見を気にする前に人生についてきちんと考えるべきではないか等々、当時は内心そのように感じた。だが、今となれば、A5の発言の真の意味が、良く分かるのである。A5にとって「女子力」を磨くこと、美しくあり続けることは、絶対に奪われない女性の価値の本質部分で、他の女性に劣りたくないということなのだ。これは彼女の尊厳に直結する問題なのである。ある意味、真剣に人生を考えているからこそ、彼女は何時までも綺麗でいたかったのだ。何故ならば、女性にとって、美しさはキャリア選択における最強の武器になるからだ。A5のようにメリトクラシー型能力が昼の定職に就いている同世代の女性達に劣る場合は、無理に自立するのではなく、経済力のある男性と結婚できるように美しさを磨き、それを保ち続ける方が、方向性を間違った努力で中途半端な学力や資格を取得するよりも、遥かに自分の人生を幸せにする可能性を高める。彼女は、それが本能的に良く分かっていたのである。

女性にとって、絶対に誰からも奪われないものは「女性性」である。だから、全ての女性が、それを大切だと断言し、まだそれを言語化できない不良少女達は、コスメを盗むという行動化で示すのだ。であるならば、やはり、「レベルの低さ日本一」をコンセプトとする店で働くということは、その女性としての尊厳を根底から傷付けられるはずなのである。だが、B11は、B11-25「はい,,. そうですね、自分の見た目がすごいコンプレックスなので、全然嫌っていう気はしなかったし。」とその屈辱を素直に受け入れてしまうのである。普通の女性であれば耐え難い屈辱を彼女が自然に受け入れてしまう程、彼女がパワーレスな状態に置かれていることを、ここから理解しなければならない。つまり、これが「最貧困女子」の心性なのである。まさに「自己」の尊厳までが壊れているのだ。そのくらい自尊感情が低い女性は、簡単には変わらないし、変わらない。事実、彼女は希望を持って田舎を離れて大学に進んだのであるが、そこでほとんど何も成し遂げられなかったのだ。

B11-80「全然将来は見えてないです。何も,,. 何がしたいとかどの職に就きたいっていうのはなかったですね、正直.」, B11-85「うーん、何を得たのかな、っていう感じではあります。」という本人の言葉通り、彼女は大学で学位以外には、価値あるものはほぼ何も得ていない。そして、その大切な学位すら、全く無駄に扱ってしまったのである。本来その学位は、就職するための手段として用いるべきものであるはずだ。だが、彼女は将来が見えないが故に一切まともな就職活動をせず、安直にニートの道を選んで益々自分の将来の選択肢を狭めてしまったのだ。

原田 138: 大学に入ってこうやりたいことが見つけられれば良いなと思って入った訳ですけども、

見つからなかった理由とかって何かわかります？

B11-138：努力することをしなかった,, , っていうのと……………自分に不都合があると逃げてしまったりとか……………

原田 139：学校の成績はあんまり良い方ではなかった？

B11-139：真ん中くらいですかね.

原田 140：真ん中くらい. 周りは就職活動するじゃないですか.

B11-140：はい.

原田 141：その時に自分もしなきゃっていう気持ちにはなりませんでしたか？

B11-141：なりましたね. 正直. やっぱり内定もらってる子とかもいたりしたんで.

原田 142：でもアクションは起こさなかった？

B11-142：そうですねー. 自分働けるのかな, 社会人としてやっていけんのかなっていう不安もあったりして.

原田 143：エントリーシートとかすら書いてないですか？

B11-143：書きました.

原田 144：それは何通くらい書きました？

B11-144：1回,, ,

原田 145：1回,, , 通らなかった？

B11-145：もう, やっぱり,, , 何も,, , なかったんで, その企業さんが求めるもの (笑)

原田 146：学校に就職相談室とかありますよね.

B11-146：はい.

原田 147：キャリアセンターとかね.

B11-147：はいはい.

原田 148：そういう所には相談に行きました？

B11-148：行きました.

原田 149：で, どんなアドバイスもらいました？

B11-149：自分の働きたい業種決めて, ハローワークとか就職支援する所とかセミナーとかも行った方が良くよと. アドバイスを頂いて.

原田 150：行ってみました？

B11-150：行ってないですね.

原田 151：行ってない

B11-151：セミナーとかは,, , あ, セミナーは1回行きましたね. やっぱそん時ちゃんとしなきゃと思って. だけど, まだ大丈夫だって,, ,

原田 152：まだ大丈夫だ。

B11-152：とかまた、そういう逃げが出来ちゃって。……ほとんど何も出来てなくて。

彼女自身が認めているように、彼女は決して A5 のように、メリトクラシー型能力が低過ぎる訳ではない。実際に偏差値 50 のごく平均的な短大に入学し、ごく平凡な成績でそこを卒業したごく普通の女性なのである。寧ろ、外見的にも内面的にも、「地雷店」の中では「当たり」の部類のはずだ。それにもかかわらず、この打ちのめされたような無力感は一切何なのだろうか。文字だけでは伝わらないだろうが、普通であれば、若者特有の希望に満ち溢れているであろう 20 歳の女性のナラティブとは到底思えない程、彼女の言葉は全てが無味乾燥で、生の実感に欠けている。だが、まさにこのパワーレスな状態が、「実存的貧困」なのである。B10 と同じで、彼女の中にもケイパビリティというものが、ほとんど存在しないのである。そして、B11 のこのパワーレスな状態は、B10 と異なり、「地雷店」に辿りついて一向に改善されていない。就職活動から逃げた彼女は、今も自分自身のキャリアや将来と真摯に向き合うことから逃げ続けている。

奨学金を返し終わる時期は、B11-214「全然わからない。」という。何時までに返済を終わらせる、という時期は、全く B11-215「決めてない。」。彼女にとって、不本意ではあっても、デリヘルで働くことは奨学金を返済するために必要な仕事なのであるが、終わりが全く見えない状況というのは、人間に極めて強い存在論的な不安をもたらすはずだ。彼女のパワーレスな状態の根源がここにあるように感じられる（※B-5・⑩参照）。加えて、B11-223「……………少し、後悔してます。」というナラティブが示すように、彼女にはスティグマの実感がある。B11-224「……周り、家族とか、自分に対しても。」という言葉から分かる通り、彼女は B3 と違い、スティグマを内面化している。スティグマが単純に外部から貼り付けられる場合は、まだ救いがある。その価値観を否定し続けることは可能だ。B3 の様に、自分の中にはその仕事に関して一切の偏見が無い、と本気で言えるならば、セックスワークは「他者評価の異常に低いサービス業」と割り切ることも可能かもしれない。だが、スティグマを内面化すれば、逃げ場は全くなくなる。その仕事をしていても、或いはその仕事を上がっても、そのスティグマは女性の尊厳を内部から蚕食するだろう。B11 がなまじ平均的なメリトクラシー型能力の持ち主であるが故に、軽度の知的障害を持つ B3 と異なり、スティグマの内面化が発生してしまうのであるが、それがより一層 B11 をパワーレスな状態に陥れ、未来に対する希望を失わせていくのである。B11-214「全然わからない。」という言葉が端的に示すように、彼女には凡そ人生に対して、何らかの具体的な計画のようなものは一切持っていない。やりたい仕事として、デザインの仕事というものを実は彼女は口にしているのであるが、それこそ大学の学業とも一切関係の無い、荒唐無稽な願望である。そこには夢というものも憚られるくらいの現実感の喪失がある。20 歳にして、人間というものはここまで人生に希望というものを失ってしまうものだろうか、と考えた時、彼女とは対照的な存在として A1 が頭に浮かんだ。

彼女も弟の大学の学費と妹の高校の学費の両方を水商売で稼いでいた。自分のためか他人のためかの違い

はあろうが、学費を稼ぐ、或いは返済するというこの意味は全く同じで、つまりは教育への投資である。弟達の学費を稼ぐことで日々がストレスフルであるにもかかわらず、A1 は、自分の未来に希望を持っていた。だから、今のキャバクラの仕事を楽しい、天職である、とまで断言できたのである。その希望がどこから来るのかと考えた時、働くにあたって明確な目標があり、かつ自らで仕事の終わりを決めている部分が大きいのではないかと思われる。A1 は、弟が大学を卒業する時まで水商売をする、それが終わればこの仕事は上がる、と明言していた。一方で、B11 は、風俗の仕事を辞めることに関して、B11-214「全然わからない。」というのである。そして、B11-218「そうですね……………、今の私にとっては、その目標を達成するためにやらなければいけない仕事だと思ってます。」と言葉を続けるのであるが、彼女にとって、何時の間にか、自立ではなく、借金返済が人生の目標になってしまっている。つまり、わざわざマイナスから人生を始めているのである。この状態で、未来に希望を持てる方が難しいのかもしれない。山田が「希望格差社会」という言葉を用いて日本社会の格差を論じてから既に 15 年以上が経過したが、山田の予想通り、日本は本当にそのような社会になってしまった。村上龍が小説・『希望の国のエクソダス』で主人公の少年に語らせた言葉、「この国には何でもある。本当にいろいろなものがあります。だが、希望だけがない」は、まさに今という時代を象徴する言葉になってしまった。小説の主人公達のように能力が高ければ、経済が停滞した新自由主義の日本社会において、中学生でも希望を生み出すことができる。だが、「最貧困女子」にとって、希望を生み出す事は他の何よりも難しい事なのだ。

希望を扱った最も重要な哲学書は、Bloch の『希望の原理』であろう。Bloch は、希望の概念を幅広く、多面的に捉える。希望とは感情であることもあるし、また認識行為であることもあるとする。Bloch によれば、人は希望することを学ぶことができるし、希望は教えることもできる。希望には「本物の希望」もあれば、「偽りの希望」もある。(Bloch=1986 : 5-20)

Bloch が論じている重要なテーマは、希望は存在論的に将来に対して、まだ存在するに至っていないもの—彼が「まだ—ない (Noch-Nicht)」と呼ぶもの—に向けて方向づけられている、という主張である。「まだならざる可能性に対する期待、希望、志向—それは人間の意識の基本的特徴であるばかりでなく、具体的に整理しつつ把握すれば、客観的現実総体の内部での一つの基本既定なのである」(Bloch=1986 : 7) という Bloch の指摘は、非常に重要である。何故ならば、希望というものの本質は、「まだない」にもかかわらず、いや、まだないからこそ求めるべき対象として、確かに「存在」しているというパラドックスであるからだ。常に不確定な要素を含み、かつ満たされていない「希望」なき状況は、決して幸福な状態ではないだろう。だが、その試練の時は、人々が「希望」を明確に描き得る限り、単なる苦悩の時間を意味しない。その希望に辿り着くか否かは別として、少なくともその試練の時に全力で立ち向かった者にとって、その時間は、人間を陶冶し、成長を促進する価値ある刻に代わる。故に、本来、人は希望を抱くべきなのである。否、人類というものは、歴史上常に希望を抱いてきたはずだ。ドイツの有名な格言に、「希望は最期に死ぬ」(Hoffnung stirbt zuletzt.) というものがある。つまり、人は、人生において、残された時間がある限り、それがどのよ

うなものであれ、希望を持つということである。だが、B11 のナラティブからは、その欠片も感じることができないのだ。

東京大学社会科学研究所（東大社研）は、2007 年に「希望学」プロジェクトを開始した。日本社会から消えてしまった「希望」を取り戻すための取組みである。リチャード・スウェットバーク（2009 : 64）は、そのプロジェクトの中で、希望を、**Hope = the wish for something to come true.**（具体的な何かを実現しようとする願い）と定義付けた。つまり、希望の核は願望である。そして、その願望は、具体的な何かを求める願望である。その何かは社会的な側面を持つ。その何かを実現するためには、それが社会の中で他の人々との相互交流を通じて実現する必要がある。この視点に立った時、A1 が希望を持つのは当然であった。彼女の希望は全て具体的である。弟の学費を稼ぐ、水商売を辞める、今の恋人と結婚する、等々である。一方、B11 はどうであろうか。唯一具体的な願望は、奨学金を返す、である。だが、彼女にはその先の構想が何もない。希望が無いのはある意味当たり前なのである。A1 が、結婚の先に自分自身の幸福を願っているのと異なり、B11 の未来には、幸福に繋がるものが何も描かれていないのだ。

東大社研は、上述のスウェットバークの発案に宇野重規と広渡清吾が更なる意味付けを行い、最終的に、**Hope = the wish for something to come true by action.**と規定した。最後に、希望の四つ目の要素として、行動を加えたのである。すなわち、希望とは、具体的な「何か（something）」を「行動（action）」によって「実現（come true）」しようとする「願望（wish）」である。（2009 : xvi-vii）希望は、必ずその四つの要因から構成される。従って、それらの要因のうち、少なくとも一つが欠けた時、希望は失われることになる。昨今、山田が「希望格差社会」と呼んだ時代が日本に確立したのだとすれば、「失われた 10 年」と呼ばれる新自由主義が急速に推し進められた 1990 年代から 2000 年代の間に、この四つの要因が何らかの原因によって社会から喪失した訳であるが、それを単に「安定した雇用」の崩壊というありきたりな理由だけに帰結させるのは、余りに安易過ぎるように感じる。何故ならば、本来希望というものは、何ら客観的な理由を必要としないからである。Bauman（=2004 : 67）は、「希望は、あらゆる想像可能な『現実の証言』よりも強固である。」「希望に証明は不要である」、「希望は根拠がなくとも、正当であり実体的である」と指摘する。だからこそ、Frankl はアウシュヴィッツの限界状況においてなお、未来に希望を抱けたのだ。希望は、絶望しない限り、どこにいても、いかようにも抱けるのである。そして Frankl は、それをサン・クエンティン刑務所でも、見事に証明した。刑務所の塀の中ですら、人は希望を抱けるというのに、何故、B11 はかくも希望を抱けないのか。それはやはり、単純に、自分自身に絶望しているからである。

少し長くなるが、B11 が自分自身に絶望した理由、「自分自身からの排除」を完成させてしまった理由が、以下に端的に語られているので引用する。

原田 153 : なるほど。親からはこう就職しろとか,,,

B11-153 : いや、言われました（笑）

原田 154 : 言われました？

B11-154 : 「大丈夫なの？」とか

原田 155 : 正社員なれとかっていうプレッシャーですか？

B11-155 : そうですね. やっぱあの一奨学金を借りることになるので, 安定した正社員の仕事を
して奨学金を返していかないと困るでしょって. 言われて. あーそうだな, 困るなって思って.
やっぱり親はそこが心配みたいで. よく言われてましたね.

原田 156 : でもその, 切迫感を感じなかった訳ですよ.

B11-156 : そうですね, 逃げてた.

原田 158 : 逃げてたか. 昔からこう大切なことが近づいてくると逃げるタイプなんですか？

B11-158 : そうですね. 課題とかぎりぎりまでやんなかったりとか. やるべきことを結構後回し
にしちゃうところがあったので.

原田 159 : うーん.

B11-159 : その人生を決める, 分かれ道, でーこうやっぱ楽な方というか, そっちの道に進んで
しまったので.

原田 160 : 人生の中で何かこれだけは努力したみたいなのってないですか？

B11-160 : んー……………なんだろう. ないですかねー.

原田 161 : ないですか.

B11-161 : どれも中途半端で終わってしまうので, いつも.

原田 162 : それは体力が持たないんですかね, それとも気力が持たないんですかね.

B11-162 : 気力ですね.

原田 163 : 気力.

B11-163 : やる気とか.

原田 164 : やる気. やる気が湧いてこないんですか？それともやる気が途中でなくなっちゃうん
ですか？

B11-164 : なくなりますね.

原田 165 : 途中で？

B11-165 : 色んな方にこうした方が良いよ, ああした方が良いよ, って. 先生にもよく言われて
ましたけど. そんな時はそうしなきゃとか. まあ一歩としてキャリアセンターとか行くみたいな.
それから, こうあまりやる気が (笑) どんどん. あーこんなことしなきゃいけないんだとか,
就活って大変だなんていう現実を見るんですよ. 色々求人見たりして, あー, 私に出来るのかな,
とか, 辞めちゃったら嫌だなとか, 続けるのかな, とか,, , ていうのがあったので,, , . また後でや
ればいっか, みたいな. まだ時間はあるしみたいな. 感じでずるずる, きて, 結局, みたいな.

原田 166 : なるほど。でも自分が決まらずに卒業を迎えてしまって,,,

B11-166 : はい。

原田 167 : 友達が決まってるみたいな状況でみじめな気持ちになったりとかしました？

B11-167 : ……ないですね。

原田 168 : それもないですか？

B11-168 : 能力が上なんだろうなって思うので。

原田 169 : でも同じ学校に入って B11 さん真ん中くらいの成績ですよ。

B11-169 : はい。

原田 170 : 能力的には同じ能力があると思うんですけど。

B11-170 : ……………

原田 171 : 自分の能力に自信が持てないですか？

B11-171 : 持ててないですね。

原田 172 : それは小学校からずっと？

B11-172 : ま、そうですね。やっぱそう来てしまっただけ癖っていうか、ついちゃってて。そういう結果になっちゃったと思うんですけど。

原田 173 : B11 さんにとってこう、一番楽な場所ってどこですか？今。

B11-173 : 楽な場所？

原田 174 : 居心地が良い場所というか。

B11-174 : 実家とか。友達の家とか。

原田 175 : ここ、Y は居場所になってますか？

B11-175 : ……居場所、ではないですね,,,

原田 176 : 居場所ではないか。自分が安心出来る場所っていうのは、実家と友達？

B11-176 : あと彼。

原田 177 : 彼氏と。こういう仕事をやってる人に私がたまに聞くんですけども、たまに「風俗が居場所です」っていう人がいるんですよ。お客さんの笑顔が癒しになってるとか、「ありがとう」って言われて嬉しいとか。そういう思いって B11 さんにはありますか？

B11-177 : ………「ありがとう」とか褒めていただいたことは嬉しいとは思いますが、それが自分の活力にはなってないですね。

原田 178 : ならない。モチベーション、また頑張ろうみたいなものにも繋がらない？

B11-178 : 繋がらないですね。

原田 179 : 人から掛けてもらって一番嬉しい言葉ってどういう言葉ですか？彼氏さんとかお父さんお母さんにかけてもらって一番嬉しい言葉って。

B11-179:「頑張ってるね。」

原田 180: 頑張ってるね。

B11-180:「…と言われたら心に響きますね。」

原田 181: あー。B11 さんはいつも頑張ってる人なんですよ、多分。

B11-181: 取り返すために頑張ってるつもりなんですけど。

原田 182: 頑張ってるんだよね。それがなかなか認められなかったりします？

B11-182: 人に認められる,, , ………それはないと思います。

B11-182「人に認められる,, , ………それはないと思います。」という最後の言葉に、彼女の絶望が集約されているのではないだろうか。彼女は、人生において、恐らく両親を含めて誰からも満足に認められたことがないのである。つまり、「承認」が致命的な程に欠如しているのだ。そして、20 年間「承認」が欠如し続けただけで、人間はかくもパワーレスな状態に陥るのである。

B10 に比べると、B11 は、実の親から虐待を受けた訳でも無く、確かにいじめという「内的作業モデル」を欠損させるに十分な状況に置かれはしたが、それでも B11 のように精神疾患を発症して精神科に通院した訳でもない。これまでの人生における不幸の総量を比較すれば、圧倒的に B10 の方が「悲惨」な人生であり、絶望的に思われるのであるが、現状、実際は逆なのである。B11 のナラティブを見れば見るほど、B10 よりも遥かに深い絶望に囚われている。

例えば、B11-167「……ないですね。」が示すように正社員になった友人達に対して嫉妬やルサンチマンさえ抱かないという。B11-171「持ててないですね。」が示すように自己肯定感は一貫して低い。そして、B10 と最も対照的なのは、B11-175「……居場所、ではないですね,, ,」だ。一方で、B10 は、生まれて初めて出会った S 店長という理解者と、彼が彼女のために用意した居場所である Y の内勤スタッフという立場に心から感謝していた。それは文字通り彼女にとって、人生の一大転機であった。だから、B10 は、Y を自らの居場所と言い切れるのである。そこから理解されるのは、絶望はいつか希望に代わり得るということ、そして、その鍵は「承認」だということだ。

かつての B10 は、性風俗の「底の底」、「最貧困女子」が揃う「地雷店」でさえ採用を躊躇した程、絶望的な状況に置かれていた。これ以上人間としての根幹を壊してはいけないと感じた S 店長が採用を見送ったということは、少なくともその時点では、B10 の方が B11 よりも遥かにパワーレスだったはずである。ところが、今立場は完全に逆転した。B10 には、希望が生まれ、B11 は相変わらずパワーレスなままである。それは、結局、「承認」の有無にかかっているである。B11-179「頑張ってるね。」B11-180「…と言われたら心に響きますね。」という言葉は、B11 が恐らく最も欲しい言葉がけである。逆に言えば、たった一言の「頑張ってるね。」を言ってくれる人が彼女の周りには誰もいないという現実が、彼女を「実存的空虚」に陥らせている。そして、原田 227「社会からの偏見みたいなものって感じますか？」に対して、B11-227「感じま

す。」というやり取りが示すように、B11 は、スティグマを実感し、社会的排除を自ら完成させてしまっており、結果的に「実存的貧困」なのである。

『最貧困女子』において、鈴木は、「最貧困女子」の特徴について、「彼女らは、本当に救いようがないほどに、面倒くさくて可愛らしくないのだ（中略）だからこそ、彼女らは孤独だ。」と端的に解説しているが、この解説はまさに B11 にそのまま当てはまる。B11 は、何をするにしても結果が出ない。否、気力が続かず途中で諦めてしまうために、結果が出せない。そのため、周囲は彼女に発破をかけたり、背中を押したり、せかしたりすることはあっても、「頑張っているね」とは言わない。否、絶対に言えないのである。周囲の目には、彼女は怠けている、或いはやる気が無いようにしか見えないからだ。それは、実の親から見てもそうなのである。だから、B11-153「いや、言われました（笑）」というように、恐らく何度も何度も、彼女の人生は、両親を始めとする周囲から「頑張れ」と言われ続けてきたのである。大学のキャリアセンターでも、そして恐らく「地雷店」の S 店長からも。だから、彼女にとって、Y は居場所にならないのだ。周囲から見て全く頑張っているように見えない彼女は、実際はひたすら、彼女なりに頑張って生きてきたのである。だが、そのプロセスは全く評価されず、何時も結果だけを求められることに、彼女は心底疲れ切ってしまったのであろう。原田 181「あー。B11 さんはいつも頑張ってる人なんですよ、多分。」という言葉に、このインタビューの間ひたすら淡々と答え続けていた B11 が、初めて表情を変え、涙声になって、B11-181「取り返すために頑張ってるつもりなんですけど。」と声を震わせた。鈴木が指摘するように、発達障害グレーゾーンの女性達は、本当に救いようがないほどに、面倒くさくて可愛らしくない。だが、それを「承認」してくれる誰かが 1 人いるだけで、彼女達の絶望は希望に代わり得る。たった一言の「頑張っているね」という「承認」の言葉、それが今の彼女の恐らく唯一の切実な「願望 (wish)」なのである。そしてそれが満たされた時、彼女の中にも、いつか真の希望が、すなわち、具体的な「何か (something)」を「行動 (action)」によって「実現 (come true)」しようとする新たな「願望 (wish)」が生まれるに違いない。

第 3 節 エンタテインメント業 (C 群) に属する女性たちの研究

第 1 項 9 人の女性達の概略

(1) 本項では、エンタテインメント業 (C 群) に属する女性達のうち、主として AV 女優として 1 年以上活躍した 6 人 (平均年齢 27.00 歳) と、同じくエンタテインメント業であり、昨今過剰営業の「闇」と「病み」が指摘されている地下アイドル 3 人 (平均年齢 21.33 歳) の女性達について考察する。前節で触れた B2 や B4, B9 もそれぞれ 1 年以上という条件を十分に満たす専属の単体 AV、或いは企画単体 AV 女優であったので、彼女達の発言も適宜引用しながら、日本において、「職業スティグマ」が桁外れに大きいと思われる AV 女優達の生い立ちやそこで発揮されるエイジェンシーや生きがい、そして苦悩等の実態を掘り下げていきたい。また、同じエンタテインメント業である地下アイドルにおいても、「闇」と「病み」の本質がどこにあるのか、AV 女優や本物のアイドルとの比較を通して明らかにしていきたい。

成育過程から見た C 群 9 名の IWM の欠損率は、77.78%であり、全員が 4 つの心理検査においても全ての不良の数値を示したため、実存的貧困率も同じく 77.78%である。うち、2 名が経済的に「相対的貧困」の状態にあったため、絶望的貧困率は 22.22%である。量的研究の結果から見ても、C 群も A 群に並んで精神保健が悪い群である。心理検査は概ね不良であり、全体で見ても最悪の項目が二つある。とりわけ目立ったのは、「自己肯定意識尺度」の「充実感」と「自己閉鎖性・人間不信」であり、両領域において全群を通して最低の数値を示した。前者の平均は、23.333 点であり、女子大生平均の 26.900 点を大きく下回っている。また、後者の平均は、29.111 点であり、同じく女子大生平均の 16.840 点を大幅に下回っているが、全ての心理尺度を通して、この群のこの尺度得点が最も女子大生平均との大きな乖離を示した。その差は 12 点以上であり、異常なまでの人間不信を C 群の女性からは感じる。この項目は、前項でも指摘した通り全ての群に共通して女子大生平均よりも顕著に悪いのであるが、29.111 点は、その中でも突出して不良な数字である。また、「生きがい感スケール」は全群を通して B 群に次ぐ 66.778 点と不良であり、女子大生平均の 71.538 点を大きく下回って、かなりの絶望感・無力感が C 群の女性達からも浮かび上がってくる。生活史に目を向けても、AV 女優群は児童虐待が 6 人中 3 人に確認されており、IWM の欠損が著しい。生活史の中では非行の数が各群と比較して最も多く、半数以上の 6 人中 4 人が少年法や刑法に触れる成育歴を送っている。B 群同様に母子家庭出身者が過半数を超え、これが児童期の深刻な「経済的貧困」と虐待の原因になっている。また、地下アイドル群では、全員にいじめが確認されている。うち、2 名のいじめは壮絶な無視であり、その結果 IWM の欠損が見受けられる。2 名とも性風俗産業に従事しており、1 名は比較的有名なグループに属しているにもかかわらず、ホストに依存して金使いが常軌を逸しており、その荒んだ生活を維持するために、徐々にアイドル活動よりも性風俗産業で働く時間が増えている状況である。

総論として言えることは、ソープランド嬢と同じように、AV 女優に共通するのは家庭環境の凄絶さと精神保健の状態の悪さであり、心理尺度の平均を比較すれば、両者に径庭は無い。寧ろ、社会的な偏見とステイグマが更に大きい分、精神保健の状態は B 群よりも一層悪化するようにも思われる。だが、AV 女優は、本当に成功すると Instagram 等 SNS のフォロワー数が数十万を超え、下手な女性芸能人以上のインフルエンサーになり得る。AV 女優とグラビア女優だけで構成されたパフォーマンス集団の「恵比寿マスカッツ」及び「二代目恵比寿マスカッツ」等に至っては、深夜帯とはいえ自分達の冠名が付いたテレビのレギュラー番組を持ち、普通のグループアイドルや地下アイドルよりも遥かに大きな知名度とイベントやライブにおける集客力を誇る。彼女達は、ほぼアイドルグループと言っても差し支えないであろう。従って、AV 業界で大金を稼ぎ、世の若い女性達に歌やファッションや生き様で影響を与える真のインフルエンサーが実際に数多くいるのである。そうした女性の 1 人が今回インフォーマントとして参加したせいで、本来は最低レベルで低い C 群の平均値が全体的に底上げされているので、彼女の数値を外れ値として、その数値を割り引いて検討した方が適切だったかもしれない。また、彼女の語る AV 産業における自己実現や夢が、本当にそこに参加している全ての女性達の価値観として共有可能かも検討する必要がある。ただ、本研究を通して驚かさ

れたのは、AV女優経験者のインフォーマントは、61人中14人いるのであるが、AV産業自体に全面的に否定的な発言をした者は、本項の冒頭で検討する「アダルトビデオ出演強要問題」を訴えているC2以外は、1人もいないということである。これらの結果が示すのは、AVは一大エンタテインメント産業（その闇は相当深いのであるが）であり、そして日本の風俗産業の頂点であるため、多くの女性に「選ばれし者」という恍惚感がある。特に専属女優だった者には、その傾向が強く感じられる。一方、企画単体、或いは単なる企画女優になると、その選民意識はかなり下がる。AVは、ソープランドやデリヘルと同じで、単に生計を維持するための手段の側面が強くなっていく。だが、それでも、AVは楽しかった、と語る女性が多い。安定して稼げるソープランドやデリヘルが生計維持の主たる手段となった後でも、AV出演時を振り返り、良い思い出として語る女性が多い以上、逆に昨今の「AV出演強要被害問題」で語られる凄絶な被害の実態と現実の間に大きな乖離が見られる。この点に関しては、今までブラックボックスのように扱ってきたAV産業の現場に光を当てて、今後も継続した調査と検証が必要不可欠であると思われる。

地下アイドルに関して言えることは、同じエンタテインメント産業であってもスティグマが無い分、当初は実存的貧困率は低いと想定した。だが、結果的にはAV女優の群と大差が無かった。他の群に割り振った地下アイドル経験者も、ここで検討する3人の状況と比べて、成育歴も心理検査の結果も大差がないため、地下アイドル活動は、決して若い女性に推奨できる類のものではないかもしれない。精神保健の状態が悪い理由は、地下アイドルは悪質な運営に搾取されていたり、承認欲求が強い女性達が生計を度外視して普通の生活を犠牲にしながら活動している側面があり、経済的に困窮している者が少なくないからだ。その結果、一部の地下アイドルは生きるために性風俗産業に取り込まれている場合があり、その際はスティグマを背負うために結果的に他の群の女性とほぼ同等の結果になったのだと思われる。無論、地下アイドルは数が膨大で、限りなく性風俗産業に近い群から、限りなくタレントに近い群までその実態はかなりの濃淡があり、本研究がインタビューを行った者のうち、性風俗産業に従事していた者は約半数であった。だが、パパ活やギャラ飲み、デートクラブなどの亜風俗・疑似風俗産業に関わっている女性も多く、その実態は、いずれ専門の調査によって明らかにされるべきと考えるが、それは本研究の主題から外れるためにここではこれ以上深入りはしない。

コード	年齢	職業	IWM	実存的貧困	経済的貧困	その他特記事項
C1	32	専属AV				高校中退、虐待、性被害、非行、母子家庭
C2	27	強要被害	○	○		性被害、DV被害
C3	28	専属AV	○	○		専門中退、離婚、虐待、非行、母子家庭
C4	23	企画AV	○	○		専門中退、いじめ、虐待、非行、母子家庭
C5	28	企画AV	○	○		高校中退、美容整形、非行

C6	24	企画 AV	○	○	○	浪人・留年, いじめ, 精神・発達障害
C7	20	地下アイドル				父子家庭, いじめ, パパ活, メイトカフェ
C8	23	地下アイドル	○	○	○	いじめ, 自傷, 精神・発達障害, デリヘル
C9	21	地下アイドル	○	○		いじめ, 虐待, 母子家庭, 整形, デリヘル
	25.11		77.78%	77.78%	22.22%	

第2項 6人のAV女優（強要被害者・現役専属・元専属×1, 元企画単体×3）の物語

(1) 最初に, C2 のナラティブから検討を始める。「AV 出演被害強要問題」の当事者の 1 人である以上, 当然業界に対する怒りと憤りは強い。しかし, 彼女にしても, やはり新自由主義の「自己責任論」を, 自分自身にも適用してしまう。騙された自分も悪い, という趣旨の発言が, 随所に垣間見られるのである。彼女が出演に至った経緯は, C2-6「えっと, 21歳の時にスカウトされて, えーとそうですね, 今から 5 年前くらいの話なんですけど, 街でスカウトされて『グラビア出る人探してるんだけど』って話から入ってグラビアに興味なかったんですけど, 音楽をやりたいと思ってたので, そこで, 『じゃあ最初だけグラビアやってくれば, あとは音楽の道に進ませてあげる』, 『デビューさせてあげるし』って言われたので, 『頑張ろう』と思って始めたってのがきっかけだったんですけど.」, というナラティブから分かる通り, 昨今その悪質性が指摘されているスカウトである（※C-2-①参照）。迷惑条例等によって取締が進んでいるが, 未だに「夜」や「風」の世界では, スカウトは必要悪として, 店舗側からも女性の側からもその存在が認められている。

ここで C2 が語るスカウトや事務所の勧誘の仕方は, AV に誘うにあたっての常套手段である。AV に出演した女性の多くは, 元々歌が好きだったり, 歌手やアイドルに憧れていたたり, 華やかな芸能界に対して何らかの思い入れがある。そのような女性達に対して, 過剰な夢を見せるのである。そして, そのために利用されるのが, かつては故・飯島愛であり, 現在では「恵比寿マスカッツ」なのである。彼女達のように, AV でキャリアを始めて, 後にテレビ番組で活躍したり, インフルエンサーになった成功譚を強調して語ることで, もしかして, 自分自身の願望が, AV 出演をステップにして本当に叶うかもしれない, と思わせるのである。実際に, C2 は完全にこの詐術に乗ってしまっている。彼女は, スカウトされるまで一切 AV の知識が無く, それが実際にどのようなものかさえ分からない状態で, スカウトと事務所社長の詐術に騙されてしまったのである。

C2-18「その時ささっと書かされたっていうのもあるし, あんまりその, それに関してのことは一切変なことは書いてなかったんですけど.」, C2-20「多分, ささっと読まれた感じであんまりわざと詳しく見せなかったのかもしれないけど, 特に『不利益だな』って思うような文章ではなかったの.」というナラティブ

から分かる通り、典型的な若い女性の無知に付け込む形での契約であり、ここに十分なインフォームド・コンセントはない。契約書もお互いが保管し合う一般の形式ではなく、事務所の側のみが、後日揉め事が起きた時の保険として（或いは、恫喝用として）、一部のみ保管するのである。ただ、多少の違和感を覚えるのは、C2-25「もー、自分の気持ちも無視されてて、それこそ NG 項目みたいなところを書いたのも無視されて」の部分である。NG 項目というのは、完全に AV 用語であり、女優が AV の中でできないプレイを示すものである以上、それを書いたということは、C2 が AV に出演すること自体は事前に了承したということである（※C-2-②参照）。所謂三大 NG と呼ばれる「アナル・スカトロ・ハード SM」の現場は、ほぼ軽度の知的障害を持った「最貧困女子」の居場所になっていると『最貧困女子』の中で鈴木が指摘しているが、そのように明らかに騙されて出演させられているケースとは異なり、二本しか作品を撮影していない C2 は、デビュー作や第二作において、三大 NG に匹敵するような厳しいプレイは求められていないはずである。女優の価値を高めるためにも、メーカーも最初から無理なプレイは要求しないため、通常デビュー作は、オーソドックスな絡みとデリヘル嬢が行うような基本プレイのみで構成される。従って、ここで C2 が言っている NG プレイが一体何を指すのか分からないのであるが、そもそも人前での性行為そのものを彼女が NG 行為であると言っているのだとすると、現場の認識と彼女の認識は、相当にずれていたことになる。このように大きな認識のずれがある状態で現場に連れてこられた C2 は、確かに「被害者」以外の何物でもないのであるが、逆に言えば、それは彼女の所属した事務所が異常なのであり、普通の事務所は、明らかに現場で一悶着起き、事務所としてもメーカーからの信頼を失うことが想定されるような悪質な騙し行為は、自分達の後々の仕事のためにも通常はしないのではないかと、ということである。

悪質な一部の事務所が、他の健全な事務所や AV 産業全体の評判を落とすようなことをしているのは腹立たしいと、C2 が受けたようなやり口に関しては多くの AV 女優達が、真っ先に事務所の問題を批判している。

B9-96: ないです。「AV 出演強要問題」とかもなんかちょっと。困った女性とかの駆け込み寺的なものがあるけど、あの人たち（PAPS, HRN, ライトハウス）もちょっと考えが偏ってる感じじゃないですか。

原田 97: そうですかね。正直どう思います？あの問題。

B9-97: あの問題、なんか一部の,, , 一部であった問題,, , 確かにあることはあるんだろうけど、あの人達が言ってることは嘘だとは絶対言わないけれども,, ,

原田 98: そりゃそうでしょうね。

B9-98: 本当のことなんだろうけど、一部のことを業界全体の話として拡大しすぎじゃないですか？みたいな。

原田 99: そう、かもしれないですよ。うーん。

B9-99: 例えばアリさんマークがブラックだっていう話があがったけど、アリさんマークの中だってブラックな所とブラックじゃない部署があったはずで、かつそのアリさんマークがおかしいからって引越し業界が全部おかしいっていうのはおかしい話だし。

原田 100: 全くその通りですね。

B9-100: 一部の AV の小っちゃい事務所なんだかスカウトなんだかが、なんかおかしいことをやったから、AV 業界自体腐ってるって言われるのが、こっちは「えー」みたいな。

原田 101: そうですよ。あっちの方の、強要問題を内閣府なんかで指摘してるグループの人達は、AV 産業で働く女性達はほぼ全員が騙されてるから、全員を助けなきゃいけないって考え、ま、基本そこで働くこと自体が、女性の人権侵害であり、男性による性的搾取だという考え方ですよね。

B9-101: そうなんですよ。

原田 102: でも、そこで働く女性からすると仕事を奪われる訳ですよ。

B9-102: そうなんですよね。だから結局、なんかあの人達は多分その中で働いてる人達が、てかその、なんだろう、今回の問題に関わってない人達を否定している訳ではないとは言ってるけれども、元々差別が強い業界じゃないですか。それに対して言うことってもうちょっと気を遣って色々言ってもらわないと業界自体が悪いって世間が勘違いしがちっていうか。

原田 103: そうですよ。

B9-103: 世間はもしかしたら興味持っていないのかもしれないですけど (笑)

原田 104: 当事者としてやっぱり強要的なものってあると思いますか？

B9-104: いや。私の場合はなくて、全然。事務所とスカウトの問題だと思うんですよ。

B9 はインテリらしく、俯瞰的に業界を見て、問題の所在を的確に捉えている。C2 のように、そもそも AV を観たことすらない女性に対して、NG 項目云々の書類を書かせて形だけ本人の同意を取ったとしても、それはほとんど意味が無い。そもそも AV 女優の仕事自体が曖昧な認識のまま、C2 は撮影現場に来てしまっているのだ。それを知らない現場では、恐らく NG 項目でもない当たり前のプレイと演技を要求しているだけなのに、新人の C2 がひたすらごねて我儘を言っている状況にしか思われなかったのではないだろうか。そこで、C2 に対して周囲から説得がなされ、挙句に恫喝がなされ、最終的に AV 出演強要が発生したのは、誰にとっても不幸な出来事ではない。これは明らかに、悪質な事務所に第一義的に大きな責任がある。そして、この事務所は、C2 にほとんど出演料も支払うことなく、社長がお金を持ち逃げして失踪してしまうのである。そこに至って、騙された C2 が、先に告発していた女優達に少し遅れて告発に踏み切ったのである。

3 人の現役・元 AV 女優が業界を相手に強要被害を訴えたことで慌てた業界側が、直ぐに対応を取って

るのが分かるのが、次の B9 のナラティブである。B9-126「うん。うちの事務所はしっかり説明してくれました。」という通り、彼女の事務所はしっかりとしており、きちんとインフォームド・コンセントを行っている。また、メーカー面接の際は、B9-135「確かに AV の事務所自体の面接ではビデオ回さなかったんですけど、その後なんか AV の事務所に入ってから事務所のマネージャーさんと一緒に各メーカーを周って『よろしくお願ひしますよ』みたいな感じでメーカー面接に行くんですけど、その時 S（大手メーカー）とかは回してましたよ。」という通り、悪質な事務所の存在を前提にして、メーカー側では女優のメーカー面接の段階から、既にビデオ撮影を開始している（※C-2-④参照）。何故ならば、300 本以上のビデオに出演している女性が当時から洗脳状態だったとして強要被害を訴えているが、その女性にしても、メーカー面接ではやる気十分の前向きな発言をしていたからだ。それがそもそも事務所の洗脳であり、本人の意思ではなかった、と主張されてしまうと、メーカーとしても何を信じていいか分からなくなってしまう。従って、今回の告発を奇貨として、トラブルが起きても事後的に自分達に落ち度が無いと示すために、そのような対策を取り始めたのだと思われる。同様の発言は B2 も行っており、事件発生後、少なくとも大手メーカー側はかなり慎重な対応を行っているのだ。B2-225「何もありませんね。今、読み上げるんですよ、1 回 1 回、誓約書。読み上げて録音して写真撮るんですよ。」という発言の通り、B2 も強要に関しては一切無いと断言し、寧ろ B2 は、出演強要被害などというものは、告発側のやらせではないのか、とまで疑っているのだ（※C-2-⑤参照）。

B2、B9 の話から分かることは、少なくとも出演強要被害問題が発覚した後からは、メーカー側は強要被害が起これないような対策をしっかり取っていることだ。そして、それに対して、AV 業界に長年関わってきた B2 などは、甚だ迷惑だと感じているのである。カメラの前でいちいち誓約書を読み上げて、強要されていないことをアピールしなければならないからだ。

では、被害が告発される以前はどうだったのであろうか。それに関しても、多くの女優達は、PAPS や HRN の主張にはまるで同意しない。彼女達のナラティブからは、多少の温度差はあるものの出演強要という問題はほとんど感じられないのである。この世界に、6 年近く前にスカウト経由で関わった元専属女優、現企画単体女優の C3 は、C3-44「出演強要?」、C3-46「全く.」、C3-47「うん。聞いたことない。」と自分と自分の周囲の女優には一切関係が無いことと片付ける（※C-2-⑥参照）。C3 と同じく、企画単体女優として、18 歳で業界入りし、以来約 10 年間企画単体女優として 300 本近い作品に出演してきた C5 も出演強要被害はピンと来ないという。彼女も C3 と完全に同じ意見であるが、C5 は、給与面で搾取に遭っている女性は周囲にいたことは指摘する。

C5-110「あー、全く。あ！いた。強要っていうか、給料が減茶苦茶安い子。」というナラティブが示すように、強要被害とは別の根深い問題が、悪質な事務所問題として AV 業界のみならず、性風俗産業全体に存在する（※C-2-⑦参照）。キャバクラなどでも、女性に対して適正な支払がなされていないケースは多々見受けられ、女性の無知に付け込むやり口は「夜」や「風」の世界ではほぼ常態化している。時に最低賃金以下だったり、労働基準法が定める以上の罰金を徴収していたり、経営者の側に民法や労働法一般に関する知識

が欠落していることも以前から指摘されている。女性は、給与から意味も無く引かれている厚生費や、様々な名目の雑費等が本当に支払う必要があるのか、自分自身で確認する必要があるであろう。C5 や次に引用する B4 も、そのような給与面で劣悪な取り扱いを受けていた女性は確かにいた、と指摘するが、同じく B4 も PAPS や HRN が主張するような形態の出演強要はない、と断言する。いや、B4 は寧ろ、出演強要を訴えているベテラン女優の「洗脳された」という主張に懐疑的である。それは、作品で共演した経験や過去の交友関係から、その主張に強い疑念を抱くからである。単に今の恋人に仕事のことがバレて責められた際、苦し紛れの言い訳として「洗脳」を持ち出したところ、引くに引けなくなっただけではないか、と B4 は疑っている。もし、B4 の疑念が正しいとすると、C2 のように悪質な事務所に騙されたという主張とは全く次元の違う話で、そもそも「洗脳」ではなく、責任転嫁の「作話」ではないのかという話になってくる。

B4-321「私みたいな人がたぶん一番多いと思う。」という B4 のナラティブは、彼女の友人の AV 女優達も、出演強要被害問題に関しては、皆同じ意見であることを意味している（※C-2-⑧参照）。PAPS や HRN は、最初に聞いていた話と違った、或いは、台本にないことをされた、NG 項目として挙げていたことを無理やりやらされた、などの被害も、広い意味での強要被害に入れて一括して主張している。そして、その点に関して、B4 は、B4-319「そうだねー。ホントに絶対嫌だっていう仕事はもちろんやらなかったし、ごっくんの仕事がきたら、『ヤだなー、ま、でも解禁したからー、そりゃ来て当たり前だよな、やるか。』みたいな感じだったからさ。強要問題って思ってる、強要って言われてる人とかはさ、諦めができない人だと思うんだよね。」と指摘し、どんなに嫌なことでも、一旦 NG を解いたならば、その程度が想像よりも酷く、現場で負担を感じたとしても、我慢してやり切るのが AV 女優であり、曲がりなりにもプロならば、そこで「やっぱり無理でした」は通用しないというのである。この考え方は、典型的な新自由主義の自己責任論であり、全面的には首肯できないのであるが、PAPS や HRN が主張している強要の定義が今一つはっきりと分らない以上、B4 の自己責任論にも強く反対も賛成もできない。結局のところ、強要が、いじめやパワハラと同じで、本人がいじめやパワハラと感じたら成り立つ類のものだとすれば、やはりそれは強要であって、自己責任論で片付けてはならないと思うし、C2 のように、現場で気持ちが変わって、撮影自体を取り止めたいと意思表示したならば、仮にスケジュールをがっちりと組んでしまっている、女性の人権を守るためにも取り止めなければならないだろう。そう考えると、B4 は、どちらかというと業界擁護派であり、それはやはり自分自身が AV 業界に愛着を持ち、そこで働いたことを誇りに思っているため、その業界を外側から部外者が、何の配慮も無く全否定してくることにに対して強い憤りを感じているのであらうと推察される。

B4 に近い自己責任論を主張するのは、業界のレジェンドであり、10 年以上に渡って専属女優を続けている C1 である。ただし、300 本以上の作品に出演している彼女でさえ、長いキャリアの中で 2 回だけ、話に聞いていない撮影を強要されたという（※C-2-⑨参照）。

ある程度話が違ふのは普通のことであり、それでもやはり AV 女優はプロとして現場でやり切らなければならないのか、と筆者が問うと、C1 は、C1-118「いやいや、普通じゃないよ。わたしもね、普通じゃない

作品はね、えっとね、2回あったかな。あの2回目は、ごっくん、ごっくんは5回って聞かされてたのに20発くらいごっくんしなくちゃいけない、で、もうわたしゲロ吐いちゃってもう無理ですってなってね。」と、普通じゃない状況を簡単には受け入れたくないという姿勢を示す。それは、B2も同様で、彼女は「NGはNG」とはっきりと拒否の姿勢を示すべきと語った。C1が300本以上の作品に出演して、たった2回だけの不本意な撮影を嫌だったが結局は仕方ない、と受け入れた点をどう捉えるかは議論の余地がある。人権団体や支援団体からすれば、そのたった2回ですら大問題である、契約違反である、人権侵害である、という話になるのかもしれないが、最終的に当の本人が受け入れているのである。C1-122「曖昧なくらいもうしょうがないじゃんって。そういうもんだよ、たぶんどの仕事でも。皆、やりたくないこと仕事でやってんだから。」は、B4のB4-324「そう。で、そういう業界だって分かってて入った、っていう、もの、かなって思う。脅されるとか、今まで経験したことないし。」とほぼ同じ意味で、AV業界という特殊な場所を仕事場に選んだ以上、多少の理不尽は受け入れなければならない、という業界の価値規範を、そこで働く女優達もある程度内面化していることを示している。2人の専属女優がほぼ同じことを言うということは、恐らくこれがAV業界の常識であり、「昼」の世界の仕事と違い、多少の理不尽さは許容範囲という認識が、広く業界内で共有化されていることが伺われる。これは、第2章で検討した上瀬の「職業スティグマ」の先行研究においても指摘されていることである。「性の商品化」が起きているキャバクラにおいては、商品である女性は客からの多少のセクハラは受けて当たり前、というずれた感覚が広く共有されているが、それがAV業界では、昨今強要問題として可視化されてきているのかもしれない。

ただ、PAPSやHRNが主張する強要問題は、本来かなり濃淡が存在する事象なはずである。それを、マスメディアが一括りに「AV出演強要被害問題」と名付けたことで、支援者であるPAPSの宮本ですら、困惑を覚えているのだ。PAPSに対する最も多い相談は、過去に合意の上で出演したが、後悔しているので作品の流通を止めて欲しい、というものであり、出演を強要された、それも悪質な形で、という相談はさほど多くはないのである。この問題が、朝日新聞や毎日新聞が繰り返し報道した結果、余りにも悪質な形式の出演強要被害にだけスポットが当たり過ぎて、B4やC1が自己責任と片付ける部分までも強要に入れるのか、そうでないのかというグラデーションの見極めと線引きを行う本質的な議論が全く無いままに、昨今言葉だけが独り歩きしているのは問題ではないだろうか。以下のナラティブでは、C6は、騙される女優の方が寧ろ愚かであるという、自己責任論の更に強いバージョンを語るのであるが、強要の「定義」をはっきりさせない限り、このように被害者に対して外部ではなく、内部からまで厳しい意見が噴出してしまうのだ。C6は、事務所が騙したうえで嫌々撮影されたのならば強要被害であるが、本人も納得の上で女優になれるなどの夢を見て、AVに出てしまった場合は強要ではないという。それが、C6-104「でもなんか、なんだろう、その後者の方ですよ？それって完全に無い話でもないんで。ホントに売れてる人は、AV辞めて、引退して歌ってる人とかも多いので。無くはないので。その話信じておいて、後で騙されたっていうのが本当に強要なのかな？とは思いますね。」というナラティブである（※C-2・⑩参照）。

C6 の立場に立てば、本項の冒頭に取り上げた C2 の訴えは、「AV 出演強要被害問題」のカテゴリではなくなるのだ。事実、名前を伏せて C2 の話を掻い摘んで説明したところ、C6 は呆れたような顔をして、「その人、本気でそれ、社会に訴えてんですか？」と言い放った。因みに、C6 は、弁護士を目指して一流大学の法学部に入学した高学歴 AV 女優である。決して、法律学に無知な女性ではない。その女性が、強い自己責任論で、被害に遭った女性の責任を問う現実が、新自由主義の自己責任論に自分自身を無自覚に隷従させる、「主体化＝服従化」のメカニズムが、日本社会に限なく波及している現状を証明しているのではないだろうか。

当事者の意見がある程度聞いたうえで、トライアンギュレーションのために現役の AV 監督からも協力を得たのだが、彼は匿名を条件に率直に以下のような業界の現状を語った。匿名を希望するのは、命が惜しいからである。反グレやヤクザ等の反社会的勢力が日本の AV 産業に深く関わっていることは公然の秘密であり、彼らの不利益に繋がる発言をして、命を落としたくないという。この業界にいと、彼らが振りかざす問答無用の暴力程、心から恐怖を感じるものは無いと彼はいう。

原 田 1：では始めさせていただきます。まず監督にお聞きしたいんですけど、昨今、AV 女優の強要問題の告発が始まって、「ポルノ被害と性暴力を考える会（PAPS）」なんかが非常に精力的なロビー活動をやっていることに関して、監督としてはどういう風に思っているのでしょうか？

Z 1－ 1：質問、ちょっと漠然としてるね。どういう風に思ってるか、か。

原 田 2：そもそも監督として、現場に長く関わってきた経験から、強要というものは、つまり彼らが言ってるような形での強要というのは、現場で実際にあるんですか？

Z 1－ 2：えっと、ちょっと先に質問したいんですけど、えー、強要、「全くない」って言ってる人たちが本当に 8 割もいました？

原 田 3：「全くない」とは言っていないです。最終的な意思決定をわたしらがやってるので、そういう意味では強要ではない、と。本当に嫌なことを、嫌がっているのに無理やりさせられたわけではないというのが、インタビューした女性の 8 割くらい、です。

Z 1－ 3：そうだね。

原 田 4：で、嫌々やって、本当はやりたくなかったのに雰囲気で逃げられなくなって、やってしまったっていうのが 2 人くらいでした。

Z 1－ 4：えっと、それは当事者に聞いたの？

原 田 5：当事者に。

Z 1－ 5：女性に聞いたんだ。

原 田 6：女性 10 人くらいに聞いて。

Z1－6: 10人の女性に聞いて、10人のうち8人くらいは、「わたしはその仕事をやりたくてやってるし、後悔もしていない」って。

原田 7: いや、後悔はするかもしれないけども、インタビューをした段階では、別にしないという立場でした。

Z1－7: なるほどね。で、あとの2人は、えっともう、撮影自体が嫌で嫌でしょうがなかったと。

原田 8: 嫌だったけども逃げられなかったっていう感じです。1人は後悔もしてるし傷つけられた、AVには二度と関わりたくない、という立場。もう1人は、嫌だったけど、AVってそもそもそういうものだから、もう仕方ないよねっていう立場でした。

Z1－8: なるほど。で、女性、今まで調査してきたのはその、今言った10人くらいの女性、だけですよね。

原田 9: はい。

Z1－9: 男性に聞くのは初めて？

原田 10: そうです。

Z1－10: なるほどね。じゃあそういう答になるだろうなあ、、、はい、その、お答を前提に答えるんですけど、えーっと、何が強要なのかっていう定義の問題で、人身売買的な、奴隷制度的な、こと、は、ない。

原田 11: ないですか。

Z1－11: と思います。

原田 12: なるほど。

Z1－12: それは、だって今、ソープランドにすらほぼない、でしょう。風俗。その辺どう思われます？

原田 13: ホストの「掛け縛り」で、女性がソープランドに沈められるというのは、ごくありふれた話です。ただ、それでもわたしは、最終的な意思決定は必ず本人がしてると思います。極端な話、ホストの掛けは、いざとなれば無視して「飛べ」ばいいので。昔のタコ部屋みたいなものとか、そんな労働基準法が禁じるような形の強制労働というのは、やれば必ず捕まると思ってるので、厳密な意味での強要というのは、風俗でももうほとんどないのではないのでしょうか。

Z1－13: そうなんです。何にも知らないところから、人が、無理やり目隠しされて連れてこられて、気が付いたら、「お前は今日からAV女優だ」、みたいなことは、僕はあり得ないと思うんですね。

原田 14: はい。

Z1－14: で、その一方で、ただ強要っていうホント定義の問題なんだけど、その、えっと向こ

う側って言うのもあれですけど、「強要問題はある」って言うてる人たちが指摘しているような、その、タレントになりたい人に AV 女優になることがタレントへの道だっていう風に納得させて、最初のデビュー作、出演作の撮影を都内のスタジオではなくて、来ると帰れないような変な場所にあるスタジオに連れて行って、みたいなことは、当たり前です。

原 田 15：それは当たり前ですか。

Z1－15：ええ。日常茶飯事です。で、ギャラの高い人ほどそういうことになります。

原 田 16：ああ、なるほど。そこで、説得が行われるわけですか。

Z1－16：説得ねえ。あの、だからさあ、ホントにこれって女の子の心の問題なんですよ。どの時点でやりたくないって思うのか、って話で、カメラまわる前とか、「じゃ服を脱いで」って言った時にやっぱりやりたくないってなったら、まあその説得だったり、えー、ある種の恫喝であつたりとかが行われる。

原 田 17：それが日常茶飯事。

Z1－17：そうです。

原 田 18：そういう時、女性はやっぱり泣いたり嫌がったりするものですか？

Z1－18：そうですね。

原 田 19：それをどういった立場の人が、監督自ら説得するんですか？それともマネージャーですか？

Z1－19：ただこれはね、僕はこれを見たわけではなくて、なぜなら僕は女性の、お金のかかった女優さんのデビュー作っていうのを撮ったことがないので、僕は現場でどういう風に行われているかっていうのは、僕は分かりません。

原 田 20：なるほど。だとそれは別室で担当の人間がやるわけですか？プロダクションの人間だったりマネージャーだったり。

Z1－20：それも分かりません。僕は。現場にいたことがないから。

Z1-20「それも分かりません。僕は。現場にいたことがないから。」という Z1 の言葉には、実際にいないという意味だけでなく、敢えていないようにした、という含意が感じられる。つまり C2 と同じように撮影の前に女優がごねるような状態に陥った時、恐らく何も言わず彼は現場から席を外すのであろう。そして、その際阿吽の呼吸で事務所のマネージャーや担当者が、女性の説得をするのである。そしてその時は、PAPS や HRN が主張するような、脅迫的手段、時には恫喝だけでなく、暴力的な脅しも含まれるのかもしれない。それを、建前上は表の世界であるメーカー側の代理人として、監督が見てしまう訳にはいかないので、Z1 は、Z1-20「それも分かりません。僕は。現場にいたことがないから。」という状況になるのである。

Z1 は、企画モノを主とする監督であり、相手にしている女優は基本的には出演料が安い企画単体女優か

企画女優である。Z1-19「なぜなら僕は女性の、お金のかかった女優さんのデビュー作っていうのを撮ったことがないので」というナラティブは、専属女優のデビュー作品を手掛けたことが無い、という意味である。従って、C2のように話が違ふ、或いはやはり気が変わった、というような新人女優特有のトラブルにZ1は、基本的に遭遇することがない。Z1が日々撮影している企画単体女優や企画女優は、本当にお金に困っているため、10万円程度のギャラでも喜んで作品に出演するB2やC5のような女優か、副業としてAV撮影自体を楽しみながら女優をやっているB9のような女優が多いためである。だが、業界の仲間内の話として、Z1は、専属女優のデビュー作が、往々にしてC2のような事態になることを良く知っているのである。有名になれる、歌手になれる、という謳い文句で、AVに乗り気でない女優をなんとかデビューさせて一度既成事実化させてしまえば、本人も結局引くに引けなくなって、二本目以降は諦めて大人しく撮影に応じるだろう、という考え方が、広くAV業界にあることをZ1は否定しない。寧ろそれは、日常茶飯事だということである。そして、Z1は、強要はあくまで「定義」の問題であることを強調する。Z1が日常茶飯事だと指摘するような撮影手法が強要であるならば、それがAV業界の日常茶飯事である以上、強要問題は深刻である。強要は今現在も刻々と日本中で行われていることになるからである。だが、B4、C1、C6のように、その程度は強要ではない、と線引きをしてしまえば、宮本が著書で紹介したような明らかに犯罪的なものを除いて、基本的にAV業界に強要は無いということになる。そして、犯罪的な事例はあくまで悪質な事務所とスカウトの問題であって、AV業界全体の問題ではないことになる。その立場に立つのが、B2やB9である。彼女達は、明らかに今の強要被害の告発は、事務所とスカウトの責任を業界の責任に転嫁し、そしてAV業界全体のイメージを悪化させ、そこで真面目に働いている女性達を本人達の許可なく全員「被害者」に仕立て上げることで、逆にスティグマを貼っていると感じている。B2やB9の尊厳は、PAPSやHRNのロビー活動と広報活動によって、著しく侵害されているのだ。従って、PAPSやHRNは、女性の人権を守るフェミニズムの立場でありながら、彼らが助けたい女性達から逆に煙たがられているのである。ラディカル・フェミニズムの立場は、エンパワーメントを目的とする社会福祉の現場に適さない点は既に指摘した通りであるが、B9-100「一部のAVの小っちゃい事務所なんだかスカウトなんだかが、なんかおかしいことをやったから、AV業界自体腐ってるって言われるのが、こっちは『えー』みたいな。」というB9の思いにも、しっかりと寄り添う必要があるのではないだろうか。PAPSやHRNが指摘していることは重要なことであり、女性の人権や尊厳を守るためにも、徹底して「被害者」の側に立つというスタンス自体が否定されることはあってはならない。仮に「被害者」が虚言を用いていたとしても、無条件で信じるのが支援者の立場である以上、その結果のミスリードを責める気も否定する気も無い。だが、B9が指摘するように、問題を提起する際の「言葉の遣い方」というものがあるのではないだろうか。今の彼らの問題提起の仕方は、セックスワーカーとしてのAV女優の誇りやエイジェンシーを真っ向から否定するものだ。そうするつもりはない、と言いつつも、AV産業をほぼ全否定することは、そこで働く女性達も併せて否定することになる。そして、その様な本音は、やはり彼らの発言の端々に見えてしまうのだ。「被害者だけでなく、私たち当事者の声も聞

け」という意見は、Twitter 等の SNS で、何度も当事者達から上がったはずだ。だが、今に至るまで頑なにそうしないということが、無言のうちに「貴女方は間違っています」というメッセージとなって当事者達に伝わっていることを、仮に支援団体を名乗るのであるならば、PAPS や HRN は自覚すべきだ。

畢竟、「AV 出演強要被害問題」は、Z1 が指摘するように「定義」の問題だと筆者も感じる。PAPS や HRN の様に、些細なものまで含める極めて幅が広い線引きをすれば、多くの専属 AV 女優のデビュー作は、ほぼ強要に該当するだろう。夢を見せて、おいしい話をして、言葉巧みに誘い込み、デビューさせるというやり口は、日本の AV 産業の常套手段であり、C2 がそれを許せない、強要された、と訴えるのも 1 人の元 AV 女優が語る真実である。だが、それを自己責任論として否定する C6 の考え方も、同じく 1 人の元 AV 女優が語る紛れもない真実なのである。また、C2 のせいで仕事がしにくくなった、勘弁して欲しい、と主張する B2 や B9 が語る真実も、同様に否定されるべきではない。結局のところ、真実とは社会的に構成されるものであって、客観的で唯一絶対の真実などどこにも存在しないという社会構成主義にしか、この問題の結論は帰着しない。誰もが大筋で嘘を言っているわけではないのであるが、随分と話が捻じれ、食い違っている。これが、筆者のフィールドワークから浮かび上がって来た昨今の「AV 出演被害強要問題」である。無論、完全な嘘を吐いていて断罪されるべき者もいる。それは C2 の事例では、C2 の事務所の社長である。だが、ここまで明白に白黒が付く事例の方が、業界的には少ないのではないだろうか。大半の女性達が、強要と自由意思の間、すなわち「中動態」を生きているのである。従って、少数事例を持って、大局を語るのは危険であるため、本研究では真実は「藪の中」である、という社会構成主義の考え方でこの問題を決着させ、これ以上の検討を加えることはしない。この問題はとりあえずエポケーし、そのうえで、改めて C2 のナラティブから、このような特殊な業界で働く女性達が抱える生活の諸問題と、その根底にある「実存的貧困」を浮き彫りにし、改めて彼女達の存在論的な苦悩の深さを検討したい。

(2) C2 のナラティブに戻るが、彼女が極めて強い承認欲求を持っていることは、C2-88「そうですね、承認欲求とか、そういうものが多いって思うのと、あとやっぱりステップ、そのあとなんか女優やりたいとか、普通のね？バラエティー番組出たいとかそういう気持ちが強いと思う。」、C2-90「講談社の雑誌に。嬉しいことなんだけど、受かって嬉しいとかっていうより恥ずかしいっていう方が強かったんで。嬉しいんだけど誰にも言えないっていうもどかしさもあったし。それがヌードじゃなければ言えるんですけど。そこの,,, なんだろうなー,,, 承認されたいのにできない、欲求が止まっちゃうっていうか。寧ろ隠したい,,,」というナラティブからも明白である（※C-2-⑫参照）。

C2-75「多分,,, 私の予想だとホントに AV がやりたくて AV やってる人って一握りだと思うんですよ。ホントはそれをやりたいわけじゃないんだけど、『自分を見て欲しい』とか、その後に『デビューしたい』とか、そういう気持ちがどうしてもあると思うんですよ。」というナラティブの中で、「自分を見て欲しい」「デビューしたい」という端的な言葉を用いているが、これは C2 の想いそのものと思われる。そして、

実際 AV に出演する女性達の多くが共有するものでもあろう。専属の AV 女優ですら、今はお金にならないことを、前項で B2 が指摘しているが、お金にならない以上、それに匹敵する何らかの魅力がそこには必ずあるはずである。そして、それはやはり、承認欲求が満たされることに求められるであろう。逆に言えば、彼女達が AV 出演に至るまでの人生には、全ての領域において、「承認」が大きく欠けているのである。

C2 の AV 出演強要被害に対して、本人がセカンドレイプと表現するくらい、批判が殺到したことは、哀しいことである。身内の親族ですらも、顔を出してマスメディアに出たり、講演したりするのを止めなさいと強く求めるといって、それでも彼女がそれ続けることもまた、承認欲求の発露なのである。C2-90「承認されたいのにできない、欲求が止まっちゃうっていうか。寧ろ隠したい,...」という想いは、結局今も同じなのではないだろうか。本来女性が性的な搾取を受けたということは、何らかのメリットが無ければ一生涯に渡って隠したいはずだ。強制的性交事件において、被害者が泣き寝入りするのも同じ理由である。裁判を起こしてまで、相手に法的な報いを受けさせたいという強い怒り、或いは、損害賠償によって金銭的な見返りを得なければ収まりがつかないという憤りが無い限り、自分の性的被害を曝け出してまで人は法廷で戦えない。ところが、今の C2 には、この二つのメリットは無いのである。相手の社長を詐欺で訴えて法的な報いを受けさせることもできなければ、被害に見合った損害賠償を得ることもできない。それは彼女自身が良く理解しているのである。

C2-105「100 パーセント向こうがあれだったら悪い、あれなんだけど、向こうもそれがうまいんですよ。私に『どっちが良い？』って考えさせてるから、うまいことやられたなって思うんですけど。」というナラティブから分かる通り、C2 自身ですら、自分に落ち度があることを率直に認めている。強制的性交の様に、100 パーセント相手に非があっても、訴えるのは難しい。彼女の場合は、仮に洗脳があったとしても、最後の自己決定を彼女自身がしている以上、一般的な理解を得ることは難しいと自分でも良く分かっているのだ。だが、それでも彼女は、誰かのために自分を犠牲にしてでも強要被害を訴えるのである（※C-2-⑬参照）。

だが、残念ながらその姿は、AV 出演でも手に入らなかった「承認」を、同じくらい自傷的なやり方で取り返そうともがいているようにしか見えない。身内は、彼女の自傷的な姿を、批判を浴び、インターネットで中傷されてまで戦う姿を見たくないのであろう。恐らく、名誉もお金も手に入らず、そして復讐心すら叶わない可能性がある C2 の闘いは、傍目には、一体彼女は、誰のために何のために闘っているのかと、疑問に思われても不思議ではない。事実、彼女は支援団体に都合良く利用されているスポークスパーソンではないのか、或いは、支援団体からお金を貰って矢面に立っているのではないか、という穿った見方や誹謗中傷の声がある。これは、彼女が「承認」に飢えていることを知らなければ、当然思い至る疑問である。そうでなければ、普通に考えて彼女の行動は、全く損得勘定が合わな過ぎる。かといって、彼女の主張する「自己犠牲」を素直に信じられるような人間性の成熟を、彼女の中に見出せない。どうしても、彼女の発言と行動が矛盾することに疑問を抱かざるを得ないのだ。

原田 80：今，そういう業界から足を洗って，将来何か夢とかっていうの持ってます？

C2-80：あまりないです．もちろん自分の中で夢はあるんですけど，，，．やっぱり夢を，，，誰よりもある意味想像力だけとかは大きいんで（笑）宇宙以上の想像力持ってるっていうか，夢とかは抱くんですけど，現実とのギャップ，特にそういうものに出たから余計にそうなんですけど，「目立ちたくない」っていうふうに思ってるんですよ．

原田 81：目立ちたくない，，，．

C2-81：目立ちたくないし，人に知られたくないし，っていうのも半分ある中で，でも「ここ主張したい，私という存在を主張したい」っていう気持ちはあるから複雑な感じではあるんですよ．

原田 82：今のお仕事だとマッサージの仕事と YouTube の自己 PR というかそういったものがメインの活動に見えるんですけども，それをずっと続けていきたい，，

C2-82：永遠に続けようとは思ってないです．

原田 83：今は楽しい？

C2-83：楽しく，，，今は自分でいうのもなんなんですけど，正義感みたいな気持ちもあります．そういうこと言うことによってやっぱり女の子救いたいって気持ち，被害受ける女性を救いたい，だから私がじゃあ，「目立ちたい」とか「好かれない」とか「すごいと思われたい」とか，そういうことともまたちょっと違うかな，と思ってて．そういう風に勘ぐる人も多いんですけど．だって，かつこ悪い自分見せて世にさらけ出してるわけだから，批判もたくさんされてるし，イヤってほどされてるんで（笑）すごいとは全く思っていないけどでもそれを言って，「あっこういう人がいるんだ」で．

（中略）

原田 124：エステ，アロマっていうのは今自分にとってとても大切なものですか？

C2-124：んー，，，それもまあ伝えることの一つかなって．やっぱり心をケアしてくれる存在だし癒しを与える存在だし．私も最初なんでこの名前を付けたかって，みんなのアロマになりたい，みたいな，そういう感じで．いろんな個性があっていろんな人がいてそれぞれ違う香り持っていて，，，いろんな人に影響を与える，良い効果も悪い効果もあるかもしれないけどそれも一つのアロマで良いんじゃない？っていうところで，，，．私は常にそういうことを思ってるんですよ．それこそ「自分の話を映画化してほしいな」とか，そういうのもあるし，なんかその一，転びすぎの人生なんだけど，伝えたいんですよ．そういう人もいるんだって．だから別になんだろうなー，かつこよくそりゃあなりたいたいし，，，そういう映画のヒーローみたいな，とか大女優さんになりたいとか，すごい有名歌手になりたいとか夢はあるけど，そこじゃなければもちろんやってる意味もないんだけど，，，伝える人になりたい，なにか，人生観を．だから私は今そういう気持ちでやっています．

たった 1 時間のインタビューの中ですら、否、ほんの数分間の会話の中ですら、C2 の発言は、これ程までに辻褄が合わない。C2-81「目立ちたくないし、人に知られたくないし、っていうのも半分ある中で、でも『ここ主張したい、私という存在を主張したい』っていう気持ちはある」というナラティブに、彼女という存在の矛盾が集約されているのではないだろうか。C2 は精神分析でいう本源的ナルシズムを欠いているために、彼女の自己愛は歪に肥大している。目立ちたくないが主張したい、という彼女の希望は、そもそも実現不可能である。元々インフルエンサーであるような偉大な人物が、黙って何かを主張するということは、確かにあり得る。だが、彼女のように未だ何物でもない人間が、黙って何かを主張することは土台無理がある。

また、C2-80 の「宇宙以上の想像力」や、C2-124 の中の「自分の人生の映画化」などは、「躁的防衛 (Manic defense)」と言っても過言では無い。これは、Vaillant による防衛機制の 4 分類では、自己愛的精神病防衛ともいわれるレベル 1 の最も未熟で病的な防衛機制である。C2-83 のナラティブにある他者の勘繰りの件であるが、これも普通に考えればそう捉えられて当然だ。C2 が病的でないとは仮定するならば、通常は売名か営利を真っ先に疑うのは寧ろごく自然な思考である。「目立ちたい」とか「好かれない」とか「すごいと思われたい」を C2 は悉く否定しているが、筆者には、C2 の行動原理は『承認』をめぐる闘争以外に考えられず、そしてこれらは全て「承認」概念に含まれるものである。従って、率直に言えば、C2 は自分自身に嘘を吐いているのだが、恐らくその自覚は無いであろう。つまり、ここでも「否認 (Denial)」のメカニズムが働いているのだが、これも同じくレベル 1 の自己愛的な防衛機制なのである。「実存的貧困」概念はアイデンティティの未形成を伴うのであるが、その意味で彼女はまさに典型的である。そして、置かれている状況は病的な自己愛の肥大であるが、これは「実存的貧困」概念と矛盾しない。寧ろ、これが「実存的貧困」状態に置かれた人間の中核的な精神病理であると言ってもいいだろう。

畢竟、C2 が得られるのは、マスメディアを通した「承認」以外は、被害に遭った女性達の身代わりになったという自己犠牲への満足感しかないはずだ。だが、それこそが、彼女が切実に欲しているもののだろう。そして、『承認』をめぐる闘争を全力で行っていることに C2 自身が気付いておらず、結果的に短時間のインタビューの中でさえ辻褄が合わなくなる彼女の不安定な発言や過去の行動との矛盾が腑に落ちないために、周囲からの彼女へのバッシングもまた大きくなってしまっている。どうしても C2 の発言や行動に、本源的ナルシズムを欠いた自己愛が未成熟な人間のそれを感じ取ってしまうのだ。だが、それ程までに C2 が承認欲求に自傷的なまでに突き動かされる原因、すなわち「実存的貧困」状態に陥っていることにこそ本来は着目し、彼女のパワーレスな状態を解消するための何らかの社会福祉的な支援を行わなければならないのではないか、と筆者は感じるのである。

社会福祉の「ヘルパーセラピー原則」は、C2 にも働いているのだろう。だが、当事者と社会の両方から感謝される福祉の仕事と違い、社会活動は、ボランティアがそうであるように時に心無い批判に晒される。今

の彼女がまさにその状態だ。テレビやマスメディアの取材によって彼女の承認欲求が満たされる一方で、彼女の尊厳もまた留まることない誹謗や中傷によって傷付けられている。そう考えた時、PAPS や HRN が女性達の支援団体であるならば、C2 が矢面に立つことが本当に彼女の人生において価値を持つことなのか、一度真剣に考える必要があるのではないかと思う。彼女の様に前面に出てくれる当事者というのは、団体としては都合が良い存在であろうが、彼女の精神保健の状態の悪さを鑑みた時、どれ程ケアをしたとしても、無理をさせるべきではないと思うし、寧ろ広報や啓発を傷付いた女性に頼るような社会活動は、支援団体として厳に慎むべきではないだろうか。彼女の行動が自傷行為になっている可能性に思い至らないのであれば、そもそも支援団体として女性の気持ちに寄り添えているとは到底言い難いと感じてしまう。それが、B2 や B9 からの強い団体への反発になっていることを自覚すべきであろう。今のままでは、団体の政治的なイデオロギーに C2 が都合よく利用されているように感じてしまう。これでは結局、PAPS や HRN が、被害者救済の美名の下に、C2 が否定する悪質な事務所と同じように彼女の自己決定だからといって、C2 の「自傷的存在証明」を敢えて容認しているのではないかと懸念せざるを得ないのである。

事実、C2-91「……私にとってあんまないかなー,,,」のナラティブが示す通り、PAPS も HRN も、彼女にとっての居場所になっていない(※C-2-⑮参照)。当事者が居心地の悪い社会活動は、エンパワーメントの手段として適切ではないはずだ。ストレングス・モデルに基づくエンパワーメント・アプローチとして、社会悪を告発する活動自体はあっていい。だが、彼女がそのアプローチに相応しい女性か、或いは、今の活動が本当にエンパワーメント・アプローチの原則を満たしているのか、渦中にある本人ではなく、周囲の専門家こそが判断すべきなのであるが、残念ながらそれは十分にできていないと感じる。C2-93「うん、ボランティア活動でアロマ教えたりもしてたし、色んな仲間と募金、被災地支援の活動してたりした時は、なんかすごく心埋めてくれたなと思ってて。人生ボランティアだなんていうふうにも思ってるんですよ。YouTube だって無料でやってることだから。でもそれはアイディア、やりたいって気持ちもあるし。ある意味そういう部分に関しては充実してるんですよ。別に何も求めてないんで。」というナラティブの最後の言葉、「別に何も求めてないんで。」には、極めて深い意味が秘められていると感じる。彼女は、確かに経済的な見返りは何も求めていない。物質的なものを欲してはいない。だが、ボランティアやお金にならない YouTuber 活動、そして今回の告発によって彼女が必死に求めているのは、他者からの「承認」であることは、これまでの分析から痛い程に明白だ。これ程までに彼女が切実に「承認」を求めている原因が、AV に出演して利用され、傷付いたからだとは思えない。そもそも、騙されて AV に出るという段階で、彼女はその「承認」の欠如と未成熟なアイデンティティを利用された訳であり、悪質な事務所に「実存的貧困」の状態に付け込まれたのである。PAPS や HRN は、そこを完全に見落としている。法を整備しようが、社会を啓発しようが、「実存的貧困」状態の女性を社会に放置すれば、仮に AV を根絶させても、彼女達は何らかの別的手段で「自傷的存在証明」を行ってしまう。それに気付かない限り、この運動の先に未来は無いし、寧ろ B2 や B9 のように今後も無自覚に性風俗に携わる女性達を傷付けて行くであろう。その中に、何時か C2

が含まれてしまわないことを祈ってやまない。

(3) C2 が、AV に「承認」を求めて騙され、傷付けられた一方で、見事にそれを使って人生を再生させ、社会からの「承認」を、そして自分で自分を「承認」できるストレングスを手に入れたのが、レジェンド AV 女優の C1 である。彼女は、今回のインフォーマントの中で、最も精神保健の状態が良好な女性の 1 人である。比較群 (F 群) として、同じように他者から「承認」される本物の芸能人やアイドル (元・現役含む) にも 7 人から協力してもらい、同じ心理検査を行ったのであるが、「生きがい感スケール」において、彼女達本物の芸能人を超える心理尺度の結果を示しているのは特筆すべきである。だが、彼女もまた、他の AV 女優達と同じで、壮絶な過去を持つ。決して、今の彼女に辿り着く道筋は平坦ではなく、数多の艱難辛苦を乗り越えた結果が今であることは十分に強調しておきたい。

まずは、C1 の置かれた家庭環境の酷さを示す箇所を、以下に引用する。彼女が援助交際をしたのは 13 歳の時で、今回のインフォーマントの中では最も早熟である。性的に早熟というのは、性風俗産業に従事する女性に概ね共通することであるが、それでも援助交際が 13 歳というのは、最も早いケースだ。小学生の頃から髪を染め、ピアスを開け、ランドセルを背負わずにリュックを背負い、ミニスカートを履いて学校に行くという彼女のギャルマインドは、既にこの時点で相当な「実存的貧困」或いは「絶望的貧困」状態にあることを示している。14 歳では年齢を詐称してイメージクラブで働いているが、これも今回のインフォーマントの中では、性風俗の世界入りした年齢としては最年少である。その店の利用者にヤクザ等が多くて客層が悪く、中学生の彼女は恐怖を感じたので、やはり年齢を詐称したままスナックに移動するのである。

C1-36「そう。そんなわたし◆◆育ちなんだけど、◆◆の時はけっこうまあ悪い友達だったり、えっと、先輩だとか仲良い人たちがいて、で、恋人もいたんですけどそれから離れ離れになっちゃって、ポツーンみたいな。そんな時すごいさみしいなあとかつらいなあとかって思ってた。」と語る C1 の幼少時の心象風景は、常に「孤独」なのである。何故ならば、彼女は再婚後の継父と折り合いが悪く、実家に全く居場所がなかったのである。従って、C1-36:「恋人もいたんですけどそれから離れ離れになっちゃって、ポツーンみたいな。そんな時すごいさみしいなあとかつらいなあとかって思ってた。」と語るように、転校によって彼女は文字通り、独りぼっちになってしまったのだ (※C-2-⑩参照)。

母親は水商売に従事していて身持ちが悪く、何時も男性の影があり、家には知らない男が常に入り浸っていた。母親と男性のセックスを目撃したことは子供の頃から何度もある。継父との再婚後は継父から身体的な虐待が始まり、虐待から逃げて実の父を求めて会いに行ったところ、その父親も実は血縁関係に無いことが判明する。彼女にとって、家族というものは最初から壊れた存在なのである。今でも彼女の本当の父親は、誰か分からないのだ。母親と継父を軽蔑しながらも、結局は虐待による愛着障害から彼女も母親と同じように男性に強く依存し、中学生の段階で早くも妊娠・中絶を経験してしまう。外傷体験の酷さが新たな外傷体験を招くという負の連鎖に囚われている C1 は、典型的な児童虐待のサバイバーなのだ。幼少期より「経済

的貧困」のどん底にいて、心理的・身体的・性的・育児放棄（ネグレクト）の全ての被害を受けた。これ程の境遇で、彼女が児童相談所に保護されなかったことが、寧ろ不可解な程である。

『「生存者」と呼ばれる子どもたち 児童虐待を生き抜いて』は、児童心理治療施設（旧・情緒障害児短期治療施設）で児童精神科医として勤務する宮田雄吾（2014）が長崎県の「大村椿の森学園」で経験したことを記したもののだが、この本のプロローグで描かれる少女は、ほぼ当時の C1 そのものである。

セックスでしか生を確認できない女の子

カルテを前にして、われわれは思わずため息をついてしまった。

「宮田先生……。この子、よくまあこんな状態で、今日まで生きてこられましたねえ……」

副園長・中島喜伸が言った。

「ほんと……。生きてるのが奇跡みたい……」

主任指導員の鳥羽瀬康子もうなずく。私が2人に見せたカルテとは、来月から私たちの情緒障害児短期治療施設（情短）「大村椿の森学園」に入所してくる十五歳の女の子のものである。そこに書かれていたのは、その子の凄まじい過去と、悲惨な生活環境だった。風俗店の経営者だった彼女の父は、彼女が生まれる前から妻に対してDV（ドメスティック・バイオレンス＝家庭内暴力）を繰り返していた。たまりかねた妻は、子どもが四歳の時に夫と子どもを捨て失踪。未だに行方は分からない。妻に逃げられたのち父は、今度は幼い我が子に暴力をふるうようになる。さらに、家に頻繁に女連れ込み、我が子の目の前でも平気でセックスをしていたという。

やがて父は家にはほとんど寄りつかなくなった。たまに帰ってくるときは暴力かセックスで食べるものもろくに与えられない。そして何人もの風俗嬢を使っている父は、幼い頃から彼女に繰り返しこう言った。

「女の価値は、使えるか使えないかや。使えない女は、生きている意味なんかあらへん」

やがてこの子は、小学校高学年の頃から援助交際を始め、自分の体の対価として見も知らぬ大人の男から金銭を得るようになる。（中略）

「この子、自分はこの世の中にいない人間なんだと思っているんでしょうね……」

鳥羽瀬がぼつんと呟いた。

「うん、そうやろうね。それと同時に、自分の生を確かめたいために援助交際を繰り返すんやろうな」

そう。肌を合わせるときは、男は女を殴ったりはしないし、そのときばかりは優しく甘い言葉をかけたりもする。わずか十代そこそこで、この子はそんな男の心理を読み取っているのだ。とはいえそこには、とんでもないリスクも伴う。（宮田 2014：4）

児童虐待のサバイバーが、愛着障害を抱えて自傷的な問題行動を繰り返すのは、児童精神医学の常識である。C1 が、癒しを求めて性風俗の世界に辿り着くのはある意味必然なのであるが、実はその前に彼女は新聞配達やガソリンスタンドのアルバイトなど、昼の仕事に就こうとしている。結局、未成年ということと、派手な身なりのせいで実現しないのであるが、彼女が「働くこと」で社会からの「承認」を得ようと人生の早期から模索していたことが伺える。そして、その「承認」の方向性として、AV という世界は、彼女の人生のかなり早期から選択肢として存在していた。C1-45「そう。だからもうムカつくと思って、絶対こう、見返してやるみたいな感じで、だから最初はお金のつもりだったけども、ゆくゆくに、あの、なんていうの、絶対 AV 女優で絶対成功、もう絶対成功するって、有名になるんだ、って強い気持ちで、なってたって感じ。もう、日本中の男性に、C1 って女の存在を知って欲しいって本気で思ったの。」という彼女の決意は、レジェンド女優のそれに相応しいと言えるだろう（※C-2-⑰参照）。

第 1 章で、「子供の頃風俗嬢になりたいという女の子はいません」という中村の言葉を引用したが、彼女は風俗嬢どころか、C1-41「じゃあわたし AV 女優になるね将来」と当時の恋人に誓った女性である。虐待サバイバーである彼女に、普通の女の子の感覚は無い。そして、18 歳で念願の AV 女優デビューを果たすのであるが、最初は酷い屈辱を味わったのである。「承認」されるために AV 業界に入ったはずなのに、そこで今までの人生よりも更に酷い「非承認」を味わったのだ。普通の女性であれば、ここで心が壊れてしまっても何もおかしくない。だが、彼女は不屈の女性だった。C1-45 の誓いを立て、それを最終的には実現させたのである。「もう、日本中の男性に、C1 って女の存在を知って欲しいって本気で思ったの。」という誓いの言葉が、彼女の「自傷的存在証明」の原点なのである。

無論、C1 のような虐待サバイバーが、簡単に過去を乗り越えることなどできない。だが、彼女は性風俗産業に従事しながら、自らの居場所を探し、そこで確かな「承認」を得ることで、家族から得られなかった承認欲求を満たし、過去のトラウマを乗り越えたのである。C1-56「あるある。たとえばまあ、離婚したことはどうでもいいんだけど、まあ再婚して知らない人がお父さんに急になっちゃったりとか、『お父さんって呼べ!』とかって胸倉つかまれたりとかさ、自分の居場所がなんせなかった。学校にも居場所がない、家にも居場所がない、っていうのはさ、多感な時期とかすごい悩んだし、あとはまあやっぱ仕事が上手いかわからない、友達ともなんか上手いかわからない、彼氏も上手いかわからない、八方塞がりになって、ああもうわたしはどうしたらいいんだとかね。病みまくってた時もあった。まあでもそれでもやっぱ生きるしかないしねえ。死にたい死にたいってこう、苦しんだ時もあったけどでもやっぱ結局死ねないんだから生きるしかないし。はあ。」という彼女のナラティブには、ある種の諦観が表れている（※C-2-⑱参照）。

彼女が、いかに絶望的な思いで多感な時期を生きていたかを示した、「病みまくってた時もあった。まあでもそれでもやっぱ生きるしかないしねえ。死にたい死にたいってこう、苦しんだ時もあったけどでもやっぱ結局死ねないんだから生きるしかないし。はあ。」という箇所には、同じ専属女優の B4 の B4-222「(笑)

でもさー，そうになったらもうねー，相手に迷惑かかるから．だから『死にてーなー』って思いながら毎日生きてるって感じ．」というナラティブに通じるものがある．奇しくも，2人は同じ時代に同じ◇◇に生きていたのである．両親の離婚による虐待的な家庭環境も同じであり，寧ろ，B4以上に劣悪な家庭環境の下，自暴自棄に生きていたC1の人生は，B4よりも更に酷い「実存的貧困」状態に彼女を導いても何もおかしくはなかったのである．だが，彼女は救われたのだ．C2の人生を破壊し，B4の人生を救ってくれなかったAV産業において，C1は見事に自己実現を手に入れ，完全に人生を立て直した．C1と他の2人を隔てたのは一体何なのか．大きな要因の一つは，「恵比寿マスカッツ」の存在である．

「恵比寿マスカッツ」は，日本のAV女優やグラビアアイドル・モデルなどの多業種のタレントで構成された女性アイドルグループである．2008年4月，テレビ東京の深夜バラエティ番組『おねがい!マスカット』レギュラーで結成された．後番組『おねだり!!マスカット』より2期生・3期生が参加し，続いて『ちょいとマスカット!』で4期生，さらに『おねだりマスカット DX!』では5期生・6期生，『おねだりマスカット SP!』では7期生・8期生・9期生が参加する等，頻繁に卒業，新規加入，復帰等のメンバーチェンジを繰り返しながらも2013年4月7日まで引継がれた．C1は，その中の○期生である．

2013年に一旦解散したが，二代目に当たる「恵比寿★マスカッツ」が2015年に再結成されており，更に2017年以降は，「恵比寿マスカッツ 1.5」として新グループとして改変され，現在も台湾に進出してライブを行うなど，国内外で幅広く人気を博している．日本中の男性に自分という存在を知ってもらいたいと願うC1にとって，テレビ番組に出演して，深夜帯とはいえ地上波で毎週全国放送された経験は，大きな誇りになったであろう．C1－74「楽しかったあー．最初は大変だったけどね，やっぱ，15曲，ま，とはいえ15曲だけどさ，いきなりこう，ダンスを覚えなきゃいけないとか，あの，人間関係とかさ．最初はちょっと馴染むのにやっぱ大変だったよね．だけどすぐもう，溶け込んで，みんなもC1ちゃんC1ちゃんって言うようになるって．うん，まあホント大変だったけどね．」というナラティブには，C1が心からその活動を楽しんでいたことが良く表れている(※C-2-⑩参照)．実際，彼女のモチベーションは，お金ではなかった．それは，C1－75「いやいや，だって，5,000円しかギャラもらえないし，ライブやったって何したって10,000円，まあ10,000円とかだったのね．でもまあ，金銭的に大変だったっていうのもあるけども，もうそれ以上に責任感だったり，得た満足度は高い．」というナラティブからも明らかだ．彼女は「恵比寿マスカッツ」に金銭的な見返りを求めている．だが，高額なギャラを貰えるAV女優以上の満足感をそこから得ている．それは，「女性アイドル」，「芸能人」という誇りである．確かに，同じ女性アイドルでも，普通の清純派アイドルとは違う目で見られる色物的な存在であろう．それでも，「恵比寿マスカッツ」は，従来のAVの世界の頂きを変えた．専属女優が頂点だったヒエラルキーの上に，もう一階層，「恵比寿マスカッツ」メンバー，という最上級階層を生み出したのである．そこに選ばれるかどうか，というのは，AV女優としての大きなステータスになったことは間違いない．更に，「恵比寿マスカッツ」は，AV産業の広告塔としての役割も果たした．その点は，B4もB4－313「やっぱそうだねー，，，一つの駒だと思うのよ，AV女優って．業界を発展

させるとかさー. 今だったらマスカッツとかもさ, あるけどさー。」と指摘している. 事実, 「恵比寿マスカッツ」が AV という反グレやヤクザ等の反社会的勢力が背後に存在するアンダーグラウンドな世界に近いものを, 普通の若者達にとって身近なものにさせ, 女性に対しても AV 女優の魅力を訴えかけて行く大きな役割を果たした. グループの第二期である「恵比寿★マスカッツ」のリーダーを務めた明日花キララは, 2018 年に女性ファッション誌の『S Cawaii!』で実施された『整形してなりたい顔ランキング』では若手女優やモデルといった女性芸能人を抑え 1 位を獲得した. 彼女は, 今やアダルトジャンルを超えた人気を持ち, SNS の Instagram のフォロワー数は, 現在 196 万人である (2019 年 10 月現在). Twitter のフォロワー数も 146 万人 (2019 年 10 月現在) と, 同世代の普通の女性芸能人を遥かに超える知名度と, 絶大なる人気を誇っている. この「恵比寿マスカッツ」の主力メンバーとして, 確固たる地位を築き, テレビにおいて数々の爪痕を残した C1 は, その後押しも押されもせぬトップ女優へと申し上がっていく. そしてそれは, 決して誰にでもできることではないのである. 彼女が言うような, タイミングが良かった, という運の問題でもない. 明らかに, C1 のハイパー・メリトクラシー型能力が, 当意即妙なやり取りが要求されるテレビのバラエティ番組の場で, いかんなく発揮されたのである. B8 と同じ, 地域の最底辺高校出身の彼女は, 近代社会で有効なメリトクラシー型能力では著しく劣ってしまうのだが, 新自由主義のポストモダン社会において高く評価されるハイパー・メリトクラシー型能力においては, 圧倒的に秀でているのである. それが, 彼女をして今も専属女優たらしめている理由であり, B4 との運命を, 致命的に分けたものである.

B4 は, ほぼ同じ時期に引退した同じ事務所の AV 女優に「恵比寿マスカッツ」を初期から支えた主要メンバーがいた. 彼女が盛大な引退ライブを「恵比寿マスカッツ」の歴代メンバーと一緒にに行っている時期に, ひっそりと長年 B4 を支えてくれた 40 数名のファン達と最後のファンミーティングを行っている. B4-313 「やっぱそうだねー,, , 一つの駒だと思うのよ, AV 女優って. 業界を発展させるとかさー. 今だったらマスカッツとかもさ, あるけどさー。」というナラティブには, 同じ事務所の二枚看板でありながら, 片方は「選ばれし者」の道を歩み, 自分はそこに選ばれなかったことに対して, 内心忸怩たる思いがあったのではないだろうか. だが, 彼女が選ばれなかったのは, 必然なのである.

既に前項で指摘したが, B4 は, ファンを大切にできなかった. いや, 裏表のない性格の B4 ならば, 自分はファンを大切にしたい, と言うに違いないので, 少し言い方を変えよう. B4 は, 新自由主義における効果的なファンの活用方法に気付かなかった. 3 枚 DVD を買うファンも 1 枚 DVD を買うファンも等しく同じ価値という B4 の考え方は, 1 人の人間としてファンを見た場合は寧ろ正しい扱いである. 差別をしない姿勢は彼女の優れた人柄を示している. だが, 区別をしない姿勢は, 「新自由主義に適応した企^{アントレプレヌール}業家であり, 自己を可塑的に変化させる^{エージェン}経済主体=行為者^ト」としては間違っているのである. AV 女優をもう一つ上の次元に押し上げるのは, 事務所の力関係+ファンの後押しだ. 「恵比寿マスカッツ」が AV 産業の広告塔である以上, そこにファンの少ない女優はいらないのだ. そして, B4 の事務所にはそこに所属女優を送り込める力があつた. その力を有効に活用できなかったのは, やはり B4 のハイパー・メリトクラシー型の能力不足

に帰結する。一方、C1は、B4と全く異なる視点でファンと触れ合っている。C1-84「うん、楽しい、すごい楽しい。あの、ホント仲良い人たちはLINEの交換もしてるし、で、別にあの将来っていうか、まあ自分がどう、結婚するなり独身なりなんかわかんないけど、将来も含めファンのの人たちと関係が続けていきたいってわたしは思う。なんだろうね、別にそれはわたしにとっては自然なことっていうか。」と彼女は公私に渡ってファンと交流していることを隠さない。また、筆者がB4から聞いたイベント時のギャラの安さを指摘すると、C1-87「それはおかしいと思うけど、やってらんねえなあって思うけど、でもまあそれはワンバックというか、もうね、一本いくらでそれがイベントもコミコミですよってなっちゃったらもうやだけどやるしかないし、だからあの、その場になったらもうそんなこといちいち考えないで楽しめばいいんだって思うけどね、わたしは。」と答えるのである。ネガティブなB4の考え方と比べると、嫌なイベントも楽しみに変えることができるC1のポジティブな考え方は、新自由主義の「勝ち組」であるB8のマインドにも近い（※C-2-⑩参照）。

C1-86「ああ、わかるわかる。それはわかる。」とC1もB4の思いに一応共感をする。だが、そこからの対応が違うのだ。イベント一日で2万円か、正直かったるいなあ、と思いながらファンと触れ合うB4と、いちいち考えないでその瞬間瞬間を楽しむC1では、ファンの側の好感度がまるで違う。ファンとLINEを交換するなどというのは、本来事務所として絶対にNGだろう。事務所を通さずにファンが私的にC1と交流をしていたりすれば、女優の管理がきちんとできていないことになり、他の所属女優に対してもまるで示しがつかなくなる。だが、彼女はそのくらいファンを大切に扱っているのだ。当然、私的なLINEのやり取りも出てくるだろうが、C1はそれすらも苦にしないのである。

A群の女性達の会話分析において、容貌が十分に美しいにもかかわらず、キャバクラの世界で通用しなかった女性達は、おしなべてそのような客との私的なメールのやりとりを負担に感じており、業務時間外にも客と関りを持たなければならない煩雑さを嫌がっていたことを指摘した。これはつまり、ハイパー・メリトクラシー型能力が欠けていることを意味する。その点で、C1は、実は非常にキャバクラに向いている。そして実際にC1は、A3と同じ六本木の有名店で最も高給取りのキャバクラ嬢の顔も持っているのである。A3の時給9,000円と、C1の時給30,000円は、容貌の格差が生んだものではない。年齢が30歳を超えたC1と23歳のA3を比較すれば、本来若い女性を好むキャバクラの客の大多数は、A3の方が容貌的には美しいと判断するであろう。だが、実際に指名を取れるのは、圧倒的にC1なのである。そこには、ハイパー・メリトクラシー型能力に基づく「人間力」の格差が存在する。B4との間にも厳然と存在するその人間力の格差が、ほぼ同じ時代、同じ場所で児童虐待の被害者として育ち、そのトラウマを克服すべく「承認」を求めて専属AV女優の道を選んだ2人の女性の運命を残酷なまでに分けたのである。その意味で、C1は、セックスワーカーを自認するB8、B9以上に、「新自由主義に適応した^{アントレプレヌール}企業家であり、自己を可塑的に変化させる^{エージェント}経済主体＝行為者」なのだ。実際彼女は、キャバクラ、スナック、イメージクラブ、セクキャバ、AV女優、テレビタレントと様々な業態の性風俗の仕事に関わり、全ての業態でトップクラスに登りつめた稀有な

存在である。だが、決してこれは単なる偶然ではなく、彼女の自己を可塑的に変化させる柔軟な人間力の賜物なのである。家にも居場所が無い、学校にも居場所が無い、と苦しみ、死にたいと思っていた C1 は、AV 産業に関わり、「恵比寿マスカッツ」のメンバーとして業界に漸く居場所を見つけたことで、人生が変わった。いや、その居場所を起点にして、彼女が独力で人生を切り開いたと言っても過言では無い。だが、C1 が余すことなく自らのエージェンシーを発揮でき、自己実現を可能にした世界は、少なくとも B4 にとってはそうではなかった。同じく、これから検討する他の AV 女優達にとっても、そうではなかった。結論から言えば、C1 は、ハイパー・メリトクラシー型能力に秀で、他の女性達はそうではなかった。従って、残念ながら、他の女性達は、新自由主義に限なく行き渡った社会において、恐らくどこでも居場所を見つけられず、輝くことはこれからも難しいと思われる。B4、C1 と同様に虐待的な環境で生育し、長じてのち専属 AV 女優となったもう 1 人の女性・C3 の人生を次に検討する。

(4) C1 の壮絶な家庭環境を先に検討したが、C3 の置かれていた環境は、それに勝るとも劣らない劣悪な状態である。少し長くなるが、C3 が家庭環境について説明したナラティブを下記に引用する。C1 の状況に対して児童相談所が関わらなかったのが不思議であるが、C3 の場合もやはり児童相談所に通報されていない。C3 は虐待が長期に渡っている分、一層酷い状況と言えるかもしれない。

原田 63：家庭環境が悪かったっていうのはどういうこと？

C3－63：家庭環境はわたしがほんと小さい時に離婚してて、お父さんが引き取って、引き取っておじいちゃんおばあちゃんと暮らしてて、んでわたしが小学校に上がると同時に再婚して、再婚相手が子連れで 2 人いて、わたしと同年と 1 個上の子。で、まあ 1 年くらいは仲良くやってたけど結局 1 年くらいしてお父さんが仕事が上手くいかなくなって、帰ってこなく、借金まみれになって、で結局母はわたしに当たるようになって、で 5 年間ずっと虐待されてて、ま、結局根性焼きの跡とか、いろいろあったから、◇◇の方には、あ、おじいちゃんおばあちゃんの方にたまに帰って来れる時があって、そういう時に何なの？この傷、みたいになって、最初は怖いから嘔吐いてて、まあ結局ばれて。

原田 64：え、それお母さんが根性焼きするわけ？

C3－64：そうそうそうそう。根性焼きとかなんか、傷、なんて言うんだろ、ガラスの破片とかで切られたりとか、まあ殴る蹴る当たり前。ご飯も食べれない、とか。

原田 65：暴言も吐かれた？

C3－65：暴言も普通に。うん。とか、まあいろいろそういうのがあって、まあそれで小学校 5 年生の時にまたおじいちゃんおばあちゃんのところに戻れて、まあそこからは、うん。そこからはそう、おじいちゃんおばあちゃんが育ててくれたけど、結局、なんか従姉が近くに住んでるん

ですよ。7歳くらい離れてる従姉。で、その人は結構ヤンキー、ヤンキー気質で、もう10代の頃に子供産んで、もともとやんちゃだったけど子供産んでから超更生したタイプなのね。若いママ、みたいな。その人がすごいうるさくて、あんたなんか幸せ者だよ、みたいな。ちなみにこっちの、その従姉の方は親は、えーと、お父さんはニートで酒飲みで、みたいな。だからお母さんが毎日働いて養うみたいな。超貧乏家庭で育ってるから、あんたは虐待されててかわいそうだったけど、おじいちゃんおばあちゃんが育ててくれてるんだからもっと有難く思いなさい、みたいな。そういう言い方をされてて、ま、確かにそうなんだけど、施設とかに入れられなかったことは有難いとは思うんだけど、幼いころにそういう言われ方をされたら、わたし的には、普通子供ってそういう、有難いとかって思うものじゃないじゃんみたいな。普通無償の愛を受けるもので。

原田 66：その通りだよ。

C3-66：そう。っていう上からの圧力みたいなのを、をすごいずーっと抱えてて、ま、そういうストレスがあったんだけど。

原田 67：その従姉のことは嫌いだったんだ？

C3-67：嫌い、ちょー嫌いだった。

原田 68：ウザいと思った？

C3-68：うん。今でも好きではないかな。あ、そう、で、プラス中学校？ん？それも嫌な記憶すぎて覚えてないんだけど、たぶんまだ処女を失う前に従姉の旦那にやられかけそうになって。

(中略)

原田 74：児童相談所とか何もしてくれなかったの？虐待受けてる時に。

C3-74：ああ、虐待受けてる時は学校の先生とかはやっぱ気づいてるんだけど、言えなかった。わたしがイエスって言わないから。転んだだけです、って言うから。それ以上踏み込めない。

原田 75：じゃあ児相に通報とかはされてないんだ。

C3-75：そうそう。

原田 76：冷たいね、なんかそんな、確認しなくても普通は通報するもんだと思うけど。言えるわけじゃないじゃんね、子供がね。自分の口から。

C3-76：そう。やっぱね、別に言えばよかったのに、子供だとね、怖い、またやられちゃう、みたいな気持ちが優先しちゃうから。

(中略)

C3-89：でお父さんも捕まってたし。

原田 90：え、捕まったってなんで？

C3-90：んー、詳しいことはわかんないけど、たぶん6年間くらいいなかったから。

原田 91：それは刑務所に入ってたってこと？

C3-91: そうそう. たぶん, 覚せい剤だと思う.

(中略)

C3-100: たぶん, わたしが特殊だったっていうのもあるんだけど, 従姉がいるって言ったじゃないですか. 従姉と遊ぶことが多くて, 従姉がそういうちょっと悪い系の人だから, 家に行くとそういう系のマンガがいっぱい置いてあるんですよ. ちょっとそういう風俗関連に関するマンガ, 例えば今で言うとうしじまくんとか. そういうアンダーグラウンドみたいな世界の描かれてるマンガがいっぱいあって, あとエロ本とかも普通に置いてあって, ちょっとその従姉のお父さんも家族がいる前で AV を見る, みたいな.

原田 101: 家族がいる前で見るの?

C3-101: そう. 頭おかしい.

原田 102: 頭おかしいよね.

C3-102: そうそう. 酒飲みながら AV つけてたりとか, そういうのが普通な環境だったから.

原田 103: ちょっと待って, 家族がいる前でってことは, その従姉と従姉の旦那さんという状況で?

C3-103: あ, 従姉の旦那はその時はいなかったけど従姉とわたしと, えーと, 奥さん.

原田 104: 女の子が 3 人もいる状況で AV を見るの?

C3-104: そう.

原田 105: それセクハラじゃないの? 3 人に対する. 奥さんとか大丈夫なの? それ.

C3-105: いや, もうね, そういう普通の家庭じゃないから. うん. 別に見て見ぬふりみたいな.

原田 106: 従姉とかも気にしないみたいな?

C3-106: そうそう.

原田 107: お父さん止めてみたいなの言わないの?

C3-107: ぜんぜん, だってもう, 自分の子供もいるし. うん. なんかね, そういう家庭じゃないんですよ.

原田 108: なんかちょっと異常な家庭な気がするよね.

C3-108: そうそう.

(中略)

C3-114: うん. でもなんか継母も筆笥の中を見てたら, 継母の真っ裸で撮った写真が額縁に入ってるやつがあって. だから今思い返すと, その継母もなんかそういう夜の仕事してたんじゃないかと.

原田 115: なるほどね. 風俗系の継母だったんだ.

C3-115: かもしれない.

C1 も酷い状況だったが、C3 は両親に加えて、従妹の家庭まで含めて虐待的である分更に逃げ場が無い。親族が皆で C3 を心理的・身体的・性的虐待をしているような状況である。当然、継母からの育児放棄もあるのであるが、父親の方は、更に 6 年間刑務所に入っていて長期間不在であった。この家庭環境で、普通の価値観を持って成育することは絶対に不可能である。鈴木『家のない少女たち 10 代家出少女 18 人の壮絶な性と生』や『援デリの少女たち』といったルポルタージュでさえ、C3 レベルの虐待状態はなかなかないのではないかと、思われるほど劣悪な環境である。その結果、当たり前であるが、彼女の愛着システムは根源的に破壊されている。幸福を感じさせるオキシトシンなど正常に分泌されるはずもない。従って彼女は、C3-138「生きてて楽しいと思った瞬間？」、C3-139「ない。」とさも当然のように語るのだ（※C-2-②参照）。

「実存的貧困」状態の根底には虐待等による「内的作業モデル」の欠損がある場合が多いと第 1 章において指摘したが、C3 の「内的作業モデル」は完全に機能不全に陥っている。生きていて楽しいと思った瞬間が無いと躊躇なく答える C3 の「実存的貧困」の深さは、今回のインフォーマントの中でも屈指である。彼女は、人生において「重要な他者」から愛された経験がただの一度も無い。結果的に、彼女は人を普通に愛することができないのである。理由は無論、C3-65 のナラティブで本人が「わたし的には、普通子供ってそういう、有難いとかって思うものじゃないじゃんみたいな。普通無償の愛を受けるもので。」と指摘しているように、無償の愛というものを知らないからである。単に虐待されただけでなく、従妹も継母も従妹の母も風俗嬢という性的に異常な環境下で生育した結果、C3 は、B3 と同じように、地元でヤリマンとして有名な存在になる。虐待の連鎖に加えて、風俗嬢の連鎖が生まれているが、鈴木が『最貧困女子』で指摘しているように、貧困地域では、その地区に生まれ育つ「アンダークラス」の女性がほぼ風俗嬢という状態が起こり得る。B4, C1, C3 が全員同じ地域の同じ地区出身というのは、恐らく偶然ではない。先輩の小遣い稼ぎで援助交際を強要された少女達は、自分が先輩になった時、同じように小遣い稼ぎで後輩に援助交際を強要する。そして、その先輩達はやがて精神疾患を抱えたシングルマザーの生活保護受給者となり、古びた公営住宅の一角に集団で住むのである。そこに生まれ落ち、そこで同じように育てられる限り、彼女達の人生には結局親世代の負の遺産が相続され、親世代の不幸の再生産がそこで何度も繰り返される。Lewis が「貧困の文化」と呼んだものは、間違い無く存在する。それはその人たちが文化的に劣等であるとか、人種的に劣っているとかいう優生思想に繋がる話ではない。ただ単に、貧困には人間の可能性を奪い、思考力を麻痺させ、尊厳を剥奪する恐ろしい力があるということを指摘したいのだ。そして、虐待が連鎖するように、貧困は連鎖するということを改めて強調したいのである。無論厄介なのは、「経済的貧困」の連鎖ではない。単にそれだけの問題ならば、それは生活保護に代わるスティグマを伴わない金銭給付によって、理論上克服可能だ。昨今欧州で導入の研究が始まったベーシックインカムは、その可能性を秘めている。だが、ベーシックインカムでは絶対に克服できないのが、「実存的貧困」の連鎖である。Honneth の三つの「承認」のうち、

法の領域と連帯の領域は、ベーシックインカムによって解決できても、愛の領域における「承認」は、結局「重要な他者」を通してしか手に入らないからだ。それを幼少期から致命的に欠いたままの女性達は常に男性に依存し、肉体関係を持った性愛の関係無しで人を愛することができないのである。C3-129「え、なんかヤリマンってめっちゃ言われてた.」, C3-130「んー. うん. 男の人から、あのなんだろう、んー、嬉しかったというか、あのね、違う、その時は若かったから、やる人はみんな好きなんですよ、わたしからしたら.」というナラティブがまさにその状態を物語っている（※C-2-②参照）。

C3は、前章で取りあげたB3と全く同じことを言っている。2人とも地元ではヤリマンと呼ばれる存在だが、本人達には、その自覚がないのである。あくまで、周囲からヤリマンという外部評価を受けて、最終的にはそれを自覚して受け入れるのであるが、本人達はさほど自分が特別だと思っていない。何故こんなに恋愛の関係構築にずれがあるのかというと、やはり愛着形成の障害によって、愛する人、愛さない人の区別が適切にできず、些細な好意であっても、寄せられれば真剣に受け止めてしまい、そして大概是恋愛関係に発展するのだ。そして、その恋愛関係には十中八九性的関係が瞬く間に付随してくるのである。本人達は、この段階では純愛をしている感覚である。

C3-130「んー. うん. 男の人から、あのなんだろう、んー、嬉しかったというか、あのね、違う、その時は若かったから、やる人はみんな好きなんですよ、わたしからしたら.」と、B3-286「好きじゃなかったんだけど、相手が『好きだよ』って言ってきたりするじゃん。それ信じてヤルじゃん。でそうするとヤリ捨てされる、ってパターンが多くて、てかほとんどがそれでいつの間にか.」, B3-289「うん. セックス自体はどうでも良いんだよ。ただ相手が『好き』っていうのが本当だと思ってるから許しちゃう.」という2人のナラティブは、決して2人が遊びで男性とセックスをしていないことを示している。2人共、ただ単に男性からの力強い「承認」を求めているだけなのだ。ただ、彼女達は、性行為への敷居が異常に低い。だがそれは、虐待された子供の特徴なのであり、彼女達の壊れた「自己」に「自己責任論」を押し付けるのは、やはり酷な話である。

そのようなC3は、当然のように性風俗の世界に足を踏み入れるのだが、その際、彼女はやはりキラキラした世界に対して憧れを抱いているのである。C3-51「んー、まあ、当時『恵比寿マスカッツ』がガーンって流行った時でもあったし、まあ後はもともとそういうのになんか、そういう世界が好きだったからやりたかったっていうのと、あとそうだ、わたし歌手になりたかったんですよ.」というナラティブから、「恵比寿マスカッツ」がやはり若い女性達の間で、憧れの存在として認知されていることが分かる（※C-2-④参照）。従って、C2が実現できなかった歌うアイドルは、C6が指摘するように、決して「なくはない」話なのである。明日花キララのように、100万人を超えるフォロワーを持つインフルエンサーになるチャンスは、確かにAV業界の中にある。ただ、それは万人が目指せるものではないし、恐らく明日花キララが芸能人として輝いていられる時間もさほど長くはあるまい。そのように、短期間だけの魔法だと割り切れれば、ハードルが高い芸能界への入口として、「恵比寿マスカッツ」を利用するのは賢明な選択なのかもしれない。確かに、その

先を見据えた時、「恵比寿マスカッツ」出身では、芸能界においても活躍の場は限られるだろう。だが、他の普通の芸能人も息の長い活躍ができるのは一握りだとすると、「恵比寿マスカッツ」を入口に芸能界に入るのも、厳しいオーディションを勝ち上がって芸能界に入るのも実は結果に大差はないのかもしれない。

だが、C3は結局、専属女優としてAVデビューしたものの、大成功と呼べる結果は出せなかった。二度、専属AV女優の契約を取り付けたが、結局2回とも契約を更新できずに終わってしまった。AV女優としては、さして大きな業績を残すことができずに、彼女は風俗嬢に戻ることになる。一方で、C3は風俗嬢としては、非凡な才能を発揮した。C3-61「みんなに必要とされてることにたぶん味を占めてしまった」と指摘するように、18歳のC3は、デリヘルに人生で最初の居場所を見つけたのである。うつ病を発症しているにもかかわらず、そこでナンバー1を目指して連日連夜出勤を繰り返した。それほど彼女は、人間としての「承認」をそこで実感することができたのである。

C3-124「うん。嬉しかったっていうか、なんか何かたぶん満たされたんでしょうね。」とC3は素直にその時の「承認」の喜びを語る。それに対して、「性の商品化」として、物象化された女性の体が求められていることと、人間として彼女が求められることは違うのではないか、という筆者からの指摘に対しても、C3-127「うん。もうね、わかってるけどもうそこしか、なんて言うんだろ、満たされるものがなかったから。んー。わかってはいたと思う。」と、それでも男性に求められることは、彼女にとってはかけがえの無い「承認」であったことを認めるのである（※C-2-②参照）。これは、A7と全く同じ感覚である。そして、彼女もまた、男性を求めるようになっていく。男性に必要とされることに執着する余り、所謂ヒモのような男性を彼氏として選択していく。この辺りの自傷性は、B4が前項で解説しているが、好条件の男性は彼女達の「承認」の感覚を満たさない。幾らでも女性に「承認」されるような好条件男性は、彼女達を見捨てて直ぐにより条件の良い女性を選ぶのではないか、或いは、自分以外にも他に女性を囲っているのではないか、という疑念を彼女達にもたらす。自尊感情が低い彼女達は、BPD特有の「見捨てられ不安」に慄き、どうしても“訳アリ”の男性を敢えて選んでしまう。私が支えてあげなければ、この人はダメかもしれない、というような男性を恋人に選択して懸命に尽くすことに、自分の存在価値を求めるのである。これもまた彼女達風俗嬢に特有の「自傷的存在証明」であり、絶対に幸せになれない選択肢なのであるが、その典型例をやはりC3の人生にも見ることができる。彼女が人生においてそれなりに長く付き合った男性は、離婚した夫も含めて全員がDV気質のヒモだ。

C3-155「DVはされなかったんだけど、もう、薬物中毒と一緒に居たらもう精神が限界になった。」と彼女は一番長く一緒にいた男性のことを表現するが、これは立派な精神的DVである（※C-2-③参照）。彼女は身体的な暴力だけをDVと認識しているのであろうが、そのくらい彼女は人生において虐待されることに慣れてしまっているのだ。薬物依存症でギャンブル依存症のDV気質のヒモの次に選んだ結婚相手も、同じくDV気質でギャンブル依存症である。そして、自分のギャンブルの損失を妻を風俗で働かせることで補填しているのである。18歳になって直ぐに風俗嬢になった彼女は、最初はナンバー1を目指して、意欲的にデ

リヘルで働いていた。彼女が昼の仕事を全く検討もしなかったのは、B3 同様に虐待のせいでうつ病だけでなく、パニック障害や不安障害など、様々な精神疾患を発症して精神保健の状態が長期的に安定しなかったせいであるが、その彼女が曲がりなりにも風俗嬢としては働くことができたのである。それは、偏に自由出勤で、働けるときに自分のペースで働けることと、全額日払いという風俗の勤務条件が彼女にとって都合が良かったからである。そしてこれは、C3 だけでなく、精神に疾患を抱えるほぼ全ての女性が、「夜」や「風」の仕事の最大の長所として指摘する点だ。だが、結局 C3 は、自分が依存する男性から DV を受けることになり、その風俗の仕事もままならなくなり、最初は「承認獲得機能」や「居場所確保機能」を果たしていたデリヘルも、徐々に「生計維持機能」しか持たなくなっていく。当然、彼女の中からもやりがい失われ、仕事はただのルーティンワークと化し、結果ナンバー1 の座も失って単なる売れない風俗労働者になっていくのである。誇りあるセックスワーカーと異なり、単なる風俗労働者の暮らしには、ほとんどエイジェンシーと呼べる要素が無い。そして彼女は今、人生の中で最も過酷な風俗労働を強いられている。原因は、ホストである。

C3-218: ま、とにかくこんなにわたしは今なんで仕事してるかっていうと、ひっくるめてホストなんですよ。

原田 219: やっぱり。

C3-219: うん。

原田 220: 正直最後にそれ聞こうと思ってたけど。

C3-220: そう。あのねえ、なんでかっていうと、18 の時に 1 回ホスト行ってるんですよ。でも 2, 3 回行って行かなくなっただけですよ。で、そっからはずっと行ってなかったけど彼氏がいなくなって、もう開放的になって、わたしやっぱイケメン好きだし、癒されたいし。でも彼氏はめんどくさいし、わたし基本ちゃんと人を好きになれないっていうのも学んだし、ホストがいいじゃんと思ってずっと行きたいって言ってたんですけどなかなか AV も忙しかったから行けなくて。で、たまたま AV がいきなり仕事入らなくなった時があって、何か月か前に。そこでめっちゃ病んじゃって、ああやっぱりわたしは誰にも必要とされないんだ、みたいな。ちょー病んで、うん。でなんかマネージャーにも一応話したことあったけど、なんか行き場がなくて。その時。そんな時にたまたまホストに、キャッチみたいなのであって 1 回行ったら、もうまんまとハマリ。

原田 221: なるほどね。そこも今、居場所になってる？君の。

C3-221: んー、居場所っていうか、もう、ほんとはずっごい抜け出したいと思ってるんだけど。うん。なんだろうわたし見栄っ張りだし、やっぱ必要とされたら嬉しいっていうのもあったり。

原田 222: ラスソン（※ラストソング。ホストクラブの最後は、その日最も売上を上げたホストが、自分を一番にしてくれた客のために歌を捧げる。店の全員の視線がホストと女性に注がれる

ため、女性にとっては非常に大きな優越感となる。)とか取りに行くタイプ？

C3-222: ラスソン. ラスソンというかね, んー, そうだね, 一番最初, まあそのホストによるけど. 結構, んー, お金使わないと意味ないと思っちゃう人だから, 無理して大金を使ってきたんですよ. ここ何か月かずっと.

原田 223: それは大金を使う自分に価値があると思えるから？

C3-223: 自分も風俗とかやってて, お金を使わないのは意味ないっていうのがわかってるから. もう全てわかって行ってるから, もうなんか, ダサいと思われたくないっていうのもあるし, やっぱり大金使ったら使っただけ良い待遇もされるし.

原田 224: ちなみにどのくらい使うの? 一晩で.

C3-224: 一晩で? あのね, 先月が一番使って 400 万.

原田 225: 月に 400 万.

C3-225: うん, ていうかそれはね, 1 日で 400 万.

ここで, C3 がホストにハマっていく過程を自ら解説しているが, 彼女の心理状態や一連のプロセスは概ねほぼ全ての女性達に共通するのではないだろうか. C3-220 で語られるように, ホストにハマる最初の切欠は孤独である. C3 は, 離婚を経てヒモのような男達の尻ぬぐい (一応, ここでも彼女は何がしかの「承認」は得ている) をするために働き続けることに疲れたのである. 1 人になり, 最も誇りとやりがいを感じる AV にも企画単体女優として, ランクは落ちたものの復帰することもできた. だが, ブランクもあり, 芸名も変わっているために, かつてのファンにも期待できない. DVD やダウンロード販売の結果が悪ければ, 一本単位で契約をする企画単体女優は直ぐに仕事にあぶれてしまう. そのような状態でまた自尊感情が下がっていた時, 彼女は癒しを求めてホストクラブに行ったのである. そして, そこで「承認」されることで, 彼女は完全にホストにハマってしまったのだ. C3-220「ああやっぱりわたしは誰にも必要とされないんだ」という状態の女性の心の隙間, すなわち「実存的貧困」状態にホストが入り込むのは簡単である. C3 が求めているのは, かつて得ることが叶わなかった無償の愛であるが, それを疑似的に与えればいいのである. ホストにとって, 本当はお金の関係が全てなのであるが, テクニックとして 1 人の風俗嬢を 1 人の人間として「承認」するのだ. 彼らは, バブル期は富裕層の年配女性を対象にしていたこともあるが, バブル崩壊後は, 明らかに若い女性, 特に孤独な女性の心に付け込む業態にシフトした. その際, 最大のターゲットとされたのは, キャバクラ嬢と風俗嬢なのである. 彼女達は, 普段から社会的排除とスティグマを実感し, パワーレスな状態に陥りがちである. かつ, 日々の感情労働で, ストレスが溜まっている. だが, それを吐き出す場所がないのである. 精神科医やカウンセラーのような立派な存在には, 彼女達は本音を言えない. 風俗で働いていることを言えば, 蔑みの目で見られることは肌感覚で分かっている. 大抵は家族にも内緒で働いている女性が多い以上, 親バレを防ぐためには, 親友であっても自分の普段の生活圏でかかわりがある人間には

愚痴すら言い難い。ここだけの話、がそうでなくなり、周囲から白眼視された経験を繰り返してきた彼女達は、基本的に仲間ですら信じられない。A2 が、キャバクラの同僚に仲間がいないと言っていたが、それは寧ろ普通である。A1 や A3 のように良好な仲間意識を確立できるコミュニケーション能力を持っている人間よりは、寧ろ A2 や A4, A6 のように、嫉妬されがちな不器用な女性達は自分から距離をとって孤独に陥り易い女性の方が遥かに多いと思われる。まして、風俗嬢であればなおさらだ。待機場所と一緒にいるとしても、キャバクラと違い、彼女達はチームで仕事をする事は無い。ということは、無理に待機場所で交友関係を築く必要がないので、ほぼ全員が携帯をいじったり音楽を聴いたりして、同じ空間に居ながらも互いに干渉することはない。ソープランドなどでは、店側が私語を厳禁にしている場合もある。それは、店によって女性に対する取り分、すなわちバック率が異なっており、特別扱いしている女性と軽視している女性の格差が会話の中で女性達にバレるのを防ぐためだ。自我が弱い女性達は、自分が少しでも店で軽視されていると感じると、簡単に退店してしまうからだ。それほど、「非承認」は、人間の心を折る。その結果、風俗嬢の苦悩は非常に深くなりがちで、吐き出したい弱音、愚痴などを存分に言える場所は、ホストクラブしかないのである。風俗で働いている、水商売で働いていることに対して、同じ仕事をしているホストが蔑むことなどない。寧ろ、そこで頑張っていることを手放しで応援する存在が彼らである。日常生活に不安が埋め込まれたポストモダン社会において、彼らが、キャバクラ嬢や風俗嬢の心の隙間を埋め、彼女達の心の支えになるのは必然なのである。そして、その心の支えを得るためには、彼女達はほぼ一日中ソープランドで働き続けることさえ厭わないのだ。

B2 は、B2-105「喋りかけないっていうのが一応暗黙のルール。女同士で仲良くしない、慣れ合わない、っていうのが暗黙のルールで。そうすると食べるしかないじゃないすか。食べるかケータイいじるか。あと、そもそも私語厳禁で貼り紙貼ってありますし。私語以外にも、お金の話厳禁、ホストの話厳禁とかも大きく貼り紙貼ってありますね。」と待機場所での規則を語っている。ソープランドで働く女性の多くはホストに対する売り掛けの返済のためと言われるため、様々な理由があるだろうが、そこでホストの会話をさせないのは、女性同士に喧嘩をさせないのが最大の理由であろう（※C-2-⑧参照）。

ホストクラブに通う常連達は、大概嫉妬からお互いに「ホスラブ」などの匿名掲示板で執拗な叩き合いを行う。B4 はホストと実際に付き合っていた時、敢えて店には余り通っていない。お店で悪目立ちして、匿名掲示板に個人情報晒されたり、誹謗中傷を受けるのが嫌だからである。ホストクラブに通い慣れると、なるべく回数を減らしてかつお金を落とすというやり方を覚えるのであるが、そうすると余り目立たなくなるため、傍目には誰がホストの「エース（※最もお金を使ってホストの成績を支えている者）」なのか分からなくなる。ホストにとってエースは自分の生命線でもあるので、明らかに公私において特別扱いするのであるが、そのエースを複数抱えているホストは当然多数存在する。女性同士がお店でバッティングしない限り、誰が本当のエースなのかは、そのホストにしか分からないからだ。そして、不幸にして女性が同じソープランドで働いており、うっかり自分がそのホストのエースだと口にしたらどうなるだろうか。仮に同じホスト

から、「お前が俺のエースだ」と言われている別の女性が待機室にいれば、一瞬で修羅場になるのが目に見える。だから、ホストの話題は厳禁なのである。水商売や風俗の世界は狭い。その場に別のエースがいなくても、その友達や、友達の友達はいるかもしれない。同じ地域で働いていれば、噂は直ぐに巡る。ホストの話厳禁と、わざわざ待機場所に禁止事項として貼り紙しなくてはならない現実から、E4 の E4-137「ソープ嬢はホス狂いばっかですよ。」という指摘が真実味を帯びてくるのである。

だが、ホストにどれ程風俗嬢が尽くしたところで、結局その想いは報われない。最初は居場所と感じられた癒しの空間は、瞬間に『承認』をめぐる闘争の場所への変化する。ホストクラブは、女性達の間に可視化された「経済」競争（決して「愛情」の競争ではない。それを履き違えた女性の精神は容易に壊れる）を生み出すシステムになっているのである。C3-221「んー、居場所っていうか、もう、ほんとにはすごい抜け出したいと思ってるんだけど。うん。なんだろうわたし見栄っ張りだし、やっぱ必要とされたら嬉しいっていうのもあったり。」というナラティブが示す通り、一時「承認」を与えてくれた場所は、もう C3 の中でも既に意味合いが変化している。彼女は、ホストクラブのために心身を酷使して、ソープランドとデリヘルと企画単体 AV の三足の草鞋を履くことに心身が悲鳴を上げているのであるが、ホストクラブで大金を使うことが止められないのである。これは、完全に嗜癖だ。

嗜癖には、物質依存以外にも、対人依存とプロセス依存があるが、ホストクラブの場合は、ホストに対する対人依存と一晩で大金を使い快感を得るプロセス依存の二つの側面がある。お酒が好きな女性であれば、それにアルコールという物質依存も加わる。これ程、女性の孤独に付け込み、「承認」を悪用したビジネスモデルは無いのであるが、支援団体・L の X2 が指摘したように、支援者よりも風俗嬢達は、ホストを心の支えとする。否、依存する。ホストのようなヒモに近い存在から、「俺のために頑張ってくれ」と売上を期待された時、普通の女性であれば、何故貴方のために私がお金を使ってまで、貴方のお店でのランキングを押し上げなければならないのか、と考えるところであるが、他者から今までの人生で頼られたことなどない自己肯定感の低い女性達は、頼りにされることを誇りに思い、「承認」の喜びを感じてしまうのである。実際、C3 もその状態である。そして案の定、彼女は完全に「掛け縛り」の状態にある。中途半端に入金させて常に店に「掛け」を残し、継続して店に呼ぶように上手く誘導されている。「掛け」の回収はホストの自己責任なので、回収できなければ、自分が自腹で店に払わなければならない。従って、ホストは本当に女性のギリギリのラインを見定めて、その月幾ら女性に使わせるかを巧妙に計算するのだ。そして、C3 の場合は月に 400 万円が限界値であり、そのうち 100 万円は、「掛け縛り」にして、ずっと残し続けるのが得策なのだ。

C3-238「でも今月めちゃくちゃ稼いで、たぶんもうちょっとで普通に 400 万返せそうだから。それはそれでよかったんだけど。」という C3 は、「掛け縛り」で飼い殺しにされていることを自覚していない（※C-2-29参照）。返せるのであれば、本来は返して二度と店に近付かないのが一番なのである。だが、ホストの方が一枚上手で、敢えて全額入金しようとする C3 に、全額入金などと無理をせず、寧ろ残りの 100 万円は、次のイベントで使って欲しいとお願いするのだ。そして、その次はバースデー、それが終われば昇格祝い、

クリスマス、ニューイヤー、店の月イベント、周年イベント等々と、何時まで経ってもイベント続きで女性に休む暇は一切与えられない。彼女達は、単にホストに貢ぐためだけに存在しているようである。このような女性達の状態を指して、E4は「信者」と揶揄するのであるが、ホストに対する女性達の妄信は、さながら教団にお布施を競い合って捧げるカルト信者そのものである。「実存的貧困」状態の「自傷的存在証明」が、テロリズムに対する理解にも通じるのは、当然なのである。社会的に孤立し、かつ「内的作業モデル」が欠損して自己が無い人間は、無条件（実際は金銭の提供がある）で自分を全面的に「承認」してくれる存在から決して離れられないのだ。だが、徐々にC3は心身共に限界に近付いている。非常に冷たい話だが、ホストは破綻した女性には徹底して冷たい。C3が体を壊し働けなくなった時、或いは風俗嬢としての価値が下がり、ホストクラブに入れられるお金が減った時、それが縁の切れ目である。どれだけ懇願しても、ホストは別の女性を風俗に沈めて、新たな金づるにすることだろう。その時、果たしてC3が自己を保っていられるか、非常に懸念される。毎月のように、歌舞伎町では若い女性がホストクラブ近隣のビル（第6トーアビルは自殺の名所として有名である。）から投身自殺を図るが、「自傷的存在証明」の究極の形が、自殺による存在証明なのである。それは女性達の激烈なルサンチマンの発露だ。私を追い込んだのは貴方なのだ、私という人間がこの世界で間違いなく生きたこと、貴方を心から愛したことは社会から直ぐに忘れられるだろうが、せめて貴方の中にだけは自責感と一緒に自分を一生忘れられない存在として残してやる。それが、身を投げる女性達の命を賭したメッセージであるが、ホスト達に自責の念があるかは極めて疑わしい。何故ならば、彼らの多くもまた女性達と大差ない環境で育っており、恐らく「実存的貧困」状態に陥っている。そんな彼らは、他者に気遣いができるほど心に余裕が無いからだ。ホストにとって、女性客は完全に「物象化」されているように見える。でなければ、心が痛んでホストとして仕事ができないだろう。そして、「物象化」されたモノに対して、Honneth（2011）や Hegel が「承認（Anerkennung）」と呼び、Lukács が「共感（Antrilnahme）」、Heidegger が「気遣い（Sorge）」と呼んだ態度は忘却されているため、女性達の命を賭した存在証明すら、彼らに対してほとんど痛みを与えられないのではないだろうか。

（5） 本項のまとめとして、最後にC4、C5、C6のナラティブを一括して比較する。C4は企画単体女優として300本を超える出演作がある。C5は、専属女優として一度だけ契約を結んだが、更新されず、結局その後企画単体女優としてもさほど活躍できずに、今は高級デリヘルで働いている。C6は、一流大学の法学部に属し、某有名オーディションのファイナリストである。大学入学後、お金欲しさに企画単体女優としてデビューしたことが直ぐに身内にバレて以来、風俗産業からは距離を置いている。今は、フリーランスの昼の仕事で、何とか生計を立てている。C1、C3～C5までは、AV女優であることに誇りを感じている。それは、全員がAV産業のヒエラルキーの上位である専属女優か企画単体女優の経験者であるからだ。C6が強要被害に遭った訳でもないのに、AV産業に関わったことを心から後悔していることから、普通の人間には、AV出演が周囲にバレるということは、耐え難いスティグマを実感し、社会的排除どころか、「自分自身

からの排除」に繋がることを示唆している。それは、強要被害に遭った C2 と全く同じ苦しみなのである。

しかし、性風俗産業の中で、最大級のスティグマを付与されるにもかかわらず、C2、C6 以外の女性達は、一切 AV に出たことを後悔しない。寧ろ、楽しかった、誇らしかった、嬉しかった、と口を揃える。これは、AV 女優がまさしく「女優」であることに起因する。芸能人のように事務所のマネージャーが付き、現場では皆からちやほやされる。無論それば、単に女性から気持ちよく働いてもらってトラブル無く撮影を行いたいからに他ならないのだが、撮影現場において女優は完全に「主役」だ。自分に文字通りあてられるスポットライト、自分中心に動く現場、監督や現場スタッフからかけられる気遣いや称賛等々、人生においてほとんど「承認」されたことが無い彼女達は、ホストクラブとまさしく同じようにそこで手厚くもてなされ、そこが居場所だと感じるようになる。下落が著しいとはいえ、それでも同世代の女性達に比べれば高額な報酬が貰えることも確かに魅力であろうが、金銭的な意味では、ソープランドやデリヘルの方が安定して AV よりも稼げる以上、風俗嬢を選ばず、「職業スティグマ」の強い AV 女優を選ぶ理由は、承認欲求に基づくところが極めて大なのである。そもそも、専属女優以外の企画単体女優ですら、今は 1 本 10 万円程度と全く稼げないのだ。それでもそこに出たいということは、一生を棒に振るリスクを冒してまで、誰かに「承認」されたいと切実に願う、「実存的貧困」状態の女性がそれだけいるということだ。

C3 は、その世界で自己実現することができた C1 と比較すれば満足度は低いかもしれない。だが、明らかに後ろめたさしか感じない風俗での仕事に比べて、AV には別の感情を抱いている。C3 にとって、AV に出演することは、誇りとまではいえなくとも、十分にモチベーションを持ち、周囲を説得できるだけの立派な「仕事」なのである。C3-192「うん。やっぱそこは、承認欲求ってそんな強くないんですけど、SNS とか嫌いだし、そこまでじゃないんですけど、一応やっぱ AV ってすごい、んーなんだろう、まあ褒めて貰えるからかな。し、まあ普通にただ作品を作り上げるっていうことにわたしは楽しいと思えてるから。」というナラティブは、それを証明している（※C-2-③参照）。

一方、C1、C3 のように専属女優にはなれなかったものの、3 年間企画単体女優として活躍し、300 本以上の作品を残した C4 は、C3 以上に AV に対して前向きである。彼女は様々な企画で他の同じ系統の女性達と交流する機会があり、人間関係も構築できたからだ。同じような境遇の同じような価値観を持った仲間達との出会いには、単純にお金に換算できない価値があったと彼女は考える。それは、同じく後半は企画単体女優として活躍した B4 も指摘していた点である。C4-34「そう,,, うん、楽しかった。」と懐かしむように当時を振り返る C4 には、AV に出演したことに対しての後悔や罪悪感、スティグマの類は全くない（※C-2-③参照）。

AV 女優としての活動に一切の後悔はないという彼女に復帰の可能性を尋ねると、仲間達と一緒になら、と答えた。一本だけ、当時の仲間達と同窓会みたいな感じでならば、と答える彼女にとって、AV 産業は明らかに学校に代わる居場所なのである。家に居場所が無い、学校にも居場所が無い、と C1 も語っていたが、そのように孤立した「実存的貧困」状態の女性達にとって、AV 産業は社会における「第三の居場所」の役

割を果たしている。従って、その居場所の居心地が悪くなれば、当然そこから出ていかざるを得ない。C4 の場合は、ジャンルとして彼女が主として関わっていたカテゴリが衰退し、ジャンル自体の需要がなくなったのが原因だという。従って、彼女の場合は、同じジャンルに出演していた仲間達もほぼ同時期に AV 産業を全員が引退しており、自分 1 人がそこから弾き出された感覚は無い。故に、彼女は AV に対して、肯定的な感情を持ったまま引退することができている。一方、C5 は、最初は AV が「第三の居場所」になったのであるが、専属女優から企画女優に降格し、そのままフェイドアウトするような形で AV 産業を去ることになった。今は、主としてデリヘルで生計を立てる彼女は、AV に対して多少複雑な思いを滲ませる。C5-129「そう。最初は専属でちやほやされて凄く楽しかったんですよ。でも、最後の方はなんか結構雑に扱われてたんで。AV の撮影自体は嫌いじゃないし、寧ろデリヘルよりも人気さえあれば楽しく、楽に稼げるんですけど、そう世の中甘くなかったですね。」という彼女の言葉は、多くの AV 女優がそこを去る際に感じる思いではないだろうか。そして、C5-128「でもそれで売るのもちょっと嫌だったので。その結果私はほとんど自分が望むような仕事は来なくて。でー、やっぱりプロダクションの人は売れてる子に熱心なので売れるかどうか分からない新人には結構対応が雑なんですよ。」というナラティブからは、改めて AV が、「性の商品化」の具体的な形態であり、個人の人間性と切り離して生産され、販売される「商品」であるということを実感する（※C-2-②参照）。C5 にとって、彼女が属したカテゴリは、不本意なのである。そのジャンルの需要が多いので、そこになるべく外見やメイクまで合わせるというやり方に彼女は納得していない。また、意に反して、ハーフやクォーターというジャンルでも売ることが検討されたという。だが、彼女には自分が目指したい方向性があり、メーカーや事務所のプロデュースの方法論が正しいと頭では分かっている、素直に納得できなかったのだ。我を通した彼女は、結局 AV 女優として大成しなかった。それに対して、多少の未練を残しながら、彼女は、C5-129「人気さえあれば楽しく、楽に稼げるんですけど、そう世の中甘くなかったですね。」と語るのである。

C5 は、愛憎半ばする感覚を AV 産業に抱いているが、C6 は、C2 同様に、そこに出演したことを完全に黒歴史と見做している。だが、C2 と異なり、C6 は AV 出演を強要された訳ではない。自分の意志でお金のために割り切って出演したのである。だが、スカウトにバレないと言われた AV 出演は、デビューから一週間もしないうちに、周囲にバレたのである。そして、彼女は自覚したのだ。AV が持つ異常なまでのスティグマと、誰が本当に自分を心配してくれる存在であるのかを。C6-14「いや、その、そんなに深い友達じゃない子はすぐになんか離れていきましたね。あ、こんなことやってるんだ、みたいな。本当に仲良い子は心配してくれて。心配してくれたんですけど。すごいそれでわかりましたね、なんか。」というナラティブは、スティグマを乗り越えて自分を気にかけてくれる味方は、決して多くは無いことを物語っている（※C-2-③参照）。

同じ類の指摘を C5 も行っている。風俗や AV で働くことは、自分の周りからあつと言う間に人を遠ざけるのである。C5 は、性風俗の世界で働く最大のメリットを、自分が望む生活水準で暮らせることと指摘す

る。これは、一見「生計維持機能」に重きを置いているように感じられるが、実はそうではない。彼女は、逐一その暮らしぶりを SNS に載せるのである。寧ろ、SNS に載せるためにお金が必要であり、そのために風俗をやっている訳で、完全に手段と目的が入れ替わっている。彼女もまた、自覚はないのであるが、『承認』をめぐる闘争』を行っているのだ。彼女にとって、面識もないネットユーザーから SNS でいいね！を貰うことは、自分自身の「実存」を支えるかけがえのない「承認」になっているのである。そして、彼女の派手な暮らし振りを見て、彼女が風俗や AV で働いていることを確信した友人達は、一斉に距離を置くのだ。その中でも、一際決定的なスティグマになったのは AV 女優だという。C5-144「友達がほぼいなくなります。」という C5 の言葉は決して大げさではないだろう。そしてそれを実感した切欠は、風俗の仕事に対する周囲からの反応ではなく、やはり AV に対するそれからなのである。

C5-149：ま、そうですね。AV が決め手,,、絶対好奇心でサンプル動画とか見るじゃないですか。元から仲良かった訳じゃないんですけど、その男の子とかと。女の子とかもやっぱりいきなり「住む世界が違うから縁切ろう」ってわざわざ絶縁宣言されたり、やっぱりこの子違うなと思うみたいで。

原田 150：それは偏見をぶつけてくるってことなのかな？

C5-150：そうじゃないですか？多分。なんか私はその子の水準に合わせて、風俗の子とご飯行く時は金額とか気にしないで食べたいもの食べたりするけど、お昼の仕事してる子とは結構安い居酒屋とか入って、お会計 1 人 2 千円とかで済ませてご飯食べてお話しして帰ったりとか、でも全然楽しかったんですけど、やっぱりずれてるんですよ。

原田 151：うーん、金銭感覚とか文化とかがずれてるんだよね。

C5-151：生活そのものが。

原田 152：それに対して嫉妬とかぶつけられてるんだね。

C5-152：んー,,、多分、何ていうか,,、んー、やっぱりみんな自分の生活とか自分と近い子と仲良く,,、自分と同じ、類は友を呼ぶじゃないけど、と仲良くしたいと思うんですよ。でも風俗嬢って自分も含めてちょっと何かおかしいなって子が多いんですよ。

原田 153：おかしいな、っていうのは感覚がずれてるってこと？金銭感覚が。

C5-153：金銭感覚は良いんだけどずれてても、んーとー、例えば自分はお客さんの悪口いっぱい言って「今日のお客さんはどうでー」みたいな、「マジあり得ない」とか言いつつ自分は自分もお客さんであるホストと本気で結婚出来ると思ひ込んでる子。

原田 154：ああああ。

C5-154：思ひ込んで何千万も使ってる子がいたり、あと、質屋で買ったお財布とかを「今日エルメスでお買い物してきた」とか虚言癖とか。なんか平気で闇金 5 社くらい踏み倒してる子とか、

普通の子がいないんですよ。

C5 の C5-153 「金銭感覚は良いんだけどずれてても、んーとー、例えば自分はお客さんの悪口いっぱい言って『今日のお客さんはどうでー』みたいな、『マジあり得ない』とか言いつつ自分は自分もお客さんであるホストと本気で結婚出来ると思ひ込んでる子。」という指摘は、C3 のようにホストに入れ込んでいる女性の耳には届かないであろう。C5 も自分の感覚がおかしいことを自覚しているのだが、それ以上に自分の周囲の風俗嬢や AV 女優の感覚がずれている、と指摘する。これは、本研究を通して一貫して筆者が感じていることでもある。そして、その原因はやはり、致命的なまでの「承認」の欠如にあるのだ。

他の子達がおかしい、ホストと本気で結婚できると思ってる、と冷ややかに指摘する C5 も、地元でバッシングを受けて友達がなくなるのが分かっていながら、自傷的な SNS の更新を止められない。月当たりの生活費が、60 万円かかる 23 歳の女性というのも、十分に世間一般からずれているはずだ。C5-153 「金銭感覚は良いんだけどずれてても」という実感がそもそも大きくずれているのだ。彼女はこの金銭感覚のずれがあるからこそ、風俗の仕事を止められないのである。C5 は、C 群の中で、C3、C6 に近い心理尺度の悪さを持つ。C3、C6 が明らかな精神疾患を複数保有しているのに対して、C5 は自覚している精神症状はなく、医療機関にもかかっている。それにもかかわらず、これ程パワーレスな状態に陥っているのは、「孤独」の中で「絶望」し、「実存的貧困」状態にあるからである。そして、その絶望が性的逸脱と消費行動という分かりやすい実存的フラストレーションに表れているのだが、その原因になっているのが、今の生活水準を維持するために、つまり無意味なセレブアピールをするために、好きでもない風俗の仕事をするしかないという状況なのだ。彼女は、セレブリティのような派手な暮らし振りを自分の友達を全て失っても世界の「誰か」に SNS で誇示するために、今日も絶望的な思いを抱えて風俗で働く。Bauman が主張するように、消費社会における「人間廃棄物」と見做されることを全力で拒否し、消費活動による人間の証明を、人間性を捨ててまで達成する矛盾した C5 の生活は、「実存的貧困」となって心理尺度に表れているのである。そして、その闇は深いのだ。

C5-185 「ほとんど闇です（笑）」と自虐的に語る C5 の半生がどれ程絶望的だったのかは、C1 や C3 ほど詳らかに分らない。だが、異常なまでにパワーレスな心理尺度の結果から、それが恐らく想像を絶する闇であろうことは推察できる。そして、少しでも性風俗の世界にいきがいややりがいを感じることができれば、多少はその闇が癒されることもあるだろうが、残念ながら C5 にとって、そこはただの風俗労働の場所だ。C1 や C3 のような居場所ではないのである（※C-2-㉔参照）。C5-187 「いや、それとこれは全く関係ないです。」と言い切ってしまう C5 に対して、自分自身のミソジニーやミサンドリーという闇を癒してくれた風俗の魅力と可能性を、彼女がそこで発揮できるかもしれないエイジェンシーを、水嶋ならば上手く彼女に伝えられるのであろうか。正直、余りにも割り切っている感じがする C5 には、水嶋であっても、B8 や B9 であっても、セックスワークの価値は伝えられないと感じてしまう。

C5-192「それは出来ることなら明日にでも辞めたいですけど、まあ多分無理。」という諦めにも似た自暴自棄なナラティブが、性風俗の仕事にやりがいがある、そして何より C5 の未来に希望が無いことを示している。何故ならば、彼女は「金銭感覚がずれているのは別にいい」と自己を正当化するのであるが、そもそもそれは全ての生きにくさの根源であり、本来ホストに依存する C3 を C5 が嘲笑うことは絶対にできないはずなのだ。畢竟、C3 と C5 が置かれている状態はほぼ同じなのである。C3 は、ただホストに貢ぐためだけに、希望が無い状態で、風俗産業で馬車馬のように働いている。そして、C5 は、ホストではなく、必要ではないモノや旅行にお金を費やすために風俗産業で馬車馬のように働いている。どちらもやりがいなど今や全く感じず、ただお金を稼ぐためだけに、である。セックスワークにおいて、エージェンシーを発揮する余地が無く、それが単に不快な風俗労働と化した時のストレスは尋常ではない。そのストレスが、2 人を一層『承認』をめぐる闘争に駆り立てるのだ。一方はホストを通して「承認」を得ようと、もう一方は、SNS を通して「承認」を得ようと躍起になっているが、どちらも闘争の限界は徐々に近付いている。消費社会において、消費は確かに人間の証明ではあるのだが、身の丈を超えた消費は必ず破滅をもたらすことを、やがて 2 人共その身をもって知るに違いない。その時、C5 は、自分自身も SNS を通して誰かの「承認」を必死に求めていることに、それはホストクラブで大金を使うことと本質的に何一つ変わらないことに、自らのずれの大きさが孤独と絶望に起因していたことに、気付くことがあるのであろうか。

(6) 本項の最後に C6 について考察を加えるが、彼女も C5 に近い特徴を持つ。それが SNS への依存である。全面的に不良な心理尺度は、彼女が AV に出て家族関係が崩壊したこと以外に、元々彼女が発達障害の自閉スペクトラム症 (ASD) と注意・欠如多動症 (ADHD) を抱えていることも関わっている。学業成績は優秀であったが、一流大学の法学部に弁護士を目指して入学し、大きな挫折を味わった。彼女は能力で絶対に学友達には叶わないし、弁護士どころか、普通の社会人にすらなれないのではないかと感じるようになったのである。事実、一浪して入学した大学は留年を繰り返し、今年 6 年目である。最終学年になり、本来は就職活動が終わっていなければならない段階で、彼女は完全に組織に属することを障害のために諦めて、唯一自信が持てるフリーランスの仕事で自立しようとしている。コミュニケーションと注意力に問題を抱える自分が働けるような会社は無いと確信しているのだ。そもそも、AV に出演したのも、スカウトから「絶対にバレない」と言われたからなのだが、彼女は ASD のせいでそれが嘘や方便だと分からなかったのである。行間が読めず、言葉を字義通りに解釈してしまう彼女にとって、メリトクラシー型能力が高いにもかかわらず、現状満足に働ける場所は、「昼」にも「夜」にも「風」にも無いのである。その意味で、彼女もまた B10 と同じ類の「最貧困女子」である。奇しくも、高偏差値の大学卒で、発達障害という境遇、家庭環境が崩壊していることまで全て一緒である。そして、心理尺度の低さも共通する。唯一両者の間に違いがあるとすれば、B10 が Y という「地雷店」に自分の居場所を見付けたことである。C6 は、未だに自分の居場所が無い。それを求めて、彼女はあるオーディションに応募した。そして、最終選考まで残ったのであるが、

そんな彼女は、承認欲求の塊である。普段は、主として SNS の Twitter を活用し、そこで自分でもイタイと自覚している病み tweet を連投するのである。

C6-36「なんか、発散なんですよ。わたしの中で。ストレス発散。」、C6-38「誰かに聞いてもらいたい。誰かに共感してもらいたいというか。誰かに。」というナラティブから、C6 が SNS を通して切実に「承認」を求めているのが分かる（※C-2-③⑥参照）。言語力がない C5 は主に Instagram に派手な写真を載せるのであるが、彼女は言語で自分の中の「闇」を「病み」として表現するのだ。それ故に、周囲にメンヘラと呼ばれ、今はそれを受け入れてメンヘラコンテストと揶揄されるオーディションに応募したのだ。そして、彼女の「病み」が評価されたのか、最終選考に残ったのである。

C6-52「完全に孤独は無理なんですよ。」という彼女もやはり、常に男性に依存している。そしてそれは、これまで見てきた通り、条件の悪い男性であり、彼女の場合はホストやバンドマンではなく、元 AV 男優である。彼女の、C6-61「そうですね。同じ闇を抱えてるんだなあみたいな。」というナラティブから、AV 女優だけでなく、AV 男優もまた同じ苦悩や生きづらさを抱えているのが理解される。ホストがキャバクラ嬢や風俗嬢と同じ闇を抱えているのと全く同根であろう。女性と同じで、自らの性行為を映像に残して社会に流通させるという行為は、明らかに自傷行為の要素を含んでいる（※C-2-③⑦参照）。

彼女も AV の自傷性にはうっすらと気付いていたという。AV に出演するという行為は、それなりにリスクがあることだと、頭では分かっていたというのだ。それに対して、何故リスクの少ない水商売、とりわけ、ミス○○の最終候補に残れる容貌があるのであれば、普通は年齢的にもまずキャバクラで働くものではないだろうか、と問うと、彼女は採用されなかったというのだ。そして、何故、もっとお店のランクを落としたり、働く場所を変えたりしなかったのか、という筆者からの問い掛けに対して、彼女は、C6-77「いやそう、ですね,,、いやまあ、そうですね。そこまで気力がなかったですね、もう。その時には。」と答えるのだ（※C-2-③⑧参照）。

彼女の障害特性を知らないと、C6-77 のナラティブが腑に落ちない。普通に考えて、お金が欲しい時にスカウトされたという理由で女性は AV に出演しない。だが、彼女の場合、ADHD の衝動性が出演を後押しするし、ASD の字義通りの解釈が、スカウトの「絶対にバレない」という言葉を鵜呑みにしてしまうのだ。また、その前段でキャバクラに落ちていた際も、普通の女性であれば単にハードルを下げるだろう。六本木で通用しないならば、歌舞伎町、そこで通用しないならば、池袋等々。幾らコミュニケーションが苦手だと言っても、ミス○○の最終選考に残るレベルなのだから、容貌だけで彼女が評価され、十分に働けるキャバクラなど東京に履いて捨てるほどあるだろう。だが、気力がなくて、その手間暇すら惜しむのである。そして、一足飛びに身バレしにくい風俗すら通り越して、いきなりスティグマの極北である AV に出演してしまう。彼女の行動のこのちぐはぐさがまさに、発達障害者の生きづらさを物語っている。結果的に、彼女の人生はこれまでも失敗の連続であり、二次障害として、うつ病やパニック障害など様々な精神疾患を発病してしまっている。これが原因で、大学卒業に時間がかかっているのである。そして、AV 出演も、バレる前か

ら既に彼女のメンタルを壊していた。C6-85「いや、お金は貰えるんですけど、精神的になんだろう、後ろめたい気持ちだ。」彼女の精神を壊し、うつ病を発症させていたのである（※C-2-③参照）。

元々、弁護士を目指すような生真面目な性格である。AV や風俗のようにグレーゾーンな仕事に対して、明確に違法ではないにもかかわらず、C6 はかなりの抵抗感を持っていた。また、C1、C3 や C4 のように AV の仕事に誇りを覚えたり、やりがいを感じていた訳でも無い。C5 同様に、精神状態が不安定な彼女が短期間でお金を稼ぐために選んだ手段なのである。そして、それが学費と生活費を賄うためだったということは、日本全体が貧困化している証左でもある。親世代が貧困化したために、今の学生が貰っている仕送りは、バブル世代に比べてかなり落ち込んだと言われる。彼女もまた、仕送りの不足を補うために、そして、継続して安定的にメンタルを保てないために、消去法で AV をアルバイトに選んだのだ。このような事情を聞けば、PAPS や HRN は、それこそ彼女を広告塔にして、強要被害を性的搾取と女性の貧困と結び付けて糾弾しそうであるが、彼女が強要被害を訴えている C2 に対して自己責任論を展開し、否定的に見ていることは既述の通りである。

彼女の自己責任論は当然自分自身にも及ぶので、自分が「承認」されない、すなわち愛されないのは、自分が醜いからだという容姿のコンプレックスに行き着く。ミス○○のファイナリストに残る女性が一体何を言っているのか、と感じてしまうのであるが、これもやはり発達障害故に、一般人と感性がずれているからなのかもしれない。結局彼女は、C6-146「それはそうですね。ワガママなんですけど、その人に言ってもらわなきゃ意味が無いんですよ。わたしの中で。だから、たぶんそういう人、そういうタイプが多いんじゃないですかね。」と言いながらも、やはり美容整形を行って、少しでも自分のコンプレックスを解消し、同時に愛する人から「可愛い」と言って貰いたいと願っている（※C-2-④参照）。

次項でも整形を肯定的に捉える女性達を何人か取り上げるが、自己責任論が横行する社会では、容姿という遺伝と運がほぼ全てを左右するものまでが、厳しい自己管理の対象になる。美しさもまた、努力の結果手に入れるべきものであり、その努力の中には「美容整形」も含まれるのだ。美容整形が努力なのだ、という主張に最初は違和感を覚えたが、彼女達が繰り返しその理屈を主張するので、恐らくそれが女性ファッション雑誌や、彼女達が情報を得るメディアが構築している「真実」なのであろう。その背景に、美容産業が存在しているのは想像に難くない。整形の手術の痛みに耐えること、精神的苦痛に耐えて風俗で働き、整形のお金を貯めることは、いずれも立派な努力なのだと彼女達は言うのだ。首肯しかねるが、その議論に今は立ち入らない。

いずれにせよ、彼女は、自分に自信を持つために美容整形を行ったのであるが、実はそれに満たされていないという矛盾に気付いていない。整形は、実際に彼女を幸せにしていけないのである。何故ならば、彼女の恋人である元 AV 男優が、「可愛い」と毎日彼女を褒めてくれないからだ。そして、彼女の理屈では、恋人に「可愛い」と言って貰えれば、彼女の精神保健の問題は概ね解決し、彼女は人生に幸せを感じることができる、ということになるのだが、これは美容整形だけでなく、何かに依存している人間が陥り易い典型的な誤

謬である。

Frankl が、「幸せ」は目的にすべきものではなく、「幸せ」自体を目的にすれば、必ず「実存的空虚」に陥ると警告しているように、事実彼女は完全に「実存的空虚」に陥っている。そして、元 AV 女優でメンヘラな彼女は社会的排除の対象でもあり、スティグマを強く実感している以上、それは「実存的貧困」状態まで達している。それを虐待サバイバーの C3 を下回る彼女の心理尺度の結果が明確に示しているが、その原因はやはり、彼女が「幸せ」を人生の目的にしてしまっているからだ。

何かを目的にして人生を真摯に生きた結果として、人は「幸せ」になるのだと Frankl は指摘する。だからこそ、人生に意味を持って生きなければならないとするのだ。フロイト心理学の「快楽への意思」とも、アドラー心理学の「力への意志」とも異なり、Frankl が「意味への意志」を主張したのは、まさにそれこそが、人生において幸福を手に入れるための大原則だからである。そしてその正しさは、これまで考察を重ねてきた女性達の姿を見れば、明らかなのである。スティグマが強い風俗産業に従事していても、その仕事に意味を感じ、自分の明確な意志で従事している、すなわちエイジェンシーを発揮している女性達は皆強い。そして、現に彼女達は幸福であり、それを心理検査の結果が完全に裏付けている。寧ろ、A1, B8, C1 が各群の中で最も幸福である理由は、そこにしか見出せない。A1 は、A 群の中でも決して収入は多くない。だが、彼女よりも遥かに稼いでいる女性達よりも心理的に強くて幸福であった。C1 は、スティグマの中でも突出した AV 女優という肩書を持ち、性風俗の世界に 14 年もの長きに渡って関わり続けて、紆余曲折の結果、最終的に本当の幸せを手に入れた。実際のアイドル以上に自己実現していることを示す心理検査の結果が、やはり彼女が強く幸福であることを示している。2 人が揃って口にした言葉は、「天職」である。人は、「天職」を生ければ、結果として必ず幸せになるのである。セックスワークを自らの「使命」と公言する B8 もまた、A1, C1 に劣らぬ非常に高い心理尺度の数値を記録したが、彼女も含め、性風俗の世界で自己実現に辿り着いたこの 3 人は、間違いなくその世界を生きる中で自らの「人生の意味」を問うている。

C6 は、無論 AV を「天職」や「使命」などと大仰に考えていない。そして何より、幸福だけを求めて「人生の意味」に向き合っていない。弁護士になりたいから、一流大学の法学部に入学する、お金が欲しいから AV に出る、恋人に愛されたいから美容整形をする。彼女の行動は、全て自分が幸福になることを前提としている。だが、全て成功していない。C6 は、本研究において最も絶望的なグループの 1 人であるが、その理由は「人生の意味」に真摯に向き合っていないからだ。大学に入る際、何故弁護士になりたいのかを全く問うていない。お金になるから、箔が付くから、親から勧められたから、幾つも彼女は理由を述べることはできるのであるが、自分が何としても弁護士になりたい理由の一つもないのである。だから、その目標を簡単に諦めてしまうのだ。叶わない夢に縋り続ければ、連帯による「承認」ではなく、「非承認」を味わってしまう。自我が弱い彼女は、それに耐えられないのである。

本来弁護士とは、目的ではなく単なる手段である。社会的に弱い人を助けたい、誰かを守りたい、そのために弁護士になりたい、と思って人が弁護士を目指すならば、その人の人生は幸福なものとなる。何故なら

ば、自らの存在理由が弁護士として弱者を守るためにあると気付く思考過程において、その人は何度も「人生の意味」を問うているからである。全く同じことだが、彼女はお金を得る時も、恋人に愛されたい時も一切その意味を問うていない。何故、それ程のお金が必要なのか。普通のアルバイトで稼げる額ではどうして我慢ができないのか、問うていれば後悔するような AV 出演には至らなかったであろう。また、何故その人から愛されなければならないのか、何故愛を実感するために外見を「可愛い」と言われねばならないのか、そもそも愛を失うことは全てを失うことなのだろうか。彼女はそれらを全く問うていない。もしそれを真剣に問うていれば、サッカーの名言である「愛してその人を得ることは最上である。愛してその人を失うことは、その次によい。」という真実に辿り着いたかもしれない。だが、彼女は常に幸福と最上しか望まないのである。これは、Frankl が紹介したハーバード大学の卒業生達が陥っていた幸福のパラドックスなのだ。どんなに成果を積み上げて、充足の無い暮らしは幸福に辿り着かない。一方、充足した暮らしは、敗北の上にも成り立つ。サン・クエンティン刑務所において、囚人達が人生に勝利するということは十分にあり得るのである。だが、「実存的貧困」状態にある彼女はそれに気付かないのだ。

彼女は、今も新しい過ちを犯そうとしている。それは、ミス◎◎になることだ。仮にミス◎◎に選ばれたとしても、彼女の人生は全く幸福に辿り着かないだろう。何故ならば、やはりそこに「人生の意味」を一切問うていないからである。法学部を選ぶときに大学のステイタスと偏差値だけで進学先を選んだ者が、同じ類の過ちを犯しているのだ。そのミス◎◎が、何かをなすために必要なのだ、というならば、それに選ばれることは意味がある。だが、ミス◎◎になれそうだから応募した、のでは、結局彼女は大学受験と同じ過ちを繰り返しているだけなのだ。C6 は、本来非常に優秀な女性である。その優秀な女性が、ここまで目的と手段を履き違えてしまう原因が、彼女が抱える「実存的貧困」なのである。それは、発達障害よりも遥かに彼女の人生の桎梏となっている。

原田 224：なるほどねえ。で、一応ミス◎◎になれば、アイドルじゃないですか。

C6-224：そうなんですかね。

原田 225：アイドルって好きじゃないんでしょ？

C6-225：うん、嫌いです。

原田 226：なんでなんですか？アイドル嫌いな。

C6-226：なんだろう、でも、まあ AKB とかだったら別ですけど、いや、アイドル。アイドル。いや、地下アイドルなんて、お金にならないし。闇深いし。バカじゃないですか。

C6-226「なんだろう、でも、まあ AKB とかだったら別ですけど、いや、アイドル。アイドル。いや、地下アイドルなんて、お金にならないし。闇深いし。バカじゃないですか。」というナラティブに、既に彼女の過ちが浮かび上がっている。

それを心から望んでいないのであれば、一体何故オーディションに応募したのであろうか。メンヘラコンテストであるミス◎◎から、確かに王道アイドルは1人も生まれていないが、非王道アイドルは何人も生まれている。芸能界には、アイドルだけでなく、ミス◎◎出身のモデルやタレント、女優もたくさんいる。ミス◎◎は、非主流派の女性の芸能界への登竜門なのである。その意味で、それに選ばれるのは、AV女優の頂点である「恵比寿マスカッツ」に選ばれるのとは格が違う。どうしても「恵比寿マスカッツ」の活動が深夜帯に限定されてしまうのに比べて、ミス◎◎出身の芸能人は、地上波で、それもゴールデンの時間帯で、現在も何人も活躍している。ファッション雑誌のモデルとしても、女優としても、活動の幅を広げている存在はたくさんいる。確かに、地下アイドルのままで終わったミス◎◎もいるだろう。だからと言って、C6-226のように、地下アイドルをこれ程蔑む必要もないだろう。だが、彼女は、自分が蔑む存在が受賞した賞を欲しくてそのオーディションに自分から参加しているのである。この矛盾を自覚しない限り、彼女の人生はC2と同じくらい生きづらいであろう。

C2も、発言内容に一貫性が無く、実際の行動と発言が極めて矛盾していた。従って、それを理解し、腑に落とすためには、レベル1の自己愛的精神病的な防衛機制を持ち出さなければならなかった。C6の矛盾する発言と行動を腑に落とすには、ここで再度防衛機制を持ち出さねばならない。そして、C6の発言と行動に見られるのは、Vaillantによる防衛機制の4分類のレベル3、神経症的防衛機制のうち、「合理化(Rationalization)」と「反動形成(Reaction formation)」であろう。「合理化」は、端的に言えば、イソップ童話の『酸っぱいブドウ』である。届かない高さにあるブドウを取ろうとして失敗した狐が、自分を納得させるために、あのブドウは酸っぱいからいらぬ、と屁理屈をいう物語だ。彼女の人生はこの「合理化」の連続である。弁護士になりたいのだが、努力した結果、なれないと恥ずかしいから、最初からなりたくなかった、と言って資格取得から逃げる。恋人から空っぽの人間性を否定されることが耐えられないから、自分が嫌われたのは彼好みの容貌ではなかったからなのだ、と納得するために、前もって整形しておき、ダメージを遁減させる。

彼女は、常に最上と幸福を求めておきながら、それが手に入らないことを想定して、無意識のうちに自分が傷付かないよう常に「合理化」の防衛機制を駆使して、予防線を張っているのである。更に、ミス◎◎の称号が喉から手が出るほど欲しいくせに、そう言ってそれが手に入らないと恥ずかしいので、さほど興味が無いように装う。本心と裏腹なことを言ったり、その思いと正反対の行動を取るのは、「反動形成」である。彼女がパニック障害などの神経症水準の病気に苦しめられているのは、このような神経症的防衛機制を日々駆使しているせいなのだろう。そう考えると、実は、AVを後悔しているというのも穿って見なければならぬのかもしれない。普通に考えて、彼女程聡明な女性が、水商売を飛び越えて一足飛びに好きでもないAVに出演することは、少し考え難い。だが、これが、「反動形成」によるものならば納得できる。

彼女は、本当はAVにもっと出たいのである。AV女優に憧れている。それは「実存的空虚」なまま生きてきた彼女を「承認」する手段だったのだ。だが、不幸にして直ぐにAVに出演した事実は、学内にも地元

も家族にも知れ渡ってしまった。家族は烈火の如く怒った。その状況で、自分はAVを通して「承認」されたいとは絶対に言えない。だから、彼女の本音であるAV女優として「承認」されたいという本心は無意識のうちに封印され、表向きはAVを貶め、過去を後悔しているというナラティブに変換されたのではないだろうか。その証拠として、彼女は今でも元AV男優を恋人に選んでいる。そもそも以前から、彼のファンだったというのも随分とおかしな話だ。普通の女性はC2のようにAVなど観ないし、ましてAV男優のファンになど絶対にならないはずだ。更に彼女は、尊敬する人間として、現役AV女優で作家の紗倉まなを挙げた。可愛くて、良い文章を書くから、懂れているのだという。C6の一連の発言と行動の矛盾は、やはり防衛機制無しには到底理解不可能である。先にAVに出演した件は、発達障害の特性によって説明できるとしたが、C6の行動は寧ろそれ以上に、精神分析の防衛機制によって漸く納得できるものとなるのだ。従って、C6-226も、「反動形成」の結果であると考ええると、彼女の本心はアイドルになりたいのではないかと推察される。どれ程地下アイドルの闇が深くても、お金にならない感情労働の極致であっても、オタク相手の昼のキャバクラ嬢と揶揄されても、男性から声援を送られるキラキラした存在に、彼女は本心では懂れているのではないだろうか。同じエンタテインメント産業として、AV女優と地下アイドルはそのくらい性質が近いはずなのだ。そして、性質が近いということは、畢竟、同じ類の「闇」と「病み」を持つ。承認欲求の塊のような地下アイドルの女性達のうち、文字通り闇をもっていた3人の地下アイドル、ホストに依存する風俗嬢地下アイドル、デリヘルで生計を賄う地下アイドル、そして、パパ活で小遣いを稼ぐ地下アイドルの3人を次項で検討する。

第2項 3人の地下アイドルの物語

(1) 姫乃たまの『職業としての地下アイドル』によれば、「地下アイドルとは、マスメディアの露出よりもライブを中心に活動しているファンとの距離が近い新しいアイドルの総称。」(姫乃2017: 3)と定義される。姫乃によれば、プレアイドル(メジャーデビュー前のアイドル)が出演できるライブハウスは数少なく、ライブは主に東京の四谷にある「四谷 Honey Burst」で行われたこと、そして、それが地下にあったことから、一般に彼女達は「地下アイドル」と呼ばれるようになったという。ただ、当事者達の中には、地下アイドルという言葉が蔑称であり、昨今特にビジュアル系バンドと同じでファンに対する過剰営業が問題になるにつれて、いかがわしいアイドルというイメージが定着しつつあるため、敢えて、「ライブアイドル」と名乗る者も多い。

国民的アイドルグループに成長したAKB48も、デビュー当時は地下アイドルのくくりであり、今もやっていることはそれに近い。専用のAKB劇場でライブを行った後、個人の写真やグッズなどの物販を行い、ファンをお見送りしながら握手をする。さすがにAKB48グループの場合は問題視されているような過剰営業にはならないが、一般的な地下アイドルは客から物販で自分の写真やCDを買って貰わないと個人の売上

にならないため、手段を選ばない者は必死に体を近付けたり、密着させたり、ハグしたりと、過剰営業になりやすい。C6-226「なんだろう、でも、まあAKBとかだったら別ですけど、いや、アイドル。アイドル。いや、地下アイドルなんて、お金にならないし。闇深いし。バカじゃないですか。」とC6が指摘するのは、そのような過剰営業の状況である。そして、地下アイドルは、なろうと思えば誰でもなれるという特徴を持つ。AKBグループや坂道グループの様にオーディションがある場合もあるが、ほとんどはセルフプロデュースかそれに近い素人運営だったりする。あくまで趣味でやっている者も多い。メジャーデビューしているアイドルが自前の歌を歌うのに比べて、地下アイドルは寧ろそれができるしっかりした運営が付いている方が少なく、多くはカラオケを使って、他のアイドルやアニメソングのカバーを行う。このような素人っぽさが好きなファン、またメジャーアイドルに比べてファンとの距離感が非常に近い点を好むファンが、地下アイドルを支えている。

これら地下アイドルには大きな格差が存在しており、限りなくメジャーアイドルに近いしっかりとした所属事務所と運営を持つ者達から、完全に趣味の領域で、自分でセルフプロデュースしている者まで幅広い。一つ、共通項があるとするならば、それはやはり「承認」である。メジャーアイドルも含めて、彼女達の承認欲求が強いことはかねてより指摘されているが、特に地下アイドルにはその傾向が強いと言われる。自身が地下アイドルである姫乃は、『職業としての地下アイドル』の中で、それを次の様に指摘している。

さて、そんな地下アイドルとファンの関係について語る時、頻繁に「承認欲求」「認知」という単語が用いられます。どちらも元々は心理学の用語ですが、地下アイドルの世界においては、

- ・「承認欲求」＝有名／人気者になりたい地下アイドルの欲求
- ・「認知」＝ファンが地下アイドルから顔と名前を覚えてもらうこと

という意味で使われています。地下アイドルの世界は、すごく大雑把に説明すると、このふたつの欲求に突き動かされています。なぜ有名になれる見通しが立たなくても地下アイドルを辞めないのか、なぜ誰も知らないようなアイドルを応援するのか。傍目には理解しがたいこれらの動機は、地下アイドルとファン双方のこれらの欲求にこそあるのです。一般的に地下アイドルとファンの関係は、どちらかの一方通行であると思われがちですが、そこに私が異論を唱えているのは、両者の欲求が鏡合わせになっているためです。双方の欲求は相手に向いているもので、互いに求め合っていて終わりが見えません。(姫乃 2017 : 50)

姫乃が指摘するように、地下アイドルの世界は水商売や風俗産業以上の「承認の共同体」となっている。そこに身体的関係が無い以上、ファンはアイドルに精神的な繋がりを強く求める。アイドルの恋愛禁止はそ

の証左である。それが、ファンが求める「認知」の形である。女性もまた元々何らかの理由で（姫乃は自身も含めて、『職業としての地下アイドル』の統計調査から地下アイドルの 8 割がいじめの被害者であることを指摘している）承認欲求が満たされていないため、それをこの場で必死に満たそうとするので、ファンからの声援は不可欠である。そのために、必死にファンに「レス」と呼ばれるステージから視線を送ったり、手を振ったり、指差したりする行為を行う。それを貰うために、ファンは物販で必死に女性の写真を買ったり、サインを貰ったり、握手をしたりして好意を送る。姫乃が「レス」と「物販」の等価交換と呼ぶ行為を通して、お互いに「承認」を高め合うのが地下アイドルの世界なのである。

昨今、地下アイドルの世界の闇が深いと囁かれるようになったのは、一つは女性側の過剰営業が時に性接待を思わせるくらい激化していることが挙げられる。もはや、キャバクラ嬢以上とも呼ばれる物販の際の過剰な営業は、本当にアイドルがやるべきことなのか、と疑問視されることも多い。無論、過剰営業を行うのは一部の売れていない地下アイドルなのであるが、それでも 1 人が行えば、結果的に新自由主義特有の「万人の万人に対する闘争」が起きてしまう。風俗嬢と同じで地下アイドルの数が過剰供給状態にある中で、底辺に行けば行くほど、このような闘争はもう避けられない。もう一つが、運営側の搾取である。芸能界の慣例として、運営側が大きな権力を持つため、女性の側は時に契約内容さえ曖昧なままにされたり、支払いの明確な取り決めがなかったりする。その結果、休みなく働いても全く自分の利益が出ず、物販を行っても、自前の衣装にお金をかけ過ぎて赤字などという状態まで起きてくる。そのような搾取の権力構造がある中で、2018 年、愛媛県のローカルアイドル「愛の葉 Girls」のメンバーが自殺した。運営が仕事を入れ過ぎてこのメンバーは通信制の学校に満足に通えずに留年した。全日制の学校に編入すれば、土日のイベントに集中できるという理由で運営側は全日制高校への編入学を勧めたが、その学費を巡って家族と運営の間にトラブルが発生し、その渦中でのメンバーの自殺となった。遺族側は運営側をパワハラや苛酷な労働環境で女性を精神的に追い詰めたとして損害賠償請求を起こして現在係争中である。

地下アイドルを巡る問題は根深い。そして、C6 や姫乃が指摘するように、かなり闇が深い。その深い闇故に、少なくない女性達が、生計を維持するために水商売や性風俗の世界で働いているという現状がある。本項では、3 人の地下アイドルを闇が深くない順に検討していく。

地下アイドルの中では、比較的「勝ち組」に近いのが、C7 である。彼女は 4 人組の地下アイドルのメンバーの一員として、4 人で事務所が管理する寮で仲間達と共同生活を送っている。大学生でもあり、大学の単位取得とアイドル活動とアルバイトの三足の草鞋を履いているのだが、メインは大学と地下アイドル活動である。大学はしばしば単位を落として補講を受けているが、今のところ留年もせずに進級はできている。ただ、どうしても地下アイドルとしての収入では生計が成り立たないため、最近普通のアルバイトを辞めて、グラビアアイドルの友人の勧めで「パパ活」を始めた。その C7 は、C7-42「あ、一応両方ですね。できれば両方やりたいです。」というナラティブからも分かる通り、将来的にもアイドルを専業で行う気は無い。そのリスクについては十分に自覚しているようである（※C-3-①参照）。彼女は偏差値 74 の公立高校の出身で

あり、大学は美術系に進学しているが、メリトクラシー型能力が非常に高い。父子の貧困家庭に育ち、私立の進学校に進めなかったが、それでも努力して公立の進学校に進んだあたりに彼女の能力の高さと意思の強さが垣間見られる。心理尺度も概ね女子大生平均を上回っており、毎日が充実しているのがその結果からも伝わってくるが、やはり目下最大の懸念は生活費である。C7-47「あ、なんか、学費のことについて、ま、自分で今学費を払ってるので、生活費を結構削ってるんですよ。で、それでお金が結構常にないので、それについてあの、結構昔からっていうのも変な話なんですけど、なんか昔からの付き合いの友達が十代の頃からパパ活をやっていて、その子に相談したところ、それだったらってサイト教えてもらって、っていう感じですね。」という通り、彼女はパパ活を使って、将来の奨学金ローンのリスクを回避しようとしているのだ。学費が高い私立の美術系大学に進学した彼女は、恐らく相当な額の奨学金を借りているはずだ。だが、彼女は性風俗産業で体を売ったり、キャバクラで水商売したりすることには、強い抵抗がある。無論、曲がりなりにも自分がアイドルであるため、ファンの手前そのようなことはできない。従って、お茶だけでお金が貰えるパパ活という活動は非常に都合がいいのである（※C-3-②参照）。

C7が行っているのは、A10と同じ純粋なパパ活である。A10と同じSNSアプリを用いてパパを見つけ、食事だけしてお金を貰う。肉体関係を迫ってくる男性は全部断り、食事以外のことはしない。それに対して、彼女の父親は心配しているという。だが、今のところ彼女は、さほどパパ活に危機感を覚えてはいない。それなりに面倒な人はいるが、聞き役に徹して上手くあしらっており、父親が心配するような身の危険は無いという。ある程度、待ち合わせ場所等にも気を遣い、駅前や大きなビジネスホテルのロビーにするとか、人目のある場所から絶対に離れないようにしているという。そこまで配慮しながら行いうパパ活は、C7にとっては、それなりに負担になっている。面倒臭いパパを適当にあしらうのも、ある程度の人間力と忍耐が必要だ。従って、C7-87「そしたらなんか、ああ接客してるなあじゃないけど、なんかちょっと、お仕事感がありますよね。」というナラティブからも分かる通り、C7には、パパ活に対しては仕事としての感覚が生まれてくるのである。少なくとも、C7はそのように認識している（※C-3-③参照）。

本来、彼女はリスクを冒してまでパパ活などしたくないのであるが、彼女にはこれしか生活を成り立たせるための選択肢が無いのである。大学も卒業したい、かといってアイドル活動は手を抜けない、そうすると、高時給の短時間のアルバイト以外に彼女の生活を成り立たせる手段が無いのだ。だが、彼女は水商売や性風俗に対して偏見がある。そうすると、昼の仕事で、水商売や風俗並みに高時給なものは、パパ活以外に無いのである。従って、彼女の中ではパパ活は致し方なくやっている接客業の仕事、という位置づけなのだ。ただ問題は、恐らく男性の側は決してその様に認識してはいないということである。A10やA11の箇所でも検討したが、パパ活は現在素人売春の温床となっている。厳密な意味でパパ活を女性が行おうとしても、男性側にその意図が無く、多くは出会い系サイトの感覚で体の関係を求めてくる。実際のところ、最初の数回はパパ活として食事だけしてくれても、A10が指摘していたように数回会えば、「じゃあ、そろそろ次の段階へ、、、」と男性の側が暗に体の関係を求めてくるのだ。A10はその段階で関係を切るのだが、それには限

界があると彼女も感じていた。女性登録者の数に比べて圧倒的に男性の数が少ないため、1人の男性を複数の女性で奪い合っているのだ。男性は、いつでも自分の目的に合致した女性に乗り換えることができる。従って、C7の3人のパパもいずれは下心を見せてくるだろうし、その時関係を断ち切れれば、新たに別のパパを見つけるのは容易ではない。故に、パパ活を業として行う仕事として考えることはリスクが高く、早晚収入の目途が絶たれる可能性があるのだが、C7はそれに気付いていないようだ。C7-82「んー、なんかたぶんよくわかってなくて、なんか、タダより高い物はないんだよって、微妙にずれた返しをされたので。たぶんちょっと、よくわかってないんだと思います。」と父親の心配を軽く捉えているが、恐らく父親がしている心配の中には、何時までもそんな都合の良い話は続かないぞ、という戒めも含まれているはずだ。だが、彼女からは、パパ活で食事をして男性の愚痴を聞いているだけで、何時までもお金が稼げると考えている甘さが伺える。

C7-188「ま、そうですね。ちょっと、人より貧しいかもしれない。」と濁して、C7は、地下アイドルの具体的な収入は決して口外しないのであるが、赤字ではない、ある程度の収入はある、そして確定申告もしている、という。そこから推察されるのは、少なくとも130万円以上の年収はあるということ、だが、その年収では大学の学費と生活費、衣装代、レッスン代、寮費等を全く賄えないため、経済的な貧困状態に陥ってしまい、結果パパ活をしなければならない、という現実である（※C-3-④参照）。これが、地下アイドルの闇の一つの側面である。

C7のように、ある程度しっかりした運営に支えられて、メジャーデビューを目指しているようなレベルでさえ、地下アイドルの活動だけでは生活が絶対に成り立たないのだ。それは、メジャーシーンで成功する前のAKB48も同じだ。今でも語り草だが、AKB48の初公演には、関係者を除けば7人しかファンが来なかった。これが、地下アイドルの現実であり、ここから這い上がってメジャーシーンで成功できるグループは非常に少ない。現在、地下から始めて成功（武道館、各種アリーナ・ドーム等を満席にしてDVD化して流通させているレベル）したと言えるグループは、AKB48グループ以外では、ももいろクローバーZ、でんぱ組.inc., まねきケチャくらいしかない（坂道グループ（乃木坂46、欅坂46、日向坂46）は、AKBグループの成功から始まっており、起ち上げ時点で大規模なオーディションを実施し、その後のメジャーデビューが確定状態であった。故に、彼女達は地下出身とは言えない。）。橋本環奈のようにグループは失敗しても、個人的には成功した事例もあるが、全国に幾らあるか分からない地下アイドルグループが成功するというのは、本当に稀有な事例だ。それが自分でも良く分かっているのに、恐らくC7は、大学に籍を置いたまま活動し、「リスク社会」におけるリスク管理をしているのだ。メジャーデビューできれば最善だが、そうならなくても、逃げ道を残して置けば、新自由主義の日本社会において、失敗した時に社会の下層に滑り落ちて行くことは無い。だが、それでもどうしても腑に落ちない点が残る。それは、C7が生活の半分以上を地下アイドルの活動に捧げているにもかかわらず、何としても有名なアイドルになりたいという強い気持ちが見えないことだ。話を聞けば聞くほど、なれば良いな、という程度の想いにしか感じられない。完全に退路を断

たないのもその理由の一つであるが、芸能界に対する執着のようなものが彼女の中に全くないのである。そのような女性が成功できるほど、芸能界は甘くはないだろう。そうすると、実は C7 は、地下アイドルの「承認の共同体」に居心地の良さを感じているだけなのではないか、という疑念が湧いてくるのである。姫乃が指摘するように、地下アイドルは、少なくとも異常にファンとの物理的・心理的距離が近いため、メジャーアイドル以上に「承認」だけは得ることができる。ほぼ利益の無い貧困状態を耐えられる理由と言うのは、本来はアイドルとしての成功への強い野心だと思うのだが、その強い野心が彼女から感じられない以上、C7 が求めているのは実はファンからの「承認」であり、裏を返せば、それは経済的に貧困な父子家庭に育った彼女の 21 年間の人生に、十分な「承認」が無かったからなのではないか、と思われるのである。そしてそれが、パパ活のような、発覚すれば、即アイドル生命が絶たれかねない行為を自傷的に行ってしまう理由でもあるのではないだろうか。C7 にとっては、地下アイドルとパパ活の両方が、『承認』をめぐる闘争であり、本来メリトクラシー型能力の高さからして昼の正業で自己実現を目指して当然の女性が、生活困窮状態に陥ってもわざわざ地下アイドル（高校時代はメイドカフェ）に生活の多くの時間を割き、大学の単位もしばしば危うくなり、その結果自分の人生の選択肢を狭めているのだとすれば、最早彼女の地下アイドル活動自体が「自傷的存在証明」に思われるのである。

C7 が闇深いと言われる地下アイドルの中では、まだ比較的「闇」を感じさせない存在だとすると、C8 においては、一気にその「闇」が深まり、今度は「病み」が見えてくる。まず C7 との大きな違いは、退路を断っていることである。彼女は事務所のスカウトによって地下アイドルの世界に入ったが、その活動を継続するために、昼の正社員の地位を捨てた。そこにはかなりの葛藤があったのだが、結果として、生計の手段を失ったため、性風俗産業で働く以外に選択肢が無くなった。C7 が確定申告できる所得水準だとすると、C8 は寧ろアイドル活動の収支はマイナスである。衣装代やレッスン代によって、持ち出しの方が多くなっている。そこには、明らかに「愛の葉 Girls」のような運営側による女性の労働の搾取、やりがいの搾取の構造が見てとれるのだが、C8 はそれでも地下アイドルを続けたいというのである。その理由として、彼女は、自分でオーディションに応募したのではなく、業界人からスカウトされたこと、アイドルは今しかできないこと、を挙げる。前半部分の、自分からオーディションに応募したのではなく、声をかけられた、つまり選ばれた存在である、という事実がいかに C8 が「承認」を感じているのかが、彼女のナラティブからは伝わってくるのであるが、C8-24「んー。なんか、やるときは本気でやってはいるけど、そこまでの夢は持っていないくて、もちろんチャンスがあるならばやるし、大きくなれる努力はしているけれど、わたしの将来の一番の夢がアイドルじゃない。」という C8 の言葉には、C7 に感じた違和感と同じものを覚えてしまう（※C-3-⑤参照）。つまり、絶対にアイドルになりたいという野心の欠落である。本来は、それなしに成功することとは絶対にあり得ないはずなのだが、彼女達が生活を犠牲にしてまで続けている地下アイドル活動に、彼女達が内心既に見切りを付けているのが透けて見えるのである。そして、当然、ではなぜ、C7 は大学生活を犠牲にし、パパ活というリスクを冒してまで、C8 の場合は、正社員の地位を捨て、マイナス収支を風俗産

業の稼ぎで補ってまで、地下アイドルを続けているのか、という当たり前の疑問に帰着する。そして、これこそがやはり地下アイドルの「闇」の本質なのである。

C8は、生活苦のために、風俗で働く以外に選択肢がないと語る。湯浅が指摘する通り、人生の選択肢が無いことが貧困であるならば、彼女は確かに貧困と言えるだろう。だが、彼女は本当に選択肢を奪われているのであろうか。彼女のナラティブから浮かび上がってくるのは、地下アイドルの置かれた深刻な搾取のメカニズムと貧困、そして、1人暮らしの女性がそれを続けるためには風俗以外に選択肢が無い現実である。だが、普通に考えれば、そもそも絶対にアイドルになりたいという野心がないのであれば、嫌で仕方ない風俗を辞めて、中途半端な気持ちでやっている地下アイドルも諦めるというのが、誰もが腑に落ちる選択肢なのだ。その最も合理的で妥当な選択肢は、誰も彼女から奪っていない。だが、やはりC8はC2の様に事務所に洗脳されている訳でも無いのに地下アイドルに執着するのである（※C-3-⑥参照）。

C8は、一貫して風俗で働くことはリスクを考えればやりたくないのだが、生活苦をなんとかするためにはこれしかない、と主張する。だが、やはりこの主張は正直全く腑に落ちない。本当に、彼女はアイドルになりたいのであろうか。C8-63「もちろん考えてます。考えてもお金が無い。生活ができないってなったら、アイドルできないとかじゃなくて生活できない、ってなったら、自分で稼ぐしかない。」というナラティブは正論なのであるが、それは全てアイドル活動が何よりも優先されるという信念があってこそ成り立つロジックである。例えば、C8から、留学してどうしても学びたい学問がある。それはその国のその大学でしか学べない。そのためには、家族に頼れない自分は風俗で稼いだお陰で生活費と留学費用の全てを賄わなければならない。今の自分には自分の体を資本に風俗で働く以外に短期間で大金を稼ぐ手段が無い、と言われれば、彼女の行動は腑に落ちるであろう。そこには、「人生の意味」を問う過程が見えるからだ。彼女が「意味への意志」に突き動かされている以上、恐らく彼女は風俗で働いたことを後悔しないだろうし、将来勉強したことを活かして必ず幸せにもなるだろう。だが、彼女は今の生活に、すなわち地下アイドルとして活動することに「人生の意味」を問うていない。それは、C8-25「まあファンの方には言えないけど、結婚と子供。要はお母さんになることだから、じゃあ、そのためにアイドルできないってなったら辞めるし、じゃあ正社員するとなっても、本当は好きな仕事をしたいけど、それよりも、じゃあ子供ができれば旦那とか子供と少しでも長くいられて、で、自分がいくら稼げばいいのか、じゃその額を稼げる職種でって。家族が第一になると思うので。どうでもいいとかじゃなくて、優先順位が自分じゃなくなると思います。」というナラティブからも明らかだ。彼女の本当の夢は、幸せな結婚をして家族を持つことなのである（※C-3-⑦参照）。

故に、C8-25のナラティブが、C8の言動と行動に違和感を覚えさせる最大の原因と言っても過言では無い。何故、人生の優先順位が一番でないもののために、正社員の生活を犠牲にして、社会から白眼視されるスティグマを背負って、風俗で働かなければならないのかが分らない。結婚と子供は、何一つ地下アイドルと合理的に結び付かない。寧ろ、幸福な家庭を持ちたいのであれば、それを破壊する要因になり得る性風俗産業になど一切近付いてはならないはずだ。普通に正社員を続けていることが、彼女の人生の最大の目的、

意味ある人生に辿り着く最短ルートであったはずなのに、何故彼女はそのルートを放棄し、そこに辿り着くか分からない不確実なルートで苦しんでいるのかが全く理解できないのだ。彼女の矛盾した発言から推測されるのは、以下の可能性である。

① C8-25 のナラティブが真であるならば、彼女の選択肢は間違いである。間違っているにもかかわらず、今直ぐにでも辞めたい風俗で働いている理由は、(1) 実は地下アイドルには「承認」があり、癒されるため、そこから離れられない。(2) 風俗で働く理由を地下アイドルの貧困に求めて正当化したい。

② C8-25 のナラティブが偽であるならば、(1) 本当はアイドルに憧れており、何が何でも成功したいが、失敗した時に惨めなので、予防線を張っておきたい。

この三つの可能性は、どれも正しい可能性を持っている。①- (1) の場合は、地下アイドルの闇が深いということである。そこに関わると、ホストクラブのように「承認」の泥沼にはまって逃げられなくなってしまふ。とりわけ、「実存的貧困」状態にあるような女性は、そこを居場所としてしまう可能性が高い。姫乃は、長い間自分自身がいじめの対象だったために自尊感情が低く、地下アイドルとして「承認」された時に漸く居場所を見付けたと感じ、最終的には「燃え尽き症候群」でうつ病になるまで目一杯スケジュールを入れてしまったことを著書で振り返っているが、C8 も姫乃と同じ様に長年いじめ被害に遭っているのです、この状態に陥っている可能性は高い。ただ、在京の姫乃との相違点は、姫乃は地下アイドルをするために風俗で働いてまで生活費を稼ぐ必要はないが、地方出身の C8 が地下アイドルという癒しの空間を維持するためには、絶対に風俗で働く必要があるということである。ただし、一時の癒しのために割に合わないスティグマを背負うというのは「自傷的存在証明」なので、いずれその矛盾から心理的・経済的な破綻が引き起こされるであろう。

①- (2) の場合は、スティグマへの防衛機制である。風俗で働く本当の理由は、昼の正社員よりもそちらの方がお金も稼げて居心地がいいから、と推測される。だが、彼女の中には性風俗産業に対する強い偏見がある。それと折り合いをつけるためには、何らかの正当な理由が必要だ。そのために「反動形成」の防衛機制が発動され、風俗は嫌だ、辞めたいという言葉が度々用いられる。だが、実際は風俗で働くことの方が昼の仕事を続けるよりも彼女にとっては意味があるのである。

この可能性も無視はできない。何故ならば、C8-47「ただ、まあ昔から夜をするつもりがなかったころから知ってたほどのお店だし、わたしが知ってるくらい有名な、芸能人も在籍してるってことは、なんでしょう、その人たちがいるからすごいお店だから、わたしが相応しいとは思えなくて。ただ、有名な人もいるってことは個人情報守ってくれるんだろうなって。信頼で選びましたね。」と自分が在籍している風俗店を称賛するナラティブはそれを強く疑わせる。そもそも一般の女性は高級風俗店に関心など無い。それを知っている段階で彼女は一般の女性とは言えないはずだ。であるならば、売れない地下アイドルよりも、彼女が縫

り付いているのは、寧ろエリート風俗嬢という地位とお金なのではないか、という疑念はやはり消せない。

最後の②－(1)の可能性であるが、三つの中では、一番可能性が低いと思われる。これも「反動形成」であるが、インタビューの最初から最後まで、自分が感じた違和感の中核は、彼女は本当にアイドルになりたいのであろうか、である。もし少しでも、アイドルに対する執着が見えたならば、このような違和感は持たない。従って、彼女の矛盾する言動と行動から推測される彼女の本音は、①－(1)か、①－(2)、或いは中途半端であるが、その両方を無意識のうちにぼんやりと実感しているケースである。

彼女が、地下アイドルと風俗とどちらにやりがいを感じているのかは、彼女の他の言動をもう少し探る必要がある。最初に、C8 が風俗の仕事について語る箇所を再度詳細に分析してみると、彼女は一貫して夜の仕事に対して否定的だ。C8－220「わざわざそういう人たちと会話したいとは思わないけど、まあ言われた瞬間は傷つく。したくてしてるんじゃないよって。」というナラティブはその象徴である（※C-3-⑧参照）。見ず知らずの人間から、「あ、風俗嬢」と言われるのは、スティグマを実感する屈辱的な瞬間だ。彼女がこの仕事で、全くエイジェンシーを発揮していないわけではない。C8－66「やるからにはやるだけ。向いてるとかじゃなくて、じゃあ向いてないなら、もしできてないなら、できる子になるし、できてるならせっかくなんでもっとできる子になるし、正直、ね、その、健全なマッサージ店ではないから、夜のお店の要素はあるけれども、何でも嫌だ嫌だ言ってるって何もできないから、そこはもう、うん。」というナラティブには、嫌な仕事であっても、自分を向上させよう、少しでも客に満足してもらえるように技術を高めようという姿勢も伺えるのである。だから、彼女は風俗という仕事にスティグマを感じてはいるが、その存在意義を全否定するような考えではない。それを効率良く利用する、やる以上は多少の努力もする、お店に対しても多少の誇りは持つ、これが彼女の考え方だとすると、一貫しており、そこに嘘は無いように思われる。

次に、地下アイドルに対して彼女が語っている箇所を検討する。この部分と風俗について語っている部分を比較分析すれば、①の可能性のうち、どちらがより妥当性が高いか自ずと判明する訳だが、C8 がアイドル、或いはアイドルと言う仕事に対して語る箇所を読んで浮かび上がってくるのは、極めて複雑な感情である。それは、愛と憎しみの両方であるとも言っているのだが、辛うじて愛が優勢にある、といった程度の差しかない。従って、やはりアイドルに拘る理由が腑に落ちない。

ヴェルレーヌの詩句、「選ばれてあることの恍惚と不安の二つ我に在り」とでもいうようなアンビヴァレントな感情を C8 はアイドルに対して抱いており、彼女自身に対してもそうである。自分自身の肯定と否定を彼女は繰り返すのだ（※C-3-⑨参照）。だが、彼女は地下アイドルの仕事を、風俗の様に一貫してネガティブには捉えていない。C8－88「どこからでも嬉しいけど、ま、とりあえずわたしを応援してくれてるっていうのが分かって嬉しいですね.」、C8－184「ステージで歌うっていう貴重な機会、もらってるから楽しんでくくらいじゃないですかね.」、C8－234「ステージに立てるのは限られた人だから、ま、それができたってことが得たことじゃないですか.」などのナラティブはどれも地下アイドルになったことを肯定的に捉えている。確かに、C8－141「アイドルの衣装は好きだけど、アイドルの曲調が正直あんまり好きじゃないし、

アイドルっていう存在が好きじゃない。腹黒い子を見てきてるから。」や、C8-142「まあ、うん。良いイメージがないんですよ。」のように、アイドル全般を否定する発言もあるのであるが、相対的に見ると、彼女は地下アイドルという仕事に、風俗の仕事よりも遥かに真摯に向き合っている。それは、C8-206「それです、正直。楽しくないとは言わないし、楽しい瞬間もあるんですけど、もともと目指していたものでもないからなおさら。」というナラティブに集約される。彼女は、地下アイドルという場所で、文字通り『承認』をめぐる闘争を戦っているのである。そう考えると、結論として、①- (1)「実は地下アイドルには『承認』があり、癒されるため、そこから離れられない。」が支持されることになる。

姫乃や C8 が長年いじめの対象だったことは、地下アイドルになるための重要な要素である。いじめによって、「内的作業モデル」に欠損を負った存在は「承認」への渴望が発生する。そして、システムとして「承認」が構造的に組み込まれている地下アイドルとファンの関係は、彼女達を強く引き寄せて離さないのだ。C8 は、正直「アイドル＝腹黒い女性」という一種の偏見を抱いており、アイドルの格好やファンにちやほやされることは好きでも、アイドルという存在そのものは好きではない。その嫌いな存在に自分になることには抵抗を感じている。また、地下アイドルの中でもマイナーな存在である彼女は、C7 のようなささやかな誇りすらない。C7 は、グループのセンターであり、握手会や物販で最も人気がある存在である。それなりに評価されるグループの最重要人物であれば、「承認」の度合いは一層強くなるであろう。それに比べて、ほとんど駆け出しで、知名度も無い C8 は、他のアイドルと比べてコンプレックスも抱くであろう。従って、癒しの空間である地下アイドルの世界を全面的に楽しむこともできないである。その結果が、「戦っている」という感覚になるのである。逃げないのは自分自身のプライドが許さないからと、ささやかではあってもそこに喜びがあり、誇りがあるからである。そして何よりも、ファンの「承認」、自分をスカウトしてくれた事務所スタッフの「承認」など、彼女の人生で全く得られなかったものが、地下アイドルを続けている限り手に入る意義は大きい。彼女は、その「承認」を手放したくないから、風俗嬢のスティグマを背負っているのであるが、これで漸く全てが腑に落ちるのである。本物のアイドルを目指すならば、スティグマを背負う風俗嬢は絶対に避けるべきだ。だが、求めているものが人間としての今現在の「承認」ならば、そのスティグマは背負うに値するし、格別一生を台無しにするものでもない。地下アイドルで「承認」が得られない状態になれば、そこから別の居場所に新たな「承認」を求めて移動すれば良い訳で、それは恐らく昼の正社員ということになるのであろう。だが、やはり普通に考えて、女性がスティグマを背負ってまで「承認」を求めるのは異常だ。逆に言えば、スティグマを背負わない限り彼女は人間として未熟過ぎて、誰からも「承認」されないのだ。前職の正社員の仕事振りに関して彼女は具体的に何も語らないのであるが、恐らく余りにも惨め過ぎて語りたくないのであろうと推察される。それは、彼女の人生が常にいじめに苛まれてきたことから理解できる。C8 は、「孤独がすごく辛い」、「1 人は耐えられるけれども孤独は耐えられない」と語るのだが、実際彼女の半生は孤独以外の何物でもない。幼稚園の頃から、彼女は常にいじめの対象であり、孤独なのである。それは、C8-169「ぜんぜん。なんか楽しい時期もあったんですけど、楽しい時期、も、あつ

たっていう割合。基本的にいじめられっ子とか、いじめられてなくても、もう、1人。とか。」というナラティブにも表れているが、彼女の役割のデフォルトは、何時も「いじめられっ子」だったのである（※C-3-⑩参照）。

今までも、A11やB4など壮絶ないじめに遭った女性はいたが、C8ほど幼少期から徹底して、という存在は初めてである。そして、これは明らかにC8に色濃く伺える、自閉スペクトラム症（ASD）の傾向が原因であると推察される。これまで検討してきた女性の中では、B11とC6はASDの確定診断が下りている。だが、それ以外にもB2やA11なども話していて独特の拘りや、空気の読めなさ、会話の噛み合わなさを感じた。そしてその感覚は、より一層C8に対して感じるのだ。彼女が独りぼっちになってしまう理由は、断じて顔が気持ち悪いからではない。それは、A11も一緒だ。2人共、地下アイドルと声優候補である。外見的魅力が平均的な女性以下ということは絶対にない。寧ろ、普通的女性よりも遥かに魅力的だと言って良いだろう。だが、独特の間やずれた表情、空気を読まない言動、ぎこちない挙動などが、C8の場合は「顔が気持ち悪い、声が気持ち悪い」という評価に、A11の場合は「キモワライ」というあだ名に繋がっているのだと思われる。ハイパー・メリトクラシー型能力が何よりも評価される新自由主義のポストモダン社会において、それを致命的に欠いているASDの女性達は、さぞ生きづらいだろう。

C8は、自分自身をC6と同じように「メンヘラ」と自称しているが、筆者は「メンヘラ」という広義の「行動や発言がイタイ情緒不安定な精神障害者」という概念には、主として境界性パーソナリティ障害（BPD）や自己愛性パーソナリティ障害（NPD）を基底にする群と、自閉スペクトラム症（ASD）を基底にする群の二種類があると考えている。そして、A11やC6、C8は、明らかに後者である。コミュニケーション能力に欠陥があり、そこから派生する周囲とのディスコミュニケーションが無用な摩擦を生み、いじめを誘発し、結果的に精神疾患を発症して、イタイ行動をとってしまう。「メンヘラ」特有のイタイ行動は、表面に表れているうつ病や不安障害が原因ではなく、背景に潜んでいるパーソナリティ障害や発達障害のせいなのだ。

C6のイタイ行動として、実際彼女が「メンヘラ」と呼ばれる直接の原因になった病み tweet が挙げられるが、そもそもその行動をすれば、他の人がどういう目で彼女を見るか、普通の人間ならば分かるはずなのだ。それが分からないということは、やはりC6は空気が読めないASDなのである。病み tweet は、BPDやNPDの「メンヘラ」もしばしば行う。ASDの「メンヘラ」と異なり、彼らは、周りが病み tweet をどう捉えるかきちんと分かっている。きっと心配するだろう、そして、自分に構ってくれるだろう、という予測の下に彼らは極めて操作的な行動を行なっている。「メンヘラ」が「かまってちゃん」とも揶揄される所以でもある。

両方の「メンヘラ」に共通していることは、孤独に耐えられないことだ。BPDやNPDは、これらの疾患概念の中核にそもそもそのような孤独への不耐性と他者への依存が組み込まれているので当然である。だが、ASDであってもやはり社会的な存在である人間は、孤独に耐えられないのだ。「1人には耐えられるが、孤独には耐えられない」と、心理検査に答えながらしみじみとC8が呟いた時、幾ら空気が読めないASDであ

っても、周囲の人が自分に距離を置いていることくらいは分かるのだな、と改めて実感させられた。その原因が自分自身のどの発言によって引き起こされるのかは C8 には分からないのであろうが、発達に障害を抱えて、幼少期から孤独を味わってきた C8 が、虐待を受けた子どものように極めてヴァルネラブルで、内面が傷付いているのは当然のことなのである。彼女は上手く言語化できてはいないのだが、地下アイドルから得られている「承認」は、確実に彼女の心の拠り所になっている。だが、姫乃と異なり、彼女は地方出身者なのだ。生計を立てるためにスティグマが張り付いた風俗嬢として生きることは、ただでさえ低い彼女の自尊感情を下げ、長い目で見れば今よりも一層パワーレスな状態に陥らせる。地下アイドルとしても結果を出すためには、ファンとの交流の間にハイパー・メリトクラシー型能力が、ある意味普通の仕事よりも求められる以上、彼女の『承認』をめぐる闘争が成功する未来は考え難いのである。

(2) 本項のまとめとして、最も「闇」の深い地下アイドル・C9 について考察する。彼女は、地下アイドルとしてデビューしたものの、直ぐにコンビを組む仲間との関係にひびが入り、解散を余儀なくされた。そして、再デビューが決まって新グループのメンバー構成も固まりつつあったのだが、自分から全てを台無しにした。一方的に彼女はグループを脱退したのである。それは、お披露目のデビューイベントの直前だった。Twitter では、常に彼女に対して仲間内から身勝手、非常識、信じられない、という大バッシングが沸き起こる。彼女は、「炎上アイドル」を自称して、バッシングに対する Twitter での挑発的な投稿を止めない。そこに上げられるのは、時にホストがラスソンを自分のために歌っている動画であり、時には 100 万円を軽く超えるような札束を無造作に並べた写真である。また、大量に買った高価なブランド品の鞆や化粧品を写した写真がこれ見よがしに投稿され、炎上しては削除する、という非常に未熟な SNS のコミュニケーションを続けていた。アイドルであるにもかかわらず、風俗で働いていることを隠さず、イケメンの男とお金が人生の全てだと言い切り、これまで使った美容整形の額は 700 万円以上と公言する。だが、ログアウトという名前で Twitter のアカウント名が更新され、「もう全部終わりだ、死ぬ」という絶望的な呟きが、彼女の最後の投稿となった。紛うことない「メンヘラ」であるが、C8 と異なり、背景に見えるのは BPD と NPD である。実際、彼女の心理検査において、BPD はカットオフポイントの 10 点を超えた。最も「闇」と「病み」が深く、それ故に地下アイドルの世界の「承認」では救われず、ホストからの「承認」に逃げ込んだが、程なくして力尽きたのであろう彼女の波瀾万丈の人生を、二度に分けて実施したインタビューから検討したい。彼女はある意味、本研究のインフォーマントの中でも、「実存的貧困」概念とそれが生み出す「自傷的存在証明」を最も分かり易い形で体現している存在の 1 人である。

彼女は、C9 - 7「月 300 (万) くらいじゃないですか。」と自分の生活費について事も無げに語る (※C-3-⑩参照)。前項で、23 歳の女性 (C5) が月の生活に 60 万円が必要だと主張することを、異常な金銭感覚であると指摘したが、20 歳の女性が、300 万円かかるのは完全に異常を乗り越えている。そして、当然この中にはホストクラブでホストに使うお金が含まれている。C5 も自身の承認欲求を満たすために、SNS で自

分のセレブな暮らしを誇示していたが、C9のそれは、一層露悪的であり、顕示的である。私を見ろ、私に注目しろ、と絶叫しているようなTwitterの投稿内容の過激さは、見ていて胸が苦しい。それは、彼女がその悲鳴のようなtweet内容に比例する程に、全く「承認」を欠いた人生を、20年間送ってきたことの結果であるからだ。

ブランド物で自分自身を着飾りたい理由を、C9は、C9-50「やっぱ、見た目、わたしの場合整形したりとか、外見をすごく気にしちゃうから、自分の見た目を、なんだろ、顔とかスタイルとか、そういうものを整えた上で、やっぱそういう物も身に付けて、相手、相手からっていかいろんな人から周りの人からどういう風に見られるかっていうの（気にしちゃう）」と語る。彼女は、いじめによって壊れた自我を、ブランド品という防壁で守っているのである。ブランド品だけでなく、美容整形も彼女の自我を守る手段であろう。実際、彼女は、美容整形を行った理由を、C9-56「単純にいじめられて整形し始めてハマった。」と語っている。そして、ブランド品や美容整形という防壁に彼女を追いやったいじめに対しては、C9-58「んー、もう、普通にはぶられたり、無視されたり、愚痴られたり。」と語るのであるが、無視ほど人間の尊厳を毀損するいじめはない。そこにいないことにされる、すなわち究極の「非承認」に人間は耐えられないのである（※C-3-⑫参照）。

母子家庭に育ったC9は、小学校の低学年から既にいじめの対象だった。その点では、C8と一緒にいる。違うのは、いじめに対抗したことである。黙って耐えるタイプのC8と異なり、C9が取った行動は常軌を逸している。高校在学中に、美容整形の手術を行ったのである。無論、この時点では未成年であり、大金を稼げるような状態でない。従って、彼女が採った手段は美容整形外科の広告塔になることである。ビフォー・アフターの顔写真を実名でクリニックのホームページで公開することで、全額無料の大きな手術を受けたのである。そこには、自分をいじめた人間達よりも美しくなって、見返してやりたいという憎しみが強く感じられる。因みに、整形前の写真と整形後の写真を比較して投稿し、彼女はTwitterで美容整形の素晴らしさを語っていた。これも極めて自虐的である。

だが、恐らく醜形恐怖症を発症している彼女の美容整形には、終わりが無い。そして、繰り返した美容整形を維持するには、多大な費用がかかる。C9-92「毎月50（万）とかかな。」と彼女は語るが、大物芸能人や余程の富裕層でない限り、月額50万円の維持費を生涯に渡って確保することは不可能であろう。従って、彼女には性風俗で働く以外に道がないのである。維持費を融通できなければ、彼女の勝利の証である大切な顔は、C9-94「崩れていきます。」という言葉通りになるのである（※C-3-⑬参照）。

最初のインタビューを行った際は、彼女は自分が美しくなった確かな実感を持っており、自分が一番可愛い、自分が目標とする芸能人などいない、とも語っていた。その時は、昨今若い女性達の間で肯定的に言われる「自分に自信が持てる整形」なのかもしれないと感じた。だが、同時に、「まだ納得できない」というナラティブに深い「病み」を感じたのも事実である。また、自分が一番可愛いという感覚は、明らかにC2と同じで、Vaillantによる防衛機制的分類ではレベル1に該当する、自己愛的精神病的防衛の「躁的防衛」で

ある。彼女の受け答えは総じて大言壮語が多いのだが、容貌以外に彼女が同世代の女性に比較して格別優れている部分はない。高校の偏差値も平均以下であり、特筆すべき課外活動の成果も存在しない。それにもかかわらず、まるで自分が本物のセレブリティであるかのような受け答えをする点は滑稽ですらあるのだが、そこには地下アイドルというよりも、彼女自身に潜むの深い「闇」と「病み」を感じる。心理検査の結果もそれを示すように、「生きがい感スケール」では、かなり上位に位置する高得点を示したが、これは真に受けられない。「躁的防衛」が全面に出ている彼女の生きがい感は安定的でなく、恐らく簡単に絶望的な数値に変わり得るからだ。そして、その理由としては、担当のホストに切られた、という事実で十分であろう。今彼女は歌舞伎町の有名ホストのエースとして月に数百万円のお金を注ぎ込んでいる。当然、ホストも彼女をエースとして厚遇するであろう。その刹那の心地良さが、現在の「生きがい感スケール」に反映されているだけなのだ（事実、ホストに切られかけていた二度目のインタビュー時には、5つの心理検査の数値は軒並み急落した。）。C9は、ホストクラブで使った一晩の最大額を、C9-118「まあ最後小計400とか。」と平然と語る。C3と同様に、彼女もまた一日で浪費する最大額が400万円なのである。彼女が偽物のセレブリティである以上、この時点で既に破滅へのカウントダウンが始まっているのだが、彼女はまだ気付いていないのである（※C-3-⑭参照）。

実際、ホストと風俗嬢という関係は、割れ鍋に綴じ蓋だが永続性がない。孤独からお互いに必要とし合うが、結局は傷付けあって終わるのが常だ。ホストがお店を上がるまで「エース」を続けて、彼の引退と共に結婚というのは、風俗嬢が語る典型的な夢物語である。実際に全く無い話ではないが、可能性は限りなく低い。そもそも、毎月数百万円を風俗で稼いで貢がなければならない「エース」を続けられるという精神状態が普通ではない。ほとんどの女性は、その前に心理的にも肉体的にも経済的にも破綻する。そして、事実ごく短期間で、文字通りC9は破綻した。2回目のインタビューの際、彼女は完全に憔悴し切っていた。「躁的防衛」はまだ僅かに残っていたが、それでも1回目のような万能感は見られず、自信もだいぶ喪失していた。ホストとの関係が上手く行っていないのは、傍目にも明らかであった。BPDの女性は、自分自身の存在証明を異性の愛による「承認」に全て委ねている。恋愛が上手く行っている時は、彼女達はまるで躁病患者のように元気で、自信に満ちている。その一方で、恋愛が上手く行かなくなった時、一瞬にして彼女達はうつ病患者のように憔悴する。自我の不確かさを他者に依存して補完するということは、自分自身の「実存」を他者に預けるということである。それは、委ねる相手を間違えた時、致命的な存在論的苦悩となって自分に跳ね返ってくる。間違ってもそれをホストなどに預けてはならないのだが、ホストクラブの「承認」のメカニズムに取り込まれた「実存的貧困」状態の女性達は、他者に自分の命綱を簡単に渡してしまうのである。その後は、相手の言うなりになって、希望する額のお金を貢ぎ続けなければならないが、往々にしてその要求は女性の限界値まで上がっていく。そして、体を売り続ける女性達は精神が摩耗し、徐々に破滅に近付いて行くのである。この時のC9からも、既に限界はを超えていると感じられた。一度目のインタビューから3か月も経っていないのであるが、まるで別人のように生氣のない表情をしており、言葉も少なく、誰が見ても

重度の精神障害者だった。それでも、最初はまだ「躁的防衛」が見られた。次はどういった活動をするつもりでいるか、という筆者の問いに対して、C9は、C9-2-4「まあ、AKBに入りたいなって。」と答えるのである。AKBグループは、オーディションとメンバーによるドラフトが選考の基本であり、事務所の推薦でここに入れるということは、表向きはないはずである。従って、事務所同士がC9のメンバー入りに関して話し合っている、という彼女の話には違和感を覚える。どこまで彼女が筆者に本気で話しているのかは分からない。事務所が彼女を騙して繋ぎ止めているのかもしれないし、彼女のプライドが、地下アイドルに留まることを良しとしなくなったのかもしれない。だが、一回目のインタビューでは、彼女は次の様に発言していた。

原田 179：アイドルの仕事は天職だと思いますか？

C9-179：はい。

原田 180：だとすると、これからもうずっとアイドルを続けてくってという考え方なんですかね？

C9-180：2年くらいしたら辞めます。

原田 181：天職なのに？

C9-181：ピークで辞めたいです。

(中略)

原田 256：ではこれからアイドルとして2年間やりきる中で、こう、行きたい地点みたいなものがあります？たとえば武道館に行きたいとか、東京ドームでやりたいとか。

C9-256：んー、今のままでいいです。

原田 257：今のままでいいんだ。

C9-257：うん。

原田 258：小さいライブハウスみたいところで、他のアイドルグループと、、、

C9-258：いや、こちらは意外とちっちゃいのでやんないんで。

原田 259：あ、そうなんだ。

C9-259：海外も行きますし、ZEPPも赤坂ブリッツも定期的にいろいろやります。

原田 260：なるほど。だともう、アイドルとしては、今は中堅レベルなんですかね？それとももう立派な上級レベルなんですか？

C9-260：中堅じゃないでしょう。たぶん。

原田 261：それより上のアイドルってなると、具体的に何になるんですか？

C9-261：上？AKBとか。

原田 262：AKBとかしかいない？上には。

C9-262：いや、その系列。

原田 263：あと乃木坂とか？

C9-263：うん.

原田 264：じゃあ C9 さんもああいいうアイドル雑誌みたいなものに何回も載ってるんですか？

C9-264：うん，載ったことがあります.

AKB には入らなくていい，今の状態でも海外にも行くし，ZEPP も赤坂ブリッツでも公演する，だから，「天職」としてのアイドルを 2 年間やり切る，「躁的防衛」の中でそう言い切った C9 が，C9-2-8「地下アイドルじゃちょっと食べていけない．生活をしていけないんで．好きなことをやって，食べていくってなったらやっぱそこ（AKB48）目指すしかない．」と言うのである．担当ホストから，相当追い込まれているのだろうな，と感じた．聞けば，ホストクラブで使う額は，月に 500 万円に増えていた．その間，お金を工面すべく，まともにアイドル活動などできるはずもなく，ただひたすら彼女は金策に走り回っていた．主な収入源は，デリヘルからソープランドを経て，デートクラブに移行していた．デートクラブで，1 回 10 万円で会員と性行為付きの食事をする．それを月に最低 10 回は行うのである．それと並行して，愛人作りに SNS のパパ活サイトを活用していたが，こちらは余り上手く行かなかったという．C9 は，パパ活の意味を間違っ理解しており，「パパ＝愛人」だと考えていた．彼女は一回限りの売春ではなく，月契約をしてくれる富裕層の愛人を探していたのであるが，そのような都合の良い存在は，SNS アプリの登録者の中にいなかったのだという．ソープランドで働くのが最も効率良くお金が貯まるとスカウトに助言されて，C9 は吉原の高級ソープランドに入店したのだが，直ぐに心身共に限界が来てしまう．彼女は，粘膜が弱く，性行為の繰り返に女性器が耐えられなかったのだ．C9-2-89「ソープランドって 1 日 11，12 人相手しなきゃいけないですよ.」，C9-2-93「しかも部屋が，もう薄暗くて，外に出ちゃダメで，閉じこもって 1 日中．で来た人を相手する.」という彼女のナラティブから，大金を稼げるその仕事が，若い女性にとっていかに過酷な仕事であるかが推察されるが，実際彼女は，ここ最近C9-2-95「常に不調」であり，うつ病，不安障害，パニック障害，摂食障害は悪化の一途を辿っている．C9-2-100「いや，太ってます.」，C9-2-109「満腹感はないです.」というナラティブは，典型的な摂食障害患者のそれである．これらの病気は，岡田が愛着障害の指標として指摘するものであるが，それらが一気に悪化している状況から，彼女の愛着システムが一層の危機に瀕していることが理解される．その状況は C9 の自尊感情を大きく低下させるため，「躁的防衛」の最中であっても，C9-2-113「わかんないけど．ずっと自信ないです.」という本音が思わず口に出るのである．その自信を何とか取り戻そうと，C9 は美容整形に依存する．だが，1 回目のインタビューで語っていた自分が一番可愛い，という自信は既に彼女の中から霧消している．畢竟，彼女にとって自信が得られるのは，C9-2-121「（美容整形を）したばかりの時は.」なのである．C9-2-122「時間経つとまた（自信が）なくなっていく.」のだ．彼女の自信は永続的なものではない．何故ならば，彼女が幸福を得る手段を誤っているからである（※C-3-⑩参照）.

岡田は、人間が幸福を感じられる三つの仕組みを以下の様に述べている。

生理的な満足や快感から、精神的な充足感や達成感まで、喜びや満足の種類も幅広い様に思えるが、人に喜びや幸福を与える生物学的な仕組みは、実は三つしか存在しない。

一つは、お腹いっぱい食べたり、性的な興奮の絶頂で生じるもので、エンドルフィンなどの内因性麻薬（脳内麻薬）が放出されることによって生じる快感だ。生理的な充足と深く関係し、われわれが生きることに最低限の喜びを与えてくれる。

二つ目は、報酬系と呼ばれる仕組みで、ドーパミンという神経伝達物質を介して働いている。大脳の線条体の側坐核と呼ばれる部位で、ドーパミンの放出が起きると、人は快感を味わう。

ドーパミンの放出が起きるのは、通常、困難な目的を達成したときだ。サッカーのゴールの瞬間や、麻雀で論をした瞬間にドーパミンが放出され、「やった！」という快感になる。（中略）

ところが、この報酬系は、しばしば悪用される。面倒な努力抜きで、ドーパミンの放出だけ引き起こし、短絡的な満足を与えてしまえば、強烈な快感を手軽に得られるのだ。

その代表が麻薬である。アルコールのような嗜癖性のある物質も、ギャンブルのようなやみつきになる行為も、ドーパミンの短絡的な放出を引き起こすことで、依存を生じさせる（麻薬の場合には、内因性麻薬の放出を伴う場合もある）。

実は、もう一つ、喜びを与えてくれる仕組みが存在する。もうお察しのことと思うが、それが愛着の仕組みである。こちらはオキシトシンの働きに負っている。愛する者の顔を見たり、愛する者とふれあうとき、興奮というよりも安らぎに満ちた喜びが沸き起こるのだ。（岡田 2019：99-100）

C9 は、岡田が報酬系の悪用と指摘する仕組みを利用して、一切の努力無しで短絡的に幸福を得ようとしている。それが、嗜癖である美容整形であり、ホストへの依存なのである。ホストへの依存の背景には、本当に欲しいもの、すなわち「無償の愛」が隠れている。彼女は、正常な愛着システムによって、つまりオキシトシンの働きによって安らぎを手に入れたことがないため、本能的にそれを求めているのであるが、実際にはそれが手に入らないという実存的フラストレーションを抱えていた。それを代理的に補うのが、お手軽に手に入る報酬系の悪用なのである。だが、それは結果的に依存を生じさせ、それに縋れば縋る程、快感は減り続ける。その間、彼女の実存的フラストレーション自体は一向に解消されないため、報酬系の快感が目減りした分、埋め合わせる形で、生理的な快感までを体が欲しがり始める。それが、摂食障害なのである。だが、本来一つ目の幸福をもたらすシステムとして最低限度の喜びを与えてくれるはずの食べ物が、報酬系の悪用に転嫁された結果、嗜癖に代わり、食欲はコントロールを失って益々彼女を苦しめているのである。愛着障害がもたらす深刻な苦しみが全て今の彼女の生き様に凝縮されている。つまり、彼女は未だ、誰にも本当の意味で愛されていないのだ。もし、彼女が誰かに愛され、確かな愛着を感じているならば、オキシト

シンの働きが彼女の実存的フラストレーションを緩和しているはずだからである。従って、担当ホストが C9 に対して「今のままで可愛い」と言うのは、恐らく美容整形に使う金があるならば、自分に使えと言う意味なので、それを優しさだと鵜呑みにはできない。そして、彼女もそれを薄々分かっているから、その言葉を信じられないのであろう。つまり彼女自身も、ホストから愛されているという実感が持てていないのだ。

上田（2019：53）は、「恋をして、その人に自分を承認してくれるかどうかを預けてしまったときには、神との契約と同じですから、それがダメになったときのダメージがものすごいのです。いくら『愛は諸行無常なんですよ』といったところで、耳には入りません」と指摘しているが、今の C9 の状況は完全にそのような状態である。彼女は、自分自身の「実存」を、完全にホストに預けている。お金を貢いでホストに「承認」される限りにおいて、彼女は辛うじてこの世界に存在しているのだが、恐らく、ホストの要求は止まらないどころか、今後も上がり続けるだろう。何故ならば、ホストにとって彼女は、所詮代替可能な存在なのである。潰れたところで、別の女性をまた同じように仕立て上げて、風俗や AV 産業で働かせて自分に貢がせればいいだけなのだ。ポストモダンの日本社会には、不安と孤独を深く内包し、虚飾の優しさであってもそれに縋りたい若い女性達は溢れる程存在している。故に彼女 1 人に気を遣い、自らのプライドを捨ててまで C9 を王女の如く遇する必要性は全くないのである。数か月間ホストクラブに通っただけで、彼女もそのようなホストクラブの搾取のシステムと、ホストの真意に気付いてしまう。そもそも自分が本当に大切にしている女性を性風俗産業に従事させて平然としていられる男性などいないであろう。彼女がそうなっている段階で、その男性の中に彼女への愛など一切無いのだ。だが、人生の中で「重要な他者」を一度も持たず、愛着障害を抱えた彼女はそれでもホストから捨てられたくない。それは、これまでお金を貢ぎ続けてきたから未練がある、という執着の類ではない。醜く歪んではいるが、それは寧ろ信仰に近いだろう。E4 が、彼女達を「信者」と表現したことを思い出し欲しい。C9 は、ホストに依存し、不覚にもその「承認」に「実存」を委ねてしまったのだ。その結果、彼女の「実存」は現在危機的状态にあるため、実存的フラストレーションは過去最悪の状態まで亢進し、摂食障害、美容整形という嗜癖は病的な水準に達している。そして、ホストクラブ以外の場所でもこうした嗜癖に湯水のごとくお金がかかってしまう以上、早晚彼女の人生は完全に破綻するだろう。どれ程彼女が若くて美しく、その肉体に性的な意味での価値があろうとも、一日 24 時間の中でそれを商品として利用できる時間と回数には限界がある。そしてそれでは、現在の異常に膨張した彼女の消費水準を維持できない。また、肉体を資本として継続的に再利用するには、休憩やエネルギー補給も欠かせないのだが、今の追い詰められた彼女は、肉体の再利用のためにも満足にお金や時間を使うことができていない。Twitter で呟いた、「死んでいる時間がない」という彼女の言葉には、過労死に追い込まれているサラリーマンのそれよりも遥かに悲愴感が漂っている。何故ならば、死んでいる暇がない程の業務量の仕事は、全てスティグマが付与された苛烈な時間でもあるからだ。

最初のインタビューの時は、ホストとの良好な関係から、C9 はかなりの多幸福感に包まれており、確かに「躁的防衛」は見受けられたものの、ある程度彼女の「実存」は保たれていた。だが、ホストからの「承認」

が、上田が指摘するような「神との契約」に移行し、そしてそれを失いかけている今、彼女は死の淵に追い込まれていると言っても過言では無い。本来、地下アイドルであった彼女は、ホストなどという不確かな存在に自らの「承認」を委ねることなく、不特定多数の彼女のファンにこそ、「承認」を託すべきであった。無論、その「承認」は家族や恋人、親友など、「重要な他者」から得られるような永続的なものではないが、それでも遥かに彼女を幸せにしてくれたはずである。

地下アイドルが得ることのできる一時の「承認」とそれがもたらす多幸感を、姫乃は以下の様に指摘している。

地下アイドルの子たちは観客から声援をもらったり、物販に会いに来てもらったりすることで承認欲求を満たします。彼女たちの「有名／人気者になりたい」欲求を実現するためには、応援してもらうことが不可欠だからです。

そして、ファンの側にもアイドルの子たちに認知されて、レスをもらいたい欲求があります。応援することが認知に繋がるため、自然と互いに満たし合う関係になるのです。こうして地下アイドルの現場では、欲求の満たし合いが密に行なわれています。（姫乃 2017：160）

C9 が地下アイドルとしてデビューした時は、彼女もまたこの欲求の満たし合いの中で、かなりの幸福を感じていたはずなのだ。長らく人生において「承認」を欠いてきた彼女は、居場所を確保して、幸せになる切欠を見つけたはずだった。少なくとも、彼女はアイドルを「天職」であると言って、充実した日々を送っていたはずなのである。それがたった数か月、ホストに嵌っただけでこれ程までに人生が壊れるのだ。

以前にも指摘したが、「天職」を全うすることが、最も自己実現に近い生き方であり、真摯に天職に向き合う限りにおいて、将来に幸福は約束されている。それは、A1 や B8, C1 の人生からも明らかである。「職業に貴賤は無い」という言葉が正しいのは、あくまで天職に限ってである。天職以外の仕事には、明確に職業に貴賤は存在する。スティグマを伴う仕事は、それを伴わない仕事よりも人の自尊感情を下げて人生を不幸にするし、生きがいを奪う。だが、天職であると本人が自覚する限り、最大のスティグマを伴う AV 産業ですら、人を幸福にすることを C1 が証明した。そして、称賛され、本来は濃密な「承認」関係をファンと構築できる地下アイドルでさえ、姫乃自身がそうだったように、迷いを持って臨めばその「承認」には価値が無くなる。自分とファンを「物象化」して消費するようになった今、地下アイドルどころか、メジャーアイドルになったところで、C9 の絶望は救われないと思われる。何故ならば、既に彼女はアイドルという職業に「人生の意味」を問うていない。AKB48 に入りたいのは、自己実現でも、大好きな歌を歌うためでも、楽しく踊るためでも、誰かに勇気を与えるためでもない。ただ単に、ホストに貢ぐお金を効率良く稼ぐためなのだ。誰かに夢や希望を与える^{アイドル}偶像だった彼女の存在は、今や単なるお金の^{シンボル}象徴に成り下がったのである。AKB48 に入りたいというのは、失った自信を取り戻したい、という彼女の切なる願いも含んでいるのかも

しれないが、いずれにせよ、何もかもが本末転倒である。F 群で、実際に AKB48 グループに所属していた元アイドルのナラティブを取り上げるが、そこにある情熱と比べると、今の C9 の中には欠片もアイドルやファンに対する敬意が無い。

結局 C9 は、ただ自分が美容整形したことを間違っていないと証明したかっただけなのだろう。ホストさえ、元々は美しく生まれ変わった自分を愛する附属品として利用していたのではないだろうか。自分はこれ程若い魅力的な男性に愛されている価値ある人間なのだと周囲に顕示し、歪んだ形で自己愛を満たしていたのではないだろうか。だが、須臾の間にその関係性は逆転し、C9 はホストに自ら「承認」を委ねて彼女の「実存」を放棄した訳だが、その背景にあったのは、やはり不安や孤独、或いは後ろめたさといった何らかの欠乏感なのであろう。上田（2019：37）は、「多くの人は気づいていないかもしれませんが、『モノを欲しがる』というのは現象的なことであって、本当の問題は、おそらくその向こう側にある欠乏感です」と指摘しているが、ここで上田が触れているモノは、必ずしも有形物に限定されまい。美しさ、若さ、地位や名声、そして愛のような無形物であっても、それを異常に欲しがる心理の背後には、必ずそれと同等に異常な欠乏感が潜んでいる。従って、彼女の異常な欲望の背景にある抑制が効かない欠乏・窮乏こそが、まさに彼女にとっては到底「容認できない困窮」であり、「実存的貧困」そのものなのである。

つまるところ、C9 は「孤絶」なのである。それを打開するために、全面的な美容整形という乾坤一擲の大勝負に人生を懸けた。そして、最初のうちは、その賭けに勝利したと思っていた訳だが、その後も一切止むことなく、寧ろ悪化の一途を辿る彼女の自傷的な嗜癖行動から察するに、美容整形をして人生を劇的に変化させた自分自身を心のどこかで後ろめたく思っていたに違いないと感じるのだ。そして、彼女の過去を知らない人間からの視線は憧れや羨望に変わったかもしれないが、実は彼女が本当に欲している愛の領域における「承認」は一切手に入っておらず、逆に彼女は仏教でいうところの「餓鬼道」に落ちてしまったのである。

「阿毘達磨順正理論」にある「多財餓鬼」は、彼女の今の姿そのものだ。「多財餓鬼」は、一切の飲食ができない「無財餓鬼」や汚物などのごく僅かの飲食ができる「少財餓鬼」と異なり、多くの飲食ができる餓鬼である。天部にも行くことができるものは「富裕餓鬼」ともいう。ただし、どんなに贅沢できても「多財餓鬼」は満ち足りることはない。天部はすなわちホストクラブである。そこで高額なお酒に湯水のごとくお金を使って飲食しながらも、陰では摂食障害の過食に苦しみ、ストレスから炭水化物を自宅の居室で孤独に食べ続けるやせ細った彼女は、まさにポストモダン社会の「餓鬼道」に堕ちた「多財餓鬼」なのである。

畢竟、愛に飢餓的に飢えた彼女は、ホストクラブ以外では、SNS に救いを求めている。ビフォー・アフターの写真を何度も Twitter に載せて、自虐的に美容整形の絶大な効果を称えていたのは、それが卑怯な手段であったり、認められない手段であるならば、彼女の生き様が、つまり「実存」が否定されることになるからだ。その投稿にイイね！を押してもらうことで、彼女は自分の「実存」を誰かに「承認」して欲しかったに違いない。内心後ろめたさを伴う美容整形という手段で人生を劇的に変えたことを、SNS という匿名世界であっても、誰かに「正しい」と言って貰いたかったのだろう。叶うことならば、愛している、という言葉

も欲しかったに違いない。だが、美容整形の痛みに耐えることは真の努力ではない。お金を稼ぐために尊厳を捨て、恥を忍び、スティグマに耐えて体を売ることは決して価値ある試練ではない。本当に意味がある努力、価値がある試練は、自らの天職を貫き通すことであったのだが、そもそも彼女は天職等というものに真剣に思いを巡らせたことなど無かったのではないだろうか。本当にアイドルが天職であるならば、ホストクラブになど行かずに、日々レッスンに明け暮れたはずだ。本当に天職ならば、例え AKB48 に入れずとも、誇りを持って小さなライブハウスの公演でも満足できたはずだ。彼女という存在は、最初から最後まで空虚で、その内面も彼女の外見同様にまるで人形のように無機的な造作物で、人の温もりが宿っていなかった。彼女の抱えた「闇」と「病み」は、美容整形という安易な手段で人間の「実存」を自ら放棄したことに始まっていたのであるが、彼女は最後までそれを放棄し、今や彼女を支配する神となったホストに「実存」を丸ごと委ねることで、救われるどころか逆に絶望の淵に追い込まれ、孤独の中でもがき苦しむ哀しい餓鬼と化したのである。この C9 が抱えた欠乏・窮乏（「実存的空虚」）は、まさに「実存的貧困」の中核である愛着障害に由来する。そして、美容整形という自己を喪失させる行為は、Stiegler の「象徴の貧困」状態に彼女が陥っていることを意味する。更に、彼女は風俗嬢となることで、社会的排除の対象となった。この一連の過程を経て、遂に彼女は「実存的貧困」の深みに囚われたのである。

第 4 節 風営法外のサービス（D 群）に従事する女性達の研究

第 1 項 13 人の女性達の概略

(1) 本項では、風営法の枠外で活動している 13 人（平均年齢 21.85 歳）の女性達について考察する。成育過程から見た D 群 13 名の IWM の欠損率は、61.54%であり、7 名全員が 4 つの心理検査においても全て不良の数字を示したため、実存的貧困率も 61.54%である。うち、5 名が経済的に「相対的貧困」の状態にあったため、絶望的貧困率は 38.46%である。量的研究の結果から見ると、D 群は多の群に比べれば精神保健は悪い群とは言えない。ただ、心理検査は概ね不良であり、15 領域中 12 領域で女子大生平均を下回っている。とりわけ目立ったのは、「ミロン臨床多軸目録境界性スケール」の結果であり、A 群に次いで悪い数値を示した。D 群の平均点は、7.444 点であり、女子大生平均の 3.640 点を大きく上回っている。A 群同様に精神医学的に病理学的な水準の者が多数見受けられ、本人や身内に BPD の確定診断を持つ者もいた。生活史に目を向けると、B 群、C 群に劣らず劣悪であり、児童虐待が 13 人中 8 人に確認されており、IWM の欠損が著しい。生活史の中では非行の数が C 群同様に多く、13 人中 5 人が少年法や刑法に触れる成育歴を送っている。1 名は実際に少年院に収監されている。母子・父子家庭出身者が 5 人おり、両親の別居状態も含める過半数近い 6 人となる。また、虐待が無い者でも、いじめ・不登校等が比較的多く確認されている。

総論として言えることは、D 群の女性達は、二極化している。精神保健が良好で、家族関係等にも大きな問題を抱えていないが、金銭目的で亜風俗産業で働いている群と、明らかに精神保健に病理的な問題を抱え、金銭的にも余裕が無く、追い込まれている群である。後者は、幼児期に虐待を受けていたり、顕著に経済的

に貧困であったりして、IWM を欠いている者が多く、深刻な「実存的貧困」、或いは「絶望的貧困」に陥っている。ただ、D 群全体としては、心理検査の結果が B 群や C 群どころか A 群に比較しても若干良好に出してしまうのは、数人が属する良好な群が全体の平均値を引き上げているからである。

パパ活やギャラ飲み、デートクラブなどの亜風俗・疑似風俗産業に関わっている女性達は、一定数風俗産業にも関わっているが、やはりスティグマの実感が強く、それらとは距離を置いている者も多い。だが、その結果、極めて収入が不安定な素人売春やパパ活で生計を立てなければならぬため、「相対的貧困」状態に置かれている者が多かった。結果的に、D 群は最も経済的に困窮している者が多く、「絶望的貧困」状態に置かれている者は、38.46%と全群を通して最も高くなった。本研究を通して、ある意味、若い女性達の経済的な貧困が最も浮き彫りになったのが、D 群である。

コード	年齢	職業	IWM	実存的貧困	経済的貧困	その他特記事項
D1	20	JK ビジネス				
D2	20	JK ビジネス	○	○		高校中退、虐待、非行、母子家庭（里親）
D3	22	素人売春	○	○	○	高校中退、虐待、非行、父子家庭（生保）
D4	20	素人売春	○	○	○	DV, 虐待
D5	28	素人売春	○	○		高校中退、虐待、整形、非行、サイコパス
D6	26	素人売春	○	○		高校中退、虐待、非行、精神・発達障害
D7	21	素人売春				親別居
D8	21	パパ活				
D9	20	パパ活				DV, 自傷、自殺未遂、整形、精神障害
D10	21	パパ活	○	○		DV, いじめ、母子家庭、自傷、自殺未遂
D11	23	パパ活	○	○	○	人種的マイノリティ、父子家庭、虐待、いじめ
D12	21	パパ活	○	○	○	虐待、性被害、非行、いじめ、不登校
D13	21	パパ活	○	○	○	母子家庭、虐待、DV
	21.85		61.54%	61.54%	38.46%	

第2項 2人のJKビジネス嬢の物語

(1) 東京の秋葉原や池袋などの繁華街において、18歳未満の少女が男性客に対してお散歩や占い、話し相手や添い寝などの様々なサービスを提供する営業形態の店舗は「JK ビジネス」と名付けられ、児童買春が陰に陽に行われている世界として、近年メディアで頻繁に取り上げられている。2014年6月にアメリカ国務省が出した人身取引報告書では、「日本のJK ビジネスは人身取引」と批判されている。2015年5月

には警視庁の有識者懇談会が 18 歳未満の少年少女を JK ビジネスで働かせることを禁止する内容の報告書をまとめ、2016 年 11 月には JK ビジネスを規制する条例案に対するパブリックコメントの募集が行われた。

元々、JK ビジネスは、2012 年頃に隆盛を極めた秋葉原の JK リフレに遡る。JK リフレは、風営法の指定する業態でないために、行政機関の取締の対象外であった。そして、当時 18 歳以下で風営法が定める店舗では勤務できない女性達の働く場所としてのニーズがあったのである。出会い系サイトや出会い喫茶において、18 歳以下が厳しく法的に規制されていく中で、合法的に 18 歳以下と出会える場所として、JK リフレは機能したのだ。加熱する JK ビジネスに法の規制が入ったのは、2013 年 1 月 27 日である。秋葉原と池袋の JK リフレ店 18 店舗に労働基準法違反の疑いで捜査が入り、中学生を含む 15～17 歳の少女 76 人が保護された。2013 年 4 月 1 日、警視庁は、JK ビジネス店で働く少女達を、保護ではなく、補導の対象とした。以降、営業を続ける JK ビジネス店は、児童福祉法と労働基準法に触れない 18 歳以上の高校 3 年生以上を中心に募集するようになり、所謂 18 歳未満の「アンダー」は、表向きは JK ビジネスから消えた。

2015 年 1 月以降、警視庁はこれまで補導対象にはされていなかった 18 歳から 19 歳の未成年の高校生も補導対象とした。同年 5 月、大手の JK ビジネス求人サイト『もえなび!』が 18 歳未満の求人広告の掲載、及び 18 歳未満のユーザーの利用登録・求人応募を禁止にする。その結果、現役の女子高生が JK リフレ店や JK お散歩店で働くことは事実上不可能になった。これらの店で働くことのできる未成年は、高校に通っていない 18 歳以上の少女（中退 JK）だけになる。従って、2015 年 1 月以降は、JK ビジネスと言いながら、実際には 1 人も女子高生（JK）は存在しない業態になったのが、JK ビジネスである。実際に JK ビジネスの現場は、「JK 上がったビジネス」と言われており、現在の主役は大学 1 年生である。高校を卒業して直ぐの大学 1 年生を中心とする 19 歳から 20 歳の女子大生（JD）が現場を担っている訳だが、それでも未だにこの業態の名前は JK ビジネスと言われ続けている。

元々、JK リフレから始まったため、JK ビジネスは女子高生風の制服を着た若い女性が、男性と個室に入って主として会話等を行うのであるが、一応リフレの流れを汲んで薄い壁一枚で仕切られた狭い小部屋に布団が強いてあり、男性がそこに寝て、女性がリフレクソロジーを行うというのが建前となっている。リフレクソロジーは、実施するのに専門の国家資格が必要無いため、無資格で施術しても違法ではない。だが、実際に女性に対してリフレクソロジーを希望する男性は少なく、多くは添い寝で会話を楽しみながら女性が準備している様々なオプションを購入していくことになる。店側は、女性がどのようなオプションを提供しているのかは、建前上全く関知していないことになっているが、実際は店舗で共通の料金表があったりして、これは形骸化している。オプションの中にはハグ 30 秒や頭撫で撫での様に身体接触を伴うものや、チェキ 1 枚撮影やコスプレ撮影など身体接触を伴わないものがある。そして、所謂「裏オプ」と呼ばれ、オプションの料金表に載っていないのが、性的サービスである。一般的な風俗店で行う様なサービスを無届けの JK ビジネス店舗で行うのは完全に風営法違反なのであるが、中にはそれが行われるのを見越して、風俗店の届け出を出している店舗もある。ホテルやデリヘルが基本プレイと料金が最初から決まっているのに対して、

JK ビジネス店においては、幾らでどこまでできるのかは完全に女性の裁量に委ねられており、その交渉過程をゲーム感覚で楽しみたい者、単純に若い女性が好きな者、或いは、風俗で働いている女性に嫌悪感を持つ者などが、JK ビジネス店を利用しているといわれ、そこでどのようなサービスが行われているのかは、当事者しか分からないブラックボックス状態になっている。店内には大音量で音楽が流れているため、薄い壁一枚で隔てられた隣の部屋の会話は聞こえないように配慮はされているが、それでも、ある程度気配等何をしているのかは推測できると言われる。

JK ビジネスというものの概略を説明したところで、本項では、そこで働く 2 人の女性のナラティブを比較する。2 人共 20 歳であり、1 人は JK 上がった大学生、1 人は専門中退の無職である。前者は、一切性的サービスを行わず、大学の学費と生活費を稼ぐために JK ビジネスに従事している。後者は、極めて「実存的貧困」が色濃く表れている児童養護施設出身者であり、ホテルと並行してそこで働く理由は、ホストクラブの資金を稼ぐためである。裏オプションは、本番行為も含めて全て対応する。

最初に、教科書通りの JK ビジネスを行っている D1 の会話分析から、JK ビジネスの実態とそこで働く女性達の実態について検討する。若い女性が学費のために性風俗で働くというのは、もはや日本社会の常態になりつつあるが、D1－23「年間,,、そうですね、100 万円前後はいますね。」というナラティブが示す通り、D1 が必要とする額も、決して少なくはない。自分の遊行費を足せば更にお金が必要になるという D1 は、キャバクラか JK ビジネスか迷った結果、JK ビジネスを選んだ。その理由は、お酒が飲めないのと、JK ビジネス店の中にも優良店があり、性的なサービスを一切しなくてもそれらと同等のお金が稼げることが分かったからである。父親が経営する飲食店を継ぐ予定で調理の専門学校に行くつもりだった D1 は、高校卒業間際になって、やはり稼業を継ぐのが嫌になった。急いで系列の大学に内部進学したのだが、父親の意に反する進学だったため、結局学費を四年間全て自分で稼がなければならなくなってしまった。高収入のバイトで最初はキャバクラを検討した D1 だが、お酒がほとんど飲めないため、インターネットで情報収集をした結果、JK リフレの優良店であれば、裏オプションも無く、客層も悪くないので、この店 (X) で働くことに決めたという。彼女としては、これ以外に私立の学費を賄いながら、大学もきちんと単位を取得できる選択肢は無いという (※D・2・①参照)。

D1－27「んーと一、働くところを探してる段階で、最初なんか高収入なバイトっていうとキャバクラが思い浮かんだんですけど、お酒飲めないんですよ、全然。その時はまず未成年なんですけど。やっぱり友達と居酒屋さんに行ったりは普通にしちゃうんですけど、弱くて、体質的に。で飲めないんですけど。さっきもちょっとお話したように高 3 の時にちょっと危ない怪しい系のお店に 1 回行ったことで、なんかリフレに対してあまり良いイメージがなくて。でもお酒飲めないよなーと思って。でもネットで調べてたらリフレでもここみたいな健全なお店もあるっていうことが分かったの。」というナラティブから、D1 は、自ら能動的に活動して JK ビジネスを選択しており、JK ビジネスの存在そのものを否定する仁藤ら支援者の立場からすると、受け入れがたい存在であろう。

D1 自身 X は優良店であり、何も自らにやましいところは無い、と語るのであるが、D1-43「んーとー、やっぱりここは健全なお店なんですけど、健全じゃないお店も結構いっぱいあって、例えば友達にリフレで働いてるって話して『なにそれー』って友達が検索したらそういうヤバイお店の情報もいっぱい出てくるので、良く知らない人からみたらひとくくりじゃないですか、業種として、一つの、だから、言えないかな。」と語る通り、JK ビジネスにもスティグマは付与されており、彼女もその実感を持っている（※D-2-②参照）。

風営法の対象外である以上、本来 JK ビジネス、とりわけリフレはマッサージ業であって、性風俗産業ではない。メイドカフェなどと同じ秋葉原のオタク文化が生んだ「萌えカルチャー」であると指摘する向きもあるが、そこで働く女性でさえも、周囲が JK ビジネスを亜風俗産業と見做していることを感じ取っている。そして、インターネットで調べれば分かると言うように、実際多くのお店では、裏オプションが横行しており、売春の温床になっているのである。ただ、D1 は、自分は絶対にそれはしないというのだ。もし、それを提供するのが当たり前の業態になったら、キャバクラに移動するという。彼女の中では、JK ビジネスは、キャバクラよりもまだスティグマは低いのである。お酒を飲みながら会話をするのと、男性に添い寝してイチャイチャしながら会話をするのでは、一般的には後者の方がいかにわしく感じられるはずであるが、D1 は、キャバクラに対する抵抗感の方が寧ろ強い。それは、JK ビジネスが亜風俗であるからかもしれない。D1-79「んー、一歩手前だとは思いますが、んー、なんかさすがにエッチなことまでするのは、,,、ぐらいただったら学校辞めたいと思っちゃいます。」というナラティブから分かるのは、D1 にとって、服の上からの身体接触は性的な行為ではなく、自分が行っているのは一歩手前であっても性的サービスではない、という認識である（※D-2-③参照）。

だが、実際の JK ビジネスの業務内容は、かなり性的要素が強い。そして、明らかに男性もそれを期待して、女性にキャバクラ以上のセクハラを行ってくる。それを空気が悪くならないようにやんわりと断るのはなかなか難しいと D1 はいっているのであるが、お酒の力を借りて場の雰囲気を読み替えることができない JK ビジネスは、坂爪（2015）が、「酒」にも「抜き（※射精）」にも逃げられないと指摘しているように、ある意味かなりの人間力が問われる場所だ。そこで、男性からのセクハラに上手く対応できる D1 には、ハイパー・メリトクラシー型能力の高さを感じる。逆に言えば、それがなければ、JK ビジネスという業態では「裏オプ」に頼らない限りは生き残れないであろう。

お酒が入らない状態で、個室で若い女性と一対一のコミュニケーションを 60 分間続けるには、女性だけでなく、男性側にもかなりのコミュニケーション能力が求められる、と坂爪（2015）は指摘する。そして、男性の中には一定数コミュニケーションに問題を抱えた者がおり、彼らにとって JK ビジネスが安心して対人関係をリハビリする場所になっているという。買春男性を絶対的な加害者として位置付けるラディカル・フェミニズムの立ち位置に対して、坂爪は JK ビジネスを含む性風俗を安易な「被害者＝加害者」という二元論で捉える理解は加害男性を抜きにした欠席裁判であり、実際の現場では、エイジェンシーを発揮している女性と性的な快楽ではなく、精神的な癒しを得ている男性という構図がしばしば見受けられ、そのような

状況を「被害者＝加害者」の枠組みで捉えるのは無理があると指摘する。

この点に関して、坂爪の『見えない買春の現場 ～「JK ビジネス」のリアル～』の中で、「合法 JK ナビ」を運営している桑田は、豊富な経験と知識から以下のように JK ビジネスの現場の実態を指摘する。

女の子に言わせると『それぞれのお客さんで求めてくるやり方は違うけど、彼らの根っこにあるものは一緒』だそうです。すなわち、誰も認めてくれない俺のことを理解してほしいという承認欲求が根っこにある。そうした欲求をメチャクチャ強く持っている。逆に、彼らはこういうところでないと誰にも認めてもらえないわけです。そういう人ばかりが来る。女の子に対するアプローチの仕方が違って、不器用であっても、根っこの部分是一緒。彼らのそうした欲求に応えるためには、女の子の側に演技力が必要になります」（坂爪 2017：160）

前項で、地下アイドルの世界は「承認」を満たし合う関係性がシステムとして構築されていることを指摘したが、性風俗産業全体に視野を広げても、程度の差はあっても、概ね全ての業態において、桑田の指摘は当てはまるのではないだろうか。姫乃が指摘するように、地下アイドルの場合は「承認」は等価交換であるが、性風俗の場合は、基本的には女性が男性を「承認」する関係性である。ホストクラブはその逆で、男性が女性を「承認」する。そして、JK ビジネスも同様に女性が男性を「承認」する場所なのであるが、一つだけ、キャバクラやスナック、デリヘル等と異なる点がある。それは、一般的に女性が素人であると考えられている点だ。性風俗に対するスティグマは、当然それを利用しない男性の側にも強くある。そこで働いている女性達に対する強い軽蔑がその利用を留めているのであるが、そのようなスティグマを持った男性でも利用できるのが、JK ビジネスなのである。つい先日まで学生で未成年であり、世の中を知らない少女だった存在というファンタジーが JK ビジネスを利用する男性の中にある。そして、スティグマを抱くキャバクラ嬢や風俗嬢ではなくて、素人の少女に癒されたいという男性の願望を叶えるのに、うってつけの形態が JK ビジネスなのである。実際は、次に検討する D2 のように、未成年時代から性風俗の世界に浸っているプロ JK もたくさんいるのであるが、利用する男性は、都合良く自分が考えている穢れ無き少女のイメージを彼女達に重ね合わせて、精神的な「癒し」を得ている。そこには、確かに男性の側の強い承認欲求が見て取れるのであるが、同時に男性の歪んだ支配欲求も伺うことができる。単に承認欲求を満たすのであれば既に多様な性風俗の形態がある。母性的な癒しが得たいのであれば、スナックや熟女風俗などはうってつけであろう。だが、それらを利用せずに、敢えて素人の 18、19 歳が中心の JK ビジネスを選ぶということは、明らかにそこに自分よりも未熟な存在をコントロールしたいという欲望もまた透けて見えるのである。

坂爪や桑田の指摘を D1 に向けてみると、男性のその目的意識は D1 も実感できるという（※D-2・④参照）。D1-183「んー、なんかお客さんから言われた時、『癒されるー』とか。」と言う D1 ナラティブは、坂爪が指摘している JK ビジネスの一側面であり、そこが一方的に男性が女性の性を搾取する場所ではないことが

理解される。だが、やはり一方で、同じくらいの男性が性的に興奮を味わっている。D1-185「どっちなんだろう。両方。でも一、『癒された一』と同じくらい『興奮した一』とかも言われます。」という D1 のナラティブから、明らかにそこで女性は男性にとって性的対象として扱われていることが理解されるのだ。従って、坂爪が指摘するように JK ビジネスは男性にとって「癒しの場」という理解もまた、一面的に過ぎないのである。畢竟、性サービスの全てが何らかの癒しの効果を持っているのは疑いようが無く、ここで JK ビジネスだけを癒しの場だとカテゴライズすることは無理があると思われる。Y1 が既に指摘したように、射精が主たる目的のピンサロレベルであっても、そこに純粹に射精だけを求めて男性はやってこない。全ての性サービスはケアサービスの側面を含んでおり、「癒された」と同等に「興奮する」という D1 が描く男性像から、性サービスの本質が浮かび上がってくるとも言えよう。そこは、「癒し」か「興奮」のどちらか、の場所ではない。そして、「興奮」されたからと言って、つまり性の対象にされたからと言って、必ずしも女性が不快感を持つ訳でも無い。D1-188「あーでもそれは嬉しい、かも。」という D1 のナラティブから、性的に魅力ある女性と認識されることは、時に女性の自信に繋がり、エイジェンシーを引き出し、性産業に喜びを見つげ出す切欠になり得る。

マジックミラー越しに男性に選ばれることを、D1 は素直に、D1-196「嬉しいです。嬉しい。」と語る。そして、この実感は、筆者も体験した。首都圏の出会い喫茶の中には、男性がマジックミラー越しに選ばれる種類の店もある。その店の話をインタビュー時にある女性から聞き、女性の心理を理解するために試しに利用したのであるが、座ってものの一分も経たないうちに、女性側から声がかかったと店員に告げられた。店内には、筆者以外にも数名の男性がいたのであるが、彼等ではなく、自分に声がかかった、という事実により、やはり多少の高揚感を味わった。キャバクラ嬢の心理に近付こうとキャバクラに潜入し、勤務した経験がある北条かやが、『キャバ嬢の社会学』の中で、同様に客に見つめられること、選ばれることの恍惚感を描いているが、間違いなく、異性に選ばれる、という体験は、時に自分自身の自尊感情を高める「承認」体験になり得る。だからこそ、D1 は JK ビジネスの仕事に、ある種のやりがいや生きがいを感じるのであろう。男性にとっての癒しになっている実感はあるか、という筆者からの問い掛けに対して、D1-182「あります」と即答する。それが、会話によるものなのか、イチャイチャによるものなのかは渾然としていて D1 にも分からないのであるが、恐らくその両方の要素が「癒し」のためには不可欠なのだと思う。

坂爪は、前掲書において、JK ビジネスにおける精神的な癒しを強調しているのであるが、既述の通り、仁藤の JK ビジネスに対する偏見同様に、これもまた偏った見方の押し付けであろう。そもそも前掲書に掲載されたたった 3 人の男性のナラティブが揃って精神的な癒しを強調したからと言って、それは統計的に何ら信頼に値するものではない。寧ろ、インタビューに答える男性は自分に余り後ろ暗いところが無い意味健全な男性に限られてしまう分、偏りがあるサンプルであると考えべきだ。一般的には、公然と裏オポジションがまかり通っている現状、大多数の男性は、身体的な快楽をも JK ビジネスに求めている。その意味でやはり、亜風俗とはいえ、JK ビジネスは風俗産業の一形態と理解すべきである。だからこそ、D1 は以下

のナラティブが示すように、そこで働くことに幾許かの後ろめたさを感じているのである。誇りを持っては働けないのか、という筆者の問い掛けに対して、D1は、D1-212「そうですね,,、楽しいです、けど。」と答える(※D-2-⑤参照)。そして、その楽しい比率は、D1-215「高い。」のである。何故ならば、JK ビジネスは指名制であるからだ。D1-216「そうですね、指名してくれるというか常連さんは、嫌な人がいないので。」というナラティブから、「裏オプ」を禁止している JK ビジネスの優良店の場合、他の性風俗産業と異なり、客層と言う意味では、比較的悪質な客が少ないと言えるかもしれない。

D1-212 のナラティブから分かるのは、後ろめたさはあるのだが、基本的に D1 はこの仕事を楽しんでいっていることだ。この点は非常に重要である。何故ならば、今まで検討してきた女性達のほとんどは、性風俗の仕事を楽しんでいない。明らかに楽しいと答えていた者の数が少ないのである。A 群の女性は、性労働が無いため、楽しいと答える比率は高かったが、B 群以降の女性達のほとんどが、仕事を楽しめていない。セックスワーカーの B8, B9, レジェンド AV 女優の C1 以外には、仕事をここまで肯定的に捉えている女性はいなかった。ということは、不本意な性労働をしない限り、多少のセクハラがあっても、JK ビジネスは、女性を露骨な被害者のカテゴリに入れるのが難しいということである。冒頭に、昨今の JK ビジネスに対する規制強化の動きを記したが、当事者がそれを望んでいるかは疑問である。事実、D1 に東京オリンピックに向けて、明らかに日本政府は JK ビジネスのような諸外国に児童買春との誤解を与えるようないかがわしい業態を無くそうとしている、規制はどんどん厳しくなって、この業態自体が無くなるかもしれないがどう思うか、と質問すると、「困る、キャバクラしか選択肢がなくなるが、水商売にはできれば行きたくない」と答えるのである。

2016 年 7 月、愛知県警は外食産業大手の日本マクドナルドと提携し、JK ビジネスへの啓発活動のポスターを作製した。それは、真っ白な背景に、「真っ白な、君が好き。」という極めてシンプルなポスターだ。そして、そのポスターの下段には、JK ビジネスのようないかがわしい場所でなく、マクドナルドで働くような若い女性に呼び掛けているのであるが、このポスターにはかなりの批判も沸き起こった。第一に、「真っ白な、君が好き。」という余りにも時代錯誤が甚だしいコピーが、廃娼運動時のキリスト教的純潔運動に通じるものがあり、その保守的過ぎる価値観が、女性の少女性・素人性を求める買春男性が重んじるそれと全く一緒ではないか、というものである。第二に、そこで働く女性達は、D1 の様に学費等の決して安くはないもののためにお金を必要としているのだ。マクドナルドは、彼女達に低賃金労働しか提供できないのに、そこで働くように呼び掛けるのは無責任ではないか、というものである。二つの意見とも至極真つ当な指摘であり、単に JK ビジネスが悪いもの、汚らわしいもの、と決め付けて大上段から語られる物言いには、寧ろ当事者が憤りを感じるであろう。JK ビジネスで一度でも働いたら、純潔を失うのか、そのような女性は社会から嫌われて当然なのか、女性にスティグマを貼る気か、と愛知県警とマクドナルドに対して、JK ビジネスで働く当事者から怒りの声が上がった時、彼らは何一つ返す言葉が無いであろう。D1 は、少なくとも、JK ビジネスを楽しんでいるし、D1-235「んー嬉しい,,、かなー,,、？」のナラティブから明らか

なように、男性から「承認」されることに喜びも感じている。「真っ白な、君が好き。」というコピーは、D1 に対して、そこで働くな、楽しむな、喜ぶな、それはおかしい、と言っているのと同義である。このような偏見に満ちた決め付けと社会福祉学が避けるべきパターンリズムは、逆に D1 のエイジェンシーと個人の尊厳を侵害しているのではないだろうか。

だが、JK ビジネスに潜む有害性もまた、看過されるべきでもない。坂爪は前掲書によって、Colabo の「わたしたちは『買われた』展」について触れ、若い女性が一方的に搾取される被害者である、という視点には疑問を投げかけた。そして、買う側の論理が一切語られないこうした取り組みは欠席裁判に等しいとして、3 人の買春男性のインタビューや桑田のインタビューを通して、男性が決して巷で語られるようなペドファイルではないこと、また、普通の成人女性や風俗嬢が相手では気後れしてしまうような性的弱者ではないことを指摘しているが、やはりそれも真実の一面に過ぎず、男性の加害者性を全面的に否定することはできないし、JK ビジネスに関わる男性が安全であることを証明するものにはなり得ない。そして、JK ビジネスが、「性の商品化」の極致であることも忘れてはならないだろう。X が始めたマジックミラー越しに男性が陳列された女性を選ぶ、というシステムは、「選ばれる性」、「売られる性」である女性の尊厳を傷つける可能性がある。

原田 250：マジックミラーで見られるお店っていうのはすごい女の子を見世物にしてるわけですね。

D1-250：そうですね、最初は衝撃がありました。

原田 251：やっぱ女の子でもあるか。

D1-251：そうですね、びっくりしました。売り物感がすごい

原田 252：売り物感がすごいですよ。自分は売り物になってるんだっていうその衝撃はどのくらいで消えました？

D1-252：んー、働き始めて次の週にはもう慣れてた気がします。

原田 253：そっか、それほど後ひくようなショックではないんだね。

D1-253：ショックではなかったです。売り物ということは分かってたので。なんかすごいショックを受けて悲しいとかではなかったんですけど衝撃的でした、ただ。

原田 254：ま、売り物なんだと、自分が。

D1-254：そうここまで露骨に選ばれるんだみたい。

上記のナラティブで、D1 は、売り物感が凄い、衝撃的だったという一方で、それがショックを受けて悲しい訳では無いという。だが、これは D1 がレギュラーキャストの中でも上位クラスであり、普段から選ばれることの優越感に浸れる側の女性であることを念頭に、読み解かなければならないだろう。確かに、彼女

の様に 8 人の女性の中から毎回のようによばれる女性であれば、マジックミラーシステムは、承認欲求を満たすものであろう。だが、そこで何時までたっても選ばれない女性の側からすれば、屈辱的なシステムに違いない。女性としての魅力を外見だけに集約して判断させるこのシステムは時に残酷で惨めな思いを女性に味合わせる。それは、地下アイドルから国民的アイドルに上り詰めた AKB48 の総選挙が、「残酷ショー」と揶揄されるのと同じだ。

AKB48 の総選挙は、グループ内の序列を明確な順位として投票結果で示すのであるが、これは普通の選挙のように 1 人一票のシステムではない。CD 一枚につき一票が投じられるシステムは、必然的に新自由主義の勝者が、経済力に物を言わせて、恣意的に順位を左右できる権力を保持することを可能にする。普段から分け隔てなくファンに接しているアイドルの見本のような人格者の女性が、特定の財力あるファンに媚びを売る腹黒い女性に簡単に上位階層に行かれるのである。そして、それをゴールデンの時間帯に全国中継で生放送されるのだ。前項で、C8 がアイドルを腹黒い、嫌い、と指摘していたが、それはこの AKB グループの序列の付け方が、運営管理の方法として、地下アイドルの世界で普遍化されたからであろう。それまでもアイドルグループには人気に序列はあっただろうが、それが明確に可視化されることはなかった。それは残酷で、当事者の尊厳を奪うからである。ところが、競争が無い場所に競争を生み、経済競争を通じて社会を統治するという新自由主義的統治は、遂にアイドルの世界にまで激烈な競争と自己責任論を持ち込んだのである。そしてその考え方が、マジックミラーシステムに反映されている。指名されたければ、アピールするしかないのだ。黒髪のやぼったい世間知らずのお嬢様風が客に好まれるのであれば、金髪や茶髪を染めてでも、普段の化粧を薄めに変えても、無理やり作ったキャラを演じてでも、自分を殺さなければならない。そのようにあらねば生き残れないのが新自由主義である。必然的に店舗内に過剰な競争が生まれ、格差が生まれ、淘汰が生じるが、そこで落ちこぼれていく女性達の尊厳に対するケアは一切無いのだ。

D1 とのインタビューのまとめの質問の中で、D1 は JK ビジネスの負の側面はさほど語らない。唯一、金銭感覚が、普通の大学生として異常になってしまった点を挙げる。この仕事を友達に勧めるか、という質問に対しても、この店ならば勧める、理由は安全で稼げるから、というのである。だが、この認識は正しくない。そもそも、風俗や亜風俗の仕事において、安全が確保されることは約束されない。事実、彼女は一度だけ、仕事帰りにストーカー被害に遭いかけているのだ。彼女の常連客が、エレベーターの下で待ち構えていて、駅まで一緒に帰ったというのであるが、これは一步間違えばただ事でない事件に発展しかねない。2016 年 5 月、当時芸能活動を行っていた 20 歳の大学生の女性をファンを自称する男が Twitter などの SNS 上でストーカー行為を繰り返した後、小金井市内のライブハウスにてナイフで刺殺しようとして重体に陥らせた。この「小金井ストーカー殺人未遂事件」が示すのは、会いに行けるアイドルは殺すことができるアイドルである、という現実である。そして、JK ビジネス店の X はビルの構造上階段が無く、エレベーターが正面の一か所しかない。これは、全員がそのエレベーターを使って一階に降りるということであり、そこで待っていれば、全ての女性達の帰りを付けられるということである。もし、D1 が「実存的貧困」状態の客に言い

寄られてそれを拒んだ時、「小金井ストーカー殺人未遂事件」と同じことが起き得る。奇しくも坂爪は、JK ビジネスを婚活の場だと勘違いしている中年の客が多い点を指摘しているが、これは、キャバクラ嬢や風俗嬢は恋愛対象にならないスティグマを持った男性であっても、D1 のような若い素人の女性は真剣に愛する対象になるということを意味する。寧ろ、そのような所謂「ガチ恋（ガチ＝真剣、に恋している）」客が必然的に発生するのが、JK ビジネスなのだ。その意味で、これはある意味キャバクラよりも罪深い。そのような仕事に従事して、安全が確保されることなど絶対にない。「リスク社会」において、昨日まで何も起きなかったことは、明日の安全を絶対に意味しないことを、若い D1 は理解していない。また、18, 19 の女性が異常な金銭感覚に陥ることも憂慮すべきである。賢明にも彼女は、自分が JK ビジネスにおいて変わってしまった点を、D1-285「金銭感覚ですね。」と指摘し、それが異常であると自覚できている（※D-2-⑦参照）。それは、彼女が偏差値の高いお嬢様高校を卒業し、お嬢様大学に入れるだけのメリトクラシー型能力を持っているからだ。そうでない貧困層の若い女性が、お金になるからと安易に JK ビジネスに嵌り、そこからホスト等にのめり込んでしまう切欠になるような状態は健全ではない。それがまさに現実には起きている事例が、次に検討する D2 なのである。

(2) D2 は、所謂「裏オプ店」に勤務している。D1 の、D1-263「んー、そっちに行ってって思います」には、明らかに男性だけでなく、そこで働く女性への侮蔑も含まれているが、同じ JK ビジネスであっても、D1 が所属している優良店と、D2 が所属している「裏オプ店」は完全に別物であり、この「裏オプ店」の存在のせいで、D1 は、必要以上に、自分の仕事を家族や友達に話せないという後ろめたさを感じてしまうのである。

「裏オプ店」に勤めている D2 は、勿論理由があつてそこにいる。その理由は既に述べた通り、ホストクラブで「エース」を務めているために、月に 100 万円のお金が必要だからである。

原田 27：月 100 必要だと、どのくらい仕事しなきゃいけないの？

D2-27：基本ヘルスだから毎日オーラス。あと、ヘルスいけない生理の時はここ（裏オプ店・E）。

原田 28：あー毎日。体持つ？

D2-28：11, 12 時くらい。体？

原田 29：うん。

D2-29：持たせるしかないよね（笑）

原田 30：持たせるしかない。その男の人はやっぱり好きなの？

D2-30：うん。大好き。恋愛じゃないけど。

原田 31：それはわかってんの？恋愛じゃないって自分で。

D2－31: 恋愛対象として見てない, D2 が.

原田 32: あ, そうなんだ.

D2－32: 別に好きだけど付き合いたいとか枕したいとかは思わない.

原田 33: ただそばにいて話を聞いてもらいたいみたいな?

D2－33: うん. 外見が良いから目の保養って感じ.

原田 34: あー, アイドルと付き合ってるみたいな感じなんだ.

D2－34: そう, なんか, ただファンみたいな感じ.

原田 35: そういう男の人とはやっぱり店外でも遊んだりするわけ?

D2－35: あーなんか言われたら会う. ま, エースだから気を遣わなきゃじゃん.

原田 36: あー.

D2－36: だから言ってくるだろうけど. 会うよ, 全然.

原田 37: なるほどね. それをやっていることに誇りみたいなものはある?

D2－37: あるある.

原田 38: やっぱり私はエースなんだ. この男を養ってんだみたいな.

D2－38: うん. だって D2 しかいないもん.

ホストクラブでエースを務めることに誇りはあるか, という筆者からの問い掛けに対して, 即座に D2－37「あるある.」というナラティブから, D2 の女性としての誇りが伝わってくる. C9 も, 資金が持っている間は, D2 の様な誇りを持っていた. 単なる「躁的防衛」ではなく, 実際に, エースの誇りを持ち, 優越感に浸っていたのである. それ程の誇りを持つまでに, ホストクラブでは, エースは特別待遇を受けるものである. だが, それを維持するためには, D2－27「基本ヘルスだから毎日オーラス. あと, ヘルスいけない生理の時はここ (裏オプ店・E).」という通り, 毎日最初から最後までヘルスに勤務して, 客を取り続ける必要がある. D2 は, 箱ヘルに勤務しているが, 理由はそれが一番客が途切れないからだ. 外で待ち合わせて, 一緒にホテルに行くホテヘルや, 相手が既に宿泊しているホテルや待機しているラブホテルに派遣されるデリヘルと違い, 店舗型ヘルスの箱ヘルは, 自分の移動時間が全くないため, 客が来る限り何人でも本数を取れるのだ. だが, 当然それは心身に異常な負担をもたらす. 半ば持つわけがないと自分でも分かっているが, それでも D2－29「持たせるしかないよね (笑)」と明るく言う D2 の空元気が痛々しく感じてしまうのである (※D-2-⑧参照). だが, そこまでの情熱を注ぐホストクラブ通いによって, D2 の精神は逆に追い込まれている. そこは最初はストレス発散の場であったのであろうが, エースの重責を背負った段階で, D2－46「うん. 金払って溜まってるだけ, ストレス.」という状況になってしまうのである (※D-2-⑨参照).

D2－46 のナラティブが示すように, ホストクラブは嗜癖と同じで, そのサイクルに嵌ると, 最初に存在した楽しみや喜びはなくなり, 単にストレスが溜まるだけになる. だが, やはり嗜癖と同じで止めることが

できなのである。D2-48「ただ一、ホストにお金使って,,、承認欲求とか満たしたいだけ？周りから。」という D2 のナラティブは、これまで論じてきたホストに嵌っていた全ての女性達に当てはまるだろう。C3 も、C9 も、結局ホストに大金を使う理由は、これ以外に無い。異常に「承認」が欠如した人生を送ってきた人間は、「内的作業モデル」に欠損を抱えて、「実存的貧困」状態に陥り易い。そして、社会的排除の対象となった時に、「実存的貧困」は完成し、「自傷的存在証明」を発動させるのであるが、D2 の場合は、生まれた時から既に社会的排除の対象なのである。

D2 の人生において、「承認」は途中から欠けたのではない。最初から、存在しないのである。今回のインフォーマントの中で、これ程までに「承認」を欠き、これ程までに深い「実存的貧困」を抱えている存在は無い。それを証明するように、彼女の「拡張版ホープレスネス尺度」は、対人領域においても、達成領域においても、尺度の最大値の 20 点である。つまり、人生の全てに絶望しているのである。因みに、この心理尺度で両方とも 20 点というのは 61 人中あと 3 人いるのだが、そのうちの 2 人は既に会話分析を行った、元キャバクラ嬢で生活保護受給中のシングルマザーの A13、発達障害で元 AV 女優のミス◎◎ファイナリストの C6 である。最後の 1 人は、高学歴に属する高級ソープランド嬢の E6 で、彼女もホストに月に 400 万円を使う女性である。D2 の「生きがい感スケール」も 31 点と突出した低さであり、全体で二番目に低い中卒で生活保護世帯出身の B7 の 43 を遥かに下回っている。これらの心理尺度が示す D2 の絶望感は、単なる「経済的貧困」状態にある者のそれを超えている。江口の「社会階層論」で言えば、B7 は典型的な「不安定・低所得階層」に合致する。彼女は、今はソープランドを引退して昼の仕事でワーキングプに陥りながら、副業として出会いカフェで売春を行っているのだが、その B7 に比べても、圧倒的に D2 はパワーレスなのである。彼女のこの無力感・絶望感は「所得貧困」に着目する限り、絶対に見えてくることはない。何故ならば、彼女は母子家庭であつても継母は医師であり、富裕層であるからだ。

D2 の人生から浮かび上がるのは、人生において、文字通り「重要な他者」が存在しない乳児院・児童養護施設出身者は、5 歳で里子に出され、医師の母親の下でそれなりに裕福な環境で育ったとしても、非物質的な貧困である「実存的貧困」に陥るという現実である。そしてそれは、「経済的貧困」である生活保護以上に、人の尊厳を破壊し、「内的作業モデル」を欠損させ、人間を 20 歳にして深い孤独と絶望へと導くのだ。

人から大切にされたという実感は、D2 に人生で一度も無い。乳児院から児童養護施設に送られ、そこで富裕層の医師の両親の下に里子に出された時は、D2 は微かな希望を抱いたのである。当初、両親は彼女に対して優しくかったのだ。だが、血の繋がらない兄との差別的な取り扱いを受ける中で、彼女の希望は完全に打ち碎かれた。D2 は、結果的に新しい家族から心理的な虐待を受けたのである。そして、やがて両親は離婚する。それに対して、D2-90「なんで D2 が悪いの。」と彼女は、里親が離婚した責任は自分には無いと主張するが、継母と継父が離婚したという事実はかなり重い（※D-2-⑩参照）。結果的に、彼女は再度里親の家庭でその存在を否定されることになったのだ。あまり記憶にない父親は、D2 を育てるのを放棄して離婚したのである。彼女は人生の早期に、二度いない子供として、捨てられたのだ。原田 51「人から大切にさ

れたっていう実感は他にないの？」に対して、即座に D2-51「えーない。」と答える。余りにも答えが早過ぎるので、驚きながら改めて問いかけたが、原田 52「生きてきて、全くない？」 D2-52「ない。」と D2 はやはり即座に断言する。ホストクラブではあるのではないかと、思ったからの再度の問い掛けだったのであるが、それに対しても「大切にされた実感は無い」と断言するのだ。つまり、ホストクラブは、本当の意味での「承認」ではないのだ。畢竟、ホストは「重要な他者」に絶対になり得ない。何故ならば、その愛が無償でないからである。お金を貢ぐ限り、という条件付きの愛は、ホストクラブにおいて、社長やオーナーも含めてどれ程「承認」されたとしても、それは真の意味で Honneth の承認論における愛の領域の「承認」にはならないのである。辛うじて、連帯の領域における「承認」としては機能するのであろうが、D2 が欲しているのは、本当は愛の領域の「承認」である。故に、ホストクラブで彼女の「実存的貧困」は全く解消されないのだ。

坂爪は前掲著の中で、JK ビジネスは、中年男性が婚活の場として真剣に考えていることを指摘しているが、女性の側にそのような気持ちは一切ない。D2-141「嬉しいよ、ガチ恋は普通に。でもそれだけ。『ありがとう』だけ。」という D2 の感覚は、恐らくホストがキャバクラ嬢や風俗嬢に抱く感覚と一緒だろう（※D-2-⑪参照）。E4 が、まさに D2 が指摘していることと同じことをホストが言っているのを証言している。改めて、その言葉を以下に引用するが、E4-162「だからでもホストの皆さんはよく言いますけど、どんなに、これ 6 人口そろえてマジで言うんですけど、『どんなに可愛くても自分にお金使ったら可愛いとかじゃなくて欲をぶつけてくるから女としては絶対お客さんを見れない』って言います。」という言葉は、D2 の客に対するナラティブと完全に一緒である。従って、D2 はホストクラブでも真の「承認」は得られず、かつ、JK ビジネスを通して客から「承認」を得られない。「重要な他者」からの無償の愛以外、基本的に社会の中では、自らが手に入れる「承認」は、他者に施す「承認」と等価交換である。だが、等価であるからと言って、その「承認」は自らが望む「承認」と同一・同質であるとは限らない。明らかに D2 は、内心ホストに愛の領域における「承認」を求めているのであるが、ホストから返ってくる「承認」は、彼女が注ぐ、愛と連帯の領域の二つの「承認」に応えるものではない。それは、単に金銭という資本主義社会における連帯の領域における「承認」に対応した「承認」なのである。これは実質、D2 ではなく、金銭が持つ貨幣価値をホストが「承認」しているに過ぎないのだ。恐らく、D2 は自分がエースを務めるホストが、D2 に対して、同様に「ありがとう」程度の感覚しか抱いていないのを気付いている。従って、D2 はホストクラブが真の居場所にならないのである。ホストを恋人にしないで、ただの目の保養というのも、決して強がっているのではない。実際に愛して欲しいという欲をリアルにぶつけたら、D2 は自分がそのホストに切られるかもしれない、と分かっているであろう。だから、彼女はホストに対する真の想いを、レベル 3 の神経症的「防衛機制」である「抑圧 (Repression)」を用いて押し殺し、自分を騙さざるを得ないのだ。だが、「抑圧」された彼女の真の欲求は、月に 100 万円のお金を貢ぎ続けるという自傷的行動となって発現する。D2 からすれば、そのホストを利用してホストクラブで連帯の領域の「承認」を手に入れることが、今を生きる微かな

希望になっているのかもしれないが、その人生には救いがない。結局それは、自分が自覚している表層的な承認欲求を満たしているだけであり、抑圧され、無意識に追いやられた、ホストから愛されたいという D2 の真の欲求を満たすものではないからだ。ホストと貨幣を媒介として関係性を保ち続ける限り、それは絶対に手に入らないのである。そして、哀しいことに、そのような関係性すらも、今は破綻の危機に直面している。

D2-153「続かないと思うよ。破産するでしょ。」というナラティブから、C9 同様に、D2 が限界に近付いているのが分かる（※D-2-⑬参照）。それでも彼女は、毎月 130 万円のシャンパンタワーを入れるというのだ。その目的は、優越感に浸るためだけである。D2-165「あ、そう、優越感がないと生きてけないんだよね。」という切実な言葉から、D2 が『承認』をめぐる闘争』を絶望的な思いを抱き、傷だらけになりながら生きていることが分かるのである。そして、ホストもまた彼女の優越感に向ける相手なのだ。昼の仕事でも生きていけない「アンダークラス」の男性が、生きるために夜ホストをしているのだが、ホストとしてもうだつが上がらない彼を、ほぼ全面的に D2 が支えているのである。消費という消費社会における人間の存在証明が、ホストという男性を経由してホストクラブで行われている。タワーを入れれば主役は D2 である、と彼女が言う通り、「ホストの成績=D2 のお金=D2 の努力」というものがホストクラブにおいて、タワーによって完全に可視化される。それは、泡沫の優越感であっても、その瞬間だけでも彼女は人生において、生の実感を得られるのである。だが、それによって逆に彼女は、本当に欲しいホストからの愛という「承認」を失っているというパラドックスに陥っているのだ。内心その矛盾に気付いているからこそ、D2 は、エースを続けることに対して、D2-192「んー、生きがいではないよ。」と答えるのである。苦行のようなエースを続ける意味は彼女自身も上手く言語化できていない。自分でも苦しみが 9 割、楽しみが 1 割しかない生活を何故続けているのか分からないのである。だが、D2 にとって、彼女の承認欲求を満たし、かつ優越感を抱ける場所は、D2-197「入らないっしょ。」というナラティブが示すように、ホストクラブしかないのである（※D-2-⑭参照）。

D1 のようにメリトクラシー型能力も、ハイパー・メリトクラシー型能力も持たない D2 は、昼の仕事では恐らく十全な「承認」を得られない。そして、D1 が JK ビジネスを楽しんでいる一方、D2 が全くそれを楽しめていないのは、D2 に「内的作業モデル」が欠けているからである。自分を愛せない彼女は、本質的に他者に気遣いを持つことができない。JK ビジネスを通して客に「承認」を与えられないのである。D1 は、客に対して自分が「癒し（＝「承認」）」になっている自信があると断言したが、恐らく D2 にはその感覚は全くないであろう。JK ビジネスの客は、「癒し」と「興奮」の両方を求めていると既に指摘したが、D2 は単に「興奮」を性労働によって受け止めているだけなのである。従って、JK ビジネスの形態を取りながらも、行為がほぼ「裏オプ」だけになれば、それは毎日自傷的に売春を続けているに過ぎなくなる。B 群の女性達は圧倒的にパワーレスであったが、彼女は完全にその群の女性と同じで、性労働のルーティンワークによって自らの心身を傷付けているのである。そこに、女性としての尊厳や、彼女が能動的に発揮しているエ

イジェンシーは存在しない。

そのようにパワーレスな状態にある D2 の、D2-196「承認欲求と優越感があれば生きていける。」というナラティブは、本研究において極めて重要である。何故ならば、彼女が生きていくために必要なのは、お金ではないのだ。否、お金などの物質的なものは、住居も含めて一切彼女の人生の足場になっていない。既に壊れかかっている彼女の「実存」を支えているのは、友人でも家族でもなく、ホストクラブにおける「承認」がもたらす微かな優越感なのである。それだけが、彼女の心の支えなのである。だが、繰り返しになるが、この「承認」は D2 が本当に欲しい「承認」ではない。彼女が本当に欲しいのは真実の愛なのであるが、それを提供してくれる者が、誰もいないのである。D2-200「嬉しいよ。嬉しいけど、『ありがとう…』って感じ。それ以上別になんも思わない。」というナラティブから、JK ビジネスの客に何を言われても、その言葉が彼女の「実存」を支える「承認」たり得ないことは明白だ。D2 は、D1 と生きている次元が全く違うのだ。D1 は、家族の愛という土台の上に生きている。「重要な他者」を持ち、普通の「内的作業モデル」を持っている D1 は、JK ビジネスで掛けられる「可愛いね」という言葉掛けを自分の自信や誇りに転換できる。それはつまり、その言葉掛けをしてくれた人間を D1 も「承認」し、その「実存」を認めているということである。だが、D2 は、「内的作業モデル」の欠損が著しいため、他者も自分の存在さえも「承認」できないのである。従って、誰の言葉であっても、D2 の心には何も響かないのだ。もしかしたら、D2 が心から愛する真の恋人の言葉であれば、彼女の心に響くかもしれない。彼女が唯一欲しているのは、無償の愛だけだからだ。だが、つい半月前、彼女の恋人は D2 を捨てた。何故別れるのか、理由も言わなかった。ホストに嵌ったのは、その直ぐ後なのである。

ホストは、当初はただ彼女の虚しさを埋めるための存在だったのである。だが、それであれば、月に 100 万円ものお金を 1 人の担当ホストに貢ぎ続ける行動の理由が説明できない。虚しさを解消するための目の保養は 1 人である必要はなく、浮気するように様々な店でホストを物色すればいいはずなのである。だが、彼女はそれをしない。そこから推察されるのは、彼女はホストに対する想いを抑圧し、無意識に押し込めているのであるが、実際は彼のことを心から愛しているということである。「抑圧」というレベル 3 の未熟な「防衛機制」は、結果的に様々な心身の不調となって表れる。彼女は、パニック障害や自傷行為の原因を、D2-259「全然リフレ通い始めてからすぐだよ。」と JK ビジネスに求めるのであるが、それは余りにも一面的に過ぎる（※D-2-⑮参照）。確かに、やりがいのない性労働である JK ビジネスは彼女にとって大きなストレスであろう。だが、ホストに対する想いを「抑圧」していることもまた、何らかの神経症となって彼女を苛んでもおかしくない。無論、「抑圧」は無意識に働きかける最も原初的な防衛機制であり、他の防衛機制のように他者から指摘されたとしても自覚することは難しいのであるが。

JK ビジネスの議論において、坂爪は、それを全く悪しきものと切り捨てるのではなく、社会資源のような考え方で捉えようと提言している。JK ビジネスは、貧困女性の生計を成り立たせるために必要なものであるという現実がある。また、コミュニケーション・スキルが足りない男性が、それを磨くために活用でき

る場でもある。加えて、中年男性が、恋の練習をする婚活の場でもある、と坂爪は JK ビジネスの肯定的側面を並べるのであるが、やはりそこが、D2 の様な女性にとっては、「自傷的存在証明」をする場所であることも忘れて欲しくない。そして、そこで彼女は病気が悪化しているのである。紛れもなく本番行為を強要するような「裏オプ店」は女性の心身を壊す。売春はそれ自体が外傷的行為であり、精神保健を悪化させるという海外の実証研究を持ち出すまでもなく、ここまでの女性達のナラティブを検討し、心理尺度を見ただけで、有害であることは歴然としている。従って、JK ビジネスは無い方がいい。D1 の様な女性が優良店で働く時のみ、男性にとっても女性にとっても一時的に坂爪が指摘するような肯定的側面が見受けられるかもしれないが、それらのメリットは長期的に見れば必ずデメリットに打ち消される。そして、D1 のような女性ならば賢明に短期間で傷付かぬうちにその業界から足を洗うこともできるだろうが、そうでない D2 の様な女性達が、「裏オプ」に手を染めたらもうその先は傷付くだけなのだ。

性風俗産業は可視化されるべきだ、地下に潜らせるべきではない、という坂爪の主張にはほぼ全面的に同意できる。だが、それはあくまで法律によって規制と管理がされているものについては、という大前提がある。その意味では、風営法に定めがある業態において、売春や他の性的サービスを全て非犯罪化し、女性の労働条件を改善しなければならないと筆者は考える。非犯罪化なくして、スティグマの解消と労働条件の改善は絶対にあり得ない。だが一方で、JK ビジネスや、次項で検討する出会いカフェやパパ活などは、規制によって無くすべきだと考える。風営法に定めが無いということは、実質的に女性が最も傷付く売春が、女性の自己責任において、極めて劣悪な環境で、高いリスクを背負って行われていることを意味するからだ。JK ビジネスを含めた亜風俗産業がそのような状態を日本社会の中で容認しているのである。規制が無いということは、自由が大きいということであり、それはつまり、女性の裁量、能力に全てが委ねられやすいということである。その様な場所に、D2 のようなメリトクラシー型能力も、ハイパー・メリトクラシー型能力も低い少女が 17 歳で入り込んだ結果、これほどまでにパワーレスな状況の追い込まれている以上、既存の性風俗の可視化と非犯罪化を進め、一方で全てのグレーゾーン産業は無くすべきだと実感する。

D2-343「生まれてこない方が良かったんじゃない？」という絶望的な言葉を、20 歳の女性が口にするのはあまりにも悲惨だ。「実存的貧困」とは、ここまで人をパワーレスな状態に陥らせる。そして、彼女を今最も追い込んでいるのが、ホストクラブなのである。D2-350「カケに追われてるとか、ホストの。稼げるかな、みたいな。それが一番辛い。」のナラティブだけを見れば、D2 が一番苦しんでいるのは、経済的な問題に思われる（※D-2-⑩参照）。だが、何故その借金が生まれたのか、作らざるを得なかったのか、と考えれば、根本の問題は、やはり「実存的貧困」なのである。ここで仮に、彼女が「飛ぶ」とする。「夜」や「風」の世界で、「飛ぶ」というのは、借金を踏み倒して逃げることを意味するが、男性も女性も、毎日のように誰かが当たり前のように「飛ぶ」世界である。彼女が「飛べ」ば、担当であるホストに入金の義務が回ってくるが、当然彼も「飛ぶ」だろう。店が D2 の売掛けを被ることになるが、それで別に誰かが死ぬ訳ではない。だから、限界が来たら彼女は躊躇せずに「飛ぶ」べきなのだ。だが、そうやって借金を踏み倒しても、経済

的な苦しみからは逃れられるが、D2-345「ごめん、みたいな。生まれてごめんで感じ。(笑)だから別に、やり直したいっていうか消えたい、死にたいとかじゃなくて消えたい。みんなの存在から消えたい。なかったことにしたい。」という彼女の深い「実存的貧困」は一切解決しないのだ。「実存的貧困」の中核である愛の欠落を埋めなければ、彼女が生きている限り、苦悩は消えないのだ。そしてその苦しみには耐えきれず、また彼女はホスト通いや性的逸脱等の「自傷的存在証明」を繰り返すだろう。「実存的空虚」で留まっている段階の者には、明確な処方箋がある。「実存的空虚」が「実存的貧困」に変わらないように、社会的に排除しないことだ。つまり、社会がソーシャル・インクルージョンを普段から実践していけば、D2のような存在は生まれない。だが、不幸にして彼女の様な「実存的貧困」が生まれた場合、ただ社会的に包摂するだけでは、その状態は改善しない。誰かがその存在に愛の領域における「承認」を与えなければならないのだが、それは専門家の役割になってくる。だが、彼女の周りには、彼女の苦悩に寄り添う「重要な他者」が、ただの1人もいないのである。そもそも専門家の1人である医師の母親すらが、全く寄り添っていないのだ。そしてそれは、彼女を担当しているホストも同様である。

D2は、担当ホストのことを、これまで目の保養と語ってきた。そこに愛情は無く、ただファンのように接しているだけだと繰り返してきた。別に付き合う気は無いのだと。だが、そのナラティブが本当だったならば、D2-379「相談つか、普通に1人で泣いてた。階段あって一、店の前に。3階なんだけど。お客さんなんか、しんどくなるとそこに集まるんだ。」というナラティブにあるように、何故こんなにも彼女は彼に対する嫉妬でしんどくなるのであろうか(※D-2-⑩参照)。D2-382「なんで?みたいな。お前うちの卓以外で、歌うなよって。」というナラティブから分かるのは、彼女はやはり彼を叶わぬ恋と知りながらも愛しているという事実である。130万のシャンパンタワーを入れるのも、もしかしたら、それで彼が本当に自分を愛してくれるかもしれない、という希望が含まれているのではないかと感じるのである。彼女がいうような単なる承認欲求や優越感のためだけに、毎日生活のほぼ全てを犠牲にして、エイジェンシーも生きがいの欠片も無い、ただ人間を壊すだけの風俗労働が20歳の若い女性にできるだろうかと考えると、不可能であろう。つまり、彼女は愛されたいという一縷の希望に縋って絶望を生き抜いているのである。

また、母親に対しても愛情を感じないと言ってきたが、本当は愛されたいことがやはりD2-387「最初は親にかまって欲しくて。」というナラティブから良く分かるのである。D2-388「でーそんでなんか最初親にかまって欲しくてやり始めて、普通に歩いてんじゃん家の中。ふっと見られて、見られた、と思ったけどなんも言われなかったし。」というナラティブから、救って欲しい、苦しいよ、助けてよ、という母親への切実な叫びが聞こえるようである。だが、それを彼女の母親は敢えて無視するのである。

「人はパンのみにて生きるものに非ず」というマタイの福音書の言葉が、今の彼女の窮状を示すのに相応しい。人は物質的満足だけを唯一の目的として生きるものではないという意だが、彼女が欲しいのはお金に象徴される物質的なものではなく、精神的な拠り所である無償の愛なのである。普通に人間として生まれれば、無条件で両親からもらえる当たり前のものを彼女は欲しているのだが、それが彼女にとっては絶望的に

遠いのだ。D2-399「んー,, なんだろう。でも普通に専門卒業して就職して,, 普通に、遅くても良いから結婚して子供産んでみたいな、普通が良かった。普通難しいなーみたいなの。」というナラティブは、決して彼女が何か特別なことを求めていることを示している。人間にとって当たり前のこと、社会の中で普通のこと、誰しもが特に努力もなしに手に入れること、ただそんなありきたりなものを彼女は望んでいるに過ぎないのだが、それが与えられないのは、決して彼女の自己責任に帰する問題ではない。D2-400「普通って難しい。」と彼女は言うのだが、普通を難しくしたのは彼女では無く、彼女の産みの親なのだ。そして、彼女の育ての親にも責任がある。そのような難しい子どもを里子に迎えておきながら、父親は離婚して責任を放棄した。彼女は二度捨てられたのである。そして今、彼女は親に捨てられるという最も辛い状況に三度置かれつつあるのである。多少長くなるが、D2の「実存的貧困」の深刻さを象徴的に物語る箇所を以下に記載する。

原田 412：で、そこを出て、5歳の時に居場所ができたって一瞬は思ったわけだね。

D2-412：あー全然思うよね。

原田 413：ねーその居場所ができたと思ったのにそれが結構早く打ち砕かれた？

D2-413：うん。…

原田 414：…そのあとは一番自分が居場所だと思うところってどこ？社会の中で。

D2-414：居場所があるってこと？

原田 415：ここにいと多少は落ち着くっていうのはどこ？

D2-415：……

原田 416：苦しさが軽減されるみたいな。

D2-416：……………ない（消え入るような震える声で）

原田 417：ホストクラブですら。

D2-417：だって客じゃん。ただの。黙って金落とす客じゃん。……別に楽しいよ。楽しいけど別に酔い醒めたら、あーまたカケ増やしちゃった、みたいな。

原田 418：親友と一緒にいる時とかってというのは落ち着いたりしない？

D2-418：あーするけど、でもー、D2 が可哀そうだから付き合ってくれてるだけなんだろうなーって思う。

原田 419：そういう風に思っちゃうか。

D2-419：絶対そんなことないんだけど、マジで。

原田 420：そういうふうに変に勘ぐるみたいな深読みするみたいな癖っていつくらいからついているの？

D2-420：小さい時から。

原田 421：小っちゃい時から？施設にいる時からもうそんな風にしか思えないか。

D2-421：思ってる，思ってるよ．皆 D2 が可哀そうだから構ってくれてるだけじゃん．

原田 422：人を信じるのって怖い？

D2-422：怖い，，，まあ怖いよね．怖いっていうかなんか信じてても得ないじゃん．損しかないじゃん．

原田 423：そっか．裏切られてばっかり？

D2-423：うん．ま D2 がそういう人だからいけないんだけど．

原田 424：自分を責めちゃうんだ．

D2-424：うん．だって別に D2 が良い子でさー，それなりに生きてればだって人間関係だって良かっただろうし．

原田 425：D2 さんの場合スタートがさ，乳児院なわけじゃん．そこに入ったのって別に D2 さん何も悪いことしてないじゃん．

D2-425：いや，悪いでしょ．

原田 426：責任があるのは親の方でしょ．

D2-426：生まれちゃったんだもん．

原田 427：生まれちゃったのは，だって D2 さんが生まれると思って生まれたわけじゃないじゃん．

D2-427：D2 ができなきゃみんな幸せだったわけじゃん．

原田 428：うーん．自分の責任だと思っちゃうの？

D2-428：そうでしょ，全部．だって D2 がいなきゃ生んだ親だって別になんか，捨てちゃった，みたいな感じ，なんも思っていないだろうけど，そういう過去もなかったわけだし．今の親だって別に 1 人だけに愛情注いでさ，お兄ちゃんを良い風に育てただろうし，皆 win-win じゃん．

原田 429：ハタチになったから知る権利を使って，産みの親に会いに行きたいんだよね．

D2-429：うん．

原田 430：それはなんで？どんな顔してるか見てやりたいみたいな感じ？

D2-430：うーん，なんか D2 生きてるよ，みたいな，死んでないよ，みたいな．お前に捨てられたからって別に生きてっから，みたいな感じ．

原田 431：それは安心させてあげたいとかでは，，，

D2-431：安心しないでしょ，別に．むしろ嫌でしょ．

原田 432：むしろこう，自分は生きてるんだぞっていう存在証明みたいなものを突き付けてやりたい？

D2-432：うん．別にお前がいなくても平気だよ，…………まーどういう人かわかんないからさ．

なんの理由かわかんないけどさー.

原田 433: それ聞きたい?

D2-433: あー別にー. 良い理由ならね. でもさ, 今お金がなくて稼いで育てられるようになったらまた引き取るとかだったらもう引き取られてるはずじゃん.

原田 434: うん.

D2-434: 戻ってこないってことはいらなかったってことじゃん.

乳児院から擁護施設に移り, そこから 5 歳で優しい里親の下に養子に出された時, 幼い彼女は初めて居場所と呼べるような安心できる家に辿り着いたのだ. だが, それは直ぐに崩壊してしまった. その責任は, 絶対に 5 歳の D2 にはない. 受け入れた里親が未熟だったのである. 実子がいたのは別に問題ではない. だが, その実子と差別的な待遇を行うのは, 明らかに心理的な虐待である. 育児放棄という虐待を受けた子供に, 再度育児放棄をする父と, 心理的な虐待をする母, 恐らく, 実の父は誰かも分からず, D2 の母は若くして未婚で彼女を出産し, 捨てたのだと思われるが, 彼女は計 4 人の親から人生で一度も愛されず, かつ全員から虐待を受けたのである. これで正気を保って居られる方が, 普通ではない. 彼女の「実存的貧困」は, 周囲からの度重なる愛の剥奪の結果なのだ.

D2-425 「いや, 悪いでしょ.」, D2-426 「生まれちゃったんだもん.」という, 生存への自己責任論は, 断じて受け入れ難い. そして, そのような自己責任論を彼女の中に構築させたのは, やはり新自由主義なのであろう. 徹底して彼女は自分を責める. それは, 湯浅がホームレス支援の実践の現場で見たホームレスの心理と同じだ. 頑張れなかった自分が悪い, うつ病になった自分に責任がある, 等々, 彼らは社会を責めず, 他人を責めず, 不甲斐ない自分を責める. 新自由主義的統治によって, その経済至上主義に主体的に隷従する. Foucault が指摘した新自由主義の「主体化=服従化」のメカニズムが社会に行き渡り, まさか日本で 20 年間生きてだけで, 不幸に生まれたことにまで自己責任論が展開される時代になったしまったことに愕然とする.

インタビューの終盤で, JK ビジネスを推奨するか尋ねた筆者に対して, D2-446 「偏見はないよ. やれば? って感じだけど, 精神が持つなら.」, D2-447 「それで壊れてくのがヤだ. それは人によるじゃん. 大概みんな壊れるじゃん. 壊れて欲しくない. やっても良いけど.」と答えた D2 のナラティブを, 筆者は坂爪に聞かせたい (※D-2-⑱参照). D1 のような女性の話だけを集めれば, 坂爪のように JK ビジネスを肯定的に捉えることは十分に可能であろう. だが, それは全ての女性にとっての普遍的な理解からは程遠い. 寧ろ, JK ビジネスを肯定する限り, D2 の苦しみを自己責任で片付けなければならなくなるのだが, 筆者にとってそれは耐え難い. 何度でも繰り返すが, 彼女の「実存的貧困」は自己責任ではない. 不幸にして様々な要因が重なった結果であり, 彼女はまさに被害者なのである. そして, その被害の中に JK ビジネスもやはり含まれる. 無論, D1 の様に「裏オプ」などせず, 健全に働けば良かったのだ, だから, 売春に走った彼女の自

己責任なのだ、という指摘をする者もいよう。だが、鈴木が『最貧困女子』で指摘したように、最初から「自己」が壊れている人間に対して、自己責任などを問う方がおかしいのである。仮に坂爪が、JK ビジネスが悪いのではなく、D2 がその使い方を間違ってしまっただけなのだ。だから、これは不幸な事故であって、普通の JK ビジネス嬢達は、こんな苦しみを抱えていない、というのであれば、それは本当に事実かと問いたい。18, 19 でも人は絶望することができる。大人と同じ扱いをされるということは、大人と同じように絶望ができるということだ。だが、法的には 18, 19 は大人であっても、実際に彼らは社会において大人扱いはされないだろう。何故ならば、高校を卒業して直ぐに自立して働けるような少年・少女はほぼいない。彼らは親の庇護の下でしばらくは子供を続けるだろう。つまり、この年代は、まだまだ未熟で親の監護が必要なのだ。その未熟な子供達を歪風俗で働かせるリスクを考えた時、もっとしっかりとしたセーフティネットでなければ D2 が言う様に、皆壊れていくだろう。それは、人権侵害以外の何物でもないのである。

D2-474「幸せになる努力って何？って感じだけどー。だって普通に生きててさ普通に働いてればさ幸せじゃん、みんなそこそこ。普通にできないんだもん。」という D2 のナラティブから社会福祉は逃げてはならない。普通にできない女性達に普通ができなくても普通の幸せを提供できる社会を目指す、そのためにも自己責任論に汚染された新自由主義的統治を終わらせなければならない。それは社会福祉学の使命である。そして、自暴自棄な生き方、すなわち「自傷的存在証明」が唯一の生きる意味と信じている D2 に、生きていて良かったと感じられる日が来るように、無償の愛を伝えらえる社会福祉の仕組みを模索することが、我々社会福祉学徒の役割ではないだろうか。

第 3 項 5 人の素人売春嬢の物語

(1) 前項同様に風営法外のサービスに従事する 5 人の女性を検討するが、大枠としては三群に分けたい。一つは、「最貧困女子」系である。このカテゴリに入る 2 人は、地域の最底辺高校を中退・卒業したり、少年院に入っていたりして、先ず普通に就労できる状況ではない。そのように、昼の社会に居場所が無く、何とか出会いカフェ等を利用して売春で生計を立てている女性達である。次に、「精神病」系である。若い時期から発達障害や精神障害を発症し、まともに働ける状態でないために性風俗の世界で生きてきており、ソープランドのような店舗では無く、出会いカフェやデートクラブを利用して売春をしている女性達である。最後の 1 人は、美容整形目的で韓国での手術用にお金を貯めている女性であり、「モラトリアム」系と名付けたい。昨今、Twitter では美容アカウントが大量に溢れ、美容整形に関する情報がたくさん流れている。そのような情報を収集しながら、自分も美しくなりたいという思いで、売春をしているデートクラブの女性のナラティブを検討するが、彼女の行動や発言は具体性のあるものに乏しく、C6 同様に極めてモラトリアム的である。

最初に、このカテゴリの女性達の特徴を整理すると、全員に何らかの病的な傾向が強く感じられる。その中でも、DSM-5 における B 群パーソナリティ障害（とりわけ、境界性と自己愛性パーソナリティ障害の傾

向は顕著である)の特徴はほぼ全員に見受けられた。BPDのカットオフポイントを超えた者は5人中3人であり、本研究全体の平均が27.0% (一般人口における罹病率の中央値は1.6%)であることから、このカテゴリが60.0%に達しているのは、平均に比してかなり高い数字だと言える。また、残りの2人も6点、7点とカットオフポイントには届かないものの、女子大生平均の3.64点は大きく超えている。従って、素人売春をする女性達は、臨床心理学的に様々な疾患を持っており、背景にパーソナリティ障害が強く感じられると言えるだろう。

では、最初に「最貧困女子」系の2人について会話分析を行う。2人共軽度の知的障害が疑われる。学校は地域の最底辺高校を中退か、ボーダーフリーの通信制高校卒業であり、恐らくこの学歴では満足な場所に就職するのは難しい。1人は未成年の時からホストに騙され、鈴木『援デリの少女たち』に描かれる少女のような扱いを受けている。16歳で補導され、少年院に送られたが、今でもほぼ更生することなく、売春を繰り返しながら生きている。実家は経済的に貧困な父子家庭であり、父親は生活保護を受給しているので、時々その面倒を見に帰っているが、主として首都圏の出会いカフェを起点に活動をしている。最初にこの女性・D3から会話分析を始める。

D3が性風俗で働く理由は、当然第一義的に金銭であるが、よりお金になる店舗に属せず、危険を冒してフリーで売春をするのは、D3の性格的な理由に基づく(※D-3-①参照)。D3-4「え、なんだろう、なんだろう,,面倒くさいっていうのもある。」というナラティブが示す様に、「最貧困女子」系のD3は、デリヘルで働くことが面倒臭いのである。出勤管理を自分でできず、スケジュール通りに勤務できないことで店と何度もトラブルになり、結局自分から行かなくなってしまった。デリヘルの方が稼げると分かっているながらも、自由が利く個人売春で生計を賄うD3は、鈴木『最貧困女子』に出てきても全く違和感が無い女性である。

16歳の時、家出して歌舞伎町に来てホストに騙され、住居を提供するという甘い言葉に乗って住み着いたところ、程なくしてそこでDVと性暴力被害を受けるようになり、指示に従って違法な「援デリ(未成年のデリヘル)」をするようになった。彼女は意志が弱く、脅されるとそれに従ってしまい、直ぐに逃げるという選択肢は取れなかったのである。D3-17「それで、たまたまフラフラしてたら男の人声掛けてきて、『家出してるんだ』って言ったら『じゃあ優しくするし家来て良いよ、料理も作るから』ってついてって、その人にお金を貢いでったみたい。それで援交して、みたい。」という当時を語るD3のナラティブには切迫感がほとんど感じられない。事実、少女を軟禁し、児童売春を強要した男性に対しての憎しみや怒りを軽度の知的障害を持つ彼女は明確には示さないのだ(※D-3-②参照)。

D3-16「家出してテレビで見て、歌舞伎町ってすごいな一って思って、ホストいっぱいいるな一って思って、高校卒業、あ、卒業、中退しちゃったから、暇だし遊ぶ人いなかったから行ってみたの。家にいんのやだから。」というナラティブで着目すべきは、16歳で家出して、真っ直ぐに歌舞伎町に行ったことである。家出少女でも幾つかパターンがあるが、いきなりお金もないのに繁華街、それも日本一の繁華街にホストで遊ぶために行ってしまうというのは、普通感覚ではない。D3のナラティブから、家にも居場所が無い、

学校にも居場所が無い、地域にも居場所が無いという、鈴木が指摘する「三つの縁」が彼女には全て存在しないことが分かる。加えて、D3は、「三つの障害」のうち、軽度の知的障害を持っている。つまり、彼女は典型的な「最貧困女子」なのである。

そんな彼女は、一度は実家に逃げて戻った後も、また直ぐに歌舞伎町に戻ってきてしまうのだ。何故ならば、家に戻っても結局は父親の暴力が待っているからだ。そして、再びお金もないのにホストクラブに嵌ってしまい、カケを支払うために今度は風俗に回されたのであるが、未成年だったため、普通の店舗では採用することができず、違法なアンダー店をスカウトに紹介されて、そこで借金返済のために違法の援デリを行うことになった。その店は、ほどなくして警察の摘発に遭い、店長は逮捕され、当時16歳の彼女も補導されて少年院送りになった。その後1年以上少年院に入っている。テレビ等でも大きく報道された事件である。

D3-42「16ん時に1回帰って、でもやっぱ歌舞伎町ハマっちゃってるからまた行っちゃってまた変な人に会って。1回私テレビ出た。」、D3-43「1回捕まっちゃったから。それで反省して。1年くらいちょいくらい入って。」というナラティブから分かる通り、彼女は、軽度の知的障害があるからか、遵法意識や倫理観、社会常識というものが欠落している。16歳でホストクラブに出入りしたのも、ホストに騙されてであり、更にそこでDVを受けたりしても、それに甘んじてしまう。警察に相談したり、福祉機関に相談するという選択肢は全く思いつかない。そして、援デリをしている時の彼女の取り分は、一日1,000円である。毎日5、6人と売春をし、10万円以上を稼いだというが、16歳という年齢を考えると、もっと高く売れていてもおかしくない。アンダー（未成年）の少女は、例え合意があっても買った場合は男性側が児童福祉法違反に問われるため、男性の側も非常にリスクが高い。発覚すれば社会的制裁を受け、懲戒解雇や免職の対象になる。しかし、それにもかかわらず、アンダーを専門に買春する男性というのは一定数存在し、売り手が少ないために、比較的高額で売買春が成立する。しかしながら、彼女の取り分は一日1,000円であるため、非常に都合よくホストの男性に騙され支配されていたのである。その後も、補導・少年院という流れを見るに、彼女はかなり小さい頃から性犯罪に巻き込まれていたことが分かる。D3は軽度知的障害の女性にありがちな性的搾取の対象だったのである。

D3の家族環境も劣悪である。彼女が頻繁に幼少期から家出を繰り返している理由を問うと、D3-86「高校辞めたし、親が厳しいから家にいたくないみたいな。」と答えるのである。彼女にとって、学校も家庭もどちらも居場所にはならなかったのだ（※D-3-④参照）。元々父親は定職に就かずニフラしている状態であったが、その状態で、彼女も含めて6人の子供を設けた。両親にも避妊等の知識が無い可能性があり、軽度の知的障害は遺伝の可能性も高い。母親が親権を取れなかった事実から、母親の方が知的障害の程度が高いことが伺える。不安定ではあっても仕事をしていた父親が子供を育てたのだが、粗野で暴力的で、躰と称してしばしばD3は殴られたという。虐待の認識はお互いに無い。親が子供を殴るのは当たり前という認識の家庭環境である。だが、さすがに耐え切れないことが多くなり、D3は度々家出を繰り返すようになる。兄も、同時期に家出を繰り返している。家族内での父親の暴力は日常的だった。D3はそのため、暴力に対

して感覚が麻痺しており，ホストから DV を受けた時も，それを異常だと思わずに受け入れてしまっていたのである．

このような D3 は，D3-125, 128, 134「面倒くさい」ために，とにかく普通の風俗店に適応できない（※D-3-⑤参照）．どれも「面倒くさい」という一言で済ませてしまうのであるが，つまりは基本プレイを覚えられないのである．デリヘルのような送迎付きのシンプルな業態ならまだ何とかなのであるが，ホテルになると，ホテルへの道筋が覚えられないのでダメになってしまう．また，イメクラのようにロールプレイが求められると，一切アドリブもきかず，かといって台詞も覚えられないので，続けることができないのだ．キャバクラのチームプレイは当然できるはずもない．従って，「最貧困女子」が出会いカフェやインターネット掲示板を使った個人売春に行きつくのは，ある意味当然のことなのである．

更に彼女は，AV でまで性的な搾取に遭っている（※D-3-⑥参照）．D3-146「本当はダメだけど．」，D3-148「多分，外国向けの，，，海外の人しか見れないって言ってた．」というナラティブから分かる通り，彼女は，自分が出演した AV が普通の AV ではないことは，辛うじて理解している．だが，それがどのようなものかは全く想像がつかないのである．そして，誓約書もなく，説明も無いこの状態は，PAPS や HRN が出演強要被害と呼ぶ状態であり，彼女は知的障害に付け込まれた完全なる被害者である．だが，それにもかかわらず，結局，D3-153「そうなの，まあ良いんだけどさ（笑）いっぱいあんじゃん AV なんて．わかんないと思うよ．」，D3-154「別にいっかな，って思っちゃう．」のだ．

事務所も通さず，当然メーカー等の面接もない段階で，完全に違法な裏ビデオなのであるが，彼女にその認識はない．三本で 25 万円も彼女にとっては十分な値段なのであろうが，だいぶ買い叩かれている可能性がある．海外サイトで恐らく無修正で世界中に拡散されていると思われるが，それに関してもさほど大ごとと捉えていない．一言で言えば能天気なのであるが，やはり事の重大さをきちんと認識しているとは思えない．少年院にいた 1 年 2 か月を除いて，物心ついて以来，ほとんどの期間を彼女はスカウトを通して性的に搾取され続けている．だが，その間，それなりに羽振りのいい時期もあり，特に未成年でデリヘルをやっていた時は月収が 100 万円を超えたという．そのために，金銭感覚は完全に狂っている．今も，さほど稼ぎが良い訳ではないのだが，D3-297「クラブ行ったり，服，かな，服とかネイルとか美容とか．」というナラティブから分かる通り，散財が止まらない．貯金や将来への備えという「リスク社会」を生き抜く上で不可欠なリスク概念は完全に欠落している（※D-3-⑦参照）．父親が生活保護を受けているのに，同一世帯の彼女が数十万の収入を売春で得るのは完全に生活保護法違反なのであるが，彼女にはその認識も無い．悪質な場合は詐欺罪で訴えられるというリスクも理解できない．また，将来の展望について語れば，到底実現不可能なことを語る．日本でも満足に生きていけない彼女が，D3-307「うーん．ボランティアとか．海外行って．」というのである．クラブの外国人がフレンドリーに日本語を話すからと言って，外国で日本語が通じると思う感覚がやはり普通ではない．C2 や C9 のような「躁的防衛」ではなく，大真面目に彼女はこれを語っているのである．

彼女のリスクに対する驚くべき無頓着さ、未来に対する無計画さは、これまで指摘してきた通りであるが、彼女は楽天的ではあるものの、売春を一生続けることはできず、そこを居場所にするのも恥ずかしいことであるとは一応認識はしている。だが、売春産業に対するスティグマを実感しているかという点、さほど強くはないのである。寧ろ、彼女は売春産業に大きな不満は無い様に感じられるのだ（※D-3-⑧参照）。原田354「そっか。でもその分リスクもあると思うんだけど、リスクは今までなかった？何にも。」というのは、これまでの散々性的に搾取され続けてきた彼女の人生について、どのように考えているのかを改めて問うた部分であるが、彼女はやはり搾取されている自覚は全くない。D3-354「別に.」, D3-356「うーん、ない。みんな良い人.」と自ら居場所ではない、といった個人売春の現場に満足している様に語るのである。D3の一連のナラティブから結論として導かれるのは、やはり「最貧困女子」を法的に守るシステムを構築しなければ、彼女の様な存在は今後もひたすら搾取され続けるのではないかと、という懸念である。鈴木が『最貧困女子』や『援デリの少女たち』で描いたD3の様な女性達が受けている壮絶な性暴力被害と性的搾取の実態は、恐らく氷山のほんの一角に過ぎないだろう。

もう1人の「最貧困女子」系女性・D4は、彼女曰く、「彼氏」に貢がせられている。実家は厳格な家であり、風俗で働いていることがばれて、父親に二度と家の敷居を跨ぐなと勘当されている。そのため、高校時代の一つ後輩である彼氏のアパートに住んでいるのであるが、その彼氏という認識がそもそも怪しいのである。また、彼女の高校は誰でも入学可能な通信制高校であり、その学校の後輩ということは、その後輩も軽度の知的障害か発達の障害を抱えていても何らおかしくはない。そして、話を聞けば聞く程、その疑念は深まるのである。

彼女の家族は、基本的には高学歴と言ってもよい家系である。D4-16「最初親にその彼氏と住むっていうのを了承を得たんですけど、彼氏がまあ一緒に住むのに挨拶も来ないとかそんな奴は礼儀がないっていうので、父親がなんか『だったらうちには帰ってこなくて良いし』って。『お前もどっから収入源があるかわかんないから、そんな子はうちにいない』って言われて。『もう一切帰って来るな』って言われたから。」というナラティブから分かる通り、D4の実家は厳格で古風な家柄である（※D-3-⑨参照）。親族のほとんどが一流かそれに近い大卒の経歴の持ち主であり、父親も同様である。彼女は、一家の恥、或いは「黒い羊」的な位置付けにあり、その意味でD4は子供のころから肩身の狭い思いを抱いてきた。これは一種の心理的な虐待と言っても過言ではないレベルである。

大学に進学できるレベルではなかったD4は、許されるのであれば専門学校に通いたかったのである。D4-37「まあ美容師じゃなかったとしてもメイクアップなり着付けなり教える仕事とかしたかったなって。」と彼女は叶わなかった進路について、多少の後悔を滲ませながら語る（※D-3-⑩参照）。D4に限らず、性風俗に従事する女性達の中で、一定数必ず美容系に進みたい、と語る女性達がいる。そして、風俗嬢のセカンドキャリアを支援する団体である一般社団法人 GrowAsPeople (GAP) は、美容系などのこれまでの知識を活用できる場所へ、風俗嬢のセカンドキャリアを後押しする支援を行うという。だが、安易に彼女達の希望

に沿った支援を行うことは、危険なのではないかと、D4などの存在を前にすると懸念せざるを得ない。D3もそうであるが、彼女達は、働く以前に、明らかに福祉に繋がるべき存在である。まず、支援の方向性はそこに向けるべきではないだろうか。次に、日本の産業の中でも介護、保育と並ぶ低賃金で、元々性風俗産業がその女性達の受け皿になってきた美容業界に彼女達を繋げたところで、ブラックな過重労働から再び性風俗に舞い戻るだけで、美容業界と性風俗を行ったり来たりする「回転ドア現象」が起きるのではないかと、という懸念もある。それでも、性風俗に関わる女性達は、昼の正業で就くとすれば何か、という質問に対してエステ、ネイルサロンといった、美容業界を挙げる者が多い。だがこれは、単に彼女達の生活の中で知っている、或いは馴染みのある業界を挙げているに過ぎないのだ。どんな女性も、女性性を向上させるために、美容業界とアパレル業界には絶対にお世話になる。逆に言えば、世間知らずな彼女達はそれ以外に想像できる仕事が日常生活に組み込まれたコンビニや飲食店の店員くらいしか思い浮かばないのである。美容師やメイクアップアーティストに就けたとしても、その給与は恐らく最低賃金に近いだろう。そしてその額では、彼女のように家を失った女性は、本来生きてはいけないはずだ。結局現実問題として、住居をなんとかするために、彼女は売春で生計を立てて、「彼氏」だと彼女が思っている男性の家に転がり込んでいるのである。だが、やはりそこには性的搾取が見受けられるのだ。彼氏は、彼女を金ヅルとしか思っていない。その彼氏のために、彼女はやりたくない売春を続けて心身を摩耗させている。そして、時には都合よく彼氏に性の捌け口にされるのであるが、いくら本人がそれを望んでいたとしても、厳密に言えばそれはデートレイプの類なのである。何故ならば、彼氏は自分を彼氏と認識していないからだ。

ハウジングプアの状態にあるD4は、自立するためにはある程度の給与が最初に保障されなければならない。だが、彼女自身その厳しさを理解している。D4-70「だから、普通に職に就いても高卒とかだと初任給が20万いかないくらいじゃないですか。」というD4の認識は正しいだろう。彼女の学歴では、初任給が20万円の会社に勤めたとしても十中八九そこはブラック企業である。資格も何もない、パソコンは全く使えない、一度も昼間まともに働いたことが無い、という人材を採用する会社は、まともな会社ではないはずだ。また、普通に最低賃金の時給でコンビニや飲食店で働いても生計は成り立たないし、将来的には年金すら満足に貰えない完全な「アンダークラス」である。だが、家族に縁を切られた彼女にとっては、その「アンダークラス」にさえ辿り着けていないのである。基本的に彼女は「住所不定無職」であるからだ。江口が貧困だと措定した「不安定・低所得階層」以下の状態にD4は置かれているのである。そして本来それは、「要保護層」つまり、生活保護を受給すべき経済的な困窮状態なのである。彼氏のアパート代や光熱費を全て彼女が賄っているにもかかわらず、彼女が置かれている状況はかくも絶望的なのだ。

自分自身を支えてくれる人は誰もいないのか、という筆者の問い掛けに対して、D4-100「うん」という小さく震える声で答える様に、現在彼女は圧倒的なまでにパワーレスである（※D-3-⑫参照）。事実、それを証明するように彼女の「拡張版ホープレスネス尺度」は、対人領域でも達成領域でも絶望の最大値を示す20に限りなく近い18である。このサブカテゴリは、比較的この尺度が悪い数値の者が少なく、同様に「生き

「生きがい感スケール」も寧ろ他の4人は全員女子大生平均よりも高い。普通の社会人として暮らせていないのに「生きがい感スケール」が高い理由は、「精神病」系の2人は「躁防衛」のため、女子大生で醜形恐怖症の女性は、貯金がたくさんあるため、また大学での交友関係があるため、と説明できる。先に検討したD3は、軽度知的障害のために自分の置かれている状況の深刻さが理解できないからであろう。そういった理由で、他の4人が軒並み「生きがい感スケール」が高い中、彼女の低さは45と突出している。だが、ホームレス一歩手前の状態であることを鑑みれば、彼女が極めてパワーレスで、ヴァルネラブルであることは当然であろう。

D4-101「店舗型のお店に行かない理由はやっぱし、出会いカフェって、自分に決定権があるじゃないですか。」と彼女はかなりの「絶望的貧困」状態でありながらも、幾許かのエイジェンシーを発揮している（※D-3-⑬参照）。店舗型風俗店では、全ての客に等しくサービスを提供しなければならないが、出会いカフェの場合は、ある程度女性に決定権がある。嫌な客に無駄に時間を使う必要もなければ、そもそも申し出自体を却下もできるのだ。大半が売春を希望する客だとしても、中にはただ食事だけしてお金をくれる人もいるかもしれない。常に生存が脅かされている今の彼女にとって、全て言いなりにならない状況を作り、かつ上手くやれば店舗に属するよりもお金を稼げるかもしれないというのは、一縷の希望なのであろう。だが、この状態は当然リスクを自ら引き受けることになる。店舗が介在しないということは、誰も彼女を守ってくれる人はいないのだ。最悪、東電OLのように薄汚いホテルで変死体で発見されることも我が身に起こり得るのである。D4-105「やっぱし、男性も上手く言い逃れていなくなっちゃう人もいないじゃないですか。」というナラティブで語られるリスクは、ある程度織り込み済みで行動しなければならないとすれば人を信じることは難しく、客と信頼関係を構築する、或いはプレイを楽しむという普通の性風俗にある要素は全く無くなってしまうであろう。ただでさえ、出会いカフェのシステムは、男性に有利で女性に不利なのである。マジックミラーで正体を隠したままで選ぶことが可能な男性と、一方的に選ばれる側の女性という状況がそれを如実に物語っている。男性は、選んでいる間はノーリスクで女性を物色できるのである（※D-3-⑭参照）。

出会いカフェは、家出少女やD4の様なホームレス一歩手前の女性を囲いこむために、食べ物だけでなく、コスメやちょっとした電化製品まで備品として置いてあったりして、明らかに男性の部屋と差別化させて居心地が良い雰囲気を出している。男性の側にも時間を潰すための週刊誌が置かれていたり、軽いドリンクバーがあったりもするが、女性の側ほど充実していない。都内と異なり、政令市の大規模な出会いカフェになると、個室のカラオケボックスまでマジックミラーで仕切られて男性から覗けるようになっていたりして、女性を囲いこむに当たっての企業努力が垣間見られる。だが、こうした一見女性にとってメリットがありそうな様々な仕掛けも、結局は買う男性の側が圧倒的に有利な権力構造を土台に成り立っているだけなのだ。JKビジネス店で同じようにマジックミラー越しに見られることを、D1は「売り物感が凄い」と表現していた。出会いカフェで起きていることも、「性の商品化」であり、女性の「物象化」である。だがそこには、JKビジネスにおけるような敬意はほとんど無い。美しい女性が美と若さを競い合う華やかなJKビジネスの舞

台と異なり、出会いカフェのマジックミラー越しの世界は、そこに参加できない女性で溢れており、さながら家畜の競り市場の様相さえ呈している。

そのように女性の尊厳が徹底して奪われる出会いカフェに1年以上留まり続けたD4の自尊心はボロボロである。そして、競りで買い叩かれるように、自らの性を買叩かれてきた彼女は、遂に社会や他者に対する信頼を失ってしまった。D4-132「んー、まあでも『世の中全てお金なんだろうな』としか思えないんですよね。」というナラティブが20歳の女性の口から出てくるまでには相当の葛藤や苦悩があったと思われる(※D-3-⑮参照)。結局自分自身を切り売りするということは、人格や尊厳をお金に換算することであり、その人格の金銭への換算過程を経て、人間の「実存」は破壊されるのである。心理尺度の全ての領域、項目において、女子大生平均を下回り、ほぼ全てが最低水準の彼女の心理状態が、いかにこの1年間で過酷な日々であったのかを物語っている。

本当は、D4とて売春などしたくないのである。JKビジネスのように、添い寝だけでお金が稼げるのであれば、そうしたいのだ。だが、彼女は容貌が見劣りするために、JKビジネスには参入できなかったのだ。D4-145「んー、いや、,,、本当は体売らずに添い寝とかだけで出来れば良いですけどでもそういうのってごくわずかな子だけなんです。スタイルも滅茶苦茶細くてスラーっとしてる子、尚且つ顔も可愛い、なんかそういうところの面接に1回行ったことはあるんですけど、『もうちょっと細ければねー』とか言われたことがあるんですよ。」というナラティブには、D1のように、「裏オプ」無しでJKビジネスができる「選ばれた女性」への嫉妬が込められている(※D-3-⑯参照)。家庭環境が劣悪で、性規範からして疑わしい少年院上がりのD3と異なり、それなりに裕福な家庭で育ったD4は、今はホームレス一步手前とはいえ、売春に対してはかなりの抵抗感があり、スティグマを内面化しているのである。だが、哀しいかな、D4の容貌では、JKビジネスの優良店では採用してもらえないのだ。ここに新自由主義社会における女女格差が如実に表れている。貨幣価値に換算されるものは容貌、才能等すべからず換算され、社会の中における位置付けが残酷なまでに可視化される。女性としての魅力の頂点が、性風俗産業においては六本木の高級キャバクラ店や専属AV女優の更に上に存在する「恵比寿マスカッツ」だとすると、彼女が置かれている今の状態は最底辺に近い。中村が提示した性風俗の偏差値の最低辺である地方ピンサロレベルか、どこの店にも所属できないような「三つの障害」のいずれかを抱えた「最貧困女子」が、出会いカフェというマジックミラーの部屋で今日も誰かから声をかけてもらうのを待っているのである。男性の側がプライバシーが守られて覗きに徹することができるのに対して、出会いカフェの部屋にいる限り、女性の側は常に見えない場所から品定めされている。D1の「売り物感」という言葉もショッキングであるが、JKビジネスの場合は、さながら高価な商品のオークションである。だが、出会いカフェは最大30人の女性が狭い部屋に所狭しと陳列される姿は、最早「見世物感」と表現しても差し支えないような気がする。その様な体験の繰り返しは、さぞD4からエイジェンシーと尊厳を奪ったのではないだろうか。

せめて、彼女が実生活においては恵まれていれば救われるのであるが、そこでも彼女は性的搾取に遭って

いるのが現実だ。D4-167「まわってないです。もう 1 円もまわってないです。」という通り、彼女は一年間もほぼ毎日出会いカフェに仕事のように通って、全く貯金が無い（※D-3-⑩参照）。ただひたすら彼女の中の性だけが消費された一年間だったのである。そこまでの苦痛を味わいながらも、彼女は彼氏に尽くすのだ。それは、ほとんどホストに貢ぐ「信者」の姿である。だが、実態はそれ以下なのだ。ホストにとっては、エースはかけがえのない存在だ。ホストの店のランクは完全にエースの手に委ねられている。担当とエースは一心同体であり、エースが潰れて飛べば、その責任は担当ホストに回ってくる。だから、担当はエースの心身をケアする。時には嫌でも枕営業を行って、性的にもエースを癒さなくてはならない。ホストがエースを切り捨てる時は、エースがストーカー化するか、潰れた時だけである。だが、今 D4 は、彼氏にとってのエースのように、必死に貢いで尽くしているにもかかわらず、見捨てられることに怯えている。勿論、住居を追い出される恐怖もあるだろう。若い女性がホームレスになれば、性暴力被害に遭いやすいことは論を俟たない。だが、D4 が一番恐れていることは、彼女の座を失うことである。そもそも、今現在が本当に彼女であるのかも第三者的には疑わしいのであるが、少なくとも D4 は自分自身を彼女であると認識している。だが、男性にとっての彼女は、ホストにとってのエースほど重みが無い。二者の間に仕事が生じていない以上、何時でも男性は彼女を捨てることができるのだ。だからこそ、D4 は滑稽なまでに怯えているのである。その恐怖は、ホストにお金を費やすエース以上であろう。少なくともエースは、お金を生む限りにおいては絶対に捨てられない。D4-170「うーん、多分そうです。」という彼女がどれ程苦しいかは、想像に難くないのである。

彼女が彼氏に捨てられないためには、哀しい話であるが、やはり売春以外に選択肢はない。彼女の能力は、メリトクラシー型能力もハイパー・メリトクラシー型能力もいずれも極めて低い。そんな彼女が、D4-192「本当に私パソコンも出来ないし、目上の人に接せるかわかんないですよ。だから友達みたく『よう』みたいな関係だったら全然行けても自分で思ってるから、それでも働ける場所だったら行きたいと思うけど。」と語るような感覚で働ける昼の会社はブラック企業以外に恐らく存在しないだろう。そして、自尊心が下がり切っている彼女は、怒られることに耐えられない。客に文句を言われても、上司に上から目線で怒られることは、彼女にとっては人間性を否定されることなのだ。その恐怖があるから、彼女は昼の正業に就けないのである。また、今の彼女には彼氏の生計を成り立たせるために 1 人以上のお金がかかる。結局、やりたくない売春から逃れることができない。唯一方法があるとすれば、生活保護である。彼女は現実問題ホームレスの一手手前であり、生活困窮者なのだ。もし、彼氏のアパートを追い出されれば、ホームレスになるか、生活保護を受給するか二択しかないのだ。従って、現実的に生活保護を検討してみても、と勧めると、D4-215「でも、何ですかね、まだそこに頼ってはいけない気がするんですよ、生活保護までは。」という新自由主義の自己責任論が彼女の内部から彼女を責めるのである（※D-3-⑪参照）。彼女にとっても、生活保護は、売春以上のスティグマなのである。

インタビューの最後に、彼女にとって出会いカフェでの売春行為に、お金を稼ぐ以外に何か意味があるか

を問うと、D3 と異なり、彼女は何もないといいうのである（※D-3-⑱参照）。D4-255「私にとってはないですかね.」というナラティブに象徴される、エイジェンシーを発揮する余地も、やりがいも楽しさも何もない過酷な性労働をこれからも続けていくことは、極めて彼女の心身にとって有害であろう。「売春が本質的に外傷体験である」という事実は、彼女を見ていれば非常に良く分かるのである。上野千鶴子は、『毒婦たち：東電 OL と木嶋佳苗のあいだ』の中で、臨床心理学者の河合隼雄が、「売春は魂が傷付く」と語ったことを揶揄し、男性の変なロマンティズムを押し付けるなどフェミニズムの立場から笑い飛ばしたが、その感覚は絶対に間違っている。魂というスピリチュアルなものが傷付くかどうかは分からない。だが、少なくとも、売春によって女性の心身は間違いなく傷付くし、壊れる。これは科学的に疑う余地が無い事実なのである。

(2) 「精神病」系の 2 人として D5、D6 の会話分析を併せて行うが、この 2 人は短大における友人である。ビジュアル系バンドが好きの「メンヘラ」という共通項があるために、大学在学中から行動を共にしている。年長の D5 が D6 を支配する様な感じを受けるが、事実お互いにその関係性を自覚している。

D5 は、精神病質（サイコパス）の確定診断を得ており、幼少時より地域社会の大問題児である。今は美容整形外科医と愛人契約を結んで全身整形を行い、ほとんどサイボーグのような状態で美を追求している。地下アイドルの C9 と同じ様に醜形恐怖症である。様々な精神疾患（PTSD、適応障害、不安障害、摂食障害、アルコール依存症、パニック障害（PD）、自傷癖）を持ち、本研究のインフォーマントの中で、「自傷性」という意味では最も激しさが際立つ女性である。

その女性が精神的な支配下においているのが、D6 である。彼女も様々な精神疾患（PTSD、適応障害、不安障害、双極性障害、アルコール依存症、薬物依存症、パニック障害（PD）、ASD、ADHD、BPD、自傷癖）を持ち、D5 同様に美容整形を行い、タトゥーを全身に入れている。2 人とも深刻な児童虐待の被害者である。幼少期に「重要な他者」を持たず、「実存的貧困」状態に陥り、ひたすらに「自傷的存在証明」を続けている人生である。今は 2 人共売春と水商売で生計を立てている。売春は、出会いカフェではなく、デートクラブを利用している。2 人共美容整形の甲斐もあり、女性としての魅力は備えているため、D3 や D4 のような最底辺の個人売春をする必要は無く、デートクラブを通じて知り合った複数の男性と定期的な売春を行う愛人契約を最も大きな収入源としている。また、2 人共ビジュアル系バンドマンの男性を囲ったり、親密な関係を持ったりしている。

D5 も D6 も虐待被害者である以上、当然家庭環境は荒れているが、中でも D5 のそれは尋常ではない。彼女も含めて、祖母も母も、それぞれ祖父、父から DV を受けており、女性が虐待や DV を受けるのがある意味当たり前という異常に父権的な家風の中で D5 は生育している（※D-3-⑳参照）。D5-18「あーもうクソでした.」、D5-39「ああ全く良くないです。自分がこうなったのも全然おかしくないと思います.」というナラティブから、彼女が自分の生い立ちに対して激しい憎しみを抱いていることが良く分かる。家庭環境が

劣悪な点では C3 や B10 に近いが、彼女達でさえ、ここまで露悪的に自分の家族を否定はしなかった。また、まともな親がいないという意味では D2 も同じ虐待被害者であるが、彼女達に比べると D5 はさほど心理検査の結果が悪くない。無論、これだけの複数の精神疾患を抱えている以上、女子大生平均は総じて下回ってはいるが、全体的に下回っているということはない。同じ虐待被害者の上記の 3 人が全員壊滅的な心理検査の結果だったことを鑑みると、彼女が比較的良好（に見える）な心理状態を維持しているのは、共感能力や良心を持たないサイコパスの心性が、普通だったら心的外傷を受けるような場面で逆にストレングスとして機能したのかもしれない。

D6 も D5 程では無いが、家族に対して否定的な感情が強い。D6-2「中・高. 中 1 で親が離婚して、自分の行きたかった友達の多い中学に行かせてもらえなかったことで反抗心が出て、それ関係なく、それとは関係あった、けど、親の仲悪くて父親が失踪して（笑）」と語るように、その否定的な思いはとりわけ父親に向けられている（※D-3-②参照）。中高と引きこもっていたが、その直接の原因は、元々不仲だった親が、中一の時に離婚したことである。加えて、遺書を置いて父親が突然失踪したという事件は、結局死んでいた訳では無いが、当時子供の心に大人や社会に対する不信感を植え付けるには十分であったと思われる。なお、D6 は、ASD のためにコミュニケーションに障害があるのだが、それは言語表現にも表れており、話し方も言葉遣いも明らかに違和感を覚えるレベルである。また、笑った時の大き過ぎる声や常時視線が泳ぐ感じから、B10 同様に ASD 特有のずれたコミュニケーションを強く感じる。

2 人共、凄絶な家庭環境で育っているため、D5 がいうように、精神疾患を抱えて人生が生きづらくなったのは、明らかな彼女達が成育した機能不全家族が原因である。著しい愛の欠損としての虐待は、食料の欠損としての飢餓と同じくらい人生の早期にあってはならないと実感する。「実存的貧困」は、必然的に「自傷的存在証明」を引き起こすのであるが、彼女達の激しい自傷性や「承認」への渴望は、彼女達のナラティブの端々に表れている。

D5-47「そうですね、1,000 万は優に超えると思います。」という整形依存症は、C9 を彷彿させる（※D-3-②参照）。彼女も全身に整形は波及していき、顔だけで 700 万円を超えていたが、D5 はそれを遥かに凌ぐ 1,000 万円超である。そして、そのために美容整形外科医の愛人になるなど、良心の呵責や良識というようなものは完全に欠落しているようだ。サイコパスの確定診断が下りているのも納得である。だが、そこまでして手に入れた容貌が好きかと問うと、D5-48「いえ、特に。」とそっけない。C9 もそうだったが、醜形恐怖症の女性は、美容整形の手術直後は気持ちが高揚して幸せになっているが、暫くすると必ず、容貌に再度自信が無くなってきて、美容整形を繰り返す。D5 は、何度もそのサイクルを繰り返してきたので、自分が美容整形手術の結果に納得することなどないと、経験的に分かっているのだから、そのような返答になったのだろう。D5-208「承認欲求もかなり強いですし自己愛もかなり強いです。で、母にないものが多分私の暴力衝動だと思います。」というナラティブが、彼女という人間を象徴している。D5 とは、承認欲求と自己愛の怪物なのである。

D6 も D5 同様に美容整形には並々ならぬ情熱を傾けている。そして、現在は D5 からかなりの影響を受けているようだ。D5 が初めて美容整形を行ったのは D6 と出会う以前であるが、D6 と出会ってから、D5 の人工的な美しさに圧倒され、劣等感を抱き始めたようである。D6-175「そうですね、コンプレックスはめっちゃありますね。」というナラティブが、D6 に対する劣等感を素直に表している（※D-3-②参照）。そして、彼女もまた本人が自覚しているように、醜形恐怖症であり、美容整形手術を何度繰り返してもそこには終わりが無いことが示されている。また、D6-177「友達。一番仲の良い。」は、D5 のことを指しているのであるが、サイコパスの D5 は、恐らく本当の意味で D6 を友達だと思っていない。D5 が抱いている友情は、実は一方通行なのである。寧ろ、D6 は密かに D5 が破滅していくように仕向けている。D5-118「で、自分よりも落ちた人間を見るのがすごく楽しくて、私は、そういう人たちと仲良くしてそそのかして不幸にするのが好きなんです（笑）」というナラティブから、その悪意が伝わってくる（※D-3-④参照）。彼女の自傷の傷跡を見ると、似たような自傷癖のある「メンヘラ」の女性達が彼女に近づいてくるのであるが、D5 は、そのような女性達をホストクラブや風俗産業などに誘導して人生を破滅させるのに喜びを感じてしまうのだ。過去に彼女は詐欺行為を行っていたことや脱法ハーブに手を出していたことなど、様々な反社会的なことをインタビューの中で赤裸々に語っているが、反社会的というよりも、反人間的行為を笑いながら語れる倫理観の欠如に驚愕する。彼女を一番の理解者だと慕っている D6 が、D5 の本性を知ったらどう思うであろうか。D5-113「これも普通の人間にはない物なんで。」と誇らしげに自傷の傷跡を見せる彼女の「闇」と「病み」は深い。これ以外の箇所でも、彼女は自分自身の自傷的な行為について語るが、タトゥーに関しては語ったナラティブは特に印象的である（※D-3-⑤参照）。

D5-54「首の後ろにバーコード入れて、自分はもう人間はやめようと思って。ただの商品でいようって決めてバーコードを入れました。」というナラティブは、D5 の「実存的貧困」の深さを物語っている。自分を商品化する「自己物象化」は、性風俗産業に従事する女性達が採る一つの現実逃避の手段である。自分が人間であるから、売春によって尊厳が傷付けられて苦しくなるのである。従って、意図的に自分をモノ化することによって苦痛を緩和しようというのは、防衛機制という「解離（Dissociation）」のメカニズムの一種だと思われる。虐待されている子供が、「解離」によって痛みを感じなくさせたり、虐待を受けている自分をあたかも他人事として見ているのは、PTSD や解離性障害の研究においてしばしば報告されている。

太宰治を「実存的貧困」の体現者として東電 OL と一緒に本研究の冒頭で示したが、D5 が自分を「人間失格」であるとして太宰に重ね合わせているのは決して偶然ではない。D5-106「自分,, あの一、縫うような大傷を人に負わせると逮捕されたりとか色んな問題になるじゃないですか。それが面倒くさいんで自分に向けた方が良いと思って。」というナラティブは、彼女の破壊衝動が自傷行為以外でも存在しており、それは他者に向く可能性も常に秘めていることを示している。ただ、サイコパスの彼女は痛み鈍感なため、他者を害して面倒に巻き込まれるよりも自分を害している方が楽なので、単に損得勘定でそうしているのである。だが、時にはそのような制御も失うことがある。彼女がサイコパスであり、本質的には人間としての共

感力と良心を完全に欠いた怪物であることは、D5-92「あの一、『あははは』って笑ってたら次の瞬間灰皿投げてるとかそういうレベルのものが多くて。」というナラティブからも明らかである（※D-3-②⑥参照）。この言葉には、一瞬背筋が凍った。実際に、このインタビューをしている間、その後も終始背筋が凍るような恐怖を感じた。目の前にいる女性が、実は怪物であるということに恐れを抱きながらの1時間だった。それは、Nietzscheの「怪物と戦う者は、その過程で自分自身も怪物になることのないように気をつけなくてはならない。深淵をのぞく時、深淵もまたこちらをのぞいているのだ」という警句の意味を思い起こさせるに十分な体験であった。実際に、何か自分が気に入らない言葉を言った瞬間に、彼女は「あははは」と笑いながら全力で自分の顔面に至近距離から灰皿を投げつけるのではないかと、という恐怖を感じたのである。「実存的貧困」状態にある者が、Nietzscheがいうところのルサンチマンを抱いた時、社会の中で戦慄すべき事件が引き起こされる、として幾つかの殺人事件やテロリズムを事例として挙げたが、図らずもD5はその中の一つに自分から話題として触れた。多少長くなるが、その箇所を以下に引用する。

原田 346：うーん。PTSD っていうのはこれ何に対するトラウマなんですか？

D5-346：それはねー、小学校2年生の時に知的障害者に首絞められてレイプされかけたんですよ。

原田 347：うーん、それも結構ディープな話ですね。

D5-347：そうですね。知的障害者なんてみんな死ねば良いと思ってますよ。

原田 348：ええ？

D5-348：あったじゃないですか、前、施設襲ったやつ。

原田 349：ありましたね、相模原のね。

D5-349：そう、よくやったと思いました。

原田 350：それは事件にならなかったんですか？警察が介入したりとか。

D5-350：私の事件ですか？

原田 351：うん。

D5-351：母親が怒っ、,,ま、怒るのは当たり前じゃないですか（笑）で一、警察にも介入してもらいましたが、結局責任能力ないような人間なんで。だから、基本的に私、スカーフとかマフラーが一切巻けないんです。

原田 352：首に？

D5-352：首に。ネックレスは細いんで平気なんですけど、首のここら辺の範囲を全部覆うものは一切ダメです。

原田 353：それは首を絞めながらレイプしようとしたの？

D5-353：こうやって首絞められて、「ウーっ」てなった状態でたまたま通りかかった軽トラのお

っちゃんがすぐに助けてくれたんです。

原田 354：それは殺そうとしたの？それともレイプしようとしたの？

D5-354：スカートまくられたんで。

原田 355：あー、じゃあレイプなんですね。

D5-355：多分そうだと思います。小学校2年の女の子に対して。私背小っちゃいんで、そんなもっと小っちゃかったんでランドセルヒョイでボンって投げられた記憶が今でもすごい覚えてます。

原田 356：ふーん、それ近所に住んでる人？

D5-356：いや、うちの周り元々銅山の町なんですけど、知的障害者がとにかく多いんですね。だから知的障害者だけが働ける工場とか施設がすごい家の周りに点在してるんでどこの人かわかんないです。

原田 357：ふーん、で事件化もされなかったんだ。

D5-357：されなかったですね。結局泣き寝入りも良いとこでしたね。

原田 358：ふーん。

D5-358：うちの子に責任が取れる訳ないし、みたいな。そっちの子が悪いんじゃないの、くらい言われたらしいんで。

原田 359：へー。

D5-359：だから、マジ死ねば良いと思って。私本当にあの身体障害者は別にしょうがないと思う、本当にしょうがないと思う、精神障害者、知的障害者は死ね、と思ってます。

原田 360：んー、でも広いくくりで言えば君も精神障害に入る感じだね。

D5-360：入りますねー。でも私は別に他人を殺そうとは思わないんで。別に自分は何も悪くないです。

原田 361：なるほどねー。そっか。でもそれはトラウマなるよね。

D5-361：ま、そうですね。知的障害者はとにかくみんな殺処分されれば良いんですよ。

原田 362：小学校2年生の時？

D5-362：そうですねー。

原田 363：その時やっぱ性的な恐怖っていうのは感じました？自分が何かされるっていう。

D5-363：その時はわかんなかったですよ。中学くらいに入ってからで、その時はもう怖すぎてねー、記憶って脳が遮断するみたいで。なんか中学2年か3年かなあれば、3年くらいの時にたまたまホントふとしたタイミングでフッて思い出して、あん時って私レイプされかけたんじゃないだろうか、って。でやっと気づいたんです。それまでは気付いてなかったです。

原田 364：気付いてなかった。ただ首絞められたってことだけは覚えてた。

D5-364 : そうそうそう。だからやっぱそのこの恐怖があるから絶対にマフラーとか。あとはしたことはないですけど蝶ネクタイとかネクタイも絶対無理だと思います，締め付けるんで。

原田 365 : うーん，本当に死を感じたんだね，そんな時ね。

D5-365 : 怖かったです。あー私人生こんなに早くして死ぬんだくらいに思ったんで。

原田 366 : ふーん。

D5-366 : あのブスだったんで，ブスに生まれてついてねーなって，あの一，小学校に入る前から思っていて，ずっと。やっぱついてない人間で早く死ぬんだな，ってその時フッて思ったんですよ。（笑）それだけはよく覚えてます。

D5-363 「たまたまホントふとしたタイミングでフッて思い出して，あん時って私レイプされかけたんじゃないだろうか，って。でやっと気づいたんです。それまでは気付いてなかったです。」というのは，典型的な「解離」のメカニズムである。そして，ほぼ同じことを，B2 が語っていることは既に取り上げた。B2 も幼少期レイプされていたことを，ペドファイルの犯人が小学校の運動会で自分を見つめている時に，まざまざと思い出したのだった，そして，その時「殺してやる」と思った，と語っていたが，D5 の怒りは，犯人を「殺してやる」では収まらないのだ。知的障害者と精神障害者の全てを殺すという異常な発想に飛躍するのである。これが，「実存的貧困」の恐ろしさであり，恐らく「相模原障害者施設殺傷事件」の犯人である植松聖被告も彼の中の「実存的貧困」に突き動かされたのである。D5 は承認欲求と自己愛の怪物なのであるが，植松被告も，まさに承認欲求と自己愛の怪物だからだ。

D5 の狂気めいた自傷行為に比べれば，D6 のそれは，単に病的なだけだ。そして，明らかに D5 に誘発された自傷行為に移行している。それは，完全に D5 の狙い通りだ。D6-76 「友達がどうにもなんない時，『ちょっとごめん切るわ』つつって。バババってやって。」というナラティブは，D6 の前で D5 が突然に自傷行為を始めることを指している。そして，その状況に D6 は思わず溜息を吐き，一瞬鬱になるのであるが，結局は自分自身も D5 の影響を受けて同じように自傷行為を繰り返しているのである（※D-3-⑧参照）。D6-78 「かなりそうですね，その子の影響だと思いますね。」というナラティブが示しているのは，D5 への「同一視」である。D5 の自傷行為を惹起する情動に，彼女自身が感染しており，自傷行為が悪化しているのだ。そして，その理由として，やはり D6 も，自傷行為をする自分を，一般的な他者とは異なる人間，という歪んだ優越感と選民意識と共に受け入れているのだと思われる。D6-73 「これは睡眠薬飲むようになって，友達の影響でやってて。死にたいわけじゃなくて，何だろうなあ，，，，」というナラティブが示す様に，「実存的貧困」状態の人間は率先して死にたい訳では無い。ただ漠然と，死んでもいいな，という感覚は持っており，それは偽りない真実の感情である。B4 が，「常に死にて一なーと思ってる」と言った感覚に近いものを，D5 も D6 も抱いている。そして，その自暴自棄な感覚を共感し合えるので，2 人は友人を続けているのである。

X JAPAN の「Rusty Nail」の歌詞に死んでもいいような自暴自棄な破壊衝動が描かれていたのは既に紹

介したが、奇しくもこの2人もバンギャで、日本のビジュアル系バンドの頂点に立つX JAPAN に対して、2人は最大限のリスペクトを捧げている。とりわけ、D6の情熱は特筆すべきレベルである。彼女が水商売と売春を行う大きな理由が、自分が推しているビジュアル系バンドの全国ツアーの追っかけをやるためなのである。

D6-187「すごいかかりますね。生活費、食費、上回ってますし、今日も10万くらい払いますね。」というナラティブから、D6は、キャバクラ店勤務で得たお金と、それによって自分自身の趣味に没頭することに素直に感謝していることが伺える（※D-3-29参照）。それは、D5も一緒である。彼女達は、重い精神疾患を抱えて生きているために、騙し騙しでも昼の正業に就くということは難しい。仮に就けたとしても、彼女達の特異なパーソナリティのために、直ぐに辞めるか首になるか、とにかく居場所を失うだろう。その意味では、能力的に足りていない「最貧困女子」系のD3やD4と同じで、彼女達は昼の労働市場から弾かれているのである。彼女達のような存在を前提とした時、志賀の社会的排除論の安易な結論が全く意味をなさないことが理解されるのである。労働による包摂は、全ての人間に適用できない。障害がある人間だけでなく、グレーゾーンの人間ですら、恐らく適用させるのは難しい。そうすると、志賀の社会的排除論に残された選択肢は、貧困を無くすためには売春や家事労働も含めて全てを労働として認め、そこに正当な対価を払う、という解決策しかなくなるのであるが、実現可能であろうか。「夜」や「風」の仕事には、確実にアンダーグラウンドの世界の住人である反社会的組織の人間が関わってくる。彼らの搾取的な労働や反社会的活動、時には明確な犯罪行為も労働と認める必要があるのであるが、それは社会通念上、絶対に容認できる訳が無い。貧困理論というものは、何らかの解決策を示すために提唱されなければ意味が無いだろう。絶対的貧困論であれば、1日2ドル以下の暮らしをさせない、相対的貧困論であれば、社会の中央値の半分以下の経済状態に置かない、という目標とすべき明確な指標があるが、志賀の社会的排除論が掲げる「全ての人に適切な労働を！」はスローガンではあっても、具体的な解決策ではない。そもそもどんな手段や施策を講じたとしても、実現不可能なのである。従って、志賀の社会的排除論で貧困を論じるべきではないのだ。

D6-198「違うと思います。宗教です。」、D6-200「全て。ドラマ（笑）」というナラティブは、D6にとってのX JAPAN やビジュアル系バンドは、エロスの対象ではなく、アガペーの対象になっていることを示している。そして、ビジュアル系バンドに限らず、人間は何であって神格化することは可能である以上、このナラティブは彼女の中では真実なのである。だが、問題は、何故ここまで性風俗産業に関わる女性達が、ホストやビジュアル系バンドに対して一般人にはないレベルの親和性を持つのかだ。それは、やはり「承認」以外にあり得ないだろう。ユダヤ教が迫害されたユダヤ人の存在全てを「承認」する宗教であるように、ビジュアル系バンドとその文化は、キャバクラ嬢や風俗嬢、ホスト、メンヘラなどのスティグマを背負った「アンダークラス」を「承認」する疑似宗教なのである。そう考えると、全ての辻褄が合う。彼女達が、月に10万円以上のお金を払ってライブツアーを追っかけるのは、彼女らにとっての巡礼なのである。文字通り、ビジュアル系バンドは、彼女達にとっては神の象徴なのである。逆に言えば、それらに過剰にのめり込む者達

には、現実社会において、著しく「承認」が欠けている可能性が高い。

D5-414「良かったことはとにかく普通の人より収入が良いってことです。悪かったことっていうのは将来やってけるのか？って。お酒の病気のリスクが一番怖いです。」というドライなナラティブが示すように、D5にとっては、水商売や売春は、全て生きて行くための単なる手段でしかない（※D-3-㊸参照）。そこには無論ある程度の「承認」の喜びもあるのである。それは、事実インタビューの中でD5もしっかりと認めている。だが、彼女にとってはそれが水商売や売春を行う第一義の理由ではなく、あくまでそれは効率よくお金を稼ぐための手段なのである。従って、性風俗の世界はD5にとってはさほど重要な居場所ではなく、単なる狩場である。そこで手に入れるお金が彼女の中では全てである。事実、そこで手に入れたお金で彼女は、年下のビジュアル系のバンドマンを囲っているのであるが、そこが彼女にとっての最大の居場所であろう。お金による支配関係であるが、サイコパスである彼女にとって、支配することは普通の感覚だ。そこに良心の呵責は無いのである。サイコパスの思考パターンにおいては、損得が常に情理よりも優先される以上、彼女にとっては「お金が全て」は当たり前の結論である。一方で、D6はそうではない。水商売や売春から、お金以外に多くのもの、価値ある「承認」を得ており、そこはD6にとってかけがえのない居場所になっているのだ（※D-3-㊸参照）。

D6-212「間違いなく言えるけど、死ぬほど払拭できないトラウマも、トラウマも結構ありましたけど、ああ自分は社会の疎外者なんだ、っていう気持ちを受け入れてくれる人はいたし、沢山いたし、ウシジマくんとかあるじゃないですか。あそこまで描かれてるほど男の人は悪、なんかその悪い人ばっかじゃないし、むしろ良い人の方が多いっていう認識になりましたね。」というナラティブは、彼女が7年以上身を置いてきたキャバクラや売春、愛人関係という世界は、アウトローではあっても決して悪意だけの世界ではなく、そこには情理があったことを示している。確かに、D6は、そこで働いていて、D6-221「世の中爆発しろって思う時もある」ののだが、それ以上に彼女はそこでひきこもっていた自分を受け入れてくれた客の男性達に救われている。人間としての「承認」を得ているのである。彼女の「世の中爆発しろ」という思いは戯画化されているが、赤木の「希望は戦争」と同じ、そして実際にそれを実行に移してしまったオウム真理教やイスラム国（ISIL）の戦士達が抱いている感情と同じなのである。これが長きに渡って「承認」を欠くということが行き着く思考の極北なのだ。幸運にして、D6は犯罪者やテロリスト、或いは社会の不穏分子にはならなかった。それは、彼女のルサンチマンを鎮めてくれる幾人かの優しい人達に水商売の世界で出会うことができたからである。「社会の疎外者」であるD6の気持ちを受け入れてくれたのは、精神科の医師やカウンセラーや教師ではなく、彼女と同じ「アンダークラス」のアウトローの住人と、性風俗に通う客達だったのである。今、D6は、最も安心できる居場所として、ビジュアル系のバンドを追いかけるバンギャのコミュニティを手に入れた。そこはかつて、雨宮処凛が属していた世界である。彼女はそこから右翼という思想の世界に癒しを求め、更にそこから左翼に転じて今は社会活動家である。「実存的貧困」状態にある人が、「承認」を求めて世界を彷徨するのは必然であり、D6のアイデンティティの確立というものはまだまだ先

の話なのであるが、少なくとも彼女は少しずつ前に進んでいるのではないだろうか。そんな彼女にとって、性風俗の世界は今なお、二番目に意味のあるコミュニティであり続けているのである

(3) 本項のまとめとして、交際クラブで売春をしている D7 の会話分析を行う。彼女は、心理検査では取り立てて見るべきものは何もない。ごく普通の、ごく平均的な 21 歳の女子大生である。壮絶な過去を持っている訳でもなく、精神疾患を抱えている訳でも無く、特別な貧困家庭に育った訳でも無い。唯一、彼女の売春の理由として挙げられそうなものは、機能不全家族である。そして、そこから生まれる「実存的空虚」以外に考えられない。彼女は一応美容整形したい、という目標を持ってそのための資金確保のために売春を始めたのであるが、未だに一度も整形手術をしたことがなく、そして既に十分に資金は集まっているにもかかわらず、売春を止めることもない。無論、美容整形が必要な醜い容貌でもなく、寧ろ交際クラブではかなりの人気でひっきりなしに申込があり、彼女のスケジュールは数か月先までびっしり埋まっている。何故売春をするのか、に対する答がなかなか見えにくい女性であるが、それもまた真実の一つであろう。

だが、彼女のナラティブを見ていくと、やはり彼女が「承認」を求めていることが浮かび上がってくる。D7 が売春を始めた理由は、容貌に対するコンプレックスを無くし、恋人を手に入れたいからなのだ。D7-13「なんか『女の子はやっぱり顔かな』って思っちゃって結局『可愛ければ誰とでも付き合えるんだろうな』とかすごい思っちゃって。だから全然彼氏とかふられると、『もっと可愛く生まれたかったな』とかすごい考えちゃいます。」というナラティブから、彼女の人生における最重要事項は恋人から愛されることであることが理解される (※D-3-③参照)。ただ、D7-13「んー,, 大学も一応行ってますし、んー、そうですね、一応物事とかもちゃんと考えられると思うんですけど。」というナラティブから分かる通り、本研究においてこれまで検討してきた女性達のように、自己肯定感が低い女性ではない。偏差値 50 の高校から偏差値 55 の大学に入学した平均よりも寧ろ少し優秀な女性である。だが、実生活で 2 年以上も恋人がいない彼女は「実存的空虚」なのであろう。外見も内面も平均以上であるはずの自分に、それを称賛し、認めてくれる恋人がいないという現状は、単に愛による「承認」を欠いていることに加えて、自分自身の存在価値を疑うに十分である。恋人ができない原因を自分自身の容貌に帰属させれば、少なくとも自分自身のこれまでの人生を否定することはしなくて済む。何故ならば、外見は運が決めるものであり、個人の努力で解決できる問題ではないからである。これは、自分自身の存在価値を否定しないための「合理化 (Rationalization)」の防衛機制なのだ。だが、自分の人生が間違っておらず、容貌に原因があると考え、自らの人生を自身が望む意味あるものに変えるためには、結果的に今までとは異なる問題解決のアプローチが必要となってしまう。既に十分な努力をしてきた内面を一層磨いたり、更に能力を高めたりすることではなく、外見を美容整形によって劇的に変えるという工夫である。しかし、実際にそのお金が貯まっているにもかかわらず、D7 が美容整形に踏み出さないのは、やはり彼女自身が防衛機制の不自然さに内心気付いているからではないだろうか。「合理化」は、満たされなかった欲求に対して、理論化して考えることにより自分を納得させること

D7-40「んー、そんなにない、です,,,」、D7-41「んー,,, なのでしょう、気持ち良いとか思わないんですけどなんか、無っていうか。ぼーっと早く終われーとか思ってたら、終わるっていうか(笑)そこまで、もうやだやだやだ、って感じではなかったです。」というナラティブが示すのは、彼女の特異な性格である。無っていうか、という言葉から、彼女が「自己物象化」を行い心理的な負担を感じないように、「解離」の防衛機制を発動していることは間違いない。そして、彼女は半年の間に数百人の男性と関係を持っている。稼

いだ額は既に数百万円を超えると推定される。普通は、精神に何らかの不調をきたしてもおかしくないのだが、防衛機制のお陰だろうか、彼女の心理検査はごく普通だ。売春は本質的に外傷的という科学的根拠も彼女の前では意味を成さないのだ。

D7-129「んー、本当はダメなんでしょうけど、確かにそうなっちゃってると思います。」というナラティブから、彼女が多額の資金を貯め終えた今尚売春を必要としていることは明らかである。だが、売春を通してお金以外に得る物は何もないという(※D-3-③参照)。D7-134「もちろん嬉しいですけど、『気に入った』って言って会ってくれて何か買ってくれたりすると、『あー、好いてくれてるんだな』とは思う、そんな時は嬉しいですけど、それを必要とはしてない、っていうか。」というナラティブは、D2の「ありがとう。でもそれだけ」という感覚と一緒にある。そこに女性としての「承認」の喜びは無い。であるならば、D7が売春を続けるモチベーションは、やはり純粋にお金なのである。そして、間違いなく、お金＝彼女の価値、という等式が彼女の中で確立している。彼女もやはり『承認』をめぐる闘争を行っているのであるが、彼女はあゝる意味これまで比較してきた女性達の中でも最も新自由主義的な価値観で生きている。すなわち、貨幣価値による自己の存在証明なのである。

D7-142「達成感ていうか、逆に本当にたまたま誰とも用事がない日で、自分で普通に自分の時間楽しんで家帰る途中に、『あーなんか今日ゼロ円かぁ』みたいな、『今日の私の価値ゼロ円かぁ』みたいなすごい思っちゃうっていうか。」というナラティブが、まさに貨幣価値による存在証明の証左である(※D-3-⑤参照)。彼女はもはや当初の目的である美容整形から完全に逸脱している。実際十分にお金が貯まっているのに、彼女は整形に踏み切らない。そして、銀行口座に貯まり続けるお金に快感を覚えている。これは、立派な嗜癖である。D7-143「1日の頑張り度みたいになっちゃって。逆にすごい稼げた日とかは、ちょっと、,,、なんか,,、病気なんですかねって思うんですけど、電車の中とかでカバンに手突っ込んで、お財布の厚み確認して、あー嬉しい、みたいな感じで。」というナラティブが示す通り、彼女自身自分が何らかの病気であることを自覚している。彼女は、それに名前を付けられないでいるが、明らかにD7は売春がもたらすお金による達成感に依存している。半年間で知らない人間と数百回の売春を繰り返したという彼女のナラティブから、余りにも異常な性行為の回数であるので当初は性依存症を疑った。だが、よくよく話を聞いた結果、改めて浮かび上がってくるのは、性行為への依存ではなく、お金を稼ぐことに対する依存なのである。

会話分析を通して、明らかにD7の中に、何らかの不安が漠然と存在するのだけは感じられる。それは「実存的空虚」と言っても良いレベルだ。その虚しさを打ち消すものを当初彼女は恋人からの「承認」に求めた。だが、D7は、彼女が望むような形で愛による「承認」を得られなかった。「承認」されない理由が彼女の内面にあるのか、外見にあるのか、という原因の二者択一で、彼女は後者を選択した。自己の内面とは21年間の努力の結果であり、それが否定されているという現実を、受け入れられるだけの自我の強さが彼女には無かったのである。だが、運によって左右される外見であれば、新自由主義的統治の自己責任論からD7は首尾よく逃れることができる。この理屈は「合理化」の防衛機制によって導き出された。そして、彼女の内

面に刷り込まれた新自由主義的統治は、無意識に彼女を新しい問題解決のための努力に突き動かす。何故ならば、彼女は D1 以上に新自由主義における「勝ち組」に近い存在で、既に安定した職場に就職が約束されている医療系の専門資格も取得している様に、メリトクラシー型能力もハイパー・メリトクラシー型能力も高い。だからこそ彼女は、その高い能力故に、なお一層自分の人生が充足していないことに耐えられないのだ。能力の高さ、容貌の美しさに値する何らかの対価、何らかの象徴を彼女は手に入れていない。これは、D7 の中に「相対的剥奪」の感覚を呼び起こし、苦しみを生み出す。その苦しみに対する間違った努力が、美容整形によって外見を変える、そのためにお金を貯める、という彼女の行動なのである。

上記の理屈で、D7 はお金を貯めるために売春を始めたのであるが、その過程で自分の不安や虚無感を一番効率良く打ち消すものが、美容整形に対する期待ではなく、実はお金そのものの多寡であることに彼女は無意識のうちに気付いたのであろう。ここに、新自由主義的統治における主体の馴化を見る。彼女は、新自由主義において、最も価値ある物はお金であると無意識に確信しているのだ。故に、彼女は強迫的に売春＝金銭獲得行為を行っているのである。今は、お金という美容整形のための手段は、完全に目的と化してしまっている。明確な使途もないままに、彼女はお金だけを求めて体を売るのである。そして、そこで心身が摩耗する感覚が全くないのが、寧ろ異常である。幾ら金銭が彼女の「実存」を支えているからと言って、売春が持つ外傷性がそれによって無化されることは考えられない。

彼女の中にある漠たる不安の根源、すなわち「実存的空虚」の原因に関して、彼女自身も全く説明ができないのであるが、単なる「実存的不安」で人間がこれ程常軌を逸した売春行為に駆り立てられるとは考えられない。明らかに彼女が陥っている状態が神経症的である以上、「実存的空虚」であると見做して差し支えないであろうが、その原因が会話分析からはなかなか判然としない。辛うじて、彼女の人生で、常人よりも唯一劣位にあるものは、家族関係である。両親が長年別居しているという機能不全家族は、彼女の「実存的空虚」と強迫的な売春の原因の一つとして、愛着障害の観点から検討する価値がある（※D-3-③参照）。

D7-163「別居は、私が中学くらいの時なんで。5, 6 年前とかだと思います。でも仲悪いのは私が 3 歳くらいの時からなんで。」というナラティブから、D7 という人間の基底に「重要な他者」による無償の愛が欠落している原因が明らかになるのであるが、彼女の会話分析の中で、一つ気になるのが、この 3 歳という時期である。通常、人間は 3 歳以前の記憶はほとんど持たない。所謂「幼児期健忘」である。それが彼女には存在せず、寧ろ両親の不仲を鮮明に覚えているということが、一見普通に見える彼女の成育史の中の唯一の異常であり、それが今の強迫的な売春に繋がっている可能性はある。幼少時における両親の不仲は、子供心に大きなトラウマとなっているのではないだろうか。

そして、D7 が内面化した過度の競争原理を当然と見做す新自由主義的統治は、自らにも厳しい。D7-208「んー、難しいな。努力じゃない,, , 楽ですね、全然.」, D7-209「全然楽しんで稼いでるって感じ.」というナラティブは、新自由主義における自己責任論を正当化させる彼女の努力をも否定する（※D-3-⑦参照）。また、彼女は売春に苦しみを感じていない非常に稀有な事例である。従って、よく美容整形を正当化する理屈

の中に挙げられる、肉体的には楽かもしれないが、精神的には苦しい思いをしてまでお金を稼いだ、だからこれは努力なのだというロジックも否定されてしまうのだ。他の女性達同様に、やはり彼女も美容整形を正当化はする。そして、そのためにお金を稼ぐ手段として、マクドナルドのバイトと同じ感覚で売春を語るのである。彼女の中で、売春がその程度の負荷であることを物語っているが、恐らく、マクドナルドのバイトの方が彼女にとっては売春よりも低賃金であるために、仕事としての負担感は強いだろう。売春を楽と見做してしまう自分自身の頑張りを認められない状況においては、新自由主義に馴化された彼女はスティグマを内面化することはあっても、何らかのエイジェンシーを発揮して自己の尊厳を高めたり、やりがいを持つということは絶対に不可能である。D7-237「本当に初めて登録しても全然わかんない人とかなら良いんですけど、やっぱりあっちが私のことそういう目で見るとじゃないかなって思っちゃって、引け目を感じちゃう、感じです。」というナラティブは、彼女がデートクラブに所属していることに対する負い目、スティグマを明確に示している。ただ、彼女はそのスティグマによって、決してパワーレスな状況には追い込まれてはいないのである。

彼女が困っていることは、社会からの差別や偏見ではない(※D-3-③参照)。D7-233「困っていること,,, 出会いがない。」というナラティブが示すように、彼女はやはり「孤独」にこそ、苦悩を感じている。だが、D7-237のナラティブからも明らかであるが、彼女はここで出会った数百人の男性達とは、自らの負い目故に恋に落ちることはできないだろう。であるならば、やはり彼女は、行為の間ひたすら「無」であり続ける以外ないのであるが、このナラティブから理解されるのは、D7は親密圏での出会い、すなわち愛による「承認」を目下最も求めている、という事実である。連帯による「承認」の証である金銭は、彼女の「実存」を支えるために日々積み上げられている。だが、恐らくそれだけでは彼女の「実存的空虚」は満たされないのである。お金が全てである、と割り切れるサイコパスのD5であれば、売春によって得た多額の資金で男性を囲ったりして愛による「承認」をも手に入れることができる。それが真実の愛かどうかはさておき、少なくとも、自身の親密圏の欠落をそのようにして埋めることはできる。だが、D7はその様に割り切れる女性ではない。従って、彼女の真の欲求である愛による「承認」は、女性の容貌との等価交換であるという明らかに誤った「合理化」による防衛機制を自覚しない限り、D7は今後も売春を続けながら、真の自分の欲求に向き合うことから逃げざるを得ない。事実、D7-232「んー、なんかすごい年齢とかって、やっぱり女の子って若い方が価値があるっていうか、やっぱ歳取っていくと自然とそういうのも、お誘いも減っていくのかな、って思ってた、だから自然と少なくなったら辞めようかなみたいな、思ってます。」というナラティブは、彼女は暫くは売春を止める意思がないことを示している。彼女にとって売春はマクドナルドのバイトと同じレベルの苦痛でしかない。そして、その程度の苦痛で、その数十倍のお金が手に入るのである。そして、貨幣価値＝人間存在の価値である彼女にとって、自分の存在価値を高める手段である売春を止める理由は何もない。人には言えない、親からは怒られる、と売春に多少のスティグマを感じてはいるが、それも売春を止める理由には全くならないレベルである。

D7 のナラティブから分かるのは、売春反対派、とりわけラディカル・フェミニズムの立場が主張する、「売春は人間の尊厳を傷付けるもの」という主張が通用しない女性がいるということである。そして、そのような女性は新自由主義という経済イデオロギーが支配的な社会においては、当然お金を稼ぐことに売春を結び付ける。別のイデオロギーが支配する社会であれば、彼女の目的も変わるのかもしれないが、少なくとも現代日本社会においては、美しく若い女性であれば対価に多額のお金を求めることが可能であり、それが彼女の存在証明になっているのだ。故にこれは完全なセックスワークなのだが、セックスワークを擁護する権利派のフェミニズムの立場から見ても彼女は異質な存在だ。権利派が主張するようなエイジェンシーや誇りが彼女の売春行為には一切ない。彼女はその間、「無」なのである。会話分析で示したように、彼女は新自由主義的統治の中で十分に成功している存在でありながらも「実存的空虚」であり、実際は愛に飢えている。だが、自我が未熟なために、「合理化」によって自身の空虚な内面と向き合うことから逃げ、自分が愛されない原因は、醜い容貌が原因なのである、という理屈で自らを誤魔化そうとしている。だが、その過程において、貨幣価値によって高まる自分自身の存在価値に気付き、手段と目的を履き違える形で売春から高額な金銭を得るプロセスへの依存、嗜癖の問題が発現してしまっている。嗜癖によって脳の報酬系を活性化させる安易な形式で幸福感を得ている状況は、逆説的に愛着システムの機能不全を強く疑わせる。そしてそれは、やはり彼女の場合は機能不全家族以外に原因は求められないのである。

D7 は、今まで比較検討してきたどの女性とも異なるタイプである。売春に対してある程度のスティグマを持っているのであるが、異常なレベルの性行為を繰り返しても、一切心理的にも肉体的にも傷付いている感覚が無い。その対価として多額の報酬を得ているから、という説明は成り立つ余地はあるが、それでも通常売春行為は、女性にとってある程度の外傷性を伴う。それは、これまでみて来たセックスワークによって多額の報酬を稼ぐ B1 や B4, C3, C5, D2 らの心理検査の結果からも明らかである。

彼女が例外的な存在である以上、これ以上の深入りはせずに本項を終えるが、今後売春或いはセックスワークを論じる際、このような不可思議な女性が、恐らく彼女 1 人ではないであろうことも、我々は認識し、想定しておくべきであろう。筆者の目には自傷的に見える彼女の存在証明は、質的・量的調査の両方の結果から、その外傷性は否定されている。彼女は、「実存的空虚」ではあっても心身ともに健全な女性なのである。それ故に、ある意味異常であるというパラドックスがそこにある。

第 4 項 6 人のパパ活嬢の物語

(1) 本節のまとめとして、本項では 6 人のパパ活嬢の生活実態や彼女達が抱える生活の諸問題について考察する。6 人とも、ほぼ同じ年齢 (20~23 歳) で、同じ SNS のマッチングアプリを利用している。「実存的貧困」状態から遠い順番に会話分析を行うが、大きく分けると、パパ活をする女性達は「モラトリアム」系、と「最貧困女子」系の二種類に分けられる。完全に二つに分かれるというよりも、両者はグラデーショ

ンのようになだらかに繋がっており、一方の極に「モラトリウム」系があり、もう一方の極に「最貧困女子」系がある。6人のうち、最初の2人は完全な「モラトリウム」系、中間の2人は両者のグレーゾーン、最後の2人は「最貧困女子」系である。この6人は、「実存的不安」のレベル(D8, D9) → 「実存的空虚」のレベル(D10) → 「実存的貧困」のレベル(D11) → 「絶望的貧困」のレベル(D12, D13)と徐々に困窮の度合いが強くなっている。精神保健上特に問題が無いのはD8だけであり、D9以降は自傷行為や神経症水準の精神疾患が見られる。D13に至っては、それに身体疾患も加わり、かつ「相対的貧困」以下の生活困窮者である。

「最貧困女子」系の2人は、幼少期から虐待と生活困窮状態にあり、明らかに人生のかなり早い段階から「実存的貧困」を超えて、「絶望的貧困」状態である。とりわけD13は、心身ともに極めてパワーレスな状態に置かれており、「女性の貧困」が連鎖している典型例でもあった。6人中半数の3人の母親が水商売か風俗で働いていたのも決して偶然ではなく、貧困の連鎖、それも「実存的貧困」が連鎖していると想定される。物質的な貧困だけでなく、非物質的な貧困も連鎖することはLewisの「貧困の文化」でも指摘されている通りであるが、本研究全体を通してそれは確認されたと言っていいだろう。同じ「最貧困女子」系でも出会いカフェ等を利用する売春女性と本項で比較するパパ活嬢に相違があるとすると、それは彼女達の容貌格差に帰着する。

パパ活をする女性達は、SNSのアプリやインターネットサイトを利用し、パパと最初にメールでやりとりをするのだが、その際ほとんど全員が写真を公開している。写真を公開しない限り、ほぼメールが来ないからだ。そして、店舗と違い、ウェブ上では登録する女性の数が圧倒的に多いため、実際に複数の男性とやりとりできる女性は容貌が恵まれている者に限られてくる。従って、出会いカフェ等を利用する「最貧困女子」系が容姿に恵まれず、デリヘル等の風俗店でも採用されないために、そこで売春をせざるを得ないような女性達だとすると、同じ「最貧困女子」系でもパパ活をしている女性達は、対照的にかなり容姿に恵まれている。一般論として、パパ活である程度の成果を出すためには、最低でもD8, D10, D12, D13の様にキャバクラやJKビジネスでも十分に働けるレベルか、D9, D11のような芸能人クラスの容姿は不可欠であると思われる。A10もパパ活を行っていたが、彼女の会社の同僚がお昼休みに「パパ活やりたーい」と大声で騒いでいた時、A10は彼女の同僚達を「やれるのならどうぞ」と内心冷ややかに見下していたという。そこに伺えるのは、所詮貴女達には無理だから、という容貌格差に立脚した女性としての優越感である。

D8は、D7に近い目的意識が余り定まっていない女子大生である。D7が目前に迫った就職に対して後ろ向きなのと同じように、D8もさほど人生や就活に真剣に向き合っていない。D7は、就職したくないので、わざと留年することも視野に入れていたが、D8は、C6と同じように大学後はワーキングホリデーで海外に行きたいという女性である。無論、英語が話せるようになることが目的であって、英語を使って将来何かをしたいとか、何かを成し遂げたいという目標はない。C6と同じように、手段と目的を完全に履き違えている。小此木圭吾風に言えば、典型的な「モラトリウム人間」なのである。そして、そのような「モラトリ

アム人間」にとって、パパ活に終わりは無い。D7 同様に、恋人ができて、正社員になっても、パパ活は割が良いので続けるだろうという考え方は、「リスク社会」を生きる上でリスク管理ができているとはいえない。だが、これが偏差値 50 のごく平均的な日本の女子大生なのである。彼女の性風俗産業の入り口は JK ビジネスであるが、今はキャバクラやラウンジを経由して完全に彼女にとって割のいいパパ活に軸足を移している。

D8-18「はい。あと雰囲気もなんか、女の子同士仲良いわけじゃなくてけっこうバチバチしてたっていうか。」、D8-104「んー、敵意というか、なんか普通に感じ悪かったです。なんか普通に、人としてなんだろ、複数で、例えば 1 人に 1 人つくじゃないですか。で、その一緒に来た男性に女の子ついて、例えば 4 人で会話したり 6 人で会話したりすると、なんだろう、んーなんか、なんか性格悪いなあってちょちょこ、、、」というナラティブから浮かび上がるのは、D8 のコミュニケーション力の低さである（※D-4-①参照）。キャバクラはチームプレイが求められるため、どうしても嫌でも他の女性と同席せざるを得ない。その時、阿吽の呼吸でお互いに誰を立て、誰が脇役に回るのかを判断することが求められるが、人間力が低い女性はこの段階で弾かれる。空気が読めない女性や自分が常に中心になろうとする女性は、直ぐに仲間内で孤立する。恐らく D8 はそのタイプである。男性社会でも、できる人間ほど嫉妬を避けるために、最初は遜る必要がある。そして、実際そうするだろう。これがまさに人間力であるが、彼女はそれができなかったのである。キャバクラにおいて、若さはそれだけで力である。18 歳の D8 は、存在だけで他の女性達の脅威になり得る。だが、それを自覚しないから、浮いてしまうのである。無論、18 歳の少女にそこまでの人間力を求めるのは酷であるが、結果的に彼女はキャバクラの世界に幻滅し、ラウンジへと移った。ラウンジは風営法の対象外の飲食店で、個室で男女が一緒にカラオケをしたり、お酒を飲んだりする。あくまで 2 人の男女はそのラウンジで初めて出会い、意気投合してお酒を飲んでいる、という体で、風営法の縛りを逃れて、禁じられている深夜営業も可能にする。朝の 4 時、5 時まで、飲んでいることができるのだ。そして、キャバクラと違って、女性を独占できる。基本的に場内指名が入って女性が別の男性の個室に移動することは無い。彼女はチームプレイのキャバクラから気遣いの必要がないラウンジに異動したのである。そして、そこで気付いたのだ。ラウンジで一対一で会って、わざわざお店にお金を抜かれるのはばかばかしい。外で普通に一対一で会えば、全額自分のお金にすることができる。従って、パパ活は稼げるということになるのである。だが、そこまでして彼女がお金を稼ごうとする目的が、正直余り見えない。

D8-39「んー、なんだろう、遊び？なんか、あれば、なんだろう、お金ってあった方がいいじゃないですか、だから特にこれに使いたいとかはなくて。」というナラティブから、彼女もまた D7 と同じ、お金を稼ぐこと＝自分の価値証明というタイプの女性である（※D-4-②参照）。新自由主義における経済イデオロギーの忠実な実践者であり、消費社会における主役である。彼女は、自分の「価値」と「可能性」を、お金稼ぐことを通して極大化させているのである。そこに、彼女の自己肯定感や生きがいが高める動因があるのだ。

D8 は、パパ活をしていることは、家族には悲しませてしまうために言えないという。だが、同級生にラ

ウンジで働いていることくらいは普通に言えるのだ。D8 の水商売に対するスティグマはかなり小さいと言ってもいいであろう。その結果として、D8-73「ネットじゃないです。なんかもう、直接、ま、陰で言う方が嫌ですけど直接、『やばっ』みたいな。『え、気持ち悪くないの?』みたいな。なんか、でも別にわたしお話してて気持ち悪いとかあんま思わないし、むしろためになるし、勉強になるから、『いや別に全然気持ち悪くないよ。ちゃんとした人たちだし』みたいな感じで話して。でもまあ分かってもらえないから,,,」と露骨に偏見をぶつけられてしまうのであるが、それに対して開き直るナラティブから、D8 はラウンジの仕事にやりがいを持ち、そこでエージェンシーを発揮していることが分かる (※D-4-③参照)。故に、彼女にとって、ラウンジは単なる「生計維持機能」だけでなく、「居場所確保機能」、「承認獲得機能」、「社会学習機能」と複数の機能が連結した有意義な場所になっているのだ。だが、それを真っ向から否定する友人のナラティブに思いがけず驚き、社会的にはかなり強いスティグマが存在していることを実感したのである。従って、彼女はパパ活や「夜」の世界に偏見を持っている訳では無いのだが、それを家族には言えないのだ。

D8 にとって、「夜」の世界が「社会学習機能」を果たしていることは、D8-79「んー、お話聞いたりするのは、ちょっと、まあ上手くなったかなあ。でもそれ以外、んー。でもこっち世界の、こっち世界っていうか、こういう夜の世界、みたいなのは勉強になります。」というナラティブからも明らかだ (※D-4-④参照)。夜の世界は D8 にとって十分に価値あるコミュニティになっている。だが、そのやりがいのあった仕事を辞めて、彼女は今パパ活に精を出しているのだ。理由はこちらの方が、遥かに割が良いからである。彼女の様に六本木のキャバクラに在籍できるレベルの女性であれば、パパ活市場でも引っ張りだこであろう。そして、事実彼女はかなりの収入をパパ活から得ているのだ。だが、水商売をしている女性にありがちな金銭感覚の狂いは彼女にはない。それなりに貯金もしている点は、彼女の経済観念がある程度しっかりしていることを示している。そして、彼女は教養ある大学生なので、比較的俯瞰して客を観察することができている。D8-128「なんだろう、パパ活する人は、なんだろうな、んー。でもなんか違うなあ。こう、恋愛対象っぽく見られてる、みたいな。」という彼女の指摘は恐らく正鵠を射ている (※D-4-⑤参照)。これに彼女が気付いたのも、彼女が高校時代に JK ビジネスを経験していたことも大きいだろう。パパ活と JK ビジネスに共通するのは、客が素人性をそこに求めるということである。男性が想定する女性は、業として性風俗に関わっていない女性なのだ。所謂市井の女性を求めてその世界に通い詰める。繰り返し業としてその仕事を行っている以上、JK ビジネスやパパ活を行う女性達は、皆立派な「業者」(彼らは「風俗」と「水商売」で働く女性達をこのように表現して蔑む) なのであるが、すれた「業者」が嫌いな男性達は、JK ビジネスやパパ活に携わる女性達は、普通の女性である、というファンタジーを持つのである。そして男を弄ぶ「業者」が穢れた存在であり、恋愛対象になど絶対に入らない彼らにとって、素人である JK ビジネスやパパ活に従事する女性達は逆に魅力的で恋人にしたい対象なのである。だが、客のその想いは往々にして勘違いである。ほとんどの女性が、お金を払って女性と交流しようとする男性を、恋愛対象としては見ることはできないからだ。

D8-153「んー、ちょっと重たい時は、もう会わないです。なんか『一緒に旅行とか行こう』って言われ

るんですけど、よく、いや旅行はちょっとなんか、怖いかなと思います。海外とか2人で行っても、自分1人じゃ帰れないし、うん。」というナラティブが示すのは、そのように恋愛感情を剥き出しにしてくる客に対する戸惑いである。あくまで仕事としてやっていることで変な風に勘違いされたくない、というD8の思いが伝わってくる。

D8は、パパ活を明確な仕事としては認識していない。それはA11がパパ活は「お仕事」と断言したのとは対照的である。実際のところ、彼女がパパ活で稼ぐ額は、決して少なくはない（※D-4・⑥参照）。だが、D8-285「うん、確かに、それはなんか出勤してなんか働いてるって感じ。」というキャバクラとパパ活を比較するナラティブで彼女が伝えたいのは、キャバクラに比べてパパ活が遥かに楽だということであろう。仕事である、と言い切れない程に、D8にとってのパパ活は友達と食事をする感覚なのである。相手に気を遣って、同僚に気を遣って、自分の発言や服装にも気を遣って、キャバクラでキャストとして働くということは、決してありのままの自分ではいられない。そこには、高い給料をもらっている以上、プロとして接客しなければならない、という気構えがあるのだ。だが、本来の自分のまま、気儘なペースで会うことができ、単に男性に食事を奢ってもらっただけでなく、お手当さえ貰えてしまうパパ活は、彼女を管理する店舗スタッフも、意地悪をする同僚のキャストもおらず、気楽でかつ高額報酬という夢のような仕事なのである。キャバクラがストレスであるが故に仕事であると認識するのであれば、D8にとって、パパ活はそもそも仕事では無く、彼女は遊びでお金を貰っているような、若干の居心地の悪さもそこで感じているのであろう。D8-280「思わないです。自分の力じゃないじゃないですか。なんか。男性が働いたお金で、わたしはもうご飯を食べてるだけじゃないですか。だからぜんぜん、自分の力じゃない、ですよ。」、D8-281「えーなんの力?... んー... パパ活の力。」というナラティブには、彼女の申し訳なさが表れている。友達感覚で楽にお金が稼げる、これがパパ活の最大の魅力なのであるが、確かに仕事という実感がないと、女性がエイジェンシーを発揮する場ではなくなってしまう。何故ならば、本物の友達とプライベートで飲食する際には誰もそこでわざわざエイジェンシーなど発揮しないからだ。D8は、自分という「存在」に価値が発生する、という状態をまだきちんと認識できていない。それは、JKという記号に付加価値が発生するのと同じで、若い女性の特権なのだが、それがD8が「パパ活の力」と呼ぶものの本質なのである。

会話分析を進めていくと、D8のD8-244「なんか一生こうやって暮らすわけにもいかないじゃないですか。別にこういう世界が好きなわけでもないから。」というナラティブから、彼女が何らかの生き方を模索していること、いずれパパ活は卒業したいことは理解できる（※D-4・⑦参照）。だがそれは、まだまだモラトリウム状態である。将来を無目的で生きて行く訳では無いにしろ、D8は明確に卒業後の進路が決まっている訳ではない。ただ漠然と、これではいけないと思っているだけなのだ。そして、大学3年になった今でさえ、彼女はワーキングホリデーで海外に働きに行くか、日本で就職するかも決めかねているのである。ただ、そんな中でも唯一決まっているのが、パパ活は仮に日本で正社員になったとしても続けるということなのだ。D8-326「やめる時、んー、なんだろう、自然にしなくなる時が来るまでかな。」というナラティブからは、や

はり彼女がモラトリアムの真っ只中であることが伝わってくる。D8 には、パパ活に対する大きなスティグマの実感が無いために、それがだらだらとパパ活を続ける理由の原因でもあろう。

D8 同様に、人生のモラトリアムの真っ只中でパパ活を活用しているのが、D9 である。D9 は、子供時代から芸能活動을続けて来たが、17 歳の時にグラビアアイドルから舞台女優に転身した。そして、それが上手く行かなかった。今も芸能事務所に籍を置き、芸能活動을続けてはいるのであるが、自分には芸能界で大成を収められるだけの才能は無いと自覚し、最近専門学校に入学した。そして、新たな人生を模索し始めた最中である。学費等を奨学金に加えて自分の稼ぎで賄っているのだが、まだ芸能の仕事が不定期で入ってくるため、昼の定期的なアルバイトができず、結果水商売やパパ活を主たる収入源としているのだ。

D9-55「キャバクラはノルマとかが多いし、争いがやっぱり、ガールズバーとかに比べると断トツで酷いんで、そういうストレスを余計感じるような仕事をしちゃうとやっぱ精神的に、仕事面でストレスフリー、確実にストレスフリーなのは無理だと思うけどなるべく軽減させていかないと。」というナラティブからも分かる通り、D9 は、精神的にかなり脆弱である（※D-4-⑧参照）。うつ病や様々な神経症水準の疾患を持ち、向精神病薬を服用している。背景には、父親の DV がある。父親の DV は、彼女自身に激しく向くのではないのであるが、日常的に姉が暴力を振るわれているのを見て、やはり恐怖を感じるのである。姉は、境界性パーソナリティ障害（BPD）の確定診断が下りており、しばしば自殺未遂を繰り返している。つい先日、D9 の姉は急に電車が向かってくる線路に飛び出そうとして警察沙汰になったという。そのような姉の激しい「試し行動」が起きる度、病気の特性を理解できない父親は姉の軽率な行動に対して激しく怒り、暴力を振るってしまうのだという。結果、愛情飢餓に陥って姉の症状と行動化は一層悪化する、父の暴力がまた繰り返される、という悪循環が家族内で長年に渡って発生してしまっている。彼女は、そういった機能不全家族のストレスからうつ病になってしまい、芸能活動も控えざるをえなくなったのだ。ただ、長年芸能界にしかいたことが無い彼女の常識は、かなり一般人の感覚からずれている。通信制のボーダーフリーの高校を卒業し、専門性の低い専門学校に入学しても、資格も何もない彼女が選択できる進路というのは限られてくるのであるが、キャリア形成に対する危機感はほぼない。寧ろ、話を聞いているこちらが心配になるほど、樂觀的過ぎるのだ。非常にハードルが高い話が、成功することが前提で D9 から語られる時、年齢にそぐわない彼女の未熟さを感じる。

D9-118「向こうに少しいれば向こう、海外らしい自分になるじゃないですか。少し染まるじゃないですか。その染まったときに、また自分がどういう風なアイディアが出てくるかっていうのをちょっと自分の中で試してみたい、っていうのはありますね。」という安易な考えで起業することは非常にリスクが高いのであるが、彼女にその認識は無い（※D-4-⑨参照）。完全な「自分探し」であるが、起業も含めて夢物語を彼女は何の銜いも無く真剣に語るのである。以下のナラティブで、彼女は芸能活動のような浮ついた夢を何時までも追ってられないという。だが、それ以上に海外に行って、そこでただなんとなく暮らして、何かを持ち帰って起業する、という考えの方が遥かに浮ついた夢物語に思われるのであるが、モラトリアム真っ只中の

D9 は、そこには思い至らない。

D9-39「はい。なんか、有難味を、ガールズバーやって改めて感じたのは、やっぱわたしのことを応援するために来てくれてるっていう、その観点がもう違うじゃないですか。女の子と飲みたいっていう風に来てると、わたしのために会いに来てくれてるっていうので、言葉のこう、出す言葉とか、やっぱこう、お土産持ってきてくれたりとか、あの、差し入れくれたりとか、っていう心遣いとかがあったかく感じて。やっぱ来れば来るほどこちらも嬉しいし、みたいな。」というナラティブが示す通り、彼女は芸能活動からかなりの「承認」を手に入れている（※D-4-⑩参照）。逆に、彼女はガールズバーからは、ほとんど「承認」を手に入っていない。水商売は、芸能の世界に関わったせいで余計厳しく感じただろう。彼女が指摘するように、芸能の場合は基本的に彼女のファンが会いに来ている訳で、そこには最初からほぼ全面的な好意しかない（無論、有名になればアンチも発生するのであるが、D9 のレベルであればアンチは発生しない）。だが、ガールズバーやキャバクラは、その場限りの客が来ることも多く、厳しい言葉をかけられることも、セクハラを受けることもあるからだ。地下アイドルの仕事に承認欲求の塊のような女性が引き寄せられ、利益など無いにもかかわらずそこから離れられなくなる理由もむべなるかなである。だが、芸能界は、売れ無くなれば今度は逆に虚しい。彼女は、自分が必要とされないその「非承認」状態に耐えられないのであろう。

機能不全家族で育っているため、D9-74「睡眠薬依存してます。」という様に、彼女も姉と同じ BPD の傾向がある（※D-4-⑪参照）。オーバードーズや自傷行為など、若い頃から自己破壊的行為が続いている。そもそも、BPD の対人依存が芸能人という仕事を彼女に選ばせた可能性も高い。これだけ精神保健の状態が良くなく、芸能の仕事も上手く行かず、奨学金という教育ローンを背負い、将来もはっきりと決まっていないうにもかかわらず、彼女の心理尺度は概ね全ての領域で女子大生平均を超えている。唯一、BPD の検査だけが、女子大生平均を超えているが、それもカットオフポイントを超える病的水準ではない。従って、心理尺度だけを見れば D9 は完全に健康なのである。

だが、彼女の一連の夢見がちな発言から感じられるのは、やはり C2 や C9 と同じ自己愛的精神病的防衛の「躁的防衛」である。3 人に共通するのは、事務所に所属している芸能人であること、或いはそれを目指した人間であることである。異常な承認欲求の塊であることを考えると、その「承認」が絶たれることは人間として耐え難い苦悩であらう。従って、「躁的防衛」を行って、未来に大きな夢を描かないと、精神が持たないのかもしれない。そして、病的な防衛機制である「躁的防衛」を行っているということは、結局は自分が目指している場所、望んでいる地位から遥かに掛け離れた場所にいる訳で、その理想と現実とのギャップは、神経症水準かそれよりも重い精神病水準の精神疾患となって発現する。事実、3 人ともそのような劣悪な精神保健の状態に置かれていることが、まさに「躁的防衛」を必要とする自我状態が病的であることを証明している。

D9-274「(マクドナルドでのバイトは) したくないですね。」というナラティブが示すように、D9 には、自分が芸能人であるという誇りがある（※D-4-⑫参照）。本来であれば苦しい生活状況に追い込まれている

筈で、その状況は、江口の「社会階層論」では「不安定・低所得階層」そのものである。今更 D9 は形振り構ってられないはずなのだが、高収入が得られるキャバクラやラウンジで本腰を入れて働く気も無いし、当然デリヘルなどのスティグマが強い風俗産業に従事する気も無いのだ。あくまで、パパ活やギャラ飲みなど、芸能人であるメリットを生かしつつ、さほど負荷もない仕事で楽に稼ぎたいのである。D9-188「楽しいですね。」というナラティブが示すように、明らかに彼女にとって、パパ活は芸能活動に近い。ほぼ間違いなく女性として「承認」される活動なのである。彼女は、恐らく D8 同様にパパ活が止められないだろう。まだ 20 歳と若さの絶頂期にあり、存在するだけで自分の価値を実感できる居場所を捨てることは難しい。彼女がパパ活で得ているものは、お金以上に「承認」と、行き詰まった芸能活動で一旦は傷付いた女性としての誇りなのである。それを示唆するのが、D9-206「はい。けっこう支持されたい人なんで、注目を浴びたい人なんで。」というナラティブである（※D-4-⑬参照）。

同様に、D9-194「重要だと思いますね.」、D9-205「みんなからですね.」、D9-207「満足な感じですね.」というナラティブからも分かる通り、彼女にとって不特定多数の男性からちやほやされることは、最大の「承認」なのだ。そして、そのためには芸能の仕事は最適だったに違いない。だが、彼女はジュニアアイドルとしての需要はあったものの、成長してからはセクシー路線のグラビアを要求されていた。それはすなわち、芸能人としては一級品ではないということである。実際に、脱がなくてもいい芸能人と、脱がなければならない芸能人には、大きな格差がある。彼女は、その現実直面し、売れない自分を認めることができないために、芸能界を去る決意をしたのである。だが、芸能の世界に未練があることは間違いない。それが、D9-213「あれは完全に趣味かなって思う。」という地下アイドルを侮蔑する言葉に表れている。恐らく、D9 が脱がなくても良いレベルの芸能人から受ける見下される感覚を、そのまま自分よりも格下の地下アイドルに対して向けているのである。その冷たさには、アイドルという同じ土俵にすら立たせたくないという意思すら感じる。

昨今、D9 のようなジュニアアイドルの活動は、問題視されることも多い。小学校・中学校のジュニアアイドルにまで、大人と同じように水着を着せてイメージ DVD を撮影するのであるが、年々際どい内容が増えており、時には年端も行かぬ少女に性行為を模したような行為をさせる場合もある。2007 年 10 月 16 日、ジュニアアイドルの写真集・DVD 業界大手の心交社のチーフプロデューサー、ビデオ制作会社の監督ら 4 人が、当時 17 歳の女子高校生が出演した DVD が児童ポルノ禁止法違反に当たるとの疑いで警視庁少年育成課に逮捕された。このケースは撮影角度やポーズなどから「過激な水着姿もわいせつな映像にあたる」と判断され、逮捕に至った事例であるが、D9 が出演していた作品群も、決して健全とはいえない。親世代の貧困化が進み、自分の子供を過激な内容と知りつつもジュニアアイドルとして働かせ、その出演料で生きているような両親が多数存在することも性的虐待の一種ではないかと問題視されている。D9 も、今振り返ると自分が「性の商品化」の一端を担っており、男性ファンの中には明らかに彼女を性的対象として認識している者がいたことを認めている。そしてそれを、素直に D9-220「気持ち悪いと思いますね.」と振り返る

(※D-4-⑭参照)。だが、結局当時は D9-222「そうですね、お客さん増えることだけ考えてましたね。」というように、どんな手段を使っても、まだ未成熟な自分の水着姿の体を用いても、多くの男性に「承認」されたかったのである。そして、それは貧困によって親に強要されたことではない。D9 自身が望んでやっていたことなのだ。そこには明らかに何らかの「闇」と「病み」がある。キャバクラ嬢や風俗嬢に見られる特有の承認欲求は、決して彼女達だけのものではなく、地下アイドルや C9 や D9 のような本物のアイドルにまで共通して見られるものなのである。それほど激しい『承認』をめぐる闘争が、ポストモダン社会の日本において、若い女性達の間で起きているのである。

(2) D10, D11 は、丁度「モラトリアム」系と「最貧困女子」系の間を埋める存在である。最初に取り上げる D10 は正社員で昼の仕事をしているが、「モラトリアム」系に近く、アイデンティティも含めてキャリアも未来も何もかもが混沌としている。パートナーに至っては、不倫関係の上司も含めて 3 人もいる状態だ。完全にアイデンティティは拡散しており、それは自傷行為等の精神病理となって明確に表れている。

D11 の職業は、D9 と同じアイドルであるが、グラビア系ではない。東南アジア系の母親を持つハーフであり、出自は社会的マイノリティである。それ故に、祖母は母親を認めることができずに、母親は離婚して家を出ている。父親は若くして脳梗塞で寝たきりとなり、一家は祖母が切り盛りする形で生計を立てた。D11 は経済的な貧困の中で育ち、不登校を経験し、自分を変えるためにアイドルを目指した。彼女は「最貧困女子」系に近い幼少期の貧困と虐待体験を持っている。

まずは、D10 の会話分析から始めたいが、彼女もまたこれまで度々取り上げてきたバンギャの女性である。D10-257「(笑) わかんない。ゴスロリはわかんないけど。でもバンギャはみんなキャバ嬢か風俗嬢なんで。」という D10 自身もキャバクラ嬢で、チャットレディである。彼女のバンギャ仲間も皆性風俗の仕事をして、ビジュアル系バンドの追っかけをしていたというのは、B5, D5, D6 と全く同じである (※D-4-⑮参照)。D10 も彼女達と同様に性的に早熟で、高校生にして既にアダルト系のチャットレディで高額なバイト代を稼ぎ出している。それを資金に、様々なビジュアル系バンドのライブに参加しては、メンバーと「繋がり」を持ったという。「繋がり」というのは、芸人やバンドメンバーと、「ファン以上恋人未満」の関係になることを意味するが、より端的に言えば、芸人やバンドメンバーのセックスフレンドに加えて貰うということである。近年、新潟を拠点とする女性アイドルグループの NGT48 のメンバーが、一部の男性ファンと「繋がって」いたことを告発したメンバーが、逆に運営から干されるパワハラ事件が発生したが、以前はかなり事務所のガードが堅かった女性アイドルグループでさえも、SNS が普及して簡単にファンと繋がれる時代になっている。

D10 は、チャットレディをしていた当時のことを振り返り、D10-61「なんか、ダメです、言いたくない。」とその仕事に対するスティグマ感を示す (※D-4-⑯参照)。キャバクラやメイドカフェで働いていたことは、恋人に言うことができるが、チャットレディは言えないというのだ。理由は、D10-62「(いかがわしいこと

を)して、お金を稼いでる自覚があるから」である。服を脱ぎ、肌を晒すという行為は、彼女にしてもやり過ぎたという自覚があるのである。今はパソコンの画面もスマートフォンの画面も簡単にスクリーンショットが撮れる。もしうっかり顔が映りこめば、それは匿名掲示板に晒されて、身元の特定までなされるケースがある。チャットレディは、D10のように高額な日当を手に入れられる可能性もあるが、それ以上に社会的なリスクとスティグマを負うのである。D10も、本項の女性達同様に承認欲求の塊であるが、そのような女性で風俗産業に抵抗がある者が働く場所として、メイドカフェがある。地下アイドルのC7も、アイドルとしてスカウトされる前は、秋葉原のメイドカフェで働いていた。D10も、秋葉原と〇〇市のメイドカフェで働いていた経験がある。その時の経験を語りながら、D10は自身の承認欲求の強さを素直に認める。D10-124「ああ、されたいです。ちやほやされるのは大好きです。」、D10-125「そうですね。はい。女の子として可愛がられたい。」、D10-131「そうですね。優越感。」というナラティブから、D10の尋常ではない承認欲求が見て取れる(※D-4-⑰参照)。地元で最も有名なバンギャとして認知され、匿名掲示板でまで悪名を馳せた彼女の行動力は、やはり異常なまでの「承認」の欠如が人生の早期にあったことを予測させる。そして、のちに語られるのだが、彼女には父親がいない。母子家庭で育ち、父親の愛情を欠いたことは、かなり深い欠乏感となって、彼女が強く父性を求める要因になっている。話を聞くと、彼女のパートナーは現在3人いるのであるが、全員が年上である。不倫相手の職場の上司に至っては10歳以上違う。過去に最も年が離れていたパートナーは16歳差である。無意識に父性を求める心理がそこに働いているのではないだろうか。

D10-150「そうです、もう全く。だけど母親に愛されてないとはまったく思わないです。すごい過保護です。」というナラティブから分かるのは、過保護・過干渉な母親とは対照的に、父親とは完全に疎遠で交流が無いということである(※D-4-⑱参照)。今回のインフォーマント達の大きな特徴の一つに家庭環境の悪さがあるが、その中でも特に目立つのが母子家庭或いは父子家庭の多さである。だが、ほとんどの場合は、離婚後も一緒に暮らしていない親と連絡を取り合ったりしていた。完全に音沙汰が無い方が少ないのであるが、そのうちの1人がD10である。母親が愛情深く、過干渉であればあるほど、父性の欠落は彼女の中でより一層大きくなってしまわないだろうか。恐らく彼女は父親から捨てられた、という感覚があるのであろう。だからこそ、異常なまでの「見捨てられ不安」を持つ。BPDの最大の特徴でもある「見捨てられ不安」は、実際に捨てられそうになった際、形振り構わぬまとわりつきとなって表れるのであるが、D10もそうである。振られそうになった際、自分がいかに恋人を愛しているかを示すために、自分の腕に恋人の名前をカッターで刻むのであるが、その病的な行動が逆に彼氏を怖がらせ、遠ざけてしまったのである。D10-154「すごいさみしいです。ずっとさみしいって言ってて、上司とかにも『なんでそんなにさみしいの?』って聞かれるんですけどわかんないんですよね。ずっとこうだから。」というナラティブから、彼女自身も自分の中に欠落があることは自覚しているのである。だが、それが恐らく父親がいないことに由来するとは思っていないのであろう。だが、父親が不在の若い女性が年上の男性に惹かれる、或いは依存することは、自分と周囲の経験から、既にB3が指摘している。彼女達と全く同じ状況にD10は置かれているのだ。

『傷つくならば、それは「愛」ではない』は、Spezzano のベストセラーの和名タイトルであるが、この言葉がまさに、D10 とその周囲の人々に共通して言えることである。D10-289「癒し？愛じゃないですか？」という D10 の言葉は半分正しく、半分誤っている（※D-4-⑱参照）。何故ならば、愛が癒しであることは間違いないのだが、D10 が愛だと思っているものは、愛ではないからだ。同著では、「依存とは過去に満たされなかった欲求をいま満たそうとする試みだ」（Spezzano=1997:86）とあるが、彼女の愛は、まさに依存である。彼女は恋愛依存症なのだ。実際、自分自身でも彼女は恋愛体質、依存体質と語っているが、恋愛依存はプロセス依存の一つである。そして、依存症は嗜癖であるが故に須らく自分を苦しめる。自分を苦しめるように傷付けるものは、愛ではないのである。彼女はかつて父親から満たされなかった欲求を今満たそうと苦しんでいるに過ぎない。だが、彼女が欲しいのは父性であり、そして無償の愛（アガペー）である。それは恋人が提供できる性愛（エロス）とは本質的に異なる。彼女の激しい試し行動の末に、必ず普通の恋人達は去って行く。彼女が手首に名前を刻みこんだ恋人の様に、その異常性を受け止められない。畢竟、それを受け入れられるのは親だけなのである。無償の愛があるからこそ、娘のどんな行動であっても父親は赦す。この赦される感覚を彼女は欲しているのであるが、それを提供できる人間は彼女と同じ地平に立ってはいない。唯一彼女と上手く関係性を築けており、彼女が内心結婚したいと強く望んでいる上司が、まさに彼女を赦している唯一の男性である。それは、彼が彼女の上司であり、会社においても社長に次ぐ地位にあり、家族を統べる父の様に会社に君臨しているからである。その男性だけが、彼女の我儘を赦すことができている。だがそれは、やはり彼女と同じ地平に立っていないからである。別に家庭を持ち、地位も名誉も手に入れ、心身が安定している存在からしかそのような赦しは得られない。だが、この愛が真の愛ではないのは自明だ。所詮は不倫なのである。そして恐らく無意識に彼女はそのような関係を維持しているのである。父親を愛することは不倫以上のタブーだ。彼女が欲しているのは父性的な無償の愛なのであるが、それを求めているうちに、D10 の中で無償の愛と性愛が一緒になってしまったのである。従って、彼女の中で無意識のうちに、父のような存在＝性愛が許されない存在＝結婚し家庭を持っている存在という等式が成り立ち、疑似的な父を求めて上司に強く惹かれているのだと推測される。だが、仮に上司が離婚し、彼女と結婚したならば、この関係は途端に上手く行かなくなるだろう。婚姻が成立すれば、それまで階層が別の地平に立っていた男性が、今度は彼女と同じ地平に降り立つ。夫婦に上下関係はないからだ。だがその時、恐らくもう彼は彼女を赦せないだろう。それは、これまでの D10 の恋愛遍歴を見れば明らかだ。彼女の試し行動は必ず男性の DV を誘発させ、何度も関係性が破綻しているのである。

D10-224「いや、すぐは出さなかったです。同棲して半年とか経ってから出てきて、□□に 2 人で出てきてからもっと出てきたって感じです。物壊したりとか酷くて。壁はもう包丁の跡だらけで。グーで壁殴って穴開けるし包丁刺すし。」というナラティブから浮かび上がるのは、最初は優しくった彼氏がどんどん変わり、最後には DV を振るう暴君に変わるという姿である（※D-4-⑳参照）。そして、実はこれは毎回彼女が繰り返している恋愛のパターンなのだ。彼女が偶然、そのような男性に連続して付き合っている可能性は

ゼロではない。だが、そのように考えるのは少し不自然だ。1人、2人ならば、同じような人に惹かれたんだね、で済むかもしれないが、彼女がこのパターンに陥った男性は付き合ったほぼ全員であり、その数は30人を超える。30回以上同じ結果の恋愛を繰り返しているのであれば、それは彼女の側に原因があると考えるのが自然だ。そして、その原因は防衛機制の一つである「投影性同一視 (Projective identification)」以外に考えられない。これは精神分析理論における対象関係学派の Klein によって 1946 年に初めて紹介された用語である。「B に帰属するのに B がアクセス出来ない感情を、代わりに A の内部に (単に外的にでなく) 『投影』することで、A が経験する」状況に対して言及される概念である。「投影性同一視はしばしば傷ついたカップルの主要な苦悩である。各々は、相手の最も理想的な、恐ろしい、また原初的な相貌を双方の狂気を駆り立てるようなやり方で演ずる」と指摘されるように、BPD や NPD の傾向が強い男女間では、しばしば「投影性同一視」による共依存が発生する。D10 は常に「見捨てられ不安」を持っている。だが、実はその感情は自分自身の移り気の裏返しでもある。彼女は自分の浮気性を認めることができない。従って、彼女(A)はそれを彼(B)に投影する。自分が浮気するのではなく、彼が最初に裏切る、と決め付けて、彼の中に移り気を、浮気をひたすらに投影する。彼の一挙手一投足の中にあらゆる疑念を埋め込む。そのように疑り深く彼女から見られる(実際には GPS を埋め込む等)と、苦しさ故に彼の中に本当に浮気心が、彼女を見捨てたいという思いが生じる。その原因は、寧ろ彼女の異常な疑念にあるのであるが、彼は彼女が重たい存在に思えてしまい、その間に彼女が実際に浮気をしたりするので、結果的に彼女の疑念通りの行動、浮気する、或いは見捨てたい、を取ってしまうのである。だが、そこに強い葛藤が生じる。彼は元々彼女を見捨てたいなどと望んでいない。彼女の「投影性同一視」によって、半ば心を操作されているのである。彼女を愛したい想いと、彼女から埋め込まれた見捨てたい想いがぶつかり合い、それが彼女に対する愛憎が入り混じった DV となって発露する。本当に彼女を見捨てたい男性ならば、彼女を殴らないはずだ。黙って彼女を捨て置き、別の女性の下へと疾く立ち去るだろう。だが、彼はそうしない。結局、男性が女性を殴るのは、支配したい欲望に起因する。つまり、本当は愛しているから彼女に自分の言うことを聞いて貰いたいのである。だが、愛しているにもかかわらず、彼女が言うことを聞かない。だから、愛故に男性は彼女を殴るのである。そしてまさにこれが、彼女が繰り返す歪んだ愛の形である。恐らく男性も彼女と似たような心性の持主なのだと思う。彼も彼女に「投影性同一視」をぶつけているのだとすれば、そのカップルが一緒にいることは苦し過ぎる。その関係性は単なる葛藤では終わらず、必ず互いを傷付けあう無残な共依存になる。D10-234「(GPS を) お互い付けてて。共依存だったんですよ。お互い付けてて、彼氏はもちろんわたし以外と浮気してって絶対ないんですけど、わたしがもともとなんか何人とも恋愛依存でしちゃうタイプなので。」というナラティブは、以上の推測に根拠を与えてくれるのではないだろうか。

移り気で、浮気的な女性であるが、D10 は、パパ活に対しては一応思い入れがあるのだ。D10-334「んー、そしたらもうパパ活じゃなくなると思ってるんで。」というナラティブが示すように、彼女はパパ活には、肉体関係を求めていない。あくまで食事だけでお手当てを貰えるというパパ活の大原則を曲げたくない

のである。彼女のこのようなこだわりは、メイドカフェで働いている時も見受けられた。彼女の住んでいる場所では、メイドカフェに無駄な「設定」は無い。「お菓子の国からきた永遠の 17 歳」のような、秋葉原の本格的なメイドカフェで展開される「設定」は、客から求められていない。従って、本場仕込みの「設定」を彼女が披露しようとする、「そういうのいいから」と言われてしまうのだ。田舎の客は、ただ若い女性の可愛いメイド服姿を見ただけなのである。それに対して、不満を漏らす彼女は、パパ活でも同じように食事だけという大原則を曲げたくないのだ。だが、彼女は、パパ活にスティグマを感じている。D10-330「やっぱ知られたくないですリア友には。」という彼女の言葉の裏には、彼女自身、パパ活が事実上の援助交際になっている自覚があるのである（※D-4-②参照）。従って、パパ活をいやらしいもの、として彼女の友達が見ているであろうことを理解している。だから、自分がどれだけパパ活の大原則を守っており、まったくいかがわしいことをしていなくても、それをしていると周囲に言うことができないのだ。そして、このようなスティグマが貼り付いた行動を止めないところに、やはり彼女の顕著な自傷性が垣間見られるのである。

D10 が SNS やパパ活について語るナラティブは、これまで検討してきたことをほぼ完全に証明している。Twitter という承認欲求を満たすツールを用いて、心に押し込めておけない本音を誰かに見て貰いたい気持ちで呟くのは、B1 や C6 と一緒だ。Twitter が世界中で爆発的に普及した理由の一つに、ポストモダン社会特有の「実存的不安」は絶対に寄与している。即時的な共感をイイね！から得られる SNS は、承認欲求を満たす格好の手段だ。そして彼女は、お金儲けから始めたチャットレディやキャバクラも、実はそれが本当の目的ではなく、ただ誰かにかまってもらいたいから、つまり「承認」されたいからだ、ここに来て漸く自ら気付いた。だが、D10-431「かまってほしいから。ちやほやされるのは好きだったけど、今はそれを拗らせて寂しさを埋めるためとかになってる感じですね。やっぱなんか、女友達で埋めれないんですよ。」というナラティブが示すのは、彼女の自己覚知が最後の部分まで辿り着いていないことを示している（※D-4-②参照）。彼女が本当に必要なのは、父性的な無償の愛（アガペー）である。だが、それを提供できる存在はいない。従って、折衷案として、彼女は 2 人の男性で父の^{アイコン}似姿を代替するのである。性愛（エロス）を担当し、かつ父性も受け持つ上司と、肉体関係を一切持たず、ただ彼女を無償の愛で満たしてくれる男性である。D10-435「使い分けてます。」というナラティブが示すように、彼女はこの二つがどちらも欠けてはならないことには気付いている。だが、その理由の本質に届いていないのである。何故、二つの異質な愛、異質な関係性が彼女にとって精神の安定のために必要なかが腑に落ちていないのだ。父的存在の不在が、ポストモダン社会においていかに大きいかを、B3 や D10 のナラティブは明瞭に教えてくれる。そして、「実存的貧困」の中核に、何故「重要な他者」の不在がなければならないかが、ここから導かれるのである。

そして、父的存在の不在が与える心理的な欠損感は、若い女性にとっては極めて大きい。インタビューの最後に、D10-454「孤独だけはたぶん耐えられないです。」、D10-455「たぶん結婚できなかったらいつか自殺しそうです。」という彼女は、「実存的貧困」概念を極めて明瞭に描いてくれた（※D-4-③参照）。今、社会のどこにも居場所がない D10 は、真に心安らぐ居場所を探している。そしてそれは、繰り返しにな

るが、父性的な無償の愛（アガペー）の提供者の庇護下しかない。だが、無償の愛（アガペー）が同時に性愛（エロス）を持つことは矛盾を孕むが故に、あり得ない。従って、彼女が望んでいることは、未来に絶対に起き得ないことが既に予期される。結婚によって手に入る性愛（エロス）と無償の愛（アガペー）は絶対に両立しないからだ。今のように、それを2人の男性で代替して持つことは可能だ。だが、それが安定性を欠いた綱渡りであることを彼女自身がよく分かっているからこそ、かくも苦しいのである。これを絶望的と言わずして、一体何を言うのであろうか。そして、「絶望」は「死に至る病」だ。彼女の、「自殺しそうです」といいます。」は、至極当然な思いなのである。それ程までに「実存的貧困」は苦しい。彼女は正社員で、更にパパ活でお小遣いもそれなりに得ており、恋人が3人もいて、若く美しく、未来は可能性に満ち溢れていても何もおかしくないにもかかわらず、見事なまでに人生に「絶望」しているのである。これが、「実存的貧困」であり、彼女もまた、「再配分」の必要が無い貧困は存在するという格好の事例の1人なのである。そして、このD10の姿に、東電OLの姿が被らないだろうか。彼女も亡き父の面影を数多の男性達に重ね合わせていた「^{ディザファイリエ}社会喪失者」であったではないか。

Kierkegaard は、「絶望」に対して「信仰」を処方した。この解は正しい。信仰によって辿り着く父なる神の愛こそ、まさに無償の愛（アガペー）であるからだ。どれ程穢れた罪深い女性であっても、父なる神は赦すだろう。だが、神殺しのポストモダン社会においては、東電OLと同じように、彼女が神の^{アイコン}似姿を見付けることは遂ぞ叶わないかもしれない。

D10 同様に、「実存的貧困」が色濃いもう1人の女性が、D11である。D10は地方都市の地下アイドルであったが、D11はつい先日まで大手の事務所に属していた現役のアイドルである。マネージャーとアイドルとしての方向性を巡って仲違いし、最近事務所から独立したのだが、現役アイドルがリスクを冒してまでパパ活を行うのは、やはり他の地下アイドル同様に経済的な問題からである。現役アイドルといえども、本格的に売れるまでは、十分に生計が成り立つほどの収入がないのだ。D11-5「そうですね。アルバイトできない分こっちでちょっとお小遣い稼ぎたいなっていう感じです。」というのは、多くの売れない芸能人の本音ではないだろうか（※D-4-④参照）。

D11もD10同様に、パパ活を定義通りに利用したいと考えている。だが、現実様は様変わりしており、インターネットニュースでパパ活が取り上げられた2017年の暮れ頃から、一気にパパ活のSNSアプリは、援助交際を求める男性と、それに応じる女性達で溢れ出したという。その結果、「夢に向かって頑張る女性とそれを応援するパパ」のためのアプリという解説を読み、参入したD11は、プロフィール欄に、『『大人の関係』は応じられませんのでご了承ください』と明記しているにもかかわらず、D11-16「はい。結構いますね。」というナラティブが示す通り、ほぼ毎回男性に体の関係を求められてしまうという。そして、男性の中には、彼女が拒んでも強引にホテルに連れ込もうとした者もいるという。実際、パパ活を見る社会の目は冷ややかであり、それは前項でD10が、友達にも言えない、と語っていることから明らかだ。だが、それでもD11は、自分の夢を実現させるためには、現状パパ活に頼らざるを得ない。何故ならば、彼女は頼れる家

族がいないからだ。D11 が語る家庭環境は非常に複雑であり、かつ児童にとっては劣悪で虐待的である。

D10 が家族の中で欠いていたのは主として父親であったが、幼少期に D11 が欠いていたのは、ほぼ家族全てである。母親は幼少期に彼女を置いて家出した。彼女からすれば、母に捨てられたと思っても当然である。そして、事実、祖母は母親が D11 を見捨てたのだ、と嘘を吐いていた。頼りにすべき父親は脳梗塞で全身が麻痺しており、満足にコミュニケーションは取れない。やがて、小学校高学年の時に父も亡くなり、D11 の世界には祖母だけが残されたのだ。だがその状態で、唯一の肉親である祖母が彼女を虐待するのである。D11-108「そうですね、でも、ちょっと、ま、虐待ってほどじゃないんですけど、おばあちゃんがアル中っていうかちょっとお酒毎日もう止められなくて、で、怒り上戸なんで、思ってもないけどわたしに罵声とか、クビ絞められたりとか、生きてなきゃよかったのにみたいなこと言われたりとか。」というナラティブは、明らかに虐待である（※D-4-⑤参照）。それも、心理的虐待・身体的虐待・育児放棄の三つが複合している深刻なレベルの虐待だ。D11 は、C3 と同じ虐待サバイバーなのである。更に、D11 にはもう一つハンディキャップがある。それは、母親が東南アジアの出身であるために、彼女が民族的なマイノリティであることだ。祖母が母親を嫌ったのは、外国籍の家族を受け入れられなかったからだ。まして、東南アジアから就労ビザではなく、芸能関係のビザで入国したということは、父親との出会いの場は、外国系の水商売か風俗関係の店ということになる。保守的な D11 の祖母は、そのような背景も含めて、D11 の母親を受け入れられなかったのである。そして、その血が流れる D11 をも、酔うと罵倒するようになったのだ。

このような崩壊した家庭において、D11 の「内的作業モデル」が破壊されるのは当然である。実際、彼女は現役のアイドルであるにもかかわらず、全く自分に自信が持てないのだ。また、東南アジア系とのハーフという意味では B4 と同じであるが、往々にしてそのような存在は、均質であることを好しとする日本社会においては社会的排除の対象になりやすい。事実、B4 もいじめの対象であり、学校が居場所ではなかった。そして、D11 も同様に学校が居場所になっていない。元々、「内的作業モデル」が欠損しているため、自己肯定感が異常に低く、学業に対しても前向きになれない。そして、民族的マイノリティであるために友人が少なく、強い疎外感を味わってしまう。彼女は学校という場所に対して早々に見切りを付けたのである。だが、家に居ても、祖母の虐待のせいで居心地が悪い。従って、当時の彼女は生き残るために現実世界ではなく、仮想世界に逃げ込んだのだ。D11 はインターネットの交流サイトに居場所を求めて、そこで辛うじて世界に接続することができたのである。

D11-192「もしなかったらわたしどうやって生きてたのかなって思いますね。」というナラティブは、インターネットの光と影のうち、光を感じさせる部分である。少なくとも彼女にとって、インターネットは生きる糧となったのだ（※D-4-⑥参照）。D11 のようにインターネットに救われた翳のある地下アイドル達を集めてプロデュースされたのが、でんば組.inc.である。2013 年 1 月、でんば組.inc.は、転機となる問題作「W.W.D」を発表する。同作品は「マイナスからのスタート」をキーワードに、ひきこもりやいじめといったメンバー6 人の暗い過去からでんば組.inc.のメンバーとして活動するに至るまでの姿を描いたドキュメン

タリーソングであったが、多くの共感を呼び大ヒットした。D11 は、そのようなでんぱ組.inc.にいても全くおかしくないか、或いは彼女達以上に不幸で、インターネットに救われたアイドルと言っても過言では無い。そして、でんぱ組.inc.のメンバーが、ファンに支えられて成長したように、D11 もまた、人生でまともに得られなかった「承認」を、今はインターネットではなく、ファンから得ているのである。地下アイドルの「闇」と「病み」は深いという話を繰り返してきたが、一般のアイドルであっても、やはり同じ状況であることが D11 の人生から理解できる。D9 もファンに支えられたというが、彼女達のように機能不全家族に育った場合は、ファンのような疑似家族が、時にその人間の尊厳を支えてくれるのである。従って、D11 が芸能の世界に希望を感じてそこを志したのは、ある意味必然であったのだ。D11 のファンのことを彼女は、「ファミリー」と呼ぶのだが、そこには本当の家族に向けられるような愛情がこもっている。

D11-107「やっぱりこうやって認めてもらえるってすごい自分の中では、生きてて良かったと思うくらいですね。」というナラティブから伝わってくるのは、「承認」が、人間の生命において欠くべからざるものであるということである（※D-4-②参照）。そして、仮に「承認」が無ければ、彼女は実際に生きてはいなかったのかもしれない、という現実の厳しさである。確かに彼女の祖母は、住居と食事は彼女に対して提供していたかもしれない。しかし、十分な愛を与えることは無かった。早世した父も、家から逃げた母親も、祖母以上に彼女に深く関わることができず、結果的に満足な愛を彼女に与えることはできなかった。従って、彼女は今でも虐待する祖母のことを、決して悪くはいわない。それは、世界にたった1人で取り残されることを避けたい孤独な子供の必死の防衛機制だったと思われる。人がそれを受け入れるにはあまりにも不快な事実と直面した際に、圧倒的な証拠が存在するにも関わらず、それを真実だと認めず拒否する防衛機制を「否認」というが、祖母の異常な虐待を受けてなお、D11 は祖母の中にも愛情はあった、本当の気持ちではなかった、と祖母のことを擁護し、今認知症になり、少しずつ彼女のことを忘れて行く祖母に対して、元気なうちに恩返ししておきたかった、というのである。ここまで1人の少女を追い詰めた過酷な成育環境は、やはり過剰なまでの「承認」への渴望を引き起こすのだ。

D11-125「あ、わたしは生きてていい存在っていうか、価値のある人間だったのかなってやっと思いたね。」というナラティブは、23歳のアイドルの言葉とはとても思えない（※D-4-③参照）。この世界に、1人として価値の無い人間などは存在しないというのが、社会福祉学の大前提である。だが、彼女は23歳になるまで、自分の「現存在」に意味を与えられなかったのだ。それを与えてくれたのが、家族でも学校でも友人でもなく、ファンという疑似家族だというのは重要である。新自由主義によって格差が拡大し、貧困が蔓延すれば、必然的に機能不全家族が増える。そして、地域コミュニティの絆は格差によって簡単に破壊される。そうすると、個人に「承認」を与えてくれる存在は、近くの誰かではなく、遠くの他者にならざるを得ないが、かつて重要視されなかったそのような存在が、インターネットの世界、とりわけ SNS を中心にして大きな力を持ち始めていることが感じられる。時に炎上などが発生する SNS は、無論、光だけでなく闇の側面もある。だが、少なくとも彼女にとってはかけがえのない命綱になったのである。彼女の歌で救わ

れた、自殺を思い留まれた、という彼女を癒し、「承認」する声は、SNSが無ければ、彼女の下に届くことは無かったであろう。

D11の「見捨てられ不安」は、D10のそれと同等かそれ以上である。D11-128「でも振られた時わたしホントに立ち直れなくて。人が1人死んだくらいの悲しみが毎回。ホントにもう1か月くらいご飯食べれないくらい病んじゃうし、会社も休んでとか。っていうのもあったので。」というナラティブが示すのは、彼女の「実存」は、完全に恋人がいる時は、恋人に委ねられているということである（※D-4-②⑨参照）。未だD11には確固たる自己が無く、自分1人では未熟な自己を支えきれない。その際、彼女が最も自己の基盤にするのは、やはり Honneth の愛の領域における「承認」なのである。だが、通常は、この「承認」を無償の愛という形で両親から受ける。それを土台にして、我々は自己を構築し、世界に対する信頼を形作る。だが、D11はその土台が何もない。だから、その代替をファンという疑似家族と、恋人に求めざるを得ないのであるが、それは両方とも安定的に供給される「承認」を意味しない。彼女は SNS におけるフォロワー数を異常に気にしているが、それは文字通りその数が彼女の「承認」の指数になるからである。下がれば彼女が感じる「承認」の強度は下がり、逆に増えれば「承認」の強度は上がる。彼氏に関しても、愛情が示されれば彼の下はかけがえの無い居場所に代わり、逆に冷たくされれば、そこは苦痛の源泉になる。このように、不確定な「承認」或いは変動する「承認」に自己の存在を委ねてしまうのは危険であり、時に炎上による「非承認」がファンの間で渦巻いたとき、或いは手酷く彼氏に裏切られた時、彼女の世界は彼女ではなく、彼らによって消滅させられる。他者からの「承認」がないと苦しいのは普通の人間であるが、他者からの「承認」がないと生きていけない D11 の「実存的貧困」の深度は、D10 を超えている。それを証明するのが、以下のナラティブである。

D11-221「あ、常を感じてます.」、D11-222「友達がどんなにいても、なんか、本当にわたしのこと好きなのかなっていつも思っちゃうし、なんか孤独感がなぜか消えない。」のは、「内的作業モデル」が欠損している人間の特徴であろう（※D-4-③⑩参照）。本当の孤独というのは、たった1人でいる時に感じるものではない。誰かと一緒にいるにもかかわらず、自分が1人であると感じることが、まさに孤独なのである。その意味で彼女は完全に孤独である。孤独に耐えられない時、D11-224「はい。あ、でも孤独感を感じた時にそういうツイキャスとかやっちゃいますね。」というのであるが、これはアイドルの特権であろう。普通の人間がツイキャスなどをやっても誰も興味も関心も持たない以上、配信していることが空しくなるはずだ。だが、アイドルがツイキャスをすれば、それを聞いてくれるファンはたくさんおり、彼らは短時間の間に、様々な言葉を文字で彼女に届けてくれる。ほんの数十分ツイキャスでしゃべっただけで、何百というファンからのちょっとしたファンレターを貰うことができるのである。それは目に見える形の「承認」であり、彼女のように「現存在」が希薄な女性にとっては、視覚化された「承認」のシャワーは、彼女の「実存」を浮かび上がらせてくれる。またしても、彼女はインターネットに救われているのである。

D11は、現役のアイドルであるにもかかわらず、未だに自尊感情が低く、自分の未来を楽観的には語らな

い。D11-229「でもやっぱり、心のどこかで不安感とか、将来への不安、うまく行きたいっていう気持ちもあるし期待もあるけど、だけど、これも運とかきっかけっていう仕事だから、うまく行かないんじゃないかなとか。まったく未来のことがわかんないからっていうので、まあやっぱりばら色には感じられない。」というナラティブは、「リスク社会」におけるある意味まとめた感覚である（※D-4-㉑参照）。逆に、D8やD9が、何の客観的根拠もなく、ばら色の未来を語る方が、本来は不可思議なくらいである。その不安な状態において、彼女は心の安定をやはりお金に求めるのだ。D11-233「あー、そしたらわたしお金持ちですかね。お金稼げないんだったら仕事として成り立ってないんで、それだったらやりがいのある仕事っていう点で考えたら稼げることに越したことはないかなと。たぶん、アーティストとかってめちゃくちゃ楽な仕事じゃないと思うんですよ。それで稼げないんだったらたぶんわたし挫折しちゃうと思うんで。絶対に。楽しくても。」という彼女の感覚もまた、新自由主義における当たり前の感覚である。寧ろ、稼げないのに仕事として成り立たせようとしている地下アイドルのC8の方が異常である。奇しくもD9が、「地下アイドルは趣味でしょう」と指摘したように、生計も満足に立てられないもので自己実現を図ろうとするのは、完全に無意味である。パフォーマンスに相応の対価が発生して初めて、その人間に仕事を通して「承認」が与えられるのである。消費社会において、消費とは関係がない歌や踊りで人間の証明をすることは絶対にできないのだ。人間の証明は、結局その人間がどれ程の所得を稼ぎ、どれほどの消費能力があるかで判断されるのである。その意味で、D11は正しい現状認識を持っている。それは恐らく、「実存的貧困」の深度が深いことに由来する。それが深くなれば深くなるほど、本来は飢餓的に愛を求めるのであるが、彼女は芸能と恋人では芸能を取ると断言している。つまり、彼女は余りにも「内的作業モデル」が欠損し過ぎているため、自分の意思やモチベーションよりも、遥かに恋人の愛情の振れに自分の感情が影響され過ぎることを何度も身をもって体験したのだ。そして、下手をすると、抑うつ状態で働けないような状態に陥ることも分かった。そう考えた時、祖母も認知症状態で頼りにならず、自分1人で人生を切り開かなければならないD11は、現実問題としてリスクを伴う恋人関係に依存している場合ではないという状況にまで、追い込まれているのだ。そして、D7が象徴的に示したように、お金の価値＝自分の価値という新自由主義の経済イデオロギーに従った方が、安定的に「承認」を得ることができることもファンとの交流を通して学んだのである。その意味で、D11は、自分の弱さを良く理解している。男性の愛による「承認」が諸刃の剣であり、自分を殺すことも生かすことのできるのを知った上で、今は殺されるリスクを避ける方が賢明であると判断したのである。そして、その代償行為として、ファンという疑似家族からの「承認」で自身の「実存的貧困」を幾許か埋めながら、まずは生きるということを最優先にするのだ。このような合理的な判断は、彼女が23年間徹底して自分の弱さと向き合ってきたからこそ手に入れることができた、彼女なりのエイジェンシーの成果であろう。

(3) D12, D13は、「最貧困」系であり、彼女達の人生は幼少期から虐待と経済的な貧困の連続である。心が休まる暇や、安全・安心を感じることができる居場所というのは人生に存在せず、常に怯えて暮らして

きた。トラウマティックな体験は、D11 同様に、彼女達の「内的作業モデル」を完全に崩壊させている。そして、「実存的貧困」以上に苦しい、「絶望的貧困」状態で、彼女達は心に虚無を抱えて今を生きている。

まずは、D12 のナラティブから見ていこう。父親の荒れ狂うような DV を毎日のように見続けた彼女は、もはや両親が自分に無償の愛を注ぐような存在であると見做していない。母親に至ってははっきりと見下しているという。人生早期の愛の欠損が「実存的貧困」を生むのであるが、その欠損が酷くなれば、最早愛に過剰な期待は持たなくなる。人から全く愛されなかった人間は、人を愛する感覚すらないのだ。それが顕著なのが D12 である。彼女は心の安定を愛に求めるのではなく、D7 や D11 同様に、新自由主義における神であるお金に求める。

D12-20「お金が心の安心。」というナラティブは、今に始まったものではない（※D-4-③参照）。D12 は、既に幼稚園の頃から、親の金を盗む子供だった。そして、筆箱やペンの数を他の子供よりも多く持つことで優越感に浸る子供だった。彼女は、既にこの時点で何かが壊れている子供である。幼児期の子供が、お金の本当の価値に気付いているとは思えない。それにもかかわらず、お金に執着したのは、やはり何らかの不安が心にあるからである。幼児期に本当に「お金が心の安心」であったならば、逆に親が心の安心でない事実には驚愕せざるを得ない。しかし、後のナラティブで明らかになるが、彼女にとって家庭は異常な場所である。到底心の安心たり得るような両親ではないのである。D12-31「人は裏切るって思って、人、まず大人が一番裏切ると思ってたし、で、それでこどもなんてその場しのぎで生きてるから、余計裏切ると思ってたから、あんまり。でもまだちっちゃいから、信じて付き合ったりはしてたけど、そのたびに裏切られて、結局お金は裏切らないから、お金だな、みたいな。」という結論に至ってしまう児童期というものは、単に不幸の一言では片付けられないものがある（※D-4-③参照）。児童虐待の爪痕の大きさが伺えるのであるが、だからこそ先に見た「お金が心の安心」の意味が腑に落ちる。両親が共にアル中で、毎日のように母親に父親が DV を行う現場を目撃し、そしてそれを応援する子供というのは異常である。だが、D12 がそのように父親の暴力を応援しなければ、自分にもその暴力が及ぶ可能性があると感じたから、彼女は身を守るために強い側に付かざるを得なかったのであろう。それは小さな子供なりの防衛本能であると理解できる。また、目の前でリストカットする母親に対して、本能的な嫌悪感を子供が抱いたとしても何もおかしくない。幼稚園ともなれば、多少の分別は付く。母親が病んでおり、父親に意味もなく絡んでいることも分かるだろう。それに対して、父親が DV を行うのは間違っているのだが、さすがにそれが理解できる是非は子供だった D12 には無かったのだと思われる。D12-39「そうですね、なんか、絡むっていうかなんか、死にたいとか、リストカットしだしたりとか、飛び降りようと窓に足かけたりとか、あとは過去の女のことをグチグチ言い出したりとか、ま、そういうことを延々と。キレたりとか。」のナラティブから伺えるのは、父親の暴力よりも寧ろ、母親の BPD 的な行動化に対する苛立ちである。D12-37「でも母が逆の立場になった時は別に、なんか母に『やめろよ』とかは言わないで、何も言わないみたいな。」というナラティブからも分かる通り、D12 は明らかに立ち位置が中立ではなく、父親の側に寄っているのだ。それは、彼女にとって、父親の暴力よりも、

母親の情緒的な不安定性の方が遥かに嫌だったことが伺える。原田 32「今大人は裏切ってるって言ったけど、一番最初に裏切られたって感じた大人って誰なの？」という問いに対して、D12-32「え、両親。」と即座に答える D12 には「重要な他者」は人生において存在しない。その結果、信頼できるのはお金だけ、ということになるのである。無論、「内的作業モデル」など、出来上がる余地もない。

D12 の荒んだ家庭環境と異常な両親について、彼女が語った箇所を少し長くなるが、以下に引用する。

D12-45：やたら警察とかが来るなあとか、けっこううるさいなっていうのは思われてたと思います。

原田 46：あ、でも誰かが通報してるってことだよな、それ。

D12-46：あ、いや、両親が通報して。

原田 47：自分で通報するのか。殺されるみたいな。

D12-47：そうそうそう。

原田 48：そっか。で、警察は来て、そこでこう、児童相談所に君を連れて行くとか、しなかった？

D12-48：ああ、それはなんか、普通に両親の問題みたいになっててわたしは隠れてるっていうか自室にいて、また今日も警察いるのか、みたいな感じで日常じゃないけどわたしに触れることはなかったし、気を遣われることもなかったの。

原田 49：警察から。

D12-49：ああやっぱ警察も信用できない、一番信用できないなってその時思いました。

原田 50：警察は来て、当然まあ家庭内のことだから逮捕とかっていうのはしづらいと思うんだけど、でもお母さん殴られて痣があるんだよね、背中に。それって傷害罪に該当すると思うんだけど。

D12-50：ぜんぜんそんなこと言ってるあれなかった。

原田 51：なかった。呼ぶんじゃないとかそういう、逆に怒って帰る感じ？

D12-51：毎回だからたぶんまたかい、みたいな感じで、ぜんぜん。うん。

原田 52：取り合ってくれない感じ？

D12-52：うん。一応来るは来るけど、みたいな。

原田 53：呼ばれたから来たみたいな感じか。

D12-53：そう。

原田 54：でもお母さんはリスカしたり飛び降りようとしてるわけだけでも、死ぬ気があったのかな、ホントに。

D12-54：んー。今思うとないんじゃないですかね。

原田 55：今思うとないか。

D12-55：たぶん誰かに止めて欲しいとか、だったと思います。

原田 56：構ってもらいたいのだろうね。ということは逆にお父さんは構ってなかったってことなんだけども、お父さんは愛情が薄い人だったの？

D12-56：あんまり表現に出さないタイプの人だから、そう思われても仕方ないかな、とか、あとは性の話になっちゃうんですけど、母の目の前で 3P したりとか、たぶんしたみたいな話を。あとは、母としての時に前の女の方が良かったとか、母にはたたないとか、そういうこと言っていてたぶん、わたしって、みたいな。

原田 57：お母さんの自尊心がどんどん壊れて行ったんだ。

D12-57：うん。もともとあの、母は両親に虐待されてて、施設で育ってるんで、それでまたそういうことされたからたぶん。

（中略）

原田 63：なるほどね。で、それはやっぱりお母さんとしては受け入れられないから、壊れていくわけだよな。

D12-63：うん。なんかもともと両親の出会いがデートクラブでの出会いだったみたいで、で、母もいろんな男の人と会ってる中、唯一信頼できる人が父だった、みたいな。なんか優しくしてくれたみたいな。それで一緒に住むかってなって、で、そのまま結婚、みたいな。

（中略）

原田 154：家庭環境っていうのは殺伐としてるね。

D12-154：うん。

原田 155：子供の頃からだもんね、それ。今親子関係はどうなの？

D12-155：今はまあ良好っていうか、でも今も母のことはあんまりこう、普通に接せれないです。こうやって会話できないです。

原田 156：見下してるとか怖いとか？

D12-156：見下してるんだと思います。

（中略）

原田 170：でも親は普通中学を卒業していきなり東京に行くって言ったら止めるもんだと思うんだけど。

D12-170：止めたんですけど、まあまあ、理由が理由というか。え、じゃあわたしはずっとこのままここで苦しまなきゃいけないの？って言ったらなんとも言わなくなりました。

母親が、殺される、或いは母親の反撃にあって父親が、殺される、と日常的に警察を呼ぶ家庭で育つ子供

は、普通ではない。そして、D12-49「ああやっぱ警察も信用できない、一番信用できないなってその時思いました。」というナラティブから、彼女の「内的作業モデル」は、通常とは逆の方向にスキーマを作っていく。つまり、「重要な他者」を土台にして「一般化された他者」を信じ、世界全体を信頼して、それらに受け入れられている自分自身を信頼する、という正常な成育過程の真逆である。彼女は「重要な他者」を疑い、更に「一般化された他者」も信じられないと確信した。警察が一番信用できない、という言葉は辛辣である。警察は「一般化された他者」であると同時に、世界の秩序を守る存在でもある。その秩序の守り手が信じられないならば、一体誰に何を訴えれば助けて貰えて、誰のどの発言を信じられるというのであろうか。教師や警察官、政治家など、社会規範を子供に伝える仕事は他にも多数あるが、小さな子供にとって警察官程身近で、信頼に値する存在は無いはずだ。だが、その警察官が、彼女の家の問題を何一つ解決してくれず、彼女の苦しみもくみ取ってくれないのだ。寧ろ、彼らが彼女達家族を、厄介者を見るような目で蔑んだことは想像に難くない。社会正義の体現者にそのような態度を取られた時、子供が何も信じられなくなるのは寧ろ当たり前である。

D12-57「うん。もともとあの、母は両親に虐待されてて、施設で育ってるんで、それでまたそういうことされたからたぶん。」というナラティブが示すのは、母親にも「内的作業モデル」の欠損があるということである。養護施設出身のD2が、どれ程酷い「実存的貧困」状態であるかは既に記した通りである。彼女が成長した姿がD12の母親だとすれば、母親の行動は異常というよりも、臨床心理学的にはBPDの典型例である。BPD特有の「見捨てられ不安」と試し行動に、父親は振り回され、そして母親の「投影性同一視」によって、内面を操作された父親は、母親にDVを振るう。その心理過程は、D10の会話分析で示した通りである。D12の家庭は、「実存的貧困」が凝縮された家族なのである。全員がそれを抱えて苦しんでいるのだ。そして貧困の連鎖が、D12にも起きている。彼女は耐え切れずに中学の卒業と同時に家を離れているのだが、14年間は彼女の心を壊すには十分過ぎる時間であった。決定的に「承認」が欠けた彼女の人生は、『承認』をめぐる闘争状態に陥らざるを得ない。D12にとって、「承認」は無償の愛という形で黙っていたら両親から与えられる類のものではないのだ。それは、他者に要求し、勝ち取る類のものなのである。

D12-87「わたしを筆頭に動いてるんだ、とか。思いたい、みたいな。」、D12-89「操りっていうかわたしの指示に従って欲しいみたいな、わたしが王様みたいな気分ではなかった。」、D12-90「じゃないけど、認めて欲しい、みたいな。」という一連のナラティブは、彼女が苛烈な『承認』をめぐる闘争状態にあったことを示している（※D-4-⑤参照）。彼女の幼児的万能感は、両親から受け入れられなかったために、歪んだまま成長してしまった。そして、彼女のその自己中心性は、結果的にいじめられる原因になってしまうのである。恐らく、彼女の友人達も、彼女と似た機能不全家族で育った者が多かったと推測される。無意識のうちに、子供達は自分と同じ匂いのする存在を求めるものだからだ。当然、家庭内で満たされない承認欲求は、彼女達の仲間内で荒れ狂い、結果的にD12-84のナラティブに示されるような、「万人の万人に対する闘争」が常態化するのである。D12の世界や他者に対するスキーマは、ますます歪むことになる。彼女にと

って、世界とは須く自分の敵であると認識されるのである。

原田 106 : D12 さんはアイドルを目指してたんだけ？

D12-106 : 目指してたわけじゃないけど、なりたくなってる願望くらい。

原田 107 : 願望が。でも何かのオーディションに応募したんだよね。

D12-107 : 応募しましたね。女優かなんかの事務所の、応募して、△△でのなんか、その、オーディションに進んだんですけど、その前日に母がまた酔っ払って、もう行けないってなって。で、こんな両親のもとで芸能活動するのもなんかあれだなあと思って、結構、そういう活動って両親の助けとか必要だと思ってたから、無理だと思って。止めました。

原田 108 : その、お母さんが行けなくてもお父さんが行くっていう選択肢があったと思うんだけど。

D12-108 : ああ、ううん、なんかその頃はたぶん、父とは関わりたくないって感じ。

原田 109 : 思春期だから？それは何歳の時？

D12-109 : 中 1 ? 小 6 か中 1.

原田 110 : そのオーディションに応募したきっかけっていうのはなんかあるの？

D12-110 : たぶん芸能人になりたい、みたいな。

原田 111 : 思いがあって。で、自分で探してきたんだ。

D12-111 : そう。

原田 112 : で、オーディション受かる、みたいな感じになって、来てくださって言われた時嬉しかった？

D12-112 : うん。

原田 113 : やったーと思ったんだ。

D12-113 : 思いますよね。

アイドルや芸能人に家庭環境が悪い者が多いのは良く指摘される。それは、比較群としてインタビューをした元 AKB48 グループの女性も、「自分は違うが、仲間内には確かにそういう子が多い」と認めていた。一般的には、幼少時に承認欲求が満たされないために、D11 のようにファンからの癒しを無意識に求めて、その世界に足を踏み入れるのだと推測される。そして、D12 も、やはりアイドルを目指した。彼女も有名事務所主催のオーディションを受け、最終選考まで残ったものの、そこで辞退している。アルコール依存症の母親が飲み過ぎで起きられず、△△での最終選考の朝、彼女の引率ができなかったのである。アイドルは親子鷹での活動が望まれる。とりわけ若い頃は、絶対に親の理解と協力無くしてその活動は成り立たない。それが絶対に自分の両親に期待できないことを悟った D12 は、アイドルになる道をそこで完全に諦めた。D12-

107「応募しましたね、女優かなんかの事務所の、応募して、△△でのなんか、その、オーディションに進んだんですけど、その前日に母がまた酔っ払って、もう行けないってなって、で、こんな両親のもとで芸能活動するのもなんかあれだなあと思って、結構、そういう活動って両親の助けとか必要だと思ってたから、無理だと思って、止めました。」というナラティブに彼女の諦観が表れているが、自分の人生を親のために諦めなければならないことを、人生のこれ程早期に彼女は受け入れているのである。

虐待、経済的な貧困、精神疾患などは、家族内で連鎖することが指摘されているが、彼女も中学時代から精神科に通っている。明らかに BPD 傾向が強い母親と、結局彼女は瓜二つに育っていくのである。何時の間にか、見下していた母と同じことを始めている。彼女が母親を軽蔑するのは、アルコール依存症で、BPD で、元風俗嬢で、面倒臭い人間だからなのであるが、それはほぼ全て今の彼女の姿そのものである（※D-4-②⑦参照）。彼女は風俗店でこそ働かないが、子供時代からお金を盗み、援助交際を行い、自傷行為をし、薬物に依存している BPD 傾向の強い情緒不安定な女性である。「ミロン臨床多軸目録境界性スケール」は、やはり BPD のカットオフポイントの 10 点を超えている。どれ程父親や母親を軽蔑しようとも、距離を置こうとも、子供は親の呪縛から簡単には逃げられないことを D12 の人生が物語っている。

「実存的貧困」概念の中核にあるのは、愛の領域における「承認」の欠如、その極限としての虐待による「内的作業モデル」の欠損である。そして、それを悪化させるのが、様々なトラウマティックな個人的な体験であるが、D12-180「そう、当時は、そういう怖さではない、殺されるみたいな感覚。」というように、彼女の DV に対するトラウマは根深い。そして、そのようなトラウマを抱えた女性達が、レイプ被害などの再トラウマ体験に遭いやすいことも以前から指摘されている。幼児期の外傷体験を、意識することなしに行動で反復する防衛機制の「反復強迫」がその背景に存在する。D12 もまた、避けたいと思いながらも、自らそれを避けられない場所に進んで足を踏み入れるのであるが、D12-184「地元の友達と遊んでて、なんかハイエースに乗った男性に声かけられて、ちょっとご飯行こうよってナンパされて、まあ友達と 2 人だったし、行こう行こうみたいな感じで行って、と思ったらなんか途中でなんかすごいこう、下を出されて、なんかやろうとしてきて、そのまま山、山じゃないけどなんか、高速の横とかに適当に 2 人で降ろされて、みたいなくらの経験です。」というナラティブで示されるエピソードなどは、まさに「反復強迫」そのものである（※D-4-②⑧参照）。

D12-189「その人（セックスフレンド）はだからなんでだろって思いますね。だから治ったのかな、みたいな。わたしも嫌だったんで、その、恐怖症なのが。で、もう嘔吐きながら男性好きとかって思うように意識をして、生きてきたら、その、セフレになってたから、あ、ちょっとは克服したのかなっていう風に思ってた。」と語る彼女の恋愛観もまた、蔑んでいる母親や歪んでいる父親のそれに結局は似てしまう（※D-4-②⑨参照）。D12 は父親の DV のせいで、男性恐怖症だったが、18 歳の時にバイト先の先輩とセックスフレンドの関係になってしまう。それまでは女性としか付き合っていないが、それも匿名掲示板等を使って、比較的精力的にパートナーを探している。D12 は、性に対して臆病になったり、嫌悪感をもったりはしていない。寧

ろ、性的逸脱という面でも、彼女は母親同様に極めて自傷的である。初めての性体験は 13 歳の時に女性相手であるが、以降、常に誰かと肉体関係に陥っているのだ。それはやはり、性愛は極めて強い「承認」行為であるからだ。彼女は男性でも女性でも誰でもいいから、優しく受け入れて貰いたいのである。

永田カビの『さびしすぎてレズ風俗に行きましたレポ』は、両親からの DV のせいで異常に自己肯定感が低いメンヘラ女性である永田が、男性が怖くて、レズ風俗に行つて癒して貰ったという自己の体験談をマンガにしたものであるが、Amazon でも多くのレビューが付くほどに共感を呼び、高い評価を得ている。性風俗の本質に癒しがある、ということをも男性ではなく、女性の視点から描いた点は、特筆すべきであろう。今回のインフォーマントの中では、B3 がそれを絶賛して、「分かる分かる」と語っていたのであるが、D12 の足跡は、永田の行動に重なる。永田は性的なアイデンティティが不安定であり、かつ男性が怖いために、レズ風俗に行ってしまうのであるが、D12 も男性が好きなのに男性が怖くて、レズビアン出会い系匿名掲示板を利用して、年上の女性と肉体関係を持っていたのである。今では男性の方が女性よりも好きだという D12 であるが、異性を性愛のパートナーにするという心理は、実は D10 の行動と同根である。その 2 人の男性を通して叶わなかった父性的な無償の愛（アガペー）を手に入れようとしていた D10 は、2 人の男性を利用したが、それを 1 人のパートナーで行えば、永田や D12 の行動になるだろう。つまり、同性同士であれば、本来そこに性愛（エロス）は発生しない。従って、その性愛は、実は彼女達が本当に欲しい無償の愛（アガペー）なのだ、というロジックが成り立つのである。人生において「承認」を欠き続け、「内的作業モデル」が欠損した人間は、性愛（エロス）以上に無償の愛（アガペー）を必要とするものなのだ。

インタビューの後半に、「実存的貧困」の深さを測る質問をすると、凡そ 21 歳の女性の言葉とは思えないナラティブが続く。多少長くなるが、貴重な場所なので、その箇所を引用する。

原田 257：なるほどねえ。正直こう、人生の中で楽しかった記憶とかってある？

D12-257：んー、あんまり思い出してこないですね。

原田 258：苦しい時の方が多いか。

D12-258：うん。

原田 259：自分が生きてる意味とかって考えたことある？

D12-259：日々考えます。

原田 260：日々考えてる。

D12-260：さっきも考えました。

原田 261：なんだった？自分が生きてる意味は。

D12-261：え、なんで生きてるんだろう、みたいな。わからないですね。

原田 262：わからない。だいたいもう若い女の子とかだと、白馬の王子様みたいな素敵な男性に出会うために生きてるとか、幸せな結婚をして子供を産みたいとか、そういう理想とか夢とか

てない？

D12-262：ありますけど、もし今安楽死できるけどする？って言われたらたぶんします。

原田 263：そんなに人生に絶望してる？

D12-263：んー、なんか、絶望してるって言われたらそれは違う気がするけど。楽しい日ももちろんあるし、幸せって感じる日もたまにある。最近幸せって感じるが増えてきたんですけど、でも結局やっぱり落ちる。

原田 264：落ちる。

D12-264：時がつらいなって。

(中略)

原田 272：なるほどね。そっか。だと、さっき考えてたって言ったけども、普通はやっぱ、ま、シンプルな意見としては、こう、幸せになりたい、幸せになるためにお金は必要だ、お金を稼ぐためには正社員にならなきゃいけない、とかってこう、本当に欲しい物から逆算して、じゃあこれが必要なんだな、これが必要なんだなって考えるのが人生だと思うんだけど、その、人生の目的みたいなものというのは、一度も考えたことがないの？

D12-272：とにかくお金持ちになりたいっていう意識しかない。

D12-260「さっきも考えました。」というナラティブから、彼女は Frankl のロゴセラピーのように人生の意味を問うているように思える。だが、違うのである。その直後に彼女は、D12-261「え、なんで生きるんだろう、みたいな。わからないですね。」と言い、D12-262「もし今安楽死できるけどする？って言われたらたぶんします。」と続けるのである。つまり、人生の意味を積極的に問うているというよりは、単に「実存的空虚」の状態に陥っているのである。一応、彼女は人生の意味を考えるのだが、それには前提があり、『こんな辛い』人生に意味があるのか」という極めて否定的な問いになるのである。そして、彼女はそこに意味を見出せるほどに強くないのだ。サン・クエンティン刑務所においても、自己充足ができる以上、どんなに辛い人生であっても、そこに必ず意味は見出せるし、意味を見出せば未来は、これからの人生は変えられる。だが、そのようなロゴセラピーの命題は、恐らく今の彼女にはまだ届かない。D12-263「んー、なんか、絶望してるって言われたらそれは違う気がするけど。楽しい日ももちろんあるし、幸せって感じる日もたまにある。最近幸せって感じるが増えてきたんですけど、でも結局やっぱり落ちる。」というナラティブが示すのは、完全なる「実存的空虚」である。そして現在の彼女は、中卒のニートであり、精神疾患を抱えて生きるためにパパ活をしているメンヘラ女性である。完全に社会的排除の対象なのである。彼女には幾重にもスティグマが貼り付いている。従って、彼女は「実存的貧困」の条件を満たすのであるが、更に経済状況を見ると、明らかに「相対的貧困」を下回っている。故に、D12 は、「絶望的貧困」状態なのである。彼女が安楽死を望むほどにパワーレスなのは、当然である。そして、やはりその根底には、「内的作

業モデル」の致命的な欠損がある。彼女の「実存」は、対人関係からは全く得ることができず、貨幣を介した対物関係からしか得られないのである。

だが、新自由主義社会において、いかに貨幣が万能の神のような存在（それは、「お金で買えないものは無い」、という元ライブドア社長の堀江貴文氏の言葉に端的に示される）だとしても、やはりお金で買えないものはたくさん存在するはずだ。人の心、というのは使い古された言葉だが、それを例に挙げれば堀江氏などは、買える、と断言するだろう。その人が納得できるだけのお金を堆くその人の前に積み上げれば、誰でも言うことを聞くはずだ、と彼ならば考えるであろう。それに対して、違うというだけの自信が筆者にもないのだが、少なくとも、お金で愛が買えないことは、ホストとインフォーマントの女性達の関係性から明らかだ。だが、それとて堀江氏は、お金の額が少ないだけで、同じ理屈でホストの愛は買えると強弁するはずである。だが、希望はどうだろうか。果たして希望は、お金で買えるだろうか。これだけは買えない、と筆者は考える。何故ならば、既にみた通り、希望とは未だ存在しない何かの到来を願うことである。オリンピックで金メダリストになりたい、ノーベル物理学賞を受賞したい、或いは世界平和を実現したい、これらは全て希望であるが、お金で叶うものは、一つとしてここにはない。従って、お金に執着すればするほど、逆にお金では買えないものに無頓着になってしまう。そして、希望が絶対にお金で買えないものであれば、彼女は希望に対して無頓着にならざるを得ないのである。

D7 の様にお金を人生における至上の存在に据えれば、必然的に希望は遠ざかる。D12-298「心の支えはお金ですかね.」, D12-299「お金の量が増えれば増えるほどわたしの心は安定していくみたいな感じ.」, D12-303「お金が減っていくことに罪悪感があります.」というナラティブからは、全く希望が浮かび上がってこない（※D-4-④参照）。D7 の場合は、まだ美容整形という希望を、そしてその先の恋人に愛されたいという欲求を実現するためにお金に執着していたのであるが、D12 の場合は、単に生存するためだけにお金に執着しているのである。銀行口座の残高が減れば罪悪感を覚えるというのは、生きていることに罪悪感を覚えるのと同義である。そのような人生に希望などあるはずもない。

従って、淡々と、D12 は自分の人生において居場所というものが絶望的なまでに無かった事実を語るのだが、D12-315「ああ、のはあって、なんか幼稚園の先生がオルガン弾いてた時に、かまって欲しいから、こうやって弾いてる時にバンッと閉めたりしたら怒られたりして、なんで怒るの？って。かまってくればいいじゃん、っていうのは思っていました.」というナラティブの中に、彼女の愛に対する渴望が芽生えていたことが伺えるのである。お金よりも愛が欲しいと願ったのに、それがバンッと閉められた時、彼女の中で、それを願う気持ちが失われたのかもしれない。所詮誰も自分には構ってくれないのだと、心を閉ざしたのかもしれない。本来、「幼児期健忘」によって曖昧になるのが人間の記憶であるが、幼稚園の頃のエピソードをこれ程明瞭に今も覚えているという事実が、実は今なお彼女が本当に欲しいのは、他者からの「承認」とりわけ、愛の領域における「承認」なのではないか、と推測させるのに十分であろう。そして、どんなに否定しようとして、お金が全てと彼女が言い張ろうと、本心はそうではないことが、彼女の対人関係からも浮かび上が

るのだ。

長くなるのだが、本研究において非常に重要な意味を持つ箇所であると思われるので、全て以下に引用する。

原田 343：でも自分が依存体質であるということはやっぱりわかってるんだ。

D12-343：うん、依存、ハマったらハマっちゃうタイプっていうのは知ってるので、ただ人間、リアルな人間にもう依存することはあまりないかなって感じで。

原田 344：なるほどね。

D12-344：無意識にたぶんブレーキかけてる。

原田 345：ブレーキかけてる。でもそんな生き方してたら、人を本当に好きになれないんじゃない？

D12-345：ああ、でも、好きにはなるんですけど、信用はできません。

原田 346：好きになっても信用はしないの？

D12-346：心から信用はできない。どうしても他に女作るだろうとか思ってるから、作られてもいいように思ってるし、うん。

原田 347：付き合い始めた初日からそういう風に思っちゃう？

D12-347：あ、思いますし、付き合う前からまあ、どっちでもいっか、みたいな。他のところ行かなかったらラッキーみたいな。

原田 348：根本的に人を信じるという概念がないの？君には。

D12-348：できない。

原田 349：できないのか。

D12-349：信用したい、し、しようと思ってるんですけど、結局なんかちょっと仕草だったり言動で、もう崩れちゃうんで、それでまた疲れちゃうんですよね。

原田 350：一度たりとも、この人はわたしのことを助けてくれる人だな、とか、この人すごい信頼できると思った人と会ったことないの？学校の先生であったり、町内会長さんであったり。

D12-350：ない、、、

原田 351：ない、親友も含めてないの？

D12-351：この一瞬だったら思うことはあるけど、その数分後とか何時間後とかにはまた、裏切りそうだな、って。

(中略)

原田 356：なるほどねえ。そっかあ。じゃあ最後に君のアンケートの中でいくつか聞きたいなと思ったところがあったんだけど、「過去において自分を無くしてしまったように感じる」とか、

こう、すごいネガティブだなと思うんだけど、自分という物はいつくらいから無いと感じる？

D12-356：んー、自分が無くなってちょっとそういう、ちょっと困ったんですけど、まあでも過去がもっと良い物だったらわたしはどうなってたんだろうとか、こんな悩むこともなかっただろうとか、常にこの幸せを感じないとか、信用できないとかでどっか心になんか石があるみたいな感じなんで。

原田 357：異物感なのかな,,、寧ろ、穴が開いてるみたいな感じじゃなくて？心に。

D12-357：うん。そう、そうですね。

原田 358：正直な所、すごい個性的だとは思うんだよね。君が。実際かわいいし、服装だっておしゃれだし、女性としてのアイデンティティというのはぱっと見たところはすごく高いはずなのに、なんでそんな人がそんな風に心に穴が開いてるのかっていうのが、すごくこう、最初分からなくて。でも、もちろん家族関係がそうだっていうのを聞いたから今は納得できるんだけど、その穴って埋まると思う？これから。

D12-358：埋まりそうもない。

原田 359：埋まりそうもない。

D12-359：埋めたいけど。

原田 360：埋めたい。普通は仕事か恋人で埋めるとか、家族とかで埋めると思うんだよね。そうだったもので。

D12-360：恋人で埋めようとするとう依存しちゃう気がする。たぶん依存するんで、そうなった時、また裏切られたら、っていう意識がありすぎて、だったらたとえばなんか、今すごい幸せだと思ってたら、幸せな時ほど怖いみたいな感じなんですよ。

原田 361：その心の穴をじゃあ埋めてるのはやっぱりお金なの？

D12-361：うん。

原田 362：お金を貯めるとやっぱりある程度心の穴は埋まってくる？

D12-362：そうですね。

原田 363：なるほどね。で、それはもう幼稚園のころから？

D12-363：うん。

原田 364：そういう感覚だったんだもんね。なるほどねえ。もう一つ、この「自分のしたことが罰に値すると思うことがよくある」って、さっきお金使っちゃったとき罰に値する、罪悪感感じたり恐怖感感じると言ったけども、それは普通の人もそうだと思う？

D12-364：いや、思わないです。

原田 365：君は自分が特別だって自覚ある？

D12-365 : 変わってるのかなって.

原田 366 : 変わってるのか.

D12-366 : うん.

原田 367 : あとやっぱりここの、「愛したいんだけど愛されなくなるんじゃないかという恐怖がいつもある」ということは、本質的には人を愛したいんだよね.

D12-367 : 愛したいし愛してる気ではいるんですけど.

原田 368 : 愛されたいんでしょ? しかも.

D12-368 : うん.

原田 369 : だよ.

D12-369 : でも愛されると怖くなっちゃったりとか.

原田 370 : 怖くなるんだ. 幸せを感じるんじゃないの? 愛されたら.

D12-370 : うん, なんか, こう言ったからこうなるんだろうな, っていう.

原田 371 : 絶対に落ちること前提に考えてしまう?

D12-371 : そう. 落ちるのが怖いので幸せであればあるほど怖くなる.

原田 372 : なんなんだろうね, その底が抜けたような絶望感というか. こう, 虚無感というのは.

D12-372 : うん, 虚無感はありますね.

原田 373 : いつからそんな虚無感の塊なの?

D12-373 : でもこの, 幸せであればあるほど怖いってというのは, 中学生くらいから意識としてはあった.

原田 374 : なるほどね. で, その虚無感を今も引きずってて, 幸せになる自分というのは想像できない?

D12-374 : うん. なっても落ちるっていう感じ.

原田 375 : そっちばかり考えてしまうんだ. 一歩も動きにくいよね, それだと. 夢に向かってとか, 何かに向かってっていうのがこう, できないよね.

D12-375 : 幸せって思う瞬間が増えたは増えたんですけど, 結局, すぐにまた落ちるんで, だからみんなどうして生きてるんだろうって.

原田 376 : みんなどうして生きてるんだろうって思う?

D12-376 : けっこうなんか, 何かするたびに, 「あー幸せ」とか言うじゃないですか. どこからその感情が.

原田 377 : 幸せの感情が来るかわからないか.

D12-377 : 幸せっていうか, 満たされてる, 今この瞬間, 水が溜まったって感じで, またすぐ溢れてなくなるって感じです.

原田 378：溜まったまんまでってことはないの？

D12-378：ないです。

原田 379：その水が。

D12-379：それ、ないです。

原田 380：ただ数か月でもいいよ、恋人と付き合ってる時の数か月とか、何週間でもいい。

D12-380：1日とかだったら。

原田 381：1日とかで終わっちゃうの？それは。

D12-381：終わっちゃいます。

原田 382：君というバケツの底が抜けてるような感じがするけど、君はそういう人間なのかな？

D12-382：あー、そうかもしれないですね。

原田 383：いくら水を注いでも無駄な感じ？

D12-383：うん。例えば恋人と泊まって、1泊2日して、2日目家に帰るじゃないですか。そして、さーって。

原田 384：さーっと。その幸せはなくなっちゃうんだ。

D12-384：うん。

原田 385：お金だけが幸せか。

D12-385：うん。だからその後にお金が入る出来事、パパ活があれば、たぶん溜まったまま。

原田 386：溜まったまま。

D12-386：だから1週間とかだったらもしかしたらいけるかもそれない。

原田 387：でもそれ以上は続かないんだ。

D12-387：続く自信がない。

原田 388：人生長くない？これから何十年君生きていくの。

D12-388：だからその積み重ねをいつも日々してるって感じで。

原田 389：でも、さっき言ったけど女性の賞味期限は30って自分で言ったよね。この地続きの人生って30までは自分も行くと思う。パパ活をしてお金を稼いで、そこそこの幸せを手に入れて、そこそこの小銭を貰って、30までは行くと思うんだけど、そっから先の人生って考えてる？

D12-389：一応子供とかがいたらいいな、とか、は思ってますけど。

原田 390：仕事は？お金はいきなり稼げなくなると思うよ。

D12-390：仕事は、その、手に職を付けたいっていう意識はあるんで、なんかまあ資格とか取ろうかなみたいなのは思ってます。

原田 391：だと漠然とその女性の魅力が通じなくなる歳以上のことも考えてはいるんだね。

D12-391：一応漠然とですけど。

原田 392：一応は、老後のこととかも一応考えてるんだ。

D12-392：は、考えてないです。

原田 393：考えてないか。

D12-393：40 代くらいまでしか考えてないですね。もうその後は死んでも大丈夫。

原田 394：死んでも大丈夫。むしろもう考えたくないのかな、それ以降は。

D12-394：考えたくない、ですかね。そこまで生きてる自分が怖いですね。どうなるんだろうって。

彼女の救い難い「実存的貧困」が、言葉の一つ一つから伝わってはこないだろうか。D12-372「うん、虚無感はありますね。」という彼女のナラティブから、彼女が深い「実存的空虚」を抱えていることが伝わってくる。そして、その状態で社会的に排除され、かつ「相対的貧困」以下であれば、「絶望的貧困」なのである。これが、全ての貧困を凝縮した状態である。Honneth の承認論で言えば、愛、法、連帯の全ての領域で「承認」を欠いている。この状態で、未来に希望を描ける人間はいない。仮に今彼女に JK ビジネスで一儲けしていた時と同じくらいお金があったとしても、彼女の心の底にぽっかりと穴が開いており、底が抜けたバケツのように、そこに他者から注がれる全ての愛情や共感や気遣いが、一瞬も留まることなく下に零れて行く状態であることは変わらないだろう。彼女は今、完全に希望から疎外されている。「絶望的貧困」状態にあるものに、生活保護を受給させても自立は遠い。彼女と同じような心理状態にある A13 の現状が、お金よりも「承認」の方が遥かに人間にとって、価値あるエンパワーメントになることを証明している。A13 の人生には、今なお「承認」が欠けている。そしてそれ故に、彼女の中に希望がないのである。村上龍の『希望の国のエクソダス』の中で、主人公の少年が言う言葉を先に引用した。それは、「この国には何でもある。本当にいろいろなものがあります。だが、希望だけがない」であるが、この言葉は間違っている。希望だけがない、という状態は考え難い。何故ならば、希望が抱けない人間には、それに先行して「承認」が欠けているからだ。従って、文学的ではなくなるが、「この国には何でもある。本当にいろいろなものがあります。だが、『承認』だけがない。故に、希望が抱けないのです」という言い回しこそが、正しいのではなかろうか。

本項のまとめとして、最も「実存的貧困」が深く、かつ経済的にも D12 以下の女性の会話分析を行う。文字通り彼女が、パパ活における「最貧困女子」である。

D13-4「(パパ活を) 始めたきっかけは、今、それこそ腎盂腎炎に 2 回かかったって言ったんですけど、入院費用、退院費用ですかね、2 回目の退院費用が足りなくて、1 回目と 2 回目の半分は出産費用として貯めてた方で賄えるんですけど、残りの半分が足りないの、親と、どちらもの両親と金融機関と頼ってもあと残りちょっとだけが足りなくて、主人ももうボーナスも給料も入っちゃったので、今月 26 日までに支払わなきゃいけない分の残り少しが足りない。」と語る D13 の望みは切実だ (※D-4-④参照)。D2 のようにシャンパンタワーがしたいために 100 万円が欲しいのではない。ホストのエースとして頑張り続けて、気付い

たら 1 月に 500 万円が必要になった C9 と異なる。D12 が欲しいのは、25,000 円の治療費である。たった 25,000 円が足りないために、妊娠 8 か月の身重の体をおしてまで、パパ活をせざるを得なくなったのだ。頼める人には全てお願いして、可能な限りの借金をしたのだが、それでも支払いにあと 25,000 円が足りなかったのである。

彼女の貧困状態は、今に始まったものではない。彼女は物心ついた時から 20 年近くひたすらあらゆる意味で貧困である。原因は劣悪な家庭環境にある。D12 と同じで、母はキャバクラ嬢、父はその常連客という関係性だ。今回のインフォーマントの女性達は、ほとんどが、客とはそういう関係になれない、と口を揃えたが、実際のところ、結婚に至るケースはありふれているだろう。そして、その場合は往々にして上手く行かない。客と結婚した女性は今回のインフォーマントにも 3 名おり、全員が離婚して不幸になっている。BPD 傾向が強い彼女達は、十中八九、男性を束縛してパートナーの重荷になり始める。だが、それは当たり前なのだ。自分自身が、キャバクラ嬢や風俗嬢として多くの男性の心を弄んできたのである。自分も相手から弄ばれるかもしれない、という思いが脳裏に浮かばない方が不自然だ。それは、「自己肯定意識尺度」における「対他者領域」の「自己閉鎖性・人間不信」の異常な高さから明らかだ。今回の心理尺度で、最も顕著に女子大学生平均と差が出たのがこの項目である。異常なまでの人間不信をほぼ全員が示すのであるが、これは完全に職業病と言ってもいいだろう。そのような不信感の塊の女性達が、実際に幾人もの男性からお金で買われることを身を持って体験しているのだ。自分のパートナーもそうではないだろうか、という猜疑心を、水商売や風俗で働いた経験が無い女性よりも持ちやすくなるのは当然なのである。その結果が、「見捨てられ不安」、「試し行動」、「投影性同一視」という BPD 的行動となって発現し、結果的に自らパートナーとの関係にひびを入れるのである。そして、D13 の両親は、まさにそのような状態に陥りながらも何故か離婚せず、結果的に機能不全家族を形成して、全員で不幸になっているのだ。D13-33「(暴力を) ふるわれましたね。きょうだい 3 人なんですけど、3 人とも。」、D13-39「ちっちゃい頃から『しかたない』って言われてたので、暴力振るわれるのも自分が悪いことしたからだと思わなきゃいけない、っていう家だったんで。」というナラティブから浮かび上がってくるのは、暴君として君臨する父親と、それにただひたすら自己責任論で耐え続ける家族の姿である（※D-4-④参照）。

父親が暴力で支配する家、そして母親は性風俗産業に関わっていた女性というのは、完全に D12 と同じである。D11 も暴力を振るうのは祖母だが似ている。そして、母親と同じようなことを娘がしている。まるで、運命であるかのように感じてしまうが、精神分析的に言えば、これが「反復強迫」であり、社会福祉学的に言えば「貧困の文化」、「貧困の連鎖」なのである。D11、D12、D13 達を、母親の生き様から何も学ばなかったのか、不幸から抜け出せないのは自己責任だ、という新自由主義的な自己責任論を押し付けるのは余りにも酷である。鈴木言葉を繰り返すが、「自己」が壊れている人達に自己責任論を押し付けること自体が過ちなのである。

D13-40: で、一番下の子が産まれたのがわたしが中学、小学 6 年生とか 5 年生とかそのあたり。で、その一番下の子が 3 歳の時に O-157 っていう病気に罹ってしまって、入院しなきゃいけないって話で、今治って元気にいるんですけどその手術費用っていうか退院費用が 2 億くらいかかるって話で。

原田 41: いくら？

D13-41: 2 億。

原田 42: 2 億！？

D13-42: 2 億何千万。

原田 43: 2 億何千万っていうお金？

D13-43: けっこう 3 歳で、最初市立病院、◆◆市立病院さんに行ってて、ここではどうにもならないって言われて、あの、〇〇の隣にある△△のこども病院っていう所に、大きい病院に移動して、でそこで何十回の手術と投薬といろいろやったんですけどその間の父親って別に、来るとなくて、会いに来るとかもなくて自分は仕事してるんだみたいな感じで。その「退院費用どうします？」っていう話になった時に、あの、3 歳でその病気が治った例っていうのが Z 県で初めてだったみたいで、あの、「18 歳まで年に 1 回注射に来て検体取らせてくれるんだったら払わなくていい」っていうありがたいお話をいただいて、その話の時も父が来ない。で、家に帰ってきて、ほんとにその、退院して一番下の子が家に帰ってきて 3 日後くらいだったんですけど、あの、2 番目の弟が学校で女の子にちょっと手をあげた、それに父がすごい怒っちゃったみたいで、お風呂場で、「ちょっと風呂場に来い」ってなって、お風呂場にカギ閉めて泣き声が聞こえて、「何してんの？」って言って開けたら、鼻血出てるは目もパンダみたいになって、「やめて！」って言って警察呼んで。警察呼んだのも、4 回目なんで、保護じゃないですけどされて、そのまま母子センターに入ったんですよ。保護センター。わたしと、母と、あと一番下のちっちゃい男の子。この 3 人は母子保護センターに入って。

原田 44: それ 2 番目の子は？

D13-44: 歳が中学生くらいだともう大きいので、母子保護センターと一緒に入ることがダメで。

原田 45: 入れないのか。養護施設？

D13-45: 児童相談所。

原田 46: 児童相談所に一時保護か。

D13-46: 別々に。っていうのも知らなくて。別々に入んなきゃいけないっていうのも知らなくて。そこで 2 か月くらい入ってたなら、もう 2 番目の弟の方が、あ、違う、児童相談所の方だ、あの、さみしいじゃないですか。それで、誰ともしゃべらない、ご飯も食べれないっていう風になっちゃったらしくて。それはよくない、って話になって、警察で相談した結果、あの、1 週間に

1 回警察が家に来て父親に様子を見る。観察がつく。それでもいいんだったら家に戻ってくださ
いってというお話を 2 か月越しくらいに言われて。でそれから暴力はなくなったんですけど。

(中略)

原 田 49：お母さんと、その男の子 2 人はお父さんと一緒に暮らしてるんだ。で君は結婚したか
らそこから家出たんだ。

D13-49：はい。それで、弟の手術、お話戻るんですけど、弟の手術の時に、これくらいかかる
って目安だけは言われてて、っていうのがわたしが中学 2 年生くらいの時だったんですけど、こ
れくらいかかる、でも父親のお金だけじゃ賄えない。母親の知り合いに個人でお店をやってる方
がいて、申し訳ないけど、わたし部活動入ってなかったの、D13、もし時間あるんだったらそ
こで働いてくれないかって言われて。

原 田 50：中学 2 年生だよな？

D13-50：2 年生ですね。

原 田 51：それ法律違反だよな？

D13-51：違反ですね。良くはないですけど、歳ごまかしてくれる、バレないんであればいいよ、
っていうその、訳があるんだったらいいよっていう。

原 田 52：何歳だった？14 か 15？

D13-52：14 か 5、あ、14 です。8 月生まれなのでまだその時は誕生日来てない 14。

原 田 53：で 2 か月くらい働いたの？

D13-53：そうですね。2 か月。

原 田 54：そのお金は全部弟さんの手術費用？

D13-54：もう親に、母親に渡してました。でその 2 か月後くらい、退院できるってなったころ
くらいにお話いただいて。1 年に 1 回注射取らせてくれるんだったらお金払わなくていいって言
われてたので、その時にやっと（スナックホステスを）辞めれて。

たった 1 時間のインタビューであるにもかかわらず、彼女の話はほぼ全てが虐待と経済的な貧困と、それ
に起因する不幸の物語である。それがひたすら途切れることが無いのだ。父の DV、キャバクラ嬢だった母
の精神疾患、弟の難病とそれがもたらす巨額の金銭負担、それを返すために D13 が 14 歳でスナックホステ
スと、これは本当にテレビドラマではないのかと思うくらいの波瀾万丈の物語である。

D13 は、見た目こそ今どきの若い女性だが、中身は非常に古風で生真面目だ。パパ活サイトでプロフィール
欄をびっしり埋めている女性などほとんどいないが、彼女はそこに何故自分にお金が必要なのか、何故パ
パ活をやっているのか、働けない理由、病気のこと、妊娠していること、結婚していること、近場でしか会
えないこと、絶対に体の関係や恋人関係には発展しないこと、食事だけでお金が貰いたいことなどが書き連

ねてある。普通感覚では、これ程困窮している女性に体を要求することなどできないはずだが、パパ活サイトに登録している男性は、もう裕福な足長おじさんではないのである。そこは、パパ活という名の売春の温床だ。事実、これ程困窮している D13 に対して、恥ずかしげもなく男性は肉体関係を求めてくるのである。そして、それに対して、D13-101「なんか求めていられることが、求められることができないのに、それなのに助けてくださいってだけ言ってるのが申し訳ない。」と感じるナラティブからは、D13 の律義さ、几帳面さが伝わってくる（※D-4-④参照）。彼女は、恥を忍んでパパ活を行っている。どうしても工面できないので、お金をください、ときちんと顔写真まで載せて見ず知らずの男性に頼んでいるのだ。会って食事をするだけで、お金が貰えるというパパ活のシステムが、心苦しいのである。C7 や D8 は、パパ活は何も心苦しくもやましくもない、何故ならば、若い女性がわざわざ貴重な時間を売って傍にいてあげているのだから、と主張するのと、D13 の態度は真逆である。

流石にこれ程の困窮状態にあるため、行政も関わっており、生活保護の具体的な受給の話も進んでいる。だが、実際は離婚してアパートを出て行かない父親のせいで、それは実現していないのである（※D-4-⑦参照）。その結果、本来であれば彼女は医療扶助も受けられたかもしれないのに、高額な入院費用を負担しなければならなくなってしまったのだ。そして、彼女はそれを自己責任であると見做すのだ。彼女のパートナーでさえ、自己責任論を受け入れて泣きながら彼女に謝るのだという。最近入籍したパートナーは、教員を目指していたが、非常勤の採用枠も受からなかったため、今は学生時代から務めている飲食店で正社員にしてもらい、12時から26時まで働いている。教員採用試験に受からなかったのも、非常勤職員に採用されなかったのも、全部自己責任で彼の努力が足りなかったからだというのだ。それは奨学金を借りて大学院まで進んだため、アルバイトに追われて満足に勉強できなかったという理由もあるのだが、彼はそれを言い訳にはしないのである。彼女が腎盂腎炎になって入院したのも、彼女曰く自己責任なのである。何故ならば、妊娠していながら、深夜まで彼と一緒に飲食店で立ち仕事で働いていた自分が悪いのだという。無論それも彼の負担を少しでも減らし、出産費用を貯め、生計を少しでも楽にしようという健気な努力なのだが、それを止めなかった彼も自分を責め、体を大事にしなかった彼女も自分を責め、途方に暮れた D13 は、彼に内緒でパパ活をしているのである。

子供の頃から暴力が支配する家で育ったせいで、D13 は、男性恐怖症である。この点も D12 と一緒である。PTSD のせいで、男性の手が肩よりも上に上がっただけで、彼女は怖くて震えてしまうという。D13-147「あの、父親に手をあげられてたっというのもあるんですけど、主人にもなんですけど、手をここ以上あげられるのがもう、嫌.」, D13-148「あがるのが嫌ですね。なので、頭を撫でられたっということも1回もないですね。」という筋金入りの男性恐怖症の D13 は、性風俗で働くのは相当なストレスであろう（※D-4-⑧参照）。一緒に食事をしながら話をするだけというパパ活でさえ、彼女にとっては限界に近いのだ。だが、D13 が、プロフィール欄に体の関係は無理である、と記載しているにもかかわらず、それでも男性側は次々と体の関係だけを求めてくる。D13 は、追い込まれているのである。D13-161「はい。もうどうにもならな

い.」, D13-162「どうにも. もう友達も頼って, 『やれることやったの?』って言われるんですけど, 自分の中ではやったつもりっていうか. もう, これしかないと思ってるので.」という一連のナラティブから, 抜き差しならない彼女の苦悩が浮かび上がってくる. そしてまさにこれが, ある意味分かり易い「女性の貧困」である.

『東京貧困女子.』や, 『出会い系のシングルマザー』などのルポルタージュを読むと, こんな大変な人が本当にいるのだろうか, と穿って見てしまう自分がいたのであるが, この研究を通して, 60 人を超える女性達の話聞いて, その認識は消えてなくなった. これらのルポルタージュに書かれていることもまた全てではないだろう. きっと, 個人情報保護の観点や様々な理由で書けない内容というものたくさんあり, そうしたものも書いてしまえば, 今日本に溢れている「女性の貧困」は, この程度で済む訳がないとさえ感じるのである.

敢えて, 本項の他の女性達と異なり, D13 の人となり伝えるために, ここでは自分の分析や説明の言葉よりも, 2 人で交わした会話の方を多く引用してきた. 一読して分かる通り, 責任感が強く, 生真面目で, パートナーも真面目な男性である. 彼女の母親と父親の場合は, どれだけ悲惨な話を聞き, 可哀そうだなと思っても, 母親に対してキャバクラ嬢という「職業スティグマ」が付与される限り, 一般人は同情しないであろう. それこそ, 役所がそのような冷たい対応を取っていることから分かるように, そもそもキャバクラ嬢になったのが自己責任, ダメな男を選んで結婚したのが自己責任, 3 人も子どもを産んだのが自己責任, 精神疾患で働けないのが自己責任, DV 男性と離婚して逃げないのが自己責任, と幾重にも重なる不幸が全て彼女の母親の自己責任に帰されるのである. だが, これは余りにも酷な話ではないだろうか. キャバクラ嬢になった彼女の母親にも恐らく何がしかのやむに已まれぬ理由があったのであろう. 既に, ここまでの研究からも明らかな通り, さしたる理由もなく, 人は他者から蔑まれるような, スティグマの貼り付いた仕事をしない. その仕事をするほとんどの女性が“訳アリ”である. その訳を斟酌する余裕が社会の側に無いことの方が本来は遥かに問題なのである. 市場原理に基づく激しい競争社会がポストモダン社会で確立し, 全世界規模で, 経済競争が激化している. そこでは全ての人間に, 尊厳を持って働けるような仕事は分け与えられない. そこから必然的に零れ落ちる人達に対して, 救いの手を差し伸べる者がいない社会の方が, 寧ろ異常なのである. D13 の窮状に付け込んで体を求めようとする男性達の醜悪さを見たであろうか. 8 か月の妊婦に対して, それが人間の掛ける言葉であろうか. だが, D13-163「すごい迷ってます. すごい迷ってますね.」, D13-164「いや, もう, 身体売るか, それかデリヘルじゃないですけど, 日払いでできるような, 座ってられるような電話のオペレーターっていうのもあるって聞いたんですけど, 長時間座ってるっていうのも苦手で, 一日やっぱりそういうのって 3 時間 4 時間以降, 以上, 働かなきゃいけないので, 身体に負担がかかるっていうのもあるから, それはなるべく避けたくて.」というナラティブから分かる通り, 今彼女は人生の分岐点に置かれている. たった 25,000 円のお金が足りないが故に, 体を売り, 後ろ指をさされてスティグマを背負うか, 流産のリスクを背負って長時間のストレスフルなコールセンター業務を行い, 腎盂腎

炎を悪化させて慢性の腎炎になり、挙句人工透析が必要な体になるか、の二者択一で迷っているのである。後者は大切な我が子の命を危険に晒し、かつ自分自身の体を壊して更に医療費がかかる可能性がある。考えるまでもなく、彼女にはもう前者の売春しか残されている手段は無いのである。

彼女の今の状況は、まるでヴィクトル・ユーゴーの『レ・ミゼラブル』の登場人物のようだ。姉の子供のために一本のパンを盗んだせいで、ジャン＝ヴァルジャンは 19 年間監獄に繋がれた。そして、シングルマザーで 1 人娘を養っていたファンティースは、上司のセクハラに応じないために工場を蹴になり、路頭に迷って娘のために売春婦に身を賣した。この 2 人の善人の姿が、D13 や彼女の母親の今の姿に重ならないだろうか。彼女は 25,000 円が払えないために売春をしなければならないのであるが、その結果、消えない「売春婦」のスティグマが、人生に刻まれるであろう。ジャン＝ヴァルジャンに刻印された「24653」という囚人の焼き印の様に、それはどこに行っても彼女の人生を躓かせるものになるかもしれない。

19 世紀フランスの不幸の物語が、21 世紀の日本にほぼ変わらぬ姿で存在するこの現実を受け入れなければならない。そして、これが「絶望的貧困」なのである。D13 の「生きがい感スケール」の数値はわずか 45 点（女子大生平均 71.538 点）である。この絶望を救わなければ、社会福祉学は一体何を救う学問なのかと厳しい誇りを受けるであろう。

原田 203 : 今世の中的には基本的にそういった水商売とか風俗関係に関して風当たりが強いというか、偏見で見る目があると思うんだけど、お母さんがそういう仕事をしてたってことは嫌？

D13-203 : 嫌じゃないですね。必死だったんだなって。

原田 204 : 必死だったんだ。

D13-204 : それを人と関わるのが嫌って、わたしが産まれる 8 か月目まで、8 か月となるとわたしの今の状況なので。

原田 205 : そのくらいまでキャバクラで働いてたんだ。

D13-205 : はい。すごいなって思うし、何回もパンダみたいになってる母親、あざだらけで顔もあざだらけでパンダみたいになって、家を、それで、殴られた日に出ていくんです。で 2、3 時間後に、それこそ朝の 4 時とか 5 時くらいに、殴られたんだから何も悪いことないのに、父親に「ごめんなさいわたしが悪かったです」って謝って部屋に入ってきて、一番つらいのは母親だってわかってるので、見ててごめんねって言って、泣いてくれる。なのがわたしだったら逃げそうだなあって思ってしまうし、それをずーっとわたしたちのために我慢する、どっか行かせるわけにはいかないって言った母親は、母親みたいな母親になりたいと思う。仕事はどうのと言うよりも。

D13-205 のナラティブは、絶望の中に光る微かな希望だ。彼女は D12 のように自分の母親を蔑んだりし

ない。寧ろ、母親に対して最大限の尊敬の眼差しを向けるのである。自分だったら逃げている、と。3人の子供を置いて、D12の母親はどんなに殴られても決して逃げなかったのだ。殴られてパンダのような顔になり、パニック障害やPTSD、うつ病に苦しめられても、彼女は命を賭して3人の子ども達の防波堤になったのである。自分が何も悪くないにもかかわらず、暴君である父親に謝って家に入れて貰い、子ども達に変わらぬ愛を注いだのである。これが、D12の母親とD13の母親の最大の違いである。そして、D12とD13の人間性の違いでもある。

ほぼ同じ境遇に育ち、過酷な運命の中で生きてきた2人を決定的に分けたのは、やはり愛なのだ。例えば方の親だけでも無償の愛を与えてくれたかどうかは、1人の人間を形作るのにこれ程大きな違いとなって表れる。愛を知るD13は、過去を受け入れてくれる男性をパートナーにすることができた。きっと同じ大きさの愛を、生まれてくる子供にも注ぐことができるだろう。貧困の連鎖は断ち切れるかもしれない。だが、愛を知らないD12は、他人だけでなく、自分すらも愛せないのだ。D10が結婚できなかつたら自殺するかもと言っていたが、D12はその言葉通り、40歳になる前に自殺するかもしれない。本当の愛すら知らぬままに、である。

D10やD12は、神経症水準の精神疾患を抱えているが、判断能力が著しく低下する精神病水準に至ってはいない。そして、そこが重要なのである。精神病水準の人間が自殺するならば、それは疾患が大きな原因の一つになるだろう。自殺した方が辛くない、という誤った判断を下してしまうのは、判断能力が疾患によって奪われるからだ。或いは衝動性を抑えきれないくらい思考能力や自制心が低下するからである。その場合、投薬や入院は必須であろうし、精神科医が命を守る責任を第一義的に負うだろう。

だが、D10やD12が自殺するのは、果たして精神疾患のせいだろうか。本研究の見解は、否である。神経症水準の精神疾患で人は誤って自殺を選ぶほど判断能力は制約を受けない。そのような人間が死を選ぶのは、「孤独」と「絶望」からである。あるインフォーマントの女性は、「例え生活保護であっても、お金がないのは我慢ができます。虐待で殴られるのも、しばらくすれば慣れます。でも、孤独にだけは耐えられません」と語ったが、この言葉は、本研究において、承認論を新たな貧困理論の土台に据える切欠となった。「孤絶」は、生来的に社会的存在である人間にとって、絶対に耐えることができない類の苦悩なのである。従って、本研究は、その「孤絶」が疾患や障害からではなく、「貧困」から生まれると措定するのだ。Honnethの三つの領域の「承認」の欠如が「実存的貧困」或いは「絶望的貧困」を生み、その状態には不可避の「孤独」と「絶望」が埋め込まれている。故に、「貧困」が人を殺すのである。その場合、その人間の命を守る責任は第一義的にソーシャルワーカーが負うことになるであろう。社会的排除とスティグマから彼女達を救い出し、彼女達の居場所を社会の中に作っていく仕事は、社会福祉学に託された使命なのである。そして、「実存的貧困」を、実存的困窮と呼ばないのも、これが死に繋がる程の苦悩であるからだ。死に繋がるものを看過しては置けない。そして、繰り返しになるが、看過できない、すなわち「なにかがなされなければならない」という感覚こそが、Spickerが指摘した、「貧困」の唯一の中核条件なのである。

社会における「孤独」の悪影響を重く見たイギリスが新たに孤独省を作り、孤独担当大臣を設置して本格的な社会的包摂の実践に取り組み始めたことは既に述べたが、それだけでは新自由主義社会に蔓延する社会病理を解決するための対策としては片手落ちである。人を死に追いやるもう一つの宿痼、「絶望」に対する処方箋もまた、神無き時代のポストモダン社会では切実に求められるだろう。東大社研が希望学プロジェクトに着手したことは、非常に意義があった。そして、「希望」の明確な定義ができたことは日本社会にとっても一歩前進と言えるだろう。だが、未だに日本には、「希望」だけが無い。その一方で、社会的紐帯は日々弱まり、幾千幾万の個人が経済的にも困窮しながら社会的に孤立している。これが、年間 30,000 人近い自殺者を長年生み出し続けてきた世界一の自殺大国・日本の哀しい現実なのである。

第5節 その他の女性達（E群）の研究

第1項 6人の女性達の概略

(1) 本節では、分析に値するサブカテゴリとして「シングルマザー」と「高学歴」を設定し、各々に2人、4人を割り振って計6人（平均年齢24.17歳）の女性達について考察する。

本項の最初に、性風俗産業を通してパートナーを得た後、離婚した2人の「シングルマザー」の会話分析を行う。A13も同じ経歴なので本来ここに入れてもいいのだが、水商売しか経験がなかった彼女は敢えてA群に入れ、風俗産業でも働いた2人をこちらに割り振った。

「高学歴」に該当する女性達は、合計で10人いるのであるが、なるべく幅広い職種を代表し、かつコーディングの際に有意義だと思われるナラティブが多かった4人を厳選した。4人の中で高校の偏差値が最も高い者はE4で76、大学の偏差値（学部）が最も高い者は、同じくE4とE5で75である。123人全員から得た出身高校の偏差値の平均は、中学卒の7人を除いた数字で46.37である。全体の高校中退率は、32.20%と極めて高く、かつ中卒の7人の偏差値は、実質ボーダーフリー高校を卒業したD4（偏差値33）以下であることを加味すると、性風俗産業で働く女性達の高校偏差値の平均値は、実態的にはもう少し下であると見做していいだろう。従って、性風俗産業に従事する女性達は、一般論としては普通の女性達に比べて学力が若干低いと考えられるが、統計学的に有意に低いというレベルではない。第5章のインタビューにおいて女性達の多くがインテリで、学力は寧ろ一般人よりも高いとY2が指摘する点は、恐らく誤りである。Y2の場合は調査対象者が全員AV女優であるので、本研究とは単純には比較できないのであるが、本研究に協力してくれたAV女優の高校偏差値の平均値は、決してY2が主張するような平均（偏差値50）以上の数字にはなっていない。

成育過程から見たE群6名のIWMの欠損率は、66.67%であり、そのうち全員が4つの心理検査においても全て不良の数字を示したため、実存的貧困率も66.67%である。うち、2名が経済的に「相対的貧困」の状態にあったため、絶望的貧困率は33.33%である。量的研究の結果から見ると、E群は他の群に比べれば精神保健はさほど悪い群とは言えない。それは、「高学歴」の女性達の多くは、心理検査において多少不良な部分はあっても全面的に不良ということが少なく、また検査の種類によってはかなり良好な数値を示すからである。ただ、それでも全体的に見れば心理検査の結果は概ね不良であり、15領域中9領域で女子大生平均を下回っている。とりわけ目立ったのは、「ミロン臨床多軸目録境界性スケール」の結果で、A群に次いで悪い数値を示した。E群の平均点はD群と全く同じ、7.444点であり、女子大生平均の3.640点を大きく上回っている。インフォーマントの女性達には、A群同様に精神医学的に病的な水準の者が多数見受けられた。生活史に目を向けると、他の群に比べると比較的恵まれており、とりわけ「高学歴」の女性達はほぼ全員が裕福な家庭に育っている。それでも児童虐待が、6人中3人に確認されており、結果的にIWMの欠損が著しい。生活史の中では非行の数がC群同様に多く、6人中3人が少年法や児童福祉法に触れる成育歴を送っている。母子家庭出身者が2人いるが、インタビューを分析しなかったE群女性全体で見ても、他の群

に比べて酷く家庭が荒んでいる訳ではない。ただ、裕福ではあっても機能不全の状態に陥っている複雑な家庭環境が目立つ。明確な虐待が存在しない者でも、いじめ・不登校・非行等はかなりの程度確認されており、何らかの生きづらさをほぼ全員が抱えて生きている。

結論として、E 群の女性達は大きく三層に分れる。精神保健が不良で、家族関係等も恵まれず、第一義的に金銭が目的で風俗産業で働いている群（第一層）と、明らかな精神保健の病理的な問題を抱えず、金銭的には浪費が目立つモラトリアム的な生き方をしている群である（第二層）。そして、離婚してシングルマザーになると、生きづらさは一層厳しくなり、経済的な困窮状態に陥る。それが第三層で、E1 は第一層から第三層に移行し、E2 は第二層から第三層に移行している。同じシングルマザーという第三層であっても、最初の層の生きづらさに大きな差があるので、その差は第三層にも格差として引き継がれている。心理検査の結果が示すように、明らかに第一層出身のシングルマザーである E1 の方が、第二層出身の E2 よりも生きづらさを人生に内包しており、それは A13 も同様である。彼女もまた第一層出身のシングルマザーであり、日本の貧困問題を凝縮したような女性であった。「高学歴」の女性達は、比較的第二層に多く存在しているが、母親が離婚・結婚を繰り返した E5 のように、何らかの理由で第一層の困窮状態に置かれている者もいる。

第一層には、幼児期に虐待を受けていたり、顕著に経済的に貧困であったりして、IWM を欠いている者が多く、彼女達は深刻な「実存的貧困」、或いは「絶望的貧困」に陥っている。一方で、第二層には「絶望的貧困」は 1 人も存在しない。第三層であるシングルマザーは、本研究においては全員が「絶望的貧困」の状況に置かれており、最もパワーレスな状態である。

E 群全体としては、第三層の存在があっても、心理検査の結果は B 群や C 群、D 群どころか A 群に比較しても若干良好に出てしまう。繰り返しになるが、その理由は、「高学歴」群に属する女性達の数人が、全体の平均値を引き上げているからである。ただ、第二層に属する女性達であっても、自傷的な生き方をしているという意味では第一層や三層と同じであり、虐待等の深刻なトラウマは存在しなくても、いじめや不登校、非行などの外傷的なライフイベントはほぼ全員の人生に見受けられた。

コード	年齢	職業	IWM	実存的貧困	経済的貧困	その他特記事項
E1	25	デリヘル	○	○	○	シングルマザー、不登校、非行、母子家庭
E2	22	デリヘル	○	○	○	シングルマザー（未婚）、非行、不登校
E3	33	AV 女優				高学歴、非行
E4	21	デリヘル				高学歴、いじめ、発達障害
E5	22	パパ活	○	○		高学歴、虐待、母親再婚 3 回、DV
E6	22	ソープランド	○	○		高学歴、虐待、いじめ、精神・発達障害
	24.17		66.67%	66.67%	33.33%	

第2項 2人のシングルマザーの物語

(1) まず、E1であるが、水商売ではなく、最初から性風俗のデリヘルに勤務した女性である。これまでの研究結果から鑑みると、キャバクラで働ける容姿を持ちながらそこを一足飛びに飛ばしてデリヘルという非本番系の性的サービスを行うのは一種の自傷行為であり、個人的な闇が深い。実際 E1 の家庭環境は劣悪な部類である。両親は離婚しているが、父親は長期間に渡って借金で家族を苦しめる存在であった。父親から可愛がられた記憶を訪ねると、即座に E1 は E1-186「無い。無い無い無い。」と答えた。このナラティブが示す通り、E1 の父親は完全な育児放棄である（※E-2-①参照）。幼少期から今に至るまで、E1 は父親に対して愛情というものを感じないという。また、家庭内で諍いが絶えなかったため、E1 は高校時代から家出を繰り返し、妹は部屋にひきこもり、家庭内は常に不穏な状態であった。E1 は、今でこそ昼の仕事に就職したが、妹のひきこもりは長期化、深刻化して、家族の悩みの種になっている。E1 の「内的作業モデル」は当然欠損しており、高校卒業当時、自分を愛することができていなかった。従って、自分を傷付けるように、キャバクラではなく敢えてデリヘルの仕事を友人と一緒に始めた。若い女性が性風俗の世界に参入する際、友人と一緒にというのはよくあるパターンである。

性風俗産業に入ったものの、今度はそこでまた、E1 の人生は悪意ある男性によって支配されてしまうのである。E1-28「いや、もう、辞めたくて辞めたくていて、でも、辞めさせて貰えないし、その男とも離れたかったけど、別れて貰えないし。で、結局何回か東京に逃げてって。ていうのを、2回くらい、2、3回繰り返して、やっと辞めた。」、E1-36「何かね、ヤクザでは無いんだけど、何か、片足突っ込んでるみたいな。うん。」というナラティブから分かる通り、遊び人で女にだらしが無かった父親を心の底から憎みながら、まさに父親そのものの男性を E1 は自分のパートナーにし、その男性に支配されてしまうのである（※E-2-②参照）。

ここで E1 が置かれている状況は、所謂「色管」である。経営者側が、従業員の恋心に付け込んで、管理することであり、DV に発展することが多々ある。「色管」は、職場内での揉め事に発展することもあり、狭い店舗で「色管」を行うと、直ぐに他の女性キャストにバレてしまう。給与面に差がついていたり、客の付け回しで最賃をしていたりすれば、他の女性達の大量離職を招いてしまうリスクがあるが、それでも、キャバクラを含めて性風俗店では以前から「色管」が無くならない。D2 も JK ビジネスで働いていた時代、「色管」に遭っていたと語っていたが、「色管」は個人情報流出するので E1 のように住居までストーキングされ、襲われる危険性がある。

E1-43「てか、たぶん、その男に半分以上は取られたかな。男に使った。」というナラティブが示すように、「色管」のもう一つの怖い点は、搾取されることである（※E-2-③参照）。恋人である、という名目で管理しておきながら、E1 のような人気キャストであれば、到底恋人にさせられないような業務であるにもかかわらず、昼から夜までびっしりとスケジュールを入れたりする。普通の女性キャストであれば苦情を言う

かもしれないが、E1 の様に恋人であれば、文句が言いにくい。結果的に心身がボロボロになるまで働かされるような悪質なケースも存在する。そして、E1 は、まさにそのケースであった。流石に辞める直前は、体がボロボロでとても客を取れない状態だったため、新規客は入れず、常連客だけで何とか回すようにして貰ったという。だが、それでも、彼女の精神は完全に破綻した。E1-71「精神的にもある。うん。てか、精神的にが大っきいんだろうね。何かもう、不感症みたいになって。触られると痛くて。もう、嫌で。」というナラティブから、デリヘルの仕事は、連続して勤務した場合は肉体的な辛さ以上に、心理的負担の方が大きいことが理解される（※E-2-④参照）。また、E1-95「うん。皆まともに働いてんのに、あたし何やってんだろうって思うこともよくあったし。」という昼職の友人達と自分を比較して後ろめたく思うのは、まじめな女性の特徴でもある。A8 の様に、人は人、自分は自分なんで、と割り切れる女性の方が普通は少ない。昼の正業で働いていない、ということだけでも、日本社会においては十分にスティグマになる以上、幾ら風俗でそれなりの所得を得ていたとしても、世間的にはニートに見られてしまうストレスは女性にとって非常に大きい。特に、近所の目が気になる田舎ではそれは顕著である。

E1 に対して、これまでの人生で居場所だったのはどこか、と問うと、暫く考えたのち、E1 は E1-205「・・・無い。」と断言するのであるが、これが「内的作業モデル」を持たない女性である（※E-2-⑤参照）。安全・安心の感覚が、失われているのである。その結果、常に誰と一緒にいても、不安を感じてしまう。E1-211「うん。から、離婚した。旦那と。」というナラティブが愛する人と一緒になっても、そこが居場所にならない苦しさを物語っている。そして、E1 の夫は、在日中国人であり、黒社会に片足を突っ込んでいる存在であった。ヤクザのフロント企業で「色管」をされてしまった E1 は、怖くて店舗を辞められなかったのであるが、その際、相談に乗り、辞めるために尽力してくれたのが、この夫であった。だが、「夜」や「風」の世界の住人は、「アンダークラス」である以上、犯罪集団に属するものが多く、この夫も怒った時に酷い DV をするようになるのである。そして、結果的に離婚するのであるが、彼女はその際 3 歳になる子供ができていた。彼女の人生を救ったのは子供の存在である。

E1-222「うん。子供いたからね。」、E1-223「子供デカイねー。うん,, , デカイね。」と語る E1 は、夫と離婚した時はまだ 24 歳であり、年齢的に彼女はまだまだキャバクラでもデリヘルでも働ける状態であった（※E-2-⑥参照）。寧ろ、実家に戻った時に、未だに妹がひきこもっていたため、どうしてもそれなりの稼ぎを得て、母親に渡したいという思いも強くあり、E1 は実は一度だけ、性風俗の道に戻ることも真剣に考えた。だが、結局彼女は完全に「夜」や「風」の世界から足を洗う決意をした。理由は、後ろ指をさされたくないからである。独り身の時は、自分が笑われるだけで済んだという。だが、子供ができた以上、自分の行動は、自分の子供まで後ろ指をさされ、いじめられる原因になり得る。そう考えた E1 は、昼の職業に就くために、ハローワークの職業訓練を受講し、昼のケアワークの仕事を選んだ。

E1 に、デリヘルやキャバクラで働いたことで、お金以外に得たものが何かあるかを問うと、人の心の痛みが分かるようになった、と答える（※E-2-⑦参照）。E1-250「うん、そうだね,,,。皆何かしらを抱えて

て,, , 親と会えないとか, 縁切られたとか,, , そういう子もいっぱいいたし。」というナラティブからは, 性風俗の世界が, 傷付いた若い女性達の「承認の共同体」であることが理解される。E1 は, 家に居場所がなく, 学校に居場所がなく, かといって, 18 歳の時は低学歴のために社会にも恐らくまともな居場所が作れないと考えたため, 若い時しかできない高収入の仕事を, と考えて一足飛びにデリヘルの仕事に飛び込んだ。そこで彼女は若さとキャバクラでも通用する容姿を売りにして, 瞬く間に店の№1 に登りつめたのであるが, それに目を付けた店長から「色管」を仕掛けられ, 途中からは完全に搾取の対象になってしまった。また, その店長がヤクザと密接な関係にあったため, 逃げることもできず, 心身がボロボロになるまで仕事を取らされ続けた。これが, 性風俗に従事することの典型的なリスクの一つである。昨今, E1 の様な小さな子供を抱えた若いシングルマザーを対象に寮付き, 簡易保育所付き, ミルク付き, オムツ付きなどを謳い文句にしたデリヘルが首都圏を中心に急成長しているが, まさにこの状況が「女性の貧困」の深刻さを物語っている。幸いにして E1 は実家の母親が同居を歓迎してくれたために事なきを得たが, それが無ければ彼女は恐らくそのような店舗で風俗の仕事を続けざるを得なかったかもしれない。若い女性にとって, シングルマザーになることが大きなリスクであり, その受け皿が婦人保護施設ではなく, 性風俗産業になっているのが日本社会の現実なのである。

(2) E1 同様に, キャバクラとデリヘルと両方で勤務したことがある E2 は, 現在未婚の母である。彼女の夫は店の客であり, そして実は不倫状態であったことが後に発覚する。夜の世界の出会いが危険であることは, E1 のケースでも検討したが, 店のスタッフだけでなく, やはりそこに通う客も信用できないということ, E2 のケースから明らかにしたい。時にそこには訴訟リスクまで潜んでいるのである。

E2 も E1 同様にスタートはお金欲しさにデリヘルであるが, そこで出会ったキャバクラの店長から自分の店で働くようにスカウトされて, キャバクラに移籍した。そして, 思いの外その水が合い, 一度 AV 女優のスカウトがあったのだが, それも断って水商売に専念している。

E2-27「わたしは, 悪い仕事だとは思わないんですけど,, , 子ども産まれてからですかね。『可哀そうだろ』『子どもが可哀そうだ』ってても言われて,, , 言われるようになったし,, , 親的にはやっぱり, 『世間の目があるのを感じなさい』っていうのも言われたし,, , 」というナラティブから, 社会からのスティグマは, 女性に子供ができると一層強くなることが理解される (※E-2-⑧参照)。結果的に, E2 は子供のために水商売に戻ることを断念している。

E2 は, タイプ的には A8 と同じように, 「夜」や「風」の世界に全く偏見を持っていない。E2-25「全然抵抗もなく。悪い仕事だとも思わないし, そんなたぶん私的にはその時公務員と同じレベルの,, , 」というナラティブからも, 彼女にとっては, キャバクラの仕事はやりがいのある仕事で, 公務員のように, 社会の役に立つとまで考えていたのである。E2 のように, 「夜」や「風」の仕事は, 風紀を乱す以上に, 治安を逆に良くするという根拠のないデータが語られることがままある。だが, 風俗店のお陰で性犯罪が減る, 自分達

はそれに貢献している、と B6 も主張していたが、B8 が指摘するように、未だそこには十全なエビデンスがあるとは言い難い。

子供が生まれるまではかなりの誇りを持って水商売に従事していた E2 であるが、実は彼女が働いていたキャバクラは、かなりのブラック企業である。E2-58「明細も無いし、そういう面倒くさいことを一切しないでやってた、ちょっとまあ、いろんな意味でブラックな会社で。」と E2 が語る様に、夜の世界に昼の仕事の常識は通じない（※E-2-⑨参照）。水商売や風俗のルールにありがちなのが、明細が無い、個人事業主としての契約も無い、だが、何故か罰金はある、という「夜の掟」である。そこは、昼の仕事をしたことがある人間であれば、直ぐに異常さに気付くのであるが、一切昼の正業に就いたことがない E2 のような存在は、基本的に何も疑問に思わないのである。これも、この業界特有の搾取のメカニズムである。雇用保険等を掛けて貰えるはずもなく、働いている間は、履歴書は完全に空欄になってしまう。それを防ぐためには個人事業主として届け出を出し、所得証明を取れるように確定申告を行う必要があるのであるが、彼女達に納税の意識はほぼない。従って、夜の仕事を止めた時に、満足なセカンドキャリアに就くことができないというのも、この世界のリスクの一つである。そして、更にそれ以上のリスクである損害賠償まで E2 は抱えてしまうのである。それは、不倫による訴訟リスクである。

E2-167「300 万。でも、もちろんそんなお金ないじゃないですか。で、彼が、まあ、あたし、付き合っただけで正味一週間くらいなんですよ。できごとが。」というナラティブからは、客との不倫は、キャバクラ嬢が背負うにとしては大き過ぎるリスクであることが分かる（※E-2-⑩参照）。昨今銀座のホステスは、客との枕営業が仕事の一環であることから、不倫関係に陥ったとしても慰謝料は請求できない、という判決が東京地裁で出された。銀座のホステスは慰謝料から逃れられるとしても、キャバクラ嬢は基本的に不倫関係になれば、100%訴えられれば敗訴である。そして、200～300 万円が慰謝料の相場だ。半年分の稼ぎが一瞬でなくなるということを E2 はこの時初めて理解したという。キャバクラは、比較的客との恋愛関係に発展しやすい業態であるために、そこで働く女性には注意が必要である。そして、E2 の不幸は、ここで終わらない。この男性との間に、ほどなくして子供ができるのであるが、男性が籍を入れることになかなか応じなかったのである。既に慰謝料は払い終えて、離婚は成立していたのにである。その後、堕胎もできないくらいお腹が大きくなってから判明したことは、男性はこの頃別のキャバクラ嬢と付き合っており、そちらの女性も妊娠していたということである。そして、結局男性は、そちらの女性を取って、E2 と子供を捨てた。これもまた、キャバクラ嬢の遭遇するリスクの一つである。男性客は最初から信用などできないのである。

E2-194「周りもそうですね、やっぱ。キャバ嬢で結婚したら、離婚がセットでついてくるみたいな。デキちゃった結婚。離婚。みたいな。」という E2 の言葉は真実であろう（※E-2-⑪参照）。キャバクラだけでなく、スナックであっても、それは変わらない。酒の席で起きた出会いは、真つ当な昼の出会いと一緒に考えてはならないのである。そして、それは十分に分かっていることだと、E2 は言うのだ。だが、それでも、彼女が指摘するように、それがキャバクラ嬢には難しい。何故ならば、E2-199「恋愛依存症の子が多い」

からである。それはつまり、「内的作業モデル」の欠損を抱えた女性が多く、本質的に「承認」に飢えており、本来はキャバクラ嬢こそが、男性客を「承認」して、癒しを提供しなければならないはずなのに、少し優しくされてしまうと、自分達の方が「承認」の喜びに嵌ってしまうのである。まさにミイラ取りがミイラになるのであるが、キャバクラ嬢を恋人にしたい男性というのも、やはり普通ではない。業として男性に媚を売る女性が好き、ということは、スティグマが貼られた女性を受け入れるということである。普通は周囲から反対されるために、付き合うことさえ、ハードルが高い。それが、全く反対されないのであれば、その男性もまた何らかのスティグマを負った「アンダークラス」である可能性が高い。E1 の場合は、「色管」をしたパートナーは実質ヤクザであり、それから救ってくれた後の夫は、在日中国人の黒社会の一員だった。そして、E2 の場合は、女癖が悪い遊び人である。2 人のシングルマザーの事例から分かるのは、夜の世界で出会って結婚しても、離婚するケースが非常に多いということである。それは概ね両方に問題がある。「ミロン臨床多軸目録境界性スケール」の数値を見ると、シングルマザーの 3 人（A13 も含む）の数値は、それぞれ A13 : 14 点、E1 : 7 点、E2 : 10 点となっており、病的水準を示す 10 点のカットオフポイントを 2 人が超えている。そして、E1 も傾向が強い。全体的に平均を出しても、この数値は 6 点を超えるのであるが、E2 が指摘したキャバクラ嬢の「恋愛依存症」は、概ねこの BPD の傾向によるものと思われる。強い対人依存と情緒の不安定性を示すこのパーソナリティ障害は、水商売や性風俗の世界に集まりやすい。何故ならば、そこで確実に依存できる男性を捕まえられるからだ。また、BPD は性的逸脱を含む自傷行為が診断基準に入っているように、過去のトラウマ体験等からとにかく嗜癖を持ちやすい。そして、水商売の中には、お酒と性という二つの大きな嗜癖が存在する。これが、水商売に BPD が惹かれる所以である。そして、結婚して離婚し易いのは、ICD-10 では「情緒不安定性パーソナリティ障害」と言われるように、BPD の女性は極めて情緒が不安定であるからだ。女性側の不安定な情緒は、パートナーからの DV を招きやすい。従って、E2 が指摘するように、嗜癖としての酒と性から、男女関係に発展し、「デキちゃった結婚。離婚。みたいな。」状況が往々にして起きるのである。

第 3 項 4 人の高学歴風俗嬢の物語（元 AV・元キャバクラ・高級デリヘル・低級デリヘル・パパ活等）

（1）高学歴風俗嬢の存在というものは、以前から指摘されている。かつては、性風俗産業に従事する女性達は低学歴で、家庭環境が悪く、非行の延長上でこの世界に入る、という一つの先入観が存在していたが、今は必ずしもそれは正しくない。無論、典型例としてそのようなライフコースは現在も健在であり、今回のインフォーマントの女性達も概ね主流はそのような事例である。だが、水商売だけでなく、性風俗産業で働く女性の中にも東電 OL のような高学歴の女性が一定数存在しており、彼女達が何故、どのような理由でこの世界に入ったかを調べることは、典型例との比較として価値があると思われるので、敢えて一つのサブカテゴリを学歴だけを基準にして作成した。従って、ここで検討する女性達の職種はバラバラであるが、キャバクラからソープランド、AV 女優まで一通り揃っている。

最初に検討するのは、2人の「変人」系である。最初の1人は日本の最高学府を卒業しながらも、AV女優や様々な性風俗産業に関わっている女性である。両親共に社会的に高い評価を持った裕福な家庭に育ち、何不自由なく暮らしているにもかかわらず、心の底から満たされない。人生のかなり早い時期に「実存的空虚」の状況に陥り、18歳を待って直ぐにキャバクラデビューを飾るのであるが、彼女は既に高校生の時からブルセラショップに入り浸り、紆余曲折を経て、今はフリーランスとして様々な活動をしている。その波瀾万丈の人生の軌跡を以下に検討する。

E3-4「お金も欲しかったし、それは何ていうんだろう,, , 現実的にはすごくお金に困っている家ではなかった。ただ一、あほみたいなことに使えるお金が欲しかった。」というナラティブからも分かる通り、彼女は全くお金に困っていない。その意味では、今回のインフォーマントでは初めての「享楽型」に近い女性である。A~D群の女性の中に、このようなお金以上のものを求めて働いている者はいなかった。確かに、A1やB8、C1のように、途中からお金以上のものに価値を置くようになり、天職に目覚め、そこで自己実現している女性はいたが、それ以外はほぼお金が第一義的な目的であり、「承認」は後から付いてきた、というケースが多かった。また、もう一つのパターンとして、お金が目的と言いながらも、明らかに構ってもらいたい、「承認」してもらいたい、という気持ちが並行して存在し、第5章でZ1が指摘するように、お金は口実で、実際は承認欲求の充足が主目的という存在もいた。彼女達は主としてAV産業やキャバクラなど、周囲からちやほやされることが仕事に織り込まれている職種を選ぶ傾向があった。そして、このE3も、系統としては後者に属するが、やはりE3が特殊なのは、お金よりも「承認」が先に出ていることである。彼女には、一見すると、一流高校、一流大学、一流大学院と順風満帆な人生の軌跡しか伺えないにもかかわらず、彼女の非行は、既に高校生の時から始まっている。つまり、彼女には、その頃から既に何らかの「承認」が必要な理由が発生しているのである。

E3-12「見られることも快感だし、その結構20人くらい女の子がいて、自分が選ばれるっていうのがまず、指名みたいな感じじゃないですか。」というナラティブから、「選ばれし者の恍惚」が伝わってくる（※E-3-①参照）。そして、そこには他の女性達にあった、「不安」が無い。多くの女性達が、ヴェルレーヌの詩句に謳われた「選ばれてあることの恍惚と不安の二つながら」を感じていたが、彼女には不安はないのである。単に楽天的、能天気と言ってしまうとそれでは済むのかもしれないが、では何故、これ程恵まれた環境で、そもそもブルセラショップに行ったり、キャバクラに行ったりして、「承認」されたいのかが分からない。通常は、既に十分な「承認」が存在するはずだからである。想定されるのは、やはり自己愛の傷付きである。一見、恵まれた家庭のお嬢様にしか見えない彼女は、何らかの形で自己愛が傷付いている。その本源的ナルシズムを回復させるための手段が、彼女にとっては性を売ることなのであろう。事実、その世界が彼女にとって居心地の良い場所であったことは間違い無い。E3-118「居場所ですね、うん。」と、彼女は性風俗の世界が自分にとって居場所であったことを素直に認める（※E-3-②参照）。逆に言えば、彼女は家庭や学校という別の居場所が、性風俗産業よりも居心地が悪いのである。

堅苦しい家族、堅苦しい学校、どこにいても、彼女にはエリートとしての過剰な期待がかけられ、それに相応しい振舞いが求められる。だがそれは、本当に彼女が望むものでは無いのである。そしてまた、彼女はそのエリートコースで本当のトップを極めている訳では無い。両親の期待に応じて彼らが望む学校には入った、それなりに自分自身のプライドも満たされた、だが、何故か完全には満たされない、という虚無的な心理の背景には、やはりコンプレックスがある。3-119「その中間の何だろうな、極めてはない、どちらの世界でもトップは取れない、けど良い所くらいまではいく、多少くさくさした気持ちを持ってる、女子、っていう感じですね。」と、彼女はブルセラショップに集まる女性達の特徴を挙げているが、勿論これには彼女自身も含まれる。彼女の父は医師であり、最近事故で亡くなった母も有資格の専門職である。理想的な親として、彼らはまさに非の打ちどころがないのだ。偉大な両親に対して、せめて反抗することができれば、まだ彼女の実存的フラストレーションも収まるのかもしれないが、寧ろ彼女の場合は母子密着が強い。母親は浮気性で常日頃から派手に夜の街を飲み歩く父ではなく、娘を傍に置き、話し相手にして支配していた。彼女はそれを支配とは思っていないが、明らかに母の影響は強く、E3の中には「インナーマザー」がいる。そして、それは彼女の行動に大きな影響を与えるのである。

斎藤学（2000：120）は、『インナーマザーは支配する 侵入する「お母さん」は危ない』の中で、「プラケーター」（慰め役の子）という概念を紹介している。これは、アメリカの心理セラピストでアダルトチルドレン（AC）研究の第一人者であるクリッツバーグのACの分類の一つである。「プラケーター」は、何時も暗い顔をして愚痴をもらしている母親の傍に寄り添い、それを聞いて慰めてあげるのが仕事だ。小さなカウンセラーとなって、家族や母親に優しい言葉をかける。E3が無自覚にやってきたことは、まさにこれなのである。

E3は、趣味としてブログを書いている。露悪的で社会に対して斜に構えた彼女のブログの内容に対しては、称賛よりも否定的な書き込みが多くなされる。何故ならば、そこに誰の目にも明らかなE3の過剰なまでの自己愛が滲み出ているからだ。そしてそれは、明らかに彼女の母親を内面化した自己愛なのである。特に彼女の亡き母との対話を綴ったものでは、美化され、ある意味神格化された母親像が徹底的に描かれる。まるで、詩人であり、哲学者であり、教育者でもあるかのような完全無欠の母親像が描かれており、それにちょっとだけ反抗するE3の姿が描かれているのであるが、そこに浮かび上がるのは歪な支配なのである。そして、今なお亡くなった母は彼女に「インナーマザー」として憑りついている。彼女が母親を愛しているのは疑いようがない。だからこそ、「インナーマザー」は怖いのである。いっそのこと、虐待をしてくれた方が憎めるし、捨てることもできる。だが、親の善意による支配は、子供の側からは拒否できない。そこにはBatesonのダブル・バインドが発生する。大好きな母親に従っても生きづらいし、反抗すれば罪悪感を覚える。従って、E3ができることは、ささいな反抗の他は、防衛機制の「摂取（Introjection）」しかないのである。離れられない以上、母親の価値観を取り入れて、一体のものとして生きるしかない。だが、その結果、自分というものが致命的に損なわれる。母と一緒にいることで家庭において失ってしまう、その自分自身を取

り戻す営みが、彼女にとっては性風俗産業で働くことだったのではないだろうか。そしてそれは、ささやかな反抗でもある。彼女の父は大学病院でも責任ある立場の医師であるが、女性関係が派手で母親はそれを不満に思い、父を取り巻くホステスやキャバクラ嬢を苦々しく思っていた。E3 が最初に就いた性風俗の仕事は、キャバクラ嬢である。彼女は無意識的に、母親の支配に対して、母親が最も嫌がる形で反抗したのである。従って、彼女にとって、キャバクラ嬢になることは、母親から心理的に分離する成長の過程でもあったのだ。

E3-26「なんか家出みたいな感じで最初家出たんで、自分で全部、仕送りとかもなかったんで。(中略)あとなんか当時の、当時スカウトマンとかホストとかと遊んでたんで。そうすると夜の業界の価値観がインストールされるじゃないですか(笑)」, というナラティブから分かるのは、家族が息苦しく、E3 は夜の世界に自らの居場所を求めたこと、その結果恋人であるスカウトやホストの価値観が植え付けられ、最も自分の存在価値を実感することができる専属 AV 女優を受け入れたことである(※E-3-③参照)。つまり彼女は、性風俗の世界に入る前は、自分の価値が低いと思っていたのだ。実際、彼女の家系は、恐らく東大以外は等しく価値が無いような家柄である。東大でも優秀であることが当たり前であろう。いくら優秀であっても、E3 がこのような価値観の中で生きていくのはかなり苦しい。唯一、家系外からやってきた母だけが彼女の理解者になるのも当然であるが、その母にしても、かなりの上昇志向の持主であり、彼女に対して無償の愛を注いでいたのかは分からない。往々にして、こうしたエリート一家に起こるのは、「頑張って、結果を出した貴方は素晴らしい」という形式のコミュニケーションである。裏を返せば、その期待に応えられない存在に向けられるであろう態度は、例えば口に出して言わなくても、「努力もせず、結果も出せない貴方は価値が無い」なのである。E3 は母を恐らく誰よりも愛している。その事実から、彼女の母が後者の言葉を口にしなかったのは間違いないだろう。事実、このような言葉を言われ続けた本項最後に分析する E6 に比べて、E3 の精神保健は遥かに良好だ。だが、言わなくても伝わるのが非言語コミュニケーションである。何も言われなくても、自分に価値がないと彼女は思ってしまうほどに、防衛機制で母の価値観を取り入れてしまっている。E3-30「だからあの一、AV 女優なんかでサイン会なんか人に来るとすごく自分に価値があるような気になれる」というナラティブは、本音であろうが、E3 が AV 女優にならなければ自分の価値を実感できなかった家庭環境に驚愕するのである。そして、家族が居場所にならない時、女性にとって依存する場所は恋人しかない。E3 も完全にそうだった。

E3-51「流されるしー、それはもう故意的に流されるっていうか、あなた色に染まりたいっていうタイプで一」というナラティブから、母親の「摂取」によって失った自己は、恋愛において依存として現れることが理解される(※E-3-④参照)。E3 はスティグマの実感が乏しいので、深刻なレベルの「実存的貧困」ではないが、やはりその心性は近い。「実存的貧困」の中核が愛着障害による「内的作業モデル」の欠損だとすると、E3 はこの部分が、欠損というレベルではない。しかし、必ずしも健全でもない。従って、中途半端な

「^{ディザファイリエ}社会喪失者」の状態に彼女は陥っている。完全に希望が無い訳でもなく、完全にアイデンティティが無い訳でもなく、完全に自尊感情が低い訳でもなく、完全に未来が不明瞭な訳でもない。だが、どれも中途半端であることは間違いない。一つ確実なのは、彼女は母親がいた時代から既に「承認」に飢えているということである。つまり、いくら母親を愛したところで、彼女から与えられるのは無償の愛ではなかったのだろう。だから、彼女は E3-52「うん、なんか愛し愛され（笑）」な関係を男性に求めてしまう。愛の領域における「承認」の欠損が存在し、「内的作業モデル」に若干の欠損があり、その傷を埋めるために「重要な他者」を求めて男性を渡り歩くのであろうが、その傷はやはりなかなか家族以外では癒されない。その意味で、彼女の「インナーマザー」の支配は続いている。E3-58「そういうところありますね。なんか『幸福になることを拒否している』とうちの母親は言っていた（笑）」というナラティブは重要である。虐待サバイバーは、幸福になることを拒否する。幸福であることを怖いといい、時に罪悪感すら覚える。それは D12 がまさにそうであった。だが、それと同じ心性に E3 が陥っているということは、愛による過剰な支配は、時に虐待と同じ結果を生むということを意味する。

E3-64「（スティグマは）感じますね。何かの拍子に『実は元 AV 女優で』とか言うのも言ったら頭おかしくなっちゃった人もいて。」というナラティブから分かる通り、やはり、男性にとって恋人が AV 女優というのは、時に精神が崩壊するほどの衝撃だ（※E-3-⑤参照）。これが、AV 女優が最大のスティグマであるという証左であろう。「恵比寿マスカッツ」のように、アイドルのような存在ならばまた少し話は違うかもしれないが、無名の AV 女優としてかなりの本数に出ていました、ということを事後的に言われて、納得できる男性というのはなかなかいないのではないだろうか。しかし、男性がそれ程狼狽している一方、E3-72「そう。で、何て言うんだろうな、何か自己陶醉型なので、『私はこうやって過去に十字架背負った女』みたいな（笑）ポエマーになるっていうか（笑）」という風に笑いに変えられる彼女のスティグマの実感がないメンタルはある意味強かで逞しい。しかし、彼女が「普通」であることに耐えられないことは、E3-120「やっぱり思春期の女の子って自分がさ一所謂、『ザ・普通』みたいなことになかなか耐えられないじゃないですか。」にも表れており、自己愛の未成熟を感じさせる。もう彼女は思春期ではないのであるが、未だに思春期特有の自分は人と違う特別な人間だ、という思いを抱いて生きていることが分かるのである。

性風俗産業で働く女性達の多くがホストクラブに嵌ってしまう理由を尋ねると、E3 は楽しいからだと答える。そして、ホストや美容整形などは、お金によって中途半端に手に入るものだからこそ、逆に魅力的であり、多くの女性達がそこにのめり込んでしまうのだと指摘するのだ。E3-77「楽しいんじゃないですか、それはそれで。だから何かその、遊び方がたまたまそういう恋愛絡みで、売り上げ絡みで、っていうものだったからそこに入るとその価値観に侵されて、あの一すごくそればかりになるっていう子は結構いますね。」、E3-79「今ホストクラブなかったら風俗嬢は半分以下になると思うんですけど。」という彼女は、ホストクラブの経営者と付き合っているため、ホストクラブに対しても否定的ではない（※E-3-⑥参照）。楽しい場所だということである。だが、それでも、E3-79 のように、ホストクラブが身の丈に合わない遊びであ

って、女性を風俗に沈める場所であることは認識している。無論、男性にとっての水商売も同じ破滅の危険性を秘めており、それはギャンブルや薬物も一緒である。だが、男性の場合は自殺や自己破産に辿り着く場所が、女性の場合は風俗なのである。どちらがいいのかは選べないし、正直どちらも選びたくない選択肢でしかないのであるが、昨今東京では若い女性の6人に1人が風俗嬢であるとも言われる。その半分（E4は約7割と指摘）がホストクラブのせいで風俗嬢になっているとすると、半ば救われない気持ちなる。

これまでも繰り返し、性風俗産業で働く女性達は多くが経済的に貧困であるか、金銭的には寧ろ稼いでいるのに浪費家で生計が破綻していることを指摘してきた。だが、逆に言えば一定数は、経済的には困窮せずに風俗嬢になっている。その場合、女性達が働く意味は、お金ではないであろう。それは、E3にも言えることである。彼女が性風俗産業で働く理由は、明らかに金銭的な目的が第一義ではない。E3-123「存在自体にお金が払われるっていう、このある意味行動よりも自分自身が、価値になってるっていうことを味わえるもしくは実践出来るっていう所だなあとは思いますね。何か仕事して、仕事出来るとかっていう方が社会的には奨励されてるけど、自分自身、いるだけで価値があるってすごいじゃないですか。」というナラティブは、非常に重要な指摘である（※E-3-⑦参照）。存在自体にお金が払われる、そして、居るだけで価値がある、という状況は、無償の愛を受けているに近い。否、無償の愛にはお金が発生しないので、ある意味それ以上である。女性がAVに出演する理由にお金を挙げるのは単なる口実で、実際の動機は承認欲求だ、とZ1がトライアングレーション部分で喝破するのであるが、やはり同じことをE3も指摘する。お金もそんなに稼げない、でも、芸能人しか味わえない経験ができる、これこそが性風俗、とりわけAV女優として戦ってきた彼女の本音であろう。スキルでも容姿でも能力でもやる気でもなく、存在に価値がある業界、これは、スティグマさえ乗り越えれば、性風俗は全ての女性にとって居場所になる可能性を秘めているということである。

次に検討するのも、E3以上の高学歴で、高校も大学も偏差値が75を超える超一流高校・大学のエリート女子大生である。地方出身であるにもかかわらず、高校から東京の超一流進学高校を受験して合格する優秀さは、彼女が自閉スペクトラム症（ASD）によって、「直観像素質」に近い異常な記憶能力を持っていることにも由来する。彼女は精神医学的にはアセクシャルで、性的な欲求が全くない。そのような女性が、何故スティグマを背負って性風俗の世界で働いているのかを以下に検討していきたい。

E4-16「（闇金から）借りましたね。50万くらい。」というのが、E4が風俗に入らざるを得なかった理由である（※E-3-⑧参照）。彼女は天才に近い知能指数を持っている。その彼女が、金銭的に追い詰められれば、未成年である以上、闇金に頼らざるを得ない。そして、その結果、2年近く、風俗をしなければならなくなつたのである。だが、彼女は闇金のローン返済が終わった今もなお、風俗の仕事を続けているのである。それは単にお金が稼げるだけでなく、そこで働くこと自体がおもしろくなってしまったからだという。だが、無論最初から風俗の仕事が楽しかった訳ではない。E4も最初は、やりがいなど全く感じていなかった。

E4-24「だからもう、1人いくらっていう値段でしか人がどんどん見れなくなってきた、でもそうすると

同時に目合わせて人と喋れなくなりだして、イラついて、『こっち見んなよ』って思うようになったりして。」
というのは、明らかに客の「物象化」である（※E-3-⑨参照）。彼女は客を人間として扱わないことで、辛い借金返済の時期を乗り切ったのである。だが、返済が終わった後、気持ちが変わっている。ある客との出会い以降、仕事としてデリヘルに向き合えるようになり、今では自分が楽しむことが客の喜びに繋がるのだと気付いたのだという。これは、のちに比較するが、AKB48 グループの OG が語っていたことと全く同じである。対人サービス業においては、自分が楽しまずに人を楽しませることは絶対にできない。それに彼女は気付いたのである。

E4 も E3 同様に単に高学歴だけでなく、お嬢様と言っても良い家柄なのであるが、それを意外だと指摘すると、彼女は、E4-233「あのね、風俗嬢って結構多いですよ、実家金持ちが。」と語る。彼女曰く、E4-235「お金のある環境に慣れてるから。で、例えば、お金持ちって、もともとのお金持ちって、お金ある環境に慣れてるからお金使っても使ってもなくならないってどっかで思ってるんですよ。だからホストで使っちゃって無くなって困ったどうしよう、みたいな、お金ないのは耐えられないからって風俗に入る。」というナラティブは、非常に的を射ている（※E-3-⑩参照）。

E 群の高学歴女性は、全員実家が富裕層なのである。無論、首都圏で、高学歴を手に入れるためには、塾から学費に至るまで全て多額の資金がかかるため、実家が富裕層でなければ、子弟が高学歴を手に入れるということは難しい。そして、その富裕層のマインドは、ホストクラブで悪い意味で利用されてしまうのだ。彼女が言う通り、お金持ちはお金が無い状態に耐えられない。父母世代のように、最初は経済的に貧困だった、というのであれば別だが、若い女性達がお金持ちであるということは、既にその前の世代以前にその家系は富裕層になっているということである。従って、彼女達は子供の頃からお金に困っていない。そのような女性達がいざ人生で初めて親の小遣いではどうにもならないような借金をホストクラブで作ってしまった時、取るべき選択肢は、風俗でお金を作ろう、なのである。親に泣きついて払ってもらって二度と行かない、という選択肢ではなくて、とりあえず、自分で稼ごうなのである。無論、親に隠して働き自分で完済するということは、その後も継続してホストクラブに通いたいからである。かくして、高学歴の「信者」ができてあがっていくのだ。2012 年に、ホストクラブに払うお金のために診療報酬を自治体から騙し取った女医が詐欺で逮捕されたが、ホストクラブに対する高額な「掛け縛り」を返済するには、極端な話、体を売るか犯罪をするかの二者択一しかなくなってしまう。以前から、風俗嬢になる理由としては、経済的な貧困がそもその原因である言われ続けているが、その一方で、本項で取り上げるような高学歴の風俗嬢が増えていることも間違いない。その理由の一つとして、やはりホストクラブの存在を挙げてもいいだろう。そして、そこに女性が通うのは勿論、ポストモダン社会の「実存的不安」に耐えられないからだ。「実存的空虚」或いは「実存的貧困」状態になっていけば、更にホストクラブの「承認」の引力から逃れることは難しいのかもしれない。その状況を、E4 は冷静に分析している。E4-264「だいたいホストにハマる子って、なんでかって言ったら自分の欲とか自分の、あのなんていうんだろ、いいイメージが頭に湧かないからじゃないですか」

というナラティブは、上手く言語化されていないが（※E-3-⑪参照）、恐らくここで E4 が言いたいことは、自己肯定感が低いので、自分が将来何かで成功するイメージを描くことができない、ということであろう。より端的に言えば、未来に希望が持てないということだ。従って、その弱さを誰かに補ってもらいたくて、ホストクラブに通い、ホストに依存してしまうのである。実は、E4 も心理尺度の結果は意外なほどに自己肯定感が低い。それは、ASD によって人と感覚が大きく違い過ぎて生きづらいということが挙げられるが、それでも彼女は絶対にホストクラブにはいかないのだ。理由はシンプルで、性欲もないし、ホストの顔立ちが好みでもない、という彼女の障害特性のせいなのである。発達障害でホストに依存するケースを多々見てきたが、その逆のパターンもあるのだ。だが、彼女くらい自己肯定感が低ければ、恐らく彼女がその障害特性を持たないならば、ホストクラブに嵌っていても全くおかしくない。実際、彼女も自分の良い将来を描けていないからである。

将来のキャリアに関しての質問に対して、E4-275「わたし何でもいいですよ。」と答える E4 のナラティブは意外であった（※E-3-⑫参照）。彼女は人も羨むエリートである。東電 OL と比較しても全く遜色がない学歴であり、恐らく大学の成績等もずば抜けている。無論それは、彼女が ASD で、「直観像素質」を持っており、人並外れた記憶力があるからなのだが、それはメリトクラシー型能力として職業人としても最大限活用できるはずだ。だが、彼女は今目的を失っている。それは、闇金に嵌ったせいで、風俗嬢にならざるを得なくなり、そして結果的に裁判官という彼女の当初の夢が絶たれたからである。彼女の心理尺度の数字が低い理由も、これで理解できる。今彼女は、「実存的空虚」であり、徐々に「実存的貧困」に近付いているのだ。風俗で働くことも、やはり彼女の「自傷的存在証明」なのである。そして、精神的に病むと分かっている風俗の仕事を、自尊心が低い状態で続けているのだ。周りの風俗嬢達を観察し、E4 は風俗嬢が病む理由をかなり冷静に分析している。

E4-273「(病む理由は) お金稼げないからです。やってることに対してお金の割合が悪いから。で、お金に困ると人って、どうしよう、えっと、例えば、えーっと、なんてったって、ホストの売掛の入金日って、こう、月の頭らしいんですよ。先月使ったやつ、例えば今月使ったら 12 月の頭に、それまでに、こう期限せまってるのに稼げないからもう、病むんですよ。」という E4 のナラティブは、D2 の言葉を思い出させる（※E-3-⑬参照）。D2 は、D2-349「辛いよ。超辛い。」D2-350「カケに追われてるとか、ホストの。稼げるかな、みたいな。それが一番辛い。」と呻くように語っていた。まさに D2 の置かれた状況は、E4 の指摘の通りである。誰だって、大きな借金の返済日が迫ってきたら辛いだろう。それに合わせて仕事をしなければならないが、風俗は客が付くかどうかは運次第の部分もある。サービスを頑張ったところでリピートには繋がるが、今今の給料が上がるわけではない。その結果、追い込まれた風俗嬢は目の前のお金が欲しくて、客からの本番強要に応じてしまうのだ。そして、それがまた別の外傷的なストレスになるという悪循環が、結局は多くの女性の精神を破綻させる。発達障害のせいで自尊感情も低く、メンタルもさほど強くはない E4 が、曲がりなりにも病まずに性風俗産業で長く働けており、借金をするどころか逆にお金を貯めてマンショ

ンまで買えてしまえた。その理由は、彼女がホストクラブに通わないことと、本番強要に応えないことの二点に尽きるかもしれない。非常に賢明な彼女は、女性を壊すものを冷静に理解し、そこから距離を置くことで自分を保っているのである。

だが、やはり、彼女は本質的な弱さを秘めている。女性としてのというよりも、人間としての「承認」に飢えている。この「承認」への飢えが、彼女を性風俗産業に留め置いているのであろう。E4-305「ううん。みんなからちやほやされたい。」というナラティブは、A10とそれと全く同じだ（※E-3-⑭参照）。この言葉と言う女性は基本的に、過去に「承認」を欠いてきた時間が長いはずだ。E4はエリートなのであるが、今通っている大学が楽しいという話をしなかった。恐らく、E4にとって、そこは居場所ではないのであろう。E3は、ブルセラにくる子は、エリートであっても中途半端でくさくさしてる子、と特徴を述べていたが、実はこれはオウム真理教に嵌ったエリートにも共通することである。彼らは間違いなくエリートであった。だが、その道のトップクラスではなかった。上昇志向が強い人間ほど、自分が望んだ場所に居ない現実には耐えられない。だから、「承認」を求めて何かに依存するのであるが、彼女は少なくとも本物のエリートである。

「直観像素質」を持つE4は、恐らく司法試験も簡単に合格するであろう。だが、今彼女が求めているのは、社会にとって価値ある何かをなすことではなく、ただ皆からちやほやされたいだけなのである。このような原初的な承認欲求を未だに抱き続けているということは、学歴や学校での成績は彼女の自尊感情を完全に満たすものではなく、実存的な全肯定が彼女の人生に欠けていたということを意味する。「お金はあるのか」という自分の質問に、「はい」と自信満々に答えているように、彼女は都内にマンションを買うことができる大学生である。最大で月に380万円を稼ぎ出す。そんな彼女が、原初的な承認欲求に囚われているという闇は深い。彼女の「内的作業モデル」に、何らかの欠損を疑うレベルである。もし、それ以外にも「承認」に対する「飢え」の理由が存在するならば、それは社会的排除のスティグマに起因するであろう。

E4-340「わたしも、二面性があるのかわかんないですけど、引きますもん。やってる子。街とか見ると、わたしわかるんですよ、あ、この子ソープだ、この子ホテルだ、この子デリヘルだってわかるんですけど、よくやるなあと思う、まあ自分もだけどな、って思うので」というナラティブに、彼女のかなり強いスティグマの内面化が伺える（※E-3-⑮参照）。二面性があるかもしれない、というのが、彼女は割り切りができないのだ。だが、恐らくそれが普通の感覚である。どんなに風俗をやる理由を防衛機制で正当化しようと試みても、上手くいくはずがない。そこには、社会から容赦なくぶつけられる偏見と差別があり、それを普通の人間は必ず内面化して自分を責めて、貶める。まして、今の彼女には借金返済という大義名分すらなくなった。惰性で風俗嬢を続けている彼女は優秀でまじめであるからこそ、嘘を吐いて自分を騙せない。まして、彼女はASDである。より一層、自分に嘘など吐けないだろう。彼女のインタビューを通して感じたのが、東電OLとは、このような存在だったのではないだろうか、ということである。同じ高学歴でも、E3は、スーパーエリートではない。彼女はくさくさしている、と自分を表現したように、内心同じ最高学府の出身であっても、祖父や父に自分が及んでいないのを知っている。そして、学歴で劣る母にすら、知識や教養で叶わな

いことを思い知らされている。自分が半端なエリートであるという自覚がある。だが、E4 はそうではない。少なくとも学歴と学力においては正真正銘のスーパーエリートなのだ。卑屈になることなど全くないはずなのに、彼女は異常に自己評価が低い。「私結構ネガティブなんで」とインタビュー中に話していたのも印象的であった。その低い自尊感情の理由の一つは明らかにこのスティグマであると言っていいだろう。もしかしたらその原因は、余り多く語られることが無かった家庭環境にもあるのかもしれない。そもそも、地方出身でありながら、高校から親元を離れてたった1人で東京の超一流の私立高校に通うという選択肢は普通では無い。合格するのも普通でないが、家を出るのも普通でない。その理由が、親と一緒にいたくない、であるならば、彼女の「内的作業モデル」はやはり欠損している可能性がある。もし、彼女がこのまま一流企業に就職したとして、第二の東電 OL になりはしないか、という危惧を抱かずにはいられない脆さが E4 には間違いなく存在するのである。

(2) 高学歴風俗嬢の最後に、「無気力 (アパシー)」系とでもいうべき事例を検討する。2 人共極めてパワーレスである。特に、最後に検討する E6 の絶望感は尋常ではないが、そこまでの深刻さがないまでも、E5 のアパシーも十分に異常である。一流高校から一流大学に進学し、本来は就職活動に力を入れるべき時期に、彼女達はパパ活やソープランドに力を入れている。その現実感の無さとアパシーが一体どこから来るのかを、最初の事例から検討していきたい。

これまで再三指摘してきた機能不全家族の桎梏は、やはり高学歴な女性達でも逃れられない。E5-72「家族ごっこって感じですね。」というドライな言葉が示す様に、E5 は家族と表面上の付き合いしかしていないのだ。血が繋がっているのは母親だけであり、連れ子同士の結婚だったため、今同居している父方の実家は極めて居心地が悪いのだ (※E-3-⑩参照)。また、3 回離婚・結婚を繰り返している母親が普通ではないので、母親に対する愛憎もあり、誰とも本当に心が通じ合っている気がしないという。当然、「重要な他者」を持たない E5 は「内的作業モデル」に大きな欠損を抱えている。これが、今現在のアパシーの最大の原因であると思われる。彼女の家族への幻滅は深い。女癖が悪い義理の父親と同じように身持ちが悪い母親が日々繰り返す様々な痴情の縛れには、心の底から辟易しているのだ。

E5-84「母が愚痴をこぼすようになったって感じなんで。中学生くらいかなあ。」というナラティブから、彼女もまた、E3 と同じ、「プラケーター」であることが分かる。ただ、E3 と違うのは、母親を尊敬せず、寧ろ軽蔑している点である。E3 の場合は、母親は専門職であり、大学で講師もしているキャリアウーマンであった。父親の女癖が悪いのは一緒であるが、しっかりと働いている母親は被害者であるので、感情移入もしやすいであろう。だが、E5 の母親は、専業主婦で、しかも 4 回目の結婚であり、E5 が尊敬できるものが何もないのだ。寧ろ、彼女は母親に様々な点で毎日の様に振り回されているだけなのだ。従って、母親の愚痴を聞くのは、かなり辛い作業であろう。そして、当然、父親に対しても良い感情は抱かない。お金にもだらしなく、女にもだらしなく、尊敬すべき点がない。E5-90「は一、しょうもな、って。」という言葉には

深い軽蔑が表れている。E5 が暮らす家は、完全な機能不全家族なのだ。少し長くなるが、彼女の家族が完全に崩壊していることを語る箇所を下記に引用する。

原 田 83：なるほどね。今さっきでも家族ごっこって言いましたけど、そんなに好きで結婚を勧めたくらいのお父さんなのにないつから好きじゃなくなっちゃったのかな、そんなに。

E5－83：別に好きじゃないわけじゃないです、今も。もしかしたら、母親より人としては間違っていないのかもしれない。ただ、家にお金をあまり入れずに、カードをリボ払いとかして、借金を膨らませて、後先のことを考えずに、ま、キャバクラだとかクラブだとかそういう所にいる女の人に払っちゃったりとか、してるのがどうなの？って思うだけで。

原 田 84：それは何歳くらいで気づきました？お父さんが女性にだらしないっていうのは。

E5－84：母が愚痴をこぼすようになったって感じなんで。中学生くらいかなあ。

原 田 85：中学生くらい。お母さんが、聞いて、みたいな感じ。

E5－85：うんなんか、電話かけたらすごいがやがやしたところにいる、ポッケに携帯を入れてて、切ったつもりが出ちゃった、って感じで、なんかビンゴがどうのこうのみたいな話してたらしくて、母が『聞こえてますよー、聞こえてますよー』って言って、聞こえてないんですよ、父親は。そのまま切って、『ビンゴしてたの？』って感じで帰ってきてから煽ったりとかしてたんです、なんか。

原 田 86：そのあたりから。だと、お母さんがやっぱりそうやって、外の女性にお金使ってるっていうのを気付いて相当傷ついたわけですね。

E5－86：ま、きっと傷ついたんでしょうね。強がってますけど。

原 田 87：そこでケンカにはならないんですか？お父さんとお母さん。

E5－87：ならないですね。言わないです母が。言えばいいのになってわたしは思うんですけど。

原 田 88：行かないでっていうのも言えない。

E5－88：うん。だから母が悪いと思うんですよ。わたしは。

原 田 89：なんで？

E5－89：言えばいいじゃないですか。嫌なら。そんな、子供に言うくらいなら自分たちで解決しろよって思うんですよ。

原 田 90：それ聞いた時、初めて聞いた時、嫌な感じしました？自分のお父さんがたぶん E5 さんよりもちょっと上くらいの人、女性に鼻の下伸ばしてるって。

E5－90：は一、しょうもな、って。

原 田 91：しょうもないって。男性に対して幻滅したりしなかったですか？

E5－91：別にしなかったですね。

原田 92: でもそうやって、お母さんが、ま、許したわけですよね。だから結果的にそれがエスカレートして。

E5-92: 許したっていうか、根に持ちながら何も言わないんですよ。

原田 93: だと家の中が結構不穏な空気ですか？

E5-93: 父親はバカなんで気付いてない。母親はもう父親に対して結構冷たい態度を取ったりとか、冷たく当たったり、言葉に棘があったりするんですけど、父親は全く気付いてないし、母親から愚痴を聞くんで、弟とわたしも父親に対して嫌な気持ちとか抱いたりするんですけど、んー、どっちもどっちじゃないかなって。

E5 同様、お金に困っている E5 の母親も、SNS のサイトを使ってパパ活を行っているのであるが、E5 はそれを軽蔑している。そして、母親がパパ活で売春を行っていたこと、その後 HIV に罹患したと勘違いして一緒に産婦人科に連れていかれたことなどに大きなショックを受けたと語る。E5-111 「かなりショックで、彼氏と仲良い友達に泣きながら話しましたね。1 人じゃ抱えきれなかった。」という E5 のナラティブから、自分の身内が売春しているという事実、しかもそれが血のつながった母親であるという事実がいかに娘にとって悪影響を与えるかが良く分かる(※E-3-⑩参照)。何度も繰り返される母親の性的逸脱は、明らかに心理的な虐待であり、E5 のアパシーの最大の原因は、この母親なのである。そして、売春までする母親と同じではないが、やはり幾ら食事だけという縛りをつけても、パパ活という母が行っていることと同じことをしている自分にも、内心スティグマを感じているのではないだろうか。機能不全家族に育った女性が、何らかの「承認」を求める行動を取るのには仕方が無いことである。彼女にとってのパパ活は、自分の女性としての価値を、体を一切売ることなく確認する作業なのである。だが、幾らやましいことがない、と自己を正当化しても、その言葉を家族は誰も信じないであろう。E5 はパパ活を繰り返しながらも彼女の中では譲れない一線を守り続けているのだが、そこにはそれを超えている母親に対する当てつけが感じられる。

E5-140 「家がそんななので、一緒にいたら頭おかしくなっちゃうので、家を出るために貯めたいとか、あとは、家庭内に泥棒がいて、おじいちゃんと同居してるんですけど、おじいちゃんが結構お金盗んだりとか、おじいちゃんが盗むから、おじいちゃんのせいにすればいいやみたいな感覚で弟と父親がちょいちょい盗んだりとかするんで。」、E5-159 「(倫理観がある人が家族の中に) いないですよ。」というナラティブには、異常な家族の中で、ただ 1 人自分だけがまともであるという響きがあるが、その彼女にしてもパパ活をしているのである(※E-3-⑩参照)。そして、彼女の恋人も、ママ活をしている。結局のところ、彼女も含めて、彼女の周囲には誰 1 人まともな倫理観を持った人がいないのである。異常な環境に育つと、自分自身の価値観も異常になり、そしてパートナーまで異常な人を選ぶのであるが、これは決して自己責任ではない。第一義的には心理的な虐待を行っている母親に責任がある。また、育児放棄に近い父親にも当然責任がある。彼女は犠牲者なのである。まだ、性に対する道德観があって、売春をしないだけでも E5 は立派であるとい

うべきだ。このような環境に育ち、一流高校から一流大学に入学したことも、本人の尋常ではない努力を物語っている。彼女は、全国模試で、ある文系科目では1位を取ったこともあるのだが、その彼女には何故か学歴のコンプレックスがある。

E5 がパワーレスな状態に陥っているのは、機能不全家族に暮らしているからに加えて、E5-167「学歴はかなりコンプレックスですね。」というナラティブが示すように、今の大学が自分の希望の大学ではない、そして、現役時代に二度希望する大学に落ちた、という挫折感がある（※E-3-②参照）。だが、正直このレベルになると、どの大学でも大差はないはずなのだ。事実、偏差値でいえば、今の大学の方が高いくらいなのである。そして、彼女も偏差値や教育内容に特段のこだわりがある訳ではなく、大学はただ校舎の外観で選んでいるのだ。つまり、彼女は単に受験に失敗した、という挫折感に苦しんでいるのである。何かを学べなかった、或いは大学でやりたかったことができなくなった、目標や夢を変更せざるをえなくなった、ということは一切今の彼女の大学生活においてない。寧ろ、人によっては、今の大学の方が遥かに上だ、という者がいても何もおかしくない。だが、彼女の世界では、ただ、受験に二度落ちた、というその事実だけが重要であり、彼女の人生の桎梏となるトラウマなのである。E5-190「めんどくさいからです。」という言葉が、彼女のアパシーを象徴しているが、彼女は非常にメリトクラシー型能力が高いにもかかわらず、持続して努力を継続できない。社会人として働ける気もしないのである。一応、難関国家資格に挑戦して自営業をする、というとりあえずの目的はあるのだが、それが本気かどうかは分からない。可能かどうか分からない。ただ、間違いないのは、将来の夢は「専業主婦」ということである。だが、これは一步間違えれば、母親と同じことになる。自分の暮らしを仮に父親のような男性に委ねた時、彼女はどうするのであろうか。そして、ママ活をしている男性をパートナーに選んでいる段階で、母親と同じような人生が E5 に待っているのではないかと既に想像されるのである。貧困や虐待の連鎖と同じで、機能不全家族の連鎖の根もまた深い。

(3) 本項の最後に、「実存的貧困」を本研究中最も分かり易い形で色濃く体现していた高学歴の女性事例を検討する。彼女には無論経済的な貧困状態など存在しない。だが、彼女は今まで検討してきた誰よりもパワーレスかもしれない。B4, C1, C3 などには、傍目から見ても壊れた家庭環境があり、異常なレベルの虐待があった。彼女達が AV 女優になったのは、そのきらびやかな世界に「救い」を求めた側面が強い。また、彼女達は極めて低学歴だった。地元の最底辺高校を中退するレベルである。だが、E6 は一見恵まれた家庭で育ち、一流と言える高学歴の大学生で、そして大手レコードメーカーのアイドルオーディションにも最終まで残った程の美貌を兼ね備えている。その彼女が、ここまでパワーレスな状態にあることから、人間にとって、経済的な困窮以上に耐え難い困窮が存在するということが明確に証明されよう。非常に重要な事例だと思われるので、長くなるのであるが、彼女のナラティブの中でも大切な部分はなるべくそのままの形で引用したい。

E6-11: まあ友達もやってたし、なんか大学生キャバクラっていうのが流行ってて、それで始めました。

原田 12: なるほどね。キャバクラを始める時って、少しく、抵抗とかって感じなかったですか？

E6-12: 初日は家帰って泣いたりしてました。

原田 13: 何が嫌だったの？

E6-13: 触られたり、なんか、上手く話せないから怒られたりするの。

原田 14: こう、例えば怖いとかって思わなかったですか？入る前に、なんか夜の世界怖いなみたいな。

E6-14: 怖いとは別に思わなかった。

原田 15: 思わなかったか。で、初日泣くくらい辛い思いしたんだけど、2年6か月続いたんですね。

E6-15: うん。

原田 16: 結局そこでがんばって働けたモチベーションって何かありますか？

E6-16: 友達と一緒にだったっていうのが大きいし、そこでみんな大学生なんで仲良くなって、なんかサークルみたいな感じで。なんか、話に行ってた感じで。

原田 17: キャバクラで働いて良かった点と悪かった点があるとすると、まず良かった点はどういうところがありますか？

E6-17: 良かったのは、まあ、人としゃべれるように、どんな人でもだいたいしゃべれるようになったところ。悪かったのは、金銭感覚、ですかね。

原田 18: 狂った？

E6-18: 狂った。

(中略)

原田 23: で、その時キャバクラやる前に普通のアルバイトは考えなかったんですか？

E6-23: その前は普通のバイトしてました。カフェで。大学の最初から。

原田 24: 最初から。キャバクラやったら普通のバイトには戻れなくなった？

E6-24: もう辞めちゃって、最初掛け持ちしてたんですけど、時給900円がばからしくなってきちゃって。

E6-16 のナラティブが示すのは、性風俗の世界にはやはり居場所としての機能があるということだ。彼女は、大学に入るまでの学校生活に良い思い出が無い。人間関係が難しく、いじめが横行する学校を自分の居場所だと思えなかったのだ。そして、実際今通っている大学すらも、居場所ではない。そのような状態で

始めた仕事も、最初は怒られたり辛いことが多かったりしたのであるが、彼女にとってはキャバクラは本当に楽しいサークルのような場所として機能したのである。だが、キャバクラで金銭感覚が狂ったことが、彼女の人生を更に狂わせていくのである。

原 田 35：(キャバクラから風俗の世界に) それは入ったきっかけって何かあるんですか？

E6－35：えーと、キャバクラで働いてて、大学3年生の夏くらいからホストクラブに行くようになって、なんか、1人秋ぐらいにハマっちゃった人がいて、で、そのころもなんか性感マッサージってメンズエステ、性感マッサージ,,,

原 田 36：回春マッサージとかいろいろ言うよね。

E6－36：そうですね。

原 田 37：回春マッサージとかメンズエステとか。

E6－37：それも周りでちらほらやってる子がいたんで、そっちの方が効率よく稼げるなと思って、で、ホストクラブも行きたかったし、始めたって感じです。

原 田 38：その、周りにいるやってた子っていうのは大学の子？それともキャバクラの子？

E6－38：大学の子です。

原 田 39：大学の子。正直一流大学なんだけど、そういう大学でも何の抵抗もない子が多いの？

E6－39：お金持ちと普通の子の差が激しい大学なんで、お金持ちの子はまったく働かないけど、それと一緒に遊ぶってなったらけっこうやってる子は多い。

原 田 40：けっこう見栄はってんだね、だとね。

E6－40：見栄はってるっていうかもう追いつかないからって。言ってる子も多いです。周りに(風俗)やってるって。

彼女の金銭感覚を狂わせたのはキャバクラだけではない。通っている大学も金銭感覚を狂わせるに十分である。そこは日本有数の富裕層が通うブルジョア大学であり、一般人が入学するとカルチャーショックを受けてしまう。無論、そこに子弟を送り込めるだけの教育には当然お金がかかる。小学校時代から塾産業にE6を送り込み、その学習を支える経済力がある家庭なのであるが、それでも恐らく、相対的にその大学では貧しい部類に入ってしまうのであろう。彼女がキャバクラに入ったのも、周りの富裕層の子弟と一緒に遊ぶためなのであるが、そのために好きでもない性風俗産業に頼らざるを得ない格差社会が大学に存在するというのは、大学教育のあり方が問われる問題でもある。彼女は、その大学に入学して初めて「相対的剥奪」の状態に置かれたのである。今までの自分の普通の価値観が否定され、自分は貧しいのではないか、という恥の感覚を抱いたのだ。これは責められるべきではない。だからこそ、貧困を絶対的な尺度で捉えるべきではないのである。そして、恥の感覚は普通以上に豊かな生活を送っている人間でもE6やその友人達のように抱

く。まして、同調圧力の強い 10 代であれば、それを未熟と言って切り捨てるのは酷な話である。

だが、学内生活で恥をかかないために始めたキャバクラでのお金稼ぎが、結果的に彼女の人生を完全に狂わせた。キャバクラでのストレスを発散するために、ホストクラブに通い始めてから、彼女はキャバクラの稼ぎでは到底生活が回らなくなってしまったのである。そして、それ以上に稼げる本格的な風俗産業に足を踏み入れたのであるが、その際、彼女を止めるべき学友は 1 人もいなかった。それどころか、彼女の周りでは、富裕層の子弟と遊ぶには、風俗をしなければ到底着いていけないという学友が寧ろたくさんいたのである。これも日本に格差社会が根付いた証左であろう。

原 田 48：今までで一番使ったのは？

E6－48：今までで一番使ったのは去年の 11 月、12 月で、1 日 150 万の日と、その前の月は半月で 80 なん万。

原 田 49：1 日 150 万、何の日だったの？

E6－49：なんか、突然持ってこられた日。

原 田 50：突然持ってこられた、「今日のお会計これなんだけど」って持ってこられたの？

E6－50：なんかその飾りボトルっていうのをポンって持ってこられて、シャンコー（※シャンパンコール）始まって、入れてないのに、「優勝」とか言われて。

原 田 51：飲みまくったの？

E6－51：飲まないやつです、それは。

原 田 52：ああ、そうなんだ。周りの男が勝手に飲んでるの？

E6－52：誰も何も飲まない。ただ置いとく。

原 田 53：置いとくだけで？

E6－53：だけで 100 万円。

原 田 54：100 万円。それおかしいって思わなかったの？

E6－54：え、これはさすがにちょっとなあと思って、でその数日後に殴られて、連絡とれなくなって、で今、弁護士通して払う払わないやってます。

これは悪質な、名もないホストクラブでの出来事ではない。日本でも三指に入る大手ホストクラブグループのナンバーワンホストの席で起きたことである。そして、そのホストは女性を殴る。所謂「オラオラ営業」というものだが、押しに弱い女性、DV から逃れられないタイプの女性には効果がある。一般的な DV 被害者と同じで、周りが何を言ってもその男性から離れなくなり、かつ男性も女性を常に放置し、お金だけは回収できるので効果的なのである。彼女は、「オラオラ営業」が苦手で、泣き寝入りするのも嫌な女性なので、弁護士を入れて双方が話し合いをしているところであるが、シャンパン 1 本が 100 万円というのが、歌舞伎

町のホストクラブの金銭感覚なのである。彼女は、今はそのホストから離れて、別の担当ホストがいる。だが、その担当ホストにも隠れて、しばしば他の店舗にも飲みに行っている。ホストクラブは永久指名制度なので、一度担当を決めたら店自体を変えない限り担当は絶対に変えられない。そして、担当に隠れて別の店に行くのも本来はご法度である。店ごと指名替えされる可能性があるからだ。

原田 65: でも、他の店にもちょくちょく行ってるのは NG なんじゃないの？

E6-65: そこは、「行かないで欲しい」って言ってたけど、なんか。

原田 66: 行っちゃうの？

E6-66: 行っちゃう。

原田 67: それはどうして？自分の意志？誘われて？

E6-67: 誘われたら行くし、自分の意志でも行くし。

原田 68: 新規開拓みたいな感じで行くの？

E6-68: 何て言えばいいんだろ、なんか行ってみたいっていう。その3番目の人も早かったから、行ったことない店もいっぱいあったし、行ってみたい店もいっぱいあったから。行っちゃう、そうですね。

原田 69: でもホストクラブって初回は安いけども2回目からは格段に高くなるでしょ？一気に。

E6-69: そうです。うん。

原田 70: そのお金を稼ぐためにけっこう風俗にどっぷり浸かってた感じ？だと。

E6-70: いや、風俗を始めたのは他にも理由があって。親からちょっと自立しないとこのままだとダメになるなって、うつ病の診断された時に思ってた、で、1人暮らしをするために始めた感じです。

E6-68「何て言えばいいんだろ、なんか行ってみたいっていう。その3番目の人も早かったから、行ったことない店もいっぱいあったし、行ってみたい店もいっぱいあったから。行っちゃう、そうですね。」というナラティブが示す通り、彼女はホストクラブの常識やルールに拘らない。それは、彼女が注意欠如・多動症（ADHD）だからである。我慢する、ということが、子供の頃から苦手であり、衝動を抑えられない。欲しいものは直ぐ買ってしまうし、何ごとに対しても飽きっぽい。それは、ホストに対してもそうなのである。そして、E6-70「いや、風俗を始めたのは他にも理由があって。親からちょっと自立しないとこのままだとダメになるなって、うつ病の診断された時に思ってた、で、1人暮らしをするために始めた感じです。」というナラティブが示すように、彼女の親は所謂「毒親」である。両親ともがそうなのであるが、特に母親は病的に彼女を支配しようとする。E3の母親も支配的な「インナーマザー」となって彼女の人生に翳を落としていたが、それはまだ過干渉というレベルであって、虐待のレベルではなかった。だからこそ、E3は母親を

心から尊敬もしていた。だが、E6 の場合は、完全に虐待というレベルである。そして、彼女は E3 同様に、生きづらさを抱えたアダルト・チルドレン (AC) なのである。ADHD からの二次障害でうつ病を発症した時、担当ホストから、このままでは壊れてしまうのではないかと助言されて、彼女は自立するためにキャバクラではなく風俗店で働くことにした。だが、これも鵜呑みにはできない。確かに担当は本当に彼女の体を慮ったのかもしれないが、恐らく一番恐れたことは、エースの彼女に倒れて貰っては困る、であろう。そして、自分が引っ越し費用を負担する訳でも無く、彼女に風俗で稼げ、というのである。無論その際、間にスカウトが入って、風俗店からはスカウトに、スカウトからは担当ホストに幾らかのキックバックがあったことも推察される。

原 田 72 : 最初の風俗ってデリヘル？

E6 - 72 : デリヘルです。

原 田 73 : で、やった時にキャバクラみたいに抵抗みたいなの感じた？

E6 - 73 : んー、なんかもう忙しすぎてなにがなんだかって感じで終わっちゃった、かな。ホント 3 日くらいしか最初働いてなかったから。3 日でこんなにお金ってもらえるんだあって正直に思いました。

原 田 74 : 正直思った。割良いなあと思った。

E6 - 74 : なんかすごいなあって思ったけど、なんかその目標、1 人暮らしの金額の目標のためとかだったら頑張れるけど、ずっとは無理だ、家賃とかを貯めるのは無理だと思っちゃって、1 人暮らしをそこでやめました。

原 田 75 : やめたの。で、今も実家から？

E6 - 75 : いや、それで、就活もしてたんですけど、就活期はホントにホストにも行ってなくて、で、就活を勝手に夏にやめて、全部落ちちゃったんで。そっからまたホストクラブに行くようになって、お金間に合わないし、で、結局やっぱ 1 人暮らしもしたいやって思って、また始めました。

原 田 76 : 就活全部落ちたの？

E6 - 76 : 全部落ちました。そんなに受けてない。

原 田 77 : 何社くらい？

E6 - 77 : 10 社くらいしか受けてない。

原 田 78 : それは今の、こう、学生のレベルでは少ない方なの？10 社って。

E6 - 78 : めちゃめちゃ少ないです。

原 田 79 : 普通の人は何社くらい受けるの？

E6 - 79 : 50 とか 100 とかじゃないですか。

原田 80：なんでやめちゃったの？10社で。

E6－80：なんかその、名の知れたところ以外、別に行きたくなかった。

原田 81：行きたくなかった。ちなみにどの辺落ちたの？

E6－81：証券会社です。

上記の一連のナラティブから理解されるのは、ADHD 故に頑張りが利かないということである。ADHD にとっては、ES を書くのは普通の人間よりも遥かに気疲れする。また、無味乾燥な面接の繰り返しも辛い。故に、直ぐに投げ出してしまうのである。だが、この行動の背景にあるのは ADHD ではない。これは、「実存的貧困」状態にある女性の「自傷的存在証明」なのである。そして、E6－80「なんかその、名の知れたところ以外、別に行きたくなかった。」というナラティブも彼女の自己愛が未熟なことから生じている感覚である。彼女は、圧迫面接で怒られたり、否定されたりすることに、耐えられないのである。何故ならば、「重要な他者」を欠いている彼女は、本源的ナルシシズムを持たず、自己愛性パーソナリティ障害（NPD）のように自我は肥大し、かつ繊細で攻撃的であり、他者の否定的評価に異常に過敏に反応してしまうからだ。従って、彼女は体のいい理由をつけて就職活動から逃げたのである。だが、それを責めるのも酷であろう。何故ならば、彼女がそのようなパワーレスな状態に置かれているのは、毒親による虐待が原因であるからだ。彼女もまた、虐待サバイバーなのである。

原田 83：なるほどね。で、来年はもう一回就活するの？

E6－83：いや、休学したんで就活はしない。

原田 84：しない。ただ身体を治すことに専念して、卒業してその後は？

E6－84：それはその時考える。

原田 85：その時考えるみたいな感じか。なるほどね。その、お母さんと仲良いんだよね？

E6－85：悪くはないです。

原田 86：悪くはない。でも、家に居たくなかったんでしょ？

E6－86：家に居たらダメになる。

原田 87：ダメになる。

E6－87：って感じ。

原田 88：なんでダメになるの？

E6－88：例えば、就活ってなったら、「絶対に有名企業に行かなきゃいけない」みたいなことを言ってきたりとかするし、全てそう。服でも「その服可愛くないからこの服じゃないとダメ」とか。

原田 89：それは E6 さんのすべてに対してお母さんが指示を出してくるわけ？

E6－89：全部否定から入る.

原 田 90：否定から入るんだ. でも褒めてはくれるんでしょ？最終的には.

E6－90：そんなに褒められた記憶ない.

原 田 91：褒められた記憶がない. だってせっかく頑張って良い大学に入ったのにこういうこと
って評価されないわけ？

E6－91：その大学については、まったく評価してなかったですね.

原 田 92：まったく評価してないの？

E6－92：最悪だって.

原 田 93：最悪だって言うの？随分と失礼というか罰が当たる言い方だね. でもここをバカにす
るっていったらあと上はもう、日本にほとんどないでしょ.

E6－93：そこがよかった.

原 田 94：そこがよかったのか. それはお母さんがそういう大学を出てるから？

E6－94：いや、お母さんぜんぜん、もっと、なんか地方の女子大です.

原 田 95：それお母さんのコンプレックスを押し付けられてるのかな.

E6－95：そう、ですかね. ていうかお兄ちゃんを、やっぱその〇〇ボーイとか××ボーイにし
たかったけどできなかったから、わたしにして欲しかった.

原 田 96：代わりにお前が〇〇か××に行けと.

E6－96：うんうん.

原 田 97：言われた？

E6－97：なんかちっちゃい時わたし頭が良かったんで、希望が見えたのかなって.

原 田 98：〇〇・××はみんな落ちたの？

E6－98：落ちましたね. 〇〇は、うん、落ちました. ××も落ちて.

原 田 99：じゃあそれにお母さんが、すごいがっかりしてしまったんだ.

E6－99：あんなにお金出したのに.

原 田 100：それは塾とかにもすごく行ったってこと？

E6－100：そうですね.

原 田 101：世間一般的に言えば◇◇は一流大学だし、就職活動でもぜんぜん強いと思うし、頑張
れば就職なんか絶対余裕でできたと思うけども、自分で E6 さん自体が◇◇を否定してるの？

E6－101：いや、別に大学は普通に、いいんじゃないかなって思うけど.

原 田 102：お母さんが褒めてくれないとダメなんだ？

E6－102：まあお母さんの的には F ランらしいから.

原 田 103：いやあ、F ランではなくてこれ A ランクな大学だよ.

E6-103 : そうかなあって.

原田 104 : それはお母さんの認識がずれてるよね. あまりにも田舎者過ぎてわからないってわけじゃないでしょ, だって.

E6-104 : わからないわけじゃないですけど.

原田 105 : なんか冷たすぎる気がするよね.

E6-105 : なんかその, 受験勉強の努力が足りなかったって言われた.

原田 106 : これは現役で入ったんだよね, でも.

E6-106 : 現役です. その, なんか最後の方ダレてたと思うし, 「努力足りなかったから落ちた」って言われて, 「だから F ランと変わらない」って.

子供に対して, E6-89「全部否定から入る.」親は, 自分が虐待している自覚が無いことが多い. 子供の悪いところを直してあげようという善意も時にあるために, 彼女も完全に母親のことを嫌いになれないのであろう. 一緒にいると, ダメになる, と思っていながらも, 仲は良い, というように, まるで DV カップルのような共依存の関係性ができあがってしまっている. だが, 母親というものは, 子供にとって最も身近な「重要な他者」なのである. その母親が, 全て否定から入ってくるのであれば, 子供の自尊心は毎回挫かれてしまう. 彼女は, 「拡張版ホープレスネス尺度」では, 対人領域, 達成領域ともに最悪の 20 点を, 「多次元自我同一性尺度」では 123 人中最低の合計点を, そして, 「自己肯定意識尺度」でも 123 人中最低点を記録した. 「生きがい感スケール」に関しても, 女子大生平均を 20 点下回り, 「ミロン臨床多軸目録境界性スケール」では, カットオフポイントを 4 点上回る 14 点を記録した. 彼女は本研究において 5 指に入るヴァルネラブルで, パワーレスな女性なのである. だが, 彼女の暮らし振りは当然「相対的貧困」には該当しない. E6-106「現役です. その, なんか最後の方ダレてたと思うし, 『努力足りなかったから落ちた』って言われて, 『だから F ランと変わらない』って.」という母親からの言葉は, 自分の娘が F ランクだと格付けしたに等しい. S ランクの大学に入る能力が彼女にあったと母親は信じたのであろうし, 事実可能性は十分にあったのだと思われる. だが, 彼女は ADHD を抱えた女性なのだ. 集中力が続かないのはダレたくてダレているのではない. 無論, 努力が足りないからでもない. 発達障害のハンディキャップを背負っても, 現役で A ランクの大学に入学したことこそ, 本来は手放しで褒めるべきあるにもかかわらず, 彼女の母親は, 彼女のそれまでの人生を全て一言で否定するのである. 母親にとっては, E6 は, 自らの夢の代理人であり, E6 が母親の代わりに彼女の人生の敗者復活戦を戦っていたのである. そこに, E6 の人生はない. Frankl が最も重要視する, 「意味への意思」は欠片も存在しないのである.

原田 108 : その, お母さん, でもお母さんのこと大好きなんだよね, たぶん.

E6-108 : わたしがたぶん一番好きなのはお母さんです.

(中略)

原田 113：親世代ってラウンジとかって言って通用するの？その、どういう仕事か。

E6-113：ま、キャバクラみたいなもんって言ったら、まあお酒飲む仕事なんかは恥だから、その時はたぶんお父さんも感情的だったから言っちゃったんだろうけど、もう一家の恥だし、なんか、除籍、籍から抜きたいみたいなことを言われました。

原田 114：ホントに？そんなこと言ったの？

E6-114：言われましたけど。

原田 115：お父さんから？

E6-115：お父さんから。

原田 116：そういう風に言われた時に、自分はそういう恥ずかしい仕事しているんだと思った？

E6-116：いや、別にそこは思っていないです。その何が悪いのかなって思ったし、なんかやっぱこうやっていう親なんだなろうなあって思って。

原田 117：除籍っていうのは、親子の縁を切るってことなんだよね。

E6-117：そうですそうです。

原田 118：ラウンジで働いただけで親子の縁を切るんだ。

E6-118：って思っちゃって。しかも別に、何がいけないのかわからないんで。だから。嫌なのはわかるけど、そこまで言うほど悪い仕事だって思わないから。

原田 119：なるほど。世間一般ではやっぱり水商売とか風俗に偏見はあると思うんだけど、その世間一般からの偏見っていうのは感じる？

E6-119：んー、なんか、たぶん昔、ちょっと上の人が思ってるより今の人ってそんなに偏見ないと思います。

原田 120：そんなに偏見ないんだ。

E6-120：キャバクラとか特に。今なりたい職業 1 位キャバ嬢みたいな感じだから。だいぶ偏見は下がってるのかなあって。

原田 121：それは風俗に対しても？

E6-121：んー、だってキャバ嬢って枕しないと売れないから。だったら一緒かなあって。

原田 122：一緒か。君もキャバクラで働いてる時は枕普通だったの？

E6-122：それは、大学生キャバクラは別に売上ノルマがないから、別にしなくて、関係ないけど、歌舞伎町で働くとかになったら枕は当たり前だから。

E6-108「わたしがたぶん一番好きなのはお母さんです。」というくらい、E6 は「インナーマザー」に支配されている。自分が虐待を受けている自覚はないのかもしれない。一方で、父親には激しい敵意を示す。

E6-113「ま、キャバクラみたいなもんって言ったら、まあお酒飲む仕事なんかは恥だから、その時はたぶんお父さんも感情的だったから言っちゃったんだろうけど、もう一家の恥だし、なんか、除籍、籍から抜きたいみたいなことを言われました。」というナラティブから、父との間には、母親に対するような愛憎を感じない。単にここには、憎しみしかないのである。だが、父は、母親と違って彼女の大学を良いと思うよ、と褒めてくれた存在なのである。こうしたやりとりから、母子密着の異常さが逆に浮き彫りになってくる。E6-118「しかも別に、何がいけないのかわからないんで。だから。嫌なのはわかるけど、そこまで言うほど悪い仕事だって思わないから。」という自己を正当化する E6 のナラティブには、レベル 2 の未熟な防衛機制である「希望的観測 (wishful thinking)」が見受けられる。キャバクラ嬢になりたい職業 1 位ということは絶対にあり得ない。確かに、『下流社会 新たな階層集団の出現』で記されたように、三浦展のいい加減な 10 代向けのケータイアンケートでキャバクラ嬢は 6 位になり、週刊誌等でも話題になったことがある。だが、件のアンケートは、キャバクラ嬢以外の選択肢に、社長といった役職があったり、アーティストといった意味が広すぎるものが含まれていたり、トリマーなどというニッチなものがあつたりと、到底科学的な社会調査の体を成していないものだ。だが、E6 はその話を真に受け、キャバクラ嬢の価値を切り上げて、彼女は自分を正当化したいのである。そして、キャバクラ嬢が枕営業（売春）をしないと売れないというのも極論である。歌舞伎町の常識と世の中の常識は違うし、六本木などでは逆に枕営業をする女性は軽蔑される。従って、キャバクラ嬢＝風俗嬢という彼女の認識は論理的な飛躍が甚だしい。

原田 139：◆◆（※ホスト名）のためにソープで働いてたんだ。

E6-139：はい。働いてました。

原田 140：にもかかわらず◆◆は暴力をふるったんだ。

E6-140：そう。

原田 150：君に。

E6-150：「1 日 10 万持って来い」って。

原田 151：「1 日 10 万持って来い」って言ったの？最低でも？

E6-151：最低でも。

原田 152：毎日来いってこと？

E6-152：そいで「毎日来い」って言われたから、それは無理だし、10 って、変動ある仕事だから絶対 10 って言えないって言ったら殴られた。

原田 153：それはお店の中で？

E6-153：お店の中で。

原田 154：それ周りは止めたりしないの？

E6-154：しないです。

原田 155 : そういうノリなんだ？F の店っていうのは.

E6-155 : らしい. そうらしい.

原田 156 : オラオラ営業だ.

E6-156 : ほかの店だったらたぶん止めてるけど, ◆◆だから日常なんじゃないですか？

原田 157 : それが日常になってるのか. 殴るっていう話は聞くけど, それって, 何て言うの, ホテルで殴ってるんだとか, その子の家で殴ってるのかなあって思ってたら店で殴るんだ.

E6-157 : 店で殴ってる.

原田 158 : どこ殴られたの？

E6-158 : ここ（肩）とか, この辺（二の腕）とか.

原田 159 : それはガチで？

E6-159 : ガチで. しかもプロだから平手ですよ. あざにならないように.

原田 160 : あざにならないように. 怖かった？

E6-160 : 怖かったっていうか, 殴られなれてるから, ぼーっとしてましたね.

原田 161 : 殴られなれてるの？

E6-161 : いや, なんか, 親に殴られてたんで.

原田 162 : それはお父さん？お母さん？

E6-162 : お母さんに.

原田 163 : いつから？

E6-163 : 物心つく前からずっと殴られてた.

原田 164 : ずっと殴られてた. どんなことで殴られるの？

E6-164 : 食べるのが遅いとか, で, ちっちゃい時は椅子から投げられたりとか, あと食べるのが遅いって蹴られて 6 歳臼歯抜けたりとか, あとなんだろ, テストで点数が悪い, あと, テスト前に熱があるから休みたいって言ったら「勉強しろ」って殴られたりとか. そんな感じかな.

原田 165 : それをおかしいとは思わなかった？

E6-165 : おかしいと思っても親だから, どうしようもないし.

原田 166 : 普通はそういう状況だとなんか学校の先生に相談するとか, 例えば家出しようとか.

E6-166 : 相談して, じゃあその先生が親に言って, また親が家でどうなるかって考えた方が怖いから, ちょっと我慢したら終わるし, そっちの方がいいなと思って.

原田 167 : お父さんに言って止めてもらおうとは思わなかったの？

E6-167 : お父さんは知ってるけど見てみぬふりだから. うん. お兄ちゃんが止めてくれるから, お兄ちゃんが帰ってくるのを待って.

原田 168 : 待つみたいなの. お母さんはそうやって E6 さんのことを殴るのは, E6 さんのことを思

ってたっていう風に思ってたの？

E6-168：んー。いや，思っていないですね。

原田 169：違う。お母さんのストレス発散なの？

E6-169：うん。えーなんか，この人も病気なんだろうなって思っていました。なんかすごい殴った後にいきなり優しくなったりするから。

原田 170：◆◆もそういうタイプじゃない？殴った後に優しくならなかった？

E6-170：優しくなりました。だから「気持ち悪い」って言って帰った。なんかホントに，お母さんみたいだなと思って，なんか殴られてる間もすごい気持ち悪いと思って。

原田 171：そんで◆◆は殴った後どういう風に謝ってきたの？

E6-171：謝ってない。なんか，「ごめんねー，拗ねてんのー？」みたいな感じ。「一緒にケータイ買いに行こうよお」みたいな。言ってたけど，気持ち悪っと思って。

原田 172：でも彼はまあ，歌舞伎町ではナンバーワンなわけだね。基本的に。

E6-172：歌舞伎町のナンバーワンではないです。Fのナンバーワン。

原田 173：Fのナンバーワンか。でも，なんでそんな人がFグループのナンバーワンなの？

E6-173：えー，ブランディングが上手い，と思う。自己ブランディングが。

原田 174：なんかこう，Twitterとか？

E6-174：Twitterとか上辺のキャラとホントのキャラが違うから，あ，思ってたより優しいんだ，ってハマるし，そっから洗脳みたいなのもうまいから，ハマる子はハマると思う。し，お客さん選ぶのが上手いんですよ。

原田 175：どんなふうに？

E6-175：稼げなさそうな子だったら絶対相手にしないから，すぐ切っちゃうし，その，稼げそうな子にしか自分から行かない。

原田 176：前，やっぱりその，Fにハマってる子の中で◆◆のエースをやってた子は，わたしは，月にやっぱりその 300 とか 400 とか貰いでるけども，何も彼には要求しないんだって言ってたよ。

E6-176：あー，それにさせるのもうまいです。

原田 177：それはうまい，やっぱうまいんだよね，向こうがね。

E6-177：うまい。

原田 178：そういう風にこう，要求をしないのが良い女だみたいなのをたぶん教育するんだよね。

E6-178：そうそう。たぶん何にもしてくれないから，してくれないんだって思うようになるんだと思うけど，でもなんかわたしは，してくれなかったら使わないタイプだってすぐたぶん分かったから，すごいマメでした。

原田 179：あ，そうなんだ．かまったりメールしたりしたんだ．

E6-179：うん．連絡もちょうマメだし，電話もマメだし，家にも来るし，なんか車で迎えに来てくれたりもしてたし．

原田 180：なるほどね．で，やっぱりその子は洗脳されてて，わたしはエースだけれども，都合の良い人間なんです，彼にとって，わたしはウザがられたり絶対してません，みたいな．

E6-180：あ，そう思わないとやってけない，ウザがられたくない，っていうタイプの子にはもう絶対何もしないと思う．

原田 181：完璧洗脳だね．なんかおかしいの，だって君がエースだったら一番主張していいはずだし，君でその，◆◆は生きてるんだから，君の要求なんかは断らないはずだし，それなのになんで何も要求しないでそんな都合の良い女，ATM かって思ったのよ，その話聞いて．

E6-181：ホントに．

原田 182：ATM か君はって思ったんだけど，まあ言わなかったけども，でもその子にしてみるとなんかそれが美学みたいな感じでしゃべるのよ．

E6-182：え，だってそれが，一番良いお客さんなんだよねっていう風にちゃんと言ってくる．

原田 183：ああ，なるほど．だからそういう良いお客さんの姿を演じたんだ．

E6-183：よく言ってたのが，なんか，俺が来なくても伝票だけたてて帰るのが最も理想，みたいな，言われて，なんでそんなことしなきゃいけないのみたいな感じで．

原田 184：普通はそうなるよね．

E6-184：そう，わたしはそう言ってたから，洗脳するまでたぶんマメにしようと思っていろいろしてくれたんだと思うけど．

原田 185：おかしいよね．金だけ貢いで死ぬほど身体売ってる訳でしょ．その，見返りが無いのになんでそんなことができるんだろうってやっぱその時すごく思って．

E6-185：わたしはそこ，やっぱなんか理解できない．

E6-152「そいで『毎日来い』って言われたから，それは無理だし，10 って，変動ある仕事だから絶対 10 って言えないって言ったら殴られた．」と E6 は語るのだが，毎日 10 万円持ってお店に来いということは，最低月に 300 万円をノルマとして落とせということである．これは，一般的に歌舞伎町のエースの金額としても多い部類なので，実際彼女は F グループのナンバーワンホストにある意味認められたのである．ホストのランキングは激しく毎月競い合う．店舗だけでなく F のように，全グループを通してお金の売り上げを競い合うのだ．客に幾ら使わせたかで先輩後輩も年齢も一切関係なく，その店の序列が決まる完全な市場原理主義が，ホストの世界を支配している．ある意味，新自由主義の究極の発現形がホストクラブだと言ってもいいだろう．そして，◆◆の E6 の前のエースが，C9 である．彼女が月 500 万円という滅茶苦茶なノルマ

のために心身共にボロボロになっていたのは既に示した通りである。E6 は、C9 と違って、◆◆の都合の良い女にはならなかった。その結果、◆◆から殴られた訳だが、その時の E6 の反応がやはり普通ではない。E6-160「怖かったっていうか、殴られなれてるから、ぼーっとしてましたね。」、E6-163「物心つく前からずっと殴られてた。」、E6-165「おかしいと思っても親だから、どうしようもないし。」という一連のナラティブには、虐待された子供特有の「学習性無力感 (Learned helplessness)」が漂っている。結局、彼女は、E6-185「わたしはそこ、やっぱなんか理解できない。」といて、深く洗脳される前に、彼の下を去っているが、少なくとも 2 か月は、彼のために彼女はボロボロになりながらもソープランドとデリヘルを掛け持ちしてエースを続けた。そして、今は別のホストのエースを務めているのだ。

原田 209：そういうがつつりした愛人っていうのは欲しくないの？お金を稼ぐんならそれ一番間違いない？

E6-209：え、いくらくれるんだろうって思っちゃう。なんか、風俗で 150 以上稼いでるけど、いくらくれるの？って思っちゃう。

原田 210：ああ、そっか。その、風俗をやる時ってたぶんリスクがあると思うんだけど、愛人だったらそのリスクないかなと思うんだけどね。

E6-210：愛人契約で貰える額なんて、その、貰えるのってだいたい 50 万くらいじゃないですか。月。

原田 211：まあ月そんなもんだね。

E6-211：50 万で生きていけないもん。

原田 212：50 万で生きていけないのか。

E6-212：うん。

原田 213：それはなに、ホスト代が入ってくるから？普通の生活は 50 万で間に合うと思うよ。

E6-213：え、無性にお金を使いたくなる時があるから。

原田 214：それ何に使うの？

E6-214：なんでもいいです。

原田 215：なんでもいいのか。

E6-215：でもホストクラブが一番使いやすいから使った。

原田 216：お金は貯めるためとか何かを買うためではなくて、ただ使うために存在してるの？

E6-216：んー、なんか衝動的になっちゃうから。どうしても使いたくなっちゃうから。

原田 217：それは、要するにイライラしてストレス発散してるってことだよな。

E6-217：んー。そうなのかなあ。

原田 218：優越感にひたりたいとか？お金を使って。

E6-218：んー。いやなんかじっとしてられなくなって、とにかくもうお金使いたい。

原田 219：お金使いたってなるんだ。で、使うのは何でもいいんだ。

E6-219：なんでもいい。だから犬飼ったっていいし、何買ったっていい。

原田 220：寄付すればいいんじゃない？なんかユニセフとかに。

E6-220：そういうんじゃない。目に見えて、わーってなるのが。

原田 221：楽しくなるものがないんだ。ギャンブルとか一発で無くせるんじゃないの？

E6-221：そう、だからパチンコとかも毎日行っちゃったりとか。

原田 222：でもパチンコだと何十万も無くすのに何時間もかかるんじゃない？

E6-222：そう。かかるから、一番楽なのがホストクラブ。

原田 223：競馬とかだと一瞬で消えるけどね。100万とかね。

E6-223：確かに。競馬ってでも衝動的になって、、、

原田 224：やるものじゃないか。

E6-224：行って、書いて、買って、っていうのがめんどくさいから。

原田 225：めんどくさいのか。

E6-225：なんかちょうどいい。

原田 226：ちょうどいいのがホストなんだ。

E6-226：だって朝でも夜でもどっちでもやってるし。

原田 227：なるほどね。

E6-227：行けばいいだけだし、家近いし。

E6-213「え、無性にお金を使いたくなる時があるから。」、E6-214「なんでもいいです。」というナラティブから、彼女が自傷的に散財をしているのが理解される。Baumanの指摘する通り、彼女にとって、彼女の存在価値はソーブランドやデリヘルでお金を稼いでいる瞬間ではなく、そのお金を一瞬で使っている瞬間に発生している。消費社会に適合することで、彼女は必死に「人間の証明」をしているのである。そして、一瞬でお金を使うためには、ホストクラブが一番使いやすいのだ。パチンコやギャンブルのまどろっこしさが無く、歌舞伎町に行けば、朝でも夜でもやっているものだからだ。E6-218「んー。いやなんかじっとしてられなくなって、とにかくもうお金使いたい。」という感覚が、双極性障害の躁状態から来るものである可能性もある。事実、彼女はその診断を受けている。また、ADHDの衝動性なのかもしれない。だが、「実存的貧困」概念の「自傷的存在証明」である可能性はかなり高いと推測される。何故ならば、衝動的にお金を使うのであれば、用途が特定のホストクラブには限定されないはずだ。目の前にパチンコ屋があればそこで、デパートがあればそこで、と刺激的な場所が目に入ればどこでも次々と散財するのが、躁状態の人間やADHDの人間の行動パターンであろう。だが、E6はそうではないのである。明確な意図を持って、特定の

場所でお金を使うのだ。そこには Stiegler の「象徴の貧困」が伺える。彼女は自らの「象徴の貧困」を埋め合わせるために、ホストという象徴にお金を使っているのである。そして、風俗嬢となって社会的排除が完成している今、彼女は完全に「実存的貧困」の条件を満たす。従って、「自傷的存在証明」が発現する。それがホストクラブでの散財だとすると、全て辻褄が合うのである。少なくとも、彼女が異常な消費者であり、それが彼女の唯一のアイデンティティになっていることだけは、疑う余地は無い。

原田 230：でも今もこうやって風俗で働いてるわけだけでも、そのお金はなんのために？

E6-230：その人のイベントのために。

原田 231：その人のイベントはいつ？

E6-231：4月の後半。

原田 232：それ誕生日イベント？

E6-232：そうですね。と、あと昇格祭。

原田 233：それは、どのくらいのお金を準備してるの？その人のために。

E6-233：今ですか？今現在は、150 くらいです。

原田 234：で、トータルどのくらいを目標にしてるの？

E6-234：550。

原田 235：550 のイベントをしてあげたいの？それはどんなレベルのイベントなの？シャンパンタワーだけでは済まないよね？

E6-235：シャンパンタワーと、あとリシャル。入れてあげたい。1,000 万、その人の目標、ホスト始めるときの目標が、あと残り 1,000 万いく、月に 1,000 万いくっていう目標だけだから、たぶん、なんかもうそれ叶えたら辞めると思うし、なんか最後の記憶に残りたい。

原田 236：でもそれでもし、その人が辞めてくれなかったらどうする？ホストを。

E6-236：別に辞めて欲しいとも思ってないから、別にいいと思うけど、ただ、どんどんどんどん売り上げも下がってるし、知名度も下がってきてるから、それで辞めた方がかっこいいと思うよっていうのだけは伝えるかな、って感じ。

原田 237：正直さ、こういう仕事をしてきて、お客さんといっぱい会ったと思うんだけど、お客さんを好きになったことってある？

E6-237：ないです。

原田 238：ないよね。それと同じでたぶんホストもお客さんを好きになることってあんまりないと思うんだけど。

E6-238：風俗はないけど、キャバクラは、好きまではいかないけど人間として好きみたいなことはある。

原田 239：でも恋愛対象として好きにはならなかったでしょ？

E6-239：時間がなかったからならなかったけど.

E6-235「シャンパンタワーと、あとリシャール. 入れてあげたい. 1,000 万, その人の目標, ホスト始めるときの目標が, あと残り 1,000 万いく, 月に 1,000 万いくっていう目標だけだから, たぶん, なんかもうそれ叶えたら辞めると思うし, なんか最後の記憶に残りたい.」というナラティブにも, 未熟な防衛機制である「希望的観測」が見受けられる. ホストに貢ぐ客の一つの夢が, ホストが引退するまでエースを続け, 担当の引退と同時に結婚する, であるが, 一体日本でこれを成し遂げたカップルがどれほどいるのであろうか. 「実存的貧困」状態は希望を描けないので, これが本当の希望であるならば, まだ彼女は絶望の一步手前で留まっていることになる. だが, 恐らくこの希望は直ぐに裏切られる. 1 か月後, 彼女が最後の力を振り絞って 550 万円のバースデイベントを達成させたとする. そこで, 彼が引退しなければ, 恐らく彼女の心は, Twitter のアカウント名をログアウトに変え, 「もう駄目だ, 死ぬ.」が最後の更新になった C9 のようにぽっきりと折れるだろう. E4 が, ホストの言葉として, 欲をぶつけてくる人間は金にしか見えない, という言葉を紹介していたが, E4 のような客観的な視点をもう E6 は持てていないのが, 非常に良く分かるナラティブである.

原田 272：こういう業界の中である程度やっぱボーイとかスカウトとかは頼りになる存在なの？

E6-272：なりますね. 結局トラブルになった時に仲介してくれる人がいた方が.

原田 273：なるほどねえ. けっこう, こう, 怖い業界で生きてると思うんだけど, そういうのを怖いという感覚は全くないんだね.

E6-273：別に, いつ死んでもいいから別に.

原田 274：えっ. いつ死んでもいいのか.

E6-274：怖くない.

原田 275：いつからそんなに投げやりな人生生きてるの？

E6-275：えー. んーなんか別に. 特にしたいことないからかな.

原田 276：したいことっていうものはもう, 人生で 1 回も, これをやりたかって思ったことないの？普通女の子はあるじゃん.

E6-276：終わっちゃったんです.

原田 277：え, 何？

E6-277：大学で.

原田 278：大学で終わっちゃったの？

E6-278：うん.

原田 279：大学に入りたい，がしたかったの？

E6-279：んー，ま，その，大学，ずっと大学，良い大学に入りたくて勉強して生きてきたから，Fランって言われたから，終わっちゃったから．

原田 280：それで終わっちゃったの？

E6-280：で，今度は就職活動も上手くいかなくて，ああ，終わったなあって思ったら，したいこと，結婚だけど，相手もないし．終わりだなあって．

原田 281：終わりだなあって？だってその，担当さんがもしかしたら水上がってくれて結婚してくれる可能性もあるじゃん．

E6-281：それが一番いいと思うけど，自分の人生で．んー．でも，人に期待して生きたくないから．

原田 282：1人で強く生きて行くっていう選択肢はないの？

E6-282：んー．今現状そうじゃないですか．

原田 283：今，1人で強く生きてる感じなんだ．

E6-283：1人ぼっちだし．

原田 284：でも担当さんは担当さんでしょう？呼べば来るでしょう？

E6-284：まあ，まあ．

原田 285：それを1人ぼっちとは言わないんじゃない？

E6-285：まあ．

原田 286：そばに居ても孤独を感じる？

E6-286：んー．なんか考えること止めちゃったんですよ．考えてもどうしようもないから．だからこの人何考えてるんだろうとか本心はどうなんだろうとか考えるのやめちゃったから，ただそこにいる人．

原田 287：でもそれだと心が休まる瞬間ってないんじゃない？

E6-287：ないです．

原田 288：辛い，よね．生きてて．

E6-288：うん．

原田 289：正直，お金はそこそこ稼げる，そこそこっていうか普通の女の子以上に稼げてるし，若いし，かわいいし，っていったらたぶん女性のカーストがあるとすれば君はたぶん学歴だって高いし上の方において，すごくこう，勝ち組の人生が待っててもおかしくない子なのに，なんでこんなに自分がないんだろう．

E6-289：なんでだろう．

原田 290：自信はないの？自分自身に．

E6-290：自信はないです。

原田 291：なんでないんだ？だって頭良い，偏差値高い学校に行ってて若くてかわいいんだよ。これで自分に自信がなかったらおかしくない？

E6-291：んー。そういう風に育てられちゃったから。自信ない。

原田 292：お前はダメな子だっていうお母さんの言葉は呪いみたいになってるんだ，今も。

E6-292：うん。

原田 293：でも正直お母さんを超えてるよね，君は。学歴とかそういった意味でも。

E6-293：超えてはいるけど，足りない。

原田 294：足りないの？でも，お母さんの人生を君が生きてるっておかしくない？なんか。

E6-294：そう，おかしいと思うから，自分の人生生きなきゃって思ったころにはもう自分がわかんないから，うん，なにも，なんか何もなくなっちゃった。

原田 295：何もなくなっちゃったんだ。でも1から，0から君という人間を作っていこうという気持ちにはならないの？

E6-295：今，だからなんか，ちょっと趣味とか探したりとか，してるけど。んー。なんかやっぱ結局，あ，これやってもお母さんきつこう言うんだろなあとか思っちゃう。

原田 296：お父さんではなくてお母さんなんだもんね。基準はね。

E6-296：お父さんはわたしの中で，特にそこまで印象にないんですよね。

原田 297：お母さんに褒められることが一番うれしいこと？

E6-297：うん。

原田 298：それは人生でいっぱいあった？

E6-298：ない。

原田 299：ない。褒められないのにこんなにがんばってきたの？褒められたくて。

E6-299：褒められたくて。

原田 301：それは〇〇に入るのが一番の目標だったんだ。

E6-301：そうですね。

原田 302：母娘で目指してきたんだ。それが入れなかった時にお母さんはもう，君のこと見捨てたと思ったの？

E6-302：うん。もうそっから全然わたしに興味ないから。

原田 303：興味ないってどういう感じで？

E6-303：だからもう昔はそうやってなんかしなさいとか，いろいろ言ってたけど，全然興味ないから就職活動も，あ，やってんだ，みたいな感じぐらいだったし，まったく興味がなくなっちゃった。

原田 304：キャバクラで働いたり風俗で働いてること知ってるの？

E6-304：キャバクラは言ったけど、へー、みたいな。

原田 305：答めることもなく？

E6-305：特になく。

原田 306：お父さんみたいに,,,

E6-306：「お父さん悲しむよー」って言って終わり。

原田 307：終わり。風俗で働いてることは言う気はない？

E6-307：それは言っちゃったら、親は別に悪くないのに、決めたのは自分だし。

原田 308：でももしかしたら構ってくれるんじゃないの？止めなさいとか。

E6-308：それ、別になんか、そういうんじゃない。して欲しいこと。お金くれるとかそういうのじゃない。

原田 309：仕送りが欲しい、仕送り貰ったらそれは違うと思うの？こんなもの欲しいんじゃないって思うの？

E6-309：昔からお金は貰って来たし、お金を貰いたいわけじゃないし、なんかそのお金で解決されてる感じがすごいや。

原田 310：お金で解決されてる感じ、受けるんだ。人生が。

E6-310：なんか。

原田 311：どんな時に特に思ったの？

E6-311：だからその、中学受験で、じゃあすごいお金かかってるんだからね、とか、大学でもお金かかってるんだからね、とか。さんざんお金のこと言われたりして、なんか嫌だ。

原田 312：でも実際お父さんは働いて、お母さんは専業主婦なんだっけ？

E6-312：パートしてました。

原田 313：だと2人とも親は頑張ってお金を稼いで君に投資してるわけだよね。

E6-313：うん。

原田 314：それに対してありがたいという感覚はないんだ？

E6-314：ありましたよ、ありがたいとは思うけど、それを子供に言うのはどうなのかなと思って。

原田 315：恩着せがましいと思う？

E6-315：大学とかだったらまだわかるけど、小学校の時に言われても。

原田 316：ある人はこう、世の中は金だって言ってる人がいて、で、一番信じられるのは人間じゃなくて金だって言って、金だけは裏切らないって言ってたけども、君もそう思う？

E6-316：お金で買えない物もあると思う。

原田 317 : 例えば？

E6-317 : 人間, の心.

原田 318 : 人間の心ね. 実際そうだと思うし, やっぱ人間の心なんか金で買えない物の代表だと思うけども.

E6-318 : でもそれを買おうとしてくるから, 嫌なんです.

原田 319 : 親が？

E6-319 : お父さんが特に.

原田 320 : どういう時に？

E6-320 : いや, だから 1 人暮らしして欲しくないから, じゃあお金あげればいいのか. そういうのが嫌だ.

原田 321 : なるほどねえ. 君の意志をお金で曲げようとするのが嫌なんだ.

E6-321 : うん.

E6-281 「それが一番いいと思うけど, 自分の人生で. んー. でも, 人に期待して生きたくないから.」という E6 のナラティブに, ホストに対する彼女の愛の本質が表れている. すなわち, 偽りの愛だ. いや, 本来それは愛と呼ぶべきものですらないのかもしれない. Fromm は、『愛すること』において, 愛の本質を以下のように述べている.

愛は能動的な活動であり, 受動的な感情ではない. そのなかに「落ちる」ものではなく, 「みずから踏み込む」ものである. 愛の能動的な性格を, わかりやすい言い方で表現すれば, 愛は何よりも与えることであり, もらうことではない, と言うことができよう.

与えるとはどういうことか. この疑問にたいする答えは単純そうに思われるが, じつはきわめて曖昧で複雑である. いちばん広く浸透している誤解は, 与えるとは, 何かを「あきらめる」こと, 剥ぎ取られること, 犠牲にすること, という思い込みである. 性格が, 受け取り, 利用し, ためこむといった段階から抜け出していない人は, 与えるという行為をそんな風に受け止めている. (Fromm = 1991 : 43)

E6-281 「人に期待して生きたくないから.」というナラティブから分かる通り, E6 はまさに何かをあきらめている. だが, それは愛に対する典型的な誤解なのである. 彼女は, ホストに多額のお金を注ぎ込んでいるので, 一見愛を与えているようにも見える. だが, これもそう見えるだけであり, 与えているのは単にお金であって愛ではない. お金は彼女の人生の時間と性労働に従事する苦痛の関数ではあるが, それがすなわち彼女の中から湧き出る愛ではない. 彼女がホストに与えているものが本当に愛であるならば, 彼女はこ

こまでパワーレスな存在ではない。能動的な活動の愛、すなわち **Fromm** がいう「みずから踏み込む」愛であれば、彼女はその行為自体から報われているはずなのだ。例え叶わぬ想いであろうとも、誰かを一心に愛する行動は、その人間を必ずエンパワーする。だが、彼女の場合は全くそうになっていない。そこから演繹すれば、彼女の中に本質的に愛は無いのである。そもそも、自己が壊れている彼女は自分自身すら愛していない。そのような女性が、他者を愛せる訳がないのだ。だから、彼女が今現在愛の様に感じているのは、ホストに対する単なる執着であり、歪んだ支配欲求である。それは、彼が自分の下を離れて行くのではないか、という不安から生まれる極めて受動的な感情に過ぎない。彼女が犠牲にしている時間やデリヘルで働く心理的苦痛は、一切価値あるものとして形をなしておらず、相手に届いてもいない。幼少期に貰えなかった母親の愛に未だに固着している性格が未熟な彼女には、残念ながら真実の愛はまだ生み出せないものなのだ。そして、**Fromm** が指摘するように、人間は孤独という最も苦しい状況を愛によって回避するのであるが、愛を生み出せない彼女には、孤独を脱する術がない。故に、彼女は「孤絶」を内包した「実存的貧困」の深淵から逃れられないのである。

E6-273「別に、いつ死んでもいいから別に。」というナラティブに、彼女の「実存的貧困」の深さを感じる。数分前に担当ホストを引退させる夢を語っているにもかかわらず、直ぐに自暴自棄な発言をするということは、やはり E6 は「孤絶」の状態にあり、希望を持っていないのである。一緒にいるのが夢ですらないのだ。そこまでしてあげても、彼が引退などしないと半ば分かっているであろう。だが、そう思っていないと恐らく彼女の脆い心が完全に壊れてしまうのだ。

E6-279「んー、ま、その、大学、ずっと大学、良い大学に入りたくて勉強して生きてきたから、F ランって言われたから、終わっちゃったから。」というナラティブも重要である。彼女もまた、目的と手段を履き違えている。良い大学に入ることは、人生を豊かにする手段であって、ゴールではないということが分かっているのだ。そして、そこに入れただけで人生が終わるということは、物心ついてからの十数年間、彼女の生きる意味はずっと大学受験だったのだ。それも母親が決めた目標である。十数年間、母親が決めた目標に向かい、母親の希望を叶えるために彼女は生きてきて人生が終わったと言い、そして今、ホストが決めた 1,000 万円という目標に向かって、ホストのために彼女は人生を生きている。その目標を達成できなかった時、彼女の心に何か残る人生の意味はあるのであろうか。恐らく、何も無いほどに空虚であることを自覚しているから、彼女は何時死んでもいいのであろう。母親からは愛されたいという思いが、切実に伝わってくる。彼女を最も虐待している存在に最も強い愛着を抱いているのは、虐待された子供の特徴でもある。そして、父親に対してはやはり距離感がある。母親のように身体的な虐待を父親はしている訳ではない。だが、彼女は自分の心をお金で買おうとすることに腹が立つというのである。だが、これもまた大きな矛盾である。それはまさに今、彼女がやっていることなのだ。彼女はホストの心を必死にお金で繋ぎ止めているのであるが、それが心をお金で買う以外の何であらうか。

考えれば考える程、彼女の行動は矛盾に突き当たってしまう。だから、彼女は考えるのをもう止めたので

ある。E6-286「んー。なんか考えること止めちゃったんですよね。考えてもどうしようもないから。だからこの人何考えてるんだろうとか本心はどうなんだろうとか考えるのやめちゃったから、ただそこにいる人。」というナラティブで担当ホストのことを表現するのであるが、考えれば、見えてしまうのだ。自分が都合よく利用されていることが。だから、彼女は思考を止めるのだが、どんなに考えることを止めても、言葉を使わなくても、伝わってくるものはある。仕草や態度、視線、表情、ありとあらゆる非言語情報から、我々はその人の内面を察することができる。Mehrabian の古典的な実験が示すように、言葉以上にその人間が醸し出す雰囲気はその人間の本質を物語る。だから、彼女は辛いのだ。自分が騙されていることが分かってしまうのである。E6-283「1 人ぼっちだし。」という E6 の言葉に、彼女の孤独が凝縮されている。そして、その孤独は、彼女のこれまでの人生の繰り返しでもあるのだ。

原田 328：なるほどね。学校生活とかはどうです？楽しかった？中学、高校。

E6-328：中学はいじめられてて修学旅行に行ってなくて、高校はずっと勉強してたんであまり記憶がない。

原田 329：中学はなんでいじめられたの？

E6-329：わかんないです。

原田 330：中学受験したってことは中学から進学校に行ったってことだよな？

E6-330：そうです。頭が悪かったからなのか、他校の男子校生と仲良かったからなのか、わかんないけど。女子校の中学校なんかみんないじめられるから、その的になってただけ。

原田 331：こう、持ち回りでいじめられてるの？それとも君だけがいじめられたの？

E6-331：順番です。

原田 332：順番。持ち回りで。1 回もいじめられないなんて人はいないの？

E6-332：いないです。よほど 1 人の人かなって感じ。

原田 333：なるほどね。つるんでいれば必ず 1 回はいじめられる。

E6-333：うん。

原田 334：なんでそんなにこう、1 人でいれないのかな？女子って。いじめられるのわかっててつるむんだもんね。

E6-334：次自分ってなったら嫌だから？

原田 335：うん。ある人が全く同じこと言ってて、なんで 1 人でいれなかったの？って聞いたらぼっちよりはましって言ってた。

E6-335：んー。ま、結局友達いないと楽しくないし。

原田 336：でもそれって本当の友達じゃないよね、そんなくだらない理由でいじめるっていうのは。

E6-336：うん。

原田 337：そういう薄い友達でもやっぱりいた方がましなんだ。

E6-337：中学生だったから，そういうのに気づかないんじゃないですか？

原田 338：なるほどねえ．だと学校生活もそれほどいい思い出ないんだね。

E6-338：ないです．

原田 339：大学もそう？

E6-339：大学は仲良い子が1人2人だけで，あとはなんかみんな，わたしはあんまり好きじゃない．普通に仲良くはするけど．

原田 340：溶け込む努力をしなかったってこと？

E6-340：いや，普通に仲良くするけど，すごい仲良いふりもできるけど，なんかその根底にある，何て言うんだろう，エリート思想みたいなのがすごいつまんなくて，なんか，どうなのかなって思っちゃうから．たぶん見下されてるんだろうなってわかっちゃうし．

原田 341：それはなに，附属から上がってきた人たち？

E6-341：ん？

原田 342：附属から上がってきた人たち？

E6-342：あ，じゃないです．

原田 343：じゃなくて，他校から普通に進学してきた人たちでもエリート思想持ってるの？

E6-343：うん，仲良いみたい．

原田 344：だって同じじゃん．君同じ大学に行ってて．

E6-344：だから良い企業に入って，みたいな．なんか．

原田 345：その価値観を君は好きじゃないんだ．良い企業に入ってって．

E6-345：で，なにしたいの？って思っちゃうんですよね．なんかそれがないのに，それがない時点で同じだし，わたしと．なんか，それでマウンティングをしてくるのがすごい嫌なやつだなあと思う．

原田 346：でもなんか最近そういう感じでマウンティングをする文化が未成年層を中心に生まれてると思うんだけど，君もインスタとかやってる？

E6-346：やってます．

原田 347：そこでインスタ映えするようなものとか撮って上げたりする？

E6-347：んー，インスタ映え，そこまでのインスタ映えはない．

原田 348：でも今女子はすごいインスタとか Twitter とか，，，

E6-348：どこどこ行った，とか．

原田 349：うん，どこどこ行ったとか，彼氏とここにいる，とか友達とこんな充実してる，みた

いなものをこぞって上げるでしょ？あれってやっぱり怖い？なんかわたしが居ないところになんとか君となんとか君が会ったんだとか。

E6-349：別に。そんなのまったく。

原田 350：気にしない？

E6-350：うん。それよりも Twitter とかで、なんか就職先がどうこうとか書いてる方がよほど気持ち悪いなって思う。

原田 351：どうこうって何？就職先、ここに決まったとか？

E6-351：とか、なんかやっぱりなんか、なんかすごい仲良かった友達がいて、一緒にホストクラブも行ってた子がいて、でもなんか、就職決まって、で、なんか働かなくなってお金もなくなってる、その前はキャバクラで働いてたんですよ。お金もなくなったから行かなくなっただけに、なんか、もうあたかもそれが偉いかのように、偉いからもう夜遊びしない、とか、さんざんすごい書いてるから。で、なんか、やっぱり大学の人と飲んでる方が楽しいとか、さんざんあんなに言ってたじゃんと思っちゃうし。なんかそれをわたしが見える位置で書いてるのもなんか、あぁって思う。

原田 352：自分に向けて書いてるのかって気がする？

E6-352：うん。気がする。考えすぎだと思うけど。

原田 353：鍵アカで書いてないの？その女の子は。

E6-353：鍵アカで書いてるけどわたしがみれる鍵アカで書いてる。

原田 354：そっか。フォローしてるもんね。やっぱそういう SNS で何か書かれたり、友達の行動見たりすると気になるんだ？

E6-354：その子のだけは気になるかな。

原田 355：その子のだけは。意識してるってことだよな。

E6-355：特にひどい。マウンティングが。

原田 356：でも、フォロー外せばいいんじゃないの？

E6-356：そうするとめんどくさい、いろいろ。

原田 357：めんどくさい？なんで外したの？って言われるから？

E6-357：うん。めんどくさい。

上述のナラティブは、彼女の生きづらさがひたすら語られている。中学、高校、大学と常に彼女は学校に居場所がない。中学ではいじめられ、高校はひたすら勉強でほぼ記憶がないという。そして大学では、マウンティング、所謂女性同士の格付けにうんざりしているのだ。だが、本来マウンティングは同じレベルでしか起こり得ない。競争心や嫉妬というものは、差があり過ぎれば抱かなくなる以上、まさに彼女が言ってい

る通りなのである。E6-345「で、なにしたいの？って思っちゃうんですよ。なんかそれがないのに、それがない時点で同じだし、わたしと。なんか、それでマウンティングをしてくるのがすごい嫌なやつだなあと思う。」というナラティブから分かるのは、文字通り彼女という人間存在はからっぽだということ、そして友人もからっぽだということなのだが、ただ一つ違いがあるとすると、彼女は休学していて、友人は内定が出て春から社会人だということである。彼女は内心彼らが良い企業に入って浮かれているだけで、やりたいことも無いし、目的も無いことを見透かしている。だが、それはかつての自分の姿だからこそ、よく理解できてしまうのである。だが、彼女が見落としているのは、友人達の幸せは決して保証などされていないということだ。目的もなく、ただ良い企業だから入社した、というのは、ただ良い大学だからそこに入学した、と何一つ変わらない。ということは、今彼女がからっぽで1人ぼっちでいるように、結局彼らもその企業でからっぽで1人ぼっちになるということである。だが、恐らく彼女が抱えているルサンチマンはそこではないのだ。彼女はまだ大学受験を引きずっている。E6の中で、友人らの就職活動とE6の大学受験は全く同じ地平にあるのだ。そして自分は失敗して、彼らは成功した。そして、彼女は被害妄想で、彼らがあてこするように、それを彼女に伝えていると思っているのだ。自分たちは成功した、貴女は失敗した、と。「実存的貧困」状態にあるE6は間違い無く今、暗いルサンチマンを抱えている。ということは、「自傷的存在証明」の中でも、最も危険な方角へ進んだとしても何らおかしくないのである。

E6とのインタビューも次のパラグラフで最後なのだが、敢えて解説を入れずに長いままで引用した。彼女の抱えている「孤独」と「絶望」に特に解説は必要ないからである。家族にも学校にも居場所が無かった彼女が見つけた、世界でたった一つの居場所が今の担当ホストだという哀しい現実を、否定することは余りにも残酷過ぎる、と感じる。

原田 377：こう、君の人生を振り返ってみて、楽しかった思い出とかってないの？このころすごく面白かった、みたいな。充実してた、みたいな。

E6-377：一番楽しかったのは、その3番目の人（※現在の担当ホスト）と会った時かなあ。最初はすごい楽しかった。

原田 378：最初は。

E6-378：今はもうそれが当たり前になっちゃったから、別に特別感ないし、ドキドキ感もないけど。

原田 379：その人が居場所なんだよね、君の。たぶん。

E6-379：だから居ないとダメなんです。

原田 380：居ないとダメなんだ。その人が居なくなった人生というのは考えられない？

E6-380：まあどうせ生きていくんだろうけど。うん。

原田 381：絶望的な気分になる？

E6-381：どうしようってなるのかなあ。

原田 382：もうその思いは知ってるわけだね、彼はね。君がそのくらい好きで好きでたまらないということを。それに対して彼はホストをやめて君と結婚するみたいな具体的なことを言ってくれないの？

E6-382：なんかそれ言ったら、ホスト上がったら結婚しようねって言ったら、営業みたいじゃん。って言われて、で、別になんか、今別れたいとか思ってないし、まあいずれホストは上がるものだから、上がって就職して、落ち着いて、その時結婚願望があったら結婚したいなとは思うよ。とは言う。

原田 383：なるほどね。で、それを気長にそばで待ち続けるんだ、じゃあ。

E6-383：あと、なんかその、病気を克服できたら結婚しようねって言われた。

原田 384：今一番つらい病気の病状っていうのはなに？

E6-384：え、躁鬱がつらい。

原田 385：つらい。鬱の状態と躁の状態どっちがつらい？

E6-385：躁の方がつらい。躁が来たらいつ鬱がくるかわからないから。

原田 386：でも循環してるっていうのは自覚してるの？躁と鬱が。

E6-386：うーん。なんか、まずじっとしてられないし、薬飲み忘れると。で、なんかもう普通じゃないのもわかるから。

原田 387：自分でわかる。

E6-387：自分でわかるから、薬飲んでないと普通じゃないなってわかるから、それがつらい。

原田 388：でもリーマスを飲んでると、普通の状態がずっと続く？

E6-388：うん。普通に。

原田 389：ADHD だというのは自分で気づいたの？それとも誰かから言われたの？

E6-389：ぼいってずっと言われてて、で、なんか躁鬱にも関係するって言われたから調べてみたらそうだった。

原田 390：たぶんこれで間違いないだろうと。パニック障害が出始めたっていうのはどのくらいの時期？

E6-390：それはもう、2、3年前だと思う。

原田 391：今はもう克服した？

E6-391：まだ、あんまり電車は好きじゃない。前みたいに一駅ずつで吐いたりとかはしない。

原田 392：しなくなった。それ起こるのは電車だけなの？

E6-392：電車と、あと、なんだろ、バスとかもダメだし。タクシーとかは窓開けれるしだらってできるから平気だけど。

原田 393 : 自傷癖が始まったのはいつくらい？

E6-393 : 中学生ですね。あ、小学校かな。

原田 394 : そんなに早いんだ。それは人がやってるのを見て？それとも自分で？

E6-394 : 自分で。

原田 395 : 気づいた時にはもう切ってた感じ？

E6-395 : うん。

原田 396 : 最初切ったところはどこ？

E6-396 : ここ。

原田 397 : リスカ。

E6-397 : リスカ。

原田 398 : リスカ専門？

E6-398 : リスカ専門です、わたし。もうだいぶ消えたけど。

原田 399 : 今はもうやってないんだ。

E6-399 : 今やってないですね。めっちゃキレイになったからもうやりたくない。

原田 400 : どちら辺まで切ったの？

E6-400 : ここ（手首）からここ（肩下）まで切ってて、,,

原田 401 : 全部切ったの。

E6-401 : ここは縦に切ってて。

原田 402 : 目立たないね、でも。遠目に見るとね。

E6-402 : 近くで見たりアルコール入ると出るんですけど。

原田 403 : ああ、うっすらとね。でもそれはもう、言わなきゃわかんないレベルだよ。リスカしてる時は気持ちは落ち着いた？

E6-403 : うん。なんかだいたい、最後の方は OD してる時にリスカしてたから記憶ないんですよ。

原田 404 : それって精神科の薬を飲んでたってこと？

E6-404 : そう。

原田 405 : 中学時代から？

E6-405 : 中学生の時は、いじめられてて、たぶんまあ親に構ってほしかったのかな。それでやってて、で、高校くらいは忙しかったし、勉強してたから特になくて、で、大学になってからは、精神科も行くようになったから、薬飲んだりお酒飲んだりしてる時にやってた。

原田 406 : OD は死ぬ気でホントに飲んでた？

E6-406 : えー。ブロンを全部飲んだときは死ぬかなあって思いましたけど。ま、死ななかった

けど.

原田 407 : 生きててラッキーだったと思う？

E6-407 : いや、もうその時は本当に死にたい時だったから、なんか飛び降りた方がよかったなあって思い返してて、でも OD してる時ってなんか、よくわかんないこと言うじゃないですか。それで、ずっとなんか、サーカス団がいて、綱渡りしろってベランダに追いやられてるの、みたいなのをずっと言っていたらしくて。だから飛び降りたかったんだろなって思って。

原田 408 : そういうことをやって、普通は親とかすごい泣いたりして、もうやめて、みたいなこと言うと思うんだけど。

E6-408 : 親は脱法ハーブやってると思ってましたね。

原田 409 : そうなんだ。脱法ハーブになるんだ。怒られたの？じゃあ。

E6-409 : もう早く寝てって言われて終わった。

原田 410 : OD してるのに？死にかけてるのに？

E6-410 : うん。

原田 411 : こう、中学校の時も構ってもらいたかったんだと思うっていう風に言っていたけども、その気持ちって今もあるんじゃないの？

E6-411 : 今はもう構って欲しくないです。

原田 412 : 構って欲しくない。ただ褒めて欲しいだけ？

E6-412 : 褒められることなんもないから。

原田 413 : なんかこう、君を見てると、なんだろう、心の蓋というか、バケツというか、が穴が開いてて、どんな言葉もすり抜けていくというか。愛情を注いでも愛が溜まらないというか、なんかそういう人に見えるんだけども、それって今だけ？それともずっとそうなの？

E6-413 : ずっと、そうかなあ。幸せの量が人より少ないと思ってるんで、自分。

原田 414 : うん。心の中に幸せが溜まらないって感じる？やっぱり。

E6-414 : うん。すごい小さいんです。普通の人はいくらもあるかもしれないんですけど、わたしはこのくらいしかないから。

原田 415 : でも、ちっちゃい入れ物だったらすぐ溜まって、幸せいっぱいになるんじゃないの？

E6-415 : んー。だから新しい幸せはやってこないし。

原田 416 : 幸せが溜まらない。

E6-416 : 溜まりすぎたら怖い。

原田 417 : 怖いのか？

E6-417 : 怖い。

原田 418 : なんで？

E6-418：幸せになるのは怖い。

原田 419：幸せになってはいけない人なの？君は。なんでだろう。

E6-419：なんもしてないから。

原田 420：なんもしてないから？幸せに値するような人じゃないと思ってるの？

E6-420：うん。だからその、好きになれるのも何かががんばってないと好きになってもらえないと思ってる。男の子に対して。お母さんと一緒に。何もしてない状態で好きなんかあり得ないから。

原田 421：あり得ない。

E6-421：何かしてなきゃ好きになってもらえないと思うし、それの方が嘘っぽくて嫌。

原田 422：「ありのままの君でいいよ」っていう言葉を誰も言ってくれなかったの？

E6-422：言われたことない。

原田 423：親からも？

E6-423：し、今までの付き合った普通の彼氏も、みんなヒステリー起こしたらわたしのせいにするから、こうやって起こさないようにがんばらなきゃいけないんだ、って思ってたし。

原田 424：ヒステリックになった理由っていうのは、男の側に問題があるの？

E6-424：たぶんないんだと思います。いきなりなっちゃうから。どうしても。なんかそんなに怒らなくていいことをすごい怒ったり責めたりしちゃうし。

原田 425：君が？

E6-425：そう。

原田 426：彼氏のことを？

E6-426：癇癪持ちというか、癇癪起こしちゃう。

原田 427：感情のコントロールができないんだ。

E6-427：できない。

原田 428：そうすると男の人は去っていくんだ。

E6-428：なんか「もっと普通にしてよ」って絶対言われるんですよ、どの人にも。それこそホストにも言われたことあるし、「もっと普通にして」って。それを唯一言わなかった人だから。

原田 429：でもその今の担当さんは君のありのままを受け入れてるんだよね、たぶん。

E6-429：そういうことに入るのかな。

原田 430：だからそんなに離れたくないんだろうし、大切なんだろうしね。

E6-430：うん。

原田 431：なんか、すごくこう、こんなに頑張ってるのになあって思うよね。君を見てるとね。

E6-431：頑張ってますか？

原田 432 : いや, 生きてるだけですごくない? そんな辛い人生を.

E6-432 : んー.

原田 433 : と, 自分だったら思うけどね. そんなに頑張らなくていいよって逆に言ってあげたいけどね. 極端な話, 君が頑張ってたかったら相手にしてくれない男を相手にするなと言いたいけどね.

E6-433 : んー.

原田 434 : 頑張らなくても生きていける人生ってあると思うし, 君がヒステリーを起こしてもどうどう, みたいな, また怒ったかぁみたいに軽く流せるような男と出会ってもらいたいと思うし, いると思うし. そのくらいおおらかな人というのもね. そっちの方がなんか, 楽じゃない? 生きてて.

E6-434 : うん.

原田 435 : 君は本当の君を押し殺して生きてるみたいだけでも.

E6-435 : うん. だからその人はホントに一緒に居て楽なんです.

原田 436 : なるほどね. そっか. まあでも, その人とお金なしでも会えちゃってるわけだからね.

E6-436 : そう.

原田 437 : そうすると本当に君が働く理由っていうのはその人のバースデーイベントを最高の思い出にしてあげたいって, それだけ?

E6-437 : それだけ.

原田 438 : それだけなんだ.

E6-438 : 夢を叶えてあげたいだけ.

原田 439 : その夢が叶ったらもう風俗で働くのはやめる?

E6-439 : 次は, わたし自分がハワイ島に行きたいから, そのためにお金ちょっと貯めるために頑張って, うん. そっからまた考え直すかな.

原田 440 : なるほどね. で, 来年一年は休学をして, 心と体を休めて, 卒業はすると.

E6-440 : うん.

原田 441 : でその後は未定.

E6-441 : 未定です.

原田 442 : それはあえて未定なの? それとも考えたくない?

E6-442 : んー. なんか, 良い企業に行きたいのって, 結局みんなお金が良いからじゃないですか.

原田 443 : まあそうだね.

E6-443 : でもわたしってお金もう貰えちゃってるから, なんかみんなほどの熱量がない, ん

ですよ.

原田 444 : なるほど. でもそのお金って期限付きじゃない?

E6-444 : でも結局じゃあその企業で一生働くのかとか, わたし女の子だから一生その仕事するのかとか考えたら, なんか, 生涯年収稼いじゃったほうが良くない? と思っちゃうし.

原田 445 : ああ, 若い間にね.

E6-445 : そう. なんか, 何の仕事を自分がしたいのかとかも, もう一回考えなきゃいけないなと思って.

原田 446 : なるほど. 自分のモラトリアムの時間を維持するためにも風俗はないといけないんだね. 場所的に.

E6-446 : なんか何するにもお金って必要だから, じゃあなんか音楽とか映像とかの専門学校行って勉強しようかなって思ったらお金必要だし, それで親に出させたらまたなんか言われるから, 自分で出せるようにまあ持っていけるし. なんか趣味にしてもカメラ欲しいと思ったらばって買えるし, それに必要.

原田 447 : なるほどね. じゃあちょっとそろそろ最後のまとめの質問したいんだけど, キャバクラとか風俗で働くことの意味って, 君にとってお金を稼ぐ以外になにかあった?

E6-447 : 意味? 効率の良さ.

原田 448 : 時間はまあ.

E6-448 : 時間がお金なんだって, 人の時間はお金なんだって覚えとくといいいですかね.

原田 449 : それは, それ以外にもたぶん, いろんな人だと例えば出会いがあったとか, あと, そうだな, 世の中のことを知ることができたとか, あと, こう, 誇りをもって仕事ができたとか, 自分に自信が持てたとか, いろいろ働く意義を言う, まあ出てくるんだけど, 聞くと. 君はそれ以外には何かある? わたしにとって風俗で働くってこういうことだなあって. お金を稼ぐ以外にある?

E6-449 : ないです.

原田 450 : ないか.

E6-450 : うん. 方法であり手段って感じ.

原田 451 : もうお金以外の意味はなにもない.

E6-451 : 考えたことない. あ, でも, 何の仕事でも気配りって必要なんだってというのは思ったかも.

原田 452 : あともう一つ最後に聞きたいのが, やっぱ若い女の子が性風俗で働くというのは, 自分は偏見に晒されてると思うんです. で, ある女の子は, 大きい荷物持ってる, 風俗嬢って一発でバレるから, こう, 車から降りた瞬間に, 「あ, 風俗嬢だ」とかって言われたことがすっご

く傷ついて、あの、わたしたちってそういう目で見られてるんだとか、汚い人間って思われてるんだみたいなこと言ってへこむって言ってたんだけど、そういう目で見られてるっていうのは感じる？

E6-452：別に見られててもなんとも思わない。

原田 453：思わない。それは自分が汚くないから？それとも世間体を気にしない人間だから？

E6-453：汚い仕事だって思わないから。

原田 454：なるほど。

E6-454：人よりお金貰って何が悪いの？って思うし。じゃあそうやって言う人って、じゃあ風俗行かないんですか？って思うし。

原田 455：一番稼げるのは AV だと思うけども AV はやる気はない？

E6-455：AV はやる気ない。

原田 456：それはなんで？

E6-456：例えばもし結婚して子供がネット社会で自分で見つけて、お母さんって AV 女優だったんだ、って思って、まあそれこそ偏見がまだあったとして、いじめられたらかわいそうだから。

原田 457：なるほどねえ。だと、一応やっぱりそういう偏見には配慮した仕事を選んでもらうんだ。

E6-457：んー、まあ。まあまあ。ソープやってる時点で警察官とは結婚できないですけどね。

原田 458：あ、そうなんだ。

E6-458：うん。保健所のやつ警察が管理してるから。名簿に名前載ってる。

原田 459：もうバレバレか。警察官には。なるほどねえ。でもそういうリスクを考えてもやったわけだよね。リスクを背負ってね。

E6-459：ま、そこまで考えてなかったですけどね、最初は。続けてるのは別にリスクがあっても金稼ごうと思うから。

原田 460：正直今の段階だともう風俗で働いてる理由＝金のため＝ホストクラブに行くため、みたいに思ってしまうんだけど、そうすると君の生きがいはホストクラブに行くことみたいになっちゃうのかなあ。

E6-460：今は、今の時期はそう。だけど別に 12 月とかは全然そんなことなくて、ただ生活費稼いで、あとはぐうたらしたかっただけ、みたいな感じ。

原田 461：効率良く生きていくための武器が風俗なんだね、君にとって。

E6-461：そうそう。そうですね。

E6-420「うん。だからその、好きになられるのも何かがんばってないと好きになってももらえないと思ってて。男の子に対して。お母さんと一緒に。何もしてない状態で好きなんかあり得ないから。」という彼女の

考え方は完全に新自由主義を内面化している。無償の愛を得たことがない、頑張らないと相手にして貰えない、など、典型的な虐待サバイバーの思考に陥っている。E6-448「時間がお金なんだって、人の時間はお金なんだって覚えとくといいいですかね。」という信念は、時間単位で性を切り売りしている自分自身の体験と、ホストクラブで時間単位で愛を買っているという両方の体験を通して、彼女の中で確たるものになっているのであろう。だがこれは、莫大なお金さえあれば、人生すら買える、ということを意味してしまう。彼女は、お金で人の心は買えない、と言った自分の言葉との矛盾に果たして気付いているだろうか。そして、風俗で働く意味はお金以外に無いと言い切る彼女にとって、この世界は居場所でもないし、無論何一つエージェンシーを発揮する余地がない。彼女にとっては、売春行為は完全に自傷である。本当に、いつ死んでも構わないのかもしれない、と思ってしまう程ヴァルネラブルでパワーレスな彼女に対して、「なにかがなされなければならない」と切実に思う。従って、彼女はやはり貧困なのである。

第6節 比較群の女性達（F群）の研究

第1項 4人の女性達の概略

(1) 本節では、A～E群までの女性達と比較するために、彼女達と同様に感情労働をしながら女性性を売りにし、かつその業務にスティグマが伴わない存在として、ある程度社会的に認知されたアイドル・女優・タレント等の所謂芸能人の会話分析を簡易的に行う。7人の調査を行ったが、本項では、本研究に関連して意義深いナラティブが見られた4人（平均年齢23.50歳）の女性達について考察する。

成育過程から見たF群4名のIWMの欠損率は、50.00%であり、そのうち1名が4つの心理検査においても全て不良の数字を示したため、実存的貧困率は25.00%である。経済的に「相対的貧困」の状態にあった者は1名もいないため、絶望的貧困率は0.00%である。量的研究の結果から見ると、F群は全ての群において最も良好な精神保健の状態とはいえ、女子大生平均を下回る結果となっている。実際、心理検査の結果は、15領域中4領域で女子大生平均を下回った。全てにおいて女子大生平均を上回ることを当初は想定していたのであるが、この結果は正直意外であった。ただ、7人中2人が児童虐待の被害者、また2人がいじめの被害者であり、この4人が全体の平均値を下げている一方で、他の3人は、女子大生平均に比べて大幅に良好な数字を示した。従って、F群の女性達は、状況的にかなり二極化している傾向が見受けられた。極めて良好な精神保健の状態を示した3人からも明らかな通り、スティグマが伴わない芸能の仕事は、IWMが欠損していない女性にとっては非常に大きな自信をもたらすことが確認される。ただ、3人中1人は、難病を抱えており、また過去にもかなりトラウマティックな経験があるため、数年前までは本当に絶望的で、上京したての時は水商売で働いていた経験も語った。売れるまでは生活が厳しいのが芸能界の常識であり、自分の今の良好な精神保健は、明らかに経済的にも社会的地位も安定した現在だからであると断言している。数年前に同じ心理検査を行えば、相当悪い結果になったと思う、と自虐的に語っていた。彼女のナラティブは比較分析に入れていないが、タイプとしては、壮絶な過去を乗り越えて極めて良好な精神保健を手に入れ

た C1 に近い。

心理検査の中でとりわけ目立ったのは、「ミロン臨床多軸目録境界性スケール」の結果で、F 群の平均点は 6.143 点であり、女子大生平均の 3.640 点をかなり上回っている。実際、女性達には、精神医学的に病的な水準の者が半数近く見受けられた。生活史に目を向けると、他の群に比べるとかなり恵まれているが、それでも児童虐待が 7 人中 2 人に確認されており、結果的に IWM の欠損が確認された。母子家庭出身者が 2 人いるが、インタビューを分析しなかった他の F 群女性を含めて全体的に判断しても、他の群に比べて酷く家庭が荒んでいる訳ではない。ただ、E 群の「高学歴」群と同様に、裕福ではあっても機能不全の状態に陥っている複雑な家庭環境は確認された。明確な虐待が存在しない者でも、いじめは確認されており、誰の眼にも美しいという状態は、周囲からの嫉妬や僻みを受ける要因となり、集団の中で悪目立ちしてしまう可能性を示唆した。それが原因なのか、彼女達の半数以上が、何らかの生きづらさを抱えて生きている印象を受けた。

結論として、F 群の女性達は女子大生平均を心理検査の結果が下回ったように、必ずしも一般人と同等ではない。無論、比較群であるためにサンプル数が 7 人と小さく、断定的なことは言えないのであるが、芸能人という間違い無く他者からの「承認」が得られる仕事を子供の頃から志向している事実から推察されるのは、やはり彼女達も何らかの「生きづらさ」なり「不安」を抱えて生きているのではないかと、ということである。実際にそれを裏付けるナラティブも散見された。女性としての最大の価値が容貌にあるということは、A～E 群の女性達が繰り返し語ってきたことである。その観点からすれば、F 群の女性達は自信に満ち溢れていなければならないはずだが、必ずしもそうではない。寧ろ、芸能界という美が乱反射している場所においては、自分の容貌に自信が持てずにコンプレックスを抱いている女性さえいるのである。その状態は、キャバクラ嬢として六本木の有名店で働く A3 の悩みと同様である。新自由主義の際限の無い競争原理は、やはり芸能界においても働いており、一般人よりも容貌が優れているから、という理由だけで女性達が幸福になれる訳ではないことが、F 群の心理検査の結果とナラティブの両面から確認された。

コード	年齢	職業	IWM	実存的貧困	経済的貧困	その他特記事項
F1	24	アイドル				短大中退, 精神障害, OD
F2	20	アイドル	○	○		高校中退, いじめ, 虐待, 母子家庭
F3	25	女優	○			いじめ, 精神障害
F4	25	元アイドル				
	23.50		50.00%	25.00%	0.00%	

第 2 項 4 人の比較群（アイドル、タレント等）女性の物語

(1) 本項では、性風俗産業に従事する女性達と同じように、男性に対して感情労働を行う若い女性達として4人の現役・元アイドルの簡易的な会話分析を行う。メインとなるのは、現役の某アイドルグループのセンターを務めるF1である。彼女の語りを中心にしながら、他の3人のアイドルの会話も随時織り交ぜて、とりわけ、C群の中で検討した性風俗産業に従事している地下アイドルのナラティブと比較したい。地下アイドルが、本当に生活苦から「過剰営業」を行っているのか、それとも「承認」を求めて性風俗の世界に参入しているのかをはっきりさせるには、本物のアイドルとの語りを比較させる必要があるだろう。また、地下アイドルの「闇」と「病み」は深く、それが『承認』をめぐる闘争に彼女達を駆り立てているのだとすると、地下であろうがメジャーであろうが関係なく、「会いに行けるアイドル」というシステム自体に問題があるのかもしれない。その点も会話分析の中で解き明かしていきたい。

地下アイドルの全員が口を揃えるのが、満足にお金が貰えない、ということである。比較的成功しているC7以外は、生活を支えるために、性風俗産業で働くことを余儀なくされていた。一方、本当のアイドルは同じようなライブ活動とファンミーティングを通して、どのくらいの所得を得ているのかをまずはストレートにF1に聞いてみた。

原田 11：ライブとかをやり続けて月にお給料ってどのくらい貰えるものなんですか？

F1-11：んー。わたしたちはめちゃめちゃ貰ってましたね。正直。まあ、いいのかなあこれ。前の事務所との契約みたいなものがあるんですけど、金額じゃなくて大体どれくらい、っていう雰囲気でもいいですか？えっと、1人暮らしを、好きなもの食べて好きなもの買って、もう光熱費とかも全然気にしない、1日中電気つけてても全然貯金できるくらいのお金です。

原田 12：1人ひとりにタワーマンションがあてがわれてるみたいな感じですか？

F1-12：まあでもそうですね、たぶん、家賃20万円でも大丈夫です。はい。それくらいは貰ってました。

既に、この段階で、地下アイドルと本物のアイドルには尋常ではない経済格差があることが理解される。一般には、家賃というものは、所得の17%以内と言われる。その感覚で言えば、20万円の家賃でも全然大丈夫ということは、F1には、最低でも約80万円は収入があると推定される。ちなみに、姫乃(2017:187)が『職業としての地下アイドル』で行ったアンケートでは、地下アイドルの平均収入は、12.7万円となっているが、実は姫乃本人がこのアンケートは失敗だったと指摘している。姫乃本人にも本研究においてインタビューをしたのであるが(姫乃のインタビューは、今回は採用しない)、姫乃自身がアンケートに答えてしまったために、平均値が上がってしまったのだという。そして、姫乃の友人には姫乃同様に個人でプロデュースしている地下アイドルが多く、彼女達3人と姫乃の収入が平均値をかなり上げてしまった結果が12.7万円なのだというのであった。そこで、外れ値の影響を受けない中央値を知りたい旨伝え、後日、姫乃から

教えて貰ったアンケートの中央値は4万円である。推定80万円の月収と、推定4万円の月収。これが、テレビのゴールデン帯に出演する本物のアイドルと、ファン以外はほとんど知名度がない地下アイドルの格差である。やはり、地下アイドルが生活をするのは、1人暮らしでは不可能というC8の指摘は正しいようだ。また、C9がホストにハマってソープランド嬢になったのも当然である。月に80万円は、若い女性が東京で1人暮らしをするには十分であるが、ホストクラブでエースを務められる額では全くない。芸能人であっても、ホストにハマれば身を亡ぼすということである。

次に、F1には、アイドルの闇について尋ねた。地下アイドルに「闇」と「病み」があるのは公然の秘密であるが、それが給与から来るものなのか、感情労働から来るものなのかを知りたいからだ。そして、端的に言えば、やはり感情労働であるアイドルにも同じような「闇」と「病み」があった。単に、所得が高いから、多くのファンに「承認」されるからという理由だけでは、その「闇」は解消されないようだ。

原田 22:なるほど。アイドルをやっていて、良かった事と悪かった事を挙げてもらおうとすると、一番良い事ってなんですか？

F1-22: んー。ファンの方っていうか人の気持ちを思いやれるようになりましたね。ファンの方がいるから正直がんばってた部分があったんですよ。前のグループを辞める前の1年とか。ファンの人たちがいるから、ほんとに一生懸命やろうっていう。もうそのためだけにやってましたね。だから人を思いやれる気持ちっていうのが学生の時ちょっと足りなくて。始めてからはちゃんと人のことを思って発言できるようにと、なりました。

原田 23: 悪かった事は？嫌な思い出とか。

F1-23: えー、悪かった事、んー、別にそんなにないんですけど、,,、えー、なんだろうな.. 嫌だったこと,,,. 生活が不規則、とかですかね。やっぱりあの、わたしは結構ゴールデンのテレビとかにも出させてもらってたんで、一時期。なんかそれで、んー、それがストレスになっちゃったりもしてたのかなって思います。人前に出ること。なんかそこで分かったことなんですけど、自分メディアに出るのあんまり好きじゃないんだなっていうのは思いました。なんか先のことを考えるとそれだけでもうなんか胸が苦しくなるというか。テレビの事考えるとあーって気が重くなっちゃったりとか。で、それで眠れなくなっちゃったりして。で、結局生活が不規則になったりとか。

原田 24: うつ病になったのってその辺ですか？

F1-24: うつ病になったのはテレビバンバン出てたちょっと後くらいで。たぶん一気に疲れがうわって来て、で、そのころやっぱり××××の面倒も見てもらえなかったっていうのもあるし、◇◇◇◇(ライバルグループ)が結構上手く行ってる時期っていうのがいろいろ重なっちゃって、なんか倒れちゃったんですよね、ライブ前に。急に。わたしが。なんかあんま覚えてない

んですけど、倒れちゃったんで。

原田 25：で、病院に運ばれて？

F1－25：なんか、気が付いたらタクシーに乗ってたんですよね。わたしたぶんその頃、心療内科から薬貰ってて、精神安定剤と睡眠薬。で、たぶんなんかもう頭おかしくなっちゃってて、ライブ前にそれ一気に飲んじゃったんですよ。だから気が付いたらタクシーとかにいて、で、お客さん、家着きましたよ、みたいな。

原田 26：それは死にたかったわけではないんですよね。

F1－26：別に死にたくはないんですけど、もういっぱいいっぱいになっちゃって。なんで自分はこんなことやってるんだろう、みたいな感じ。なんかここまで犠牲にしてやる事なのか？って思う反面、でも自分にはこれがなくなったら何ができるんだと思っちゃうんですよね。それでいっぱいいっぱいになっちゃいました。

原田 27：それはどのくらいで治りました？

F1－27：えっと、もう活動自体休止しちゃったんですよね。1回わたし。もう人前に出ない、っていう休止して。2, 3週間。で、まあ1か月くらい、なんか診断されてから復帰するまで1か月くらいだったんですけど、たぶん今思えば半年ぐらひはうつ病の前兆というか、うつ病だったのかなっていうのは思いますね。なんかこういう時とかに急に泣き出しちゃうんですよ。なんかもう、悲しくないのに。人と話してる時も急にこうやってなったりとか、なんか寝てる時に急に自分がちゃんと呼吸出来てないとか思うんですよね。で、なんか、これヤバいなと思って病院に行きました。

F1－25「なんか、気が付いたらタクシーに乗ってたんですよね。わたしたぶんその頃、心療内科から薬貰ってて、精神安定剤と睡眠薬。で、たぶんなんかもう頭おかしくなっちゃってて、ライブ前にそれ一気に飲んじゃったんですよ。」というナラティブは、芸能界の闇を表している。一見華やかに見える世界であるが、やはりそこには過剰な競争が存在する。F1 は、当時のプロデューサーから、彼がプロデュースしている新しいアイドルグループを推したいと言われて、ショックを受けたのだという。そして、そのタイミングで、グループの初期メンバーの1人が脱退した。センターとしての重責がF1にのしかかる中で、ファンが少しずつ離れていくのを感じ、かつ、自分達よりも推したい、と言われた後輩にあたるライバルグループは急成長していった。その苦しさに耐え切れず、F1はODをしたのである。幸い大事に至らなかったが、これによって、F1は休養に入らざるを得なくなった。

アイドルという仕事自体が過剰な競争原理の下に晒されており、本家ともいえるAKB48でも、センターの前田敦子がステージで過呼吸を起こすのである。それ程のストレスを抱えながら仕事をしている別のアイ

ドル・F2にも、アイドルの苦しさを訪ねた。F2は、グループにおいて歌詞も担当しているのであるが、尋常ではないくらいネガティブな歌詞である。アイドルらしからぬその歌詞は、本気で書いているのか、それとも敢えてアイドルの価値観とのギャップを狙っているのかを尋ねた。

原田 64：でもなんかこう、××××××とかぎょつとするような歌詞ですよ。本当に思ってた？

F2－64：それが思ってた、日記とかに書いてたのを使ったら、なんか、ヤバイね、みたいな。

原田 65：ヤバイよね。なんていうかこう、アイドルとして売る時に、すごいこういうネガティブな言葉とか生きにくさみたいなもの、もちろん、でんぱ組.inc.とか、こういう世界観出してるバンドは他にもあるけれども、ああいうのと比べてもヘビーじゃないですか？それはこの路線で売れる自信というのがあります？

F2－65：うん。でも、うん、頑張ればあると思う。

原田 66：やっぱり自分と同じように生きにくい人っていうのはいっぱいいると思う？

F2－66：思います。

原田 67：アイドルの世界ってそういう生きにくい女の人がすごく多い印象を自分は受けるんだけど、なんでそういう人って、こういう所に集まるんだと思います？

F2－67：え、でもなんか承認欲求がめっちゃ強いと思うんですよ。

原田 68：それ感じますよね。

F2－68：うん。だからだと思う。なんか、誰かに認められればいいみたいなのを思ってるから、だと思います。

原田 69：だとステージの上でみんながコールをくれた時とかってすごく気持ちいいですか？

F2－69：うん。

原田 70：生きてるって感じがする？

F2－70：うん。

F2－67「え、でもなんか承認欲求がめっちゃ強いと思うんですよ。」というナラティブは、地下アイドルだけでなく、メジャーのアイドルも「承認」に飢えていることを示している。そして、F2は自分は子供の頃から生きにくいのだという。いじめに遭ったりして、ひきこもったこともある。そうした過去の負の体験を今は歌詞に込めて表現したものが、iTunesでも最もダウンロード数が多いことに自信を得ているという。最初は大丈夫かな、とF2自身も不安に思っていた歌詞に対して共感し、お金を払って曲を購入してくれるたくさんのファンがいる。そしてそれは、本音を抑えたマイルドな歌詞よりも、ずっと多いのだ。今後も、F2は自分の中の「闇」と「病み」を隠さないという。F1、F2が自分自身の「闇」について語ってくれたので、

F3 にも、何故アイドルにはそんなに「闇」があるのか、という話をした。有名なアイドルグループにも過去にいじめられていた、という存在は多い。乃木坂 46 の初代センターの生駒里奈も二代目センターの白石麻衣もいじめの被害者だった。そして、インタビューでも決して彼女達は光の部分だけを語らない。しばしば、アイドルとしての苦悩や自尊心の低さを語るのであるが、それが今のアイドルの主流なのか、それとも単にあざとくファンの同情を引きたいだけなのか、個人的な意見を F3 に求めたところ、彼女も F1、F2 同様の自分自身の「闇」と自尊心の低さを告白した。乃木坂 46 のメンバーが語る「闇」には、F3 自身が大いに共感するという。

原田 176：なんでそんな自尊感情がないんですか？

F3-176：わかんないんですけど、でも子供のころから自殺したいみたいな気持ちが強くて、今はもうないんですけど、なんかはっとしたきっかけで、あの、同級生に頭良い男の子がいて、なんか強く感電するとわりと人は死ねるよ、みたいなこと言われて、そうなの？みたいな。なんかそれで、ああ、いつでも死ねるんだったらいいじゃん、みたいな感じでそこからあんま考えなくなったんですけど。それまではもう、死にたい死にたいっていうか。

原田 177：そんなに生きててつらいんですか？

F3-177：いや、そういう訳でもないんですけど。具体的に何が嫌だとかもないんですけど、慢性的にまあ鬱っぽいんですよ。

F3 までが、「闇」を告白すると、やはりアイドルという仕事を選ぶ人間は、承認欲求に突き動かされており、その背景には、かなりのコンプレックスがあるように思われる。そしてそれは、地下アイドルだろうが、メジャーアイドルだろうが、ほとんど関係がないようだ。そもそも、自分が歌い、踊っている姿を人に観て貰いたい、という欲求の下には、Honneth の承認論で言えば、強烈な愛と連帯の領域による「承認」を求める心性が伺える。だが、疑問に思ったのは、そもそもそのように、生きづらさを抱えている人間が何故多くのファンの前に立てるのか、ということである。自分に自信が無い人間が人前に出て歌い踊るなどということとは、そもそも矛盾なのではないか、という自分の疑問に対して、F1 が答えた部分を引用する。

原田 89：そうなんだ。いや、不思議だなあと思って。そんないじめられたり、生きにくそうな人が芸能界でファン、何千人何万人って相手にする仕事じゃないですか。なんでできるんですかね、そこは。

F1-89：あ、でももう、よく自分で思うのが、やっぱり全く知らない人と話す時に、やっぱりちょっと学生の時の思い出が蘇っちゃって、無視されるんじゃないかってびびっちゃうんですよ。だけど、アイドルとかやると、自分のことを好きになった人が来てくれるじゃないですか。

原田 90：なるほどねえ。

F1－90：だからこの人はわたしのことが好きなんだ，って思うと話せるんです。でもそれがどうかわからない人は，もう，怖くて話せないです。

原田 91：人見知りなんですか？だと。

F1－91：人見知りっていうんですかねえ。なんか人見知りのレベルじゃないような感じがしますね。

原田 92：人間嫌い？

F1－92：みたいな。なんだろう，なんか怖いんですよ。無視されたら，って。

原田 93：無視されるのが。

F1－93：はい。無視されるわけがないんですけど，普通に生活してたら，でも学校の時あったので，実際。なんかそれが蘇って来ちゃうんですよ。一瞬。一瞬，ほんとに一瞬。

原田 94：人生の中で一番つらいのって，その無視ですか？

F1－94：うん，結構無視とか，なんか目の前通った時にキモッみたいな言われたりとか。そういう感じですかねえ。でも，やっぱ学生時代が一番そういうのがつらかったです。今はもう全然つらくないです。

ここでF1が語っているのは，まさに『承認』をめぐる闘争である。彼女にとって一番辛いことは，「非承認」なのである。無視されること，これが彼女にとって最もつらいことなのだ。そして，実際そうされた学生時代の苦痛が今も忘れられないのである。だが，ファンはそれを癒してくれる存在なのだ。何故ならば，F1－89「アイドルとかやると，自分のことを好きになった人が来てくれる」からである。握手会に並ぶ人は，全員自分のファンなのだ。だから，怖くないとF1はいう。彼女は，自信が無かった自分をファンが癒してくれていると心から実感できるというのである。F1と全く同じことを，D9も語っていたが，彼女達にとってファンはかけがえのない存在だろう。

最後に筆者がアイドルをやる意味を問うと，F1は以下の様に答えた。

F1－130：んー，最近わたしそれ考えたんですよ。何のためにやってるんだろうっていうのがあったんですけど，わたしが活動してることによって，誰かの希望になれたりとか，光になれたり，なんか，原動力になったりしたら，1人でもそういう人がいるんだったら，今の活動をやる意味があるなっていうのは最近思いました。

原田 131：誰かの役に立ちたいっていう。

F1－131：役に立ちたい。はい。

F1 は、今誰かの役に立つことが自分のアイドルをやる意味であるという。彼女は「人生の意味」をしっかりと問うているのだ。そしてこれは、一つの模範解答であろう。そもそもアイドルはその語源が「偶像」である。祈りを捧げる対象なのだ。アイドルの仕事の本質として、自分が歌い踊って楽しむのではなく、自分達はファンのためにこそ存在しているのだという自己犠牲と献身がなければならないだろう。従って、その意味を問い続け、そこに辿り着いた F1 は、ファンが望む理想のアイドルであると言えるかもしれない。だが、彼女の考え方を否定する訳ではないが、それが唯一絶対の答である必要は無い。恐らく生真面目な彼女は真剣にそれを実践していくのだと思うが、自分の全く同じ問いかけに対して、F4 は F1 とは真逆の答を返してきた。F4 は、芸歴でいえば、圧倒的に F1 を上回る。AKB48 グループでセンターになることはなかったが、彼女は悔いのない芸能活動を送った、楽しかった、と語った。唯一の心残りは、普通の学生生活が送れなかったことだけ、と言い切った。そこにはこれまでインタビューをしてきた地下アイドルや、F1～F3 のような、そして今なおメジャーアイドルの中心的存在として活躍している乃木坂 46 や欅坂 46 の主要メンバー達が語るような翳は微塵も無いのだ。最後にそれを引用して、この項を閉じよう。

原田 116 : AKB というグループは F4 さんにとっては居場所だったんですね？

F4-116 : はい.

原田 117 : 居心地のいい居場所だったんですね？

F4-117 : うん.

原田 118 : じゃあこれが最後の質問になるんですけど、F4 さんにとって、アイドルをやるということは、どういう意味がありました？

F4-118 : んー、あたしがアイドルをやる意味？

原田 119 : 意味。〇年間の意味、なんでした？

F4-119 : んー、むずかしー、

原田 120 : やりきったって、さっき言いましたよね？

F4-120 : やりきりましたねー、アイドルをやった意味かー、,,,

原田 121 : まあ、芸能人をやった意味でもいいですけど.

F4-121 : んー、一番はあれな気がする。ステージに立つ自分が好きだから。ファンの人は勿論大切だけど、それより先に来るのが、わたしが一番好きだったのが、ライブとか、劇場公演なんですけど、それはもう、〇年間ずっと好きだったことで、マイクを持って、歌って踊る自分が好きだから？ 観られてどうかじゃなくて、普通にただ単にその自分が一番好きだから、辞めようと思っても、その時だけは,, 一番の幸せだったし、それがこう、誰にどう影響してるとかはまず置いといて、ただ単に自分が、その姿が一番好きだったから、やってみました。はははは
(笑) 答になってますか (笑)

F4-121「一番はあれな気がする。ステージに立つ自分が好きだから。」という自信に溢れた F4 の言葉にもきっとファンは共感するはずだ。屈託のない笑顔と語り、これもまたアイドルの王道の姿である。

結局、地下アイドルの闇の深さが何に由来するのか、そして、同じ年頃の女性が感情労働をすれば、スティグマと無縁で、かつファンから最大値の称賛が約束されているアイドルでさえ病むことはあるのか、を調べるためにインタビューを集めた訳だが、とりあえず、前者に関しては、やはり収入の安さとやりがいの搾取を挙げていいと思われる。同じ仕事をしていて、メジャーアイドルと 20 倍もの格差があれば、地下アイドルは病んで当然である。そして、無論感情労働もそれに拍車をかけるであろう。F1 は、アイドルはファンが集まってくる、だから基本的に「承認」されるのが当たり前で、傷付くことは無い、と主張するが、逆に F4 はアンチに叩かれた、それは辛いことだった、という。AKB48 グループの規模になると、ファンの数に比例してアンチが必ず付いてくる。そして、インターネット上ではアンチが垂れ流す嘘が実しやかに語られて、エゴサーチをすると、それで何度も心が折れそうになった、辞めたくなった、と F4 は語るのである。だが、最後に卒業公演をやりきって、今改めてアイドルとして自分がやって来たことの意味を振り返ると、自分のため、が一番に優先されていた、ということに気付いたのである。自分が楽しんでいる姿を見せることが、きっとファンが最も求めているものではないか、という F4 らしい答なのであるが、きっとこの感覚は、今の地下アイドルからは出てこない気がする。F4 の心理検査の結果は、今回のインフォーマントの中でもトップクラスだ。A1, B8, C1 などの自己実現組と同等なのである。そこから浮かび上がってくるのは確かな自尊心と未来に対する希望だ。結論を言えば、確かにアイドルという仕事は病む仕事であろう。アンチに対しても笑顔を返す仕事なのだ。その意味ではキャバクラ嬢達と何も変わらない。従って、比較群である F の心理状態が、想定以上に女子大生平均を下回っていた理由も納得できる。だが、やはり最も健全だった理由も納得できる。「承認」の強度が全く違う。そこには愛と尊敬がある。そして、何よりもスティグマが無い。幾らアンチが悪口を言おうが、それは人気と嫉妬の裏返しであり、力に変えられる類のものだ。だが、スティグマを力に変えることは不可能である。故に、本項の結論として、収入が高く、スティグマの無いアイドルでさえ、病むのが感情労働の怖さである。収入が低く、スティグマがある対人接客業に就いている女性達が普通の女子大生よりも病んでいるのは妥当な結果である、と結論付けて間違い無いであろう。

第 7 節 質的研究（52 人のインタビュー調査＋比較群 4 人）のまとめ

第 1 項 性風俗産業で働くということ：「現代的不幸」と「近代的不幸」の入り組んだ^{アンサンブル}総体

(1) これまで、52 人の性風俗産業に携わる女性達のナラティブを一つ一つ丹念に分析して来たが、そこから浮かび上がって来たのは、「現代的不幸」と「近代的不幸」が入り組んだ^{アンサンブル}総体である。その不幸の質や程度は、誰 1 人として同じでは無い。その有り様は、レフ・トルストイが『アンナ・カレーニナ』の冒頭に記した、「幸福な家庭はすべて互いに似かよったものであり、不幸な家庭はどこもその不幸のおもむきが異

なっているものである。」(Tolstoy=2018: 5) という名文の通りである。

比較的境遇が似ている数人の女性達をマッチングして比較分析した結果、幾つかなの特筆すべきことが見えて来た。

第1に、性風俗産業に従事する女性達は、学力が低く、家庭環境にも恵まれない経済的な貧困層の出身者が多い、「アンダークラス」の中でも不幸な類型の一つである。トラウマティックな失調要因を抱えている者が多く、児童虐待、学校でのいじめ、学校の中退、性暴力被害等が顕著に見受けられた。また、それを原因として、精神疾患を発症しているケース、或いは発達障害によって昼の仕事に定着できないといったケースも目立った。また、パートナーからのDVや中絶経験なども多く見受けられた。総じて、不幸な女性が多い印象である。なお、そういった個人的失調要因はインタビューの際なるべく聞き取りをするようにし、一覧表で整理した。内的作業モデルの欠損が、「実存的貧困」に該当するかどうかの判断材料の一つであるため、それに関連するものは全て記録するように心がけたところ、68（比較群のF群も含む）人中最も多かった失調要因は、「浪人・留年・中退」で、44人（64.7%）、次いで、「DV・ストーカー被害」が27人（39.1%）、「児童虐待被害」が25人（36.7%）となった。

第2に、性風俗産業を職業として見た場合、一見時給が高いように思われても、雇用保険、社会保険等の福利厚生が無く、常に失業のリスクと隣り合わせである。また、「夜」や「風」の世界は労働基準法などの昼の常識が通用しないが、そのような違法がまかり通っていることや、自分達が経営者達に搾取されていることさえ理解できていない女性が多い。中には、「夜」や「風」の仕事は昼の仕事よりも得だとさえ思っている者もいる。最後に検討したE6は、知的水準が高いにも関わらず、若いうちに生涯年収を稼いだ方が賢いと語っていた。そこには、老後の年金等の社会保障の概念が抜け落ちているが、これがそこで働く女性達の現実認識である。彼女よりも知的水準が低い女性達であれば、更に近視眼的な見方しかしていないだろう。なお、確定申告を行って納税をしていたのは、高額所得者のC1と、セックスワーカーのB8、B9の3人のみであった。

第3に、彼女達の仕事は「職業スティグマ」を負っているが、それを自覚しない者、或はそれを乗り越えた者も存在する。その場合、彼女達にとってその仕事は生きがいとなり、決して彼女達の全員が「実存的貧困」であつたり、不幸な訳ではない。だが、多くの者は「職業スティグマ」と社会からの偏見を実感しており、Goffmannがいうところのパッシングや劇化を通して、昼の世界や家族の中で自身のスティグマを管理することを余儀なくされている。そしてこれは、彼女達にとっての大きなストレスになっていた。

第4に、性風俗産業の仕事は、主に6つの機能を持っている。最上位の機能は、「自己実現機能」であり、これに達する者は稀である。インタビュー群の中では、わずかにA1とC1のみが、ここに辿り着いている。辿り着く条件は、仕事を「天職」と自覚することである。「天職」と自覚している女性は、「職業スティグマ」を乗り越えている。A1とC1の2人は、現在は周囲に仕事のことをほとんど隠していない。逆に、隠している限りにおいて、そこに真の誇りは無く、従って、天職になりえていない。ただ、一般社会にパッシングを

行いながらも、近親者の間ではある程度はパッシングを解除している者もいる。セックスワーカーを自認している B8, B9 などがそうで、彼女達はかなりのエイジェンシーを発揮してセックスワークに前向きに取り組んでいた。その場合は、限りなく自己実現に近いと考えても差し支えないであろう。B8 は心理尺度の結果も非常に高く、A1, C1 とほぼ遜色ないという結果がそれを支持している。

最上位機能の下に位置する、「上位機能」は、彼女達を人間として成長させ、仕事に生きがいや楽しさをもたらす可能性がある有意義なものである。それらは、①「承認獲得機能」、②「居場所確保機能」、そして③「社会関係資本構築機能」である。客や同僚達を通して得られる人的資源のネットワークは、「夜」や「風」の世界を引退し、昼職を探したりする時にも大きなメリットになったりすることもある。

「下位機能」は、彼女達を人間的に成長させるというよりも、ただ単に現在の生活を維持・安定させたり、アンダーグラウンドの世界を見てみたいという知的好奇心を満たしたりするものである。無論、下位機能も十分大切な役割を持っているが、これだけを主な目的としてしまうと、性風俗産業の中で人間としての成長が得られる機会は失われる。そして、仕事に従事している期間が長くなればなるほど、単なるルーティンワークに心が摩耗し、尊厳が失われてパワーレスな状態になってくるのが確認された。キャリアが長かった B1, B2 などにこの傾向は顕著であった。

④「生計維持機能」は、全員が性風俗の仕事のメリットとして最初に挙げるものであり、最も基本的な機能であるとも言える。会話分析の中で、当初、「お金以外に得たものは何もない」と答える女性が多いが、それは「得たもの」を最初は「有形物」で考えるからである。しかし、インタビューを続けて行く中で、彼女達は実はその仕事を通して自分達が「無形物」として様々なものを得ていたことに少しずつ気づき、そのナラティブは最終的には最初のものとは大きく変わって行くことが多々見受けられた。事実、「この仕事をして、心から後悔している」とインタビューの最後に答えた女性は C2 を除いて 1 人も存在しなかった。A13 のように、そこで出会った男性に手酷く裏切られて人生を滅茶苦茶にされた女性であっても、キャバクラが有ったから、とりあえず「命を繋ぐことができた」と「生計維持機能」には感謝しているのだ。性風俗産業が、表の社会から零れ落ちてしまった人たちにとって、生活保護の手前に存在する、「裏のセーフティネット」として機能しているのは、最早疑いようがない。

⑤「社会学習機能」は、比較的若い女性に多かった。自分が知らない夜や風の世界や表には出ないような「ヤバい話」を知りうるということは一種の優越感であり、アンダーグラウンドの世界に漂っている怪しい魅力なのかもしれない。しかし、これを単独で目的に挙げた女性は 1 人もおらず、性風俗産業で働く女性達は、基本的に「生計維持機能」を中核的な機能として活用し、無意識的に「承認獲得機能」、「居場所確保機能」を組み合わせているケースが最も多かった。「居場所確保機能」に重きを置く傾向が強い女性ほど、「夜」や「風」の世界での仕事が増えるケースが確認された。ただ、その場合エイジェンシーを発揮して、仕事に何らかの生きがいを見つけ出す群と、嫌な仕事と割り切り、深く考えないでルーティンワークとして淡々とこなす群に分れたが、後者の心理尺度は総じて低い傾向が見られた。

第5に、彼女達は、自分自身の「居場所」を求めて、性風俗の世界を自発的に移動する。会話が巧みでコミュニケーション・スキルに長けた者はキャバクラ嬢やラウンジ嬢として留まり、それが苦手だが、お酒が強い若者はガールズバーに、また容姿が若干見劣りする者や年齢が高い者はスナックやクラブに移行する。自分に自信を持っており上昇志向が強い者では銀座の高級クラブに務めた経験がある者が3名いたが、数が少なかったためそれぞれ経歴が一番長かったキャバクラ、ガールズバー、パパ活に割り振った。

コミュニケーション・スキルもお酒も苦手なものは、水商売の世界には居場所がなく、所謂風俗嬢を選択肢とする。男性と本番行為をすることに抵抗がある者は、とりあえず、店舗数が多いデリヘル嬢に移行しやすい。デリヘル嬢のように車に乗っている送迎時間が勿体ないとする者はホテル嬢に、また、移動すること自体が嫌で自分の個室を持ちたいものは箱ヘル嬢に落ち着く。男性客との本番行為に抵抗がない者は、「風俗の王様」と呼ばれるソープランド嬢になるが、本番行為は身体への負担が大きいため、粘膜が弱い等の理由で、非本番系サービスに戻る者も多い。

いずれの店舗にも属せない容姿のもの、障害や疾病のために店舗でトラブルを起こした者等は、自己責任で個人売春を行わざるを得ない。その際は、出会いカフェやデートクラブ等が利用される。昨今はインターネットが普及したために、SNSや匿名掲示板、各種マッチングアプリなど、個人売春の温床が多岐に渡っている。パパ活は、個人売春の亜形であり、基本的に食事だけの関係であるが、昨今は明らかに個人売春の様相を呈している。AV女優は、どの業態からでも容姿に魅力があれば専属女優としてスカウトされる可能性がある。昨今は自ら事務所に売り込む女性も増えており、「恵比寿マスカッツ」等の影響で、エンタテインメント業としての側面が強くなっている一方、強要被害などの問題も発生して来ている。専属女優として長く活躍するには、C1のように何か一芸に秀でる必要があり、そうでないものは、例え専属女優になったとしても、順次時間と共に企画単体女優、単体女優とランクが下がり、それに比例して収入も下がっていた。

今回の調査で会話分析を行わなかった業態としては、ピンサロ嬢やちょんの間の売春、イメージクラブ、回春マッサージ、SMクラブ嬢、セクキャバ嬢、チャットレディなどがあつたが、ちょんの間以外は経験者が複数おり、聞き取りをしたところ、さほどそこで働く女性達に特異性があるとは思えなかったため敢えて調査はしなかった。ちょんの間は、今回の調査対象として東日本ではほぼ壊滅しており、既存の二か所も高齢化が進んでいるため、調査対象とすると女性達の平均年齢が高過ぎて、心理検査の結果が女子大生平均との間に乖離が出てしまうために避けた。

なお、チャットレディはA群の女性に経験者が多かった。イメージクラブや回春マッサージで勤務経験がある者は主としてB群の女性が多く、セクキャバ嬢、SMクラブ嬢はC群のAV女優経験者に多く見られた。ピンサロ嬢は、出会いカフェに出入りしていた「最貧困女子」系に多かった。

風営法に規定がないが、明らかに性風俗産業のカテゴリに入るものにJKビジネスがあつた。特徴としては、女性の自己責任の側面が強く、管理売春に問われるのを避けるため、店舗側は女性の行為を基本的には完全に黙認している。従って、昨今では「裏オプショ

元々の添い寝・ハグ・おしゃべり・コスプレなど性的サービスを含まない基本オプションのみの店よりも、裏オプションが横行している、所謂「裏オプ店」が増えているという実感を得た。

給料は、スティグマの大きさに比例して高くなる傾向があり、一般的には専属のAV女優が月に50～100万円であるが、毎日休みなく出勤するのが前提であれば、日給が5～10万円を稼げるソープランド嬢が月収でAV女優を上回る場合が多い。それ以外は、業態と職種による明確な賃金体系の差は見えにくく、属人的な要素が強くなって、一概にこの仕事が稼げる、と断定的に言うことは難しい。時間給で言えば、非本番系の性的サービスであるデリヘルの方がキャバクラよりも当然高いのであるが、3日も指名が入らないデリヘル嬢と毎日出勤して時間給で稼いでいるキャバクラ嬢では給与は簡単に逆転する。とりわけ、六本木や歌舞伎町など日本有数の繁華街の有名店で働いているキャバクラ嬢やラウンジ嬢は時給が非常に高く、銀座のホステスは時間給ではなく、日給のケースもあり、その場合は風俗嬢以上に収入があった。従って、女性達は自分達が最も稼げる業態か、心理的にも身体的にも最も負担が少ない業態を試行錯誤しながら選択し、納得した場所で働き続ける、というのが性風俗産業である。なお、自分で仕事を取捨選択できない女性は、自分の給与からキックバックを取られることを承知のうえでスカウトを利用して、自分に最も向いている仕事や店舗を選択して貰っているケースも多々見受けられた。

第6に、性風俗産業において、いかなる業態であってもセクシャル・ハラスメントからは逃れられないことが分かった。「性風俗」というスティグマを帯びて社会から「夜」や「風」の仕事が「賤業」として蔑視されるのも、男性のそのような振舞に対して女性達が笑顔で感情労働を続けるからであると思われる。しかし、セクシャル・ハラスメントを喜んでいる女性は1人もおらず、仮に男性客が、「女性も楽しんでいる」と考えるのであれば、それは大きな誤りである。また、キャバクラやJKビジネスを筆頭に、一定数女性に恋をする男性客が存在するが、ほとんどの女性がそれを迷惑だと考えている。とりわけ、風俗産業は初対面が裸の関係であり、そこから恋に発展することはあり得ない、というのがインタビューをした女性のほぼ全員の答である（だが、実態としては、必ずしもそうでないことも確認された。）。

最後に、性風俗の仕事を生涯の仕事にしようと考えている者は1人もいない。セックスワーカーを自認しているものでさえ、自らの限界というものを弁えており、いつかなだらかにこの世界から引退していくものと皆考えている。水商売の場合は、最も若い順にガールズバー、キャバクラ・ラウンジ、クラブホステス、スナックという順番で居場所を移す。高級なクラブホステスやスナックの場合は、ママ（或いは経営者）として生涯の仕事にする場合もある。風俗産業の場合は、水商売と違って業態が多様化しており、キャリアパスのようなものは存在しないが、最も若い世代がJKビジネスを入り口にし、最も年配まで働けるのは熟女系の非本番サービスであると思われる。

水商売の場合、妊娠や結婚による退店は、比較的女性にとっては望ましい形での引退と思われているが、実際その後の離婚率も高い。それは、夜の世界で出会える男性は、昼の世界で出会える男性よりも、あらゆる意味でリスクが高いからである。彼らは、プレカリアートや同じ夜職の男性、生業不明等であることが多

く、それなりにステイタスの高い仕事に就いていたり、しっかりした肩書を持っている場合は、本人にとっては単なる「火遊び」の傾向が高い可能性がある。また、既述の通り、風俗業において客と恋愛関係に発展するというケースは極めて稀である。だが、インタビューをした中で、両親が風俗嬢とその客だった、というケースが実際に数名いたため、恋愛に発展する可能性は全くのゼロではないと思われる。ただ、その後が幸福な事例は一つも無かった。

以上が、第 4 章の会話分析から浮かび上がって来た性風俗産業に携わる女性達に関する事実の概略である。

第 2 項 性風俗産業で働く女性と「実存的貧困」

(1) これまでの考察の結果を踏まえると、性風俗産業で働く女性達には明らかに「実存的貧困」概念に該当する女性が多く見受けられた。だが、「実存的貧困」概念という計測しづらい概念がどのインフォーマントに該当するのかを恣意的にならずに判定するために、ある程度の基準が不可欠である。従って、本研究においては、暫定的に以下の様に定める。

「実存的貧困」は以下の基準 1～3 を満たす。「絶望的貧困」は、更に基準 4 を満たすものとする。

基準 1：心理検査において、「拡張版ホープレスネス尺度」、「多次元自我同一性尺度」、「自己肯定意識尺度」、「生きがい感スケール」の全てにおいて、女子大生平均を下回ること。

基準 2：「内的作業モデル (IWM)」の欠損が質的データから確認されること。

基準 3：本人の口から「虚無感」または「存在論的な苦悩」が明確に語られていること。

基準 4：「相対的貧困」以下であること

以上 1～3 の基準に該当する女性は、61 人中 31 人であり、50.81%である。更に、31 人の「実存的貧困」に該当する女性達の中で、経済状況が「相対的貧困」以下の者（基準 4 に該当する者）は 13 人おり、21.31%となった。従って、純粋な「実存的貧困」者は、18 人であり、29.50%である。

本研究の調査によれば、性風俗産業に従事する女性達のうち、約 3 割が、「実存的貧困」状態であり、彼女達は従来の貧困概念である、「相対的貧困」では捉えられない、再配分の必要がない貧困状態であると測定する。

なお、質的調査の段階では、明らかに「実存的貧困」状態だと思われた女性の何人かが、量的調査の結果、幾つかの心理尺度が女子大生平均を上回ってしまったために今回設定した基準では「実存的貧困」に該当しなくなってしまった。この点に関しては、今後も精緻化が必要であると思われる。基準 1 を満たさないが、基準 2, 3 を満たすものは更に 8 人いるため、最大に見積もって今回の調査において 26 人 (42.62%) が「実存的貧困」であると結論付けたい。「絶望的貧困」の 13 人と併せると 39 人 (63.93%) が貧困で、「なにか

がなされなければならない」状態であり，喫緊の支援を必要としている．

第5章 補足研究の分析とまとめ

第1節 トライアングレーション（量的研究）から見た性風俗に生きる女性達の「生きづらさ」

第1項 量的研究の結果と分析

(1) 「拡張版ホープレスネス尺度」の結果は、「対人領域（女子大生平均 4.130）」に対して、A～F 群の全ての群で不良な結果が示された。比較群である F 群でさえ、1 人の女性がかかり複数の精神疾患を抱えていたため、平均で女子大生を下回った。A～E 群においては、別紙 15:1 に示された通り、全ての群で顕著に女子大生平均を下回り、性風俗産業で働く女性達は、対人領域において肯定的な関わりができないこと、対人領域において、将来に渡って希望的観測を抱き難いことが示されたが、飛び抜けて不良な数字を示したのは C 群であった。C 群には、外れ値と言ってもいい C1 がおり、たった 1 人全検査において異常な高得点を記録したのであるが、それでもこの群が対人関係において最も絶望的である。C3, C5 の虐待被害者と、AV 出演強要被害者の C2, 発達障害が対人関係に大きな影響を及ぼしている C6 の影響が大きいと思われる。コミュニケーション・スキルに秀でていなければ務まらない A 群まで女子大生平均を下回ったが、これはそれが苦手でデリヘルに居場所を映した A6, A7 と生活保護受給者の A13 の影響だと思われる。他の群も平均して高い絶望感を示し、対人関係における苦悩の深さを物語っている。

「達成領域（女子大生平均 5.650）」では、比較群の F 群だけでなく、E 群も女子大生平均を上回った。E 群は高学歴にグルーピングされた 6 人がいるため、彼女達がこの領域で得点を引き下げたと思われる。E 群だけでなく、A～D 群に満遍なく高学歴の大卒女性がいるにもかかわらず、やはり総体としては対人領域と同等に不良な数字を示した。高等学校、専門学校、短大、大学を中退・留年している者が、全体の 35% を超え、それが結果に大きな影響を与えていると推測される。性風俗産業に従事する女性達が、学業成績において苦戦していることは、高校の偏差値からも理解される。平均偏差値は 47.5 と平均の 50 を若干下回っている程度であるが、これは中卒で高校受験をしていない 7 人とボーダーフリーの通信制高校出身の 7 人が計算に入っていないため、実際の平均偏差値は本来更に低い。高学歴の女性がいるのも事実であるが、一般論として、性風俗で働く女性達は主に学業や仕事の領域で挫折を味わい、達成領域にも強い絶望感を抱いていることが伺える。

なお、A～E 群、そしてデータのみ収集した G 群（62 人）を合わせた結果で両領域において片側の t 検定を行った結果、「対人領域」では、統計量： $t=6.18012824504212$ 、自由度 534、P 値は、 $P<0.001$ （0.00000000063605）である。「達成領域」では、統計量： $t=3.71547239763492$ 、自由度 534、P 値は、 $P<0.001$ （0.00011209796973）である。両領域において、「性風俗産業に従事する女性達の心理状態は、女子大生と同じである」という帰無仮説は棄却され、彼女達は、確実に広い範囲に渡ってホープレスネスな状態、すなわち「絶望」的な状態であることが証明された。

(2) 「多次元自我同一性尺度」の結果は、4 領域中 2 項目で帰無仮説が棄却された。また、全体として

も 5%水準で帰無仮説が棄却された。女子大生平均との差が最も大きかったのは、B 群である。「自己斉一性・連続性」、「対自的同一性」、「対他的同一性」、「心理社会的同一性」の 4 領域中「対自的同一性」以外の全てで女子大生平均を下回り、顕著なアイデンティティの拡散状態を示した。ただ、A 群は、各項目ごとに検討した際は B 群や C 群ほど差は大きくはない。だが、A 群は少しずつ 4 領域の全域に渡って女子大生平均を下回り、他の群ではアイデンティティが確立されている「対自的同一性」においても唯一、女子大生平均を下回った。これは A 群がモラトリアム状態で自分探しをしている女性が多いことを示している。事実、水商売だけでなく、昼の正業に就いた者、性風俗産業に移行したもの、失業中の者、専門学校に通っている者など、最も女性達の現在の状況に差異が見られた。彼女達は水商売を一つの一里塚として、自分探しの旅を続けているのである。逆に、それ以外の B~F 群においては、「対自的同一性」は全群が女子大生平均を上回り、少なくとも対自領域においてはある程度自己というものは確立されていることが伺える。

4 領域のうち、顕著に女子大生平均を下回ったのは、「自己斉一性・連続性」であり、これは比較群の F 群以外の全ての群で不良な数字を示した。虐待やいじめ、性暴力被害など、それまで築き上げたアイデンティティを毀損するような心的外傷体験が多く女性に見受けられることがその要因だと推測される。「対他的同一性」、「心理社会的同一性」においても、「自己斉一性・連続性」ほどではないが、アイデンティティの拡散が見られた。

総体としては、全群を合わせた結果で 4 領域において各々片側の t 検定を行った結果、「自己斉一性・連続性」では、統計量： $t=4.57614821850375$ ，自由度 518，P 値は， $P<0.001$ (0.00000296730858) で、帰無仮説が棄却された。また、「心理社会的同一性」でも、統計量： $t=1.79232407403836$ ，自由度 518，P 値は， $P<0.05$ (0.0368322544699528) であり、帰無仮説が棄却された。残りの 2 領域においては、「対自的同一性」は、統計量： $t=-1.59392926512303$ ，自由度 518，P 値は，0.94421908498635 で帰無仮説は棄却されなかった。同様に、「対他的同一性」でも統計量： $t=-0.120058333766088$ ，自由度 518，P 値は，0.547758255677299 となり、帰無仮説は棄却されなかった。4 領域の合計値では、統計量： $t=1.63724644399241$ ，自由度 518，P 値は，0.0510973103399329 であり、帰無仮説が棄却されるに至らなかった。

アイデンティティというものを多次元で比較検討した場合、性風俗産業に従事している女性達は、A 群を除き必ずしも全面的にアイデンティティが拡散している訳ではない。とりわけ、「対自的同一性」は、寧ろ女子大生平均を上回っている。だが総体として見た場合は、「自己斉一性・連続性」の領域で突出したアイデンティティの拡散を招いており、彼女達の過去・現在・未来が何らかの外傷体験によって上手く接続しない状況が引き起こされていることが推測される。また、心理的・社会的にも未熟な側面を持っているために、総体として、性風俗産業に従事する女性達は、職業の領域に強くコミットしていないため、Marcia が考案した「自我同一性地位 (Identity Status)」で捉えると、やはり「アイデンティティ拡散 (Identity Diffusion)」の状態にあると結論付けることができるであろう。

(3) 「自己肯定意識尺度」は、大項目が二つあり、それぞれに三つの小項目が存在している。「対自己領域」の「自己受容」、「自己実現的態度」、「充実感」の三項目中二項目で、女性達は顕著に不良な数字を示した。とりわけ、「充実感」は、A～E 群の全てにおいて、女子大生平均を下回った。「対他者領域」の「自己閉鎖性・人間不信」、「自己表明・対人的積極性」、「被評価意識・対人緊張」の三項目中、女性達は同様に二項目で顕著に不良な数字を示した。とりわけ、「自己閉鎖性・人間不信」、「被評価意識・対人緊張」の二項目において、A～E 群の全てにおいて、女子大生平均を下回った。

各項目で個別に片側 t 検定を実施した結果、「対自己領域」の「自己受容」では、統計量: $t=2.916349316625$, 自由度 290, P 値は, $P<0.001$ (0.00190905498461831) で、帰無仮説が棄却された。また、「充実感」でも、統計量: $t=2.9442426437037$, 自由度 290, P 値は, $P<0.001$ (0.0017497209145967) であり、帰無仮説が棄却された。「自己実現的態度」においては、C 群と E 群の数値が高く、女子大生平均をかなり上回っているため、統計量: $t=0.725653465804705$, 自由度 290, P 値は, 0.234318210079997 となり、帰無仮説は棄却されなかった。

「対他者領域」の「自己閉鎖性・人間不信」では、統計量: $t=7.47569640067123$, 自由度 290, P 値は, $P<0.001$ で、帰無仮説が棄却された。また、「被評価意識・対人緊張」でも、統計量: $t=2.22611589838385$, 自由度 290, P 値は, $P<0.05$ (0.0133873987048269) であり、帰無仮説が棄却された。「自己表明・対人的積極性」においては、A, B 群以外の数値が一様に高く、女子大生平均をかなり上回っているため、統計量: $t=1.24181789708456$, 自由度 290, P 値は, 0.107653571351214 となり、帰無仮説は棄却されなかった。

6 つの小項目中、三つの領域で 1%水準で帰無仮説が棄却され、一つの領域で 5%水準で帰無仮説が棄却されたことから、性風俗産業に従事する女性達の自尊感情は低いと結論付けられる。とりわけ、「自己受容」、「充実感」、「自己閉鎖性・人間不信」の三つは突出して低い。水商売や性風俗産業は強い「職業スティグマ」が貼り付いた仕事であるため、そこで働く自分を受け入れることができず、仕事内容にも充実感を持っていないのは当然である。また、「夜」や「風」の世界は本音で話せる仲間が少なく、基本的にはお店のスタッフや同僚、客も信頼できる存在ではないため、人間不信と自己閉鎖性が強まる。また、対人接客サービス業でありながらも、「被評価意識・対人緊張」においても女子大生平均を下回っており、他者から差別や偏見の眼差しを向けられることで女性達の自尊心が著しく傷付いていることが推測される。日本社会において、水商売や風俗産業に従事することは強いスティグマを実感することであり、未だに堅固な差別と偏見から社会的排除の対象となる以上、ごく一部の女性達からセックスワーカーとしての誇りややりがい主張されたとしても、そこで働くほとんどの女性達の自尊心は、未だに極めて低いままであることは、疑いようのない事実である。

(4) 「生きがい感スケール」は、高学歴の 6 人を含む E 群において、女子大生平均を超えたため、他

の群の低さ、とりわけ B 群の低さが埋め合わされる結果になった。また、C 群も総じて低いのであるが、C1 というレジェンド AV 女優が 91 というインタビュー群で 2 番目に高い生きがい感を示したために、全体が多少底上げされた。総体的には、全群を平均して、片側 t 検定を実施した結果、統計量: $t=1.81528059158818$, 自由度 234, P 値は, $P<0.05$ (0.0353804577955043) で、帰無仮説が棄却された。比較群の F が生きがい感において、当然女子大生平均を遥かに超える高い数字を示したように、「承認」が埋め込まれた仕事は本来かなりの生きがいややりがいの源泉になり得ることを示唆している。だが、やはり「職業スティグマ」が、性風俗産業に従事する女性達から生きがいを奪っているのだ。とりわけ、B 群の生きがい感の低さは尋常ではなく、これは、ルーティンワークと化した性労働が、彼女達に極めて強い負担感をもたらすことに起因すると思われる。B 群の仕事は、日々の業務量が最も多く、そこに従事する女性達は多額のお金が稼げる反面、最も生きがいややりがいから疎外されていることが伺える。

(5) 「ミロン臨床多軸目録境界性スケール 17 項目版」は、比較群の F 群も含めて、全群において不良な数字を示した。インタビュー群と非インタビュー群の数字の乖離が最も大きいのも特徴であり、インタビューに応じてくれる女性は、インタビュアーにすら依存したい心理が働いているのかもしれない。また、病的水準ではないが、F 群もかなり高い数字を示している以上、不特定多数の人間から「承認」されたいという心性の背景には、やはりある程度 BPD と共通する類の依存性や孤独に対する不耐性があると推測される。

総体的には、全群を平均して、片側 t 検定を実施した結果、統計量: $t=4.83446448596626$, 自由度 192, P 値は, $P<0.001$ (0.00000136429098447) で、帰無仮説が棄却された。

本尺度は、修士課程における質的研究の際、キャバクラで働く多くの女性達に BPD の傾向が強く見受けられたことから、博士課程の研究に際して追加されたのであるが、実際キャバクラ嬢を中心に構成された A 群 (7.846) において、その傾向は最も顕著に見受けられた。全体として見た場合でも、女子大生平均 (3.640) を遥かに超える 6.143 は、カットオフポイントの 10 点には届かないものの、インタビュー群においては実に 27%を超える女性がカットオフポイントの 10 点を超えており、明らかに精神病理学的な水準にあった。一般人口に占める BPD の割合が多く見積もって 5% (DSM-5 では、中央値は 1.6%とされる) 前後とされる中、この業界にその 5 倍以上の BPD の女性が集まっている現状は、異常な状態であると指摘することができるであろう。BPD は、児童期の虐待と密接な関係があると指摘されているが、本研究のインフォーマントの多くに児童期の虐待が見られたこととの因果関係は深いと思われる。岡田は、愛着障害の指標の第一に BPD を挙げるが、「実存的貧困」の中核に愛着障害がある、という本研究の仮説はこれによってほぼ証明されたと思われる。岡田は BPD 以外にも、愛着障害の指標として、児童期の気分障害、摂食障害、ADHD 等を挙げるが、これらも多くの女性達に見受けられた疾患群である。一方で、愛着障害とは関連性がない統合失調症は、多くの女性達が極めて劣悪な精神保健の状態にある中、ほぼ見受けられなかった (F・G 群の各 1 人のみ)。

第2項 「実存的貧困」概念の妥当性

(1) 前項の心理検査の結果から、本研究における「実存的貧困」概念の構成要件を、性風俗産業に従事する女性達の多くが満たしていることが証明された。繰り返しになるが、「実存的貧困」の定義は、『実存的貧困 (existential poverty)』とは、心理学的な「内的作業モデル (IWM)」の欠陥を抱え、非物質的な困窮状態を抱えた者が、ポストモダン社会特有の『実存的不安』を、何らかの要因(図4で示した様に、マクロ・メゾ・ミクロの各段階に要因が存在する)で時に精神医学的に病的な症状を持つ『実存的空虚』の段階にまで悪化させ、かつその生育歴の中で社会的排除に直面し、その過程においてスティグマを自らに内面化した状態である、と定義される。そして、質的研究の調査結果によれば、その状態は、必ず以下の4つの心理・社会的欠損状態を引き起こしている。すなわち、①希望の喪失、②自我(アイデンティティ)の未形成、③低い自尊感情、④生きる意味の不明瞭性、である。

前項で分析した5種類の心理尺度の検査結果は、完全にこの定義を裏付ける結果になった。Franklが提唱した「実存的空虚」は、必ずしも精神医学的に病的な状態ではないが、深い苦悩は実存神経症に達することをFranklも指摘している。実際、インフォーマントの半数近くが精神科或いは心療内科に通った経験があり、中には神経症水準どころか、境界例水準、或いは精神病水準の者も多く見受けられた。そして、インタビューの会話分析でも示したが、はっきりと「生きる意味」が分からない、と主張する者が多かった。質的調査及び量的調査の両面から、性風俗産業に従事する女性達の精神保健の状態は一様に悪く、それらの多くは精神病理学的症状を抱えた「実存的空虚」であると見做しても良いであろう。病理学的水準の重さは、「ミロン臨床多軸目録境界性スケール17項目版」の劣悪な数値からも明らかである。

第1章で述べた通り、「実存的貧困」概念の中核は、愛着障害である。インタビュー群がフェイスシートを記入する際、主な精神疾患は全て○で囲む形式で記載した。岡田が愛着障害の指標に挙げたBPD、摂食障害、児童期の気分障害、ADHDは、極めて高率で見つかった。とりわけ、61人のインタビュー群中、BPDの21人(心理検査から判別)、気分障害の18人は、特筆すべき数であろう(摂食障害とADHDはそれぞれ5人)。

成育歴において社会的排除を実感している者も、非常に多かった。児童虐待率32%、学校の中退率が35%を超え、彼女達の家族及び学校における居場所の無さは顕著であった。幼少期の社会的排除状態は、長じてからも概ね変わらず、その結果、彼女達は昼の正業から排除される形で、スティグマが強い「夜」や「風」の仕事に従事することになっている。彼女達の社会的排除は、金銭目的で性風俗産業に従事した時から始まったのではなく、人生の早期から上記の理由以外にもいじめやDV、ハラスメント等様々理由で体験されており、ほぼ全員が「夜」や「風」のスティグマを内面化している。特に、「実存的貧困」が根深いと感じたインフォーマントは全員が自分自身に対して、スティグマを内面化した厳しい言葉を向けた。

質的研究によって、クラスター化された4項目は、量的調査によって、ほぼ全面的に支持された。「拡張版ホープレスネス尺度」の異常な高さから、女性達に①希望の喪失が発生していることは確実である。多く

の女性達は、生きる意味を見失っており、未来に対して具体的で力強い目標を述べる者は少数派であった。

「自己肯定意識尺度」の全面的な低さは、彼女達の③低い自尊感情を実証した。多くの女性が「わたしなんて」、「所詮」といった、後ろ向きな言葉をナラティブの中で多用したことも象徴的だった。②自我（アイデンティティ）の未形成及び④生きる意味の不明瞭性、は、「多次元自我同一性尺度」の低さによって証明された。とりわけ、「自己斉一性・連続性」は突出して低く、彼女達が過去から外傷体験に苦しめられ、自己を形成する力が奪われ続けてきたことを、質的研究と量的研究の両面から実証された。そして、「実存的貧困」が単なる非物質的な困窮状態ではなく、今直ぐにでも「なにかがなされなければならない」パワーレスな状態であることは、女性達の「拡張版ホープレスネス尺度」の異常な高さに加えて、「生きがい感スケール」の低さが物語っている。彼女達は、明確に社会福祉の支援の対象であり、本人達が支援を希望しないから、或いは福祉実践の現場に表れないからという理由で彼女達の実存的な苦悩を看過して良いものではないことは明らかである。そして、次節で検討するが、支援者や当事者達の多くはそれに気付いている。だが、その支援方法や、関わり方、女性達の捉え方に対しては共通の理解がなく、結果的に効果的ではない支援が押し付けられたり、或いは女性達が不要とするような支援を支援者側が押し付けたりして、信頼関係を損なってさえいるのが、今の女性の貧困をめぐる社会福祉の現実である。それを、支援者・関係者のインタビューを通して次節で検討する。

第2節 トライアングレーション（質的研究）から見た性風俗に生きる女性達の実態

第1項 支援者の立ち位置：中立派・社会福祉系（X1, X2）

(1) これまで社会福祉の領域においては、性風俗産業で働く「女性の貧困」問題は、長らく一部のフェミニストや婦人保護事業にかかわる社会福祉実践家によって担われてきた。だが、第2章等で検討したように、ラディカル・フェミニズムは、女性の気持ちに寄り添うというよりは、自分達のイデオロギーを女性達に強要し、教化・更生するという姿勢が明確であった。そして、そのやり方が全く女性達のニーズにそぐわないため、全国の婦人保護施設が大幅に定員割れしている状態が続いている。また、福祉機関に相談しても仕方がないと、行政を頼る者すら少なくなり、結果「社会保障は性風俗に敗北した」という言説が、マスメディアでまことしやかに喧伝されている。そのような既存の社会福祉のあり方に一石を投げようとしているのが、X1 や X2 の取組みである。彼らは、従来の女性を教化・更生しようという立場を明確に放棄している。そして、薬物やホスト等女性が依存する対象から無理に引き離したりする支援の形を否定し、「承認」を欠いてきた女性達に、まず「承認」を与えて信頼関係を構築し、少しずつ成長を促しながら、「夜」や「風」の世界との共存、或いはそこからの穏やかな卒業という道筋を探っている。支援の立ち位置としては、明らかにストレングス・モデルに立脚した、エンパワーメント・アプローチである。また、X1 が主宰する出張型の相談支援事業などは、今の社会福祉に欠落しているアウトリーチの実践であり、非常に示唆に富む。

X1－5：今その障害者の性と風俗ですね。二つ合わせてやってる感じですけども。

原田 6：だと結論としては風俗の世界にソーシャルワークを持ち込みたい、という視点なんですかね。

X1－6：ですね。ただ、それも自分の中で第一段階みたいな感じがあって最終目標として性風俗の社会化、なので、性風俗の世界で働いてきた、しかも安心安全に働けて、色んな差別も出来るだけ減らして、もちろん多分ゼロには出来ないと思うんですけども、減らして、出来るだけローリスクミドルリターンくらいで稼げるような世界になれば良いんじゃないか、っていうのが、そこら辺が多分ゴールとしてあるので。それを実現していく上で風俗の世界で起こっている言葉をそのまま社会に出しても全く多分聞き入れられないと思うんですよ。（中略）社会福祉っていうフィルターを通して、社会福祉の言葉に翻訳すればすごく通じると思うんですよ。出張型相談事業で一枚かめば、そこで起こったことがすごく分かりやすく解説できるじゃないですか。現場で起こっていることが。そういった意味で、風俗と社会を繋ぐ一種の翻訳者みたいな形で相談事業が機能して、その結果として風俗の世界をもっと良い方向に向かうような政策提言とか出来ればなーっていうのがすごく思ってるんで、だからアウトリーチ型の相談事業はあくまでも初めのファーストステップくらいのイメージですかね。自分の考えとしては。

X1の主宰する支援団体・Kのミッションは、「性の社会化」が第一義であり、必ずしも社会福祉的な支援で女性達を助けて行くことが目的ではない。だが、「性の社会化」を目指す中で避けて通れないのが、「女性の貧困」の問題であり、性風俗の搾取のメカニズムであるとX1は捉えている。そして、彼が展開しているアウトリーチ事業（弁護士・臨床心理士或いは、弁護士・社会福祉士（或いは精神保健福祉士）の2人組で風俗店の待機所に出張して相談援助を行う）は、「風俗と社会を繋ぐ一種の翻訳者」と彼は考えている。

原田 27：だから考え様によっては居場所がない女性達に居場所を作ってあげれば風俗に引っ張られる、ということはないのかなって気はするんですけど、そういうことはどう思いますか？

X1－27：んーでも風俗が居場所でも良いんじゃないかと自分なんかは思っちゃう部分があって、やっぱその昼の社会にないものが夜の世界にあるからみんなこっち側に行っちゃう訳なんで、それはやっぱ引っ張られるのを防ぐのはすごく難しいと思うんですよ。ちょうど今日午後からJK ビジネスの店と連携してアウトリーチ事業やるんですけど、やっぱ話聞くと皆さんその一、なんか地下アイドルとかバンドとかそっち系の人にみんなハマってる訳ですよ。

原田 28：ハマってますよね。

X1－28：多分それに代替するくらい魅力的なものを社会の中で用意出来ないじゃないですか。用意しようがないし。だからそっち側に行くのは悪、って決めつけて良いかっていうとそれもな

んか違うんで。だから彼女たちが踏み外さない程度、そういったものにハマっても色んな教訓が得られるようにしていく方が現実的な気はするんですよね。多分そこから引っ張り出してなんか昼のコミュニティに無理やり突っ込んでも多分意味がない。だから安全に、夜の世界を安全にしていけるしかないような気はするんですよね。結果的には、もちろんいっぱい昼に居場所があればそれに越したことはないですけど。多分あんま通じないんじゃないかなって気はしますね。

原田 29: なるほど。正直私も同じ立場で、おそらくそうやって作ってあげたところで、止まらないと思うんですよね。そういったものに行く理由というのは。

X1-29: そうなんですよ。多分やっぱまあ福祉の歴史とか見てもやっぱ婦人保護施設とかシェルター系あんまり上手くいってないじゃないですか。その点はそれだと思うんですよね。ひっぺがしてきて、隔離しろってのはたぶん無理。

原田 30: 無理ですよ。

X1-30: 明らかに。それは限界だし。

X127「皆さんその一、なんか地下アイドルとかバンドとかそっち系の人にみんなハマってる訳ですよ。」というナラティブは、本研究でも確認されている。A10 がアイドルに憧れて足繁く坂道グループの握手会に通っていること、D5、D6 等、非常に多くの女性達が主としてビジュアル系のバンドマンに依存していることがこれまで何度も示されたが、何かにハマるというのは、実存的フラストレーションを抱えた女性達にとって当為であり、X1 のナラティブは、JK ビジネスに関わる若い女性達もまた、その多くが「実存的貧困」状態にある可能性を示唆している。そして、X1-29 が指摘しているように、「ひっぺがしてきて、隔離しろってのはたぶん無理。」という認識は正しい。これが、明治時代の矯風会以降、日本の婦人保護事業が繰り返してきた、教化・更生路線の限界なのである。全く同じ認識を、支援団体・L の X2 も感じている。

原田 17: やっぱあっち側の当事者に寄り添う人たちは、わたしからすると、こう、本当に完璧な被害者という像しか描きたくなくて、そういう像しか発信したくなくて、本当に完璧なる被害者っていう風に捉えると逆に女性を傷つけてるような気がするんですよ。なにかこう、そこでじゃあやりがいをもって働いちゃいけないのかとか、そこで誇りをもって働いてるセックスワーカーの人はどうなるんだと思ってしまうと、彼女らだって当事者なのに、彼女らがなんか違う人みたいな、罪悪感も感じずにそういうことやって、みたいな、フェミニズムの敵みたいにか、見做す風潮がなんかその当事者に寄り添う側の支援団体から非常に感じられて。でそういう、誇りをもって性風俗をやってる方に対して X2 さんはどういったお考えですか？

X2-17: わたしは、あの、あのね、よくある話で、施設の職員でもすごく多いんですね、特に施設の職員と一緒に暮らしてきた子供たちだから、その一緒に暮らしてきた子供たちが巣立った

後性風俗で働いてる、それで、まあ、そこでトラブルがあって渋々自分の施設に相談した時に、そのトラブル、まあ搾取されてたりとか、なにかこう暴力振るわれてとか、そこに目が行く前に、まず、「なんで風俗なんかで仕事してたの？」っていう所から始まるんですよ。それで、その子はただ解決したいだけで、風俗を、まあその店は辞めるとしてもまた店を変えたりとか、そういう思いもあって、風俗自体をどうのこうのっていう話ではないのに、一つの職としてこんな困ったことがあってどうしようって相談してるのに、受ける側の職員、大人が、「なんで風俗なんかで働いてるんだ」、そこから始まって、「とにかく辞めろ」みたいなところから、まず辞めさせる、二度とそこに足を踏み入れさせないためにどうするかっていうので、本人のそういう倫理観、倫理っていう話が持ち上がったとか、「風俗で働いてるからそういう目にあうんだ」みたいなところの説教みたいなのが始まる。で、結局その問題解決する前に、相談した子たちなんかは「もういいよ」、って、「もう連絡が取れなくなっちゃった、それでどうしたらいいですか？」っていうので、たまにこういう、今みたいな相談が施設の職員からうちに来るんですね。うちは、それをジャッジする、あの、なんていうかな、辞めさせるための、その子が辞めたいって言うてるのに辞められないんだったらどれだけでもその手助けはするけど、あなたが風俗をダメだって言ってそれを辞めさせるためにLさん力を貸してくださいって言ったって、そんなことしませんよって言うんですよ。で、それを辞めなさいって言うんだったら、その例えば生活費とか家賃とか次の仕事見つかるまでのすべて生活をね、サポートするだけの、なんていうかな、あの、思いとかそれだけの支援をするだけのつもりでいるのかっていうところ、なぜ風俗はダメなのか、っていうところの本人が納得できるまでの説明や答や、んーなんていうかなあ、考えを持っているのかっていうと、わたしが嫌なだけ、って結局そこに何もみんな突き詰めてないんですよ。なんで風俗って嫌なんだろう、なんでこんなに嫌悪感感じるんだろうっていうのを聞くと、なんでダメなのって聞くと、別に法的に違反じゃないよねっていうので、こう仕事として認められて、原田さん言うように働いてる人いっぱいいるよねっていうので「なんで？」って言うと、自分が嫌かどうかだけ、っていうところで、子供に働くな、みたいな、なんでだ、の説教してっていうことで、そりゃ子供も離れていくよ、っていうかまあ相談した子も離れていくよっていうので、で、うちは風俗だろうがなんだろうがそこで困ってる、こんなことになってる、それを解決したい、っていうのであればやるけれど、風俗だから、何だから、ダメだみたいなことは、わたしたちの範疇ではないと正直思ってるのね。ただ、あの、そこでやる上でこんな危険が伴うよと、こういうリスクが他の仕事と比べたらあったりするよということ、それは相談もいっぱい受けてきてるからそういう話はできるし、あとあなたが辞めたいと思った時にサポートができるよとか、辞めることを選択して、辞められないという風に思ってる子もいるので、自分はこれでしか食っていけないと思ってる子もいるので、辞めたいと思ったらこんな選択肢がある、ということ

も伝えるとか、そういう前向きな、っていうか、あくまでその子が選択していくところの情報を伝えたりだとか、その問題のみを解決するっていうことは、そういうサポートはわたしたちは支援をLではやるけど、いやもう性産業、風俗なんて、とんでもないっ、辞めなさい、みたいなことをわたしたちは支援と思ってないので、協力できませんって言って。言うとか、じゃあまず、でも、やっぱりこのまま途切れたままじゃあれだから、もう一度相談、何か困った時に相談貰えるような環境をもう一度作り直したいから、どうしたらいいですか？って言うから、そしたらまずあなたのその価値観とか倫理観とか、なぜ風俗が嫌だっていうところをまず自分で整理するっていうところから始めないと向き合えないですよ。だから結局向き合えないんだなあっていうか。

「そしたらまずあなたのその価値観とか倫理観とか、なぜ風俗が嫌だっていうところをまず自分で整理するっていうところから始めないと向き合えないですよ。だから結局向き合えないんだなあっていうか。」という X2 の嘆きが、今の社会福祉の婦人保護施設や児童養護施設の職員の限界を物語っている。「Biestek の 7 原則」のうち、受容 (acceptance) や、非審判的態度 (nonjudgmental attitude)、利用者の自己決定 (client self-determination) などの、基礎的な部分すら、彼らは全く実践できていないのだ。結局、人間の「性」の問題が絡むと、支援者の中の価値観や倫理観が重視されてしまい、目の前の女性の個人の尊厳に思い至らなくなってしまう。これは、実は支援者の側の自己覚知ができていないからであり、支援者の側に、「統制 (Controlling)」や「反動形成 (Reaction formation)」という未熟な防衛機制が発動しているのである。

原田 85: 私はソーシャルワーカーなので技法論としてちょっと研究している部分があるんですよ。ソーシャルワークの様々なトリートメントスタイルというものがあるんですけども、(中略)

X1 さんは何か支援にあたって、そういった理論であったり関わり方みたいなものって持ってますか？

X1 - 85: 理論ですよ。そんな自分理論理論で感じじゃないんですけど、ただやっぱり実際現場ではまずこう関係性をそもそもつくらないとどうしようもないじゃないですか。上からのお説教じゃ当然きかないし、意味が全くないので。まずはその女性の方々とまず信頼関係をつくるためにきちんと聞く姿勢であったりとか、そんな特殊なことをやってるわけでは全然ないと思いますけど。ただ一般のソーシャルワークで言われてるところの非審判的態度であったりとか共感的傾聴とか基本的なことをやってちゃんと関係性をつくった上で、長期的に支援していくっていうベーシックなことが出来れば良いのかなって思いますね。でも女性個人だけじゃなくて背景にある家族とか子供とか夫とか恋人とか、そっち側にもうまく視点をひろめることが出来れば。そういう特殊なことは全然やってないと思いますね、ソーシャルワーク的にみて。

ソーシャルワーカーとして専門家ではないので、特に理論的なことはやっていないという X1 だが、少なくとも、X2 の下へ助言を求めに来る婦人保護施設や児童養護施設の職員に欠けている「非審判的態度」やラポールに対する X1 の意識はしっかりしている。また、アウトリーチやエンパワーメントの大切さを理解している点でも、資格がなくても十分にソーシャルワークを実践している、と言っても過言では無いであろう。改めて、社会福祉においては、資格の有無ではなく、大切なのは価値観と倫理観であることを痛感する。ソーシャルワークの土台となる価値観・倫理観において、既に支援が成り立っていない既存の社会福祉施設の職員に比べれば、遥かに X1 の関わり方の方が実践的であり、かつ効果的であるように感じられる。そして、その価値観や倫理観は、やはり X2 の女性達に対する関わり方にも共通する。

X2-19: そうですね。話さないとやっぱりお互いの理解できないし、うん。その、その場にも立たないっていうのがね。確かに。で、わたしはいつもそれ、なんか女性の、えっとそういう団体の前に、公的な女性の支援あるじゃないですか。自治体にある女性相談員とか、婦人保護施設とか、母子施設、母子生活支援施設とか。だから婦人保護施設なんてガラガラなんです。だから、ガラガラで、どんどん今閉鎖に追い込まれて。それが物語ってるんですよ。結局、窓口に立つ人で、ま、婦人保護施設の職員なんかでもすごく色々な声を聞いて頑張ってる、いろんなところと繋がろうとか、あと全否定じゃない職員だったり施設長もいるんだけど、多くがなんかやっぱり「被害者」みたいなところはあると同時に、「なぜそれをしたの？」みたいな説教的な、やっぱり審判的な、あるから、みんな女性相談のところに行かないんですよ。基本的に自治体に女性相談員みんな、なんか配属されてて、そこに行けばいいとか言うけど誰もそんなところ行かないし、そこでの相談者の人に対しての支援者の姿勢ってなるとやっぱり上から目線だったり、いつでもこう、ジャッジの体制にあるから、まずそこにちゃんと声が届かないし、繋がれる公的にある女性支援というところが婦人保護施設であったり女性のそのシェルターみたいなのあるけど、「あんなムシみたいなところ誰も居たくない」って言って結局みんな出てきちゃうから、わたしたちももうそこに繋がらないでそれでもうめんどくさいから女性支援の、所謂公的な女性支援につなげたってそこでより窮屈な思いとか、そこでなんか変な女性からの被害と言うか、変なジャッジを受けたり、説教受けたりっていうのを、それだったらもう普通に生活保護をだとか、あって、女性としてのうんぬんのサポートっていうのをきめ細かにされるどころか、そこで傷つけられるのであれば、生活保護を受けて、そのケアはこちらでしていくとか、お便り専門のあの、医師のところと繋がるとか、カウンセリングとか、そんな風にしちゃってて、その仕組みも本当に、なんていうのかな、やってる側の自己満足みたいになってるからガラガラなんだよ、ほんとに困った人が、ここに居たいとかここにたどり着きたいとか、ここに来てよかったって思えるんだったら、なんていうかな、足を洗いたいって思ってる人だっているだろうし、性風俗の

あれじゃなくても性被害受けてて助けを求めたいと思ってる人がなぜそこに繋がらないのか、っていうのは、相談者側の問題じゃなくてやっぱり支援を提供する側がなんかガチガチに、うん、なんていうかな、作ってるものとか、あるからやっぱりそれを、なんかそういう人たちみんな敏感だから感じて、そこに行かないですよ。そうだったら、理解ある風俗店の店長のとことか、より安全に「ここならまだ大丈夫」とか思えるところで働いて自分でお金をきちんと貯めて自立していくとか、そういう福祉の力借りないでそうした方がいいや、っていうところで、福祉よりもそっちを選ぶっていう人も、何人もいましたね、わたしたちも。だから申し訳ないと思う、女性のシェルターどうのこうのとかは、だからもう、正直、あんな携帯取り上げられて、あんな刑務所みたいな感じで、正直女性の相談員、そこにいる相談員の質もすごく低い所に、せっかく相談に来てくれた人をそこに入れるとか繋げるっていうのは、わたしたちはもうしてないですね。だったらもう、えっと、ビジネスホテルでわたしたちシェルター持っていないのでビジネスホテルで、えっと、土日とか挟む場合は相談があったらそこに居てもらって、それでもう、普通に生活相談のところに行くように言って、この方がすぐ生活保護受けられて、アパートに住むための支援を受けられるように、という手続きを交渉していくっていう感じになってってるのもすごく、うん、自分も、つらいというか、つらい、じゃない、なんか、うん。ほんととはそこももっと婦人保護施設の方ともね、やっぱりあの、どうやったら変えていけるか、それも変えて行かなくちゃとみんな思ってるんですけど、この古い制度というか、古い体制。

(2) X1 や X2 らに代表される、既存の社会福祉の婦人保護事業や児童福祉事業と距離を置く立場を、本研究では、「中立派・社会福祉系」と呼ぶ。立ち位置としては当然社会福祉学を土台としているのであるが、彼らが所属しているのは、メインストリームの社会福祉学ではない。寧ろ、既存の婦人保護事業を担ってきた林や宮本らの実践、或いは、昨今「アダルトビデオ出演強要問題」の急先鋒となっている HRN や PAPS、そして当事者性を全面に出して女子高生達の支援を行っている民間団体の Colabo 等がこれまで続けて来たラディカル・フェミニズムに基礎付けられた取組みこそが、保護・教化という従来の社会福祉学の流れを汲む、近年のメインストリームであろう。事実、マスメディアが大きく報道するのは、こちらの取組みの方だ。だが、果たしてそこに実効性はあるのであろうか。本研究を通して浮かび上がって来たのは、性風俗で働く女性達は明らかに困窮し、苦悩し、支援してくれる誰かを切実に求めているのであるが、そこで従来の支援機関はほとんど選択肢に上がることも無く、心から求められてもいないという哀しい現実である。また、一定数成果を上げている民間団体にしても、その立ち位置は必ず「被害者救済」の姿勢を崩さず、結果的に「加害者」の男性に対して剥き出しの敵意を示す。だが、その支援のあり方、そしてその支援の背後にある支援者としての価値観・倫理観は社会福祉学の理念に相応しいのであろうか。

『セックス・ワーク 性産業に携わる女性たちの声』は、性風俗産業に携わる女性達が「被害者」として

扱われるのを拒み、エイジェンシーを持った存在であることを社会に強く訴えたものである。1989 年にこの本が出版されるまで、アメリカ社会においても、やはり性風俗産業に携わる女性達にはスティグマが一方的に貼り付けられていた。そして、「ふしだらな女性」という「娼婦ラベル」以外にも、やはり「全てのセックスワーカーは可哀そうな犠牲者」というレッテルが人権派のフェミニスト達から、そこで働く女性達に容赦無く貼り付けられていたのである。

無論、自分達は「犠牲者」である、という主張をするセックスワーカーも多数アメリカには存在するであろう。事実、そのような女性達が作った団体が、WHISPHER (Women Hurt In Systems of Prostitution Engaged in Revolt=売春制度の中で傷付き反乱を起こす女達) である。彼女達は、売春婦は全て犠牲者であり、売春婦として働くことを自分から選んだ女性はいないし、売春とは女性を支配し虐待するために家父長制によって作り出された制度であると主張する。WHISPHER は、人権派のラディカル・フェミニズムに理論的基盤を与える立場であり、彼女達の声は比較的以前から欧米でも真摯に受け止められてきていた。だが、それとは全く立場を異にするのが、COYOTE (Call Off Your Old Tired Ethics=古ぼけた道徳を捨てよ) とその親組織である NTFP (National Task Force on Prostitution=売春に関する全米特別対策委員会)、そして ICPR (International Committee for Prostitution=売春婦の権利のための国際委員会) である。『セックス・ワーク 性産業に携わる女性たちの声』は、COYOTE の共同代表であり、レズビアンでもあるブリシラ・アレキサンダーとフェミニストのフレデリック・デラコステによって編集された著作である。彼女達は、売春の問題に留まらず、中絶やレズビアンの権利等も含め、幅広い「性」の領域において、女性には自分の体をどう扱うか自分自身で決定する権利がある、という観点から活動をしている。WHISPHER が匿名で活動をする当事者団体であるのに対して、COYOTE とその姉妹団体は、自分達を取り巻く固定観念や神話を打ち壊すために、敢えて自分達の身分を公表して活動を行っている。こちらはリベラル・フェミニズムに理論的基盤を与える立場である。

両者の間に位置するのが、アメリカ売春婦協会 (U.S. Prostitutes' Collective) とその関連組織であるイギリス売春婦協会 (English Collective of Prostitutes) である。彼女達は、「家事労働に賃金を求める国際運動 (Wages for Housework Campaign)」の支部であり、主として売春は階級問題だと見做している。彼女達は、貧困のために女性が性産業で働くことを強いられており、従って売春はなくなるべきだが、しかしそれは売春をしなくても自分と家族を養えるだけの賃金を女性が稼げるようになってからである、という主張を行っている。

COYOTE の活動は、当時衝撃を持ってアメリカ社会に受け止められたが、その後ヨーロッパにも広がりを見せ、オランダのレッド・スレッド等、同様の主張を行う団体がその後起ちあがっている。これまで検討してきた、水嶋や Y1 の主張は、概ね COYOTE と同じ「権利派」の主張である。そして、本項で検討した X1 や X2 の立ち位置は、恐らく、アメリカ売春婦協会の考え方に近い。「人権派」と「権利派」の間の立ち位置、すなわち「中立派」である。

日本においても、丸山里美の『女性ホームレスとして生きる—貧困と排除の社会学』や、熊田曜子の『性風俗世界を生きる「おんなのこ」のエスノグラフィ——SM・関係性・「自己」がつむぐもの』などでは、困難な状態に置かれた女性達をエイジェンシーを持った存在として描き、女性を一方的な「被害者」と決め付け、保護・教化・更生の対象としてきた従来の社会学やフェミニズムの枠組みに対して疑問を投げかけているが、残念ながら社会福祉学において、このような取組みは全くなされていない。社会福祉的視点を重視する鈴木や荻上も基本的には社会福祉学の人間ではなく、ジャーナリスト、社会学者であり、彼らの様な部外者が気付き始めて、様々な問題点を指摘している状況にあって、未だに社会福祉学に属する人間がそれらの問い掛けに対して全く応えられていないことは、日本の社会福祉学がその狭量さを露呈してしまっているといだろうか。

無論、狭量さを露呈しているのは、日本のフェミニズムも同じである。『セックス・ワーク 性産業に携わる女性たちの声』を翻訳した角田由紀子でさえ、本書の解説において、ラディカル・フェミニスト故の戸惑いを隠さないのである。なお、角田は、「ポルノ・買春問題研究会」の元共同代表であるが、その外郭団体が PAPS である。

角田は、『セックス・ワーク 性産業に携わる女性たちの声』の解説で、以下の様に述べる。

この本の中でかなり強力に主張されているのは、売春婦の現在置かれている状況を変革するために、売春を職業として認知し、労働者としての権利を保障せよということだ。この主張にはとまどった読者が多いのではなかろうか。私もそうだ。（中略）

私は **WHISPER** の見解には抵抗がないが、その他の人たちの主張には、本当にそうなのかという疑問がぬぐいきれない。いずれも当事者の主張であるから、読む者はますます混乱してしまう。（角田 1993 : 418）

当事者の声を抑圧する、角田のこの保守的な考えがまさにラディカル・フェミニズムの旧弊であり、水嶋の様なセックスワーカーの当事者が、最も強い抵抗を示すものである。支援者の価値観や道徳観を善意で押しつけること程、当事者のエイジェンシーを毀損するものはないということに、角田は気付かなければならない。彼女の主張は、当事者にとって最も性質の悪いダブル・バインドとして機能する、男性の説教客に極めて近い。両者とも女性を搾取される性として最初に「物象化」しておきながら、貴女達は売春を止めれば真人間になれると主張して、後から条件付きで人間扱いするのである。当事者は、人間扱いして貰うためには、説教客或いはラディカル・フェミニストの保守的な価値観を受け入れなければならないのであるが、その屈辱感が想像できないのであろうか。受け入れれば、それ以前の自分を自ら道徳的・倫理的に否定しなければならないのである。その苦しみを女性達に無理やり負わせるのが、果たして本当の支援であらうか。説教客が最低の客であると認識されるように、ラディカル・フェミニストの支援は最低の支援だと当事

者に実感されているという自覚を持っていないならば、ラディカル・フェミニズムは一体誰のための学問であり、誰のための支援枠組みなのであろうか。畢竟、それは保守的な女性達が、自らの道徳観・倫理観と精神的な安寧を守るために作り上げた学問なのではないのか、という謗りを免れないであろう。

第2章でもラディカル・フェミニズムの支援のあり方には批判的に考察を加えたが、真に社会福祉的支援を行う上で最も重要なのは、最低限支援者は「Biestekの7原則」を守れなければならないという、ある意味当たり前のことである。そして、「女性の貧困」に向き合う社会福祉の現場において、それがいかに蔑ろにされているのかを考える上で、X1・X2両者の指摘は非常に的を射ていると思われる。彼らの立ち位置は、次項で論じるフェミニズムの権利派に通じるところもあるのであるが、あくまで2人が社会福祉学を支援の土台に据えていることから、フェミニズムではなく、社会福祉学の支援者として位置付け、彼らの支援のあり方や価値観が、女性達と主流派社会福祉学の中間に位置することから、彼らを中立派の支援者と名付けた。

第2項 支援者の立ち位置：権利擁護派・フェミニズム系（Y1, Y2）

(1) X1, X2を社会福祉学を土台にした支援者であるとするならば、社会学、とりわけフェミニズムの立場から、女性達の権利擁護を行わなければならないというのが、権利擁護派・フェミニズム系である。女性を「被害者」と位置付け、保護・救済・教化・更生を行おうとする人権派のフェミニズムとは、真っ向から対立する立場である。

この立場の支援のあり方を考えるにあたって、セックスワーカーとしての権利を主張する、という立場が非常に明快な風俗嬢の支援団体・Mを主宰するY1の主張を最初に考察する。

Y1-73: だから、もうちょっとその、あの、セックスワーカーの人が食いつぶれられないような仕組みを、性産業内で考えていって欲しいなっていうのはあるよね。外部にね、期待してばかりじゃん、今。就労支援だ、セカンドキャリアだ、みたいなその所謂風テラスでもさあ、なんかその、風俗で働くべきでなかった人が来ているみたいなね。だからその福祉に繋げてどうのこうの言ってるけどね。じゃ、その人たちは、ま、もちろん風俗で働きたくない、他の仕事したいのあるんでそれを支援して、って言う人は支援したらいいけど、じゃなくて、その風俗でもっと稼ぎたいっていう人がいるわけじゃん、実際やっぱり。稼げない、風俗に来るべきじゃなかった人たちが稼げない人がいる、っていう風な見方は、風俗以外で稼げたらいいねっていう選択肢ともう一つは、風俗でどうやったら今稼げてない人が稼げるのか、あるいは風俗内での再分配というのはどうやったらできるかとかね。いくらでも伸びしろみたいなのはあるのに。

原田 74: なるほど。

Y1-74: で、実際アメリカでね、セックスワーカー同士の相互扶助っていうのを行われてて、シスターフット的なというかロビンフット的なというか。

原 田 75：それは所得の再分配ですか？

Y1－75：よく似た感じですね，その例えば売れてる風俗嬢が，まあ何か，売れてるから余裕あるわけじゃん．んで，売れてる風俗嬢で社会貢献したい人たちっていうのがいて，一定数，一部ね．でその人たちは，その売れてないセックスワーカーを助けようとするわけよ．例えばその，いっぱいパトロンがいる，客がいる，指名客がいる風俗嬢がさ，あの，どうやってその，客の恩恵を再分配するかっていうのを考えてるわけよ．

Y1 の立場は，セックスワークをスティグマ化することなく，職業の一つとして社会の中で確立しようというものだ．そして，そのためには，セックスワーカー自体が立ち上がらなければならないとする．Y1 のセックスワーカーとしての取組みの一つの活動が M であり，それが彼女にとってのエンパワーメントに繋がっているということは既に述べた．ストレングス・モデルに基づけば当事者を巻き込まない活動に意味はない．その意味で，坂爪の風テラスですら，Y1 にすれば外から押し付けられたものに見受けられるであろう．女性達が個人事業主として，水嶋のように独立心を持ち，連帯を深めて嫌な客は断れるようにする，したくないプレイは NG を出せるようにする，そして何よりもセックスワークで十分に生きて行けるような生活保障の仕組みを作ることが，「被害者」として支援団体や行政から守って貰うよりも遥かに女性のエンパワーメントに繋がり，活動としても価値がある，というのが Y1 の立ち位置である．

ただ，Y1 の活動に違和感を持つとすれば，それはやはり女性の能力差を考慮していない点である．高学歴から障害を抱えた「最貧困女子」まで，様々な女性達がプレイヤーとして参画しているのが日本の性風俗産業である．そこで，Y1 が言うような個人事業主として届け出を出し，自分のウェブサイトで客を募集し，中間搾取を一切無くし，客から受ける危険に関してはボディガード等を自分で手配して対処し，確定申告をして納税者の義務を果たす，ということが出来る女性がどれ程いるのかと問われれば，少なくとも今回のインフォーマントの中では，B8，B9 でもそのレベルに達していない．セックスワーカーを自認し，確定申告を行うまでは彼女達でもできる．だが，中間搾取を無くすことはできていない．彼女達でさえ，客は店舗経由で採っていた．理由は，リスクを個人で背負いたくないからである．それに対して，アメリカでは，ボディガードをシェアし合って，セックスワーカーが中間搾取を無くし，なるべくリスクを減らすようにマネジメントしているという事例を Y1 は紹介するのだが，今日本の性風俗の現場で働いている女性達にそこまでの気概があるとは思えない．そもそも，セックスワークを職業として考えるからそれが可能になるのであるが，未だに売春は日本では違法であり，それを職業と見做すことは心理的に難しいのである．また，Y1 が指摘しているアメリカの相互扶助も，恐らく日本では絶対に成り立たないのは自明だ．B8 は，自分のテクニックを教えるのはやぶさかではないと言っており，B9 も含めて彼女達は，テクニックを介しての女性達の支援には前向きだ．だが，それを聞きたいという女性がどれ程いるのか，という話になってしまう．結局アメリカで相互扶助が成り立つのは，職業意識を高く持つプロフェッショナルがおり，例え違法ではあつて

も、曲がりなりにも売春が「職業」として認められているからだ。だが、今の日本の売春防止法や風営法を変えない限り、売春の非犯罪化どころか、合法化すらも難しい。スティグマが貼り付いた日本社会において、Y1 や水嶋が指摘するような形でのセックスワーカーの権利向上は、現状では、同じ風俗嬢達からも賛同が得られないのではないだろうか。彼女達は、寧ろ自分達がその仕事に就いていることを誰にも言いたくないのである。その想いを無視してまで行う権利向上は、一体誰のための権利向上なのかという問題にぶつかってしまう。事実、Y1 達の活動に対して、同じように AV 女優の権利向上のために支援団体・N を立ち上げた代表の Y2 は以下のように反論する。

原田 71: わたしはスティグマを無くしたいと思ってるし、ヨーロッパのリベラルな国が行っているような政策も一つの選択肢かなと思います。売春の合法化ですね。そして、労働者として扱って保険なんかを掛けたり年金なんかもかけてあげて、個人事業主みたいな不安定な立場ではなくて、一労働者として社会に貢献してもらうという形を目指す運動というのはあり得ませんか？

Y1 - 71: そうですね、ただまあ、わたしは外の、たとえばオーストラリアのセックスワーカーであるとか、アメリカのポルノ団体の代表の人ともお話をしたことがあるんですよ。M さんの仲介で。で、聞くとね、えー、例えばその性労働、セックスを本番をするということは、もう、すなわち売春であると、いう風に。で、国が認めた範囲なら許してやるぞということで労働として認められるというのが、良いことか悪いことかもちょっと分からないな、と思ってます。それは例えばアダルトビデオというもののこの性の表現というものはすごく幅を狭めてしまって、本番をしなくちゃいけない、本番がマストのものになるということのもおかしい話だとわたしは思ってるんですよ。（中略）日本の AV はすごくマージナルな存在で、セックスワーカーを非犯罪化した方が良い、これは当たり前なんですね。非犯罪化することでアダルトビデオの出演者の中でもこう、ある層は非常にそれをメリットを感じることができる。でも、ある層は関係ないんですよ、「表現者」だから。で、これは出演報酬を貰う出演業の人たち、役者なわけですよ。役者として認められてる部分というのは非常にメリットがあるんですよ。これはこれで。で、じゃあ、アダルトビデオに出てるってことはすなわち役者じゃありませんということになってしまうと、その部分のメリットは全て手放さないといけなくなる。その時にじゃあ果たしてそのセックスを、性労働している出演者、顔も晒している、リスクな出演者としての彼らの生活が守られるんですかね、というところですね。まったく差別がない世界ならばそれもありかもしれない。でも差別があるから、出演業者です、俳優ですということで例えば〇〇さんは男優さんとして新潮社から本が出る、ちゃんとした団体の HIV の啓蒙活動なんかの講演会にも呼ばれる、彼は賢いし弁が立つので。そういう状況です。でもあれば、性労働者であると。役者ではないってなれば、男優なんて名乗れない、っていうことになって、体を売ってるだけだろうっていうことになったら、さあ

果たして差別がある日本で、彼の今の立ち位置は守られるのだろうか,,、と思うんですよ。で、じゃ例えばわたしは今まで過去に、AV 出た頃に、出演料でずーっと税申告してたわけなんですけど、じゃあそういうことになったら出演料では税申告はできない、でも、そういうのっていろいろな所から捕捉されることなので、税の申告とか、何の職業として届け出てるかということ。で、そうすると例えば子供がその辺の公立小学校に行く、中学校に行くという時に差別にあわないんだろうか、ってことを考えると、じゃあ「性労働者としての立場、労働者としての立場を確立するためにがんばろう！」って、まあ M とかそういう考え方だと思うんですけど、っていう風に言えるかっていうとわたしはそれはちょっと日本の現状には今のところマッチしないんじゃないかと。そうじゃなくてやっぱりうちは表現者ネットワークって言ってるんですけど、表現者として、表現活動する出演者として俳優としての立ち位置をしっかりとさせた方が良くと。

ここで、M の立場に Y2 が「表現者」としての立場から異論を挟むのは、ある意味当然である。Y1 のような風俗嬢と、Y2 が代表する AV 女優は、そもそも全く立ち位置が違うからだ。同じように「性の商品化」を行いながら、M の立ち位置からセックスワーカーの労働者性を求めて行くと、結果、AV 女優は「表現者」性を捨て去らなければならない。そして、Y2 が指摘する通り、社会にスティグマが無いのであれば、M の路線でも問題はないが、それが明瞭に存在する日本社会において、労働者の権利を主張していくのは、順番が逆だというのである。スティグマが無くならないのであれば、そのスティグマがある前提で生きるキャリアや人生をデザインしなければならない。そのためには、寧ろ AV 女優が「出演者」であり、「表現者」であり、断じてセックスワーカーではない、という路線を Y2 は堅持したいのである。同じように、女性の権利を守ろうとする団体の代表が、このように意見が分かれてしまうところに、複雑に入り組んだ日本の性産業のねじれが発現してしまう。「被害者」という括りは止めて貰いたい、自分達にはエイジェンシーがあるのだ、という立場に立つ二つの団体の目指すところが、完全に異なってしまうのだ。ただ、両団体が共有していることは、スティグマを少しでも減らすためにも、セックスワーカーの立場は「非犯罪化」されるべき、というものである。

これは、前項で論じた X1 も主張することなのであるが、恐らく人権派の支援団体は、これに対して全面的に異を唱えるであろう。人権派の支援団体が目指すのは、性的搾取の根絶である。そのためには、「非犯罪化」は風俗業界に参入しようとする女性の心理的な障壁を取り払う逆の動きでしかない。女性がその世界にこれ以上流入せず、男性から中間搾取されない状況こそが望ましい、という人権派の理想論に関しては、前項で X1 が現実を無視していると冷静に指摘しているが、恐らく両者の対立はかみ合わないであろう。事実、Y2 が代表を務めている N に対しては、PAPS や HRN は、あくまで AV 業界側のスポークスパーソンの団体という警戒感を崩さない。それに対する疑問をぶつけたところ、Y2 はその認識には誤解があると主張する。

原田 130 : なるほど. わかりました. 大体わたしが聞きたかったことを聞けたのでそろそろちょっとまとめの質問をしたいんですけども, わたしは最初この強要被害問題が起きた時に, AV 業界に強要がありきで物事を捉えてるのが PAPS や HRN の考えというか立ち位置で, 強要はないという立ち位置が N の立ち位置かと思っていたんですけども,,,

Y2-130 : 違います.

原田 131 : それは違うんですか.

Y2-131 : 違う. 強要はありますよ.

原田 132 : やっぱあるんですね.

Y2-132 : あります. で, 強要はある, しかし多くはない.

原田 133 : PAPS が言ってるようなものではないってことですね.

Y2-133 : わたし最初から強要ゼロだって言ったことないですよ. それは原田さんも多分勘違いしてて,,,

原田 134 : 勘違いしてました.

Y2-134 : ええ. 強要ゼロだとかクリーンだって, 別の AV 女優さん, 現役の AV 女優さんの〇〇ちゃんとかが言っちゃったんです.

原田 135 : そうですよ.

Y2-135 : はい. でもそれは「彼女」は, ないと思ってるってことです. 彼女の視野の中には入らないってことですね. これは彼女何べんも会ったことあるんでわかるんですけど嘘ついてるんじゃないんです. 本当にないと思ってるんです. で, わたしは「強要はない」とは言ってないんです. ただ, 全体に AV がこれだけすごい本数作られてるわけなんですけど, その中で強要が行われてる本数がじゃどれくらいあるのかとか, PAPS さんの言ったあの被害報告例が, 氷山の一角だとしてもでもまああの件数だとして, その調査期間にとられた AV から割り出したら, 交通事故に合う人の数より少ないと. 割合より. んで, ま, その非常に少ない例をもって全体の AV 業界をまあ撲滅しようみたいな動きっていうのはまあ, これは間違ってる.

原田 136 : 行き過ぎてるかなという感じはします.

Y2-136 : っていう風にわたしは言ったんですよ. で, それがあのどういうわけだか曲解されて, AV に出演強要はないって言ってるのが N みたいな風に言う人たちが出てきちゃったんで, 困ったことになったんですね.

原田 137 : そうですね.

Y2-137 : 「AV 出演強要被害問題」は大変深刻な問題で, だから着地点が同じだってライトハウスさんと仲良くできてるのはなんだからって言うと, そんなものあっちゃいけないから.

原田 138 : 仰る通りですね。

Y2-138 : 考え方は全く、そこはかち合わないんです、対立するものではないんですよ。ただ、わたしはそれで前インタビューを朝日新聞の△△さんから受けた時に思ったのは、△△さんとかもなんかわたしの考え方よくわかってらっしゃるはずなんで、言ってくればいいのになと思うんですけど、あの、そういう、それは大きな問題の隅っこの方なことなんです。所謂、嫌々AVに出されてしまって性暴力を受けた、みたいなのは大変な被害ですけど、そうじゃない、それがなんでそんなことが起こるかという、AV 女優さんの、その立場の弱さ、がそれを起こしてるんですよ。AV 女優さんのその権利を完璧に確立したら、そんなことは起きないんですよ。そもそも、そこが大変な、ま、わたしはそれはすぐ、AV 女優やってたし、周りにもいるからすぐわかったんですよ。そういうことじゃないかと。「AV 出演強要被害問題」と言われている大変悲惨な被害報告例のようなことというのは、それは大きな問題のほんの一角ですと、いう事がわたしにはわかったんです。そうじゃない、そうじゃなくて、総ギャンブルをごまかされて知らないうちに搾取されてる、搾取されてることに気がつかない女優さんが大勢いる、これは大勢いると思います。大勢いると、それから、知らないうちにプロダクションが例えば、えっと、何て言うのかな、寮、という名目だったりいろんな名目でその子の住居を用意してあげる、マンション貸してあげて、衣食住すべて賄ってくれる、お金をくれる、車も出してくれる、で、AV 業界に依存する体質になって、しかし例えばあの、彼女は学習する機会がないんですね、大学も中退で辞めてしまう、20 代の若い貴重な時間をそこで AV どっぷりで過ごして、若いうちしか仕事がない、で、辞めた後にどうするかを AV 業界の方ではまったく彼女にアナウンスしない、手当てしない、ぼいっと使い捨てにしちゃうと。そうするといきなり無一文で住むところもないって状況になっちゃうんですね。で、あんなに稼いでたはずのお金の使い方、もうみんなお金の使い方がなっちゃう人が多いんで、それも誰も指導しない、話し合う、なんで、指導受けなくとも少なくとも横の繋がりがあって女の子同士で話し合ったら、もう少しましな状況になると思うんだけど、横の繋がりがないと、で、それもよろしくない。AV 業界が抱える問題はもっといっぱいあって、性暴力のような被害にその、制作現場で遭うみたいなことはもう、これは滅多にないわけですけど、その滅多にないからって言って、他の全部を、その子だけ手当てして他のみんなはほったらかしってこれはおかしい話でそうじゃなくて、他が全部直ったらそんなことも起こらない、っていう話なんじゃないの？っていう事なんです。だから、労働組合みたいなものが必要だし、出演者同士の横の繋がり、ネットワークみたいなものが絶対必要だし、いざという時に弁護士さんにもあの活動家にも繋がれるようなそういう組織というものがいつも相談窓口開けてますっていうような状況をすぐ作らないとまずい。と。

(2) Y1 と Y2 という 2 人の団体の代表の話を聞いて理解されるのは、やはり日本社会には根強いスティグマが性風俗産業で働く女性達には付きまとっているということ、そして何らかの搾取のメカニズムが存在しているということである。そして、時にそこには深刻な性暴力被害が起こってしまう以上、それをなんとかしなければならない、ということは、Y1 と Y2 の両方が共有している問題意識である。

ただ、明らかに両者の間に温度差があったものが二点存在する。一つが、そこで働くモチベーションについての認識である。社会福祉学的には、女性がスティグマが貼り付いた仕事を行う理由が第一義的に貧困に由来するものであるならば、保護・救済しなければならない、という認識が強い。まさにそのための制度が婦人保護法であり、婦人保護事業なのである。無論、その女性の貧困を形作っているのは、彼女達が抱える虐待等の負の遺産と、それから生まれる疾病や障害だ。これらが足枷となって、昼の正業への就業を阻み、貧困が生まれる。彼女達が置かれたその経済的な貧困問題の解決策が、性風俗産業なのである。

だが、それらが現在性風俗産業で働いている女性達の支援機関としては形骸化していることは、婦人保護の実践の現場からも問題視されており、前項で X2 が指摘した通りである。故に、X1 らの民間団体によるアウトリーチなどが検討されているのだ。この点に関しては、Y1 は、経済的な貧困や障害、疾病は、性風俗産業に至る大きな原因であるとする。従って、そこで働く女性達は社会福祉的支援の対象であるという認識だ。ただ、Y1 は、彼女達を「有徴化」すべきではないとも指摘する。昨今、「女性の貧困」問題が大きく取り上げられる中で、繰り返し彼女達の貧困の背景にある障害や疾病が報道され、報告される。本研究もその系譜の一つであろうが、Y1 は、荻上の『彼女達の売春(ワリキリ)』を例に挙げて、あのように女性達が精神的に病んでいる、売春や性風俗で働く女の子達は、皆何らかの病気である、というようなレッテルを貼ることは、女性の尊厳を大きく傷付けるために本来すべきでないという。確かに、女性達のエイジェンシーやレジリエンスに一切触れることなく、「貧困コンテンツ (X1 はより露悪的に「貧困ポルノ」と呼ぶ)」として提供される書物には、そのように当事者を傷付けてしまう可能性があることは、十二分に配慮しなければならないだろう。

Y1 が女性の性風俗産業への参入を社会福祉学の問題と認識する一方で、Y2 はそうは考えない。Y2 にとって、AV 産業に出演する女性達は、人生の中に大きな貧困や障害があるどころか、寧ろ一般の女性達以上に高学歴で向学心があるしっかりした女性であるとする。そして、自己の意思を持って参入してくる以上、そこに社会福祉学的な保護や救済など全く必要無く、大切なのは、彼女達にギャラがしっかりと払われることである、とあくまで AV 産業が抱える問題を女性の権利、それも金銭的搾取の問題に矮小化するのである。多くの女性達が、高額なギャラを求めて AV 産業に参入する以上、そのギャラが中間搾取によって女性達に払われないことはあってはならない、というのが Y2 の最大の関心事なのだ。そのために、法的な契約を重視する。当事者だけでなく、N のような中立的第三者が間に入った三者契約によって、総ギャラの額を女性の側に明確に知らしめ、経済的搾取を無くすために、Y2 は活動しているのである。

原田 31: そのことについてちょっと私、一点疑問があるんですけども、例えば、今言った書面的なものを取り交わせば、法的な物というのは完全にクリアできると思うんですよ。法的な問題というのは、ただ、法的な問題ではなくて私は社会福祉の人間なので、例えば、その完全に受動的な人がいなくなるということですよね、今の話だと。させられているような人が。

Y2-31: それはねえ、あの、××先生ともこの間話したんですけど、完全にはいなくならないと思う。

原田 32: ですよ。

Y2-32: はい。だって、すぐにこう、なんていうんだろう、えー、まず、んー、その、男性でもそういう人いると思うんですけど、相手のペースにすぐ吞まれてしまったり、何でも「Yes」って答える人、

原田 33: いますよね。

Y2-33: ええ。そういう人もいます。

原田 34: 軽度の知的障害があったりとか、学習障害があったりして、契約書が読めない人もいますよね？

Y2-34: それについてはね、ええ、わかります、それについてはね、全然、被害報告例とか、あの、悲惨なことになってる例の方を見るからそういう例が、特に原田さんはそこにスポットを当ててるんでしょうけど、そこにえっと、××先生もアンケート取ったんですね。うちはね、実はお渡しした資料にあるよりももっと詳細な、千何十人だったかな、かなりの人数のAV女優さんのアンケート結果を持ってるんですけど、リサーチした結果を持ってるんですけど、知的障害の人は多いどころか、日本の女性の平均よりも学歴が上回るんですよ。AV女優さん。平均で言うと。標準的な所で、特徴があって、学歴は高め、で、関東圏に住んでる人がほとんど、えーあと、もう一個特徴があって、学歴が高くて、学歴は高いんですが、矛盾するっていうと差別的になるのであんまり言いづらいんですけど、片親家庭が多い。

原田 35: なるほど。

Y2-35: それから性風俗業の経験者が多い。性風俗嬢の要するに原田さんが言ってた、えー、2号でしたっけ、

原田 36: 2号営業。

Y2-36: の経験者がキャバクラも含み、の経験者が約30%。

原田 37: そんなもんですよ。

Y2-37: ええ。AV女優さんになる人は、約30%なんですよ。すごく多い。で、けれども学歴は、なんでしょう、すごく高いです。あの、普通の平均よりも高くて、まず中卒はいない、と言っていいくらい少ない。それから高卒、も案外少ない。大学卒業がもう当たり前。

原 田 38：今は大学全入時代ですから、きっと最近はそうなのでしょうね。

Y2－38：はい。最近の傾向ですね。わたしが現役の頃はそうでもなかったと思います。地方から出てきて中卒・高卒がすごく多かったと思うんですよ。えー、昔、わたしのころはもっと景気がよかったので、お小遣い欲しさで始める人も多かったんですね。で、今はそうではなくて、なんらかの家庭の事情があって、お金がない、で、お金がないけれども向上心は強いというか、何て言ったらいいんだろうなあ、うん、向上心がある人。っていうのがAV業界に比較的に入って来やすいのかなと思いますね。学費を稼ぎたいって人はすごく多いです。

原 田 39：それってホントなんですかね？

Y2－39：ホントです。

原 田 40：建前で学費と言ってるんじゃないですか？

Y2－40：いや、全然違います。

原 田 41：そうなんですか。

Y2－41：そうです。あの、それは違う。建前言ってる余裕なんてなくてあの、親が食費を稼げないような状況だったりするので、だから学費を稼ぐために黙って風俗を始めたんだけどAVの方が実入りが良いかなと思って始めたらハマってしまったとか、そういう人もいます。

一連のY2のナラティブから分かるのは、Y2が想定するAV女優は、基本的には自分なのである。判断能力があり、自らの意志で出演し、能力も高く向上心もあり、精神保健の問題も障害も抱えていない。それが、今のAV女優だというのであるが、それに関しては第4章で検討した通り、Y2の認識が全くずれているとしか思えない。学歴が高い女性が多いのは、否定はしない。大学全入時代になって、当然全ての業種で高学歴化が進んでいる以上、それはAV女優であっても例外ではないだろう。だが、それはAV産業の現場に軽度の知的障害や学習障害の女性が存在しないことを意味しない。また、彼女達が学費が必要なのは、母子家庭が多いからだとなると、当然そこには根深い貧困が存在する。第1章で検討した通り、新自由主義の日本社会において、最も貧困率が高いのはシングルマザーであり、そこで育った子供が経済的な貧困と無縁で成長することの方が稀であろう。そして、Y2は、AV産業で働く女性達の精神保健の問題には一切思いが及ばない。自分と自分の友人達が皆問題を抱えていないというだけで、最底辺と呼ばれる企画女優の現場、特に三大NGと称される、「スカトロ・アナル・ハードSM」の出演者などは、ほぼ軽度の知的障害の女性だけであるという事実すら目に入らないのである。この事実一つとっても、Y2が持っているアンケート調査の結果は、例え数が十分であっても母集団に著しいバイアスがかかっているのではないかと疑うに十分であろう。

その点、Y1は、女性達の相談を日常的に受けているせいか、性風俗産業で女性が働くということ、特に、Y1が一番近いB群の女性達の精神保健がいかに悪いかは、正確に把握できている。

原田 112:なるほど. この, 性風俗の研究をしてちょっと自分が気になってることが一つあって, あの, 心理検査やるんですよ, わたし必ず. で, 5 種類くらい, 自己肯定感であったり, あとアイデンティティだったり, そういった検査をして, この間 123 人分のデータを統計取ったのを全部出してみたんですけども, 結構病んでるんですよ.

Y1-112: うんうんうん.

原田 113: で, それすごく自己肯定感が低かったり, アイデンティティが拡散していたり, 生きがい感が低かったり. だからこう, Y1 さんが行った風俗嬢に対するアンケート調査のデータを見ると 7 割くらいがポジティブ, 低く見積もっても 6 割くらいがポジティブと言われると, わたしが取ったそのデータの病み方とちょっとギャップを感じるんですよ.

Y1-113: それはね, ギャップっていうか矛盾しないと思うよ.

原田 114: しないですか?

Y1-114: あのね, だからやっぱり, あの, ポジティブっていうのは, 働く動機に関して, 無理やり強制的に自分を働かせてる, みたいな, その, 自分が選んだんじゃない, みたいな意識じゃなくてその, むしろ消去法で風俗の方がましだから来ましたみたいな子が多いっていう意味であって, 他の仕事よりましじゃん, みたいなね. なんていうのかな, 自分に合ってる, 合ってるっていうか, うん, 他の仕事よりこの仕事の方がいいと思ったとか, そういう意味でのポジティブであって, ネガティブでないという意味であって, あの, そのことと自己肯定感が低いとか病んでるっていうのは全然矛盾しないよ.

原田 115: なるほどね. それだったら自分も納得です. うん. そんな感じですよ, 確かに.

Y1-115: うん. 病んでると思うよ. だってみんな言うもん. 店長さん達に聞いたら, わたしたちが支援したいと思ってるんだけど, どういうニーズがありますか? って聞いたらみんなね, メンタルヘルスのサポートって言う.

原田 116: ですよ.

Y1-116: 店長さん達も.

Y1-115 「うん. 病んでると思うよ. だってみんな言うもん. 店長さん達に聞いたら, わたしたちが支援したいと思ってるんだけど, どういうニーズがありますか? って聞いたらみんなね, メンタルヘルスのサポートって言う.」という指摘は非常に重要であると思われる. 確かに Y2 が指摘するような正当なギャラの確保というものも, そこで働く女性達にとっては死活問題であり, 重要である. だが, 仮に女性達の働く権利を最大限尊重し, ステイグマの無い社会を作り上げて女性が長く AV で働ける環境を整えたとしても, 肝心の女性の心が壊れてしまっただけでは意味が無いのである. そして, 実際 C 群の心理尺度の結果は B 群と遜色な

く、もしレジェンド AV 女優の C1 がいなければ、B 群を下回っていた可能性もある。やはり、キャバクラでも、デリヘルでも、AV 女優であっても、自らの「性を商品化」する仕事は精神的な摩耗感が強い。水嶋は性風俗を「究極の接客サービス業」と表現したが、それはつまりそれだけの感情労働と肉体労働の両方を伴うということである。そこで、次項では、実際に女性達を管理する、店舗マネージャーと AV 監督のナラティブから、実際の現場で女性達がどのように扱われているのか、何が女性達にとっての苦しみであり、喜びであるのかを考察する。

第 3 項 支援者の立ち位置：業界関係者（Z1, Z2）

(1) 第 1 節で、性風俗産業で働く女性達の精神保健の問題を、統計学的に実証した。そして、第 2 節の第 1 項、2 項において、当事者でもある Y1 の言説を中心に、彼女達がやはり「闇」と「病み」を抱えていることを考察した。今度は、現場でそれに直面している店舗管理者である Z2 の会話分析を行う。Z2 は、昔と今では女性の特性が大きく変わったという。Z2 は、日本最大級の店舗型ヘルス店のグループマネージャーの 1 人であり、20 年以上に渡って業界を生き抜いてきた。その意味では、キャリア 14 年の B2 以上の業界の生き字引である。

Z2 によれば、昔は、ヘルス嬢は、文字通り「女性の貧困」の代名詞であったという。シングルマザーが家族を養うためや、家族の借金のために、ヘルスで働く。そのためには当然レギュラーで出勤しなければお金にならないため、シフトもびっしりと入り、無断欠勤等も少ない。管理するのも楽だったというが、昨今の女性はそうでないという。ふわっとした理由で入店し、ふわっとした理由でいなくなる。信頼関係を結ぶというのが、かつて以上に難しくなり、出勤も一週間に 1 日、2 日しかしないような、経営的にも余り貢献度が低い女性が増えているのだ。そうした昨今の女性の質の変化について質問すると、意外な答が返ってくるのである。

原 田 96：一般的な女性ってたぶん、この仕事をほんと生きていくためにやってる人と、あと、なんらかの夢のための資金作りでやっている人と、どっちかに分かれると思うんですけど、どっちの方が最近が多いんですか？

Z2－96：いや、どっちも、少ないと思います。

原 田 97：どっちも少ないんですか？今はどういう感じですか？

Z2－97：今は、とにかく今、今の稼ぎを、今の楽しみのために、っていう人が割と多いと思いますよ。

原 田 98：今今の？

Z2－98：そうですね。

原 田 99：人生を楽しむために、日銭が必要だと？

Z2-99: そういう人の方が多いと思いますね.

原田 100: それはブランド物のバッグとかそういうレベルの話なんですか?

Z2-100: いや, そういう物じゃなくて, さっきも言いましたけれども自分の趣味のため,,,

原田 101: ジャニーズの追っかけとか?

Z2-101: とか, AKB だとか, あとはアニメとか, そういった, こう, 本当にすごいブランド物を沢山持って, とかいう子は, どちらかという飲み屋に比べると少ないですよ.

原田 102: 女性なのに AKB に行くんですか?

Z2-102: 多いですよ.ほんとに, AKB とか, あと, ももクロとか好きな女の子いっぱいいますねうち.

原田 103: それは自分になれなかったからってことなんですかね?

Z2-103: そこまで詳しく話聞いたことないですけど, 結構コンサート行ったりとかしてる子いっぱいいますよ.

原田 104: なるほど. ジャニーズの追っかけやビジュアル系バンドの追っかけが多いっていうのはよく聞くんですよ.

Z2-104: それはもうほんと, 女の子の間でどこも好きな子は多いですね. 若い子は特に.

原田 105: やっぱりホスト行ったりもするんですか?

Z2-105: そうですね. ホスト, たぶん, そうですね, いや, 僕の知らない所で行ってるかもしれないけどあんまりそんなに, めちゃくちゃうちの会社で働いてる子でホストにハマってるっていう子がたくさんいるっていうのはあんまり聞いたことないですね.

原田 106: それはやっぱり業態にもよるんですかね.

Z2-106: うーん. どうでしょうか.

原田 107: ソープランドなんかは相当いるって話は,,,

Z2-107: それはよく聞きますね. そうですね. ソープランドとはやっぱりちょっと違うんでしょうね.

キャバクラ嬢が派手な身なりをして, 派手なバッグを持ったり, エクステや化粧品等にたくさんのお金をかけるということは, A 群のインタビュー調査からも明らかだ. だが, AKB48 やももいろクローバーZ のような女性アイドルグループの追っかけをヘルス嬢がしている, そしてそのために日銭を稼ぐというのは, かなり意外だ. これまでのインフォーマントでは, 唯一 A10 にその傾向があった. 改めてその部分を引用する.

原田 206: なるほど. じゃあちょっと最後にこう, 漠然とした質問なんけども, 今の心の支え

って何かありますか？

A10-206：心の支え。んー。なんですかね。でもなんかそういう趣味的なことじゃないですかね。そのアイドルとか,,,

原田 207：乃木坂 46 が好きなんですよ？

A10-207：乃木坂ちゃんとか， うん。

原田 208：それはやっぱり大切なもの？

A10-208：そうですね。結構わたしお金の使い道が割とそういうのが，割とお金を使いがちなので，アイドルとか好きな芸能人に，そのなんかコンサート行くとか。なので， うん。

原田 209：こう，近場の人間ではなくて結構遠いところが心の支えですか？

A10-209：確かに。そうですね。そうかもしれないですね。

原田 210：家族とか恋人とか親友とかよりもむしろそっち？

A10-210：ああ，全然，家族とかも大事ですけど，自分がこう情熱を注ぐのはそっちの方が。

原田 211：そっちの方なんだ。

A10-211：多いかもしれないです。

原田 212：それはやっぱり，彼女達が女性として輝いてるからですか？

A10-212：んー，そう,,，なんかこう，癒される。

原田 213：ジャニーズとかじゃなくて乃木坂の方が癒される？

A10-213：うん。乃木坂。いや，昔はジャニーズ，結構，なんでもいいんですよ。昔はジャニーズ好きでしたし，ちょっと前まで，ちょっと前までで，今もですけど，プロレスとかも好きでしたし。

原田 214：プロレスとかも。

A10-214：たぶん何でもいいんですけど， うん。なんか，そういうのにきゃーきゃー言ってるのが楽しいみたいな。

A10 の会話分析の中では，アイドルを目指していた彼女の防衛機制として，「投影」を用いて同一化し，そこに癒しを求めているのであろう，と分析したが，改めて普通の女性がアイドルに癒しを求める心理を再度この項で考えてみたい。

無論，A10-212「んー，そう,,，なんかこう，癒される。」という言葉が全てを物語っているのであるが，Z2 の店で働くヘルス嬢達も，アイドル達に癒しを求めてお金を稼ぎ，全国ツアー等を巡るのであろう。その資金を稼ぐのにヘルスは都合がいいのであろうが，やはりここで明らかにしたいのは，何故女性のグループアイドルであるのか，である。AKB48 とともいろクローバーZ に共通しているものは，グループであることと，元地下アイドルであるということだ。そして，多分そこそが最大のポイントなのだと思う。

つまり、地下アイドル出身のグループアイドルには、様々なドラマがある。彼女達は、最初からは輝いていない。AKB48のデビュー公演は、客が7人しかいなかったのは有名な話であるが、そのような逆境から、国民的グループアイドルに成長した、というドラマにこそ、彼女達は惹かれるのではないだろうか。実際、グループアイドルのドキュメンタリー映画の全国公開という手法は、AKB48グループから始まったのであるが、既に姉妹グループの乃木坂46も含めて、10本以上が公開されている。2012年、AKB48を一気に全国区に押し上げた『DOCUMENTARY of AKB48 少女たちは涙の後に何を見る?』の中で、当時のセンターを務める前田敦子が過呼吸で倒れるシーンが話題を呼んだ。同じように、センターを務めた大島優子も過呼吸になるシーンが後に描かれているが、大人数のグループアイドルが背負うプレッシャーは尋常ではない。ステージに立てる選抜の16人に入るためには熾烈な競争があり、ステージに立ったとしても、いつ自分が仲間に追い落とされるか分からない。そして、彼女達は1人で活動ができる正統派アイドルと異なり、基本的にたった1人で芸能界で活躍ができるような美しさを持っていない。彼女達は、あくまでグループアイドルの一員であるから価値があるのであり、そこからの卒業はほぼ芸能界からの引退を意味する。そこに、一瞬しかない「生」の輝きがある。そして、そこに惹かれる人間というのは、その一瞬しかない「生」の輝きから遠い人間なのではないだろうか。目標もない、生きる意味も良く分からない、でもある日、過呼吸になっても頑張っている「普通の子」の存在を知る。支えてあげたい、と思うのであろう。

今でこそ、グループアイドルは戦国時代となり、かつ最初から大々的にデビューするグループアイドルもいる。だが、どんなグループアイドルであっても必ず共通するのは、研修生といった下積み、そして人間としての成長がファンの前で残酷なまでに「可視化」されることである。最初にフロントに立てなかった目立たない子が、握手会で努力をして、総選挙で結果を出して、遂にセンターに登りつめる。確かにそこにはドラマがある。そして、A10はプロレスにも触れているが、そこにも同じようにエンターテインメントショーとしてのドラマの側面が強い。怪我を乗り越える、一度も勝てなかったライバルに最後に勝利する、血と汗と涙という分りやすいドラマが存在する。白夜書房の『BUBKA』は、グループアイドルとプロレスの両方を扱うサブカルチャー雑誌であるが、これは両者に共通項があるから一緒になっているのである。つまり、この二つはファン層が一緒なのだ。AKB48グループが、連続でテレビドラマ化していた群像劇のテーマは、第一期が「ヤンキー」だった。第二期が「キャバクラ嬢」である。そして、2017年に始まった第三期のテーマは、「プロレス」だった。正統派アイドルであれば全く接点がなさそうなこの三つは、グループアイドルのファンからすれば、全て親和性の高いものなのであり、これは自然な流れなのである。つまり、スカウトされて、あっという間に芸能界で登りつめるような松田聖子や小泉今日子のような正統派アイドルと異なり、グループアイドルというものは、サブカルチャーとしての位置づけは「ヤンキー」、「キャバクラ嬢」、「プロレス」のような「二流」、或いは「周縁」、或いは「異端」なのである。学校に居場所が無い人達の象徴、社会に上手く適応できなかったはぐれ者達、すなわち Castel が、『社会喪失』で描いた「^{ディザファイリエ}社会喪失者」のメタファーとして用いた放浪者トリスタンとその恋人イゾーの現代版が、「ヤンキー」、「キャバクラ嬢」、「プロ

レス」，そしてそれらのメタアイコンとしての「グループアイドル」なのであろう。

こうした、「二流」，「周縁」，「異端」の象徴のようなものを追いかける女性達は，当然彼女達は自分と一緒に，という「同一視」が生まれているはずであり，恐らくそれが Z2 が指摘する昨今増えている若い風俗嬢の心性なのである。Z2 が，キャバクラ嬢と違い，彼女達は身なりも普通で目立たない子が多い，という理由も良く分かる。彼女達は，スクールカーストで言えば，「2 軍」なのである。その「2 軍」の女性達が，下克上を成し遂げた「2 軍」代表の AKB48 を追いかけているというのは，納得がいくのではないだろうか。AKB48 は，見た目の美しさと人気が一致しないとよく言われるが，そもそもファンが AKB48 に求めているのは汗と涙のドラマであって，見た目の美しさではないからであろう。

そのような普通の子が増えた一方で，やはり定番の女性も存在する。それは，ホストに貢ぐために働いている女性だ。これまで第 4 章で何度も検討してきたものである。

原田 16：なるほど。で，これもよく聞く話なんですけれども風俗嬢のかなりの数がホストにハマってるっていう話を聞くんですけども，そういうのって見てわかりますか？

Z2－16：ええっとですね，かなりかどうかはわかりませんが，ある一定数は必ずいますね。

原田 17：必ずいる？

Z2－17：ええ。それはもう昔から変わらずにいますね。はい。

原田 18：そういう子たちというのはやっぱりもう本当にホストに行くためにお金を稼いでるわけですよね。

Z2－18：そうです。そう思いますね。

原田 19：幸せになれる感じがしないんですけども。

Z2－19：そうですね。その辺はやっぱり僕らもう十分わかってるんで，そういう話をした時期もあるんですよ。自分のためにならないよ，みたいな話をするんですけど，そういうことを言うと逆にあの，こっちが悪者になるんですよ。「わたしが一生懸命頑張ってその人をナンバーワンにしようとしてるのに，何でそれを否定するんだ」っていう風になっていくから。一方でこう，お金を使ってくれるからうちで仕事を続けているっていう，あの，考えで働くスタッフたちもやっぱりいますので，まあ一方で良しとしよう，ちゃんと来てくれるなら良しとしよう，ということもありますね，やっぱりね。考えとして。ただそれを，ね，「社会になじまないからそういうのはやめた方がいいよ」っていう，個人的な考えはあります。そういう，その方が良くってというのはありますけど。一方でそれでうちを辞めて他のお店に行くんだったら，それだったらうちで働いてくれた方がいいなっていうのはもちろんありますけどね。

Z2－19「一方でそれでうちを辞めて他のお店に行くんだったら，それだったらうちで働いてくれた方がい

いなくてというのはもちろんありますけどね。」という言葉は、マネージャーとしてドライに聞こえるかもしれないが、Z2は、風俗店のマネージャーとしては非常に女性思いだ。無論、利益を出してくれるのが女性である以上、仕事として優しくしなければならないのであるが、実際はそれができずに次々と女性が退店して、店が潰れるというのが普通の風俗店である。経営者の側も何らかの精神保健の問題を抱えていたりすれば、当然そうなる。だが、Z2は50店舗を超える規模を誇る全国最大級のヘルスグループだ。曲がりなりにも20年以上存続する店には、やはり女性に対する特別な気遣いがある。

原田 26: その戻ってくる理由っていうのはやっぱりお金なんですかね？

Z2 - 26: それ以外にないと思いますけどね。

原田 27: お金以外にはないですか。

Z2 - 27: ただ一方で自分の居場所だという子も中にはいると思いますね。ほんとにそれこそあの、僕らよく、何て言うんだろ、懇意にさせていただいてる産婦人科の先生がいらっしゃるんですけど、その先生がびっくりしてたのが普通だったら怒るようなものを、その女の子に怒る場面でも一切怒らないで、「どうしたどうした」っていう風に僕らもずっと女の子に接しているから、びっくりしたんだって。

原田 28: その怒るシーンっていうのはどういう？

Z2 - 28: いやだからあの、ほんとに自分のわがままというか、ばかりを言って人のことを一切考えないで自分の主張ばかりをして人に迷惑をかけたたりしてても、それをこう、叱ることなく諭すように話していた、というのは、その場面に僕はいたわけではないのでわからないですけど、先生びっくりされてて、そういう面ではもしかしたらこう、何て言うんでしょうかね、こう、自分の居場所になっている子も中にはいるのかなという風には思いますね。

原田 29: やっぱり徹底して女性を否定しないってことはスタッフさんみんな心がけてるということですか？

Z2 - 29: そうですね。やっぱりそれは、勉強しましたね。自分が現場で二十年前やってた頃っていうのはそんなじゃなかったんですけど、どちらかというと、いや働きに来てる子なんだから、っていう視点でやってましたから、もう普通に怒りますし、遅刻したら怒るし、お客様に一生懸命サービスしなかったら怒るっていうのはありましたけど、今はそういうのは変わって来てるかなっていう気はしますね。今は怒れないスタッフが多いですし、で、優しさと甘やかすと、ていうのをやっぱはき違えてるというのが、そこがちょっと僕らも教育不足だと思うんですけど、やっぱりその子が辞めちゃいけない、辞めさせたらお前のせいだ、みたいな感じですけど、一方でそういう指導をしてた時期もあったのでそうするとそれがだんだんだんだんちょっと歪んでいって、もうほんとに、ほんともう、自由主義、自分の出たいとき行きたいときに来るような女の

子が増えてしまったっていう側面はあるかな、と思います。おそらく、急激に増えたんで。

(中略)

原田 119: 何年か働いて通過点として行って、何かの人生に着いた、そのあと、こう、お店の方に感謝してます、みたいな事言う方っていうのはいらっしゃるんですか？

Z2-119: あ、いらっしゃいますよ。手紙とか届きますから。女の子から。

原田 120: 今頑張ってます、みたいな？

Z2-120: そうです。「あの時はありがとうございました、助かりました」みたいな。手紙ももちろん届いたりもしますし。みんながみんなじゃないですけどね。一部ですけどでもそれはやっぱりスタッフたちは嬉しいですよ。そういうの貰えとね。

原田 121: そういう人というのはお店にとってもなくてはならない人だったんでしょうね、たぶん。

Z2-121: そうでしょうね。やっぱり、よき理解者であり、しんどい時にやっぱり助言をもらったりとかっていうこともあったでしょうし。やっぱり根気が要りますよ、そういう子たちと話すのは。ほんとに、1時間2時間ずーっとこう、帰れない時もありますからね、スタッフ。帰りたくても。

原田 122: そうですよ。愚痴を聞いてあげるっていう、たぶんそういう時間外が発生しない時間を嫌がる人と、いやこれが仕事なんだという人に分かれるってことですよね。

Z2-122: そうです。どちらかというところはそういうのを、ちゃんと最後まで話を聞くようにしていこうという指導をしてきたので、ええ。嫌がるスタッフもいますし店長もいますよ、それは。だけどどちらかというところそういうのをちゃんと、ま、女の子の、その子の質やレベルにもよりますけどね。ええ。それは利益もあるんで。ええ、この子は辞められたら困る子には付き合おうという場面もあるし、もう何回も同じことばかり聞いてきたからこの子はもう無理だってさじ投げる場面もありますしね。

原田 123: なるほどねえ。

Z2-123: だからそれはやっぱり女の子からしてみれば一対一なんですよ。僕らスタッフというのは。けれどもスタッフからしてみればやっぱり、ま、1店舗に5人スタッフがいたら5対40なわけじゃないですか。5対40であり、ま、店に女の子が30人40人いますから、それを全部受け止めるっていうのはやっぱりなかなか至難の業になりますよね。

原田 124: そうやったら逆にスタッフさんの方が壊れますよね。

Z2-124: ええ。潰れてしまいますね。全部を真剣にやったら潰れてしまうと思います。ま、だからああいう、アウトリーチ事業というようなものがあるのは非常に良いと思いますけどね。

原田 125: 相談を外注してしまうわけですからね。

Z2-125: ええ.

原田 126: なるほど. 今後そういったアウトリーチ事業みたいなものが Z2 さんの会社でもやらせてほしいみたいな話があれば受けますか?

Z2-126: ああ, もうそれはぜひ, あの, あれば受けたいと思いますけどね. あとはまあ一方で, これはもう今後の課題だと思うんですけどその, やっぱり今言ったように 10 年働いてる, 20 年働いてる子たちがいるんですよ. そういう子たちってやっぱりもう, ある意味すごい人材だと思うんですよ. そういう子たちのセカンドキャリアとしてうちでなんとかこう, そういう相談にのれる子, だったり, あとは技術的な指導できる女の子だったり, そういう方にこう, 転換して行けたらなあというのはありますよ. その子によりますけどね. 選ばなきゃいけないですけど.

この一連のナラティブから浮かび上がってくるのは, 性風俗産業が, 傷付いた女性達の「承認の共同体」として機能しているという現実である. Z2-27「ただ一方で自分の居場所だという子も中にはいると思いますね.ほんとにそれこそあの, 僕らよく, 何て言うんだろ, 懇意にさせていただいてる産婦人科の先生がいらっしゃるんですけど, その先生がびっくりしてたのが普通だったら怒るようなものを, その女の子に怒る場面でも一切怒らないで,『どうしたどうした』っていう風に僕らもずっと女の子に接しているから, びっくりしたんだって.」というナラティブには,「Biestek の 7 原則」が存在する.そして,恐らく「Rogers の三原則」も.女性にとって,この店が金銭以上の価値を生む場所になるのは理解できる.この研究を始めて,フィールドワークで何十人もの関係者から様々な話を聞いたのであるが,20 年以上同じ店で働き続ける女性がいる,という話は流石に聞いたことが無い.この店にしても早ければ三日で女性が辞めるという.だが,明らかに 20 年間働いた女性と店の間には,共生関係が構築されている.その女性のセカンドキャリアを考える,という Z2 は,非常に優れたマネージャーである.実際,本研究の量的調査の一部をこのグループに依頼した.「20 数名分の心理検査なんて,何も問題無いですよ.一店舗にそのくらい女性の数いますから.」.そう言って一度は引き受けた検査用紙は全て送り返されてきた.理由は,現場スタッフの判断で,女性達の大量離職に繋がらねないということであった.無論,女性を傷付ける程心理的侵襲性が高い設問項目が標準化された心理検査に含まれている訳がない.だが,自分というものを問う検査は,危険が大きいと判断したのだという.店舗では源氏名で偽のキャラクターを作っている女性であっても,心理検査には素の自分で向き合わなければならないだろう.その時,「わたし,なにやってんだろ」と我に返って思うのではないかとスタッフ会議で判断されたのだ,というのであるが,スタッフもまた女性のことを第一義に考えていることが理解される.

ここまで Z2 の会話分析を行ってきたが,厳密に言えば, Z2 は女性達の支援者ではない.だが,間違いなく理解者である.時に最大の理解者なのかもしれない.いかに女性を扱うのが仕事であり,それが自分達の給料に直結するから,と分かっているにもかかわらずではない.それが簡単にできるのであれば,病

院や児童福祉施設、高齢者施設、障害者施設等で虐待など起き得ない。ケアがお金に直結していても、ケアは疲れる。だが、それを徹底するグループの風俗店は、十分に彼女達の居場所たり得るだろう。改めて、「社会福祉は性風俗に敗北した」という思いを強くする Z2 とのインタビューであった。

(2) 本項のまとめとして、既に引用した AV 監督の Z1 とのインタビューをここで検討する。強要はある、ただしそれは、PAPS や HRN がいうような形ではなく、よりソフトな形である、と断言する Z1 がリスクを覚悟して匿名でのインタビューに応じるのは、今の AV 業界を憂うからである。Z1 曰く、「流通と女街だけが儲かる」業界は、女性を使い捨てにし、満足なギャラも払わない。そして、自分達は全くリスクを負うことなく、女性にだけ一生消えないスティグマを負わせる。これに時に憤りを感じるという。彼が望んでいることは、過剰供給の AV 女優の数が今の 10 分の 1 になること、そして、満足なギャラが彼女達に払われることだ。少なくとも彼女達が背負ったスティグマに対する対価が全く払われていない、というのが彼の立場である。だが、それを業界内では絶対に言えないという。それは、未だにメーカーやプロダクションの背後には、反社会的勢力が跋扈しているからだ。彼らは利益に対して貪欲だ。従って、AV 業界が利益が薄いシノギになれば、彼らは自然と別のシノギに軸足を移して離れて行くだろう、そのためにも警察や行政機関が必死に悪質なプロダクションを摘発し、プロダクション経営がリスクであること、海賊版 DVD のせいで AV 業界はかつてのように儲からないこと、などを反社会的勢力に外部から理解させる必要があるという。暴力が支配する世界に自浄作用はないからである。

Z1-25: 我々の業務として女の子がごねるっていうのはよくあることだということです。

原田 26: よくある。それは 2 作目以降の作品を手掛けている監督であっても、やっぱりごねられる人っていうのはごねられますか？

Z1-26: 2 作目以降で、「やっぱりやりたくなかった」みたいなことを言う人はいない。

原田 27: 一度出ればすんなり？

Z1-27: あの、「やっぱりやめたくなったんだけど、今やめると迷惑かかるから」ってことで、なんとなくテンションが低い子はいますよ。

原田 28: うん。なるほど。その、1 作目、すごくこう、揉める女の子がいるんだけど、でもその女の子たちというのは、監督は何を目的にその AV に出ようと思うんだと思いますか？

Z1-28: 承認欲求だね。

原田 29: やはりそこですか。お金ではないですか。

Z1-29: 僕、お金で AV って子、今ほぼゼロだと思います。

原田 30: やはりそうですか。

Z1-30: お金は言い訳。本人にとっての。

原田 31: やはり.

Z1-31: 一方で、たとえば実名出しますけど、Mさんっていう方は、まああの方もだからA（アイドルグループ名）に、芸能界に一泡吹かせたいみたいなのがあるんじゃないの。それは、僕は本人も知らなければ記事で読んだだけなんだけど、あの、だからそれはもうお金じゃないよね。要するにA（アイドルグループ名）の養成所っていうか二軍みたいなところでいた時代よりは遥かに貰っている、それは一見お金が目的のようだけど、でも彼女は、あれもちろんぜんぶマネージャーが演出してるんだと思うんですけど、あの、テレビで自分はA（アイドルグループ名）時代よりも貰ってるんですよ、マンションも買っちゃったんですよ、って言ったでしょ？

原田 32: そうですね.

Z1-32: とても有名な話で。あんなこと、あれ、ああやってあれ言わせたマネージャーはホント頭良いなと思ったんですけど、あんなこと言う人いなかったですよ。強要問題が明らかになるまで。あれ言ったってことは、本人が完全にマネージャーの側についてるというか、AV業界側についてるってことで、その、かつて不遇だった自分に対する、これもうご本人の名前出しちゃってるんで、あんまり僕が勘ぐったこと言うのも失礼なんだけど、彼女のことっていうわけじゃなくて一般的なこととしてですよ、過去への復讐みたいなのところがあるんじゃないかと思いますね.

Z1-28「承認欲求だね.」、Z1-29「僕、お金でAVって子、今ほぼゼロだと思います.」、Z1-30「お金は言い訳。本人にとっての.」というナラティブから、分かるのは女性達はAV産業において、『承認』をめぐる闘争」を行っている、ということである。Z1が挙げたMは、問題児だったためにアイドルグループを解雇された。そして、その後、元〇〇を看板にして、AV業界にデビューし、大スターに登りつめた。現在では、超格差社会の頂点に君臨する1人である。そして、その背景にあるものを、Z1は、復讐だというのである。自分を受け入れなかった芸能界そのものへの復讐以外にも、自分が所属していたグループの名前に傷がつくことまで考えての行動であろうと、Z1は指摘する。

Z1-33: あんまり良くない風俗で働いてる人だったら、明らかに普通の就職とか普通のバイトとかの方がいいだろうし、でAVに出るその、僕が言ったような、揉める人っていうのはだいたい美人さんなので、美人さんだからAVに出てもギャラが高いんだけど、でもそれで彼女は中間搾取される結果、彼女が貰える金額を考えたら、その美貌であつたら恐らくソープの方がぜんぜん良い.

原田 34: なるほど.

Z1-34: まあ、よくご存じだと思うんですけど、綺麗な人が勤められるランクの風俗と、まあ

普通の方が働くランクの風俗っていうのがあるわけなんですよ。で、どっちもそういう問題が起きてますよね。あの、綺麗な人だったら AV 女優より風俗の方がいいし、普通の人だったら風俗で苦勞するよりも普通の仕事の方がむしろいいんじゃない？っていうロジックが、同じロジックが成り立ちますね。だから本当に困ってる美人だったら、まあ大変かもしれないけど風俗に行く方が、お金だけだったら、良い。

Z1-34「だから本当に困ってる美人だったら、まあ大変かもしれないけど風俗に行く方が、お金だけだったら、良い。」というのは、性風俗産業では、特にホスト絡みの話でよく指摘される。ホストの掛け縛りで何百万円も来月まで入金しなければならない、という状況に置かれて、AV を第一選択肢に挙げる女性は恐らくいない。専属女優は、月に撮影は 1 本、6 本半年の契約がまとまったとしても、M クラスで最大月に 100 万円＋イベント日当が少し、である。それで半年拘束され、その間は当然 AV 以外の仕事は契約上できなくなるのだ。ホストクラブのエースであれば、月に自分の生活費とは別に、200～400 万円近くをホストに貢ぐためだけに稼がなければならないとなれば、AV 女優の収入は足りな過ぎるのである。Z1 が指摘するように、そこにあるのはお金以上の名誉だ。専属の単体女優として選ばれた、という女性としての誇りと、現場でちやほやされることで満たされる彼女の承認欲求が、最大級のスティグマを背負う理由なのである。

原田 36：たとえば「恵比寿★マスカッツ」とかがそうだと思うんですけど、あの存在というのは、AV 女優にアーティストだという側面を与えるわけですよね。

Z1-36：そうですね。

原田 37：本人たちは「アーティストなんだ」という風に自分に言い聞かせることによって AV 業界に長く居続けると。

Z1-37：こういうのなんていうんだっけ。やりがい搾取っていうの？

原田 38：やりがいの搾取ですよ。

Z1-38：承認欲求。

原田 39：承認欲求ですよ。「アーティストなんだ」という風におだてて、長く AV を続けてもらえば当然業界は潤うし、マネージャーなんかは、，，

Z1-39：おだてるって言うけど、本当に楽しいんだよ、あの人たち。

原田 40：でしょうね。分かります、それはやっぱり。

Z1-40：まあ作られてしまった状況っていうのが本当になったのか嘘なのか、って言うことは、その、もう、個々の、だから僕はそれは是々非々だと思うんですけど、ぜんぜん違う話で、本当にやりがいを持って、本当に AV の仕事をしている人、恐らく AV の仕事やってなかったら死んでるっていう人はたくさんいます。

原田 41：いるでしょうね。やっぱりその、AV 女優の自傷率というのも異常だと思うんだけど、その、AV も一つの自傷行為だと思うんですよ。

Z1－41：そうだね。

原田 42：自傷するような女の子たちが生きていくために AV をやってるのであれば、AV がやっぱりあらなければならない、それが救いになってると思うんです。

Z1－42：そうだね。

原田 43：けれども、人によっては、もっと傷つく人もいるわけですよね。

Z1－43：そうだね。おっしゃる通りです。

原田 44：前にある AV 監督が書かれた記事を読んだ時に、AV に出ていい子と出てはいけない子がいて、病んでるような子はやっぱり出てはいけないという風におっしゃってたと思うんですけども、割合で言うとわたしは病んでる子の方が多んじゃないかと感じてるんですけども。

Z1－44：そうかもしれないですね。それについては、僕は違うことを言い続けてるんでね。AV 女優は普通の人だってというのが僕の論点なので。

原田 45：そうなんですか。

Z1－45：うん。僕はその意見に「その通りです」とは言えないですね。言いたくない。

原田 46：普通の子なんですか？

Z1－46：普通の人も病んでるよ、っていう。

Z1－40「本当にやりがいを持って、本当に AV の仕事をしている人、恐らく AV の仕事やってなかったら死んでるっていう人はたくさんいます。」という Z1 の話は、B4 や C1 の話を聞いた後であれば腑に落ちる。彼女達は、「死にたい、死にたい」と言い続けていた若い日、AV 女優という地位について、「承認」されることで、生き抜くことができたのだ。虐待サバイバーのように、自暴自棄に生きて、社会も認められず、自分自身さえ受け入れられない女性達が、華やかにスポットライトを浴びる場所で、そこに人生の生きる意味を見出したとしても何もおかしくはない。ここで、Z1 が、「僕はそれは是々非々だと思うんですけど」というのは、まさにそういうことなのだ。人によっては、救いになり得るし、人によってはスティグマに殺される。だから、個々人が判断すればいい、というのが、Z1 の立場だ。ただ、彼は、圧倒的に人生を破滅に追い込まれる方が多いと経験上分かっている。

原田 107：M さんのような逞しい人はもう我々が関知するところではないから、もうハッキリ言って。それは本当にその人の好きなおりで生きてくださいと。スティグマなんかはねっ返して頑張ってくださいと。そういう話だと思うんです。でも、そういう人がいるから良いんだと言ってしまうと、はね返せない弱い人たちが困るじゃないですか。

Z1－98：まあ困るっていうか、まあ人生が減びる、人生滅亡しますよその人。

原田 108：滅亡されたあとに,,,

Z1－99：どっかで自殺しますよ。

原田 109：生活保護に回ってこられたら、それを、もう,,,

Z1－100：そこで社会保障費がかかるよねえ。

原田 110：なんでこんなになる前にこの業界を辞めなかったの、誰も助けなかったの、助言しなかったのってなった時に、やっぱり、「今まで人生でそういう人がいませんでした」と。そこで感じることは、圧倒的なまでの孤独なんです。

Z1－101：でね、それは、なんでかって言うと、やっぱりそういう人たちとの接触をヤクザがシャットアウトするからですよ。

原田 111：でも、それも、生まれつき孤独なんですよ。生い立ちからしてもう孤独なんですよ、話を聞くと。

Z1－102：ああ、いやいやいや、だから、AV 業界にそのシステムがあればね、救うって言葉はたぶん僕、好きじゃないから使わないけれども、そこで本人と話をする、その孤独じゃなくするシステムっていうものがあれば、AV 女優になって良かった、一瞬は良かったってことになるじゃないですか。だけど、AV 業界の問題は、その構造が孤独な人をますます孤独にするようにプロダクションが囲い込む。でそれが、昔ほどは悪くないんですよ。なんでかって言うとインターネットがあるから。SNS によって、女優は昔ほどは孤独ではない。

Z1－102「だけど、AV 業界の問題は、その構造が孤独な人をますます孤独にするようにプロダクションが囲い込む。」というナラティブに AV 業界の宿痾が表現されている。孤独な人をますます孤独にする、つまり、外部との一切の連絡を取らせないようにするのである。専属女優の場合は、四六時中マネージャーが付くようになる。軽々しく、電話はできない。イベントも営業もどんどん入れられる。毎日が忙しい状態に追い込まれる。結果的に、それまでも友人が少ない女性の周りは全て業界関係者になっていく。そして、業界の常識、一般社会の非常識が教え込まれていく。これを洗脳と言って、強要被害を訴える女性が出て、おかしくはないのである。

そして、Z2 が運命共同体のような形で 20 年間も一緒に働いてきた女性を、セカンドキャリアを考えて、現役の風俗嬢ではなく、現役のキャストに指導する研修者として再雇用しようか、というところまで親身になって人生を考えているのとは比べて、いかに AV 産業が冷たいか、Z1 のナラティブから理解されるのである。Z1－99「どっかで自殺しますよ。」というのは、想像ではない。恐らく、何人もその通りに自殺した女優を見てきたが故の、Z1 のこの言葉なのである。

Z1-139: で、ヤクザの人たちはだんだんギリ貧だから女の子をいじって沈める仕事だとしてもそこまでは儲からないってなってきたら、撤退していく人たちもいるだろうけれども、とりあえずやっぱ彼らがいることで、彼らと×××（流通最大手）の間に制作メーカーというものが入ることによって、×××には警察が来ないし、ま、いろんなことが安全便利になっていて、相変わらず女の子だけが精神的危険になってるんだけど、話戻すとさっきも言ったようにもともと流通と女連れてくる仕事しか儲からないシステムなんですよ。システム自体が、で、まあアメリカのポルノ産業がこんな日本ほど大きくないと思うんですけど、まあこれも、ご存知のようになっていか現地見たわけではないので聞いた話なんで僕は知りませんが、女優さんのギルドがあって、マフィアもいることはいるけど、さっきみたいな、ホントに女優さんたちの用心棒として機能しており、で撮影現場で何かあったらすぐに FBI が飛んでくるみたいな、まあ、女優が守られますよね。ヤクザから守られてるんじゃないくて女優たちが自主的に自分の身を守ってる。アメリカのポルノは。

原田 149: そうですね。ヨーロッパもたぶんそうです。

Z1-140: そうなるべきだよ。

Z1-140「そうなるべきだよ。」に Z1 の良心を見ることができる。彼は、憂慮しているのである。日本の AV 産業において、女性が消耗品の様に扱われていることに、である。彼女達は、表向きは現場で非常に大切に扱われて「承認欲求」を満たされている。だが、契約が切れた AV 女優は、一切面倒を見て貰えない。次々と新人が参入する AV 産業において、最近また一つ参入障壁を下げたものがある。それは、美容整形である。専属女優になどなれないレベルの女性であっても、デビュー前に完全に美容整形手術を終わらせておけば、身バレも防げる。また、引退後にまた整形手術をすれば、一層周囲にはバレないかもしれない、という安易な考えで女性達が AV に参入する。その多くはスカウトによる勧誘であるが、現代の女街であるスカウトは、その女優が引退するまで、出演料の 10~15%が事務所から支払われる。Z1 が、儲かるのは女性ではなく、流通と女街だけ、というのはそういう訳なのである。だから、スカウトは、自分の生活のために徹底して女優に優しくする。生活全般の面倒を見たり、プライベートな悩みまで聞き、精神面をケアする。だが、そうやって、元々孤独な女優は一層孤独になっていくのだ。C 群の心理検査の結果は、最大級のスティグマを背負っているにもかかわらず、そこが突き抜けて悪いという結果にはなっていない。だが、AV 女優がスティグマを味わうのはこれからである。B 群の風俗嬢は、確かに今は一番苦しい状況にあるのが結果から浮かび上がってくるものの、彼女達は、何ごとも無かったかのように日常生活に戻り、普通の人として生活を送り、結婚し、子供を産み幸せになれる可能性がある。だが、AV 女優はそうではない。紗倉まなの原作で映画化もされた『最低。』に描かれているように、将来結婚して生まれた子供が大きくなって、AV 女優としての自分の映像を見ることがあり得るのだ。その意味で、C 群の心理状態は、本来長いスパンで追跡調

査が必要であると思われる。

本項では、「社会保障は性風俗に敗北した」という言説を改めて、複数の関係者の証言から考察した。Z2のような店舗と、自分の価値観・倫理観やイデオロギーを押し付けようとする支援者のどちらを女性達が頼るかは考えるまでもない。従って、現状、敗北した可能性は極めて高いが、敗北から前に進むためにも、この研究をその一助としたい。

最終章 研究の総括：Honneth の承認論に基づく新たな「貧困理論」の構築

第 1 節 社会福祉の支援対象としての「性風俗」

第 1 項 「実存的貧困」或いは「絶望的貧困」からみた女性達の「貧しさ」

(1) 本研究（会話分析を行った計 52 人）において、古典的な「経済的貧困」状態、すなわち、「相対的貧困」を下回っている女性は 13 人であり、25.0%、概ね 4 人に 1 人の女性が物質的な欠乏状態に置かれていた。日本の相対的貧困率（2015 年）は、15.6%であり、今回の調査はそれを大きく超えるものである。一般的には「夜」や「風」の仕事は、高収入であると考えられているが、今回の調査ではそれが必ずしも正しくないことが証明された。無論、暮らし向きが派手で豊かな生活を送っている者もそれなりに存在している。だが、その数は全体的に見ても各群の一部に留まっており、大勢を占めているとは言い難い。性風俗産業は、一般的な社会以上に格差が拡大しており、「相対的貧困」以下で暮らしている者が 4 分の 1 もいる一方で、ほぼ同数の女性達が月収で 80 万円以上を稼ぎ出している。ただ、こうした高収入群、とりわけ他の群と比較すると安定して稼げている B、C 群において、高収入であるにもかかわらず、そのお金を全てホストクラブで散財するような女性達がかかなり存在しており、結果的に彼女達もまた著しい生活困窮状態に陥っている。自分の手元にお金が残らず、ホストに搾取されている、と考えれば、幾ら月収があろうとも、このような女性達も広い意味では経済的に貧困である、と見做しても差し支えないと思われる。

結局、これらの仕事に就いていても「経済的貧困」状態に陥ってしまう理由に関しては、元来が生活に困窮した機能不全家族に生まれており、その生活様式からなかなか這い上がることが難しいこと（Lewis が指摘する「貧困の文化」や「アンダークラス」論が指摘する貧困の世代間連鎖が実際に存在している証左であろう。）、そして、首都圏での单身生活者の場合は、住居等の維持費が高額なことに加えて、不安定な仕事であるが故に計画性を持って生計を立てるのが難しいことなどが指摘できる。「高時給」、「高収入」というのは、女性達をこの世界に誘う際の謳い文句であるが、それはあくまで都合の良い呼び水であって、必ずしも全員がその仕事で高額所得者になれる訳ではない。

貧困化の傾向としては、何らかの理由で店舗に属せず、出会いカフェや SNS 等で個人売春をしている女性達の収入が最も安定しないため、結果的に D 群の女性達が多く「相対的貧困」のカテゴリに入った。中にはハウジングプアに陥っているような極端な女性も数名存在した。A～E 群の全てに満遍なく「相対的貧困」状態の女性は存在しており、具体的な内訳で言うと、A 群の生活困窮家庭出身者が 2 人、B 群の首都圏单身生活者が 2 人、同じく C 群の首都圏单身生活者が 2 人、D 群の「最貧困女子」系が 5 人、E 群のシングルマザーが 2 人となっている。

A 群の 2 人は、精神疾患のために昼の就業と失業を繰り返しながら、体が動くときに並行して風俗で働く女性が 1 人、生活保護受給者が 1 人である。2 人共元来の家系が母子家庭で経済的に貧困であり、虐待やいじめといったトラウマティックな外傷体験を多く抱えていることも共通している。結果として、貧困の世代間連鎖が見られ、A13 は、親子二代で母子家庭となっている。在日中国人と結婚した A13 の妹も離婚し、同

じく母子家庭になっている。B 群の 2 人は、中村が『東京貧困女子.』で描いた女性達に近い。江口の「社会階層論」における典型的な「不安定・低所得階層」として首都圏の小さな町工場で働いている B7 は、元来が地方都市の生活保護世帯出身であるため、A 群の 2 人と同じように親世代から引き継いだ貧困の連鎖に囚われている。B11 は、貧困世帯の出身ではないが、教育ローンを抱えた首都圏単身生活者であり、いじめによるアパシーの状態から立ち直れずに、昼の正業への就職を断念したのが原因である。中村（2019）が指摘するように、首都圏で単身生活を送る場合、住宅費や光熱費が割高なため、地縁や血縁が無い地方都市出身者が昼の正社員の地位を確立できない場合は、かなりの確率で経済的な困窮状態に陥る。まして、A 群の女性達のように水商売で働けるような容貌を持たない B11 が高額な教育ローンの支払いまで抱えれば、性風俗産業で働く以外に選択肢が無くなってしまふのである。

C 群の 2 人も首都圏単身生活者である。C6 は、ミスコンの最終選考まで残り、かつエリート予備軍とも言っている高学歴大学に通う大学生であるが、発達障害の自閉スペクトラム症（ASD）が思いのほか人生の足枷となっている。生きづらさから大学では留年を繰り返して大学の最終学年であるにもかかわらず、就職活動も完全に諦めてしまった。また、甘い考えから AV 女優としてデビューしてしまった以上、本来の学歴から期待される大企業への就職は今後も難しいと自覚しており、現状はフリーランスの仕事を細々と請負ながら将来のキャリアを模索しているが、全く道筋は立っていない。辛うじて男性と同居することで生活は成り立っているが、大学卒業後、仮に男性と上手く行かなくなれば一気にハウジングプアに陥るか、DV に耐えてそこに居続けるか、実家に戻るかしか選択肢は無い。だが、AV に出演したことで実家や地元との関係性はかなり疎遠になっており、本来は貧困とは無縁の家庭に育ち、無縁の人生を送ってきた富裕層出身者であっても、AV 女優という性風俗産業でも最大のスティグマを背負うということが貧困への切欠になり得ることを C6 は示唆している。C8 も一般家庭の出身で、普通に上京して単身で正社員として生計を立てていたのであるが、地下アイドルにスカウトされたことで生活が破綻した。地下アイドル活動を継続するために、性風俗産業で働くという本末転倒の状態に陥っているが、C6 同様に自閉スペクトラム症（ASD）の傾向があり、幼少時から続いているいじめ等、彼女もかなりの生きづらさを抱えている。

D 群は最も経済的に困窮している女性が多い群である。出会いカフェで素人売春を行っている軽度の知的障害が疑われる D3 と D4 はハウジングプアの状態であり、時折実家に戻る D3 であっても、父子家庭の実家は生活保護状態である。D4 は逆に富裕層出身なのであるが、本人は軽度の知的障害からか、家族や親族の様に一流大学に進学することができず、最底辺の通信制高校を辛うじて卒業して家出状態である。厳格な実家からは性風俗産業に関わった時点で絶縁されている。ヒモに近い男性と同居しているが、その男性から追い出されれば、首都圏でホームレスになるしかない状況であり、それを回避するために、彼女は売春で得たお金のほぼ全てを男性に貢いでいる。これは女性の恋愛感情に付け込んだ経済的な搾取であり、ある意味性風俗産業における「色管」よりも遥かに性質が悪い。D4 の状況からは、「女性の貧困」の悲惨な側面が浮かび上がってくる。

貧困家庭出身で、首都圏単身生活を送っている D11, D12 も色濃く親世代から続く貧困の連鎖に囚われている。パパ活を中心に活動しているこの 2 人は、出会いカフェで売春を行う D3, D4 同様に、生活が安定しない。D11 と D12 は、容貌の面では女格差の上位にいるため、売春をしてまでお金を稼ぐ必要はないのであるが、D11 は駆け出しのアイドルのために事務所の拘束があり、D12 は PTSD 等の精神障害のせいで安定した昼の正業に就くことができない。従って、パパ活によって残りの生活費を何とか工面する必要があるのであるが、売春をしない限り、パパ活は大きな収入源になり得ない。かといって A11 の様に、パパ活に売春を組み込んでしまうと、生活は安定してもストレスから心身が摩耗する。D11 と D12 は、自分達の脆弱性を理解しているため、心身を壊さないために、敢えてパパ活もお茶だけに限定して、経済的な困窮状態に耐えているのである。

E 群の 2 人は、ジェンダー・ギャップが著しい日本社会における分かり易い「女性の貧困」の体現者であり、シングルマザーであるが故に生活困窮状態にある。2 人とも父親は性風俗産業に従事していた時に出会った「アンダークラス」の男性であり、養育費を貰えていない。そして、小さな子どもの存在が足枷となつて、性風俗産業に戻ることも難しい。地方都市であっても、性風俗産業従事者をターゲットにした認可外保育施設は存在するため、働こうと思えば彼女達も仕事に復帰することは可能なのであるが、2 人とも子どもに対する罪悪感からそれを諦め、働ける範囲で昼の正業に就いている。しかし、保育園からの度重なる呼び出しや、日勤帯に限定されてしまう勤務シフトのせいで、現状正社員にもなれずに短期の有期雇用契約を繰り返さざるを得ない「不安定・低所得階層」としてワーキングプア状態に置かれて苦しんでいる。E2 は、まだ最後のセーフティネットとして市内に同居を認めてくれる実家があるのだが、貧困な母子家庭出身の E1 はひきこもりの妹を抱えて公営住宅に住んでいる母親に頼ることができず、心身共に体調も思わしくないことから今は生活保護の申請を検討中である。

13 人中、IWM に欠損を抱えておらず、トラウマティックな外傷体験が存在しない者は 1 人もおらず、かつ性風俗産業従事者という社会的スティグマを背負っている以上、13 人全員が、「実存的貧困」を兼ね備えた「絶望的貧困」状態である。一方、「実存的貧困」ではあっても、「絶望的貧困」状態では無い者も今回の 52 人のインフォーマントの中に多数存在している。本研究が重視している、再配分の必要が無い貧困状態を体現している女性達である。

A 群では、A2, A4, A5, A11 の 4 人、B 群では、B1, B2, B4, B5, B10 の 5 人、C 群では、C2, C3, C4, C9 の 4 人、D 群では、D2, D5, D6 の 3 人、E 群では、E5, E6 の 2 人が「経済的貧困」を伴わない「実存的貧困」であり、合計で 18 人である。「絶望的貧困」状態の 13 人と併せれば、52 人のインフォーマントの過半数近い 21 人が直ちに「なにかがなされなければならない」という困窮状態に置かれており、性風俗産業従事者は、社会福祉の支援対象である、という本研究の主張は概ね証明された。無論、「実存的貧困」或いは「絶望的貧困」に該当しなかった他の 31 人の女性達も、その多くが精神・発達障害を発症していたり、虐待やいじめ、DV、性被害等の何らかの外傷体験の後遺症に苦しんでいる。何らかの生きづらさを

抱えていない女性というものは、52 人のインフォーマントにただの 1 人も存在せず、性風俗産業が、様々な個人的な失調状態と社会問題・社会病理の集積地であるという認識は間違い無いであろう。

性風俗産業において、貧困の極北である「絶望的貧困」に陥らないためには、基本的には店舗か事務所に属して働くことが一つの回避策になる。首都圏での単身生活者を除けば、女性達が店舗に属している限り、水商売であろうと、風俗産業であろうと、辛うじて経済的な困窮は回避されることが導かれた。一方で、この回避策は「最貧困女子」には該当しない。彼女達は、容貌格差や様々な疾病・障害によって、店舗に所属することが難しい。鈴木が『最貧困女子』で描いた様に、彼女達は結果的に最も危険と言われる街娼に近いのである。出会いカフェやインターネットの匿名掲示板、SNS、パパ活アプリ等を用いて個人が自己責任で行う売春でしか生計を賄う手段がなく、彼女達がエージェンシーを発揮する機会はかなり制限されてくる。また、店舗に所属していても、首都圏での単身生活者で家族に援助を求められない者も、容易く経済的な困窮状態に陥ってしまう。女性達の多くは「不安定・低所得階層」であり、ワーキングプアである。それを補う手段が水商売や風俗産業なのであるが、キャバクラ嬢が十分に務まるレベルの容貌でなければ、風俗嬢になっても毎日コンスタントに客が付くとは限らない。それが、性産業に従事する女性が異常なレベルで供給過多となっている首都圏の現実であり、中村が『東京貧困女子.』で生々しく描き出した事例は一部の例外ではない。新自由主義の下で格差が拡大し続けているこの国で、今この瞬間も誕生している紛れもない現実の一部なのである。

ここで再度、貧困に喘ぐ女性達のナラティブのうち、象徴的なものを提示する。

A13-158 : I は、あたしの生きる意味です。でも、それなのに、時々思うんです。I と一緒に死んでしまいたいって、、、 実は、昨日も夜 I が泣き止まないのをずっとあやしながら、顔をじっと見つめてました。このまま 2 人で死んでしまおうかって。生きていても意味がないし、、、 希望なんか、何も見えないし、、、

原田 414 : …そのあとは一番自分が居場所だと思うところってどこ？社会の中で。

D2-414 : 居場所があるってこと？

原田 415 : ここにいと多少は落ち着くっていうのはどこ？

D2-415 : ……

原田 416 : 苦しさが軽減されるみたいな。

D2-416 : ………………ない（消え入るような震える声で）

原田 370 : 怖くなるんだ。幸せを感じるんじゃないの？愛されたら。

D12-370 : うん、なんか、こう言ったからこうなるんだろうな、っていう。

原田 371：絶対に落ちること前提に考えてしまう？

D12-371：そう。落ちるのが怖いので幸せであればあるほど怖くなる。

原田 372：なんなんだろうね、その底が抜けたような絶望感というか。こう、虚無感というのは。

D12-372：うん、虚無感はありますね。

A13の「生きていても意味がないし、、、希望なんか、何も見えないし、、、」というナラティブが、死の一手手前で踏みとどまっている絶望を伝える。D2の「(居場所が) ……………ない(消え入るような震える声で)」という涙声から、今にも世界から消えてなくなりたいという哀しみが溢れる。D12の「うん、虚無感はありますね。」という言葉が重い。20代の女性が、何故、これ程までに社会に追い詰められなければならないのか。彼女達の苦しみは断じて自己責任ではない。自己が壊れてしまっている人間に責任など問うてはならないである。今直ぐにでも彼女達に対して、「なにかがなされなければならない」と切に願う。何故ならば、これまで描いてきた通り、彼女達は圧倒的に貧困なのである。希望がない日常の中、彼女達の人間の「実存」が日々削られているのである。もう、彼女達は、助けを求めることさえ、諦めかけている。助けてと言えない彼女達に、助けて、ともう一度言わせることが、社会福祉学の役割ではないだろうか。

第2項 偽装されたセーフティネットとしての「性風俗」

(1) これまでの研究から明らかなのは、性風俗産業は、間違いなく、傷付いた女性達のセーフティネットになっているということである。だが、この言葉は語義矛盾も含んでいる。確かに、彼女達は行政機関のシェルターに頼るよりは、性風俗産業の寮を好み、ソーシャルワーカーやカウンセラーに悩みを打ち明けるよりは、スカウトや店舗のスタッフ、そしてホストに相談する。この状況は、彼女達に安心をもたらすと同時に、確実に未来に問題を先送りする。彼女達が抱えた経済的な問題は、ほとんどの場合そこで解決しない。何故ならば、解決されたら、性風俗産業に携わる者達が皆困るのである。女性には一日でも長く、健康で、働き続けて欲しいのだ。無論、自分たちのために、である。

従って筆者は、性風俗産業全体が、偽装された「裏のセーフティネット」であると考えている。「偽装された」という言葉の意味は、一見、この世界は女性の方にもメリットが大きいのに見えるからだ。だが、それはあくまで見せかけだけだ。高い時給は、劣悪な労働条件と環境の上に成り立っている。雇用保険も社会保険も無く、労働基準法が禁じている以上の罰金を当たり前のように取り、いざ辞めると言えば、最後の月の給料は未払いになるなどというのはザラな世界なのだ。そもそも、労働者の権利など、何一つ保障されていないのである。

ただ、中には強かに性風俗産業に依存することもなく、自分の目的を達成して、綺麗に業界からいなくなる女性もいる。そのような女性にとっては、確かに性風俗産業はセーフティネットと呼んでも良いかもしれない。例えば、実際にそこに救われた女性の言葉を下記に引用する。

それは、キャバクラユニオン交渉委員の根来祐の事例である。キャバクラ嬢が悪質な店に搾取されないために、声をあげたキャバクラ嬢の支援団体、キャバクラユニオンは、フリーター全般労働組合（PAFF）の分会として生まれたキャバクラ嬢の労働組合である。一般に「水」の世界も「風」の世界も、女性達は個人事業主という体で働かせられる。そこには、店舗側が女性が万が一トラブルを起こしたときに、管理者としてリスクを負いたくない、社会保険料等の負担をしたくない、労働基準法の縛りから逃れたい、など様々な理由があるであろう。だが、一般的に、幾ら店側がキャストは個人事業主だと強弁していても、指揮命令系統がはっきりと店にある限り、みなし労働者であり、キャバクラ嬢にも労働基準法は適用されるし、店舗側に当然団体交渉を挑むことも可能だ。

キャバクラユニオン交渉委員の根来祐は国際基督教大学の発刊紙である CGS News letter 013（2010 年 10 月 13 日）の中で次のように語っている。

●寄る辺としての水商売

キャバクラユニオンで団体交渉に携わる交渉委員を始めて 4 ヶ月が経つ。短い経験だが自分が気づいた事を書き記しておく。20 代前半、映画の仕事をやる為に家出同然で上京した。映像制作の技術を身につけ、男並みに働いても得られるお金は時給換算すると最低賃金以下。体と精神を壊して不安定な状況に陥った。そんな時に水商売が支えになった。東京に出るお金はスナックで稼いだし、東京でもクラブで働き続けた。危機的状況にいた私にとって水商売は「セーフティネット」だった。ユニオン発足当初、水商売を経験していた交渉委員はわずか 2 名。水商売で働いていた事を家族には隠していたため、私は匿名で活動するつもりだった。しかし、名乗り出なければ社会は変わらないと思い、カミングアウトして活動する決心をした。

ここで根来が水商売をセーフティネットと呼んでいるのは、本当にそうなのであろう。だが、今彼女は、居場所だったセーフティネットと闘う組織の一員だ。根来の時代に比べて、新自由主義における過度な競争が、女性達の働く環境を著しく悪化させ、女性達の尊厳が守られるどころか日常的に搾取がまかり通るからこそ、彼女はセーフティネットのふりをして女性をかき集める悪質な店舗が許せないのだ。

一方で、恐らく彼女達から絶対に訴えられることなどない程に、コンプライアンスを重視している企業も存在する。前章で、Z2 の善良な考え方に触れた。彼は、win-win の関係を長い間築くことがお互いにとって大切だが、最近の女性とはそれが非常に築きにくくなった、と嘆いていた。性風俗産業の市場が拡大し過ぎた結果、女性の数が足りないために、どうしても 1 日でもいいから、1 時間でもいいから出勤して欲しい、と甘やかし、昔のように仕事なんだからしっかりしなさい、と注意し、怒ることができなくなったのが原因かもしれない、という。Z2 のような老舗がこの状態であるならば、他の店も同じかそれ以上に女性達を甘や

かしているだろう。恐らく、メリトクラシー型能力も、ハイパー・メリトクラシー型能力も足りず、昼の仕事に就けば、マクドナルドのようにマニュアル化されたルーティンワークですら務まらないレベルの彼女達が、怒られずに働ける場所は、日本には性風俗産業しかないのかもしれない。女性達が、ここを居場所にしてしまうのは、ある意味当たり前なのである。

だが、このセーフティネットは巧妙に偽装されているのだ。そもそもが、セーフティではない。お店のスタッフは優しいかもしれない。だが、客はどうだろうか。決して全員が優しくはないだろう。キャバクラのレベルでも、セクハラは当たり前、デリヘルでは本番強要は当たり前、である。AV 産業は最も女性をちやほやして、彼女達の承認欲求を存分に満たす場所であると指摘されるが、そこですら、NG 項目を騙し打ちで無理やりやらせるような強要被害が起きている。性風俗産業において、セーフティなどという言葉は絶対にあり得ない。JK ビジネスで働いていた D1 は、そこを選んだ理由を健全で安全だから、と言ったが、その認識は間違っている。昨今の JK ビジネスは無法地帯の様相を呈しており、寧ろ、そこはリスクでいっぱいだ。

とりわけ危険なのは、組織に属さない、或いは属せない女性達の個人売春と、未成年の援デリである。組織に属さない女性達は、多くの場合は出会いカフェを使って対面で客を探すか、インターネットの匿名掲示板か出会い系サイトで客を探す。どちらにも多いのが、普通の風俗店には採用されないレベルの「最貧困女子」である。今回のインフォーマントにも、組織に属さない女性達は、軽度の知的障害が疑わしい「最貧困」系の女性達と、明らかに店が嫌がるであろう「精神病」系の女性達が多かった。彼女達が、ヤクザや反グレ達から性暴力被害に遭ったり、その後脅されて AV 出演や売春を継続的に強要されたりする可能性は決してゼロではない。後ろ盾がないということは、全てが自己責任になるということである。事実、東電 OL の最期はそうだった。彼女は、恐らく「精神病」系の扱いになり、渋谷の全ての店舗から採用されない状態になったのであろう。その結果、街娼という最底辺の売春婦に堕ちた訳だが、彼女の死は未だに多くの謎を残したままで犯人が見つかっていないのだ。

援デリも同じく非常に危険な仕事である。援デリは、未成年のデリバリーヘルスだ。児童福祉法違反である以上、いつか必ず摘発される。従って、短期間で稼げるだけ稼ぐ、というのが、援デリを仕組むヤクザや反グレの考え方だ。Z1 が指摘していたが、彼らに、未成年を使うなんておかしい、或いは、そんなことしたら必ず捕まりますよ、という助言を与えることは、一切意味が無い。何故ならば、最初から彼らは捕まる前提で動いているからだ。そして、捕まった時に警察に逮捕される人間は、既に確保してあるのだ。従って、ノーリスクで利益が出せる以上、それをやらない理由が無い。当然、子供だから可哀そうだ、などという甘い感覚は無い。鈴木 2 の壮絶なルポである、『援デリの少女たち』では、性器から血を流しながら、更にそこにローションを縫って売春を続ける女性や、痛みを耐え切れずに、遂に麻酔薬を性器に塗って売春を続ける女性達の実態が描かれる。家出少女達や“訳アリ”少女達に、短期間で稼げるだけ売春させるというその無法なやり方からは、子供ですらお金を生む道具としてしか見做していない組織の非情さが伝わってくる。これ

が、性風俗産業の裏の貌である。どんなにそこが居場所に思われて、仮にどんなに良い出会いに恵まれたとしても、それは全ての女性にとってのセーフティネットではないのだ。本当のセーフティネットは、人を選ばない。誰にとっても、同じ安全と安心を提供するからこそ、それはセーフティネットなのである。従って、「社会保障は性風俗に敗北した」という言説とその現状を、絶対に認めてはならないのである。

(2) 上記の言説を打ち消すためには、具体的な取組みが必要になる。だが、極めて残念なことであるが、日本の社会福祉学は、これまで性風俗産業に従事する女性達に、積極的に手を差し伸べてきたとは言い難い。否、寧ろ、彼女達をそこに追い込んできたのが日本の社会福祉なのである。これ程日本社会で「女性の貧困」が問題になり、シングルマザーの相対的貧困率は5割を超えている異常な社会であるにもかかわらず、寧ろ、そこで一度でも働いてしまうと、スティグマが貼られて社会福祉の支援対象から外されてしまう。そもそも、そこで働いている女性達が社会福祉の対象であるという認識を、ほとんどの社会福祉学の専門家が理解していない。辛うじて、社会学のフェミニズムに属する人間が啓発を行ったり、婦人保護事業に長年従事している専門家が時折警鐘を鳴らす程度である。NHKが女性の貧困の特集を組んだり、Colaboの「私たちは『買われた』展」の特集を報道したりする度に、社会は寧ろ彼女達をバッシングする側に回る。この国は、生活保護等に対して起こる貧困バッシング以上に、売春バッシングに熱中する。だからこそ、行政を頼ることが益々できなくなるのである。

売春バッシングを回避する方法は、水嶋やX1らが指摘するように、売春の非犯罪化以外に方法は無いと思われる。売春防止法が、売春を違法であると規定するからこそ、そこに差別と偏見が生まれる。また、合法化だけでは足りない。合法化は、しかじかの条件の下では売春を認める、という規定であるが、そのしかじかの条件から外れた場合はやはり売春は罪に問われてしまう。従って、どのような条件で売春が行われようとも、一切罪に問われない非犯罪化以外に、セックスワーカーの尊厳を守り、社会にスティグマを軽減する方法は無いのである。そして、実際に売春の非犯罪化が社会にとって有益であることは、徐々に科学的にも根拠が示されてきている。2014年7月16日のウェブ版「THE WALLSTREET JOURNAL」に掲載された一つの記事が、ネット上で大きな話題を呼んだ。記事の見出しはこのようなものだ。

“米ロードアイランド州、売春非犯罪化でレイプ激減＝全米研究所、

記事によれば、議会の立法ミスにより、一時的に屋内での売春が非犯罪化されていた時期が2003年から6年間続き、その間のレイプ件数と淋病の発生件数をその他の期間と比較したところ、レイプは31%、淋病は39%減少していたことが分かったのである。同期間において、その他の犯罪件数は一切変化が無かったにもかかわらず、レイプだけが大幅に減少したのだ。理由は至ってシンプルで、レイプを行う集団の一部が売春宿を利用し、売春宿ではレイプに比べて安全な性行為を行うため、性感染症に感染したり、感染させた

りする件数が減ったと推測されるからである。性風俗のお陰で性犯罪が減るという俗説が、初めてエビデンスを持って正しいと証明されたのだ。

現在、性風俗産業に従事している女性達は社会的排除の対象であるが、それを社会的に包摂していく道を、社会福祉学は目指さなければならない。一つのあり方が、店舗型風俗店の復活である。2005年以降の「浄化作戦」によって、歌舞伎町からも店舗型風俗店が姿を消し、代わりに無店舗型の風俗店、所謂デリヘルが誕生した。東京都の場合は、吉原以外では店舗型風俗店の営業は禁止されており、全国的に見ても全面禁止にしている都道府県が多い。だが、その結果風俗店で働く女性達の危険度は大幅に増加している。社会から性風俗を不可視化したとしても、その存在が無くなる訳ではない。寧ろ新自由主義の波及・浸透は、日本に格差社会をもたらし、貧困状態に陥った若い女性達は雪崩を打って性風俗の世界に飛び込んでいる。であるならば、再度性風俗の世界を可視化させて、そこで厳格な管理を行う方が働く女性にとっても、取締を行う警察にとっても、そして支援を行う相談員や心理士にとっても都合がいいと言える。無制限に店舗型の復活を行えば、地域住民の批判が巻き起こることが想定されるので、本来過度なゾーニングは避けるべきであるが、一種のゲーティッド・コミュニティを人口規模に応じて各県に策定し、そこで集娼を行い、社会福祉学的な支援を実施すべきではないだろうか。公衆衛生、メンタルヘルスケア、セカンドキャリアの支援等を包括的に行うことによって、犯罪や性感染症に対するリスクマネジメントが可能になるだけでなく、女性達の引退後の社会への再統合が容易になるはずだ。

第3項 自由意思か性的搾取か：「中動態」を生きる女性達

(1) 第2章でも「性の商品化」について検討したが、その際明らかになったのは、これまで指摘したイデオロギー的及びジャーナリスティックなフェミニズムの限界だけでなく、本来その土台となるべきアカデミックなフェミニズムの限界でもあった。江原のような日本を代表する生粋のフェミニストが、女性の自由意思での売春を容認していないのである。故に、それを容認する橋爪論文を取り上げてフェミニズムの論壇に議論を呼びかけたのであるが、橋爪を論破する日本のフェミニズムの底力を信じてのものであると江原自らが中立的な立場でないことを素直に認めている。だが、結果的に、それが露呈させたのは、日本のフェミニズムの成熟ではなく、停滞ではないだろうか。主流に位置するアカデミックなフェミニズムですが、売春女性に対して中立的でいられないという事実だけが、江原の試みから浮き彫りにされたのである。

アカデミズムにおける保守性は、実践の場においてはなお一層先鋭化される。PAPS, HRN, Colabo等の実践団体の姿勢は明確な女性の「再倫理化」を目指している。でなければ、かように一般男性まで含めた男性性の否定や、AV産業を追い込むほどの「被害者」性の強調は考え難い。そしてこれは、決して今に始まった潮流ではないのである。

長年、婦人保護事業に関わってきた林の言説を見ても、基本的にはPAPS, HRN, Colabo等の主張とほとんど差異はない。林の、「性の商品化」は女性の明確な人権侵害である、一見女性の自由意思に見えるもの

でも須く強制なのである，という論理は，必然的に，強制である以上，被害者なのである，という PAPS, HRN, Colabo ら支援団体の基本認識に演繹される．これは，確かに矯風会の宗教倫理の押し付けからは一歩前に進んだかもしれないが，やはり当事者である女性達から十全に支持を得ることができない，彼女達の「行為における主体性」の全否定なのである．多くの女性達は貧困状態に置かれているため，一般人に比べて確かに選択肢は少ないのであるが，だからと言って，彼女達が完全にパワーレスで，何もできないか弱い存在ではない．

彼女たちの背後には，生育家庭の崩壊，学校教育からの離反，不安定就労による疎外感と経済的貧困があった．経済的自立力もなく，心の通いあう人間関係も得られなくなって追いつめられる姿が多かった．相談にきた女性たちは，判断，自覚，選択などの力を奪われていた．そのようなとき，容易に逃避する場を性産業は提供している．「とにかく，たとえ本人が自由意思でその道を選んだようにみえる時でも，売春は，実は何らかの強制の結果なのである」とする国連の見解は，上記のような脈絡でとらえることができるのではないだろうか．（林 1995 : 196）

上記の林の指摘は，前半部分には概ね同意できる．林が『現代の売買春と女性』や『女性福祉とは何か』で指摘するように，女性の売春は，第一義的に「経済的貧困」抜きには語れない．昨今巷で言われるような「享楽型」の売春などというものは，ほんの一部に留まっており，それは寧ろ男性や社会の都合の良い幻想と断言してもいい．何時の時代も売春は，貧困の宿痼である．

また，国連の「とにかく，たとえ本人が自由意思でその道を選んだようにみえる時でも，売春は，実は何らかの強制の結果なのである」という見解にも，ある程度の同意はできる．何故ならば，國分が『中動態の世界 意志と責任の考古学』の中で，能動態でも受動態でもない中動態という概念を提示し，薬物依存症やカツアゲの事例などを挙げて，人間の自由意志の限界について述べているように，本来人間の全ての行動は安易に能動か受動かという二者択一に帰すべきものでは無いからだ．

われわれはどれだけ能動に見えようとも，完全な能動，純粹無垢な能動ではありえない．外部の原因を完全に排することは様態には叶わない願いだからである．完全に能動たりうるのは，自らの外部をもたない神だけなのである．

だが，自らの本質が原因となる部分をより多くしていくことはできる．能動と受動はしたがって，二者択一としてではなく，度合いをもつものとして考えられねばならない．われわれは純粹な能動になることはできないが，受動の部分を減らし，能動の部分を増やすことはできる（國分 2017 : 258）

國分が指摘するように、神でない限り、完全なる能動というものは存在し得ない。だが、同じ理屈で、完全なる受動などというものの、まして強制などというものの存在しないはずだ。寧ろ、国連のこの大前提が、自由意思で売春を行う女性の人間性を否定する呪いの言葉になっている。「性の商品化」の議論において、筆者は、選択肢が十分でない状態での自己選択は自由意思ではない、と指摘した。その文脈では国連の見解も支持するが、「売春は、実は何らかの強制の結果なのである」という考え方を、全女性の意思決定に普遍化し、従って売春は全面的に禁止すべきである、と結論付ける林ら日本の伝統的フェミニズムの立場には、強い疑義を呈したい。

そもそも、我々の人生において、何らかの強制の結果でないものなど一つとしてないはずだ。それが、社会の中で生きるということである。であるにもかかわらず、仮に、道徳的・倫理的に正しい選択をした場合は、本人の自由意思が認められ、一方で、売春をした場合には本人の自由意思が否定されるというダブルスタンダードなロジックを用いるならば、それは単なるご都合主義の詭弁でしかない。そこに日本のフェミニスト達は、少しも違和感を抱かないのであろうか。林らの支援によって売春を止めた女性は、果たして本人の自由意思であろうか。それは、恐らく、教化・啓発・啓蒙という名の「何らかの強制の結果であろう」。つまり、林はその女性の「行為における主体性」を毀損した可能性があるのであるが、善意の支援者である林は、果たしてその自覚を持てるだろうか。第2章で検討した、Y1の、「そうそう。けど、なんで傷付いちゃったのかな、それで、って考えないと支援者は。うん。」という言葉は、ソーシャルワーカーである筆者にとっては極めて重い。だが、過去も今も、日本の売買春に関わるフェミニスト達の立ち位置は、やはり女性の権利と尊厳を守りたいが故に、過剰なまでのパターナリズムに陥っている。これが、残念ながら、日本の女性福祉の現在地なのである。

何故、かくも根深く日本のフェミニストの心底に、キリスト教的な倫理観や道徳観が刻まれているのか。仲正（2018：308）は、中世ヨーロッパでは、「聖書というエクリチュールに根拠を置くキリスト教の教え＝教会法が、キリスト教世界の境界線を形成していた」と指摘し、それが現代の西欧思想にも深い爪痕を残していると指摘する。そして、欧米化された日本において、そのキリスト教的な法のエクリチュールから日本のフェミニズムも完全に自由とは言えないのである。

フロイトやラカンの精神分析を通して明らかにされた、「父の名」の下に作動する、各エディプス的な「主体」を支配する「法」もまた、“我々”が生きることのできる世界（現実界）の境界線を示す働きをする。そして、この「父の法」は、先に述べたような、現実の社会を支配する様々な掟や実定法、あるいはユダヤ＝キリスト教の教えと密に結び付き、それを影で支えているという。

究極の法としての「父の法」は、当然のことながら不可視であり、実際にはあるのかないのか確かめようがないが、西欧的な男根ロゴス中心主義を糾弾し、解体しようとするラディカルな左

派やフェミニストが、「父の法」に執拗なまでに拘ることが、逆説的に、「父の法」の呪いを証明しているとも言える。今更言うまでもないことだが、実在する政治秩序として現れる「父の法」を二項対立的に否定し、力づくで解体しようとする者は、しばしば、自らが「父の法」の権化と化す。「父の法」は、我々の心の奥深くに刻み込まれた法なので、表面的な操作によってデリートしたつもりでも、直に再起動してくる。（仲正 2018 : 309）

この仲正の指摘は、まさに今の日本のラディカル・フェミニストの立ち位置を示している。「アダルトビデオ出演強要問題」に関して、同じ被害者支援の立場でありながら、元 AV 女優で N の代表でもある、ある意味業界側にも近い Y2 はラディカル・フェミニスト達と上手く支援関係を構築できないという。Y2 はトライアングレーションのインタビューの中で、PAPS, HRN, Colabo ら支援団体の立場を、「一周回って保守」と表現した。一見リベラルな立場に思われるが、無自覚に彼女達は保守的な倫理観を、彼女らが救いたい女性達にも押し付けていると批判するのであるが、それは上記の仲正の指摘とほぼ同じことである。

畢竟、男性＝加害者、女性＝被害者という分り易く支持を得やすい二元論を唯一絶対の価値観として展開する限り、そのイデオロギーは必ず被害者ではない女性の尊厳を傷付ける。そして、加害者である男性は、最初から議論から外されており、支援団体への賛同以外は求められてはいないのである。当事者を置き去りにし、敵味方の二元論でジェンダーを分断しかねない彼女達ラディカルなフェミニズム実践家の行動は、決して全面的には首肯できないのだが、Y1 が指摘するように、彼女達を批判した者は恐らく「悪魔化」され、現状彼女達が支配しているメディアからも批判されるのである。

PAPS や HRN に対する疑義を呈した中山の記事が週刊誌から掲載を取り消された、ということが、本人達の主張通り事実だとすれば、フェミニストとメディアの関係性は、「アダルトビデオ出演強要問題」を境に一変したと言える。林ら日本の代表的なフェミニスト達は、性産業を蔓延らせる悪しき性の情報産業として、マスメディアを長らく批判の俎上に乗せ続けて来た。だが、片居木が、「マスコミ＝セックス産業複合体」（林 2011 : 28）と揶揄した構造は、逆に今は、フェミニストによってコントロールされているということになる。フェミニズムが本来守るべき「当事者」を、相変わらず置き去りにしたままではあるが。

第 2 節 結論：「実存的貧困」概念による「貧困理論」の再定義

第 1 項 「新しい貧困」概念の検証と課題

(1) これまでの考察をまとめると、1980 年以降、世界中で「新しい貧困」と呼ばれるものが発見され、それに対して、様々な研究者からそれらを解説するために新たな貧困概念が提唱されてきた。

Castel は「社会喪失」、Paugam は「降格する貧困」という独自の貧困概念を用いて、貧困者の極めて乏しい社会関係資本とソーシャルサポート・ネットワークに着目して主としてヨーロッパの孤立しがちなプレカリアートの問題を通して「新しい貧困」を論じた。これは、貧困を物質的困窮ではなく、非物質的困窮の

中の「関係性」に求める理論である。本研究においては、一貫して批判的に論じてきたが、Colabo の代表である仁藤も「関係性の貧困」が、「経済的貧困」以上に、若い女性達を苦しめていることを、『女子高生の裏社会 「関係性の貧困」に生きる少女たち』で指摘している。

こうした関係性の中に新たな貧困を見出す者達がいる一方で、Stiegler のように、ハイパーインダストリアル社会において、「新しい貧困」としての「象徴的貧困」が発生していると指摘する者もいる。Stiegler (= 2006 : 2) は、「日本とアメリカ、ヨーロッパ、そしてテクノロジーが支配している社会において特徴的な事象は、『個』が衰退し、シンボル（象徴）の生産に参加できなくなることである」と指摘する。これは、精神的な「自己愛の貧困」といえるであろう。

「関係性の貧困」と「象徴的貧困」は、「経済的貧困」と相互に影響し合いながら、非常に困難な状況を形成するというのが、Lister の主張である。Lister は、上記の概念を一括りにし、貧困概念の中核に経済的な困窮を据え、その周縁に「関係的・象徴的貧困」の概念を布置して新たな貧困観を呈示した。Lister は、「新しい貧困」に関して政治学者の Fraser の「再配分」と「承認」の政治哲学から多くの示唆を受け、剥奪や搾取といった経済的な問題に関わる貧困だけでなく、「非承認」や「蔑視」といった「文化的・象徴的不正義」への配慮が不可欠であることを指摘しているのだ。なお、Lister においては、「象徴的貧困」は、主としてスティグマや恥辱等の外部から押し付けられる負のレッテルを意味し、Stiegler のそれは個人の内奥の空虚化を意味するため、注意が必要であることは既述の通りである。

Booth らに代表される古典的貧困研究を土台とする従来の「経済的貧困」論と大きく異なるのは、Lister が「関係的・象徴的貧困」の方が遥かに人間の「行為における主体性」に根深い爪痕を残すものであり、社会福祉学的により一層刮目すべき貧困問題であると指摘した点である。ただ、Lister の貧困理論は、土台となる Fraser の「パースペクティブ二元論」に依拠する余り、「経済的貧困」を貧困の中核に据える近代的貧困理論に留まっているため、ポストモダンの「新しい貧困」を正しく捕捉するために、再定義を必要とすることは既述の通りである。

本研究では、Lister の「貧困の車輪」から、中核にある「容認できない困窮」を、すなわち、経済的困窮を切り離し、なおその状態を「貧困」として措定できるであろうか、を問い、仮説として、「関係的・象徴的貧困」の一部は、幾つかの条件を満たせば「経済的貧困」が中核に存在しなくとも十分に「貧困」に該当する、と考えた。そして、それを「実存的貧困」と名付けた。そして、Lister の「貧困の車輪」の中に、「実存的貧困」という新たな概念を埋め込み、それが真に貧困概念たり得るか、それが本当に「経済的貧困」以上に人をパワーレスな状態に陥らせるものなのか、を第 4 章以降順次検証してきた訳であるが、既に結論は出たはずである。人間にとって、本研究で提唱する「実存的貧困」状態は、Lister が重視した「関係的・象徴的貧困」以上に、より一層人間の「行為における主体性」に根深い爪痕を残すものであることが実証された。

とりわけ、E 群の最後に検討した E6 は、本研究における最重要なインフォーマントであった。

彼女は、富裕層に生まれ、日本でも有数の富裕層が集う大学に通っているものの、ソープランドとデリへ

ルを兼務して、ホストのために毎月多額のお金を入金していた。当然、「経済的貧困」のカテゴリには入らない。だが、彼女の各種心理尺度の結果は、非常に劣悪であり間違いなく彼女はヴァルネラブルでパワーレスであった。様々な自傷行為、精神疾患等、彼女が抱えている「闇」と「痛み」は根深かったが、驚くべきことに彼女はスティグマを感じていなかった。風俗嬢であることにはほぼ苦しんでいなかった。そして、ある程度の人間関係も保ち、物理的には孤立してはいなかった。Lister が指摘したように、「関係的・象徴的貧困」が、E6 の「行為における主体性」に大きな負の影響を与えているようには思えなかった。だが、彼女は大学卒業後の進路も決めることなく休学し、休学後も何をするか具体的に考えることも無く、ひたすらモラトリアムに逃げ込みながらホストに依存していた。

何故、こんなにも彼女がパワーレスな状態なのか、手探りでインタビューを続け、徐々に判明してきたのが、Honneth の承認論でいう、愛の領域の「承認」の致命的なまでの欠如であった。彼女には誇るべき連帯の領域の「承認」が幾つもあった。だが、他者の高い評価は、彼女の低い自己評価の前では全くの無意味であった。無論、E6 にもかなりの外傷体験はあったものの、同じかそれ以上劣悪な過去を持つ女性はいくらいたったため、それだけが彼女がパワーレスな状態に置かれている原因だとは思えなかった。そして、最終的に理解できたのは、彼女を不幸にしているのは、第一義的に彼女自身であり、高い能力と資質を自分から無駄にするような自暴自棄な生き方の背景にあったのは、希望の喪失であった。彼女は、「経済的貧困」にも、Lister の「関係的・象徴的貧困」にも合致しなかったが、唯一本研究が提唱する「実存的貧困」概念には全面的に合致した。従って、彼女から、「行為における主体性」を奪っているのは、「実存的貧困」であると断言しても過言ではないであろう。

E6 以外にも、Lister の貧困概念では説明がつかないケースが本研究のインフォーマントの女性達の中に多々見受けられた。故に、最早 Fraser の「パースペクティブ二元論」を、貧困の土台とすべきでは無いというのが本研究の結論である。また、志賀が指摘するように、社会的排除論で全てを捉えようというのも難しかった。本来、最も対象の範囲が広いのが社会的排除論である。従って、性風俗産業に関わっているというだけで、既に全員が社会的排除の対象と言ってもいいだろう。更に、民族的マイノリティや精神疾患、発達障害、母子・父子家庭出身、養護施設出身、少年院出身と、性風俗産業に従事する女性達の多くは、一般人に比べて遥かに多くの点で社会的排除の対象であった。だが、全員がパワーレスではなかった。概ね、インタビュー群であっても、6 人に 1 人はかなり健康的で、幸せで、毎日が充実しており、貧困とは一切無縁であった。社会的排除論が貧困理論たりえないことはこの結果からも明白である。従って、志賀の社会的排除論を棄却し、Lister の「貧困の車輪」は再定義されなくてはならないだろう。

(2) Lister の「貧困の車輪」を再定義するにあたって、志賀とは別の切り口から「新しい貧困」の包括的な理解を考えた時、Fraser ではなく、Fraser と『再配分か承認か?—政治・哲学論争』で論争を繰り広げた、Honneth の承認論から、「新しい貧困」を捉える可能性をこれまで検討してきた訳だが、本研究が提唱

する「実存的貧困」概念は、第4章、第5章の実証研究によって概ね実証された。だが、勿論課題も幾つか残っている。

第一に、「実存的貧困」が非物質的な概念であるために、測定するのが難しい。無論それは、Sen のケイパビリティや、Lister の「関係的・象徴的貧困」も同様なのであるが、概念を描き、それを共有することまではできるのであるが、実証研究をする際に、その難しさが露呈してしまう。61 人のインフォーマントを 1 人ひとり、「実存的貧困」とそうでない群に分ける際、逐語記録だけを見ては判断できなかった。「躁的防衛」が酷いケースなどは、逐語記録だけを見れば、明らかに悩みも苦しみも感じられないのである。その後全員の心理検査の結果を、その女性の成育歴・学歴・職歴等のフェイスシートと一緒に 1 人ひとりまとめて、改めて逐語記録と照らし合わせると、多くの女性達に乖離が見受けられた。高学歴で逐語記録を見た限りでは特に「闇」も「病み」も感じなかったのに、著しく心理検査の結果が悪い者、逆に、逐語記録を読めば壮絶な体験をした虐待サバイバーであり、大きなスティグマを背負っているはずなのに、女子大生平均を大きく上回る精神保健の良好な者もいる。こうしたギャップに着目しながら丁寧に会話分析を進めていっても、結局腑に落ちなかった事例も幾つかある。今回の研究を通して感じたのは、今後「実存的貧困」を社会科学の中で確立していくためには、どうしたら正確にその概念をデータとして把握できるのかということである。そして、実証研究や臨床のソーシャルワークにどのように生かしていけるのかを検討していかなければならないだろう。

修士課程に置けるキャバクラ嬢の調査当時は「実存的貧困」ではなく、「実存的な苦悩」或いは「現代的不幸」と呼んでいた概念を客観的に測定するために、インタビュー調査だけでは不安だったため、量的研究も含めたトライアングレーションを行った。質的研究の部分では比較群を設定し、更に支援者による聞き取りも行ったので、実際は三角測量ではなく、四角、五角測量になった。それはそれで妥当性の担保に繋がったと思うが、今後研究における負担をなるべく軽くしなければ、この研究に向き合う者がいなくなってしまう。そして、量的調査も一つの心理検査だけでは不安だったため、インフォーマントの負担になることはある程度承知のうえで、5 種類の調査を組み合わせた。実際に、インフォーマントにお願いすると、早い者でも 15 分、遅い者だと 40 分以上の時間を心理尺度に使うことになってしまった。更にフェイスシートには学歴や職歴、病歴等の欄も設けたため、更に時間を要してしまい、毎回インタビュー調査にかかる時間は全体で 2 時間を超えた。かなりの負担をインフォーマントにかけてしまったことは今回の研究において、一番大きな反省材料である。また、日本最大手の風俗グループのマネージャーの許可を得たため、比較的集めるのが簡単だと思われた量的調査も、同じ理由で集計が遅れたり、欠損が目立ったりした。200 人のサンプルを一つの目標に据えたのだが、結果的に 123 人分のデータしか集まらなかったということは、それだけ負荷の大きな調査だったということである。先述した通り、今後は、一種類の調査票と一種類の心理検査で、「実存的貧困」が測定できるようになることが強く期待される。そうならない限り、研究調査がどうしても恣意的になってしまい、科学的妥当性を欠く恐れが残る点が、本研究が今後抱えた最大の課題である。

「実存的貧困」概念に関する理論的な面でも、やはりまだ課題は残っている。Fraser と Honneth による『再配分か承認か?—政治・哲学論争』は未だに決着を見ていない。Fraser と Honneth の間で最大の争点となったのは、Fraser が「再配分」の領域として「承認」の領域とは別個に認識したものを、Honneth が、「承認」の下位概念だとして、同じカテゴリに入れたことである。Fraser にとっての二元論は、Honneth においては、一元論なのである。未だこの論争には明確な決着はついていないのであるが、本研究の立ち位置は、既述の通り、Honneth の一元論に基づいた。何故ならば、それ以外に、筆者の力量では、①Lister の「貧困の車輪」概念の瑕疵を修正し、かつ②「新しい貧困」を捕捉し、加えて③社会的排除概念とも矛盾しない貧困のグランドセオリーは構築できなかったからである。だが、「実存的貧困」概念や Honneth の承認論を用いなくとも、この三条件を満たす立論の仕方はあったかもしれないし、そもそも全てを満たすグランドセオリー自体、必要がないという考え方も当然ある。貧困は個別具体的なものであり、それを包括的に理論化する必要は無く、個別具体的に適宜ベストな方法で対応すればいい、という批判は甘んじて受け入れる。

ここでは、再度立論の流れを振り返りながら今後の研究のために理論的な課題を洗い出してみる。

①から順次再度簡単に概説するが、Lister の「貧困の車輪」は、非物質的な要素の重要性を説きながら、「関係的・象徴的貧困」を単独で貧困として指定できないため、結果的に「相対的貧困」論に社会的排除の概念を重ねただけになっている。そして、Lister が「関係的・象徴的貧困」と定義した部分は、広義の社会的排除に全て含まれる概念であるために、実際 Lister が主張していることを端的に述べれば、『貧困』とは、『相対的貧困』のことである。ただし、同じくらの低水準の所得状態に置かれても、社会的排除の状況によって、その生活困窮状態は大きく変動する。従って、『相対的貧困』の基準に判断を引きずられることなく、個別の社会的排除の状況を勘案して『貧困』を理解しなければならない。ただし、『貧困』の中核はあくまで経済的に容認できない物質的困窮であり、社会的排除のような非物質的困窮は単独で『貧困』たりえない。『貧困』の外側部分は、中核にある物質的な貧困状態を悪化させる要因に過ぎない」というものである。

Lister の主張には、やはり幾つかの点で瑕疵がある。Fraser の「パースペクティブ二元論」において、二軸に重要性の軽重は無い。どちらもそれ以上遡ることができない等価的審級である。であるならば、そこから導き出される結論に軽重が出るのは論理矛盾である。重要な中核と附属的な外核という形で「再配分」領域と「承認」領域に序列を付けてしまう Lister の整理は、明らかに論理的な矛盾を孕むため、そのように貧困概念を理解したいのであれば、寧ろ Fraser の「パースペクティブ二元論」には拠らない方が良い。第二に、Lister は、「貧困の車輪」の中核に据える「容認できない困窮」という概念を、Spicker から借用しているが、Spicker 自体は、「容認できない困窮」を物質的な困窮に限定していない。そして、虐待やテロリズム、いじめ、性暴力等、様々な非物質的な「容認できない困窮」が社会の中に存在している以上、何故 Lister がそこで物質的なものだけに特別な意味を置いたのかが腑に落ちない。貧困理論の上位概念に対象論があり、そもそも貧困は物質的なものである、という大前提が Lister の中にあるのであれば、今度は何故「貧困の車

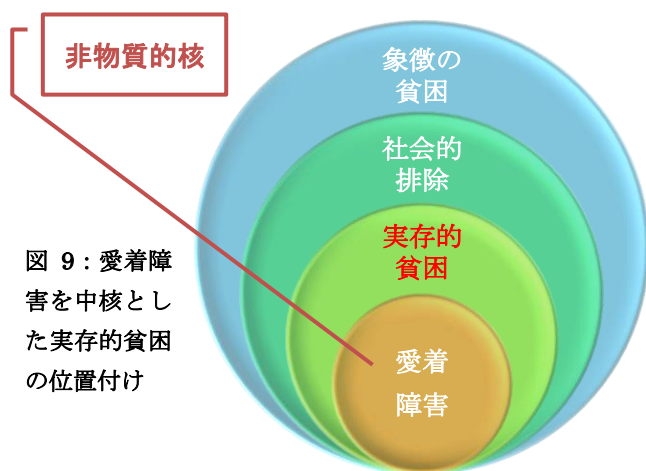
輪」の外側の概念を「関係的・象徴的貧困」などという名称で呼ぶのかが分からない。素直に社会的排除としておけば、無駄な誤解は受けないだろう。「容認できない困窮」は先に述べた虐待など、非物質的なものが無数に考えられる。それらが当然車輪の外側に生まれることは、容易に想像できたはずであるが、そこにものように **Lister** は整合性を取るつもりだったのであろうか。第1章で指摘した通り、車輪の内と外に「容認できない困窮」が発生すれば、それはもう車輪の体をなさないため、**Lister** の「貧困の車輪」概念は再定義される必要がある。ここまでは、十分に納得して貰えると確信する。

②「新しい貧困」は、様々な社会問題を孕んだ「生きづらさ」の複合体である。**Castel** が指摘する通り、そこには、所得が「相対的貧困」以上でも発生する「生きづらさ」というものが、確実に存在する。従って、貧困を「所得貧困」に矮小化させる古い貧困観は捨てるべきである。更に、この考えを推し進めれば、所得が平均的であっても貧困状態は成り立つし、更にいえば、高額所得でありながら貧困という状況も考え得る。だが、流石に高額所得の貧困という概念は語義矛盾を孕み始める。従って、貧困を所得概念と切り離し、**Honneth** の承認論と再結合させ、「貧困」とは、『承認』の欠如であると措定すると、従来の「所得貧困」は「連帯の領域における非承認」、社会的排除は「法の領域における非承認」と置き換えることができる。だが、そうすると、**Fraser** の「パースペクティブ二元論」に無い要素、愛の領域における「非承認」が **Lister** の「貧困の車輪」の図の中に置き場が無くなる。だが、これら三つの非承認は等価的審級である以上、どれか一つを都合よく無視する訳にはいかない。そうすれば、**Lister** と同じ論理矛盾を抱えてしまう。また、「法の領域における非承認」が現実にあるのかと問われれば、近代法が確立した社会において、それは建前上あってはならない。法の下での平等が守られなければ憲法違反を見過ごすことになり、それは貧困というよりは犯罪か、**Schmidt** のいう「例外状態」である。従って、現在の社会的排除は「法の領域における非承認」の残滓と考えれば辻褄があう。そして、「愛の領域における非承認」とは、すなわち虐待や性暴力に端的に表されるものであるが、これを看過できない故に「貧困」と措定することができるならば、**Lister** の「貧困の車輪」を改変して、その中に新しい貧困概念を位置付けることができる。そして、不利や不平等は「貧困」と同義であるという **Spicker** の認識に則り、「愛の領域における非承認」という不利または不平等は、「貧困」に置き換え可能である、というのが本研究が導き出した結論である。

「経済的貧困」が物質的なものの欠損であり、それが貨幣に代表されとすると、個人が所有する貨幣価値が規定の水準に足りていない状態が「経済的貧困」なのである。全く同じロジックを愛に置き換える。本研究が新たに提唱する「実存的貧困」が非物質的なものの欠損であり、それが愛に代表されとすると、個人が所有する愛の総量（＝「内的作業モデル（IWM）」）が規定の水準に足りていない状態が「実存的貧困」なのである。多面的特徴を持つ貧困に唯一共通する要素があるとするならば、「なにかがなされなければならない」ということであるという **Spicker** の指摘から判断しても、虐待等の非物質的困窮に対しては「なにかがなされなければならない」し、明らかに「容認できない困窮」であるため、「貧困」の定義に矛盾しない。仮に「貧困」とは貨幣価値に換算されるものの不足である、という定義があれば、その段階で承認論を土台

に据えた貧困理論は成り立たないのであるが、Booth や Rowntree らに代表されるそのような古典的な定義は、現状有力ではない。故に、「実存的貧困」概念は棄却されない。また、仮にそのような定義が有効であれば、志賀の社会的排除論も貧困理論ではなくなってしまう。そして、③の社会的排除概念と、これまで述べてきた Honneth の承認論は矛盾しない。従って、承認論が貧困理論に適用できるならば、①～③の問題は全て解決される。そして、志賀の社会的排除論が抱えてしまう際限の無い外延の拡張問題も解決する。そこは Lister と同じ立場を取ればいいのだ。社会的排除≡「关系的・象徴的貧困」は単独では貧困概念たりえず、「実存的貧困」と「経済的貧困」、或いはその複合体である「絶望的貧困」を悪化させる要因に過ぎないと理解すれば、第1章で説明した新・貧困概念図が完成する。

「実存的貧困」概念における最大の課題は、愛という見えないものをどのようにして計測するのか、という問題に尽きる。事実、これは物理的に測りようがないのであるが、臨床心理学的に、愛が不足する結果生じる愛着障害が起きていれば、それを「絶対的」或いは「相対的貧困」の基準のように考えていいだろう。ただ、「実存的貧困」を愛着障害と同義にすると、それは貧困理論ではなく、疾病論になってしまう。従って、本研究ではそれを社会福祉学の中に留め置くために、更に二つのしほりをかけて概念化した。つまり、「経済的貧困」のようにそれ単独で「実存的貧困」は発現しないのである。愛着障害は、単なる虐待の結果である。その愛着障害を容認できない非物質的核として、「実存的貧困」は Stiegler が提唱する「新しい貧困」である「象徴的貧困」を絶対に持たなければならない。加えて、当事者は社会的排除の対象となりスティグマの実感を伴っていなければならない。従って、「実存的貧困」は、単なる愛着障害ではなく、「象徴的貧困」のように「自己の喪失」を伴い、かつスティグマの実感を含む複合的な非物質的困窮概念である。



「実存的貧困」の核は「内的作業モデル」の欠損なので、臨床心理学的には愛着障害である。そして、更に Stiegler の「象徴的貧困」に属し、社会的排除とスティグマの実感が不可欠である。かなり精緻化されているので、「実存的貧困」が社会的排除のように無制限に拡大することはないが、逆に「経済的貧困」のように単独で成り立たせることができない点が検討課題である。

上記の概念から必然的に4つの特徴が浮かび上がる。①希望の喪失、②自我(アイデンティティ)の未形成、③低い自尊感情、④生きる意味の不明瞭性である。この状態は、Castel の「社会喪失者」が持つ特徴でもあるので、「実存的貧困」は、社会的に排除されている「アンダークラス」の「社会喪失者」が陥っている深刻な非物質的困窮状態で、絶望から「死に至る病」であると考えれば分かり易いだろう。

(3) 貧困理論としての検討課題以外では、本研究で提唱する「実存的貧困」に対して、ソーシャルワークがどのように向き合うべきかという実践における技法論・技術論も今後に残された重要な課題である。

本研究を通して改めて実証されたのは、「実存的貧困」の基底には必ず愛着障害があり、その結果、岡田が愛着障害の指標と見做す境界性パーソナリティ障害（BPD）、摂食障害等の嗜癖行為・依存症、気分障害、不安障害、注意欠如・多動症（ADHD）などの様々な精神医学的症状が「実存的貧困」を抱えたクライアントに発現するという事実である。これはある意味、精神科病院における PSW のソーシャルワーク臨床よりも遥かに厄介な問題を孕んでいる。何故ならば、精神科病院における PSW の臨床であれば、精神科病院を受診している段階で、本人にある程度精神疾患の病識があり、仮に BPD という病名が治療の方針上本人に告知されていないとしても、少なくとも自分が何らかの精神疾患を抱えているという自覚はあるはずだ。その様に、クライアントの側が精神医学的課題を抱えているということを最初から面接の前提にできる PSW の臨床と異なり、「実存的貧困」状態にあるクライアントと精神保健福祉以外の領域において遭遇した際、ソーシャルワーカーは BPD の様に非常に扱いが難しく、かつ自己覚知にも乏しいクライアントに向き合わなければならない。そして、「新しい貧困」である「実存的貧困」は、従来の社会福祉の領域に留まらず、今後は様々な場所でソーシャルワーク・トリートメントの「新しい対象」になることが想定される。その際、ソーシャルワーカーに正しい貧困理解と正しいソーシャルワークの技法が無ければ、両者の関係性は極めて悲惨な結果に終わることが想定される。

最も分かり易い例は、ひきこもりである。ひきこもり当事者の中には、精神科の受診歴や通院歴が無い者も多いが、彼らが「実存的貧困」状態にあれば、十中八九 BPD の心性を発現させ、様々な試し行動を用いてソーシャルワーカーを苦しめることになるであろう。そして、転移・逆転移の問題は、この臨床において不可避であると言っても過言ではあるまい。従って、精神科医の指導を受けることができない状況下において、BPD 傾向のある難しいクライアントにソーシャルワーカーが向き合うには、高度な専門性に裏打ちされたソーシャルワーク実践が求められるであろう。

本研究が対象とした性風俗産業従事者も、極めて難しいクライアントの一類型である。婦人保護施設など、従来の社会福祉の領域が彼女達の受け皿にならず、その一方オルタナティブな支援として、L の X2 達の支援や X1 達の「アウトリーチ事業」が一定の効果を上げている現状から、従来のソーシャルワーク実践が「実存的貧困」に寄り添えていなかったのは明らかである。とりわけ、長い歴史を持つラディカル・フェミニズムを基盤とした林らに代表される女性福祉のソーシャルワーク実践には、改めて深い反省が求められる。

これまでのソーシャルワーク実践において、確たる成功体験や科学的なエビデンスの蓄積が不十分な現状においては、クライアントとして「実存的貧困」状態にあるキャバクラ嬢や風俗嬢を想定した時、本研究の知見が新しいソーシャルワーク実践の土台となるであろうが、恐らくたった一つの理論やアプローチに基づく支援では片手落ちになるであろうと想定される。何故ならば、彼女達の置かれた問題は、何か特定の原因に、まし

てそれさえ解決すれば良いというたった一つの原因に還元できるものではないからである。

これまで見てきた通り、彼女達が置かれてきた状態は単に経済的に困窮しているだけではない。虐待、いじめ、機能不全家族、DV、性暴力被害、障害、疾病といった様々な個人的な負因を抱えており、複合的に絡まり合ったこれらの諸問題は彼女達に深刻な生きづらさをもたらしている。そして、こうした個人的な負因に加えて、マクロレベルの問題で言えば、ポストモダン社会という全人類に普遍的な「生きにくい時代」が訪れており、その結果彼女達は「現代的不幸」である「実存的不安」や「実存的空虚」を常時抱えている。また、新自由主義が日本の経済・雇用政策を壊滅的に破綻させて格差社会をもたらし、改めて現代に「近代的不幸」を出現させた。彼女達はプレカリアートとして社会の下部構造に組み込まれる形で「現代的不幸（≡「実存的貧困」）」と「近代的不幸（≡「経済的貧困」）」という「2重の不幸」を抱えているのだ。

メゾレベルの問題で言えば、新自由主義がもたらした社会の格差は、本来個人を守るべき存在であった「共同体意識」を喪失させた。その結果、社会的排除は先進国において常態と化し、「アンダークラス」である彼女達には容赦無く「娼婦ラベル」が貼り付けられて侮蔑の対象となる。それは、実際に肉体を売らないキャバクラ嬢であっても同様だ。女性性を売りにする仕事に従事するだけで、上瀬の先行研究が示した様に、根強いスティグマが彼女達に無条件に付与されるのである。社会福祉学が社会的排除と戦う学問である以上、本研究が取り上げてきた性風俗産業に従事する女性達は、紛れもなくソーシャルワークの新たな支援対象なのである。

「実存的貧困」状態にあるキャバクラ嬢や風俗嬢をソーシャルワーク実践における新たなクライアントとして捉える時、縷々指摘してきた通り、BPD に対する対応を念頭に置かなければならない訳だが、それは彼女達を精神障害者として扱うことを意味するものでは断じてない。Richmond に遡る伝統的な臨床ケースワークである「心理社会的アプローチ」でさえ、そのように「医学モデル」に立ってクライアントを捉えることはない。

心理社会的ワーカーは、精神医学の記述的カテゴリーは状態について言及しているのであって、その人自身についてではないと確信している。したがって、境界性パーソナリティ障害の特徴を持った人は、“境界例”ではない。われわれは、精神医学的あるいはそのほかの条件がクライアントが望んでいるゴールを達成するのにどのような影響をもつかに関心を抱いている。個人の能力、サポートシステムそして社会資源が障害を乗り越えるためにどのように動員できるかをアセスメントすることが、最も肝心である。(Woods&Robinson=1996 : 339)

『ソーシャルワーク・トリートメント—相互連結理論アプローチ〈上〉』の中で、Woods と Robinson は、「心理社会的アプローチ」の視点を上記のように説明しているが、筆者が彼女達を BPD のクライアントに近いというのは、Woods らの考えと全く同じで、ただ「状態」について言及しているに過ぎない。BPD の治療を行うのはあくまで精神科医や臨床心理士であるべきで、断じてソーシャルワーカーではない。筆者は彼女達を BPD の傾向と特徴を持った“かけがえのないただ 1 人の生活者”として扱うべきだと言いたいだけである。

性風俗産業に従事する女性達が抱えた問題は、マクロ・メゾ・ミクロの全ての視点から眺めた時、「生きがい・自己の存在理由」などに関する人間の「実存的な苦悩」から、他者との交流の中で味わう「偏見、差別、社会的排除、孤立」などの社会関係の諸問題、更に「虐待・DV・いじめ・失業・疾病・障害」のような個人のライフサイクルの中で出会う偶発的な状況や発達課題など、問題の幅は実に広く、その支援に必要な社会資源も多岐に渡るであろう。このように複合的に入り組んだ問題を解決するには、それらを解決するためにソーシャルワーカーが用いる実践理論（アプローチ）も、必然的に複合的で理論的に相互に連結したものにならざるを得ない。結局のところ、ソーシャルワークの領域には、今後もクライアントのニーズを瞬く間に全て解決する「偉大な統一的万能薬は出現せず、あらゆるものを明確かつ精確にするような重要な理論的突破もまた生じないであろう」という考え方が受け入れられている」（Turner=1996: 538）という Turner の指摘は正鵠を射ている。

Turner は、編著書『ソーシャルワーク・トリートメント—相互連結理論アプローチ〈上〉』の中で、27 種類の実践理論（アプローチ）を紹介し、最も合理的な支援手段として、「相互連結理論アプローチ」を提唱しているが、筆者が「実存的貧困」状態にあるクライアントに対する支援として考えているのも、まさにそれである。

Turner は、アプローチにクライアントを適合させるのではなく、クライアントに、或いは抱えている問題に適合的なアプローチを選択していくことが何よりも重要であると指摘する。ソーシャルワーカーが恣意的に実践理論を運用した結果、生じる弊害は下記の通りである。

理論が、クライアントと状況の個別性に基づくよりはむしろラベル貼りや分類を強調する形で、過剰に知性的で機械的になるとき、理論は目的それ自体になってしまうことがある。次いで、人間の潜在的力を最適化し成長を促進することよりも、予測し説明し、更には統制する能力が目標になってしまう。そういったエートスにおいては、実践家の共感への熱意は縮減され価値無きものとされる。このため、人間行動の理論の探索は人間の自由と自律性という重大な価値から遠く離されてしまうことがある。理論はまた自己充足的であり、とりわけ、ある特定の理論システムに強く愛着するときにはそうである。選ばれた理論的視野からのみ世界を眺めはじめ、すべての現象をその概念枠組みに適合するやり方で解釈する傾向となる。当然、このことは状況に関する別の説明を考慮に入れることを制限したり、妨げたりする。（Turner=1996: 22）

では、性風俗産業に従事する女性達を支援対象にした場合、「相互連結理論アプローチ」として、27 の実践理論のうち、一体何と何を相互に連結すべきなのであるかと問うた時、その解は、本論文における質的・量的研究から把握された女性達が抱えている以下の 13 の課題を検討する中から必然的に浮かび上がって来るであろう。幾つかの実践理論は彼女達が陥っている「実存的貧困」或いは「絶望的貧困」状態に対して非常に有効であり、幾つかの理論は恐らくさほど効果的ではないか、全く意味が無い。

これまでの考察の結果を踏まえると、性風俗産業に従事する女性達の困窮状態は以下の 13 項目に収斂される。

- ① 性風俗産業に従事する女性達は、ヴァルネラブルかつパワーレスな状態に置かれており、何らかの支援が必要である。
- ② 性風俗産業に従事する女性達は、「アンダークラス」で社会的排除の対象である。
- ③ 性風俗産業に従事する女性達は、従来の社会福祉の領域から疎外されている。
- ④ 性風俗産業に従事する女性達は、教育課程や家族福祉からも排除されているケースが多い。
- ⑤ 性風俗産業に従事する女性達は、「不安定・低所得階層」のプレカリアートの一類型である。
- ⑥ 性風俗産業に従事する女性達は、「職業スティグマ」を負った差別・偏見の対象である。
- ⑦ 性風俗産業に従事する女性達は、発達障害や精神保健の問題を抱えているケースが多い。
- ⑧ 性風俗産業に従事する女性達は、愛着障害を基底に抱え、実存的な困窮状態にあるため、未来に希望を抱くことができない。
- ⑨ 性風俗産業に従事する女性達は、自己の能力（メリトクラシー型及びハイパーメリトクラシー型）が足りないために、達成領域における劣等感が非常に強い。
- ⑩ 性風俗産業に従事する女性達は、自我同一性（アイデンティティ）に深刻な課題を抱えており、その確立を促す支援が必要である。
- ⑪ 性風俗産業に従事する女性達は、自己肯定感が低く、それを高めるためには、居場所と社会関係資本の開発が必要である。
- ⑫ 性風俗産業に従事する女性達は、必ずしも就労によって救われる保障は無く、時にそれによって更にパワーレスな状態に追い込まれることもある。
- ⑬ 性風俗産業に従事する女性達は、生活保護を受給しても必ずしも救われることはない。

今後、具体的な支援のためのソーシャルワーク・トリートメントを検討する際には、上記の 13 の視点を常に考慮しながら、支援の枠組みを考えなければならない訳だが、性風俗産業に従事する女性達を実際のクライアントとするに当たり、ソーシャルワーカーが留意すべき点をここでもう少し考察したい。

まず、上記の⑦、⑧から言えることなのだが、彼女達がクライアントとなった時、先述の通り、転移・逆転移関係の発生は不可避だと思われる。キャバクラ嬢の精神保健の問題の中でも、やはり境界性パーソナリティ障害（BPD）は、最も注意を払うべき疾患である。彼女達の何人かは精神科医の確定診断として BPD を持っているが、全員ではない。だが、27%の女性達が、簡易検査でカットオフポイントを超え、ほぼ全員が BPD の何らかの特質を持っていることは疑いようのない事実である。故に、「性風俗産業に従事する女性達の多くに BPD 傾向がある」とここで控えめに表現することは、差支えないように思われる。

BPD を発症するメカニズムは諸説あって病因論は確立していない。だが、はっきりと分かっていることは、虐待やトラウマ体験と密接に関係があること、深刻な自我同一性（アイデンティティ）の問題を抱えていることである。「近代的不幸」の最たるものである「経済的貧困」から虐待やトラウマ体験は生じ易く、また「経済的貧困」ではなくても、ポストモダン社会に生きている限り、A12 のように「現代的不幸」からも自我同一性の問題は発生する。BPD の問題行動の中に挙げられる自傷行為、性的逸脱、暴走行為、薬物・ギャンブル依存、自殺未遂の繰り返し、摂食障害等は、ほぼ今回インタビューした女性達の多くに見受けられたため、先述の通り、一般的なキャバクラ嬢や風俗嬢は、BPD の特徴を強く持っている傾向があると指摘するのは誤りではないだろう。恐らく、BPD で昼の定職に就けない人間が選ぶ職種として、キャバクラ嬢や風俗嬢の仕事は、実存的な苦悩や孤独を埋めてくれる居場所として効果的に機能するために、彼女らと非常に親和性の高い仕事なのである。

故に、彼女達は、クライアントとしては、常にスプリッティングの防衛機制を用い、ワーカーを理想化したり脱価値化したりすると思われる。また、その行動や発言は時に極めて操作的であり、ワーカーと他の専門機関の関係者の人間関係に亀裂を入れ、ワーカーの私的領域にも踏み込んで来る可能性がある。通常のクライアントと比べて、ラポールを築くのに時間がかかり、相手の心理に踏み込み過ぎれば過度の依存を促し、それを恐れて不用意に距離を置けば、二度とクライアントとして相談援助の場に戻って来なくなる可能性がある非常に難しいクライアントであると認識すべきである。

そのような女性達の扱い難いクライアントとしての姿が、鈴木『家のない少女たち 10 代家出少女 18 人の壮絶な性と生』に実例としてたくさん描かれているが、最も参考になるのが、鈴木が最後に紹介する仁美（17 歳）という少女の事例である。

「コワレモノの少女」というタイトルで鈴木が紹介する仁美は、生活保護を受給している母子家庭であり、その母親からの虐待で解離性同一症（DID）になっていると自称する。父親は幼少期に自殺している。更に、祖父（DV 体質）と叔母（アルコール中毒）も自殺している。都立の最底辺高校に通ったが途中で不登校となり、折り合いの悪い母と喧嘩して、家出をしながら男友達の家を渡り歩いた揚句に高校は中退した。現在はバンドを組んで、ギター・ボーカルをやっているが、活動費を稼ぐために援助交際を強要されている。そして、彼女はそれを喜んでやっている（性的逸脱）。派手なピアスを付け、メイクは例によってビジュアル系である。初めて仁美に出会った瞬間、そのような少女と出会うのは、一連のフィールドワークで十分に慣れているはずの鈴木でさえ、「病んでいる……。それもかなりヘビーに」（鈴木 2010：217）と感じたほどである。

自傷行為は、両腕の手首から肘までビッシリであり、まだ鮮血が滴り落ちている箇所もある。小学校 4 年生の時に、先輩達数人から輪姦の被害に遭っている。小学生時代からテレクラで援助交際を日常的に行い、セックスフレンドは多数いるが、セックスでは心の寂しさは決して埋まらないことに最近気付いたと言う（「実存的空虚」）。今は、タケシ君（18 歳）という最愛の恋人がいるが、彼は無職である。今後は、2 人で

自立することが仁美の夢であると鈴木は語る。

さて、ここまで書いたところで、A 群 13 人のインフォーマントのナラティブのうち各々の要素を少し変えて足し合わせると、この仁美とほぼ同じ女性を描けることが分かる。A13 の輪姦被害、自殺未遂、生活保護、自傷行為、A7 の父親の自殺と母親からの虐待による養護施設への入所、底辺高校の中退、デリヘルでの性的逸脱、派手なピアス、自傷行為、A12 のリストカット癖とパニック障害 (PD)、BPD、芸術家への憧れ、プレカリアートの頼りない彼氏、A5 の恋人の家を転々とする家出体験等々、たった 4 人の半生を足しただけで、既に彼女の輪郭は大よそ出揃った感じである。A8 のヤクザとの不倫経験と破天荒な性格も加えると、ほぼ仁美のできあがりである。彼女は、『家のない少女たち 10 代家出少女 18 人の壮絶な性と生』の中でも最も病んでいる少女なのだが、本研究で取り上げてきた女性達の実態から、それほど乖離している特異な存在ではない。寧ろ、完全に同じ支援対象の範疇に入るだろう。その仁美が、結局タケシ君に捨てられて、最後に鈴木の手紙にかけた内容を下記に引用する。

「あたしはものすごくわがままな女だと思う。お母さんにもタケシ君にも鈴木さんにも、今まで会った人たちみんなにメチャクチャわがままなことを言うけど、本当は助けてほしい時に助けてって言えないのは、なんで？それを言わないと幸せになれないのはわかってるけど、言えません。誰か、助けてって言えないあたしを助けてよ (傍点筆者)・・・」(鈴木 2010 : 242)

「助けて」と言えないほどパワーレスで、そしてメチャクチャわがままなことを言うインヴォランタリーなクライアントと、支援者は果たしてどのように向き合っていくべきか。上述した 13 項目の視点を考慮しながら、それを以下に検討して行きたい。

(4) まず検討に値するのは、長期的な関わりを続けながら、込み入った問題の一つひとつに効果的に働きかけられる類のアプローチである。性風俗産業に従事する女性達に対する支援として、特に重視したい課題は、「実存的な苦悩の解消」、「自尊感情の低さやパワーレス状態への対応」、「生活の諸問題の改善と QOL の向上」である。これらに上手く働きかけられそうな実践理論を検討すると、「クライアント中心理論」、「構築主義理論」、「エンパワーメント・アプローチ」、「実存主義」、「フェミニスト理論」、「ゲシュタルト理論」、「物語理論」、「自我心理学理論」、「心理社会的理論」の 9 つが挙げられる。「先住民の理論」、「行動理論」、「認知理論」、「コミュニケーション理論」、「問題解決理論」、「危機理論」、「機能理論」、「催眠の利用」、「ライフモデル理論」、「唯物論的フレームワーク」、「瞑想」、「神経言語プログラミング理論」、「精神分析理論」、「役割理論」、「システム理論」、「課題中心理論」、「交流分析理論」、「超個人心理」の 18 の実践理論は女性達が抱えている諸問題を支援する上で、直接関係が無い、または効果が薄いと思われるために最初から除外する。これらの理論は、ヴァルネラブルかつパワーレスな状況に置かれ、明らかに長期に渡る伴走型の支援

が必要な「実存的貧困」状態にあるキャバクラ嬢や風俗嬢には適さないプラグマティックで指示的・命令的・権威主義的な技法であったり、トリートメント効果が性風俗産業従事者以外の特定の領域・対象に限定されているものである。

次に、最初に挙げた9種類の中から、幾つかをまた篩にかけたい。Turner (=1996: 555) は大学院レベルで大体上記の実践理論のうち、「3~4の理論を最低習得すべきである」と指摘しているが、「相互連結理論アプローチ」としても、効果的に運用するには恐らくその程度が連結できる限界であると思われる。そこで、背景となる論理基盤が比較的近い理論の中で、より効果が期待できるものを残す方向でもう一度9種類の実践理論を精査する。

「今、ここ」を大切にしている現象学的視点を共にするのは、「クライアント中心理論」、「ゲシュタルト理論」、「実存主義」である。これまで、再三再四 Giddens の「実存的不安」及び Frankl の「実存的空虚」の概念を展開させて、女性達が抱えている苦悩を人間の「実存」の問題として取り上げて来た以上、ここは当然「実存主義」を第一に残さなければならないだろう。

「構築主義理論」は「物語理論」の背景となる社会学のメタ理論と考えることもできるが、対人援助技法としてより洗練され、「物語療法」、「ナラティブ・アプローチ」として臨床心理学や看護学など近接領域で既にトリートメント効果がある程度実証されているのは、「物語理論」であろう。故に、ここは「物語理論」を選択する。

トリートメントの目的としては、真逆の立ち位置にあるのが、治療や解決を目指す「心理社会的理論」、「自我心理学理論」と、それらを特に志向せず、クライアントの癒しのプロセスそのものを援助の中心に据える「エンパワーメント・アプローチ」である。女性達の多くは、自分自身が抱えている問題や疾病を認めないケースもあり、変化・成長したいという強い動機を生み出す自我が極めて未成熟である。その場合前者の実践理論は上手く適用できないだろう。また、「心理社会的理論」や「自我心理学理論」は、明らかに個人の内面への働きかけを重要視するあまり、環境要因への配慮が欠けていることがしばしば指摘される。従って、経済的な貧困や抑圧、トラウマに起因する問題まで個人の内面的問題に帰着させるようなアプローチは、自己責任論を否定する立場からも受け入れ難い。更に、性風俗産業に従事する女性達をクライアントとして考慮した場合、上述の通り、『助けて』と言えないクライアントであるという認識を持つことの重要性を指摘した。故にここでは、「助けて」と女性達が素直に言えるようになるための支援が先決であると考えて、「エンパワーメント・アプローチ」を採択する。

「フェミニスト理論」は、「エンパワーメント・アプローチ」と同じく、「女性」という社会的弱者に対する支援アプローチであるが、エンパワーメントの対象が女性全般に特化している。本研究では、社会における「キャバクラ嬢差別」を主題として来たが、女性全般への差別や権利意識の問題を取り上げて来た訳ではないので、これも今回は除外してよいであろう。すると、結果として残った実践理論は、「実存主義」、「物語理論」、「エンパワーメント・アプローチ」の三つということになる。これが、「実存的貧困」或いは「絶望的

「貧困」状態に陥っている女性達に対する「相互連結理論アプローチ」を構成するうえで、現時点では最適な組み合わせであると思われる。

「実存主義」は⑧や⑩の問題に非常に効果的なトリートメントとなるであろう。その際、ソーシャルワークの領域における Krill の貢献のみならず、精神療法の分野における Frankl のロゴセラピーの業績は非常に参考になると思われる。⑫、⑬が提起する人間の生活手段や生存そのものに関する支援としては、単に就労や生活保護の獲得を目指してそれを実現させるような「問題解決理論」や「課題中心理論」は、結局ソーシャルワークとしては片手落ちの支援になってしまう。何故ならば、これまでの事例から十分に分かることだが、女性達は例え仕事に就いて雇用のセーフティネットに守られたとしても、また、公的扶助のセーフティネットに守られたとしても、必ずしも人としての生きがいや幸福を感じて QOL が向上するとは限らないからである。

この問題に対して、筆者が最も効果的だと考えるのは、「物語理論」すなわち、「ナラティブ・アプローチ」による自己の物語の再構成である。現実の社会の有り様は何も変わらなくとも、それに向き合う自分自身の「世界を認識する枠組み」すなわち、ドミナント・ストーリー (dominant story) を新しいオルタナティブ・ストーリー (alternative story) に書き換えれば、⑫や⑬の場合、de Shazer が言うように、「問題は解決しなくても、解消する」ことができるはずである。また、近年、フィンランドの西ラップランド地方でエビデンスが集約しつつある「オープン・ダイアログ」の取り組みや、北海道浦河町の精神障害者グループホーム「べてるの家」の取り組みが、精神保健福祉における優れたナラティブ・プラクティスとして世界的にも注目を集めている。その意味で、「ナラティブ・アプローチ」は、⑦の問題にも効果が期待できる。

残りの問題に対しては、全てのマイノリティや社会的弱者に対して用いられる、ストレングス・パースペクティブに基づいた「エンパワーメント・アプローチ」を包括的に実施するのが最も効果的であろう。大切なのは、あくまで個人のエンパワーメントが先決なのであって、問題の解決や課題の達成を急いだり、強要したりしないことである。多少時間はかかるかもしれないが、彼女達が持っているストレングスを信じ、やがて力を取り戻した彼女達が、A1 や C1 のように、世界のあり方と自己の物語を再構成し、自らの人生の意味を確かに感じられるようになるその日まで、辛抱強くエンパワーし続けることが、この問題に関わるソーシャルワーカーには求められるであろう。

「実存的貧困」が、Honneth の承認論から導かれた社会正義の欠落である以上、第一義的にはソーシャルワーカーが向き合うべき問題である。そして、そのためには、適切な課題分析とアカデミズムに裏付けられた戦略的な実践的関わりが求められている。ソーシャルワークの実践が乏しい「新しい貧困」概念を対象にする以上、今後も地道なソーシャルワーク実践の積み重ねと効果測定が求められるが、一つの指針として、ここでは一先ず「実存主義」、「物語理論」、「エンパワーメント・アプローチ」による「相互連結理論アプローチ」が持つ可能性を提示しておきたい。

第2項 「実存的貧困」における存在証明の構造：Camusの「異邦人」的世界観

(1) 「きょう、ママンが死んだ。もしかすると、昨日かも知れないが、私にはわからない。」(Camus＝1942：6)で始まる『異邦人』は、一般的には人間の不条理を描いた実存主義の小説であると言われる。

主人公のムルソーは、母親を養老院に入れておいたことを親不孝だとは思わない。母が死んだとの連絡を受け、遺品整理のために養老院に着いて母親の遺骸を前にしても、彼は一筋の涙も流さず、不謹慎にも遺骸の前で煙草を吸い、ミルクコーヒーを飲んだ。養老院での唯一の母親の友人がその場でむせび泣いていたにもかかわらず、である。ここに、主人公・ムルソーの「内的作業モデル」の著しい欠損を見る。ムルソーには、父の記憶がない。つまり彼は、「重要な他者」を持たない人間なのである。彼は、葬儀の翌日、旧知の女性マリイと再会し、海水浴に行き、2人で喜劇映画を観て、夜は情事に及んだ。その数日後、女衞の友人・レイモンが起こしたアラブ人とのトラブルに巻き込まれ、仲介役として彼らの諍いに立ち会ってしまう。その時、海岸のうだる様な暑さとアラブ人達の大声にうんざりして、ムルソーはレイモンから立ち合いのために事前に渡されていた拳銃で、アラブ人を射殺するのだ。

殺人罪で逮捕され、裁判が始まるが、ムルソーは一連の薄情さを法廷で問われ続ける。母が死んだ日に涙を流さず、亡くなった母の年齢さえ知らず、翌日には元同僚の女性と海水浴を楽しんだ後で喜劇映画を観て情事に耽り、拘留後も祭司に対して無神論者であることを明言する。人間として極めて不謹慎なムルソーは、一般人からすればその行動も発言も全く理解不能な「異邦人」なのである。ムルソーはいう。「もちろん、私はママンを深く愛していたが、しかし、それは何ものも意味していない。健康なひとは誰でも、多少とも、愛する者の死を期待するものだ」(Camus＝1942：6)。この言葉を聞いて驚いた弁護士は、法廷でそのような冷たいことは絶対に言わないようにと、ムルソーに釘を刺す。弁護士に何か誤解されたと思ったムルソーは、「ママンが死なない方が良かったと思った」(Camus＝1942：68)と発言の真意を語るが、それに対しても弁護士は、「それは十分ではない」というのである。ムルソーは、情状酌量を勝ち得るために自分を良く見せようという気持ちが無く、嘘が吐けないどこまでも不器用な人間なのである。

裁判が始まっても、彼の態度は変わらない。そして、自分に死刑判決が下される前の晩、不意にムルソーは昔母親から聞いた父の話を思い出す。ムルソーは父を知らないが、母から聞いたたった一つの父のエピソードを唐突に思い出したのである。それは、父が好奇心から死刑執行を見に行き、帰宅後具合が悪くなって嘔吐した、という話である。当時は父の人間としての弱さに幻滅した記憶しかなかったが、自らの死を前にして、父の反応が人間としては正常であることをムルソーは理解したのである。だが、それでもムルソーは死刑を恐れない。彼は言う。「他のひとより先に死ぬ、それは明白なことだが、しかし、人生が生きるに値しない、ということは誰でも知っている」(Camus＝1942：117)。

裁判の最後では、殺人の動機を問われたムルソーは、「太陽が眩しかったから」と述べて法廷で傍聴者達から失笑を買う。その後、死刑を宣告されたムルソーは、懺悔を促す司祭を監獄の部屋から追い出し、自らの最後の「希望」を思い描くのだ。「すべてが終わって、私がより孤独でないことを感じるために、この私に

残された望みといったのは、私の処刑の日に大勢の見物人が集まり、憎悪の叫びをあげて、私を迎えることだけだった」(Camus=1942: 127)。

一連の研究を終えた今、筆者は上述した Camus の『異邦人』を初めて読了した時とは全く違う視点で見えるようになった。「実存」とは、孤独に世界に対峙する存在であるという認識、例えば人間という「考える葦」が大自然の前に儂くも揺ぎ無く佇むように、「それでも地球は動く」と言ったガリレオが、教会という権威に対して毅然と立ち向かうように、常に「実存」は不条理な状態に置かれて苦しむもの、という通り一遍の解釈で Camus の『異邦人』を読むことは勿論可能である。だが、今この研究を通して感じたことは、単なる不条理小説としてではなく、「実存的貧困」概念と「自傷的存在証明」の枠組みから、寧ろこの物語は読み解くことができる、いや読み解くべきだという実感なのである。そして、「人生に意味が無い」というムルソーの全ての行動にも単なる不条理と決め付けて理解していたが、今はそれを疑うようになったのである。有名な話だが、ムルソーには実際にモデルがいる。であるならば、彼の行動は1人の実在する人間が取り得る行動であると見做して解釈すべきなのである。ムルソーが完全なる創作物ではない以上、一見不条理にしか見えない彼の行動原理は、心理学的にも社会学的にも、説明できなければならないのだ。そして、第4章では、一見不条理で、時には全く合理性に欠けているとしか思えない女性達の様々な行動の背景に意味を探り、不条理を条理と情理に落とし込む作業を行ってきた訳だが、改めてここで、ムルソーという人間が彼女達と同じ「実存的貧困」であることを証明したいと思うのだ。

ムルソーは決して根っからの悪人ではない。彼はただ、自分自身に余りにも正直なだけだ。だが、ムルソーは、彼が考えている程幸福では無いし、彼が考えている程強くもない。彼はそれに気が付いていない。何故ならば、彼は「実存的貧困」であるからだ。「実存的空虚」の若者が、チキンレースなどのつまらないことに命を懸けて、実存的フラストレーションを発散することは、Frankl が指摘している通りであるが、結局ムルソーは、自分が同じようなスリルに酔っていることに気付かないのである。彼は自分にも他人にも嘘を吐かず、彼の信念に従って正しく生きようとしている様に見える。だが、それは最後の瞬間に単なる自己欺瞞に過ぎなかったことが露呈する。さながら Nietzsche の「超人」のように描かれているムルソーが、物語の最後で1人の孤独な人間であることが分かるのだ。

よく Camus は実存主義者の Sartre と比較されるが、Camus 本人は実存主義者と言われることを徹底して拒み、『異邦人』も寧ろ実存主義に反抗する方法で描かれている、と主張した。ということは、やはり、『異邦人』で描かれているのは、人間の「実存」に反する営みであり、「実存」を欠いた人間の脆弱さなのである。そして、筆者のその感覚が全く正しかったと今、「実存的貧困」状態にある女性達の研究を終えて確信するのである。何故ならば、彼女達は、まさにこの Camus が『異邦人』で描いた主人公・ムルソーの姿そのものだからだ。

筆者がインタビューをしている間、最もムルソーの姿をその背後に感じたのが、E6 である。彼女には特別な思い出があったため、第4章でも一際長く会話分析の引用を行ったが、再度ここで彼女の言葉をムル

ソーの行動や言葉に重ねてみよう。「^{ディザフィリエ}社会喪失者」である両者には、「内的作業モデル」の欠損に加えて、図4の下段で示した4つの心理・社会的欠損状態を引き起こしている。すなわち、①希望の喪失、②自我（アイデンティティ）の未形成、③低い自尊感情、④生きる意味の不明瞭性、である。それを改めて以下に確認しながら、両者の類似性を指摘する。それがすなわち、E6が日本社会における「異邦人」であることの証明になるであろう。

まず、ムルソーと母親の微妙な関係であるが、明らかにそこには距離がある。それは、養老院と自宅という物理的な距離だけでなく、それ以上の心理的な距離も含む。そして、同じ様な距離感がE6と家族の間にも存在する。彼女は、一緒にいると自分自身が正常でいられなくなるので、風俗で働いたお金で虐待をする母親と別居しているのだ。だが、完全にお互いの存在を否定している訳でも無い。そこには愛と憎しみと無関心の三者が複雑に入り混じっている。

ムルソーと母親の関係が複雑な一方で、彼と父親との関係はシンプルである。ほぼ関係性が無い。ムルソーは父に対しては無関心に近く、そこには母親に対するような愛憎相半ばする複雑な感情は一切無いのだ。死刑判決の前日に不意に父のことを思い出すまで、微かな軽蔑があっただけである。

原田 85：その時考えるみたいな感じか。なるほどね。その、お母さんと仲良いんだよね？

E6－85：悪くはないです。

原田 86：悪くはない。家に居たくなかったんでしょ？でも。

E6－86：家に居たらダメになる。

(中略)

原田 108：その、お母さん、でもお母さんのこと大好きなんだよね、たぶん。

E6－108：わたしがたぶん一番好きなのはお母さんです。

(中略)

原田 113：親世代ってラウンジとかって言って通用するの？その、どういう仕事か。

E6－113：ま、キャバクラみたいなもんって言ったら、まあお酒飲む仕事なんかは恥だから、その時はたぶんお父さんも感情的だったから言っちゃったんだろうけど、もう一家の恥だし、なんか、除籍、籍から抜きたいみたいなことを言われました。

(中略)

原田 117：除籍っていうのは、親子の縁を切るってことなんだよね。

E6－117：そうですそうです。

原田 118：ラウンジで働いただけで親子の縁を切るんだ。

(中略)

E6－160：怖かったっていうか、殴られなれてるから、ぼーっとしてましたね。

原田 161 : 殴られなれてるの？

E6-161 : いや, なんか, 親に殴られてたんで.

原田 162 : それはお父さん？お母さん？

E6-162 : お母さんに.

原田 163 : いつから？

E6-163 : 物心つく前からずっと殴られてた.

原田 164 : ずっと殴られてた. どんなことで殴られるの？

E6-164 : 食べるのが遅いとか, で, ちっちゃい時は椅子から投げられたりとか, あと食べるのが遅いって蹴られて 6 歳臼歯抜けたりとか, あとなんだろう, テストで点数が悪い, あと, テスト前に熱があるから休みたいって言ったら「勉強しろ」って殴られたりとか. そんな感じかな.

原田 168 : お母さんはそうやって E6 さんのことを殴るのは, E6 さんのことを思ってたっていう風に思ってたの？

E6-168 : んー. いや, 思っていないですね.

原田 169 : 違う. お母さんのストレスなの？

E6-169 : うん. えーなんか, この人も病気なんだろうなって思っていました. なんかすごい殴った後にいきなり優しくなったりするから.

「もちろん, 私はママンを深く愛していたが, しかし, それは何ものも意味していない. 健康なひとは誰でも, 多少とも, 愛する者の死を期待するものだ」(Camus=1942 : 6), 「ママンが死なない方が良かったと思った」(Camus=1942 : 68) というムルソーの言葉は, E6 が言っても何も違和感がない. 彼女も母親を憎んでいながらも愛しており, そして恐らく心のどこかで死を期待しており, だが, 普段は距離を置いている. これが「内的作業モデル」が虐待によって壊された人間の「当たり前」の思考や行動である.

ムルソーは, 恋人との関係も普通ではない. 久し振りに再会した元同僚のマリイと葬儀の翌日には直ぐに肉体関係を持つのだが, そこには全く逡巡が無い. そして, 本気になったマリイが結婚についてムルソーに問いかけると, ムルソーはあたかもそれは人生における些事であるかのように応じるのだ.

夕方, マリイが誘いに来ると, 自分と結婚したいかと尋ねた. 私はそれはどっちでもいいことだが, マリイの方でそう望むなら, 結婚してもいいといった. すると, あなたは私を愛しているか, ときいてきた. 前に一ぺんいったとおりの, それには何の意味もないが, 恐らくは君を愛してはいないだろう, と答えた. 「じゃあ, なぜあたしと結婚するの？」というから, そんなことは何の重要性もないのだが, 君の方が望むのなら, 一緒になっても構わないのだ, と説明した. それに, 結婚を要求してきたのは彼女の方で, 私はそれをうけただけのことだ. すると, 結婚という

のは重大な問題だ、と彼女は詰め寄ってきたから、私は、違う、と答えた。マリイはちょっと黙り私をじっと見つめたすえ、ようやく話し出した。同じような結びつき方をした、別の女が、同じような申し込みをして来たら、あなたは承諾するか、とだけきいてきた。「もちろんさ」と私は答えた。マリイは、自分が私を愛しているかどうかわからないといったが、この点については、私には何もわからない。(Camus=1942 : 45)

このムルソーの投げやりな態度と全く同じ状況にある E6 のナラティブを比較してみる。

原田 281 : 終わりだなあって？だってその、担当さんがもしかしたら水上がってくれて結婚してくれる可能性もあるじゃん。

E6-281 : それが一番いいと思うけど、自分の人生で。んー。でも、人に期待して生きたくないから。

原田 282 : 1人で強く生きて行くっていう選択肢はないの？

E6-282 : んー。今現状そうじゃないですか。

原田 283 : 今、1人で強く生きてる感じなんだ。

E6-283 : 1人ぼっちだし。

原田 284 : でも担当さんは担当さんでしょう？呼べば来るでしょう？

E6-284 : まあ、まあ。

原田 285 : それを1人ぼっちとは言わないんじゃない？

E6-285 : まあ。

原田 286 : そばに居ても孤独を感じる？

E6-286 : んー。なんか考えること止めちゃったんですよ。考えてもどうしようもないから。だからこの人何考えてるんだろうとか本心はどうなんだろうとか考えるのやめちゃったから、ただそこにいる人。

(中略)

原田 437 : そうすると本当に君が働く理由っていうのはその人のバースデーイベントを最高の思い出にしてあげたいって、それだけ？

E6-437 : それだけ。

原田 438 : それだけなんだ。

E6-438 : 夢を叶えてあげたいだけ。

ムルソーのマリイに対する投げやりな態度と、E6 の恋人の担当ホストに対する接し方に通底しているの

は、踏み出す愛への恐怖である。一見すると、そこには過剰な期待も無ければ、強い感動もないように見える。だが、彼女はこのホストに月に 150 万円のお金を使い、彼のバースデーでは、550 万円を使って記録と記憶に残る盛大なイベントにしようと企画している。本当に愛してもいない人間に対して、性風俗産業で自らの心身を酷使して、ここまでのことができるだろうか。結局、彼女が投げやりな態度を取るのはただの防衛機制なのである。叶わない想いに縋り付き、報われなかった時の痛みを緩和するための予防線に過ぎない。それ程までに E6 の自己愛は未成熟であり、自我は脆弱である。

E6-286「んー。なんか考えること止めちゃったんですよね。考えてもどうしようもないから。だからこの人何考えてるんだろうとか本心はどうなんだろうとか考えるのやめちゃったから、ただそこにいる人。」という彼女は、ただ、今男性が傍にいるから仕方無く一緒にいてあげてる、そんな口吻で、男性よりも心理的にも経済的にも自分の側に余裕があるような素振りを見せる。そしてそれは、ムルソーのマリイに対する投げやりな感覚に近い。だが、そもそも本当にムルソーもマリイに対して、そんな投げやりな態度で結婚という重大事を約束したのであろうか。筆者は、それもムルソーの防衛機制だと考える。事実彼は後に獄中でマリイを求めている自分に気付く。畢竟、彼は、E6 と同じように、人を愛せないのではなく、自己愛が未成熟であるが故に他者を愛する勇気が無いのである。愛して裏切られることが、愛して自らの全てを捧げた後に他者から見捨てられることが心から恐ろしいのである。「それに、結婚を要求してきたのは彼女の方で、私はそれをうけただけのことだ。」という受動的なムルソーの言葉にそれが如実に示されている。自分から結婚を申し出たのでない以上、仮にマリイが自分の下を去ったとしても、それはムルソーの人間存在が否定されたことにはならない。実はムルソーは愛する人から「承認」されたことが内心嬉しいのであるが、彼女から「非承認」されることに耐え切れる自我がない。故に、「非承認」の可能性が埋め込まれた対等な関係性を回避するために、自分が常に「承認」を与える安全な側にいられるような、歪な関係性を構築しようとするのである。それが、「同じような結びつき方をした、別の女が、同じような申し込みをして来たら、あなたは承諾するか、とだけきいてきた。『もちろんさ』と私は答えた。」というムルソーの言葉が持つ真の意味なのだ。そして同じように、常に「承認」を与える安全な側にいたい E6 の心理が以下のナラティブに表れている。E6-438「夢を叶えてあげたいだけ。」という言葉は、ムルソーがマリイや別の女性と結婚をしてあげる、承諾してあげる、いう状況とほぼ同じ感覚である。だが、寧ろ実際の関係性の主導権は、ムルソーや E6 ではなく、マリイとホストの側にあるのである。端的に言って、この状況はムルソーと E6 が、真の愛から完全に疎外されていることを示している。このような中途半端な関係性を続けた先には何一つ希望も創造的な未来も存在しない。何故ならば、「愛とは、愛する者の生命と成長を積極的に気にかけることである。この積極的な配慮のないところに愛はない。」(Fromm=1991: 49) からである。

人は意識のうえでは愛されないことを恐れているが、ほんとうは、無意識のなかで、愛すること

を恐れているのである。

愛するということは、なんの保証もないのに行動を起こすことであり、こちらが愛せばきっと相手の心にも愛が生まれるだろうという希望に、全面的にゆだねることである。愛とは信念の行為であり、わずかな信念しかもっていない人は、わずかしかな愛することができない。(Fromm=1991: 189-190)

Fromm の上述の指摘が、ムルソーと E6 の心理状況を極めて的確に表現している。Fromm は、愛することと愛されないことは、コインの裏表であり、人としてどちらかの心性だけが発現することはあり得ないとする。従って、愛されることに真の喜びを感じるものは、心から他者を愛することができるだろうし、愛されないことに恐怖を感じるものは、自らが愛することにもそれ以上の恐怖を感じるのである。そして、その恐怖は意識のうえでは愛されないことに対して強く立ち現れるのであるが、無意識のうちに回避している本源的な恐怖は、愛した結果「非承認」を味わうことなのである。この事態は、人間にとって自己の存立にかかわる問題なのだ。愛するということは、相手の心にも愛が生まれるだろうという希望に自らを全面的に委ねることである、と Fromm は指摘しているが、真の愛から疎外されているムルソーも、E6 も自身を全面的にマリイやホストに委ねることができない。E6 の場合、それはある意味当然である。何故ならば、相手はホストなのだ。ビジネスとして彼女の相手をしているのであって、幾ら彼女が彼のエースだとしても、彼が彼女を現実社会の中でも愛する保障など最初から担保されていない。従って、お金が続かなくなってホストから愛されなくなる恐怖と、愛してもどうせ裏切られるだけで、傷付いて終わるだけだろうという愛することへの恐怖の両方を E6 が抱いてしまうのは必然である。結果的に彼女は、愛だけでなく、希望からも疎外されており、ホストと同じ空間に存在していながらも強い孤独を味わうことになる。

一方、ムルソーの場合、マリイは当初真剣に彼を愛している。裁判の際、彼のために減刑の嘆願までする。だが、それ程彼を愛した女性に対して、受動的な愛しか示さなかった彼は、Fromm が指摘するように、無意識のうちに、愛することを恐れているのである。その結果、最後にはマリイからも見捨てられてしまう。放免された後は結婚しよう、と語っていたマリイも、死刑判決の後には、彼の独房を訪れることもなく、手紙すらこなくなってしまうのだ。そこに至って、初めてムルソーは自分自身が実際はマリイを心から愛していたこと、それにもかかわらず、踏み込む勇気がなく、自らの愛をマリイに与えることができず、結果的に永遠に真の愛を喪失したことに遅まきながら気付くのである。

何カ月も前から、この壁をみつめている、と私はいった。この世でこれ以上私がよく知っているものは、何一つ、また誰一人なかったのだ。恐らく、ずっと前には、私もそこに一つの顔を求めていただろう。しかし、その顔は太陽の色と欲情の炎とを持っていた。それはマリイの顔だった。私はむなしくそれを追い求めた。が今ではそれも終わった。いずれにしても、私はこの石の

汗から、何一つ現れ出でるのを眼にしなかったのだ。(Camus=1942 : 151)

真の愛から完全に疎外され、Kierkegaard が「自己自身をめぐって絶望している」と指摘した状態に陥ったムルソーは、ここに至って「絶望的貧困」の極北に辿り着いたのである。

「他のひとより先に死ぬ、それは明白なことだが、しかし、人生が生きるに値しない、ということは誰でも知っている」。(Camus=1942 : 117) 死刑の宣告を前にして、ムルソーは、そう語る。人生に意味など無いのだ、と。既にマリイという愛を喪失した彼には最早抛って立つ希望が無い。そして、彼は無神論者であるが故に、神による救済もまた人生に存在しない。ムルソーに予め父が存在しないのは、父なる神の不在を示すメタファーであろう。「絶望的貧困」状態にありながら、防衛機制によって彼は自分自身が絶望していないと自らを欺いており、物語の最後のセリフの前には、「私は、自分が幸福だったし、今もなお幸福であることを悟った。」と語る。だが、筆者にはこのムルソーの言葉は、単なる自己欺瞞の虚言にしか感じられない。何故ならば、死刑判決が確定し、マリイをも失ったと確信した彼は、改悛を迫る祭司に対して、それまでの冷静さが嘘のように、以下の様に激しく怒りをぶつけるからである。

君はまさに自信満々の様子だ。そうではないか。しかし、その信念のどれをとっても、その髪の毛一本の重さにも値しない。君は死人のような生き方をしているから、自分が生きているということにさえ、自信がない。私はといえば、両手はからっぽのようだ。しかし、私は自信をもっている。自分について、すべてについて、君より強く、また私の人生について、来るべきあの死について。そうだ、私にはこれだけしかない。しかし、少なくとも、この真理が私を捕えていると同じだけ、私はこの真理をしっかりと捕らえている。私はかつて正しかったし、今もなお正しい。いつも、私は正しいのだ。私はこのように生きたが、また別な風にも生きられるだろう。私はこれをして、あれをしなかった。こんなことはしなかったが、別のことはした。そして、その後は？ 私はまるで、あの瞬間、自分の正当さを証明されるあの夜明けを、ずうっと待ち続けていたようだった。(Camus=1942 : 125)

ムルソーのこの言葉は、祭司ではなく、あたかも鏡に映った自分自身に向けて必死に叫んでいるように感じられる。一から十まで神の御名に縋らなければならない祭司は確かに滑稽で醜悪だ。そこには全く自己というものが無い。その祭司の借り物の信念を否定し、キリスト教的価値観から逃れられない祭司に対して無神論者の自分の方が強い、自分の方が自信を持っている、自分の方が真理に近い、と畳みかけるようにムルソーは語るのであるが、結局それは、自分自身もまた目の前の祭司と同じで何も持たない空疎な人間であることを、本研究の定義で言えば、「絶望的貧困」状態に置かれた「^{ディザフィリエ}社会喪失者」であることを、認めたくないだけなのだ。何故ならば、否定は必ずしも価値を生まない。事実、ムルソーの中には何一つ彼独自の思想が

ない。それは物語の中で一切語られないからだ。彼はひたすら虚無の象徴として、文字通り人間世界に迷い込んだ「異邦人」として描かれているのだ。従って、ムルソーのこの強い怒りは、ただの精神病的自己愛的な防衛機制の「躁的防衛」に過ぎない。本当に彼が強く、自らに自信を持っており、真理に近く、信念を持って生きてきて、その結果として確信的に人を殺害したとするならば、ただ粛々と自身の死を受け入れるだけであろう。それこそ、「悪法でも法である」として毒杯を自ら仰いだソクラテスのように、である。だが、最後までキリスト教的な救済の価値観を押し付けてくる祭司に対してここでムルソーが怒りをぶつけているのは、恐らく信仰が自分を救ってくれなかったことに対するルサンチマンの爆発なのである。彼は、本当は「誰か」や「何か」に救われたいと願っていたのだ。未熟な自我故に埋めることができない、内奥に深く抱えた「象徴の貧困」を癒してくれる「何物か」を、彼は無意識のうちに切実に求めていたのである。

従って、彼は大層なことを言っているが、実は何一つ悟ってなどいない。ただ、人生を諦めただけの空虚な「^{デイズフィリエ}社会喪失者」なのだ。だから、自分で自分の発言や行動、思考を心からは正当化できない。聖典の権威によって、悩むことなく安易に自分を正当化できる祭司に対してかくも激しい怒りをぶつけるのは、それができない自分への苛立ちと無邪気な祭司への嫉妬である。

そもそも人間は、ムルソーが主張するように何時も正しい必要など無いのだ。人間は神ではない。自らの正しさも過ちも受け入れることができ初めて人は成長できる。だが、それができる人間は、かつて「重要な他者」に愛され、成熟した自己愛を備えた人間だけなのである。ソクラテスとて、「孤絶」の中で毒杯は仰げまい。彼が、自らの信念を守り、アテナイの国法を遵守して自ら死を選べるのは、彼を逃がそうと精一杯働きかけてくれる家族や仲間や弟子達など、多くの人々に畏敬の念の下に囲まれているからだ。

人間の信念や正しい生き方は、愛という堅固な土台の上にしか構築できない。人は愛無しで自己の全てを受容し、成長に繋げられるほどに強くはないのだ。従って、彼が、異常なまでに祭司を否定し、神を否定し、自らの正しさを主張すればするほど浮き彫りになるのは、愛の領域における絶望的なまでの「承認」の欠如と自分自身に対する圧倒的な無力感である。常に彼は正しくあらねばならないと思って生きてきたのである。だが、それ程までに彼が正しさに縋り付くのは、それ以外に何一つ寄る辺が無いからなのだ。つまり、彼の人生において、ムルソーは愛の領域の「承認」を致命的なまでに欠いており、その結果「内的作業モデル」を確立できず、他者を信じることができず、社会も神も信じることができないのだ。上田の言葉を借りれば、彼は愛がないために、世界に繋がることができない。故に自分自身も信じることができずに、彼はからっぽで空虚な人間になってしまったのである。だが、それを誰かに見透かされること、そしてそのような弱い自分という人間存在を神という権威の前で認めさせられ、告解によって神の赦しを得ることは、彼にとっては耐え難い屈辱なのである。彼に足りなかったのは、神の愛ではなく、人の愛だったのであるが、祭司は彼の心の中に空洞を見つけ、それを見当違いの愛で埋めようとし、結果それがムルソーの逆鱗に触れたのである。

だが彼は、最後に図らずも本音を口走ってしまう。「私はまるで、あの瞬間、自分の正当さを証明されるあ

の夜明けを、ずうっと待ち続けていたようだった。」と言うのだ。殺人という悪による存在証明を、つまり「自傷・他害的存在証明」をなすことをずっと待っていたと言うのだ。そこに、本当は救済を求めている孤独で弱い人間の絶望的な姿が浮かび上がってはこないだろうか。自らの力で自己を世界に存立させられない人間の脆さと儚さが、ムルソーという人間味の一切感じられなかった主人公から、最後の最後に初めて匂い立つように伝わってくるのである。そして、ムルソーがここで示したのと全く同じようなルサンチマンの発現は、やはり同様の心理状態に置かれた E6 のナラティブにも見受けられる。E6 の場合は、エリート思想を振りかざす大学の友人に対して、彼らの内面の空疎さを見透かしながら以下の様に怒りをぶつけるのである。

E6-340：いや、普通に仲良くするけど、すごい仲良いふりもできるけど、なんかその根底にある、何て言うんだろう、エリート思想みたいなのがすごいつまんなくて、なんか、どうなのかなって思っちゃうから。たぶん見下されてるんだろうなってわかっちゃうし。

原田 341：それはなに、附属から上がってきた人たち？

E6-341：ん？

原田 342：附属から上がってきた人たち？

E6-342：あ、じゃないです。

原田 343：じゃなくて、他校から普通に進学してきた人たちでもエリート思想持ってるの？

E6-343：うん、仲良いみたい。

原田 344：だって同じじゃん。君同じ大学に行ってて。

E6-344：だから良い企業に入って、みたいな。なんか。

原田 345：その価値観を君は好きじゃないんだ。良い企業に入ってって。

E6-345：で、なにしたいの？って思っちゃうんですよね。なんかそれがないのに、それがない時点で同じだし、わたしと。なんか、それでマウンティングをしてくるのがすごい嫌なやつだなあと思う。

E6-340「何て言うんだろう、エリート思想みたいなのがすごいつまんなくて、なんか、どうなのかなって思っちゃうから。たぶん見下されてるんだろうなってわかっちゃうし。」、E6-345「で、なにしたいの？って思っちゃうんですよね。なんかそれがないのに、それがない時点で同じだし、わたしと。なんか、それでマウンティングをしてくるのがすごい嫌なやつだなあと思う。」と所謂「意識高い系」の大学の学友達に対して怒りの想いを吐露する E6 のルサンチマンは、明らかにムルソーのそれに近い。ムルソーが、祭司が金科玉条のごとく崇めて己の価値観の拠り所とする神の教えを冷笑するように、E6 は、「良い大学・良い企業・良い人生」という日本社会のパイプライン・システムを支えてきた E6 の親世代の近代的価値観とそれを未だに信じている学友達が無邪気さを冷笑するのだ。ポストモダン社会において、既にパイプライン・シ

システムは決壊しており、E6 の学友達が一流大学に入学しただけで感じているような幼児的万能感や就職先の企業に抱く安易な信頼の根拠は、既に甚だ疑わしいものがあるはずだ。だが、若さ故にそれらを一切疑うことなく、自身の将来に確たる目的やビジョンがないにもかかわらず、そこには薔薇色の未来が待っていると確信し、あたかも自分達は新自由主義社会における「勝ち組」であるかの如く錯覚している学友達に対して、醒めた E6 が覚える違和感は、ムルソーが祭司に抱く不快感と全く同根のものである。本来は何ら確たるアイデンティティを確立していないにもかかわらず、その現実から目を背け (Marcia の「自我同一性地位」に基づけば「早期完了 (Foreclosure)」状態である)、「人生の意味」を何一つ問うていない祭司や学友達が行うマウンティングが、2 人には極めて滑稽に見えるのである。だが、行動的には一見等しく無軌道に見える E6 とムルソーの間にも、「自我同一性地位」に関しては差異があり、結局それが、「自傷的存在証明」で留まっている E6 と、「自傷・他害的存在証明」にまで達してしまったムルソーとの人生の差異に繋がっている。

E6 のアイデンティティに関して言えば、不器用でもそれを模索し、真摯に苦悩する過程である程度俯瞰して自己も周囲も把握できており、学友達に比して、若さ故の視野狭窄に陥っていないと言えるかもしれない。だが、図らずも E6 自身が、E6-345「なんかそれがないのに、それがない時点で同じだし、わたしと。」と気付いている様に、結局は、やはり彼女もまた、唾棄すべき学友達とほぼ同じ地平に立っているのである (Marcia の「自我同一性地位」に基づけば、彼女は「モラトリアム (Moratorium)」状態である)。かつてアイデンティティの危機に直面したか否か、或いは、空虚な内奥に気付いているか、気付いていないかの差異がそこに明確に存在しているにしても、両者が共に「アイデンティティ達成 (Identity Achievement)」からは遠く、内面は空疎なままで、「象徴の貧困」状態にあることは間違いない。本来そこに人間の価値や彼女の人生における優劣など存在していないのである。寧ろ、そこに優劣を付けようとして、マウンティングによって E6 を必死に貶める学友達の方が遥かに未熟なのだ。

一方で、祭司よりも自分が正しい、と我を忘れて強弁するムルソーの言葉は空しい。「祭司よりも自分が正しい」根拠を何一つ示すことができないムルソーは明らかに未熟で間違っており、彼には「自分も学友と同じ」という気付きを得ている E6 以下の自己覚知しかない。その意味で、ムルソーが持つ本源的ナルシズムは虐待サバイバーの E6 以下であり、そこから彼がいかに酷い「象徴の貧困」に陥っているか、引いてはいかに愛着システムに深刻な問題を抱えているかが演繹されるのである。その状況は、Marcia の「自我同一性地位」で理解すれば、完全に「アイデンティティ拡散 (Identity Diffusion)」の状態である。

従って、明らかにムルソーは物語の冒頭から既に深刻な「実存的空虚」の状態にあった。そして、殺人を犯して獄中に囚われてからは、社会的に排除されて「絶望的貧困」状態にまでその心理・社会的な窮乏は深まった。「^{ディザファイリエ}社会喪失者」として社会を彷徨い続けてきた彼は、文字通り「異邦人」なのである。本来は彼が殺したアラブ人の方が、フランス人が支配する世界においては文化的には「異邦人」であろう。だが、実際は彼の方が完全なる「異邦人」なのである。フランス人が支配するアラブ人の土地、仏領アルジェリアにおい

て、彼はフランス人的世界観を誰かと共有することも無く、かつアラブ人の価値観も受け入れない。社会の中に全く居場所がない「異邦人」の彼が、女衞である同じく社会のはみ出し者のレイモンしか友人がいないのもまさにそういうことなのだ。ムルソーという人間は、社会の何物にも帰属できない「^{ディザフィリエ}社会喪失者」なのである。そして、このムルソー同様に「実存的貧困」に陥っている E6 の言動から伝わってくるのは、彼と同じで、孤独で脆弱な人間の絶望的な姿である。

E6-273：別に、いつ死んでもいいから別に。

原田 274：えっ。いつ死んでもいいのか。

E6-274：怖くない。

原田 275：いつからそんなに投げやりな人生生きてるの？

E6-275：えー。んーなんか別に。特にしたいことないからかな。

（中略）

原田 287：でもそれだと心が休まる瞬間ってないんじゃない？

E6-287：ないです。

原田 288：辛い、よね。生きてて。

E6-288：うん。

原田 289：正直、お金はそこそこ稼げる、そこそこっていうか普通の女の子以上に稼げてるし、若いし、かわいいし、っていったらたぶん女性のカーストがあるとすれば君はたぶん学歴だって高いし上の方でいて、すごくこう、勝ち組の人生が待っててもおかしくない子なのに、なんでこんなに自分がないんだろう。

E6-289：なんでだろう。

原田 290：自信はないの？自分自身に。

E6-290：自信はないです。

原田 291：なんでないんだ？だって頭良い、偏差値高い学校に行ってて若くてかわいいんだよ。これで自分に自信がなかったらおかしくない？

E6-291：んー。そういう風に育てられちゃったから。自信ない。

原田 292：お前はダメな子だっていうお母さんの言葉は呪いみたいになってるんだ、今も。

E6-292：うん。

原田 293：でも正直お母さんを超えてるよね、君は。学歴とかそういった意味でも。

E6-293：超えてはいるけど、足りない。

原田 294：足りないの？でも、お母さんの人生を君が生きてるっておかしくない？なんか。

E6-294：そう、おかしいと思うから、自分の人生生きなきゃって思ったころにはもう自分がわ

かんないから、うん、なにも、なんか何もなくなっちゃった。

原田 295：何もなくなっちゃったんだ。でも1から、0から君という人間を作っていこうという気持ちにはならないの？

E6-295：今、だからなんか、ちょっと趣味とか探したりとか、してるけど。んー。なんかやっぱ結局、あ、これやってもお母さんきつこう言うんだろなあとか思っちゃう。

原田 296：お父さんではなくてお母さんなんだもんね。基準はね。

E6-296：お父さんはわたしの中で、特にそこまで印象にないんですよね。

原田 297：お母さんに褒められることが一番うれしいこと？

E6-297：うん。

原田 298：それは人生でいっぱいあった？

E6-298：ない。

（中略）

E6-413：ずっと、そうかなあ。幸せの量が人より少ないと思ってるんで、自分。

原田 414：うん。心の中に幸せが溜まらないって感じる？やっぱり。

E6-414：うん。すごい小さいんです。普通の人はいくらもあるかもしれないんですけど、わたしはこのくらいしかないから。

原田 415：でも、ちっちゃい入れ物だったらすぐ溜まって、幸せいっぱいになるんじゃないの？

E6-415：んー。だから新しい幸せはやってこないし。

原田 416：幸せが溜まらない。

E6-416：溜まりすぎたら怖い。

原田 417：怖いのか？

E6-417：怖い。

原田 418：なんで？

E6-418：幸せになるのは怖い。

原田 419：幸せになってはいけない人なの？君は。なんでだろう。

E6-419：なんもしてないから。

原田 420：なんもしてないから？幸せに値するような人じゃないと思ってるの？

E6-420：うん。だからその、好きになられるのも何かがんばってないと好きになってももらえないと思ってて。男の子に対して。お母さんと一緒に。何もしてない状態で好きなんかあり得ないから。

原田 421：あり得ない、、、

E6-421：何かしてなきゃ好きになってももらえないと思うし、それの方が嘘っぽくて嫌。

原田 422 : 「ありのままの君でいいよ」 っていう言葉を誰も言ってくれなかったの？

E6-422 : 言われたことない.

E6-421 「何かしてなきゃ好きになってももらえないと思うし、それの方が嘘っぽくて嫌。」という E6 のナラティブが示すのは、親子の愛情にまで、新自由主義的統治が及んでいるという哀しい現実である。競争のないところに競争を作り出し、市場原理主義と「万人の万人に対する闘争」によって全てを支配するこの政治経済イデオロギーは、無償の愛を否定し、子供にまで愛情に対する努力を求めてしまうのだ。だが、この状況は人間の本質に反している。新自由主義が行き渡った社会が生きづらいのは、このように人間性そのものを否定するような「規律権力」のメカニズムが社会の中に埋め込まれつつあるからなのだ。

火は熱く、触ると痛い。母親の体は温かくて心地よい。木は固くて重い。紙は軽く、破ることができる。人間をどう扱えばいいのかも学ぶ。食べれば母親はほほえむ。泣けば、抱いてくれる。ウンチをすれば、ほめてくれる。

これらすべての経験は統合され、私は愛されているという経験へと結晶する。私は母親の子どもだから愛される。私は無力だから愛される。私は可愛い良い子だから愛される。母親が私を必要としているから、私は愛される。これをより一般的な言い方でいえば、私は今のような私だから愛されるということになる。もっと正確には、私が私だから愛されるということになるのか。

母親に愛されるというこの経験は受動的である。愛されるためにしなければならないことは何もない。母親の愛は無条件なのだ。しなければならないことと云ったら、生きていること、そして母親の子どもであることだけだ。母親の愛は至福であり、平安であり、わざわざ獲得する必要はなく、それを受けるための資格もない。

しかし、母親の愛が無条件であることには否定的な側面もある。愛されるのに資格がいらない反面、それを獲得しよう、作り出そう、コントロールしようと思ってもできるものではない。母親の愛があるのは神の恵みのようなものであって、もし母親の愛がなく、人生が真っ暗になってしまったとしても、どんなことをしても創り出すことはできない。

八歳半から十歳くらいの年齢に達するまで、子どもにとって問題なのはもっぱら愛されること、つまりありのままの自分を愛されることだけだ。この年齢の子どもはまだ自分からは愛さない。愛されることにたいしては喜んで反応する。子どもの発達はこの段階において、新しい要素、すなわち自分自身の活動によって愛を生み出すという新しい感覚が生まれる。生まれてはじめて、子どもは母親（あるいは父親）に何かを贈ることや、詩とか絵とかを作り出すことを思いつく。生まれてはじめて、愛という観念は、愛されることから、愛することへ、すなわち愛を生み出すことへと変わる。もっとも、こうして芽ばえた愛が成熟するにはまだ長い年月がかかる。(Fromm

=1991 : 66-68)

Fromm が指摘している様に、本来、母親の愛は無償である。そこに新自由主義的な努力など一切必要ないはずなのだ。だが、母親が愛の源泉ではなく、「規律権力」の執行機関となってしまった E6 にとっては、愛は頑張った対価として与えられるものなのである。従って、ホストから愛されるためにも、彼女は自らの心身を酷使し、ボロボロに傷付きながら頑張って性風俗で働いてお金を貢がなければならないのである。その対価として、彼女にはホストから愛が与えられる、というのが、E6 の信念体系なのである。「お金」と「愛」の等価交換であるが、これは地下アイドルとファンの、「レス（ファンに対するステージからの目線や指差し、微笑みなど）」と「物販（地下アイドルの個人の収益になる写真や T シャツなどのグッズ販売）」の等価交換と全く同じである。これは単なる経済活動であって、愛の本質からは遠く隔たっている。

Fromm は、Marx の秀逸な表現を引用し、愛の本質を次の様に指摘する。

人間を人間とみなし、世界にたいする人間の間を人間的な関係とみなせば、愛は愛とだけ、信頼は信頼とだけしか交換できない。その他も同様である。（中略）人間や自然にたいする君の関わり方はすべて、自分の意志の対象にふさわしいような、君の現実の、個人としての生の明確な表出でなければならない。もし人を愛してもその人の心に愛が生まれなかったとしたら、つまり、自分の愛が愛を生まないようなものだったら、また、愛する者としての生の表出によっても、愛される人間になれなかったとしたら、その愛は無効であり不幸である。（Fromm=1991 : 47）

改めて指摘するまでもなく、E6 の愛はただひたすらに不幸である。故に E6 は、かくもパワーレスな状態に置かれているのである。現状では、E6 はまだムルソーのような「悪による存在証明」をしようとしている訳ではない。彼女は、寧ろ、実存的フラストレーションをチキンレースや非行で補償しようとする「実存的空虚」を抱えている若者達に似ている。彼女は長年の児童虐待によって、その心身はすっかり摩耗している。彼女ができるのは、あくまで自分自身に向けた「自傷的存在証明」である。それは、リストカットや性的逸脱、浪費や薬物乱用だ。彼女の中に強者に対するルサンチマンはまだ無い。何故ならば、先述の通り、彼女の「自我同一性地位」は「モラトリアム」に留まっており、まだ社会の中に自らを係留し、やがて折を見て自己を確立しようという微かな願いが存在している。だが、何時か彼女が抱えた虐待的環境や精神・発達障害のせいでその願いが無残に破れ、ムルソーのように「アイデンティティ拡散」の状態に陥れば、E6 とて社会の中で「何らかの象徴」にほの暗いルサンチマンを抱き、現在の「自傷的存在証明」を、ムルソーの様に激しく「他害的な存在証明」に変換して社会に突き立ててくる可能性は、十二分にあるのである。そして、実際、「絶望的貧困」状態に置かれた「社会喪失者」^{ディザファイリエ}が、それを現実社会で行った事例を改めて次項で検討する。

第3項 「自傷・他害的存在証明」：愛着障害＋社会的排除＋「象徴の貧困」＝「実存的貧困」の極北

(1) Stiegler は、『象徴の貧困』の中で、既に述べた通り、リシャール・デュルンという青年が引き起こした大惨事に度々触れる。何故ならば、彼が置かれた心性がまさに、「象徴の貧困」そのものであるからだ。そして、Stiegler が主張する「象徴の貧困」を土台とし、それに中核としての愛着障害と社会的排除を加えたものが、筆者が提唱する「実存的貧困」である。

Stiegler (=2007 : 21-2) は、「リシャール・デュルンが苦しんでいたのは、本源的な（基盤となる、原型としての）ナルシシズムの能力が構造的に剥奪されていたからだ」と指摘する。彼が「本源的なナルシシズム」と呼んでいるのは、プシュケ *psychè* [人間の生命原理としての魂、心、「姿見＝鏡」をも示す] の機能に欠かせない構造としての自己愛のことである。この自己愛は時には病的に過剰になることもあるが、しかしそれがなければいかなる形での愛も不可能になってしまう基本なのだ。

本源的ナルシシズムは、もちろん「私」を愛するのだが、その「私」は本来的には「われわれ」と深く結びついている。つまり、「私」のだけでなく、「われわれ」のナルシシズムというものも存在すると Stiegler は主張する。デュルンは、自分のナルシシズムを作り上げることができず（「内的作業モデル」の欠陥が想定される）、したがって「われわれ」に参加することができない状態に長く置かれていた。そして、彼は、「市議会という本来は『われわれ』の代表であるものの内に……自分を苦しめるだけの『他』という現実を見てしま」ったが故に「その『他』を破壊した」（Stiegler=2007 : 22-3）のであるが、以下のデュルンの言葉に、筆者は激しいデジャヴュを覚えるのだ。

「嫌で堪らないこの街のシンボルであるエリートたちを殺すことで、この人生を終えたいと思う」

「出来るだけ多くの人を殺したい。何故なら、一人では死にたくないからだ。そして、不愉快な人生を送って来た私は、せめて一度だけでも力強く、自由でありたいのだ」（Stiegler=2007 : 22-3）

これは、デュルンが生前日記に書き残した言葉であるが、ムルソーが採った行動も、本質的にはデュルンと何一つ変わらない。嫌で堪らないアルジェリアのシンボルであるアラブ人という「他」を殺すことで、彼は「私」という存在が決壊する前に人生を終えようとしたのである。筆者は、同じようなルサンチマンに突き動かされて記された言葉を確かに他にも知っている。デュルンと同じ深淵に囚われた2人の日本人の言葉を、である。奇しくも、その2人は、冒頭に挙げた太宰治と同じ、青森県出身の青年である。1人の名は、永山則夫、もう1人の名は、加藤智大である。

永山則夫に関しては、社会学者の見田が『まなざしの地獄』の中で、実に秀逸な分析をしている。以下、見田の分析を織り込みながら、永山の人生の足跡を駆け足で辿りたい。

「永山則夫連続射殺事件」の犯人である当時 19 歳の青年であった永山則夫は、生育時に両親から育児放棄（ネグレクト）を始めとする壮絶な虐待を受け、両親の愛情を全く受けられなかった。裁判が始まった当初は、逮捕時は自尊感情や人生に対する希望や他者を思いやる気持ちも持てず、犯行の動機を「国家権力に対する挑戦」と発言するなど、ひたすらルサンチマンの発現に終始し、精神的に荒廃していた。後に、独房において独学で膨大な書籍を読み漁り、自らの無知を恥じ、苦悩とともに獄中で記され、出版された『無知の涙』は、不幸にしてデュルンに辿り着けなかった、永山が自分自身の「虚無的な生」から発した「実存」への問いである。

私には、肉親というものを考えることが出来ない。なぜにこうなってしまったのかを一言的に表現すると、すべて、すべて、すべて、すべては、貧困生活からだとは断定できる。貧困から無知が生まれる。そして、人間関係というものも破壊される。（見田 2008 : 51）

これは、『無知の涙』でも恐らく最も有名な一節だと思われるが、永山のオリジナルの文章であるとは言い難い。何故ならば、この文章は、河上肇の『貧乏物語』に引用された **Bonger** の『犯罪と経済状態』の文章の借用だからである。1970 年 6 月末の第 11 回公判で、永山が以下の英文を暗唱したのは有名であるが、その際法廷に異様な緊張が張り詰めたことを、井口時男が、『人民をわすれたカナリアたち 続・無知の涙』のあとがきに記している。

Poverty kills the social sentiments in man, destroys in fact all relations between men. He who is abandoned by all can no longer have any feeling for those who have left him to his fate.
（永山 1998 : 367）

そして、見田（2008 : 52）は、恐らく永山の言葉と、上記の英文を併せて理解したうえで、「貧困とはたんに生活の物質的な水準の問題ではない。それはそれぞれの具体的な社会の中で、人びととの誇りを挫き未来を解体し、『考える精神』を奪い、生活のスタイルのすみずみを『貧乏くさく』刻印し、人と人との関係を解体し去り、感情を枯渇せしめて、人の存在そのものを一つの欠如として指定する、そのようなある状況の総体性である。＜鯨を食う＞夢に託して N.N が語ろうとしたのは、貧困とは貧困以上のものであること、それは経済的カテゴリーであるより以上に、社会的存在論のカテゴリーであること（傍点筆者）、貧しさが人間を殺すということ、このことの無念ではなかっただろうか」と続けるのである。

見田はこの時点で、永山則夫が何に最も苦しんでいたのかを実に正確に把握し、記述している。当事者である永山は、彼の犯罪行為の背景にあるものを、一言的に貧困生活に帰着させているが、恐らく、その貧困

とは単なる「経済的貧困」に留まらず、人間関係の^{アンサンブル}総体を破壊する三つの貧困、三つの非承認の全てである。それに見田は優先順位を付け、永山を最も苦しめた貧困は、経済的カテゴリというよりも、社会的存在論のカテゴリ、すなわち本研究が提唱する「実存的貧困」であると喝破するのである。

このような状態で永山を死なせてしまったことが非常に悔やまれる。貧困故に疎外され、差別され、孤立したまま殺人という人間の禁忌を犯した彼は、19年という短い人生の間、長きに渡り「経済的貧困」と「実存的貧困」の複合体である「絶望的貧困」に苦しんでいたのである。つまり、彼は明らかに社会福祉の支援の対象であったのだ。であるならば、実存主義ソーシャルワークは、彼が社会のシンボル（象徴）の破壊を通して、彼自身を自らの手で葬る一歩手前で、その魂を辛うじて救えたのではないだろうか（事実永山は、最初に富裕層の「象徴」である東京プリンスホテルで犯行に及んだのは、富裕層に対するルサンチマンだったと述べている。）。永山が獄中で記した『無知の涙』は、実存主義哲学の影響をふんだんに受け入れて、社会に対するルサンチマンを吐き出し続けたが、それを受け止めるべきは本来社会福祉学であるべきなのである。

「この一〇八号事件は私が在っての事件だ。私がなければ事件は無い。事件が在る故に私がある。私はなければならないのである（傍点筆者）。」

「私の為にこの網の部屋はある・・・普段は懲罰室であるのだそうだ。部屋は私の為にある！なんとありがたいではないか？！私は存在をこれらの事柄から知ることが出来るのである。」

悪による存在証明。だがその存在は、存在すべからざる者としての存在、非・人としての存在に他ならなかった。

しかし、このことは N.N の＜成功＞にとって、妨げとなるものではない。N.N はまさに、この存在をこそ決意したのであるから。（見田 2008：64）

見田は、「悪による存在証明」を永山（N.N）の「成功」と表現する。そして、それを「存在すべからざる者としての存在」と表現する。このような自傷・他害的、或いは自殺的存在証明による「人間の実存」に対する懊悩は、先に Stiegler が取り上げたデュルンが、自分がこの世に存在していない、つまり彼曰く「生きている実感」が持てないということに酷く苦しんでいた事実と完全に符合する。自分を見ようと鏡を覗き込んでもそこにはぽっかりと空いた穴のような虚無しかない、という言葉は、永山の言葉だとしても何一つ違和感はないはずだ。

(2) 「秋葉原無差別殺傷事件」の犯人・加藤智大の存在も「実存的貧困」の極北である「自傷・他害的存在証明」を論じる上で、決して無視できない存在である。機能不全家族の中で厳格過ぎる母から弟（高校中退後、自殺）と一緒に虐待を受けながら育ち、奇しくも太宰と同じ県下一の名門高校に進んだものの、そ

ここで彼は劣等生になってしまった。その後、両親に対する反抗を示すようになり、母親が拘ったエリートのシンボルである北大の工学部への進学を諦めて、関東の短大へと進学し、その後は更に自殺未遂なども経験してひきこもりがちな派遣社員へと身を窶していく。

事件発生の前に、加藤が匿名掲示板に書き込んだ、「顔さえ良ければ彼女ができていたでしょうし、彼女ができていれば性格も歪んだいなかったでしょう（原文ママ）」、「彼女がいない、ただこの一点で人生崩壊」というナラティブは、額面通り捉えれば、彼の容貌への極度の劣等感である。だが、加藤が後に一連の著作で語る様に、これは単なる「ネタ」であって、必ずしも本心ではない。彼は、匿名でも仮想空間であっても、自分とかかわってくれる人がいれば良かったのである。そして、不器用な加藤が匿名掲示板でコミュニケーションを行う際、最も構ってくれる人が多かった「ネタ」が傍目には不謹慎な「不細工ネタ」や「彼女ネタ」だったために、それを続けていただけであり、加藤の匿名掲示板でのやりとりの会話分析をすればする程、逆にミスリードに繋がってしまう。

事実、「私の仕事も仕事と認められていないようですので、ホームレスの方の仕事も仕事とは認められないのでしょうか」という書き込みから、浅野（2008：190）は、加藤の容貌への劣等感は、「対面」或は「面子」の問題とリンクしていると指摘する。そして、「K（加藤）が劣等感を抱いていたのは、本人の言葉に反して物理的な顔の造作やそれによって彼女ができないということではなく、むしろ対面や面子を支えるだけの敬意や尊重を得られないことに対してであったと言うべきだろう。彼は、親密性の領域（恋愛）において自分が徹底的に疎外されてあることの苦痛を必死に訴えているのだが、その訴えにもかかわらず、実際のところで彼が疎外されているのは敬意と尊重との交換によって成り立つ領域、いわば公共性の領域なのである」と考察する。

浅野は、加藤が疎外され、最も苦しんでいた領域を、公共性の領域であると指摘するのだが、残念ながらその理解は余りにも表層的過ぎる。加藤は全ての領域で疎外されているため、当然公共性の領域、Honnethの承認論で言えば連帯の領域でも「承認」を欠いていたのであるが、やはり彼が最も欲した「承認」は、ここではなく、より原初的な愛の領域における「承認」であったろう。何故ならば、既述の通り、加藤は公判でも、自らの犯行までの心理と行動を整理した『解』、『解+』、『東拘永夜抄』、そして『殺人予防』の中で、派遣社員だったこと、格差社会の犠牲者であったことを事件の根本原因に据えようとするマスメディアや社会学者達に対して、彼らの言説を一貫して否定し続けているからだ。寧ろ、彼は新自由主義の自己責任論を完全に内面化しており、派遣社員になった努力不足の自分が悪いとすら考えていた。確かに、代替可能な「労働力」として扱われる事に対しても憤りを示していたが、加藤が最後まで事件の根本原因として拘ったのは、母親からの虐待によって性格が歪み、人付き合いが苦手な、事件直前は社会との接点を失っていた事など、やはり親密性の領域、つまり愛の領域における「承認」の欠損なのである。そして、より直接的には、匿名掲示板に彼が立てた自分のスレッドが「成りすまし」によって荒らされ、誰1人寄り付かなくなり、彼が一日の労働の後の心の拠り所としていた唯一のコミュニケーションの場を失ったことに対して、適切な対処行

動を自身が取れなかったことなのである。

彼が派遣社員で、不安定な低賃金労働のプレカリアートとして、代替可能な労働者として使い捨てにされていた側面があるのは間違い無いが、目に見える分かり易いものに着目し過ぎると、物事の本質を見失う。確かに典型的な「不安定・低所得階層」の加藤は、江口の「社会階層論」から見ても「経済的貧困」に該当する。だが、加藤本人は、その状況に一切不満はなかったというのである。無論、社会に対する恨みも無かった。だが、彼は耐え難い孤独に苛まれていた。社会的な孤立は、彼をインターネットを介した異常な対人依存に追い込んでいた。浅野は、「派遣社員」という分かりやすいものに目を奪われてしまい、結果的に、経済的な貧困以上に加藤を苦しめていた存在論的な苦しみを完全に見落としていたのだ。

一方、中島は『秋葉原事件』の中で、加藤の真意を理解すべく、彼が事件に至るまで続けた匿名掲示板への書き込みの中から、真実に繋がる手がかりを丁寧に拾い上げている。そして、事件直前に加藤が書いた言葉がこれだ。

やりたいこと……殺人

夢……ワイドショー独占（中島 2011：203）

加藤は、本人が一貫して主張している通り、決して殺人がしたかった訳ではない。これまで日本で起きた無差別殺傷事件は、犯人が最後まで反省せず、更生の素振りさえ見せなかったサイコパスによるものも多かった。だが、彼は反省の弁を法廷できちんと述べた。彼は、良心の呵責を持てる、人の死に涙を流せる人間であった。中島が指摘した加藤の書き込みは、加藤のスレッドを荒らした人間とそれを誘発させた「成りすまし」に対する警告であり、この段階で「殺人」は全く本意ではない。明らかに自閉スペクトラム症（ASD）が疑われる加藤の杓子定規の思考では、これによって恐怖を感じた成りすましがいなくなり、加藤のスレッドは元の心安らぐコミュニティに戻るはずだったのだ。だが、不幸にして、加藤の思惑は相手に全く通じず、匿名掲示板は一層荒らされた末に、文字通り加藤以外誰もいなくなった。携帯依存症で、この匿名掲示板が他者との唯一の接点だった加藤からすれば、成りすましに殺意を感じたのは必然だったのである。成りすましを止めなければ大事件を起こす、という加藤の匿名掲示板での警告は無視された。自分を社会的に完全に孤立に追い込んだ成りすましに心理的な打撃を与えるには、警告を現実のものにしなければならない。余りにも幼稚で合理性にも欠けるのであるが、これが、日本を震撼させた「秋葉原無差別殺傷事件」の真の動機なのである。

たかが携帯依存症が原因で、あれ程の大事件を引き起こしたのか、という批判を受けて、彼は、『解』の冒頭でその状態を以下の様に記している。

では、依存でなくて、どのように説明するのかといえば、全ての空白を掲示板で埋めてしまう

ような使い方をしていた、と説明します。空白とは、孤立している時間です。孤立とは、社会との接点を失う、社会的な死のことです。社会との接点とは、自分の行動の理由になる相手のことです。私にとって孤立は恐怖であるため、それを埋めなくてはいけないところ、掲示板はとても楽だったので、手抜きをして、全て掲示板で埋めてしまっていた、という話なのです。(加藤 2012: 12)

ここから理解されるのは、永山の主張と異なり、加藤は「経済的貧困」とは一切関係ない次元の苦しみから、人間としての禁忌を犯したということである。だが、永山が貧困と称したものは、寧ろ社会存在論的カテゴリーの貧困であった、という見田の分析は既に記した通りである。加藤は、恐らく ASD であるが故に、永山よりも客観的に私情を排して自己を分析できている。無論、『解』や『殺人予防』は、何度読んでも腑に落ちない部分が最後まで幾つか残る。それは、やはり強く ASD が疑われた C8 のインタビューの会話分析をしているのと同じ感覚だ。

格別アイドルになりたい訳ではないのに、心身を壊してスティグマが貼り付いた風俗嬢までやりながら、地下アイドルの赤貧状態に甘んじている。将来の夢は結婚することで、芸能界での成功は別に考えてもいない、地下アイドルの仕事も特に楽しい訳でも無く、ただスカウトされたから続けている、強いて言うならば戦っているような状況、という C8 のナラティブは、普通の人が読めば支離滅裂で理解不能、或いはいい加減な虚言・作話、として片づけられるレベルのものだ。だったら、地下アイドルなんて今直ぐにでもやめればいいのに、C8 はこの理屈を本気で言っているのであろうか、とあれを読んだ多くの者が思うであろう。

だが、インタビューをした当事者の実感として、彼女はいちいち発言を細かく訂正したり、こちらの些細な言葉使いに食って掛かってきたりして、全く手抜きをして答えている感覚は無かったのである。寧ろ、必死に誤解されないように、神経質くらい自分の真意を伝えようと努めていた。その ASD 故の生真面目さと腑に落ちなさを、同様に加藤の文章からも感じるのであるが、大筋で加藤が嘘を吐いているとは思わない。そもそも、死刑が確定しており、それを反省して受け入れている加藤に今更嘘を吐く理由がない。永山の様に獄中でルンペンプロレタリアートとして覚醒し、日本に共産主義革命を起こそうなどと加藤は考えもしないだろう。既述の通り、加藤は寧ろ資本主義の奴隷だ。完全に新自由主義の「主体化＝服従化」のメカニズムによって馴化され、自己責任論で自分を律している。その点では、E6 と全く一緒なのだ。ただ、粛々と死刑の執行を待つだけの人間が、自らの事件の動機を何らかの意図を持って書き換える理由が無いのである。

加藤に社会的な死をもたらした「成りすまし」に対して、彼は以下の様に記述する。

ところが、私が仕事に備えて寝ている間にも成りすましは続き、起きたら、成りすましが私になり、私は私ではなくなっていました。それを「殺された」と表現しています。存在が殺されたということです。いっそ、本当に殺される方が、自分ではない者が自分の全てを引き継いで自分

として生きている現実を知らずに済む分、まだ幸せではないかとすら思えます。

現実ではなかなか考えられない事態ですが、例えば、家に帰ったら自分そっくりな人が家族から自分として認識されていて、本物である自分がそれを告げても逆に偽物扱いされるような状況です。（加藤 2012 : 53）

正直、こんなつまらない理由で自分の愛する家族が殺されたのか、と恐らく残された遺族の方々は怒り心頭に発するであろう。ASD である加藤にそのような普通の人の気持ちは理解できないだろうが、ASD であっても、対人関係における人並みの苦しみや苦悩は持っているのである。否、ASD が周囲と引き起こすコミュニケーション不全の連続で、寧ろそのような苦悩は一般人よりも遥かに大きいかもしれない。それは、今回のインフォーマントの中で ASD の確定診断がついていた B10, C6, D6, E4 と、恐らく会話のちぐはぐさから ASD であろうと推測される C8 の心理尺度の異常な低さから理解されるのである。B10, C6, E4 の様にメリトクラシー型能力においては人並み以上であり、一流大学に入れるレベルであっても、全員が極めてヴァルネラブルでパワーレスである。D6, C8 の様にメリトクラシー型能力が普通かそれ以下であれば、なお生きづらさを抱えるであろう。結果的に、全員が発達障害以外にも、何らかの精神的或いは身体的な疾患を複数抱えていた現実がそれを如実に物語っている。まして、児童期から虐待を受けて愛着障害を抱えた「^{ディアザフィリエ}社会喪失者」の加藤が自らの唯一のコミュニティにおいて「存在」を殺されるという事態は、耐え難い苦悩であったろう。

Stiegler (=2006 : 218) は、「この貧困は単に『物理的』なものでなく、象徴に関わるものであるだけにいっそう耐え難い（傍点筆者）。それはあたかもすべてのシンボルがディアボルに寝返る運命にあるかのようなのだ。」と指摘したが、まさに加藤は自己（シンボル）を失う苦しみには耐えられず、悪魔（ディアボル）に変容したのである。そもそも、加藤の「自己」は元来希薄であった。否、加藤自身の言葉を借りれば、自己など最初から存在しないのである。

将来に希望を持たない理由は、人それぞれあると思いますが、「自分」が無い人も、将来に希望を持たないはずです。何故なら、そのまま、「自分」がないからです。

私は、自分のことはどうでもいい人です。死にたいわけでも死刑になりたいわけでもない、と書きましたが、死にたくないわけでも死刑になりたくないわけでもありません。そうでもいい、といっても、どうなってもいい、とやぶれかぶれなのではなく、単純に、自分で自分の将来に興味が無いということです。だから、目の前の損得しか考えられず、今は我慢して将来を良くしようと、先のことが視界に入りません。（加藤 2012 : 111）

虐待によって本源的なナルシズムを欠いていたこと、その結果、「集团的個体化」に失敗し、致命的な

「象徴の貧困」に陥っていたこと、これは加藤の言葉からも疑いない事実であろう。そして、後に検討するが、まさにこれこそが、加藤が自ら言説化できないこの事件の本質なのである。

電腦世界で「存在」を殺され、追い詰められて逆上し、一時悪魔（ディアボル）となった彼は、「目的」ではなく「手段」として秋葉原で大量殺人を犯した。従ってそれは、決して本当に「やりたいこと」ではなかったはずだ。事実、彼は何度も秋葉原の交差点への突入をためらっているのだ。彼は、同じ無差別殺傷事件の犯人でも、サイコパスで良心の呵責を全く持たない宅間守元死刑囚などとは根底から違うのである。

彼は、『殺人予防』の中で、彼の動機を各々の立場から一方的に解明しようと努めてきた有識者達の言説を悉く否定し、自分が事件を起こしたのは、「匿名掲示板で行った殺人予告に対する懲役刑を回避するためだった。中途半端な懲役刑で服役し、刑務所でいじめられるよりも死刑の方がマシだと思った」という自らの動機の言説化を行っている。加藤が ASD であることを前提に考えると、加藤の実際の行動と一連の著作での言説は大筋で矛盾しておらず、この言説にもさほど大きな違和感はない。

『僕はパパを殺すことに決めた 奈良エリート少年自宅放火事件の真実』で、少年は虐待を繰り返してきた父親を殺すために自宅に火をつけて殺すことを決め、それをノートに記した。それが、上述の本のタイトルにも示されている。そして、彼は実際に執行予定日と決めた日の夜、自宅に火をつけたのであるが、その日医師の父親は夜勤で家におらず、逆に就寝中だった無関係な母親と妹が被害に遭って焼死した。何故父がいないことを事前に知っていたにもかかわらず、また東大寺学園という超一流高校に通う優秀な少年であったにもかかわらず、無意味な放火を行い、これ程辻褄が合わない殺人事件を行ってしまったのかに関して、当時様々な議論が展開された。だが、ASD というものは、この少年の様に、不合理ではあっても一度決めた予定を簡単には変えられない特性を持っている。恐らく加藤も同じ特性を持っている以上、秋葉原で殺人を行う、と一度決めた心的決定事項を、事後的に自殺や他の殺人計画に変更できなかったのであろう。従って、単に死刑になりたいだけならば、あれ程の大量殺人事件をわざわざ秋葉原まで出かけて起こす必要はなかったではないか、という一般人の当たり前の反論に対して、いや、あの時は別の選択肢を選べなかった、と答える加藤の言説は、ASD の特性を加味すれば十分に了解可能だ。

問題は、何故、秋葉原なのか、である。やはりどうしても、加藤の著作を何度読んでも、この部分だけが腑に落ちない。この点に関しては、ASD では全く説明がつかず、加藤自身も取調べ時から一貫して上手く言説化できていない。当初の取調べでは、思考を積み重ねて考え出したというよりも、単純に何故か頭に浮かんだ、と説明していた。そして、その理由を、日本のどこに住んでいるか分からない、自分を電腦世界で社会的に殺した憎い成りすましに対して心理的な打撃を与えるためには、事件を大ニュースにする必要がある。故に、場所は東京でなければならない、秋葉原は良く知っている、だから、秋葉原になった、と結論付けていた。

つまり、オタクである加藤にとって、秋葉原は大都市でかつ最も馴染みがあり、土地勘があったから、という言説であるが、どうしても加藤のこの説明は腑に落ちないのである。そもそも、大量に人を殺すのに土

地勘は必要であろうか。これは明らかに自分自身でも良く分からない行動に対する後付けの論理であろう。つまり、加藤は自分でも言説化できないくらい無意識のうちに秋葉原という場所を殺人事件の現場として設定したのだが、無意識の作用であるが故に、本人もその理由を明確に言語化できないのである。だが、これは本来最も重要な事件の鍵であるはずだ。

結局加藤は、『解』と『解+』によって、警察の取調べ時の上記の言説を撤回する。警察の取調べにおいて、何故秋葉原で事件を起こしたのか、と聞かれた際、実際は答えられなかった、と述べるのである。

自分で起こした事件の動機がわからないのがおかしいとも思われるかもしれませんが。しかし、今回明らかになったように、経緯といえるような経緯はなく、長期間何かに悩み苦しんだ挙句の事件、というわけではありませんから、事件時や事件後の混乱と合わせて考えれば、動機が印象に残らないのはおかしいことではないと思います。

そもそも私は、取調べ時から何故自分が事件を起こしたのかわかっていませんでした。それを「知りません、わかりません」では無責任なので、調査官と一緒に、私の記憶のかけらから推理しようとしたために、全てを見失いました。（加藤 2013 : 132）

調査官から、何故秋葉原なのかと訊かれていました。秋葉原であることに意味は無く、私が答えられずにいると、秋葉原で特定の人を狙ったのではないかと訊かれました。そうではないので、これに対しては「いいえ」と答えられます。そこで、「誰でもよかったのか」と訊かれ、私が「はい」と答えたものが、あたかも誰でもいいから殺したかったと私が自発的に話したかのごとく、「殺すのは誰でもよかったのです」という供述調書になりました。（加藤 2012 : 125-126）

結局、加藤は、秋葉原で無差別殺傷事件を起こすことが頭に浮かんだ理由を深掘することを諦め、あくまでそれが懲役刑を回避するための手段であった点を『解』以降の著作でも強調する。基本的にその動機は今も変わっていないが、腑に落ちない部分は四作目の『殺人予防』にも引き継がれたままだ。恐らく、何故、秋葉原だったのかは、防衛機制の「抑圧」故に今後も加藤の口から語られることは無いであろう。だが、自分の命を懸け、人の命を奪うという大事件を、全く無計画に行うという事態は考えられない。事実、ダガーナイフの準備、レンタカーの準備等、彼は無差別殺傷事件を起こす準備を計画的に進めていたのだ。場所だけが未定のままで、そのような具体的な準備を行えるはずがない。ASD の特性から、自分に不利になることまで素直に文章にしている加藤が言説化できない真の動機が、明らかに加藤の無意識に存在している。そしてそれこそがまさに、前述した「象徴の貧困」なのである。

今、ハイパーインダストリアル社会である日本では、Stiegler の指摘する、シンクロニゼーションとディアクロニゼーションが同時進行で起きている。これは、「自己を確立せよ」という命題と、それに相反する

「自己を集団に同一化せよ」という命題が、強力な潜勢力としてそこに生きる成員全てに強制されている、ということである。本来、人間はこの潜勢力に何とか耐えることができる。何故ならば、健全な人間は、その矛盾する潜勢力を愛という行為を通して既に体験しているからだ。一度は、精神分析学の対象関係論が重視する親と子の「分離＝固体化」の過程を通して、そして、その後も「重要な他者」との関係を通してである。

成熟した愛は、自分の全体性と個性を保ったままでの結合である。愛は、人間のなかにある能動的な力である。人をほかの人びとから隔てている壁をぶち破る力であり、人と人とを結びつける力である。愛によって、人は孤独感・孤立感を克服するが、悠然として自分自身のままであり、自分の全体性を失わない。愛においては、二人が一人になり、しかも二人でありつづけるという、パラドックスが起きる。(Fromm=1991: 41)

だが、虐待サバイバーの加藤には、そもそもこの潜勢力に耐え得る愛着システムと自己愛が無い。上述の通り、加藤は自分を持っていないと断言する。本源的ナルシシズムを欠いた人間が、ハイパーインダストリアル社会で生きることが、必然的に自我の崩壊を招くのである。そして、その自我の崩壊を一層悪化させるのが、社会的排除である。加藤は、社会的に孤立していた、と認める。それは恐らく ASD に起因するコミュニケーションの不全によるものであろう。彼のずれた思考、普通とは異なる価値観を周囲の人間はなかなか受け入れられない。C8 が、幼稚園時代から長年いじめの対象である、というのと同じように、恐らく加藤も似たような境遇を送っているに違いない。だが、空気が読めない ASD だからといって、社会的存在であるという人間の本質が変わる訳ではない。人間である以上、人とのかかわりたい欲求は絶対に無くならない。どれほど空回りしようとも、彼らは必死に「誰か」とコミュニケーションしようとしているのだ。人間関係に全く興味・関心を持たないシゾイド・パーソナリティ障害でもない限り、人は決して社会の中で孤立などしたくないのである。

Fromm (=1991: 25) は、「人間のもっとも強い欲求とは、孤立を克服し、孤独の牢獄から抜け出したいという欲求である。この目的の達成に全面的に失敗したら、発狂するほかない。なぜなら、完全な孤立という恐怖感を克服するには、孤立感が消えてしまうくらい徹底的に外界から引きこもるしかない。そうすれば、外界も消えてしまうからだ」と指摘する。加藤はまさにそれを実践していた。それにもかかわらず、徹底的に外界から引きこもっていた、加藤の言葉を借りれば、「全ての空白を掲示板で埋めてしまうような使い方をして」外界である現実世界からインターネットの世界に逃げ込んでいた彼から安息のコミュニティを奪い、無理やり孤立に向き合わせ、発狂に誘ったのが、加藤の成りすましなのである。加藤が、存在を殺された、寧ろ生身の体を殺された方が楽だった、と語るのは当為である。彼が語る存在論的な苦しみには、何一つ誇張など無いであろう。

気も狂わんばかりの孤立感から逃れるためには、Fromm が指摘するように人は外界そのものを消すしかない。だが、現実問題として核兵器のスイッチを持たない一般人が、外界を実際に抹消することは不可能である。ならば、取る手段は一つしかない。それは、外界の「象徴」を排除することである。だが、その外界の「象徴」は、ハイパーインダストリアル社会においては、実は自分自身の「象徴」と限りなく融合している。外界は、既に分離し難い程に、自らに侵食しているのである。従って、外界の「象徴」を排除することはすなわち自分自身の「象徴」を排除することになる。自らの姿見を破壊する行為、それが、「象徴の貧困」に置かれた人間が振るう暴力やテロリズムなのである。

ナンテール市議会を襲撃したリシャール・デュルンの様に、加藤もまた外界の「象徴」であり、かつ自分自身の「象徴」でもある存在を攻撃したのは疑いない。そして、オタクである加藤の「象徴」とは、すなわち、オタクの聖地・秋葉原であり、そこを行きかう人々は外界の「象徴」だったのである。従って、「象徴の貧困」に陥っていた彼は、無意識に秋葉原に赴き、そこで殺傷に及んだのである。無論、それは自分自身の「象徴」を破壊する自傷行為でもある。彼がこれを言説化できないことは、責められないであろう。無意識を表面化させるためには、熟練の精神分析医と向き合う必要があるからだ。

加藤が自分でも言説化できなかった秋葉原を選んだ理由は、「象徴の貧困」概念によって、了解が可能になった。だが、それでもなお、もう一点、どうしても腑に落ちない点がある。何故彼は、ダガーナイフなどの準備を万全に整え、白昼堂々とあれ程の惨事に及んだのであろうか。秋葉原という場所で事件を起こすことが外界の「象徴」を排除し、自我の崩落に歯止めをかけることであるならば、行為自体は別に夜でも良かったはずだ。また、加藤が主張するように懲役刑を死刑で上書きしたかっただけならば、人数は4人で十分だった。日本における死刑の基準である「永山基準」を、加藤が知らなかったとは考え難い。その彼が何故、7人の犠牲者という過剰なまでの殺戮を、人波に溢れる白昼の歩行者天国で堂々と行ったのか。まるで、俺を見ろ、とその場にいた者だけでなく、日本中の人々に言わんばかりに。これは、「象徴の貧困」でも、説明がつかない。

畢竟、彼は自分が生きてこの日本という社会に存在していることを、証明したかったのであろう。「承認」を致命的に欠いたままの人生を送ってきた加藤にとって、普通の方法で、人間として「承認」されることを彼は全く想像できなくなってしまったのだ。その結果が、永山と同じ悪による存在証明の実行、「夢……ワイドショー独占」なのである。「自傷的存在証明」は、「実存的貧困」が深まる程に他害的になるのだが、自らの「実存」がそれ程までに希釈された彼は、自分の命を捨てても社会からの「承認」が、生の実感が、欲しかったに違いない。孤立して、名もない誰かのまま社会で野垂れ死ぬのではなく、加藤智大という1人の人間として、絞首刑で殺されたかっただのである。その感覚は、「すべてが終わって、私がより孤独でないことを感じるために、この私に残された望みとっては、私の処刑の日に大勢の見物人が集まり、憎悪の叫びをあげて、私を迎えることだけだった」(Camus=1942:127)と嘯くムルソーの「希望」と全く同じものではないだろうか。

(3) 加藤が、「夢……ワイドショー独占」の書き込みをしたのは事件のほぼ1か月前だった。それから加藤は少しずつ、レンタカーの手配や凶器であるダガーナイフの準備を始める。そして、事件決行の二日前、彼は連続で風俗店に行った。それに対して、警察の調書の中で、彼はこう記している。

なぜ行きたくなかったのかはわかりません。2日続けて行った理由は、誰かに相談したかったのかもしれませんが、記憶にはありません。(中島 2011 : 213-14)

この事実に対して、公判では女性検事が加藤の人間性を貶めようと、加藤の性欲についてしつこく彼に質問を続けたのだが、それも完全に的外れであろう。事実加藤は自身が性欲に流されて風俗店に行ったという彼女の指摘を徹底して否定或いは無視した。この点に関して、加藤は、『解』、『解+』において、改めて真の意図を語っている。

サービス業の女性を相手に金を使うと、その間は孤立が解消されたことに気がしました。何の解決にもなっておらず、現実逃避でしかないのですが、孤立している私にとっては救いでした。(加藤 2012 : 25)

風俗嬢も「誰か」になりますが、一瞬だけです。(加藤 2013 : 121)

彼は、中島(2011)が『秋葉原事件』で指摘するように、やはりお金を払ってでも「誰か」と話がしたかったのである。それほどの「孤絶」の状態に追い込まれていたのである。そして、そのような感覚で男性が風俗店を訪ねるのは、決して稀なことではない。業界の生き字引である B2 がそれを指摘した箇所を以下に引用する。

B2-81: で、ホテヘルの特徴って駅近なんですよ。

原田 82: うん。

B2-82: なんでだと思います？これ。

原田 83: 家に帰る前にやっていきたいってことですか？

B2-83: 自殺抑止なんです。

原田 84: そうなんですか？

B2-84: ええ。絶対駅の前パチンコありません？

原田 85: あります。

B2－85: あれって明るいからっていうので駅近なんです。ホテヘルも自殺抑止っていうので、「死ぬしー、風俗でも行っちゃおうかな」って思って,, , るような感じで作られてるらしい。

原田 86: あー、なるほどね。

B2－86: デリヘルって余裕があって、どんな子来るかな、みたいなそういうものじゃない。ホテヘルはもうちょっと切羽詰まった感じがあるので好きなんすよ。

原田 87: あー、なるほどね。だとお客さんの中に実際そういう人いました？

B2－87: もちろんいますよ。

原田 88: 死のうと思って来たみたいな人。

B2－88: そんなこと出だしから言うと引くだろうなって思ってるんで、一発抜いた後に「死にたいって思うことってない？」みたいな風に言われて「私はないけど、あんの?」、「このままいっちゃおうかなと思ったんだ」って言われて、「でもこの時間の速度は弱いからね、飛び込んだってお金かかるだけだよ」というふうなコストの話すると、やっぱり,, , 中途半端に若かったりするじゃないすか。

原田 89: なるほど。思いとどまる,, ,

B2－89: 「残してきた親にこんだけかかるんだよ」って話をすると、「奥さんにこんだけお金用意してからにしたら?」って諭すと、「じゃそうするわ」ってなりますよね（笑）

加藤は、本当は、「誰か」に凶行を止めて欲しかったのだろう。だから、彼は2日続けて女性の下に行ったのだ。だが、勇気を持って彼は本音を語れなかった。自分自身の醜いルサンチマンを明かし、孤独であること、「誰か」に必要とされたいこと、人間として自らの存在を「承認」して貰いたいこと、これらを1人の女性に語ることができなかったのだ。もし、加藤に本音を語れる勇気があったならば、あの悲劇は、1人の風俗嬢が抑止できていた可能性があるのである。

B2の指摘からも明らかだが、人間の「実存」は裸の関係の中でこそ、極限に実感することができる。本来無償の愛を加藤に注ぐべき親は虐待者であり、彼らから愛の領域の「承認」は絶対に得られなかった。そうなれば、残された手段は性愛の体験を通して、女性から自らを強く「承認」して貰う他ないのであるが、加藤は遂にそれが叶わなかったのである。ASD特有のずれたコミュニケーションを行う加藤には、人生において彼女と呼べる存在はできなかった。

彼は、「彼女をどう定義するのか知りませんが、私にとっては、24時間365日ずっと一緒にいてくれる女性がそうです。私に彼女がいれば、私は常に『彼女のために』生きることになりますから、孤立から完全に解消できるはずでした。」（加藤2012: 35）と述べているが、この認識は、余りにも未熟である。加藤に自覚はないのであろうが、これはある意味女性を「物象化」している。女性を1人の尊厳ある主体であると理解できていないため、単に自分の孤独を埋めるために利用したいのである。自分も女性のために生きるから同

じである、という理屈は通用しない。24 時間 365 日一緒にいろ、という命令は、モラル・ハラスメント或いは精神的な DV 以外の何物でもない。だが、このような心性は、往々にして今回のインフォーマントの女性達にも見受けられた。例えば、D10 は、自分と彼氏がお互いに GPS を付けていたが、これは基本的には加藤の考えに近い。無論、D10 はそれによって彼氏の DV を誘発し、結果的に傷付け合うことになったのであるが。また、逆にホストに 24 時間 365 日一緒にいて欲しい、と願う女性達もいた。C3 や C9 がそうである。彼女達も、ホストに健気に尽くしたいという思いでそう言ったのであろうが、ホストからすればやはり同じ理由で迷惑であろう。

加藤は、結局愛による「承認」の代替物を得るために、性風俗を利用した。出会い系にも登録して、性行為を行わず、会話だけしてお金を渡すこともあったという。この様な強い対人依存は、「実存的貧困」或いは「絶望的貧困」状態に置かれた人間の特徴でもある。何故ならば、これらの貧困概念の中核に存在する愛着障害が、孤独に耐えられない BPD の心性となって表れるからである。

他方、本研究の女性達は、加藤と同じ孤独な状況に置かれた時、自分の体を売ることによって、性愛を通して束の間の「承認」を得ることができていた。この男女差は、極めて大きいと思われる。テロリストや大量殺傷事件の犯人に男性が多いことは、一般的には男性の凶暴性・攻撃性のためと理解されるが、「自傷的存在証明」の中でも犯罪行為以外の方法で、「承認」を得られる手段を女性は持っている、という点は無視できないだろう。「最貧困女子」の様に法や連帯の領域で「承認」を得ることが難しい女性であっても、疑似的な愛の領域による「承認」は、性風俗産業に従事する限りほぼ得ることができるからだ。つまり「性」とは、人間の「生」そのものなのである。

永山は、獄中で幾つか小説を書き残しているが、そこに出てくる主人公のパートナーの女性に共通していることがある。それは、必ず主人公を、性的に、それも全面的に受け入れることだ。彼女達は一様に、興奮で性器を濡らして主人公を受け入れる。永山の小説において、主人公が愛の領域で「承認」されないことは絶対にないのである。永山が私小説に託した願望も、加藤と全く同じなのである。彼ら虐待サバイバーの男性は、愛による「承認」が、他の全ての「承認」に優先される。そして、それは本研究で検討した虐待サバイバーの女性達も同じであった。従って、「実存的貧困」状態の基底にあるのは、致命的なまでの愛の欠損なのである。

岡田は、人に喜びや幸福を与える生物学的な仕組みは、実は三つしか存在せず、それらを、①性欲・食欲といった生理学的欲求の充足、②通常、困難な目的を達成した時に発されるドーパミンによって脳が刺激される場合（麻薬もドーパミンを介して脳の「報酬系」を活性化させるため、努力ができない個人はこれに嵌りやすい）、③脳内のオキシトシンの働きによって、安らぎと安心が得られる愛着システム、に整理する。そして、何故愛着システムに欠陥を抱えた個人が様々な嗜癖に嵌りやすいのかを以下のように記述している。

親から無条件の愛情を与えられずに、不安定な愛着を抱えた人では、オキシトシン系の充足が

不十分にしか得られない。そこで、頑張ることによって目標を達成し、周囲からも認められることで自分を支えようとする。そのプロセスがうまくいっているときは、オキシトシン系の不足を、ドーパミン系の充足で補っているわけだ。ところが、頑張って結果を出すという戦略がつかずいてしまったとき、喜びを与えてくれるのは、食べたりセックスしたりという生理的な快感か、麻薬や嗜癖的行動によって、ドーパミンを短絡的に放出させるという手段しか残っていない。人はこの世の苦痛に耐え、生きていくために、何らかの喜びを必要とする。その喜びを与えてくれる最終手段が、過食やセックス依存、薬物やギャンブル、ゲームにおぼれることなのである。それは、努力して達成感を味わうという本来の喜びではないが、生きるために必要な喜びなのである。

ただ、短絡的な充足は、耐性を生じ、同じだけの喜びを得るためには、もっと強い刺激を必要とするようになる。それが、ときには健康を害し、破滅の危険に身をさらさせることにもなる。それでも、止められない。なぜなら、いくらやり続けても、本当の満足を与えてはくれないからだ。本当の満足を与えてくれる唯一の仕組みは、オキシトシンを介した愛着の仕組みなのかもしれない。それが不足し、それ以外の満足で代償しようとするとき、飢餓感は癒やされず、際限のない自己刺激行為に陥ってしまうのかもしれない。嗜癖的な行動だけでなく、目的に向かって頑張るという行動においても、愛着システムがうまく働いていないとき、しばしば度を越した中毒となってしまう。(岡田 2019 : 101-102)

「経済的貧困」の極限が飢餓だとすると、それを是正するのは比較的容易い。単に食料を与えればいいのか。その人間は、たちまち喜びと幸福を感じることができる。だが、「実存的貧困」の極限が虐待だとすると、それを是正するのは極めて難しい。有島武郎が指摘するように、「愛は惜しみなく奪う」ものであっても、Fromm が言うように簡単に与えられる類のものではないからだ。他者に惜しみなく愛を与えられる者は、しっかりした愛着システムを持っている人間、つまり過去に十分な愛を与えられた者だけなのだ。そうでない人間、すなわち愛着システムに欠損を抱え、実存的フラストレーションに苦しむ人間が、太宰や東電 OL がそうであったように「自傷的存在証明」に耽溺してしまうのは当然であり、同様に本項で取り上げた永山や加藤も、自らの飢餓感を癒すためにただひたすらにそれに縋ったのである。だが、岡田が指摘するように、ドーパミンを用いて「報酬系」を刺激し、一時の多幸感を得たとしても、それは本当の癒しにはなりえない。東電 OL の一生が、まさにそれを哀しいくらい完璧に体現している。彼女の摂食障害とセックス依存症は、岡田が挙げた①と②を非常に分かり易い形で示している。そして、彼女は東電に入社するまでも、入社した後も、学業や仕事(売春も含めて)においては、異常な努力を続けた女性だった。これも、②に該当する。だが、彼女は敬愛する父の死後は、常に幸せの極北である「孤絶」であった。「実存的貧困」状態そのものであった。③の愛着システムが欠けた人生とは、これ程の苦悩を人間にもたらすのである。

従って、「実存的貧困」が、「経済的貧困」以上に、人間の尊厳を剥奪し、個人をパワーレスな状態に陥れ、

かつ自立を疎外するのは、ある意味当たり前なのである。そして、見田が永山の研究から導き出した知見、すなわち、「貧困とは貧困以上のものであること、それは経済的カテゴリーであるより以上に、社会的存在論のカテゴリーであること（傍点筆者）、貧しさが人間を殺すということ」は、本研究によって完全に証明できたことを今、確信している。また、その貧しさには、必ずしも経済的な貧しさは必要が無い点も、ここで改めて強調しておきたい。

永山は、獄中において、上述した『貧乏物語』に引用された **Bonger** の一文と、実存主義哲学、マルクス思想などにことのほか大きな影響を受けて、ルンペンプロレタリアートとしての自らの思想を築き上げていったが、彼に大きな影響を与えたものを敢えてもう一つ付け加えるとするならば、中原中也の詩が挙げられる。井口は、中原中也にのめり込んでいく永山の様子を以下の様に記述している。

永山は、「中原中也という一風変わったプロレタリア的な詩人」と書いている。むろんこれは誤解である。中原は実際には資産家の放蕩息子だった。にもかかわらず中原が永山の眼に「プロレタリア的」に映ったとすれば、それは中原の詩に永山が「貧しさ」を感じ取ったことを示している。だが、その「貧しさ」は、彼が闘争の拠点として設定したルンペン・プロレタリアートの「絶対的な貧しさ」とは性質を異にしたものだ。

中原中也はたしかに「貧しさ」の詩人だった。しかしそれは、いわば「心の貧しさ」なのであり、その「心の貧しさ」は、中原の語り口としての「貧しさ」と切り離せない。中原は、決して世界を高めから見下ろすことなく、低い場所から、ありふれた言葉で、虚栄を排して、どんな弱点もつくろうことなく、自分の心を歌おうとしたのである。それは永山の初期の詩にも共通する語り口だ。（永山 1998 : 372）

永山がいたく共感した中原の「貧しさ」を、井口は「心の貧しさ」と表現しているが、これは「実存的貧困」に置き換えても差し支えないであろう。太宰同様に、中原は富裕層を出自とする「実存的貧困」者であった。中原は、太宰同様実家からの仕送りに夭逝するまで依存しており、本当の意味での経済的な貧困状態を経験していない。だが、確かに永山は感じ取ったのである。中原の中に存在する社会存在論的な貧困のカテゴリを、である。

中原の代表作である『山羊の歌』の中でも最も有名な 4 連 16 行の詩である、「汚れつちまつた悲しみに」の 3 連目は、「実存的貧困」の心象風景そのものである。

汚れつちまつた悲しみは
 なにのぞむなくねがふなく
 汚れつちまつた悲しみは

倦怠（けだい）のうちに死を夢む（中原 1990 : 89)

何を望む訳でもなく、ただ漫然と空虚で死を夢見してしまう。これはこれまで会話分析を続けて来た性風俗産業に従事する女性達や、X JAPAN の歌詞にも見受けられた「実存的貧困」の象徴とでもいうべき心象風景であるが、永山がここに「プロレタリア的」なもの、すなわち「貧しさ」を確かに感じたのだとすれば、やはり再配分の必要のない貧困は存在するという本研究における結論は、正しかったのだと言えるだろう。

第4項 現代のトリスタンとイゾー：ある「^{ディザフィリエ}社会喪失者」の悲劇

(1) 「みなの人衆、お聞きなされませぬか、愛と死とのこの美しい物語を。これはトリスタンと妃イゾーとの物語、お聞きなされ、いかに二人の恋人が、恋の大きな悦びと、大きな悲しみを嘗めて愛し合い、やがては同じ日のうちに、彼は彼女のため、彼女は彼のために、死んでいったかを」(Castel=2015 : 280)。

Castel (=2015 : 281) は、ケルトの古い伝承である『トリスタンとイゾー』を、「社会喪失の物語」であると指摘する。トリスタンは、イギリスのコーンウォール地方にあったとされるリオネス国の、メリオダス王とイザベラ王妃の間に産まれた息子で、叔父であるコーンウォールのマルク王に仕える騎士であった。トリスタンはコーンウォールに朝貢を要求するアイルランドの騎士モルオルトと決闘し破るが、モルオルトの剣に塗られていた毒により倒れる。死を覚悟し、1人海に漕ぎ出でたトリスタンは、偶然にも7日7晩海を彷徨いアイルランドに漂着する。トリスタンは「どんな毒でも取り除ける」と有名な王妃に預けられるが、実はこの王妃が、トリスタンが決闘で倒したモルオルトの姪であるイゾー（金髪のイゾー）である。トリスタンは、自分の正体がばれる前にアイルランドを脱ち、コーンウォールに戻る。そこでマルク王は、彼を養子にし、王国を彼に継がせようとするが、トリスタンはこれを断る。そして彼は自ら提案して、マルク王にイゾーを嫁がせるために再びアイルランドに向かうのだ。

アイルランドに戻ると、彼は土地を恐怖に陥れていた龍を倒す。アイルランド王は、返礼としてイゾーをトリスタンに渡さざるを得なくなる。だが、コーンウォールに戻る船中で、トリスタンとイゾーは、誤って媚薬を口にしまい、婚姻外であるにもかかわらず情事に及ぶ。その後イゾーはマルク王に正式に嫁ぎ、トリスタンは更に遍歴を続ける。ドイツ、スペイン、フランスと彼は転戦を続けるが、一か所に落ち着くことはない。最後に行き着いたフランスのブルターニュの地で、トリスタンはイゾー（白い手のイゾー）という名の女性と結婚をするのであるが、彼が心から愛しているのは、金髪のイゾーであったため、妻であった白い手のイゾーには指一本振れることはなかった。やがて、トリスタンはブルターニュの地の戦いで致命傷を負う。彼は自らの傷を癒すために、金髪のイゾーをコーンウォールから呼び寄せるのであるが、金髪のイゾーに密かに嫉妬していた白い手のイゾーに欺かれ、金髪のイゾーが向かってきていることを知らせて貰えず、見捨てられたと勘違いしたままトリスタンは絶命する。そして、トリスタンの生前に到着が間に合わなかった金髪のイゾーもまた絶望の余り、愛人の死体にしがみついて絶命するのである。これが、アーサー王

の物語にも影響を与え、のちに円卓の騎士の1人にも組み入れられたトリスタンの悲恋の物語である。

このようにトリスタンは、所謂逸脱者ではないが、自身の道筋からは逸れているのだ。階級脱落者ではなく、社会喪失者^{ディザファイリエ}なのである。彼は自らの条件のあらゆる属性を備えているが、その条件を達成することはない。しかし、その欠如の本質にあるものは、個人的な欠陥や道徳的な過ちに関連づけられない。彼は失敗や破綻などで、価値を落としたものでは無いが、隠遁により、場所を移された者である。彼の行いの客観的不道徳さにもかかわらず、社会的及び道徳的法と彼との関係は、対立の関係でもなく、無関心の対象でもない。彼はそうした法を超えている。なぜなら彼は、法の支配する現実の外にいるからである。彼は、所有や継承、血縁など、物の交換と同時に人の交換も規制するあらゆる物事の外にいるのだ。このようにトリスタンは、社会的な達成の欠如のかたちを携えてさまよい、それをどこにおいても具現することができない。(Castel = 2015 : 288)

トリスタンとイズーは、他のあらゆる社会的登録の規則の外にいるのと同様に、結婚の外にいる。彼らは自分たちのお互いの愛を除いて、何ら後世に残すものは無く、子供もいない。彼らはただ、帰属なき二つの存在が鏡像関係のなかでもつ関係にしか依拠しない結合の悲劇を、死ぬまでいきるのが自分たちの使命であると理解しているかのように、すべては過ぎていく。

このようにトリスタンとイズーの愛の構造は、脱領域化によって理解され、それが物語を独自なものとしている。二人の恋人たちは、世のなかには住んでいなかった。しがたって、彼らの愛は、それ自体として絶対的なものであることを余儀なくされている。この愛は、社会生活のなかにいかなる可能な支えをもたないからである。それは土地の継承や分割を規制することもなく、夫婦間ないしは社会的な戦略に組み込まれることもなく、子孫のなかに広がっていくこともない。それは何ものによっても制限されず、相対化されず、延長されることがない。(中略)

その結果、こうしたかたちの愛は、明らかに死においてしか完遂されえないことになる。この愛は、完全に生への執着から離脱しているがゆえに、死の外では実現不可能なのだ。(中略) 死はこの愛の終わりではなく成就であり、愛が占めることのできる唯一の場所である。(Castel = 2015 : 293-295)

冒頭に引用を多用したが、「トリスタンとイズーの物語」は、Castel が指摘するように「社会喪失の物語」として、完璧なメタファーなのである。トリスタンは王家に連なる身である以上、どれほど放浪を重ねようと「階級脱落者」ではなく、「社会喪失者」なのである。その身分は、貶められることなく疎外され続け、だが、最後に非業の死を遂げるように、社会喪失とは少しずつ自らの存在を、「現存在」の地平から切り離して

いく行為のことなのである。さて、なぜこのような物語を持ち出して社会喪失を語るのかといえば、まさにこのような存在が社会の中に多数存在しているからである。

まず、1人目のトリスタン、それは太宰治である。彼は、青森の大富豪の家に生まれたことは既述の通りである。彼は父親と兄に衆議院議員を持つ生粋のエリート家庭に生まれた。従って、どれ程の彷徨を経たとしても、彼もまた「階級脱落者」ではなく、「社会喪失者」なのである。トリスタンの最期は、2人のイズーの愛憎の交錯の中で看取られるのであるが、太宰もまた、妻とは別に2人の愛人がいた。そして、正式な妻である白い手のイズーではなく、金髪のイズーと重なり合うように亡くなったトリスタンの姿は、愛人の山崎富栄と玉川上水の急流で入水自殺し、一緒に引き上げられた太宰の姿に重なる。「その結果、こうした私たちの愛は、明らかに死においてしか完遂されえないことになる。この愛は、完全に生への執着から離脱しているがゆえに、死の外では実現不可能なのだ。」という Castel の解説は、さながら太宰とその愛人の生涯を解説したようには感じられないであろうか。

もう1人のトリスタンは、性別は異なるが東電 OL である。東大卒の東電重役の父と専業主婦の母の下で何不自由なく育ち、慶應義塾大学経済学部を経て東京電力の初めての女性の幹部候補生として入社した。そして、冒頭に記したように、29歳から渋谷で毎日のように売春行為を行う生活にのめり込む。「この愛は、社会生活のなかにいかなる可能な支えをもたないからである。それは土地の継承や分割を規制することもなく、夫婦間ないしは社会的な戦略に組み込まれることもなく、子孫のなかに広がっていくこともない。それは何ものによっても制限されず、相対化されず、延長されることがない。」という Castel の解説もまた、東電 OL の売春の日々を完璧に説明したかのようなのである。彼女は最後まで東電の幹部社員として生き、死んで行った。彼女もまた「階級脱落者」ではなく、「社会喪失者」なのである。

「トリスタンとイズーの物語」が持つ儚さと美しさは、詰まるところ、2人が、「階級脱落者」ではなく、「社会喪失者」であることに起因する。もし、この2人が王家の血を引かず、或いは仮に引いていたとしても、その地位を剥奪され、「階級脱落者」となり、彷徨の末に無残に死んだとすれば、中世の高貴な騎士物語として長く吟遊詩人に愛される物語たり得たであろうか。恐らく、ならなかったに違いない。そして、我々が太宰の繰り返される薬物による自殺未遂や5度目で既遂に至った入水心中に何がしかの悲劇的な美しさとロマンを感じ取ってしまうも、東電 OL が殺された渋谷の円山町の廃屋近くの地蔵に今も献花が絶えないのも、畢竟、彼らが「階級脱落者」ではなく、「社会喪失者」であることに起因する。「階級脱落者」でないにもかかわらず、自ら望んで「社会喪失者」の地位に甘んじたその矛盾にこそ人間としての魅力が発生するのかもしれない。貴種流離譚が世界のどこの文化圏においても散見され、人々に愛されるのも同じ理屈であろう。

では、仮に「階級脱落者」の「社会喪失者」が、つまり「アンダークラス」の「社会喪失者」が、より端的に言えば、「実存的貧困」の2人が愛ゆえに死ななければならないとすれば、そこにも何がしかの美しさやロマンは発生するだろうか。発生する可能性はある、というのが本研究の解であり、事実、近年それが発

生し得ることを証明するような、象徴的な事件が起きている。

(2) 2019年5月23日、新宿歌舞伎町で、1人の若い女性・Aが、恋人と思しき全裸で血塗れになった男性・Bの横に座り込み、真っ赤な返り血を浴びながらも、駆け付けた警察の前で悠然と煙草をくゆらしながら、裸に一枚だけ上着を羽織った状態で携帯で電話をかけている姿の画像がTwitterに上げられて、あっという間にトレンド入りした。そのショッキングな画像は世界中に拡散され、そして瞬く間に今度はその画像を描いた絵がTwitterに溢れ始めた。太宰の心中事件や東電OL事件にマスメディアが飛びつき日本中が熱狂したように、SNS時代においては、Twitterにおいて、この女性是世界中を席捲したのだ。そして、衝撃の画像の後、更にTwitterは沸き立った。ありがちな痴情のもつれかと思われた事件は、ホストと女性客のトラブルだった事が判明したのである。そして、女性客であるAの言葉に社会は再度衝撃を受けることになる。「好きで好きでしょうがないから刺した」、「刺したあと、相手が“好きだ”と言ってくれて幸せだった」と彼女は警察の取り調べで供述したのである。

これは、愛しているが故に憎いという通常の痴情のもつれではない。無論、何らかの憎しみから殺意を抱いたのでもない。愛しているが故に殺したいのである。かつて、このような事件があったであろうか。

刺されたホスト・Bは、生死を彷徨った後、歌舞伎町のホストクラブに直ぐに復帰した。そして、週刊誌の記事に次のように答えている。「だけど自分には、ここしか戻る場所がなかったんです。親がいなくて施設で育って、7人いる兄弟とも音信不通だから、この店の先輩たちがはじめてできた家族みたいな感じで…。週刊誌によれば、Bは栃木県那須烏山市でうまれた。一家が離散したのは小学生の時だったという。兄弟は別々の施設に預けられ、中学を卒業後は建設関係の職人として働くも、人間関係がうまくいかずに退職し、一時期は家もお金もないホームレスになっていたという。そんな彼を“拾って”くれたのが、同店の幹部だった。

「その人は去年の11月、面接に行ったときから、すごくよくしてくれて、ご飯を食べさせてくれたし、寮にも住めるようにしてくれた。入院中には同僚たちと一緒に毎日お見舞いにくいて、“お酒が飲めないなら俺たちが代わりに飲んでやる”って言うてくれて、もう一度戻りたいなって思いました。事件のことは店のお客さんは皆知っていること。だったらここで隠すのではなく、すべてを明かしてホストを再開しようと思ったんです」と語るBは、Aのことを恨んでいないという。駆け出しホストだった彼をナンバーワンに押し上げてくれたのが、歌舞伎町のガールズバーで店長を務めていたAだった。AがBに想いを寄せていたことを知っていたにもかかわらず、十分に彼女に報いてあげなかった自分にも責任がある、刺されたのが自分で良かった、もう二度と誰かを刺したりしないで欲しい、それがBの言葉だ。

ホストと水商売女性という関係性は、第4章以降で度々触れてきた。何故、彼らが惹かれ合うのか、何故それを止めることができないのか、それは、このAとBの悲劇的な事件からも思わずにいられない。Aはガールズバーの店長として大量の写真をSNSに載せていたため、インターネットには今でもそのスクリー

ンショットが出回っている。そして、ハッシュタグを付けて Instagram に書かれている言葉は、「バンギャ」と「メンヘラ」である。これもまた、本論文で何度も繰り返し取り上げてきた、性風俗産業に従事する女性達を語る上での鍵概念である。今回のこの事件は、ある意味典型的な「実存的貧困」状態にある女性が、起こるべくして起こした「自傷的存在証明」なのである。そして、冒頭に取り上げた Castel の「トリスタンとイゾーの物語」、すなわち「社会喪失の物語」の解説に再度目を通せば、これがほとんど今回の事件の解説として通用することに驚愕するのである。

トリスタンとイゾーは、他のあらゆる社会的登録の規則の外に在ると同様に、結婚の外に在る。彼らは自分たちのお互いの愛を除いて、何ら後世に残すものは無く、子供もいない。彼らはただ、帰属なき二つの存在が鏡像関係のなかでもつ関係にしか依拠しない結合の悲劇を、死ぬまでいきるのが自分たちの使命であると理解しているかのように、すべては過ぎていく。

このようにトリスタンとイゾーの愛の構造は、脱領域化によって理解され、それが物語を独自のものとしている。二人の恋人たちは、世のなかには住んでいなかった。しがたって、彼らの愛は、それ自体として絶対的なものであることを余儀なくされている。この愛は、社会生活のなかにいかなる可能な支えをもたないからである。それは土地の継承や分割を規制することもなく、夫婦間ないしは社会的な戦略に組み込まれることもなく、子孫のなかに広がっていくこともない。それは何ものによっても制限されず、相対化されず、延長されることがない。(中略)

その結果、こうしたかたちの愛は、明らかに死においてしか完遂されえないことになる。この愛は、完全に生への執着から離脱しているがゆえに、死の外では実現不可能なのだ。(中略) 死はこの愛の終わりではなく成就であり、愛が占めることのできる唯一の場所である。(Castel＝2015 : 293-295)

幸か不幸か、A の愛は成就しなかった。A は B の死だけが、愛が占めることのできる唯一の場所であり、自らの愛の成就であると考えたのである。B は就寝中に腹部を A に刺され、命の危険を感じて A のマンションのエントランスまで逃げた。その際、A は、「私のこと好き？」と B に聞き、B は救急車を呼んで欲しいがために、「好きだ」と答えたという。だが、彼女は救急車を呼ぶことは無く、力尽きてエントランスに横たわる B の横に腰を下ろし、通行人が警察に通報しているにもかかわらず、彼が死に行くのを見届けようとしていたのである。そして、その後、自分も自殺しようと思っていたのだ。この物語の主人公である A と B は、太宰や東電 OL のような高貴な生まれではない。寧ろ、真逆の「アンダークラス」である。週刊誌で描かれた通り、B は児童養護施設出身者で、歌舞伎町に流れ着き、ホストクラブの幹部に拾われるまではホームレスだった。そして、A は、有罪の実刑判決が下された一審において、日本人の父と中国籍の母親の下で中国で生まれ、2 歳で来日して日本に帰化した事実が確認された。いずれもホスト、ガールズバー店員とい

う「職業スティグマ」を背負っているだけでなく、出自も十分に社会的排除の対象であり、本研究が縷々述べてきた「実存的貧困」に該当する。A は月額 11 万円のマンションに住み、B のホストクラブで散財をしていた。後の公判の中で、B に貢ぐためにデリヘル店に勤務し、パパ活で数百万円を稼いだことも明かにされた。軽蔑されるのではというスティグマから、そのお金をどうやって稼いだのかは B には話せなかったという。結局、A の手元には一銭も残らない以上、彼女は経済的にも不安定で貧困であるのだが、従来の貧困概念で彼女を捉えることはやはり不可能である。だが、彼女の心の「闇」と「病み」は深かった。記述の通り、2 人共歌舞伎町の水商売に従事し、彼らの出自も含めて社会的排除の対象だった以上、恐らく「孤絶」だったのであろう。トリスタンのように文字通り彷徨を続けた B は歌舞伎町に流れ着き、そこで、A に殺されかけた。実際のトリスタンは、ブルターニュに流れ着き、白い手のイズーに謀られて絶望の中で事切れている。A は金髪のイズーであり、同時に白い手のイズーでもあった。それは彼女がガールズバーの店長としての顔と、ホストに恋する女性客としての顔と、二つの顔を使い分けていたこととも重なる。そして、2 人のイズーが共にトリスタンを愛しながらも、片方は殺したいと願い、片方は救いたいと願うというアンビヴァレントな状況もまた、A という 1 人の女性の中に存在していただろう（事実、彼女が電話をかけていたのは、実は警察であったことが公判で明らかになった。「好きだ」と B に言われてやはり B に死んで欲しくないと思い直し、警察に自分が人を刺したことを通報したのだった。).

この事件は、中世の吟遊詩人が愛し、アーサー王の円卓の騎士物語にも組み込まれた「トリスタンとイズー」とほとんど同じロマンティックな構造を持っている。従って、SNS において、あれほどの衝撃を持って、このニュースは世界中を駆け巡ったのである。

「実存的貧困」概念については、既に十分に書き記したので、改めて最後に、それが「トリスタンとイズーの物語」で描かれるような愛と死の物語に直結するものであることを指摘したい。何故、「実存的貧困」は「実存的困窮」では駄目なのか、そもそも非物質的なそれと物質的な「貧困」を同じレベルで語れるものなのか。これはこの研究を始める前に抱いた筆者の最初の問いでもある。これは苦悩や困窮と表現すべき類の概念なのではないか、と。だが、苦悩や困窮は、耐えることができる。一方で、「実存的貧困」状態の女性達は、文字通り耐え難い苦悩の底で打ちひしがれていた。彼女達の近い未来に過るのは常に死の翳だった。そして、往々にして、彼女達は口にする。死にたい、別に今直ぐに死んでも構わない、と。精神病の錯乱状態で軽々しく死を口にしているのではない。十分な判断能力を持っていてなお、彼女達は死を口にするのである。そしてそこに嘘や見得や脅しは微塵も無かった。彼女達は、本心でそう口にしていると確信した時、直ぐに Kierkegaard の『死に至る病』のことを考えた。彼女達は、「孤独」の中で「絶望」している。だが、一体彼女達は人生の何に絶望しているのか、と問うた時、彼女達はまさに Kierkegaard が指摘した苦しみ of 極限である、自分自身に絶望している状態なのだと気付いた。そして、彼女達の生い立ちに真摯に耳を傾けた時、圧倒的に足りていないものが直ぐに理解できた。愛が、全く彼女達の心の泉に溜まっていないのだ。そして、人生において幾度か気まぐれにかけられた愛情は、砂漠に染み込む水の様に全て消えてなくなって

いた。彼女達はまるで、大いなる渇きに苦しみながら、絶望的な程に水を求めて彷徨する砂漠の旅人の様に見えた。彼女達には Honneth の三つの「承認」が全て欠けていたが、彼女達が最も求めるものは、必ず原始的な「承認」である愛だった。A が B に求めたもの、トリスタンとイゾーがお互いに求め合ったもの、それは地位でも名誉でもお金でも無く、ただ無償の愛だったはずだ。それが無ければ、人は生きていけないのだ。愛の領域における「承認」を欠いた人生には、絶望への処方箋である希望が絶対に生まれない。希望は未来へと託す願いである。そして、願いは何かを信じる力無しには生まれない。だが、人生において満足に愛されたことが無い彼女達は社会も、自分自身ですらも信じられない。だから彼女達は皆一様に、ただひたすらに愛を求める。それは、彼女達にとって唯一の救いなのだ。何時か未来に希望を抱くために、今この瞬間はただ愛だけが欲しいのである。それが、「実存的貧困」状態にある「社会喪失者」^{ディザフイリエ}が示すたった一つの「実存」である。

(3) 畢竟、「救い」は、やはり彼女達自身の心の中にある「希望」だ。キャバクラの仕事やデリヘルの仕事でも、そこに「生きる意味」を見出している人間は、他の女性達と比べて少しかだけ強かった。そして、働く意味が分からなかったり、ただ生活のためだけに「夜」や「風」の仕事をしている女性達は非常に内面が脆くボロボロだった。60 年前に Frankl がアウシュヴィッツの強制収容所で見つけた真実と、結局は何も変わらなかったのである。

極限状態の強制収容所で「生」と「死」を分けたものは、「未来に対して希望を持ちえているか否か」(諸富 2013 : 24) であったように、ほぼ同じような「近代的不幸」と「現代的不幸」に見舞われた女性達の中で、「実存的貧困」状態に陥ることがない強い女性達は、未来に対する「希望」を持っている者だったのである。だが、その「希望」を持つことが、ポストモダン社会においては、ある意味最も難しいことなのかもしれない。何故ならば、現代は山田 (2007 : 14) が指摘するように、哀しい「希望格差社会」だからである。

とりわけ、社会的排除に遭っている「アンダークラス」の人々が抱えた「実存的不安」は、我々一般人が持っているそれとは質が違いうだろう。その不安は、人生における幾度かの挫折の後に恐らく「実存的空虚」に代わり、やがて社会的に排除される過程においてスティグマを内面化し、「実存的貧困」が形成される。

Frankl は、「失業神経症」という定義の下で、ある種の失業者に対して次のように述べる。

以上のことから明らかになるのは、結局失業に対する心理的反応はいかに運命的なところが少ないか、そして、人間の精神的自由の余地がここでもどれほど多く残されているか、ということである。

(中略)

失業神経症は、それゆえ、決して失業の直接的結果ではない。それどころか、反対に、失業が神経症の結果であるとすら考えられる場合もあるのである。神経症が、それを病んでいる人間の社会

的運命や経済的状況に対して影響を及ぼすことは明らかである。もし他の事情が同じならば、内面的に毅然とした失業者の方が、無感動になった失業者よりも競争においてより大きなチャンスを持ち、就職活動においても成功しやすいであろう。しかし失業神経症の影響は、単に社会的なものにとどまらず、生理的なものにまで及ぶ。なぜなら、精神的生命がその使命的性格によって獲得した構造的統一性は、生物学的なものにまで及ぶからである。他方、無意味さと無内容さの体験と共に生じる内的構造の突然の喪失は、有機体的な崩壊現象にすら至るのである。精神医学は、たとえば定年退職した人々に現れる急激な老化現象という形で、典型的な心身の崩壊を知っている。これと同じようなことは動物の場合にも見られる。たとえば、調教されて「任務」を与えられたサーカスの動物は、動物園で「働かずに」飼われているだけの同種類の動物よりも平均寿命が長いことが知られている。

失業神経症が失業によって運命的に引き起こされるのではないという事実から、それを精神医学的に治療する可能性が生まれてくる。これに対して、失業の心理学的問題をこのような方法で解決すべきではないとして、この方法を過小評価する者には、とくに若い失業者がしばしば次のような言葉を口にするのを指摘せねばならない。「われわれが欲しいのは金ではない。われわれは生きがいが欲しいのだ。」このような事例の場合、狭義のロゴセラピー的ではない精神療法——たとえば「深層心理学的な」治療法——では見込みがないことは明らかであろう。ここで示されているような問題は、むしろ、ただ実存分析によってのみ克服されうるものである。実存分析は、この失業者に対して社会的運命に対する彼の内的自由への道を示し、その困難な生活に対してすら内容を与え、意味を克ち取ることができるような責任性への意識へと彼を導くのである。

(中略)

なぜなら、人間の尊厳は、人間自身が一つの手段に、すなわち、単なる労働過程の手段とか生産手段に貶められることを禁ずるからである。労働能力だけがすべてなのではない。それは生活を意味で充たすための十分な根拠でもなければ必要な根拠でもない。労働能力をもちながら、無意味な生活を送る人もいれば、労働能力をもたないにもかかわらず、その人生に意味を与えることができる人もいる。享受能力についても、ほぼ同様のことが言える。ある人間が自分の人生の意味をもつば特定の領域に求め、そのかぎり自分の生活を何らかの形で制限するのは問題なく正当である。ただ問題は、このような制限、このように自己を限定することが事実在即したものなのか、それとも、神経症の場合のように、本当は不必要なものなのではないか、ということである。後者の場合には、労働能力のために不必要に享受能力が犠牲にされたり、あるいはその逆であったりするのである。そのような神経症的な人間に対しては、ある意味恋愛小説（アリス・リトッケンスの『夕食はいらない』）にある言葉が示されねばならないであろう。「もし愛がなければ、労働は代用物になり、

もし労働がなければ、愛は阿片になるであろう（傍点筆者）。」（Frankl=2011：214-216）

何という卓見であろうか。失業者が精神的に病んでいる理由は、失業という「生きる意味を失った」状況そのものに原因あるのだと、精神科医の Frankl は早くから既に見抜いていたのだ。特に、若い世代に「意味を克ち取ることができるような責任性への意識へと彼を導く」ことが、Frankl 流に言えば、『人生』が私に求めている」就労支援のソーシャルワークなのである。

しかし、Frankl でさえ、よもやポストモダン社会におけるグローバリゼーションと新自由主義の波及・浸透が、ここまで世界を荒廃させるとは、流石に予見できなかったのではないだろうか。「なぜなら、人間の尊厳は、人間自身が一つの手段に、すなわち、単なる労働過程の手段とか生産手段に貶められることを禁ずるからである。」という Frankl (=2011：15) のこの言葉を嘲笑うかのように、新自由主義における労働の規制緩和は容赦なく先進国において進められ、今や日本の労働市場において、働く者の4割は非正規雇用である。そこでは、人間存在が単なる生産手段に貶められている。このままでは、「自己の代替可能性」に耐え切れない、第2、第3の永山則夫が、そして加藤智大が、日本社会に次々と生まれるだろう。そして、赤木のように、社会の流動化を求めて戦争を望む若者も一層増え続けるだろう。奇しくも永山は、『驚産党宣言』草案（手稿）」と題したマルクス・エンゲルスの『共産党宣言』のパロディの中で、マルクスが階級闘争の役に立たず、更には無階級社会実現の障害となる層と見做して冷たく切り捨てた彼の様なルンペンプロレタリアートこそが、真の共産主義革命の担い手であり、命を捨ててでも支配権力と闘うと主張している。「実存的貧困」状態に置かれた「アンダークラス」が「自傷的存在証明」を行うという本研究の主張を、永山は自身の体験から思想にして、既に明確に宣言していたのである。

(4) 「もし愛がなければ、労働は代用物になり、もし労働がなければ、愛は阿片になるであろう（傍点筆者）。」という Frankl の言葉を、完全にその身をもって体現してしまっているのが、この研究でこれまで検証を続けて来たキャバクラ嬢や風俗嬢の心性ではないだろうか。これまでの考察通り、彼女達は、現代のハイパー・メリトクラシー社会では労働者として評価されるべき能力は、極めて低いのである。働きたくても、働く場所が、「夜の世界」や「風の世界」しかないのである。だが、そこでの仕事を社会は決して労働とは認めない。「職業スティグマ」が性風俗産業に押されている限り、当事者達もそれに誇りを持って「労働」であると言えないのである。かくして、愛の阿片が毒となり、彼女達の心を蝕むのである。それはもう、真実の愛ではないのだ。嗜癖としての愛である。それが、端的に発現している状況が、AのBに対する想いの様な、キャバクラ嬢や風俗嬢のホストに対する愛である。或いは、バンギャのビジュアル系バンドマンに対する愛である。だが、そこに救いがないのは、これまで縷々描かれてきた通りだ。自分の客となった人間、或いはファンとなった人間は、新自由主義の消費社会においては「お金」としての価値に貶められ、それは恋愛の対象とはなりえない。「物象化」された存在だからこそ、割り切ってホストもバンドマンもかわる

ことができる。つまり、彼女達の愛には、報われる「可能性」が、すなわち「希望」が無いのである。

希望がない状態で生きられるほどに、人間は強くはない。それを現実に証明しているのが、20年前からスウェーデンで発生している「生存放棄症候群（Resignation Syndrome）」である。この「生存放棄症候群」の発症が確認されている国は、以前はスウェーデンだけに留まっていたが、昨今オーストラリアへの亡命を希望する者達のオフショア抑留国であるナウルでも確認されている。二つの国で、この病気が発病した子供達に共通しているのは、「希望」がないことである。

「生存放棄症候群」はほとんどの場合、亡命を望む家族の子供にだけ発生する。子供たちは無気力に陥り、食べることも、話すことも、目を開けることすらなくなるという。更には昏睡状態のように、何年も寝たきりになる子もいる。スウェーデン語で“*uppgivenhetssyndrom*”として知られるこの症状は、亡命申請を却下されたストレスや失望と関係していると考えられている。近年、亡命を取り巻く規制が厳しくなり、実際に戦闘地域になっている場所から逃げてきたのではない難民は、申請を却下される傾向が強い。例え却下されるにしても、それが決まるまでに何年もかかる場合もあり、難民の家族はどっちつかずの状態で捨ておかれる。子どもたちにとって、亡命できないという現実の重みは耐え難いものだ。それを受け止めきれずに、すべてを完全にシャットアウトして殻にこもり、まるで生と死の狭間にいるように、生きているのに活動しない昏睡状態に陥るのではとされている。スウェーデンのフルトクランツ医師は、「生存放棄症候群」の人たちが回復するためには、生命維持のための医学的介入だけではなく、彼女が「ソフトバリュー」と呼ぶ「保証」や「希望」が必要だと強調する。しかし、そのような考えを、移民当局や懐疑的な政府に伝えるのは難しい。彼女は、BuzzFeed News の取材に対して、「こうした所謂『ソフトバリュー』は、医学の教科書や法律書にはあまり書かれていない」と指摘する。「診断書に、保証や希望について書くのも、非常に難しい」という。また、ナウルで亡命希望者情報センターの抑留者支援マネージャーを務めるナターシャ・ブラッチャーは、「島から外へ移すと、回復する」と説明する。「スウェーデンのケースと一致している。スウェーデンでは、永住ビザが与えられると、希望と安定を感じることができ、その状態から回復する。一度ナウルから出られたので、彼らは健康的な環境にいるのだ」。

この状態は20年前に突然、スウェーデンの難民の子供達の間で発症したのではない。医学的にこのような症状が最初に観測されたのは、ナチスドイツによるユダヤ人に対するホロコーストの際なのである。明らかにスウェーデンやナウルに抑留されている難民のストレスと、ナチスドイツによって強制収容所に拘留された Frankl 達ユダヤ人の状況は異なる。恐らく、少なくとも最低限度の衣・食・住が提供され、医療的なケアも受けられる難民の方が、極寒の地に裸という極限状態に置かれたユダヤ人達に比べれば、遥かに生命維持の面では安全であろう。だが、ナチスドイツの強制収容所で見られた状況とほぼ同じ症状が、スウェーデンの難民キャンプとナウルの抑留地で起きているという事実から、飢餓や栄養失調、疾病その他、様々な生命の危機以上に、心理的な「希望」が人間の肉体に与える影響が大きいことが理解されるのだ。「希望」が無い状態であれば、人はどこにいても本能が生存を放棄する。それがナチスドイツの強制収容所であっても、

スウェーデンの難民キャンプであっても、ナウルの抑留地であっても、そして恐らく飽食の日本であっても、

「生存放棄症候群」の人達が回復するためには、フルトクランツ医師は「ソフトバリュー」と呼ぶ「保証」や「希望」が必要だと強調するが、同様に、「実存的貧困」状態にある人達が回復し、自立していくためには、医学的な介入や物質的な支援に留まらず、本質的には「ソフトバリュー」の提供が必要だろう。そして、難民の子供達と違って、「実存的貧困」状態の女性達は、既に日本国籍を手に入れているか、望めば取得できる地位にある。従って、彼女達に必要なのは、純粹に「希望」だけなのだ。

「この国には何でもある。本当にいろいろなものがあります。だが、希望だけがない」と村上龍が『希望の国のエクソダス』で 10 年前に予言したことは、昨今現実のものになりつつある。日本という国に、これ程「実存的貧困」が溢れているという現実を受け入れ、そこに「希望」の光を当てるのは、今、社会福祉学に託された最大の使命である。

補稿 第4章における会話分析のトランスクリプト

第4章 質的研究：52人の「性風俗」に生きる女性達の実態（トランスクリプト版）

第1節 水商売（A群）に属する女性たちの研究

第2項 3人の現役キャバクラ嬢の物語（地方都市・政令市・六本木）

第4章で取り上げたナラティブの前後を以下に順次記載する。一部を切り離すと文脈が理解できなくなる箇所はなるべく一塊として記載したが、個人情報に触れる箇所や前後の文脈と併せて意味が無い発言は、（中略）として割愛している。第4章を読んでも良く会話内容が理解できない場合は、この補稿を併読して貰いたい。

※A-2-①

以下、個人情報保護の観点からウェブ公開版では全て割愛。

※A-2-②

以下、個人情報保護の観点からウェブ公開版では全て割愛。

第2節 風俗業（B群）に属する女性たちの研究

第2項 3人のホテヘル・デリヘル嬢の物語

※B-2-①

以下、個人情報保護の観点からウェブ公開版では全て割愛。

第3項 4人のソープランド嬢の物語（高級・中級・低級×2）

※B-3-①

以下、個人情報保護の観点からウェブ公開版では全て割愛。

第4項 2人のセックスワーカーの物語

※B-4-①

以下、個人情報保護の観点からウェブ公開版では全て割愛。

第5項 2人の最貧困風俗嬢の物語

※B-5-①

以下、個人情報保護の観点からウェブ公開版では全て割愛。

第3節 エンタテインメント業（C群）に属する女性たちの研究

第2項 6人のAV女優（強要被害者・現役専属・元専属×1，元企画単体×3）の物語

※C-2-①

以下，個人情報保護の観点からウェブ公開版では全て割愛．

第3項 3人の地下アイドルの物語

※C-3-①

以下，個人情報保護の観点からウェブ公開版では全て割愛．

第4節 風営法外のサービス（D群）に従事する女性達の研究

第2項 2人のJKビジネス嬢の物語

※D-2-①

以下，個人情報保護の観点からウェブ公開版では全て割愛．

第3項 5人の素人売春嬢の物語

※D-3-①

以下，個人情報保護の観点からウェブ公開版では全て割愛．

第4項 6人のパパ活嬢の物語

※D-4-①

以下，個人情報保護の観点からウェブ公開版では全て割愛．

第5節 その他の女性達（E群）の研究

第2項 2人のシングルマザーの物語

※E-2-①

以下，個人情報保護の観点からウェブ公開版では全て割愛．

第3項 6人の高学歴風俗嬢の物語（元AV・元キャバクラ・高級デリヘル・低級デリヘル・パパ活等）

※E-3-①

以下，個人情報保護の観点からウェブ公開版では全て割愛．

参考文献

- American Psychiatric Association (2013) Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders: DSM-5, Amer Psychiatric Pub Inc. (=2014, 日本精神神経学会監修, 高橋三郎, 大野裕訳『DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル』医学書院.)
- Ashforth, B.E. and Kreiner, G.E. “How can you do it? : Dirty Work and the Challenge of Constructing a Positive Identity” *Academy of Management Review* 24, 413-434, 1999
- Bauman, Z. (2004) Identity : Conversations with Benedetto Vecchi, Polity. (=2007, 伊藤茂訳『アイデンティティ』日本経済評論社.)
- Bauman, Z. (2000) Liquid Modernity, Polity. (=2001, 森田典正訳『リキッド・モダニティー液状化する社会』大月書店.)
- Bauman, Z. (2004) Wasted Lives. Modernity and its Outcasts., Polity. (=2007, 中島道男訳『廃棄された生—モダニティとその追放者』昭和堂.)
- Bauman, Z. (1998) Work, Consumerism and the New Poor, Open University Press. (=2008, 松本伊智朗監訳『新しい貧困 労働消費主義ニュープア』青土社.)
- Beck, U. (1998) Risk Society: Towards a New Modernity, SAGE Publications Ltd. (=1998, 東廉・伊藤美登里訳『危険社会—新しい近代への道』法政大学出版局.)
- BestTimes (2017) 「『社会保障は性風俗に敗北した』を考える」
(https://www.excite.co.jp/news/article/BestTimes_7306/).
- Brinton, M. C. (2011) Lost in Transition : Youth, Work, and Instability in Postindustrial Japan, Cambridge University Press. (=2008, 池村千秋訳『失われた場を探して——ロストジェネレーションの社会学』NTT出版.)
- Bloch, E. (1959) *Das Prinzip Hoffnung*, Verlag Suhrkamp. (=2012, 山下肇訳『希望の原理 第一巻』白水社.)
- Camus, A. (1942) L'Étranger, Éditions Gallimard. (=1963, 窪田啓作訳『異邦人』新潮社.)
- Castel, R. (2009) La montée des incertitudes : Travail, protections, statut de l'individu, Ed. du Seuil, Editions du Seuil. (=2015, 北垣徹監訳『社会喪失の時代——プレカリテの社会学』明石書店.)
- Delacoste, F., Alexander, P. (1989) Sex Work: Writings by Women in the Sex Industry, Cleis Press. (=1993, 角田由紀子監訳『セックス・ワーク—性産業に携わる女性たちの声』パンドラ.)
- Farley, M., Cotton A., Lynne J. et al. Prostitution and trafficking in nine countries: an update on violence and post-traumatic stress disorder. *J Trauma Pract* 2003; 2(3/4):33-74
- Frankl, V. E. (1988) The Will to Meaning: Foundations and Applications of Logotherapy, New American Library. (=2015, 広岡義之訳『絶望から希望を導くために ログセラピーの思想と実践』青土社.)

- Frankl, V. E. (2007) Aerztliche Seelsorge: Grundlagen der Logotherapie und Existenzanalyse. Mit den 'Zehn Thesen ueber die Person', dtv Verlagsgesellschaft. (=2011, 山田邦男監訳『人間とは何か 実存的精神療法』春秋社, 2011)
- Frankl, V. E. (1979) The Unheard Cry for Meaning: Psychotherapy and Humanism, Touchstone. (=1999, 諸富祥彦監訳『「生きる意味」を求めて』春秋社.)
- Fromm, E. (1941) Escape from Freedom, Farrar & Rinehart. (=1952, 日高六郎訳『自由からの逃走』東京創元社.)
- Fromm, E. (1956) The Art of Loving, Harper & Brothers. (=1991, 鈴木晶訳『愛するということ』紀伊國屋書店.)
- Gans, H.J. (1995) The War against the Poor: The Underclass and antipoverty Policy, Basic Books.
- Giddens, A. (1990) The Consequences of Modernity, Stanford University Press. (=1993, 松尾精文・小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か?——モダニティの帰結』而立書房.)
- Giddens, A. (1991) Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age, Polity. (=2005, 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ——後期近代における自己と社会』ハーベスト社.)
- Goffman, E. (1978) Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity, Jason Aronson Inc. Publishers. (=2012, 石黒毅訳『スティグマの社会学-烙印を押されたアイデンティティ-』せりか書房.)
- Hayek, F. A. (1994) The Road to Serfdom, Univ of Chicago Pr. (=2008, 西山千明訳『隷属への道 ハイエク全集 I-別巻』春秋社.)
- Honneth, A. (1992) Kampf um Anerkennung, Suhrkamp Verlag AG. (=2014, 山本啓, 直江清隆訳『承認をめぐる闘争——社会的コンフリクトの道徳的文法』法政大学出版局.)
- Honneth, A. & Fraser, N. (2003) Umverteilung oder Anerkennung?, Suhrkamp Verlag AG. (=2012, 加藤泰史訳『再配分か承認か?—政治・哲学論争』法政大学出版局.)
- Honneth, A. (2003) Verdinglichung - Eine anerkennungstheoretische Studie, Suhrkamp Verlag AG. (=2011, 辰巳伸知, 宮本真也訳『物象化——承認論からのアプローチ』法政大学出版局.)
- Hughes, E.C. "Good People and Dirty Works." *Social Problems* 10, 3-11, 1962
- Lister, R. (2004) Poverty, Polity. (=2011, 松本伊智朗監訳『貧困とはなにか』明石書店.)
- Lyotard, J.F. (1979) La condition postmoderne, Editions de Minuit. (=1989, 小林康夫訳『ポスト・モダンの条件—知・社会・言語ゲーム』水平社.)
- Lévi-Strauss, C. (1955) Tristes tropiques, Librairie Plon. (=2001, 川田順造訳『悲しき熱帯〈1〉』中央公論新社.)
- Lewis, O. (1959) Five Families: Mexican Case Studies in the Culture of Poverty, Basic Books. (=

- 2003, 高山智博訳『貧困の文化—メキシコの“五つの家族”』筑摩書房.)
- Levitas, Ruth. (2005) The Inclusive Society?: Social Exclusion and New Labour, Palgrave Macmillan.
- Marx, K. (1867) Das Kapital: Kritik der politischen Oekonomie, Verlag von Otto Meisner. (=1968, 向坂逸郎訳『資本論 1』岩波書店.)
- Marx, K. (1852) Der 18te Brumaire des Louis Napoleon, Die Revolution. (=2014, 市橋秀泰訳『レイ・ボナパルトのブリュメール一八日』新日本出版社.)
- Nietzsche, F. (1887) Jenseits von Gut und Böse. Zur Genealogie der Moral, dtv Verlagsgesellschaft. (=1993, 信太正三訳『ニーチェ全集〈11〉善悪の彼岸 道徳の系譜』筑摩書房.)
- Nussbaum, M.C. (2008) Liberty of Conscience: in Defense of America's Tradition of Religious Equality, Basic Books. (=2011, 河野哲也訳『良心の自由』慶應義塾大学出版会.)
- Nussbaum, M.C. (2010) Not for profit: why democracy needs the humanities, Princeton University Press. (=2013, 小沢自然訳『経済成長がすべてか?—デモクラシーが人文学を必要とする理由』岩波書店.)
- Offe, C. (1985) 'Work: The Key Sociological Category?' in C. Offe, *Disorganized Capitalism: Contemporary Transformations of Work and Politics*. Cambridge : Polity.
- Paugam, S. (2013) La régulation des pauvres, Puf. (=2016, 川野英二監訳『貧困の基本形態—社会的紐帯の社会学』新泉社.)
- Piketty, T. (2014) Le capital au XXIe siècle, Points. (=2015, 山形浩生訳『21世紀の資本』みすず書房.)
- Seabrook, J. (2000) The No-Nonsense Guide to World Poverty, New Internationalist. (=2004, 渡辺雅男訳『階級社会—グローバリズムと不平等』青土社.)
- Sen, A. (1995) Inequality Reexamined, Clarendon Press. (=1999, 池本幸生・野上裕生・佐藤仁訳『不平等の再検討—潜在能力と自由』岩波書店.)
- Spicker, P. (2007) The idea of poverty, Policy Press. (=2008, 坪洋一監訳『貧困の概念—理解と応答のために』生活書院.)
- Standing, G. (2011) The Precariat: The New Dangerous Class, Bloomsbury Academic. (=2016, 岡野内正訳『プレカリアート: 不平等社会が生み出す危険な階級』法律文化社.)
- Stiegler, B. (2003) Aimer, s'aimer, nous aimer : Du 11 septembre au 21 avril (=2007, メランベルジェ, G.・メランベルジェ真紀訳『愛すること——「自分」を, そして「われわれ」を』新評論.)
- Stiegler, B. (2004) De la misère symbolique: Tome 1. L'époque hyperindustrielle (=2006, メランベルジェ, G.・メランベルジェ真紀訳『象徴の貧困〈1〉ハイパーインダストリアル時代』新評論.)
- Thurow, Lester.C. (1996) The Future of Capitalism: How Today's Economic Forces Shape Tomorrow's World, William Morrow & Co. (=1996, 山岡洋一・仁平和夫訳『資本主義の未来』阪急コミュニケーションズ.)
- Tolstoy, L. (1877) Анна Каренина, Russkiy Vestnik. (=2018, 木村浩訳『アンナ・カレーニナ〈上〉』

新潮社.)

Turner, F. (1996) Social Work Treatment 4th Edition, Free Press. (=1999, 米本秀仁訳『ソーシャルワーク・トリートメント—相互連結理論アプローチ〈上〉』中央法規出版.)

Turner, F. (1996) Social Work Treatment 4th Edition, Free Press. (=1999, 米本秀仁訳『ソーシャルワーク・トリートメント—相互連結理論アプローチ〈下〉』中央法規出版.)

Young, J. (1999) The Exclusive Society: Social Exclusion, Crime and Difference in Late Modernity, SAGE Publications Ltd. (=2007, 青木秀男・伊藤泰郎・岸政彦・村澤真保呂訳『排除型社会—後期近代における犯罪・雇用・差異』洛北出版.)

Young, J. (2007) The Vertigo of Late Modernity, SAGE Publications Ltd. (=2008, 木下ちがや訳『後期近代の眩暈—排除から過剰包摂へ』青土社.)

Dostoevsky, F. (1866) Crime and Punishment, Russkiy Vestnik. (=1987, 工藤精一郎訳『罪と罰 下』新潮文庫.)

Spezzano, C. (1997) If It Hurts, It Isn't Love: And 365 Other Principles to Heal and Transform Your Relationships, Dacapo Press. (=1997, 大空夢湧子訳『傷つくならば、それは「愛」ではない』ヴォイス.)

Foucault, M. (1976) La volonté de savoir (Histoire de la sexualité, Volume 1), Gallimard. (=1986, 渡辺守章訳『知への意志 (性の歴史)』新潮社.)

Foucault, M. (2004) Cours au College de France. 1978-1979 Naissance de la biopolitique, Gallimard. (=2008, 慎改康之訳『ミシェル・フーコー講義集成〈8〉生政治の誕生 (コレージュ・ド・フランス講義 1978-79)』筑摩書房.)

Foucault, M. (1994) Le Sujet et le pouvoir. in Dits et écrits, t. IV, Gallimard. (=2001, 渥海和久訳『ミシェル・フーコー思考集成 IV』筑摩書房.)

赤川学 (1992) 「<性>の装置としてのポルノグラフィ—性—性の比較社会学・序説」東京大学大学院社会学研究科修士論文.

赤木智弘 (2013) 『若者を見殺しにする国』朝日新聞出版.

浅野智彦 (2013) 『「若者」とは誰か: アイデンティティの30年』河出書房新社.

浅野智彦 (2001) 『自己への物語論的接近—家族療法から社会学へ』勁草書房.

阿部彩 (2011) 『弱者の居場所がない社会—貧困・格差と社会的包摂』講談社.

阿部真大 (2013) 『地方にこもる若者たち 都会と田舎の間に出現した新しい社会』朝日新聞出版.

阿部真大 (2011) 『居場所の社会学—生きづらさを超えて』日本経済新聞出版社.

雨宮処凛 (2010) 『生きさせろ! 難民化する若者たち』筑摩書房.

雨宮処凛 (2009) 『排除の空気に唾を吐け』講談社.

- 雨宮処凛 (2009) 『ロスジェネはこう生きてきた』 平凡社.
- 雨宮処凛・中島岳志・宮本太郎・山口二郎・湯浅誠 (2009) 『脱「貧困」への政治』 岩波書店.
- 飯田泰之・荻上チキ (2013) 『夜の経済学』 扶桑社.
- 稲葉陽二 (2011) 『ソーシャル・キャピタル入門 - 孤立から絆へ』 中央公論新社.
- 岩田正美・西沢晃彦 (2005) 『貧困と社会的排除—福祉社会を蝕むもの』 ミネルヴァ書房.
- 岩田正美 (2007) 『現代の貧困—ワーキングプア/ホームレス/生活保護』 筑摩書房.
- 岩田正美 (2008) 『社会的排除—参加の欠如・不確かな帰属』 有斐閣.
- 岩永理恵・岩田正美 (2018) 「第4章 貧困研究の系譜」 橋木俊詔・宮本太郎・駒村康平ほか編『貧困 (福祉+α)』 ミネルヴァ書房.
- 上野千鶴子・信田さよ子・北原みのり (2013) 『毒婦たち: 東電 OL と木嶋佳苗のあいだ』 河出書房新社.
- 江口英一 (1979) 『現代の「低所得層」〈上〉—「貧困」研究の方法』 未来社.
- 江口英一・川上昌子 (2009) 『日本における貧困世帯の量的把握』 法律文化社.
- 江口英一 (1981) 『社会福祉と貧困』 法律文化社.
- NHK「女性の貧困」取材班 (2014) 『女性たちの貧困 “新たな連鎖”の衝撃』 幻冬舎.
- 江原由美子 (1992) 『フェミニズムの主張』 勁草書房.
- 江原由美子 (1995) 『性の商品化—フェミニズムの主張 〈2〉』 勁草書房.
- 岡田尊司 (2019) 『死に至る病 あなたを蝕む愛着障害の脅威』 光文社.
- 岡田尊司 (2019) 『愛着障害の克服—「愛着アプローチ」で、人は変わる—』 光文社.
- 岡田尊司 (2019) 『愛着アプローチ 医学モデルを超える新しい回復法』 KADOKAWA.
- 小澤千咲 (2014) 『女性性産業従事者における職業に対する態度の形成および変容プロセス—M-GTA および心理検査を用いて—』 国際医療福祉大学平成 26 年度博士論文.
- 小澤千咲・岡野憲一郎「性産業従事者 (commercial sex worker) にみられる心理的傾向および問題—半構造化面接の質的分析と心理検査から—」『こころの健康』 2014 29 (1) 77-86.
- 大橋謙策 (2012) 『社会福祉入門』 放送大学教育振興会.
- 大澤真幸 (2008) 『不可能性の時代』 岩波書店.
- 大澤真幸編著 (2008) 『アキハバラ発—〈00 年代〉への問い』 岩波書店.
- 大沢真理 (2010) 『いまこそ考えたい生活保障のしくみ』 岩波書店.
- 荻上チキ (2012) 「社会の側にある斥力「ワリキリ」女性への調査から」『女たちの 21 世紀』 (72), 11-15.
- 荻上チキ (2012) 『彼女たちの売春 (ワリキリ) 社会からの斥力, 出会い系の引力』 扶桑社.
- 小熊英二 (2009) 『1968 〈上〉 若者たちの叛乱とその背景』 新曜社.
- 小此木啓吾 (2010) 『モラトリアム人間の時代』 中央公論新社.
- 加藤智大 (2012) 『解』 批評社.

- 加藤智大（2013）『解+—秋葉原無差別殺傷事件の意味とそこから見えてくる真の事件対策』批評社.
- 加藤智大（2014）『殺人予防』批評社.
- 加藤智大（2012）『東拘永夜抄』批評社.
- 要友紀子・水島希（2005）『風俗嬢意識調査—126人の職業意識』ポット出版.
- 上岡陽江+ダルク女性ハウス（2010）『生きのびるための犯罪』イースト・プレス.
- 上瀬由美子「性の商品化と職業スティグマ：キャバクラに対する成人男女の意識調査から」GEMC journal：グローバル時代の男女共同参画と多文化共生：Gender equality and multicultural conviviality in the age of globalization (5), 32-46, 2011-03
- 上瀬由美子「職業スティグマと偏見」心理学ワールド(52),17-20, 2011-01
- 川村隆彦（2011）『ソーシャルワーカーの力量を高める理論・アプローチ』中央法規出版.
- 木田元・野家啓一・村田純一・鷺田清一編（1994）『現象学事典』弘文堂.
- 久保紘章・副田あけみ（2005）『ソーシャルワークの実践モデル—心理社会的アプローチからナラティブまで』川島書店.
- 久保田まり（1995）『アタッチメントの研究—内的ワーキング・モデルの形成と発達』川島書店.
- 熊田陽子（2017）『性風俗世界を生きる「おんなのこ」のエスノグラフィ——SM・関係性・「自己」がつむぐもの』明石書店.
- 玄田有史（2005）『仕事のなかの曖昧な不安—揺れる若年の現在』中央公論新社.
- 玄田有史，宇野重規，東大社研編（2009）『希望学1 希望を語る』東京大学出版会.
- 小杉礼子・宮本みち子（2015）『下層化する女性たち：労働と家庭からの排除と貧困』勁草書房.
- 小林純一（1979）『カウンセリング序説—人間学的・実存的アプローチの一試み』金子書房.
- 小林多喜二（1953）『蟹工船・党生活者』新潮社.
- 小松源助訳（2000）『ソーシャルワーク実践におけるエンパワメントその理論と実際の論考集』相川書房.
- 児美川孝一郎（2013）『キャリア教育のウソ』筑摩書房.
- 今野晴貴（2012）『ブラック企業日本を食いつぶす妖怪』文藝春秋.
- 斎藤学（1998）『インナーマザーは支配する—侵入する「お母さん」は危ない』新講社.
- 斎藤学（2001）『家族の闇をさぐる—現代の親子関係』小学館.
- 斎藤塩子・布施絵里子「「夜の世界」の労働問題 キャバクラユニオンの相談事例から」女たちの21世紀(72), 6-10, 2012-12
- 酒井あゆみ（1997）『禁断の25時』ザマサダ.
- 坂井素思，岩永雅也（2011）『格差社会と新自由主義』放送大学教育振興会.
- 坂上香（2012）『ライフアーズ 罪に向きあう』みすず書房.
- 坂爪真吾（2018）『「身体を売る彼女たち」の事情——自立と依存の性風俗』筑摩書房.

- 坂爪真吾 (2017)『見えない買春の現場「JK ビジネス」のリアル』文芸春秋.
- 坂爪真吾 (2018)『パパ活の社会学 援助交際、愛人契約と何が違う?』光文社.
- 佐藤嘉幸 (2009)『新自由主義と権力—フーコーから現在性の哲学へ』人文書院.
- 佐野真一 (2003)『東電 OL 殺人事件』新潮社.
- 佐野真一 (2003)『東電 OL 症候群』新潮社.
- 志賀信夫 (2016)『貧困理論の再検討：相対的貧困から社会的排除へ』法律文化社.
- 渋谷望 (2005)『魂の労働—ネオリベリズムの権力論』青土社.
- 鈴木謙介 (2008)『サブカル・ニッポンの新自由主義—既得権批判が若者を追い込む』筑摩書房.
- 鈴木大介 (2010)『家のない少女たち 10 代家出少女 18 人の壮絶な性と生』宝島社.
- 鈴木大介 (2012)『援デリの少女たち』宝島社.
- 鈴木大介 (2010)『出会い系のシングルマザーたち—欲望と貧困のはざままで』朝日新聞出版.
- 鈴木大介 (2015)『最貧困シングルマザー』朝日新聞出版.
- 鈴木大介, 中村淳彦 (2016)『貧困とセックス』イースト・プレス.
- 鈴木大介 (2012)『フツーじゃない彼女.』宝島社.
- 須藤八千代, 宮本節子 (2013)『婦人保護施設と売春・貧困・DV 問題—女性支援の変遷と新たな展開—』明石書店.
- SWASH (2018)『セックスワーク・スタディーズ』日本評論社.
- 宋敏鎬 (2015)「周術期における心臓血管外科医のストレス対処反応に関する調査および病理的力動的解析」『総合病院精神医学』27 巻 (2015) 1 号
- 竹内洋 (1995)『日本のメリトクラシー—構造と心性』東京大学出版会.
- 高野悦子 (1979)『二十歳の原点』新潮社.
- 高橋亜美「児童養護施設退所後に風俗で働く女たち」女たちの 21 世紀(72),18-21, 2012-12
- 橘木俊詔 (2012)『朝日おとなの学びなおし 経済学 課題解明の経済学史』朝日新聞出版.
- 橘木俊詔, 浦川邦夫 (2006)『日本の貧困研究』東京大学出版会.
- 橘ジュン (2010)『漂流少女 夜の街に居場所を求めて』太郎次郎社エディタス.
- 太宰治 (2019)『人間失格』新潮社.
- 土井隆義 (2009)『友だち地獄—「空気を読む」世代のサバイバル』筑摩書房.
- 土井隆義 (2009)『キャラ化する/される子どもたち—排除型社会における新たな人間像』岩波書店.
- 仲正昌樹 (2006)『集中講義!日本の現代思想—ポストモダンとは何だったのか』日本放送出版協会.
- 仲正昌樹 (2018)『ポストモダン・ニヒリズム』作品社.
- 中村淳彦 (2016)『図解日本の性風俗』メディアックス.
- 中村淳彦 (2018)『ハタチになったら死のうと思っていた AV 女優 19 人の告白』ミリオン出版.

- 中村惇彦（2014）『日本の風俗嬢』新潮社.
- 中村惇彦（2019）『東京貧困女子. 一彼女たちはなぜ躓いたのか』東洋経済新報社.
- 中原中也（1990）『中原中也詩集』岩波書店.
- 永田カビ（2017）『さびしすぎてレズ風俗に行きましたレボ』イースト・プレス.
- 永山則夫（1990）『無知の涙』河出書房新社.
- 永山則夫（1998）『人民をわすれたカナリアたち 続・無知の涙』河出書房新社.
- 西村貴直（2013）『貧困をどのように捉えるか—H.ガンズの貧困論』春風社.
- 仁藤夢乃（2013）『難民高校生 — 絶望社会を生き抜く「私たち」のリアル』英治出版.
- 仁藤夢乃（2014）『女子高生の裏社会 「関係性の貧困」に生きる少女たち』光文社.
- 橋本健二（2018）『アンダークラス』筑摩書房.
- 長谷川俊雄, 中山正雄（2014）『実践から学ぶ社会福祉』保育出版社.
- 浜渦辰二（2005）『「ケアの人間学」入門』知泉書館.
- 林千代（2004）『女性福祉とは何か—その必要性と提言』ミネルヴァ書房.
- 林千代（1995）『現代の売買春と女性一人権としての婦人保護事業をもとめて』ドメス出版.
- 東浩紀（2000）『動物化するポストモダン オタクから見た日本社会』講談社.
- 姫乃たま（2017）『職業としての地下アイドル』朝日新聞出版.
- 藤田和恵（2012）『ルポ 労働格差とポピュリズム—大阪で起きていること』岩波書店.
- 藤田孝典（2015）『下流老人 一億総老後崩壊の衝撃』朝日新聞出版.
- 藤野寛（2016）『「承認」の哲学——他者に認められるとはどういうことか—』青土社.
- 古市憲寿（2011）『絶望の国の幸福な若者たち』講談社.
- 古市憲寿, 本田由紀（2010）『希望難民ご一行様 ピースボートと「承認の共同体」幻想』光文社.
- 古荘純一（2009）『日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか』光文社.
- 本田由紀（2009）『教育の職業的意義—若者, 学校, 社会をつなぐ』筑摩書房.
- 本田由紀（2011）『軋む社会—教育・仕事・若者の現在』河出書房新社.
- 丸山里美（2014）『女性ホームレスとして生きる——貧困と排除の社会学』世界思想社.
- 三浦展（2008）『女はなぜキャバクラ嬢になりたいのか?』光文社新書.
- 三浦展（2010）『ニッポン若者論 よさこい, キャバクラ, 地元志向』筑摩書房.
- 水嶋かおりん（2015）『風俗で働いたら人生変わった www』コアマガジン.
- 見田宗介（2008）『まなざしの地獄』河出書房新社.
- 宮田雄吾（2014）『「生存者」と呼ばれる子どもたち 児童虐待を生き抜いて』, KADOKAWA.
- 宮台真司（2000）『まぼろしの郊外—成熟社会を生きる若者たちの行方』.
- 宮台真司・神保哲生（2009）『格差社会という不幸(神保・宮台マル激トーク・オン・デマンドVII)』春秋社.

宮台真司（2018）『社会という荒野を生きる.』ベスト新書.

宮本節子（2016）『AV 出演を強要された彼女たち』筑摩書房.

宮本みち子（2012）『若者が無縁化する：仕事・福祉・コミュニティでつなぐ』筑摩書房.

村澤和多里，山尾貴則，村澤真保呂（2012）『ポストモラトリウム時代の若者たち（社会的排除を超えて）』世界思想社.

元少年A（2016）『絶歌』太田出版.

本山央子・鈴木水南子・あきら・要友紀子「座談会 風俗で働く女性への差別・スティグマ」女たちの 21 世紀 (72), 40-47, 2012-12

村上龍（2000）『希望の国のエクソダス』文藝春秋.

諸富祥彦（2013）『NHK100 分 de 名著 フランクル「夜と霧」』NHK 出版.

山田昌弘（2007）『希望格差社会—「負け組」の絶望感が日本を引き裂く』筑摩書房.

山竹伸二（2011）『「認められたい」の正体—承認不安の時代』講談社.

山野良一（2008）『子どもの最貧国・日本』光文社.

湯浅誠（2008）『反貧困「すべり台社会」からの脱出』岩波書店.

鷺田清一（1997）『現象学の視線』講談社.

渡辺三枝子（2007）『新版 キャリアの心理学—キャリア支援への発達のアプローチ』ナカニシヤ出版.

行ごとのコーディング (line by line coding)

- | | |
|-------------------|----------------|
| 1 家族の中の秘密 | 59 夜働く女の子の多様性 |
| 2 家族の干渉 | 60 女の子への怒り |
| 3 家族の暗黙の承認 | 61 女の子への気遣い |
| 4 家族に対する嘘 | 62 女の子への理解 |
| 5 家族に対する配慮 | 63 女の子からの嫉妬 |
| 6 家族との和解 | 64 女の子からの気遣い |
| 7 家族との不和 | 65 友人からの理解 |
| 8 家族への恭順 | 66 友人からの助言 |
| 9 家族への反抗 | 67 友人からの反対 |
| 10 家族への感謝 | 68 女の子に対する敬意 |
| 11 家族からの束縛 | 69 女の子に対する共感 |
| 12 家族からの反対 | 70 女の子に対する侮蔑 |
| 13 家族からの助言 | 71 女の子に対する恐怖 |
| 14 家族からの叱責 | 72 女の子の裏切り |
| 15 家族からの理解 | 73 自暴自棄な付き合い |
| 16 家族からの自立の試み | 74 障害を持つ女の子 |
| 17 家族に対する申し訳なさ | 75 場違いな存在 |
| 18 家族に対する愛情 | 76 男の子という方が楽 |
| 19 家族に対する不満 | 77 友人に対する感謝 |
| 20 家族内で不満を言う | 78 友人に対する敬意 |
| 21 家族内での葛藤 | 79 友人に対する配慮 |
| 22 家族に障害者がいる | 80 友人が夜働いている |
| 23 恋人による自己の考え方の変化 | 81 友人と客のトラブル |
| 24 恋人に対する嘘 | 82 一見優しい友人 |
| 25 恋人に対する不信感 | 83 同じ境遇の友人 |
| 26 恋人に対する複雑な感情 | 84 良くない交友関係 |
| 27 恋人からの理解 | 85 具合の悪い対人関係 |
| 28 恋人からの承認 | 86 店の指示に従う |
| 29 恋人からの嫉妬 | 87 店の裏切りとショック |
| 30 恋人からの侮蔑 | 88 店による管理 |
| 31 恋人からの反対 | 89 店からの承認 |
| 32 恋人からの自立の試み | 90 店からの恫喝 |
| 33 恋人からの束縛 | 91 店との駆け引き |
| 34 恋人からのDV | 92 店とのトラブル |
| 35 恋人からの受容 | 93 店との和解 |
| 36 恋人からの解放 | 94 店に対する不信感 |
| 37 恋人からの愛情 | 95 店に対する信頼感 |
| 38 恋人との出会い | 96 店に対する理解 |
| 39 恋人とのすれ違い | 97 店に対する配慮 |
| 40 恋人との破局 | 98 店に対する申し訳なさ |
| 41 恋人とのトラブル | 99 店に対する意思表示 |
| 42 恋人との和解 | 100 客に対する意思表示 |
| 43 恋人と趣味を共有する | 101 客に対する無視 |
| 44 恋人と客のトラブル | 102 客に対する申し訳なさ |
| 45 恋人と店のトラブル | 103 客に対する恐怖 |
| 46 恋人の将来に対する希望 | 104 客に対する共感 |
| 47 恋人の指示に従う | 105 客に対する諦め |
| 48 恋人に対する感謝 | 106 客に対する嘘 |
| 49 恋人への依存 | 107 客からの承認 |
| 50 恋人への反抗 | 108 客からの裏切り |
| 51 恋人に対する愛情 | 109 客からの告白 |
| 52 恋人に対する申し訳なさ | 110 客からの嫉妬 |
| 53 恋人に対する嘘 | 111 客への感謝 |
| 54 社会的条件の悪い恋人 | 112 客への理解 |
| 55 同じ夜の住人としての恋人 | 113 客への配慮 |
| 56 微妙な関係の恋人 | 114 客への怒り |
| 57 女の子同士の友情 | 115 客への信頼感 |
| 58 女の子同士の静い | 116 客への不信感 |

- 117 同じ境遇の女の子の存在
- 118 客への不快感
- 119 客への安心感
- 120 客との恋愛関係
- 121 客との私的な付き合い
- 122 客とのメールのやりとり
- 123 客と店外デート
- 124 気の合う客との楽しい関係
- 125 客としての恋人
- 126 客に温もりを求める
- 127 客からママになることを勧められる
- 128 客による自己の考え方の変化
- 129 客と恋人は違う
- 130 店員への感謝
- 131 店員への信頼感
- 132 店員への不信感
- 133 店員とのトラブル
- 134 店員との恋愛関係
- 135 店員からの承認
- 136 先生からの理解
- 137 先生に対する不信感
- 138 先生への怒り
- 139 昼の仕事で頑張っている人への敬意
- 140 未来に対する無計画
- 141 未来について語り合う
- 142 未来に希望を持ってない
- 143 実現しなかった未来
- 144 モラトリアムの維持
- 145 職業選択からの逃避
- 146 やりたいことが見つからない
- 147 働く意味が分からない
- 148 現実逃避
- 149 結婚を機に水揚げ
- 150 結婚を機に働き方を変える
- 151 将来の失敗の予測
- 152 将来の苦しみの予測
- 153 漠然とした将来
- 154 将来に対する不安
- 155 結婚願望
- 156 結婚と幸せに対する願望
- 157 一応の水揚げ時期の設定
- 158 働く期間を明確に区切る
- 159 夜を続ける必要性の存在
- 160 夜を続ける必要性の消失
- 161 受動的に他者の意見に従う
- 162 友達はやりたいことが見えている
- 163 目標の設定
- 164 目的の達成
- 165 復学に対する意欲
- 166 今の生活を犠牲にしたくない
- 167 他の子よりもちょっと良いものを持ちたい
- 168 深く考えずに昼を選択する
- 169 深く考えずに夜を選択する
- 170 暇つぶし
- 171 ありきたりな幸せでの満足
- 172 生活水準が下がることに対する不満
- 173 今お金が無いことに対する不安
- 174 ダラダラと夜の仕事を続ける
- 175 ずっと夜を続ける
- 176 けじめをつけたい
- 177 昼職のために何か手に職をつける
- 178 昼職への幻滅
- 179 昼職での葛藤
- 180 昼職での不満足感
- 181 昼職のお給料が不満
- 182 昼職の代わりとしての夜職
- 183 昼職をしていることの誇り
- 184 昼職を直ぐに退職
- 185 昼職に対する恐怖感
- 186 昼職と夜職の掛け持ち
- 187 昼の就業に備える考え
- 188 昼の就業への願望
- 189 昼の定職で長く働く
- 190 夜の経験を昼に活かす
- 191 昼の職場からの理解
- 192 昼の職場に対する不満
- 193 自分を持っている人への憧れ
- 194 美容業への憧れ
- 195 経済的な収入の妥協
- 196 経済的な満足感
- 197 拍子抜けの感覚
- 198 売上を競い合わない
- 199 なるべく敵を作らない
- 200 同僚のプライベートに立ち入らない
- 201 仕事とプライベートを割り切る
- 202 あまり深入りはしない
- 203 自分をごまかす
- 204 接客で演技をする
- 205 接客で自分を隠さない
- 206 チーママとして店を管理する
- 207 成績を競い合う
- 208 同僚を相手にしない
- 209 自分から人と距離を置く
- 210 自分から壁を作る
- 211 客を上手くあしらう
- 212 自分の身を守る術
- 213 お客さんを褒める技術
- 214 営業のテクニック
- 215 接客のテクニック
- 216 接客に対する侮辱
- 217 プロとしての心構え
- 218 ナンバーワンになることの諦め
- 219 ナンバーワンになることへの憧れ
- 220 連絡を取ることの煩わしさ
- 221 本来の自分自身とのギャップ
- 222 リスクのある職場
- 223 楽しくは無い職場
- 224 楽しい職場
- 225 楽な職場
- 226 嫌では無い職場
- 227 苦手な職場
- 228 不愉快な職場
- 229 やりにくい職場
- 230 忙しくは無い職場
- 231 週末だけの仕事
- 232 嫌な客からの逃避
- 233 社会勉強の場としての夜職
- 234 店のシステムに対して無頓着
- 235 キャバクラとデリヘルの良い点・悪い点
- 236 キャバクラとデリヘルの違い

- 237 天職の自覚
- 238 自分の外見への自信
- 239 自分の過去を後悔しない
- 240 自分に対する誇り
- 241 自分が家計を支える
- 242 強い自己肯定感
- 243 成績に対する嫉妬
- 244 夜の仕事に対する熱意
- 245 夜の仕事に対する関心
- 246 歪んだ自尊感情
- 247 風俗雑誌に載る
- 248 達者な話術への自信
- 249 周囲の視線は気にしない
- 250 他者と比較をしない
- 251 学業に関する優越感
- 252 夜働くことで得られる優越感
- 253 女性としての魅力の証明
- 254 お金を稼ぐことで得られる自己肯定感
- 255 性的な視線に対して嫌悪感を抱かない
- 256 適切な損得勘定
- 257 自己抑制
- 258 勉強は嫌いではない
- 259 夜の金銭的な魅力
- 260 お金があると心に余裕もできる
- 261 欲しいものを手に入れる
- 262 金銭的目的以外の動機
- 263 やりがいを感じる
- 264 充実した毎日
- 265 会話の楽しさ
- 266 出会いの場としての夜
- 267 夜の世界で学んだこと
- 268 自覚している人としての成長
- 269 効率の良い仕事
- 270 生きがいとしての仕事
- 271 融通が利く仕事
- 272 特別なスキルを必要としない仕事
- 273 嫌なことに対する当然の対価
- 274 フロー体験
- 275 フロー体験の終了
- 276 交流の回復
- 277 人を見る目が養われる
- 278 華やかな夜の世界への憧れ
- 279 ただでお酒が飲めるメリット
- 280 お金のありがたみを理解する
- 281 無職でいるよりは風俗でも働いたほうがいい
- 282 無職でいるよりは夜でも働いたほうがいい
- 283 お金のために割り切って働く
- 284 生活のための仕事
- 285 落ち着いた生活
- 286 生きがいの無い日常生活
- 287 平凡な日常生活
- 288 生活費を切り詰める
- 289 享乐的なライフスタイル
- 290 夜型のライフスタイル
- 291 昼型のライフスタイル
- 292 計画性の無い金銭感覚
- 293 週末だけ夜働く
- 294 お金以外に得る物は無い
- 295 夜の仕事に意味を見出せない
- 296 夜の仕事は昼の仕事に繋がらない
- 297 夜の仕事で上手く立ち回れない
- 298 夜の仕事に対する自問自答
- 299 夜の仕事での負担感
- 300 将来的に魅力のない仕事
- 301 夜職に対する醒めた考え
- 302 実存的な苦しみは夜の仕事では埋まらない
- 303 昼職の友人とのすれ違い
- 304 知り合いに会う気まずさ
- 305 職場での孤立
- 306 希薄な友人関係
- 307 単なる同僚の集まり
- 308 職場での狭い交友関係
- 309 表面上の居心地の良さ
- 310 対人関係に対する恐怖心
- 311 セクハラに対する憤慨
- 312 身の危険を感じる
- 313 ストーカー被害
- 314 性的な視線に対する嫌悪感
- 315 体を触られることの不快感
- 316 プライベートに立ち入って来られる不快感
- 317 連絡先を交換することの不快感
- 318 リスクの高い店で働く
- 319 違法な店で働く
- 320 罰金制に対する不満
- 321 罰金の免除
- 322 一、二時間の同伴出勤
- 323 身繕いの金銭的負担
- 324 契約書による縛り
- 325 禁止事項への違反行為
- 326 待遇に対する不満
- 327 不安定な雇用状態
- 328 最初は楽しかった仕事が悪痛になって来る
- 329 自由な時間が欲しい
- 330 家に帰ると一気に疲れる
- 331 世間に対して無知になる
- 332 誤解を招きやすい
- 333 目立たないように辞める
- 334 辞めたくても辞められない状況
- 335 汚い世界への諦め
- 336 汚い大人への諦め
- 337 汚い世界への幻滅
- 338 男性に対する幻滅
- 339 何かに縛られることからの逃避
- 340 あまり得る物は無い
- 341 会話が苦手
- 342 ノルマの要求
- 343 仕事に対するペナルティ
- 344 店でのいじめ体験
- 345 ネット掲示板での嫌がらせ
- 346 愛人に甘んじる
- 347 不倫関係
- 348 不倫関係の隠匿
- 349 不倫関係の露見
- 350 遊びの男女関係
- 351 自分を守るための虚勢
- 352 病気になるリスク

- | | | | |
|-----|--------------------|-----|-------------------|
| 353 | お金の感覚が麻痺する | 411 | 承認への喜び |
| 354 | 否定的な自己概念 | 412 | 居場所の無さ |
| 355 | 倫理観の欠如 | 413 | 社会に置いて行かれる感覚 |
| 356 | 自分を否定されることに対する恐怖 | 414 | 居場所の喪失 |
| 357 | 性的に不用意 | 415 | 拠り所の無さ |
| 358 | 人生に対するやぶれかぶれな思い | 416 | 承認欲求 |
| 359 | 他者と比較して劣等感を抱く | 417 | 新しい居場所の発見 |
| 360 | 容姿に対する劣等感 | 418 | 避難所としての居場所 |
| 361 | 外見的美しさに対するとらわれ | 419 | 大切な居場所 |
| 362 | 家族も水商売 | 420 | 交流の回避 |
| 363 | 自罰的傾向 | 421 | 人生の転換点 |
| 364 | 実存的な苦しみ | 422 | 自由を求める |
| 365 | 孤独に耐えられない | 423 | 孤独を埋めたい |
| 366 | 自分を許せない | 424 | 寂しさを埋められる |
| 367 | 自分の弱さの自覚 | 425 | 居心地の良さを感じる |
| 368 | 居眠りをする | 426 | 気持ちを紛らわせる |
| 369 | 貯金ができない | 427 | 癒し |
| 370 | 朝起きられない | 428 | 敵も多いけど、味方も多い |
| 371 | こらえ性の無さ | 429 | 決してマイナスだけの世界ではない |
| 372 | やる気になれない | 430 | 夜の世界は結局自分次第 |
| 373 | 毎日きちんと働けない | 431 | 夜の世界でも成功した人生を送れる |
| 374 | 面倒臭い | 432 | 夜の世界に戻りたいと思う |
| 375 | 楽な仕事に流れる | 433 | 夜の世界から離れたと思う |
| 376 | 他人の幸せを羨む | 434 | 夜に人生を懸ける |
| 377 | 自分の能力に対する自信の無さ | 435 | 夜の仕事をしたことは後悔しない |
| 378 | 自分に対する情けない思い | 436 | 夜の仕事は人生において意味があった |
| 379 | 自己嫌悪 | 437 | 夜の世界に対する理解と共感 |
| 380 | 同族嫌悪 | 438 | 辞めた後も店と連絡を取り合う |
| 381 | 学業に対する拒否感 | 439 | 夜の仕事も昼の仕事も大切 |
| 382 | 学歴に対する劣等感 | 440 | 恥の意識の欠落 |
| 383 | 勉強で遅れを取る | 441 | 世間体へのとらわれ |
| 384 | 勉強だけで精一杯 | 442 | 拒絶の予測 |
| 385 | 今を生きるだけで精一杯 | 443 | 他人が気付かないようにする |
| 386 | 昼間働いている友人達に対する負い目 | 444 | 他人の観方を操作する |
| 387 | 家庭を築いている友人達に対する負い目 | 445 | 周囲を混乱させない振舞い |
| 388 | 意味のないスタート | 446 | 周囲に対する配慮 |
| 389 | 自分自信が持っているスティグマ感 | 447 | 家族を持っていることが夜への足枷 |
| 390 | 自分自身のスティグマ感の払拭 | 448 | 年齢による足枷 |
| 391 | 払拭できない自分自身のスティグマ感 | 449 | 昼の仕事による足枷 |
| 392 | 仕事に対する恥の意識 | 450 | 夜職でも派手では無いことが救い |
| 393 | 風俗業に対する偏見 | 451 | 自分とは違う別の世界 |
| 394 | ずっと夜を続けることへの抵抗感 | 452 | 年齢をごまかして働く |
| 395 | 夜職への楽なイメージ | 453 | アルバイト体験 |
| 396 | 夜職への楽しそうなイメージ | 454 | 事情の説明 |
| 397 | 夜職に対する怖いイメージ | 455 | 夜の仕事を転々とする |
| 398 | 自分の夜のイメージとのギャップ | 456 | 昼の仕事を転々とする |
| 399 | スティグマを回避する | 457 | 軽い気持ちでの入店 |
| 400 | スティグマの実感 | 458 | 入店と退店を繰り返す |
| 401 | スティグマの欠如 | 459 | 自分から夜の世界に入る |
| 402 | パッシング | 460 | 友達と一緒に夜の世界に入る |
| 403 | パッシングの告白 | 461 | 友達が次々夜の世界に入る |
| 404 | パッシングが不必要 | 462 | 友達の紹介で夜の世界に入る |
| 405 | パッシングの対象を選ぶ | 463 | 他人の紹介で夜の世界に入る |
| 406 | 劇化 | 464 | 自分なりのストレス解消法 |
| 407 | 擬装 | 465 | ホストクラブで遊ぶ |
| 408 | 周囲への露見 | 466 | ストレスの蓄積 |
| 409 | 露見の回避 | 467 | 触れられない過去 |
| 410 | 恥の意識の克服 | 468 | 無茶苦茶な仕事管理 |

469 無理な仕事
 470 お小遣いを貰えない
 471 人工中絶の経験
 472 望まない妊娠
 473 妊娠で退店
 474 キャバクラを直ぐに退店
 475 孤独
 476 SNSで友人が遊んでいるのを見ると辛い
 477 ストレスからの解放
 478 就職活動の失敗
 479 志望校に合格する
 480 学校生活からの逃避
 481 学校を辞める
 482 学校を変える
 483 不登校
 484 不本意な休養
 485 周囲に対する失望
 486 曖昧な記憶体験
 487 精神保健医療機関の受診
 488 精神科医の診断
 489 受診拒否
 490 情緒不安定
 491 情緒的安定
 492 身体的不調
 493 精神的不調
 494 精神的不調からの回復
 495 コミュニケーション不全
 496 自傷行為
 497 自傷行為を知識として知る
 498 気晴らしとしての自傷行為
 499 自傷行為の提示
 500 自虐的な感情
 501 希死念慮
 502 大量服薬
 503 貧困
 504 絶望感
 505 挫折体験
 506 セクハラを受ける
 507 劣悪な生い立ち
 508 家族の自殺
 509 アルコールへの依存
 510 家出状態
 511 ホームシックで家に戻る
 512 過去の受容
 513 過去の否定
 514 過去に戻ることの恐怖
 515 過去に対する反動
 516 過去に対する後悔
 517 過去に対する開き直り
 518 過去に対する複雑な思い
 519 建設的でない選択
 520 他人が決めた人生
 521 波瀾万丈な人生
 522 風俗へ入店
 523 逸脱体験
 524 違法行為
 525 出勤拒否
 526 店とのコンタクト

	行ごとのコーディング総数
合計	526

インビボ・コード(in vivo codes)

キャバクラ・風俗共通			
	1	看板	看板としての役割を果たす、人気がある女の子。
	2	レギュラー	ほぼ毎日出勤している女の子で、店の中心の子達。
	3	No.1	お店の中で売上げがトップの子。大抵敬意をもって呼ばれる。
	4	古株	長く業界にいる女の子。
	5	在籍	お店に登録している女の子。出勤せずに在籍だけの子もいる。
	6	新規さん	初めて自分を指名してくれるお客さん。余りよく思われない。
	7	常連さん	常に自分を指名してくれるお客さんで、仲が良く、落ち着く存在。
	8	本業	他に掛け持ちをしている場合、中心として活動する仕事。
	9	系列	同じオーナーが運営している店のグループ。
	10	夜(夜職)	水商売の仕事。風俗は「風」とも言うが、夜でも通じる。
	11	昼(昼職)	一般的な昼の仕事。正社員とは必ずしも限らない。
	12	指名	自分を直接選んで貰うことで、指名料が店と女の子に入る。
	13	体験	お試しで入店すること。実際入店しなくても、日当だけは出る。
	14	(出勤)回数	お店に出勤する回数。「回数出てるから」のように用いる。
	15	引退	仕事から足を洗うこと。出戻りすることも多々ある。
	16	プライベート	仕事とは関係がない私的な時間。
	17	店外	お店の外でお客さんと会うこと。原則禁止されている。
	18	バレる	自分がその仕事をしていることが親密な人に知られること。
	19	落ちる	気持ちが落ち込んで、苦しむこと。
	20	病む	精神的に、酷い状態になること。
	21	潰れる	落ちたり、病んだりして、何もできなくなること。
小計	21		
キャバクラのみ			
	1	疑似恋愛	お客さんとまるで恋人のように振る舞うこと。メール等も含む。
	2	営業	お店に来てもらうために、メールや電話で誘うこと。
	3	アフター	仕事が終わった後に、無休でお客さんに付き合う残業サービス。
	4	同伴	仕事が始まる前にお客さんと飲食し、そのまま店に直行すること。
	5	ヘアメイク	仕事の前に髪の毛を整えたり、メイクをしたりすること。
	6	水揚げ	水商売から足を完全に洗うこと。
	7	夜一本	夜の仕事に専念すること。
	8	黒服さん	女の子を守ったり、客を案内したりする店員さん。
	9	チーママ(ママ)	スナックで女の子の管理を任されている女の子のリーダー。
	10	雇われ	スナックでママの下で働くか、キャバクラでキャストとして働くこと。
	11	罰金	お店に迷惑をかけた時(遅刻・早退・欠勤等)払うお金。
	12	バチバチ	女の子同士の諍い。客を奪い合ったりすることから生じる。
	13	派閥	お店の中でグループができて、女の子達が分かれること。
小計	13		
風俗のみ			
	1	本番	性器の挿入を伴う性行為
	2	プレイ	性的なサービス(フェラチオ・手コキ・スマタなど)
	3	ファイナル	女の子が引退する最後の週または月のお別れイベント
総計	32		

焦点化のためのコード化(focused codeing)

①家族関係の諸問題

- 1 家族の中の秘密
- 2 家族の干渉
- 3 家族の暗黙の承認
- 4 家族に対する嘘
- 5 家族に対する配慮
- 6 家族との和解
- 7 家族との不和
- 8 家族への恭順
- 9 家族への反抗
- 10 家族への感謝
- 11 家族からの束縛
- 12 家族からの反対
- 13 家族からの助言
- 14 家族からの叱責
- 15 家族からの理解
- 16 家族からの自立の試み
- 17 家族に対する申し訳なさ
- 18 家族に対する愛情
- 19 家族に対する不満
- 20 家族内で不満を言う
- 21 家族内での葛藤
- 22 家族に障害者がいる
- 3 夜働く女の子の多様性
- 4 女の子への怒り
- 5 女の子への気遣い
- 6 女の子への理解
- 7 女の子からの嫉妬
- 8 女の子からの気遣い
- 9 友人からの理解
- 10 友人からの助言
- 11 友人からの反対
- 12 女の子に対する敬意
- 13 女の子に対する共感
- 14 女の子に対する侮蔑
- 15 女の子に対する恐怖
- 16 女の子の裏切り
- 17 自暴自棄な付き合い
- 18 障害を持つ女の子
- 19 場違いな存在
- 20 同じ境遇の女の子の存在
- 21 男の子という方が楽
- 22 友人に対する感謝
- 23 友人に対する敬意
- 24 友人に対する配慮
- 25 友人が夜働いている
- 26 友人と客のトラブル
- 27 一見優しい友人
- 28 同じ境遇の友人
- 29 良くない交友関係
- 30 具合の悪い対人関係

②恋人関係の諸問題

- 1 恋人による自己の考え方の変化
- 2 恋人に対する嘘
- 3 恋人に対する不信任
- 4 恋人に対する複雑な感情
- 5 恋人からの理解
- 6 恋人からの承認
- 7 恋人からの嫉妬
- 8 恋人からの侮蔑
- 9 恋人からの反対
- 10 恋人からの自立の試み
- 11 恋人からの束縛
- 12 恋人からのDV
- 13 恋人からの受容
- 14 恋人からの解放
- 15 恋人からの愛情
- 16 恋人との出会い
- 17 恋人とのすれ違い
- 18 恋人との破局
- 19 恋人とのトラブル
- 20 恋人との和解
- 21 恋人と趣味を共有する
- 22 恋人と客のトラブル
- 23 恋人と店のトラブル
- 24 恋人の将来に対する希望
- 25 恋人の指示に従う
- 26 恋人に対する感謝
- 27 恋人への依存
- 28 恋人への反抗
- 29 恋人に対する愛情
- 30 恋人に対する申し訳なさ
- 31 恋人に対する嘘
- 32 社会的条件の悪い恋人
- 33 同じ夜の住人としての恋人
- 34 微妙な関係の恋人
- 1 店の指示に従う
- 2 店の裏切りとショック
- 3 店による管理
- 4 店からの承認
- 5 店からの恫喝
- 6 店との駆け引き
- 7 店とのトラブル
- 8 店との和解
- 9 店に対する不信任
- 10 店に対する信頼感
- 11 店に対する理解
- 12 店に対する配慮
- 13 店に対する申し訳なさ
- 14 店に対する意思表示

④店関係の諸問題

⑤客関係の諸問題

- 1 客に対する意思表示
- 2 客に対する無視
- 3 客に対する申し訳なさ
- 4 客に対する恐怖
- 5 客に対する共感
- 6 客に対する諦め
- 7 客に対する嘘
- 8 客からの承認
- 9 客からの裏切り
- 10 客からの告白
- 11 客からの嫉妬
- 12 客への感謝
- 13 客への理解
- 14 客への配慮
- 15 客への怒り
- 16 客への信頼感
- 1 女の子同士の友情
- 2 女の子同士の諍い

- 17 客への不快感
- 18 客への不快感
- 19 客への安心感
- 20 客との恋愛関係
- 21 客との私的な付き合い
- 22 客とのメールのやりとり
- 23 客と店外デート
- 24 気の合う客との楽しい関係
- 25 客としての恋人
- 26 客に温もりを求める
- 27 客からママになることを勧められる
- 28 客による自己の考え方の変化
- 29 客と恋人は違う

⑥店員との関係の諸問題

- 1 店員への感謝
- 2 店員への信頼感
- 3 店員への不快感
- 4 店員とのトラブル
- 5 店員との恋愛関係
- 6 店員からの承認

⑦の人間関係の諸問題

- 1 先生からの理解
- 2 先生に対する不快感

⑨夜職に関する事

- 1 拍子抜けの感覚
- 2 売上を競い合わない
- 3 なるべく敵を作らない
- 4 同僚のプライベートに立ち入らない
- 5 仕事とプライベートを割り切る
- 6 あまり深入りはしない
- 7 自分をごまかす
- 8 接客で演技をする
- 9 接客で自分を隠さない
- 10 チーママとして店を管理する
- 11 成績を競い合う
- 12 同僚を相手にしない
- 13 自分から人と距離を置く
- 14 自分から壁を作る
- 15 客を上手くあしらう
- 16 自分の身を守る術
- 17 お客さんを褒める技術
- 18 営業のテクニック
- 19 接客のテクニック
- 20 接客に対する侮辱
- 21 プロとしての心構え
- 22 ナンバーワンになることの諦め
- 23 ナンバーワンになることへの憧れ
- 24 連絡を取ることに煩わしさ
- 25 本来の自分自身とのギャップ
- 26 リスクのある職場
- 27 楽しくは無い職場
- 28 楽しい職場
- 29 楽な職場
- 30 嫌では無い職場
- 31 苦手な職場
- 32 不愉快な職場
- 33 やりにくい職場
- 34 忙しくは無い職場
- 35 週末だけの仕事
- 36 嫌な客からの逃避
- 37 社会勉強の場としての夜職
- 38 店のシステムに対して無頓着
- 39 キャバクラとデリヘルの良い点・悪い点
- 40 キャバクラとデリヘルの違い

- 3 先生への怒り
- 4 昼の仕事で頑張っている人への敬意

⑧昼職に関する事

- 1 昼職のために何か手に職をつける
- 2 昼職への幻滅
- 3 昼職での葛藤
- 4 昼職での不満足感
- 5 昼職のお給料が不満
- 6 昼職の代わりとしての夜職
- 7 昼職をしていることの誇り
- 8 昼職を直ぐに退職
- 9 昼職に対する恐怖感
- 10 昼職と夜職の掛け持ち
- 11 昼の就業に備える考え
- 12 昼の就業への願望
- 13 昼の定職で長く働く
- 14 夜の経験を昼に活かす
- 15 昼の職場からの理解
- 16 昼の職場に対する不満
- 17 自分を持っている人への憧れ
- 18 美容業への憧れ
- 19 経済的な収入の妥協
- 20 経済的な満足感

⑩未来に対する考え方等

- 1 未来に対する無計画
- 2 未来について語り合う
- 3 未来に希望を持ってない
- 4 実現しなかった未来
- 5 モラトリアムの維持
- 6 職業選択からの逃避
- 7 やりたいことが見つからない
- 8 働く意味が分からない
- 9 現実逃避
- 10 結婚を機に水揚げ
- 11 結婚を機に働き方を変える
- 12 将来の失敗の予測
- 13 将来の苦しみの予測
- 14 漠然とした将来
- 15 将来に対する不安
- 16 結婚願望
- 17 結婚と幸せに対する願望
- 18 一応の水揚げ時期の設定
- 19 働く期間を明確に区切る
- 20 夜を続ける必要性の存在
- 21 夜を続ける必要性の消失
- 22 受動的に他者の意見に従う
- 23 友達はやりたいことが見えている
- 24 目標の設定
- 25 目的の達成
- 26 復学に対する意欲
- 27 今の生活を犠牲にしたい
- 28 他の子よりもちょっと良いものを持ちたい
- 29 深く考えずに昼を選択する
- 30 深く考えずに夜を選択する
- 31 暇つぶし
- 32 ありきたりな幸せでの満足
- 33 生活水準が下がることに対する不満
- 34 今お金が無いことに対する不安
- 35 ダラダラと夜の仕事を続ける
- 36 ずっと夜を続ける
- 37 けじめをつけたい

⑪肯定的自己観

- 1 天職の自覚
- 2 自分の外見への自信
- 3 自分の過去を後悔しない
- 4 自分に対する誇り
- 5 自分が家計を支える
- 6 強い自己肯定感
- 7 成績に対する嫉妬
- 8 夜の仕事に対する熱意
- 9 夜の仕事に対する関心
- 10 歪んだ自尊感情
- 11 風俗雑誌に載る
- 12 達者な話術への自信
- 13 周囲の視線は気にしない
- 14 他者と比較をしない
- 15 学業に関する優越感
- 16 夜働くことで得られる優越感
- 17 女性としての魅力の証明
- 18 お金を稼ぐことで得られる自己肯定感
- 19 性的な視線に対して嫌悪感を抱かない
- 20 適切な損得勘定
- 21 自己抑制
- 22 勉強は嫌いではない

⑬夜職の肯定的な側面

- 1 夜の金銭的な魅力
- 2 お金があると心に余裕もできる
- 3 欲しいものを手に入れる
- 4 金銭的目的以外の動機
- 5 やりがいを感じる
- 6 充実した毎日
- 7 会話の楽しさ
- 8 出会いの場としての夜
- 9 夜の世界で学んだこと
- 10 自覚している人としての成長
- 11 効率の良い仕事
- 12 生きがいとしての仕事
- 13 融通が利く仕事
- 14 特別なスキルを必要としない仕事
- 15 嫌なことに対する当然の対価
- 16 フロー体験
- 17 フロー体験の終了
- 18 交流の回復
- 19 人を見る目が養われる
- 20 華やかな夜の世界への憧れ
- 21 ただでお酒が飲めるメリット
- 22 お金のありがたみを理解する
- 23 無職でいるよりは風俗でも働いたほうがいい
- 24 無職でいるよりは夜でも働いたほうがいい
- 25 お金のために割り切って働く
- 26 生活のための仕事

⑭生活態度

- 1 落ち着いた生活
- 2 生きがいの無い日常生活
- 3 平凡な日常生活
- 4 生活費を切り詰める
- 5 享乐的なライフスタイル
- 6 夜型のライフスタイル
- 7 昼型のライフスタイル
- 8 計画性の無い金銭感覚
- 9 週末だけ夜働く

⑫夜職の否定的な側面

- 1 お金以外に得る物は無い
- 2 夜の仕事に意味を見出せない
- 3 夜の仕事は昼の仕事に繋がらない
- 4 夜の仕事で上手く立ち回れない
- 5 夜の仕事に対する自問自答
- 6 夜の仕事での負担感
- 7 将来的に魅力のない仕事
- 8 夜職に対する醒めた考え
- 9 実存的な苦しみは夜の仕事では埋まらない
- 10 昼職の友人とのすれ違い
- 11 知り合いに会う気まずさ
- 12 職場での孤立
- 13 希薄な友人関係
- 14 単なる同僚の集まり
- 15 職場での狭い交友関係
- 16 表面上の居心地の良さ
- 17 対人関係に対する恐怖心
- 18 セクハラに対する憤慨
- 19 身の危険を感じる
- 20 ストーカー被害
- 21 性的な視線に対する嫌悪感
- 22 体を触られることへの不快感
- 23 プライベートに立ち入って来られる不快感
- 24 連絡先を交換することへの不快感
- 25 リスクの高い店で働く
- 26 違法な店で働く
- 27 罰金制に対する不満
- 28 罰金の免除
- 29 一、二時間の同伴出勤
- 30 身纏いの金銭的負担
- 31 契約書による縛り
- 32 禁止事項への違反行為
- 33 待遇に対する不満
- 34 不安定な雇用状態
- 35 最初は楽しかった仕事が悪痛になって来る
- 36 自由な時間が欲しい
- 37 家に帰ると一気に疲れる
- 38 世間に対して無知になる
- 39 誤解を招きやすい
- 40 目立たないように辞める
- 41 辞めたくても辞められない状況
- 42 汚い世界への諦め
- 43 汚い大人への諦め
- 44 汚い世界への幻滅
- 45 男性に対する幻滅
- 46 何かに縛られることからの逃避
- 47 あまり得る物は無い
- 48 会話が苦手
- 49 ノルマの要求
- 50 仕事に対するペナルティ
- 51 店でのいじめ体験
- 52 ネット掲示板での嫌がらせ
- 53 愛人に甘んじる
- 54 不倫関係
- 55 不倫関係の隠匿
- 56 不倫関係の露見
- 57 遊びの男女関係
- 58 自分を守るための虚勢
- 59 病気になるリスク
- 60 お金の感覚が麻痺する

⑮否定的自己観

- 1 否定的な自己概念
- 2 倫理観の欠如
- 3 自分を否定されることに対する恐怖
- 4 性的に不用意
- 5 人生に対するやぶれかぶれな思い
- 6 他者と比較して劣等感を抱く
- 7 容姿に対する劣等感
- 8 外見的美しさに対するとらわれ
- 9 家族も水商売
- 10 自罰的傾向
- 11 実存的な苦しみ
- 12 孤独に耐えられない
- 13 自分を許せない
- 14 自分の弱さの自覚
- 15 居眠りをする
- 16 貯金ができない
- 17 朝起きられない
- 18 こらえ性の無さ
- 19 やる気になれない
- 20 毎日きちんと働けない
- 21 面倒臭い
- 22 楽な仕事に流れる
- 23 他人の幸せを羨む
- 24 自分の能力に対する自信の無さ
- 25 自分に対する情けない思い
- 26 自己嫌悪
- 27 同族嫌悪
- 28 学業に対する拒否感
- 29 学歴に対する劣等感
- 30 勉強で遅れを取る
- 31 勉強だけで精一杯
- 32 今を生きているだけで精一杯
- 33 昼間働いている友人達に対する負い目
- 34 家庭を築いている友人達に対する負い目
- 35 意味のないスタート

⑯スティグマ・偏見・イメージ等

- 1 自分自信が持っているスティグマ感
- 2 自分自身のスティグマ感の払拭
- 3 払拭できない自分自身のスティグマ感
- 4 仕事に対する恥の意識
- 5 風俗業に対する偏見
- 6 ずっと夜を続けることへの抵抗感
- 7 夜職への楽なイメージ
- 8 夜職への楽しそうなイメージ
- 9 夜職に対する怖いイメージ
- 10 自分の夜のイメージとのギャップ
- 11 スティグマを回避する
- 12 スティグマの実感
- 13 スティグマの欠如
- 14 パッシング
- 15 パッシングの告白
- 16 パッシングが不必要
- 17 パッシングの対象を選ぶ
- 18 劇化
- 19 擬装
- 20 周囲への露見
- 21 露見の回避
- 22 恥の意識の克服

⑩承認・居場所等

- 1 承認への喜び
- 2 居場所の無さ
- 3 社会に置いて行かれる感覚
- 4 居場所の喪失
- 5 抛り所の無さ
- 6 承認欲求
- 7 新しい居場所の発見
- 8 避難所としての居場所
- 9 大切な居場所
- 10 交流の回避
- 11 人生の転換点
- 12 自由を求める
- 13 孤独を埋めたい
- 14 寂しさを埋められる
- 15 居心地の良さを感じる
- 16 気持ちを紛らわせる
- 17 癒し
- 18 敵も多いけど、味方も多い
- 19 決してマイナスだけの世界ではない
- 20 夜の世界は結局自分次第
- 21 夜の世界でも成功した人生を送れる
- 22 夜の世界に戻りたいと思う
- 23 夜の世界から離れたいと思う
- 24 夜に人生を懸ける
- 25 夜の仕事をしたことは後悔しない
- 26 夜の仕事は人生において意味があった
- 27 夜の世界に対する理解と共感
- 28 辞めた後も店と連絡を取り合う
- 29 夜の仕事も昼の仕事も大切

- 23 恥の意識の欠落
- 24 世間体へのとらわれ
- 25 拒絶の予測
- 26 他人が気付かないようにする
- 27 他人の観方を操作する
- 28 周囲を混乱させない振舞い
- 29 周囲に対する配慮
- 30 家族を持っていることが夜への足枷
- 31 年齢による足枷
- 32 昼の仕事による足枷
- 33 夜職でも派手では無いことが救い
- 34 自分とは違う別の世界

⑩過去の出来事・生い立ち等

- | | |
|-----------------------|------------------|
| 1 無茶苦茶な仕事管理 | 60 年齢をごまかして働く |
| 2 無理な仕事 | 61 アルバイト体験 |
| 3 お小遣いを貰えない | 62 事情の説明 |
| 4 人工中絶の経験 | 63 夜の仕事を転々とする |
| 5 望まない妊娠 | 64 昼の仕事を転々とする |
| 6 妊娠で退店 | 65 軽い気持ちでの入店 |
| 7 キャバクラを直ぐに退店 | 66 入店と退店を繰り返す |
| 8 孤独 | 67 自分から夜の世界に入る |
| 9 SNSで友人が遊んでいるのを見ると辛い | 68 友達と一緒に夜の世界に入る |
| 10 ストレスからの解放 | 69 友達が次々夜の世界に入る |
| 11 就職活動の失敗 | 70 友達の紹介で夜の世界に入る |
| 12 志望校に合格する | 71 他人の紹介で夜の世界に入る |
| 13 学校生活からの逃避 | 72 自分なりのストレス解消法 |
| 14 学校を辞める | 73 ホストクラブで遊ぶ |
| 15 学校が変わる | 74 ストレスの蓄積 |
| 16 不登校 | 75 触れられない過去 |
| 17 不本意な休養 | |
| 18 周囲に対する失望 | |
| 19 曖昧な記憶体験 | |
| 20 精神保健医療機関の受診 | |
| 21 精神科医の診断 | |
| 22 受診拒否 | |
| 23 情緒不安定 | |
| 24 情緒的安定 | |
| 25 身体的不調 | |
| 26 精神的不調 | |
| 27 精神的不調からの回復 | |
| 28 コミュニケーション不全 | |
| 29 自傷行為 | |
| 30 自傷行為を知識として知る | |
| 31 気晴らしとしての自傷行為 | |
| 32 自傷行為の提示 | |
| 33 自虐的な感情 | |
| 34 希死念慮 | |
| 35 大量服薬 | |
| 36 貧困 | |
| 37 絶望感 | |
| 38 挫折体験 | |
| 39 セクハラを受ける | |
| 40 劣悪な生い立ち | |
| 41 家族の自殺 | |
| 42 アルコールへの依存 | |
| 43 家出状態 | |
| 44 ホームシックで家に戻る | |
| 45 過去の受容 | |
| 46 過去の否定 | |
| 47 過去に戻ることの恐怖 | |
| 48 過去に対する反動 | |
| 49 過去に対する後悔 | |
| 50 過去に対する開き直り | |
| 51 過去に対する複雑な思い | |
| 52 建設的でない選択 | |
| 53 他人が決めた人生 | |
| 54 波瀾万丈な人生 | |
| 55 風俗へ入店 | |
| 56 逸脱体験 | |
| 57 違法行為 | |
| 58 出勤拒否 | |
| 59 店とのコンタクト | |

	焦点化のコーディング総数
合計	18

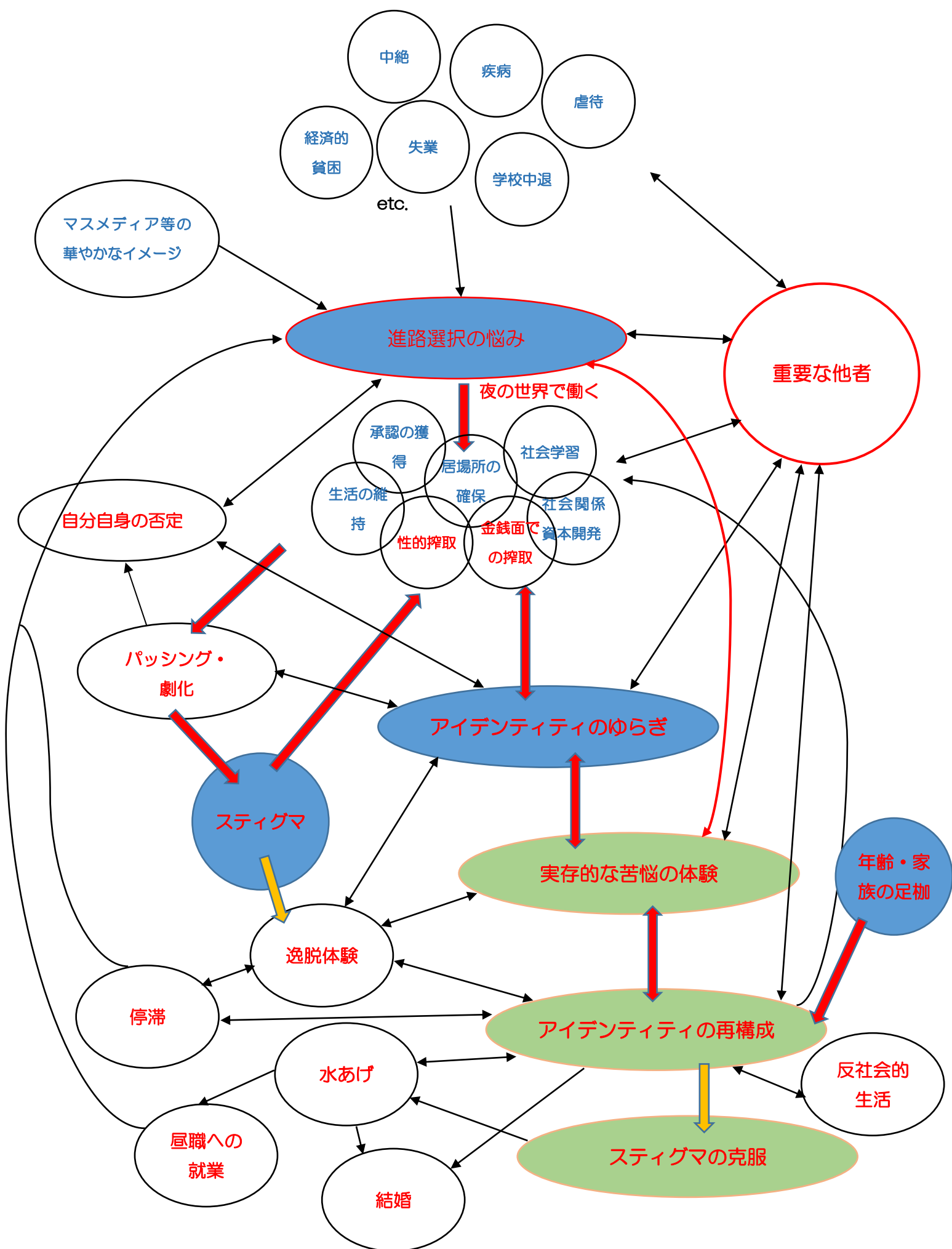
理論的コード化(theoretical coding)		
1	個人的な負の体験	362 家族も水商売
		471 人工中絶の経験
		478 就職活動の失敗
		481 学校を辞める
		492 身体的不調
		493 精神的不調
		496 自傷行為
		501 希死念慮
		502 大量服薬
		503 貧困
		507 劣悪な生い立ち
2	マスメディアの華やかなイメージ	167 他の子よりもちょっと良いものを持ちたい
		219 ナンバーワンになることへの憧れ
		245 夜の仕事に対する関心
		278 華やかな夜の世界への憧れ
		279 たたでお酒が飲めるメリット
		395 夜職への楽なイメージ
		396 夜職への楽しそうなイメージ
3	進路選択の悩み	140 未来に対する無計画
		143 実現しなかった未来
		144 モラトリアムの維持
		145 職業選択からの逃避
		146 やりたいことが見つからない
		147 働く意味が分からない
		148 現実逃避
		153 漠然とした将来
		170 暇つぶし
		358 人生に対するやぶれかぶれな思い
4	重要な他者との様々な関係	12 家族からの反対
		18 家族に対する愛情
		31 恋人からの反対
		35 恋人からの受容
		51 恋人に対する愛情
		52 恋人に対する申し訳無さ
		66 友人からの助言
		67 友人からの反対
		77 友人に対する感謝
5	承認の獲得	89 店からの承認
		107 客からの承認
		135 店員からの承認
		219 ナンバーワンになることへの憧れ
		242 強い自己肯定感
		252 夜働くことで得られる優越感
		253 女性としての魅力の証明
		254 お金を稼ぐことで得られる自己肯定感
		263 やりがいを感じる
		264 充実した毎日
		270 生きがいとしての仕事
		411 承認への喜び
		416 承認欲求

6	生活の維持	159	夜を続ける必要性の存在
		196	経済的な満足感
		259	夜の金銭的な魅力
		260	お金があると心に余裕もできる
		261	欲しいものを手に入れる
		281	無職でいるよりは風俗でも働いたほうがいい
		282	無職でいるよりは夜でも働いたほうがいい
		283	お金のために割り切って働く
		284	生活のための仕事
		294	お金以外に得る物は無い
7	居場所の確保	224	楽しい職場
		265	会話の楽しさ
		417	新しい居場所の発見
		418	避難所としての居場所
		419	大切な居場所
		423	孤独を埋めたい
		424	寂しさを埋められる
		425	居心地の良さを感じる
		426	気持ちを紛らわせる
		427	癒し
8	社会学習	233	社会勉強の場としての夜職
		268	自覚している人としての成長
		277	人を見る目が養われる
		280	お金のありがたみを理解する
		335	汚い世界への諦め
		336	汚い大人への諦め
		337	汚い世界への幻滅
		338	男性に対する幻滅
9	社会関係資本開発	38	恋人との出会い
		57	女の子同士の友情
		83	同じ境遇の友人
		121	客との私的な付き合い
		124	気の合う客との楽しい関係
		266	出会いの場としての夜
		277	人を見る目が養われる
10	アイデンティティのゆらぎ	185	昼職に対する恐怖感
		203	自分をごまかす
		295	夜の仕事に意味を見出せない
		297	夜の仕事で上手く立ち回れない
		298	夜の仕事に対する自問自答
		299	夜の仕事での負担感
		304	知り合いに会う気まずさ
		344	店でのいじめ体験
		345	ネット掲示板での嫌がらせ
11	実存的な苦悩の体験	142	未来に希望を持ってない
		146	やりたいことが見つからない
		147	働く意味が分からない
		148	現実逃避
		153	漠然とした将来
		154	将来に対する不安
		193	自分を持っている人への憧れ
		302	実存的な苦しみは夜の仕事では埋まらない
		364	実存的な苦しみ
		365	孤独に耐えられない

12	アイデンティティの再構成	139	昼の仕事で頑張っている人への敬意
		156	結婚と幸せに対する願望
		162	友達はやりたいことが見えている
		237	天職の自覚
		250	他者と比較をしない
		256	適切な損得勘定
		294	お金以外に得る物は無い
		296	夜の仕事は昼の仕事に繋がらない
		300	将来的に魅力のない仕事
		301	夜職に対する醒めた考え
		303	昼職の友人とのすれ違い
		394	ずっと夜を続けることへの抵抗感
13	スティグマ	389	自分自信が持っているスティグマ感
		391	払拭できない自分自身のスティグマ感
		392	仕事に対する恥の意識
		393	風俗業に対する偏見
		399	スティグマを回避する
		400	スティグマの実感
		409	露見の回避
		441	世間体へのとらわれ
14	スティグマの克服	27	恋人からの理解
		28	恋人からの承認
		64	女の子からの気遣い
		65	友人からの理解
		390	自分自身のスティグマ感の払拭
		410	恥の意識の克服
		403	パッシングの告白
		404	パッシングが不必要
15	パッシング・劇化	399	スティグマを回避する
		402	パッシング
		406	劇化
		407	擬装
		443	他人が気付かないようにする
		444	他人の観方を操作する
		445	周囲を混乱させない振舞い
		446	周囲に対する配慮
16	自分自身の否定	354	否定的な自己概念
		356	自分を否定されることに対する恐怖
		376	他人の幸せを羨む
		377	自分の能力に対する自信の無さ
		378	自分に対する情けない思い
		386	昼間働いている友人達に対する負い目
		387	家庭を築いている友人達に対する負い目
		379	自己嫌悪
		414	居場所の喪失
		415	拠り所の無さ
17	年齢の壁・家族の足枷	11	家族からの束縛
		447	家族を持っていることが夜への足枷
		448	年齢による足枷
18	反社会的生活	289	享乐的なライフスタイル
		346	愛人に甘んじる
		347	不倫関係
		350	遊びの男女関係
		524	違法行為
19	水揚げ	149	結婚を機に水揚げ
		157	一応の水揚げ時期の設定
		158	働く期間を明確に区切る
		160	夜を続ける必要性の消失
		163	目標の設定
		176	けじめをつけたい

20	結婚	155	結婚願望
		156	結婚と幸せに対する願望
		150	結婚を機に働き方を変える
		473	妊娠で退店
21	昼職への就業	187	昼の就業に備える考え
		188	昼の就業への願望
		189	昼の定職で長く働く
		190	夜の経験を昼に活かす
22	停滞	140	未来に対する無計画
		142	未来に希望を持ってない
		144	モラトリアムの維持
		286	生きがいの無い日常生活
		358	人生に対するやぶれかぶれな思い
		475	孤独
23	逸脱体験	347	不倫関係
		350	遊びの男女関係
		465	ホストクラブで遊ぶ
		509	アルコールへの依存
		522	風俗へ入店
		523	逸脱体験
24	性的な搾取	311	セクハラに対する憤慨
		312	身の危険を感じる
		313	ストーカー被害
		314	性的な視線に対する嫌悪感
		315	体を触られることの不快感
		316	プライベートに立ち入って来られる不快感
		317	連絡先を交換することの不快感
		352	病気になるリスク
25	金銭面での搾取	322	一、二時間の同伴出勤
		323	身纏いの金銭的負担
		324	契約書による縛り
		326	待遇に対する不満
		327	不安定な雇用状態
		342	ノルマの要求
		343	仕事に対するペナルティ

別紙 5 : 図 8-1 夜の世界の構造図①



メモ⑬

「大きな物語の終焉」

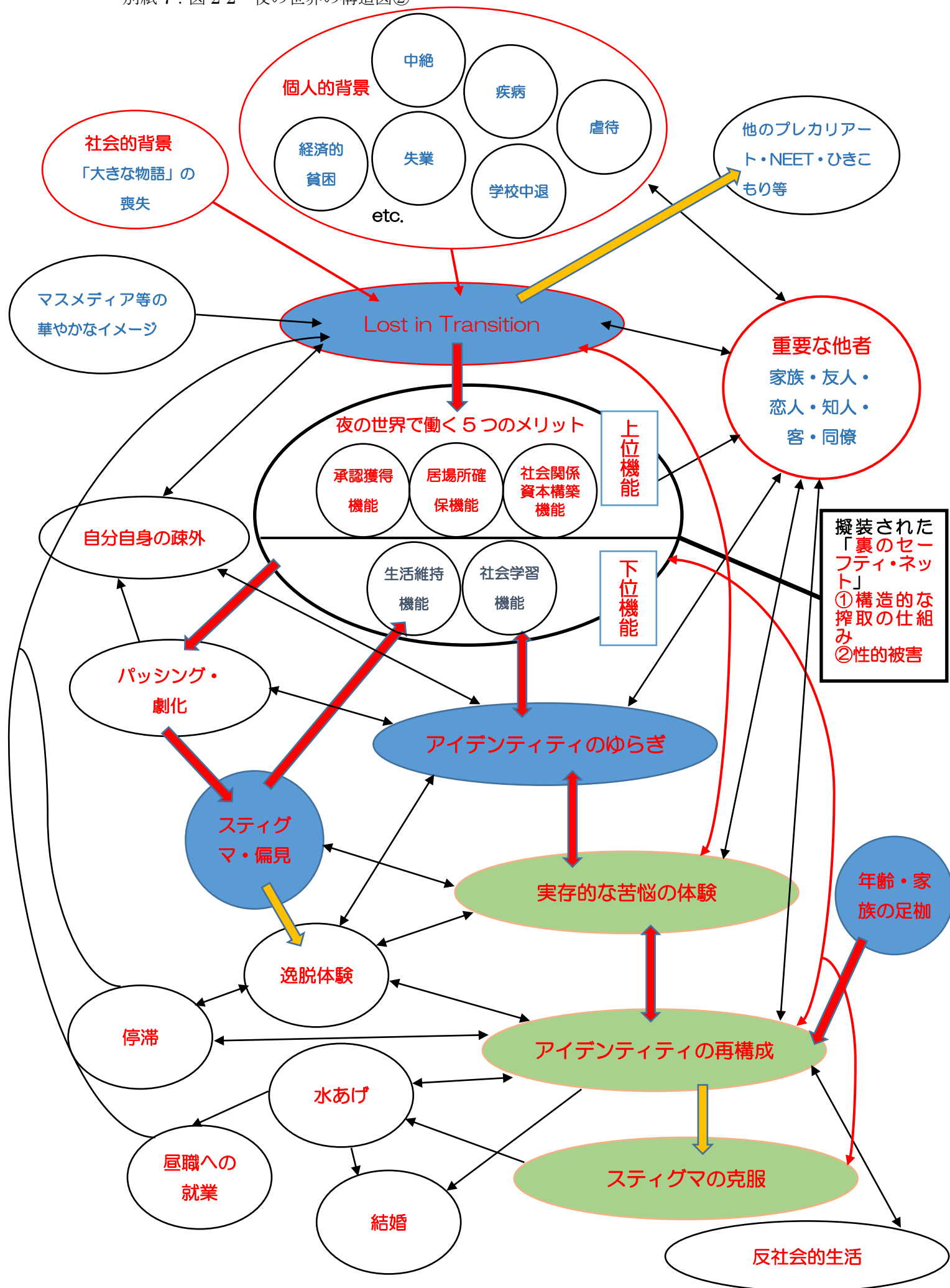
ジャン＝フランソワ・リオタールは「科学はみずからのステータスを正当化する言説を必要とし、その言説は哲学という名で呼ばれてきた。このメタ言説がはっきりとした仕方でなんらか大きな物語—《精神》の弁証法、意味の解釈学、理性的人間あるいは労働者としての主体の解放、富の発展—に依拠しているとすれば、みずからの正当化のためにそうした物語に準拠する科学を、我々は《モダン》と呼ぶことにする。（中略）極度の単純化を懼れずに言えば、《ポスト・モダン》とは、まず何よりも、こうしたメタ物語に対する不信感だと言えるだろう（リオタール，J.F.，1986 p.8）。

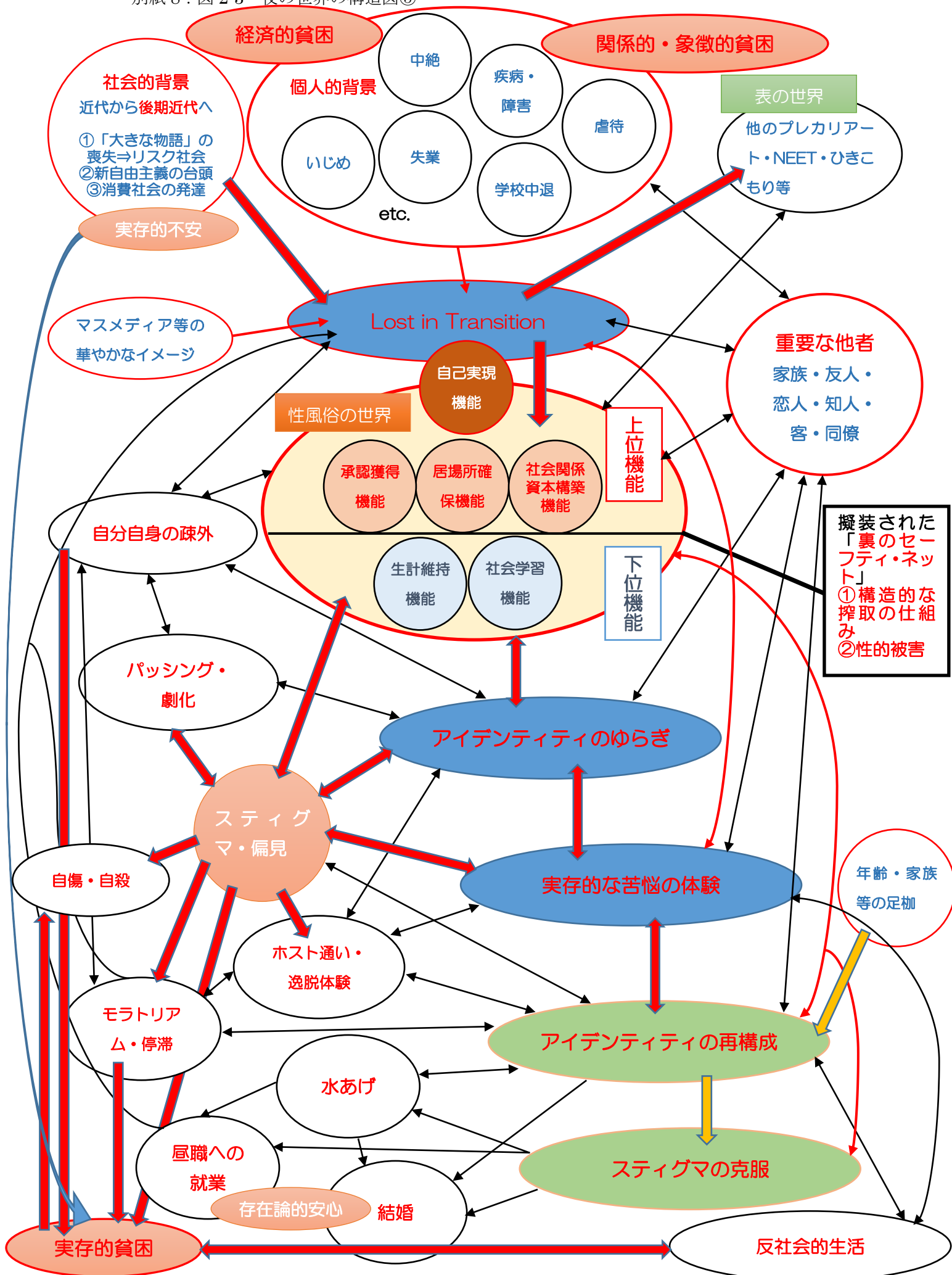
リオタール，J.F.が大きな物語（メタ物語）と呼んだものと、その終焉は、歴史的時代認識を単に「モダン」「ポスト・モダン」に分けただけでなく、あらゆる社会科学の領域で、パラダイムシフトを起こしている。社会構成主義によるナラティブ・アプローチ等は、明らかにポスト・モダンの影響を受けており、キャバクラ嬢への支援としてナラティブを用いるのであれば、それを用いる理由として、もっとポスト・モダン社会が彼女達にもたらす負の影響を掘り下げる必要があるそうである。

ポスト・モダン社会に特有の社会現象や心理的影響等を考慮すれば、キャバクラ嬢の特有の生きにくさが見えてくるかもしれない。そもそも、キャバクラ嬢は、日本社会がポスト・モダンに入った 1980 年代に誕生したものであるとすると、それもポスト・モダン社会が必要としたものである可能性が高い。キャバクラ嬢を生み出した要因と、その社会的必需性、存在理由等を鑑みれば、キャバクラ嬢の性質が単に精神病理学的症状に陥った病んだ子が多いとか、貧困層の出身者が多いというだけでなく、別の性質なり、特異性が新たに考察できるかもしれない。ポスト・モダンがもたらす状況をより正確に把握するために、新たにギデンズ，A.やバウマン，Z.等社会学者の著作を読む価値が見えて来た。併せて、見田宗介や宮台真司らの著作も再度読み返す必要がある。

見田の「まなざしの地獄」の主人公となっている永山則夫は、モダンを代表する犯罪者であり、貧困故に犯罪を起こしたのだとすると、宮台の「透明な存在の中の不透明な悪意」の主人公・少年 A は、ポスト・モダンを代表する犯罪者かもしれない。加藤智大の「解」や「解+」やそれを解説した大澤真幸の「アキハバラ発」等を比較検討すると、ポスト・モダン特有の息苦しさや犯罪への誘因が分析できるはずである。貧困というモダンに特有の苦しみとは異なる、ポスト・モダンの別の何か息苦しい苦悩を上手く表現できれば、それをキャバクラ嬢やその客達もすべからく共有しているはずだという理解は十分に成り立つであろう。これは、今後検討に値する。

別紙 7 : 図 2-2 夜の世界の構造図②



別紙 8：図 2-3 夜の世界の構造図③

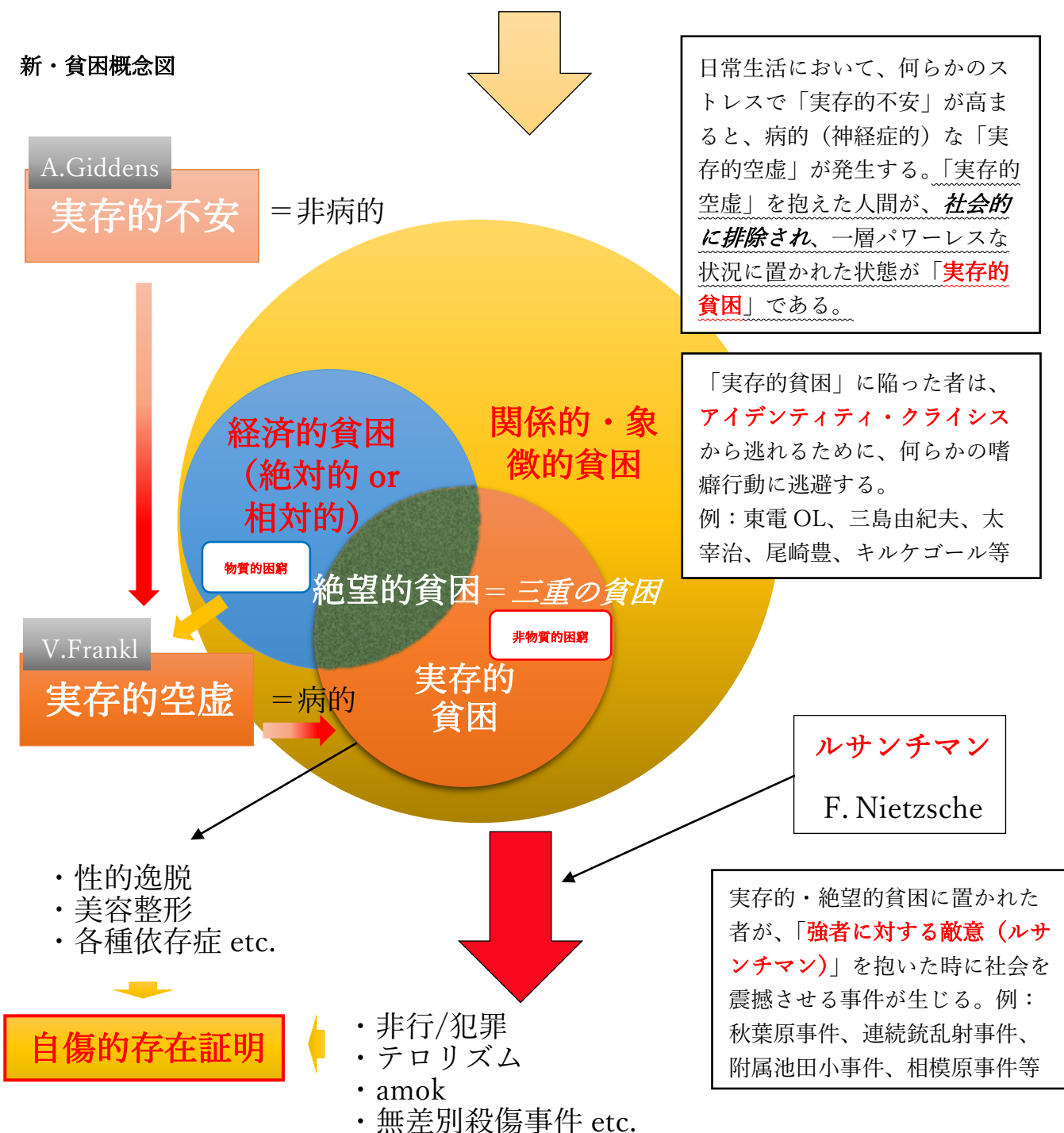
別紙 9：図 2-1 貧困概念図①

Lister, R.による

貧困の再定義図



新・貧困概念図



Lister, R.による

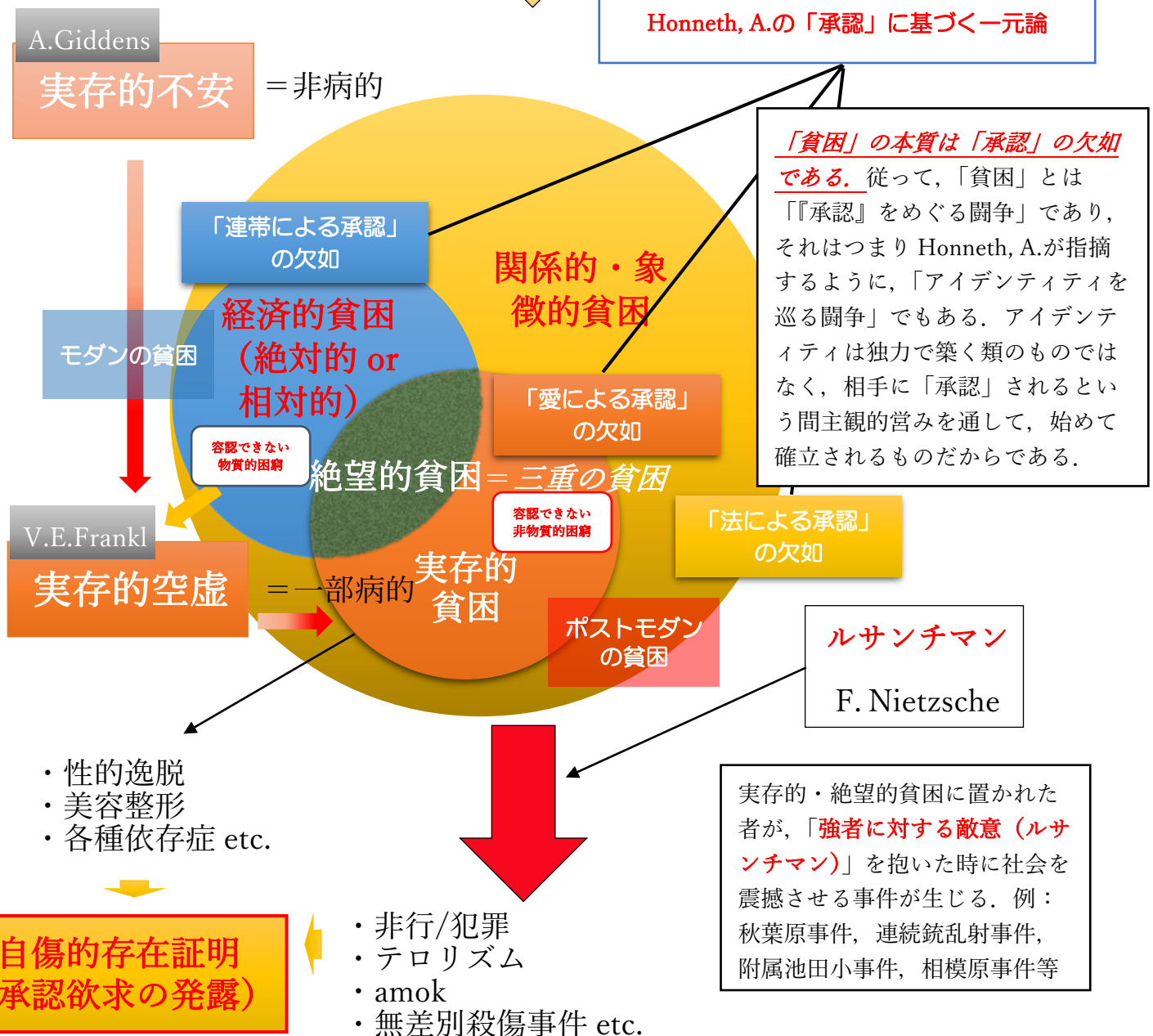
貧困の再定義図



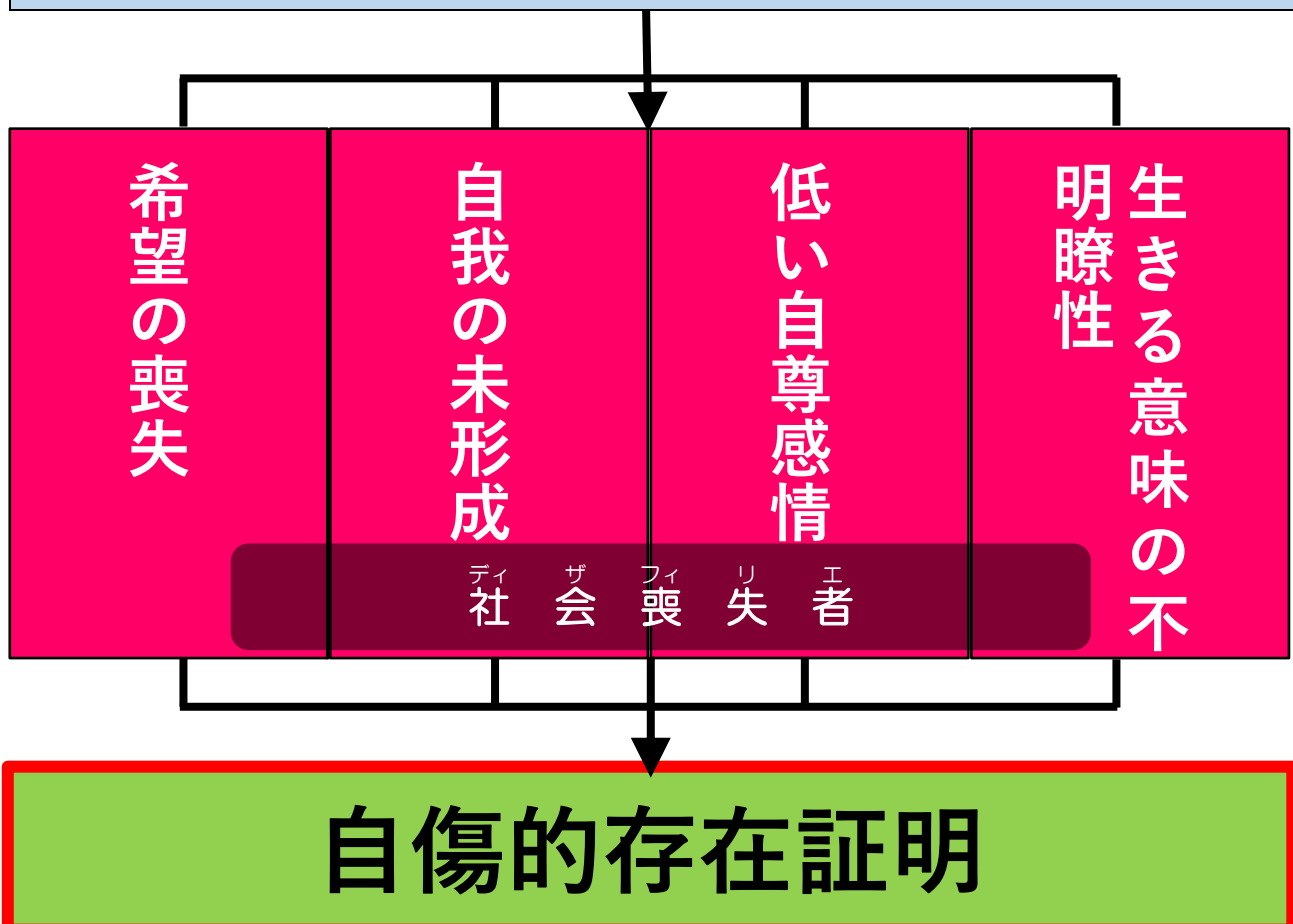
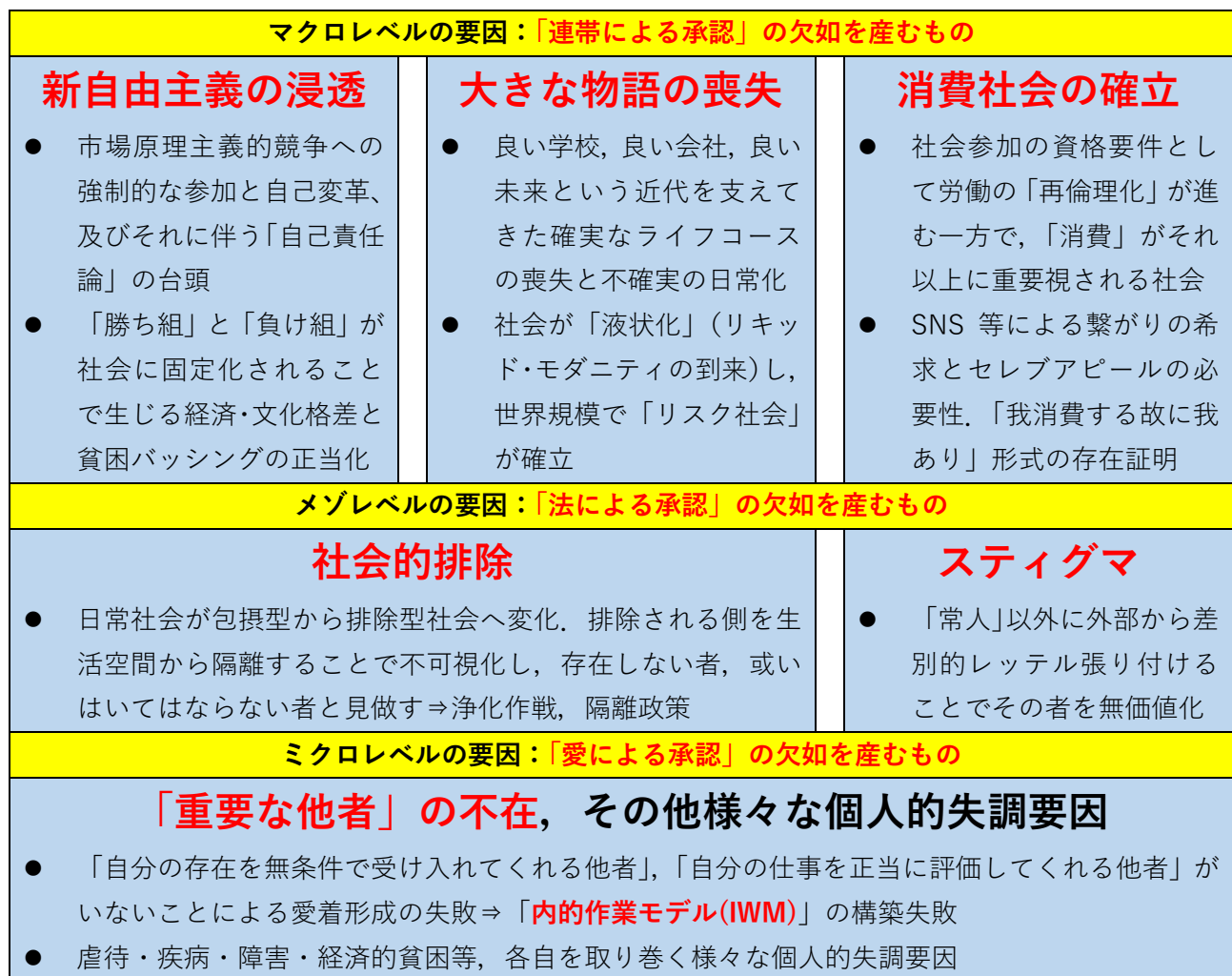
Fraser, N.の「パースペクティブ二元論」

新・貧困概念図

Honneth, A.の「承認」に基づく一元論



実存的貧困における存在証明の構造



半構造化面接質問項目

- 何時、(〇〇) の仕事を始めましたか？
- どの位の期間働きましたか？
- 何故、(〇〇) の仕事を始めましたか？
- (〇〇) の仕事は楽しかったですか？
- (〇〇) で働いて良かったこと、悪かったことは？
- 何時まで (〇〇) で働きますか (また、(〇〇) に戻りたいと思いますか？) ？
- 仕事のことを家族や恋人、友達に話しましたか？
- 将来の夢や欲しいものは何かありますか？
- 今の生活に満足していますか？
- 今何か困っていることはありますか？
- 人生を振り返ってどう思いますか？
- 周囲の人と比較して、自分をどう思いますか？
- 何らかの自覚している病気を持っていますか？
- 十分な貯金がありますか？
- 周囲からの偏見を感じますか？
- 友人との関係に何らかの影響はありましたか？
- 家族との折り合いに影響はありましたか？
- これまでの家庭生活はどのような感じでしたか？
- 学校生活は楽しかったですか？
- 今の心の支えは何ですか？
- (〇〇) で稼いだお金は何に使いましたか？
- 今後 (〇〇) で働いていることを誰かに言うつもりですか (今 (〇〇) で働いていることを、誰かに言えますか) ？
- 頼りになる人は誰ですか？
- 一番繋がりをを感じる人は誰ですか？
- (〇〇) は貴方にとって居場所でしたか？
- (〇〇) で働く意味は何ですか？

半構造化面接質問項目（AV 関係者）

- 昨今マスメディアで問題になっている「AV 出演強要問題」について貴方はどのようにお考えですか？
- AV 出演の強要は実際に存在しますか？
- （存在するならば）どのような手口で出演は強要されますか？
- AV 女優への何らかの支援は必要だと思いますか？
- （必要ならば）具体的にどのような支援が考えられると思いますか？
- 何故、彼女達は AV の仕事を始めると思いますか？
- どのような女性が AV 出演を希望すると思いますか？
- 一般的に彼女達はどの位の期間働きますか？
- AV の仕事を彼女達は楽しんでいると思いますか？
- AV 業界で働くメリットとデメリットとしては、それぞれどのようなものがありますか？
- 彼女達は、AV の仕事のことを家族や恋人、友達に話しています・いましたか？
- 彼女達から将来の夢や欲しいものについて何か聞いたことはありますか？
- 彼女達は当時の生活に満足している・いたと思いますか？
- 彼女達は何か困っていることはあります・ましたか？
- 彼女達の人生をどう思いますか？
- 周囲の人と比較して、彼女達をどう思いますか？
- 彼女達は何らかの病気を持っています・ましたか？
- 彼女達は十分な貯金があります・ましたか？
- 彼女達に対する周囲からの偏見を感じますか？
- 彼女達とその友人との関係に、AV の仕事は何らかの影響を与えます・ましたか？
- 彼女達と家族との折り合いに、AV の仕事は何らかの影響を与えます・ましたか？
- 彼女達の家庭生活はどのようなものだったと聞いていますか？
- 彼女達の学校生活はどのようなものだったと聞いていますか？
- 彼女達が心の支えとしている・いたものは何ですか？

- 彼女達は、AV で稼いだお金を何に使います・ましたか？
- AV に出演していることを、親しい人に秘匿することは可能ですか？
- AV 業界において、彼女達にとって頼りになる存在は誰ですか？
- AV 業界において、彼女達が一番繋がりを感じる存在は誰ですか？
- AV 業界は彼女達にとって居場所として機能しています・ましたか？
- 彼女達が AV 業界で働く意味は何だと思えますか？

半構造化面接質問項目（支援者用）

- 性風俗店は社会的に必要な存在だと、貴方はお考えですか？
- （必要ならば）性風俗店が持つ役割は何だと思えますか？
- 性風俗店への強引な勧誘は実際に存在しますか？
- （存在するならば）どのような手口で強引な勧誘はなされますか？
- 風俗嬢への何らかの支援は必要だと思えますか？
- （必要ならば）具体的にどのような支援が考えられると思えますか？
- 支援者として、貴方は性風俗産業をどのように変えたいと思えますか？
- 支援者として、貴方が常に心掛けていることは何ですか？
- どのような女性が性風俗への従事を希望すると思えますか？
- 一般的に彼女達はどの位の期間働きますか？
- 性風俗の仕事を彼女達は楽しんでいると思えますか？
- 性風俗産業で働くメリットとデメリットとしては、それぞれどのようなものがありますか？
- 彼女達は、性風俗の仕事のことを家族や恋人、友達に話しています・いましたか？
- 彼女達から将来の夢や欲しいものについて何か聞いたことはありますか？
- 彼女達は当時の生活に満足している・いたと思えますか？
- 彼女達は何か困っていることはありますか・ましたか？
- 彼女達の人生をどう思いますか？
- 周囲の人と比較して、彼女達をどう思いますか？
- 彼女達は何らかの病気を持っています・ましたか？
- 彼女達は十分な貯金があります・ましたか？
- 彼女達に対する周囲からの偏見を感じますか？
- 彼女達とその友人との関係に、性風俗の仕事は何らかの影響を与えます・ましたか？
- 彼女達と家族との折り合いに、性風俗の仕事は何らかの影響を与えます・ましたか？
- 彼女達の家庭生活はどのようなものだったと聞いていますか？
- 彼女達の学校生活はどのようなものだったと聞いていますか？
- 彼女達が心の支えとしている・いたものは何ですか？

- 彼女達は、性風俗で稼いだお金を何に使います・ましたか？
- 性風俗で働いていることを、親しい人に秘匿することは可能ですか？
- 性風俗産業において、彼女達にとって頼りになる存在は誰ですか？
- 性風俗産業において、彼女達が一番繋がりを感じる存在は誰ですか？
- 性風俗産業は彼女達にとって居場所として機能しています・ましたか？
- 彼女達が性風俗産業で働く意味は何だと思えますか？

心 理 尺 度 結 果 一 覧 表

番号		平均(A)	平均(B)	平均(C)	平均(D)	平均(E)	平均(F)	平均(Intv.)	平均(data)	平均(合計)	SD(合計)	女子大生平均	女子大生SD	女子大生標本数	帰無仮説棄却
属性		A	B	C	D	E	F	G	H						
標本数		13	11	9	13	15	7	61	62	123					
年齢		25.08	27.64	25.11	21.85	23.72	23.29	24.50	23.94		3.85				
学歴	高校偏差値	44.85	48.67	49.44	45.55	57.83	44.00	48.82	45.73		9.25				
	専門・短大・大学偏差値		57.33	48.83	47.50	57.91	41.50	52.94	42.17		11.75				
	大学院		58.00			71		67.75			6.18				
1 拡張版ホープレス ネス尺度	対 人	6.000	7.273	9.444	6.000	7.833	4.714	7.311	6.790	7.049	5.498	4.130	4.110	406	** : P<0.01
	達 成	8.923	8.000	8.111	7.769	4.167	5.143	7.377	7.710	7.545	5.614	5.650	4.390	406	** : P<0.01
2 多次元自我同一性 尺度	自己斉一性・連続性	19.077	16.091	18.222	21.000	21.111	25.857	19.262	22.435	20.862	7.707	24.400	6.800	390	** : P<0.01
	対自的同一性	19.000	20.273	21.889	21.000	22.111	24.857	20.426	20.839	20.634	6.784	19.800	6.700	390	
	対他的同一性	19.000	16.636	18.556	19.231	19.167	22.000	18.377	20.565	19.480	6.501	19.600	5.400	390	
	心理社会的同一性	19.538	19.545	19.889	20.538	21.778	21.143	20.279	20.468	20.374	6.302	21.400	5.100	390	* : P<0.05
	合計	76.615	72.545	78.556	81.769	84.167	93.857	78.344	84.306	81.350	23.150	85.300	18.000	390	* : P<0.05
3 自己肯定 意識尺度	1. 對自己領域														
	自己受容	14.154	14.818	16.333	16.538	15.500	18.143	15.361	15.210	15.285	3.383	16.440	2.480	162	** : P<0.01
	自己実現的態度	21.000	23.091	24.667	22.923	24.611	27.000	22.869	22.306	22.585	6.525	23.340	5.640	162	
	充実感	24.462	23.727	23.333	25.692	24.556	29.571	24.344	23.952	24.146	8.169	26.900	6.110	162	** : P<0.01
	2. 対他者領域														
	自己閉鎖性・人間不信	22.231	27.545	29.111	22.308	22.111	20.714	24.180	22.355	23.260	8.576	16.840	5.730	162	** : P<0.01
	自己表明・対人的積極性	21.462	20.364	25.889	25.538	25.444	25.857	23.607	22.887	23.244	6.629	24.250	5.280	162	
	被評価意識・対人緊張	22.769	25.727	20.000	22.385	22.611	20.143	22.803	19.613	21.195	7.555	19.340	6.250	162	* : P<0.05
4 生きがい感 スケール		67.769	63.545	66.778	68.077	72.333	77.571	67.689	68.661	68.179	12.972	71.538	10.714	106	* : P<0.05
5 ミロン臨床多軸目 録境界性スケール		7.846	7.364	7.444	7.538	7.444	6.143	7.59	5.177	6.374	4.286	3.640	3.290	76	** : P<0.01

※赤文字部分で女子大生平均を下回った

※最低の数値には黄色い網掛けをした

※C群は、外れ値のC1を入れて算出した

